

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第215集

私部南遺跡Ⅲ

有池遺跡
上私部遺跡

上の山遺跡

交野市・枚方市

私部南遺跡Ⅲ

有池遺跡 上私部遺跡 上の山遺跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一一年三月

財団法人
大阪府文化財センター

2011年 3月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第215集

交野市・枚方市

私部南遺跡 III

有池遺跡 上私部遺跡 上の山遺跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



1 調査地遠景（西から）



2 動物形土製品

序 文

ここに発掘調査成果を報告する私部南遺跡は、東と西に生駒山脈北部の山々がせまる交野市域北西部に広がる平坦地の西端に営まれ、そこからさらに西側には天野川を望むことができます。

交野なる地名は平安時代中期の『和名類聚抄』に「加多乃」と記され、その由来は湿潤な土地を表す「潟」と、平坦地を表す「野」が入り組んでいる様子からとも、淀川流域の低い土地から眺めると丘陵上にあるので「肩野」と称せられたとも、丘陵と平地が交迭（かたがた）にあるからともいわれますが詳らかではありません。

翻って私部なる地名の由来は『日本書紀』巻第二十 敏達天皇である淳中倉太珠敷天皇の条に「六年春二月甲辰朔詔置日祀部私部」と著されているのが初出です。これは、その前年の「五年春三月己卯朔戊子有司請立皇后詔立豊御食炊屋姫尊為皇后」という詔勅、即ち、後に推古天皇となる女性の立后を契機としています。この記述により当遺跡の発掘調査には6世紀後葉の敏達朝を中心とする歴史を解明する命題が付与されることともなりました。結論からいえば今回の第二京阪道路建設に伴う発掘調査成果からはそれを実証する具体的な資料を得ることは叶いませんでした。

しかしながら、旧石器時代から近代に至るまで営々といとなまれた過去の人々の歴史を明らかにすることができました。中でも、旧石器時代のナイフ形石器などの出土は、遠く2万数千年前にまで遡る氷河期を生きのびた人々の足跡を、また、流路や点在して見つかる縄紋時代各期の土器や石器は、狩猟・採集活動を生業としていた人々の息吹を、そして、交野市域では初めての例となった弥生時代の導水施設と鋤や鍬、竪杵などの木製農耕具は、この場所で灌漑用水路を整備し、稲を育て、秋の実りを心待ちにしていた人々の姿を、さらに、古墳時代では、農家が集まるムラの一角で、鉄製農耕具の製作に勤しんでいた鍛冶に携わった人々の技を、鎌倉時代から室町時代では、起伏の激しい土地を徐々に開墾して耕作地を切り拓いた人々の営為を、安土桃山時代から江戸時代では、先祖から受け継いだ耕作地の維持管理に精励し、昭和時代までみられたこの附近の牧歌的な原風景の保持に勤しみ続けてきた人々のたゆまない努力を垣間みることができました。

このような連綿とする大地に刻まれた歴史が明らかにされたのは、偏に国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所ならびに西日本高速道路株式会社関西支社枚方工事事務所、また、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関、交野市教育委員会、交野市都市整備部第二京阪道路対策室などの地元各機関、そして、向井田・柴野自治会など発掘調査地周辺の皆様方の多大なご協力とご理解を頂戴したからにほかなりません。これら関係各機関や方々に深甚の情を表わすと共に、今後とも当センターに対して多大なご支援とご協力を賜りますよう切に希望いたします。

最後になりましたが、いつの日か「キサイベ」の実相に迫る資料が現出することを疑わず、この夢を将来に託すことを以て今回の序とさせていただきます。

平成 22 年 3 月
財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、以下に記す調査地の調査報告書である。

私部南遺跡 06 - 2 : 大阪府交野市向井田一丁目・二丁目

私部南遺跡 07 - 1 : 大阪府交野市私部南一丁目・二丁目・向井田一丁目

上の山遺跡 08 - 1 : 大阪府枚方市茄子作南町・交野市私部西五丁目

上の山遺跡 09 - 1 : 大阪府交野市私部西五～七丁目

上私部遺跡 09 - 1 : 大阪府交野市青山二丁目地内

有池遺跡 09 - 1 : 大阪府交野市青山四丁目地内

2. 発掘調査は、第二京阪道路（大阪北道路）（一般国道1号バイパス）建設に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所および、西日本高速道路株式会社関西支社枚方工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。

3. 調査名、受託名称、受託期間および調査体制は、以下の通りである。

受託名称の○印は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所との受託名を、□印は西日本高速道路株式会社関西支社枚方工事事務所との受託名を表す。

平成 18 年度

受託名称：

○第二京阪道路（大阪北道路）私部南遺跡発掘調査（その1の2）

□平成 18 年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（私部南遺跡その1の2）

調査名称：私部南遺跡 06 - 2

受託期間：平成 18 年 9 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日

調査体制：調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本彰

調査第三係長 小林義孝

班長 三好孝一

技師 森井貞雄

専門調査員 吉田綾子

平成 19 年度

受託名称：

○第二京阪道路（大阪北道路）私部南遺跡発掘調査（その1の3）

□平成 19 年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（私部南遺跡その1の3）

調査名称：私部南遺跡 06 - 2

受託期間：平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日

調査体制：調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本彰

調査第二係長 三好孝一

技師 長戸満男

専門調査員 村田裕介

受託名称：

○第二京阪道路（大阪北道路）私部南遺跡発掘調査（その3）

□平成19年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（私部南遺跡その3）

調査名称：私部南遺跡07-1

受託期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

調査体制：調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本彰

調査第一係長 小林義孝 調査第二係長 三好孝一

副主査 後藤信義 技師 小松武彦、鈴木廣司、佐伯博光

専門調査員 吉田綾子、村田裕介、松岡淳平

平成20年度

受託名称：

○第二京阪道路（大阪北道路）私部南遺跡発掘調査（その3の2）

□平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（私部南遺跡その3の2）

受託期間：平成20年4月1日～平成21年3月31日

調査体制：調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本彰

調査第一係長 三好孝一

主査 西村公助

副主査 田中龍男、後藤信義、佐伯博光、信田真美世

技師 奥和之、後川恵太郎、西村公助、船築紀子

専門調査員 村田裕介、松岡淳平、市来真澄

受託名称：

○第二京阪道路（大阪北道路）上私部・私部南遺跡他遺物整理

□平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業（上私部・私部南遺跡他）

調査名称：上の山遺跡08-1

受託期間：平成20年4月1日～平成21年3月31日

調査体制：調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本彰

調査第一係長 三好孝一

副主査 後藤信義、若林幸子

技師 黒須亜希子、船築紀子

専門調査員 吉田綾子

平成 21 年度

受託名称：

○第二京阪道路私部南遺跡発掘調査

□平成 21 年度第二京阪道路（一般国道 1 号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（私部南遺跡）

調査名称：私部南遺跡 07－1・上の山遺跡 09－1・上私部遺跡 09－1・有池遺跡 09－1

受託期間：平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

調査体制：調査部長兼調整課長 福田英人 調整グループ長 金光正裕

調査グループ長 寺川史郎

京阪総括主査 三好孝一

副主査 森本徹、佐伯博光、若林幸子、信田真美世、市村慎太郎

技師 奥和之

専門調査員 入江正則

平成 22 年度

受託名称：

○第二京阪道路私部南遺跡他遺物整理

□平成 22 年度第二京阪道路（一般国道 1 号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業（私部南遺跡他）

調査名称：私部南遺跡 06－2・07－1、上の山遺跡 08－1・09－1、上私部遺跡 09－1、有池遺跡 09－1、

受託期間：平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日

調査体制：調査部長兼調整課長 福田英人 調整グループ長 江浦洋 主幹 岡本茂史

調査グループ長 岡戸哲紀

京阪総括主査 三好孝一

主査 陣内暢子、村上富喜子

副主査 佐伯博光

技師 奥和之

4. 工事請負、写真測量委託と期間は次の通りである。

私部南遺跡 06－2

工事請負名称：私部南遺跡（その 1－2）発掘調査に伴う工事

平成 18 年 10 月 11 日～平成 20 年 1 月 31 日

写真測量委託名称：私部南遺跡（その 1－2）発掘調査に伴う航空測量

平成 18 年 10 月 23 日～平成 20 年 2 月 29 日

私部南遺跡 07－1

工事請負名称：私部南遺跡（その 3）発掘調査に伴う工事

平成 19 年 4 月 6 日～平成 22 年 1 月 29 日

写真測量委託名称：私部南遺跡（その 3）発掘調査に伴う航空測量

平成 19 年 9 月 21 日～平成 22 年 2 月 26 日

上の山 08 - 1

写真測量委託名称：上の山遺跡（その 7）発掘調査に伴う航空測量

平成 20 年 4 月 30 日～平成 20 年 7 月 31 日

5. 遺物写真については、主査 上野貞子が、木器・金属製品の保存処理については、主査 山口誠治が担当した。
6. 放射性炭素年代測定（液体シンチレーション法・AMS 法）・植物珪酸体・花粉・珪藻微化石分析は株式会社古環境研究所に、大型植物遺体同定分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その成果は、文中に盛り込んでいる。なお、放射性炭素年代測定の年代は 2 σ 暦年代で表記している。
7. 本書の執筆は、目次にその旨を記している。文体・記述方法などは、あえて統一を図っていない。
8. 編集は、奥・陣内との協議の上、三好・佐伯が行った。
9. 現地での発掘調査では、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社関西支社枚方工事事務所、交野市、大阪府教育委員会、交野市教育委員会、財団法人交野市文化財事業団、私部財産区、向井田自治会、私部自治会、柴野自治会区の皆様のご協力を得るとともに、関係各機関の方々のご指導・ご教示を賜った。記して感謝いたします。（五十音順）

なお、ご教示いただいた内容に誤謬があるならば、それはすべて三好の責に帰す。

入江文敏（福井県立若狭高等学校）、大野 薫（大阪府教育委員会）、大庭重信（財団法人 大阪市博物館協会）、奥田 尚（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、熊谷博志（松本市教育委員会）、佐伯英樹（財団法人 栗東市文化体育振興事業団）、濱口和弘（橿原市教育委員会）、樋口めぐみ（財団法人 八尾市文化財調査研究会）、降矢哲夫（裏千家 財団法人 今日庵茶道資料館）、松浦五輪美（奈良市教育委員会文化財課）、南 孝雄（財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）、森村健一（堺市立泉北すえむら資料館）

10. 本書収録の写真・遺物などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 発掘調査及び整理事業は、当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】 2003. 8」に従って行った。
2. 発掘調査で行った測量は、世界測地系にもとづく測地成果 2000 を使用し、平面図直角座標系第 VI 系を基準としている。また、本書で示す北は座標北を示し、磁北はこれより西へ 6 度 18 分、真北は東へ 0 度 12 分振っている。
3. 発掘調査で使用した測量の標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準とする。本文・挿図中では T.P. を省略して記している。
4. 地層の土色および遺物観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2004 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠している。地層の層名の記載においては記号・土色名・土質としている。
5. 私部南遺跡 07 - 1 の発掘調査は、電渠柵・仮排水路・下水管・仮雨水管などの極小規模な調査を

含めると 119ヶ所の調査区に分けて行っているため、調査区名を下記のように表している。

例) 1-1区・1-2区 ※詳細は「第3章 調査の方法」を参照していただきたい。

6. 私部南遺跡 07-1 の調査における遺構番号は、アラビア数字を用い大地区毎の通し番号で名称を付けている。そのため、本書ではまず大地区名を表すアラビア数字を記し、次にハイフン（-）で遺構番号をつなげ、その後ろに遺構の形態・種類を表す文字を付して、遺構番号としている。

例) 1-123 溝、12-456 流路

また、複数の調査区にまたがっている流路や溝などの遺構の場合は、本書作成段階で1つの遺構番号に代表させて示したが、必要に応じて（ ）内に併記している。

例) 1-789 流路（2-246 流路）

なお、複数の遺構の集合である掘立柱建物や竪穴建物については、遺構番号とは別に遺構の種類を表す文字の後ろに、アラビア数字の通し番号を付して表している。本書においてこれは、共通である。

例) 掘立柱建物 1、竪穴建物 2

7. 掘立柱建物の方向の記載については、私部南 06-2 では座標北からの角度で表している。
8. 遺物の番号は、遺物実測図・遺物写真すべてに共通する。
9. 断面図・平面図・遺構図は、対象により適宜縮尺を変え掲載しており、図ごとにスケールバーで縮尺を表示している。
10. 遺物実測図の縮尺は、原則として土器は4分の1であるが、石器・木製品や一部の土器、銭貨や石製品・金属製品は必要に応じて異なる縮尺を用い、スケールバーで縮尺を表示している。
11. 遺物実測図では、須恵器の断面を黒塗りに、他の土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器は断面を白抜きで表している。土器の調整の変化位置を示す場合、須恵器ならば実線（回転ヘラ削りは直線、回転ヘラ切り放しは手描き線）、土師器ならば破線を用いている。
12. 遺物写真は、木製品のみ実測図と縮尺を合わせている他は、縮尺不同である。
13. 遺構・遺物の記述・観察・器種分類については、次に掲げる文献を参考とした。

引用・参考文献

- 奈良国立文化財研究所 1962年 『平城京発掘調査報告書Ⅱ』
- 西 弘海遺稿集刊行会 1986年 『土器様式とその背景』 真陽社
- 古代の土器研究会 1992年 『古代の土器1 都城の土器集成』 真陽社
- 古代の土器研究会 1993年 『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』 真陽社
- 古代の土器研究会 1994年 『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』 真陽社
- 古代の土器研究会 1996年 『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東 煮炊具-』 真陽社
- 古代の土器研究会 1997年 『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東 7世紀の土器-』 真陽社
- 古代の土器研究会 1998年 『古代の土器5-2 7世紀の土器(近畿西部編)』 真陽社
- 中世土器研究会編 1995年 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 太宰府市教育委員会 2000年 『大宰府条坊XV 陶磁器の分類編』大宰府の文化財 第49集 大宰府市教育委員会
- 田辺昭三 1981年 『須恵器大成』 角川書店
- 山田邦和 2004年 「須恵器環状連結甕とその系譜」『花園史学』第25号 花園大学史学会
- 文化庁文化財部記念物課 2010年 『発掘調査のてびき 一集落遺跡発掘編/整理・報告書編一』 天理時報社

目次

巻頭図版

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と経過 (佐伯)	1	第14項 第7-2面	153
第1節 調査に至る経緯	1	第15項 第8面	156
第2節 調査の経過	3	第16項 木器・木製品	169
第2章 位置と環境	32	第17項 石器・石製品	173
第1節 地理的環境 (佐伯)	32	第18項 金属製品	179
第2節 歴史的環境 (三好)	34	第3節 4区で検出した遺構と遺物	180
第3章 調査の方法 (佐伯)	37	第4節 小結	196
第4章 私部南遺跡06-2の調査 (三好)	46	第5章 私部南遺跡07-1の調査 (佐伯)	197
第1節 基本層序	46	第1節 基本層序	197
第2節 1・2・3・5・6・7区で検出した遺構と遺物	49	第2節 検出した遺構と遺物	209
第1項 第1-1面	49	第1項 中世(3a層)	209
第2項 第1-2面	54	第2項 奈良時代から古墳時代(4a層)	258
第3項 第1-3面	60	第3項 弥生時代(5a層)	393
第4項 第2-1面	63	第4項 縄紋時代	402
第5項 第2-2面	72	第3節 小結	404
第6項 第2-3面	75	第6章 上の山遺跡08-1の調査 (佐伯)	411
第7項 第3-1面	78	第7章 上の山遺跡09-1の調査 (佐伯)	413
第8項 第3-2面	122	第8章 上私部遺跡09-1の調査 (佐伯)	415
第9項 第4面	123	第9章 有池遺跡09-1の調査 (佐伯)	417
第10項 第5-1面	130	第10章 総括 (三好・佐伯)	418
第11項 第5-2面	138	私部南遺跡07-1調査区 遺物観察表	420
第12項 第6面	144	抄録	
第13項 第7-1面	149	写真図版	

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	1	図 38	第 2-1 面 95・110・540・1143・1718 c 溝、耕作溝 出土遺物実測図	69
図 2	第二京阪道路内遺跡発掘調査地 1	17	図 39	2-1 層 出土遺物実測図 (1)	71
図 3	第二京阪道路内遺跡発掘調査地 2	18	図 40	2-1 層 出土遺物実測図 (2)	72
図 4	第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 1	29	図 41	第 2-2 面 遺構全体図	73
図 5	第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 2	29	図 42	第 2-2 面 1464 土坑、1463・1653・1654 溝 断面図	74
図 6	第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 3	30	図 43	2-2 層 出土遺物実測図	74
図 7	第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 4	31	図 44	第 2-3 面 遺構全体図	75
図 8	第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 5	31	図 45	第 2-3 面 1563・1564 土坑 断面、及び 1564 土坑 出土遺物実測図	75
図 9	私部南遺跡周辺の地形分類図	32	図 46	第 2-3 面 1718 d・2285・2286・2287 溝 断面、及び耕作溝 出土遺物実測図	76
図 10	私部南遺跡の地形分類図	33	図 47	2-3 層 出土遺物実測図	77
図 11	遺跡地図	35	図 48	第 3-1 面 遺構全体図	78
図 12	上の山遺跡 08-1・09-1 有池遺跡 09-1 上私部遺跡 09-1 調査区位置図	38	図 49	第 3-1 面 竪穴建物 1 平・断面図	79
図 13	私部南遺跡 06-2・07-1 調査区位置図	39	図 50	第 3-1 面 竪穴建物 1 カマド 平・断面図	80
図 14	地区割り基準図	40	図 51	第 3-1 面 竪穴建物 1 出土遺物実測図	81
図 15	私部南遺跡 06-2・07-1 地区割り図	41・42	図 52	第 3-1 面 竪穴建物 2 平・断面図	82
図 16	上の山遺跡 08-1・09-1 有池遺跡 09-1 上私部遺跡 09-1 地区割り図	43	図 53	第 3-1 面 竪穴建物 2 カマド 平・断面、及び立面図	83
図 17	現道部 下水管調査位置図	45	図 54	第 3-1 面 竪穴建物 2 出土遺物実測図	83
図 18	基本層序 東西断面図	47	図 55	第 3-1 面 竪穴建物 3 平・断面図	84
図 19	第 1-1 面 遺構全体図	49	図 56	第 3-1 面 竪穴建物 3 出土遺物実測図	85
図 20	第 1-1 面 176・1766・2182 土坑 断面、及び 176 土坑 出土遺物実測図	50	図 57	第 3-1 面 竪穴建物 4 平・断面図	86
図 21	第 1-1 面 49・137・139・140・282・294～296・301・316～318・1718 a 溝 断面図	51	図 57	第 3-1 面 竪穴建物 5 平・断面、及び出土遺物実測図	87
図 22	第 1-1 面 49・83・86・316・1049・1411・1718 a 溝 出土遺物実測図	52	図 59	第 3-1 面 掘立柱建物 1 平・断面、及び出土遺物実測図	88
図 23	第 1-1 面 233・314 落ち込み 出土遺物実測図	53	図 60	第 3-1 面 掘立柱建物 2 平・断面図	89
図 24	1-1 層 出土遺物実測図	55	図 61	第 3-1 面 掘立柱建物 3 平・断面図	90
図 25	第 1-2 面 遺構全体図	56	図 62	第 3-1 面 掘立柱建物 4 平・断面図	91
図 26	第 1-2 面 320・578・609 溝、耕作溝 出土遺物実測図	57	図 63	第 3-1 面 掘立柱建物 5 平・断面図	92
図 27	第 1-2 面 1718 b・1993～1996 溝 断面図	57	図 64	第 3-1 面 掘立柱建物 6 平・断面図	93
図 28	第 1-2 面 311 落ち込み 断面、及び出土遺物実測図	58	図 65	第 3-1 面 掘立柱建物 7 平・断面図	93
図 29	1-2 層 出土遺物実測図	59	図 66	第 3-1 面 掘立柱建物 8 平・断面図	94
図 30	第 1-3 面 遺構全体図	60	図 67	第 3-1 面 掘立柱建物 9 平・断面、及び出土遺物実測図	95
図 31	第 1-3 面 耕作溝 出土遺物実測図	61	図 68	第 3-1 面 掘立柱建物 10・11 平・断面図	96
図 32	1-3 層 出土遺物実測図	61	図 69	第 3-1 面 掘立柱建物 12 平・断面図	97
図 33	側溝 出土遺物実測図	62	図 70	第 3-1 面 掘立柱建物 13 平・断面図	98
図 34	第 2-1 面 遺構全体図	63	図 71	第 3-1 面 掘立柱建物 14 平・断面、及び出土遺物実測図	98
図 35	第 2-1 面 2069 井戸、534・536・537・538・541・1091・1092・2010 土坑 断面、及び 536・541 土坑 出土遺物実測図	65	図 72	第 3-1 面 掘立柱建物 15 平・断面、及び出土遺物実測図	99
図 36	第 2-1 面 81・83・91・92・94・95・96・98・99・2291 溝 断面図	67	図 73	第 3-1 面 掘立柱建物 16 平・断面図	100
図 37	第 2-1 面 108～110・526・527・529～533・539・540・1718 c 溝 断面図	68	図 74	第 3-1 面 掘立柱建物 17 平・断面、及び出土遺物実測図	101
			図 75	第 3-1 面 柱列 1・2 平・断面、及び出土遺物実測図	102

図 76	第 3-1 面 柱列 3・4 平・断面図	103	881 溝 出土遺物実測図	140	
図 77	第 3-1 面 2290 井戸 平・断面、及び出土遺物実測図	104	図 112	第 5-2 面 860・874 溝、859 b・865 流路断面、及び 876 溝・859 b 流路 出土遺物実測図	142
図 78	第 3-1 面 198・199・302・821・2335 土坑断面、及び 198・199 土坑 出土遺物実測図	105	図 113	第 5-2 面 309 c 流路内 2340 シガラミ・2342 流路内 2341 シガラミ 検出状況図	143
図 79	第 3-1 面 548・756・795・798 土坑 平・断面、及び 548 土坑 出土遺物実測図	107	図 114	第 6 面 遺構全体図	145
図 80	第 3-1 面 670・671・676・678・682・702・703・716・719・720 土坑 平・断面図	109	図 115	第 6 面 890 土坑 平・断面、及び出土遺物実測図	146
図 81	第 3-1 面 175・394・395・396・406 ピット 平・断面図	110	図 116	第 6 面 857 d 流路 断面、及び出土遺物実測図	147
図 82	第 3-1 面 176・199・236・664・2302・2315 ピット 出土遺物実測図	111	図 117	第 6 面 893 流路 出土遺物実測図	148
図 83	第 3-1 面 198・199・309 土坑、136・138・143・2292・2297 溝 平面、及び 143 溝 断面・遺物出土状況図	112	図 118	6 層 出土遺物実測図	149
図 84	第 3-1 面 143 溝 出土遺物実測図	113	図 119	第 7-1 面 遺構全体図	150
図 85	第 3-1 面 136・138・785・797 溝 断面、及び 136 溝 出土遺物実測図	114	図 120	第 7-1 面 1704 土坑 断面図	150
図 86	第 3-1 面 844・845・846 溝 平・断面、及び 839・846 溝 出土遺物実測図	115	図 121	第 7-1 面 493 流路 出土遺物実測図	151
図 87	第 3-1 面 1668・2292・2297 溝 平・断面図	117	図 122	第 7-1 面 857 e 流路 断面図	151
図 88	第 3-1 面 2292 溝 出土遺物実測図	118	図 123	第 7-1 面 857 e 流路 出土遺物実測図	152
図 89	第 3-1 面 2297 溝 遺物出土状況、及び出土遺物実測図	119	図 124	第 7-1 面 859 d 流路 出土遺物実測図	153
図 90	第 3-1 面 1695 溝 平・断面図	120	図 125	第 7-1 面 892 a 流路 出土遺物実測図	153
図 91	第 3-1 面 550・761・800・802 落ち込み断面、及び 549 落ち込み・547 流路 出土遺物実測図	121	図 126	7-1 層 出土遺物実測図	154
図 92	3-1 層 出土遺物実測図	122	図 127	第 7-2 面 遺構全体図	154
図 93	第 3-2 面 遺構全体図	123	図 128	第 7-2 面 857 f 流路 出土遺物実測図	155
図 94	第 4 面 遺構全体図	124	図 129	7-2 層 出土遺物実測図	155
図 95	第 4 面 308 a 流路 断面図	125	図 130	第 8 面 遺構全体図	156
図 96	第 4 面 308 a 流路 出土遺物実測図 (1)	126	図 131	第 8 面 973・974 土坑 平・断面、及び 973 土坑 出土遺物実測図	157
図 97	第 4 面 308 a 流路 出土遺物実測図 (2)	127	図 132	第 8 面 857 g 流路 杭列検出状況図	157
図 98	第 4・5-1 面 309 a 流路 断面図	128	図 133	第 8 面 857 g 流路 出土遺物実測図	158
図 99	4 層 出土遺物実測図	129	図 134	第 8 面 859 e 流路 出土遺物実測図 (1)	159
図 100	第 5-1 面 遺構全体図	130	図 135	第 8 面 859 e 流路 出土遺物実測図 (2)	160
図 101	第 5-1 面 308 b 流路内 2339 シガラミ 検出状況図	131	図 136	第 8 面 859 e 流路 出土遺物実測図 (3)	161
図 102	第 5-1 面 308 b 流路内 2339 シガラミ 平・立面図	132	図 137	第 8 面 859 e 流路 出土遺物実測図 (4)	162
図 103	第 5-1 面 308 b 流路 土器出土状況図	133	図 138	8 層 出土遺物実測図 (1)	163
図 104	第 5-1 面 308 b 流路 出土遺物実測図	133	図 139	8 層 出土遺物実測図 (2)	164
図 105	第 5-1 面 309 b 流路 出土遺物実測図	134	図 140	下層確認トレンチ 出土遺物実測図 (1)	165
図 106	第 5-1 面 773・867 流路 断面、及び出土遺物実測図	135	図 141	下層確認トレンチ 出土遺物実測図 (2)	166
図 107	第 5-1 面 857 b 流路 断面図	136	図 142	下層確認トレンチ 出土遺物実測図 (3)	167
図 108	第 5-1 面 857 b 流路 出土遺物実測図	137	図 143	9 層 出土遺物実測図	167
図 109	5-1 層 出土遺物実測図	138	図 144	10 層 出土遺物実測図	167
図 110	第 5-2 面 遺構全体図	139	図 145	11 層 出土遺物実測図	168
図 111	第 5-2 面 858・864・866・868～873・885 土坑、881 溝 断面、及び 864 土坑		図 146	12 層 出土遺物実測図	168
			図 147	木製品実測図 (1)	169
			図 148	木製品実測図 (2)	170
			図 149	木製品実測図 (3)	171
			図 150	石器実測図 (1)	172
			図 151	石器実測図 (2)	173
			図 152	石器実測図 (3)	174
			図 153	石器実測図 (4)	175
			図 154	石器実測図 (5)	176
			図 155	石器実測図 (6)	177
			図 156	石器実測図 (7)	178
			図 157	石製品実測図	179
			図 158	銭貨実測図	180

図 159	第 1 面 遺構全体図、911・915 土坑、909・910 溝 断面、及び 911 土坑 出土遺物実測図	181	図 198	掘立柱建物 58 平・断面図	224
図 160	第 1 面 894 溝・耕作溝 出土遺物実測図	182	図 199	掘立柱建物 59 平・断面図	225
図 161	1～3 層 出土遺物実測図	182	図 200	掘立柱建物 60 平・断面図	226
図 162	4-1 層 出土遺物実測図	183	図 201	掘立柱建物 61 平・断面図	226
図 163	第 2 面 遺構全体図、及び耕作溝 出土遺物実測図	183	図 202	掘立柱建物 68 平・断面図	227
図 164	4-2 層 出土遺物実測図	184	図 203	7-66 土坑 7-309 土坑 11-87 土坑 25-19 土坑 7-371 土坑 11-130 土坑 11-149 ピット 23-63 ピット 平・断面図	229
図 165	第 3 面 遺構全体図、土器出土状況、及び出土遺物実測図	185	図 204	3 a 層帰属 7 区付近建物等遺構配置図 (平坦面 3 中世)	231
図 166	第 3 面 966・967 流路 出土遺物実測図	186	図 205	3 a 層帰属 建物等遺構配置図 (平坦面 4 中世)	233
図 167	第 4 面 遺構全体図、970～972 土坑・968・969 溝 断面図、及び 971 土坑・5 層出土遺物実測図	187	図 206	掘立柱建物 23 平・断面図	234
図 168	第 5 面 遺構全体図、及び 5 層 出土遺物実測図	188	図 207	掘立柱建物 33 平・断面図	235
図 169	第 6 面 遺構全体図、979 土坑 断面、及び出土遺物実測図	189	図 208	掘立柱建物 35 平・断面図	236
図 170	7-1 層 出土遺物実測図	189	図 209	掘立柱建物 38 平・断面図	237
図 171	第 7 面 遺構全体図、及び 980 流路 断面図	190	図 210	掘立柱建物 45 平・断面図	238
図 172	7-2 層 出土遺物実測図	190	図 211	7-355・400 井戸 11-7・40 井戸 平・断面図	240
図 173	7-3 層 出土遺物実測図	190	図 212	11-71・131 井戸 21-20 井戸 7-350 土坑 平・断面図	241
図 174	第 8-1 面 遺構全体図、及び 982 土坑 断面図	191	図 213	中世出土遺物 (1)	245
図 175	8-1 層 出土遺物実測図	191	図 214	中世出土遺物 (2)	246
図 176	第 8-2 面 遺構全体図、及び 984・985・988・1005・1006・2338 土坑・986 ピット 断面図	192	図 215	中世出土遺物 (3)	247
図 177	第 8-2 面 柱列 5 平・断面図	193	図 216	中世出土遺物 (4)	248
図 178	第 8-2 面 杭列 6 平・断面図	193	図 217	中世出土遺物 (5)	249
図 179	第 8-2 面 988 土坑・986 ピット 出土遺物実測図	194	図 218	中世出土遺物 (6)	250
図 180	第 8-2 面 1025 流路 断面図	195	図 219	中世出土遺物 (7)	251
図 181	8-2 層 出土遺物実測図	195	図 220	中世出土遺物 (8)	252
図 182	石器実測図	195	図 221	中世出土遺物 (9)	253
図 183	北壁地層模式図	203・204	図 222	中世出土遺物 (10)	254
図 184	北壁地層模式図	205・206	図 223	中世出土遺物 (11)	255
図 185	北壁地層模式図	207・208	図 224	中世出土遺物 (12)	256
図 186	平坦面・谷 位置図	209	図 225	中世出土遺物 (13)	257
図 187	第 3-1 面 段彩図	210	図 226	第 6 面検出 4 a 層帰属遺構配置図 (平坦面 1 古代～古墳時代)	259
図 188	第 3-1 面 遺構配置図	213	図 227	竪穴建物 4 平・断面図	260
図 189	10-1 溝 8-56・57・58 溝 18-2 溝 20-32 溝 平・断面図	215	図 228	竪穴建物 6 平・断面図	261
図 190	3 a 層帰属 建物等遺構配置図 (平坦面 1 中世)	217	図 229	竪穴建物 7 平・断面図	262
図 191	掘立柱建物 13 平・断面図	218	図 230	竪穴建物 8 10-112 カマド 竪穴建物 9 10-85 カマド 平・断面図	263
図 192	3 a 層帰属 建物等遺構配置図 (平坦面 2 中世)	219	図 231	竪穴建物 8 平・断面図	264
図 193	掘立柱建物 47 平・断面図	220	図 232	竪穴建物 9 平・断面図	266
図 194	4-90 ピット 4-98 ピット 平・断面図	220	図 233	竪穴建物 14 平・断面図	267
図 195	3 a 層帰属 建物等遺構配置図 (平坦面 3 中世)	221	図 234	竪穴建物 27 平・断面図	267
図 196	掘立柱建物 18 平・断面図	222	図 235	竪穴建物 19～26・28 外周溝・溝 全体図	269
図 197	掘立柱建物 19 平・断面図	223	図 236	竪穴建物 19・20 平・断面図	270
			図 237	竪穴建物 21 平面図 竪穴建物 20 遺物出土状況図・外周溝 遺物出土状況図	272
			図 238	竪穴建物 22 平面図・カマド 平・断面図	273
			図 239	竪穴建物 22 外周溝 断面図 竪穴建物 24 平面図 竪穴建物 23 断面図	274
			図 240	竪穴建物 25 平面図・外周溝 断面図	275

図 241	竪穴建物 26・28 平面図	275	図 290	掘立柱建物 65 平・断面図	323
図 242	竪穴建物 19・20・21・22・24・25・26・ 28・29 断面図	276	図 291	柱列 1 平・断面図	323
図 243	掘立柱建物 2 平・断面図	276	図 292	1-74 井戸 周辺遺構図	324
図 244	掘立柱建物 4 平・断面図	277	図 293	1-74 井戸 平・断面図	325
図 245	掘立柱建物 6 平・断面図	277	図 294	1-63・65・73・76 土坑 2-8 土坑 平・ 断面図	326
図 246	掘立柱建物 7 平・断面図	279	図 295	6-150 土坑 7-359 土坑 平・断面図	327
図 247	掘立柱建物 8 平・断面図	280	図 296	11-86 土坑 23-64 土坑 平・断面図	328
図 248	掘立柱建物 9 平・断面図	281	図 297	7-185 ピット 25-19 ピット 平・ 断面図	329
図 249	掘立柱建物 10 平・断面図	282	図 298	1-61・62 溝 断面図	330
図 250	掘立柱建物 11 平・断面図	283	図 299	1-5・1-62・7-5・22・27・30 溝 平・ 断面図	331
図 251	掘立柱建物 12 平・断面図	284	図 300	第 6 面検出 4 a 層帰属遺構配置図 (平坦面 4 古代~古墳時代)	334
図 252	掘立柱建物 14 平・断面図	285	図 301	竪穴建物 10 平・断面図	335
図 253	掘立柱建物 15 平・断面図	286	図 302	竪穴建物 11 平・断面図	336
図 254	掘立柱建物 44 平・断面図	287	図 303	竪穴建物 11 18-462 カマド 平・断面図	337
図 255	掘立柱建物 46 平・断面図	287	図 304	竪穴建物 11 遺物出土状況図	338
図 256	掘立柱建物 54 平・断面図	288	図 305	竪穴建物 12 平・断面図	339
図 257	掘立柱建物 55 平・断面図	289	図 306	掘立柱建物 24 平・断面図	340
図 258	掘立柱建物 70 平・断面図	289	図 307	掘立柱建物 25 平・断面図	341
図 259	掘立柱建物 57 平・断面図	290	図 308	掘立柱建物 27 平・断面図	342
図 260	4-29・45・46・47・48 土坑 平・断面図	292	図 309	掘立柱建物 30 平・断面図	343
図 261	10-140 土坑 平・断面図	293	図 310	掘立柱建物 34 平・断面図	344
図 262	4-47・131 19-1・3 土坑 平・断面図	294	図 311	掘立柱建物 39 平・断面図	345
図 263	4-48 土坑 平・断面図	295	図 312	掘立柱建物 40 平・断面図	346
図 264	10-159・17-12・13・14 土坑 断面図	295	図 313	掘立柱建物 41 平・断面図	347
図 265	19-1・3 土坑 4-62 溝 19-2 溝 平・ 断面図	297	図 314	掘立柱建物 42 平・断面図	348
図 266	10-95 溝 平・断面図	298	図 315	掘立柱建物 66 平・断面図	349
図 267	第 6 面検出 4 a 層帰属遺構配置図 (平坦面 2 古代~古墳時代)	299	図 316	12・13・14・18 区 拡大平面図	350
図 268	竪穴建物 15 平・断面図	300	図 317	13-19・20 土坑 14-78・85 土坑 断面 図 14-82 土坑 平・断面図	351
図 269	柵 1 平・断面図	300	図 318	18-148 土坑 平・断面図 18-424 土坑 断面図	353
図 270	第 6 面検出 4 a 層帰属遺構配置図 (平坦面 3 古代~古墳時代)	301	図 319	13-1・6・12 b 溝 16-7 溝 18-3・ 60・75・120・145・402 溝 断面図	356
図 271	竪穴建物 1 平・断面図	302	図 320	13-10 溝 平・断面図	357
図 272	竪穴建物 2 平・断面図	303	図 321	14-88 溝 平・断面図	358
図 273	竪穴建物 3 平・断面図	305	図 322	12-2 b・13-21 落ち込み 平・断面図	360
図 274	25-58・65・66 炉 平・断面図	306	図 323	18-4 落ち込み 断面図	360
図 275	竪穴建物 13 平・断面図	308	図 324	20-53・5-15・20-49・21-26 土坑 断面図 20-47 土坑 平・断面図	361
図 276	竪穴建物 16・17 全体平面図	309	図 325	7-401 溝 平・断面図	362
図 277	竪穴建物 16 平・断面図	310	図 326	古代~古墳時代出土遺物 (1)	365
図 278	竪穴建物 17 平・断面図	311	図 327	古代~古墳時代出土遺物 (2)	366
図 279	竪穴建物 16・17 外周溝 断面図	312	図 328	古代~古墳時代出土遺物 (3)	367
図 280	竪穴建物 18 平・断面図	313	図 329	古代~古墳時代出土遺物 (4)	368
図 281	竪穴建物 30 平・断面図	314	図 330	古代~古墳時代出土遺物 (5)	369
図 282	竪穴建物 30 6-10・13 土坑 6-8 溝 平・断面図	315	図 331	古代~古墳時代出土遺物 (6)	370
図 283	竪穴建物 31 平・断面図	316	図 332	古代~古墳時代出土遺物 (7)	371
図 284	竪穴建物 32 平・断面図	317	図 333	古代~古墳時代出土遺物 (8)	372
図 285	竪穴建物 34 平・断面図	318	図 334	古代~古墳時代出土遺物 (9)	373
図 286	掘立柱建物 31 平・断面図	319	図 335	古代~古墳時代出土遺物 (10)	374
図 287	掘立柱建物 32 平・断面図	320			
図 288	掘立柱建物 49 平・断面図	321			
図 289	掘立柱建物 50 平・断面図	322			

図 336	古代～古墳時代出土遺物 (11)	375	(弥生～縄紋時代)	394
図 337	古代～古墳時代出土遺物 (12)	376	図 356 平坦面 1 旧流路内 第 5-1・2 面平面図 (2	
図 338	古代～古墳時代出土遺物 (13)	377	- 2 区)	395
図 339	古代～古墳時代出土遺物 (14)	378	図 357 竪穴建物 5 平・断面図	396
図 340	古代～古墳時代出土遺物 (15)	379	図 358 5-3・5 土坑 平・断面図	397
図 341	古代～古墳時代出土遺物 (16)	380	図 359 10-158 土坑 平・断面図	398
図 342	古代～古墳時代出土遺物 (17)	381	図 360 掘立柱建物 62 平・断面図	399
図 343	古代～古墳時代出土遺物 (18)	382	図 361 方形周溝墓 1・2 平面図	400
図 344	古代～古墳時代出土遺物 (19)	383	図 362 18-155・156 溝 18-115・146・421	
図 345	古代～古墳時代出土遺物 (20)	384	土坑 断面図	402
図 346	古代～古墳時代出土遺物 (21)	385	図 363 弥生～縄紋時代出土遺物 (1)	405
図 347	古代～古墳時代出土遺物 (22)	386	図 364 弥生～縄紋時代出土遺物 (2)	406
図 348	古代～古墳時代出土遺物 (23)	387	図 365 弥生～縄紋時代出土遺物 (3)	407
図 349	古代～古墳時代出土遺物 (24)	388	図 366 弥生～縄紋時代出土遺物 (4)	408
図 350	古代～古墳時代出土遺物 (25)	389	図 367 弥生～縄紋時代出土遺物 (5)	409
図 351	古代～古墳時代出土遺物 (26)	390	図 368 弥生～縄紋時代出土遺物 (6)	410
図 352	古代～古墳時代出土遺物 (27)	391	図 369 遺構平面図	412
図 353	古代～古墳時代出土遺物 (28)	392	図 370 遺構平面図 建物 1 平・断面図	414
図 354	第 6 面検出 5 a 層帰属遺構配置図-1		図 371 地層断面図 遺構平面図	416
	(弥生～縄紋時代)	394	図 372 遺構平面図	417
図 355	第 6 面検出 5 a 層帰属遺構配置図-2			

表 目 次

表 1	第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧	6～16	表 5	第 3-1 面段彩 調査区別標高一覧	212
表 2	第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧	19～28	表 6	ピット一覧 (平坦面 2)	232
表 3	北壁地層模式図土色	199～202	表 7	溝一覧 (平坦面 2)	232
表 4	第 3-1 面全体図 調査区別遺構面一覧	211			

写 真 目 次

図版 1	1. 第 1-1 面 (1 区東半: 東から)		図版 4	1. 竪穴建物 2・3 断面 (1 区: 南から)	
	2. 第 1-1 面 耕作痕全景 (1 区東半: 北から)			2. 竪穴建物 2 全景 (1 区: 南から)	
	3. 第 1-1 面 (7 区: 北から)		図版 5	1. 竪穴建物 2 カマド内遺物出土状況	
	4. 第 1-2 面 (5 区南半: 西から)			(1 区: 南から)	
	5. 第 1-3 面 (3 区北半: 南から)			2. 竪穴建物 2 カマド内土器設置状況	
	6. 第 2-1 面 (3 区北半: 東から)			(1 区: 南から)	
	7. 第 2-1 面 (5 区: 南西から)			3. 竪穴建物 2 カマド内土器設置状況	
	8. 第 3-1 面 (2 区北半: 東から)			(1 区: 南から)	
図版 2	1. 第 3-1 面 (2 区南半: 北東から)		図版 6	1. 竪穴建物 2 カマド (1 区: 南から)	
	2. 第 3-1 面 (3 区: 南から)			2. 竪穴建物 2 カマド断面 (1 区: 南から)	
	3. 第 3-1 面 (5 区: 南から)			3. 竪穴建物 2 カマド断面 (1 区: 南から)	
	4. 第 3-1 面 (6 区: 南から)			4. 竪穴建物 2 カマド断面 (1 区: 南から)	
	5. 第 3-1 面 (7 区: 東から)			5. 竪穴建物 2 カマド遺物出土状況	
	6. 第 3-1 面 (7 区: 北から)			(1 区: 南から)	
	7. 竪穴建物 1 断面 (1 区: 南から)			6. 竪穴建物 2 カマド遺物除去後 (1 区: 南から)	
	8. 竪穴建物 1 全景 (1 区: 北から)			7. 竪穴建物 2 カマド断ち割り状況 (1 区: 南から)	
図版 3	1. 竪穴建物 1～3 全景 (1 区: 北から)		図版 7	1. 竪穴建物 3 柱穴検出状況 (1 区: 南から)	
	2. 竪穴建物 1 カマド検出状況 (1 区: 北から)			2. 竪穴建物 4 全景 (1 区: 北東から)	
	3. 竪穴建物 1 カマド断面 (2 区: 北から)			3. 竪穴建物 5 全景 (2 区: 東から)	
	4. 竪穴建物 1 カマド全景 (1 区: 北から)			4. 掘立柱建物 1・2・3・16、143 溝 全景	
	5. 竪穴建物 1 柱穴検出状況全景 (1 区: 南から)				

- (2区:北東から)
5. 掘立柱建物1・2・3 全景(2区:北東から)
6. 掘立柱建物1 全景(2区:南東から)
7. 掘立柱建物2 全景(2区:東から)
8. 掘立柱建物3 全景(2区:南東から)
- 図版8 1. 掘立柱建物5 全景(2区:東から)
2. 掘立柱建物4 202柱穴(2区:南から)
3. 掘立柱建物4 222柱穴(2区:南東から)
4. 掘立柱建物5 203柱穴(2区:北から)
5. 掘立柱建物5 227柱穴(2区:南から)
- 図版9 1. 掘立柱建物4 全景(2区:東から)
2. 掘立柱建物5・6、柱列3・4 全景(2区:東から)
3. 掘立柱建物6 全景(2区:東から)
4. 掘立柱建物7 全景(1区:東から)
5. 掘立柱建物11・12 全景(1区:北西から)
6. 掘立柱建物13 全景(1区:西から)
7. 掘立柱建物15 全景(7区:東から)
8. 掘立柱建物17 全景(7区:東から)
- 図版10 1. 掘立柱建物7 441柱穴(1区:南東から)
2. 掘立柱建物8 210柱穴(1区:北西から)
3. 掘立柱建物8 215柱穴(1区:南から)
4. 掘立柱建物9 455柱穴(1区:東から)
5. 掘立柱建物10 全景(1区:東から)
- 図版11 1. 掘立柱建物10 469柱穴(1区:南から)
2. 掘立柱建物11 253柱穴(1区:北から)
3. 掘立柱建物14 272柱穴(1区:西から)
4. 掘立柱建物16 412柱穴(2区:南西から)
5. 487ピット(1区:東から)
6. 175ピット(2区:南西から)
7. 395ピット(2区:東から)
8. 406ピット(2区:南東から)
- 図版12 1. 2290井戸(6区:北から)
2. 143溝(2区:東から)
3. 143溝西部 遺物出土状況(2区:南から)
4. 2297溝 遺物出土状況(6区:西から)
5. 畦畔検出状況(5区:南から)
- 図版13 1. 畦畔検出状況(5区:東から)
2. 第4面(6区:南東から)
3. 第5-1面(3区:南東から)
4. 第5-1面(6区:南から)
5. 309c流路 2340シガラミ全景(6区:南から)
6. 2342流路 2341シガラミ全景(6区:南から)
7. 第8面(1区:北西から)
8. 第8面(3区:南から)
- 図版14 1. 308a流路 全景(3区:東から)
2. 308a流路 北側断面(3区:北西から)
3. 308a流路 南側断面(3区:南東から)
4. 308a流路 遺物出土状況(3区:北西から)
5. 第5-1面(1区:西から)
- 図版15 1. 308b流路 2339シガラミ検出状況(3区:東から)
2. 308b流路 槽出土状況(3区:東から)
3. 308b流路 丸蹴出土状況(3区:東から)
4. 308a流路底部 土器出土状況(3区:東から)
5. 308b流路肩部 土器出土状況(3区:東から)
- 図版16 1. 第6面(6区:南から)
2. 890土坑(3区:西から)
3. 890土坑 檜材出土状況(3区:西から)
4. 890土坑 又鋤出土状況(3区:南から)
5. 890土坑 全景(3区:南から)
- 図版17 1. 第8面(5区:南から)
2. 第7-1層 竪杵出土状況(3区:南東から)
3. 859e流路 土器出土状況(3区:南から)
4. 石棒出土状況(5区:北から)
5. 第2面(4区南半:南東から)
- 図版18 1. 第5面(4区:北から)
2. 第6面(4区:北から)
- 図版19 1. 第8-2面(4区:北から)
2. 柱列5 全景(4区:東から)
3. 1005土坑 全景(4区:南から)
4. 986ピット、2338土坑 全景(4区:東から)
5. 988土坑 全景(4区:南から)
- 図版20 土器(1)
- 図版21 土器(2)
- 図版22 土器(3)
- 図版23 土器(4)
- 図版24 木製品(1)
- 図版25 木製品(2)
- 図版26 石製品・石器(1)
- 図版27 石器(2)
- 図版28 石器(3)
- 図版29 石器(4)
- 図版30 石器(5)
- 図版31 1. 第3-1面(4-1区:北から)
2. 第3-1面(10-3区:南西から)
3. 第3-1面(11-1区東半:北から)
4. 第3-1面(13区:北西から)
5. 第3-1面(24-5区:南西から)
6. 第3-1面(6-3区:西から)
7. 第3-1面(6-5区:東から)
8. 第3-1面(6-6区:東から)
- 図版32 1. 8-58溝(8-4区:東から)
2. 暗渠(15-2区:南東から)
3. 23-15溝 全景(23-1区:北から)
4. 23-15溝(23-1区:南から)
5. 4-90ピット(4-1区:北から)
6. 11-130ピット(11-2区:南から)
7. 11-131井戸(11-2区:南から)
8. 7-350土坑(7-4区:北から)
- 図版33 1. 掘立柱建物13 全景(10-1区:東から)
2. 掘立柱建物18 全景(7-2区:北から)
3. 掘立柱建物19 全景(7-2区:北から)
4. 掘立柱建物58 全景(6-5区:南から)
5. 掘立柱建物60 全景(25-1区:西から)
6. 掘立柱建物61 全景(25-1区:南から)
7. 掘立柱建物33 全景(18-1区:南から)
8. 掘立柱建物35 全景(18-1区:南から)

- 図版 34 1. 掘立柱建物 38 全景 (18-1区:西から)
2. 掘立柱建物 45 全景 (18-2区:東から)
- 図版 35 1. 第4面 (21-2区:北から)
2. 第4面 (6-6区:東から)
3. 第4面 (11-1区東半:北から)
4. 第4面 (11-1区東半:南から)
5. 第4面 (11-3区:南から)
6. 第4面 (24-1区:西から)
7. 第4面 (24-5区:南西から)
8. 第4面 (9-3区:西から)
- 図版 36 1. 第6面 (10-1区:南から)
2. 第6面 (10-1区:北東から)
- 図版 37 1. 第6面 (4-3区:南から)
2. 第6面 (10-3区:南西から)
3. 第6面 (17-3区:北から)
4. 第6面 (22-2区:南東から)
5. 第6面 (1-1区:北から)
6. 第6面 (1-3区:西から)
7. 第6面 (2-2区:北から)
8. 第6面 (6-5区:南から)
- 図版 38 1. 第6面 (7-2区東半部:東から)
2. 第6面 (7-2区西半部:東から)
3. 第6面 (7-3区東半部:西から)
4. 第6面 (7-4区:西から)
5. 第6面 (11-1区東半:北から)
6. 第6面 (11-2区西半部:南から)
7. 第6面 (11-3区:南から)
8. 第6面 (11-4区:南から)
- 図版 39 1. 第6面 (11-2区東半部:南東から)
2. 第6面 (25-1区:南から)
3. 第6面 (13区:北西から)
4. 第6面 (14区:西から)
5. 第6面 (18-1区:南から)
6. 竪穴建物 4 全景 (4-2区:南から)
7. 竪穴建物 6 全景 (10区:北東から)
8. 竪穴建物 7 全景 (10区:東から)
- 図版 40 1. 竪穴建物 4 東西断面 (4-2区:南西から)
2. 竪穴建物 4 南北断面 (4-2区:南東から)
3. 竪穴建物 7 遺物出土状況 (10区:東から)
4. 竪穴建物 7 遺物出土状況 (10区:西から)
5. 竪穴建物 7 10-141 柱穴 (南東から)
6. 竪穴建物 7 10-142 柱穴 (南西から)
7. 竪穴建物 7 10-143 柱穴 (北東から)
8. 竪穴建物 7 10-144 柱穴 (北西から)
- 図版 41 1. 竪穴建物 8 全景 (10区:南から)
2. 竪穴建物 9 全景 (10区:南から)
3. 竪穴建物 27 全景 (17-2区:北から)
4. 竪穴建物 14 全景 (19-2区:東から)
5. 竪穴建物 19~25 全景 (4-4区:西から)
6. 竪穴建物 19・20 全景 (4-4区:北から)
7. 竪穴建物 21・24 全景 (4-4区:北から)
8. 竪穴建物 25 全景 (4-4区:北から)
- 図版 42 1. 竪穴建物 19等 断面 (4-4区:北から)
2. 竪穴建物 22 4-153 溝 (東から)
3. 竪穴建物 22 4-153 溝 (東から)
4. 竪穴建物 22 4-154 カマド (南から)
5. 竪穴建物 22 4-154 カマド (南から)
6. 竪穴建物 25 検出状況 (4-4区:西から)
7. 竪穴建物 25 断面 (4-4区:東から)
8. 竪穴建物 25 4-151・152 溝 (東から)
- 図版 43 1. 掘立柱建物 2 全景 (4-2区:南から)
2. 掘立柱建物 7 全景 (10区:東から)
3. 掘立柱建物 8 全景 (10区:北東から)
4. 掘立柱建物 9 全景 (10区:東から)
5. 掘立柱建物 10 全景 (10区:南東から)
6. 掘立柱建物 11 全景 (10区:東から)
7. 掘立柱建物 14 全景 (10区:東から)
8. 掘立柱建物 44 全景 (20-1区:東から)
- 図版 44 1. 掘立柱建物 54 全景 (4-4区:北から)
2. 掘立柱建物 55 全景 (4-5区:南から)
- 図版 45 1. 竪穴建物 1 全景 (1-3区:北東から)
2. 竪穴建物 2 全景 (1-3区:北西から)
- 図版 46 1. 竪穴建物 3 全景 (25-1区:北から)
2. 竪穴建物 3 全景 (25-1区:西から)
- 図版 47 1. 竪穴建物 3 (25-1区:西から)
2. 竪穴建物 3 25-65 土坑 (東から)
3. 竪穴建物 3 25-65 土坑 (北から)
4. 竪穴建物 3 25-58 土坑 (西から)
5. 竪穴建物 3 25-58 土坑 (東から)
6. 竪穴建物 3 25-58 土坑 (東から)
7. 竪穴建物 3 25-66 土坑 (東から)
8. 竪穴建物 3 25-66 土坑 (東から)
- 図版 48 1. 竪穴建物 13 全景 (11-2区:南西から)
2. 竪穴建物 13 11-79 ピット (東から)
3. 竪穴建物 13 壁溝 (11-2区:南東から)
4. 竪穴建物 13 11-141 柱穴 (東から)
5. 竪穴建物 13 断面 (11-2区:北東から)
- 図版 49 1. 竪穴建物 16 全景 (11-2区:北西から)
2. 竪穴建物 16 遺物出土状況 (南西から)
3. 竪穴建物 16 南北断面 (11-2区:南から)
4. 竪穴建物 16 11-75 柱穴 (北から)
5. 竪穴建物 16 11-70 溝: D (南から)
- 図版 50 1. 竪穴建物 17 全景 (11-2区:西から)
2. 竪穴建物 17 遺物出土状況 (北から)
3. 竪穴建物 17 南北断面 (11-2区:南から)
4. 竪穴建物 17 東西断面 (11-2区:南から)
5. 竪穴建物 17 11-74 溝: F (西から)
- 図版 51 1. 竪穴建物 18 全景 (11-2区:北から)
2. 竪穴建物 30 全景 (6-5区:南から)
- 図版 52 1. 竪穴建物 31 全景 (23-2区:北西から)
2. 竪穴建物 32 全景 (23-2区:東から)
- 図版 53 1. 掘立柱建物 32 全景 (11-2区:南西から)
2. 掘立柱建物 49 全景 (11-2区:南西から)
- 図版 54 1. 掘立柱建物 50 全景 (11-2区:南から)
2. 竪穴建物 11 全景 (18-1区:西から)
- 図版 55 1. 竪穴建物 11 遺物出土状況 (南から)
2. 竪穴建物 11 遺物出土状況 C (西から)
3. 竪穴建物 11 壁溝内遺物出土状況 C (南から)

4. 竪穴建物 11 壁溝内遺物出土状況 (南東から)
 5. 竪穴建物 11 壁溝 (18-1区:西から)
 6. 竪穴建物 11 18-135 溝 (西から)
 7. 竪穴建物 11 南北断面1 (南東から)
 8. 竪穴建物 11 東西断面1 (西から)
- 図版 56 1. 竪穴建物 11 南北断面2 (西から)
 2. 竪穴建物 11 東西断面2 (南から)
 3. 竪穴建物 11 18-462 カマド (西から)
 4. 竪穴建物 11 18-462 カマド (南から)
 5. 竪穴建物 11 18-462 カマド (西から)
 6. 竪穴建物 11 18-462 カマド (西から)
 7. 竪穴建物 11 18-249 柱穴 (北東から)
 8. 竪穴建物 11 18-252 柱穴 (南東から)
- 図版 57 1. 竪穴建物 12 全景 (18-1区:北から)
 2. 竪穴建物 12 東西断面 (18-1区:南から)
 3. 竪穴建物 12 壁溝 (18-1区:東から)
 4. 竪穴建物 12 カマド (18-1区:西から)
 5. 竪穴建物 12 18-137 柱穴 (北東から)
- 図版 58 1. 掘立柱建物 24 全景 (14区:北から)
 2. 掘立柱建物 25 全景 (14区:西から)
- 図版 59 1. 掘立柱建物 39 全景 (18-1区:北から)
 2. 掘立柱建物 40 全景 (18-1区:東から)
- 図版 60 1. 掘立柱建物 41 全景 (18-1区:東から)
 2. 掘立柱建物 42 全景 (18-1区:南から)
- 図版 61 1. 4-48 土坑 (4-2区:北西から)
 2. 19-1 土坑 (19-2区:北西から)
 3. 4-62 溝 全景 (4-1区:南から)
 4. 4-62 溝 (4-1区:北から)
 5. 10-95 溝 (10-1区:南から)
 6. 10-95 溝 (10-1区:西から)
 7. 7-150 溝 (7-2区:東から)
 8. 1-74 井戸 遠影 (1-1区:南から)
- 図版 62 1. 1-74 井戸 近影 (1-1区:南から)
 2. 1-74 井戸 (1-1区:南から)
 3. 1-63 土坑 (1-1区:南西から)
 4. 1-63 土坑 (1-1区:南から)
 5. 1-65 土坑 (1-1区:北から)
 6. 1-73 土坑 (1-1区:北から)
 7. 11-86 土坑 (11-2区:南西から)
 8. 11-86 土坑 (11-2区:南から)
- 図版 63 1. 6-105 土坑 (6-6区:東から)
 2. 25-37 柱穴 (25-1区:西から)
 3. 1-5 溝 (1-3区:北西から)
 4. 7-27 溝 (7-3区:北西から)
 5. 7-30 溝 (7-3区:北から)
 6. 7-30 溝 (7-3区:南西から)
 7. 7-30 溝 (7-3区:南から)
 8. 7-360 溝 (7-10区:北から)
- 図版 64 1. 14-82 土坑 (14-1区:南から)
 2. 13-10 溝 (13-1区:北東から)
 3. 13-10 溝 (13-1区:南から)
 4. 13-12 b 溝 (13-1区:西から)
 5. 13-12 b 溝 全景 (13-1区:南西から)
 6. 14-88 溝 全景 (14-1区:北東から)
7. 18-3 溝 全景 (18-2区:南西から)
 8. 18-3 溝 (18-2区:西から)
- 図版 65 1. 13-21 落ち込み (13-1区:西から)
 2. 18-4 落ち込み (18-1区:南西から)
 3. 竪穴建物 5 5-3 土坑 (5-1区:北から)
 4. 竪穴建物 5 5-5 土坑 (5-1区:北から)
 5. 竪穴建物 5 全景 (5-1区:南から)
- 図版 66 1. 掘立柱建物 62 全景 (25-1区:西から)
 2. 竪穴建物 5 5-4 柱穴 (5-1区:南から)
 3. 竪穴建物 5 5-8 柱穴 (5-1区:南から)
 4. 掘立柱建物 62 25-41 柱穴 (北から)
 5. 方形周溝墓 1 18-58 主体部 (東から)
- 図版 67 1. 方形周溝墓 1 全景 (18-1区:東から)
 2. 方形周溝墓 2 全景 (18-1区:西から)
- 図版 68 1. 方形周溝墓 1 18-57 土坑 (東から)
 2. 方形周溝墓 2 18-115 土坑 (西から)
 3. 方形周溝墓 2 10-158 土坑 (南から)
 4. 18-143 土坑 (18-1区:南東から)
 5. 1-78 土坑 (1-1区:北から)
 6. 第5-2面 (22-2区:南から)
 7. 第5-2 b面 (22-2区:南から)
 8. 旧流路 (南東から)
- 図版 69 1. 上の山遺跡 08-1 調査区北半部 (南西から)
 2. 上の山遺跡 08-1 調査区南半部 (北西から)
 3. 上の山遺跡 08-1 調査区西半部 (南東から)
- 図版 70 1. 上の山遺跡 09-1 調査区東半部 (南西から)
 2. 上私部遺跡 09-1 調査区全景 (東から)
 3. 有池遺跡 09-1 調査区全景 (南から)
- 図版 71 土器・土製品 (平坦面 1①)
 図版 72 土器・土製品 (平坦面 1②)
 図版 73 土器・土製品 (平坦面 1③・平坦面 2・平坦面 3①)
 図版 74 土器・土製品 (平坦面 3②)
 図版 75 土器・土製品 (平坦面 3③・平坦面 4①、谷 1①)
 図版 76 土器・土製品 (平坦面 4②)
 図版 77 土器・土製品 (平坦面 4③)
 図版 78 土器・土製品 (平坦面 4④、谷 1②)
 図版 79 土器・土製品 (平坦面 3④、谷 1③)
 図版 80 土器・土製品 (谷 1④・谷 2①)
 図版 81 土器・土製品 (谷 1⑤・谷 2②・谷 3①)
 図版 82 土器・土製品 (谷 3②)、石製品 (1)
 図版 83 石製品 (2)
 図版 84 石製品 (3)
 図版 85 石製品 (4)
 図版 86 石製品 (5)
 図版 87 石製品 (6)
 図版 88 石製品 (7)、金属製品
 図版 89 木製品 (1)
 図版 90 木製品 (2)
 図版 91 木製品 (3)
 図版 92 木製品 (4)
 図版 93 木製品 (5)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書に収録する、私部南遺跡06-2・私部南遺跡07-1・有池遺跡09-1・上私部遺跡09-1・上の山遺跡08-1・上の山遺跡09-1の発掘調査は、第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴って実施したものである（図1）。第二京阪道路は、京都市伏見区から大阪府門真市に至る延長約28.3kmの、一般国道1号のバイパスである。道路構造は、専用部と呼ばれる6車線の自動車専用道路と、側道と呼ばれる2～4車線の一般道路からなる。また、その外側には、副道・植栽帯・自転車歩行者道からなる幅20mの環境施設帯を設けている。第二京阪道路は、昭和44年5月に大阪府域区間の都市計画が決定（一部は昭和46年2月）され、平成22年3月20日に全線開通している。

第二京阪道路内遺跡の埋蔵文化財については、大阪府教育委員会の指示により平成8年より確認調査が行われ、その調査成果にもとづき、文化財保護法に基づく新規の遺跡発見や、周知の遺跡の拡大などの判断が大阪府教育委員会によりなされた。これを受けて、私部南遺跡・有池遺跡・上私部遺跡・上の山遺跡の本格的な発掘調査が開始された。

私部南遺跡06-2・07-1（図1）

私部南遺跡は、本遺跡を含む京阪電鉄交野線西側の市道から府道交野久御山線北川交差点付近までの延長約1.2kmについて、平成13年9月から翌平成14年3月にかけて大阪府教育委員会文化財保護課

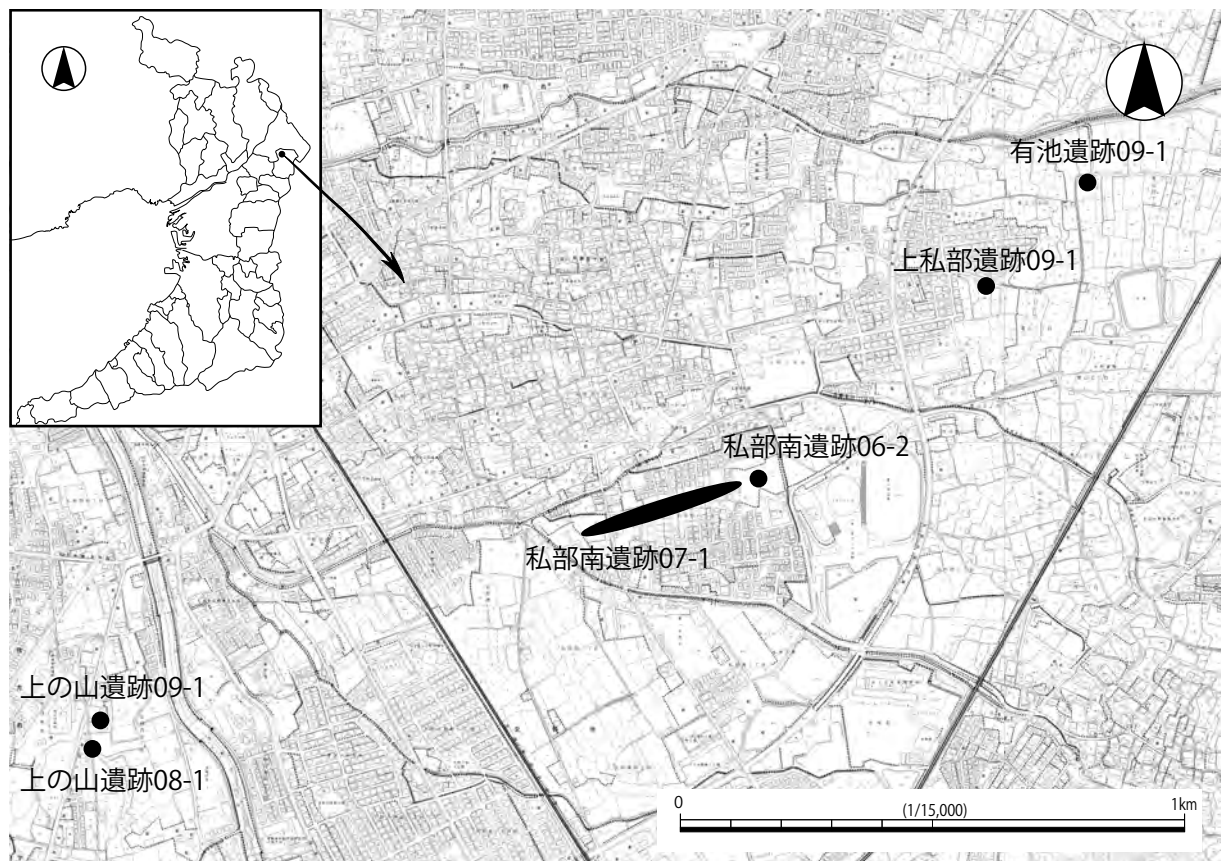


図1 調査地位置図

の指導のもと国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所（平成 15 年 4 月 1 日に浪速国道工事事務所より名称変更）、西日本高速道路株式会社関西支社枚方工事事務所（平成 17 年 10 月 1 日に日本道路公団より分割・発足）（以下、第二京阪道路事業者とする）の委託を受け、財団法人大阪府文化財センターが一次調査を実施している。

その結果、地点によって疎密はみられるものの遺構・遺物が検出され、それまでの私部南遺跡の範囲が平成 14 年 5 月付けで北と東に拡張された。この成果を受け、平成 16 年から平成 17 年にかけて私部南遺跡 04－1 の調査が実施された。私部南遺跡 04－1 は平成 17 年 3 月に調査を終了し、平成 19 年 3 月に「私部南遺跡Ⅰ」として報告書を刊行している。平成 18 年には私部南遺跡 06－1 と私部南遺跡 06－2 の発掘調査が開始された。私部南遺跡 06－1 は、平成 20 年 1 月に現地での調査を終了し、平成 23 年 3 月に「私部南遺跡Ⅱ」として報告書を刊行している。私部南遺跡 06－2 は平成 18 年 11 月に、私部南遺跡 07－1 は平成 19 年 11 月に機械掘削を開始し、順次人力掘削を開始している。

有池遺跡 09－1（図 1）

周知の遺跡であった有池遺跡内に、第二京阪道路が建設されることに伴い、平成 11 年に確認調査が行われその結果、遺跡範囲の拡大が行われた。平成 14 年には大阪府教育委員会の指導のもと、第二京阪道路事業者からの委託を受け、有池遺跡 02－1 の発掘調査が当センターにより実施された。翌平成 15 年には有池遺跡 03－1・2 の調査が行われた。これらの調査成果は平成 19 年に「有池遺跡Ⅰ」として調査報告書を刊行している。その後、大阪府枚方工事事務所（旧枚方土木工事事務所）より、委託を受け主要地方道枚方大和郡山線（都市計画道路村野神宮寺線）建設に伴う発掘調査として有池遺跡 04－1 が行われた。平成 18 年にはその成果を「有池遺跡Ⅱ」として報告書を刊行している。

有池遺跡 02－1 から 03－2 の調査によって有池遺跡内における第二京阪道路の発掘調査は終了したが、狭小な面積ではあるが未調査の部分があった。このため大阪府教育委員会は、事業用地内の細かい未調査地についても、稠密に遺構が分布する範囲については発掘調査が必要であるとの判断を下した。

これらの経緯を受けて有池遺跡 09－1 の発掘調査が行われた。現地調査は平成 21 年 4 月 20 日に開始し、平成 21 年 5 月 8 日に終了している。

上私部遺跡 09－1（図 1）

上私部遺跡は、平成 11 年に実施した第二京阪道路建設に伴う確認調査により、新規発見された遺跡である。平成 15 年には大阪府教育委員会の指導のもと、第二京阪道路事業者の委託を受け上私部遺跡 03－1 の発掘調査が実施された。その成果は平成 18 年に「上私部遺跡Ⅰ」として刊行している。

平成 17 年には、上私部遺跡 05－1、平成 19 年には上私部 07－1・2、平成 20 年には上私部遺跡 08－1 の発掘調査が実施された。これらの成果は「上私部遺跡Ⅱ」平成 19 年刊行、「上私部遺跡Ⅲ・有遺跡Ⅲ」平成 21 年刊行にそれぞれ掲載している。これらの調査をもって、上私部遺跡内の第二京阪道路建設に伴う発掘調査は終了した。

平成 21 年には、第二京阪道路に付随する建物の建設に伴い上私部遺跡 09－1 の発掘調査が行われた。現地調査は平成 21 年 6 月 15 日に開始し、平成 21 年 6 月 26 日に終了している。

上の山遺跡 08－1・09－1（図 1）

上の山遺跡は、平成 12 年に財団法人大阪府文化財センターが、第二京阪道路事業からの委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、一般国道 1 号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建

設予定地内において茄子作遺跡として確認調査を実施した際に新規に発見された遺跡である。その確認調査の成果を受けて、平成15年に上の山遺跡03-1の発掘調査を行い、平成18年に「上の山遺跡Ⅱ」として報告書を刊行している。その後、第二京阪道路につながる168号線（枚方大和高田線・天の川磐船線）道路建設に伴う発掘調査として、平成16年に上の山遺跡04-1、平成17年に上の山遺跡05-1・05-2として発掘調査を行った。

また、平成17年には第二京阪道路建設に伴う発掘調査として上の山05-3の発掘調査も行った。

上の山遺跡04-1は2005年に「上の山遺跡Ⅰ」として、上の山遺跡05-1・05-2は2007年に「上の山遺跡Ⅲ」として報告書を作成している。上の山05-3は「上の山遺跡Ⅱ」に収録している。

平成18・19年には168号線道路建設に伴う発掘調査として上の山遺跡06-1・07-1の発掘調査を実施、平成19年「上の山遺跡Ⅲ」として報告書を刊行。平成20年度には第二京阪道路建設に伴う発掘調査として上の山遺跡08-1を、平成21年には上の山遺跡09-2の発掘調査を実施した。

本書が関わる上の山遺跡08-1は平成20年5月から6月、上の山遺跡09-1は平成21年4月から6月まで現地調査を実施した。

図2・3と表1に当センターが行った第二京阪道路建設に伴う調査一覧を掲載している。

第2節 調査の経過

私部南遺跡06-2

私部南遺跡06-2は、発掘調査を平成18年10月に開始したが、既設フェンスの撤去や進入路の設置・雨水排水路の設置、万能板設置などの事前作業があり、機械掘削の開始は11月末であった。調査区の設定については、遺構平面図作成などに用いる写真撮影用の25トントラッククレーンの通行と撮影限界範囲と、その後の建設工事用大型車両の通行を可能ならしめるための進入路の確保を第一義としたため、道路計画地内の南辺に沿って1区とした調査区を設け、その後は撮影範囲の限界と、掘削土仮置場用地を勘案しながら南北方向に長い短冊状の2・3・5・6区を設定した。

なお、平成16年度に実施された調査で、弥生時代の遺構面が確認された04-1の1区の北側については、橋脚建設予定地が調査対象地とされ、これを06-2の4区と呼称して調査を実施し、竪穴建物が検出されるまでには至らなかったが、当初の予測どおり、弥生時代前期遺構面の続きを確認し、当該期における周辺の地形環境を復原する上において有為な情報を得ることができた。

そして、地元との協議が整う中で、道路予定地に含まれていた向井田集会場の移転が決定し、その跡地を06-2の追加調査区とするか否かについて、国土交通省近畿地方整備局浪花国道事務所・西日本高速道路株式会社関西支社枚方工事事務所・大阪府教育委員会・当センターの間で協議が持たれ、その結果、工期内で完了させる時間的余裕が確保される状況にあったことからこれを7区として追加調査を実施し、7区の調査を完了させることによって、当初からの懸案事項であった工事中進入路の確保も現実のものとなった。

また、調査予定であった2箇所については、調査に至る条件整備が整わず私部南06-2で発掘調査を実施することができなかった。このため、後続の私部南07-1の調査に含むことを第二京阪道路事業者・大阪府教育委員会・当センターで決定した。

その後、調査は順調に進展し、平成20年1月22日に人力掘削を終了し、1月31日に全ての作業を終了した。

私部南遺跡 07 - 1

私部南遺跡07-1は、私部南06-2と同様に第二京阪道路の高架橋道路部分の建設用地内にあたる。

第二京阪道路の供用開始が決定していることもあり、道路工事や発掘調査の工程も非常に厳しい状況であった。そのため、従来のように発掘調査終了後、道路工事に着手する工程の期間を確保することができず、発掘調査と道路工事を並行して実施することとなった。具体的には、高架橋道路の橋脚の部分を施工する下部工と呼ばれる部分と、高架橋道路の橋梁部分の道路を施工する上部工部分と発掘調査の並行実施である。実際には下部工により橋脚が完成してから、上部工が開始されるため時間差があり、開始当初は下部工と発掘調査の並行実施であった。

当初、こういった同一場所での並行実施にあたって、各施工業者間との工程調整や安全管理など多くの問題が予想された。そのため、2007年10月11日に初めて現地で行われた会議の冒頭で今回を第1回として、定期的に会議を行いたいとの提案があり、以降月1回の「私部南遺跡発掘調査 連絡調整会議」を開くこととなった。参加者は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、大阪府教育委員会文化財保護課、交野市都市整備部第二京阪道路対策室、西日本道路株式会社関西支社枚方工事事務所、下部工工事請負業者、上部工工事請負業者（上部工乗り込み後から参加）、文化財工事請負業者、当センターの8者である。この連絡調整会議は、調査終了までに28回開かれた。連絡調整会議は、センターにとって発掘調査を安全に効率よく進める上で非常に重要な会議となった。この会議で提案された案件や、確認された事項は速やかに実施に移され、センターのみならず、事業者・請負業者にとっても有意義な会議であった。

私部南07-1の調査は2007年4月6日からであったが、実際に発掘調査の機械掘削に着手したのは11月初めであった。この間に、センター・交野市・第二京阪道路事業者・請負業者は地元調整を行っていたためである。その後、発掘調査の機械掘削が開始された。

現地調査に当たっては、調査着手前から大阪府教育委員会・第二京阪道路事業者・センターの間で、私部南07-1については、本体工事及び本体工事に伴う付帯工事により私部南遺跡内で遺構が破壊される部分についてのみ発掘調査の対象とする調整が行われており、基本的に副道と橋脚・調整池の部分が対象となっていた。そのため、図6・表2-3～9に示すように当調査地内において斜線のハッチングがかかっている部分が未調査部分となっている。

なお、これまでの第二京阪道内の発掘調査においては、大阪府教育委員会により特に必要と認められた部分についてはその都度、大阪府教育委員会と事業者とが協議の上、保存区として検出した遺構の保存に務めている。

こうした保存区は、第二京阪道路内に点在しており、図4～8と表2に示す。これらの中には、上の山遺跡で発見され新聞などで報道された、弥生時代中期の独立棟持柱を持つ大形掘立柱建物などが含まれる。

このような発掘調査範囲の調整などを行いながら、当初調査は用地内を縦・横断する現道を残したまま進め、副道部分の調査終了後に副道部分へ現道に移設し、必要に応じてその部分の調査を実施することが事業者と大阪府教育委員会で合意され、副道部分と橋脚部分の発掘調査を進めた。しかし、本体工事の進展に伴い、当初発掘調査の予定がなかった現道部分のライフラインとりわけ最も早く工事の必要な下水管と、それに伴う人孔の取り扱いが問題となった。このため、大阪府教育委員会と事業者は再度協議を行い、現道部分の当該工事については、工事等による文化財の損壊又は影響を及ぼすおそれのあ

る範囲が狭小で通常の発掘調査が困難であったため、大阪府教育委員会が平成12年3月に策定した「大阪府における開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて（通知）」の大阪府における開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱い基準に基づき工事立会が適当との判断が示されることとなり、平成20年5月2日付教委文1254号により、大阪府教育委員会から当センターへ発掘調査の実施について通知がなされることとなった。

この通知をうけ、平成20年5月12日から工事工程にあわせて17箇所について調査を実施することとした。調査方法は、職員立会いのもと重機による掘削と必要に応じて人力による掘削を行い、地点ごとに調査カードを作成し、土層の観察および遺物の採集に努めた。また状況写真についても適宜撮影することとした。これらは狭小な部分の調査であるが、基本的に現道部分は本体工事終了後、原に復し利用するため調査を行わない範囲に含まれるため、既調査区の補完をする成果として重要な調査であった。

さらに、平成20年8月に事業者より、副道の設置位置変更の報告が連絡調整会議であり、調査範囲が増加し新たな工程案が示された。これを受け、調査面積・期間の延長の調整が図られた。

その後調査は順調に進み、平成21年5月頃より上部工工事が開始された。上部工工事は、発掘調査地の直近・上空での施工で、安全確保が心配されたが無事、調査と工事の並行施工を行うことができた。

平成22年1月8日に、現地での調査を終了し、私部南遺跡07-1の発掘調査終了をもって、第二京阪道路内遺跡の発掘調査は全て終了した。

平成22年3月14日には、第二京阪道路開通イベントが開催され、この機会を捉え当センターも第二京阪道路内遺跡の調査成果を広く紹介することができた。

平成22年3月20日、第二京阪道路は全線開通となった。

表 1-1 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受託		大阪府	工事請負		報告書		
			浪速国道事務所	西日本高速道路		年度	契約名	航空測量	年度	報告書番号
津田遺跡03-1	※ 枚方市津田地先	第二京阪道路（大阪北道路）津田・東倉治遺跡（確認）発掘調査	平成15年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田、東倉治遺跡）	大阪府	津田・東倉治遺跡（確認）発掘調査に伴う工事	15	津田・東倉治遺跡（確認）発掘調査に伴う航空測量	16	津田遺跡、東倉治遺跡、茄子作遺跡他	124
津田遺跡05-1	枚方市津田南町1丁目地先他		平成17年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡）	大阪府	津田遺跡発掘調査に伴う工事	17・18	津田遺跡発掘調査に伴う航空測量	19	津田遺跡	175
津田遺跡08-1	枚方市津田南町1丁目他	第二京阪道路（大阪北道路）津田遺跡発掘調査（その2）	平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡その2）	大阪府	津田遺跡（その3）発掘調査に伴う工事	20	津田遺跡（その3）発掘調査に伴う航空測量			
津田遺跡08-2	枚方市津田南町2丁目他	第二京阪道路（大阪北道路）津田遺跡発掘調査（その3）	平成21年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡）	大阪府	津田遺跡（その4）発掘調査に伴う工事	20・21	津田遺跡（その4）発掘調査に伴う航空測量	21	津田遺跡II	200
東倉治遺跡03-2	交野市東倉治2丁目地先	第二京阪道路（大阪北道路）東倉治遺跡発掘調査	平成15年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（東倉治遺跡）	大阪府	東倉治遺跡発掘調査に伴う工事	15	東倉治遺跡発掘調査に伴う航空測量	16	東倉治遺跡I	120
東倉治遺跡04-1	交野市東倉治4丁目		平成16年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（東倉治遺跡）	大阪府	東倉治遺跡（その2）発掘調査に伴う工事	16・17	東倉治遺跡（その2）発掘調査に伴う航空測量	18	東倉治遺跡II	146
東倉治遺跡04-2	交野市東倉治4丁目		平成17年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（東倉治遺跡その2）	大阪府	東倉治遺跡（その3）発掘調査に伴う工事	16・17	東倉治遺跡（その3）発掘調査に伴う航空測量			
倉治遺跡05-1	交野市倉治1丁目		平成16年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（東倉治遺跡その2）	大阪府	有池遺跡（その5）発掘調査に伴う工事 一般国道168号（枚方大和高田線・天の山際線）他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務	17	有池遺跡（その5）発掘調査に伴う航空測量	19	倉治遺跡	169

表 1-2 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	委託		工事請負		報告書	
			浪速国道事務所	西日本高速道路	大阪府	契約名	年度	航空測量
倉治遺跡05-2	交野市倉治1丁目			一般国道168号(枚方大和高田線、天の川磨輪線)他道路整備事業に係る上の山遺跡発掘調査 一般国道168号(枚方大和高田線、天の川磨輪線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務 一般国道168号(枚方大和高田線、天の川磨輪線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務	倉治遺跡発掘調査に伴う工事	17	倉治遺跡発掘調査に伴う航空測量	
倉治遺跡05-3	交野市倉治1丁目			一般国道168号(枚方大和高田線、天の川磨輪線)他道路整備事業に係る上の山遺跡発掘調査 一般国道168号(枚方大和高田線、天の川磨輪線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務	倉治遺跡(その2)発掘調査に伴う工事	17・18	倉治遺跡(その2)発掘調査に伴う航空測量	169
倉治遺跡06-1	交野市倉治1丁目地内			一般国道168号(枚方大和高田線、天の川磨輪線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務	倉治遺跡(その3)発掘調査に伴う工事	18	倉治遺跡(その3)発掘調査に伴う航空測量	
有池遺跡02-1	交野市青山4丁目	第二京阪道路(大阪北道路)有池遺跡発掘調査	平成14年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(その1)			14		
有池遺跡03-1	交野市青山4丁目	第二京阪道路(大阪北道路)有池遺跡発掘調査(その2)	平成16年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(有池・上私部遺跡)		有池遺跡(その2)発掘調査に伴う工事	15・16	有池遺跡(その2)発掘調査に伴う航空測量	152
有池遺跡03-2	交野市青山3丁目地先	第二京阪道路(大阪北道路)有池遺跡発掘調査(その3)	平成16年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(有池・上私部遺跡)		有池遺跡(その3)発掘調査に伴う工事	15・16	有池遺跡(その2)他発掘調査に伴う航空測量	
有池遺跡04-1	交野市青山4丁目		平成17年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(有池・上私部遺跡)	主要地方道枚方大和青山線(都市計画道路内野神宮寺線)道路整備事業に係る有池遺跡発掘調査	有池遺跡(その4)発掘調査に伴う工事	16	有池遺跡(その4)発掘調査に伴う航空測量	148

表 1-3 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受託		大阪府	工事請負		航空測量	報告書		
			浪速国道事務所	西日本高速道路		契約名	年度		報告書名	報告書番号	
有池遺跡09-1	※ 交野市青山3丁目地内	第二京阪道路上私部・私部南遺跡他遺物整理	平成21年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業（上私部・私部南遺跡他）	21	事業者発注	22	私部南遺跡Ⅲ	215			
		第二京阪道路私部南遺跡他遺物整理	平成22年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業（私部南遺跡他）								
上私部遺跡03-1	交野市青山2丁目地先	第二京阪道路（大阪北道路）上私部遺跡発掘調査	平成15年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（上私部遺跡）	15・16	上私部遺跡発掘調査に伴う工事			有池遺跡（その2）他発掘調査に伴う航空測量			
			平成16年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（有池・上私部遺跡）								
			平成17年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業（有池・上私部遺跡他）							151	上私部遺跡Ⅰ
			平成18年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業（有池・上私部遺跡他）								
上私部遺跡05-1	交野市青山2丁目		平成17年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（上私部遺跡その2）	17	上私部遺跡（その2）発掘調査に伴う工事			上私部遺跡（その2）発掘調査に伴う航空測量			
		第二京阪道路（大阪北道路）津田・上私部遺跡他遺物整理	平成18年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業（有池・上私部遺跡他）							165	上私部遺跡Ⅱ
上私部遺跡07-1	交野市青山2丁目地内	第二京阪道路（大阪北道路）上私部遺跡発掘調査（その3）	平成19年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田・上私部遺跡その3）	19	上私部遺跡（その3）発掘調査に伴う工事			上私部遺跡（その3）発掘調査に伴う航空測量			
上私部遺跡07-2・有池遺跡07-1	交野市青山2丁目地内	第二京阪道路（大阪北道路）上私部遺跡発掘調査（その3）		19・20	有池遺跡（その6）・上私部遺跡（その4）発掘調査に伴う工事			有池遺跡（その6）・上私部遺跡（その4）発掘調査に伴う航空測量			
上私部遺跡08-1	交野市青山3丁目地内	第二京阪道路（大阪北道路）上私部・私部南遺跡他遺物整理	平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業（上私部・私部南遺跡他）	20	有池遺跡（その6）・上私部遺跡（その4）発掘調査に伴う工事			有池遺跡（その5）発掘調査に伴う航空測量		193	

表1-4 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受託		大阪府	工事請負		報告書	
			浪速国道事務所	西日本高速道路		年度	契約名	年度	報告書名
私部南遺跡09-1	交野市青山2丁目地内	第二京阪道路私部南遺跡発掘調査	平成21年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査(私部南遺跡)	大阪府	21	事業者発注	私部南遺跡Ⅲ	22	251
		第二京阪道路私部南遺跡他遺物整理							
私部南遺跡04-1	交野市向井田1丁目地内 先地	第二京阪道路(大阪北道路)私部南遺跡発掘調査(その2)	平成16年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査(私部南遺跡その1)	大阪府	16	私部南遺跡(その1)発掘調査に伴う工事	私部南遺跡Ⅰ	18	154
私部南遺跡06-1	交野市向井田1丁目地内 内他	第二京阪道路(大阪北道路)上私部・私部南遺跡他遺物整理	平成18年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査(私部南遺跡その2の2)	大阪府	18・19	私部南遺跡(その1)発掘調査に伴う工事	私部南遺跡Ⅱ	22	207
私部南遺跡06-2	交野市向井田1丁目地内 内他	第二京阪道路(大阪北道路)私部南遺跡発掘調査(その1の3)	平成18年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査(私部南遺跡)	大阪府	18・19	私部南遺跡(その1)発掘調査に伴う工事	私部南遺跡Ⅲ	22	251

表 1-5 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受益		大阪府	工事請負		報告書	
			西日本高速道路	大阪府		契約名	年度	航空測量	報告書名
私部南遺跡07-1	交野市向井田1丁目地内他	第二京阪道路(大阪北道路)私部南遺跡発掘調査(その3)	平成19年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(私部南遺跡その3)西日本高速道路株式会社	大阪府	私部南遺跡(その3)発掘調査に伴う工事	19・20	私部南遺跡(その3)発掘調査に伴う航空測量	私部南遺跡Ⅲ	251
		第二京阪道路(大阪北道路)私部南遺跡発掘調査(その3の2)	平成20年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(私部南遺跡その3の2)	大阪府	私部南遺跡(その3)発掘調査に伴う工事	19・20	私部南遺跡(その3)発掘調査に伴う航空測量	私部南遺跡Ⅲ	251
		第二京阪道路私部南遺跡発掘調査	平成21年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(私部南遺跡)	大阪府	私部南遺跡(その3)発掘調査に伴う工事	19・20	私部南遺跡(その3)発掘調査に伴う航空測量	私部南遺跡Ⅲ	251
		第二京阪道路私部南遺跡他遺物整理	平成22年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業(私部南遺跡他)	大阪府	私部南遺跡(その3)発掘調査に伴う工事	19・20	私部南遺跡(その3)発掘調査に伴う航空測量	私部南遺跡Ⅲ	251
上の山遺跡03-1	交野市私部西5丁目、 枚方市茄子作南町地先	第二京阪道路(大阪北道路)上の山遺跡発掘調査	平成15年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(上の山遺跡)	大阪府	上の山遺跡発掘調査に伴う工事	15・16	上の山遺跡発掘調査に伴う航空測量	上の山遺跡Ⅱ	155
			平成16年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(上の山遺跡)	大阪府	上の山遺跡発掘調査に伴う工事	15・16	上の山遺跡発掘調査に伴う航空測量	上の山遺跡Ⅱ	155
			平成17年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業(有池・上私部遺跡他)	大阪府	上の山遺跡(その2)発掘調査に伴う工事	15・16	上の山遺跡(その2)発掘調査に伴う航空測量	上の山遺跡Ⅱ	155
上の山遺跡04-1	交野市私部西5丁目		平成18年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業(有池・上私部遺跡他)	大阪府	上の山遺跡(その2)発掘調査に伴う工事	16	上の山遺跡(その2)発掘調査に伴う航空測量	上の山遺跡Ⅰ	137
				大阪府	上の山遺跡(その2)発掘調査に伴う工事	16	上の山遺跡(その2)発掘調査に伴う航空測量	上の山遺跡Ⅰ	137
上の山遺跡05-1	交野市私部西4丁目			大阪府	上の山遺跡(その3)発掘調査に伴う工事	17	上の山遺跡(その3)発掘調査に伴う航空測量	上の山遺跡Ⅲ	171
				大阪府	上の山遺跡(その3)発掘調査に伴う工事	17	上の山遺跡(その3)発掘調査に伴う航空測量	上の山遺跡Ⅲ	171

表 1-6 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	遺跡国道事務所	委託		大阪府	工事請負		報告書	
			西日本高速道路	大阪府		契約名	年度	航空測量	報告書名
上の山遺跡05-2	交野市私部西4丁目			一般国道168号線(枚方大和高田線・天の川磨粉線)他道路整備事業に係る上の山遺跡発掘調査 一般国道168号線(枚方大和高田線・天の川磨粉線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務 一般国道168号線(枚方大和高田線・天の川磨粉線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務	上の山遺跡(その4)発掘調査に伴う工事	17	上の山遺跡(その4)発掘調査に伴う航空測量	上の山遺跡Ⅲ	171
上の山遺跡05-3	枚方市茄子作南町		平成17年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業(有池・上私部遺跡他) 平成18年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業(有池・上私部遺跡他)	事業者発注	17	上の山遺跡(その5)発掘調査に伴う基準点測量	上の山遺跡Ⅱ	155	
上の山遺跡06-1	交野市私部西4丁目地内			一般国道168号線(枚方大和高田線・天の川磨粉線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務 一般国道168号線(枚方大和高田線・天の川磨粉線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務	上の山遺跡(その5)発掘調査に伴う工事	18		上の山遺跡Ⅲ	171
上の山遺跡07-1	交野市私部西4丁目地内			一般国道168号線(枚方大和高田線・天の川磨粉線)他道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務	上の山遺跡(その6)発掘調査に伴う工事	19	上の山遺跡(その6)発掘調査に伴う航空測量		
上の山遺跡08-1	※ 枚方市茄子作南町・交野市私部西5丁目	第二京阪道路(大阪北道路)上私部・私部南遺跡他遺物整理	平成20年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理作業(上私部・私部南遺跡他)	事業者発注	20	上の山遺跡(その7)発掘調査に伴う航空測量	私部南遺跡Ⅲ	251	
上の山遺跡09-1	交野市私部西5～7丁目	第二京阪道路私部南遺跡発掘調査	平成21年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査(私部南遺跡)	事業者発注	21		私部南遺跡Ⅲ	251	
上の山遺跡09-2	交野市私部西5丁目地内			平成21年度一般国道168号線(枚方大和高田線・天の川磨粉線)他道路整備事業に係る上の山遺跡発掘調査等業務	事業者発注	21	上の山遺跡(その8)発掘調査に伴う航空測量	高宮遺跡-遺物編-大妻遺跡、高宮遺跡、讀良部突里遺跡	206
茄子作遺跡03-1	※ 枚方市茄子作南町 交野市屋田北9丁目	第二京阪道路(大阪北道路)茄子作遺跡他(細認)発掘調査	平成15年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査(茄子作遺跡)	事業者発注	15	茄子作遺跡他(確認)発掘調査に伴う工事	茄子作遺跡他(確認)発掘調査に伴う基準点測量	茄子作遺跡、東倉治遺跡、茄子作遺跡他	124

表 1-7 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受託		大阪府	工事種別		航空測量	年度	報告書	
			西日本高速道路	受託		契約名	年度			報告書名	報告書番号
茄子作遺跡04-1	枚方市茄子作南町	第二京阪道路(大阪北道路)津田・上私部遺跡他遺物整理	平成16年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(茄子作・茄子作下浦遺跡)	平成17年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(茄子作・茄子作下浦遺跡)		茄子作・茄子作下浦遺跡発掘調査に伴う工事	16・17	茄子作・茄子作下浦遺跡発掘調査に伴う航空測量	19	茄子作遺跡	174
平池遺跡04-1	枚方市皇田北9丁目地先	第二京阪道路(大阪北道路)津田・上私部遺跡他遺物整理	平成18年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(平池遺跡)	平成19年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(津田・上私部遺跡他)		平池遺跡発掘調査に伴う工事	16	平池遺跡発掘調査に伴う航空測量	18	平池遺跡発掘調査報告書	149
寝屋東遺跡02-1	寝屋川市寝屋地先	第二京阪道路(大阪北道路)寝屋東遺跡発掘調査	平成16年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(平池遺跡)				14		16	寝屋東遺跡 I	123
寝屋東遺跡02-2	寝屋川市寝屋地先	第二京阪道路(大阪北道路)寝屋東遺跡発掘調査	平成17年度第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府)に伴う埋蔵文化財発掘調査(遺物整理作業(有池・上私部遺跡他))				14		16	寝屋東遺跡 I	123
寝屋東遺跡02-3	寝屋川市寝屋地先	第二京阪道路(大阪北道路)寝屋東遺跡発掘調査(その2)					14		16	寝屋東遺跡 I	123
寝屋東遺跡03-1	寝屋川市寝屋地先	第二京阪道路(大阪北道路)寝屋東遺跡発掘調査(その3)					15	寝屋東遺跡(その4)発掘調査に伴う航空測量	16	寝屋東遺跡 II	130
寝屋東遺跡03-2	寝屋川市寝屋地先	第二京阪道路(大阪北道路)寝屋東遺跡発掘調査(その3)					15	寝屋東遺跡(その4)発掘調査に伴う航空測量	16	寝屋東遺跡 II	130
寝屋東遺跡05-1	寝屋川市寝屋地先	第二京阪道路(大阪北道路)讀良部桑里遺跡他遺物整理						事業者発注	19	寝屋東遺跡・太秦遺跡・大尾遺跡・讀良部桑里遺跡・砂遺跡	176
寝屋南遺跡03-1	寝屋川市寝屋地先	第二京阪道路(大阪北道路)寝屋南遺跡発掘調査					15	寝屋南遺跡発掘調査に伴う工事	18	寝屋南遺跡・奥山遺跡	159
奥山遺跡03-1	寝屋川市寝屋地先	第二京阪道路(大阪北道路)奥山遺跡発掘調査					15	奥山遺跡発掘調査に伴う工事	18	寝屋南遺跡・奥山遺跡	159
太秦古墳群	寝屋川市打上	○	○	○			13	○	15	太秦古墳群	99
太秦遺跡(太秦古墳群)03-1	寝屋川市明和町地先	第二京阪道路(大阪北道路)大尾遺跡・太秦遺跡(太秦古墳群)発掘調査					15	大尾・太秦遺跡発掘調査に伴う航空測量	17	太秦遺跡・太秦古墳群 II	143
太秦遺跡(太秦古墳群)04-1	寝屋川市打上	第二京阪道路(大阪北道路)大尾遺跡・太秦遺跡(その2)					16	太秦遺跡(確認その2)発掘調査に伴う工事	16	太秦遺跡・太秦古墳群 高宮遺跡	131
太秦遺跡(太秦古墳群)04-2	寝屋川市明和町						16	太秦遺跡(太秦古墳群・その3)発掘調査に伴う航空測量	16	太秦遺跡・太秦古墳群 I	126
太秦遺跡(太秦古墳群)05-1	寝屋川市太秦高塚町	第二京阪道路(大阪北道路)讀良部桑里遺跡他遺物整理						事業者発注	19	寝屋東遺跡・太秦遺跡・大尾遺跡・讀良部桑里遺跡・砂遺跡	176

表1-8 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受託		工事請負		報告書		
			西日本高速道路	大阪府	契約名	年度	航空測量	年度	報告書名
太秦遺跡 (太秦古墳群)05-2	寝屋川市太秦高塚町	第二京阪道路 (大阪北道路) 讀良郡桑里遺跡他遺物整理	〃	一般国道168号(枚方大和高田線、天の川府和線)他道路整備事業に係る上の山遺跡他発掘調査	太秦遺跡(太秦古墳群・その5)発掘調査に伴う工事	17	太秦遺跡(太秦古墳群・その5)発掘調査に伴う航空測量	太秦・太秦古墳群Ⅲ	141
太秦遺跡 (太秦古墳群) 05-3	寝屋川市打上・太秦高塚町	第二京阪道路 (大阪北道路) 讀良郡桑里遺跡他遺物整理	〃	〃	事業者発注	17	太秦遺跡(太秦古墳群・その6)発掘調査に伴う基準点測量		
太秦遺跡 (太秦古墳群) 06-1	大阪府寝屋川市太秦高塚町	第二京阪道路 (大阪北道路) 太秦遺跡他遺物整理	〃	〃	事業者発注	18	〃		
太秦遺跡 (太秦古墳群) 06-2	大阪府寝屋川市太秦高塚町	第二京阪道路 (大阪北道路) 太秦遺跡他遺物整理	〃	〃	事業者発注	18	太秦遺跡(太秦古墳群・その7)発掘調査に伴う基準点測量	寝屋車遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、大尾遺跡、讀良郡桑里遺跡、砂遺跡	176
太秦遺跡 (太秦古墳群) 06-3	大阪府寝屋川市打上新町	第二京阪道路 (大阪北道路) 讀良郡桑里遺跡他遺物整理	〃	〃	事業者発注	18・19	太秦遺跡(太秦古墳群・その8)発掘調査に伴う		
太秦遺跡 (太秦古墳群) 07-1	大阪府寝屋川市打上新町	第二京阪道路 (大阪北道路) 讀良郡桑里遺跡他遺物整理(その2)	〃	〃	事業者発注	19	〃		
太秦遺跡08-1	寝屋川市打上	第二京阪道路 (大阪北道路) 讀良郡桑里遺跡他遺物整理(その3)	〃	〃	事業者発注	20	〃	高宮遺跡一遺物編一 太秦遺跡、高宮遺跡、讀良郡桑里遺跡	206
大尾遺跡 図では大尾遺跡01-1	寝屋川市明和町	〃	〃	〃	事業者発注	13	〃	大尾遺跡	92
大尾遺跡03-1	寝屋川市明和町地先	第二京阪道路 (大阪北道路) 大尾遺跡・太秦遺跡 (太秦古墳群) 発掘調査 第二京阪道路 (大阪北道路) 大尾・太秦遺跡他発掘調査(その2)	〃	〃	大尾遺跡(その2)発掘調査に伴う工事	15	大尾・太秦遺跡発掘調査に伴う航空測量	大尾遺跡Ⅱ	125
大尾遺跡04-1	寝屋川市明和町	第二京阪道路 (大阪北道路) 大尾・太秦遺跡他発掘調査(その2)	〃	〃	高宮遺跡(その4)発掘調査に伴う工事	16	高宮遺跡(その4)発掘調査に伴う基準点測量	太秦遺跡・太秦古墳群 大尾遺跡	131
大尾遺跡05-1	寝屋川市高宮あさひ丘	第二京阪道路 (大阪北道路) 讀良郡桑里遺跡他遺物整理	〃	〃	事業者発注	17	大尾遺跡発掘調査に伴う航空測量	寝屋車遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、大尾遺跡、讀良郡桑里遺跡、砂遺跡	176
高宮遺跡 (その2)	寝屋川市高宮・小路地内	〃	〃	〃	事業者発注	14	高宮遺跡(その2)	高宮遺跡(その2)	112
高宮遺跡 (その3)	寝屋川市明和町	〃	〃	〃	〃	13・14	〃	高宮遺跡	115
高宮遺跡04-1	寝屋川市高宮・小路	第二京阪道路 (大阪北道路) 大尾・太秦遺跡他発掘調査(その2)	〃	〃	高宮遺跡(その4)他発掘調査に伴う工事	16	高宮遺跡(その4)発掘調査に伴う基準点測量	太秦遺跡・太秦古墳群 大尾遺跡	131
高宮遺跡07-1	寝屋川市高宮	第二京阪道路 (大阪北道路) 讀良郡桑里遺跡他遺物整理(その3)	〃	〃	事業者発注	20	〃	高宮遺跡一遺物編一 太秦遺跡、高宮遺跡、讀良郡桑里遺跡	206
高宮遺跡08-1	寝屋川市小路	第二京阪道路 (大阪北道路) 讀良郡桑里遺跡他遺物整理(その3)	〃	〃	高宮遺跡(その5)発掘調査に伴う工事	20	高宮遺跡(その5)発掘調査に伴う航空測量	高宮遺跡一遺物編一 太秦遺跡、讀良郡桑里遺跡	206
小路遺跡 (その2)	寝屋川市	〃	〃	〃	事業者発注	14	〃	小路遺跡(その2)	122
小路遺跡 (その3)	寝屋川市小路・高宮	〃	〃	〃	事業者発注	14	〃	小路遺跡(その3)	113

表 1-9 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受託		大阪府	工事請負		航空測量	報告書			
			西日本高速道路	大阪府		契約名	年度		報告書名	報告書番号		
小路遺跡04-1	寝屋川市小路・高宮	第二京阪道路(大阪北道路)大尾・本条遺跡他発掘調査(その2) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡他遺物整理	西日本高速道路	大阪府	事業者発注	16			小路遺跡Ⅲ	142		
小路遺跡04-2	寝屋川市小路・高宮	第二京阪道路(大阪北道路)大尾・本条遺跡他発掘調査(その2) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡他遺物整理	西日本高速道路	大阪府	事業者発注	16						
讀良郡条里遺跡(その1)	寝屋川市高宮		西日本高速道路	大阪府		13・14			讀良郡条里遺跡(その1)	109		
讀良郡条里遺跡(その2)	寝屋川市高宮		西日本高速道路	大阪府		13・14			讀良郡条里遺跡(その2)	98		
讀良郡条里遺跡(その3)	寝屋川市小路・高宮		西日本高速道路	大阪府		13・14			讀良郡条里遺跡(その3)	114		
讀良郡条里遺跡03-1(一部小路遺跡と重複)	寝屋川市小路・高宮	第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡発掘調査(その2) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡発掘調査(その2の2) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡発掘調査(その2の3) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡他遺物整理	西日本高速道路	大阪府	讀良郡条里遺跡(その4)発掘調査に伴う工事	15・16・17		讀良郡条里遺跡(その4・5)発掘調査に伴う航空測量	讀良郡条里遺跡Ⅵ	173		
讀良郡条里遺跡03-2	寝屋川市小路・高宮	第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡発掘調査(その3) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡発掘調査(その3の2) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡発掘調査(その3の3) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡他遺物整理	西日本高速道路	大阪府	讀良郡条里遺跡(その5)発掘調査に伴う工事	15・16・17		讀良郡条里遺跡(その4・5)発掘調査に伴う航空測量	讀良郡条里遺跡Ⅴ	160		
讀良郡条里遺跡03-3	寝屋川市楠根町	第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡発掘調査(その4) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡発掘調査(その4の2) 第二京阪道路(大阪北道路)讀良郡条里遺跡他遺物整理	西日本高速道路	大阪府	讀良郡条里遺跡(その6)発掘調査に伴う工事	15・16		讀良郡条里遺跡(その6・7・8)発掘調査に伴う航空測量	讀良郡条里遺跡Ⅳ	138		

表1-10 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受託		大阪府	工事請負		報告書	
			西日本高速道路	大阪府		契約名	年度	航空測量	報告書名
讀良郡条里遺跡03-4	寝屋川市新家2丁目・四条橋市砂	第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡発掘調査（その5）	大阪府	讀良郡条里遺跡（その7）発掘調査に伴う工事	15・16・17	讀良郡条里遺跡（その6・7・8）発掘調査に伴う航空測量	20	讀良郡条里遺跡Ⅲ	187
		第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡発掘調査（その2）							
		第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡他遺物整理							
讀良郡条里遺跡03-5	寝屋川市新家2丁目	第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡発掘調査（その6）	大阪府	讀良郡条里遺跡（その8）発掘調査に伴う工事	15・16・17	讀良郡条里遺跡（その6・7・8）発掘調査に伴う航空測量	20	讀良郡条里遺跡Ⅳ	188
		第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡発掘調査（その2）							
		第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡他遺物整理							
讀良郡条里遺跡03-6	寝屋川市讀良東町・讀良西町	第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡発掘調査（その7）	大阪府	讀良郡条里遺跡（その9）発掘調査に伴う工事	15・16・17	讀良郡条里遺跡（その9）発掘調査に伴う航空測量	20	讀良郡条里遺跡Ⅴ	182
		第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡発掘調査（その2）							
		第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡他遺物整理							
讀良郡条里遺跡05-1	寝屋川市小路	第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡他遺物整理	大阪府	事業者発注	17	讀良郡条里遺跡（その10）に伴う航空測量	18	讀良郡条里遺跡Ⅵ	160
		第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡他遺物整理							
讀良郡条里遺跡05-2	寝屋川市高宮・小路	第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡他遺物整理	大阪府	事業者発注	17	讀良郡条里遺跡（その11）発掘調査に伴う基準点測量	19	讀良郡条里遺跡Ⅶ	173
		第二京阪道路（大阪北道路）讀良郡条里遺跡他遺物整理							

表1-11 第二京阪道路内遺跡発掘調査一覧

調査名	所在位置	浪速国道事務所	受託		大阪府	工事請負		航空測量	年度	報告書	
			西日本高速道路	大阪府		契約名	年度			報告書名	報告書番号
讃良郡条里遺跡06-1	寝屋川市高宮・小路	第二京阪道路(大阪北道路) 太 条遺跡他遺物整理				事業者発注	18・ 19	讃良郡条里遺跡(そ の12)発掘調査に伴 う航空測量	19	讃良郡条里遺跡Ⅵ	173
讃良郡条里遺跡06-2	※ 寝屋川市新家2丁目	第二京阪道路(大阪北道路) 讃 良郡条里遺跡他遺物整理				事業者発注	18	讃良郡条里遺跡(そ の13)発掘調査に伴 う航空測量	20	讃良郡条里遺跡Ⅹ	188
讃良郡条里遺跡06-3	大阪府寝屋川市讃良東 町地内	第二京阪道路(大阪北道路) 讃 良郡条里遺跡他遺物整理				事業者発注	18・ 19	讃良郡条里遺跡(そ の14)発掘調査に伴 う航空測量	20	讃良郡条里遺跡Ⅶ	182
讃良郡条里遺跡07-1	寝屋川市小路	第二京阪道路(大阪北道路) 讃 良郡条里遺跡他遺物整理(その 2)				事業者発注	19		19	讃良郡条里遺跡Ⅵ	173
讃良郡条里遺跡08-1	※ 寝屋川市高宮・小路	第二京阪道路(大阪北道路) 讃 良郡条里遺跡他遺物整理(その 3)				事業者発注	20		22	高宮遺跡一遺物編一 太条遺跡、高宮遺跡、讃良郡条里遺 跡	206
砂遺跡06-1	※ 大阪府四条畷市砂地内	第二京阪道路(大阪北道路) 建 設に伴う太条遺跡他遺物整理				事業者発注	18	砂遺跡発掘調査に伴 う基準点測量	19	寝屋東遺跡、太条遺跡・太条古墳 群、大尾遺跡、讃良郡条里遺跡、砂 遺跡	176
東本遺跡03-1	門真市北東本町	第二京阪道路(大阪北道路) 東 本遺跡発掘調査(その1)				東本遺跡(その 1)発掘調査に伴 う工事	15・ 16・ 17	東本遺跡(その1・ 2)発掘調査に伴う 航空測量	19	東本遺跡Ⅰ	167
東本遺跡03-2	門真市北東本町	第二京阪道路(大阪北道路) 東 本遺跡発掘調査(その2)				東本遺跡(その 2)発掘調査に伴 う工事	15・ 16・ 17	東本遺跡(その1・ 2)発掘調査に伴う 航空測量	20	東本遺跡Ⅱ	183
東本遺跡06-1	門真市北東本町	第二京阪道路(大阪北道路) 東 本遺跡発掘調査(その1の3)				事業者発注	18・ 19	東本遺跡(その3) 発掘調査に伴う航空 測量			

調査名に※がついているものは図示なし

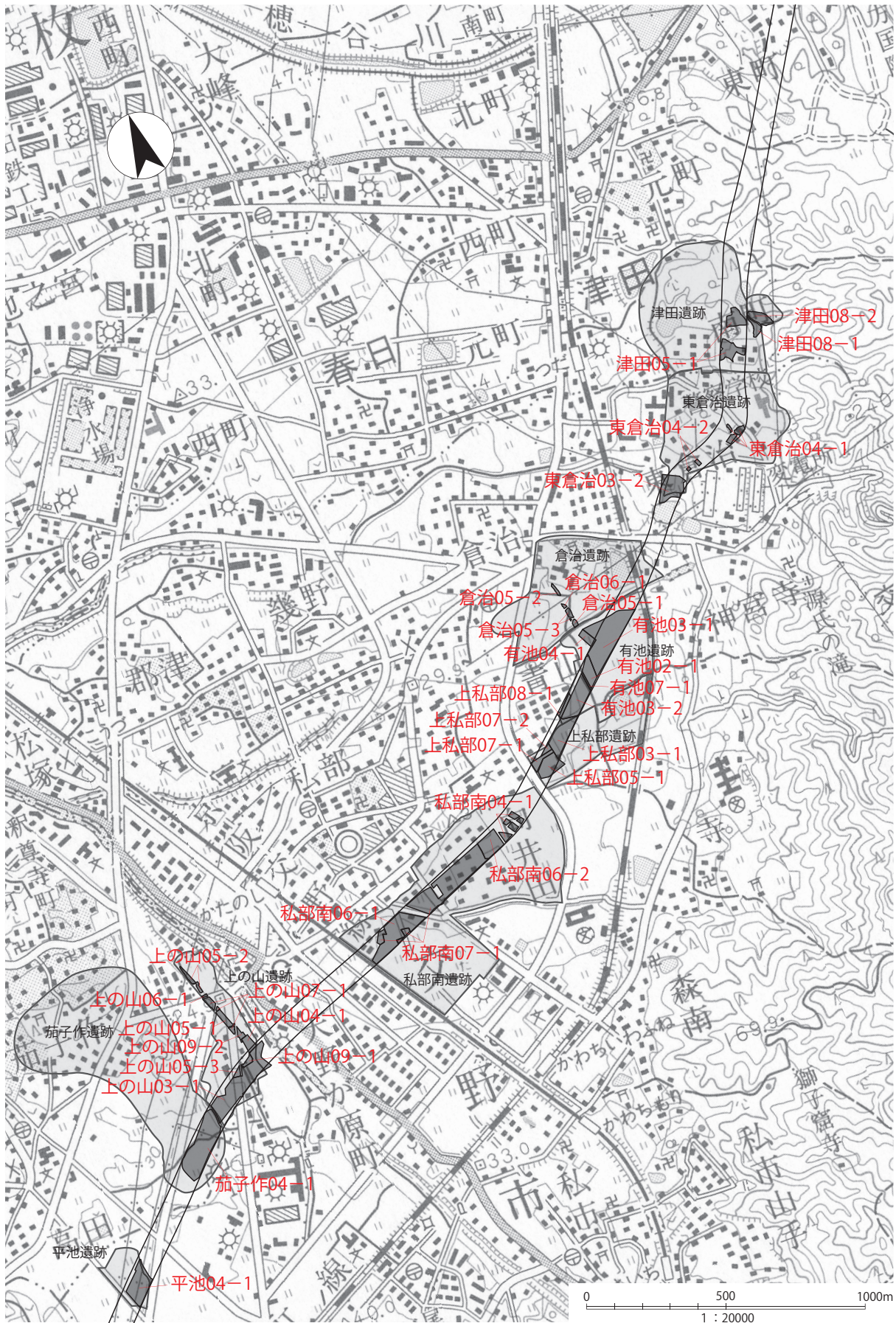


図2 第二京阪道路内遺跡発掘調査地 1



図3 第二京阪道路内遺跡発掘調査地 2

表 2-1 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考	
			X	Y			
有池	A	A-1	1	-134125.5021	-27950.6251	43.500	
			2	-134124.3234	-27960.0191	43.400	
			3	-134122.8656	-27971.3923	43.200	
			4	-134122.4268	-27974.2906	43.100	
			5	-134122.4665	-27977.4308	43.000	
			6	-134122.8373	-27980.0012	43.000	
			7	-134150.8878	-27980.0012	43.100	
			8	-134148.3317	-27977.4202	43.100	
			9	-134140.8825	-27969.201	43.300	
			10	-134135.5647	-27962.5844	43.300	
			11	-134126.0171	-27950.7151	43.500	
		12	-134125.6411	-27989.9885	42.300		
		13	-134126.0109	-27994.5025	42.300		
		14	-134127.5272	-28007.8226	42.100		
		15	-134127.7121	-28022.8448	41.800		
		16	-134127.3361	-28024.1865	41.800		
		17	-134127.3003	-28042.8907	41.500		
		18	-134148.569	-28043.1943	41.500		
		19	-134181.0619	-28042.2717	41.800		
		20	-134200.0892	-28040.27	41.700		
		21	-134185.7774	-28024.8408	41.900		
		22	-134183.4356	-28022.8583	41.900		
		23	-134149.1187	-28022.8933	41.800		
		24	-134146.6257	-27990.0441	42.200		
		25	-134130.2504	-27989.9714	42.300		
上私部	B	B-1	1	-134363.8165	-28231.1752	36.800	
			2	-134366.4779	-28231.0226	36.800	
			3	-134370.0326	-28231.5032	36.800	
			4	-134376.03	-28232.1932	36.800	
			5	-134378.045	-28235.063	36.800	
			6	-134382.0569	-28235.6651	36.600	
			7	-134386.3492	-28240.068	36.600	
			8	-134389.3915	-28244.0148	36.600	
			9	-134393.8714	-28248.0284	36.600	
			10	-134394.3394	-28252.042	36.600	
			11	-134394.0385	-28257.8617	36.600	
			12	-134393.6373	-28258.3634	36.500	
			13	-134393.7792	-28267.4858	36.500	
			14	-134393.7792	-28274.4427	36.300	
			15	-134394.3809	-28276.2154	36.300	
			16	-134397.9916	-28287.721	35.900	
			17	-134399.73	-28292.136	35.800	
			18	-134399.8999	-28294.0624	35.700	
			19	-134398.1949	-28294.4303	35.700	
			20	-134398.5292	-28297.2733	35.600	
			21	-134400.1005	-28300.2166	35.500	
			22	-134401.4712	-28304.966	35.500	
			23	-134402.5745	-28304.8322	35.400	
			24	-134403.2765	-28308.0766	35.400	
			25	-134405.7839	-28320.2846	35.100	
			26	-134405.7505	-28322.6511	35.100	
			27	-134404.7476	-28323.4538	35.000	
			28	-134403.6443	-28323.5876	35.000	
			29	-134404.5804	-28327.6012	35.000	
			30	-134406.6198	-28339.4413	34.600	
			31	-134393.9994	-28341.8375	34.800	
			32	-134381.7968	-28329.6629	35.100	
			33	-134378.5205	-28324.7463	35.100	
			34	-134377.8372	-28323.4029	35.000	
			35	-134379.5422	-28321.3292	35.000	
36	-134371.552	-28312.3989	35.000				
37	-134370.3818	-28311.9641	35.400				
38	-134366.4888	-28309.0413	35.400				
39	-134359.7356	-28303.7567	35.400				
40	-134355.0401	-28299.9954	35.600				
41	-134346.5484	-28291.6337	35.600				
42	-134347.6275	-28290.6528	35.700				
43	-134348.7883	-28289.6269	35.800				
44	-134349.4235	-28286.2822	35.800				
45	-134349.1561	-28274.3418	35.800				
46	-134348.9886	-28272.721	35.800				
47	-134351.6966	-28270.9149	36.400				
48	-134353.4017	-28260.7471	36.700				
49	-134356.2499	-28253.2449	36.600				
50	-134362.5837	-28242.4283	36.700				

表2-2 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考		
			X	Y				
上私部	B	B-1	51	-134362.8553	-28235.948	36.800		
			52	-134397.6445	-28252.4161	36.200		
			53	-134399.0853	-28253.128	36.200		
			54	-134403.4081	-28257.7446	36.100		
			55	-134407.0764	-28261.7131	36.000		
			56	-134413.2585	-28268.0312	35.900		
			57	-134417.9188	-28272.979	35.900		
			58	-134418.1777	-28274.1879	35.700		
			59	-134422.3054	-28278.8884	35.700		
			60	-134427.8027	-28285.0542	35.600		
			61	-134429.8343	-28287.4439	35.600		
			62	-134431.7745	-28290.3936	35.600		
			63	-134432.3262	-28291.916	35.600		
			64	-134435.1985	-28291.6115	35.500		
			65	-134442.4383	-28299.1396	35.400		
			66	-134445.3867	-28302.2986	34.300		
			67	-134444.778	-28304.2397	35.100		
			68	-134446.7943	-28304.6583	35.100		
			69	-134447.3812	-28305.2928	35.000		
			70	-134449.2859	-28307.5712	34.900		
			71	-134452.3752	-28310.696	34.700		
			72	-134455.1231	-28313.9232	34.500		
			73	-134457.632	-28315.699	34.400		
			74	-134459.7768	-28317.8932	34.300		
			75	-134461.8679	-28319.9302	34.200		
			76	-134464.6744	-28323.2702	34.100		
			77	-134469.1318	-28328.0232	34.000		
			78	-134469.3336	-28328.904	34.000		
			79	-134465.1697	-28328.7756	34.000		
			80	-134462.2347	-28328.9224	34.100		
			81	-134459.4495	-28329.3097	34.200		
			82	-134453.708	-28330.0071	34.200		
			83	-134447.9559	-28330.5804	34.500		
			84	-134445.718	-28330.5621	34.500		
			85	-134445.3328	-28331.131	34.700		
			86	-134441.2789	-28337.609	34.600		
			87	-134440.2562	-28338.2584	34.600		
			88	-134437.7248	-28339.3595	34.600		
			89	-134433.9094	-28340.6992	34.500		
			90	-134429.1769	-28341.5617	34.600		
			91	-134428.7258	-28341.4699	34.500		
			92	-134421.6337	-28343.0302	34.500		
			93	-134416.3325	-28343.911	34.600		
			94	-134411.6183	-28345.269	34.600		
			95	-134410.9396	-28345.893	34.600		
		96	-134409.8573	-28346.3334	34.600			
		97	-134409.1603	-28344.4616	34.600			
		98	-134411.4898	-28342.1493	34.600			
		99	-134410.5897	-28337.4949	34.600			
		100	-134409.3057	-28331.2371	34.600			
		101	-134409.3057	-28328.9432	34.600			
		102	-134409.5258	-28327.0163	34.600			
		103	-134409.9846	-28325.9766	34.600			
		104	-134411.4704	-28320.8932	34.800			
		105	-134411.342	-28318.8379	34.900			
		106	-134409.7044	-28313.5783	35.000			
		107	-134406.6594	-28302.072	35.100			
		108	-134406.2742	-28301.9986	35.200			
		109	-134404.1067	-28294.5231	35.500			
		110	-134404.712	-28294.2662	35.500			
		111	-134404.3635	-28293.734	35.600			
		112	-134403.1849	-28289.65	35.600			
		113	-134399.7667	-28275.8706	35.800			
		114	-134397.7856	-28267.3556	35.800			
		115	-134397.5558	-28263.6241	35.800			
		116	-134397.7682	-28262.9334	35.900			
		117	-134397.7151	-28261.0209	36.000			
		118	-134397.6074	-28256.189	36.100			
		119	-134409.6253	-28264.13	35.900			
		120	-134471.3132	-28333.1799	33.900			
		121	-134471.928	-28338.3548	33.900			
		122	-134472.7336	-28341.006	33.900			
		123	-134475.321	-28340.6571	33.900			
		124	-134477.9497	-28344.9414	33.800			
		125	-134479.4973	-28347.3592	33.700			
				B-3				

表 2-3 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考	
			X	Y			
上私部	B	B-3	126	-134477.9073	-28347.7834	33.700	
			127	-134471.5475	-28348.759	33.800	
			128	-134466.3807	-28349.4593	33.800	
			129	-134460.1692	-28350.6894	33.900	
			130	-134451.2681	-28352.9393	34.000	
			131	-134444.8446	-28354.1906	34.200	
			132	-134437.7471	-28355.3148	34.200	
			133	-134432.6804	-28356.248	34.200	
			134	-134426.9353	-28357.4569	34.200	
			135	-134421.2959	-28358.6841	34.200	
			136	-134416.7804	-28359.8506	34.100	
			137	-134413.2612	-28356.5844	34.100	
			138	-134412.5616	-28355.9481	34.200	
			139	-134407.6645	-28350.8368	34.300	
			140	-134407.6811	-28350.7482	34.300	
			141	-134411.3063	-28349.7514	34.300	
			142	-134416.0025	-28348.2624	34.300	
			143	-134421.0056	-28347.0959	34.300	
			144	-134426.6616	-28346.0533	34.300	
			145	-134431.7495	-28345.1201	34.300	
			146	-134435.3746	-28344.5051	34.400	
			147	-134437.3596	-28344.3543	34.400	
			148	-134442.7019	-28342.3607	34.300	
			149	-134444.7159	-28341.788	34.200	
			150	-134446.7086	-28338.0553	34.200	
			151	-134449.0364	-28334.2142	34.100	
152	-134455.6083	-28333.9385	34.100				
153	-134463.6813	-28333.5192	33.900				
154	-134408.6987	-28350.3665	34.300				
上私部	C	C-1	1	-134.545.963	-28.418.858	33.700	限定協議区間
			2	-134.535.154	-28.406.000	33.900	
			3	-134.525.512	-28.395.675	34.600	
			4	-134.521.337	-28.390.673	34.600	
			5	-134.513.179	-28.398.275	34.600	
			6	-134.520.446	-28.406.839	34.600	
			7	-134.527.095	-28.414.127	34.400	
			8	-134.537.584	-28.426.236	33.700	
		C-2	9	-134.514.130	-28.382.538	34.600	限定協議区間
			10	-134.504.836	-28.372.761	34.600	
			11	-134.496.174	-28.380.988	34.600	
			12	-134.505.326	-28.390.338	34.600	
		C-3	13	-134.500.747	-28.367.931	35.100	限定協議区間
			14	-134.490.762	-28.357.206	35.100	
			15	-134.489.290	-28.359.897	35.100	
			16	-134.488.013	-28.366.672	35.100	
			17	-134.487.945	-28.372.087	35.100	
			18	-134.489.090	-28.373.800	35.100	
			19	-134.491.577	-28.376.335	35.100	
		C-4	20	-134.516.942	-28.421.173	33.900	限定協議区間
			21	-134.503.941	-28.406.298	34.500	
			22	-134.497.761	-28.412.751	34.600	
			23	-134.502.152	-28.418.227	34.500	
			24	-134.509.304	-28.425.887	33.900	
			25	-134.510.691	-28.426.693	33.900	
		C-5	26	-134.481.279	-28.383.053	35.100	限定協議区間
			27	-134.481.024	-28.379.980	35.100	
			28	-134.473.904	-28.372.349	35.100	
			29	-134.471.375	-28.374.286	35.100	
			30	-134.474.236	-28.385.573	35.100	
			31	-134.474.834	-28.386.308	35.100	
			32	-134.475.873	-28.386.537	35.100	
		C-6	33	-134.469.503	-28.397.415	35.100	限定協議区間
			34	-134.464.187	-28.393.543	35.100	
			35	-134.454.879	-28.388.372	35.100	
			36	-134.466.220	-28.400.359	35.100	
		C-7	37	-134.483.078	-28.411.210	34.400	限定協議区間
			38	-134.473.957	-28.401.674	34.600	
			39	-134.470.288	-28.404.848	34.600	
			40	-134.479.282	-28.414.793	34.400	
私部南	D	D-1	1	-134.897.7857	-29.164.8641	24.700	限定協議区間
			2	-134.903.7857	-29.181.1338	24.700	
			3	-134.878.6258	-29.174.0637	24.700	
			4	-134.883.9259	-29.188.3234	24.700	
			5	-134.872.1159	-29.178.3635	24.700	
			6	-134.876.8159	-29.190.9032	24.700	

※日本測地座標をパラメーターを使って世界測地に変換

表2-4 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考	
			X	Y			
私部南	D	D-2	7	-134,918.0057	-29,195.4236	24.800	限定協議区間 ※日本測地座標をパラメーターを使って世界測地に変換
			8	-134,922.8058	-29,208.3433	24.800	
			9	-134,897.0759	-29,202.9231	24.800	
			10	-134,898.2259	-29,206.3531	24.800	
		D-3	11	-134,910.3459	-29,219.9529	24.200	限定協議区間 ※日本測地座標をパラメーターを使って世界測地に変換
			12	-134,878.5360	-29,217.5125	24.200	
			13	-134,883.0060	-29,229.4323	24.200	
		D-4	14	-134,932.6559	-29,234.9428	23.800	限定協議区間 ※日本測地座標をパラメーターを使って世界測地に変換
			15	-134,937.1759	-29,246.9924	23.800	
			16	-134,921.2359	-29,235.8526	23.800	
			17	-134,885.3161	-29,244.3419	23.800	
		D-5	18	-134,890.8362	-29,264.2015	23.800	限定協議区間 ※日本測地座標をパラメーターを使って世界測地に変換
			19	134,944.5460	-29,266.8121	23.800	
			20	-134,952.0660	-29,287.0916	23.800	
			21	-134,902.4662	-29,282.2011	23.800	
		D6	22	-134,909.9563	-29,302.5307	23.800	限定協議区間
			23	-134,850.6266	-29,158.7008	26.500	
			24	-134,842.1160	-29,171.0552	26.500	
			25	-134,812.3729	-29,122.4620	26.000	
			26	-134,813.8675	-29,118.1660	26.000	
			27	-134,817.2549	-29,125.2325	26.000	
			28	-134,822.3629	-29,133.2876	26.000	
		D7	29	-134,828.1067	-29,142.3661	26.000	限定協議区間
			30	-134,847.8130	-29,151.1820	26.000	
			28	-134,822.3629	-29,133.2876	26.000	
		D8	31	-134,844.5671	-29,143.6943	26.000	限定協議区間
			32	-134,828.5600	-29,100.5770	26.000	
			27	-134,817.2549	-29,125.2325	26.000	
			25	-134,812.3729	-29,122.4620	26.000	
			26	-134,813.8675	-29,118.1660	26.000	
			33	-134,824.3243	-29,095.3825	26.000	
			34	-134,823.4898	-29,092.8798	26.000	
		D9	35	-134,801.6731	-29,100.8772	26.000	限定協議区間
			36	-134,804.3448	-29,108.0874	26.000	
			37	-134,807.9793	-29,115.2800	26.000	
			38	-134,801.2840	-29,096.6120	26.000	
			39	-134,822.0483	-29,088.6549	26.000	
			40	-134,823.0775	-29,086.6952	26.000	
			41	-134,822.9261	-29,086.1921	26.000	
			42	-134,821.7479	-29,086.7319	26.000	
			43	-134,817.7223	-29,077.9970	26.000	
			44	-134,815.4149	-29,077.8007	26.000	
			45	-134,814.4279	-29,074.5975	26.000	
			46	-134,809.8132	-29,076.0697	26.000	
			47	-134,807.0539	-29,076.0697	26.000	
			48	-134,803.8239	-29,063.3108	26.000	
			49	-134,803.3821	-29,058.7961	26.000	
			50	-134,803.1942	-29,058.2963	26.000	
			51	-134,804.8583	-29,057.6633	26.000	
			52	-134,804.6754	-29,057.2609	26.000	
			53	-134,803.1926	-29,056.0376	26.000	
		54	-134,801.3019	-29,054.9995	26.000		
		D10	55	-134,800.0785	-29,054.5176	26.000	限定協議区間
			56	-134,798.6328	-29,054.2581	26.000	
			57	-134,796.9876	-29,054.1531	26.000	
			58	-134,798.6353	-29,061.3687	26.000	
			59	-134,800.5579	-29,090.3310	26.000	
			60	-134,854.6398	-29,154.9338	26.500	
			61	-134,876.6984	-29,127.9673	26.500	
			62	-134,876.5747	-29,127.4524	26.500	
			63	-134,862.8625	-29,132.4345	26.500	
			64	-134,858.1038	-29,135.1592	26.500	
		D11	65	-134,848.5276	-29,138.7009	26.500	限定協議区間
			61	-134,876.6984	-29,127.9673	26.500	
			62	-134,876.5747	-29,127.4524	26.500	
			66	-134,872.4316	-29,116.5141	26.500	
			67	-134,875.5990	-29,109.1320	26.500	
		D12	68	-134,878.8326	-29,117.7759	26.500	限定協議区間
			69	-134,887.7255	-29,114.4218	26.500	
			64	-134,858.1379	-29,135.1142	26.500	
			70	-134,854.8972	-29,126.3777	26.500	
			71	-134,845.3224	-29,129.8134	26.500	
			72	-134,835.1930	-29,102.5080	26.500	
		73	-134,839.4686	-29,100.9651	26.500	限定協議区間	
74	-134,847.4328	-29,120.8152	26.500				

表 2-5 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考	
			X	Y			
私部南	D	D12	75	-134.868.5360	-29.112.8694	26.500	限定協議区間
			76	-134.877.2011	-29.095.5659	26.500	
			77	-134.872.4676	-29.083.8484	26.500	
			78	-134.876.2823	-29.082.2898	26.500	
			79	-134.884.9799	-29.105.6575	26.500	
			67	-134.875.5990	-29.109.1320	26.500	
			66	-134.872.4239	-29.116.4936	26.500	
			80	-134.858.8982	-29.121.4645	26.500	
		63	-134.862.9384	-29.132.3979	26.500		
		D13	81	-134.843.6517	-29.099.3149	26.400	限定協議区間
			82	-134.840.4137	-29.090.7488	26.400	
			83	-134.846.7083	-29.088.5993	26.400	
			84	-134.849.9276	-29.096.9461	26.400	
		D14	85	-134.831.9793	-29.093.8293	26.500	限定協議区間
			86	-134.827.6840	-29.082.1190	26.500	
			87	-134.825.6296	-29.077.9745	26.500	
			88	-134.822.8370	-29.073.8370	26.500	
			89	-134.821.4567	-29.072.1348	26.000	
			90	-134.816.5572	-29.058.3752	26.000	
			91	-134.817.8849	-29.057.5577	26.000	
			92	-134.821.3151	-29.067.0018	26.000	
			93	-134.830.6554	-29.063.5330	26.000	
			94	-134.827.2137	-29.054.1476	26.000	
			95	-134.832.9672	-29.051.6037	26.000	
			96	-134.836.7439	-29.061.6841	26.000	
			97	-134.850.2390	-29.056.7047	26.000	
			98	-134.846.4983	-29.046.5640	26.000	
			99	-134.852.5464	-29.044.7717	26.000	
			100	-134.856.0454	-29.054.1380	26.000	
			101	-134.865.4027	-29.050.6341	26.000	
			102	-134.861.9271	-29.041.2212	26.000	
			103	-134.861.8276	-29.040.9960	26.000	
			104	-134.863.5089	-29.040.6572	26.500	
			105	-134.864.6972	-29.040.7486	26.500	
			106	-134.866.7013	-29.041.5122	26.500	
			107	-134.868.3237	-29.042.7051	26.500	
			108	-134.869.9550	-29.044.5320	26.500	
			109	-134.870.0989	-29.044.8763	26.500	
			110	-134.870.4330	-29.045.1547	26.500	
			111	-134.872.8276	-29.052.2109	26.500	
			112	-134.872.7719	-29.053.1016	26.500	
			113	-134.873.2662	-29.063.9116	26.500	
			114	-134.872.8485	-29.065.2475	26.500	
			115	-134.872.1673	-29.070.3190	26.500	
			116	-134.872.4587	-29.072.0665	26.500	
			117	-134.873.0713	-29.073.7364	26.500	
118	-134.868.4109		-29.075.4456	26.500			
119	-134.862.2985	-29.058.9263	26.500				
120	-134.828.5540	-29.071.4350	26.000				
121	-134.836.2317	-29.092.1073	26.000				
D15	122	-134.861.9271	-29.041.2212	26.500	限定協議区間		
	123	-134.861.8276	-29.040.9960	26.500			
	124	-134.855.7481	-29.042.2208	26.500			
	125	-134.838.4437	-29.045.7070	26.000			
	126	-134.818.7626	-29.049.6982	26.000			
	127	-134.817.0943	-29.050.4025	26.000			
	128	-134.816.0563	-29.051.0328	26.000			
	129	-134.814.6810	-29.052.4380	26.000			
	130	-134.813.9433	-29.053.2571	26.000			
	131	-134.813.3131	-29.054.2952	26.000			
	132	-134.812.9174	-29.055.2761	26.000			
	133	-134.815.2711	-29.054.7631	26.000			
	134	-134.816.5572	-29.058.3752	26.000			
	135	-134.817.8849	-29.057.5577	26.000			
	136	-134.827.2612	-29.054.1390	26.000			
	137	-134.832.9672	-29.051.6037	26.000			
	138	-134.846.4954	-29.046.5649	26.500			
	139	-134.852.5401	-29.044.7741	26.500			
D16	140	-134.811.3148	-29.043.8468	25.900	限定協議区間		
	141	-134.809.1627	-29.043.3136	25.900			
	142	-134.807.6662	-29.042.6277	25.900			
	143	-134.806.5438	-29.041.8171	25.900			
	144	-134.805.8579	-29.041.1935	25.900			
	145	-134.805.3670	-29.040.6375	25.900			
146	-134.812.4244	-29.039.6378	25.900				

表2-6 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考	
			X	Y			
私部南	D	D16	147	-134,809.7674	-29,028.3495	25.900	限定協議区間
			148	-134,849.9757	-29,014.2241	26.200	
			149	-134,849.2810	-29,012.6010	26.400	
			150	-134,850.5420	-29,009.9900	26.400	
			151	-134,851.0381	-29,011.2518	26.400	
			152	-134,853.0281	-29,010.9727	26.400	
			153	-134,853.4819	-29,013.1711	26.400	
			154	-134,855.0878	-29,016.2420	26.400	
			155	-134,858.8582	-29,020.5693	26.400	
			156	-134,858.7692	-29,020.6796	26.400	
			157	-134,859.2298	-29,028.1341	26.400	
			158	-134,857.9896	-29,034.7487	26.400	
			159	-134,856.0089	-29,035.7236	26.400	
			160	-134,836.2622	-29,039.8366	26.000	
			161	-134,859.7365	-29,020.2058	26.500	
			162	-134,860.8212	-29,019.6745	26.500	
		163	-134,851.4403	-28,994.5056	26.500		
		164	-134,836.6326	-28,954.8038	26.500		
		165	-134,835.9798	-28,954.8171	26.500		
		166	-134,838.4458	-28,961.4892	26.500		
		167	-134,837.2119	-28,962.0640	26.500		
		168	-134,840.4702	-28,969.9190	26.500		
		169	-134,840.9494	-28,969.7394	26.500		
		170	-134,843.3874	-28,976.1423	27.400		
		171	-134,847.4730	-28,988.6630	27.400		
		172	-134,847.8457	-28,989.3850	27.400		
		173	-134,848.9940	-28,993.5240	27.400		
		174	-134,848.5090	-28,993.7400	27.400		
		175	-134,851.0230	-28,999.6970	27.400		
		176	-134,853.1220	-29,002.4050	27.400		
		177	-134,854.5820	-29,005.1300	27.400		
		178	-134,854.8995	-29,006.1770	27.400		
		179	-134,854.8036	-29,006.2728	27.400		
		180	-134,855.5942	-29,010.0207	27.400		
		181	-134,857.6936	-29,014.7364	27.400		
		182	-134,834.1332	-28,950.1281	26.300		
		183	-134,833.7610	-28,949.2580	26.300		
		184	-134,833.2200	-28,948.1870	26.300		
		185	-134,830.7446	-28,944.5381	26.300		
		186	-134,826.1002	-28,932.3133	26.300		
		187	-134,825.0124	-28,929.4643	26.300		
		188	-134,826.3062	-28,928.9734	26.300		
		189	-134,824.9794	-28,925.9639	26.300		
		190	-134,823.8949	-28,924.6067	26.300		
		191	-134,824.6446	-28,924.9001	26.300		
		192	-134,826.1357	-28,926.4977	26.300		
		193	-134,827.2717	-28,929.4090	26.300		
		194	-134,834.9091	-28,950.0793	26.300		
		195	-134,819.9068	-28,927.7388	26.300		
		196	-134,818.7229	-28,924.9027	26.300		
		197	-134,823.8949	-28,924.6067	26.300		
		198	-134,824.9794	-28,925.9639	26.300		
199	-134,774.9288	-28,936.9912	26.000				
200	-134,773.2070	-28,932.6410	26.000				
201	-134,772.6840	-28,932.6800	26.000				
202	-134,772.6507	-28,931.4801	26.000				
203	-134,773.2015	-28,929.8278	26.000				
204	-134,773.7522	-28,928.9099	26.000				
205	-134,775.1597	-28,927.7166	26.000				
206	-134,775.3301	-28,927.6082	26.000				
207	-134,816.9165	-28,925.0742	26.600				
208	-134,809.3963	-28,928.0510	26.600				
209	-134,809.4946	-28,928.6700	26.600				
210	-134,808.4570	-28,928.8170	26.600				
211	-134,806.7820	-28,929.7580	26.500				
212	-134,801.3170	-28,930.4510	26.500				
213	-134,796.2695	-28,930.8762	26.000				
214	-134,792.4980	-28,931.6680	26.000				
215	-134,786.0070	-28,933.4850	26.000				
216	-134,781.1630	-28,935.0660	26.000				
217	-134,779.1294	-28,935.6843	26.000				
218	-134,776.4040	-28,936.3920	26.000				
219	-134,793.8444	-28,988.6782	25.800				
220	-134,796.9248	-28,987.4859	25.800				
221	-134,798.5880	-28,993.0172	25.800				

表 2-7 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考	
			X	Y			
私部南	D	D21	222	-134,797.5565	-28,993.3233	25.800	限定協議区間
			223	-134,801.1064	-29,003.0986	25.800	
			224	-134,800.9222	-29,004.5143	25.800	
			225	-134,803.2321	-29,011.8973	25.800	
			226	-134,804.8605	-29,016.4464	25.800	
			227	-134,805.3851	-29,017.9118	25.800	
			228	-134,803.3551	-29,018.6368	25.800	
			229	-134,805.4236	-29,024.4545	25.800	
			230	-134,805.1000	-29,025.2000	25.800	
			231	-134,805.4013	-29,028.1937	25.800	
			232	-134,802.0526	-29,028.2866	25.800	
			233	-134,802.4130	-29,021.8380	25.800	
			234	-134,802.4047	-29,014.5303	25.800	
			235	-134,799.3930	-29,003.4890	25.800	
			236	-134,800.0783	-29,003.1703	25.800	
			237	-134,795.8173	-28,991.5647	25.800	
			238	-134,795.2759	-28,991.8294	25.800	
			239	-134,790.1681	-28,979.2450	25.800	
		D22	240	-134,789.5007	-28,977.1961	25.800	
			241	-134,778.3841	-28,950.3163	25.800	
			242	-134,779.9463	-28,949.7438	25.800	
			243	-134,781.6045	-28,950.6226	25.800	
			244	-134,787.6228	-28,966.7725	25.800	
			245	-134,791.7666	-28,977.8925	25.800	
			246	-134,793.7480	-28,977.0915	25.800	
			247	-134,793.9704	-28,977.8191	25.800	
		D23	248	-134,791.8324	-29,006.3979	26.200	
			249	-134,793.7145	-29,005.6293	26.200	
			250	-134,789.6525	-28,994.2158	26.200	
			251	-134,789.6004	-28,994.2377	26.200	
			252	-134,784.2665	-28,979.1893	26.200	
			253	-134,784.1203	-28,979.1465	26.200	
			254	-134,774.0717	-28,951.9856	26.200	
			255	-134,774.0211	-28,952.0362	26.200	
			256	-134,773.2230	-28,949.9294	26.200	
			257	-134,770.9847	-28,950.4449	26.200	
		D24	258	-134,783.9878	-28,985.2216	26.200	
			259	-134,769.2267	-28,945.4859	25.800	
			260	-134,765.5746	-28,935.7590	25.800	
			261	-134,765.3623	-28,931.4486	25.800	
			262	-134,764.2657	-28,931.7603	25.800	
			263	-134,763.2255	-28,928.3583	25.800	
			264	-134,764.1960	-28,928.8537	25.800	
			265	-134,765.3216	-28,929.6723	25.800	
			266	-134,766.4813	-28,930.9856	25.800	
			267	-134,766.8556	-28,931.9004	25.800	
			268	-134,766.9610	-28,932.7800	25.800	
			269	-134,771.5090	-28,945.0000	25.800	
D25	270	-134,765.2231	-28,917.5523	26.100			
	271	-134,765.0119	-28,915.9890	26.100			
	272	-134,767.4584	-28,915.8825	26.100			
	273	-134,764.9499	-28,908.4427	26.100			
	274	-134,772.6549	-28,905.5001	26.100			
	275	-134,777.0193	-28,905.1890	27.000			
	276	-134,793.4319	-28,899.0314	27.000			
	277	-134,796.6035	-28,896.5696	27.000			
	278	-134,804.9174	-28,893.5161	27.000			
	279	-134,807.5081	-28,901.0234	27.000			
	280	-134,808.2116	-28,900.9453	27.000			
	281	-134,812.0830	-28,910.6420	27.000			
	282	-134,813.0211	-28,914.7544	27.000			
	283	-134,780.8039	-28,916.8891	26.100			
284	-134,765.3069	-28,917.5725	26.100				
D26	285	-134,772.6549	-28,905.5001	26.100			
	286	-134,769.6217	-28,896.7716	26.100			
	287	-134,772.8408	-28,894.2518	26.100			
	288	-134,777.0193	-28,905.1890	26.100			
D27	289	-134,793.3204	-28,887.9354	26.100			
	290	-134,796.6035	-28,896.5696	26.100			
	291	-134,793.4319	-28,899.0314	26.100			
	292	-134,789.4688	-28,888.1803	26.100			
D28	293	-134,761.6913	-28,899.6598	26.800			
	294	-134,769.6217	-28,896.7716	26.800			
	295	-134,772.8408	-28,894.2518	26.800			
	296	-134,789.4688	-28,888.1803	26.100			

表2-8 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考	
			X	Y			
私部南	D	D28	297	-134,793.3204	-28,887.9354	26.100	限定協議区間
			298	-134,801.5672	-28,884.8490	26.100	
			299	-134,798.3156	-28,874.1303	26.100	
			300	-134,798.0214	-28,873.8489	26.100	
			301	-134,797.5511	-28,873.2611	26.100	
			302	-134,797.0515	-28,872.7908	26.100	
			303	-134,796.1697	-28,872.2324	26.800	
			304	-134,795.2586	-28,871.8797	26.800	
			305	-134,794.2006	-28,871.7327	26.800	
			306	-134,792.3195	-28,871.6739	26.800	
			307	-134,756.6910	-28,873.7174	26.800	
			308	-134,756.3539	-28,874.2232	26.800	
			309	-134,755.1894	-28,874.7531	26.800	
			310	-134,753.8360	-28,875.9840	26.800	
		311	-134,753.3771	-28,876.8761	26.800		
		312	-134,754.1250	-28,876.9830	26.800		
		313	-134,819.1510	-28,913.5101	27.000		
		314	-134,820.7784	-28,913.4148	27.000		
		315	-134,820.8545	-28,913.5250	27.000		
		316	-134,821.2144	-28,913.4900	27.000		
		317	-134,816.5253	-28,900.6846	27.000		
		318	-134,815.3528	-28,897.2075	27.000		
		319	-134,813.5422	-28,897.3501	27.000		
		320	-134,813.8770	-28,898.7730	27.000		
		321	-134,815.3505	-28,898.2504	27.000		
		322	-134,815.7582	-28,903.2052	27.000		
		323	-134,819.1522	-28,913.5135	27.000		
		324	-134,812.3527	-28,892.1703	27.000		
		325	-134,811.7165	-28,889.4039	27.000		
		326	-134,812.4260	-28,889.4087	27.000		
		327	-134,813.4264	-28,892.0489	27.000		
		328	-134,892.7024	-29,109.7479	26.500		
		329	-134,901.8397	-29,101.4752	26.500		
		330	-134,883.5673	-29,050.9314	26.500		
		331	-134,888.3366	-29,035.7118	26.500		
		332	-134,884.3568	-29,036.5494	26.500		
		333	-134,882.2612	-29,039.8358	26.500		
		334	-134,879.5657	-29,047.8823	26.500		
		335	-134,879.2150	-29,051.1189	26.500		
		336	-134,880.2770	-29,054.5690	26.500		
		337	-134,881.3320	-29,056.8153	26.500		
		338	-134,882.9437	-29,061.0566	26.500		
		339	-134,879.1301	-29,062.4100	26.500		
		340	-134,878.6836	-29,068.0426	26.500		
		341	-134,879.8032	-29,075.4634	26.500		
		342	-134,886.7570	-29,094.6280	26.500		
		343	-134,888.6230	-29,100.3940	26.500		
		344	-134,890.9830	-29,106.7850	26.500		
		345	-134,749.5820	-28,867.6674	27.600		
		346	-134,751.3379	-28,868.4720	27.600		
		347	-134,753.7993	-28,869.1116	27.600		
		348	-134,788.8461	-28,866.8915	27.000		
		349	-134,788.7625	-28,866.6634	27.000		
		350	-134,786.2806	-28,853.9490	27.000		
		351	-134,781.4460	-28,855.7650	27.000		
		352	-134,778.4723	-28,858.8955	27.000		
		353	-134,761.9246	-28,864.9967	27.000		
		354	-134,757.4567	-28,864.6359	27.600		
		355	-134,757.4567	-28,864.6359	27.600		
		256	-134,761.9246	-28,864.9967	27.600		
		257	-134,757.3129	-28,852.7943	27.600		
		358	-134,754.1907	-28,856.0266	27.600		
		359	-134,778.4723	-28,858.8955	27.000		
		360	-134,774.0415	-28,846.7835	27.000		
		361	-134,778.2270	-28,846.9562	27.000		
		362	-134,781.4460	-28,855.7650	27.000		
		363	-134,754.1907	-28,856.0266	27.600		
		364	-134,748.8037	-28,858.1166	27.600		
		365	-134,744.0465	-28,847.9939	27.600		
		366	-134,742.3136	-28,848.8788	27.600		
		367	-134,739.8273	-28,841.7053	27.600		
368	-134,740.3735	-28,841.4982	27.600				
369	-134,737.1838	-28,833.4313	27.600				
370	-134,743.6618	-28,830.9447	27.600				
371	-134,747.6736	-28,829.4209	27.600				

表2-9 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考		
			X	Y				
私部南	D	D35	372	-134,764.4534	-28,823.0765	27.600	限定協議区間	
			373	-134,769.9165	-28,821.2725	27.000		
			374	-134,777.4673	-28,818.4114	27.000		
			375	-134,778.0126	-28,819.7353	27.000		
			376	-134,778.2828	-28,819.6396	27.000		
			377	-134,785.8922	-28,840.1252	27.000		
			378	-134,785.5920	-28,840.2408	27.000		
			379	-134,787.0503	-28,843.7765	27.000		
			380	-134,778.2270	-28,846.9562	27.000		
			381	-134,774.0415	-28,846.7835	27.000		
		382	-134,757.3129	-28,852.7943	27.600			
		D36	383	-134,743.6613	-28,830.9250	27.600		限定協議区間
			384	-134,747.6736	-28,829.4209	27.600		
			385	-134,743.8332	-28,819.2500	27.600		
			386	-134,740.0887	-28,821.5860	27.600		
		D37	387	-134,735.7457	-28,823.2482	27.700		限定協議区間
			388	-134,734.2921	-28,819.2837	27.700		
			389	-134,739.6010	-28,818.1885	27.700		
			390	-134,745.2242	-28,816.3292	27.700		
			391	-134,759.2509	-28,812.4013	27.700		
			392	-134,759.1093	-28,813.1893	27.700		
			393	-134,743.8258	-28,819.2302	27.700		
			394	-134,740.0887	-28,821.5860	27.700		
		D38	395	-134,764.4534	-28,823.0765	27.700		限定協議区間
			396	-134,761.0286	-28,814.1620	27.700		
			397	-134,766.5914	-28,812.2730	27.700		
			398	-134,769.9165	-28,821.2725	27.700		
		D39	399	-134,794.1236	-28,839.1247	27.000		限定協議区間
			400	-134,792.6363	-28,838.6973	27.000		
			401	-134,791.9579	-28,838.3098	27.000		
			402	-134,791.7510	-28,837.7751	27.000		
			403	-134,791.3881	-28,837.9204	27.000		
			404	-134,790.5576	-28,837.1719	27.000		
			405	-134,789.9295	-28,836.3045	27.000		
			406	-134,789.2241	-28,834.7060	27.000		
			407	-134,783.0514	-28,817.8682	27.000		
			408	-134,784.6777	-28,817.3746	27.000		
			409	-134,782.5470	-28,814.4040	27.000		
			410	-134,780.0293	-28,808.1330	27.000		
			411	-134,781.2899	-28,807.5741	27.000		
			412	-134,788.6829	-28,827.5860	27.000		
			413	-134,789.4288	-28,829.2804	27.000		
			414	-134,791.1239	-28,835.9905	27.000		
		415	-134,791.8020	-28,836.0583	27.000			
		416	-134,792.8328	-28,835.9051	27.000			
		上の山	E	E-1	1	-135,299.700		-30,099.200
2	-135,284.087				-30,086.700	29.700		
3	-135,289.087				-30,080.455	29.700		
4	-135,303.139				-30,091.705	29.700		
5	-135,304.075				-30,093.736	29.700		
E-2	1		-135,314.192	-30,161.336	28.500	竪穴住居		
	2		-135,314.584	-30,171.829	28.500			
	3		-135,271.540	-30,171.437	26.700			
茄子作	F	F-2	1	-135569.2264	-30425.6387	29.820	竪穴住居	
			2	-135573.4663	-30424.7775	29.850		
			3	-135570.4875	-30421.6103	29.910		
			4	-135568.0157	-30421.8968	29.820		
	F3	1	-135,346.9028	-30,289.6202	26.060	竪穴住居		
		2	-135,350.4145	-30,288.7476	25.810			
		3	-135,353.9202	-30,294.5385	25.930			
		4	-135,348.3860	-30,295.9884	26.050			
小路	G	G-1	1	-138,200.0237	-33,162.4469	10.3000	古墳	
			2	-138,208.9403	-33,150.4184	10.1000		
			3	-138,217.2831	-33,155.8248	9.9000		
			4	-138,223.9314	-33,161.6278	9.9000		
			5	-138,223.6970	-33,165.0338	9.8000		
			6	-138,230.4237	-33,169.5588	9.7000		
			7	-138,227.5146	-33,175.2731	9.7000		
			8	-138,223.3785	-33,178.9172	9.8000		
			9	-138,216.7477	-33,172.1027	9.8000		
			10	-138,213.9227	-33,173.7557	9.9000		
			11	-138,207.9399	-33,169.2905	9.8000		
讃良郡 条里	H	H-1	1	-138,378.983	-33,318.107	8.250	竪穴住居	
			2	-138,386.441	-33,328.967	8.200		

※日本測地座標をパラメーターを使って世界測地に変換

表 2 - 10 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間一覧

遺跡名	記号	地区番号	座標値		保存面高/m	備考			
			X	Y					
讃良郡 条里	H	H-1	3	-138,387.252	-33,333.489	8.200	竪穴住居		
			4	-138,383.650	-33,334.135	8.200			
			5	-138,383.276	-33,333.168	8.200			
			6	-138,383.442	-33,333.097	8.200			
			7	-138,379.614	-33,324.578	8.280			
			8	-138,376.480	-33,318.555	8.200			
		H-2	1	-138,401.443	-33,375.167	8.000	竪穴住居		
			2	-138,409.026	-33,384.982	7.850			
			3	-138,404.202	-33,399.014	8.000			
			4	-138,395.146	-33,398.400	7.700			
			5	-138,395.714	-33,392.566	7.700			
			6	-138,395.695	-33,386.591	8.000			
			7	-138,399.908	-33,376.354	8.000			
		H-3	1	-138,380.504	-33,372.238	7.800	竪穴住居		
			2	-138,380.995	-33,375.142	7.800			
			3	-138,381.683	-33,382.539	7.750			
			4	-138,381.707	-33,390.240	7.700			
			5	-138,377.010	-33,390.239	7.700			
			6	-138,375.138	-33,387.750	7.700			
			7	-138,371.829	-33,390.239	7.600			
			8	-138,370.998	-33,390.239	7.600			
			9	-138,370.998	-33,372.238	7.750			
		I	I-1	1	-138,969.000	-34,238.000	1.500	掘立柱 建物	
				2	-138,978.000	-34,238.000	1.500		
	3			-138,978.000	-34,265.000	1.600			
	4			-138,973.000	-34,265.000	1.600			
	5			-138,969.000	-34,260.000	1.600			
	I-2		1	-138,982.200	-34,272.700	1.500	掘立柱 建物		
			2	-139,012.600	-34,271.800	1.000			
			3	-139,012.500	-34,283.300	1.100			
			4	-139,015.000	-34,290.000	0.800			
			5	-139,000.000	-34,290.000	1.500			
			6	-139,000.000	-34,300.000	1.600			
			7	-138,998.000	-34,300.000	1.600			
	I-3		1	-139,044.900	-34,315.800	1.600	掘立柱 建物		
			2	-139,050.000	-34,315.450	1.600			
			3	-139,053.600	-34,315.000	1.600			
			4	-139,055.000	-34,315.250	1.600			
			5	-139,060.000	-34,315.700	1.600			
			6	-139,065.000	-34,316.100	1.700			
			7	-139,070.000	-34,316.350	1.700			
			8	-139,075.000	-34,316.550	1.800			
			9	-139,077.750	-34,316.550	1.800			
			10	-139,078.600	-34,320.000	1.800			
			11	-139,079.300	-34,322.550	1.800			
			12	-139,078.350	-34,325.000	1.800			
			13	-139,076.250	-34,330.000	1.800			
		14	-139,075.420	-34,335.000	1.700				
		15	-139,074.750	-34,340.000	1.700				
		16	-139,073.900	-34,345.000	1.600				
17		-139,073.050	-34,350.000	1.500					
18		-139,070.900	-34,350.500	1.500					
19		-139,069.100	-34,350.000	1.600					
20		-139,061.350	-34,345.000	1.600					
21	-139,057.250	-34,340.000	1.800						
22	-139,053.600	-34,335.000	1.700						
23	-139,049.450	-34,330.000	1.700						
24	-139,047.600	-34,325.000	1.700						
25	-139,045.750	-34,320.000	1.600						

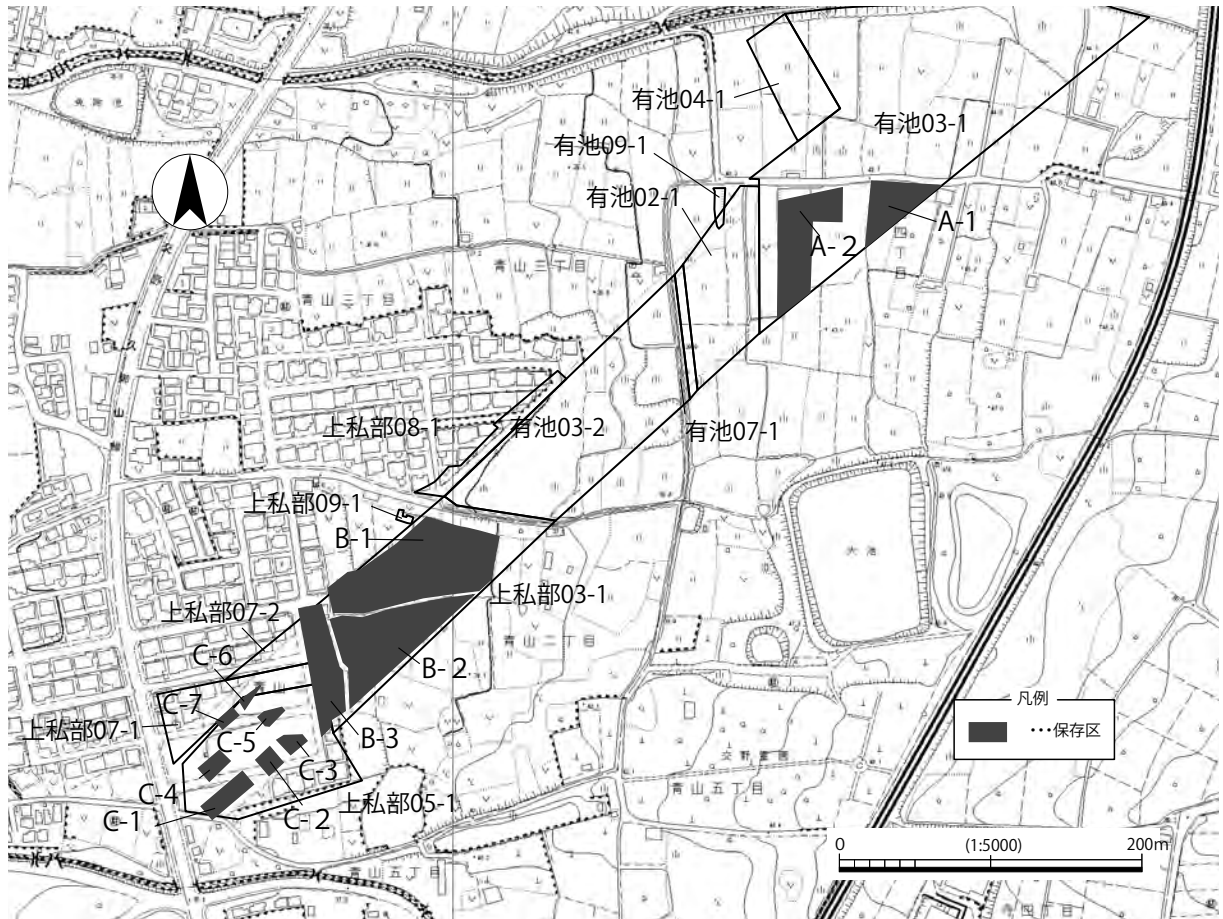


図4 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 1

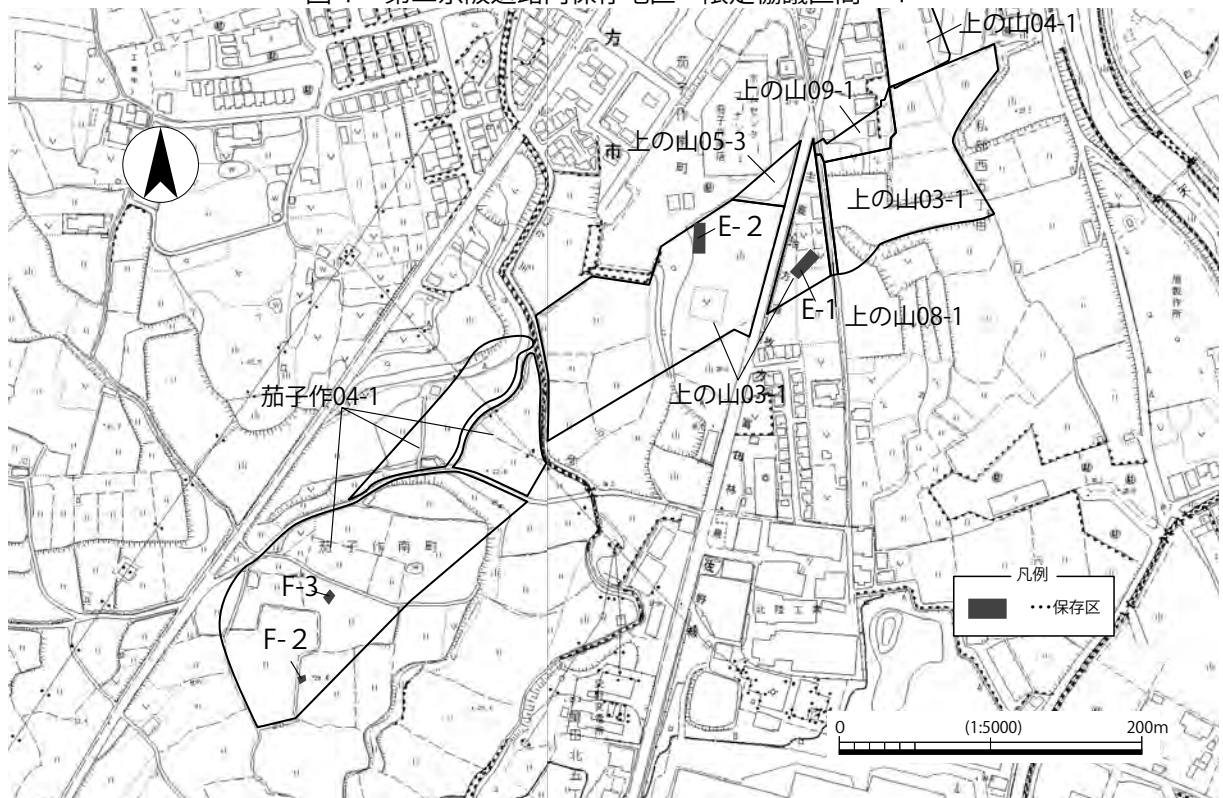


図5 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 2

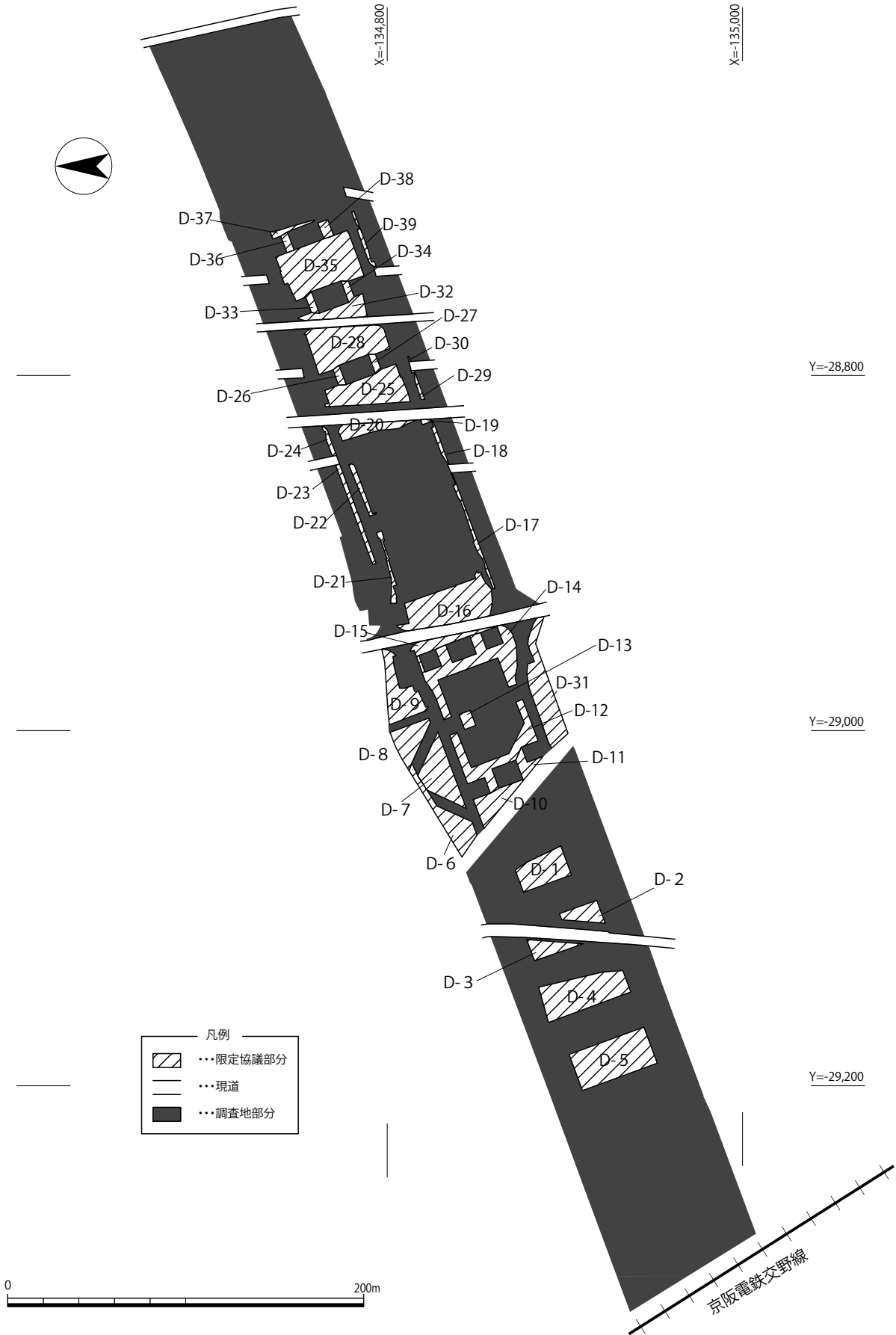


图6 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 3



図7 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 4

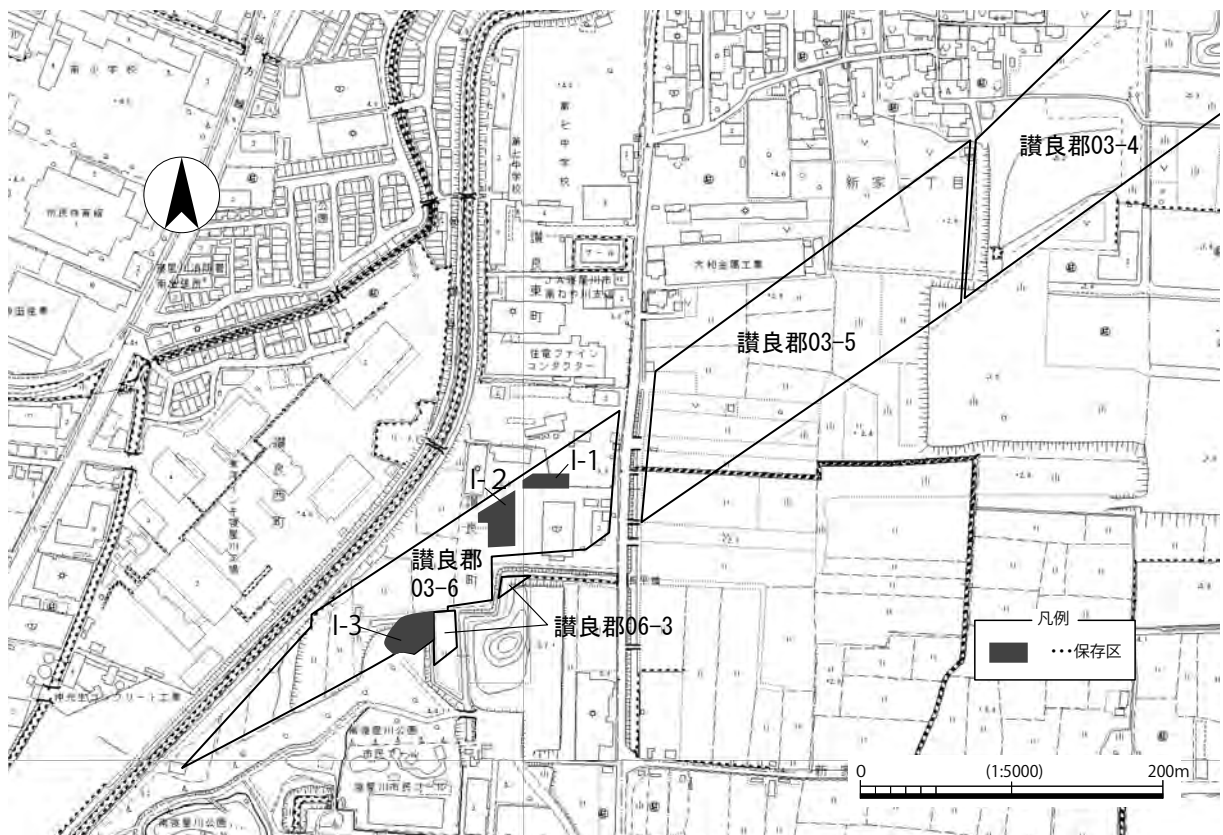


図8 第二京阪道路内保存地区・限定協議区間 5

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

私部南遺跡周辺の地形については、「私部南遺跡Ⅰ」において地形分類図が示され、分析も加えられている。また、この成果を踏まえ「上私部遺跡Ⅱ」においても検討がなされている。特に当遺跡の北側を流れる私部北川について、13世紀を一つの画期とし、その影響による周辺の環境変化の検討がなされている。これらの成果を踏まえて、「上私部遺跡Ⅱ」において示されている地形分類図（図9）で開析谷と新期扇状地Ⅰ面として捉えられている、私部南遺跡周辺のより細かな地形判読を行い、そこから読み取れる点について述べる。

地形判読にあたっては、国土地理院1961年撮影の航空写真（2倍引き伸ばし 縮尺約5000分の1）を実体視し、大阪府1961年3000分の1の地形図をベースマップとして作成した。

その結果、図10に示すように、0から3'の様相が見られた。一番古い面は3と3'である。3と3'は、前述の地形分類図で旧期扇状地面Ⅰと新期扇状地面Ⅰにあたる。おそらくこの段階には、1・2で示す開析谷が、生駒山地からの水を天野川へ流していたと考えられる。その作用により、1・2部分は緩やかに埋没し、その埋積層は私部南遺跡07-1では谷部堆積層、22-1区では5-2b層に当たる。

やがて、2に示される部分が急激に埋没し、一部は微高地化する。調査地内で言えば私部南遺跡06-1の一部と、私部南遺跡07-1の旧流路部分にあたる。時期は弥生時代後期である。これにより、水の流れは変化し、0に示す部分へと移動したと考えられる。こうして、2の部分は取り残され、暗部として残ることになった。そして北の北川と、南の前川へ移動した水の流れは、堆積作用が増大してく

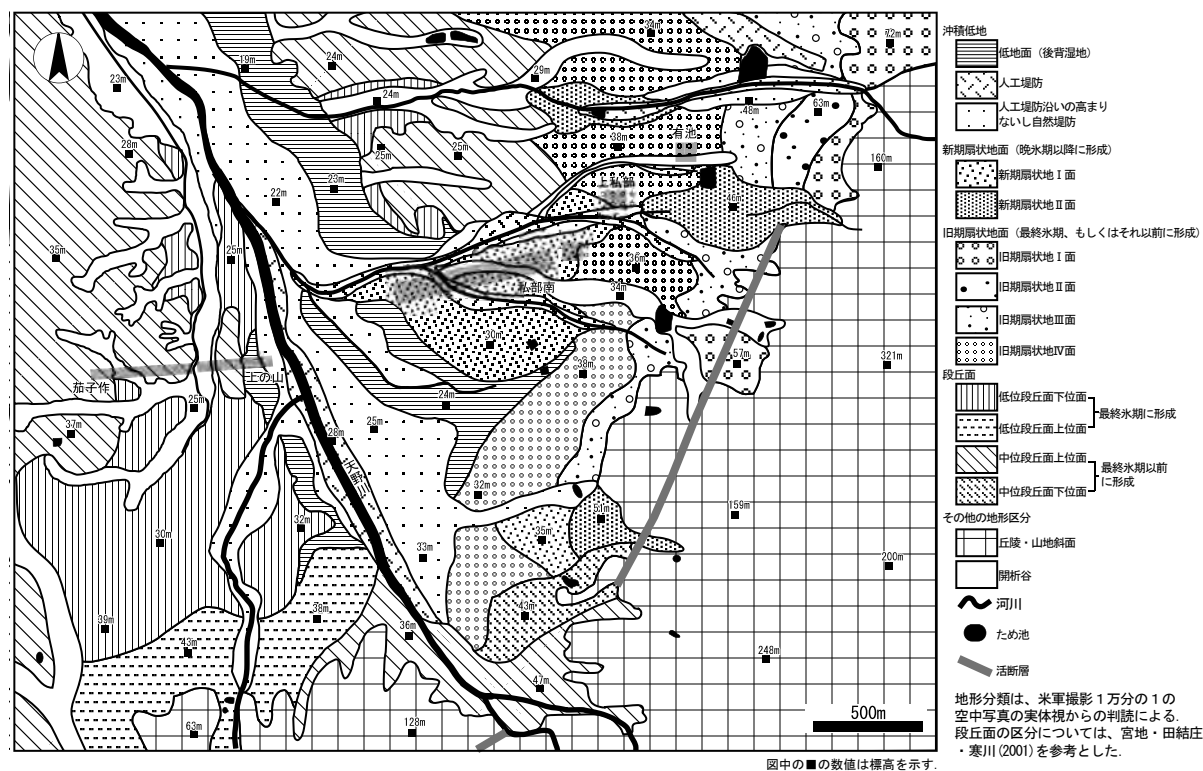


図9 私部南遺跡周辺の地形分類図

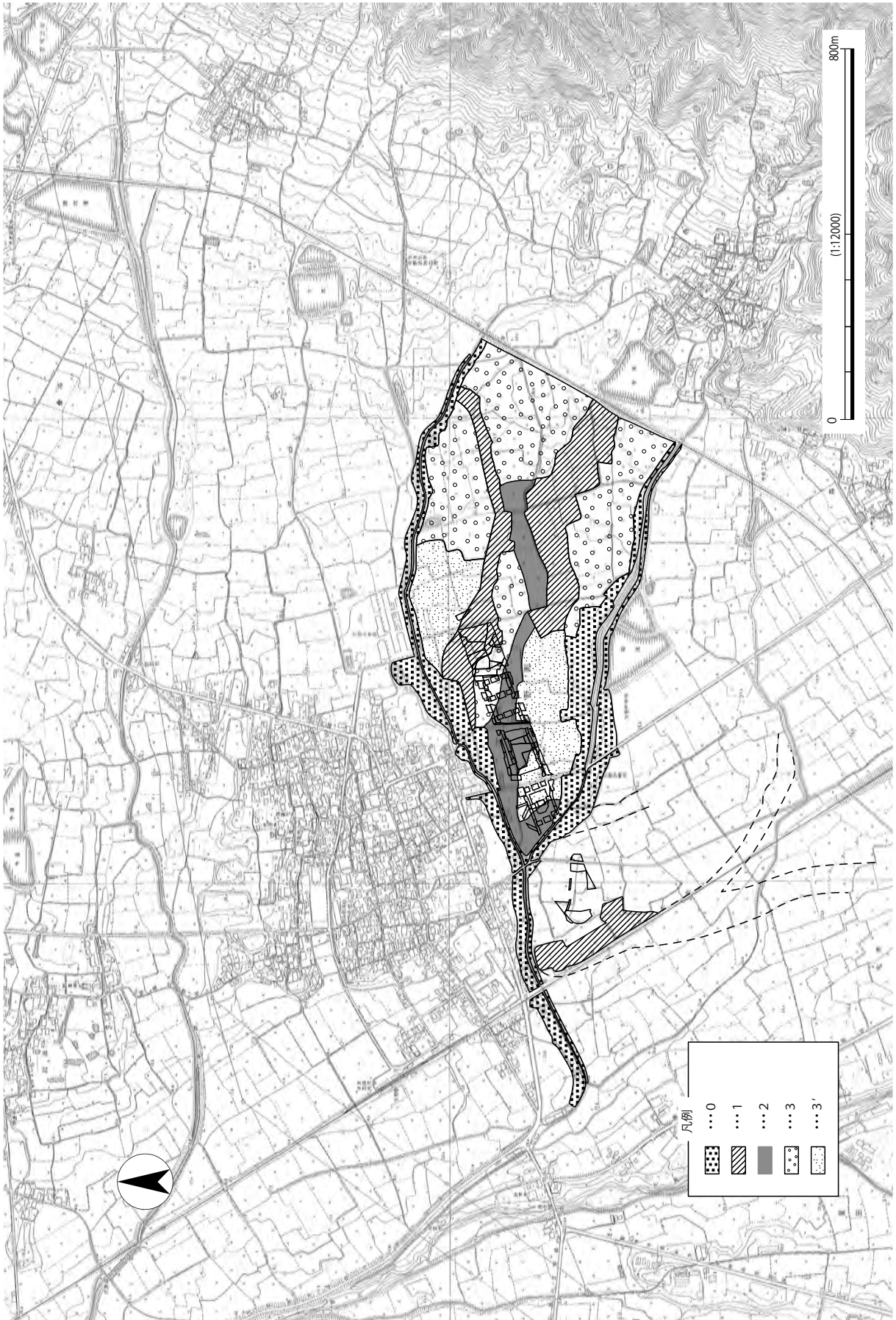


図 10 私部南遺跡の地形分類図

る13世紀になると、堆積が進みやがて自然堤防を形作り河川は天井川化し、人工堤防が形成される。

その際、2の部分で0の部分に接する箇所も、分厚い自然堆積層により埋没が進んでいる。この段階が、おそらく近世であろう。

なお、私部南遺跡07-1の18区で見られる谷は、前述の開析谷とは異なり、調査地南から延びてくる別のものであることが読み取れる。

以上のような地形変化が、当遺跡の形成に大きく関わっている。

第2節 歴史的環境

私部南遺跡の所在する交野市は、先述のようなさまざまな地形環境を背景とした先人たちのたゆまない足跡をたどることができる。それらについて、今回の第二京阪道路の調査を通して見て行きたい。

旧石器時代：交野山西麓に発達した扇状地上に営まれた神宮寺遺跡から国府型ナイフ形石器や握槌様石器が出土したほか、星田に所在する布懸遺跡では、当該期終末期のナイフ形石器や削器130点弱と碎片80点余りが出土し、今回の私部南遺跡でも角錐状石器や国府型ナイフ形石器、そして、細石刃やその石核が出土し、特に後者は、大阪府内では羽曳野市誉田白鳥遺跡や青山遺跡で出土例が確認されているのみであり、西日本全体を視野に入れても類例の乏しい資料である。

縄文時代：草創期では神宮寺遺跡で有茎尖頭器が出土し、焼垣内遺跡の周辺でもこれが採取された。早期では学史的にも著名で、押型文土器の一型式名ともされた神宮寺遺跡から遺構を伴って検出され、津田遺跡からも同型式や高山寺式土器、繊維土器、表裏条痕文土器、粕畑式に類似する土器などが出土し、南山遺跡や寺村遺跡からも当該時期に属するとみられる石鏃などが出土している。中期では、初頭の中津氏が今回の私部南遺跡から、前半の船元式土器が津田遺跡や私部南遺跡で出土し、続く醍醐ⅡからⅢ式段階では、星田旭遺跡から土器と共に石器が出土し、末葉の北白川C式段階には、上の山遺跡や私部南遺跡から貯蔵穴などに伴って土器などが出土している。

後期では、星田旭遺跡から北白川上層式、私部南遺跡から同型式、彦崎K式、元住吉山式、宮滝式の各型式が出土した。晩期では滋賀里Ⅲb式の土器が私部南遺跡の調査で出土し、この他、焼垣内堰からも当該段階の土器が採集されている。終末の滋賀里V式では、津田遺跡や私部南遺跡で土器が出土し、特に私部南遺跡の調査成果からは、交野ドーム周辺にこの段階の遺構が埋没している可能性が高いことが指摘されている。

弥生時代：近年まで市内において前期にまでさかのぼる遺跡は確認されていなかったが、今回行われた一連の私部南遺跡の調査で、この中の新段階に属する竪穴建物が検出され、さらに、周辺からはまとまった量の土器や石庖丁なども出土した。竪穴建物はその床面構造が、大韓民国の松菊里型住居と通ずることとでにわかに脚光を浴び、土器の中の一部には、きわめて少量ながら、肩部に段を形成したり、赤彩を施す前期中段階の壺も含まれたりしていることから、北河内地域の丘陵部に位置するこの地域においても、かなり古い段階から稲作文化が浸透していた状況を明らかにすることができた。

中期になると、初頭では上の山遺跡で検出された独立棟持柱を持つ大形掘立柱建物や、方形周溝墓群が衆目を集め、私部南遺跡では竪穴建物や方形周溝墓、津田遺跡でも竪穴建物が検出され、前期の資料と共に、当地域における従来の認識を覆す新知見が得られた。中頃では私部南遺跡から木器貯蔵穴が検出され、中から鋤先などの木製農耕具が出土した。後半になると遺跡数は増加し、私部城遺跡では石庖

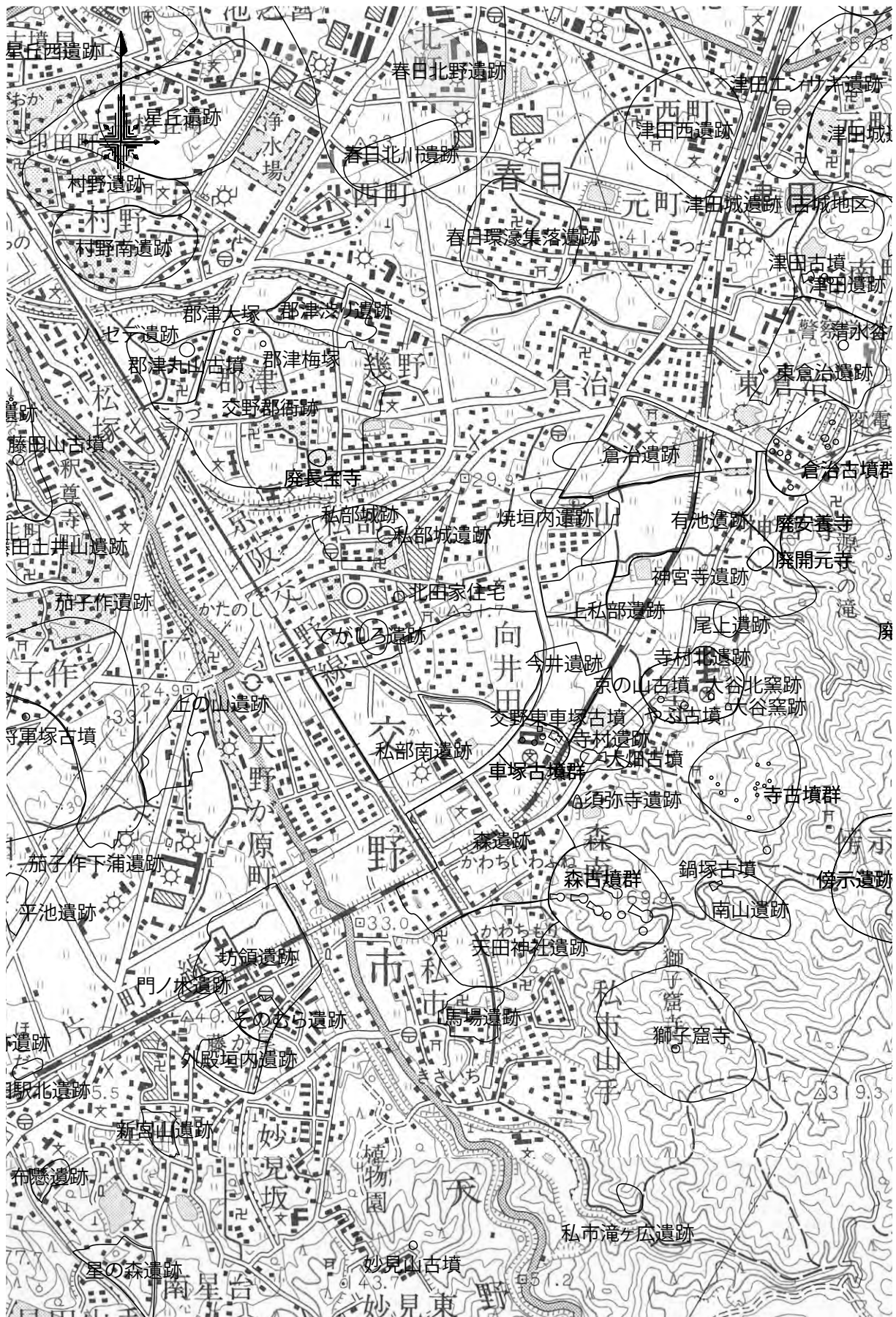


図 11 遺跡地図

丁や土器、交野古墳群内で完形の土器が出土し、郡津渋り遺跡や、郡津大塚遺跡では土器と共にサヌカイトの剥片が散布していたとの記録があり、これらも当段階以前となる可能性がある。

後期では、東倉治遺跡で竪穴建物が検出され、森遺跡、天田神社遺跡、ハセデ遺跡、坊領遺跡、神宮寺遺跡、南山遺跡などで土器が出土し、うち、南山遺跡は標高 260 m に位置することで他の遺跡と立地条件が大きく異なる。今回の私部南遺跡の調査でも竪穴建物や流路が検出され、後者からは手焙形土器や動物形土製品、木製農具が出土し、灌漑用水を確保するために設けられたシガラミを検出した。

古墳時代：前期初頭には、全長 100 m を凌駕する前方後円墳を含む 6 基からなる森古墳群が存在するため、初期ヤマト政権にとってこの地が重要であったことが窺え、これに続く段階に粘土槨を主体とする妙見山古墳が構築される。中期では初頭段階の交野東車塚古墳から後半の大畑古墳へと系譜をたどれる交野車塚古墳群が築造される。うち、主体部の調査が実施された車塚古墳からは、巴形銅器のほか、国内では 11 例のみが知られている三角板綴襟付短甲が出土し、これを含め三角板甲冑生産開始直後の例として、被葬者像とともに注目されている。また、上の山遺跡と茄子作遺跡を界する谷部では、窯本体の検出はなかったが、窯壁や焼け歪みの著しい初期須恵器が出土したことから、陶邑以外にこの地域でも最古段階の須恵器生産が行われていたことを明らかにした。また、私部南遺跡では韓式系土器や鉄鋌と共に、この段階の竪穴建物や掘立柱建物が検出され、中には鍛造剥片など鍛冶関連遺物もみられ、森遺跡と共にこの時期における当地域の特質を如実に表している。

後期では、横穴式石室を主体部とする倉治古墳群や寺古墳が構築される。上私部遺跡では集落が検出され、居住形態を竪穴建物から掘立柱建物へと変遷させる過程が具体的に見て取れ、また、韓半島の百濟から搬入された陶質土器片には、往時の国際交流の一端を垣間みることができた。なお、私部南遺跡周辺には遺跡名の由来ともなった蘇我氏と物部氏の政争にも絡む私部の設置が記録されるため、この追究が今回の調査目的の一つであった。

奈良から平安時代：奈良時代前期では津田遺跡より火頭形三尊と独尊埴仏が出土し、滝ヶ広遺跡出土例と共に注目される。今回の私部南遺跡でも重弧紋軒平瓦が出土し、附近では廃長宝寺近辺からも瓦が出土している。大宝令以降では、茨田郡から交野郡三宅郷とされ、郡衙の設置もここに比定する意見もある。私部南遺跡では青銅製の帯金具、神功開宝、陶硯と共に規格性を持つ掘立柱建物群が検出されこの問題に一石を投じた。また、山麓には聖武天皇の勅願により行基が創建したとされる獅子窟寺が現在まで法灯をつなぎ、津田寺や開元寺もこの時期に創建されたと『興福寺官務牒疎』には記され、津田遺跡では百濟寺と同紋の軒平瓦や和同開珎が出土している。平安時代では津田遺跡より灰釉陶器を蔵骨器とした火葬墓が複数検出され、滝ヶ広遺跡では火葬骨と富壽神寶 50 枚を収めた土師器の蔵骨器が採集され、私部南遺跡では銭種不明の鉛製方孔円形銭や緑釉・灰釉陶器が出土している。

鎌倉から室町時代：鎌倉時代では、有池遺跡から溝で区画された屋敷地群が検出され、津田遺跡は青磁 5 点や短刀を副葬した土壙墓が検出された。南朝の元中八（1391）年三月には畠山氏の重臣である安見氏によって私部城が築かれたとされ、天正六（1578）年十一月、織田信長に破却されるまでは存続したとの記録がある。その城跡は現在も非常に良好な状態で旧状をとどめ、土塁や堀の跡を明瞭にたどることができる。この段階における私部南遺跡では、耕作地が展開されていたが、その作土層に混入した遺物の中に青磁の天目台、香炉とその蓋と思われる瀟洒なものが含まれており、当時、有力寺院が存在しないことから、この地に居を構えた先の武士達の姿を偲ぶことができる。江戸時代前期には北田氏がこの地域を治め、その居宅に設けられた長屋門は国内最大のもので国の重要文化財に指定されている。

第3章 調査の方法

発掘調査および整理事業は、当センターの「遺跡発掘調査マニュアル【暫定版】2003.8」に従って行った。

事前調整・事前作業

私部遺跡南06-2は、調査に先立ち地元調整を第二京阪道路事業者・交野市と共に行った上、調査に着手した。また、調査開始にあたっては、砂塵の飛散防止や騒音防止のため、万能板の設置を行い周辺環境への配慮に十分に留意した。

私部南遺跡07-2は、本体工事と同時並行で発掘調査を行うため、調査に先立つ地元調整は、第二京阪道路事業者・交野市・請負業者と共に行った。また、万能板設置や濁水の流出、歩行者や通行車両の安全確保、近隣家屋への振動・騒音対策などは、本体工事と同時並行のため、本体工事請負業者が主に行った。

上の山遺跡08-1・09-1、有池遺跡09-1、上私部遺跡09-1は、第二京阪道路内での発掘調査未了地の部分を対象としており、本体工事が進行している中での、発掘調査であった。

調査区割り（図12・3・15・16・17）

上の山遺跡09-1、有池遺跡09-1、上私部遺跡09-1は、調査地を分割することなく発掘調査を行った。上の山遺跡08-1は、調査地内を通る本体工事進入路の確保のため、調査地を南北二分割しての発掘調査となっており、北側の調査区を1区、南側を2区と呼称している。

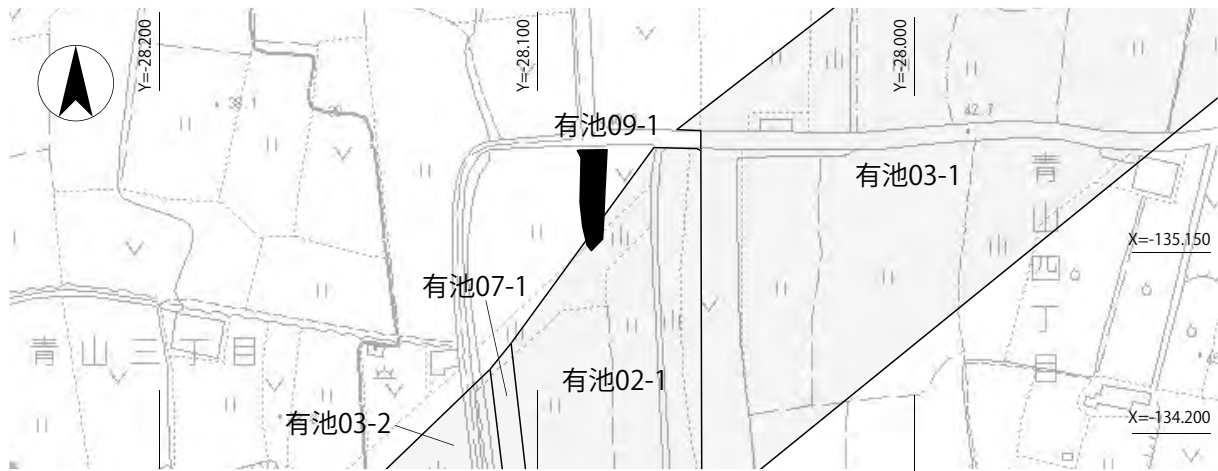
私部南遺跡06-2は、本体工事用作業車の進入路の確保を第一にして欲しいとの事業者の要望があり、この条件に則した形で調査区を設定した。その上で、調査によって発生する土砂の仮置場や、写真撮影用のクレーン設置場所などの調査ヤードを勘案して、8地区に分けて調査を行っている。なお、調査区名は、調査着手順に1区から8区と呼称している。

私部南遺跡07-1は、基本的に道路用地の両側に設置される副道部分と、高架橋道路の橋脚部分、調整池部分、それから私部南06-1・2で調査できなかった部分が対象となっている。調査にあたっては、調査地内を走る南北の現道を残しつつ、かつ東西方向の現道の機能も失わないよう実施するため、これらの道路により分断された調査区割りとなっている。

また、副道部分については調査の経緯で述べたように、調査途中での設置位置の変更があったため、結果として、副道の調査区を細分することとなった。その上、本体工事と同時に調査を行うため、調査当初は下部工工事の工事ヤードと進入路の確保、後半は上部工工事の工事ヤードと進入路の確保のために、さらに細分されることとなった。このため、極小規模な電渠柵や下水・雨水管設置の調査区を除外しても、96箇所の調査区に分かれている。なお、電渠柵設置箇所2箇所、水路の切替え箇所2箇所、下水管設置箇所16箇所、仮雨水管設置箇所2箇所を含めると、合計で119の調査区となる。

このような要件のため、細分された調査地区名の呼称には－（ハイフン）でつなぐ枝番号を用いている。基本的な調査地割りの考え方として、副道部分については南側と北側に分けた上で、東西の現道を境とし調査区名を付している。橋脚部分は、ピア番号毎に、調整地・残地部分は1つの調査区としている。その上で、細分された調査区について枝番号を付している。

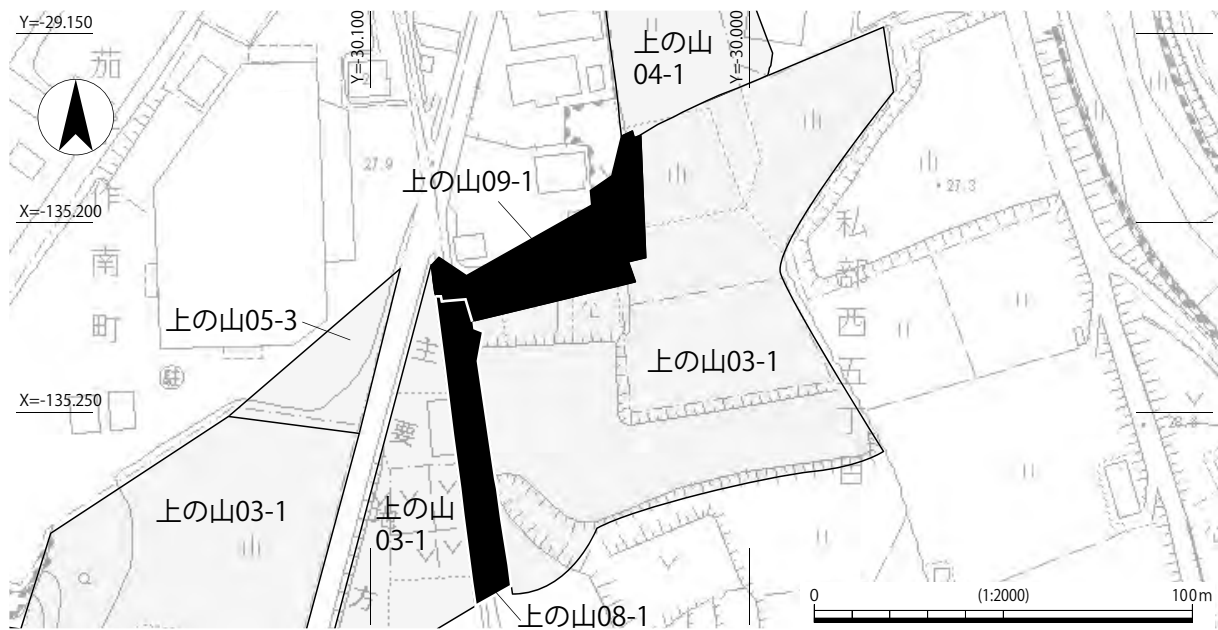
枝番号は、その調査区の中で着手した順である。例えば、6-5区は、6調査区で5番目に調査に着



有池遺跡09-1調査区



上私部遺跡09-1調査区



上の山遺跡08-1・09-1調査区

図12 上の山遺跡08-1・09-1 有池遺跡09-1 上私部遺跡09-1 調査区位置図

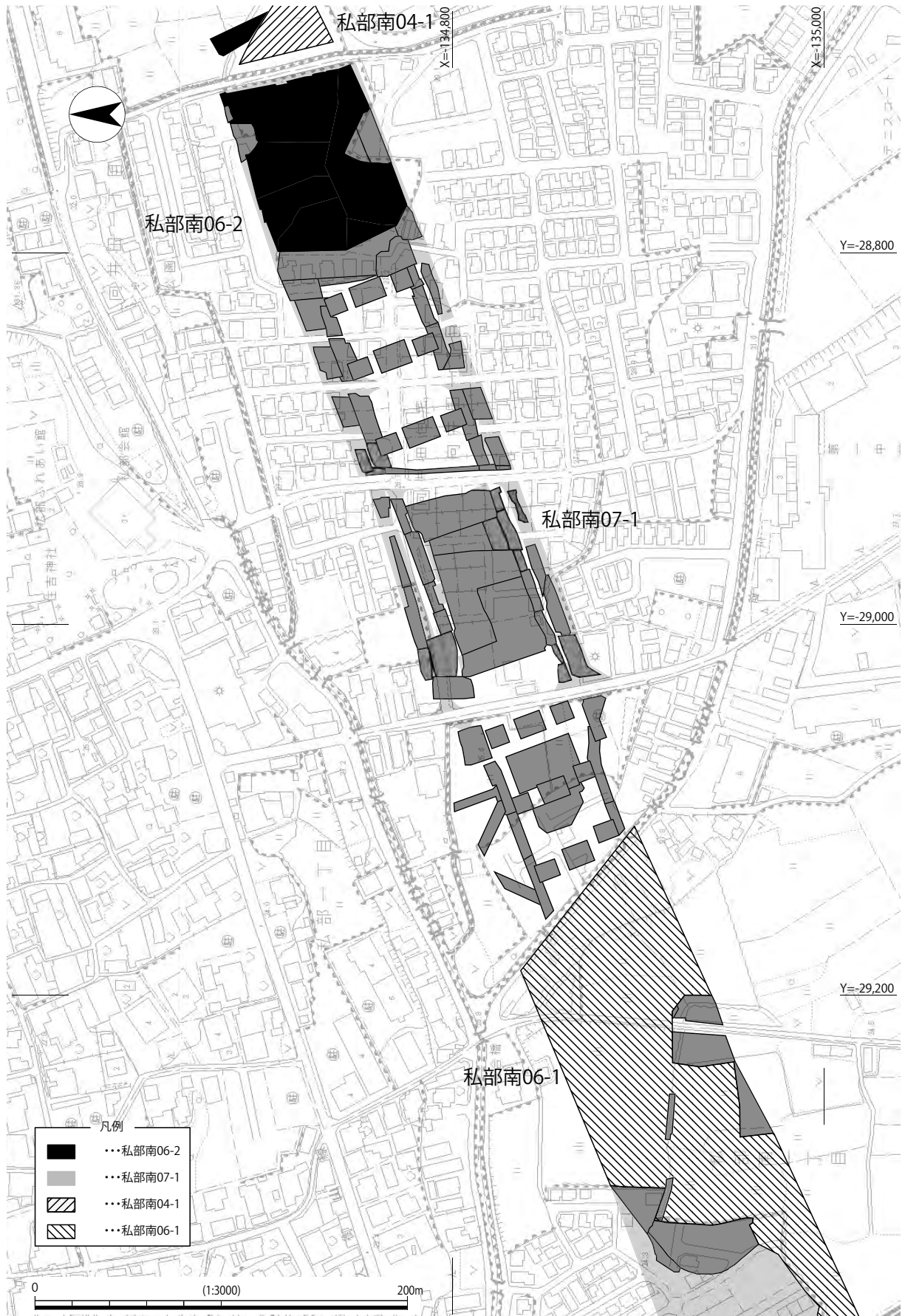


図 13 私部南遺跡 06 - 2 ・ 07 - 1 調査区位置図

手した調査区である。なお、電渠柵・雨水・下水はそれぞれ、電渠柵1、雨水1というように呼称している。

地区割り (図14・15・16)

地区割りは、世界測地系にもとづく測地成果2000を使用した、平面図直角座標系第VI系を基準とし、大阪府域を共通の区画割りで統一するものである。遺物の取り上げや、写真測量を含める図面作成の基準としても、同基準を使用している。

地区割りは、大区画の第I区画から順にこれを細分し、第II区画、第III区画の順で表す。なお、マニュアルの規定では、第III区画をさらに細分する場合の区画として、第V区画・第VI区画も存在するが、今回の調査では使用していない。

第I区画は、大阪府の南西端 $X = -192,000\text{ m}$ ・ $Y = -88,000\text{ m}$ を基準とし、縦6km、横8kmで区画する。縦軸をA～O、横軸を0～8とし、縦・横の順で表示する。第II区画は第I区画内を縦1.5km、横2.0kmで区画し、縦横それぞれ4分割して、計16区画を設定する。この区画に関しては、南西端を1として東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北東端を16とする平行式で表示する。第III区画は第II区画内を100m単位で区画し、縦を15分割、横を20分割する。北東端を基点に縦A～O、横1～20とし、横・縦の順で表示する。各調査区の地区割りは図15・16に示す。

遺構名

遺構名は、遺構の種類(土坑や溝など)や、遺構面にかかわらず通し番号を付しており、「205井戸」のように「番号と遺構種類」という形で記載している。上の山遺跡08-1・09-1、有池遺跡09-1、上私部遺跡09-1、私部南遺跡06-2も、この通りである。しかし、私部南遺跡07-1は、調査

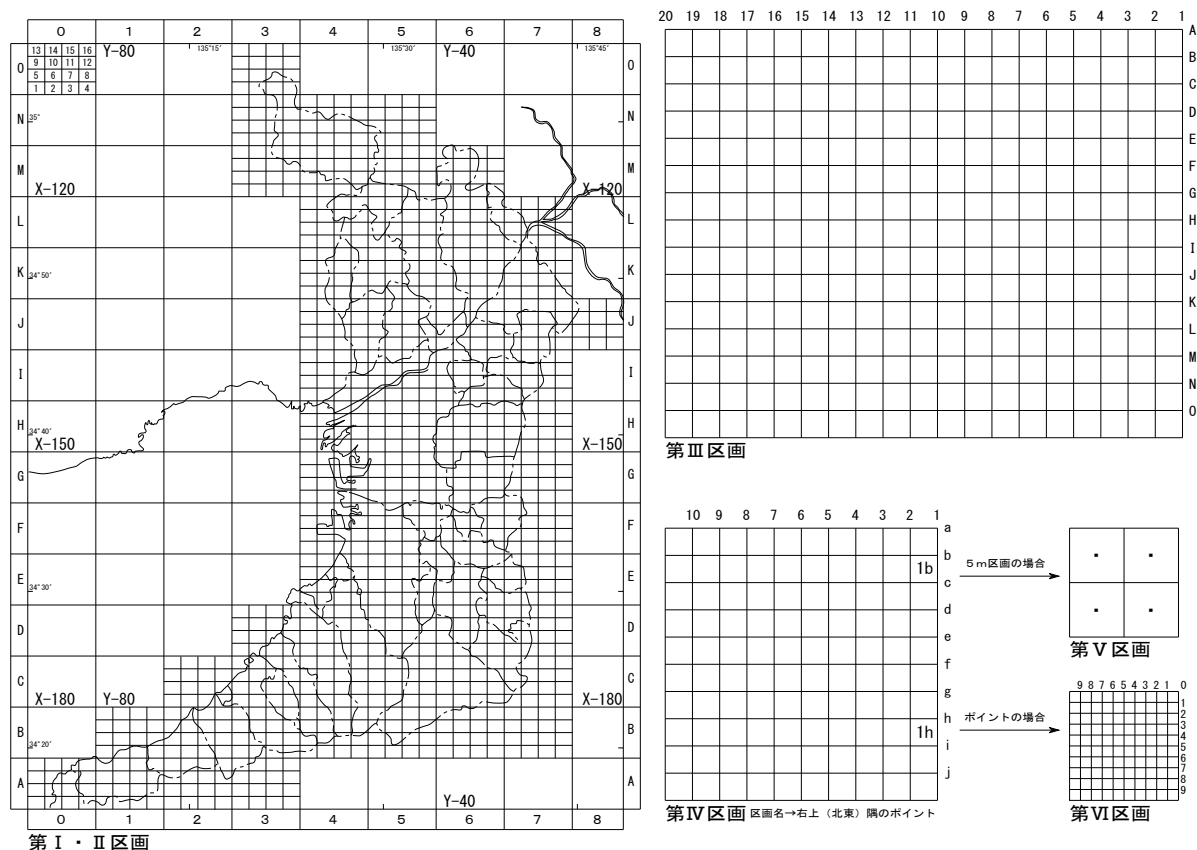


図14 地区割り基準図

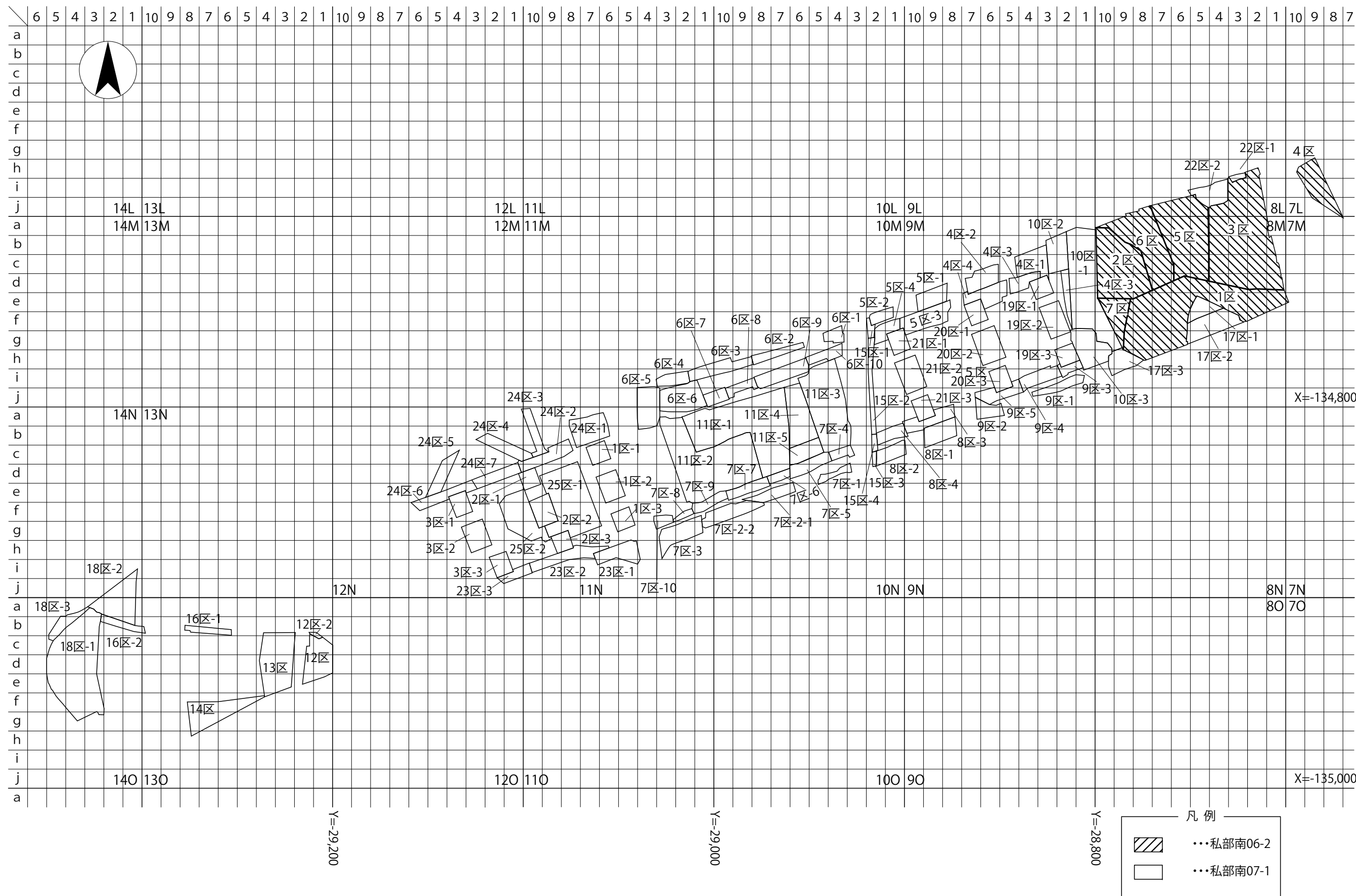
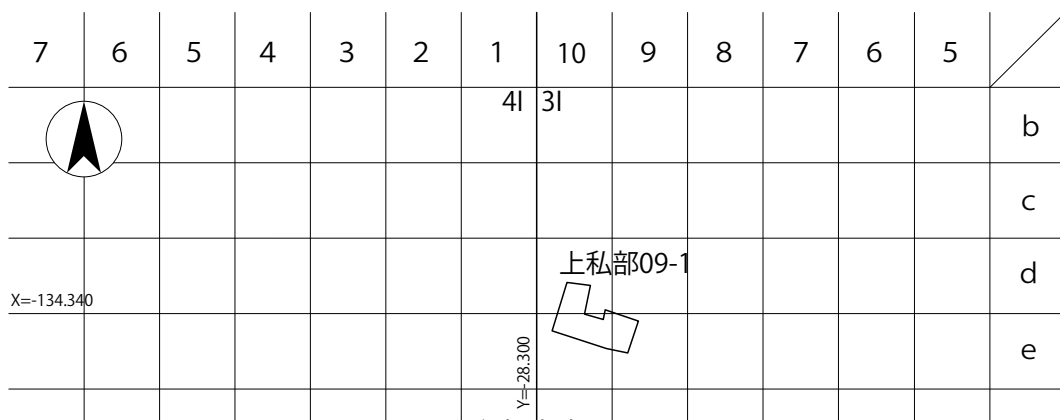


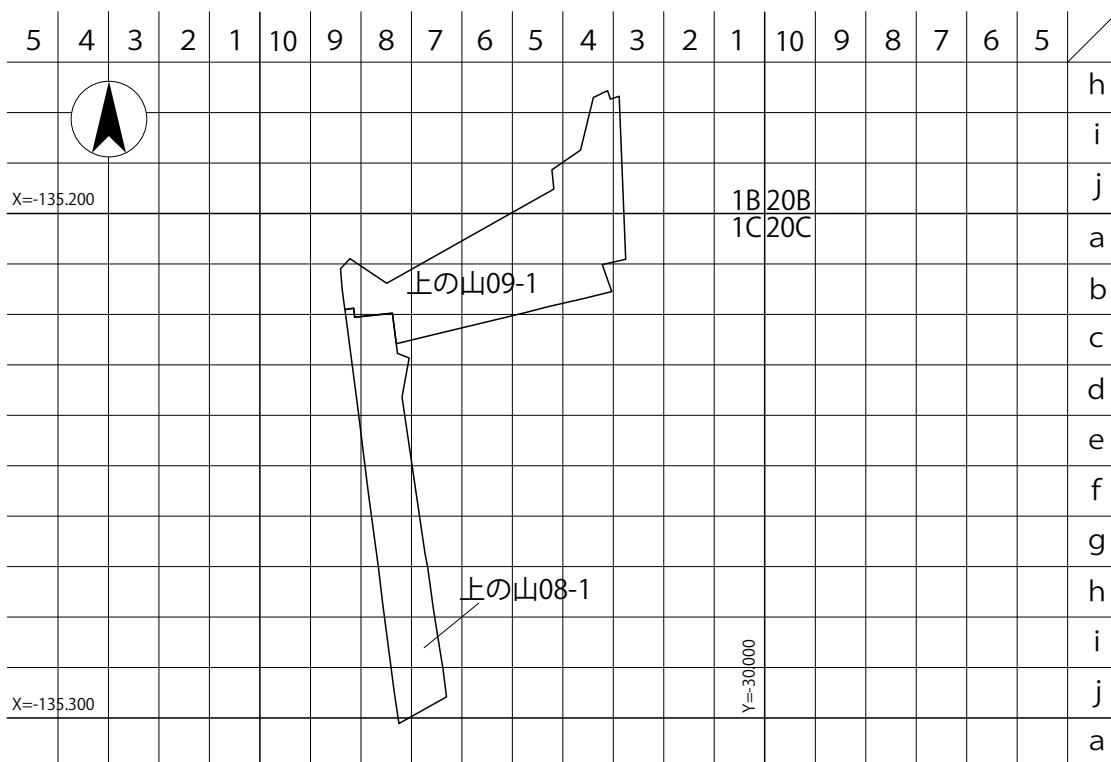
图 15 私部南遺跡 06-2・07-1 調査区地区割図



有池遺跡09-1



上私部遺跡09-1



上の山遺跡08-1・上の山遺跡09-1

図 16 上の山遺跡 08 - 1 ・ 09 - 1 有池遺跡 09 - 1 上私部遺跡 09 - 1 地区割り図

に至る経緯と経過で述べたような条件下での調査であったため、調査地での通し番号を付けることができず、調査区毎に遺構名を付けている。その結果、例えば6区と7区には、1溝が両方に存在することとなる。そこで、本報告書では、私部南遺跡07-1の記述においてのみ、遺構名の前に調査区名を付して区別する。例えば、6区の1溝ならば「6-1溝」、7区の溝1ならば「7-1溝」である。

また、調査区をまたいでいる、溝や流路などの記述においては、複数存在する遺構名の内、最初に付した遺構名で表しているが、文中初出の際（）内に全ての遺構名を併記している。

掘立柱建物や竪穴建物など、複数の遺構が集合したものに関しては、「遺構種類と番号」の形で表現した。例えば「竪穴建物5」は、6-213 竪穴・6-1255～258 柱穴・6-254 炉・6-227 溝・6-223 溝などを包括する遺構名称である。

掘削方法

調査の迅速化をはかるため、調査の対象とはならない盛土や江戸時代中期以降の地層は機械力で除去し、それ以前の地層を人力によって掘削した。

私部南07-1調査区においては、機械掘削対象の地層である昭和40年代の宅地盛土や、江戸時代中期以降の周辺河川からの氾濫堆積物が分厚く堆積しておりまた、本体工事との並行調査であったため、掘削の迅速化や土砂仮置ヤードの確保のため、これらの地層の掘削を本体工事で行った。本体工事による機械掘削は人力掘削対象地層のおおよそ30cm上で止め、止めた面で現況測量を行った。現況測量の後、発掘調査としての機械掘削を実施しその後、人力により掘削を行った。

測量方法

調査記録の図面作成には、世界測地系にもとづく測地成果2000を使用した平面図直角座標系第VI系を基準として使用した。また、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とする。

上記の基準を用い、各遺構面では平面図を作成し、遺構を検出していれば遺構平面図や断面図、遺物出土状況図などを適宜作成している。

また、調査地・調査区毎に地層図も作成し、遺跡の成立過程を考える上での資料に供した。測量にあたっては、従来のオフセット測量の他、トータルステーションを使用した測量やデジタルカメラを使用した写真測量も利用している。また、遺構の配置図や地形測量では、従来のアリダードを使った平板測量ではなく、光波を使用する光波アリダードも使用している。

検出した遺構面の内、特に必要と判断された面については精度の確保と迅速化を図るため、写真測量を実施している。私部南06-2・07-1、上の山08-1については、クレーンをカメラステーションとする空中写真測量を実施した。

自然科学的分析

発掘調査で検出した遺構面の景観復元や、時代の決定・土地利用方法を理解する上で、特に必要と認められた場合に、花粉分析・珪藻分析・プラントオパール分析・C14年代測定などの自然科学的分析を実施した。その結果については、遺構や遺物の記述やまとめに反映している。

立会

調査終了に際しては、大阪府教育委員会の立会を受け、検出した遺構や遺物を確認した上で、掘削が無遺物層に達し、遺構も確認できない状態となった時点で調査完了とした。なお、私部南遺跡07-1では、調査区が細分されておりそれぞれの調査区の調査終了後、すぐに本体工事が当該地区で開始されるため、調査区毎に立会を行っている。立会は、延べ43回実施した。

全体調整会議

私部南遺跡 07 - 1 では、各調査区の発掘調査完了後すぐに、本体工事が当該地区で開始されている。

下部工事と呼ばれる高架橋道路の橋脚部分の施工である。また、橋脚部が完成すると、上部工と呼ばれる橋梁部や路面、防音壁などの施工が開始され、場合によりその下での調査を行うこととなった。このため、安全管理を第一として、工程管理やヤードの確保などの調整が必須となった。これを受け、本体請負業者との打ち合わせを毎日実施するほかに、工事と調査の全体工程や調査区割り、調査開始・終了時期の調整、調査ヤードや安全の確保など、第二京阪道路事業者や交野市、大阪府教育委員会を交えた調整を行う必要性があった。こういった状況を踏まえ、全体調整会議を月1回実施した。副道の計画変更に伴う調査地の追加や、下水・雨水管の設置工事に伴う調査地の追加など、この会議で調整された案件が多くあった。

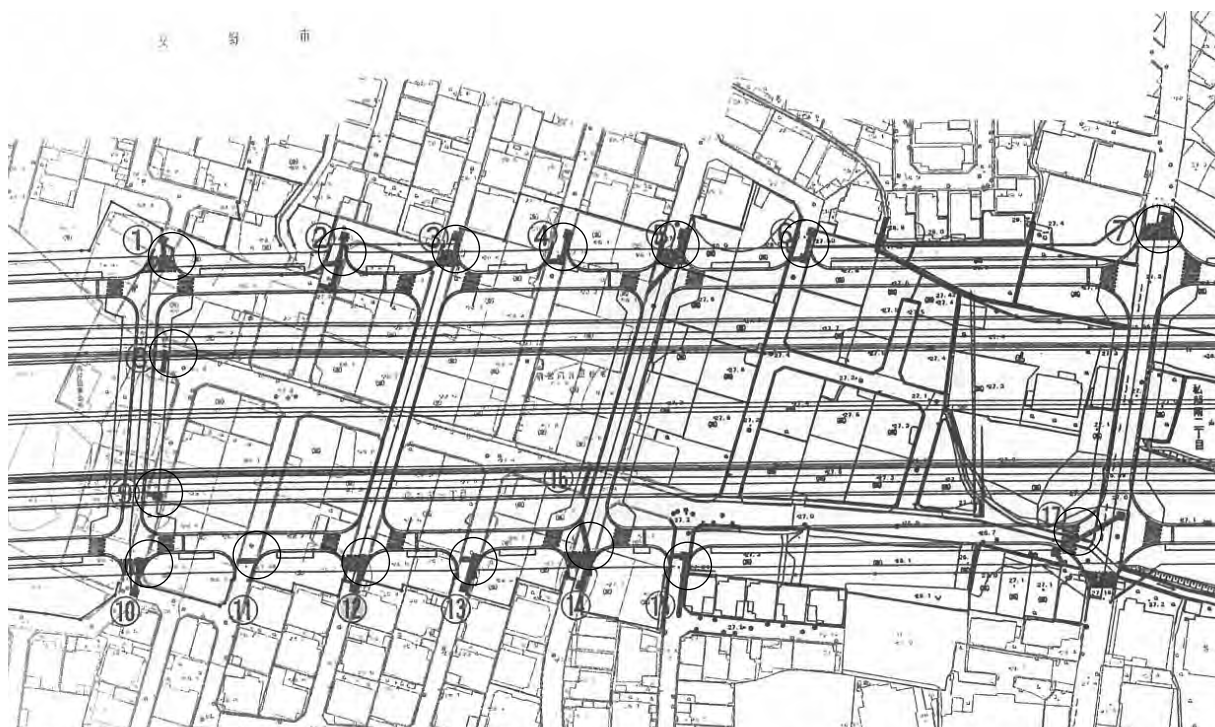


図 17 現道部 下水管調査位置図

第4章 私部南遺跡 06－2 の調査

第1節 基本層序

06－2 調査は用地買収以前までは大部分が耕作地とされ、一部では盛土を行って宅地に改変されていた。今回の報告では盛土を省略して耕作土以下の各層準を12層に大別すると共に、部分的な堆積層には枝番号を付して総計19層の基本層序を設定した。調査に際しては、これに従って遺物の取り上げなどを行うと共に、各層準を除去した段階で遺構検出を試みた。以下、地区ごとにその様相を述べる。

1・2・3・5・6・7区

旧耕作土：用地買収以前の作土層。1946年と1961年段階の航空写真ではその区画も映し出されている。なお、調査区西部では、これを除去した段階で直ちに私部南遺跡 07－1 調査で平坦面1とされた旧扇状地性堆積物が露呈する部分も多い。ここでは弥生時代後期の第5面までの遺構を同一面で検出したが、遺物にはそれ以前のものも多数確認されるため、それ以前にも相当な削平を受けたと考えられる。

1層：調査区のほぼ全域に分布する灰・褐色系シルトから細砂。北から北東部には、区画はほぼ同様だが、嵩上げによって高低差を解消する部分が存在し、これらに1－2・1－3層と枝番号を付した。

層準の時期は、出土遺物からみて、1－1層が18世紀中頃以前、1－2層が17世紀中葉前後、1－3層が、上下層の時期から勘案して17世紀中葉前後以前、17世紀前葉以降となる。

2層：西半にはみられない。灰・黄褐色系砂混じりシルトを基調とし、1層と同様、低地部を整地して平準化を図っているため、3層に細分した。遺物の時期は、それぞれ2－1層が17世紀初頭から前葉以前、2－2層が15世紀から16世紀代まで、2－3層が13から14世紀より古い段階となる。

3層：平坦面1を除く東半部に分布し、2層に細分される。3－1層は灰黄色系シルトを中心とする土層で、6世紀後葉を中心として7世紀中頃以前までの遺物を含む。また、西半の旧扇状地性堆積物の上位から掘り込まれる竪穴建物や掘立柱建物などについては、表土層直下で認識されるものも存在したが、上下位との層序関係を検討した結果、ここに帰属させることとした。3－2層は砂粒を含む黒褐色系の層準で、下位の4層上位に由来する古土壌である。本層上面に形成された遺構からは、7世紀中頃までの遺物が出土していることや、上層との関係からみて6世紀後半代の時期を与えることができる。

4層：この層以下の層準は、調査区東半のみで検出される氾濫堆積層の累積である。供給源は南東から北西に流下する流路で、現在調査区の北側に天井川となって存在する北川の旧流路とも想定される。上位堆積層との関係から6世紀後半以前には調査地内から移動し、これ以後、砂礫の供給は途絶する。

流路内と、そこから供給された溢流堆積層内には、弥生時代後期後葉の土器などを含み、最上部には古墳時代後期の遺物もみられる。なお、この間の庄内期から布留式段階の遺構や遺物は皆無となる。

5層：旧流路から溢流により供給されたオリーブ灰色系シルトと、その下に堆積する同色系統の古土壌層で、前者を5－1層、後者を5－2層と認識した。5－1層は、各地点で粘性を帯びる部分や、砂質となり砂礫を混じえる部分が存在する。層内より少量ではあるが弥生時代中期後半より後期初頭から前半期にかけての土器などが出土し、供給元の一つである308 a 流路からは弥生時代後期初頭までの遺物が出土した。5－2層は下層に堆積した6層上位が古土壌となった層準で、濫原内全域にはおよばない。調査地北東部では、上位との層界を慎重に剥いていくと水田様の区画が検出される部分も確認され

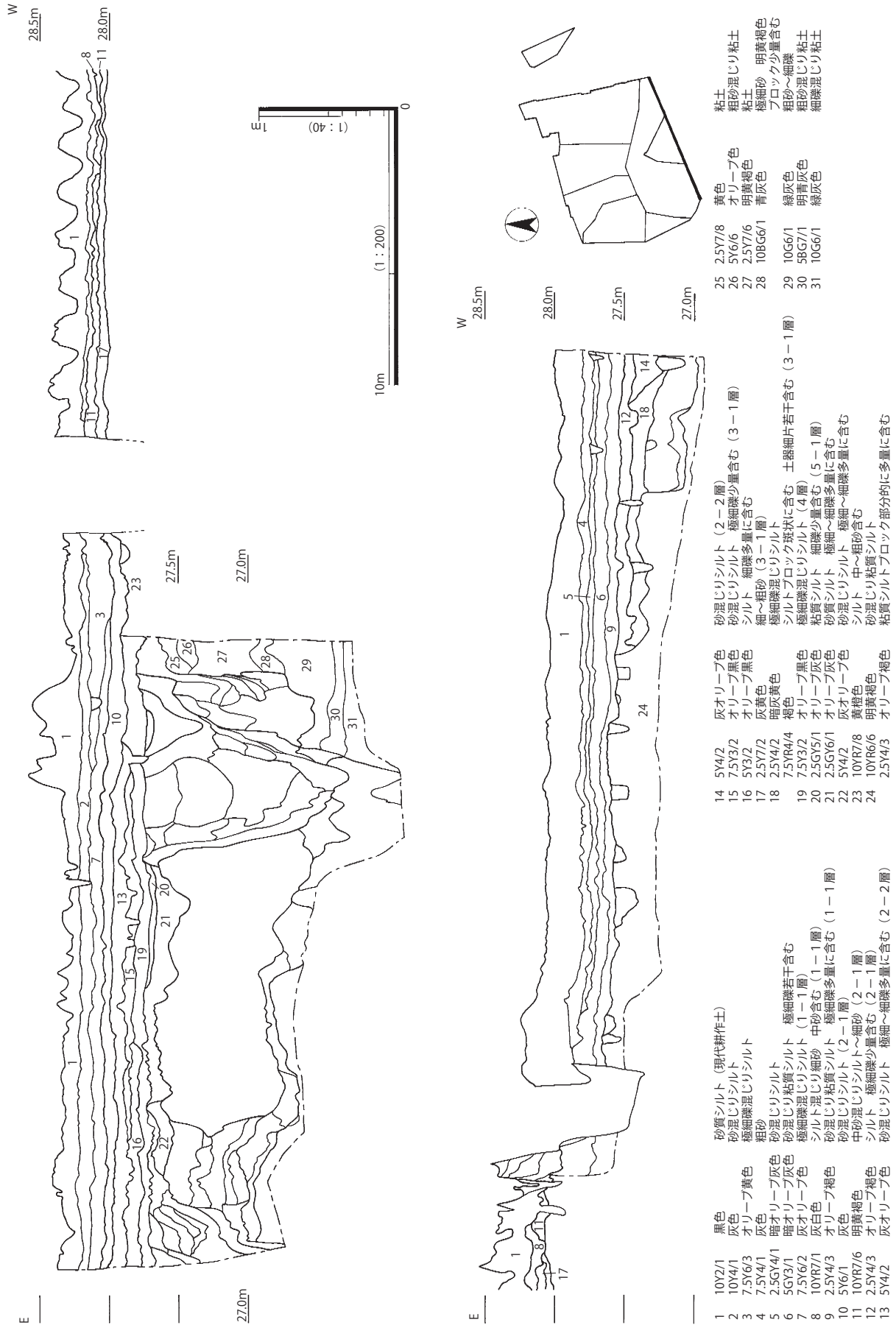


図 18 基本層序 東西断面図

た。層中および当該面から認識される流路からは、弥生時代中期後半から後期の土器などが出土した。

6層：オリーブ灰色系の粗砂からシルト。調査区北東部を中心として分布する層準で、南西部では上下位の流路が錯綜するため検出面の把握が非常に困難となり、893流路のようにこれと調査区境となる悪条件が重なり合って混乱をきたした部分もある。層中に含まれる遺物には、弥生時代中期初頭から中期後半のものまでがみられるが、実際には後半段階のものは多くはないものと認識している。

7層：灰色系の粗砂からシルト。2層に細分したが、流路の肩が確認される層準よりこれを分けたのみであり、層自体の様相に相違はない。しかし、出土遺物からみた場合には、7-1層からは弥生時代前期新段階から中期初頭までの遺物が含まれていたのに対し、7-2層からは、弥生時代前期新段階のものが含まれるという時期差が認められるため、この区分が一定程度有効と思慮された。しかし、この層準でも上下位に位置する流路の重複が激しく、7-1層から確認される857e流路のように弥生時代中期初頭の遺物を中心としながらも前期から後期の遺物が混じるものも存在した。これに関連し、砂礫堆積を除去した段階で検出された892a流路より、第Ⅱ様式の土器と共に得られた植物遺体の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、405BC（95.4%）370BCという値が得られたため、弥生時代中期初頭に近い年代と判断された。なお、7-2層と8層との層界には、雲母を多量に含むシルトと極細砂からなる葉理が発達したシルトが観察され、その様相からこれを逆級化構造と判断した。

8層：灰黒色系粘質シルト。流路以外のほぼ全面に観察される古土壌。数箇所には立木がそのまま埋没し、このうち2本を上記と同じ方法で測定したところ、405BC（95.4%）370BCと、410BC（93.3%）360BC / 270BC（2.1%）260BCという年代を得た。層の上面には第Ⅰ様式新段階の土器や木器、石棒などが置き去られたかのような状態で検出され、往時の様子をそのまま留めたかの如き状態であった。

9層：8層から確認される流路の掘削を終了した段階でも河床や壁面には砂礫が連続し、平坦面1を構成する旧扇状地性堆積層が観察できない部分も多かった。さらに、層内には、若干ではあるが縄紋土器も含まれていたため、遺物が多いと予測される部分と、橋脚予定地にトレンチを設定して状況の把握を試みた。その結果、面の認識は不可能であったが、9から12の4層に大別できると判断されると共に、その中の木片を年代測定したところ1890BC（95.4%）1750BCという値を得ることができ、これらが縄紋時代まで遡る流路であることが判明した。そして、この分層に従って掘削を行った結果、本層位では、縄紋時代中期末葉の北白川C式より、晩期の船橋式から長原式段階にかけての土器を検出した。

10層：以下の層準は灰白色系砂礫層の連続である。この層準からは、縄紋時代中期末葉の北白川C式から晩期前半の滋賀里Ⅲb式までの遺物が出土した。

11層：縄紋時代中期前半の船元Ⅱ式とみられるものから、後期中葉の北白川上層2式までが出土した。

12層：縄紋時代中期末葉の北白川C式を中心として、中期前半の船元Ⅱ式などの遺物が出土した。

以下についても掘削を行ったが、8層上面から2m以上掘削しても砂礫層が続いたまま未だ旧扇状地性堆積層には達しないままであった。このためさらに掘削を進めようとしたが、激しい湧水と壁面の崩落に阻まれたため、より以上の調査は断念せざるを得なかった。

4区

既往の04-1調査区に準拠しながら調査を進め、合計13層の基本層序を設定すると共に、今回の調査と連続すると考えられる層準と面に関しては、調査成果の項でそれぞれを記載した。

なお、1層から3層までは通常の手順により調査を実施したが、遺物整理の結果、18世紀中頃以降の肥前焼系磁器が含まれていることが判明したため、特徴的な遺物を除いて報告書への掲載は見送った。

第2節 1・2・3・5・6・7区で検出した遺構と遺物

第1項 第1-1面

176土坑 (図19・20)

調査区西部中央からやや南で検出された。平面は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は短軸0.4 m強、長軸0.7 m弱、深さ0.25 mで、断面は西側に膨らんだU字形をなす。埋土は2層からなる灰色や褐色を帯びた黄色シルトで、下層には粒状化した基盤層が大量に含まれるため、短期間のうちに埋め戻されたとみられる。

出土遺物には図20-1に示す脚台がある。形態や調整から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての製塩土器との印象を受けるが、胎土は比較的精良なためそれとは異なる。

1766土坑 (図19・20)

調査区中央部から北西の位置で検出された。平面は南東側に頂部を向けて一部が窪む倒卵形様を呈し、

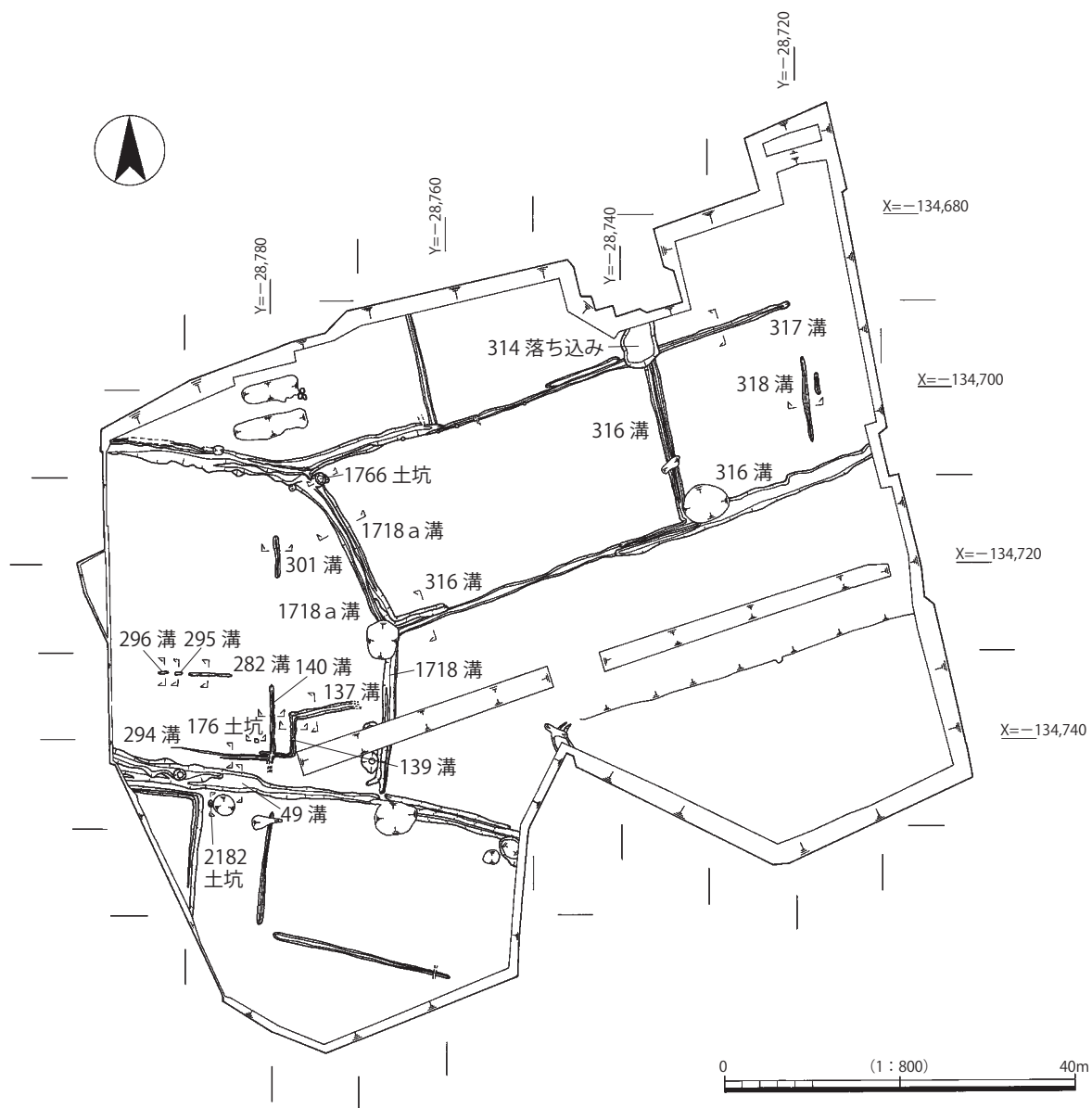


図19 第1-1面 遺構全体図

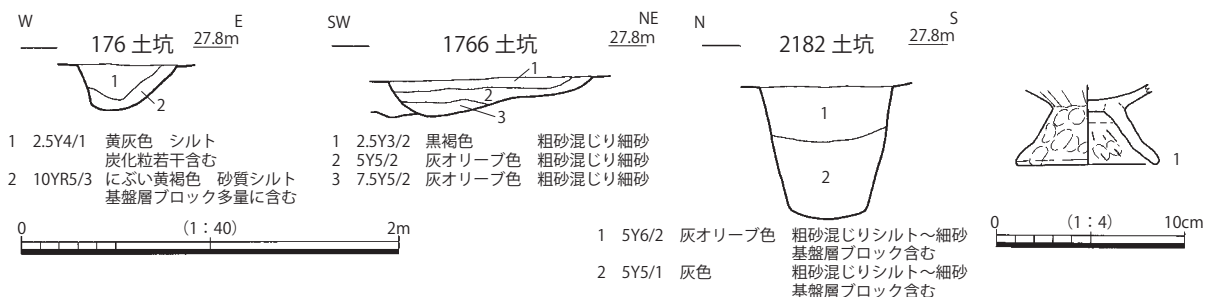


図 20 第 1 - 1 面 176・1766・2182 土坑 断面、及び 176 土坑 出土遺物実測図

規模は長径 1.4 m、短径 1.1 m を測る。断面は図 20 中央のように、南西部側が一段深くなる耳形を呈し、最深部で 0.2 m を測る。埋土は、粗砂から細砂を多く含む黒褐色から灰色系統の土壌で 3 層に細分される。その中に遺物はほとんど含まれていなかったため時期は特定できなかった。

遺構の性格は、区画単位の北西隅で検出されたため、耕作に関連する何らかの施設と考えられる。

2182 土坑 (図 19・20、図版 1)

調査区南西部で検出された。東側は近代の井戸により攪乱を受け欠失するが、遺存する部分からみて平面は不整形円形をなすとみられる。規模は、東西 0.6 m 以上、南北 0.7 m で、断面は隅の丸い逆台形を呈し、深さ 0.7 m を測る。埋土は、灰色を基調としたシルトから細砂からなり、上下 2 層に分けられるが、いずれの層中にも団粒状化した基盤層を多く含むことから埋め戻されたことが考えられる。

層中に遺物がほとんどないため時期は特定できないが、耕作溝の分布状況や、この土坑の西に接するようにして区画溝が開削されているため、耕作に伴う小規模な溜井状の施設であったと思われる。

49 溝 (図 19・20～22、図版 1)

調査区西半の中央から南の位置で検出された。北からやや東に偏るが、ほぼ東西に開削され、総検出長は 47 m におよぶ。幅は各所で差異がみられるが、最も狭い部分で 0.8 m、広い部分では 2.5 m を測り、深さは 0.2 から 0.8 m 前後で、西側に向かうほど深くなる。断面は基本的には偏平な U 字形から皿形を呈し、西部では溝底に起伏を持つ部分が多く観察された。

埋土は、灰色がかかった黄色を呈するシルトから細砂で、図 21 の土層図 4 のように粗砂が観察される部分が存在することから流水があったことや、層序序列からみて最低で 3 回は底さらえや掘り直しが行われたものとみなされる。

出土遺物のうち、図化できたものに図 22 - 7 から 12 の陶磁器類や瓦がある。土器類には、7 の瀬戸美濃窯系陶器の天目茶椀、8 の龍泉窯系青磁碗、9 の肥前焼系陶器の椀、10 の瓦質焼成の火舎、12 の備前焼の播鉢があり、瓦類には 11 の鳥衾瓦がある。陶磁器類の時期はおおむね 15 から 16 世紀を中心とし、瓦も巴紋や連珠紋などの意匠や離砂の使用からその範疇に入るとみなされるが、唯一、17 世紀前半代の肥前焼系陶器が含まれる。

したがって、時期の下限は 17 世紀代まで下がるが、先述した通り、溝には幾度かの改変がおよんでいることから、それ以前にも存在していた可能性も考慮しておかねばならない。

なお、溝の検出された位置は、用地買収以前まで使用されていた耕作地の区画単位や宅地との境界部分に相当することから、これらの区画や用排水路として設置されたことが考えられる。

137 溝 (図 19・21)

調査区中央からやや南西の位置で検出され、東からやや北に振れるもののほぼ東西方向にのびる。長

さ 8 m分を検出したが、西側は後述する 139 溝とほぼ直角の角度をなして接続し、東端については削平と調査区境となったため検出できなかった。幅は最も大きい部分で 0.8 mを測り、断面は北側に偏った皿形で、掘削深度は 0.2 m前後となる。溝底は東から西に高低差を持ち、段状になる部分が観察されることや、土層の堆積状況より何度か掘り返されたような様相が看取された。

埋土は、黄色や褐色味の強い灰色の中砂から粗砂混じりシルトで、遺物はほとんど含まれていなかった。このため時期は不明であるが、平面形や埋土の堆積状況から、耕作地を区画する意図を持って開削されたものと考えられる。

139 溝 (図 19・21)

調査区中央からやや南西の位置で検出された。南北方向にのび、北端では先述した 137 溝が東に折れて接続している。規模は、長さ 4.5 m、幅 0.6 m前後を測り、南端は確認調査によるトレンチにより攪乱のため滅失している。断面は偏平で隅の丸い逆台形を呈し、深さは 0.2 m前後を測る。溝底は平坦で、南から北に向かって緩やかに傾斜している。埋土は、灰褐色から黄色を呈するシルトからなり、中央部には中砂から粗砂を含んだ粘質土が堆積しているため、一時期、流水があったことを窺わせる。

時期については出土遺物がないため判然としないが、前段の 137 溝と直角をなして一連となる状況から判断して、耕作地を区画するため設けられたと考えられる。

140・282・294・295・296・301・318 溝 (図 19・21)

調査区各所に散在する状態で検出された。長さはおのおので異なるが、幅 0.1 から 0.3 mで、断面は

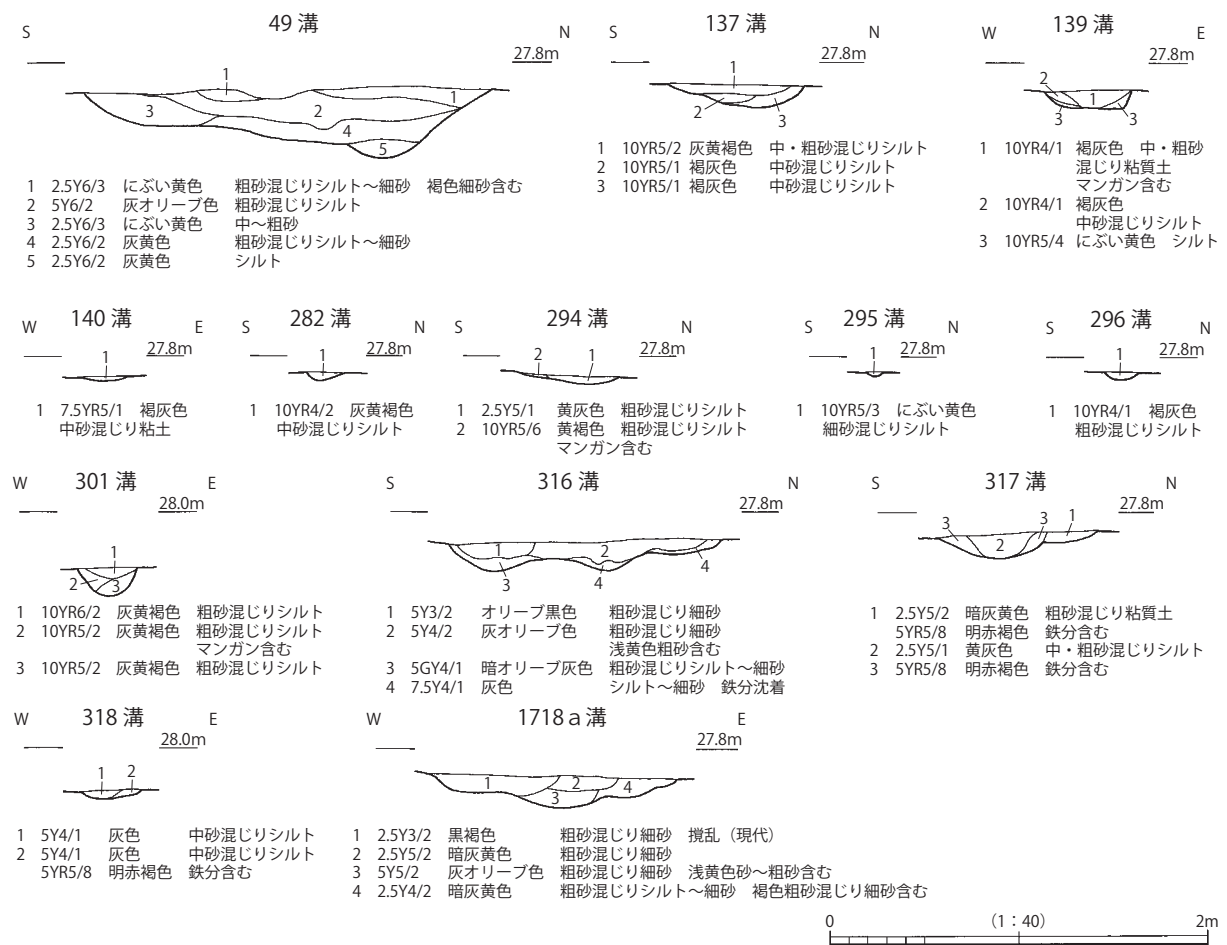


図 21 第 1 - 1 面 49・137・139・140・282・294～296・301・316～318・1718 a 溝 断面図

偏平な皿形をなす。埋土が基本的に単一層であることや、耕作地を区画する溝の長辺に対し平行するものがほとんどで、交差する場合でも直交または短辺に平行している点、溝の両端の高低差がほとんどみられない点で共通する。以上に述べた諸様相からみて犁による耕起痕とみなすことが妥当と考える。

316 溝 (図 19・21・22)

調査区中央を北東から南西に縦断するようにして検出され、南西端は 1718 a 溝と合流して収束する。東から西にわずかに傾斜しながらのび、途中、南北方向に分岐するため全体の平面は凸字形を呈す。

規模は、北東から南西に 58 m 以上を検出したが、北東端は調査区外となる。東半で分岐する南北部は、南に向かって緩やかに下降し、20 m 分を確認したが、北端は攪乱と調査区外のため不明となる。幅は 1.5 から 2.1 m、深さ 0.2 m 前後で、溝底には起伏が多い。

埋土は、オリーブ灰色系の粗砂から細砂を中心とするため、断続的に水の流れる環境にあったことが窺える。また、図 21 の断面図からは幾度かの底さらえや掘り直しが行われた状況が看取され、この様相は、南北方向の平面形や先に述べた溝底にみられる起伏の様相とも符合する。

出土遺物のうち、図化できたものに図 22 - 6 に示す志野焼の皿がある。16 世紀代に位置づけられることから、この溝の時期を示すものと考えられる。

溝の性格は、耕作地を区画するために開削されたと考えられるが、耕作地の旧景観と比較した場合には南北方向の区分単位が確認できないため、旧状よりも小さな単位で耕作が行われていたと思われる。

317 溝 (図 19・21)

調査区北西部で検出された。先述した 316 溝と 20 m 離れて平行してのびる位置関係となり、さらに、東から西に緩やかに傾斜することや、南西端が 1718 a 溝と合流して完結していることでも共通する。

規模は、長さ 58 m、幅 0.5 から 1.5 m を測り、東から西に向かって低くなる。断面は偏平な U 字形から皿形を呈し、深さは 0.2 から 0.3 m で、溝底には帯状の起伏が観察される部分も存在した。

埋土は、灰色を核とする色調の粗砂の入ったシルトから粘質土で、それらが幾重にも重ねられたよう

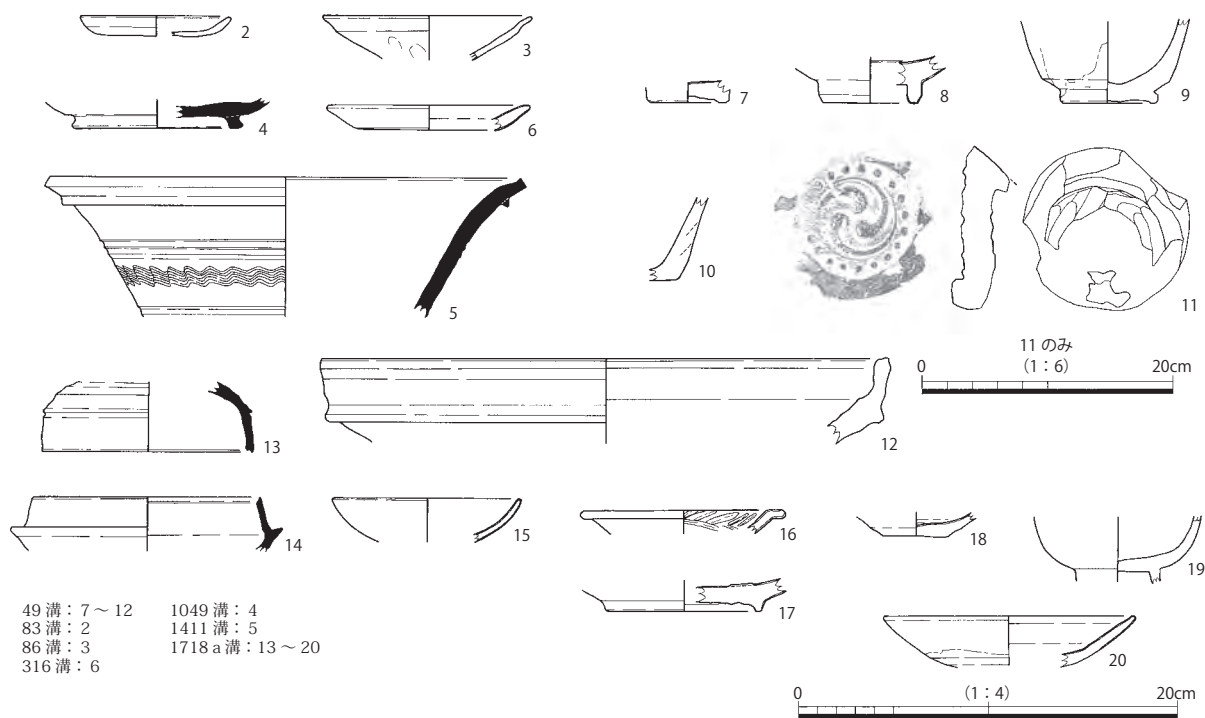


図 22 第 1 - 1 面 49・83・86・316・1049・1411・1718 a 溝 出土遺物実測図



図 23 第 1-1 面 233・314 落ち込み 出土遺物実測図

な状況で堆積していることから、何度かにわたって掘り直された状況が想定される。

出土遺物の中に図化可能な遺物は含まれておらず、ここから時期を特定できないが、平行する 316 溝、接続する 1718 a 溝との関係や、同一面出土遺物からみて江戸時代中頃以前と考えられる。

1718 a 溝 (図 19・21・22、図版 1)

調査区西半の中央から北西隅に向かって弧状にのび、その形状は 07-1 調査で平坦面 1 とされた高まり部の北東部縁辺をめぐる形に開削される。検出された総延長は 62 m で、南端は 49 溝との交点で収束する。途中、前述した 316 溝と 317 溝を合流させ、北西側へ方向を変え、調査区外へとつづく。

規模は、幅 0.5 から 2.0 m を測り、317 溝の合流部と屈曲部とが重なる地点では 3 m に達する。断面は深さ 0.2 から 0.3 m 前後を測る皿形を基本とするが、溝底は何度かにおよぶ再掘削や底さらえにより列状をなす起伏がみられ、高低差からみて南から北西方向に流下していたと考えられる。

埋土は、灰色系の細砂混じり粗砂で、うち、最新の堆積層は調査前まで機能していた溝の土層である。溝内からは土器などが出土し、このうち図 22-13 から 20 の土器 9 点を図示した。これらのうち 13 と 14 は古墳時代中期から後期にかけての須恵器蓋杯の蓋と杯、15 は 15 世紀代以降中国南方で製作された白磁の皿、16 と 17 は 16 世紀後半以降の瀬戸美濃窯系陶器小皿の折縁口縁部と底部で、17 には内面に矢羽根状の刻目紋が施されている。18 は硬質焼成された京・信楽系陶器、19 は呉須で丸手紋を描出した肥前焼系染付磁器、20 は肥前焼系陶器の皿である。

なお、後述する第 2-1 面で検出された 1143 溝から出土した平行タタキの間に鳥足紋風の横線が付加された硬質の韓式土器の壺片がこの溝からも出土し、互いに接合することができた。

遺構の時期は、出土遺物中で最も新しいものが 18 と 20 であり、双方とも 18 世紀中頃を中心とする時期に位置づけられるためこの年代とみなされよう。さらに、この溝に接続する関係となっていることから、316 溝と 317 溝も、これに近似した年代が付与されることとなろう。

314 落ち込み (図 19・23)

調査区北東部の北側調査区際で検出され、一部が調査範囲外となる。平面は南北に長軸を持つ不整形をなし、規模は短径 4.0 m、長径 4.9 m 以上、深さ 0.4 m を測る。

出土遺物には、図 23-22 から 25 に示す土器などがあり、22 は底部下端に圈線をめぐらす肥前焼系染付磁器の碗、23 は京・信楽系陶器急須の蓋、24 は肥前焼系陶器の溝縁皿、25 は鉄釉が掛けられた丹波焼の壺の破片である。これらのうち、最新のものが 18 世紀中葉以降であるため、これが遺構の時期となり、この所見は 18 世紀中葉前後の時期に比定される 316 溝と 317 溝を切り込んで開削されている事実とも矛盾をきたさない。

1-1 層出土遺物 (図 24・158)

第 1-1 面を覆う包含層より各種の遺物が出土し、これらのうち、特徴的な資料を図 24 に示した。古い順から記すならば、26 から 32 は古墳時代の須恵器で、器種には 26 の体部片、27 の蓋杯の蓋、28 から 30 の蓋杯の身、31・32 の有蓋高杯の蓋がある。これらの大半は 5 世紀後半代に属するが、

30のように7世紀に下るものや、26のように鋸歯紋を施したTK-73型式以前の須恵器も含まれる。

33は送風管の羽口で時期の特定はできない。34は平安時代の灰釉陶器碗の高台部、35は13世紀後半代の瓦器碗、36は瓦質土器の仏飯具、37から39は瓦当で、37は唐草紋、38は珠紋の施された軒平瓦、39は巴紋の施された軒丸瓦で、時期は平安時代後期から室町時代にかけてのものと考えられる。

40から42は16世紀代の中国製青花白磁の碗、43から47は中国製の白磁碗で、これらのうち44・45・47の3点は華南沿海窯系白磁に分類され、おおむね13世紀前半代までのものと考えられる。他は15世紀代以降まで時期が下がり、2時期に大別される。48から53は龍泉窯系青磁の碗で、48・49・51の外面上には細蓮弁紋が施され、50には雷紋帯が観察される。52の外面上には片切彫による蓮弁紋、53には線描による間延びした蓮弁紋が施され、これらの内面見込みには陰刻印による草花紋が押捺される。時期は、白磁と同様に52のような13世紀後半代のもの、15世紀後半から16世紀前半代にかけてのものに大きく分けられる。

54から64は瀬戸美濃窯系陶器の小皿や碗である。これらのうち、54・55・57から59は小皿で、55の底部外面には輪ドチが溶着し、59の折縁小皿の内面には形押による菊花弁形の紋様が施されている。56は平碗の口縁部から体部である。60から64には天目釉が施され、60と61は小皿、61から64は茶碗で、60には重ね焼きの痕跡が観察される。

これらの時期は、15世紀から16世紀にかけてのものを中心とし、一部に17世紀中頃までのものを含む。65から68は肥前焼系陶器の底部で、65が碗、それ以外が皿で、後2者の内面見込みには胎土目による重ね焼き痕が観察されるため、17世紀初頭に位置づけられる。

69と70は備前焼の壺底部と播鉢の底部で、いずれも16世紀代以降の製品と考えられる。71は常滑焼の甕で口縁部の形態から13世紀中葉頃の製品と考えられる。

以上、1-1層出土遺物について述べた。時期的には古墳時代中期から17世紀中頃までと非常に幅を持つが、これらの遺物を包含していた土層は第1-1面に伴う作土層と考えられるため、これらのうち最も新しい段階である17世紀中頃までがこれら耕作溝の時期と考えられる。

なお、この時期と、先に報告した耕作地の用排水の確保と区画とを兼用した諸溝との間に時期的な隔たりが認められる。この問題については、当該遺構面が最終的には18世紀代まで耕作地として利用され、この段階以降に調査前までの耕作地に改変されたのか、あるいは、各溝の報告どおり、それらは何度も底をさらえたり、再掘削を繰り返したりしたため、調査段階では充分注意したつもりだが、同一面で検出した新しい段階の溝を遺構と誤認して、そこから得た資料を採集したことがこの時期的齟齬の主因とするのかで評価が大きく異なる。しかし、少なくとも、旧表土とそれと同質の堆積層とは完全に分離して調査を実施しているため後者の可能性は極めて低くしたがって、区画溝群が最終的に埋没したのは18世紀代で、その後、用地買収以前までみられた耕作面に整えられたと考えたい。なお、図158-846に掲載した銅製寛永通寶の年代が、江戸時代の元文期(1736～)であることも、この考え方を支持する一つの根拠として記しておきたい。

第2項 第1-2面

1718 b溝(図25・27)

第1-1面で確認した1718 a溝の屈曲部附近で検出され、切り込まれる面が異なるため、本来は別の遺構番号を付与すべきではあるが、耕作地を区画する目的でその位置を踏襲しながら繰り返し掘削されていることを重視して枝番号を付して報告する。上層の316・317・1718 a溝の3者を統合した形

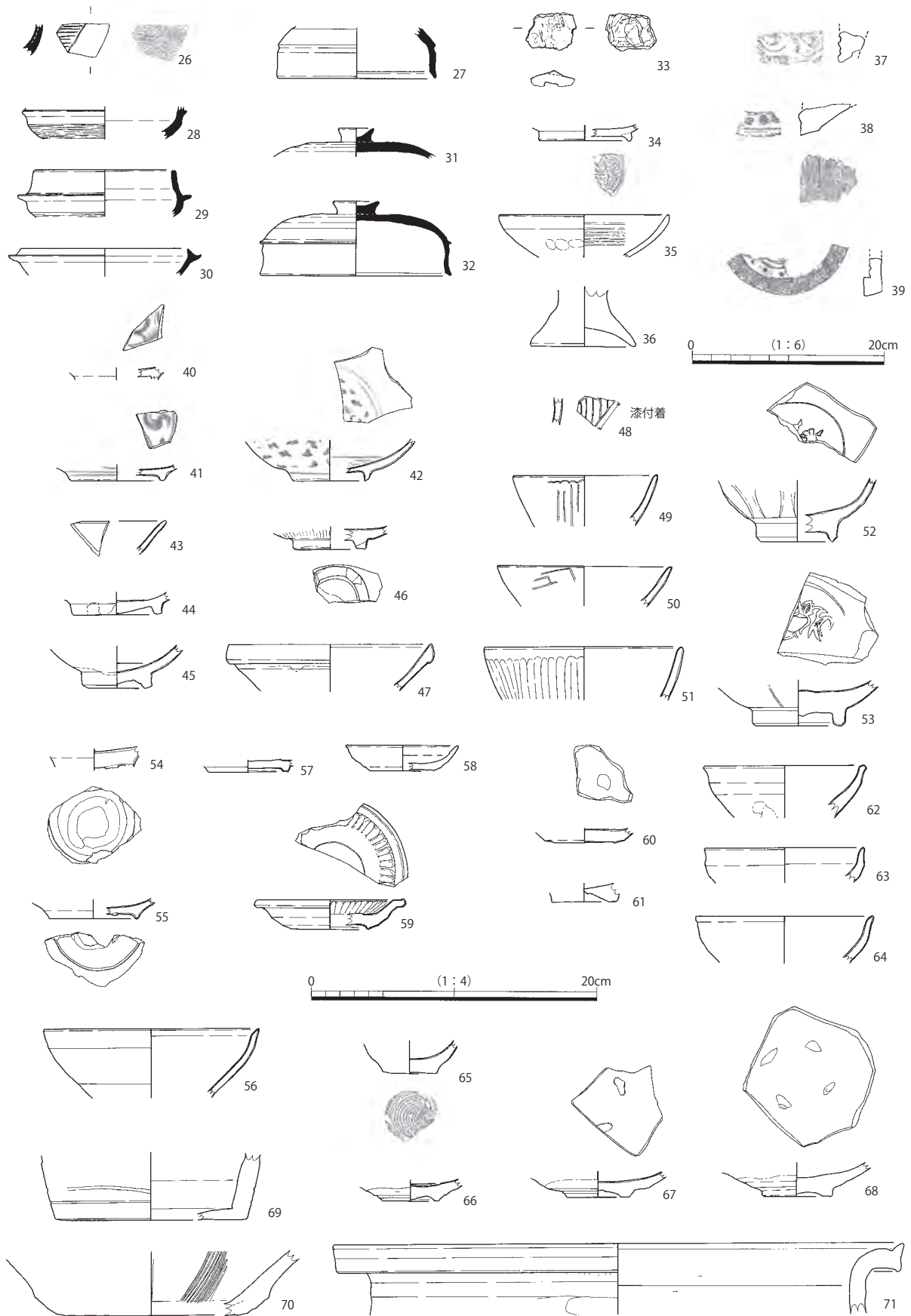


图 24 1-1 層 出土遺物実測図

となり、平面は短冊形を呈する。規模は幅 0.5 m から 3.5 m 前後を測るが、途中、それらが合流する付近では、図 25 のように幅 5.0 m にわたり大きく膨らむ箇所がある。断面は地点により差異がみられるが、測図した地点では図 27 のような不整形な逆台形が重なったような形状をなし、溝底には帯状の起伏がみられた。

埋土は、灰色系の細砂から粗砂混じりシルトであるため流水があったことを窺わせ、また、堆積状況や断面の形状、溝底の起伏との間に対応関係が認められるため、数回の掘り直しがあったと判断される。

出土遺物には図化できるものはなかったが、上層との時期的関係や、同一面から出土した遺物の中に肥前焼系磁器が含まれていないため、それ以前と考えることが可能となる。

なお、本溝が開削された目的は、平面形やほぼ同じ位置に重複して設けられていること、溝内堆積土から判断して、耕作地の区画単位としての役割と、それらにより区画された土地に流入した水を北西側に集約し排水する機能とを兼務させたものと考えられる。

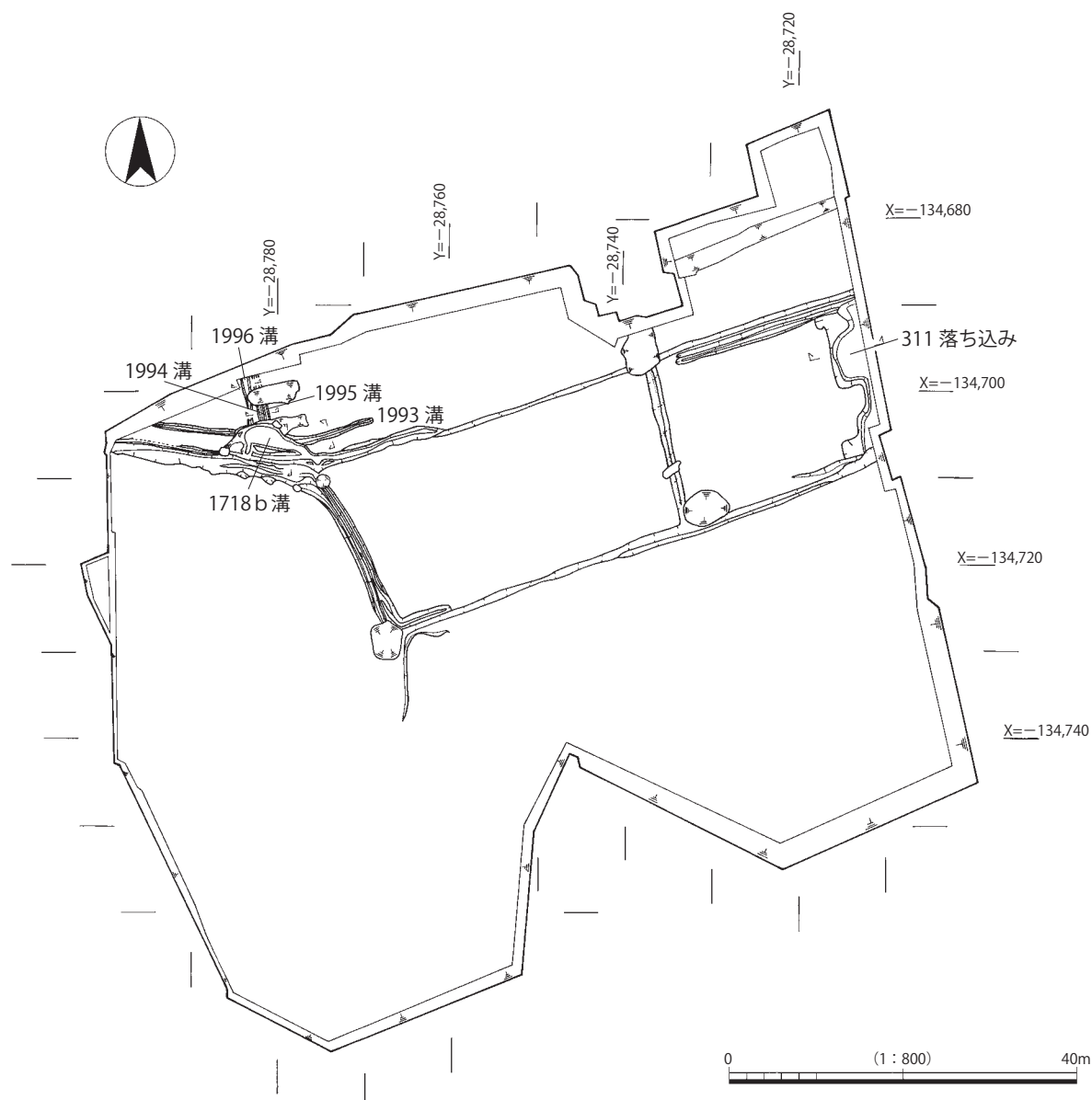


図 25 第 1 - 2 面 遺構全体図

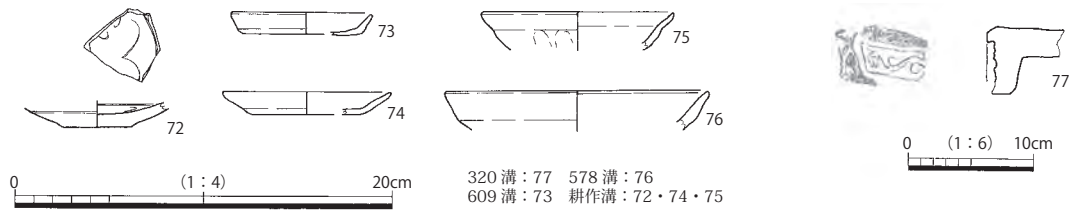


図26 第1-2面 320・578・609溝、耕作溝 出土遺物実測図

1993溝 (図25・27)

調査区北西側で検出され、前述した1718b溝北西部で約3.0mの距離を隔てて2条が等間隔に並んでいる。規模は、長さ25m以上で西端は調査区外にのび、東端は調査区境附近で収束する。幅は0.2から0.3m、深さ0.1mを測り、東から西に向かって低くなる。断面は浅い皿形を呈し、溝底は平らである。埋土は、シルトから粗砂が入り混じるため流水があったと考えられる。

遺構の時期は、それを判別できる遺物がないため不明だが、1718b溝と相似形をなすことや、これにより一部が削剥されているため、1718b溝と同時期か、埋没はやや先行するものと考えられる。

1994・1995溝 (図25・27)

上記1993溝のほぼ中央附近より南北に開削される溝で、2条が重なり合いながら南北方向にのびる。断面からみて西側の1994溝が新しく、東側の1995溝が古いと理解される。規模については、検出長がおおの10mで、双方とも北端は調査区外にのび、南端は攪乱のため途切れる。幅は1994溝が0.45m、1995溝が0.6m以上を測り、深さは両者とも0.2m前後で、断面は隅の丸い偏平な逆台形を呈す。埋土は2条とも灰色がかった粗砂混じりの中砂から細砂で水の流れる環境であったことを窺わせる。

時期は、それを知る遺物が出土していないことや、他の遺構と前後関係がないため不明だが、1993溝に対してほぼ直角に開削されているため、これと一連をなして耕作地を区画したことも考えられる。

1996溝 (図25・27)

先に述べた1994・1995溝の西側に位置し、それと平行して南北にのびる。北端は調査区外となり、南端は攪乱により滅失するため、長さ10m分を確認したにとどまる点でも1994溝や1995溝と共通する。規模は、南端の幅が0.1m弱、北端のそれが0.2mで、深さは0.15mを測り、断面は皿形を呈する。

埋土は、灰色を呈した粗砂混じりの細砂であることから、水が流れていたことが推測される。

時期は、それを特定できる遺物が出土せず、また、他の遺構との重複関係もないため不明だが、1994・1995溝と共に3条が一体となり、耕作地を区画するなどの機能を果たしたとも考えられる。

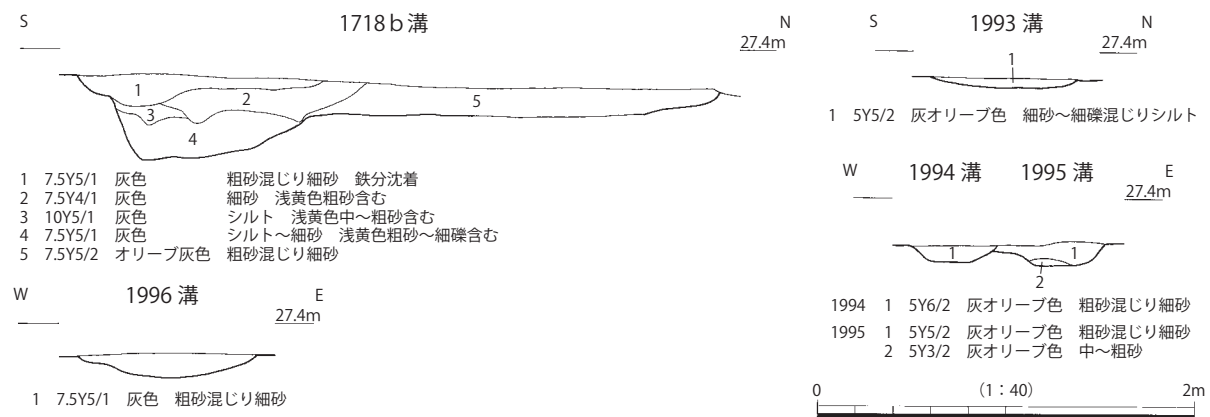


図27 第1-2面 1718b・1993～1996溝 断面図

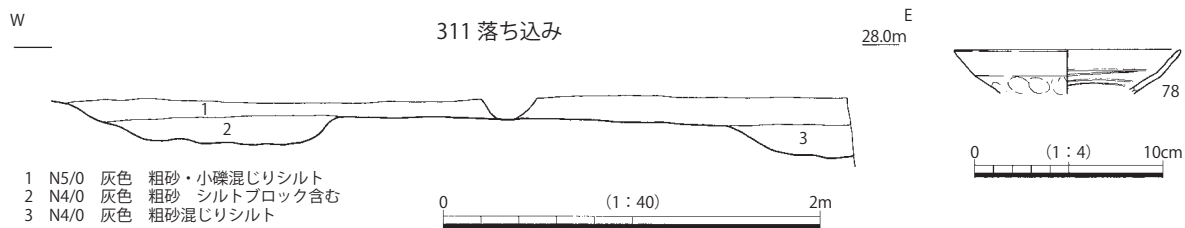


図 28 第 1 - 2 面 311 落ち込み 断面、及び出土遺物実測図

耕作溝 [320・500・578・598・609・1269 溝] (図 26)

犁による耕起痕である耕作溝の幾条かより凶化可能な遺物が出土したため、これらをまとめて図 26 に掲載した。72 は 598 溝より出土した瀬戸美濃窯系陶器の小皿片で、底部外面にはケズリが施され、内外面の下部には圏線がめぐらされると共に、内面には沈線により輪花が描かれる。73・74 は土師器の小皿で、それぞれ 609 溝と 1269 溝より出土した。75 と 76 は瓦器椀で、前者は 500 溝から、後者は 578 溝から出土した。77 は 320 溝出土の軒平瓦で、瓦当面には 3 回以上反転させる唐草紋を描出している。

これらの遺物の時期は、土師器の小皿、瓦器椀が 14 世紀代以前、そのほかの瀬戸美濃窯系陶器や瓦が 15 世紀代以降の所産と考えられる。

311 落ち込み (図 25・28)

調査区東端の中央から北に向かった位置で検出された。東端は調査区外となるため全形は不明だが、西側は矩形の起伏が連続する形をなす。現状での規模は、長さ 17 m、最大幅 4.0 m で、深さは 0.3 m を測る。断面は、西側のみの所見ではあるが、偏平な逆台形をなす。埋土は、上位には粗砂から小礫混じりのシルトがほぼ水平に堆積し、下位にはそれが塊状をなした状態で 2 箇所に分かれて観察された。

出土遺物のうち、凶化できたものに図 28 - 78 に示す瓦器椀がある。その形態や法量、そして調整や暗文からみて 14 世紀前半頃のものと考えられる。

1 - 2 層出土遺物 (図 29)

前記の耕作溝以外にこれらを覆う包含層より出土した遺物を一括して報告する。79 と 80 は時期の特定できない送風管の羽口、81 から 84 は須恵器で、81 は T K - 217 型式の杯 G 蓋、82 は有蓋短頸壺の蓋、83 は T K - 216 型式の蓋杯の身、84 は T K - 209 型式の杯 H 身で、5 世紀から 7 世紀までの幅広い年代のものが混在している。

85 から 87 は青磁で、いずれも龍泉窯系の製品である。器種には外面に細蓮弁紋を施した 85 と 87 の碗、86 の花瓶の口縁部で、時期は 16 世紀のものを下限とする。88 から 92 は白磁で、88 は口禿口縁とされる皿の底部、89 は華南沿海窯系、90 から 92 は中国南方産の小皿で、92 の内面見込みには蛇の目状の釉剥、底部外面には丸に三星紋が黒漆によって描かれている。これらの時期は、89 が 13 世紀前半代、88 は 14 世紀後半代である以外、15 世紀代まで下がる。

93 から 104 は瀬戸美濃窯系の製品で、器種には 93 から 97 の稜皿、98 の大形器種の体部片、99 の平椀、100 と 101 の花瓶底部、102 から 104 の天目茶椀がある。これらのうち、95 の内面には菊花弁紋、102 の外面には禾目状の釉調の変化、104 の体部下半には下地に施された鉄化粧がそれぞれ観察され、時期については、102 の高台脇の切り回しが鋭くなっているため、16 世紀中頃までのものを含んでいる。105 と 106 は外面に圏線、内面見込みにそれぞれ折枝花紋とねじ花紋を描くことから 16 世紀後半に位置づけられる染付白磁の底部で、前者の高台内側には、「萬曆□作」とも記されている。

107 から 110 は肥前焼系陶器で、前三者は皿、残りの 1 つは椀である。皿のうち 107 と 108 の 2 点は溝縁皿で、109 の口縁は波状をなし底部内面には墨書が確認される。これらの時期は、108 の形態や、内面の砂目積による重ね焼き痕が観察されるため、おおむね 17 世紀前葉以降に位置づけられよう。111 は 15 世紀以降と考えられる瓦質の播鉢で、112 から 114 は備前焼で、112 が鉄漿壺ともみられる小壺、113 と 114 は播鉢で、前者が 16 世紀代、後者が 13 世紀後半から 14 世紀代に位置づけられる。これらの遺物の時期は、5 世紀後半から 17 世紀後半までと非常に長い、肥前焼系陶器の最新資料と、国産染付磁器の食器類をまったく含まない点などを考慮し、下限を 17 世紀後葉前後としておきたい。

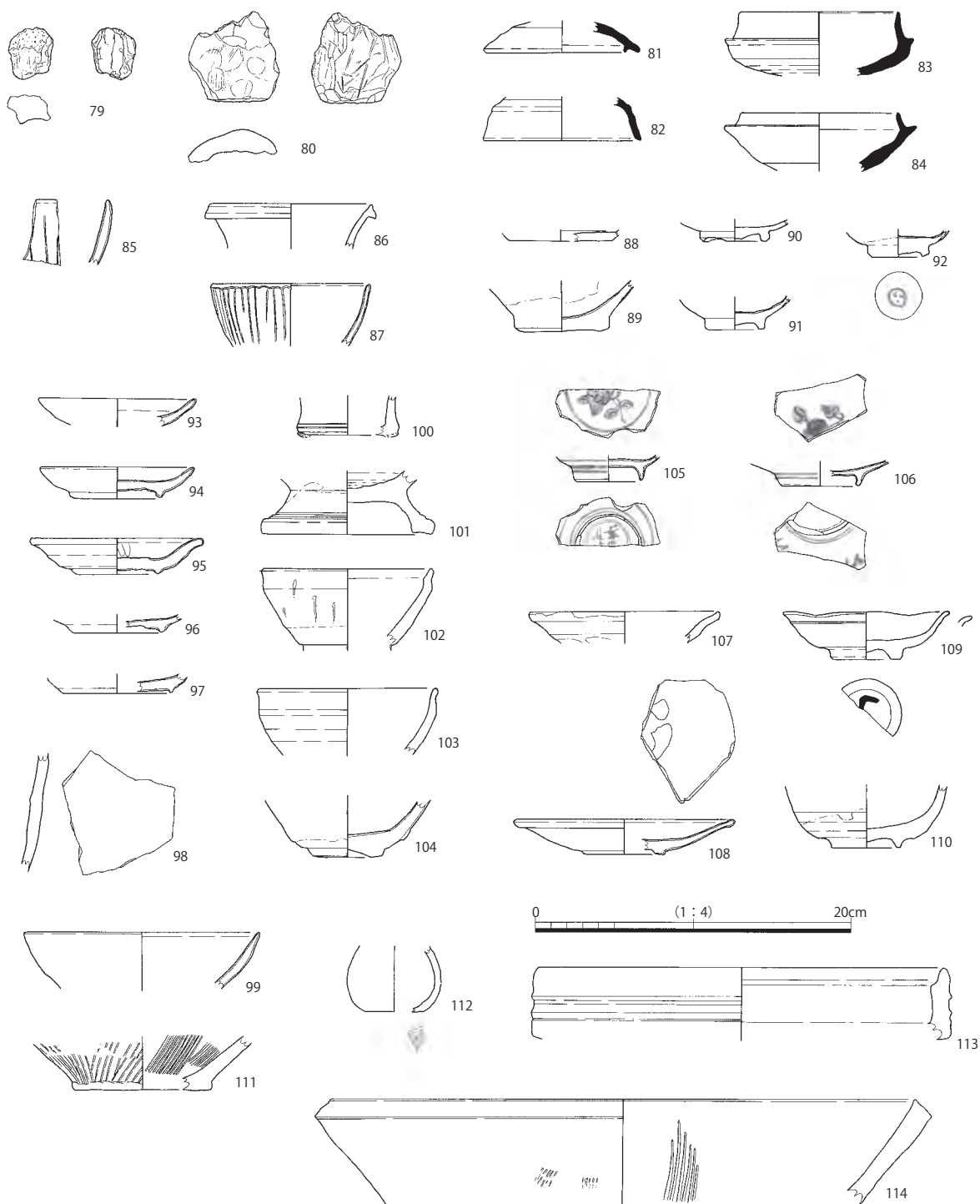


図 29 1 - 2 層 出土遺物実測図

第3項 第1-3面

耕作溝 [338・344・1451溝] (図30・31、図版1)

いずれの溝も長さに差異はあるものの、幅・深さ・断面形態・埋土など個々の特性、および、検出された位置や方向、高低差など総体的な様相についても大同小異であるため、犁による耕起痕とみなされ、その他の大多数の溝もこれらと同様の性格を有すると考えられるが、時期の特定可能な遺物が出土しているためこれらを抽出して報告する。

338溝からは図31-115に図示した中国南方で生産された15世紀前半代の白磁小皿が出土し、344溝と1451溝からは116と117に示す13から14世紀代の瓦器椀が出土した。



図30 第1-3面 遺構全体図

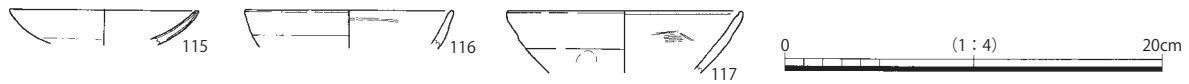


図31 第1-3面 耕作溝 出土遺物実測図

なお、この遺構面は、調査区北東部の一段低くなった地区でのみ確認され、その範囲は上層の第1-2面で検出された1718 b溝の東半部と、そこから南18 mにほぼ相当する。この状況から、耕地整理の際に統廃合されたより小さな単位の水田区画がこの段階に存在していたことが裏付けられた。

1-3層出土遺物 (図32)

耕作溝群を覆う包含層出土遺物のうち、時期判断に有為と思われる資料と、当調査区の来歴を示すものを図32にまとめて図化した。

118は平安時代前期の緑釉陶器片、119は6世紀前半代に位置づけられるMT-15型式の蓋杯の蓋、120は中世の土師器小皿、121から124は瓦器で、器形には121の小皿と、それ以外の椀がある。これらのうち、遺存状況の比較的良好な122は12世紀後半代と考えられる。125は瓦質の火舎で、大和産の15世紀代以降に位置づけられる。126と127は軒瓦で、前者は連珠紋を欠いた意匠を持つ軒丸瓦、後者は中心飾の一部と3回反転させた唐草紋を表現した軒平瓦で、共に16から17世紀代にかけてのものとみなされる。128と129は瀬戸美濃窯系陶器で、128の小皿には灰釉、129の稜皿には天目釉が掛けられ、それらの形態や特徴からみて、16世紀代以降のものと思われる。

130から132は青磁で、130は片刀や櫛刀を用いて片切彫風の花紋や点掻紋により草花紋を描出し

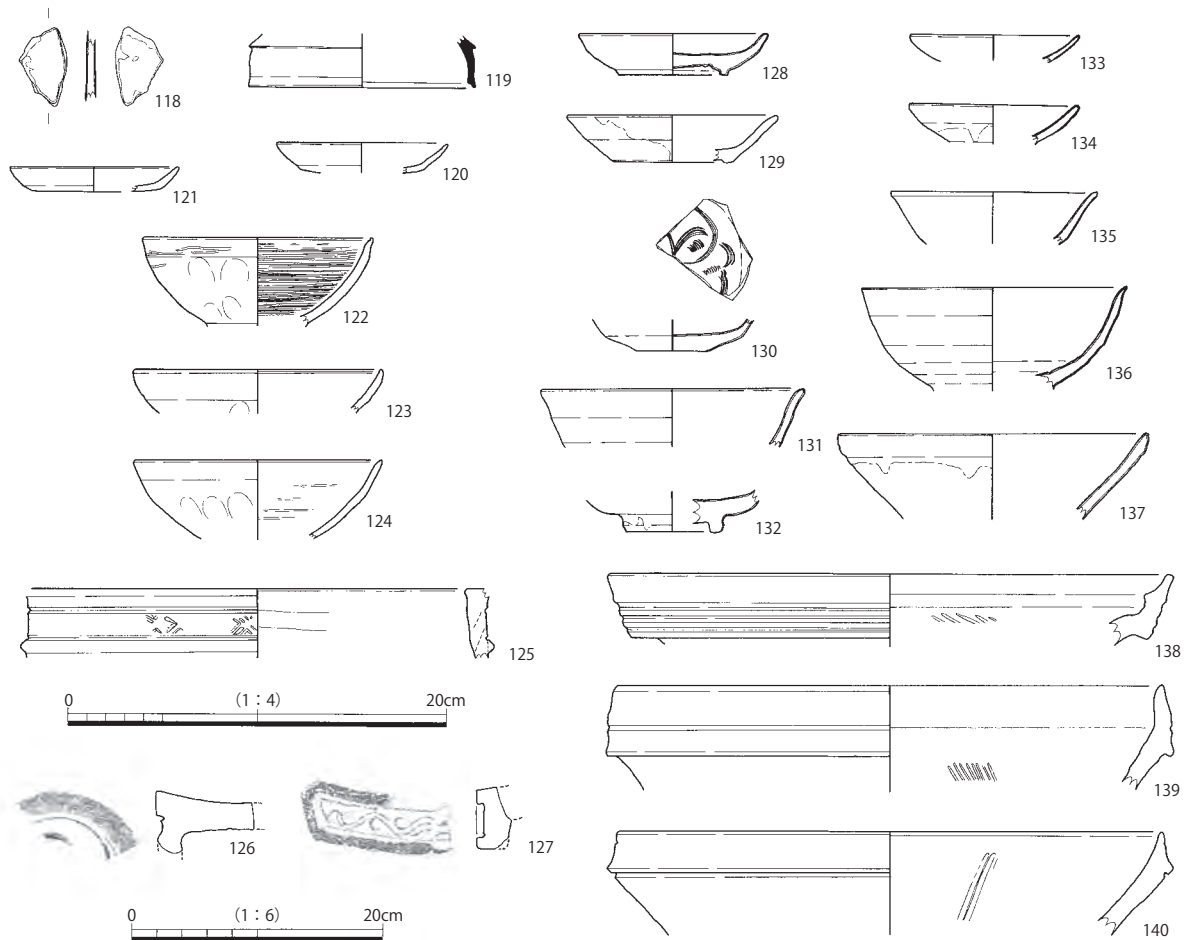


図32 1-3層 出土遺物実測図

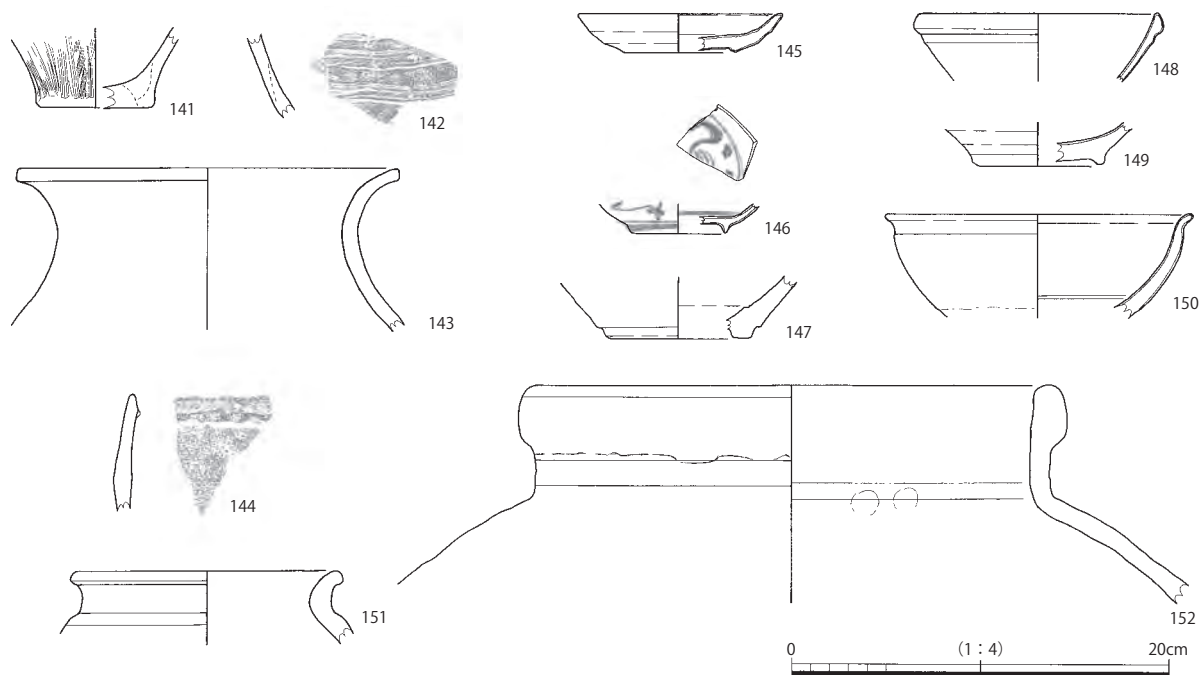


図 33 側溝 出土遺物実測図

たいわゆる猫描手と称される 13 世紀前半代の同安窯系青磁の小皿、131 と 132 は龍泉窯系青磁碗で、前者の底部は非常に肉厚となることから、16 世紀代まで下がる段階の製品である。133 から 137 は白磁で、器種には 133 から 135 の中国南方窯系の小皿と、136 から 138 の碗がみられ、後者のうち 136 は同安窯系、137 は華南沿海窯系の製品で、時期的には 13 世紀前半代から 15 世紀前半代のものを含んでいる。

138 から 140 は備前焼播鉢の口縁部片で、それぞれの形態からみて、138 が 16 世紀中葉頃の製品と考えられ、139 が 15 世紀後半から 16 世紀、そして、140 が 15 世紀前半代に位置づけられる。

以上、第 1 - 3 面を覆う包含層の遺物について述べた。これらは 16 世紀代を中心とするが、127 の軒平瓦のように 17 世紀代と思われるものまでを含んでいるため、この遺物を以て当該遺構面の時期としておきたい。

なお、下層の第 2 - 1 面には若干ではあるが肥前焼系陶器が含まれ、上層の第 1 - 2 面は 17 世紀中葉を中心とするとみられるため、短期間のうちに耕地区画の整理が繰り返されたと考えられる。

側溝出土遺物 (図 33)

第 1 - 1 面から第 3 面までの調査を進めている段階で調査区の周囲に排水用の側溝を掘削し、その際に出土した遺物のうち代表的なものを図 33 に掲載した。これらの遺物は本来の帰属面を明らかにできないが、堆積層の大まかな時代や、下層に埋もれている遺構や遺物の情報を得るには有効であった。

141 から 143 は弥生土器で、141 は甕の底部、142 は壺の体部、143 は壺の口縁部から頸部の破片である。3 点のうち 142 に施された直線紋や、143 の形態からみて弥生時代第 II 様式に位置づけられ、これらの資料により、さらに下層に弥生時代の文化層が存在していることが知れた。144 は突帯紋をめぐらせた縄紋時代晩期の深鉢で、これにより 04 - 1 調査で確認されていた遺物の分布範囲が本調査区におよんでいることを予測することができた。

145 は瀬戸美濃窯系陶器の小皿で 16 世紀代に分類される。146 は青花白磁の皿で、外面には草花唐草紋、内面の見込みには玉取獅子紋の一部と思しき部位が鮮やかな呉須で描かれているため 15 世紀後

半から 16 世紀前半代にかけてのものと考えられる。

147 は赤褐色の素地に褐釉が施された中国南方諸窯系の壺底部片である。148 から 150 は白磁の碗で、これらのうち、148 と 149 は華南沿海窯系、150 は同安窯系の製品である。151 と 152 は備前焼で、前者は種壺の口縁部から体部上半の破片、後者も先と同じ部位が遺存する甕で、これについては 16 世紀中葉頃の製品と考えられる。

第 4 項 第 2 - 1 面

2069 井戸 (図 34・35)

調査区北西側で検出された。その位置は 1718 c 溝の屈曲部頂点と重なるため、この溝によって一部が削剥され、また、07 - 1 調査で平坦面 1 とされた高まり部の北東隅とも重なる。平面は北東側の突出した倒卵形をなし、規模は長径 2.6 m 以上、短径 2.0 m、深さ 0.6 m を測る。断面は南西肩部を 1718 c 溝によって失うが、その方向に偏った皿形を呈する。

埋土は、細砂から細礫を含むシルトで、下位は坑底に沿うような状態の堆積層が存在することから、

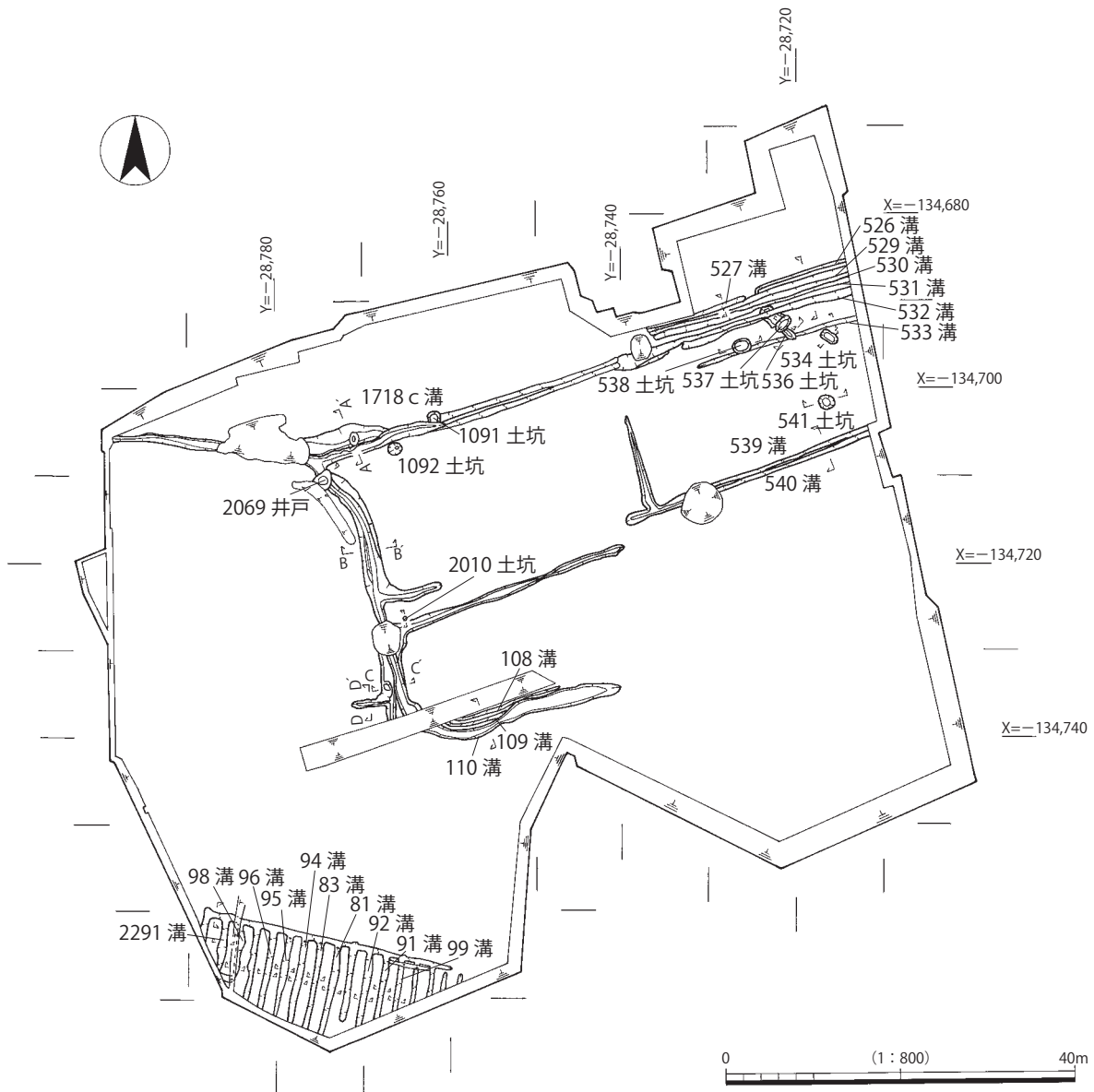


図 34 第 2 - 1 面 遺構全体図

当初より枠は設置されていなかったと判断される。

出土遺物のうち、図化可能なものや時期判別の参考となるような資料は含まれていなかった。よって、時期は不明であるが、重複関係より少なくとも 1718 c 溝より先行することは確実で、また、開鑿された位置や掘削深度からみて、耕作に供されたとみなされるため、17 世紀代の中で捉えておきたい。

534 土坑 (図 34・35)

調査区北東側で検出された。平面は北西から南東に主軸を通す隅丸長方形を呈し、その規模は、短辺 1.2 m、長辺 2.3 m、深さ 0.2 m を測る。断面は、図 35 に示すような北東側に偏った隅の丸い逆台形で、埋土は灰色からオリーブ黒色系を呈し、極粗砂から細礫の混ざったシルトである。

時期は、それを判断するための特徴的な土器が出土しなかったため明らかにできなかった。

536 土坑 (図 34・35、図版 1)

調査区北東側で検出され、上記 534 土坑とは南東側に約 3 m 離れて位置する。北西端を 537 土坑によって失われるが、平面は南東から北西に主軸を持つ長楕円形と考えられ、規模は、短径 0.9 m、長径 1.4 m、深さ 0.2 m を測る。断面は、南西側が深くなった皿形を呈し、埋土は、粗砂から中砂、シルトからなる灰色からオリーブ黒色系の土層で、一部には断面図の 2 のように中砂とシルトが互層をなす部分も観察された。

埋土内からは図 35 - 154 のようなての字口縁風の土師器の皿などが出土した。この資料は法量や器壁の厚さなどからみて 11 世紀中頃のものと考えられるが、周辺の遺構や、包含層からはこれよりも新しい遺物が多数出土しているため、必ずしもこれが遺構の時期を反映しているとは限らない。

537 土坑 (図 34・35、図版 1)

前述した 536 土坑の北東部に接続した状態で検出され、重複関係より本土坑が新しいと判断される。平面は北東から南西に主軸を通す長楕円形を呈し、この方向は上記の 534 土坑や 536 土坑とほぼ直交する。規模は、短軸 1.2 m、長軸 2.2 m、深さ 0.2 m となる。断面は皿形を呈し、埋土は灰色を基調としたシルトから粘質土で、一部には塊状となった土層が含まれている部分も観察された。

時期については、遺物がほとんど出土していないため、ここから判断することはできなかった。

538 土坑 (図 34・35、図版 1)

先に述べた 537 土坑から南西側 4.3 m の位置で検出された。平面は北東から南西にやや長い楕円形をなし、規模は短径 1.7 m、長径 2.2 m を測る。断面は南西側に段を設けたような形状をなし、深さは最深部で 0.4 m を測る。埋土には団粒状となった土塊が含まれていることや、断面図のように幾度か改削されている様相が看取されるため、比較的短期間のうちに一連の所作が繰り返されたと理解される。

出土遺物には図 35 - 155 に示す瓦器椀の高台部片が含まれていた。その形態からみて 13 世紀後半段階以降の製品であるとみられるため、遺構の時期もこの段階を上限とすると考えられる。

541 土坑 (図 34・35)

既述した 536 土坑の南東側 7.3 m の場所で検出された。平面は北西から南東方向にやや長い不正円形を呈し、規模は短径 1.6 m、長径 1.7 m、深さ 0.35 m 前後を測る。断面は図 35 のように南西側が段状に、北東側が壁面を抉り込むように掘削され、坑底は平らとなる。

埋土は、最下層にラミナと見紛うような級化層理が観察される 7 の層序がみられ、それより上位の各層順には団粒状の土塊が点在していることから、掘削後に一旦水没したのち、短時間のうちに埋め戻されたと考えられる。

出土遺物には図 35 - 153 の土師器の小皿がある。小片となっていることや、これ単独であることから不確定要素を多分に有するが、おおむね中世後半段階のものとみなされる。

1091 土坑 (図 34・35)

調査区中央から北東の位置で検出された。1718 c 溝や、耕作溝群により欠失する部分が多く、全体の形は知れない。現状での規模は、東西 1.5 m 以上、南北 1.4 m 以上を測り、断面は、北側が深い偏平な皿形で、深さは 0.05 から 0.1 m を測る。埋土は、粗砂の混じった灰色系シルトの単層で、遺物はみられなかった。そのためここから時期を推し量ることはできず、さらに、本土坑より後出する重複関係にある 1718 c 溝からも明確な時期を知ることが可能な資料が得られていないため不明である。

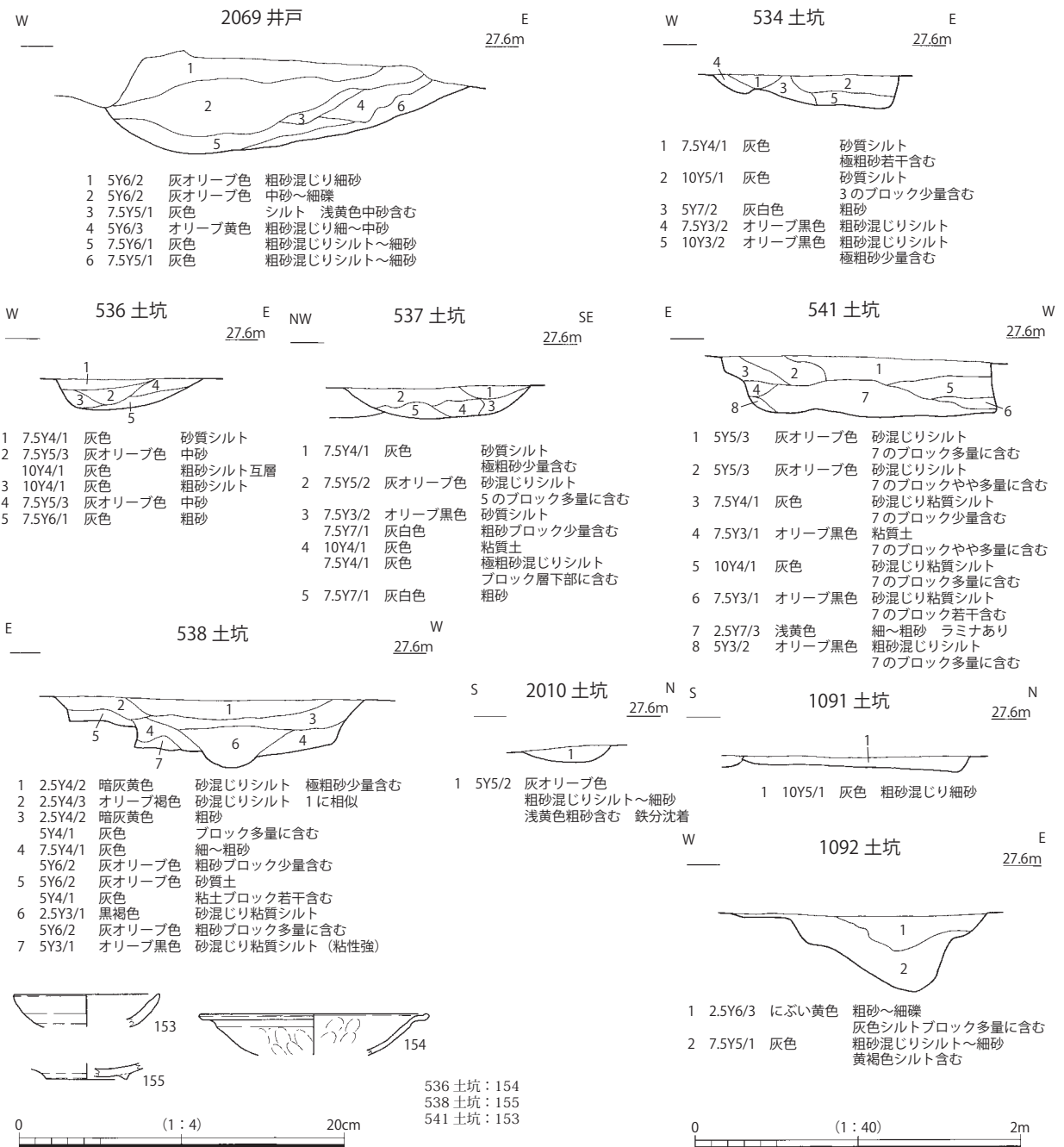


図 35 第 2 - 1 面 2069 井戸、534・536・537・538・541・1091・1092・2010 土坑 断面、及び 536・541 土坑 出土遺物実測図

1092 土坑 (図 34・35、図版 1)

上記の 1091 土坑から南西に 4.0 m の位置で検出された。1718 c 溝により北西部の一部を失うが、北西から南東方向にやや長い不整形円形を呈する。規模は長軸 1.6 m 以上、短軸 1.6 m、深さ 0.5 m を測り、断面は北東側に偏った二段掘の播鉢状だが、南東側は極端に浅くなる。埋土は 2 層に分けられ、上層はにぶい黄色を呈した粗砂から細礫、下層は灰色を呈した粗砂からシルトで、双方とも団粒状の異質な土層を混じえ、特に上層にはそれが大量に含まれるため、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

時期判別の行える土器などは出土しておらず、また、前後関係から本土坑に後出することが判明している 1718 c 溝は先述したような状況であったため、本土坑の時期も確定できなかった。

2010 土坑 (図 34・35)

調査区中央からわずかに南西方向の位置で検出された。周囲を耕作溝群によって削剥され、改変を受けているが、現状からみて平面は不整形円形をなすものと考えられる。規模は、長径 0.5 m 以上、短径 0.4 m 以上、深さ 0.1 m を測り、断面は、やや北方向に膨らんだ皿形を呈する。埋土は、粗砂を含んだ灰オリーブ細砂からシルトの単一層で、出土遺物はみられなかった。

時期については、その根拠となる資料がほとんど得られていないため不明と言わざるを得ない。

81・83・91・92・94・95・96・98・99・2291 溝 (図 34・36・38)

調査区北部南西部で検出された。17 条の溝が北東から南西方向に並列し、それらのおのおの北東端を、北西から南東にのびる 1 条の溝がほぼ直角をなして接続することにより、総体としては櫛歯状の平面形をなした遺構を形成しているため、これらを一括して報告する。規模については、北東から南西方向に並列する 17 条の溝のうち、現状での最長例は 81 溝の 10 m だが、南西部が調査区外となるため全体形は不明で、北西から南東にのびる 1 条の溝は 2291 溝の位置で北西端が確認されたため、全長 29.0 m と判明する。これらの幅については 0.4 から 0.5 m で、深さは 0.3 m 前後を測り、断面は、図 36 に一括して掲載するような偏平な U 字形から隅の丸い逆台形を呈するものまでさまざまである。

埋土は中砂から粗砂を含んだシルトからなり、91・96・2291 溝のように、基盤層に沿うようにした堆積が観察されるため、一定期間開口していたような状況が観察される箇所もみられる。また、これらのうち、98 溝は 2291 溝と一連となって短辺 1.5 m、長辺 6.0 m の長方形区画をなすこと、81 溝は 8.5 m の位置で途切れていることで他の溝と様相が異なる。溝底の高低差は北東から南西に向かって低くなっていることから、最終的には調査区外となるこの方向に水を導いていたものと理解される。なお、この溝群の性格については、全体形や埋土の堆積状況からみて畑作に伴う畝間溝とみなすことが妥当と考えられ、これらによって区画された幅 1.2 から 1.5 m の間で作物を栽培していたと想定される。

時期に関しては、95 溝から出土した図 38 - 161 に示した黒色土器 A 類が唯一図化可能な資料であり、これ以外はそれよりも時期のさかのぼる須恵器や土師器で占められていた。よって、当遺構の時期は 10 世紀前半頃を上限とするとみなされるが、上層を覆う包含層が 17 世紀前葉までの遺物を含んでいることからこの 1 点のみを以て時期を判断するには不確定要素を残す。

なお、この遺構に関しては、07 - 1 調査で平坦面 1 とされた中の一段窪んだ部分に形成された遺構群であるため、これを挟んで北東側において検出された面との対応関係については、平坦面 1 の高まりによって層序が断絶していることにより連続性をみいだせない。さらに、層中に含まれる遺物も僅少かつ、細片化していることから、遺物からの比較検討材料にも乏しい。このため、あくまでも上位に堆積する包含層を除去した段階で確認される遺構として認識するものであり、厳密な意味での同時期性につ

いては不確定要素を多分に有しているものであることをあらかじめ断っておきたい。

108・109・110 溝 (図 34・37・38)

調査区中央からやや南西に向かった位置で検出された。北東から南西方向にのびる 3 条の溝が、中ほどより相似形をなしながらほぼ直角に北西へと方向を変じていることから、共時性はともかくとし、これらが同じ目的で開削されたとみられるためまとめて報告する。

これらの規模は、外側の 110 溝が幅 0.8 m、深さ 0.2 m 弱、中間の 109 溝が幅 0.4 m、深さ 0.1 m 強、内側の 108 溝が、幅 0.3 m、深さ 0.1 m 弱と、内側になるにしたがって規模を減じると同時に溝底が高くなる。しかし、総体としては屈曲部を経て北東から北西方向に向かって下がっていく点では共通し、ここにも互いの関連性を窺うことができる。

断面は、108 溝が隅のなだらかとなった逆台形、他の 2 条が皿形を呈する。埋土は、互いに近似する細砂から中砂混じりの黄灰色系シルトで、これらの諸様相からみて、本溝群の性格は耕地を区画するために設けられたと考えられる。なお、それぞれの溝からの出土遺物は僅少であったが、その中 2 点を抽出し、図 38 - 163 と 164 に示した。これらのうち、前者は須恵質焼成された丸瓦の破片で、表面に布目圧痕、裏面に縄目タタキを磨り消した調整法が観察されることから、奈良時代のものと考えられる。後者は、古墳時代に属する蓋杯の蓋で、形態や法量からみて MT-15 型式に分類される。

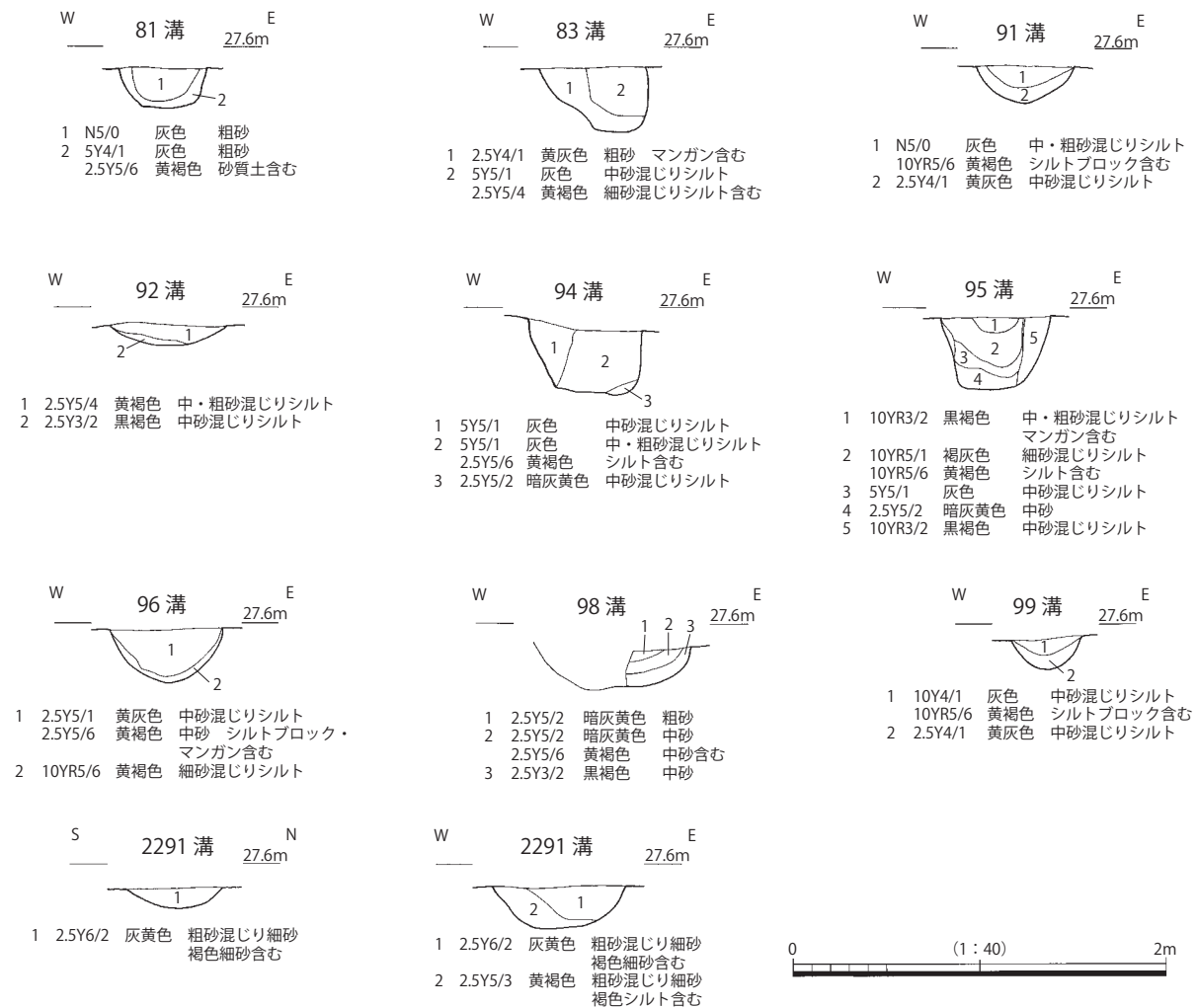


図 36 第 2 - 1 面 81・83・91・92・94・95・96・98・99・2291 溝 断面図

しかし、この溝を覆う包含層や、周辺で近似する埋土となる遺構の時期を勘案するならば、17世紀代まで下がることは確実であるため、これら2点のみの時期を以て判断することには危険性を伴う。

526・527・529・530・531・532 溝 (図 34・37、図版 1)

調査区北東部において、おのおの6条が北東から南西方向に一部重なり合いながら平行して群在することからまとめて報告する。ただし、これらのうち526溝のみは、途中、南東方向に向かって鉤状に曲がることで他と様相が異なる。

これらの規模は、長さ約11.0から28.0m、幅0.4から1.2m、深さ0.1から0.2m弱を測り、溝底の傾斜は北東から南西に向かうにつれて低くなる。断面は皿形で、埋土は、一部に中砂から粗砂を含んだ粘質土からシルトで、2層に細分されるものが多い。これらのうち、529溝から531溝の3条は、規模の差こそあるものの、ほぼ同じ位置を踏襲しながら開削されている。

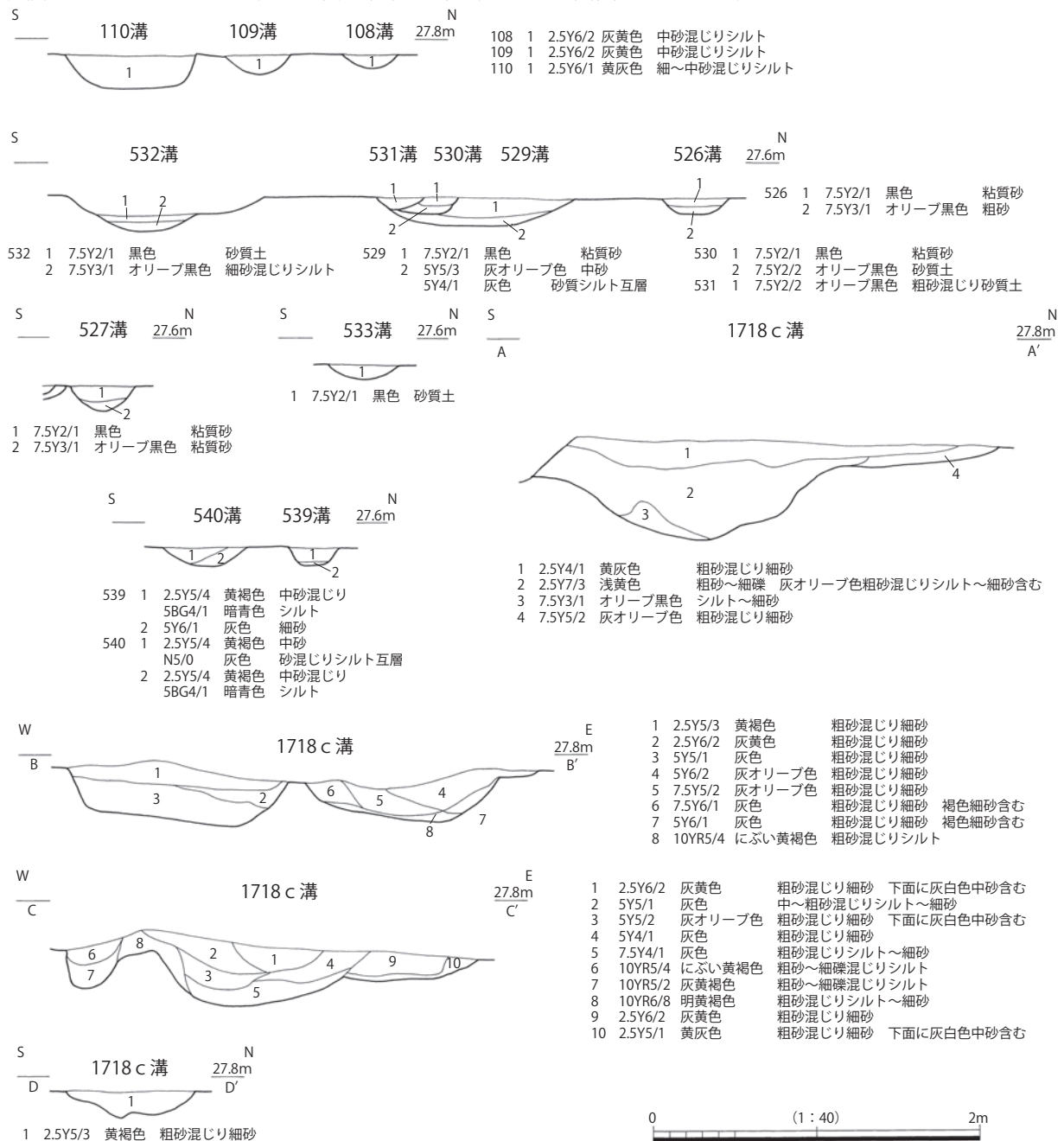


図 37 第 2 - 1 面 108 ~ 110・526・527・529 ~ 533・539・540・1718c 溝 断面図

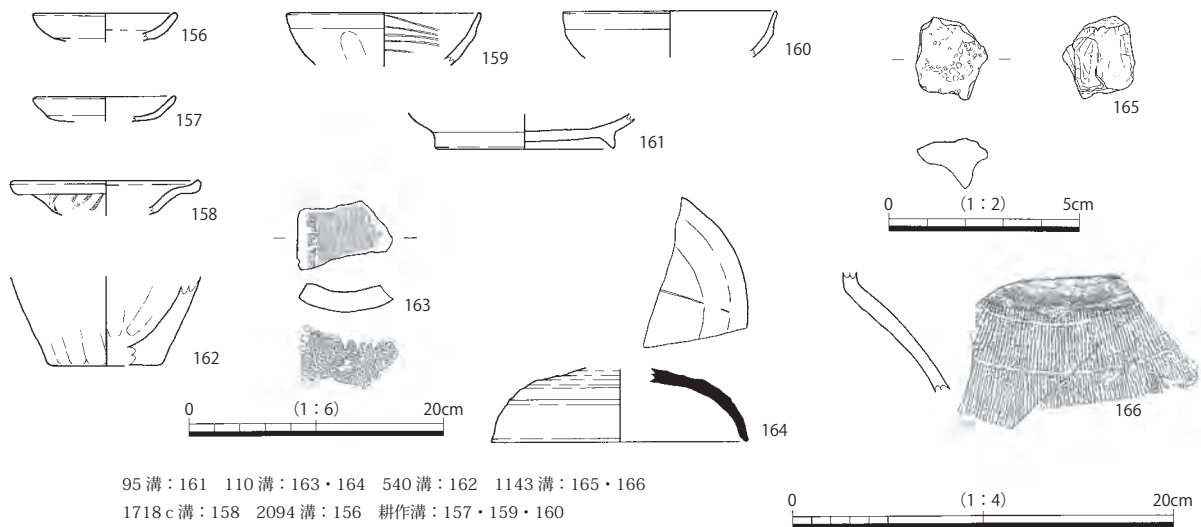


図 38 第 2 - 1 面 95・110・540・1143・1718 c 溝、耕作溝 出土遺物実測図

これらの時期に関しては、時期の判る土器など特徴的な資料が出土しなかったため不明だが、上部を覆う包含層や、同じ方向を持つ溝から出土した遺物から判断して 17 世紀前葉頃と考えられる。

なお、これらの溝の性格は、ほぼ同位置に繰り返し掘削されていることや、第 1 - 3 面で検出された 339 溝の北に密接して掘削されているため、耕地を区画するために開削されたと考えておきたい。

533 溝 (図 34・37、図版 1)

調査区北東部から検出された。532 溝から 2.4 m 南東に向かった位置でこれらに平行して開削され、途中、536 土坑と 538 土坑によって一部を失う。検出長は 19.3 m 以上だが、北東端が調査区外となるため全長は確認できない。幅は 0.4 m で、溝底は北東から南西に向かって緩やかに下降する。断面は浅い皿形を呈し、埋土は黒色砂質土の単層で、遺物は含まれていなかった。

このため時期は不明だが、13 世紀後半の遺物が出土した 538 土坑に先行しているとしても、埋土の特徴や下層に堆積する文化層との関連から、これと大きく時期を隔てているとは考え難く、むしろ、その方向や断面形などの諸相が既述の諸溝と共通することに着目してこれらと近似した時期に開削された耕作関連の溝と解釈しておきたい。

539・540 溝 (図 34・37・38)

調査区東半の中央からやや北の位置で検出された。既述した 526 溝をはじめとする溝群とは約 16 m の間隔をおいてこれらと平行しながら北東から南西にのびる。2 条が並列されて開削されていることや、南西端で合流していることから双方をまとめて報告する。

規模は、両者とも長さ 24.5 m 以上となるが、北東部は調査区外へとつづくため不明で、幅は 0.3 から 0.6 m、深さ 0.1 m 前後を測り、溝底は北東から南西にいくに従い下降する。断面は 539 溝が隅の丸い逆台形、340 溝が皿形を呈し、埋土は双方とも黄褐色から暗青色を基調とした細砂から中砂混じりシルトで、後者の下位には砂とシルトが互層をなして堆積する部分も観察されたため、いくばくかの流水がみられる環境であったことを窺わせる。

双方ともに若干の遺物が出土し、このうち、後者から出土した甕の底部を図 38 - 162 に図示した。その形態からみて、弥生時代第 II 様式のものと考えられるが、表面が摩滅していることや、周辺の同一面において当該期の遺構は確認されていないこと、そして、この時期の遺物を包含する流路や文化層はかなり下層に位置していることから、下層の遺物が巻き上げられたものと考えられる。

1718 c 溝 (図 34・37・38)

調査区西半中央から北東部にかけての位置で検出された。北西端は、上層に位置する 1718 b 溝の下に位置することや、そこに各所から溝群が集中して流れ込んでいること、そして、07 - 1 調査で平坦面 1 とされた高まり部の北東縁辺の頂部に位置するという諸条件が重なり合うため落ち込み状となり、水の澱む環境であったことを窺わせる。平面は先述した平坦面 1 の縁辺部に沿いながら南から北西方向に湾曲し、溝底もこの方向にしたがって下降する。なお、南西隅では西側に分岐させて支流を設けている。溝の幅は 0.8 から 3.4 m、深さは南側の浅い部分で 0.15 m、北西側の深い部分で 0.6 m に達する。断面は皿形から隅の丸い逆台形を呈し、埋土は黄灰色から灰色を基調とする細礫から粗砂混じりの細砂からシルトで、図 37 の C 地点断面のように改削が繰り返された状況が看取される部分も存在する。

埋土内出土遺物のうち、図化できたものに図 38 - 158 に示す土師器の小皿がある。口縁部の形態などから考えて、11 世紀後半頃のものと考えられる。

耕作溝 [1143・2094 溝] (図 38)

2 条より図化可能な遺物が出土し、これらを図 38 に示す。これらのうち、165 と 166 は、1143 溝からで、165 は所属時期不明鞆の送風管の羽口、166 は外面に平行タタキと螺旋状沈線をめぐるせた陶質の韓式系土器で、平行タタキの間には部分的に横線が観察され、鳥足紋風となっている部分も存在する。この破片に関しては、第 1 - 1 面で検出された 1718 a 溝より出土した破片と接合合致した。2094 溝からは中世頃とも考えられる 156 の土師器の小皿が出土した。

2 - 1 層出土遺物 (図 39・40)

第 2 - 1 面を覆う包含層から出土した遺物のうち特徴的なもの 50 余点を抽出し、図 39 と 40 に図化した。以下、番号順に述べる。167 と 168 の 2 点は詳細な時期が不明な鞆の送風管の羽口で、後者の先端には高温により還元状態となり、灰色の変色部と鉍滓が付着した部分が観察される。

169 から 173 および、177・178・180 は須恵器で、これらのうち、169 は器台脚部上半の破片、170 は有蓋高杯の蓋、171 は無蓋高杯、172 は有蓋壺、173 は甕の口縁部、177 と 178 は杯 B の破片、180 は双耳壺である。これらの時期は 169 と 172 が T K - 216 型式段階かそれ以前、170、171 が T K - 23 型式、173・177・178 が 8 世紀後半から 9 世紀にかけて、180 が 9 世紀後半の所産にかかるものと考えられる。

174 と 175 は緑釉陶器で、小片となるため器種の特定は不可能だが、9 世紀後半から 10 世紀前半にかけての洛西から篠窯の製品とみられる。176 は黒色土器 A 類の椀で、法量や器壁の厚さから類推して 10 世紀前半代のものと考えられる。179 は灰釉陶器椀の破片で、高台部が非常に小さく成形される特徴を持つことから、9 世紀前半代までさかのぼる可能性がある。181 から 184 は土師器の小皿で、これらのうち、184 は、器形が扁平となり、ての字風の口縁を作出していることから 10 世紀代と考えられるが、その他についての時期は判別できない。185 から 190 の 6 点は瓦器の椀で、法量や暗文の様相から 189 と 190 が 12 世紀後半代、それら以外が 13 世紀前半代の製品とみなされる。

191 から 193 は輸入陶磁器の白磁で、体部に屈曲部を持つ器形から 191 が 14 世紀後半、それ以外の 2 点は、高台部の形状から 13 世紀後半代の華南沿海窯系白磁碗と考えられる。194 と 195 は青白磁で、前者は影青技法を用いて紋様を際立たせた盒子の蓋、195 は碗の高台部破片で、共に 12 世紀後半代以降に属する。196 から 202 は青磁で、いずれも龍泉窯系の製品である。これらのうち、196 から 200 は碗で、198 と 199 の外面には鎬蓮弁紋が施され、さらに、後者の内面見込みには図柄は不明

ながら陰刻印により紋様が押捺されていることから13世紀前半代に属するものとみなされる。その他については、196の高台部の器壁が分厚くなっていること、197は厚い釉に阻まれて図化はかなわないうが外面にわずかながら細蓮弁紋が観察されること、200は無紋化していることから16世紀代にまで下がると思われる。201は全面に釉が施され、3箇所以上に花卉状の透穴を穿つことから香炉や有蓋壺などの蓋と想定される破片、202は香炉の口縁部片で、これらについては14世紀中頃以降のものと考えられる。204と205は軒平瓦で、204は唐草紋を圏線で区画して、その外周に連珠紋をめぐらしていることから16世紀中頃に、205は中心飾に菊花風の紋様を配し、そこから唐草紋を反転させる意匠を用いていることから17世紀初頭頃の製品とみなされる。

206から212は瀬戸美濃窯系の製品で、206から208は灰釉、209から212には天目釉が施される。器形は、206と209が小皿と稜皿、207が花瓶、208が椀で、これの外面には細蓮弁紋風の線刻が施されている。210から213は天目茶椀で、213の外面には天目釉を掛ける前に鉄化粧を施す。これらの時期は16世紀後半から17世紀にかかる製品と考えられる。213は肥前焼系陶器の椀で、その形態から17世紀前葉までの製品とみなされ、214は備前焼の種壺で16から17世紀代の所産と思慮される。

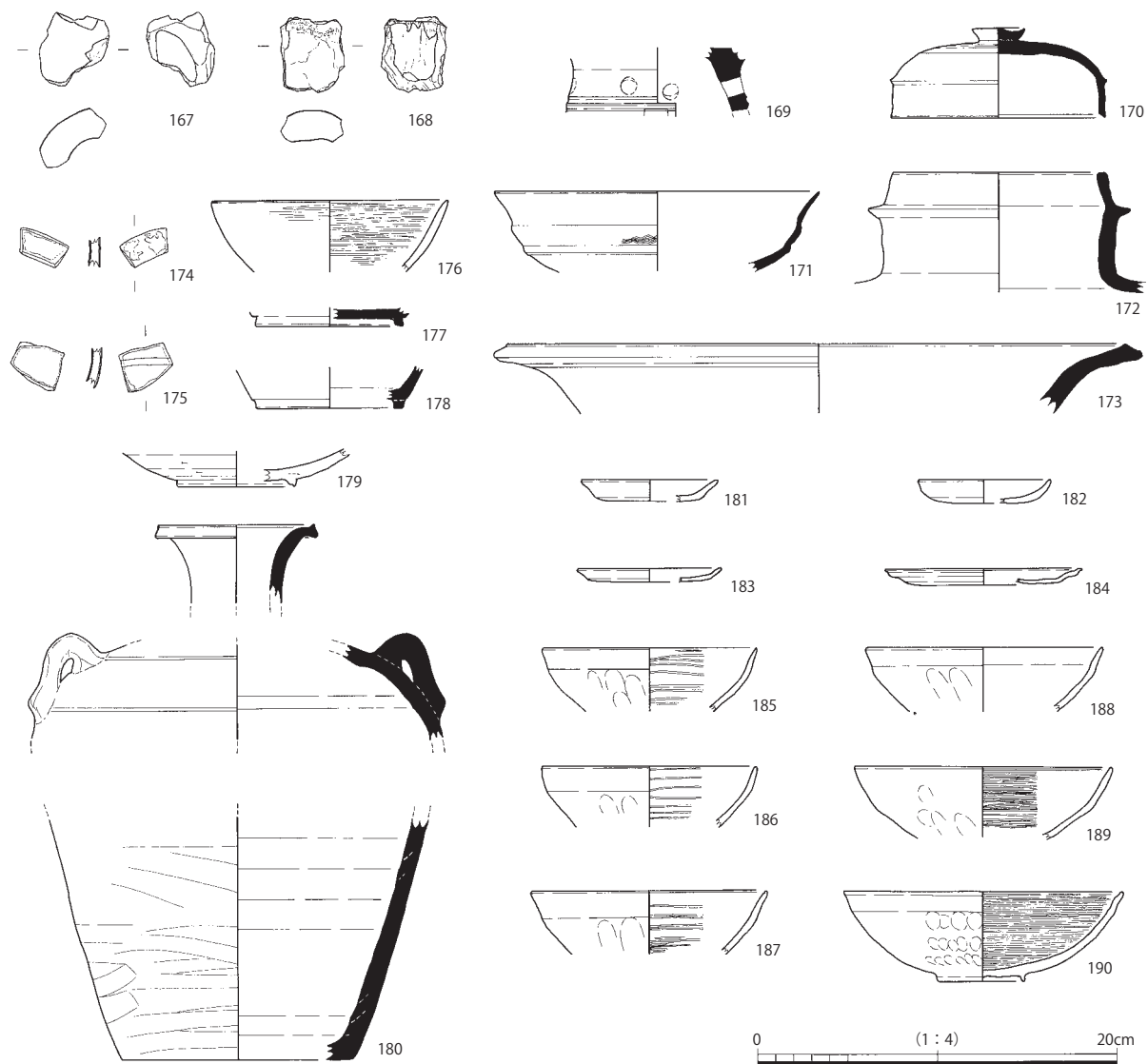


図39 2-1層 出土遺物実測図(1)

215は常滑焼の甕で、口縁部の形態から12世紀後半代の製品とみられ、216から218は瓦質土器で、これらのうち、216は5弁の印花紋を押捺する小形の火舎、217は鍋の口縁部、218は播鉢の口縁部で、時期については126が15世紀代、217が13世紀後半代、218が15世紀後半以降のものと考えられる。

以上、2-1層出土遺物について述べた。長期間にわたる多種多様な遺物が出土しているため、調査地周辺の歴史的環境を反映させていると評価されるが、これらの中でも、最も新しい段階の資料は17世紀初頭から前葉頃にかけての瓦や瀬戸美濃窯系製品や肥前焼系陶器であることから、この時期を以て当該遺構面の時期と位置づけておきたい。

第5項 第2-2面

1464土坑(図41・42)

調査区北東隅において検出された。南半部は1463溝と重なり合っており、その重複関係を検討した結果、この土坑の方が新しいと判断した。平面は、図41に示すような北東から南西に長軸を持つ不整な楕円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.7m弱、深さ0.3m強を測る。

断面は、坑底の中央部分がやや窪んだ隅丸の長方形を呈し、埋土は、黄色から灰色を帯びた粗砂や細礫を含むシルトで、部分的に図42の断面図のような葉理状の堆積や団粒状をなしたシルト塊を含むた

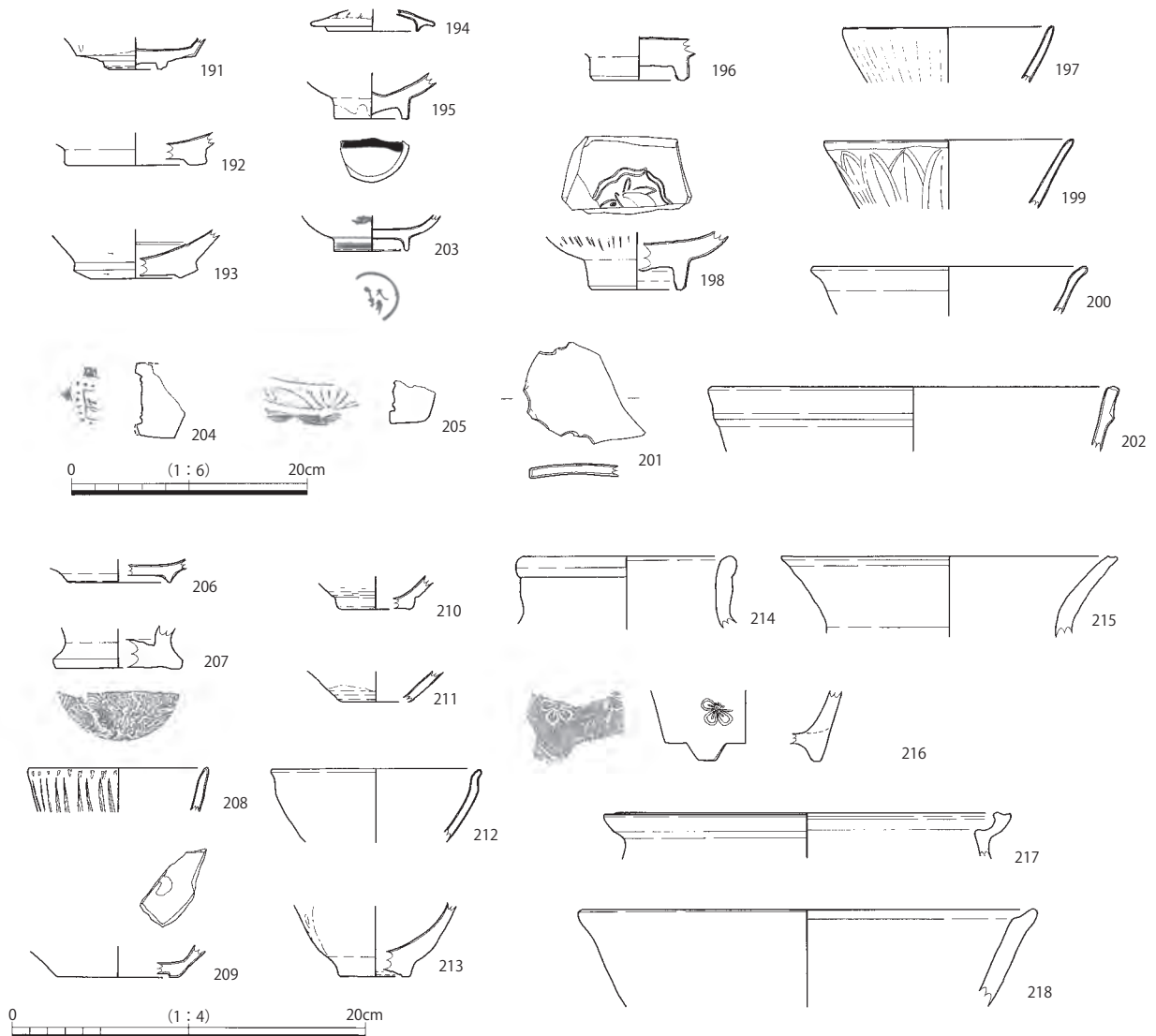


図40 2-1層 出土遺物実測図(2)

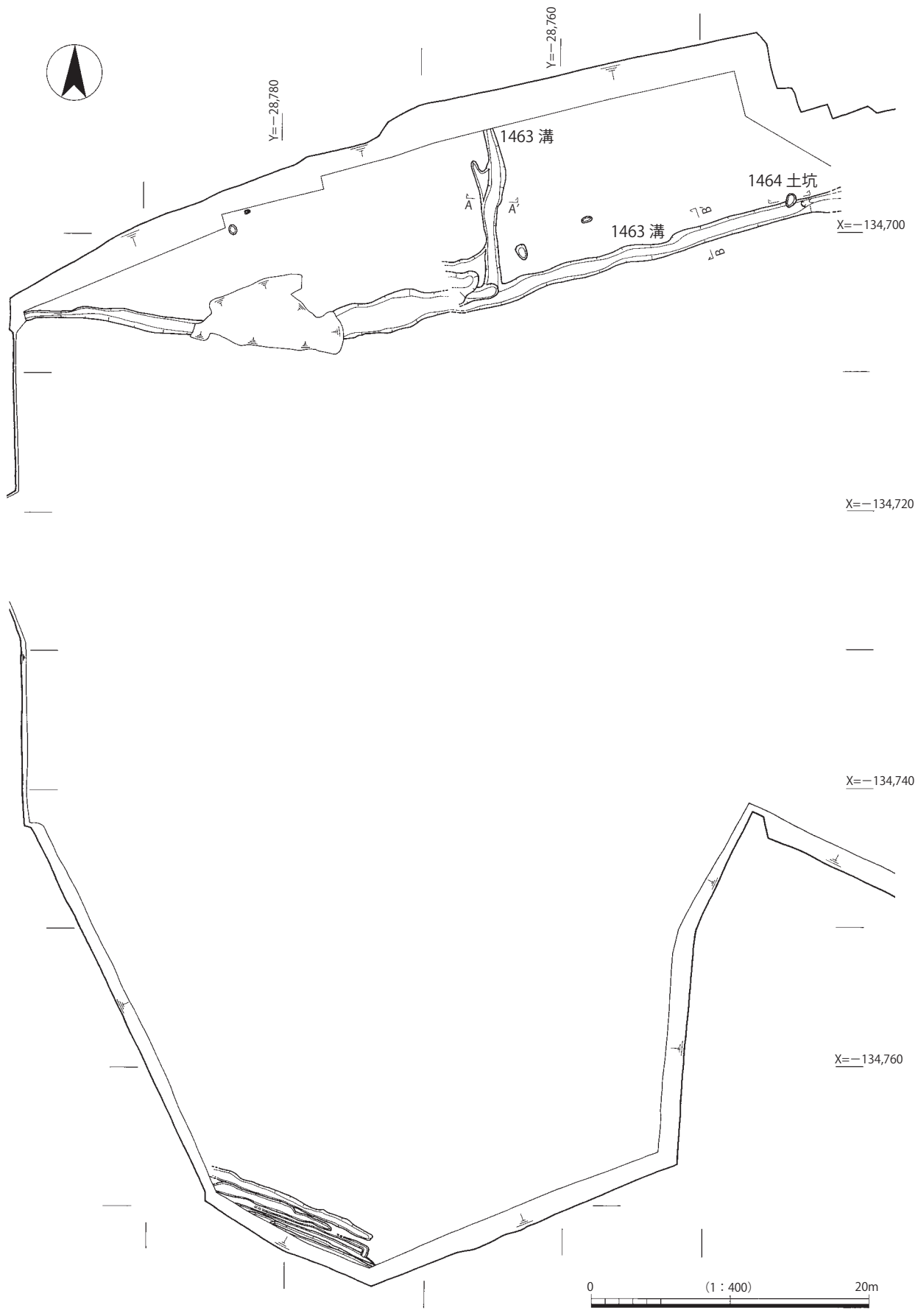


图 41 第 2-2 面 遺構全体図

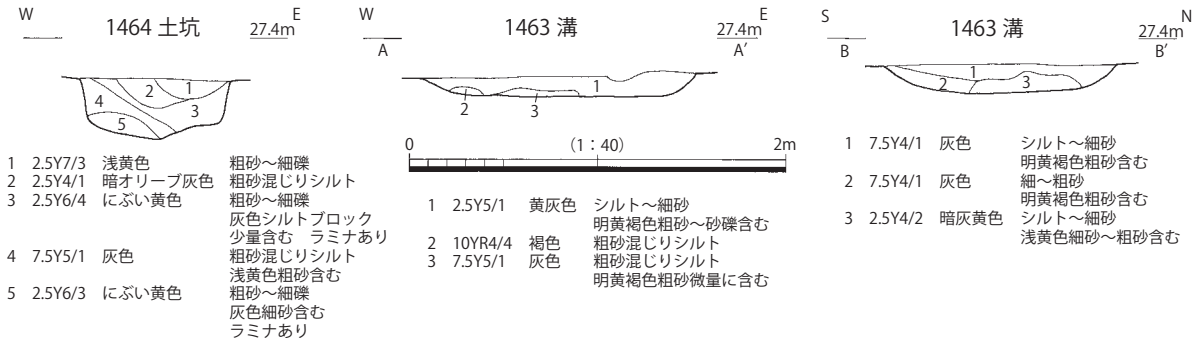


図 42 第 2 - 2 面 1464 土坑、1463・1653・1654 溝 断面図

め、流水のある環境のもとで埋没した可能性が考えられる。

埋土中に時期の特定できる遺物が含まれていなかったため、それを明らかにすることはできなかった。

1463 溝 (図 41・42)

調査区北端部を北東から南西に向かって流下し、途中、攪乱を挟んでその方向を西に転換させ、ほぼ中央に北から南へ流下する分流路が設けられる。検出された長さは 30 m を測るが、北東端と西端は調査区外となるため全体形は確認できていない。幅は、最小で 0.5 m、最大で 1.4 m で、深さは 0.1 から 0.2 m を測る。断面は、偏平で隅の丸い逆台形から皿形をなし、溝底は平坦となる。埋土は、灰色を基調とし、粗砂や細礫が混じったシルトから細砂である。

時期については、それを判断する資料が得られなかったため不明だが、上層に堆積する包含層出土遺物から推し量るならば、17 世紀前葉以前に位置づけることが可能となる。

調査区南西端耕作溝群 (図 41)

上記の溝群から 07 - 1 調査で平坦面 1 とされた高まりを隔てた位置において、地形の傾斜に平行する形で折り重なるようにして耕作溝群を検出した。その位置は、上層の第 2 - 1 面で櫛歯状の形状をなした 81 溝ほかから構成される畝間溝群が検出された場所の南半部に相当し、耕作地の平準化に伴って嵩上げされる前の旧態を確認したと考えられる。

時期比定が行える出土遺物がなかったため、それを特定することは不可能だが、上層を覆う包含層から後述するような 17 世紀前葉までの遺物が出土したことより、少なくともその段階以前とはなる。

2 - 2 層出土遺物 (図 43)

第 2 - 2 面を覆う包含層より出土遺物のうち、図化可能なものと、時期の判断材料となる土器や瓦類 11 点を図 43 に掲載した。これらのうち、219 と 220 の 2 点は、巴紋を意匠とする軒丸瓦で、小

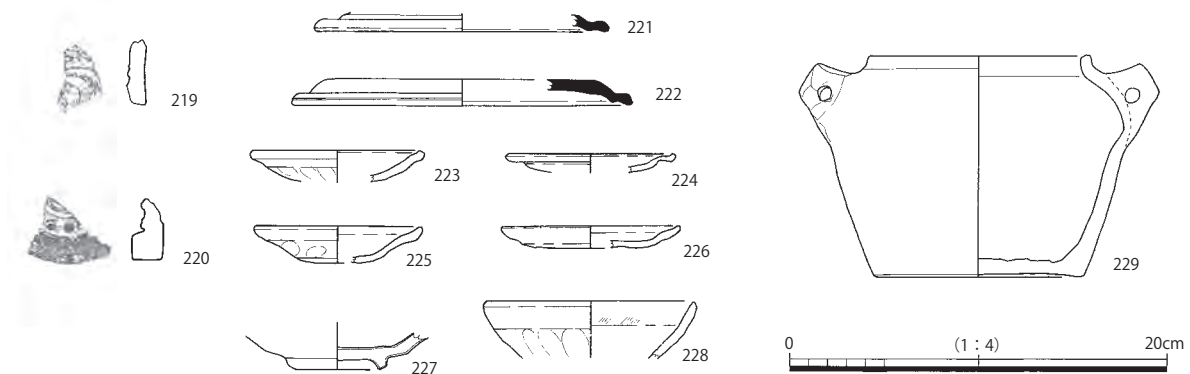


図 43 2 - 2 層 出土遺物実測図

片のため詳細を窺えないが、蓮珠紋の大きさと間隔からみて少なくとも古い段階には位置づけられない。221 と 222 は須恵器杯 B の蓋で、つまみが欠失しているため不確定要素を残すが、偏平化した口縁部の形態からみて 9 世紀前半代までの製品となろう。223 から 226 の 4 点は土師器で、いずれも小皿である。時期は、224 のように口縁部がての字状を呈するため 10 世紀後半にまでさかのぼるものや、226 のように 11 世紀代と思われる資料も含まれるが、225 については 16 世紀前半頃まで下がる形態的特徴を有する。

227 は輸入陶磁器の龍泉窯系青磁で、体部下半に屈曲部を持つため杯の破片であると類推され、その形態からみて、15 世紀代に属すると考えられる。228 は、瓦器の椀で遺存状況が悪いため詳細は不明ながら、おおむね 13 世紀代の製品とみなされる。229 は、瓦質土器の双耳短頸壺で、散在して出土した破片が接合し、ほぼ全形が窺えるまでに復原された。これらの遺物の時期については、15 世紀代から 16 世紀代の中で捉えられるものとみなされよう。

以上に図示した遺物のうち、最も新しい段階の資料は 16 世紀前半代に位置づけられる 225 の土師器の皿であることから、この包含層に対する時期の下限を当該段階に設定することが可能となる。

第 6 項 第 2 - 3 面

1563 土坑 (図 44・45)

調査区北縁のほぼ中央で検出された。北西から南東に長軸を通し、その方向は図 44 のように附近の耕作溝群と同軸となる。規模は長径 2.0 m、短径 1.2 m、深さ 0.1 m 強を測る。断面は、偏平で隅の丸

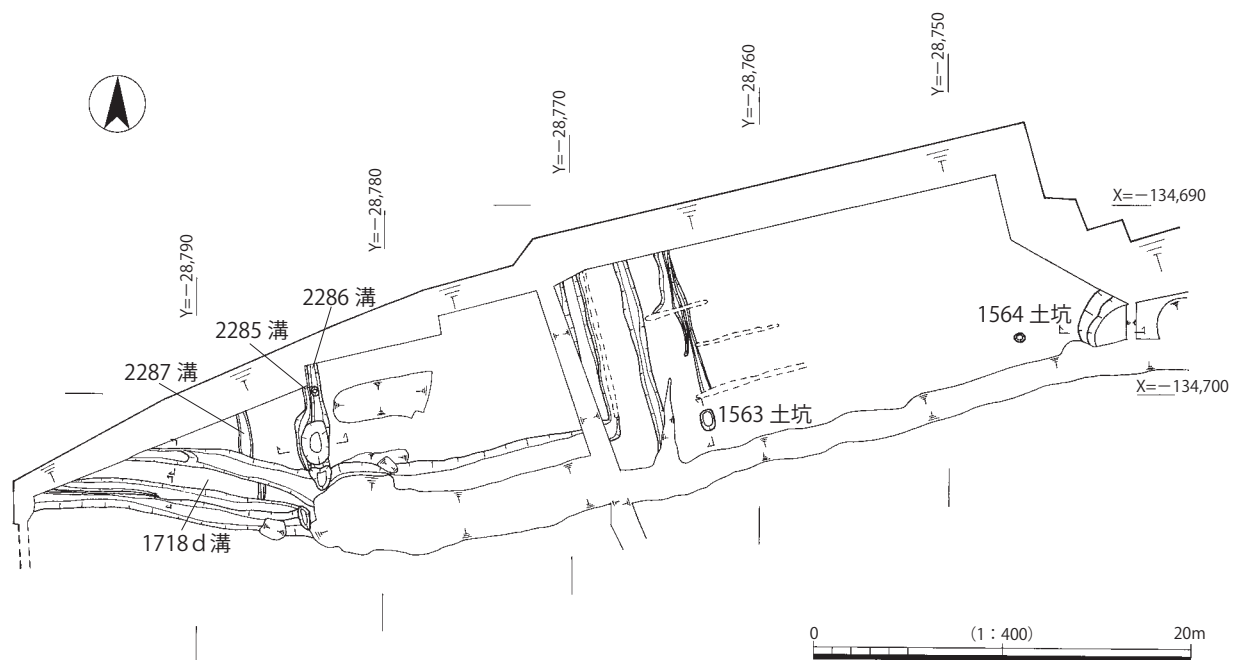


図 44 第 2 - 3 面 遺構全体図

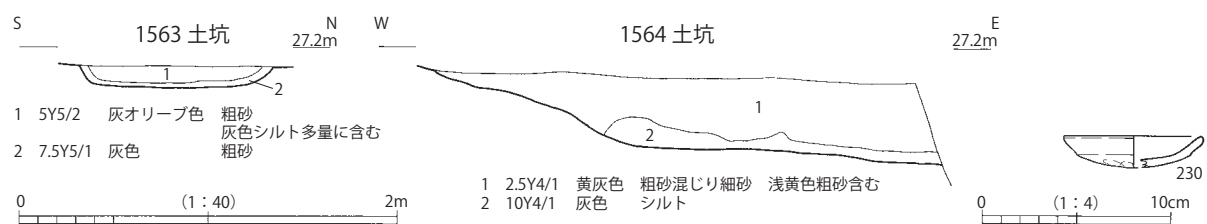


図 45 第 2 - 3 面 1563・1564 土坑 断面、及び 1564 土坑 出土遺物実測図

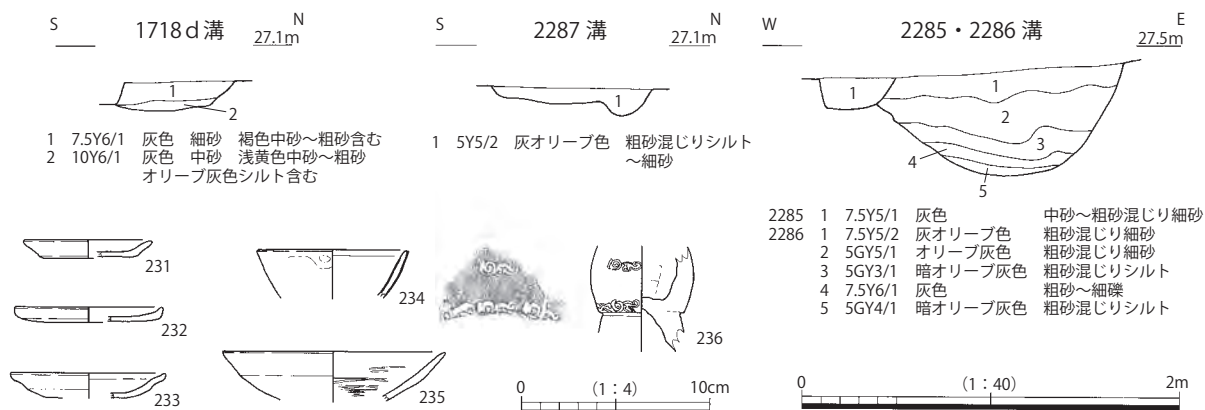


図 46 第 2 - 3 面 1718 d・2285・2286・2287 溝 断面、及び耕作溝 出土遺物実測図

い逆台形を呈し、坑底は平らとなる。2層に分けられる埋土のうち、下位には坑壁に沿うようにして厚さ 0.03 m前後を測る灰色粗砂が堆積し、この上位を灰色シルトを多量に含む灰オリーブ粗砂が覆う。

出土遺物の中に特徴的なものが含まれていないため、ここから時期を知ることはできず、また、耕作溝の一つと重複するが、これからもそれを判別できる資料が得られていない。ために、この方面から時期を特定することは不可能だが、上層に位置する第 2 - 2 面から 16 世紀前半代を下限とする土器が出土していることから、この段階以前の遺構とみなすことは可能である。

1564 土坑 (図 44・45)

調査区北縁の中央からやや東の位置で検出され、東半は近世の井戸により削り取られ全容は把握できない。検出された限りでは、平面は円形をなすとも考えられ、規模は、東西、南北ともに 3.4 m 以上で、深さ 0.4 m を測る。断面は皿状をなすと考えられ、坑底はほぼ平らとなる。埋土は 2 層に細分され、下底部には灰色シルト、上位には粗砂を含んだ黄灰色細砂が堆積していた。

埋土中から、図 45 - 230 に示す土師器の小皿などが出土した。巨視的には 14 世紀後半頃とみなされるが、これ 1 点のみで時期を確定するには躊躇せざるを得ず、おおむねこれ以降と考えておきたい。

1718 d 溝 (図 44・46)

調査区北西で検出され、東から西に流下する。検出長は 14.0 m だが、東部は攪乱により失われ、西側は調査区外となるため全形は不明である。幅は 1.5 m 前後を測るが、上部を掘削した段階で作図したため、図 46 の断面図との齟齬を生じている。この段階での深さは 0.15 m を測り、断面は皿形である。埋土は、灰色を呈した中砂から粗砂を中心とし、一部にオリーブ灰色のシルトを混じえる。

埋土内から若干の遺物が出土したが、この中に時期判別可能な土器などは含まれていなかった。したがって、時期は不明だが、同一遺構面で検出された耕作溝から 15 世紀までの遺物が出土し、上位の第 2 - 2 面より 16 世紀前半代までの遺物が出土しているため、この間に営まれたと考えられる。

2285・2286 溝 (図 44・46)

調査区北東部の北壁際で検出された。2 条の溝が重複しながら平行しているため双方を合わせて報告する。なお、前後関係については、図 46 の断面図のように、2285 溝の方が新しい。方向は、若干北側に偏るものの、ほぼ北から南へのび、規模は、現況での長さ 6.7 m 以上を測るものの、北側が調査区外となるため総長は不明である。幅と深さは、2285 溝が 0.4 m と 0.2 m 弱、2286 溝が 0.5 m と 0.3 m で、後者は南側に向かった 2287 溝手前で一旦大きく膨らみ、水溜状の窪みとなった後に 2287 溝へと合流する。なお、断面図はその部分の状況を記録したものであるため、両者の差が極端に表れている。断面

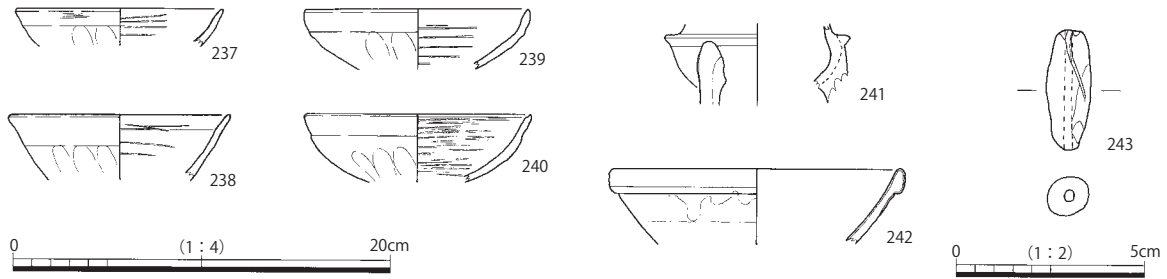


図 47 2-3層 出土遺物実測図

は、両者とも隅の丸い逆台形を呈するが、先述した膨らみの部分では偏平なU字形となる。

埋土は、灰色からオリーブ色を基調とした粗砂から細礫を含む細砂からシルトで、ほぼ水平に堆積しているため、比較的緩やかな流勢のもとで堆積したと考えられる。このような状況から考えてこの膨らみは 2287 溝に水を流入させる際に機能する沈砂池のような役割を担ったとも考えられる。

時期については、手掛かりとなる遺物がほとんどないため不明だが、耕作溝群を区画するような位置にあることや、第 2-2 面の時期からみて 15 世紀代以降、16 世紀前半代の間に位置づけられる。

2287 溝 (図 44・46)

調査区北西部で検出された。東西にのび、その方向に緩やかに傾斜している。検出長 14.0 m を測るが、東側は攪乱のために消失し、西側は調査区外となるため全体形は不明である。幅は西側の狭い部分で 0.6 m、東側の広い部分で 1.6 m を測り、深さは、0.2 m 前後となる。断面は、偏平で隅の丸い逆台形で、溝底には起伏が観察された。埋土は、灰オリーブ色の粗砂混じりシルトから細砂で、そこから少量の遺物が出土したが、その中に図化できるものや時期の特定できるものは含まれていなかった。

時期はこのような状況のため明らかにできないが、耕作溝群南端を削って開削されていることから、これらより後の段階である 15 世紀代以降のものと考えられ、さらに、上位の第 2-2 面に伴う包含層出土遺物からみて、16 世紀前半代以前となることから、この間に形成されたとみなされる。

なお、前述した 2286 溝との合流点で、北側溝壁から溝底が一部窪んでいるのは、そこからの流れを受けたことにより削られた可能性が考えられる。

耕作溝 [1558・1566・1568・1570・2264 溝] (図 46)

いくつかから図化可能な土器が出土し、このうち 6 点を図 47 に示した。以下、出土した溝の番号順に述べる。1558 溝からは、231 の土師器小皿と 235 の瓦器碗が出土した。それらの形態や暗文の様相より 13 世紀後半代から 14 世紀前半代にかけてのものと思われる。1568 溝からは 232 の土師器の小皿が出土した。偏平な体部に短く立ち上がる口縁部を作り出していることから、14 世紀代の製品とみなされよう。1570 溝からは 233 の土師器が出土した。器形的特徴に欠けるため、詳細は不明だが、おおよそ 14 世紀頃のものと考えておきたい。2264 溝からは 234 に図示した白磁の碗が出土した。口縁端部に釉が施されない、いわゆる口禿口縁となる製品のため、14 世紀前半代の時期が付与される。1566 溝からは 236 に掲出する仏花瓶が出土した。体部表面の中央と下段の 2 箇所には、唐草紋風の陰刻紋が連続して押捺されていることから、15 世紀以降、大和で作られた製品の可能性が高い。

2-3層出土遺物 (図 47)

2-3層出土遺物のうち、図化可能なものと、特徴的なもの 7 点を抽出して掲載した。これらのうち、237 から 240 は瓦器の碗で、形態や法量、そして、内面に施された暗文の様相からみて、13 世紀前半代のものともみなされる。241 は小形の部類に属する瓦質土器の三足鍋で、14 世紀代のものであろう。

242 は輸入陶磁器の白磁碗で、玉縁口縁となるその形態からみて華南沿海窯系の製品と考えられ、時期については、瓦器碗と同様の 13 世紀前半代に比定される。

243 は土師質焼成された管状土錘で、重量 2.82 g を測る。この資料については時期の特定ができない。

第 7 項 第 3 - 1 面

竪穴建物 1 (図 48 ~ 51・150・156・157、図版 2・3・20)

調査区南西部隅で検出された。方向は、北から約 29° 東に傾く。平面は南西と北西側がやや長い隅丸方形を呈し、各辺の長さは東辺 4.5 m、西辺 4.9 m、南辺 4.3 m、北辺 3.8 m で、床面積は約 16.0 m² を測る。深さは最も遺存状況の良い南西側で 0.35 m、対面の遺存状況の悪い部分で 0.25 m を測り、平面形態や柱の配列状態、造り付けカマドの存在から住居と考えられる。埋土は大きく 3 層に分けられ、このうち図 49 の 4 は、竪穴建物を掘削した段階から床面を整える際の整地層で、その上面が床面をなす。それより上位は竪穴建物が廃絶した段階以降の堆積層で、下層が厚く、上層が薄い。両者の層間には部分的に図 49 の 3 に示す粘性を帯びた堆積層が観察された。なお、東隅の埋土中位から上位にかけては、

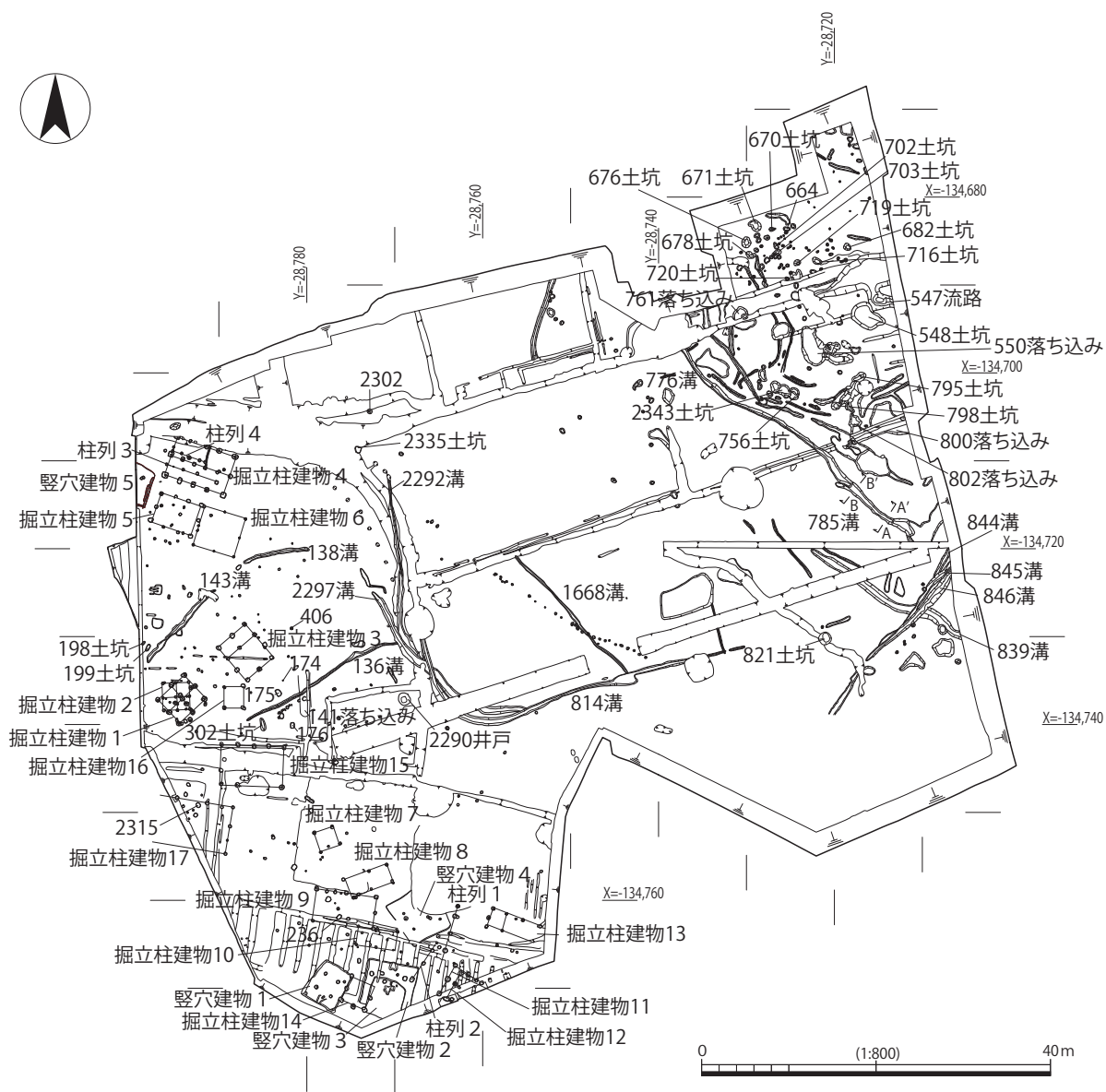
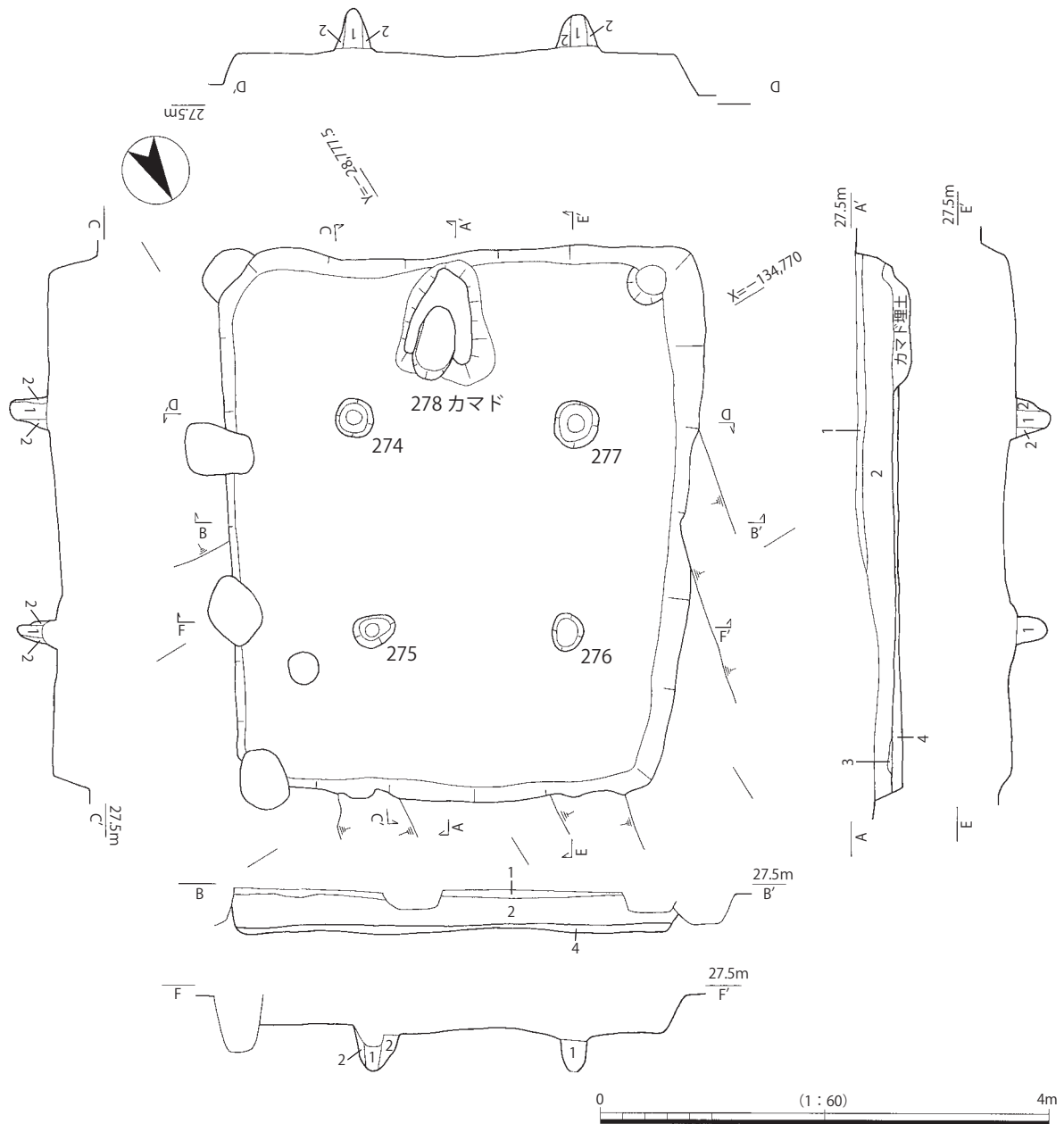


図 48 第 3 - 1 面 遺構全体図

細片化した製塩土器片が約 20 cm にわたって集積した状態で検出された。

主柱穴は 4 本で、それらの平面は直径 0.3 から 0.4 m を測る不整形円形を呈し、深さはおおむね 0.3 m 前後を測る。うち、北側の 1 基を除いて直径 0.15 m を測るほぼ円筒形の柱痕跡が確認された。これは先述した図 49 - 4 の堆積層を除去した段階ではじめて確認され、上面では検出できなかった。

南辺のほぼ中央には図 50 に詳細を示す平面が馬蹄形をなす造り付けカマドが設けられていた。燃焼部には、焼土や炭を大量に含む土層が堆積し、このうち図 50 の 3 と 4 の堆積層はカマドの袖と天井部



- | | | | | | |
|-----|----------|---------|-------------|--------------|-------------------------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色 | 粗砂 小石混じり土 | | |
| 2 | 7.5YR4/1 | 褐灰色 | 粗砂混じり土 N3/0 | 暗灰色 | 粗砂混じりブロック含む 10YR6/4 にぶい黄橙色 粘土ブロック含む |
| 3 | 2.5YR5/2 | 灰赤色 | 中砂混じり粘土 | | |
| 4 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 粗砂混じりシルト | | |
| 274 | 1 | 2.5Y3/2 | 黒褐色 | 砂混じり粘質シルト | 炭化物若干含む |
| | 2 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色 | 粗砂～極細礫混じりシルト | |
| 275 | 1 | 10YR3/2 | 黒褐色 | 砂混じりシルト | |
| | 2 | 2.5Y5/4 | 黄褐色 | 砂質粘質シルト | |
| 276 | 1 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 粗砂混じりシルト | |
| 277 | 1 | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ褐色 | 砂混じりシルト | |
| | 2 | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 粗砂～極細礫混じりシルト | |

図 49 第 3 - 1 面 竪穴建物 1 平・断面図

の崩落土と考えられる。カマド内の堆積土と構築土の一部約 38 cm³の土壌分析を行った結果、ドングリ・マメ類のほか、コムギの胚乳 5 粒を検出することができた。

出土遺物には図 51 の土器類や、図 150・156・157 の石製品がある。これらのうち、244 から 261 は須恵器で、器種には 244 から 250 の蓋杯の蓋、251 から 258 の蓋杯の身、259 の有蓋高杯の蓋、260 の高杯の脚部がある。261 から 265 は土師器で、261 は高杯脚部、262 は鉢、263 から 265 は甕の口縁部片である。266 は表面に格子目タタキを施す軟質の韓式系土器の体部片、267 は上記の集積した状態の中から選出した製塩土器である。268 は輪の送風管で、先端部は被熱により赤変した部分と灰色に還元した部分が観察される。石製品には図 157 - 843 と図 156 - 841 に示す白玉と砥石がある。これらのうち、前者は滑石製でカマド内の堆積層洗浄中に採取し、後者は細粒砂岩を用いる製品で、カマド右袖の上位から出土した。

以上の出土遺物のうち、須恵器は 259 が形態や焼成などから T K - 216 型式までさかのぼると考えられるほかは、T K - 23 から 47 型式を中心とする段階とみなされ、これらに伴う土師器や製塩土器、滑石製白玉も時期的な齟齬をきたさないことから、建物の時期を 5 世紀後半とすることができる。

竪穴建物 2 (図 48・52 ~ 54、図版 3 ~ 6・20)

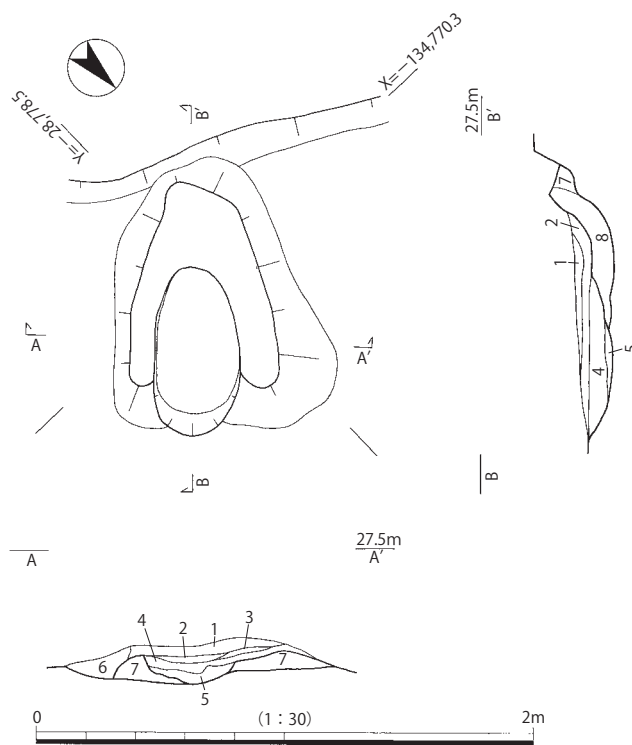
先述した竪穴建物 1 の東約 1.2 m の位置で検出した。建物の方向は北から約 12° 西に偏る。平面は南東隅が削平と調査区外になることと、南辺の大部分を竪穴建物 3 によって損壊されるため詳細は不明だが、東西 1.95 m、南北 1.75 m を測る隅丸方形とみなされ、深さは最も遺存状況の良い北辺部で 0.4

m 弱を測る。長さから計測される床面積は約 27.5 m² となり、平面形や柱の配列状態、造り付けカマドが設けられている状況から住居とみなされる。

埋土は、竪穴建物 3 によって大きく損なわれるため、残存部のみからの所見となるが、2 ないし 3 層に細別され、このうち、図 52 の断面図 6 の層は、建物を最初に掘削した段階から床面を整える際の整地層と考えられる。

支柱穴は 4 本で、それらの平面は直径 0.4 から 0.5 m 前後を測る不整円形ないし、隅丸方形様をなす。深さは 0.2 から 0.4 m のものまでさまざま、これらのうち、南東側の 1 基を除いては、直径 0.15 m 前後を測るほぼ円筒形を呈する柱痕跡を確認した。なお、これら支柱穴を検出したのは、埋土をすべて除去し基盤層を露呈させた段階であり、6 の層上面では確認できなかった。

建物北辺の中央からやや西の部分には、平面が馬蹄形を呈する造り付けカマドが設



- | | | | | | | |
|---|---------|--------|-----------|---------|--------|--------------|
| 1 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粘質シルト | 2.5Y4/6 | オリーブ褐色 | 基盤層ブロック |
| 2 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 砂混じり粘質シルト | 5YR4/4 | にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量に含む |
| 3 | 5YR4/4 | にぶい赤褐色 | 粘質シルト | | | 炭化物多量に含む |
| 4 | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色 | 砂混じりシルト | | | 崩落したカマド焼土層 |
| 5 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 砂混じり粘質シルト | | | 焼土ブロック若干含む |
| 6 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 砂混じり粘質シルト | | | 焼土ブロック多量に含む |
| 7 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 極細礫混じりシルト | | | 基盤層ブロック多量に含む |
| 8 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 | 粗砂混じりシルト | | | 基盤層ブロック少量含む |

図 50 第 3 - 1 面 竪穴建物 1 カマド 平・断面図

置されていた。その状況は図 53 や図版 5 と 6 に詳細を示すように、袖の基部から立ち上がりに至る部分や、煙道につながる部分が壁面に覆い被さる非常に遺存状況の良い状態であった。

また、断面を検討した結果、図 52 の南北方向の断面図に示すように、先述の床面を整えた土層と報告した 6 の層を削り込んでカマドを構築している状況が看取されるため、この層を敷き均すと同時にカマドを設置したのか、当初設置していたカマドを破壊し、再び基盤層まで掘削してカマドを再構築したか双方の可能性が考えられた。この問題に関しては、図 53 の断ち割り断面図に示す 10・11 の土層中に焼土や炭がまったく含まれていないことから、前者の可能性が高いとみなしておきたい。なお、同図 9 のように塊状の焼土を多量に包含する土層が壁面に沿うようにみられることや、それと相似するような形で 7 の土層が観察されることから、壁面の改変や補修が行われたことも確認できる。

さらに、このカマドでは、燃焼部には図 53 や図版 5 - 1 から 3 に示すように、図 54 - 278 の土師器の壺を倒置し、その上に 273 の須恵器蓋杯の蓋を正置して重ねたままの状態を検出されたことが特筆される。これに関しては、双方の土器が二次焼成を受けていないこと、その周囲に粘土の被覆が認められなかったこと、さらに、仮にこの位置に掛口が設けられていたとするならば、その位置がかなり手前になること、そして、この位置にこの大きさの支脚を設けたとするならば、炎の流れを遮断して煙道に達しない状況となることが想定されるため、支脚とされていたとは想定し難い。ゆえに、その状況は、カマドを放棄する際に行われた祭祀的行為の所作として理解する方がむしろ合理的であると解釈しておきたい。

出土遺物には、図 54 に示す土器のほか、図化し得ない製塩土器の細片が少量みられた。これらのう

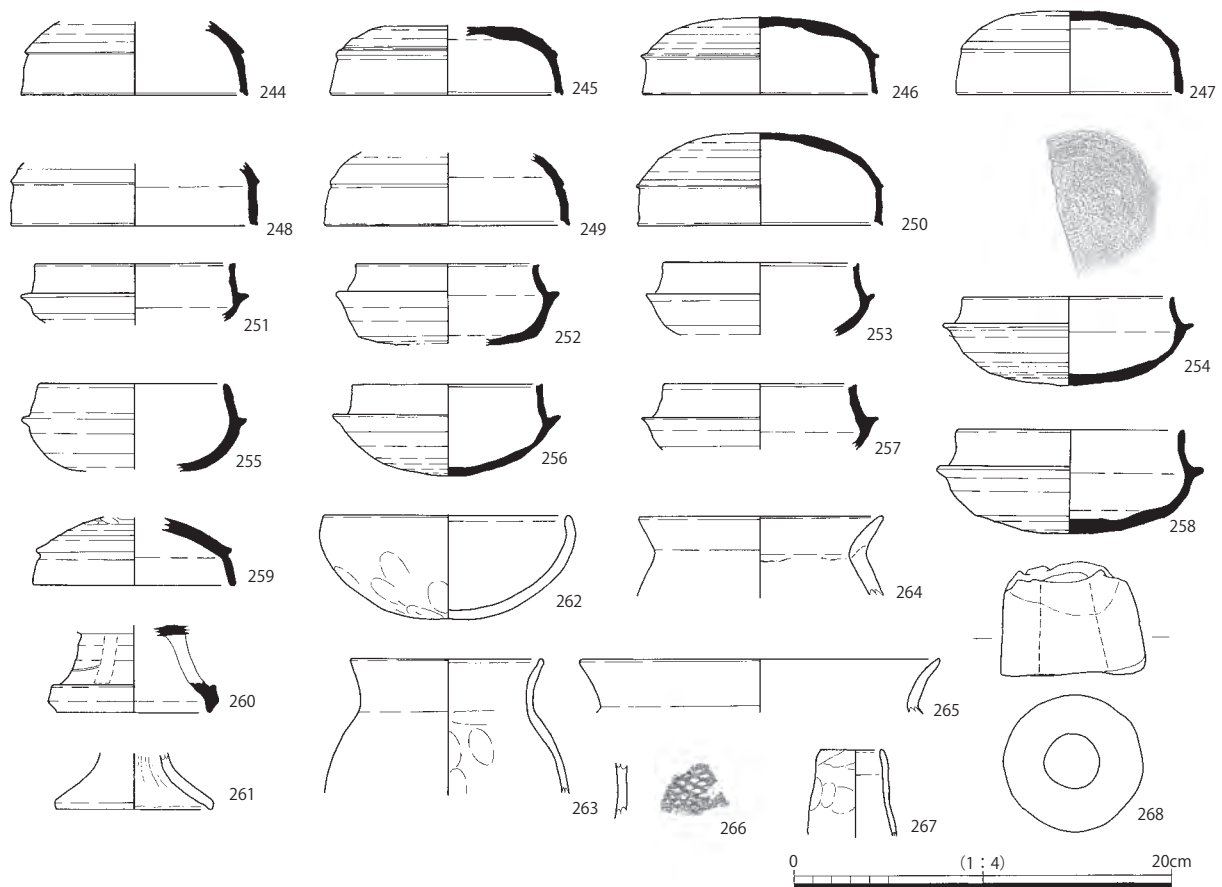


図 51 第 3 - 1 面 竪穴建物 1 出土遺物実測図

ち 269 から 277 は須恵器で、器種には 269 から 275 の蓋杯の蓋、276 と 277 の高杯の脚部がある。蓋のうち、273 は先述のカマド内に置かれた二つのうちのひとつで、278 の土師器の壺に被せられていたものである。現状では一部が欠失しているが、出土状況や破片の遺存状況からみて、本来は完形だったと推測される。278 から 282 は土師器で、278 が壺、他が甕である。このうち、278 はカマド内に倒置されていた資料で、圧密により破碎された状態ではあったが、まったく欠損部のみられない旧状に復せた。

建物の時期は、出土した須恵器蓋杯の型式が T K - 23 型式に位置づけられることや、共に出土した

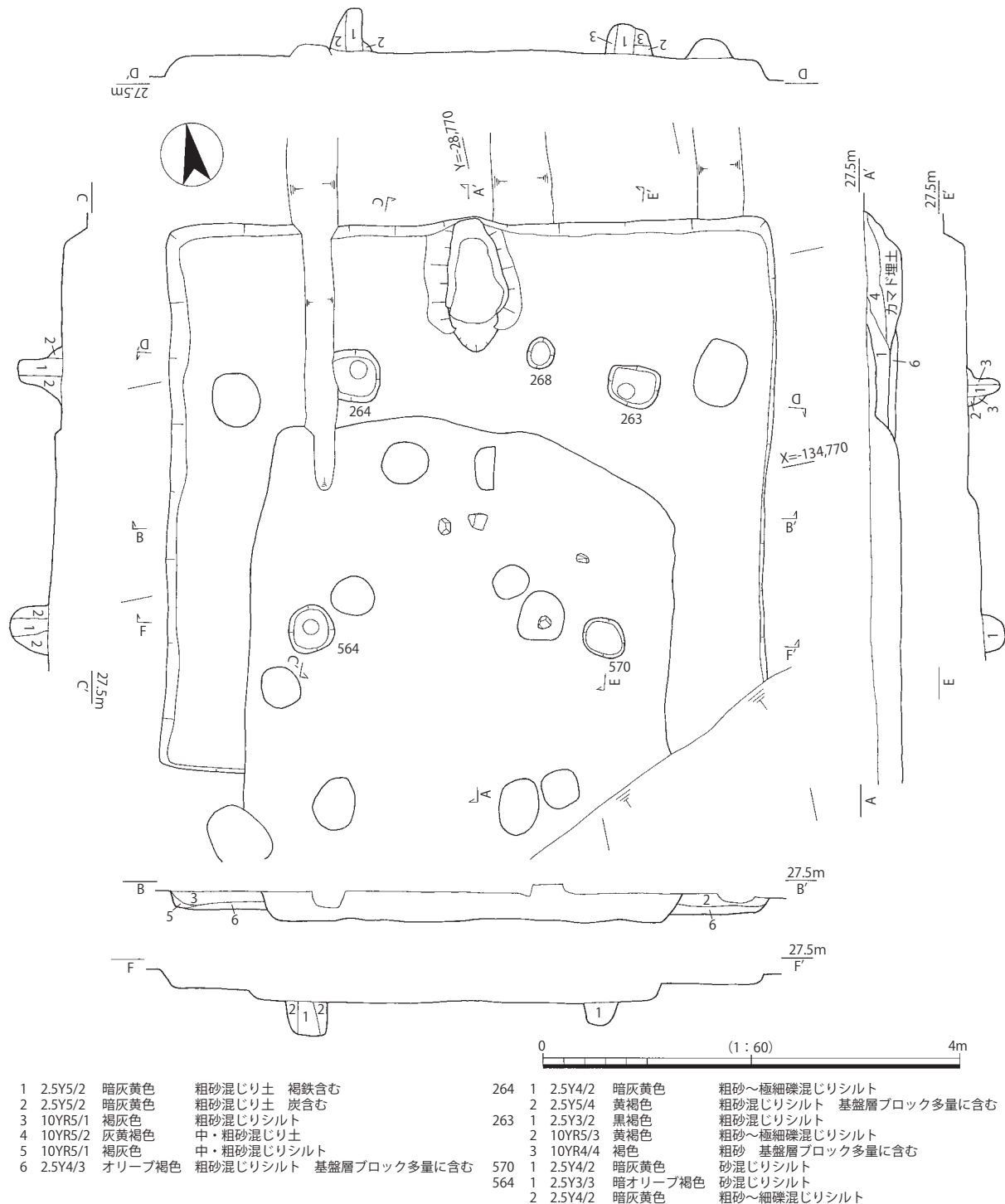


図 52 第 3 - 1 面 竪穴建物 2 平・断面図

土師器や製塩土器もこれらと時期的な差異が認められないため5世紀後半とみなされる。

竪穴建物3 (図48・55・56・156、図版3・4・7・20)

竪穴建物2の南側に一回り規模を縮小したような状態で検出され、互いの重複関係からそれより後に構築されたと判断される。建物の方向は、竪穴建物2と同様に北から約12°西に偏っている。平面は南辺の遺存状況が悪いことや、南東隅が調査区外となることから必ずしも明確にはし難いが、北辺が整わない隅丸方形を呈すると考えられる。規模は東辺が推定で3.5m、西辺4.2m、南辺が復原で4.0m、北辺4.0m、床面積は15.5㎡前後となり、深さは最も遺存状況の良い北部で0.2m弱を測る。

埋土は、図55の断面図のように大きく3層に分けられ、そのうち1は竪穴建物2との重複関係を把握するために設けた畦の最上部堆積層、6は基盤層に由来する土層が大量に含まれることから、床面を

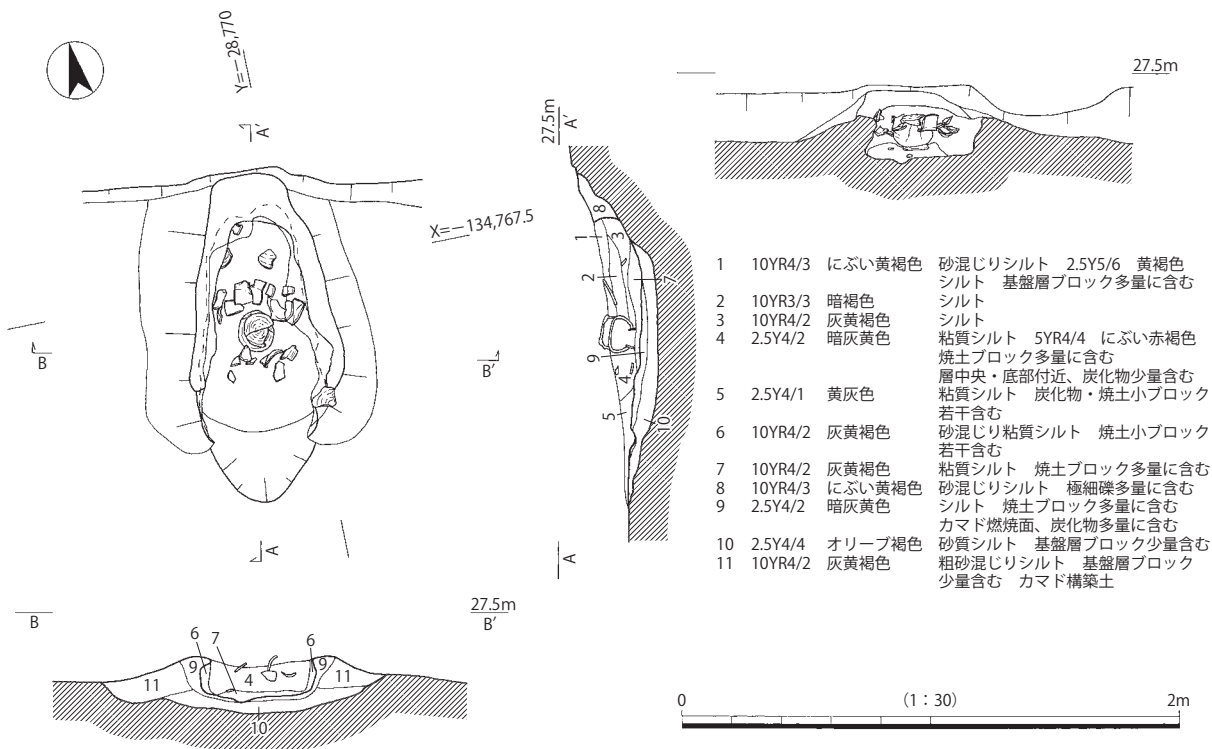


図53 第3-1面 竪穴建物2 カマド 平・断面、及び立面図

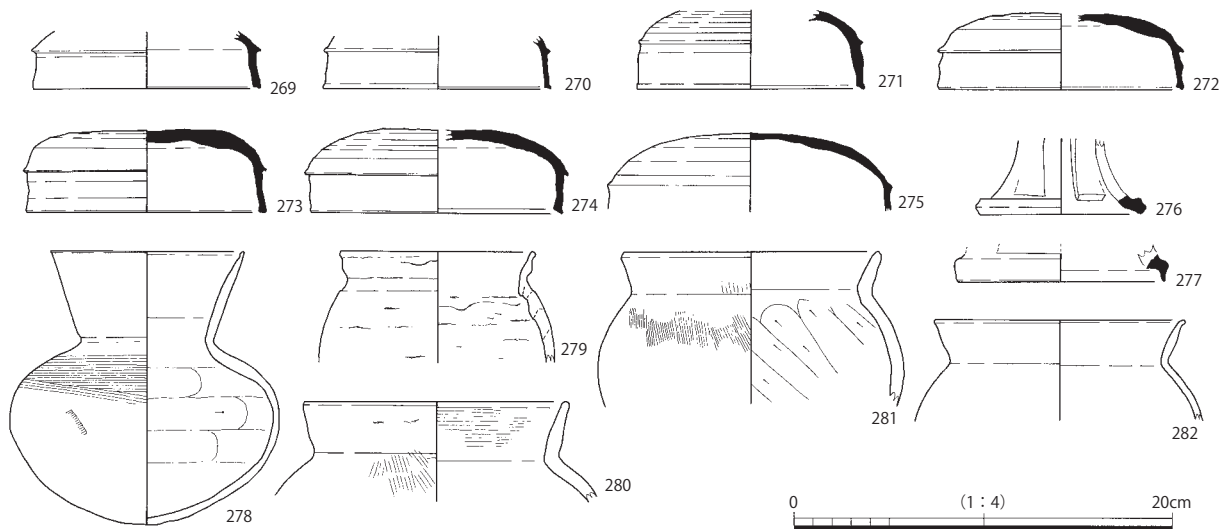


図54 第3-1面 竪穴建物2 出土遺物実測図

整える際に敷き均された整地層、2と3は建物廃絶後に流入した土層で、6との層界附近には図版4に示すように多量の炭や炭化物、焼土塊が散在していた。また、7は炭・炭化物・焼土塊などが集積した状況をなす非常に特徴的な土層で、先述した層界の堆積物の供給源であると考えられた。また、その北部のほぼ中央には、表裏面が平滑で外面に被熱痕跡をとどめる一辺 15 cm程度の三角柱状を呈した金床石と思しき台石状の角礫が存在し、そこから東へ約 1 m離れて3点の砥石、南西側約 1.5 mでは図 56 - 283 の須恵器有蓋高杯の蓋が内面を上にした状態で出土した。

床面の調査を完了した後、支柱穴を確認すべく6層を掘り下げ、南側に偏った位置で4基の柱穴を検出した。それらの平面は円形から隅丸方形様を呈するものまでさまざまで、規模も 0.3 から 0.5 mに至

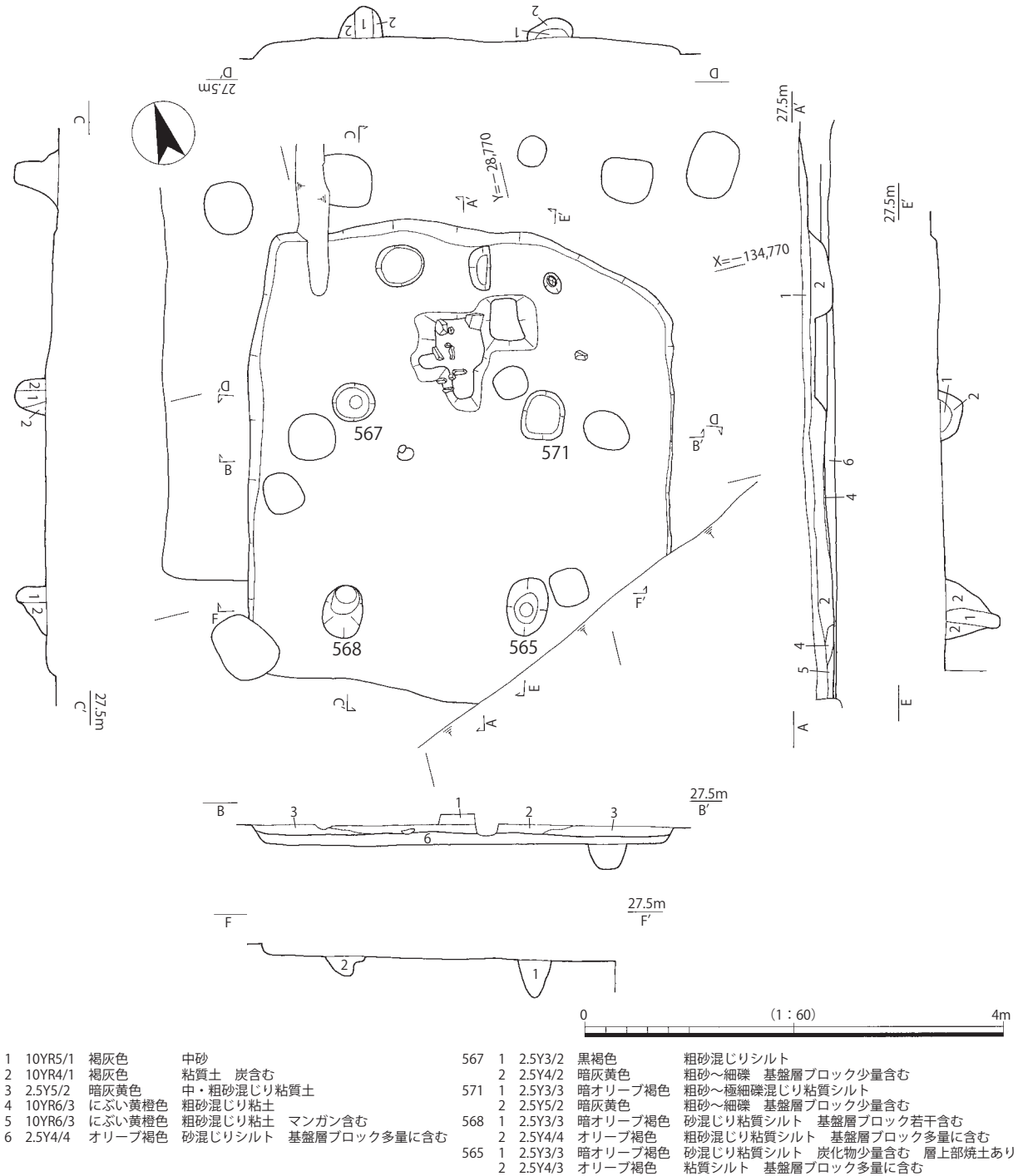


図 55 第 3 - 1 面 竪穴建物 3 平・断面図

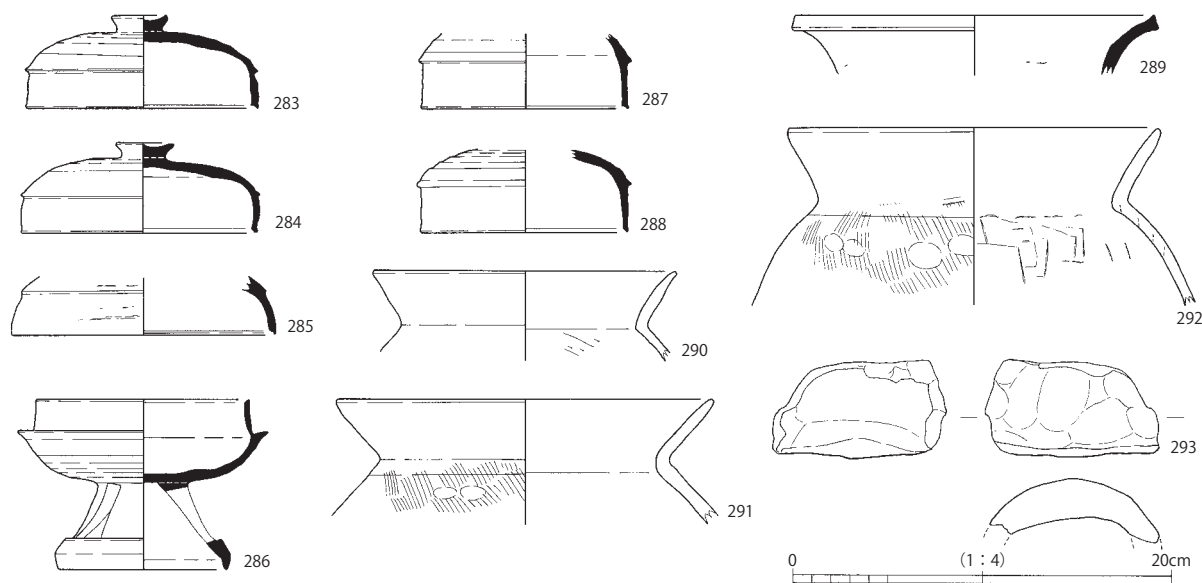


図 56 第 3 - 1 面 竪穴建物 3 出土遺物実測図

るまでおのおの差異がみられた。深さも、0.2 から 0.5 m 弱と不均等で、それらのうち、北東に位置する 1 基以外には直径 0.15 m 前後の円筒ないし裁頭円錐形を呈した柱痕跡が観察され、そのうちの南側 2 基には加圧のためか、掘方の底面より柱痕跡の方が一段低くなっていた。

埋土内からは、図 56 - 283 から 293 に示す土器や鞆の送风管、図 156 - 839・840・842 に示す砥石が出土した。また、埋土中に炭や焼土を多量に含んでいたため、鍛冶関連遺構の可能性を想定し、図 55 の 7 の土層を中心に水洗作業を行った。その結果 5 cm 以下の鉄滓を採取したが、鍛造剥片などは検出されなかった。土器のうち、283 から 289 は須恵器で、器種には 283・284・286 の有蓋高杯の身と蓋、285・287・288 の蓋杯の蓋、289 の甕口縁部がある。290 から 292 は土師器で、共に甕の口縁部片である。293 は大形の鞆の送风管。砥石は、839 と 840 との材質が流紋岩、842 が中粒砂岩で、穿孔貝の生痕を残す。

これらのうち、須恵器の型式は 285 にやや新しい傾向が看取されるが、床面出土の 283 や完形の 286 が T K - 23 型式、287 と 288 が T K - 47 型式と考えられる。よって、この建物の時期は 5 世紀後半でも新しい段階のものと考えられ、放射性炭素年代測定 (AMS 法) で得られた、430AD (95.4%) 540AD の数値とも整合する。

なお、この建物に関しては規模が小さいこと、支柱穴が南側の偏った位置にあるため、北側を除いて支柱穴と壁との間にヒトの入る隙間がほとんどなく、唯一空間が設けられた北側には火処が設置されるためここにもヒトの居所が確保できないこと、その火処が造り付けカマドより規模の大きい盛り上がった構造であることから通常の住居とは考えられず、多量の炭や焼土、鉄滓の出土を積極的に評価するならば、火処を鍛冶炉と認識して鍛冶関連工房のような施設ともみなされよう。

竪穴建物 4 (図 48・57、図版 7)

竪穴建物 2 の北方約 2 m の位置で検出された。上位に堆積する中世までの遺物を包含する堆積層を除去して基盤層を露呈させた段階で精査を行ったところ、北西隅が明瞭に検出され、これを手掛かりとして周囲に注意を払った結果、隅丸方形を呈する平面形が確認された。壁面の立ち上がりがほとんど残らないまでに削平されていたことや、東部が攪乱によって失われているため遺存状況は非常に悪いが、建物の方向を北から西に対し約 35° 傾け、北東辺 1.9 m 以上、南西辺 5.7 m、南東辺 5.0 m、北西辺 3.5

m以上、床面積 28.8 m²前後を測る建物であったと考えられる。

支柱穴は北側の1基を除いて確認され、その大きさは直径0.2から0.3 m強、深さ0.3から0.5 m強、平面はほぼ円形に近い。それらのうち南側の1基では直径0.25 mを測る円筒形の柱痕跡が観察された。各辺と支柱穴の内側を注意深く観察したが、造り付けカマドや、地床炉の痕跡を確認することはできず、このような状態のため、出土遺物も皆無であった。

したがってここから時期を推し量る根拠となる資料は得られなかったが、遺構内埋土の色調や周辺の状況から、古墳時代中期となる可能性が高いと推察する。

竪穴建物 5 (図 48・58、図版 1・7)

調査区北西隅から南にやや向かった位置において、旧耕作土除去直ちに検出された。このため遺存状況が非常に悪く、ごく浅い壁溝が検出されたためにそれと認識される状況であった。また、南東辺以外の北西辺のすべてと、北東辺および南西辺は、接続する 07 - 1 調査地へと伸びるため、今回の調査では、全体の約 4 分の 1 程度を調査したに過ぎない。

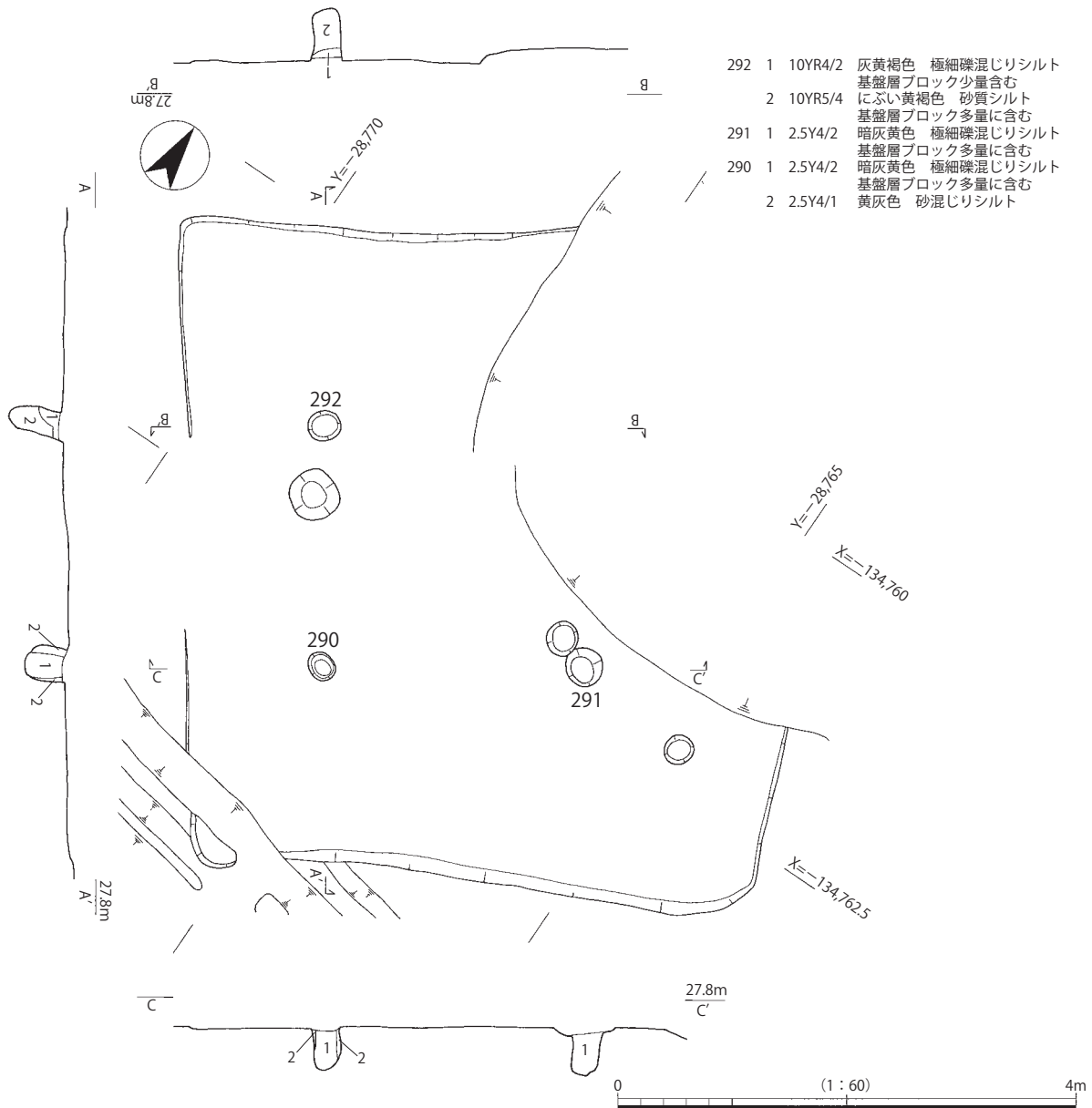


図 57 第 3 - 1 面 竪穴建物 4 平・断面図

よって、建物の平面形や規模に関する全容は07-1調査の報告に譲ることとし、ここでは当該調査区で知り得た限りの報告を行う。唯一本調査区で全体形が確認された南東辺の壁溝は、削平のため南端が欠失するが、長さ4.1 m以上を測る。北東辺の内側には、部分的ではあるが同様の小溝が相似形をなすようにしてめぐっているため、ほぼ同じ位置で建て替えがなされたとみなされる。

出土遺物には壁溝から出土した図58-294に示す土師器の杯がある。図のみを瞥見するならば中世段階のものと見紛うが、器壁の厚さや胎土中に混和された砂粒からみて、古墳時代のものと考えられる。ただ1点の破片で時期を推すのは確実性に乏しいが、敢えて記すならば古墳時代となろう。

掘立柱建物1 (図48・59、図版2・7)

調査区西端のほぼ中央で検出された梁行2間、桁行2間の総柱建物である。主軸は棟筋を北西から北東に通し、それに直交する方向で北から西方向へ44°傾く。建物の平面形はゆがみが激しいが、それと比較して柱通りは良い。

身舎の規模は、北東と南西の妻側が3.6 mで柱間寸法1.8 m等間、南東部の平側が4.0 m、北西部の平側が4.3 mとなり、床面積は約15.0 m²を測る。掘方の平面は不整円形から整わない隅丸方形を呈し、大きさは長径0.6 m前後、短径0.4 m強である。断面は隅の丸い矩形からU字形の双方がみられる。こ

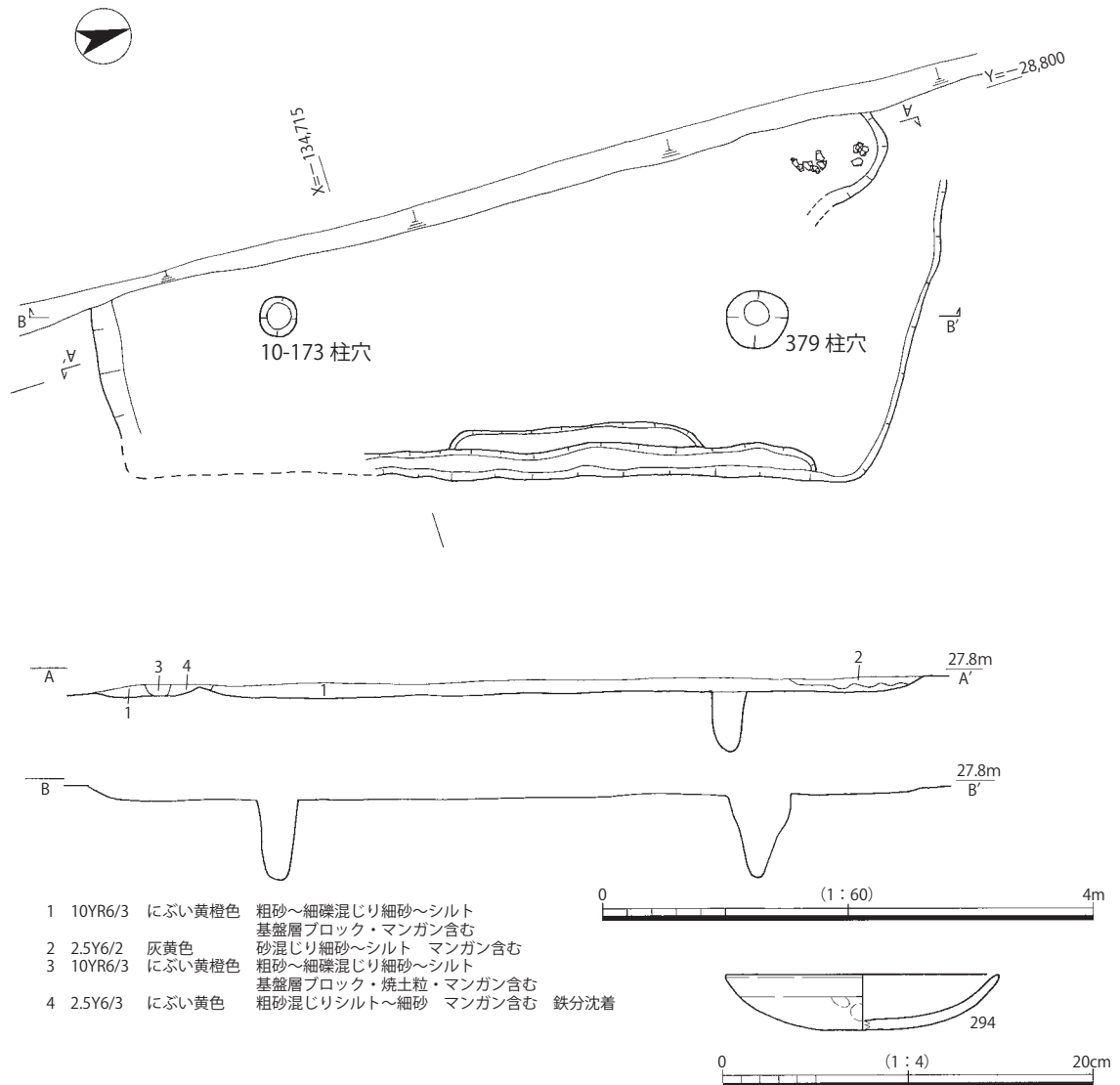


図58 第3-1面 竪穴建物5 平・断面、及び出土遺物実測図

れらすべての柱穴において直径 0.2 から 0.3 m を測る柱痕跡が観察され、埋め戻された土層との堆積関係から、底面に直接柱を立てる場合と、一定程度埋め戻してから立てる場合の二通りがあったことが看取される。

出土遺物には図 59 の右下に示す 295 の土師器の甕がある。158 柱穴の掘方から出土し、その形態から 6 世紀後半代以降と考えられる。よってこの建物の時期の上限もこの段階となる。

なお、次に記す掘立柱建物 2 と位置的には重複する関係となるが、互いの柱穴が重なり合う関係にはないため、ここから前後関係を知ることはできない。

掘立柱建物 2 (図 48・60、図版 2・7)

調査区西端のほぼ中央で検出された梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物で、棟筋を南北に通す。建物の主軸は棟筋の方向で北から 4° 西へ傾く。身舎の規模は、南北の妻側が柱間寸法およそ 1.5 m 等間の 3 m、

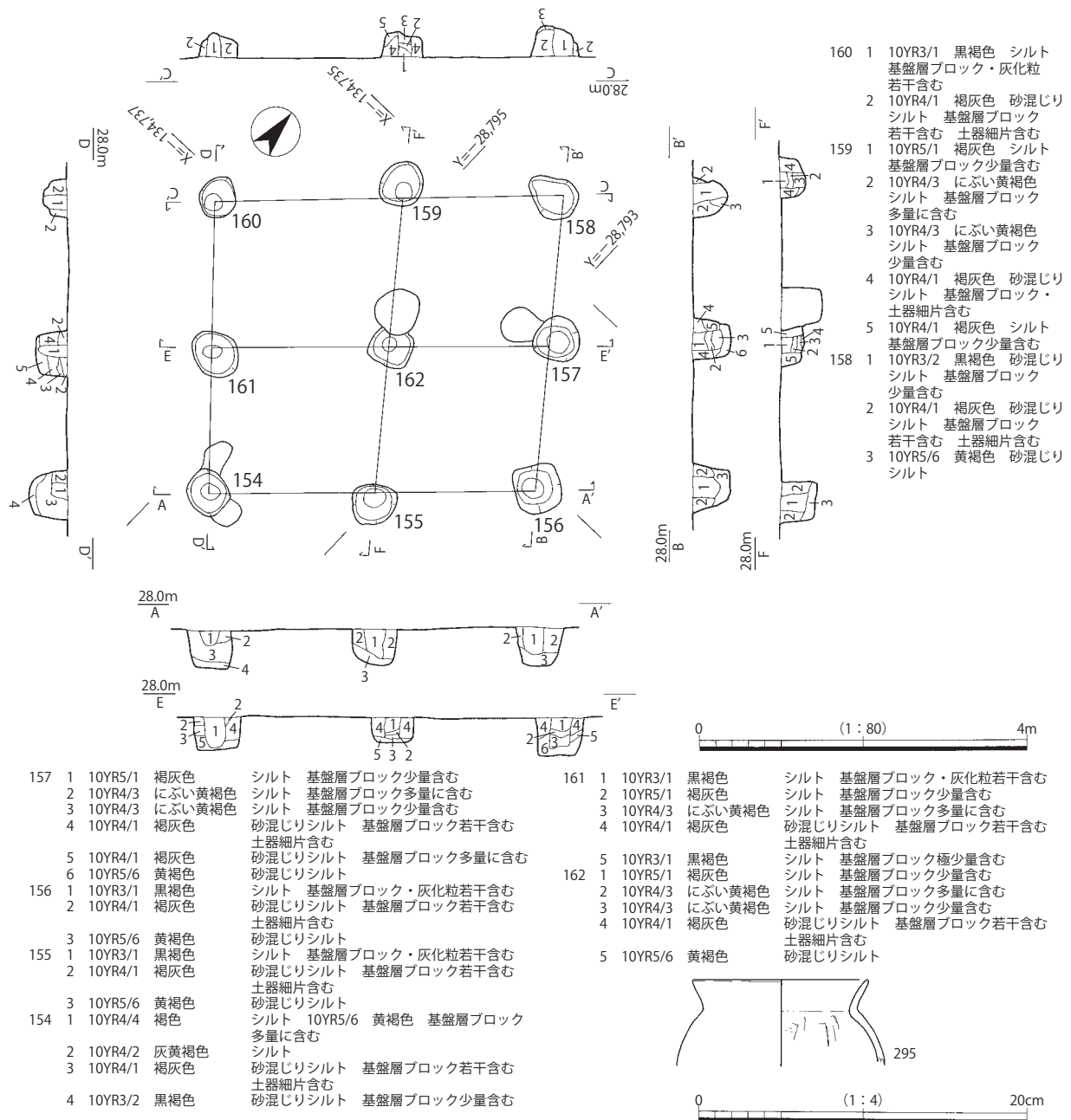


図 59 第 3 - 1 面 掘立柱建物 1 平・断面、及び出土遺物実測図

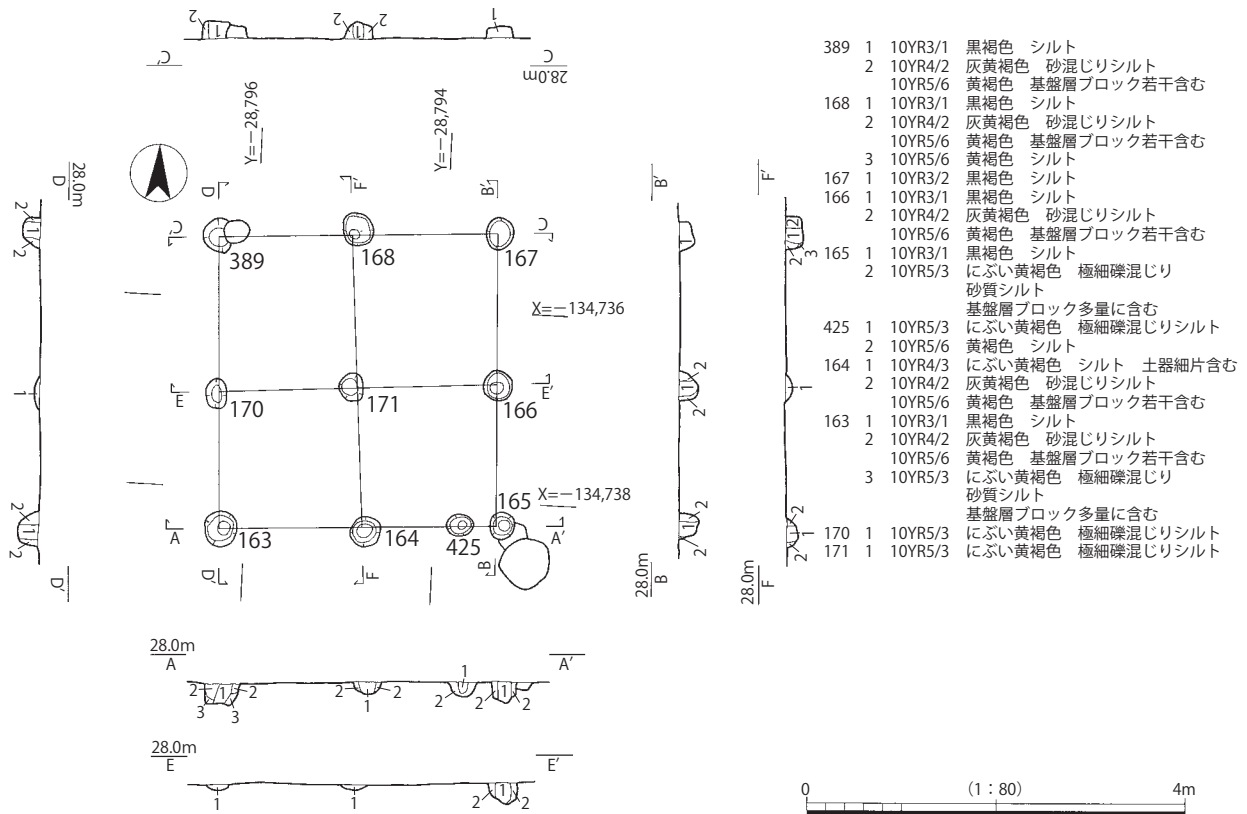


図60 第3-1面 掘立柱建物2 平・断面図

東西の平側が3.1mと後者が若干長く、床面積は約9.3㎡を測る。掘方の平面は直径0.3から0.4mを測る不整形をなし、深さは0.1から0.2mとまでさまざまである。断面は隅丸の矩形から偏平なU字形を基本とするが、遺存状況によるものか皿形のものもみられる。また、遺存状況の良い柱穴を中心として直径0.15から0.2mを測る円柱状を呈する柱痕跡が観察された。

各柱穴の掘方と柱痕跡のどちらからも土器の細片しか出土せず、また、前述の通り、平面的には掘立柱建物1と重複するが、相互の柱穴が重なっていないために、ここからも前後関係を知ることができない。よって建物の時期は不明である。

掘立柱建物3 (図48・61、図版1・2・7)

掘立柱建物1の北東約4.5mの位置で検出された梁行2間、桁行3間の側柱建物である。棟筋を北西から南東に通し、主軸はその方向で北から西に約40°傾いている。

身舎の規模は、北東と南西の平側が4.9m、北西側の妻が4.0m、南東部のそれが3.8mを測り、床面積は19.0㎡強となる。建物の平面形はいびつで、柱通も悪く総体的に不揃いである。掘方の形は不整形から隅丸形状のものまでさまざま、大きさは直径0.2から0.6mを測る。深さは周辺一帯が大きく削平されているため0.2m以下のものが大多数を占める。断面は皿形のものを中心として一部に偏平なU字形や隅丸の矩形を呈するものも存在し、遺存状況が悪いことに起因するのか、柱痕跡の観察される柱穴はみられなかった。遺物は、145柱穴埋土より出土した細石刃核以外ほとんどみられないため、時期を推し量る術はない。なお、153柱穴については、棟筋と北東から2列目の側柱列の交点付近に位置するために、間仕切柱として機能していたものと考えられる。

また、この建物に関しては、掘立柱建物1と北西辺の柱列が揃っていること、建物の軸がそれと近似することのほか、柱掘方の形状や大きさが近似すること、平面形が整わず柱通りが悪いことなど、双方

に共通点を多く指摘することが可能なため、同時に存立していた可能性が高いとみなされる。

掘立柱建物 4 (48・62、図版1・8・9)

調査区北西隅よりやや南で検出された梁行4間、桁行2間の側柱建物である。北西から南東に棟を通し、主軸は建物側柱筋に直交する形で北から東に向かって20°偏っている。

身舎の規模は南東の妻が4.6m、北西の妻が4.7m、南西と北東の平が7.0mを測り、床面積は22.5㎡となる。また、棟筋の通りには側柱よりも一回り小形の一边0.3から0.4mを測る柱穴4基が、ほぼ1.4m間隔で一直線に並んでおり、これらを床束とみなすならば、床構造は床張であったと考えられる。掘方の平面は隅丸方形を基本とする。その大きさは長辺0.7m前後、短辺0.5m前後のものが大多数を占め、深さは0.1から0.6mを測る。断面は隅丸の矩形からU字形のものが混在し、これらのうち4分の3には直径0.2m前後の円筒形を呈した柱痕跡が確認された。なお、隅柱4箇所は他と比較して平面形、掘削深度ともに大きくなる傾向が看取される。一部の柱穴からは少量の土器細片が出土したが、この中には時期比定が行えるものは含まれていなかった。

したがって、遺物から時期を推察できないが、他の掘立柱建物と比較して、掘方埋土の黒味が強いこと、平面が隅丸方形を基本としていることなどから、それらより時期的に下がることも考えられる。なお、この建物の立地場所であるが、北東の平側は比高1m以上に達する大きな段差に接するように構築されている。段差の下には弥生時代後期の自然流路が埋積しているため、少なくともこの時代には段差が形成されていたことが明らかであることから、当初よりこの崖際を意図して選地したと考えられ、少なくともこちら側には出入口が設けられていないことが判明する。

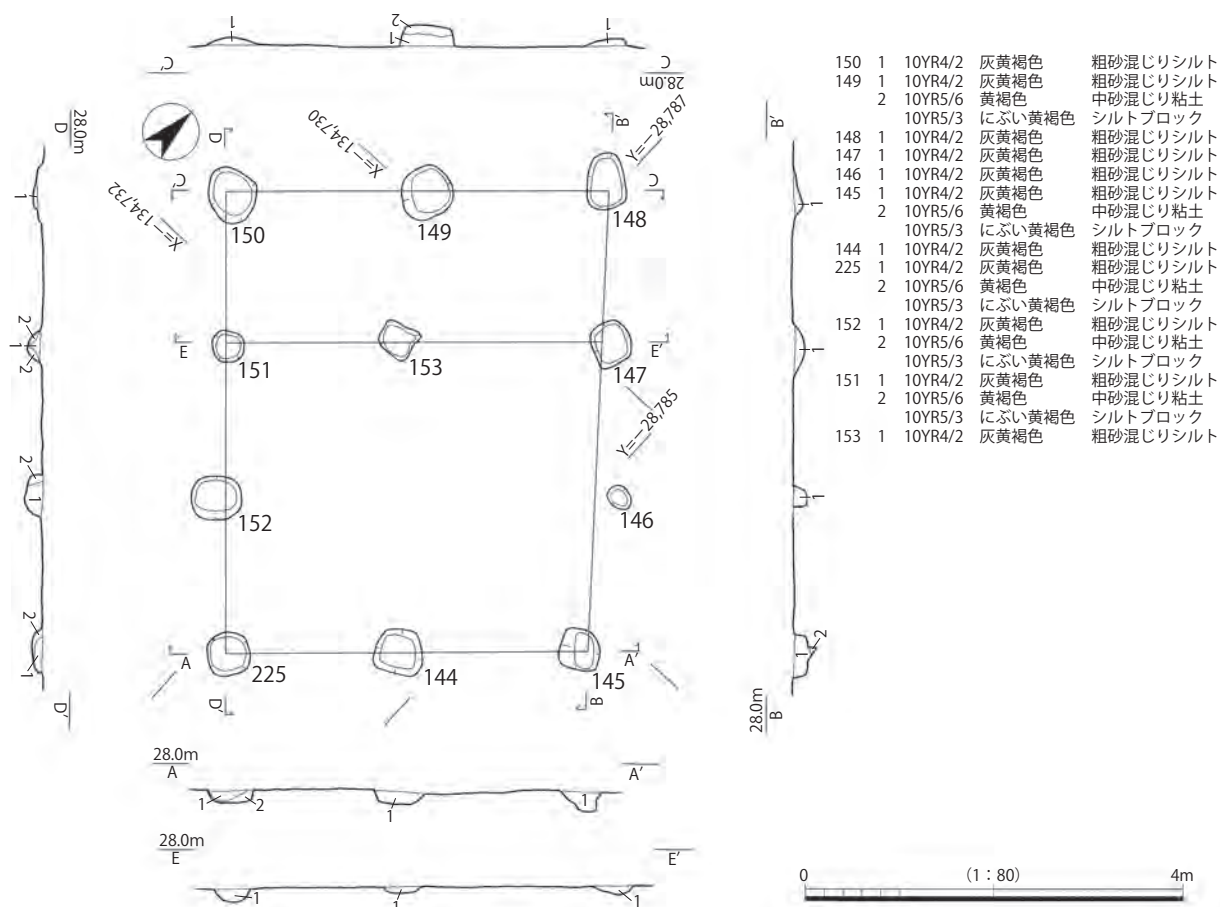


図 61 第 3 - 1 面 掘立柱建物 3 平・断面図

掘立柱建物 5 (図 48・63、図版 1・8・9)

先に述べた掘立柱建物 4 の南西約 2 m の位置で検出した側柱建物である。棟筋を北西から南東に通し、主軸はそれに直交する方向で北から 20° 東を向いている。

身舎の規模は、梁行 2 間、桁行 3 間で、南東側の妻が 3.8 m、北西側の妻が 3.5 m、南西側の平が 4.7 m、北東側の平が 4.9 m で、平面は台形様を呈し、ここから求められる床面積は 13.9 m² となる。

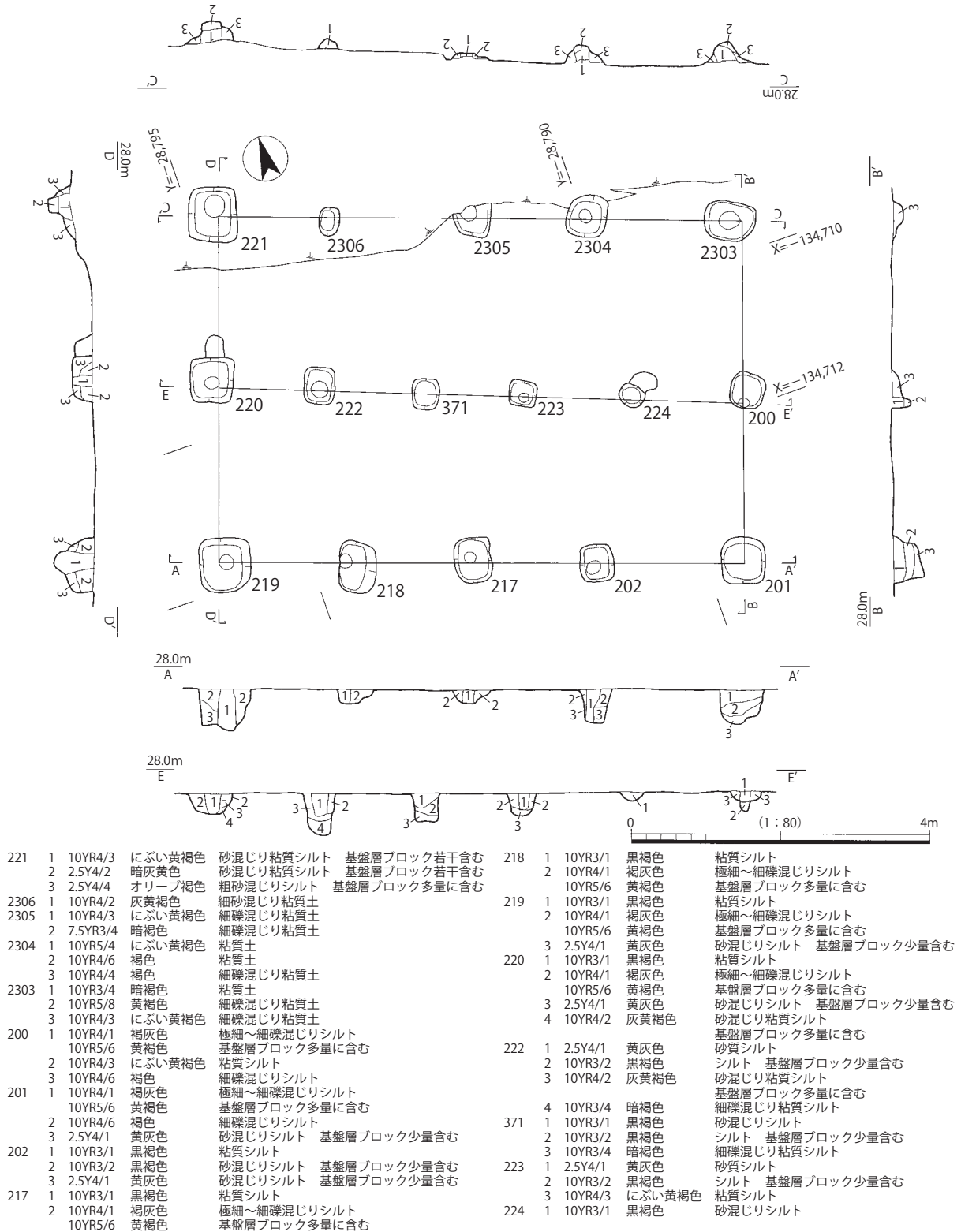


図 62 第 3 - 1 面 掘立柱建物 4 平・断面図

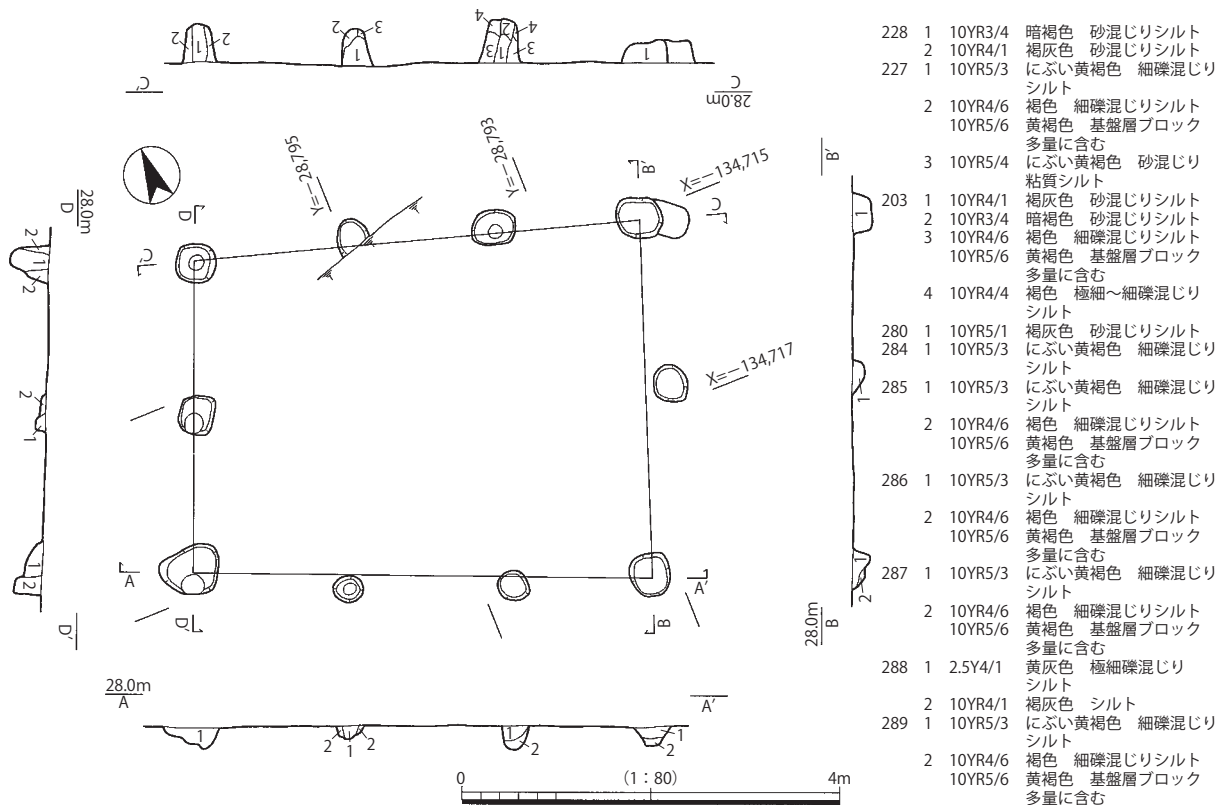


図 63 第 3 - 1 面 掘立柱建物 5 平・断面図

掘方の形状は不整円形から整わない隅丸方形様のもがあり、大きさは長径 0.3 から 0.6 m 強、短径 0.3 弱から 0.5 m まで多様である。深さは 0.2 弱から 0.5 m までおのおの差異があり、概して北東側柱列の方が深い傾向にある。断面は U 字形を基本とするが、穴底に起伏を持つものも多い。

建物を構成する柱穴 10 基のうち、5 基の埋土中には、直径 0.15 から 0.2 m を測る円筒形を呈した柱痕跡が、周囲より明るく均質な土層に置換された状態となることにより確認された。

一部の柱穴から土器の細片が出土したが、この中に時期の判明するものはない。ゆえにここから建物の時期を知ることは不可能だが、この建物と先述の掘立柱建物 4 との関係に注目した場合、双方の建物の平面規模の差は認められるものの、主軸を同じくし、かつ、北西妻側を揃えるようにして構築されているため互いに関連性を持つと考えられる。両建物の平側の間隔が 2 m しかなく、軒の出を勘案するならば同時に併存していたとは考え難いが、互いが前後関係にあったことは充分考えられよう。

掘立柱建物 6 (図 48・64、図版 1・9)

先の掘立柱建物 5 と接するような状態で検出され、その東側角柱とこの建物の北側隅柱が重複しているため、その前後関係よりこの建物が先行して構築されていたことが判明する。

建物の規模は梁行 2 間、桁行 2 間の側柱建物で、棟の通りを南東から北西に通す。主軸はそれに直交する形で北から西に 18° 偏る。身舎の規模は南東と北西双方の妻が 4.5 m、南西と北東側両者の平が 4.9 m を測り、床面積は 22.0 m² となる。柱穴の平面は円形から不整円形を呈し、大きさは直径 0.2 から 0.3 m のものが中心となる。掘り込みの深さは 0.1 未満から 0.4 m 強までのものが認められ、断面は偏平な U 字形あるいは隅丸の矩形を呈する。これらのうち、それぞれの隅柱は、間柱と比較して平面形や掘削深度が大きく、特に北東辺の平側についてはその傾向が顕著である。

遺存状況が悪いことに関連してか、柱痕跡の観察されるものは確認されず、また、ほとんどの柱穴か

ら遺物も出土しなかったため、建物の時期は不明である。このような状態ではあったが、重複関係からみて少なくとも掘立柱建物5には先行すること、それと東北辺を揃えていることから両者の間に関連性があるものと捉えられ、さらに、掘立柱建物5は掘立柱建物4との関連性も考慮されることから、近接して設けられたこれら3棟の建物が、互いに関連性を持っていたものと考えられる。

掘立柱建物7 (図48・65、図版1・9・10)

調査区西部の中央からやや南の位置において検出された。各辺とも1間であることや、桁行、梁行の

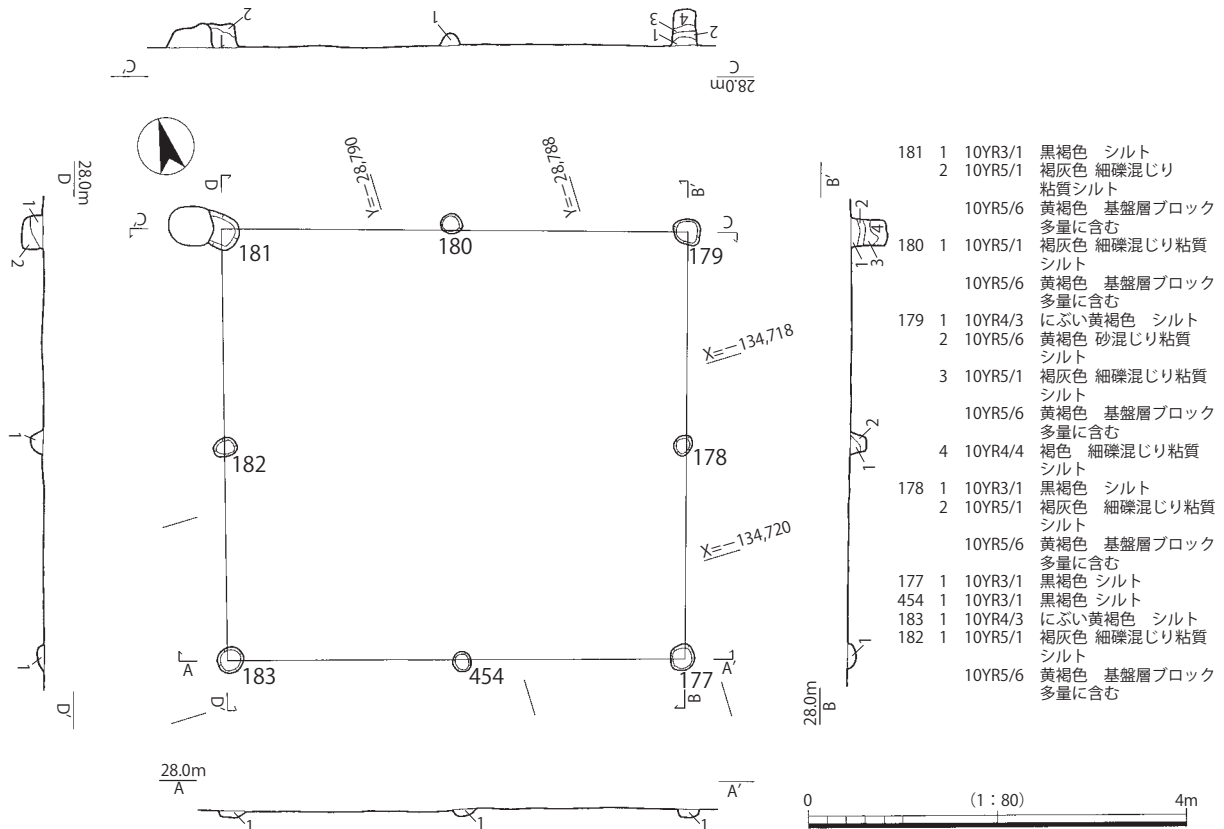


図64 第3-1面 掘立柱建物6 平・断面図

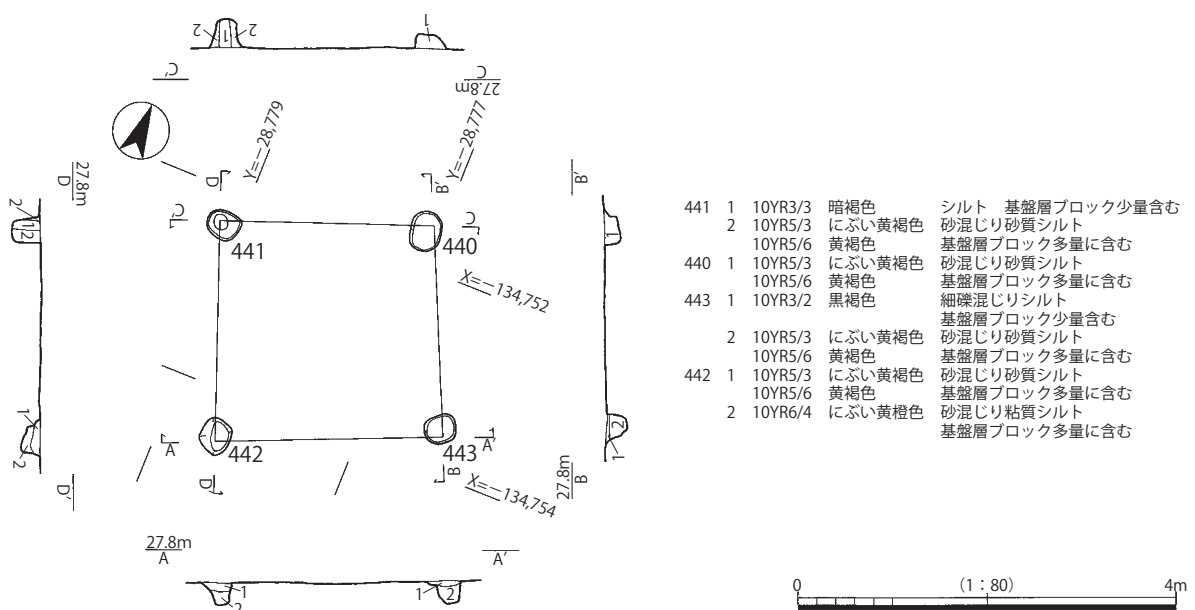


図65 第3-1面 掘立柱建物7 平・断面図

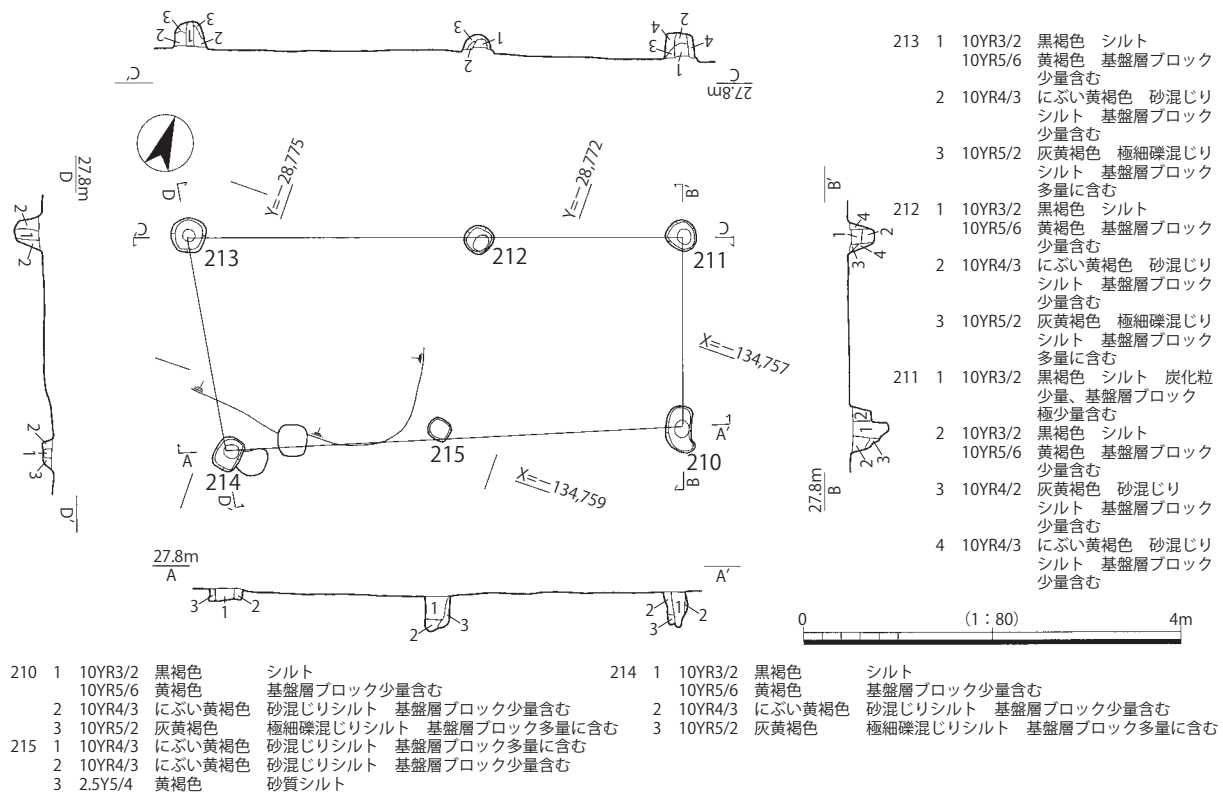


図 66 第 3 - 1 面 掘立柱建物 8 平・断面図

区別もできないこと、竪穴建物 4 と軸が近似するため、あるいは掘り込みが完全に削平された竪穴建物の残骸の可能性も考えられるが、今回は掘立柱建物として報告する。柱列の方向は、北から 21° 西に向かい、4 辺に囲まれた床面積は約 5 m²となる。掘方の形状は不整な円形で、その大きさは短辺 0.3 m、長辺 0.4 m 前後を測る。断面は U 字形あるいは不整な矩形を呈し、深さ 0.2 から 0.3 m を測る。なお、西側の 441 柱穴では直径 0.15 m の円筒形をなす柱痕跡が観察された。

各柱穴からほとんど遺物が出土しなかったため、時期については不明である。

掘立柱建物 8 (図 48・66、図版 10)

調査区南半のほぼ中央、既述した竪穴建物 4 と掘立柱建物 7 とに挟まれるような位置において検出された梁行 1 間、桁行 2 間を数える側柱建物である。

建物の平面は、各柱筋のゆがんだ四辺形で、身舎の規模は、北東側の妻 2.0 m、南西側の妻 2.3 m、南東側の平 4.8 m、北西側の平 5.3 m 弱を測り、床面積は 10.8 m²となる。主軸については、いびつな平面形をなすため確定しづらいが、この中でも比較的柱筋の通る北西の平に直交する方向で計測した場合で北から西に 19° 偏る。掘方の大きさや形状は、直径 0.3 から 0.4 m 弱の円形のものや、短辺 0.2 m 強、長辺 0.4 m 弱の隅丸長方形のもの、短径 0.3 m、長径 0.5 m 強の三日月状の形をしたものが混在する。断面は、扁平あるいはゆがんだ U 字形から矩形、柱根の部分が一段窪んだものなどさまざま、掘削深度もまちまちであり、大きさ、平面形、掘削深度の間に相関関係は認められない。また、柱穴 6 基のうち 1 基を除いては、埋土中に直径 0.15 から 0.2 m 前後を測る円筒形を呈した柱痕跡が観察され、中でも 210 柱穴では柱痕跡のみが荷重により一段沈下している状態が観察された。

柱穴からは土器の細片が出土したが、この中に時期判別の基準となる資料は含まれていなかった。

掘立柱建物 9 (図 48・67、図版 10)

調査区南西部で検出された梁行 4 間、桁行 2 間の側柱建物で、ほぼ東西に棟を通す。建物の主軸は互

いの妻側の長さを二分した点を結んだ線に直交する方向で北から東に8° 向いている。

身舎の規模は、東側の妻が3.6 m弱、西側のそれが3.8 m、南側の平が7.0 m、北側のそれが7.0 m弱を測り、ここから求められる床面積は30.0 m²を測る。また、北側柱列の柱間寸法は1.2 から2.2 mまでと不揃いで、南側柱列は西側の3基が削平などのため検出されず、西側も棟持柱が確認できなかった。掘方の平面は、短径0.3 m弱から長径0.5 mの不整円形を主とし、北東隅柱に相当する217柱穴のように一辺0.4 mを測る整然とした隅丸方形のものも存在する。掘り込みは最も浅い例で0.05 m、最も深い例で0.4 mに達するが、削平によるためか概して浅い。断面はU字形を主体とし、一部に隅の丸い矩形のものが観察された。なお、これら9基の柱穴の中で柱痕跡が確認されたのは450柱穴のみであり、それは、直径0.2 m弱の円筒形を呈し、均質で周囲より明るい土層として認識された。

建物の時期は、455柱穴から出土した図67右下に示す296の須恵器蓋杯の身がMT-15に位置づけられることから、6世紀初頭を上限とすることが判明する。なお、掘立柱建物8とは平面的に重なり合うが、互いの柱の掘方同士が直接重複していないので、それとの新旧関係は知り得ない。

掘立柱建物10 (図48・68、図版10・11)

上記掘立柱建物9の南東隅に重なって検出された梁行1間、桁行2間の側柱建物である。棟をほぼ東西に通し、主軸は平の柱筋に直交する形で計測して北から8° 東に偏っている。

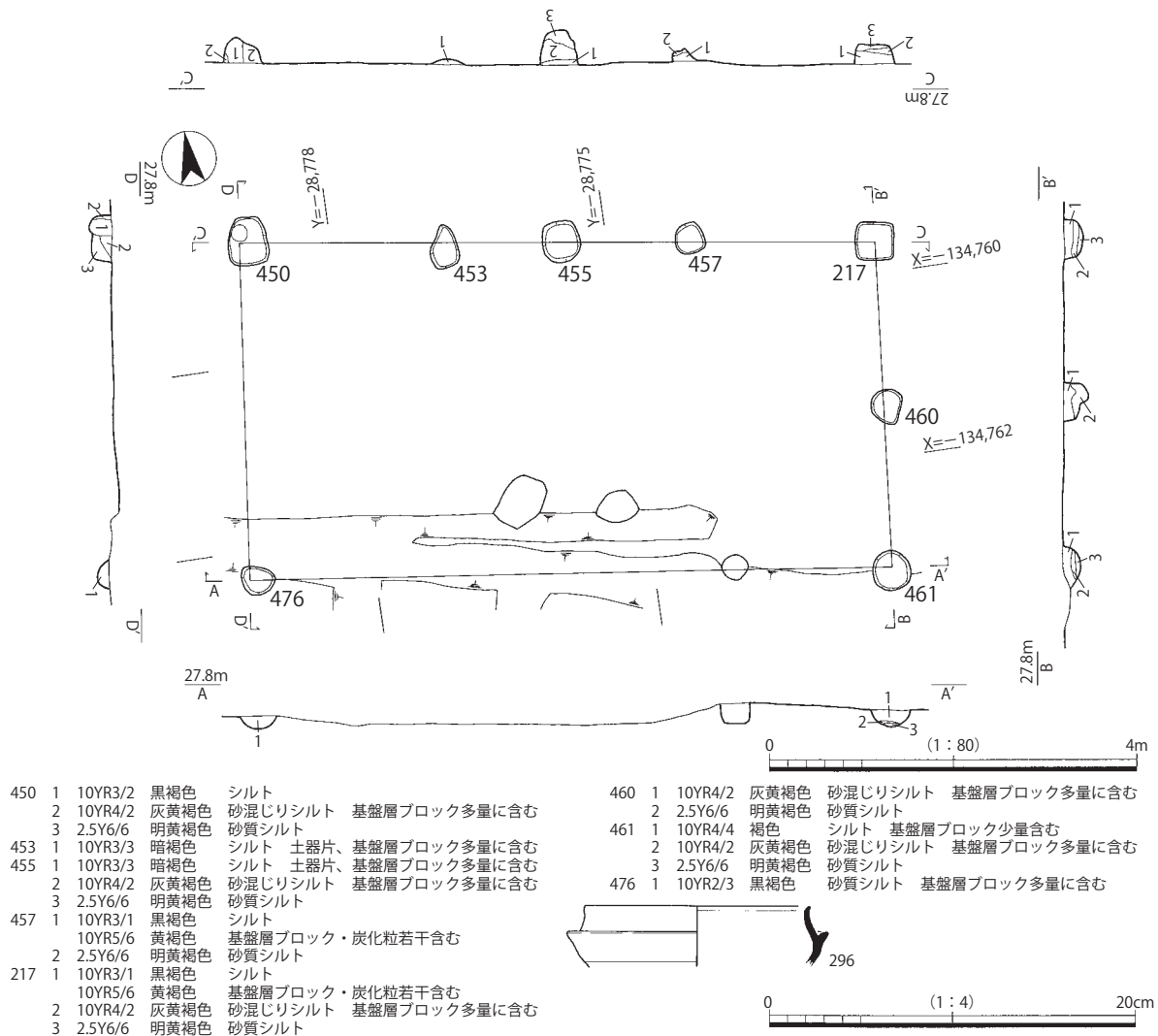


図67 第3-1面 掘立柱建物9 平・断面、及び出土遺物実測図

身舎の規模は、東西双方の妻が 2.1 m、南側の平が 4.3 m、北側の平が 4.5 m で、床面積は 9.2 m²強を測る。掘方の平面は、直径 0.2 強から 0.3 m の円形を主体とするが、6 基のうち、南東側隅柱に相当する 466 柱穴のみが短径 0.15 m 弱、長径 0.2 m の不整形円形となる。深さは 466 柱穴が 0.05 m である以外 0.2 強から 0.3 m 強を測り、断面は U 字形と、これが扁平となったものを主体としている。なお、これらのうち、467・469 柱穴では 0.15 m 前後の円筒形をなした柱痕跡が確認できた。

建物の時期については、各柱穴からの出土遺物が僅少で、時期判断の根拠に乏しいため不明である。
掘立柱建物 11 (図 48・68、図版 9・11)

調査区南西部で検出された建物で、梁行 2 間、桁行は 2 間ないしそれ以上となる可能性もあるが、調査区外となるため詳細は不明である。主軸は、南西側柱列に直交する方向で北から東に 29° 偏る。

身舎の規模は、南東側の妻が調査区外のため不明、北西のそれが柱間寸法 1.8 m 等間 2 間分の 3.6 m

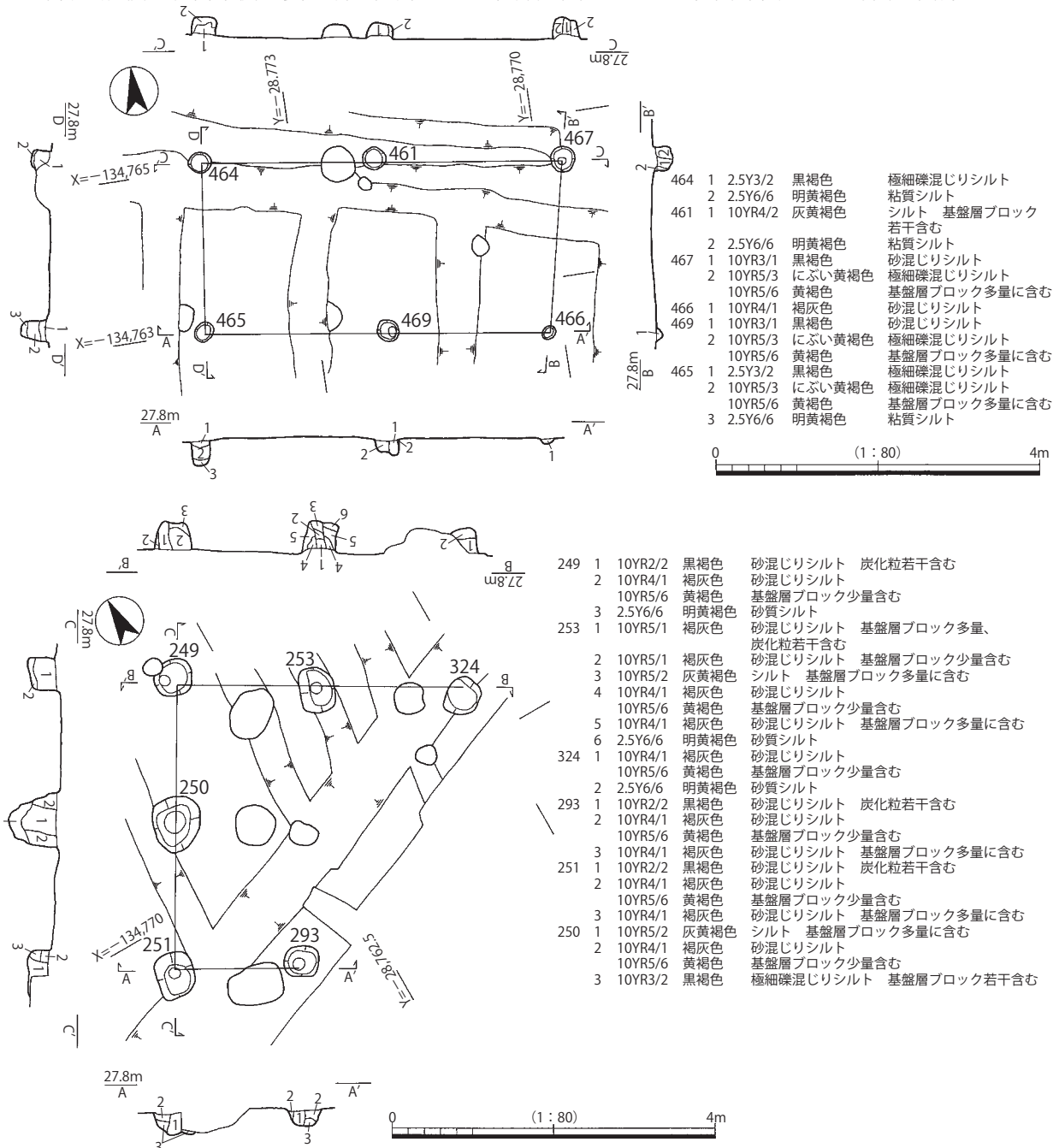


図 68 第 3-1 面 掘立柱建物 10・11 平・断面図

を測る。平は南西側が 1.8 m 以上、北東側が 3.9 m ないしそれ以上となり、床面積は 14.0 m² かそれを凌駕する。掘方の平面は不整な円形から方形をなし、大きさは短径 0.3 から 0.4 m、長径 0.4 から 0.7 m を測る。断面は、U 字形から隅の丸い矩形を呈し、深さは 0.2 から 0.6 m のものまでさまざまである。これらのうち、324 柱穴以外では 0.15 から 0.2 m を測る円筒状をなす柱痕跡が観察され、中には 250 柱穴のように 0.3 m に達する例も認められた。

柱穴の何基かからは土器の細片が出土したが、この中に時期を知ることのできるものは含まれていなかった。したがって、ここから建物の時期を明らかにすることはできなかった。

なお、梁と桁の柱列が交差する附近に側溝により削られながらも 256 柱穴が検出されたことや、他の掘立柱建物に用いられる柱の規格を大きく上回る資材を使用していることに着目するならば、256 柱穴を束柱とみなすことによって、側柱建物ではなく総柱建物であった可能性も考えられる。

掘立柱建物 12 (図 48・69、図版 9)

255 柱穴を北側の隅柱として認識し、そこから南西に並ぶ柱列 2 間分以上と、同じく南東にのびる柱列 1 間以上を一体の建物と捉えることにより側柱建物を復原した。その位置は上記の掘立柱建物 11 とほぼ重なるような状態となり、それと同様に妻の南東側と平の南西側が調査区外となる。

このように考えた場合、身舎の規模は、北西の妻 3.5 m 以上、南東の妻が不明、北東の平が 3.1 m 以上、南西の平が不明で、検出した範囲での床面積は 6.5 m² となる。掘方の平面は不整円形ないし方形で、大きさは短径 0.5 m 弱、長径 0.5 から 0.7 m を測る。断面は U 字形が基本だが、一部ゆがんだものを含む。深さは 0.3 から 0.5 m で、255・256 柱穴では直径 0.15 から 0.2 m の円筒形をなす柱痕跡が観察された。

建物の時期は、遺物がほとんど出土していないため、知ることができない。

掘立柱建物 13 (図 48・70、図版 9)

調査区西半の南東隅で検出された側柱建物である。旧耕作土を除去し、鉄分の沈着やマンガンの結核を除去した段階で直ちに検出されたため残存状況は非常に悪い。

南東側の妻柱列は調査区外となるため全体形は不明だが、梁行は 2 間と確定され、桁行は 3 間ないしそれ以上を数える。棟筋を北西から南東に通すが、各柱筋の通りが悪く主軸の角度をにわかには確定し難い。しかし、北西側妻の柱痕跡の通りで計測した場合には北から 23° 東に傾く。身舎の規模は北西側の妻が 4.2 m、北東の平側が 5.8 m かそれ以上、南西が 3.8 m を測り、ここから求めら

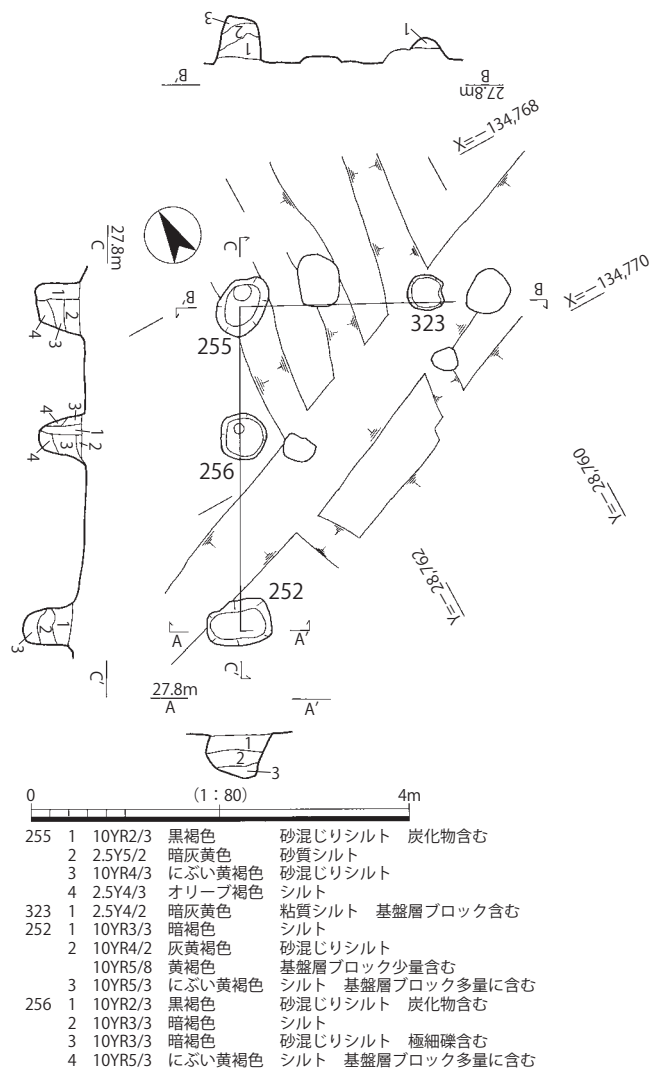


図 69 第 3-1 面 掘立柱建物 12 平・断面図

れる床面積は最低でも 24 m²となる。なお、棟通りの推定線と北西妻側から一列目の桁柱列を結ぶ交点に、この建物を構成する柱穴と平面の大きさや掘削深度、埋土が類似する 247 柱穴が位置し、これを間仕切柱とみなすことも可能である。掘方の平面は不整形で、それらの大きさは短径 0.2 から 0.4 m、長

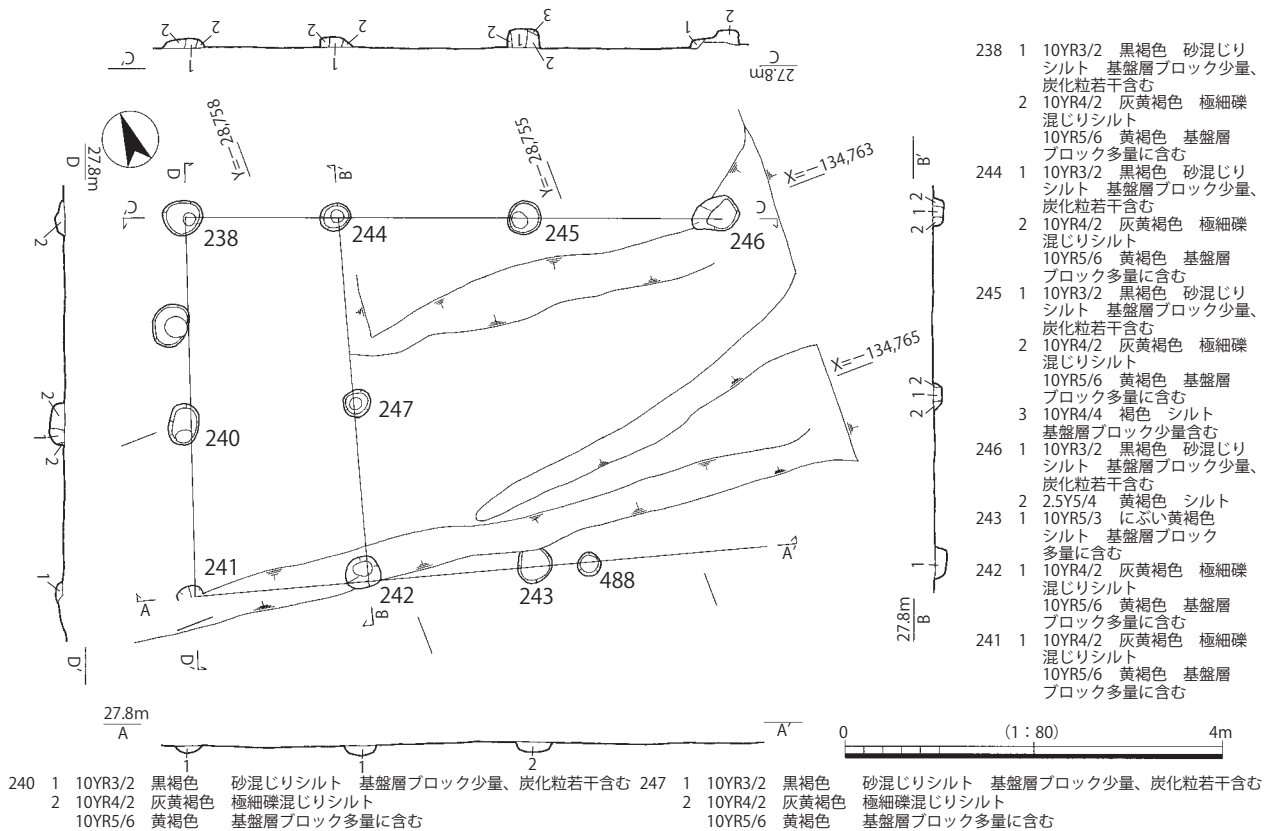


図 70 第 3 - 1 面 掘立柱建物 13 平・断面図

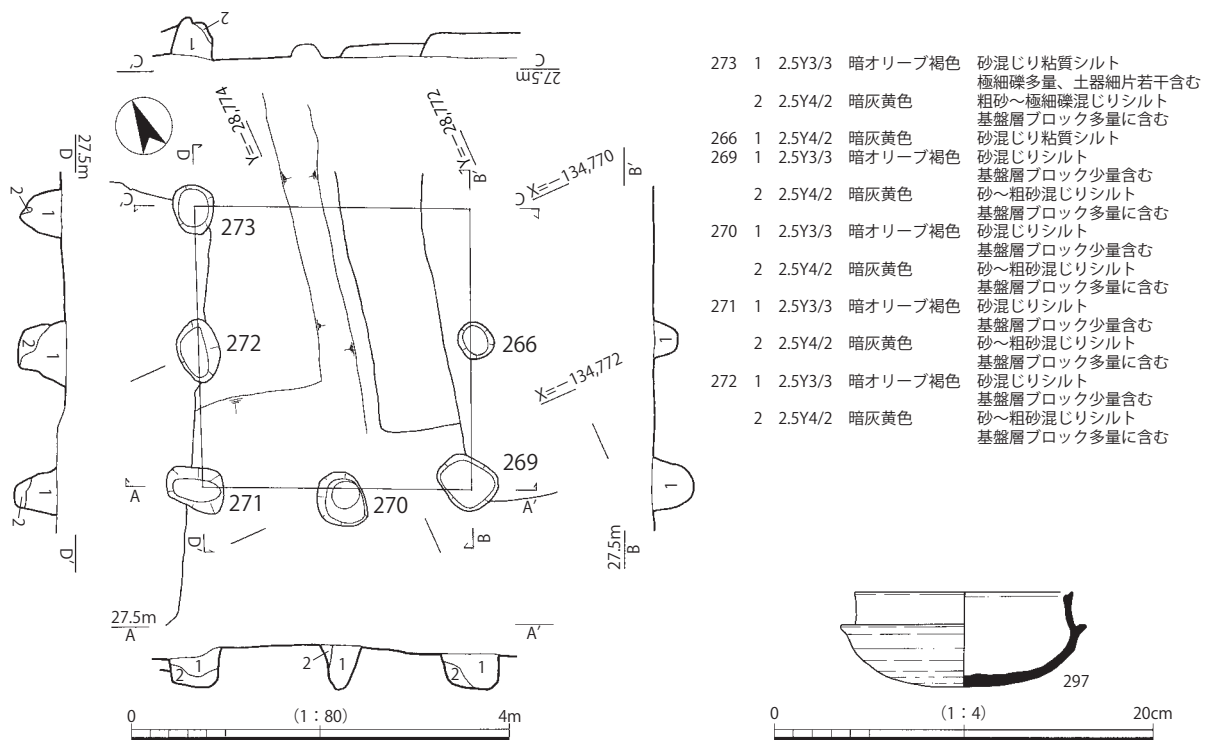


図 71 第 3 - 1 面 掘立柱建物 14 平・断面、及び出土遺物実測図

径 0.2 から 0.5 m 強を測る。深さは 0.1 m 未満から 0.2 m 弱しか遺存していなかったが、建物を構成する柱穴 9 基のうち、半数以上の 5 基において、直径 0.15 m 前後を測る柱痕跡が確認された。

建物の時期については、それを判別する手掛かりとなる土器が得られず、また、他の遺構とも重複関係にないため、明らかにすることはできなかった。

掘立柱建物 14 (図 48・71、図版 11)

調査区南西隅で検出され、北西柱列が竪穴建物 1、南東柱列が竪穴建物 3 と重複するため、その前後関係を詳細に検討した結果、三者の中で最も新しい段階に構築されたことを確認した。

建物の構造は南西から北東に棟筋を通す梁行 2 間、桁行 2 間以上の側柱建物で、北東妻となる柱列については、想定される位置を精査したが検出することはできなかった。身舎の規模は、南西の妻側が 2.9 m、北東側のそれが未確認、北西の平側が 2.3 m あるいはそれ以上、南東のそれが 1.9 m 以上を測り、床面積は 6.7 m² 以上を測る。掘方の平面は不整形円形をなし、大きさはそれぞれ短径 0.4 から 0.5 m、長径 0.4 から 0.6 m のものまでがみられる。深さは 0.2 m 未満から 0.6 m に達するものまでがみられ、今回の調査区の中では平面形、掘削深度とも概して大きい傾向にある。

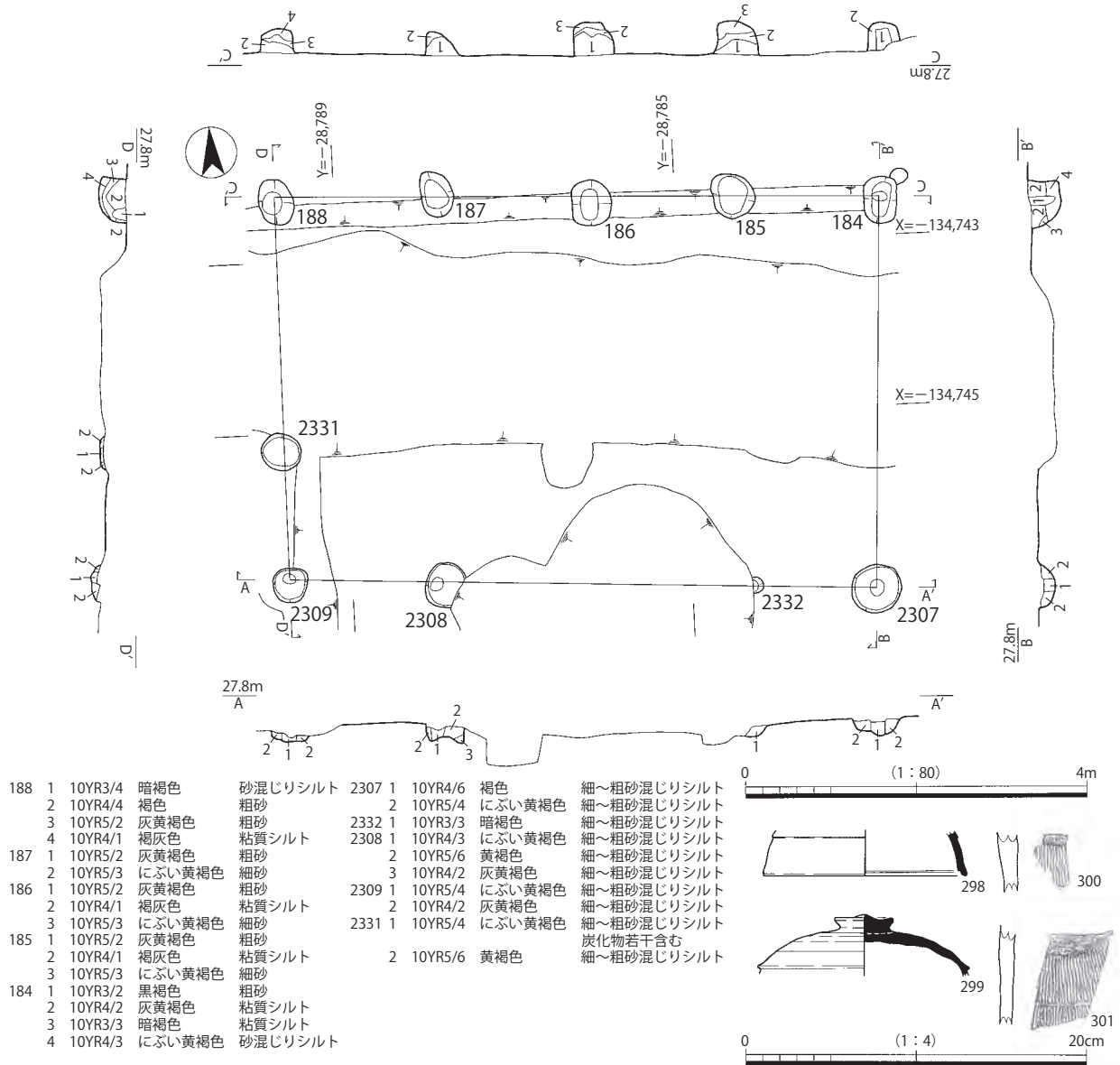


図 72 第 3 - 1 面 掘立柱建物 15 平・断面、及び出土遺物実測図

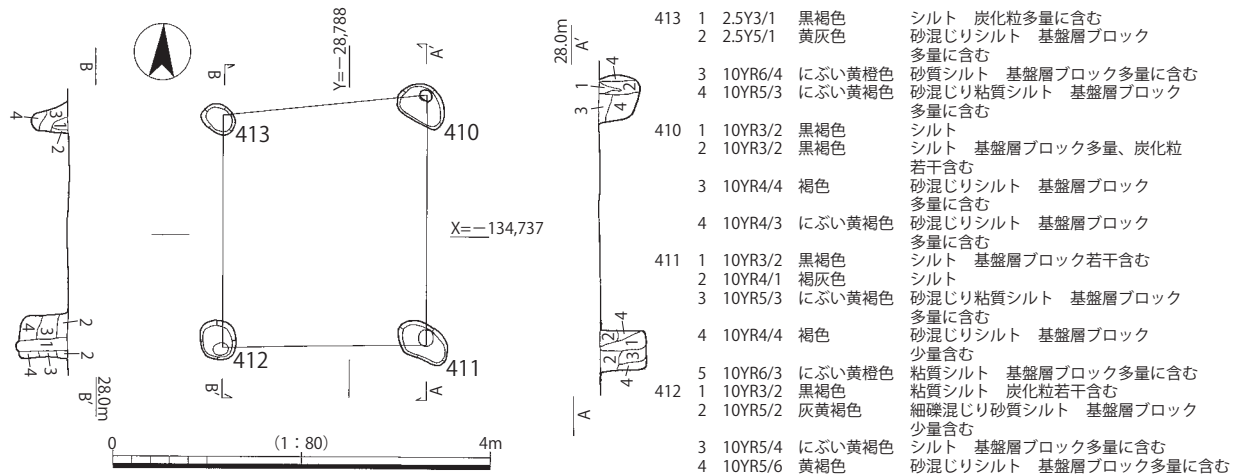


図 73 第 3 - 1 面 掘立柱建物 16 平・断面図

遺物には図 71 右下の 297 に示す 272 柱穴掘方出土の須恵器蓋杯の身がある。その特徴から T K - 23 型式段階に位置づけられるが、この柱穴が切り込む竪穴建物 1 と同時期のため、本来、竪穴建物の埋土に含まれていた遺物を混入させた可能性も考えられる。この 1 点以外に時期判断の行える遺物はなかったため、当該建物の時期については、須恵器の示す 5 世紀後半以降としか言及できない。

掘立柱建物 15 (図 48・72・157、図版 9・26)

調査区西端部の中央からやや南で検出された東西棟の側柱建物である。中央部には建物の長軸に対して平行する攪乱がおよび、さらに、南辺中央部も攪乱を蒙るため全容は明らかにし難いが、梁行 3 間、桁行 4 間を数えるものと復原され、主軸は平側柱筋の中間点を結んだ線に直行する形で北から東に 2° 偏る。ちなみにこの方向は真北とほぼ同様である。

身舎の規模は、東側の妻が 4.6 m、西側のそれが 4.5 m で、南側の平が 6.9 m、北側のそれが 7.1 m を測り、床面積は約 32.0 m² となる。掘方の平面は不整形円形から楕円形をなし、大きさは短径 0.4 m 前後、長径 0.6 m 弱のものまで差異がある。断面は偏平な U 字形を基本とし、2307・2308 柱穴では穴底に起伏がみられた。遺存する 10 基のうち 4 基には、直径 0.15 m 前後を測る柱痕跡が観察され、これらの中には、184 柱穴のように、一旦掘削した後、ある程度まで埋め戻して柱を設置する例も観察された。

柱穴の何基かより遺物が出土し、中でも 185 柱穴掘方北東部の埋土中位から、図 157 - 845 に示す滑石製子持勾玉が水平の状態出土したことは、土器との共伴例が乏しい中、貴重な新例を加えたことで特筆される。このほか、186 柱穴掘方と 187 柱穴掘方から図 72 の 301 と 300 に示す硬質の韓式系土器の壺片が出土し、これらについては第 2 - 1 面 1143 溝出土例と同一個体である可能性が高い。また、須恵器のうち、図 72 - 298 は 188 柱穴掘方出土の蓋杯の蓋、299 は 187 柱穴掘方より出土した有蓋高杯の蓋で、前者が口縁端部の形状から M T - 15 型式に、後者がつまみの中央が突出する形態的特徴や法量からみてこれと同時期とみられる。子持勾玉は扁平化した本体の両側面中央と背面中央に突出部を削り出して形を整えている。

建物の時期については、出土した土器から判断して 6 世紀前半以降と考えられる。

掘立柱建物 16 (図 48・73、図版 2・7・11)

調査区西端のほぼ中央部で検出され、位置的には掘立柱建物 1 と 3 に挟まれた形となる。前述した掘立柱建物 7 と同様、妻と平双方の柱間 1 間ずつとなる側柱建物のため、掘り込みやカマドが完全に削平された竪穴建物の残骸であることも考えられるが、先と同様に掘立柱建物として報告する。

建物の規模は、桁の柱間寸法 2.2 m、梁の柱間寸法 2.5 m を測り、床面積は 5.5 m² となる。棟筋を南北に通し、主軸はその向きでほぼ座標北と重なる。掘方は不整な楕円形や隅丸方形で、大きさは短辺 0.3 m 前後、長辺 0.6 m 前後を測る。断面は先ずぼまりの U 字形や隅の丸い矩形をなし、深さは 0.4 から 0.6 m と概して深い。北西の 413 柱穴以外では直径 0.15 m 前後の円筒形をなす柱痕跡を確認した。

時期については、各柱穴からわずかに遺物が出土したのみで、この中に時期の判別できるものは含まれておらず、また、隣接する掘立柱建物 1 や 3 と重複する関係にないため不明である。

掘立柱建物 17 (図 48・74、図版 2・9)

調査区南西隅で検出した側柱建物である。この建物については調査段階では 2319 柱穴を起点としてそこから 7 - 2322 柱穴までに柱穴 4 基が並んでいること、さらに、前者の柱穴から西に 2314 柱穴が先の柱列から直角方向に位置していることから掘立柱建物の可能性を考慮し、その延長線上の壁面を一部掘削して、2313 柱穴 (07 - 1 調査 10 - 71 柱穴) を検出したが、その柱間寸法が広いことから一連の遺構とは認定せず、南北方向の柱列として調査を行った。ただし、今回の調査が完了した翌

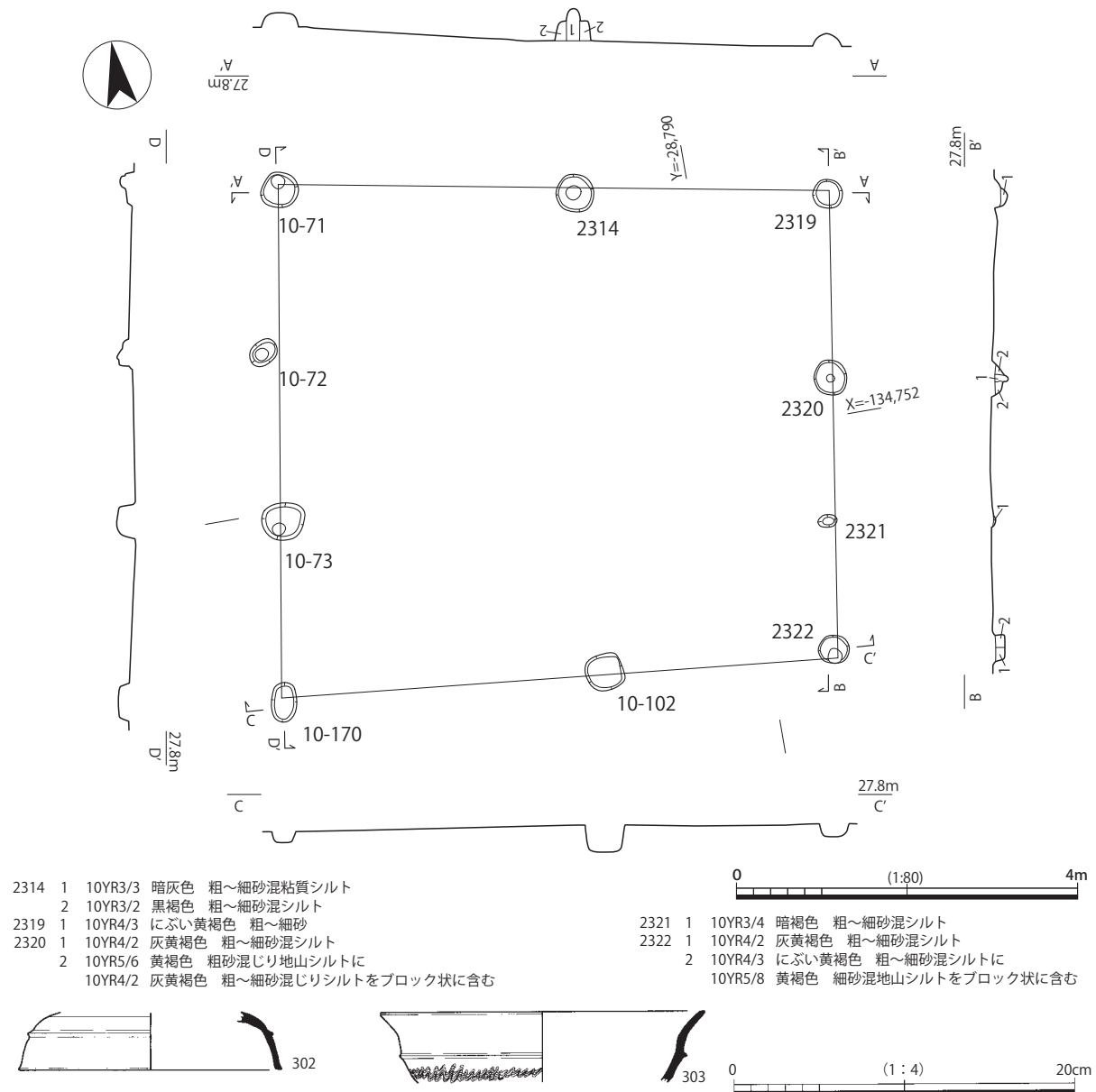


図 74 第 3 - 1 面 掘立柱建物 17 平・断面、及び出土遺物実測図

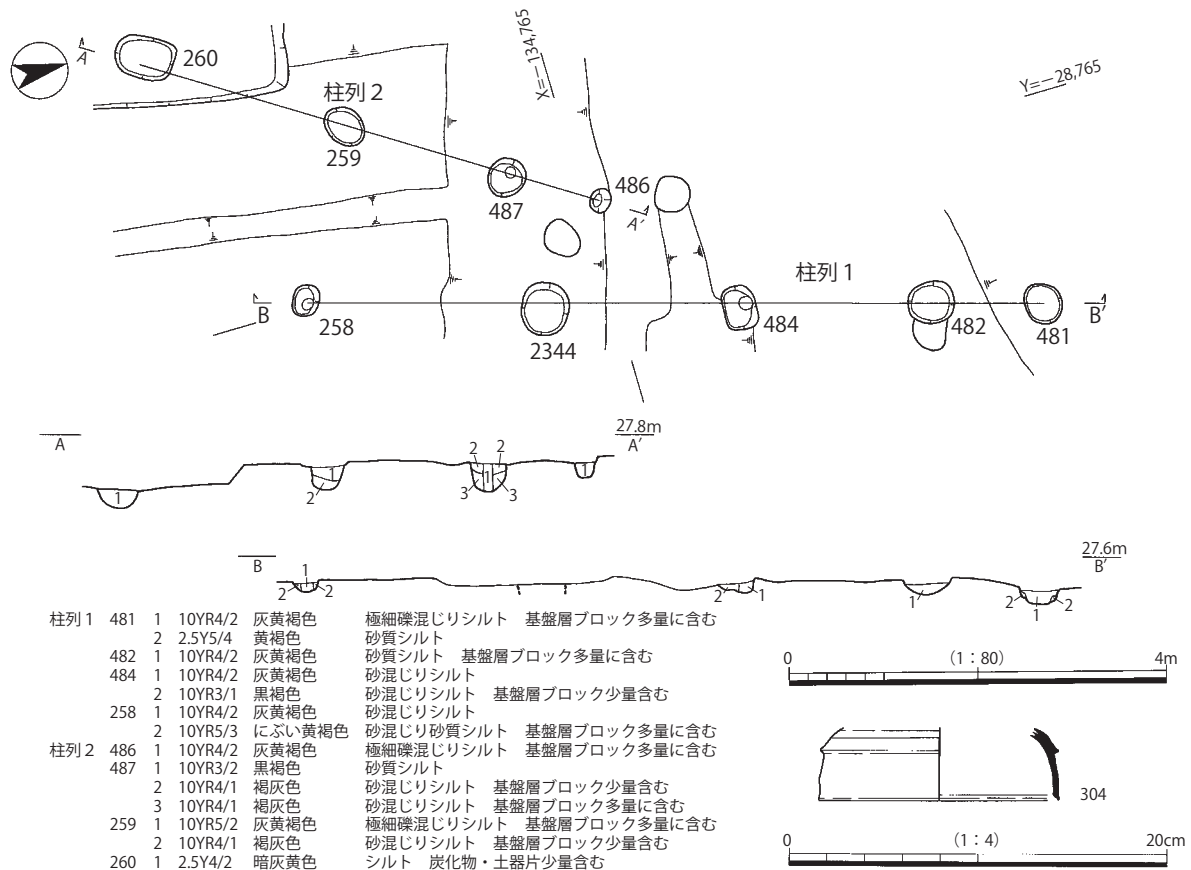


図75 第3-1面 柱列1・2 平・断面、及び出土遺物実測図

年度に07-1調査が予定されていたため当初より側溝は掘削せず、また、万が一にも掘立柱建物となる可能性を考慮して、2313柱穴の埋土を写真測量に耐え得る最小限のみ掘り窪めて一旦埋め戻し、07-1調査に委ねることとして調査の万全を期した。その結果、当初の所見が覆されて、10-71柱穴と再認識されることによって単なる柱列ではなく、梁行3間、桁行間の掘立柱建物となることが判明した。以上のような状況のため、建物の全容については07-1調査の報告を参照して頂くこととし、ここでは今回の調査で知り得た範囲内について述べる。

建物は、東西棟の側柱建物で、規模は東側の妻で5.4mを測る。建物の主軸はそれに直交する方向で北から東に向かって10°偏る。掘方の平面と大きさは、直径0.3から0.6mの円形を基本とするが、これらの中で、7-2322柱穴のみは短径0.15m、長径0.20mの楕円形で、規模が小さい。深さは、後世の削平により0.05から0.20m未満と浅く、断面はU字形のものや隅丸の矩形を呈するものが混在する。検出された柱穴6基のうち、半数の3基には直径0.10から0.15mの円筒形を呈した柱痕跡が観察された。柱穴埋土から若干の遺物が出土し、そのうち2点の須恵器を図74下段に示した。302は7-2314柱穴掘方より出土した蓋杯の蓋、303は7-2310柱穴から出土した無蓋高杯の杯部で、形態の特徴や法量からみて、前者がTK-10型式、後者がTK-47型式に属すると考えられる。

建物の時期は07-1調査で検出された各柱穴からは時期の判別できる遺物が出土していないため、上記の須恵器が指し示す6世紀中頃を上限とするものと考えられる。

柱列1 (図48・75)

調査区南西部で検出された。北東から南西に5基の柱穴が6.8mにわたって並ぶことから柱列と認識した。柱列の主軸は、並んだ方向で北から17°東に向く。掘方の平面は不整な円形を主とするが、そ

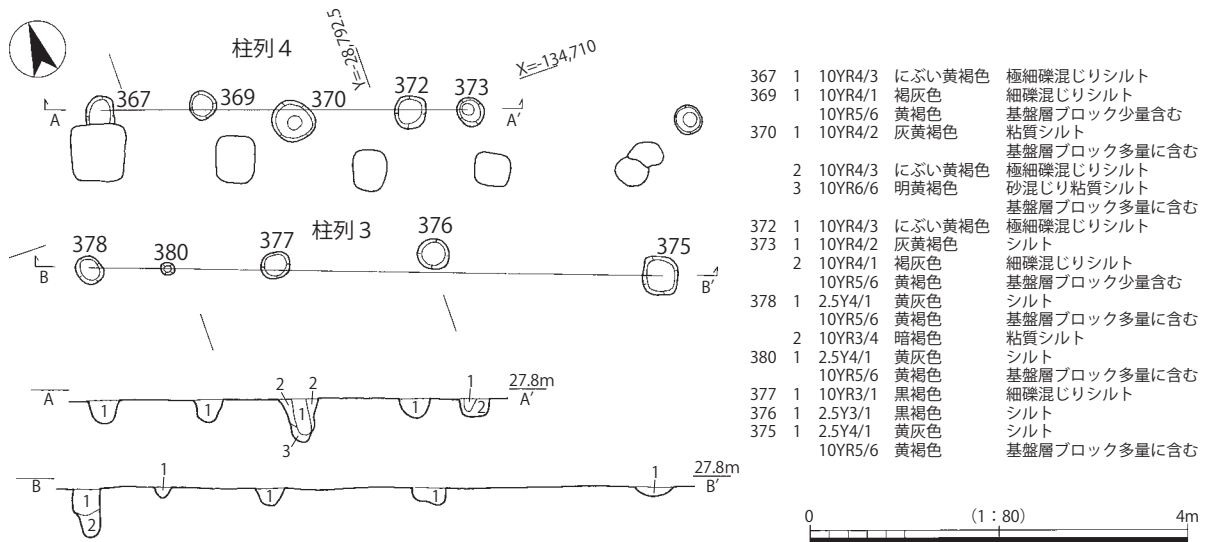


図 76 第 3 - 1 面 柱列 3・4 平・断面図

のうち 484 柱穴のみは隅丸長形状を呈する点において他と異なる。大きさは、短径 0.2 強から 0.4 m 弱、長径 0.4 弱から 0.6 m 弱のものまでさまざま、深さは後世の削平が激しく 0.1 から 0.2 m 前後と浅い。

断面は皿形を基本とし、484 柱穴のように柱痕跡部分のみが一段深くなる例も存在する。なお、5 基のうち、258 柱穴と 484 柱穴では、埋土中に直径 0.15 m 前後を測る円筒形をなした柱痕跡を確認した。この柱列の時期に関しては、各柱穴からはほとんど遺物が出土していないため、ここから判断する手掛かりは得られなかった。ただし、周辺の遺構と比較した場合には、南東側約 3.8 m に掘立柱建物 13 の北西側妻柱列がこの柱列とほぼ同様の方向で並んでいることに注目され、掘立柱建物 13 に対する北西側からの視線をさえぎるために設けられた柵列あるいは塀として機能していたとの解釈も可能となる。ならばこの二つの遺構に深い関連性をみいだせることとなる。

柱列 2 (図 48・75)

上記、柱列 1 から西に 1 から 2 m 離れた位置で検出された柱穴 4 基が一行に並ぶため柱列とした。その主軸は北から東へ 33° 偏っている。掘方の平面は不整な円形から楕円形をなし、大きさは、短径 0.2 から 0.3 m、長径 0.2 強から 0.6 m のものまでさまざま、深さは 0.1 から 0.3 m を測る。また、これら 4 基の柱穴のうち、487 柱穴では、埋土中に直径 0.15 m 前後を測る円筒形をなす柱痕跡を確認した。

出土遺物のうち、図 75 - 304 に示す須恵器蓋杯の蓋が図化できた。端部の特徴や法量からみて TK - 23 型式に位置づけられるため、この柱列が設けられた上限を 5 世紀後半とすることができる。

なお、この柱列の南東側 3.3 m には掘立柱建物 11 北西側妻柱列が、さらに 4.3 m 離れた位置には掘立柱建物 12 のそれが主軸をほぼ同じくして存在し、かつ、260 柱穴と互いの南西隅柱とを揃えるような位置関係にあることから、これら 2 棟のいずれかに伴う可能性があるため、この柱列が北西方向からの視線を遮蔽するために設置された塀または柵列であったとも考えられる。そして、どちらかの掘立柱建物に付随する柱列であったならば、時期が不明なこれらに一定点を付与することとなる。

柱列 3 (図 48・76、図版 1・9)

調査区北西側において検出された。北西から南東方向に大小 5 基の柱穴がほぼ直線的に並ぶことから柱列と認識し、主軸は柱筋に直交する形で北から東に向かって 20° 偏っている。

掘方の平面は円形から不整円形のものが 4 基、隅丸長形状をなすものが 1 基で、それらの大きさは、

短径 0.15 強から 0.3 m 強、長径 0.2 弱から 0.4 m を測る。断面は偏平な U 字形から傾斜を持つ隅丸の矩形を呈し、掘削深度は 0.15 から 0.5 m までとさまざまである。

掘方埋土内から時期の判明する遺物は出土していない。しかし、後述する柱列 4 と共に掘立柱建物 4 の桁柱列と方向を揃え、さらに、北西妻側の柱列がほぼ並ぶことを重視するならば、北西棟持柱との間に先後関係はあるが、掘立柱建物 4 には床束が伴うためその床構造に関連する柱列、あるいは、掘立柱建物 4 を構築する際の仮設構造物の柱列であった可能性も考えられよう。

柱列 4 (図 48・76、図版 1・9)

前記の柱列 3 から北東 1.6 m の位置で、柱筋は不揃いながら柱穴 5 基が検出されたためこれを柱列 4 とした。主軸は掘立柱建物 4 や柱列 3 と同様に柱筋に直交する形で北から 20° 東に偏っている。

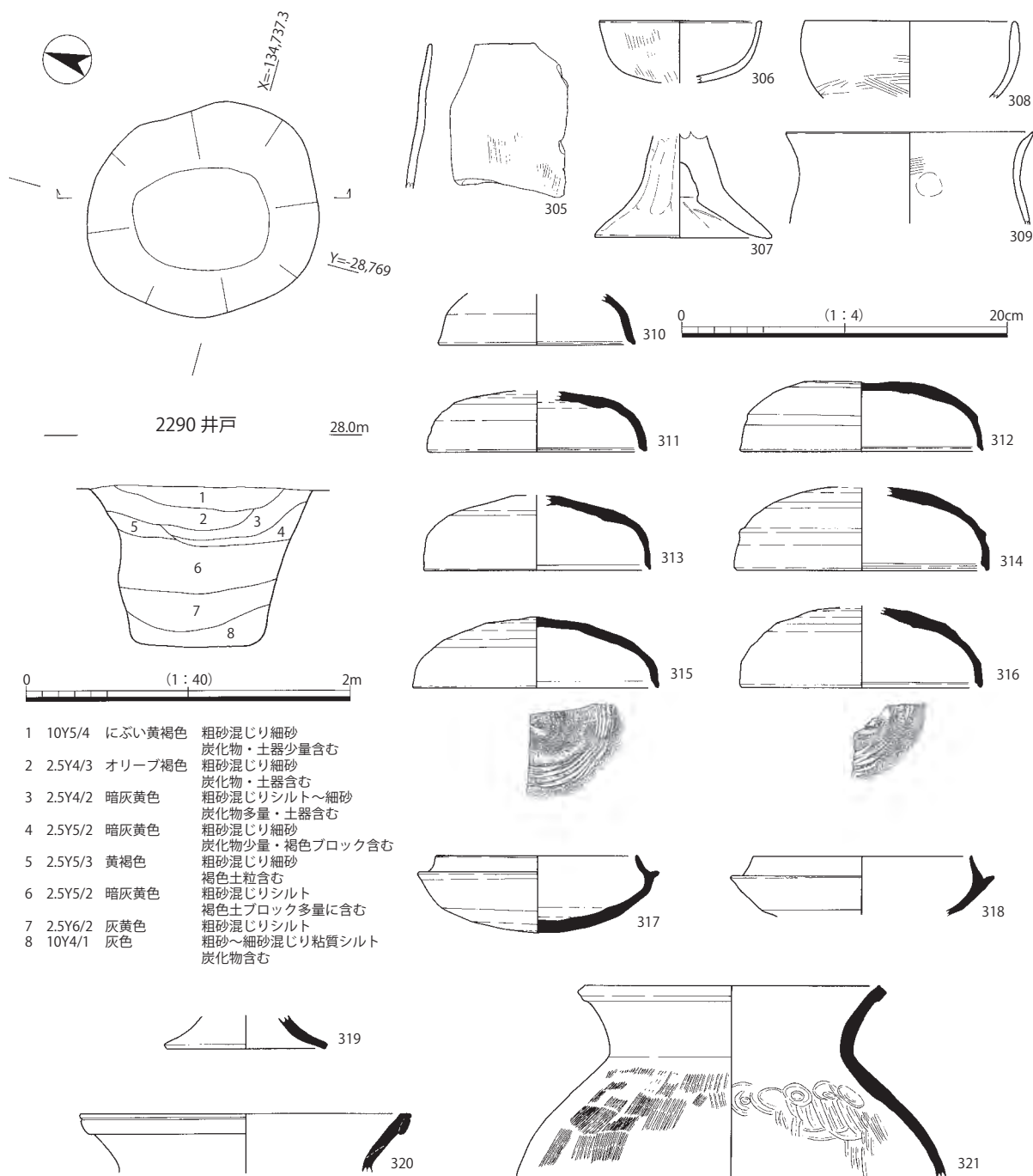


図 77 第 3 - 1 面 2290 井戸 平・断面、及び出土遺物実測図

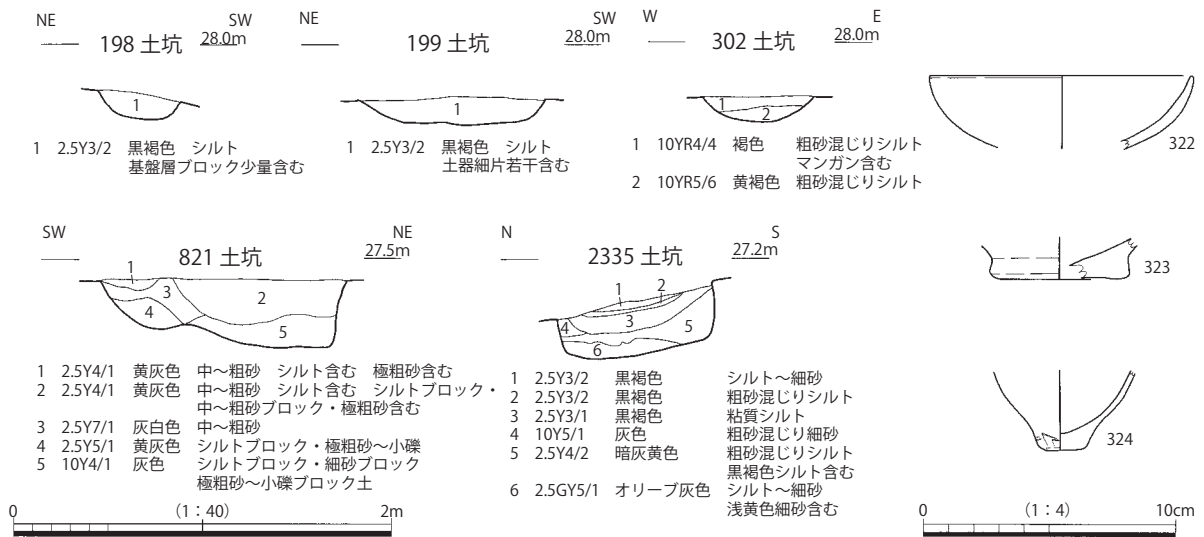


図78 第3-1面 198・199・302・821・2335土坑 断面、及び198・199土坑 出土遺物実測図

掘方の平面は不整形円形をなし、大きさは短径0.3弱から0.4m強、長径0.3強から0.5m弱を測る。断面はU字形をなし、370柱穴の0.5m弱となる例を除いて0.2m前後を測る。

掘方埋土内から時期の判明する遺物が出土しなかったため、ここから判断することはできないが、この柱列4、掘立柱建物4、柱列3との間には、先述のような相関性が看取される。

2290井戸 (図48・77・87、図版2・12)

調査区中央からやや南西の位置において検出された。平面は北西方向から南東方向にやや長い不整形円形をなし、規模は、長径1.4m、短径1.3mで、深さは1.0mを測る。

断面は、上位がやや漏斗状に広がる隅丸長方形を呈し、底部は平坦となる。埋土は、図77の断面図のように8層に細分され、堆積状況からみて枠が設置された様相は看取されない。また、堆積土の中位には4から6のような団粒状をなす土塊が含まれ、特に6の層準ではこれが顕著に観察されることから、廃棄後やや時間が経過した後、中程まで埋め戻されその上に土器などを投棄したと考えられる。

出土遺物には、図77の土器などがある。うち、305から309の5点は土師器、310から321の12点は須恵器である。土師器のうち、305は甑の口縁部片、306は杯、307は高杯の脚部、308は鉢、309は甕の体部上半から口縁部の破片である。須恵器には310の有蓋短頸壺の蓋、311から318の蓋杯、319の高杯の脚部、320と321の甕の口縁部がみられ、蓋杯は311から316の蓋と、317・318の身がある。

これらの時期は、須恵器蓋杯の口径と受部径が15cm前後となること、312や314のように、蓋の天井部と口縁部とを界する圏線が形骸化しながらも残存することから、TK-10型式からMT-85型式に位置づけられる。よってこの井戸が廃絶し、埋め戻されたのは、6世紀中頃から後半とみなされる。

198土坑 (図48・78・83)

調査区西端の中央からやや北寄りの壁際から検出され、排水用の側溝を掘削時に確認したため西半の一部を削平してしまった。平面は北東から南西に長い楕円形を呈し、規模は長軸0.5m、短軸0.2m強、深さ0.15m弱で、坑底はほぼ平坦となる。断面は腕形を呈し、埋土は、団粒状となった基盤層を少量含む黒褐色シルトの単一層で、その中から図78-323のような底部片が出土した。この遺物については、表面の遺存状況が非常に悪いが、形態や胎土からみて弥生時代後期の壺と考えられる。

遺構の時期については、上記の壺が出土したこと、埋土の色調が周辺の遺構のものより一段と黒味を

帯び固く締まっていたことより、弥生時代後期と考えられる。

199 土坑 (図 48・78・83)

前述した 198 土坑から南東約 0.4 m で検出され、これを一回り大きくしたような形をなす。平面は北東から南西に長軸を持つ細長い円形で、規模は長軸 0.9 m、短軸 0.4 m、深さ 0.15 m となり、坑底には若干の起伏が観察された。断面は皿形を呈し、埋土は、土器の細片を混じえた黒褐色シルト一層で、この土器を接合した結果、図 78 - 322 に示す高杯と、324 のような体部から底部にかけての部位が復原された。胎土や形態から類推して双方とも弥生時代後期の鉢とみなされ、この土器の時期と、198 土坑と同様の黒褐色を呈する特徴的な埋土の様相からみて、土坑の時期は弥生時代後期と考えられる。

302 土坑 (図 48・78)

調査区西半の中央からやや南西で検出された。北からわずかに西へ偏った方向に頂点を持つ下膨れの長楕円形を呈し、規模は、長軸 1.4 m、短軸 0.6 m、深さ 0.15 m を測る。断面は、図 78 に示すような皿形を呈し、埋土は褐色を帯びた色調を呈する粗砂混じりシルトで、2 層に細分される。

出土遺物の中に凶化できるものや、特徴的なものが含まれていなかったため時期は特定できない。

548 土坑 (図 48・79)

調査区北東部において土坑、溝、ピットなどが集中して検出されたが、それらの中で最も東寄りで確認された。平面は北西から南東に長い不定形を呈し、規模は、長軸 4.0 m、短軸 2.6 m、深さ 0.3 m を測る。断面は隅が緩やかに丸い逆台形を呈し、坑底はほぼ平坦となる。埋土は、黒褐色シルトを混じえた暗黄灰色粗砂の単一層で、そこから図 79 - 325 に掲載する M T - 15 型式に位置づけられる須恵器蓋杯の身の破片などが出土した。したがって遺構の時期は、6 世紀前半となる。

756 土坑 (図 48・79)

上記と同じ調査区北東部の一角で検出された。北西から南東にかけて 3 基の土坑が接続して開削され、それらの中で最も南東に位置する。北西側の土坑に一部を削られるように見えるが、図 79 の断面図から互いに独立した遺構であると理解される。平面は西側が窪んだ三日月形となり、規模は、長径 1.3 m、短径 0.8 m、深さ 0.1 m を測る。断面は、東側に膨らむ皿形で、埋土は 2 層に細分される。

時期は、遺物がないことや、これを覆う包含層出土遺物も非常に長期間にわたるため特定できない。

795 土坑 (図 48・79)

前記の遺構集中区で検出され、南側は攪乱により一部が失われる。平面は東西に長い不整な楕円形で、規模は、長径 1.7 m、短径 0.6 m 以上、深さ 0.3 m を測り、坑底の東側には緩やかな段が形成される。断面は基本的には矩形を呈するが、東側は漏斗状に大きく広がる。埋土は、黒色から灰色を基調とするシルトで、最上層には、図 79 のように団粒化した粗砂を多量に含むため、埋め戻された可能性もある。

出土遺物の中に特徴的なものが含まれていなかったため、時期については不明である。

798 土坑 (図 48・79)

前段に報告した 795 土坑から、南西方向に約 3 m 離れた位置で検出された。平面は東西方向がわずかに長い不整円形をなし、規模は、長径 1.2 m、短径 0.9 m、深さ 0.25 m を測る。断面は、壁と底との境がやや屈曲する偏平な U 字形を呈し、中央部が窪む。埋土は古土壤に由来するとみられる黒色を呈した粗砂混じりシルトで、この中に遺物は含まれていなかった。ために、時期は判別できなかった。

821 土坑 (図 48・78・86)

調査区北東部のほぼ中央で検出され、平面は南北がわずかに長い不整円形を呈する。規模は、長径 1.4

m、短径 1.3 m、深さ 0.4 m 弱を測る。断面は東側が矩形、西側が皿形となり、坑底には起伏がみられた。埋土は、黄灰色から灰色を基調とした中砂から粗砂で、各層準に極粗砂からシルトを中心とする団粒状の堆積物を夾雑させているため、不安定な環境の中で比較的短期間のうちに埋没したことを窺わせる。

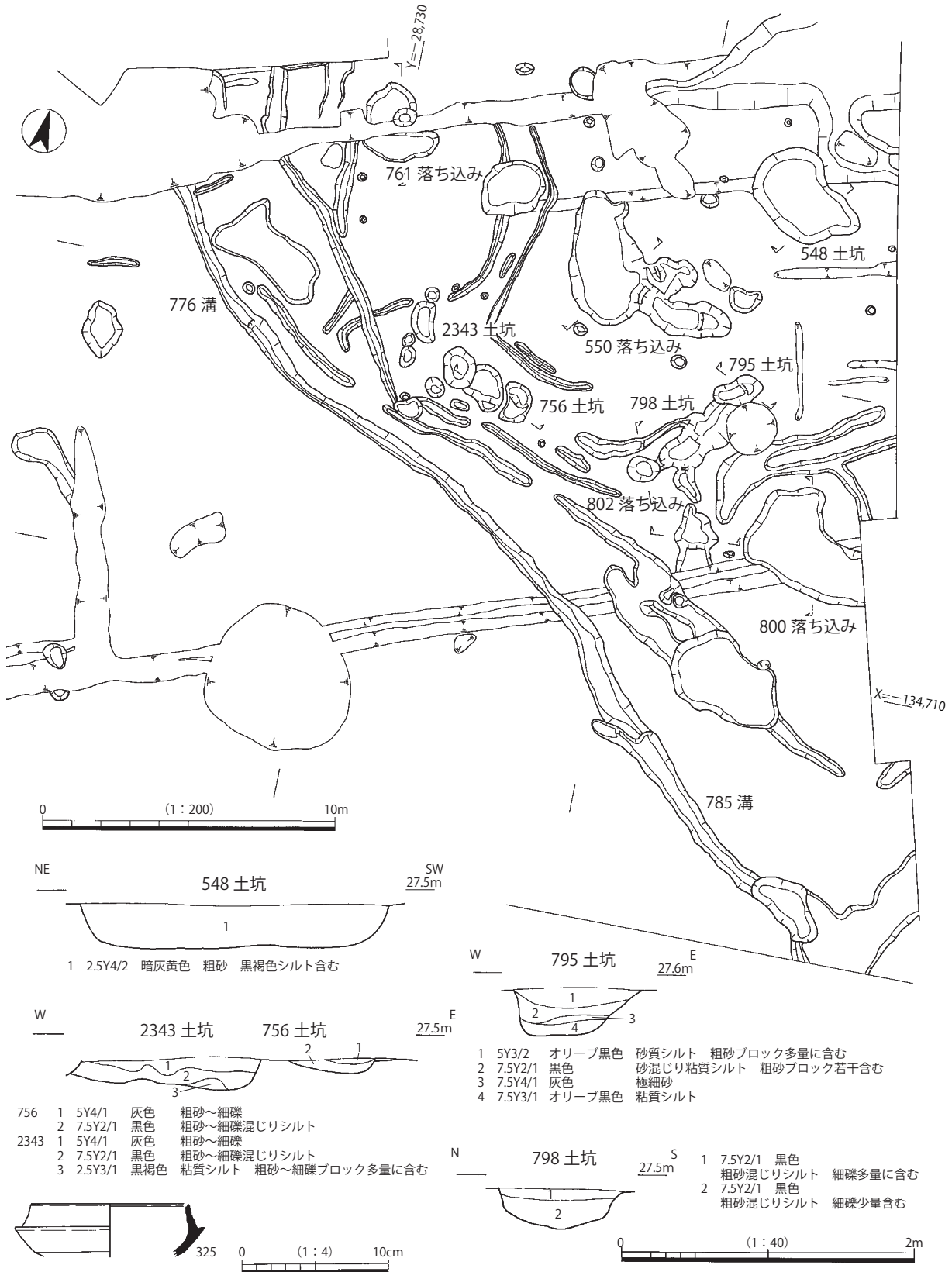


図 79 第 3 - 1 面 548・756・795・798 土坑 平・断面、及び 548 土坑 出土遺物実測図

時期は、埋土に遺物が含まれていなかったため不明で、本土坑と重複し、これよりも先行する溝のそれも特定できなかったため、ここから手掛かりを得ることもできなかった。

2335 土坑 (図 48・78)

調査区北半の中央から西、07-1 調査で平坦面 1 とされた高まり部の北東端で検出された。平面は多角形状をなし、規模は東西、南北とも 0.7 m 前後、深さ 0.3 m を測る。断面は矩形を呈し、埋土は図 78 のように 6 つに分層されるが、大きくは下位の灰色系シルトから細砂、上位の黒褐色粗砂から細砂混じりシルトの 2 単位で捉えられる。埋土に遺物が含まれていないため、ここからは時期を特定できないが、上位を削剥する第 2-2 面の溝群が 15 世紀までとなるため、少なくともこの段階以前と言える。

670 土坑 (図 48・80)

調査区北東隅の遺構集中部で検出された。平面は東部に頂点を持つ倒卵形を呈し、規模は、長軸 0.6 m、短径 0.4 m、深さ 0.15 m を測る。断面は、東部にやや偏った皿形を呈し、坑底はほぼ平坦となる。埋土は、上位の黒褐色粗砂混じりシルト、下位の暗黄灰色を帯びた粗砂から細礫に細分される。

埋土中から遺物は出土していないため、これから時期を判断することはできなかった。

671 土坑 (図 48・80)

上記 670 土坑の西側約 0.9 m の位置で検出された。平面は北西から南東に長いびつな楕円形を呈し、規模は、長径 1.5 m、短径 1.1 m、深さ 0.2 m となる。断面は、中央が窪むため、皿を 2 枚重ねたような形態をなし、坑底は内湾する。埋土は 3 層に分けられ、最上位には古土壌に由来する黒褐色を呈した粗砂混じりのシルトが堆積している点において他のほとんどの遺構と共通する。

埋土中からは時期の特定できる遺物が出土していないため、これを明らかにすることはできなかった。

676 土坑 (図 48・80)

671 土坑の南側で検出された。平面は、北から南にのびた不整円形をなし、規模は、長径 1.2 m、短径 1.1 m、深さ 0.1 m 強を測る。断面は、扁平な皿形をなし、坑底は播鉢状となる。埋土は 2 層に細分され、他の遺構と変わらず、上位に黒色の粗砂混じりシルトの堆積層が観察される。

遺物がないため、時期は不明だが、埋土から推察して周辺の大多数の遺構に近いと考えられる。

678 土坑 (図 48・80)

676 土坑から南に 0.5 m 離れた位置で検出された。平面は東西方向に長いびつな形状をなし、規模は、長軸 1.1 m、短径 0.6 m、深さ 0.1 m 強となる。断面は、南側に偏った皿形をなし、坑底は内湾する。埋土は南から北に向かって順次重なるようにして堆積したような状態で 3 層に分けられ、後世の削平によるものか、上位の黒色土層が観察されず、この点において他の大多数の遺構とは異なる。

遺物は出土せず、上位の堆積土も他の遺構と異なるため、ここから時期を類推することもできない。

682 土坑 (図 48・80)

671・676・678 土坑から南東約 9 m で検出された。平面は北西に基部を向けた倒卵形を呈し、規模は、長径 0.9 m、短径 0.7 m、深さ 0.15 m を測る。断面は坑底がやや突出した椀形で、埋土は、3 層が斜め方向に折り重なるようにして堆積する点や、最上部に黒色系の土層がないことで上記 678 土坑と共通する。

出土遺物がないことや、堆積土の様相にも共通点がないため時期は特定できない。

702 土坑 (図 48・80)

670 土坑の南約 5.0 m で検出され、南側には後述する 703 土坑が接するようにして位置する。平面は、

北西から南東に長い涙滴形を呈し、規模は長軸 3.2 m 弱、短径 1.2 m を測る。断面は皿形を呈し、埋土は黒褐色を呈した粗砂混じりシルトの単一層である。出土遺物がなく、時期比定の根拠をみいだせないが、周辺に存在する他の大多数の遺構と埋土が同様であることでは共通点を指摘できる。

703 土坑 (図 48・80)

676 土坑と 719 土坑のほぼ中間で検出された。平面は、南西から北東にのびる涙滴形を呈し、規模は、長軸 1.2 m 強、短軸 0.6 m で、断面は東側が一段下がった皿形を呈する。埋土は、下位の暗灰黄色粗砂

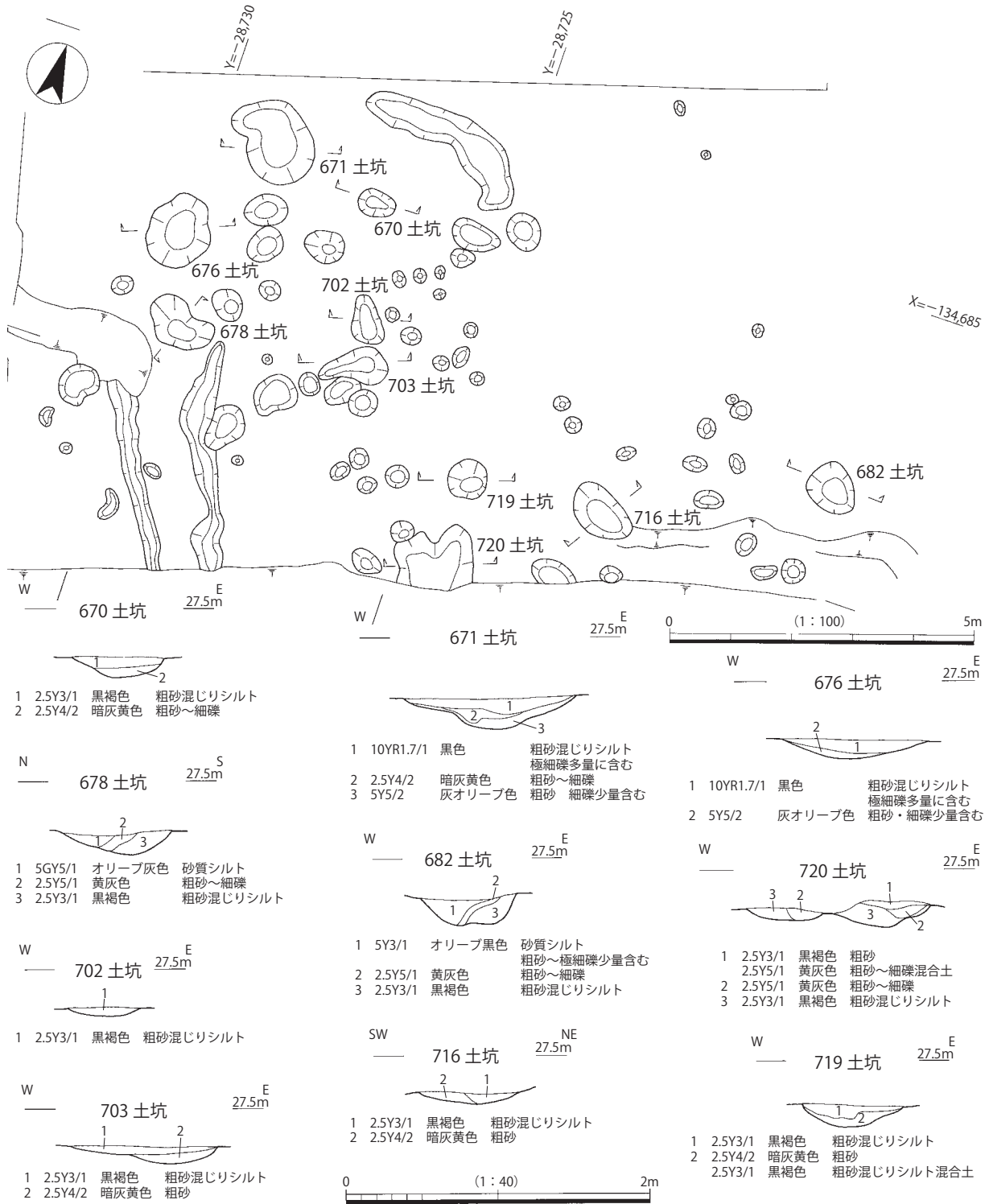


図 80 第 3 - 1 面 670・671・676・678・682・702・703・716・719・720 土坑 平・断面図

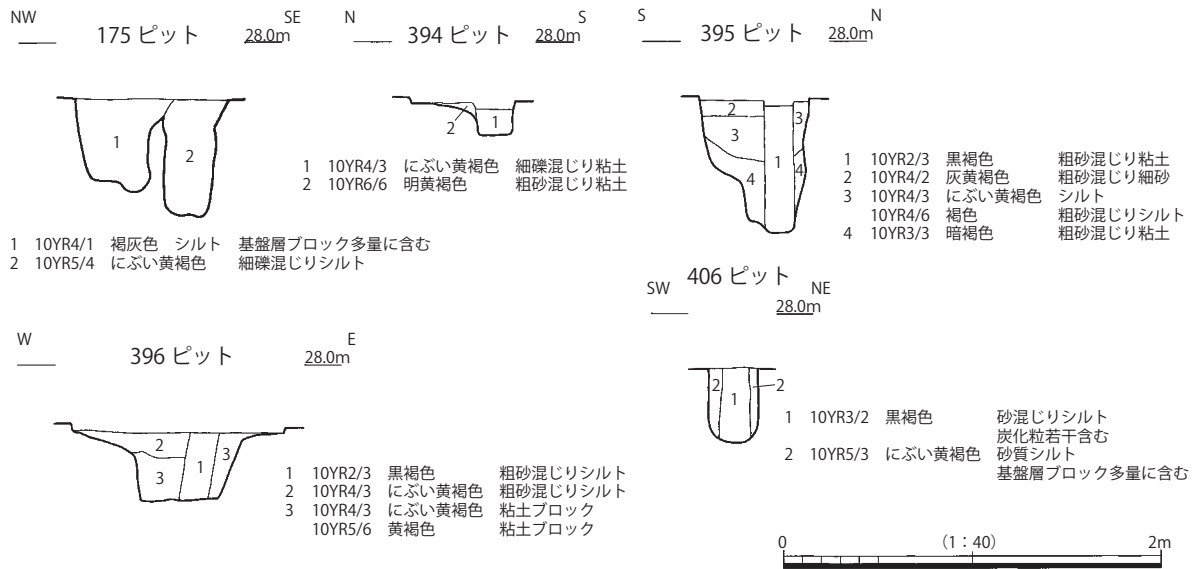


図 81 第 3 - 1 面 175・394・395・396・406 ピット 平・断面図

と、上位の黒褐色粗砂混じりシルトの 2 層に分けられ、上位は近隣の遺構と同様に、古土壌に由来するものと考えられる。出土遺物がないため時期は特定できないが、上位に黒褐色粗砂混じりシルトが堆積する点においては周辺に存在する他の多くの遺構と共通する。

716 土坑 (図 48・80)

682 土坑と 719 土坑を結んだ線からやや後者寄りで見出された。平面は、北西から南東に細長い不整な楕円形をなす。規模は、長軸 1.2 m 弱、短軸 0.7 m、深さ 0.05 m を測る。断面は偏平な皿形をなし、埋土は 2 層に分けられるが、最終堆積に従前と同様の古土壌が堆積することで他の多くの例と共通する。

時期については、それを判別し得る土器などの資料が出土していないため特定できない。

719 土坑 (図 48・80)

703 土坑と 716 土坑のほぼ中間で見出された。平面はほぼ円形を呈し、規模は東西、南北とも 0.6 m、深さ 0.15 m を測る。断面は皿形を呈し、埋土は、上位に黒褐色粗砂混じりシルトが堆積する点では他と同様だが、下位の堆積がこれと暗黄灰色粗砂との混合土となっている点において相違する。

埋土からは、時期の特定が可能な土器などが出土しなかったため、これを明らかにできなかった。

720 土坑 (図 48・80)

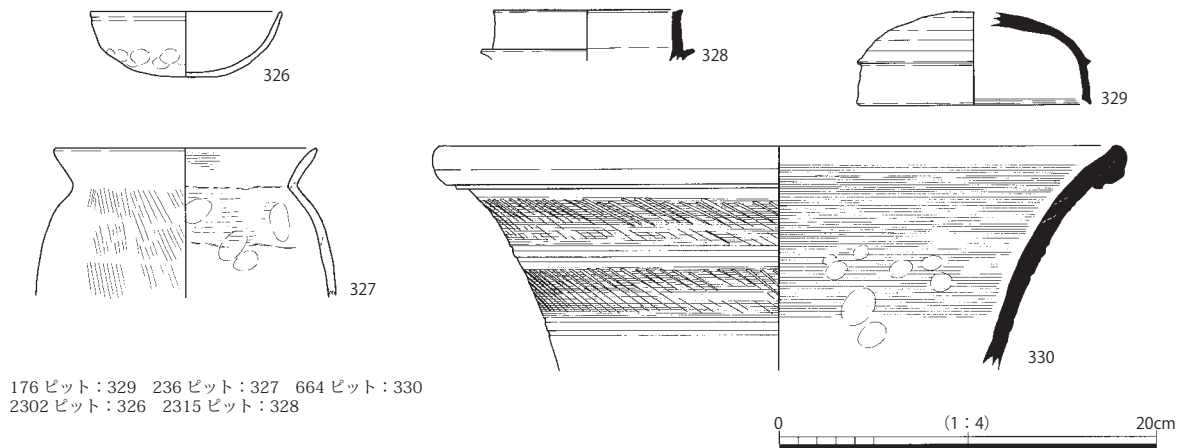
上記 719 土坑の南側約 1.4 m の位置で見出された。攪乱により南東部を失うが、下半を欠失した猪目形状をなし、規模は、その方向に 1.0 m 以上、これに直交する方向に 1.3 m を測る。断面は、皿を横に 2 枚並べたような形をなし、埋土は黒褐色と黄灰色の細礫からシルトを混合させたような状態となる。遺物が出土しなかったためここから時期を特定することは不可能だが、古土壌に由来する黒褐色の土層が観察される点においては他の遺構との共通点を指摘できる。

821 土坑 (図 48・78、図版 2)

調査区中央から南東の位置で見出され、平面は南北に軸を持つ楕円形を呈す。規模は長径 1.6 m、短径 1.2 m、深さ 0.35 m を測り、断面は東側の角度が急な逆台形で、埋土は、団粒状の土塊を混じえた灰色系の中砂から粗砂となることで、他の多くの遺構と相違する。

時期については、遺物も出土しておらず、埋土の共通点もないことから不明である。

第 3 面からは、掘立柱建物を構成するもの以外にも明瞭な柱痕跡の観察される柱穴や、遺物の出土し



176 ピット：329 236 ピット：327 664 ピット：330
2302 ピット：326 2315 ピット：328

図 82 第 3 - 1 面 176・199・236・664・2302・2315 ピット 出土遺物実測図

たピットが検出されたため、以下にこれらを一括して報告する。

175 ピット (図 48・81・83、図版 11)

掘立柱建物 3 の南東妻柱辺棟持柱からその方向に 2.8 m の位置で検出された。平面は、北西から南東に長辺を有するいびつな長方形を呈し、規模は、長辺 0.8 m、短辺 0.6 m を測るが、掘削の結果、図 81 の断面図のように、北西側のピットが南東側のそれより新しいと判明した。北西側のピットは深さ 0.5 m を測り、底部は二段掘となる。埋土中には、灰褐色系のシルトに団粒状をなす基盤層の碎片が多量に含まれ、南西側のピットは、深さ 0.6 m で、埋土は、にぶい黄褐色細礫混じりシルトである。双方ともに特徴を持った遺物が出土しなかったため、時期については不明である。

394 ピット (図 48・81・83)

調査区西辺中央からやや北で検出された。平面は、頂部を北西に向けた倒卵形を呈し、規模は、長軸 0.5 m、短軸 0.3 m、深さ 0.03 m を測る。南東側は、図 81 の断面図のように、直径 0.2 m にわたってにぶい黄褐色細礫混じり粘土が円筒形をなして一段落ち込んでいたため、これを柱痕跡と判断した。

時期については、その判断材料となる遺物が出土しなかったため不明である。

395 ピット (図 48・81・83、図版 11)

上記の 394 ピットから南東に 0.5 m 離れた位置で検出された。平面は北東から南西に長軸を持つ不整形な形態をなし、規模は、長軸 0.6 m、短軸 0.4 m を測る。掘方は北東側が一段深く掘削され、そこには図 81 のような状態で直径 0.15 m 弱を測る円筒形をなした柱痕跡が明瞭に観察された。

時期は出土遺物の中にそれを推し量ることのできる資料がないため、明らかにすることができない。

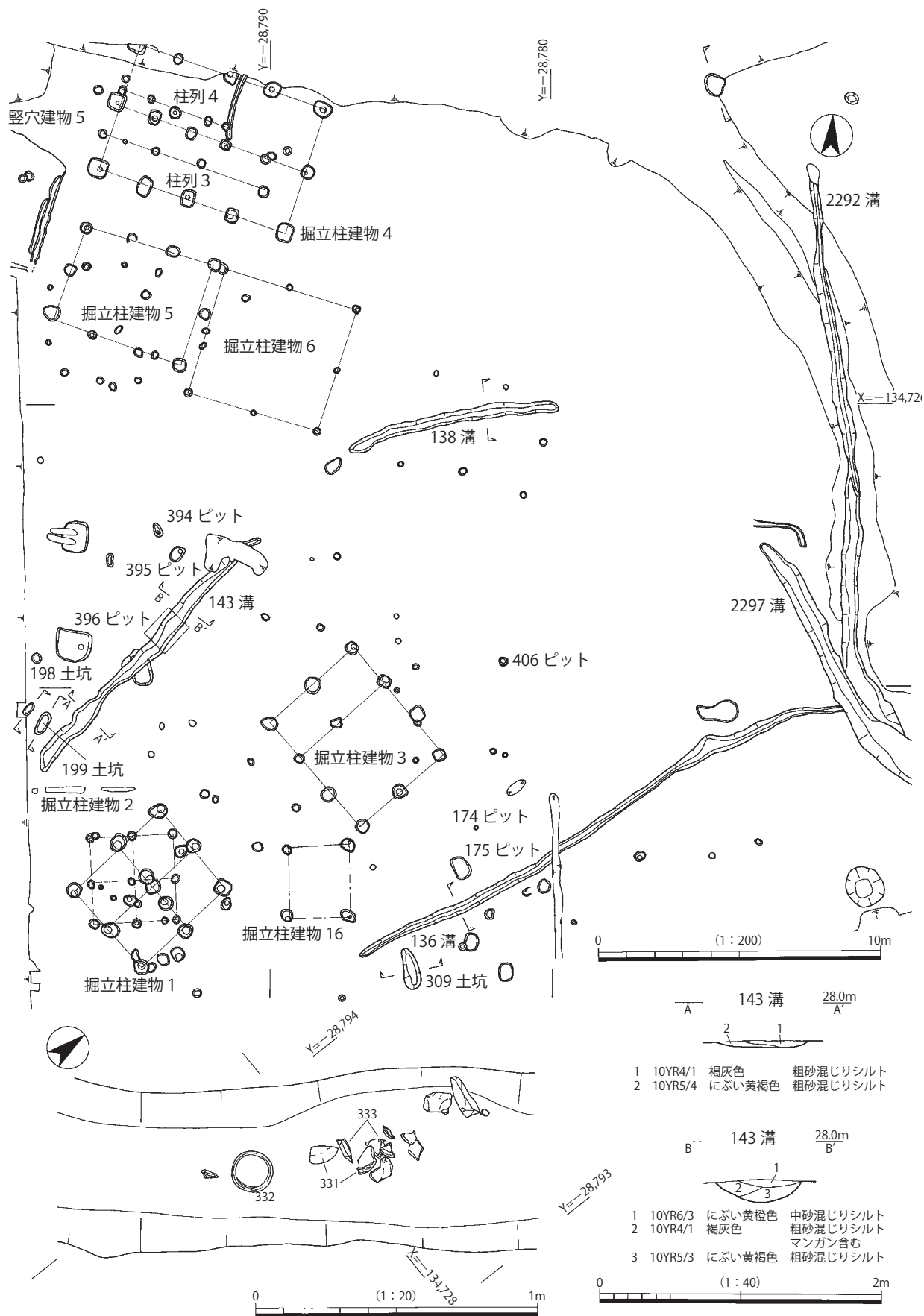
396 ピット (図 48・81・83、図版 11)

調査区西端中央から北に向かった壁際で検出された。平面は東西方向がわずかに長い不整形な隅丸長方形を呈し、規模は、長辺 1.2 m、短辺 1.1 m を測る。断面は、図 81 のように二段掘となり、その東寄りには直径 0.2 m 弱を測る円筒形を呈した柱痕跡が、やや東に傾いた状況で確認された。

時期は、遺物の中に特徴的なものが含まれていなかったため、明らかにすることはできなかった。

406 ピット (図 48・81)

掘立柱建物 3 北東側桁から約 3.6 m 北東の位置で検出され、平面は円形に近い隅丸方形を呈す。中央には炭化物を若干含む粗砂混じりシルトが直径 0.2 m 弱の円筒形の体をなして観察され、その周囲には団粒状となった基盤層の碎片を多量に含む土層が堆積することからこれを柱痕跡と認識した。



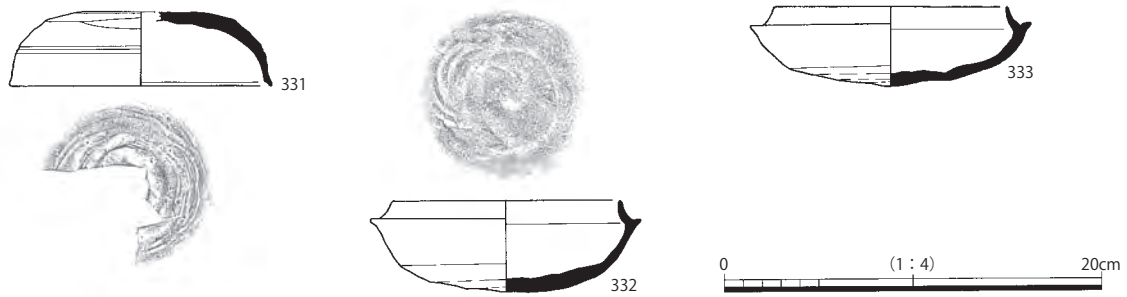


図 84 第 3 - 1 面 143 溝 出土遺物実測図

時期は、これを特定できる特徴的な遺物が出土しなかったため、明確にすることはできなかった。

上記のほか、時期判別可能な遺物が出土したピットが数基存在する。これらのうち、326 は 2302 ピットから出土したほぼ完形の土師器杯 C で、時期は、表面が剥離するため暗文は不分明ながら、形態や調整技法からみて、飛鳥Ⅲに属すると考えられる。327 は 236 ピットから出土した土師器の甕で、5 世紀後半から 6 世紀代のもものとみなされる。328 は 2315 ピットから出土した須恵器蓋杯の身で、法量や口縁端部の成形技法から T K - 47 型式に分類される。329 は 176 ピット出土の須恵器蓋杯の蓋で、形態や調整技法から T K - 23 型式に分類される。330 は 664 ピットから出土した須恵器甕の口縁部片で、外面の施紋工具が櫛からへら状工具に変容しているため、6 世紀後葉頃に属するものであろう。

136 溝 (図 48・83・85、図版 2)

調査区西半のほぼ中央を北東から南西に向かって直線的に開削され、北東端は 2297 溝によって失われる。規模は、長さ 19.2 m、幅 0.3 m 前後を測るが、狭い部分で 0.2 m、広い部分で 0.7 m となる。断面は椀形を呈し、深さは 0.05 から 0.1 m である。内部には、褐色を帯びた中砂から細礫混じりシルトが 2 層堆積し、下位に団粒状となったシルトを含むことや、溝底の高低差もほとんどないことから、水の流れた状況は看取されない。

したがって、水を流すのではなく、区画を意図して設けられたと考えられる。

出土遺物には、図 85 右下に示す 334 の須恵器蓋杯の蓋がある。形態や法量からみて M T - 15 型式に位置づけられるため、溝は 6 世紀前葉以降に廃絶したと考えられる。なお、この溝と同時期の遺物が出土した 2292 溝は、2297 溝を介して直交するため、併存していた可能性もあり、その推量が正鵠を射ているのならば、双方が一体となって何らかの施設を区画するために開削されたとの解釈も成立する。

138 溝 (図 48・83・85、図版 1)

調査区西半の中央から北側の位置で検出された。平面は、東から南西方向に向かって弓状に湾曲しながら収束する。規模は、全長 7.7 m、幅 0.3 から 0.4 m、深さ 0.1 m 前後を測り、断面は、南側にやや膨らんだ椀形を呈す。埋土は 3 層に細分され、溝底に高低差がないことから、水はほとんど流れていなかったと考えられる。このため用排水を意図したとは考え難く、区画する目的で開削されたとみなされる。この視座に立って周辺の遺構との関係に注目するならば、南西端から約 4.5 m 隔てた場所に前段で報告した 136 溝の北東部が断続するような形に存在しているため、これとの関連性も示唆されよう。

時期については土器などの遺物がほとんど出土しなかったため不明である。

143 溝 (図 48・83・84、図版 1・7・12)

調査区西端部の中央から北で検出され、北東から南西にほぼ直線的にのびる。規模は、長さ 11.5 m、幅 0.5 m、深さ 0.05 から 0.15 m を測る。深さについては、図 83 の断面図にも一部表現されるが、両

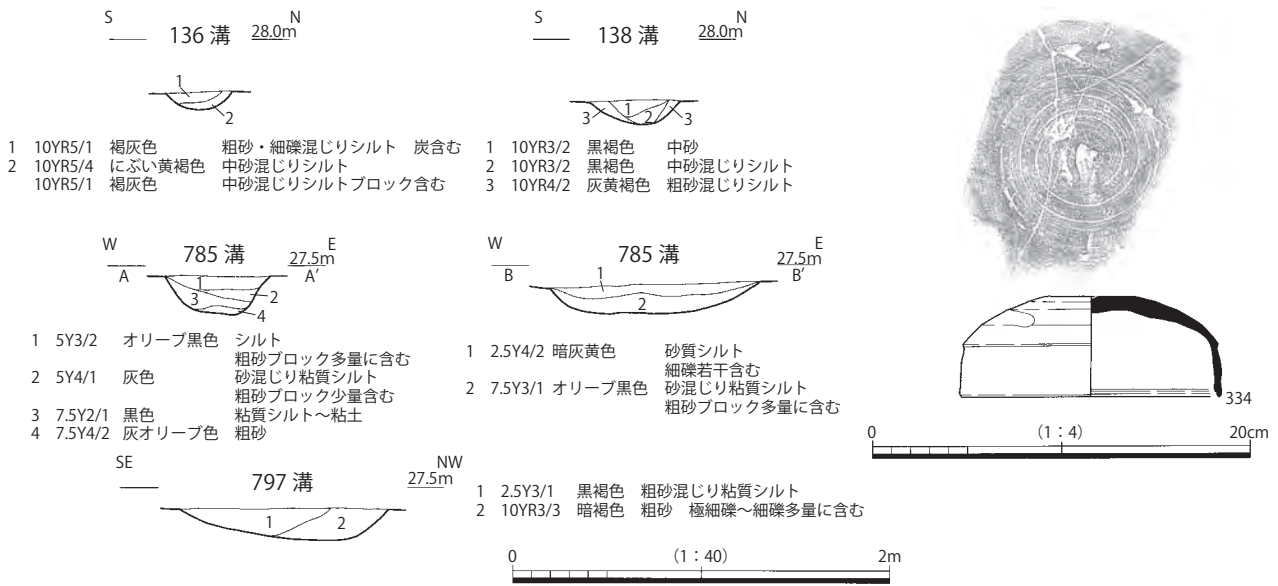


図 85 第 3 - 1 面 136・138・785・797 溝 断面、及び 136 溝 出土遺物実測図

端の高低差がないに等しいのに対し、中央が 0.1 m 近く深いため、排水用の溝ではなく区画するためのそれであったと考えられる。断面は、両端が扁平な皿形、中央部附近が椀形を呈し、埋土は、2 層ないし 3 層に細分されるが、すべてが中砂から細砂を含む褐色系シルトである点では共通する。

溝内中央からやや北東では、図 83 左下のような状態で TK-43 型式に位置づけられる 3 点の須恵器蓋杯が出土した。うち、331 は蓋、他の 2 点は身で、332 については完形のまま正置された状態で検出された。これらのうち、331 と 332 の内面には、同芯円タタキが施される点で他の 1 点と異なり、また、331 は、法量的には蓋杯の蓋に分類されるが、当該期では天井部と口縁部を界する稜や沈線を形作る資料をほとんどみいだせないため、有蓋短頸壺のそれとなる可能性も考えられる。

なお、この溝と掘立柱建物 1 と 3 との位置関係に注目した場合、三者の方向軸が同じで、かつ、掘立柱建物 3 の北東側桁柱列を北西に延長した線と 143 溝の北東端が揃っていること、さらに、掘立柱建物 1 の 158 柱穴掘方出土の土師器の甕が 6 世紀後半に位置づけられ、143 溝出土の須恵器とほぼ同時期であるとみなされることから、これら三つの遺構が互いに深い関係にあったことを窺わせる。

776 溝 (図 48、図版 2)

調査区北東部で検出された。南東側は 785 溝によって失われ、北西側は攪乱によって壊されるが、南東から北西に 0.2 m 弱下降するため、この方向に流下していたと理解される。平面は、わずかに蛇行するが、等高線にほぼ直交しながら一方向にのびる。規模は長さ 12.1 m、幅 0.3 から 0.5 m、深さ 0.05 から 0.2 m を測る。断面は皿形から椀形を呈し、溝底には起伏が観察される部分も存在する。

出土遺物がないため、時期を特定できないが、この溝を境として北東側には土坑やピットが群在し、反対側の南西部にはそれらがいないため、両者を区画する意味も兼ねているとも考えられる。

785 溝 (図 48・85、図版 2)

調査区北東部において南東から北西にやや屈曲しながらのびる。北西端は上記の 776 溝に接続し、この溝が新しいことを確認した。溝底の両端の高さにほとんど高低差はないが、776 溝や周辺地形の傾斜からみて、南東から北西方向に水の移動があったと考えられる。

規模は、長さ 5.3 m、幅 0.3 から 0.7 m、深さ 0.05 から 0.1 m を測り、断面は隅の丸い逆台形を呈する。溝底はほぼ平坦だが、南東部には局所的に窪んだ部分が存在する。埋土は 2 層から 4 層に細分され、そ

ここからは遺物が出土しなかった。しかし、最上部に古土壌に由来する粗砂を含んだ黒色系シルトの堆積が観察されることでは、調査区北東部で集中して検出された土坑やピット群との間に共通点があるため、776 溝と共にこれらの南西部を画するような機能を果たしていた可能性を指摘しておきたい。

797 溝 (図 48・85)

調査区北東部の遺構集中部で検出され、北東から南西にのびる。平面は、両肩の広狭の差が著しい不整形をなす。北東を 795 土坑、南西を 798 土坑によって失うが、現況での長さ 1.4 m、幅 1.2 m、深さ 0.15 m を測る。断面は南東が膨らんだいびつな皿形で、埋土は、図 85 左下のように 2 層に分けられるが遺物はみられない。最終的に黒褐色粗砂混じりシルトで埋没する点では、周辺の遺構と共通する。

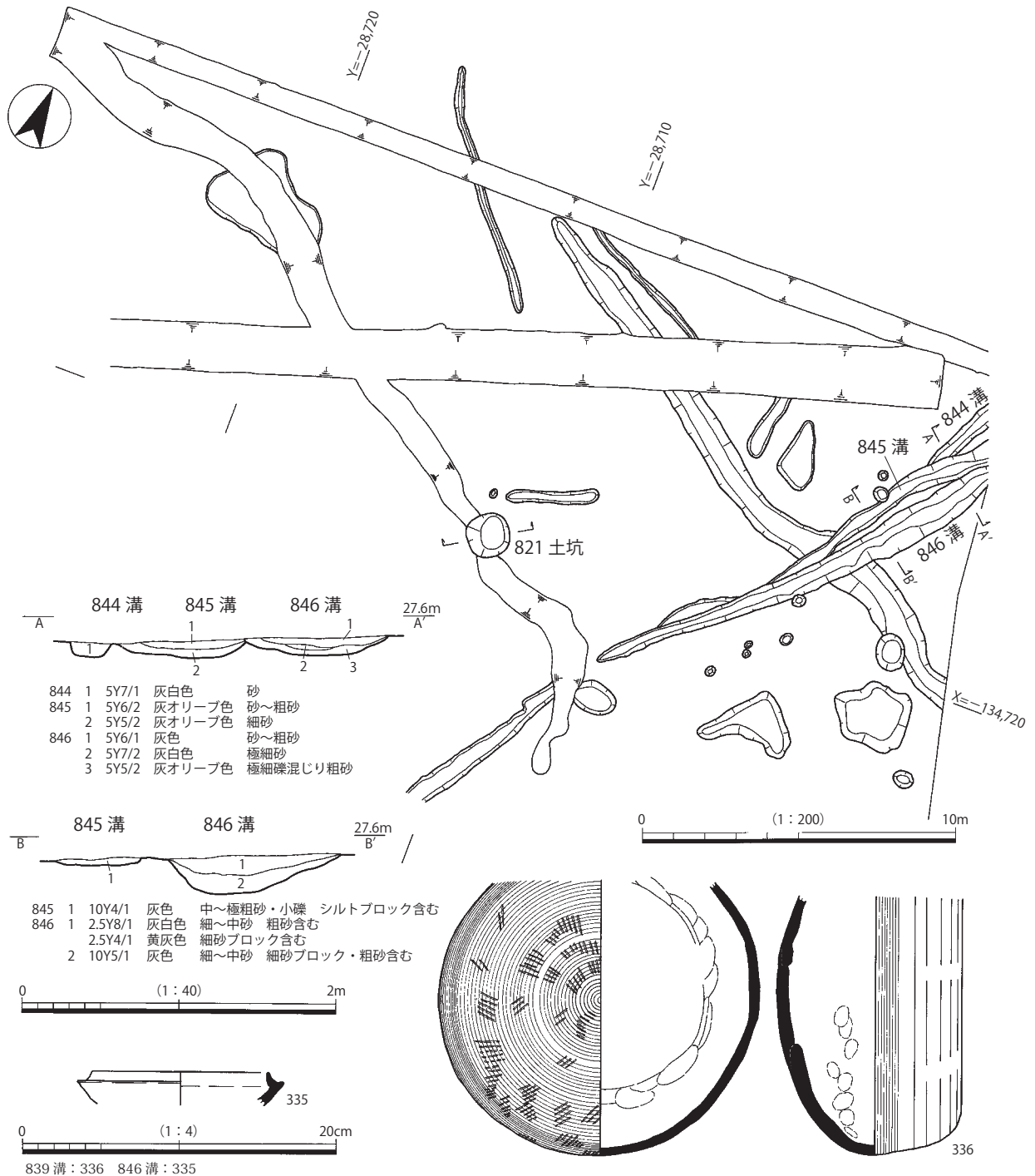


図 86 第 3 - 1 面 844・845・846 溝 平・断面、及び 839・846 溝 出土遺物実測図

814 溝 (図 48・87)

調査区中央部の南辺を北東から南西に向かって直線的に流れ、その先は攪乱のため消滅する。途中、2度にわたって 2292 溝を横断し、大きく湾曲して方向を北西に転じる。総延長は一連の遺構とみられる 813 溝を含めると約 44 m となり、幅は、0.3 から 0.8 m、深さ 0.05 から 0.3 m を測る。溝底の標高 27.35 から 27.40 m 前後で推移し、埋土の堆積状況から水の流れた痕跡は観察できなかった。

遺物がないため、時期を特定できないが、TK-10 型式の須恵器蓋杯などが出土した 2292 溝に後出するため、少なくとも、この時期以降となることは確実である。なお、本溝は 07-1 調査で平坦面 1 とされた高まり部の縁辺を等高線に沿うようにして開削されていることや、溝底の高低差が僅差で、水流の痕跡がみられないことから、区画することを目的として設けられた可能性が高いと考えられる。

839 溝 (図 48、図版 2)

調査区東半の中央から南で検出され、南東から北西にのびる。途中、確認トレンチや、重複して開削された 844・845・846 溝により寸断されるが、本来はこの溝と、南西に位置する 838 溝、北西に位置する 804 溝の 3 条で一つとなり、等高線に直交する形で南東から北西にやや蛇行しながら流下する溝に復原される。その規模は南東端が調査区外となるため、長さ 10.0 m 以上、幅 0.4 から 0.6 m、深さ 0.1 から 0.15 m となる。なお、流れの方向は、776・785・1668 溝などとほぼ同様となるが、この要因については、地形に即したものなのか、人為的所作に起因するものなのかはにはわかには断じ難い。

埋土からは図 86-336 に示す須恵器の提瓶が出土した。時代判別の要素である把手や口縁が欠落するが、比較的大形であること、側面が扁球形に近いことから 6 世紀後葉までは下がらないとみられる。

844・845・846 溝 (図 48・86、図版 2)

調査区南東部で検出され、南西から北東方向にやや蛇行しながらのびる。3 条の溝がほぼ同じ位置に重複して確認されたため、これらをまとめて報告する。3 条の前後関係については、平面と断面から検討した結果、844 溝から 846 溝の順に北西から南東の順に新しくなることが確認された。なお、844 溝には両端が調査区外となるため全体形が確認できず、他の 2 条も北東部が調査範囲外にのびるため全容を把握できない。したがって、現況では、844 溝が長さ 17.0 m、幅は広狭があるが 0.4 から 0.6 m、深さ 0.1 から 0.2 m、845 溝が長さ 6.3 m、幅は先と同じく 0.3 から 0.4 m 前後、深さ 0.05 m から 0.1 m、846 溝が長さ 1.9 m、幅 0.25 m、深さは溝底に起伏が観察されるものの 0.1 m 前後を測り、全体的には南西から北東に向かって 0.2 m の高低差がある。

断面は、基本的には皿形をなすが、845 溝と 846 溝では、図 86 左下のように、一部偏平となる地点や西側に向かって膨らむ箇所も存在し、844 溝は限られた範囲での所見では、隅の丸い逆台形を呈する。埋土は、灰色を基調とするシルトから細礫混じりの土層で、総体的には中砂から粗砂が優勢となるため、水の流れる環境下にあったことを窺わせる。

出土遺物には、846 溝から出土した図 86-335 に示す須恵器蓋杯の身がある。小片だが、形態や法量などからみて TK-209 型式に位置づけられるため、溝の時期は 6 世紀末葉前後が上限となる。そして、この時期比定は、846 溝が 839 溝を貫く前後関係にあることとも齟齬をきたさない。

なお、これら 3 条の溝群は、ほぼ同じ場所に重なるようにして位置していることや、等高線に対して平行して流れていることから、人為的に開削された可能性が高いものとみなされる。

1668 溝 (図 48・87、図版 2)

調査区中央を南東から北西に比高約 0.2 m を持って直線的に流下する。北西端を第 2-3 面の溝に

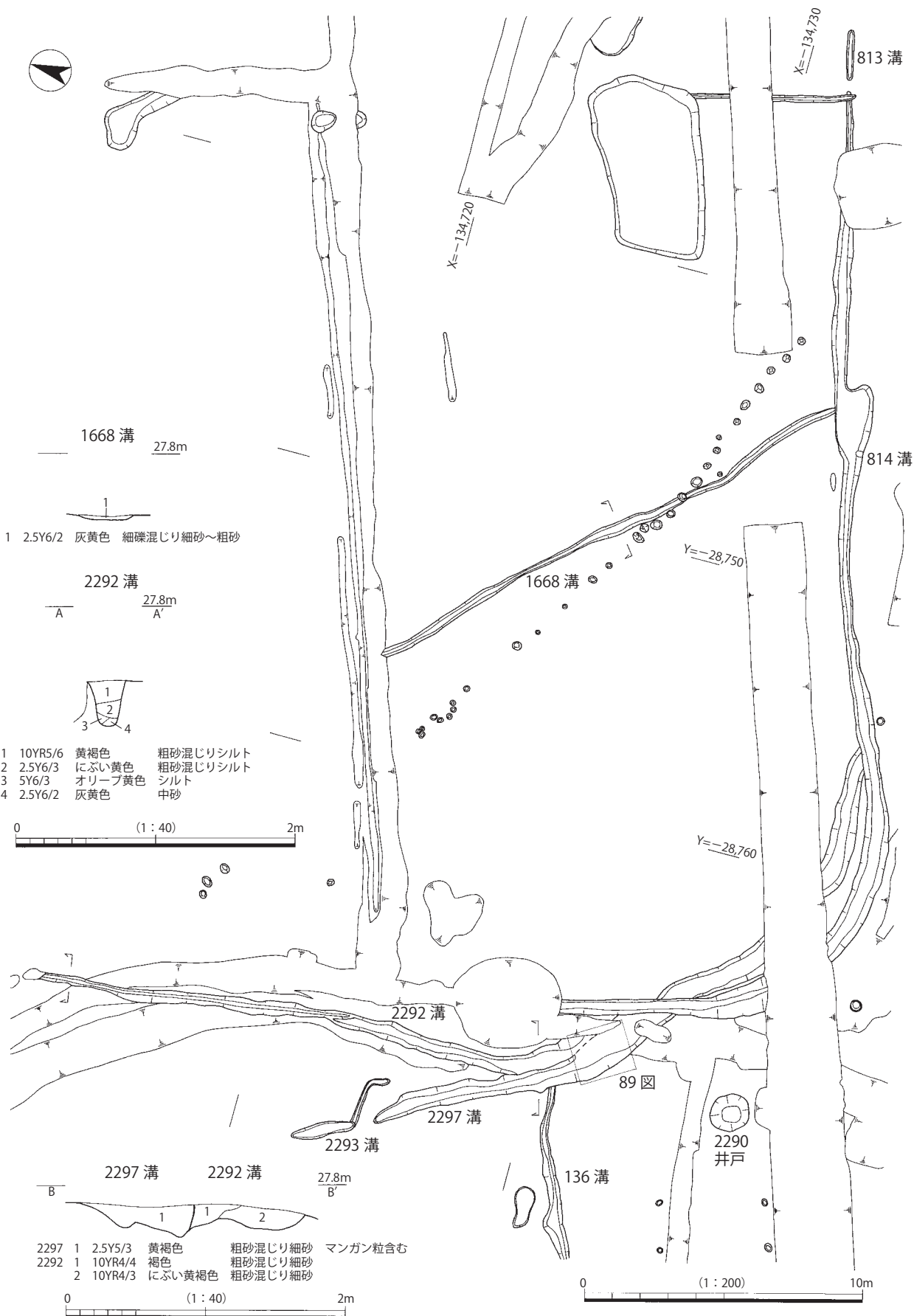


図 87 第 3-1 面 1668・2292・2297 溝 平・断面図

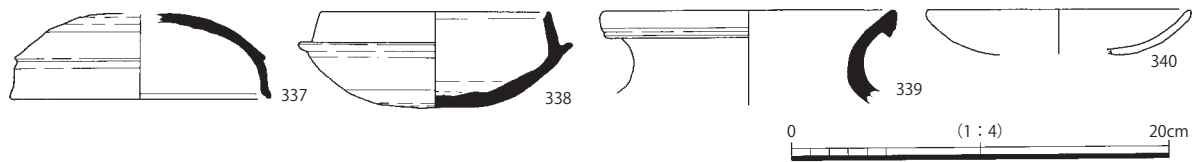


図 88 第 3 - 1 面 2292 溝 出土遺物実測図

よって失うが、長さ 9.2 m を確認した。規模は、幅 0.3 から 0.4 m、深さ 0.05 から 0.1 m で、溝底はやや起伏を持つ。断面は、図 87 左のような偏平な皿形を呈し、埋土は、細礫を含む細砂から粗砂である。時期については、特徴的な出土遺物が皆無であったため、判断することはできなかった。

1695 溝 (図 48・90、図版 2)

調査区北縁中央からわずかに東で検出され、南部は攪乱により削平される。北部は調査区外のため全体形は不明だが、現況では南から北東方向に曲がる 4.6 m 分を検出し、流れの方向は、溝底にほとんど高低差がみられないため不明である。断面は最大部で幅 0.5 m、深さ 0.1 m 強を測る椀形を呈し、埋土は、4 層に細分されるが、いずれも灰色を基調とした粗砂や細礫を含む細砂から粘質土である。

時期は、その判断材料とすべき土器などが出土しなかったため不明である。

2292 溝 (図 48・87・88、図版 2)

調査区中央からやや西で検出され、南北方向にのびる。南端は 2297 溝によって切断され、その関係は図 87 左下に示すように断面からも追認した。平面はほぼ直線的だが、南端では東に広がる。規模は、長さ 19.7 m、幅 0.3 から 0.5 m 前後、深さ 0.2 から 0.35 m を測り、埋土は、粗砂混じりの黄褐色系細砂から中砂を主体とするが、北部の最下層では黄灰色中砂が観察された。断面は、図 87 の左に示すように、南側は不定形な皿形、北側は U 字形を呈する。溝底は南から北に向かって 0.5 m 下降し、北側断面の最下層には中砂が単独で堆積するため、この方向に向かって水が流れたと考えられる。

出土遺物には、図 88 - 337 から 339 の須恵器、340 の土師器の杯などがある。前者のうち、337 と 338 は蓋杯の蓋と身、339 は壺の口縁部で、2 点の蓋杯は、形態や法量などからみて MT - 15 型式に位置づけられる。したがって、この溝が埋没した時期の上限を 6 世紀前半と考えることができる。

2297 溝 (図 48・87・89、図版 2・12・20)

上記 2292 溝の南端部を剝し、136 溝の東端も切断する。平面は、南西側に湾曲する弓状を呈し、北西から南東へと伸びる。規模は、長さ 25.7 m、幅 0.7 から 1.0 m、深さ 0.1 から 0.2 m を測る。断面は皿形を呈し、溝底には緩やかな起伏がみられるが、中央と両端部との標高差がほとんどないことや、埋土が基盤層に近似することを勘案するならば、水の流れはほとんどなかったと考えられる。

出土遺物には図 89 - 341 から 349 に示す土器や、350 の輸送風管の羽口、紅簾石片岩がある。土器は、349 の土師器の甕以外すべてが須恵器で、器種には 341 から 344 の蓋杯、345 の蓋、346 から 348 の高杯がある。蓋杯は MT - 15 型式の 341 が蓋である以外は身で、うち、342 は受部径からは TK - 47 型式に位置づけられようが、それと比較して立ち上がりの角度と上方への成形が非常に大きく異質な感を拭えない。また、343 は MT - 15 型式、344 は TK - 10 型式に分類される。345 は蓋と考えられるが、先の 341 と比較して天井部と口縁部の境の稜が作出されていないため同一視できず、さりとして、端部に緩やかな段が作出されているために TK - 43 型式にまでは下げられない。目を転じ口縁端部の段に注目するならば、有蓋短頸壺の蓋ともみなされようが、径が大きすぎる点と、先に述べた天井部と口縁部とを界する稜や凹線が設けられていないことが疑問視される。高杯のうち、346 は

無蓋のもので、形態から T K - 216 型式以前の初期須恵器に分類される。347 は脚部のみの破片のため蓋の有無は不明。348 は有蓋高杯の身で、これらは法量や形態、調整技法からみて、T K - 47 型式に位置づけられよう。

溝の時期は、須恵器からみた場合には 5 世紀後葉から 6 世紀前半を中心とする。うち、T K - 10 型式に位置づけられる 344 が確実に最も新しいことから、この須恵器の示す 6 世紀中頃と考えたい。

なお、この所見については、本 2297 溝に先行して開削された 136 溝と、2292 溝の双方から出土した須恵器が、M T - 15 型式段階であることとも矛盾を生じていない。

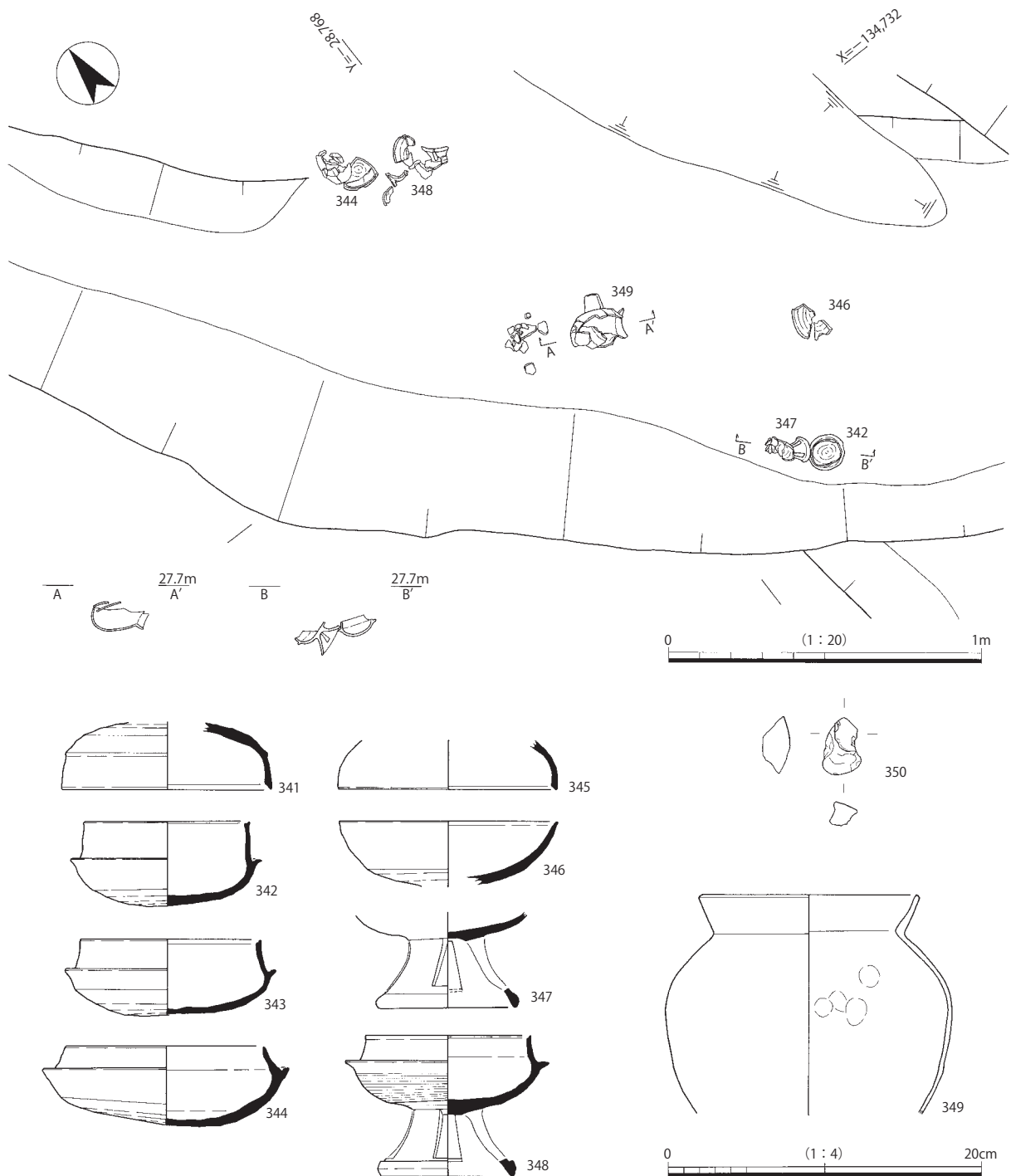


図 89 第 3 - 1 面 2297 溝 遺物出土状況、及び出土遺物実測図

549 落ち込み (図 48・91)

調査区北東部の遺構集中部分で検出された。北西部を攪乱により欠失するが、平面は南西から北東に長い倒卵形を呈すると考えられ、現状での規模は長軸 1.4 m、短軸 1.0 m、深さ 0.2 m を測る。

埋土から若干の遺物が出土し、そのうち図 91 - 351 と 352 の 2 点の土器を図化した。これらのうち、351 は須恵器蓋杯の蓋で、法量や口縁部の形態から T K - 47 型式に位置づけられる。352 は橙色を呈した軟質焼成の韓式系土器の体部破片で、表面には細かい格子目タタキが施されている。

遺構の時期は、遺物からみて 5 世紀後葉を上限とする。

550 落ち込み (図 48・91、図版 2)

調査区北東部の遺構集中区南西部で検出された。東側の一部は他の遺構と重複し、前後関係を確認した結果、本落ち込みが新しいと判断した。平面は北東に頂部を有する倒卵形を呈し、規模は、長径 4.6 m、短径 2.6 m、深さ 0.3 m を測る。断面は、隅の丸い逆台形を呈し、底面には起伏が観察される。

埋土は、図 91 左上に示すような黒褐色系の細礫からシルトで、最上部には古土壤に由来するとみられる細礫混じりの黒褐色シルトから粗砂が堆積している点において、周辺の遺構と共通する。

特徴のある遺物が出土していないため、遺構の時期は不明であるが、埋土の特徴から類推することが許されるのならば、周辺に位置する多くの遺構に近似するとも考えられる。

761 落ち込み (図 48・91)

調査区北東部の遺構集中部の西部に位置する。中央に攪乱がおよぶため二分されるが、平面は、西側に突出部を持つ猪目形を呈するとみられる。規模は、長軸 2.6 m 以上、短軸 2.7 m で、深さは底面に起伏がみられるが最深部で 0.15 m を測る。埋土は、粗砂などを含んだ灰色から黒褐色シルトからなり、中央部にみられる最終段階の堆積層は、周辺の遺構と同様に黒褐色粗砂となる。遺構の時期は、特徴のある遺物が出土しなかったため不明だが、上記のように鍵層となる埋土を持つ。

800 落ち込み (図 48・91、図版 2)

調査地東端中央からやや北で検出され、中央部は攪乱、東側は調査区外となるため、全体形は不明である。平面は、北西から南東に長い鉤形を呈し、北側に鉤を有す。規模は、長径 5.2 m 以上、短径 3.3 m、深さ 0.1 m を測る。断面は偏平な皿形を呈し、底面は平坦となる。埋土には、上位に団粒状のオリーブ褐色から黒色の粗砂やシルトを混在させる堆積層がみられる点において他と相違する。

遺構の時期は、土器などの遺物が出土しておらず不明で、周辺の遺構にみられた鍵層と認識する古土壤に由来した黒褐色粗砂混じり土層の存在がないため、ここから類推することも不可能となる。

802 落ち込み (図 48・91、図版 2)

調査区東端からやや北側の遺構集中区南側で検出された。

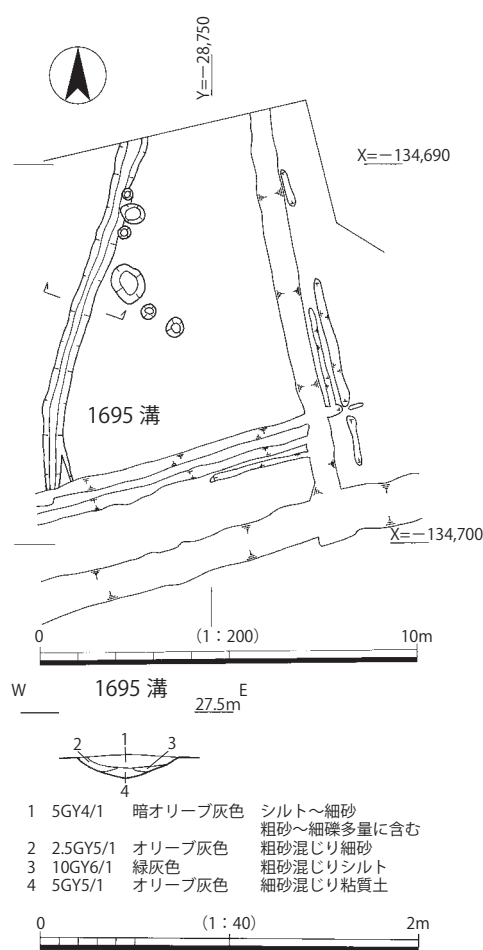


図 90 第 3 - 1 面 1695 溝
平面図

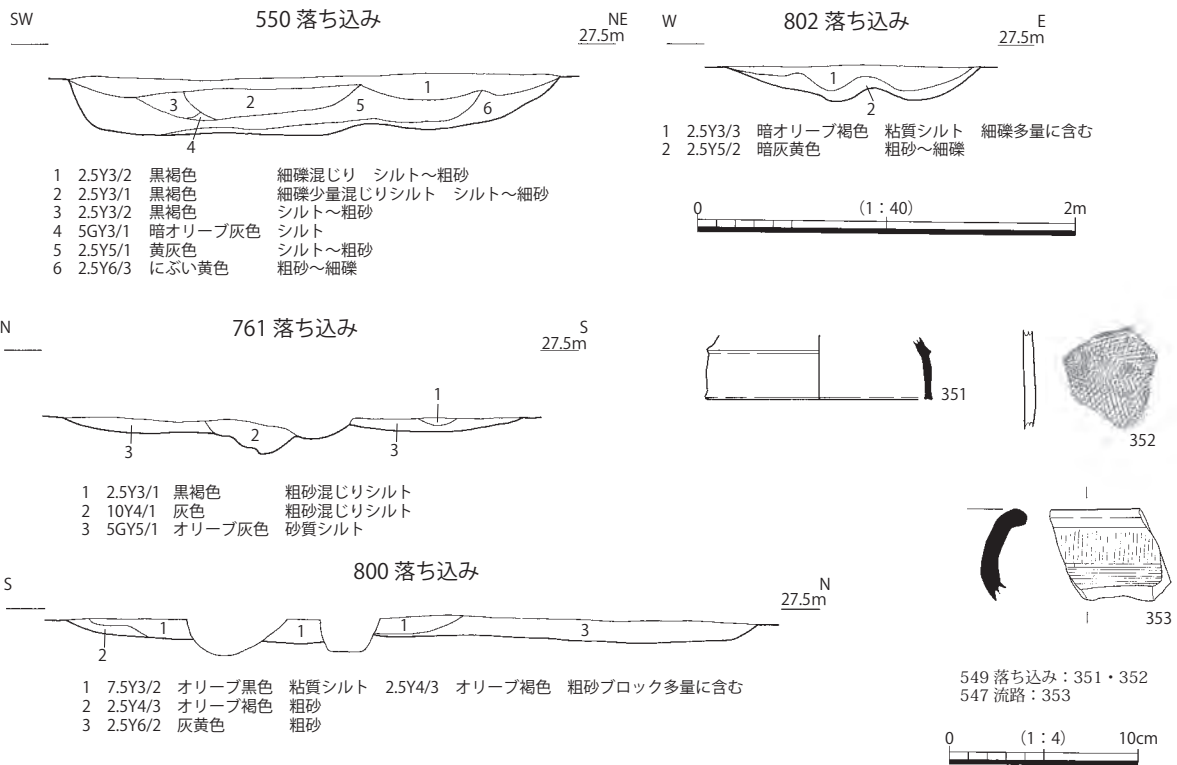


図 91 第 3 - 1 面 550・761・800・802 落ち込み 断面、及び 549 落ち込み・547 流路
 出土遺物実測図

南部を攪乱により欠損するため全体形は不明だが、現状では北から南に軸を持つ不整形を呈し、規模は長軸 2.2 m 以上、短軸 1.5 m、深さ 0.2 m を測る。断面は稜の丸い W の字状を呈し、底面は、図 91 右上のように大きく起伏する。埋土は、2 層に細分され、上層には細礫を多量に含む暗オリーブ褐色シルトが堆積する。

出土遺物がないため、ここから時期を把握することはできず、他の多くの遺構にみられた黒褐色粗砂混じりシルトを中心とする埋土が存在しないため、ここから手掛かりを得ることもできない。

547 流路 (図 48・91)

調査区北東部の壁際で検出された。西端は攪乱により消滅し、東側は調査区外にのびる。平面は北東から南西に長い不定形をなし、東側は南に分岐する。検出された範囲内での長さは 9.0 m、最大幅 6.4 m、深さは北側の最深部で 0.3 m、南側のそれで 0.5 m を測り、総体的には東側に向かうほど深い。

出土遺物のうち、図 91 - 353 に須恵器甕の口縁部片を掲出した。7 世紀前半代頃に位置づけられるため、流路はこの時期を上限とする。しかし、これ 1 片のみの小片のため、確実性には乏しい。

3 - 1 層出土遺物 (図 92)

第 3 - 1 面を覆う包含層より遺物が出土し、それらのうち、図化可能な資料と特徴的なものを抽出して図 92 に掲載する。なお、後述する第 3 - 2 面として便宜的に区別した遺構面に食い込むようにして出土した遺物についても、この包含層出土遺物と対比するためここに包括して掲載する。これらについては混乱を避けるため 357・358・361・367・371・372 の 6 点であることを明記しておく。

出土した遺物の種類には縄紋土器、製塩土器、須恵器がある。縄紋土器には 354 に示す口縁部小片がある。外面の突帯は端部からやや下がった位置に貼り付けられ、刻目の様相を含めて考えるならば晩期の船橋式に分類される。355 は器壁が非常に薄いことや、土師質に焼成されること、筒状の形態

をなすことから、古墳時代中期後半の製塩土器とみられる。356 から 372 は須恵器で、器種には蓋杯、高杯、有蓋短頸壺、甕のほか、装飾須恵器の一類型である環状台連結甕と類推される 365 が特筆される。蓋杯のうち、357 は奈良時代の杯 A に伴い、それ以外は古墳時代に属する。これらのうち、358 から 360 は蓋、361 から 363 は身で、形態や法量から、蓋では 358 と 360 が MT-15 型式に、359 が TK-47 型式に分類され、身では 361 に MT-15 型式、362 と 363 に TK-10 型式の特徴が看取される。高杯には 356 の有蓋高杯の蓋、366 から 369 の脚部片があり、これらを形態などから観察するならば、356 は偏平で逆ハの字形に広がるつまみを有するため 6 世紀後半に、366 は定形化する段階以前に多用される凸帯を持つため 5 世紀中頃以前に、367 と 368 は端部の差異からそれぞれ TK-47 型式と TK-23 型式に、そして、369 は長脚で二段の透穴を穿つことや、大きさからみて MT-85 型式に分類される。364 は有蓋短頸壺の身で、偏球化した体部の上半に明瞭な屈曲部を形作るため 6 世紀後半代に位置づけられる。370 から 372 の 3 点は甕の口縁部片で、これらのうち、370 に新しい傾向が看取されるが、その他の 2 点については 6 世紀中頃以前のもと考えられる。

以上、3-1 層出土遺物の報告を行った。これらの時期は 357 のように 8 世紀代にまで下がるものも含まれる。しかし、大多数の遺物は 6 世紀中頃から後半を中心としてそれ以前に属するため、これが第 3-1 面の時期を反映させているとみなされる。ただし、07-1 調査で平坦面 1 とされた旧耕作土を除去した段階で直ちに検出される遺構についてはこの限りではない。

第 8 項 第 3-2 面

水田 (図 92・93、図版 12)

第 3-1 面の全景写真を撮影するため高所作業車に搭乗したところ、褐色を呈した土層が碁盤の目状

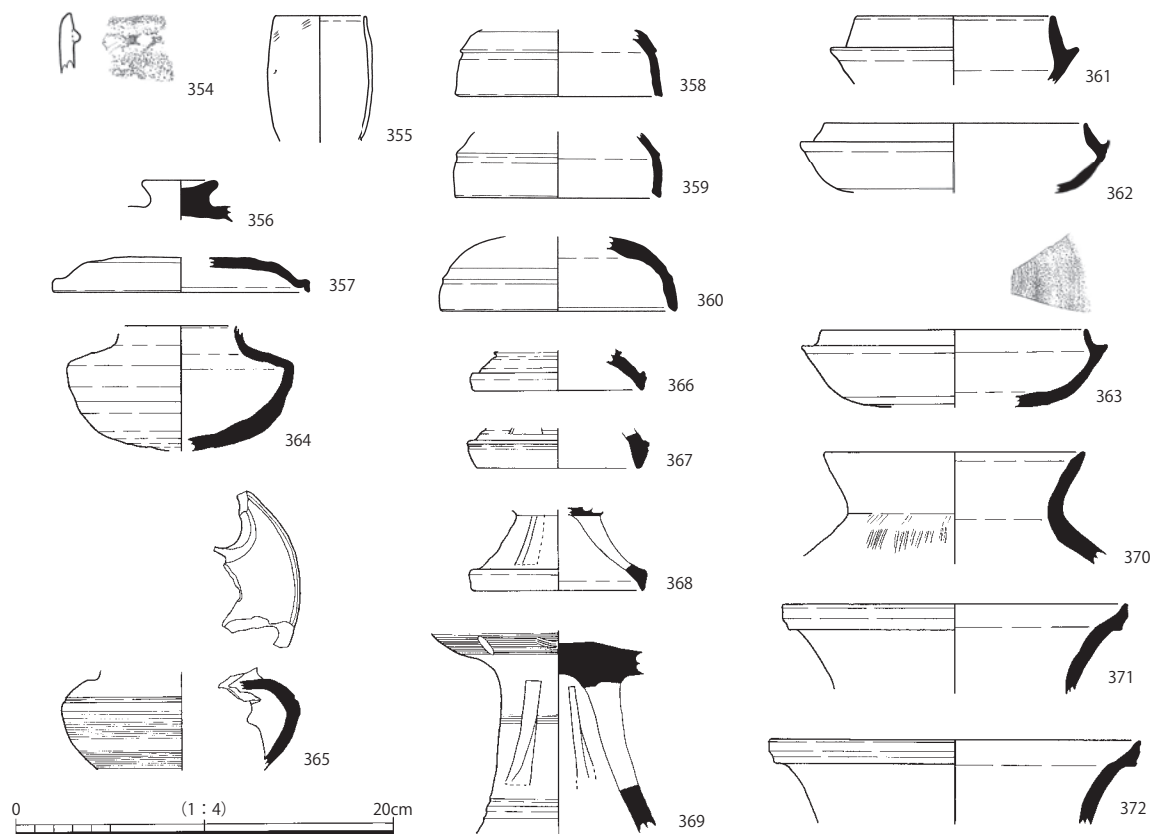


図 92 3-1 層 出土遺物実測図

に広がるのを確認したことにより認識され、地上からは全く目視することができなかった。したがって、検出面としては第3-1面と完全に同一であり、遺構の性格からこれを便宜的に区分したに過ぎない。

確認される水田区画は最大で22筆を数える。これらは、褐色系のシルトからなる畦の基底部分、いわゆる擬似畦畔と称されるものと、同一層準が耕作により灰褐色系の粗砂や細砂と攪拌され、一部にはヒトの足跡も観察される田面に生成された土壌からなる。耕作面は南東から北西に傾斜する標高27.25から27.45m、その差20cm足らずの高低差を、等高線に対し平行または直交させる形に長さ3から5mの畦畔を設けて巧みに区画し、連続する6面以上の田面を形作っている。

作土層からは、第3-1面の報告でも述べたように、遺構面に食い込むような状態で遺物が出土し、それらのうち、図92-357・358・361・367・371・372の6点を図化して357の杯A以外が6世紀代に位置づけられることを述べた。そしてまた、この作土層は、従前までに再三にわたって述べてきた調査区東北部の遺構集中部において、大多数の遺構の最上層とこれらを覆う鍵層と認識した古土壌に由来する黒褐色粗砂混じりシルトに相当する層準でもある。したがって、これらの遺物が示す6世紀以前が遺構集中部分の中心的な時期となることにもつながる。そして、わずかな例とはなるが、この鍵層が観察された遺構出土遺物より逆説的に時期を検証するならば、548土坑よりMT-15型式の須恵器蓋杯の身、549落ち込みからTK-47型式の蓋杯の蓋、839溝から6世紀後葉以前の提瓶、664ピットから6世紀後葉頃の須恵器の甕が出土し、さらに、839溝に後出し、埋土が全く異なる846溝からTK-209型式の須恵器蓋杯の身、この鍵層を切り込む547流路からTK-217型式と思しき須恵器の甕という7世紀中頃以前の遺物が出土したことから、先の時期比定があながち不合理なものではないと理解されよう。

第9項 第4面

308 a 流路 (図94~97、図版13・14・21・22)

調査区南東隅から北西隅に向かって平坦面1の縁辺部に沿って蛇行しながら流下する。総延長は110mを測り、幅は1.5から5.0mと広狭があるが、3m前後を平均とする。

断面は図94のような不整形な逆台形を呈し、壁面や河床は起伏が激しい。また、同図B-B'断面のように、攻撃面では外側が深い。堆積層は中礫から細礫を中心として植物遺体や木片を混じえる氾濫堆積物で、随所に葉理や級

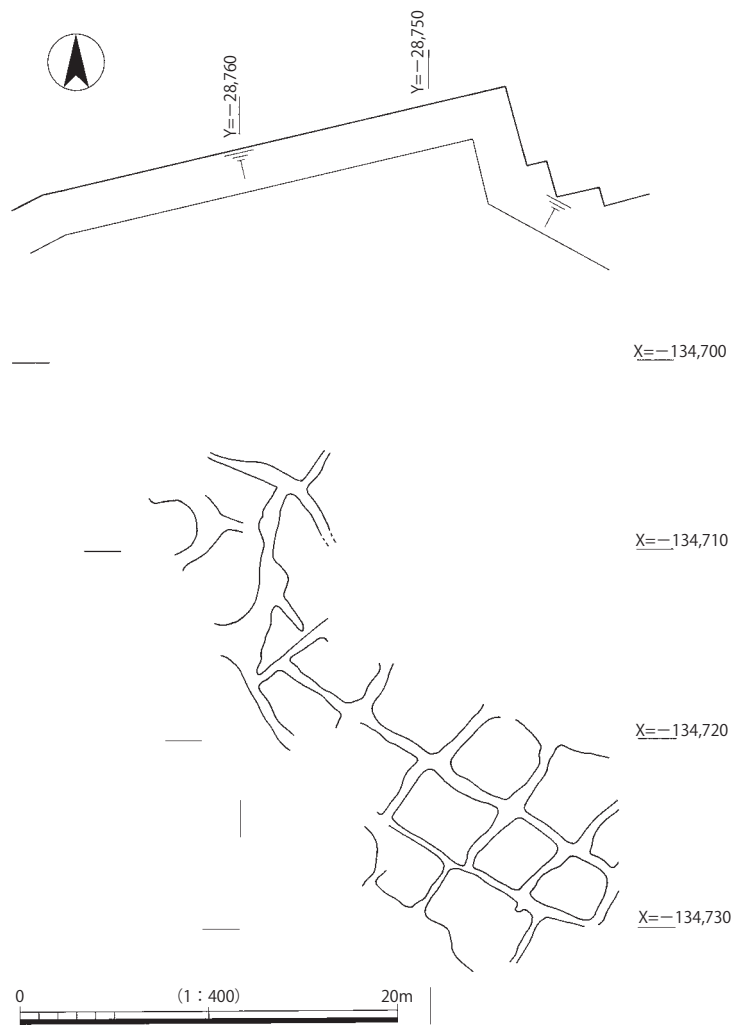


図93 第3-2面 遺構全体図

化の発達した部分が観察されるため、緩急を繰り返す水流の環境のもとで埋積した状況が看取される。

層内からは土器を中心とする遺物が出土し、そのうち凶化可能なものと特徴的なものを、図 96 と 97 に掲載した。これらを古いものから列挙すると、396 は縄紋時代突帯紋期後半段階の深鉢で、それが 2 条めぐらされていることや、端部上端部に 3 個一対の瘤突起を有することから、東部瀬戸内地域の黒土 B II 式からの影響を受けた土器と考えられる。

つづく弥生時代のものには、409 から 411 の 3 点の甕があり、409 のような球形化が進行して口縁部が矮小化したものは弥生時代中期末葉に、それ以外の端部を上部に拡張したものは中期後葉に位置づけられる。上記以外は弥生時代後期の土器で、器種には 373 から 378 の手焙形土器、379 から 395 の壺、397 から 399 の高杯、400 から 404 の鉢、405 から 408、412 から 423 の甕がみられる。手焙形土器のうち、覆部が遺存する 2 点はいずれもその部分が小さいという特徴を持つ。

壺は口縁部の形態から 379 の長頸壺、380 の広口壺、381 から 390 の短頸壺に分類され、これらのうち、381 から 383 は、口縁端部が上方に引き出される点、384 は受け口状となる点と、体部下半に

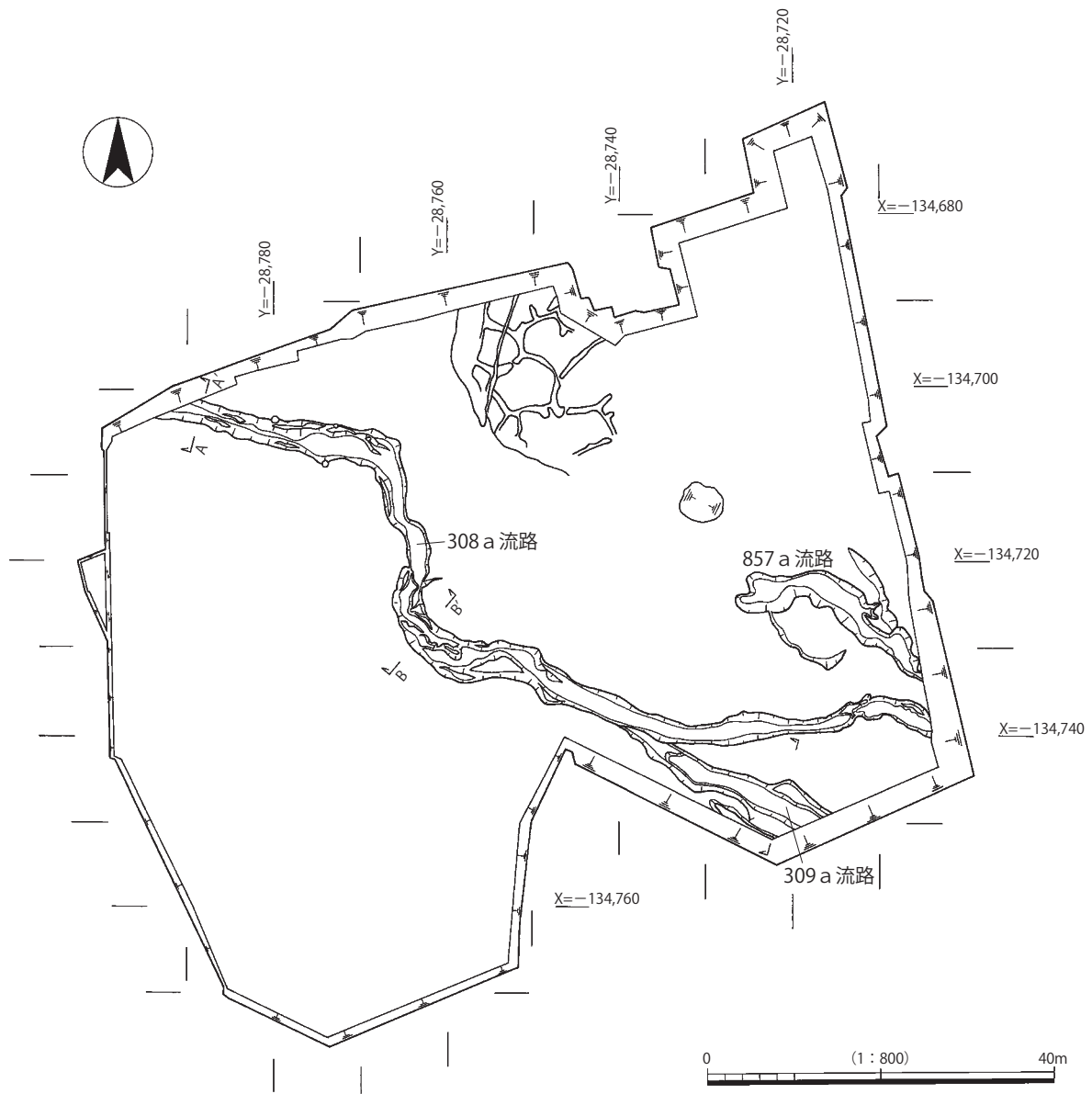


図 94 第 4 面 遺構全体図

焼成後外面から穿孔が行われている点において他と相違する。391 から 395 は壺の体部から底部の破片とは判断されるが、より詳細は不明である。高杯は 3 点確認されるが、いずれも小片となるため詳細は不明で、また、口縁部が遺存する 4 点の鉢のうち 1 点のみは、外反する口縁部を作出することで他と相違している。

甕は口縁部の形態から受け口状をなす 405 から 408、くの字形に外反する 412 から 417、やや上方につまみ上げる 418 と 419 に分けられ、他にこの底部と考えられる破片 4 点を 420 から 423 に掲載した。これらのうち、受け口状口縁となる 3 点については、その形態と櫛描紋が施されていることを兼ね合わせて考えるならば、近江・山城地域を中心とする淀川水系の影響を受けたものと考えられる。これらの時期は、手焙形土器が出現していること、摩滅が少なく遺存状況の良い 384、389、390 の壺の形態的特徴、そして、球形化が進行し、2 段階成形技法を採る 417 の甕からみて、弥生時代後期中でも後半段階に位置づけられる。

なお、確実なもの 2 点、可能性を有するものを含めると 6 点もの手焙形土器が出土したことは注目さ

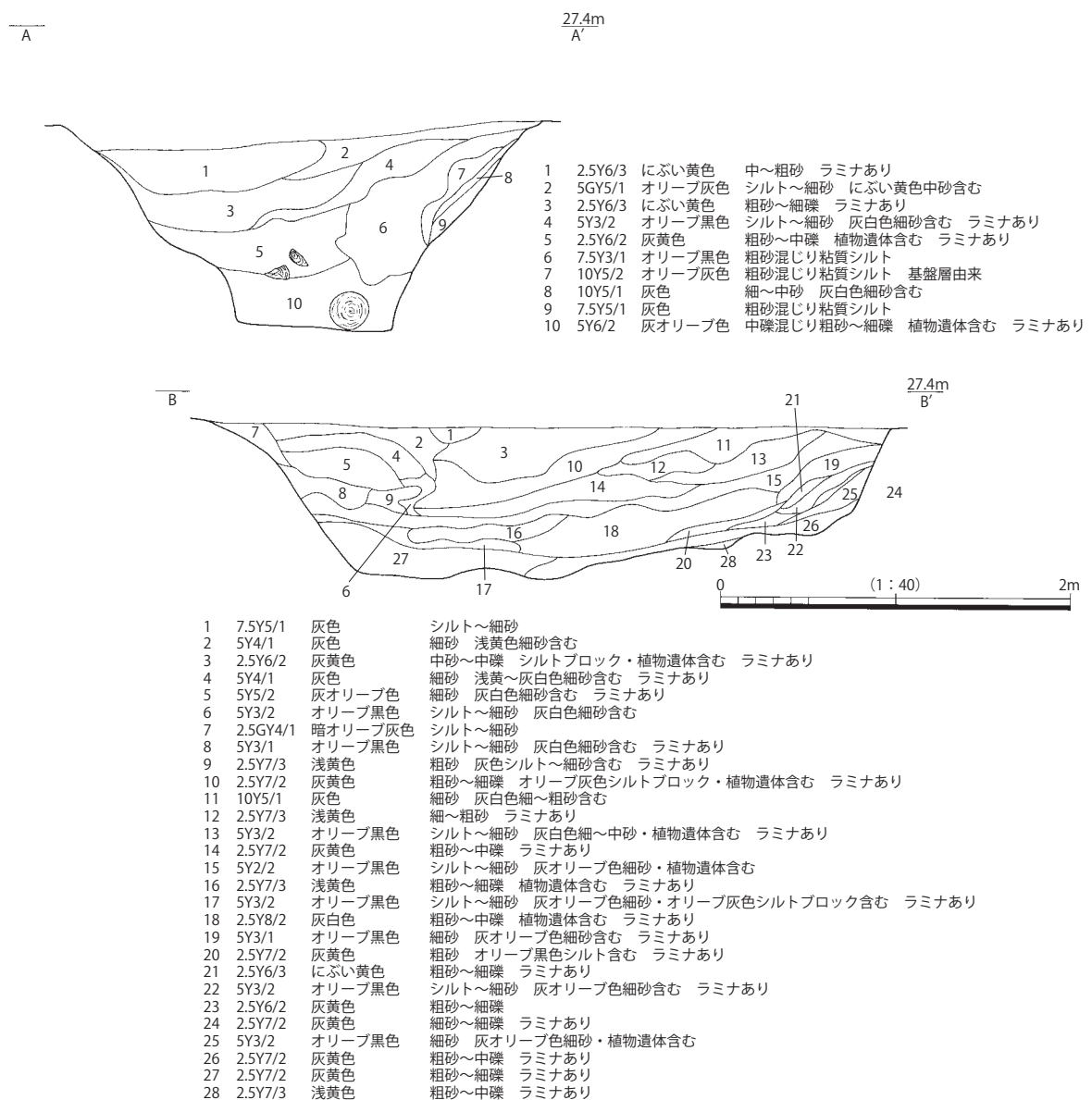


図 95 第 4 面 308 a 流路 断面図

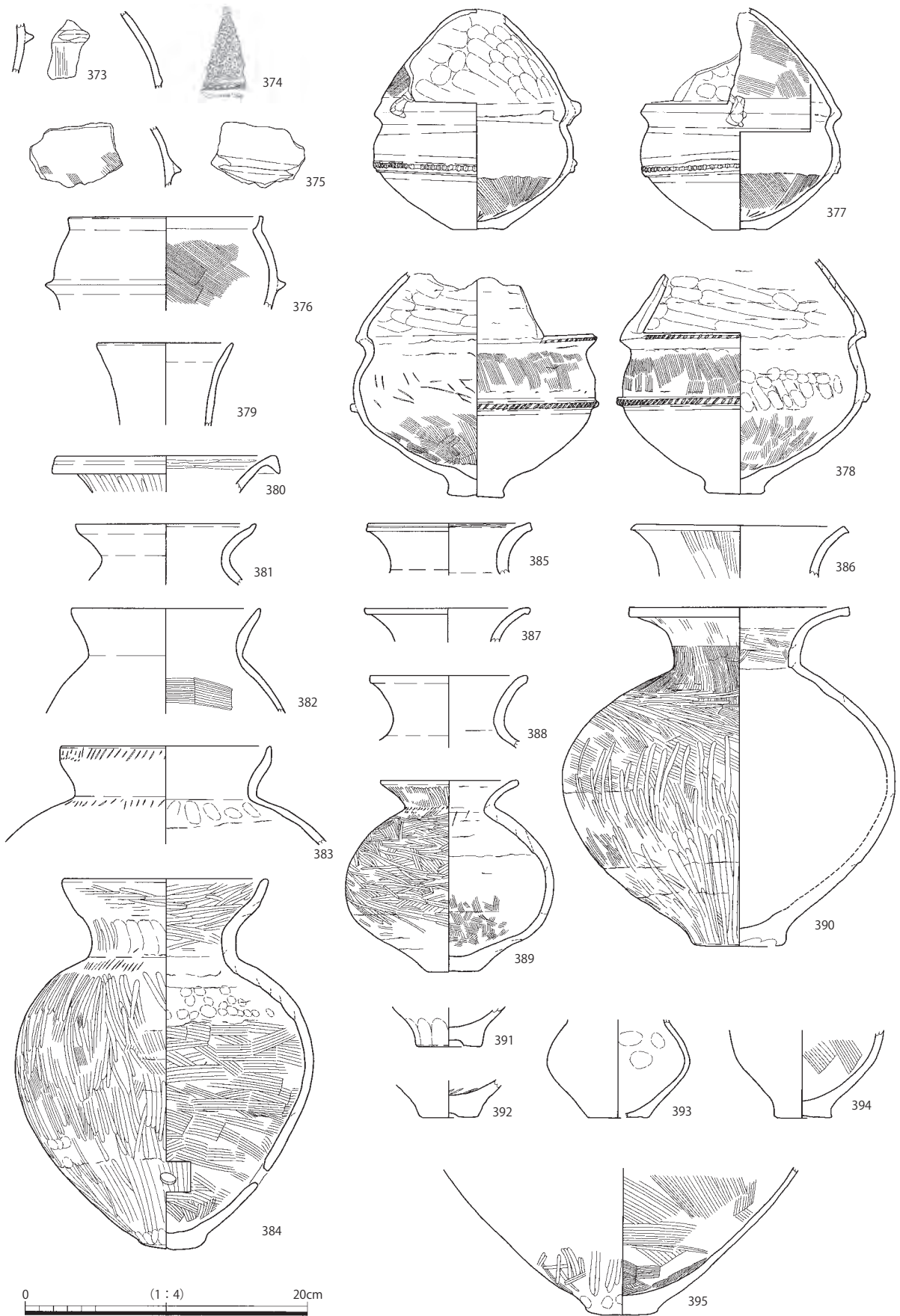


图 96 第 4 面 308 a 流路 出土遺物実測図 (1)

れ、焼成後穿孔が行われた 384 の壺の出土とも相まって非日常的な利那があったことを想起させる。

309 a 流路 (図 94・98・148)

調査区南東部の南縁を、南東から北西に向かって流下する。南東側は調査区外となり、また、北西側は 308 a 流路によって断ち切られているため、現状では長さ 5.2 m、幅 2.5 から 7 m、深さ 1.4 m だが、流芯で捉えた場合の幅は 2.5 m 前後となる。断面は、図 97 のような偏平な V 字形をなし、壁面や川底面は大きな起伏を繰り返している。なお、南側の壁面は平坦面 1 を構成する基盤層を削剥しており、そ

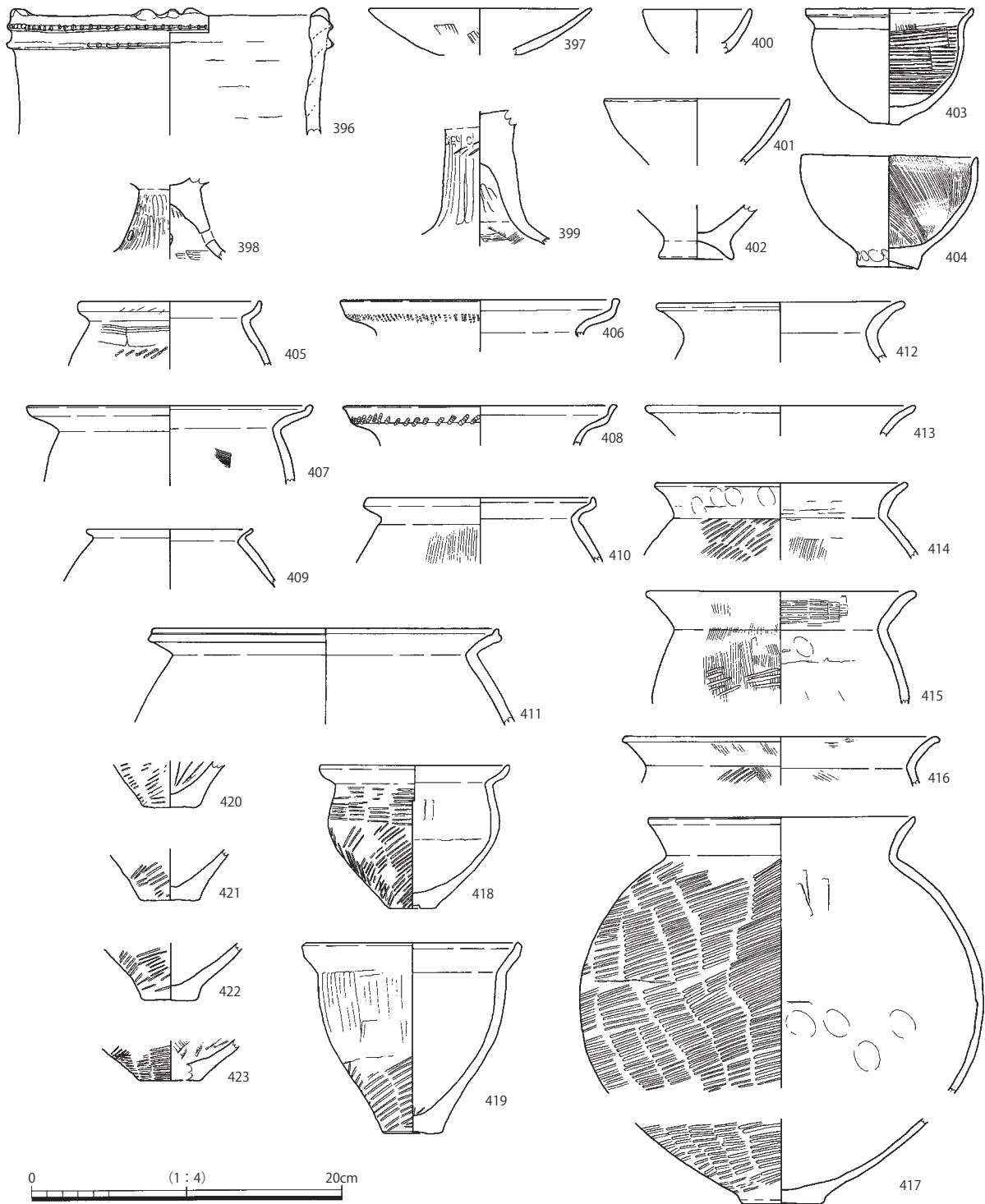


図 97 第 4 面 308 a 流路 出土遺物実測図 (2)

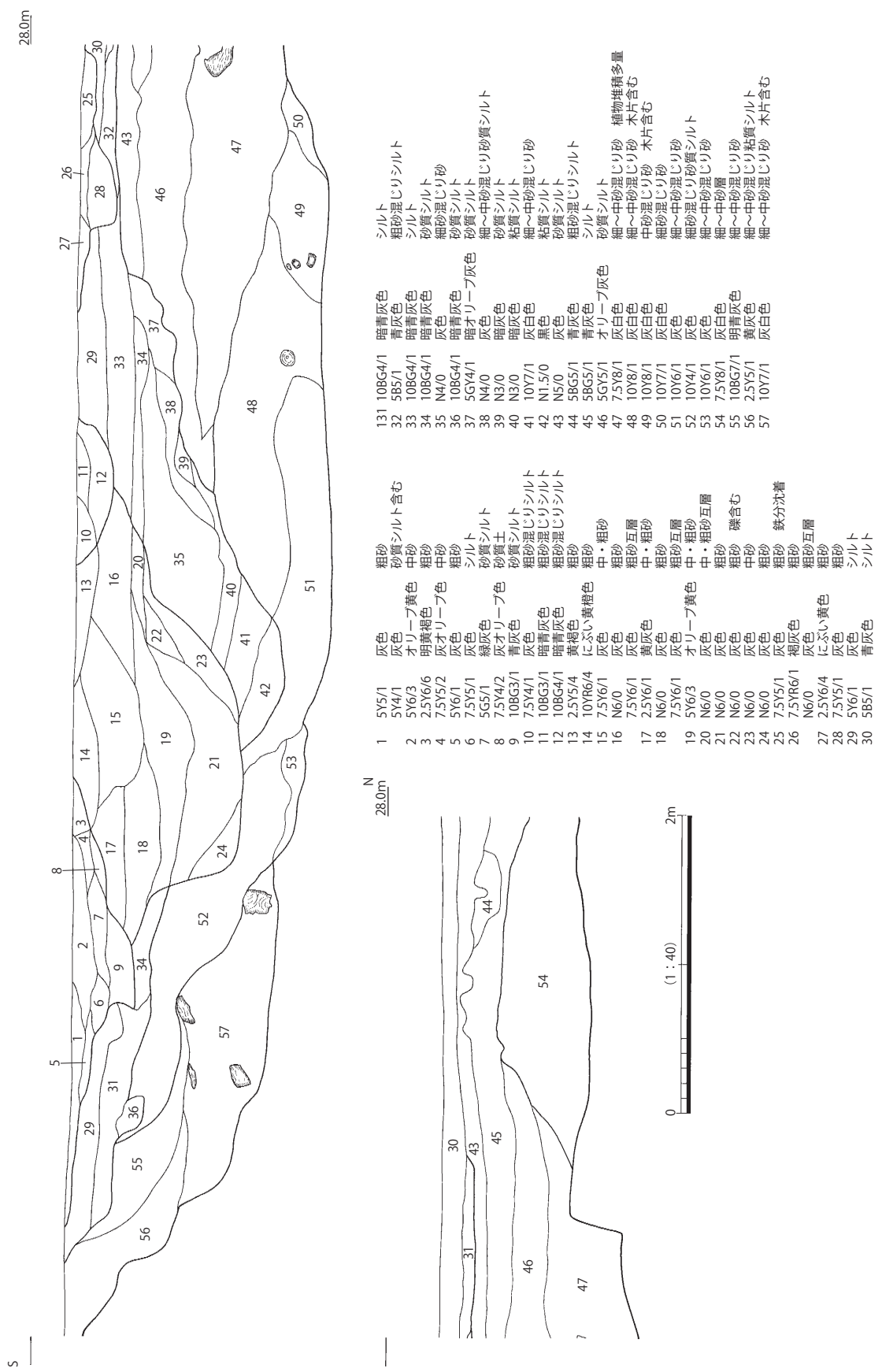


図 98 第4・5-1面 309 a流路 断面図

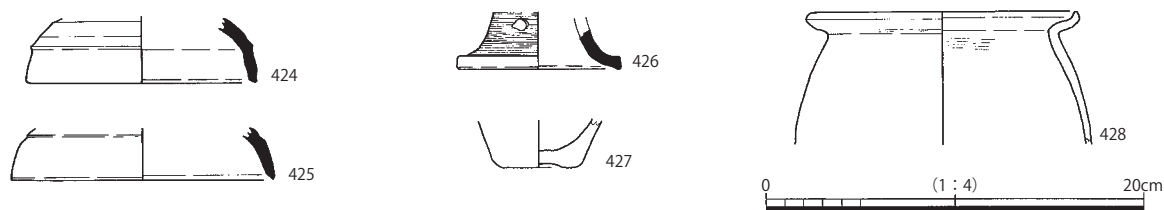


図 99 4層 出土遺物実測図

の形状がそのまま現在の土地区画に踏襲されている状況が明らかになった。

堆積層は、粗砂から中砂を主体とする氾濫堆積物で充填され、それらの単層を構成する砂粒の状況から比較的穏やかな流れの環境のもとで堆積を重ねていったとみなされる。

流路の時期に関しては、転摩を受けた土器の細片が出土したのみであるため明確にはし難いが、308 a 流路によって削り取られていることにより、弥生時代後期後半以前となることは確実である。

なお、平面形から 308 a 流路との関係をみた場合、309 a 流路の流末と 308 a 流路とが整合的に併さっていることから推察して、後者である 308 a 流路の前身が 309 a 流路であった可能性も指摘されよう。

857 a 流路 (図 94)

調査区南東隅からやや北に向かった位置で検出された。南東端は調査区外となるが、平面は北東側に膨らんだ不整形をなし、規模は、長さ約 26 m、最大幅 4.0 m を測る。

出土遺物がみられないため時期は不詳であるが、流末の行き先がないことや、下層に 857 b 流路が埋れていることから、857 b 流路の窪みに堆積した土層を流路と認識して掘削した可能性もある。

水田 (図 94、図版 13)

調査区中央からやや北東の位置で検出された。周辺の自然流路からの溢流によりもたらされた土砂が水田を覆い、この付近のみがわずかに低くなっていたために後世の削平をまぬがれたと考えられる。分布範囲は 340 m²前後を測り、その中に 10 筆程度の水田面が形成される。畦畔の高さは 0.05 m 未満で、水田区画の平面形は崩れた亀甲状を呈している。

水田面を覆う洪水砂層や作土層から遺物が出土しておらず、ここから時期を判断する根拠を失うが、周辺の状況から察して、この水田を覆う溢流堆積物の供給源の一つが 308 a 流路である可能性が高いと判断されるため、308 a 流路の埋没時期である弥生時代後期後半以前となることが考えられる。

4層出土遺物 (図 99)

第 3-2 面を部分的に覆っていた包含層より若干の遺物が出土し、その中から 5 点の土器を図 99 に掲げた。これらのうち、424 から 426 は須恵器で、424 と 425 の蓋杯の蓋は法量や形態から MT-85 型式に位置づけられ、426 の高杯脚部は、短脚に菱形の透かしを穿つため、陶邑傍流の窯あるいは周辺の窯で焼成された 6 世紀代の製品であるとみられる。また、427 と 428 は弥生土器で、427 は表面の剥離が激しいが、焼成や胎土からみて後期の壺と考えられ、428 の甕は口縁部の形態から中期後半と判断される。

これらの遺物については、弥生土器が下層から巻き上げられたもの、須恵器が上層の第 3-1 面および第 2 面から降下したものと考えられ、後者については、6 世紀代におさまることから、先述した第 3-2 面の時期比定を間接的に補強する資料とみなされる。

第 10 項 第 5 - 1 面

308 b 流路・2339 シガラミ (図 100 ~ 104・148・149、図版 13・15・22)

調査区南東隅から北西隅方向に平坦面 1 の縁辺部に沿うように蛇行して流下し、その位置は 308 a 流路とほぼ重複する。検出された総延長は 110 m、幅は 2.5 m 前後で、蛇行部分では 8.0 m に達し、深さは 0.5 m から 1.5 m を測る。なお、上層では 308 a 流路に削剥される 309 a 流路であったが、この段階では途中で合流し、両者が併存する関係となる。流路内は中礫から細礫を主とする氾濫堆積物で充填され、絶えず流れのある環境のもとで埋積した状況をとどめている。

また、南東隅には図 101 と 102 に示すように 308 b 流路の左岸から右岸に向かって斜行するような形に 2339 シガラミを構築し、これを設置することによって、本 308 b 流路から北側に位置する 857 b 流路へと水流を制御することを可能ならしめている。なお、斜めに杭を打設しているのは、下流側に相当する右岸から 857 b 流路へと水を導く際に、水勢からの直接的影響を回避するための配慮とも考えられる。規模は、長さ 12.0 m、幅 1.0 から 3.0 m、高さ 1.5 m を測るが、杭群が河川堆積層内に打

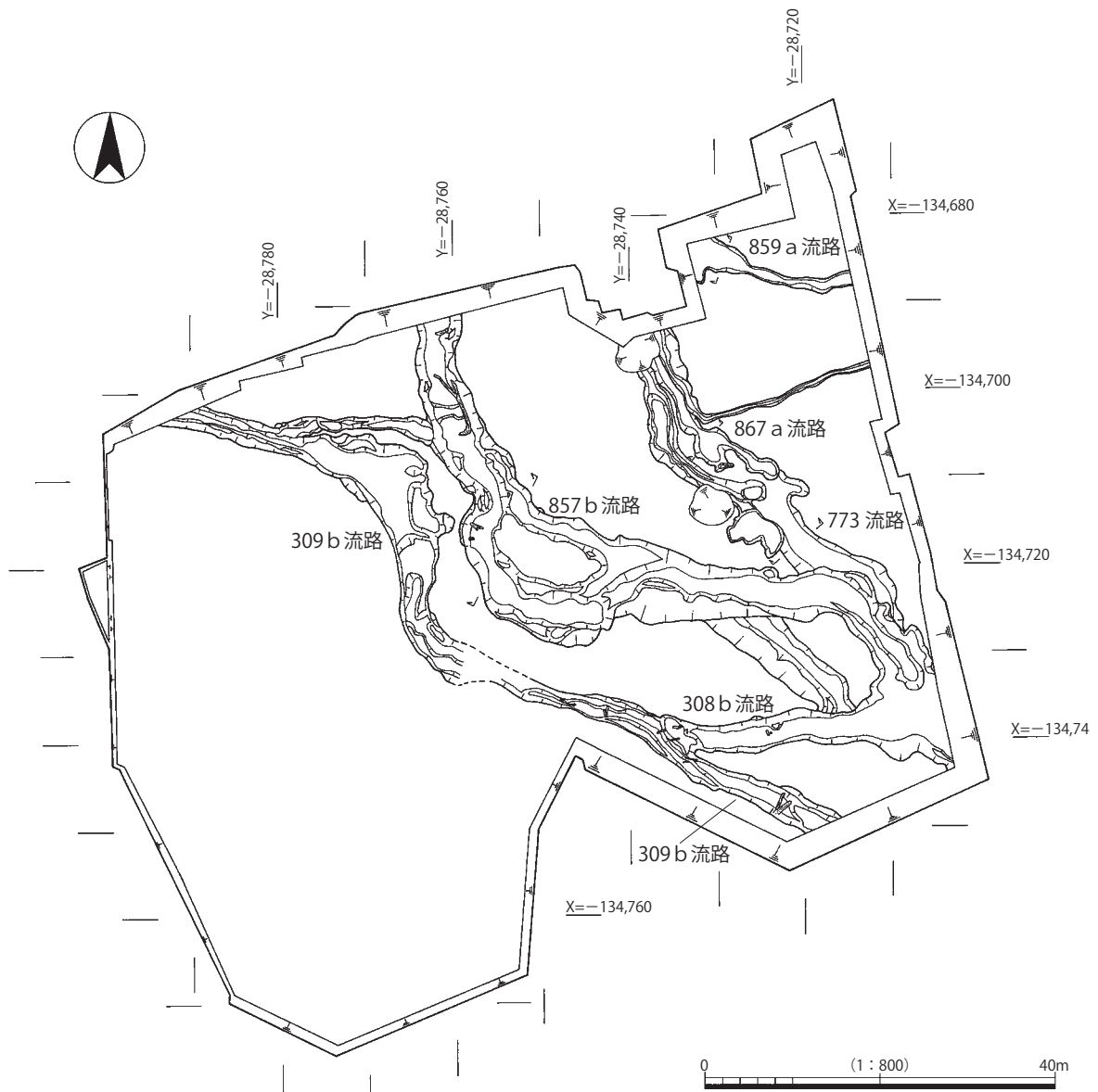


図 100 第 5 - 1 面 遺構全体図

設されていたため、機能していた時点でそれらが如何ほど現れていたかについては把握できなかった。

杭の用材は直径0.05から0.1 m前後を測る自然木が多く用いられ、樹皮をそのまま残したものを含め片方を二ないし三方から削り出して尖らせて成形し、これらを南西から北東方向に打設して水流を受け止めている。なお、前面には粗朶状の小枝や束状の植物遺体が貼り付いている場所も観察された。

流路内および周辺からは土器や木器などの遺物が出土し、それらのうち図化可能なものを抽出して図104・148・149に掲載した。さらに、その中でも北肩に貼り付くようにして出土し完形に復された438の甕と、木製品の泥除や槽については、図102と図103や、図版15に出土状況を掲載した。



図101 第5-1面 308b流路内2339シガラミ 検出状況図

図 104 の土器のうち、429 は縄紋時代後期北白川上層式の鉢の口縁部片、430 は弥生時代中期前葉の第Ⅱ様式の甕である。431 から 438 は弥生時代後期の土器で、器種には 434 の器台あるいは壺の口縁部、435 の長頸壺、436 から 438 の甕、432 の壺の底部、433 の甕の底部がある。これらの土器は特徴からみて、後期の中でも前半代に位置づけられ、特に北肩に貼り付くようにして出土した 438 の甕は、その初頭段階に位置づけられると共に、出土した位置が 2239 シガラミから 5 m ほどしか離れていない南岸に完形の状態で置かれていたとみられるため、シガラミと何らかの関連性があるかとも思慮される。

木製品にはシガラミの手前で出土した図 148 - 789 の泥除と、シガラミの杭列に沿うようにして出土した図 149 - 791 に示す槽のほか、南肩部において図 148 - 787 に掲げた笠形を呈した曲柄平鍬か又鍬の頂部がある。



図 102 第 5 - 1 面 308 b 流路内 2339 シガラミ 平・立面図

このうち、槽は出土位置からみてシガラミの構築材として再利用された可能性もある。

309 b 流路 (図 100・105、図版 13・14)

調査区南東隅で検出され、その方向に直線的に流下する。位置は上層で確認された 309 a 流路と重複するため、これの前身流路と考えられる。南東部は調査区外となり、北西部は先述した 308 b 流路

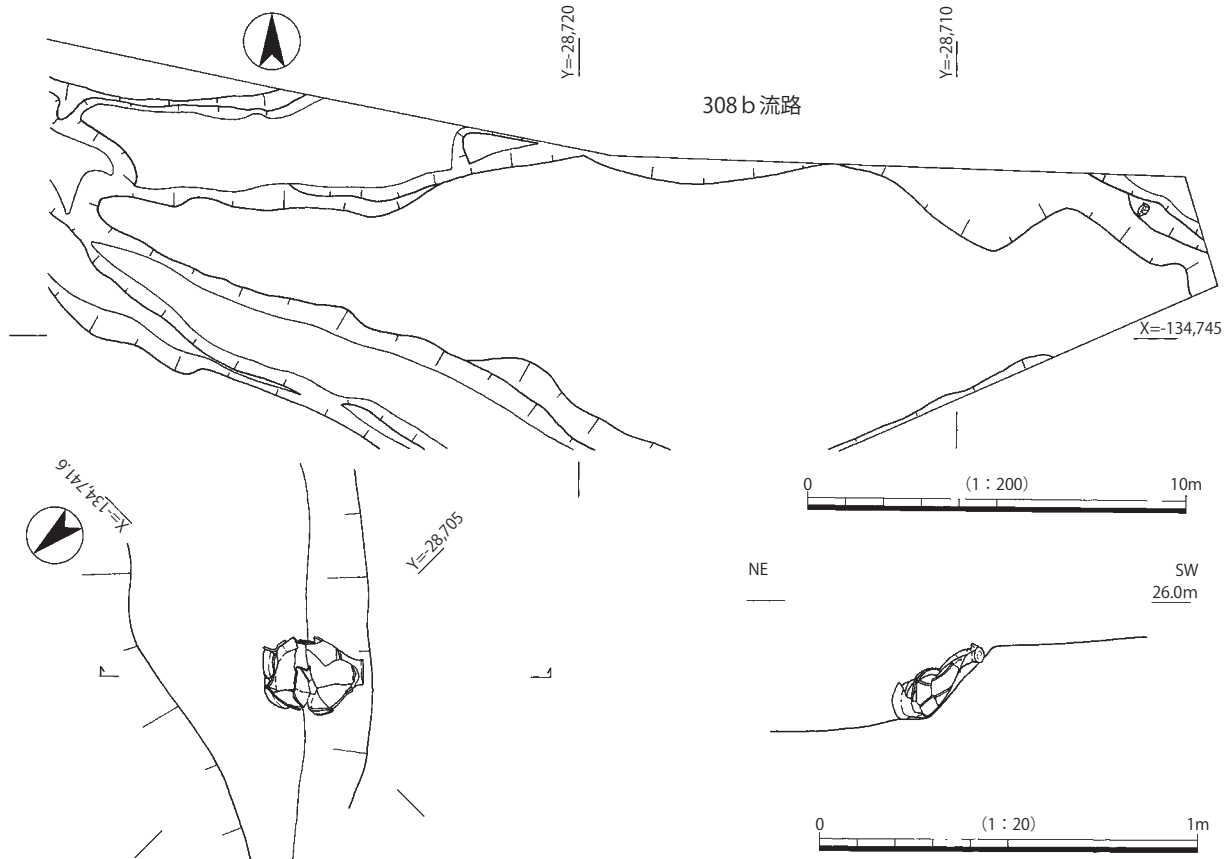


図 103 第 5-1 面 308 b 流路 土器出土状況図

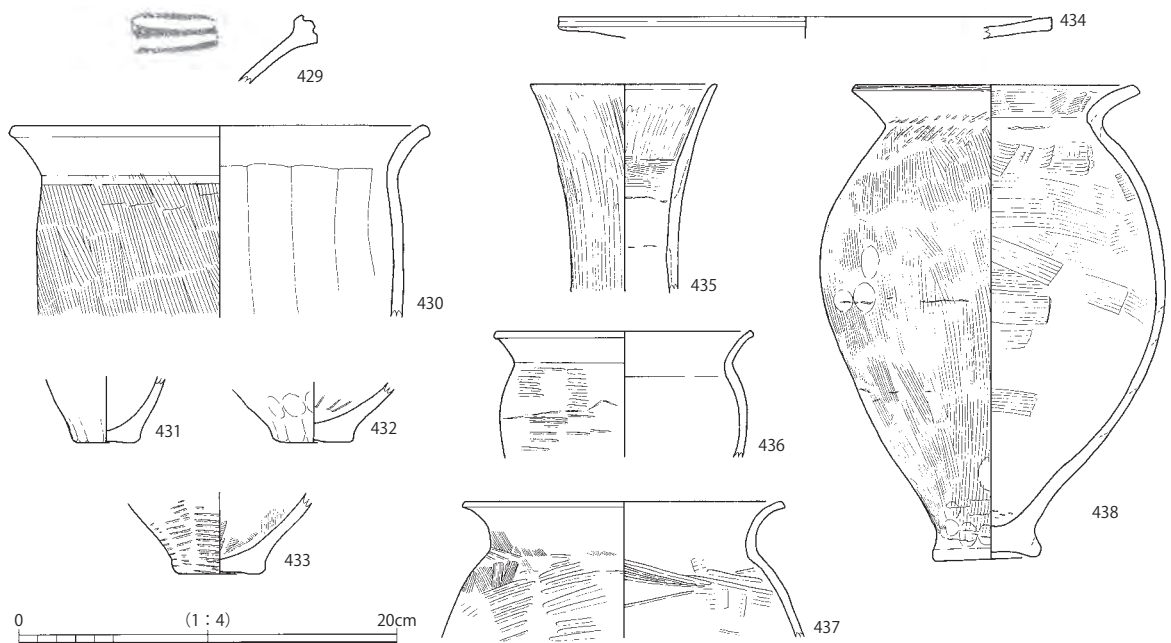


図 104 第 5-1 面 308 b 流路 出土遺物実測図

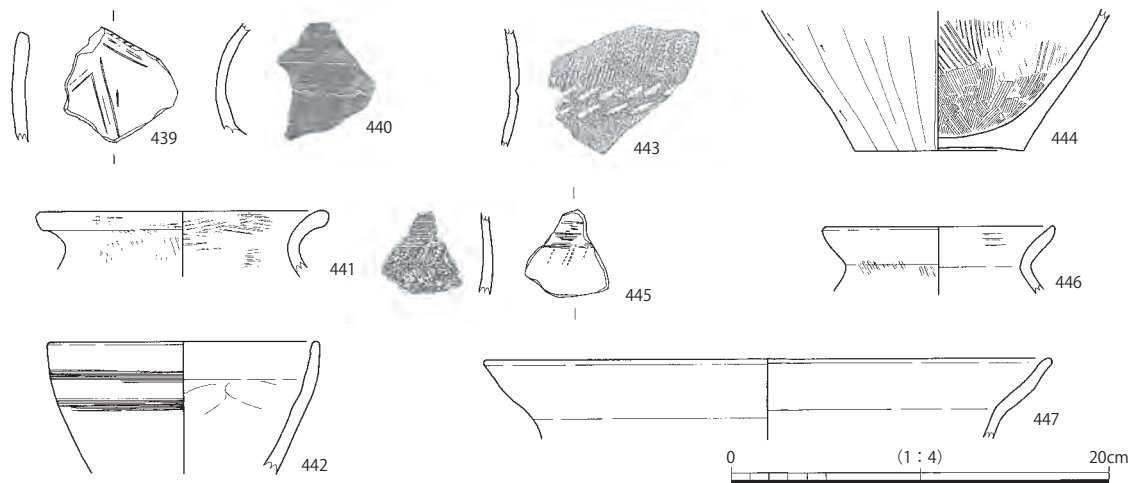


図 105 第 5 - 1 面 309 b 流路 出土遺物実測図

と合流する。現状での規模は長さ約 20 m、幅 2.5 から 3.0 m、深さ 1.0 から 1.5 m を測り、壁面には起伏が多く観察される。流路内は氾濫堆積層で埋没し、少量ながら土器などの遺物を包含していた。

その中から特徴的なものを抽出して図 105 に掲載した。これらのうち、439 は縄紋土器深鉢片で、波状の山形口縁に垂下した沈線が施されるため、北白川上層 2 式に位置づけられる。これ以外は弥生土器で、古いものから順に、440 と 441 の壺、442 の鉢が中期前葉第 II 様式、443 と 444 が中期後半第 IV 様式の甕とその底部、445 と 446 の甕と 447 の鉢が弥生時代後期第 V 様式の甕と鉢に分類され、このうち、445 には、施紋の様相から淀川流域を分布の中心とする近江・山城系の土器と考えられる。

以上のうち、最も新しいのは弥生時代後期のものであるため、当該期に埋没したとみなされる。

773 流路 (図 100・106、図版 13)

調査区東半で検出され、南東から北西方向に流下する。南東部は 857 b 流路によって削剥され、北西側は調査区外となるため全体形は把握できないが、現状では長さ 44.0 m、幅 2.0 から 4.0 m、深さ 0.4 から 0.5 m を測る。なお、北西側では 867 a 流路と分流するが、この 867 a 流路については、773 流路が南西側に蛇行する以前の河道である可能性がある。流路内の堆積層は、図 106 上段のような褐灰色系の粗砂からシルトで、粒径や色調からみて比較的穏やかな環境下で堆積したと考えられる。

層内からは、図 106 - 448・449 と、451 から 455 の土器などが出土した。図化した土器はすべて弥生時代のもので、うち、451 は口縁端面に綾杉状の刻目を施す第 I 様式新段階の壺、449 は体部の傾きや櫛描直線紋の様相からみて、第 II 様式に分類される壺である。451 から 455 の 6 点は第 V 様式に属す。451 は鉢の底部、452 は器台の体部、453 は甕の底部、454 は受け口状口縁と施紋の様相から淀近江・山城系の特徴を持つ甕、455 は体部下半が欠如する甕で、2 方向からタタキを施すという特異な調整がみられ、下の底部片はこれと胎土が共通することや、同様の調整が観察されるため同一個体とみなした。

以上の遺物から、流路が機能し埋没した時期を弥生時代後期とみなすことができる。

857 b 流路 (図 100・107・108、図版 13・22・23、巻頭図版 2)

調査区東半部を大きく蛇行しながら南東から北西に流下し、既述した 308 b 流路内に設置された 2339 シガラミにより制御された水流を導く役割を果たしている。北西部は調査区外へつつぎ、確認される範囲内での規模は、長さ 90 m、幅 4 m 前後で、深さは 0.4 から 1.0 m を測る。川幅は、蛇行の攻撃面では侵蝕作用により 7 m まで広がり、また、壁面と底面には起伏が多くみられる。

流路内堆積層は、図 107 のような状態で、部分的に葉理の観察される細砂からシルトを主体として、一部に植物遺体やその分解が進行した帯状の堆積層が観察されるため、比較的穏やかな水流の中で埋積していった状況を推定させる。また、北部にはこの推測を否定するように、直径 0.5 m、長さ 7 m を測る自然木が検出されたが、その大きさからみて蛇行部を通過できないことなどから、周辺に生育していた樹木が朽ち果てて落ち込んだのか、加工を予定して貯木されていたかとも思われるが、遺存状況が悪く加工痕等を観察できないため判断を下せなかった。

なお、この 857 b 流路により寸断された幅 2 から 3 m の直線的な流路にも同じ名称を付与しているが、これは、蛇行が進行する以前に流下していた前身流路と捉えたことを事由とする。

出土遺物のうち、特徴的なものと図化可能なものを図 108 に掲載した。これらは、456 と 457 のような土製品とそれら以外の土器に大きく区分される。土製品のうち 456 は両端を欠失するが半環状をなすと考えられる。457 は巻頭図版にも示すように動物を模した製品で、図 107 上段に出土位置を示すように、北西側断面図を作成した右岸部の肩に相当する軽微な土壌化が進行した土層最上部から正置された状態で、まったく破損せずに出土した。この土製品は、円筒状をなした粘土塊を体部としてこれからやや上方につまみ出すようにして頭部を形作り、顔面には刺突により眼と口を表現する。その下方

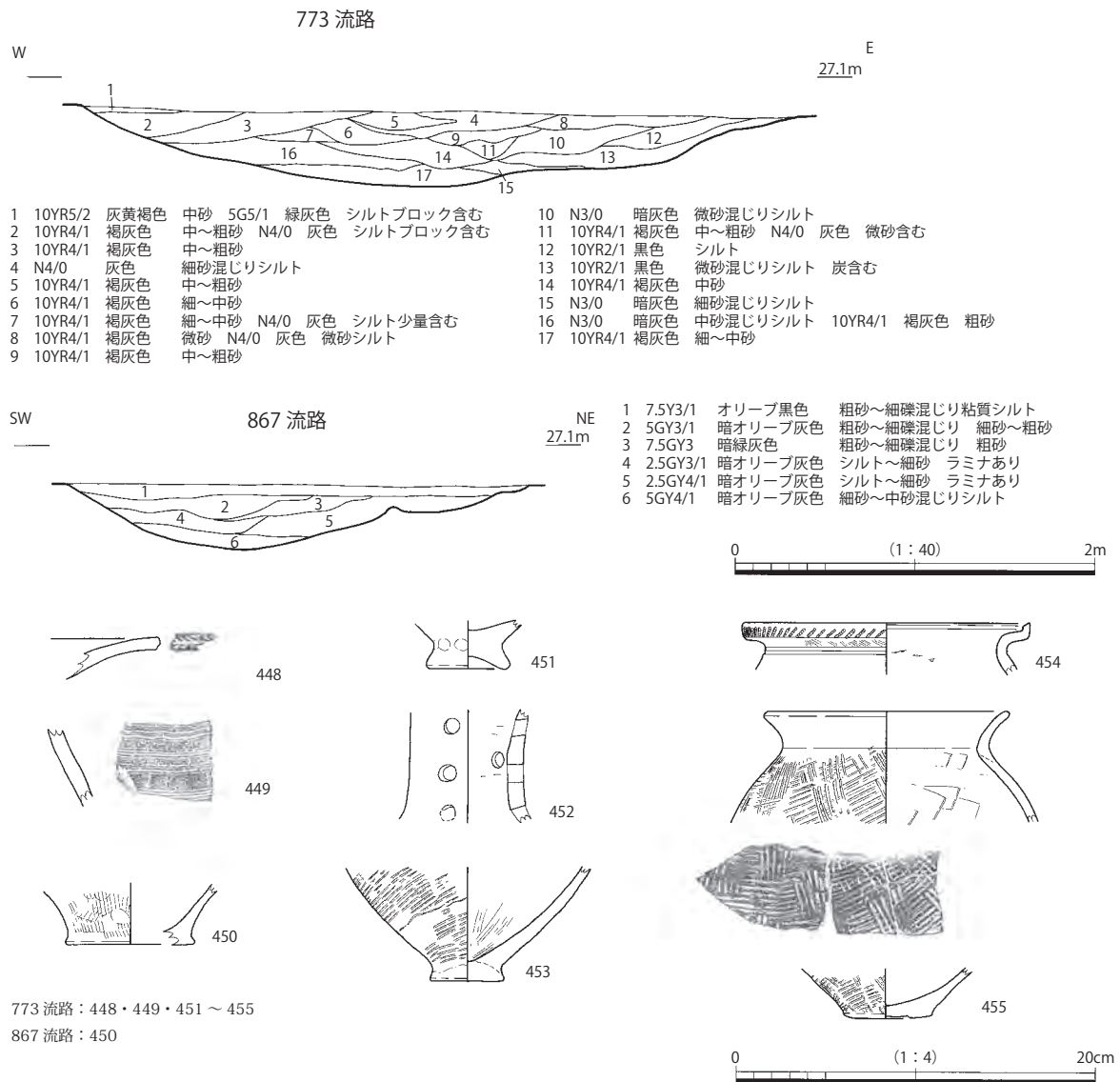


図 106 第 5 - 1 面 773・867 流路 断面、及び出土遺物実測図

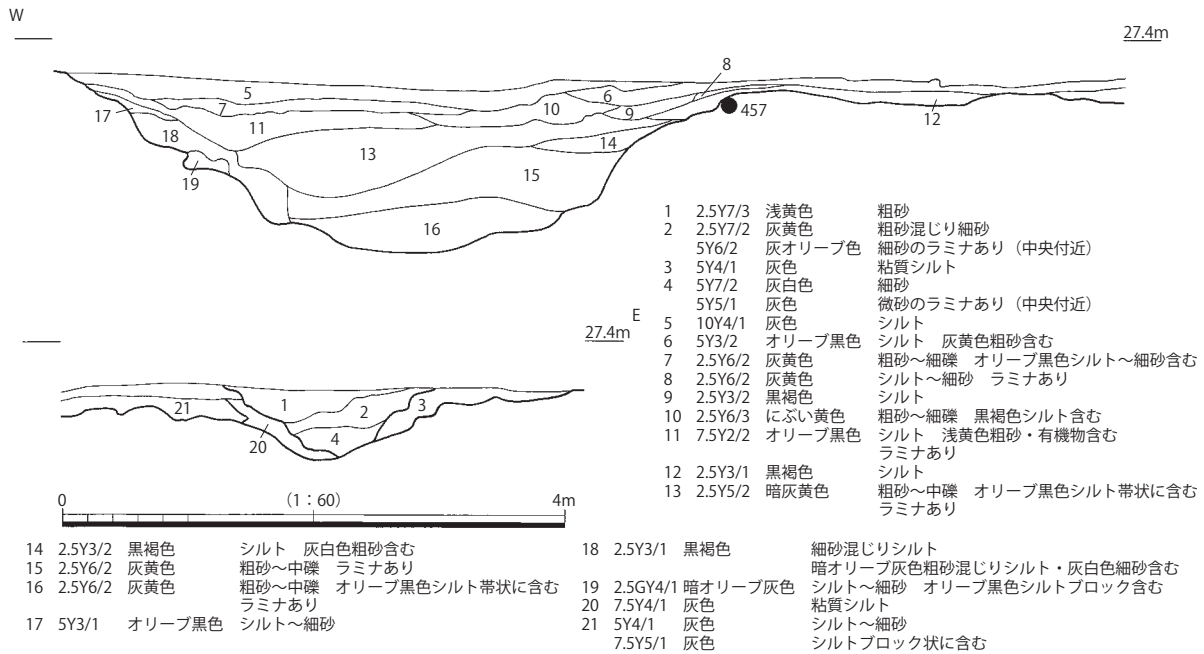


図 107 第 5 - 1 面 857 b 流路 断面図

には踏ん張った四肢を作出し、臀部にも刺突の手法を用いて肛門を表す。さらに、頭部の後方から背面にかけては鬣を想起させる鷹ノ羽状をなした極めて細い線刻が観察され、これら全体の様相からイノシシまたはイヌを模したと考えられる。

土器は縄紋時代と弥生時代とに分けられる。縄紋時代のものには 466 の突帯紋期に伴う底部、467 の滋賀里Ⅲ b 式の深鉢、468 の北白川上層式に伴う粗製の深鉢、469 の船橋式の深鉢がある。

弥生土器には後期から前期のものがあるが、前期と中期については、下層の流路から巻き上げられたものや、調査時に層界を厳密に区分できないまま掘削した結果、ここで採取したものである。

後期の土器には 458 の高杯の脚裾部、459 の鉢、460 の壺がある。このうち、壺については生駒山西麓産の胎土で製作されていることから、その地域の編年観に依拠して考えた場合、口縁端部が丸く形作られていること、体部が球形を呈していること、2 分割して施されたヘラミガキのうち、下位の方が後とされることからみて第 V 様式初頭に位置づけられる。

中期の土器には 461 に示す壺の底部がある。外面にヘラケズリが施されていることや、煤が付着していることから、中期でも後半段階の壺 D に分類される資料である。

上記以外は前期新段階の土器で、器種には 462 と 463 の壺、464 の鉢、465 の甕がある。これらのうち、463 の壺は、貼付凸帯紋を外面には平行に、内面には漏斗状に貼りめぐらせて極度に加飾していること、465 は非常に大形であることが特異である。なお、これら 2 点の土器については、破片が大きいことや摩滅していないことから、下層の流路に包含されていたものをこの段階で取り上げた可能性がある。

859 a 流路 (図 100)

調査区北東隅で検出され、東西両端とも調査区外へとつづくため不明だが、西側は幾筋かに分岐する様相をみせる。方向はほぼ東から西で、そちらに向かって流下する。現状での規模は、長さ 19 m 強、幅 1.5 から 2.0 m 前後、深さ 0.2 から 0.3 m を測り、底面には流れの方向に平行するよう起伏がみられた。流路内堆積層は、粗砂からシルトを中心とする氾濫堆積層で、遺物は含まれていなかった。

したがって、ここから時期を判断することは不可能であるが、周囲の状況や、流路内堆積層の様相か

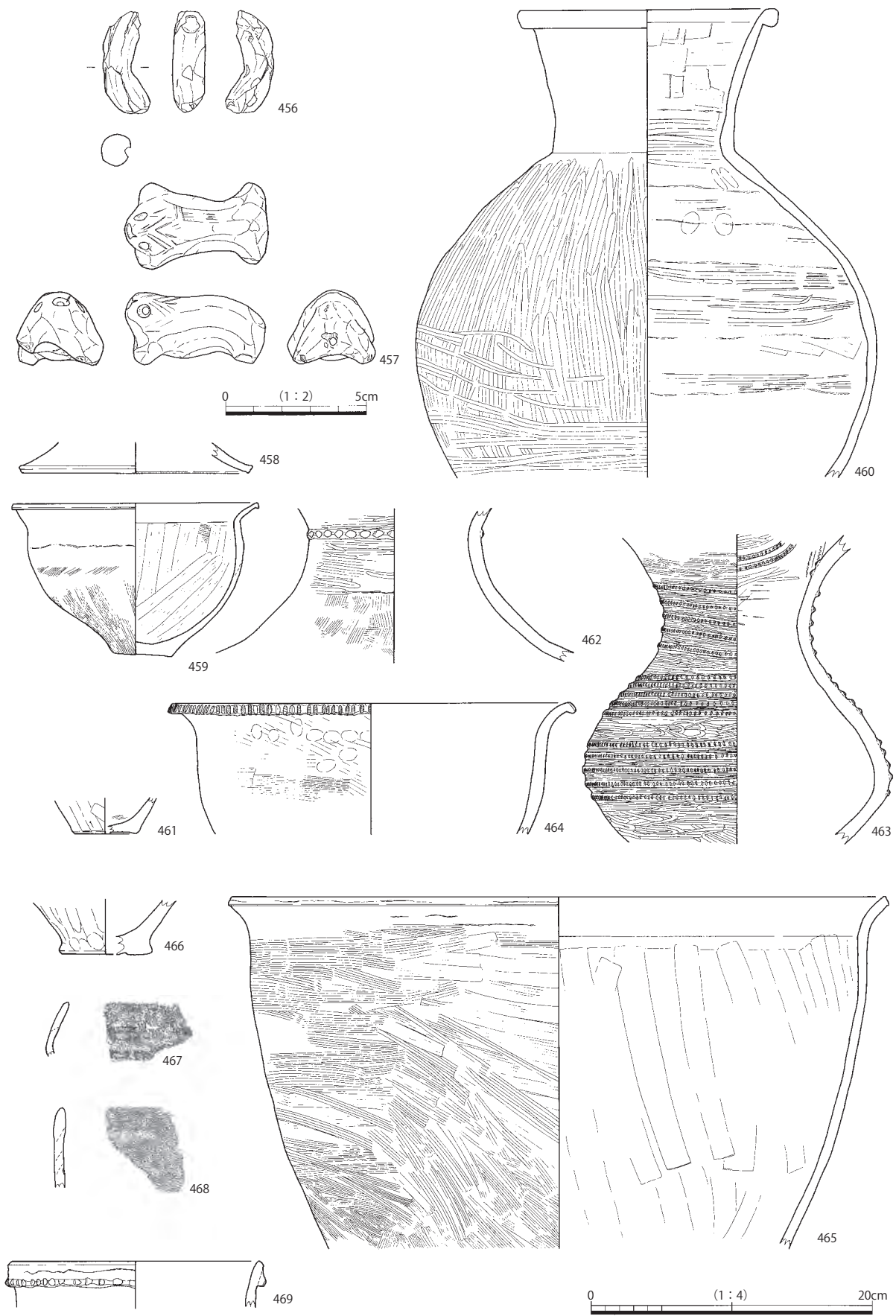


图 108 第 5-1 面 857 b 流路 出土遺物実測図

ら考えて弥生時代後期の中にはおさまるものと思察される。

867 a 流路 (図 100・106、図版 13)

調査区北東部で検出され、南東から北に方向を変えながら流下して調査区外へとつづく。確認される平面形は不整で広狭が激しく、規模は、長さ 21.5 m、幅 2.0 から 4.0 m、深さ 0.4 m 前後を測る。

断面は皿形を呈し、流路内堆積層は、図 106 中段に示すようなオリーブ灰色を基調とした細礫からシルトで、葉理が観察される層準も存在する。

流路内堆積層からは、図 106 - 450 に示す弥生土器の底部が出土した。これについては、外面に施された粗いハケ目と胎土の特徴から第Ⅱ様式の大和型の範疇に入るが、周辺の包含層や、773 a 流路出土遺物の時期からみて、この時期を以て直ちに本 867 a 流路のそれに充当させることはできない。

5 - 1 層出土遺物 (図 109)

第 5 - 1 面の直上やこれを覆うシルトなどの溢流堆積層内から土器などの遺物が出土し、これらのうち特徴的なもの 4 点を図 109 に図化した。これらは 1 点の弥生時代中期のものを除いてすべて後期に属する。中期に分類されるものは 471 に示す高杯の脚部で、形態や内面にヘラケズリが施される調整技法から、弥生時代中期後半段階に位置づけられる。後期の土器には 470 の高杯、472 と 473 の甕がある。これらについては、形態や成形技法からその中でも前葉に位置づけられるものとみなされる。

これによって、当該遺構面の時期もこの段階以前となることが判明する。

第 11 項 第 5 - 2 面

858 土坑 (図 110・111)

調査区北東部で検出された。平面は不整な円形を呈し、規模は長径 0.7 m、短径 0.65 m、深さ 0.15 m を測る。断面は皿形を呈し、埋土は細礫を含むシルトから細砂の単一層である。

特徴を持った出土遺物がないことや、単独の遺構であるため、時期を判断することはできなかった。

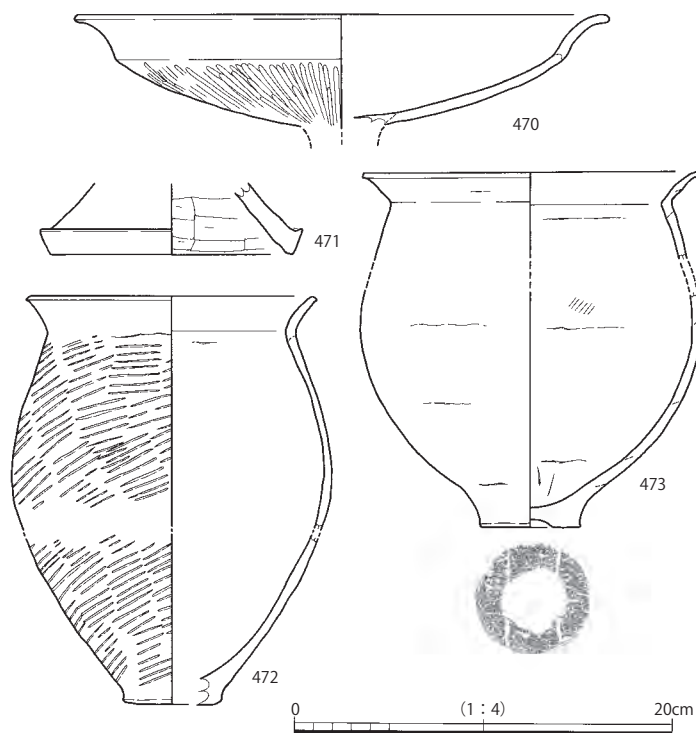


図 109 5 - 1 層 出土遺物実測図

864 土坑 (図 110・111)

調査区北東部に位置し、859 b 流路の埋積層上面から掘り込まれている。平面は北西から南東に長い楕円形を呈し、規模は長径 0.7 m、短径 0.6 m、深さ 0.1 m となる。断面は偏平な皿形を呈し、埋土は黒色系の細礫からシルトで、2 層に細分される。

出土遺物には図 111 - 474 の壺がある。形態や紋様からみて弥生時代第Ⅱ様式に分類され、これと 859 b 流路出土遺物とを比較した場合、同時期のため当該期の中で互いが形成されたと考えられる。

866 土坑 (図 110・111)

864 土坑の南方約 4.0 m で検出され、北西から南東に長軸を持つ。平面は北

東側に頂部を持つ倒卵形で、規模は長径 2.5 m、短径 1.4 m、深さ 0.2 mを測る。埋土はオリブ黒色系のシルトから粗砂となる。

時期は、単独の遺構であることや、特徴を持った遺物が出土しなかったため、判断できなかった。

868 土坑 (図 110・111)

864 土坑の南西約 3.0 mで検出された。平面は北西から南東にやや長い不整な形をなし、規模は長径 2.1 m、短径 1.5 m、深さ 0.2 mとなる。断面は皿形を呈し、坑底は播鉢状となる。埋土は図 111 に示すように 5 層に細分されるが、大きくは下位の黄灰色系を基調とする細礫から細砂と、上位の黒褐色を呈し中礫を混じえた細砂から粗砂に二分される。

時期については、これを知ることでできるものがなく、他の遺構とも重複していないため不明である。

869 土坑 (図 110・111)

調査区の北東部で検出された。平面は北西から南東方向に長い不整な形状をなし、規模は長径 1.7 m、短径 1.1 m、深さ 0.2 mを測る。断面は南側がやや膨らむ椀形となる。埋土は図 111 のような黄灰色

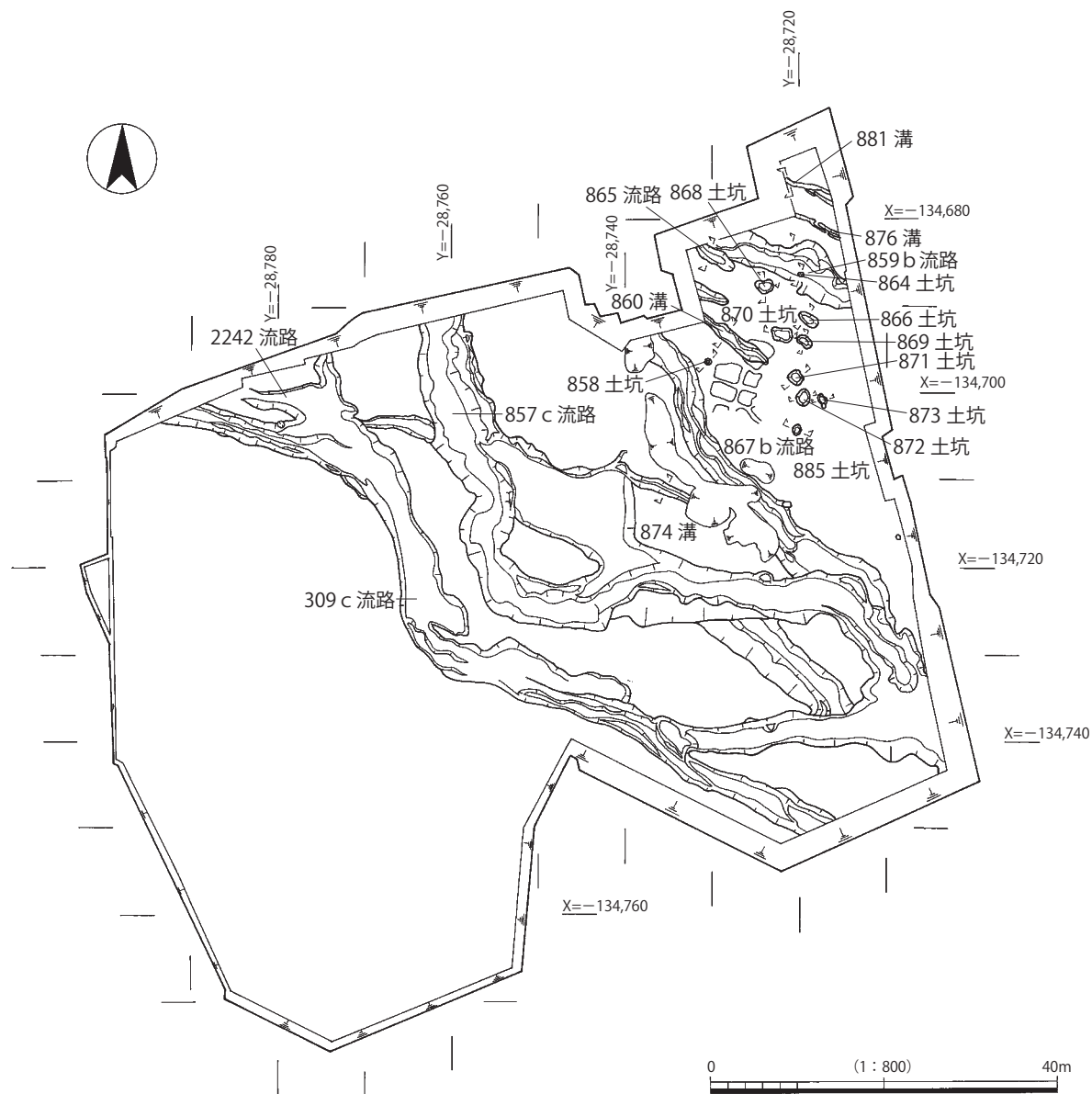


図 110 第 5 - 2 面 遺構全体図

の細礫を含んだオリブ黒色シルトから細砂の単一層で、遺物は含まれていなかった。

このような状況であることと、これ単独で検出されたことから、時期については判断できなかった。

870 土坑 (図 110・111)

869 土坑の西側 0.5 m の位置で検出され、平面は中央部のくびれた東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は長径 2.6 m、短径 1.4 m、深さ 0.20 から 0.25 m である。断面は東側が窪んだ浅い皿形を呈し、坑底には緩やかな起伏が観察された。埋土は細礫を含む黄灰色の細礫からシルトである。

時期は、遺物が出土していないことや、他の遺構と重複していないことから明らかにできなかった。

871 土坑 (図 110・111)

870 土坑の南側 3.5 m において検出された。平面の形は南東から北西へ辺を揃える隅丸方形をなし、規模は長辺 1.7 m、短辺 1.5 m、深さ 0.15 m を測る。断面は南西側がやや深い皿形を呈し、埋土は細礫を混じえたオリブ黒色シルトから細砂で、遺物は含まれていなかった。また、他の遺構とも重複しておらず、ここから判断材料を得ることもできないので時期は明らかでない。

872 土坑 (図 110・111)

871 土坑から南東方向に 0.5 m 離れた場所に位置し、平面は北側に頂部を持つ倒卵形を呈する。規模は、長軸 2.1 m、短軸 1.5 m、深さ 0.15 m を測る。断面は皿形となり、埋土は細砂から細礫を混じえ

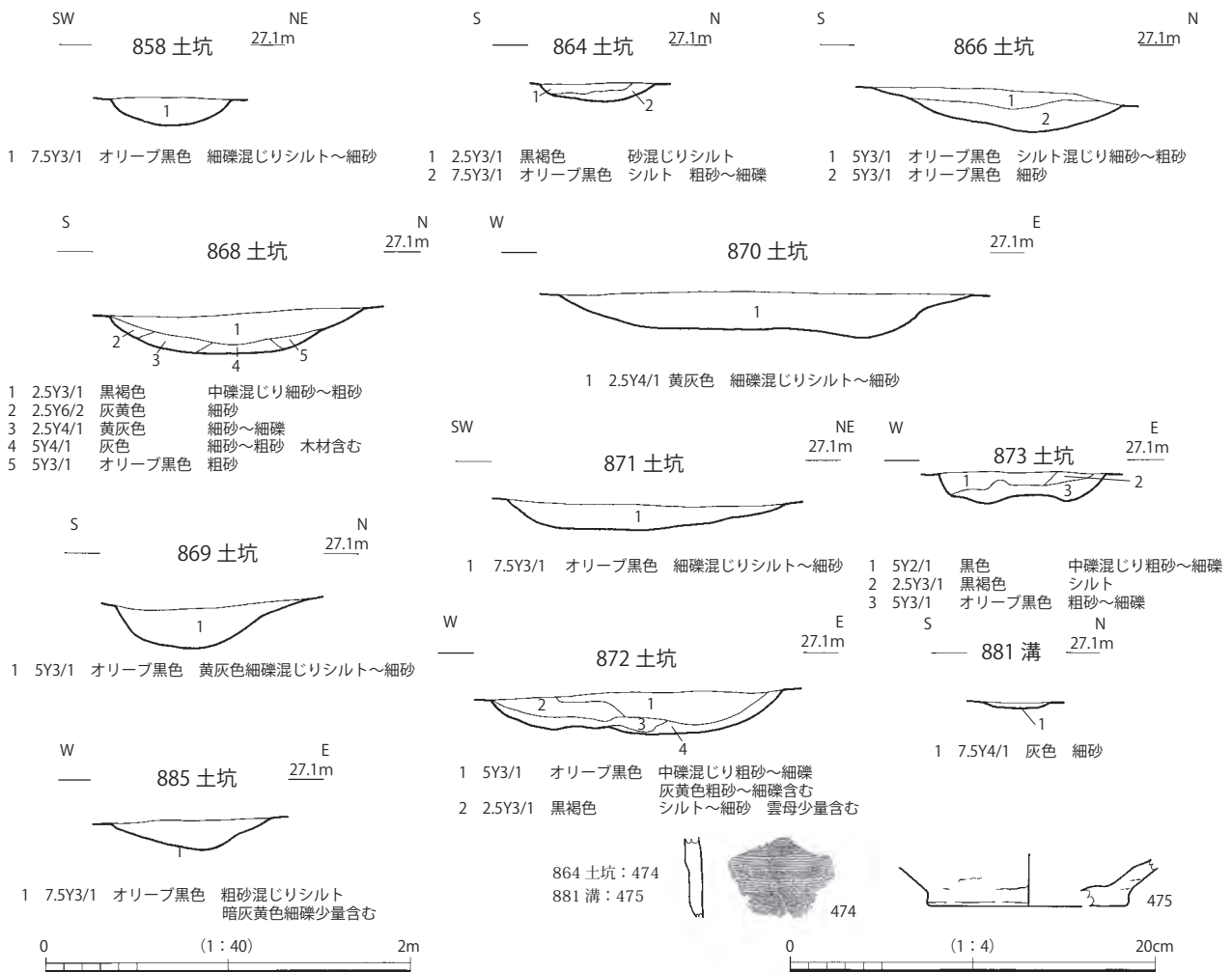


図 111 第 5 - 2 面 858・864・866・868～873・885 土坑、881 溝 断面、及び 864 土坑・881 溝 出土遺物実測図

た黒色系統の2層に細分される。遺物は出土しておらず、また、他の遺構とも重複する関係にないため、双方ともに時期を知る手掛かりは得られなかった。

873 土坑 (図 110・111)

872 土坑の東側 1 m 弱に位置し、平面は北西から南東にやや長い不整な楕円形をなす。南端はピットにより削り取られ、その状態での規模は、長径 1.2 m、短径 0.9 m、深さ 0.10 から 0.15 m を測る。断面は隅の丸い逆台形をなし、坑底には起伏を有する。埋土は 2 層に細分され、黒から黒褐色系の中礫から細礫を混じえた粗砂からシルトである。

時期については、出土遺物がなかったため不明である。

885 土坑 (図 110・111)

872 土坑の南方 2.0 m から検出された。平面は、ほぼ南北に長い楕円形状を呈し、規模は長軸 1.5 m、短軸 0.9 m で、深さは 0.15 m である。断面は偏平な V 字形をなし、埋土は暗灰色細礫を少量含んだオリーブ黒色粗砂混じりシルトの単一層である。

遺物の出土がみられなかったことや、単独で検出された遺構であるため、時期は推し量れなかった。

860 溝 (図 110・112)

調査区北東部で検出され、南東から北西方向にのびる。北西側は調査区外に向かうため全体形は不明だが、調査区内での規模は、長さ 9.5 m 以上、幅 0.8 から 1.8 m、深さ 0.1 m を測る。断面は図 112 左上に示すような南西側が深い偏平な皿形を呈す。埋土は黄色から灰色系等の中礫から細砂で、狭い断面形にもかかわらず 8 層にも細分されるため、流れが早かったことを窺わせる。

時期については、それを知る手掛かりとなる遺物が出土しなかったため不詳とせざるを得ない。

874 溝 (図 110・112)

調査区北東部において検出され、この溝を境としてより南西には当該期の遺構が存在しない。平面形はほぼ直線的となり、南東から北西に流下する。規模は、長さ 7.0 m、幅 1.0 から 1.5 m、深さ 0.3 m を測る。断面は、図 112 に示すように北東側が一段深い。埋土は粗砂から細礫を含んだオリーブ黒色シルトで遺物は出土しなかった。また、他の遺構とも重複しておらず、時期は不明である。

876 溝 (図 110・112)

調査区北東部で検出され、南東から北西方向にのびる。平面は直線的で、規模は南東部が調査区外へとつづくが、現状での長さ 3.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。埋土から図 112 - 478 の土器が出土し、その形態や直線紋と波状紋の様相からみて、弥生時代第 II 様式の壺と判断される。

よって、当遺構はこの段階を上限とするが、下層の第 6 面から弥生時代中期後半までの土器が出土しているため、この土器の時期を以て直ちに遺構のそれに結びつけることはできない。

881 溝 (図 110・111)

上記 876 溝の北東約 2.0 m の位置でそれと平行するようにして検出され、方向も 876 溝と同じく南東から北西である。北西端は調査区外のため全容は把握できないが、現状での規模は、長さ 3.1 m 以上、幅 0.5 m、深さ 0.05 m を測る。断面は図 111 右下のような非常に浅い皿形を呈し、埋土は灰色細砂の単一層で、そこから図 111 - 475 に示す壺の底部が出土した。これについては、器壁の厚さなどが弥生時代第 I 様式の特徴を示しており、よって、遺構の時期は弥生時代前期以後に求められる。

309 c 流路・2340 シガラミ (図 110・113、図版 13)

第 5 - 1 面で検出された 309 b の前段階に相当する流路と考えられ、流れの方向や規模などの諸相

は、それと小差がみられるのみである。しかし、この段階で特徴的なのは、北西部の 2342 流路との分岐点において 2340 シガラミが検出されたことである。その規模は、長さ 1.0 m、幅 0.8 m、高さ 1.0 m 前後を測り、西から東に向かって斜め方向に杭が打設されているが、北方では途切れて杭と杭の間には隙間が目立つなど堰の機能を果たしていない。このことから、このシガラミを設けることによって下方への流勢を制御し、北側の 2342 流路へと水を導く役割を担っていたと考えられるが、後の段階にはこれとは反対に 2342 流路側に新しく 2341 シガラミが設置され 309 c 流路へと導水路が変更されたため、放棄されたと考えられる。杭の用材は、直径 0.05 から 0.1 m 弱の自然木のみで、これらの片方の端部を二方ないし三方から切削することにより先端部を作出している。

時期は、調査時に杭が確認されたのがこの堆積層上面からであるため、これらを打設し実際に堰として機能し、放棄されたのは当該遺構面以降のことであり、事実、シガラミ上部を覆う砂礫層から弥生時代後期の土器が出土したため、本来は第 5 - 1 面段階までの間に構築されたと考えられる。

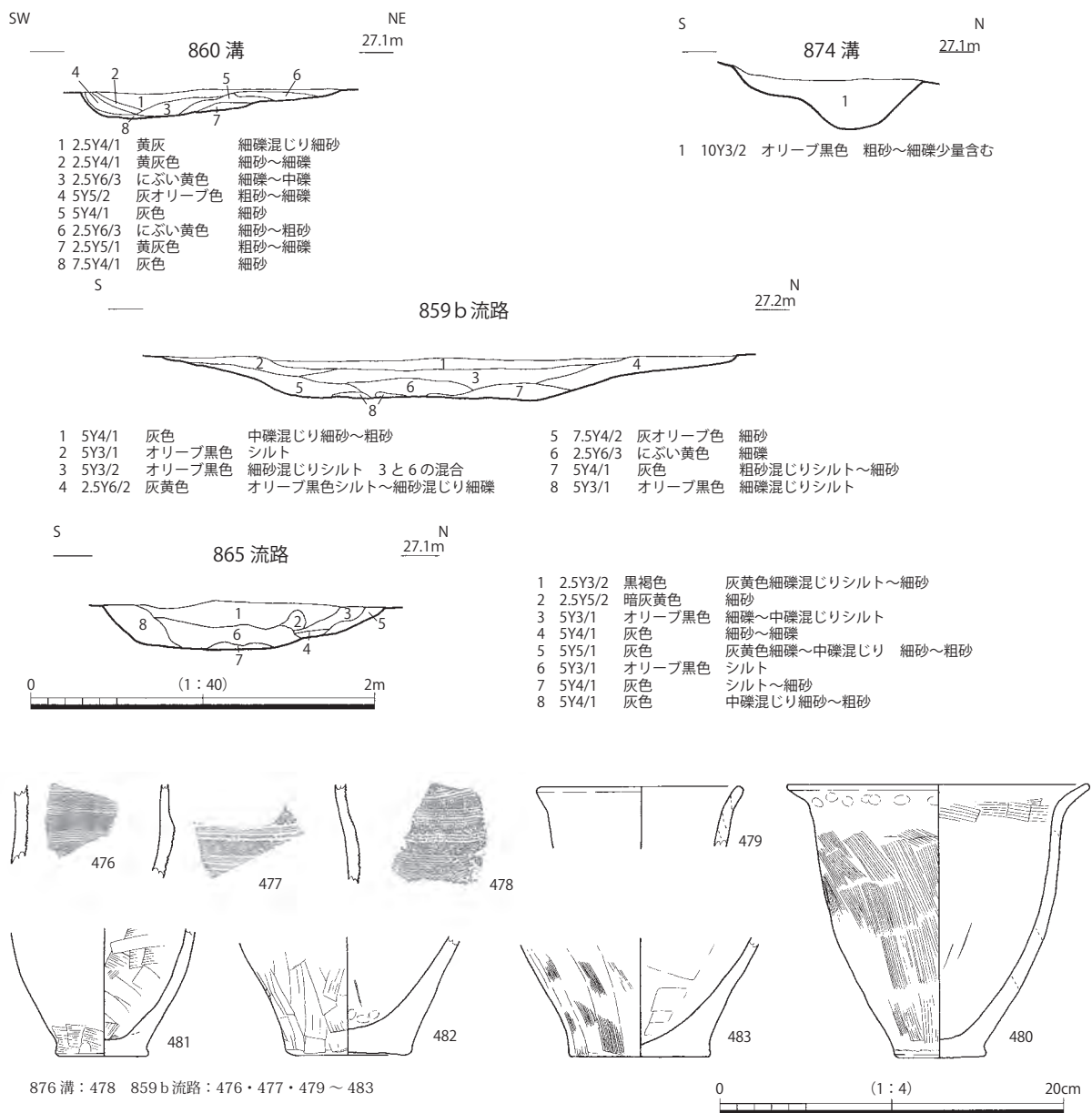


図 112 第 5 - 2 面 860・874 溝、859 b・865 流路 断面、及び 876 溝・859 b 流路 出土遺物実測図

859 b 流路 (図 110・112・148)

調査地北東側を南東から北西方向に向かってほぼ直線的に流れ、平面形は場所によって広狭の差が激しい。両端が調査区外となるため、現況では長さ 18.0 m 以上を測り、幅は 2.5 から 6.5 m、深さ 0.2 m 前後となる。断面は偏平な逆台形を呈し、河床には起伏がみられた。埋土は、図 112 中段に示すように 8 層に細分され、灰色から黒色系を呈した細礫から細砂からなる氾濫堆積がみられた。

出土遺物には図 112 - 476・477 および、479 から 483 に示す 7 点の弥生土器や、図 148 - 788 に掲載する 1 点の木器がある。木器は遺存状況が非常に悪いが、A 型突起を有することから直柄広鋏の

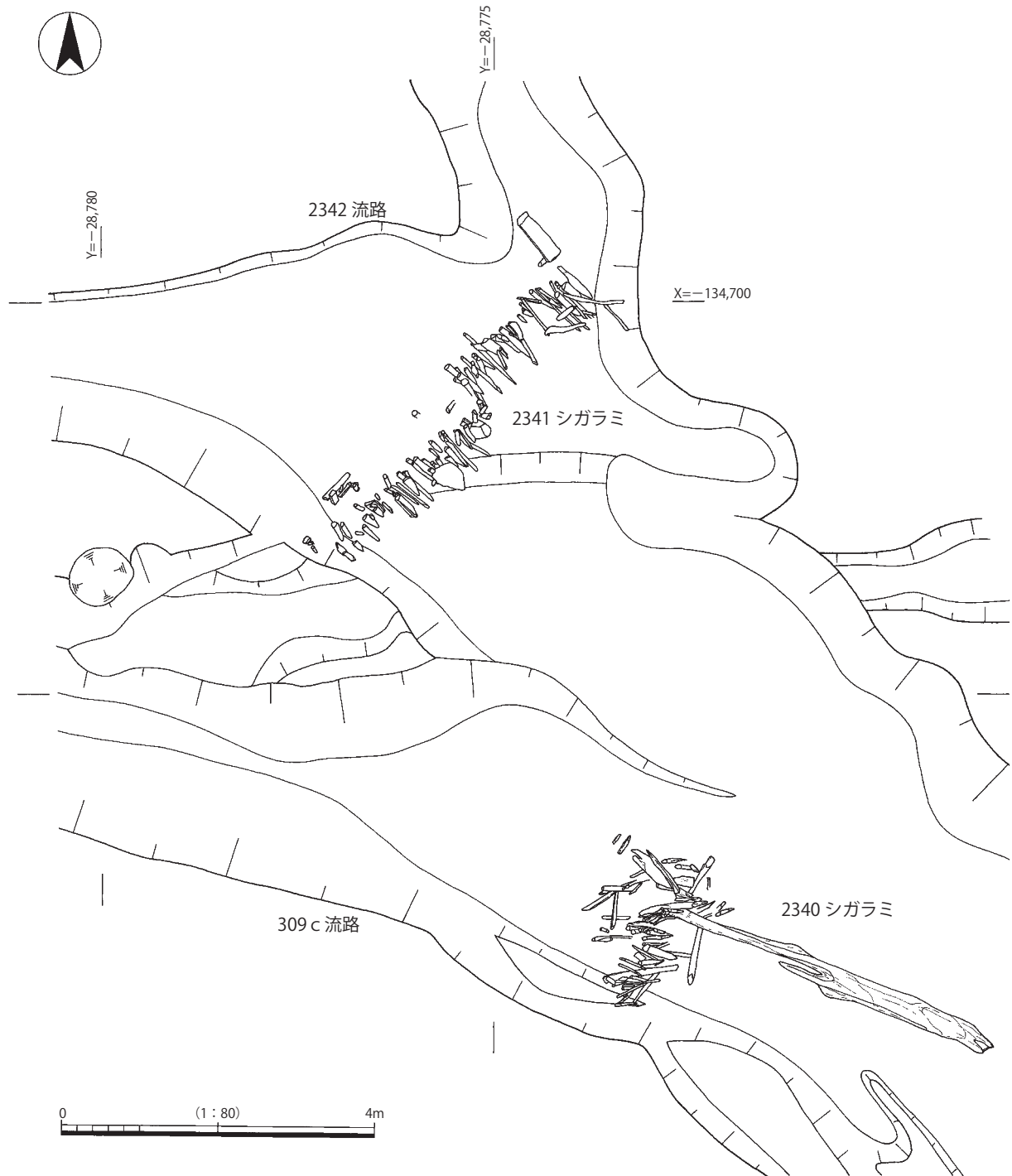


図 113 第 5 - 2 面 309 c 流路内 2340 シガラミ・2342 流路内 2341 シガラミ 検出状況図

未成品と考えられる。土器のうち前者は壺、後者は甕で、形態や施紋から第Ⅱ様式に位置づけられる。よって、時期は弥生時代中期初頭を上限とするが、下位に第6面の890土坑が重複し、そこから弥生時代中期前半の土器が出土しているため、この時期を本流路の時期とすることはできない。

なお、木製品については、表面の風化が著しいことから、本来、下層の890土坑に帰属していたものがこの流路の水流により遊離し、ここに混入した可能性も考えられる。

865 流路 (図 110・112)

上記の859 b流路の南西部に沿うようにして検出され、北西端は調査区外へと伸びる。確認された長さは5.0 mだが、調査区壁際の様相から判断してこれより大きくはのびないと考えられる。幅は最大で1.7 m、深さは0.3 m前後となる。断面は図112中段左に示すような逆台形をなし、底面には起伏が観察された。埋土は、灰色からオリブ黒色を呈した細砂からシルトで9層に分割される。

出土遺物はみられなかったが、重複関係より859 b流路に後出するものであることは確実である。

2342 流路・2341 シガラミ (図 113)

調査区北辺から西側の位置で検出された。南側を309 c流路により削剥され、以北は調査区外となる。このため全体形は不明で、現状での規模は、長さ3.5 m以上、最大幅3.5 m、深さ0.5から1.0 mを測る。北西側で2方向に分岐し、その手前で流路内に堆積した砂層上面から杭を打設することにより2341シガラミを設けて2342流路の水を西側の支線水路に流入させて309 c流路への分流を図っている。

規模は、長さ2.4 m、幅0.3から0.5 m、高さ0.5前後を測り、杭を北西から南東に傾けて密に打設することにより構築している。杭の用材は直径0.05から0.1 mを測る自然木で、その一端を二ないし三方向から削り出している。なお、この中に建築部材などからの転用材は含まれていなかった。

時期については、流路内やシガラミ周辺から土器などが出土していないため不明だが、分流された309 c流路から第Ⅴ様式の土器が出土したため、本来ならば第5-2面の中の小画期として捉えなければならぬものを、309 c流路から供給された溢流堆積を完全に除去しないまま下層の調査に着手したために当該遺構面で検出するに至ったと認識している。

区画 (図 110)

調査区北東部において第5-2面を覆う溢流堆積層を除去すると古土壌が露呈し、これらの層界を丁寧に掘削してゆくと、図110のような一辺1.5 m弱から3 m弱を測る畦畔状の盛り上がりにより区画された田の字形の地形が検出された。さらに、それぞれの隆起の延長部を追究した結果、南北にも畦畔状の高まりがつついていることが判明し、合計8区画以上存在することを確認した。

畦畔状の高まりは等高線に対し、直交する方向と平行する方向にそれぞれが設けられているため、1区画の面積は矮小ではあるが、これらが水田の区画をなしているものとも考えられる。

なお、時期については、作土層に相当する古土壌からも、これを覆う流水堆積層からも遺物が出土していないため不明と言わざるを得ない。

第12項 第6面

890 土坑 (図 114・115・147、図版 16・24)

調査区北東部で検出された。調査段階で第5-2面において検出した859 b流路内堆積と、附近の溢流堆積層を除去し、河床を精査していると、壁際で東西、南北とも約3.5 mの範囲にわたってオリブ黒色のシルトが露呈し、これを掘削したところ木製品などが検出されたため木器貯蔵用の土坑と認識した。なお、掘り込み面は859 c流路の最上層から確認され、その窪みを利用して営まれている。

平面は不整な円形を呈し、規模は南北 3.5 m、東西は一部調査区外にもものびるが、現状で 3.4 m を測る。断面は偏平な播鉢形で、深さは 0.7 m で、図 115 や図版 16 に示すように、北側の壁面に接するようにして握りの欠損した曲柄鋏台部が出土した。さらに、中央からやや北の埋土中位より曲柄又鋏が水平の状態で見つかり、そして、土坑北東部の一段落ち込んだ部分からは、図 147 - 786 の広鋏未成品とも察せられる加工痕の観察される板材が坑底に接して出土した。なお、紐掛けの大きさからみて、図 147 - 784 の曲柄鋏台部と、同図 - 785 の曲柄又鋏は、本来、一組をなすものとも考えられる。

土坑内からはこのほかに土器類などが出土し、このうち図化できるものを図 115 下段に掲載した。双方とも弥生時代のもので、形態的特徴から、484 は第Ⅱ様式の最終末から第Ⅲ様式最古段階に位置づけられる壺、485 は第Ⅲ様式古段階に帰属させることが可能な高杯の脚部である。

これらの土器からみて、遺構の時期は弥生時代中期前半段階以降と考えられ、さらに、この土坑の上位を覆う 859 b 流路から出土した土器の時期が第Ⅱ様式であることから、その段階から大きく隔たるものではないと考えられる。なお、木器の形式からみた場合での時期もこれと齟齬をきたすものではない

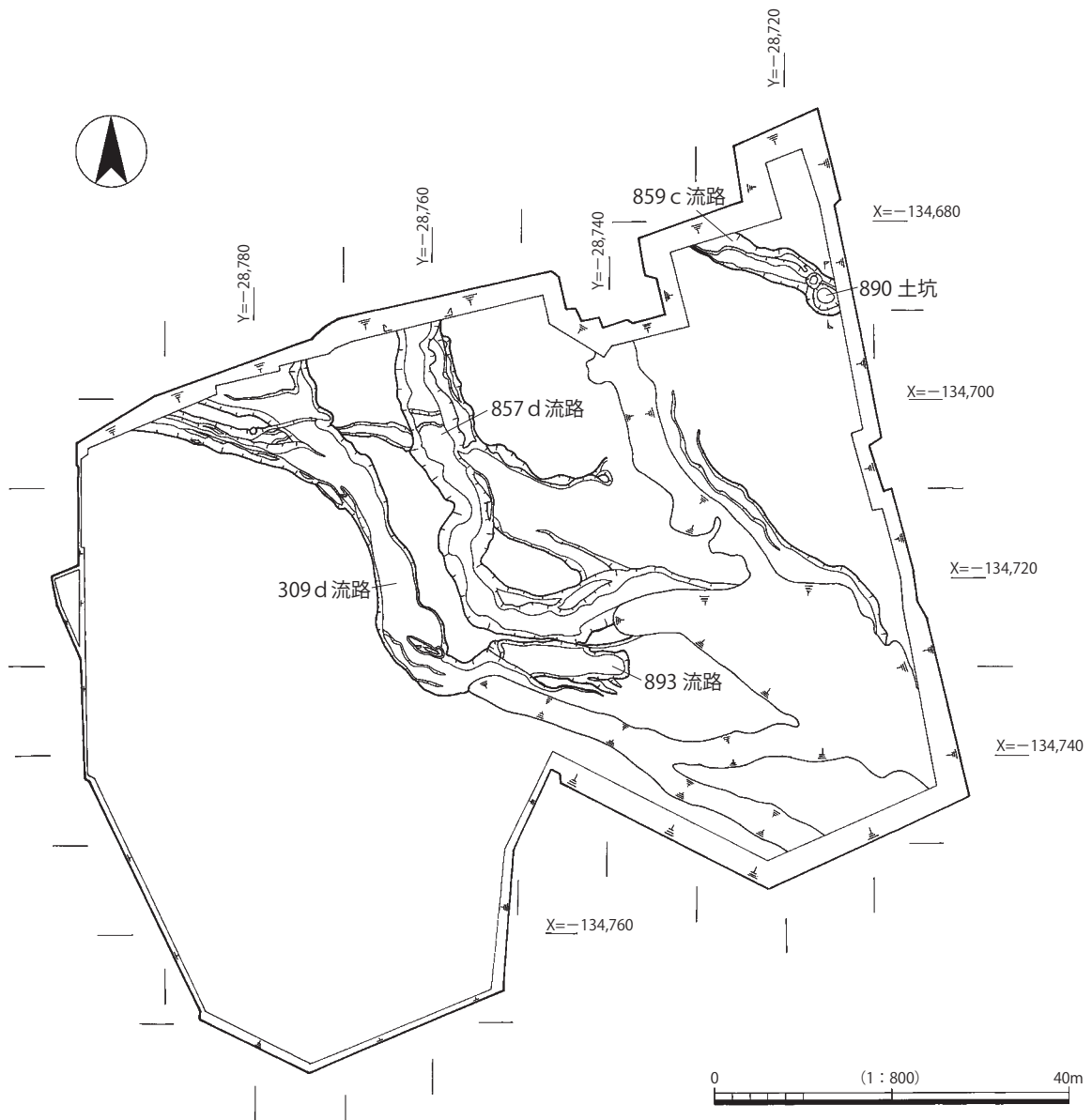


図 114 第 6 面 遺構全体図

いため、この時期比定が補強されるものと捉えておきたい。

857 d 流路 (図 114・116)

調査区東半の中央から西に流下し、ほぼ中央で大きく北西に蛇行して調査区外へとつづく。東半は基底面に至るまで 857 c 流路に削剥されるため、現況での規模は長さ約 50 m、幅 5 m 前後、深さ 1.0 m となり、幅は流域北東部の分岐点では 7 m 程度まで広がる。断面は、図 116 上段のような逆台形で、堆積層内には、植物遺体に由来する有機質を多く含む層や、葉理の観察される層序、周辺の基盤層や古土壌が削剥を受けて遊離した偽礫が各所で観察され、この中には少量ながら弥生土器などの遺物も含まれていた。図 116 下段に示す 486 と 487 の甕もその一部で、形態や特徴から第Ⅱ様式に分類される。したがって、この流路は、弥生時代中期初頭に存在していたものと考えられる。

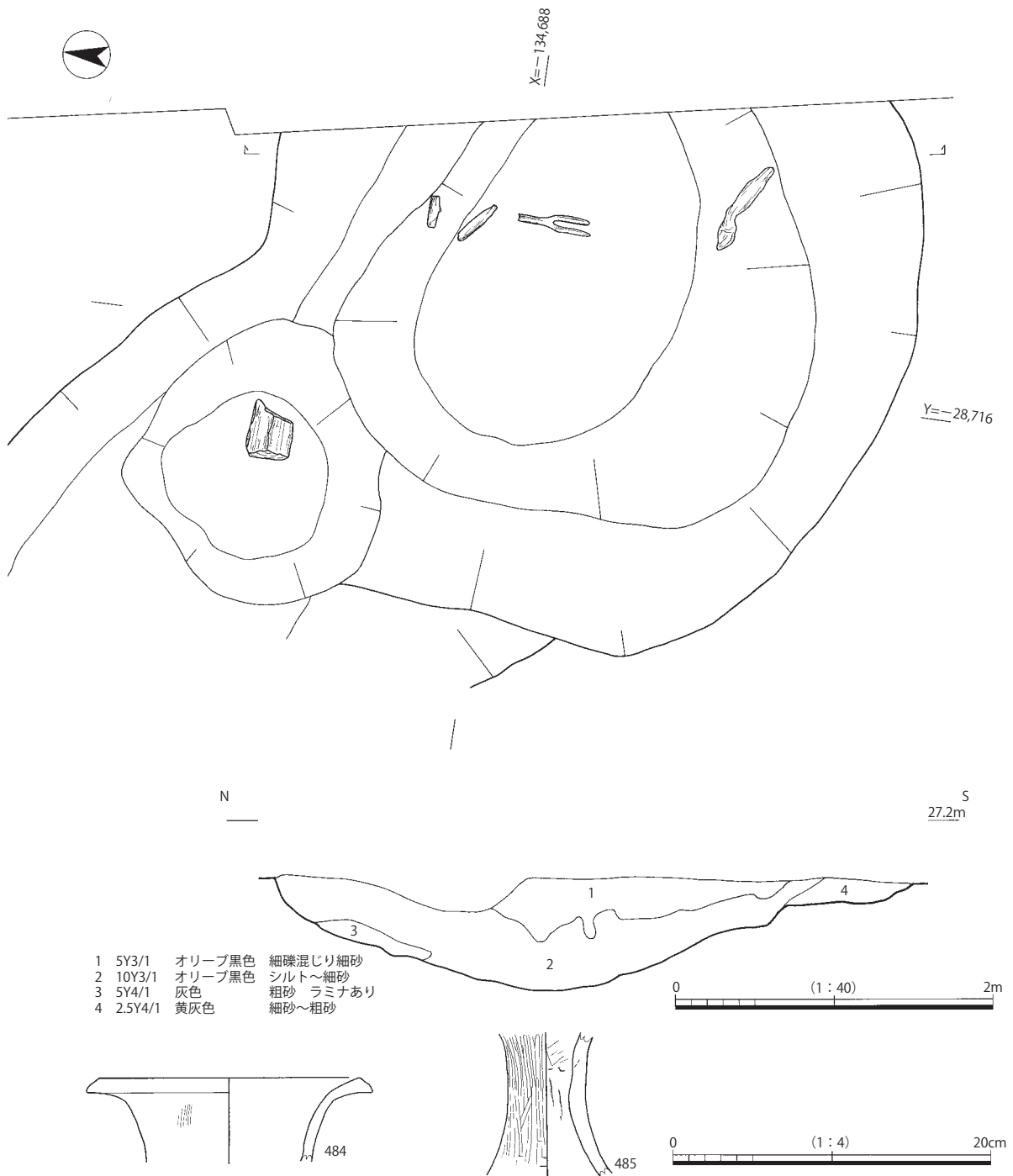


図 115 第 6 面 890 土坑 平・断面、及び出土遺物実測図

893 流路 (図 114・117)

調査区中央で検出され、河床の高低差より東から西に流れていたと考えられる。東西両端部をそれぞれ第5-1面から検出された308 b流路と309 b流路、および第5-2面で確認された857 c流路によって削り取られるなど、上層に位置する流路との重複による削剥が非常に激しい。このため、長さ20 m足らずしか残存せず、幅は3 m前後、深さは0.7 から 1.0 m程度を測る。

流路内は氾濫堆積層で充填され、土器なども含まれていた。図 117 ではそれらの中から特徴的なものを抽出して図化した。これらのうち、488 は表面が摩耗しているが、胎土と形態から判断して第I様式の壺、489 は高杯、490 は甕で、双方とも第II様式に分類される。491 は壺、492 と 493 は甕で、互いに接合する関係にはないが同一個体とみなされ、これら2点については、第III様式新段階のものである。

以上のうち、最も新しい時期の資料は 491 と 492・493 で、特に後者は、全形が窺えるばかりか、

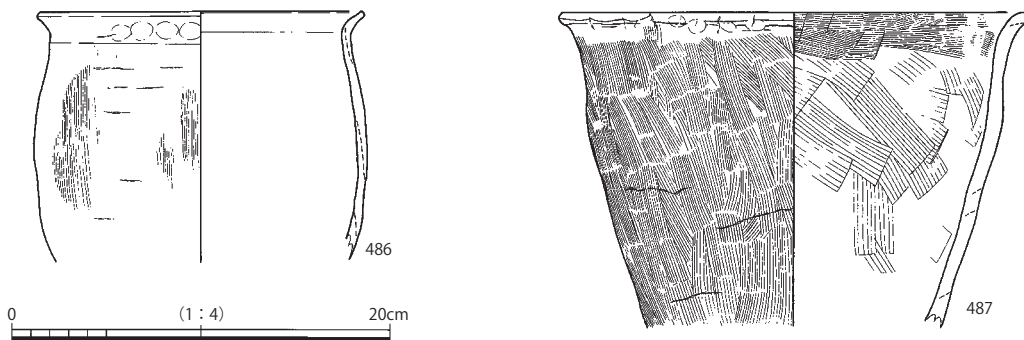
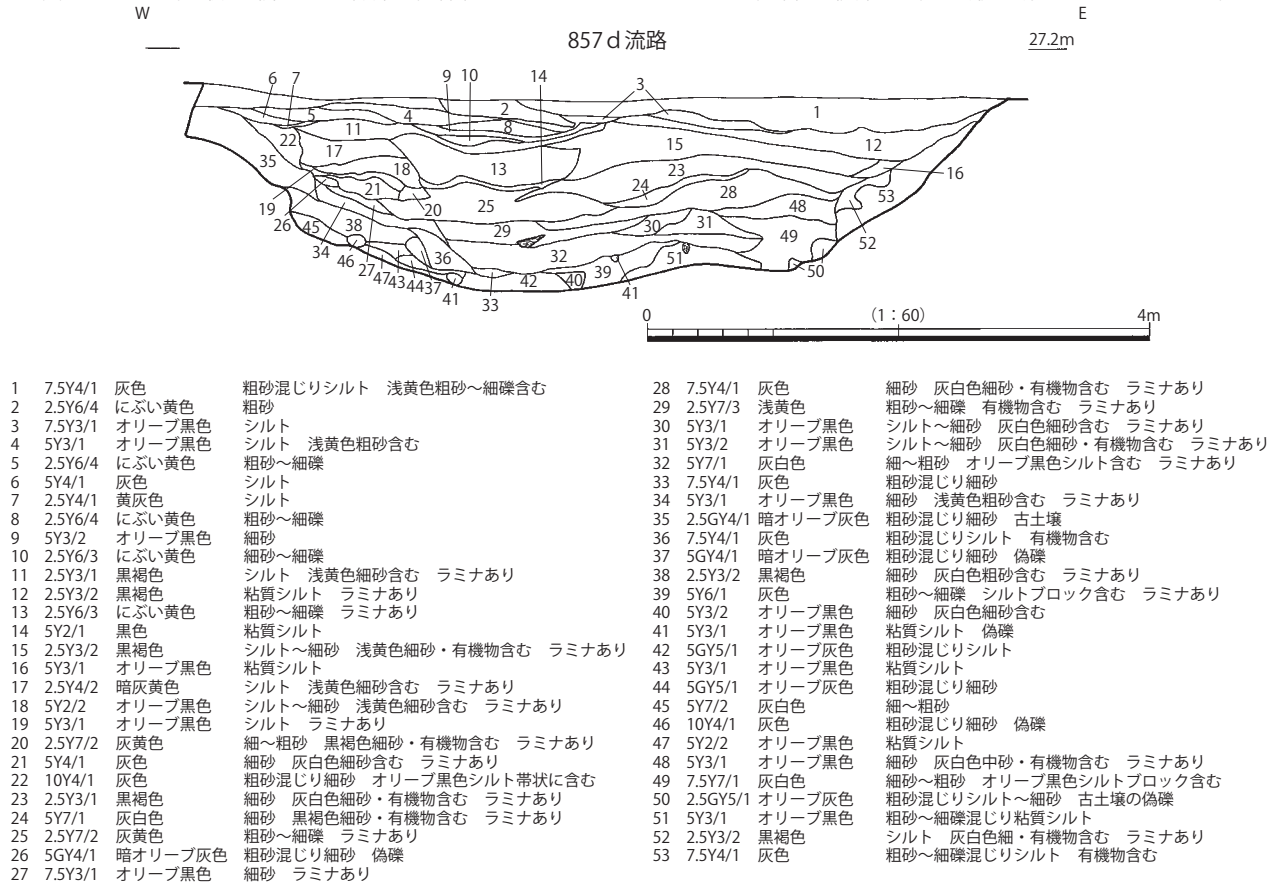


図 116 第6面 857 d流路 断面、及び出土遺物実測図

煤が付着したままの状態を保つため、往時、埋没するまでの時間が短かったことを推測させる。したがって、当流路が機能し、埋没に至る時間幅は弥生時代中期後半の中とみなされよう。

6層出土遺物（図118）

当該遺構面を覆うシルト質の土層や、各流路からの溢流堆積層から、弥生土器やサヌカイトの剥片が出土し、それらの一部を図118に掲載した。これらの遺物を古い順に記すならば494から496は前期、それら以外は中期に分類され、中期はさらに初頭と後半に分けられる。前期の土器のうち494は頸部と体部の境ににぶい段を形成しているため、第Ⅰ様式前半代に位置づけられる。495はミニチュアの壺、496は5条の沈線紋をめぐらすため新段階に位置づけられる。

中期初頭のもののうち、壺には497から499の体部片、500と501の口縁部片のほか、508と509の同一個体と思われる破片があり、それぞれ横型流水紋など第Ⅱ様式特有の紋様で加飾されている。502から505は甕で、これらのうち、503は口縁部下端を巻き込むように成形することや、ハケの方向からみて大和型の範疇となる。

中期後半の土器には、506の壺と507の甕があり、ケズリ調整や施紋法から第Ⅲ様式新段階新に位置づけられる。

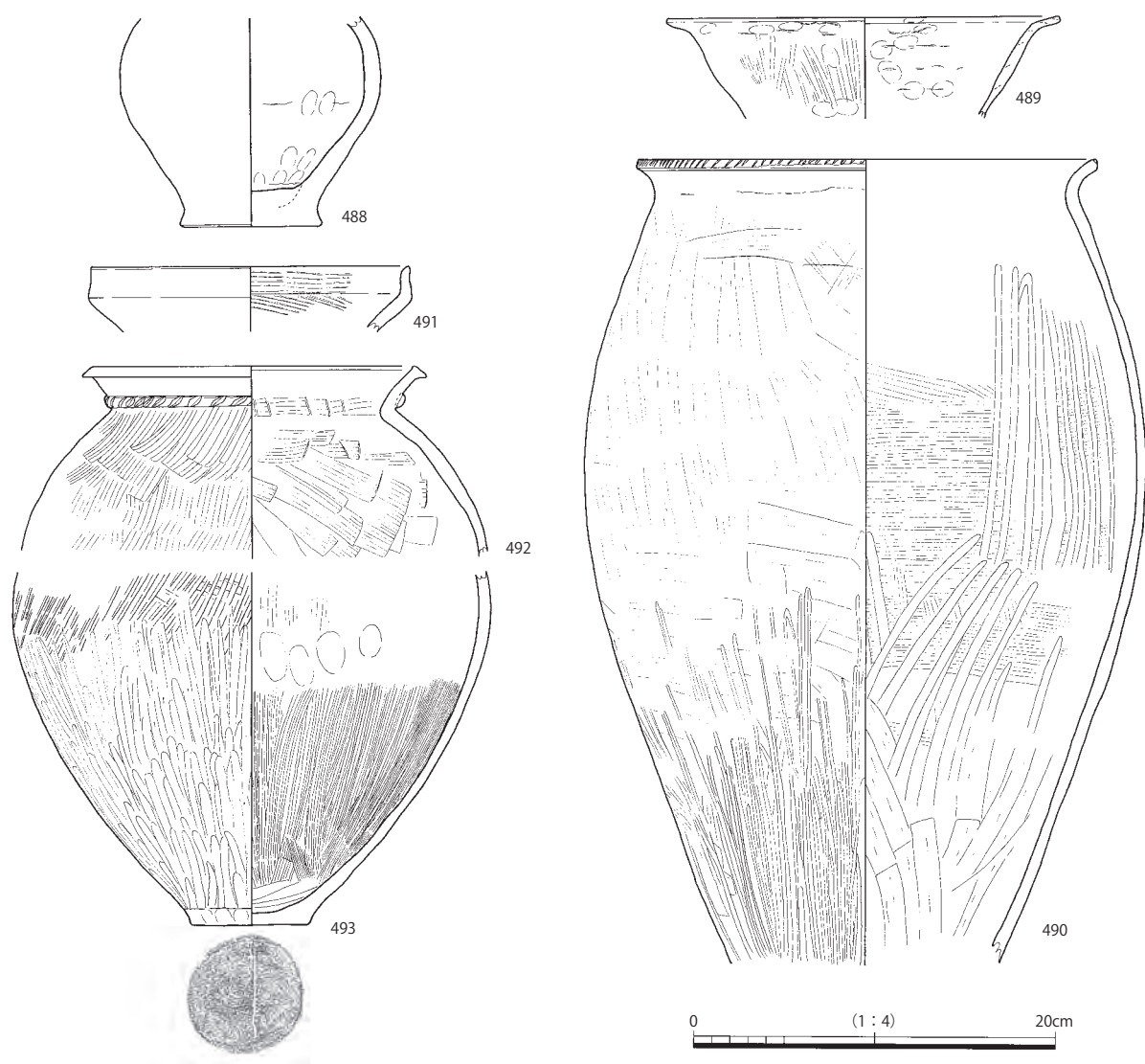


図117 第6面 893 流路 出土遺物実測図

以上、包含層出土遺物について述べたが、これらと各流路出土遺物を対比させて勘案した場合、当該遺構面は弥生時代中期初頭から中期後半段階まで存続したと判断される。

第 13 項 第 7 - 1 面

1704 土坑 (図 119・120)

調査区北東部の北壁際で検出された。北東端は調査区の外へのび、東側は側溝で失われる。平面は北西から南東に辺を合わせる隅丸方形状を呈し、規模は、南西辺 2.7 m、南東辺 1.7 m 以上を測る。断面は扁平な皿形を呈し、坑底は平坦である。埋土は図 120 のような灰色系の粗砂からシルトで、一部に葉理が観察される部分も存在する。この中に遺物は含まれておらず、したがって時期は不明である。

493 流路 (図 119・121)

調査区の南東隅で検出され、その方向から北西に流下する。第 5 - 1 面で検出された 308 b 流路による削剥を受け、確認できる長さは 19.0 m、幅 4 m 前後、深さ 0.3 m 内外で、川底には起伏がみられる。流路内は溢流堆積層で満たされ、そこから図 121 に示す弥生土器などが出土した。510 は甕、511 は壺で、双方とも第 II 様式に位置づけられることから、弥生時代中期初頭の流路と考えられる。

857 e 流路 (図 119・122・123)

調査区のほぼ中央から確認され、北西隅に向かって蛇行しながら流下する。その位置からみて、第 6

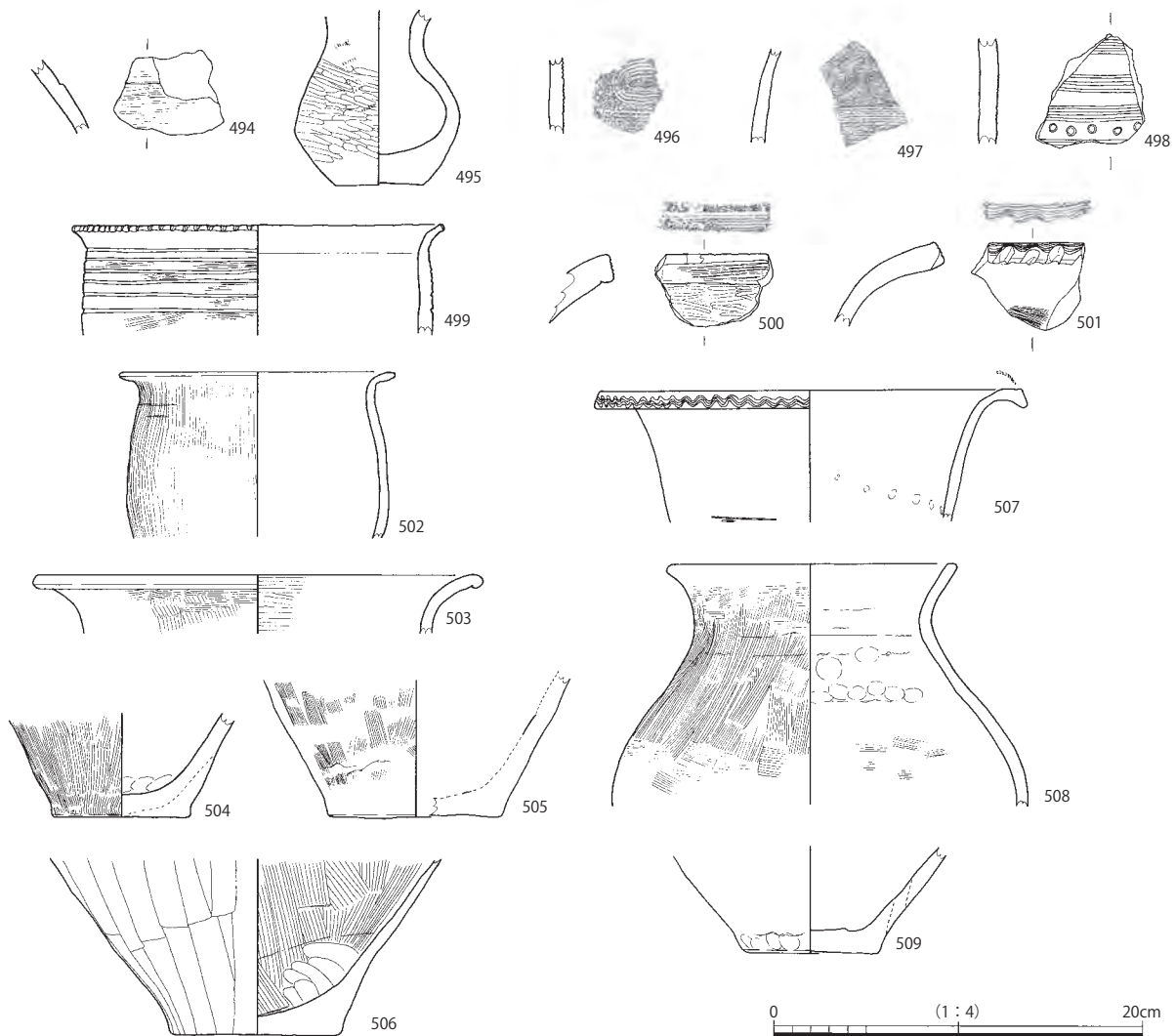


図 118 6 層 出土遺物実測図

面で検出された 309 d 流路の前身とも考えられる。北西部が調査区外となるため確認される長さは約 42 m、幅については、上層から検出された各流路からの削剥が激しく明確には把握し難い。深さは断面図を作成した位置では 0.5 m 弱を測る。その形状と堆積土は図 122 のような状態で、有機質を含むことや、葉理が観察されることから比較的穏やかな環境の中で累重した状況が看取される。

遺物のうち図化できたものを図 123 に掲げた。縄紋時代晩期から弥生時代後期までのものがあるが、中期後半と後期の土器は、この流路が調査区境に位置し、この段階で堆積土を十分に区分しきれないま

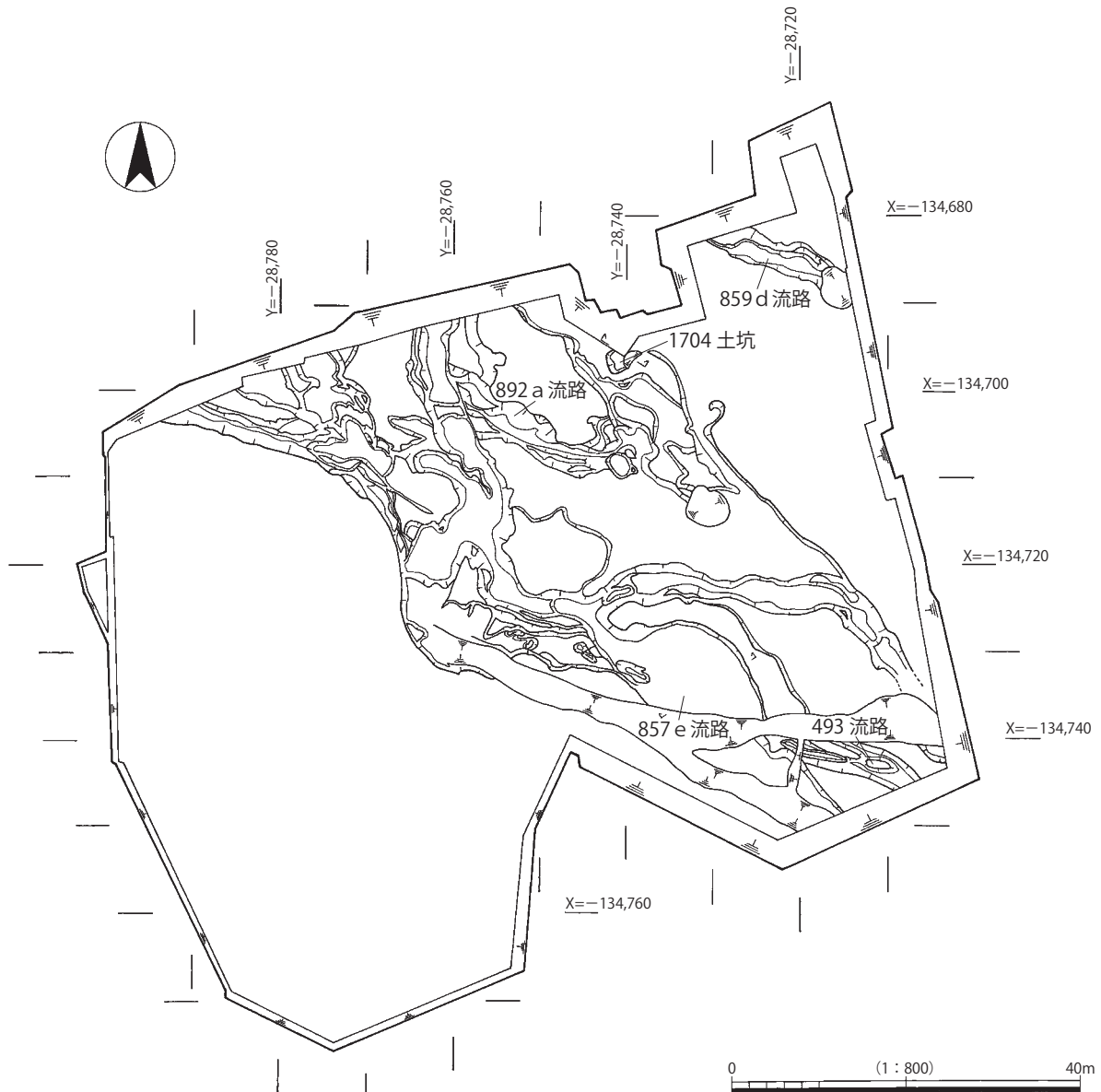


図 119 第 7-1 面 遺構全体図

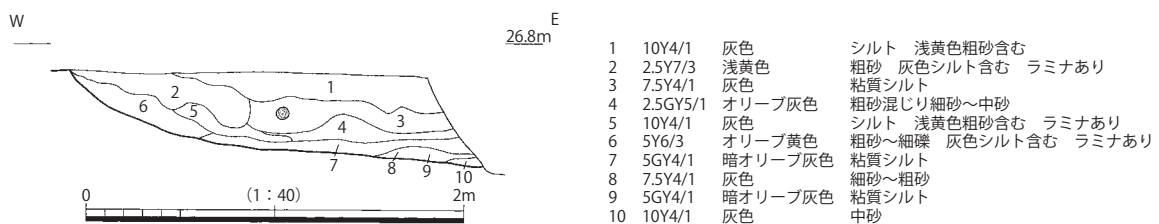


図 120 第 7-1 面 1704 土坑 断面図

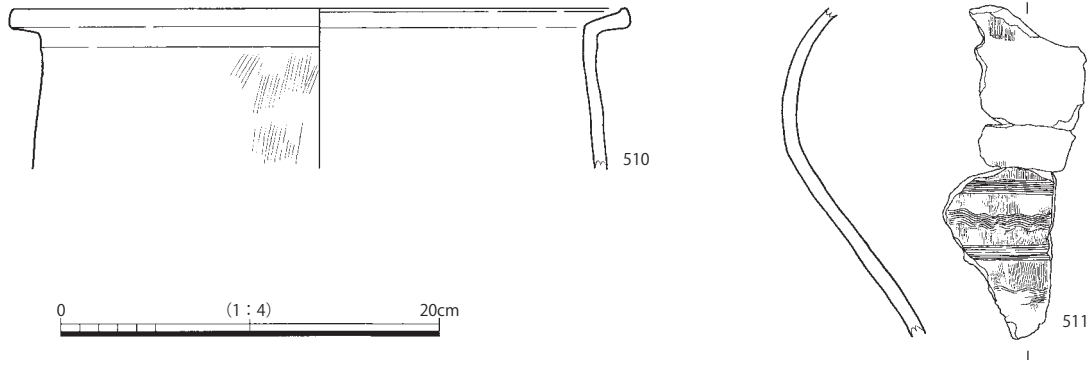


図 121 第 7-1 面 493 流路 出土遺物実測図

ま掘削したためここに含まれたものであり、本来ならば、中期後半のものは第 6 面の 893 b 流路、後期の土器は第 5-1 面の 309 b 流路または、第 5-2 面の 309 c 流路に帰属するはずのものである。

これらを古い順に述べるなら、512 と 514 が縄紋時代晩期長原式の浅鉢と深鉢と思しき口縁部、513 が同じく滋賀里Ⅲ b 式の深鉢である。これら以外は弥生時代の土器で、522 が前期の甕である以外は中期の資料で、521・523・524 から 526 の 5 点は第Ⅱ様式に分類され、中でも 526 に施される波状紋は、扇形紋を反復させるようにして施紋するいわゆる連続扇形紋となることや、523 の底部にみられる木の葉圧痕は、当該期の典型的な指標となる。第Ⅲ様式には、518 の壺、515 から 517 の甕 3 点があり、壺の口縁部外面に施される凹線紋、甕の口縁端部のつまみ上げ、体部への施紋などからみて、その後半に位置づけられる。第Ⅴ様式の土器には 519 の壺の底部、520 の高杯があり、後者の形態から、前葉に分類される。以上、出土遺物についてみてきたが、これらの中で摩滅が少なく、大きな破片となっているのは弥生時代中期のものであり、これらのうち、後半以降のものは前述した事由により、本来、この流路には帰属しないものである。したがって、当流路の時期は弥生時代中期初頭とみなされる。

859 d 流路 (図 119・124)

調査区北東部で検出され、南東から北西に向かって直線的に流下する。北西部は調査区外、南東部は 890 土坑により損壊され、確認できる規模は、長さ 15.0 m、幅 3 から 4 m、深さ 1 m 前後である。

内部は氾濫堆積層で充填され、その中から図 124 に示す弥生時代前期から中期の土器などが出土した。このうち、前期のものには 527 から 532 の壺、533 と 534 の甕があり、そのほとんどが第Ⅰ様式新段階に分類されるが、531 のみは頸部と体部の境を窪ませて段を作出するという古い要素を持つ。上記以外は中期の土器で、器種には 535 と 536 および、539 の甕、537 の壺、538 の鉢がある。これらは形態や紋様、特に 538 に施された横型の流水紋からみて第Ⅱ様式に位置づけられる。

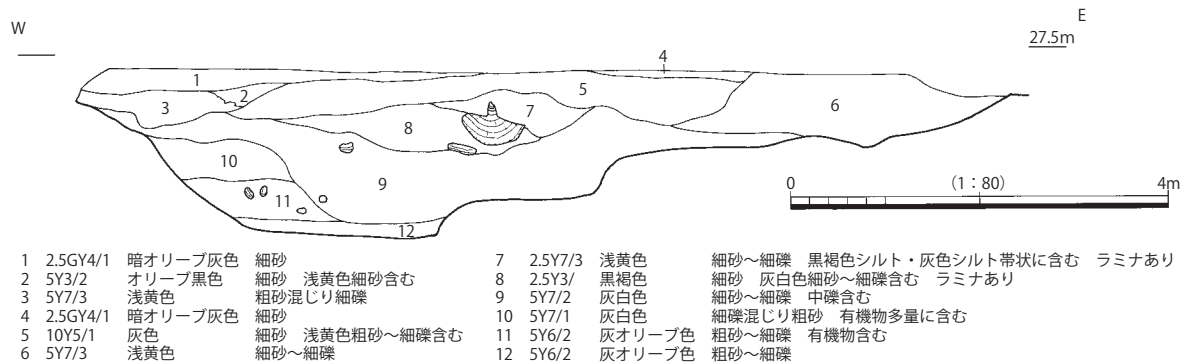


図 122 第 7-1 面 857 e 流路 断面図

よって、流路は中期初頭までに埋没したとみなされ、これと 890 土坑との関係にも矛盾はない。

892 a 流路 (図 119・125)

調査区中央からやや北東側で検出された。両端部を上層からの流路によって寸断され、長さ約 15 m の範囲が確認されたのみである。幅は 5 m 前後、深さは 0.5 m 程度を測る。

堆積層内には樹木などを多く含み、その中から図 125 に示す土器などが出土した。540 は壺の蓋で、541 は壺の口縁部片、542 は同じく頸部片である。これらのうち、542 は第 I 様式新段階に位置づけ

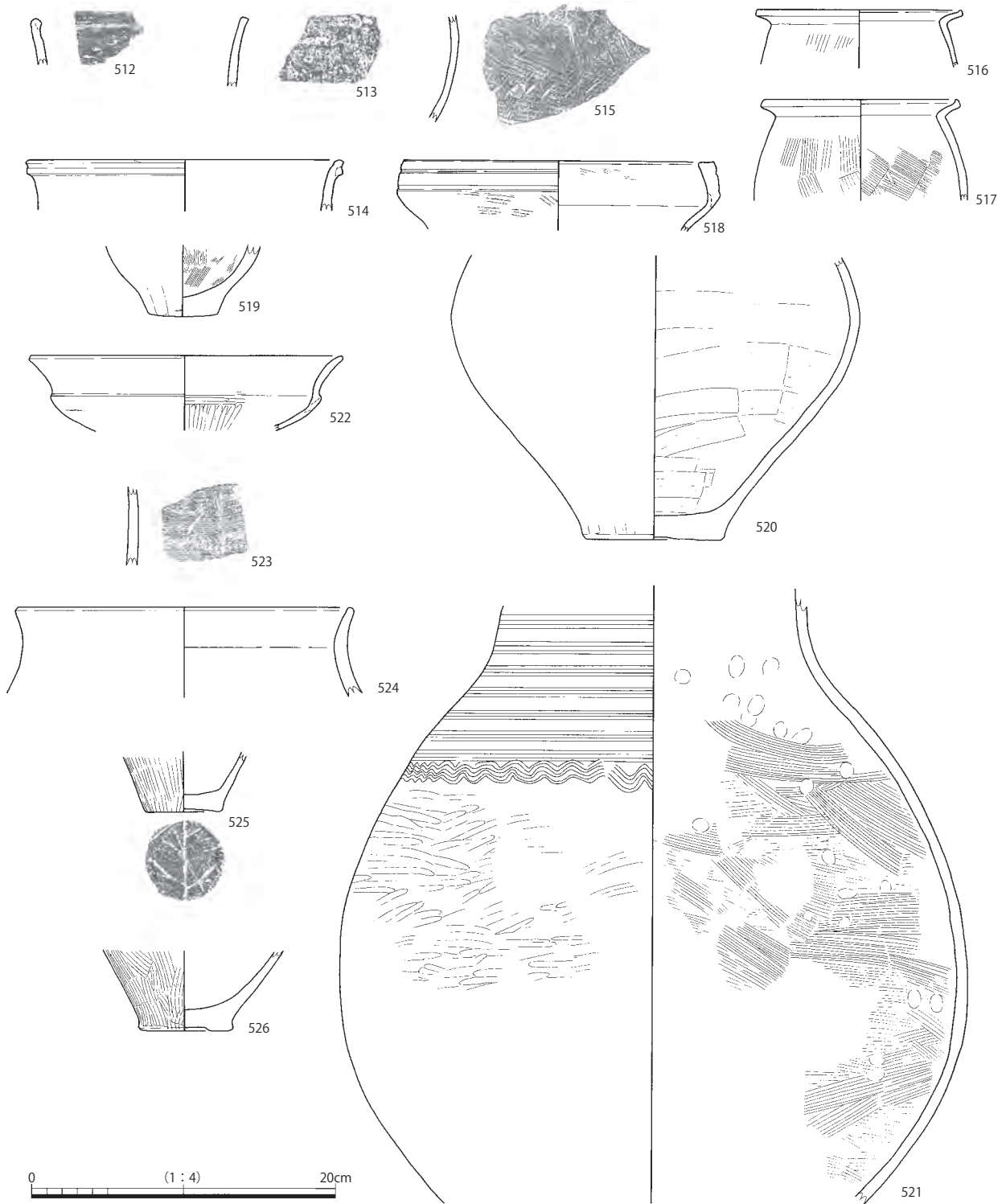


図 123 第 7 - 1 面 857 e 流路 出土遺物実測図

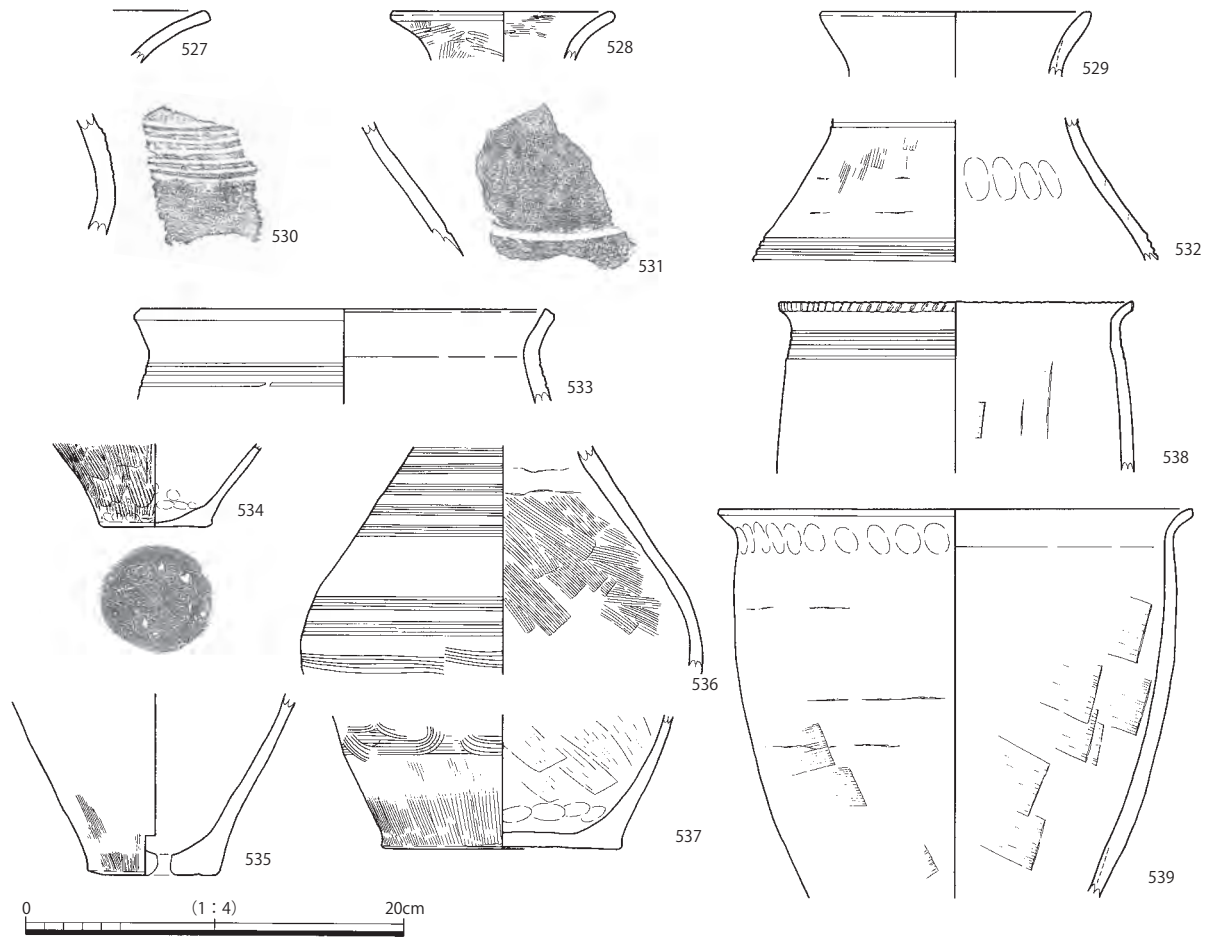


図124 第7-1面 859 d流路 出土遺物実測図

られるが、541の口縁端部内面には赤彩が施されるためより古く位置づけられ、この土器の存在は、段を形成する壺と共に当地域における弥生文化の浸透を探る上で、その持つ意義は非常に大きい。

なお、上述の通り、堆積層中に木質が多く含まれていたため、放射性炭素年代測定（AMS法）を行ったところ、405BC（95.4%）370BCという値を得た。

7-1層出土遺物（図126、図版17）

第7-1面検出時において図126に掲載する土器を採取した。本来これらの遺物はいずれかの流路などに含まれていたのであろうが、帰属させることが不可能なため、ここに一括して報告する。

これらは縄紋時代晩期と弥生時代の土器に大別される。548と549は縄紋時代晩期に属し、後者は突帯紋期長原式の深鉢である。弥生土器は形態や紋様からみて549の壺が中期初頭に区分される以外、前期に属し、器種には545と546の甕、547のミニチュアの壺、548の壺がある。うち、545は口縁部外面に貼付凸帯をめぐる逆L字形口縁を作り出すため東部瀬戸内地域の瀬戸内型甕に分類される。

第14項 第7-2面

857 f流路（図127・128）

調査区南東部で検出され、南東から南西に向かって大きく蛇行する。857 e流

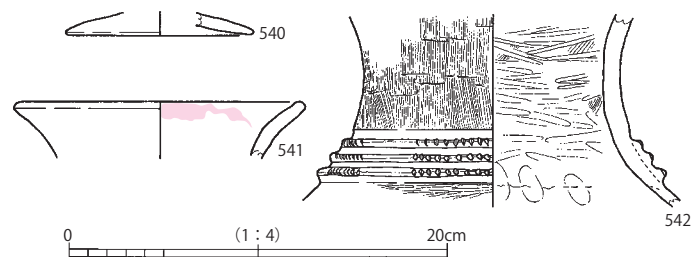


図125 第7-1面 892 a流路 出土遺物実測図

路など上層からの各河川により削剥、寸断されて2条の流路が大きな落ち込み状の体をなして検出されたため、現状での規模は、長さ約36mを測り、幅と深さは明瞭な部分で5m前後と0.3m程度である。

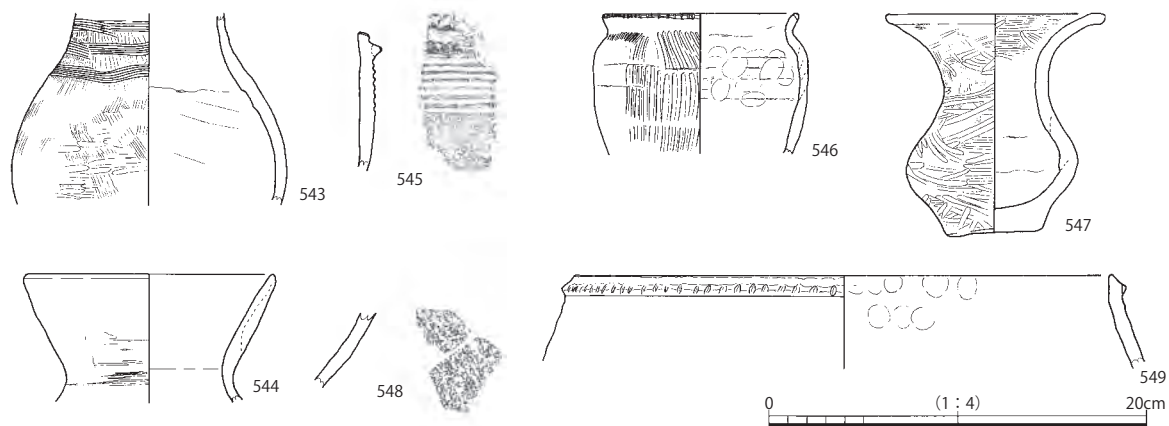


図126 7-1層 出土遺物実測図

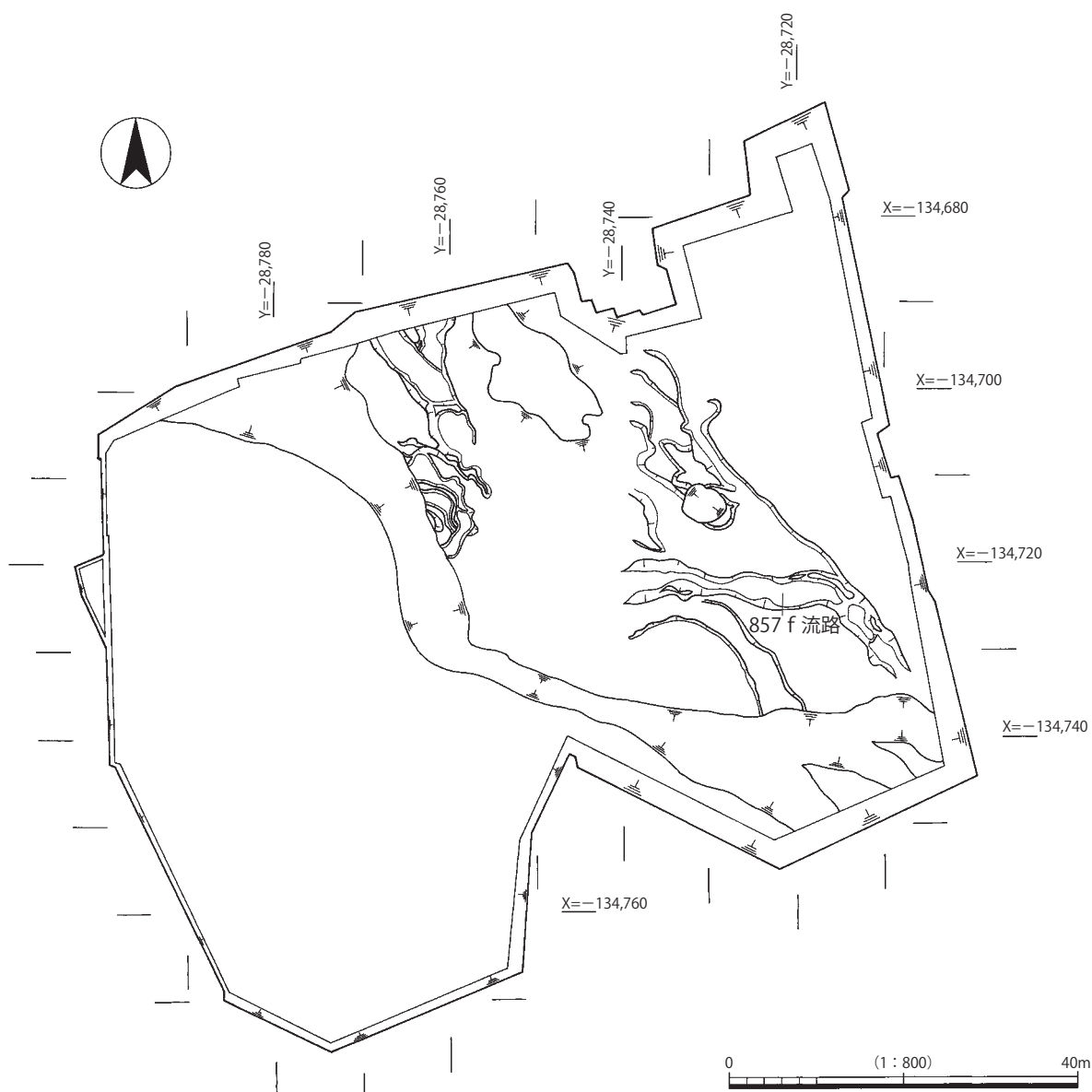


図127 第7-2面 遺構全体図

堆積層からは土器などが出土し、5点を図128に示した。これらのうち、550の壺が弥生時代第Ⅱ様式に属する以外、縄紋時代晩期の深鉢で、552と554は滋賀里Ⅲb式、551と553は長原式に分類され、554は破片も大きく摩滅していないため、元は下層の流路に含まれていた可能性が高い。

7-2層出土遺物(図129)

遺構検出時において土器などの遺物が出土した。これらも第7-1面と同様に元来はいずれかの流路などのものであるが、調査段階で層や面として取り上げているため、ここにまとめて報告する。

時期的には縄紋時代と弥生時代のものに区分され、前者には555の滋賀里Ⅲb式や、556の長原式の深鉢がある。後者には558の甕と、それ以外の壺があり、559は形態や紋様からは縄紋土器とのつながりを想起させるが、調整などの製作技法は弥生土器的であるという折衷的要素を有する。

これらの時期については、559の位置づけに苦慮するが、557の外面に施された円形竹管紋や、558の沈線紋が1条のみであることに着目するならば、第Ⅰ様式新段階にまでは下らない。

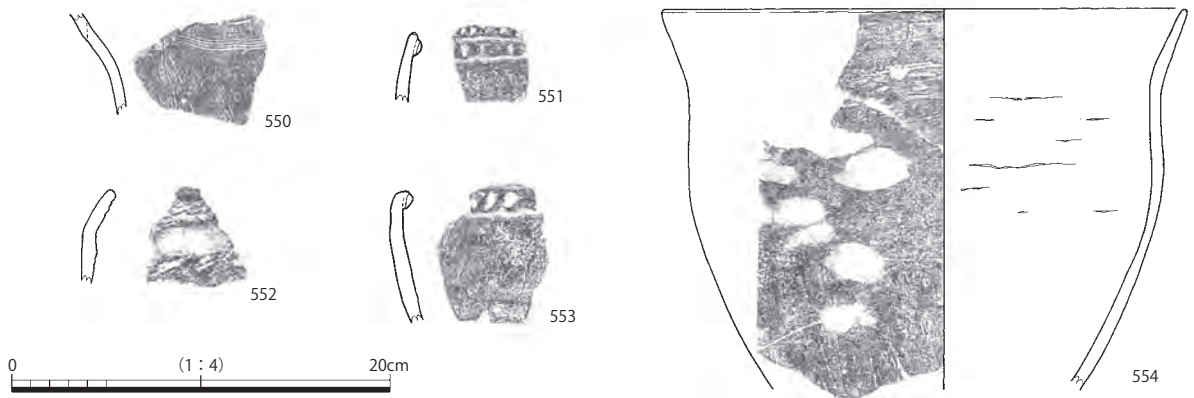


図128 第7-2面 857 f 流路 出土遺物実測図

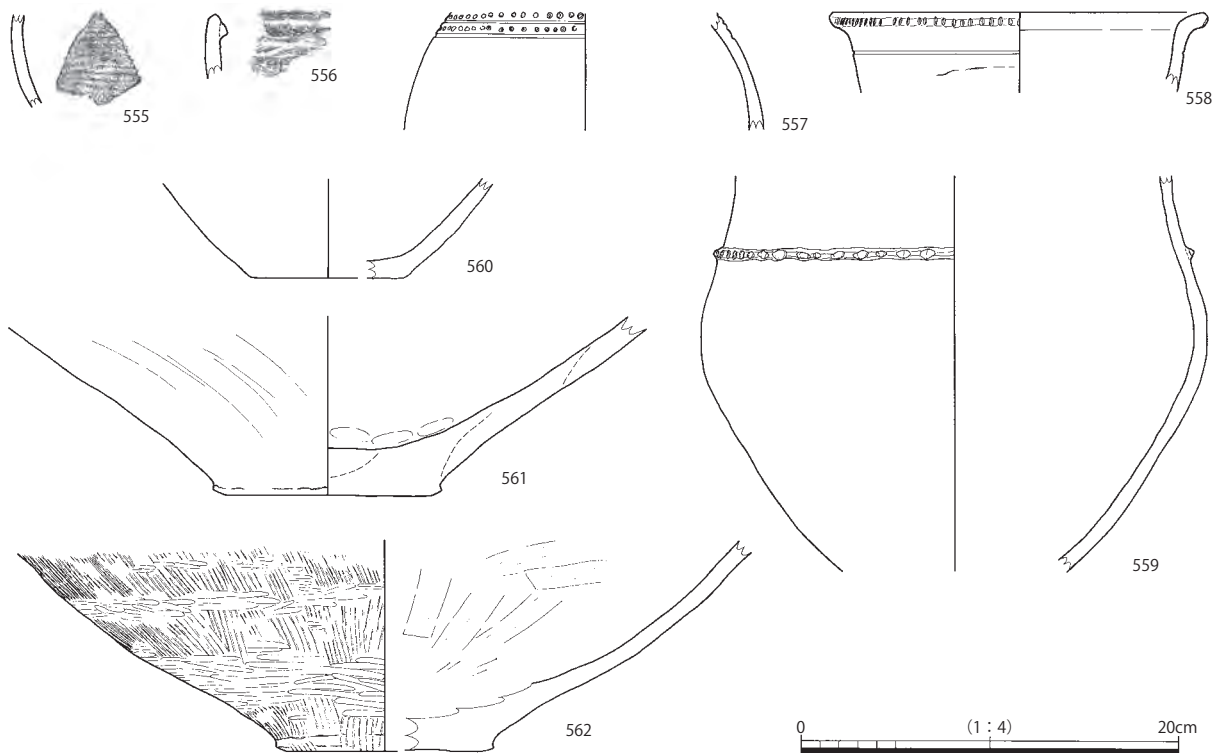


図129 7-2層 出土遺物実測図

第 15 項 第 8 面

973 土坑 (図 130・131、図版 13)

調査区北東隅で検出された。後述する 859 e 流路右岸以北では基盤層が露呈し、この上面に遺構が営まれる。

平面は北東から南西に軸を通す長楕円形で、規模は長径 0.5 m、短径 0.2 m、深さ 0.15 m を測る。断面は図 131 のような皿形を呈し、埋土は黒色系シルトで、そこから 563 の甕蓋が出土した。

土坑の時期は、出土した土器が第 I 様式に位置づけられることから、弥生時代前期と考えられる。

974 土坑 (図 130・131、図版 13)

調査区北東隅で確認され、それ以外は調査区外となるため全体形は不明である。計測可能な範囲での規模は、東西 0.3 m 以上、南北 0.5 m 以上、深さ 0.1 m で、断面は、図 131 に示すように偏平な皿形を呈する。埋土は黒色を呈した粘質シルトで、そこから土器の細片が出土した。

時期は、土器の胎土が第 I 様式と共通する特徴を持つため、弥生時代前期となる可能性が高い。

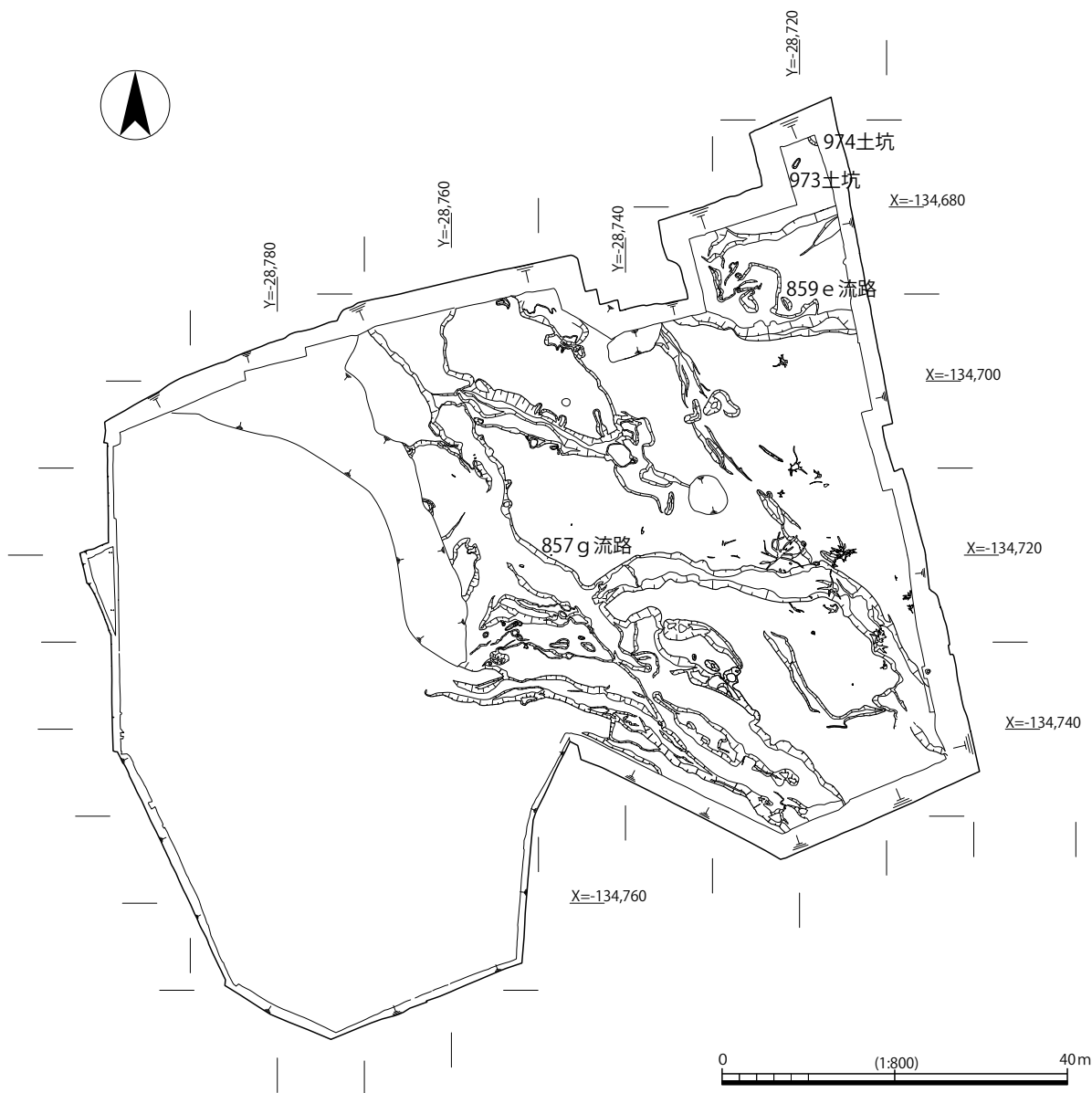


図 130 第 8 面 遺構全体図

857 g 流路 (図 130・132・133、図版 13・23)

調査区南東部から北西に向かっていくつかに分かれながら流下し、両端は調査区外となる。現状での規模は長さ 60 m、幅 5 から 10 m、深さ 0.5 から 1.0 m 前後を測り、河床は起伏が激しい。中程の左岸には図 132 のような状態で 4 本の杭が打設され、水に関連する何らかの施設とも考えられる。

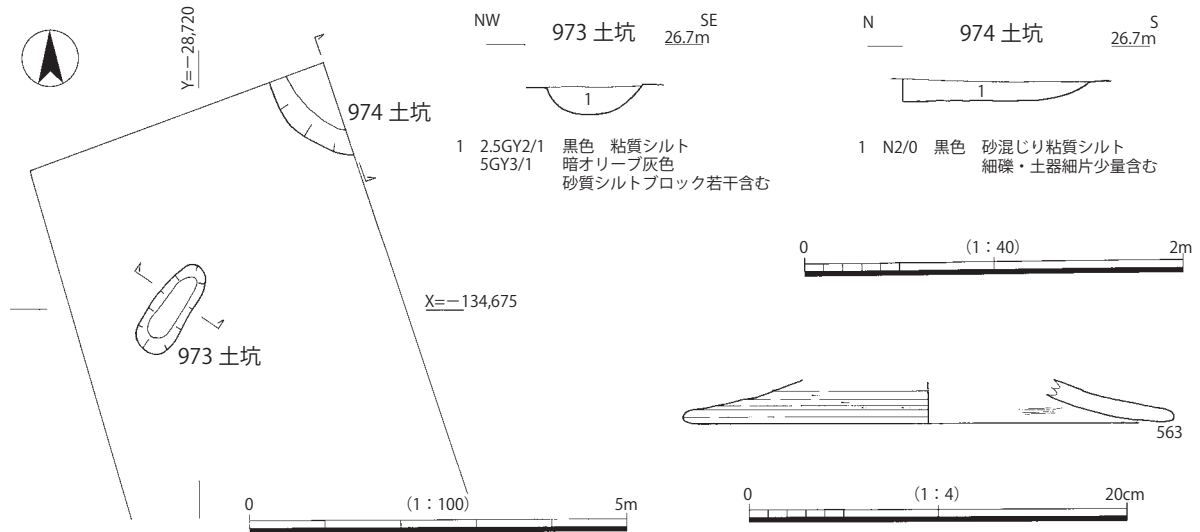


図 131 第 8 面 973・974 土坑 平・断面、及び 973 土坑 出土遺物実測図



図 132 第 8 面 857 g 流路 杭列検出状況図

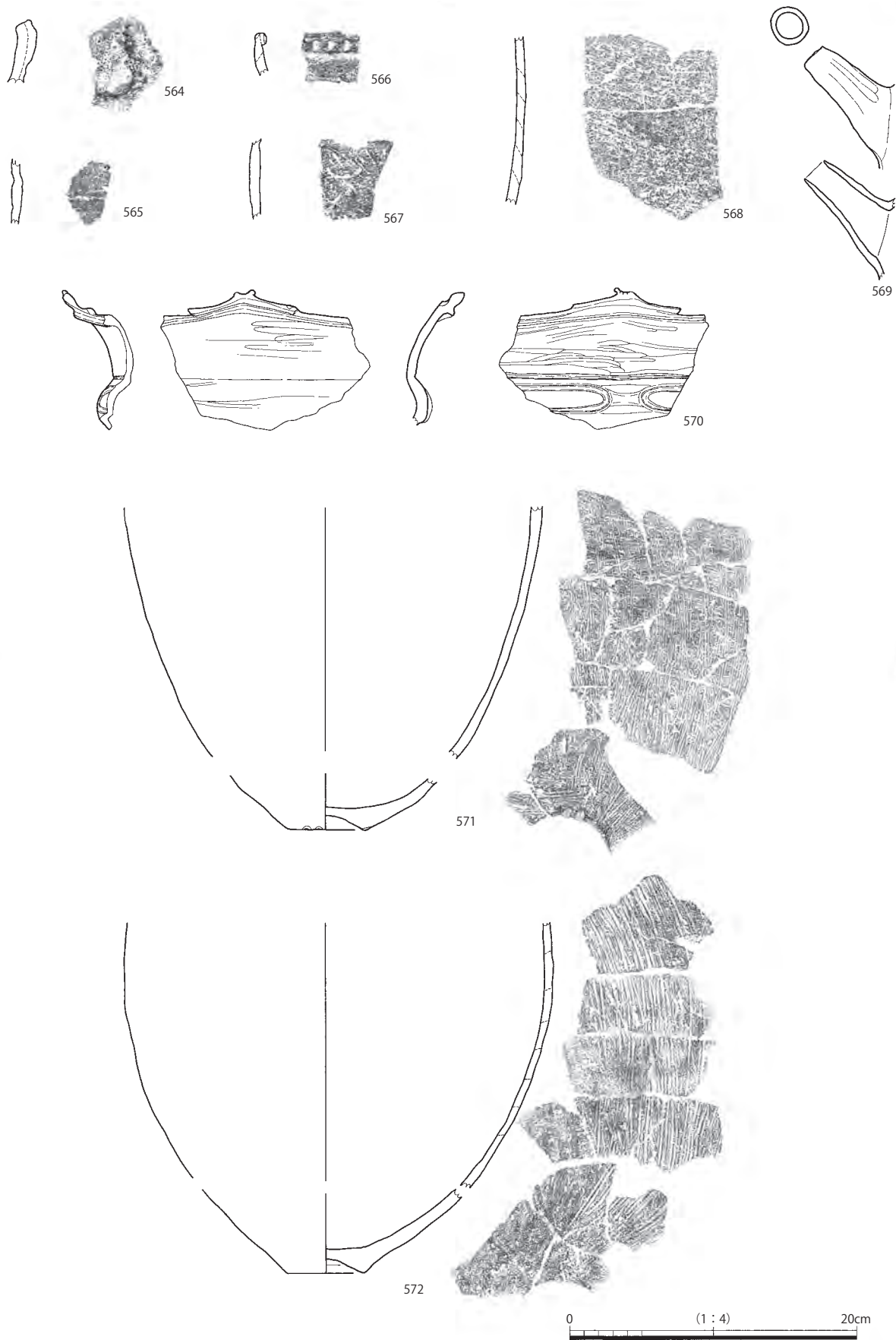


图 133 第 8 面 857 g 流路 出土遺物実測図

流路内の堆積層からは、図 133 に示す縄紋土器などが出土した。これらは、北白川C式に分類される 564 の深鉢、後期後葉と考えられる 569 の注口土器、晩期中葉から後葉にかけての滋賀里Ⅲb式に位置づけられる 571 と 572 の深鉢、外面体部に眼鏡状隆帯、口縁頂部に B 字形突起を付加する図版 23 に掲げた大洞系との関連性を窺わせる 570 の精製浅鉢、晩期終末の長原式に分類される 564 の深鉢がある。これらのうち、比較的残存状況の良い資料に 570 から 572 があり、特に後 2 者の深鉢はそれぞれがまとめて出土したため、流路内での原位置を保っていた可能性が高い。

したがって、流路の時期は縄紋時代晩期中葉から後葉とみなされ、本来は 10 層上面から流れていた流路が、後続段階の各河川により削剥を受けたため当該面で露呈し、確認されたと考えられる。

859 e 流路 (図 130・134～137、図版 13・17)

調査区北東部を東から西に向かって流れる。両端が調査区外となり、現況での長さ 20 m、幅 12 か

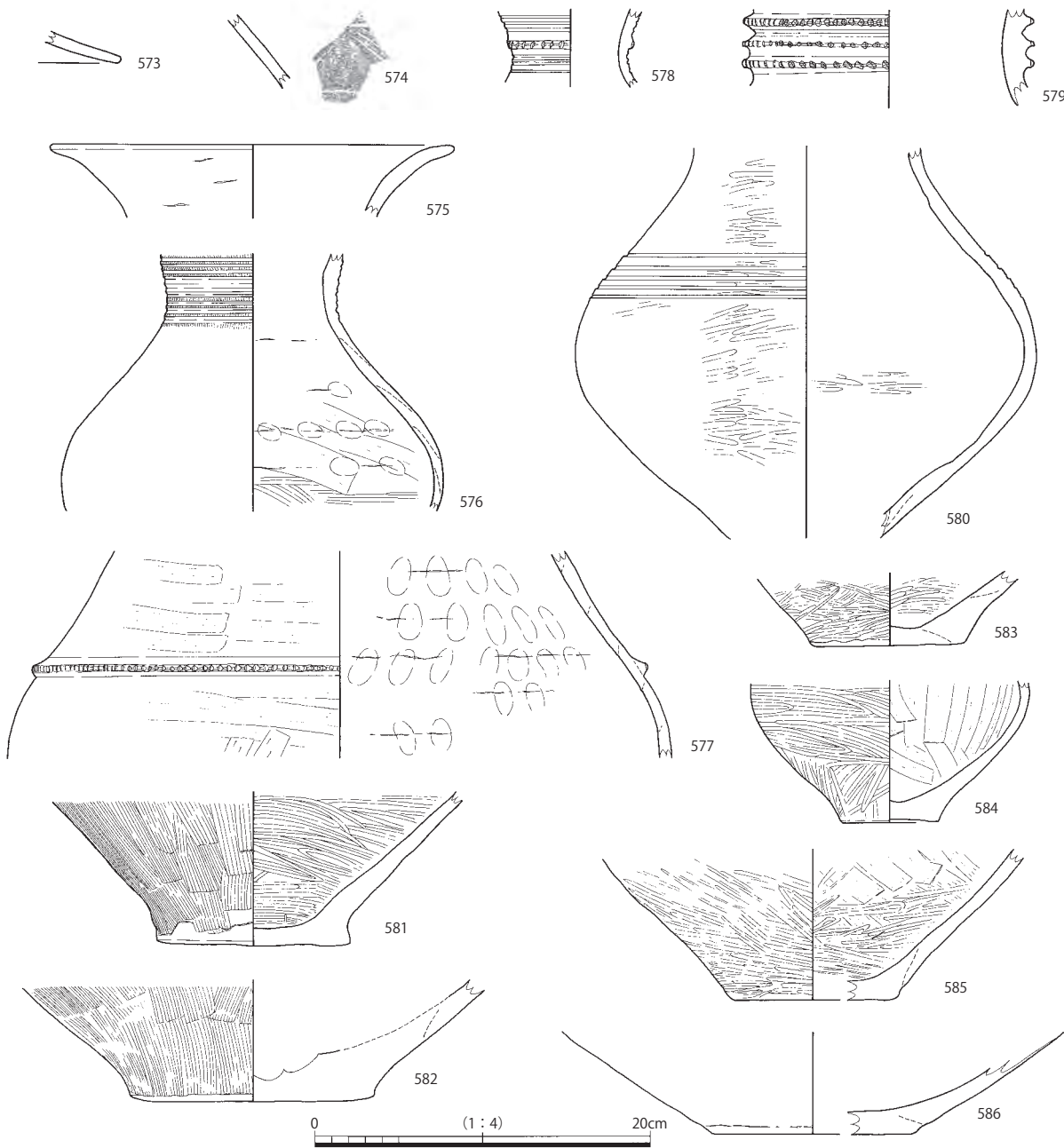


図 134 第 8 面 859 e 流路 出土遺物実測図 (1)

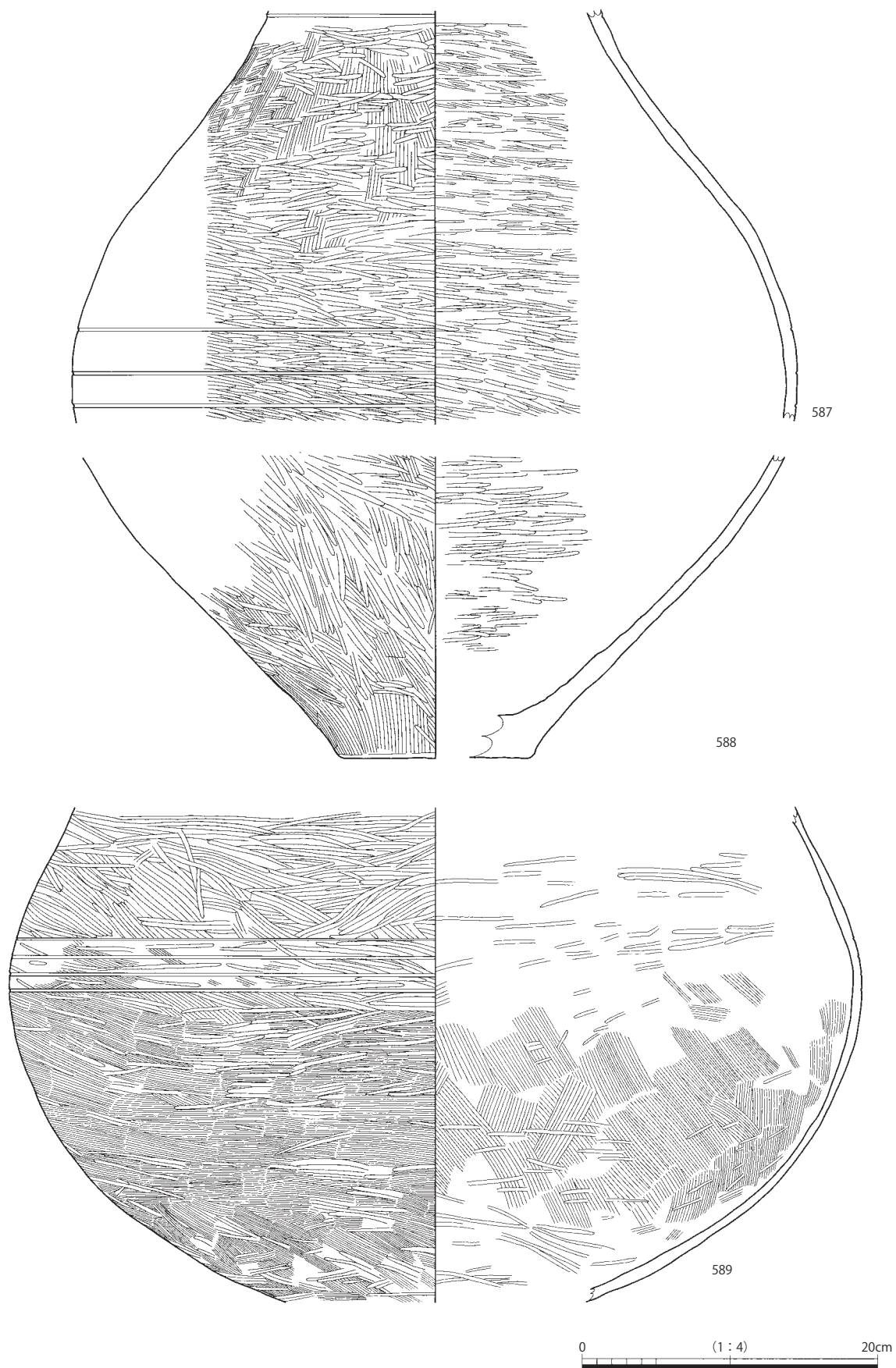


图 135 第 8 面 859 e 流路 出土遺物実測図 (2)

ら 15 m、深さ 1.0 から 1.5 m を測る。断面は隅の丸い逆台形を呈し、各所に葉理がみられる氾濫堆積物で充填される。各層からは部分的にまとまって大量の土器が出土し、うち 44 点を図化した。

これらは、長原式を中心とする縄紋晩期の土器以外、弥生時代前期のもので圧倒的多数が占められ、破片が大きいことや、摩滅がほとんどみられないことから、ごく近い場所から供給されたと考えられる。器種には 573 の壺蓋、574 から 589 の壺、590 から 598 と、601 から 604 の甕とその底部、599 から 600 の鉢がある。これらは、その形態や紋様の様相からみて第 I 様式新段階に位置づけられるが、577 のように調整技法は縄紋晩期のそれに酷似するものの、形態や施紋は完全に弥生時代前期のものである点が注目される。特に内面の調整のみに着眼するならば、晩期のそれとまったく見紛うような資料であり、既に報告した 559 の壺と共に注目すべき土器といえる。

なお、遺物の時期からみて、当遺構面と、私部南遺跡 04 - 1 調査で検出された第 7 面ないし、第 8 面がほぼ同じ段階と捉えられ、第 8 面からは竪穴建物などの遺構が検出されていることから、遺物の供



図 136 第 8 面 859 e 流路 出土遺物実測図 (3)

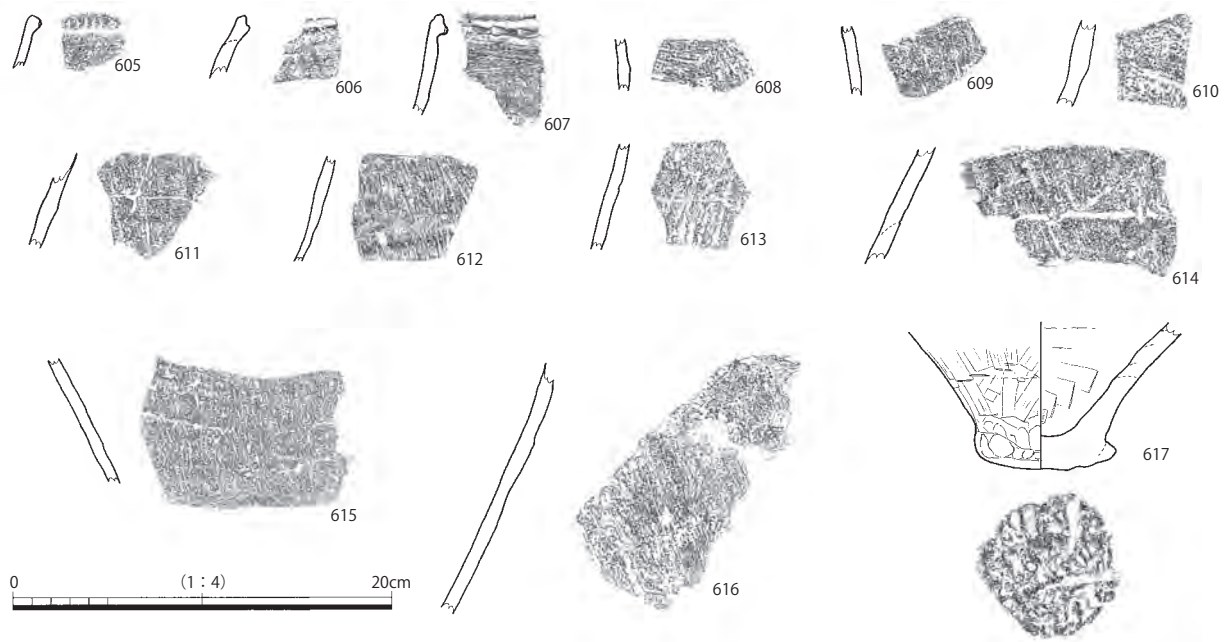


図 137 第 8 面 859 e 流路 出土遺物実測図 (4)

給源はこの附近であったことも充分想定される。そして、これが正鵠を射たものであるならば、この流路が居住域の縁辺を区画することを兼ねていたとも考えられよう。

8 層出土遺物 (図 138・139・148・152、図版 23)

第 8 面を覆う古土壌と、その上位に雲母を多量に含むシルトと極細砂からなる葉理が発達した薄層より、図 138 から 139 に示す土器や石器のほか、木製品の竪杵が出土した。うち、618 から 620 は弥生時代中期初頭の壺、621 から 626 は壺、627 と 628 はミニチュアの壺、629 から 634 は甕、635 から 637 は壺と甕の底部である。

なお、624・625・632 は第 8 面上位から古土壌内において押し潰されたような状態で出土したため、置き去られた往時の状態を留めているとみなされる。縄紋土器には 638 から 642 の深鉢があり、口縁部をみる限りでは船橋式から長原式に分類される。また、木製品には、古土壌直上に貼り付くような状態で二つに分かれて出土した図 148 - 790 に示す竪杵がある。石製品には、同じ層準から出土した図 152 - 815 に示す泥質片岩製の石棒がある。

以上のうち、面に貼り付くようにして出土した土器が弥生時代前期新段階のものであることから、この層準が形成されたのはこの時期であったと捉えておきたい。なお、石棒に関しては、当該期において縄紋文化的要素を残す証左としての一新例を付け加えたという点で重視される。

なお、溢流堆積物の平面的粒径分布状況から判断して、この薄層の供給元は 859 e 流路と考えられる。

下層確認トレンチ出土遺物 (図 140 ~ 142)

第 8 面で確認される流路の調査を終了した段階でも河床や壁面には未だ砂礫の堆積が連続したままで基盤層が露呈していない部分も多く、その中からは若干ではあるが縄紋土器も採取されていた。このような状況であったため、遺物を多く含んでいると予想される部分と、橋脚建設予定地を中心として、幅 2 m のトレンチを十文字に設定し、その回収と面の把握とを行うよう努めた。その結果、直径 3 cm 程度の礫から粗砂からなる溢流堆積が錯綜しながら幾重にも折り重なるようにして堆積している状況を確認すると共に、面の把握には至らなかったが、これらを 9 から 12 の 4 層に大別して、この区分にしたがっ

て周囲にトレンチを拡充しながら遺物の採取を行い調査の万全を期した。ここでは、最初のトレンチ掘削時に 983 流路と総称した流路の出土遺物について古い順から述べる。

643 と 644 は船元式の深鉢で、前者は船元Ⅱ式の 1 期、後者は船元ⅠかⅡ式で、R L 縄紋が施される。645 から 664 は北白川 C 式に分類される深鉢と浅鉢がある。深鉢のうち、A 類には 647・648・650・

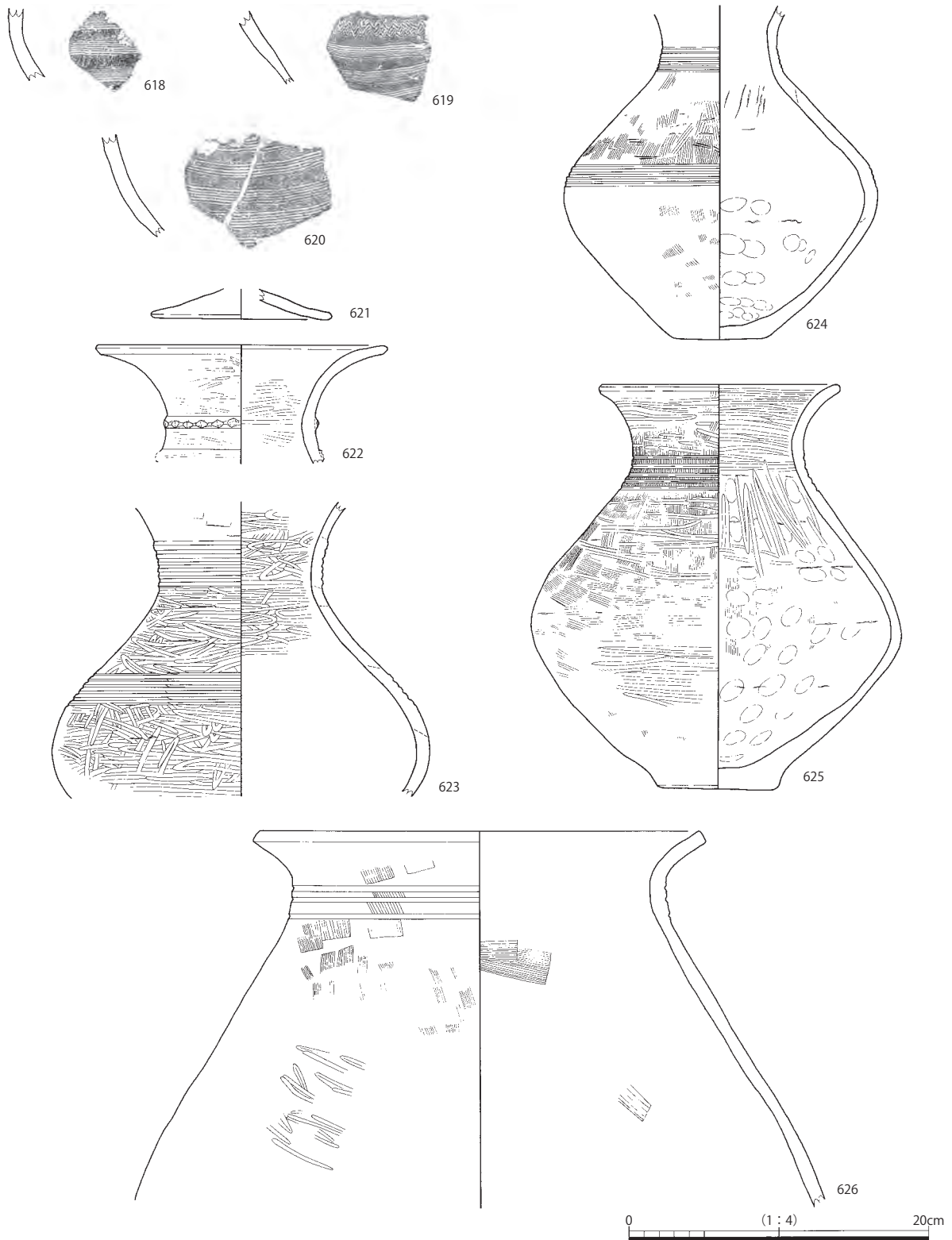


図 138 8 層 出土遺物実測図 (1)

663があり、647と648にはL R縄紋が施される。B類にはL R縄紋の施された661がある。C類の突起状山形口縁を形成する例には654とL R縄紋を施す655があり、677もこれとなる可能性を持つ。D類には当型式の中でも最新に位置づけられる653がある。651は浅鉢で、口縁部外面上位に穿孔が施されていることからB 2類に分類され、L R縄紋を施した672も鉢か浅鉢とみられる。このほか、類別には至らないが、この型式に属するものとして、645と646の口縁部片があり、深鉢では中心飾をなすと思しき口縁部紋様帯にL R縄紋を施した649、縦位沈線とL R縄紋を施す660、後期に近い段階と考えられるL R縄紋を施した652、刺突紋を有する656と662がある。器種不明の資料には、657や658、同芯円紋あるいは渦巻紋を持つ659があり、664の底部は内面が平らに成形されているためこの段階に属す。

上記のほか、中期から後期にかけての土器には、L R縄紋が施される666が中期、668が中期かと思われる。さらに、R L縄紋が施された674も中期後葉かともみなされ、665とL R縄紋が施された667も末葉頃と考えられる。671は中期後葉から後期前葉の深鉢に分類され、L R縄紋を持つ673の深鉢は、北白川C式から中津式段階に、675は中期後葉から後期前葉にかけて、676は中期末から北

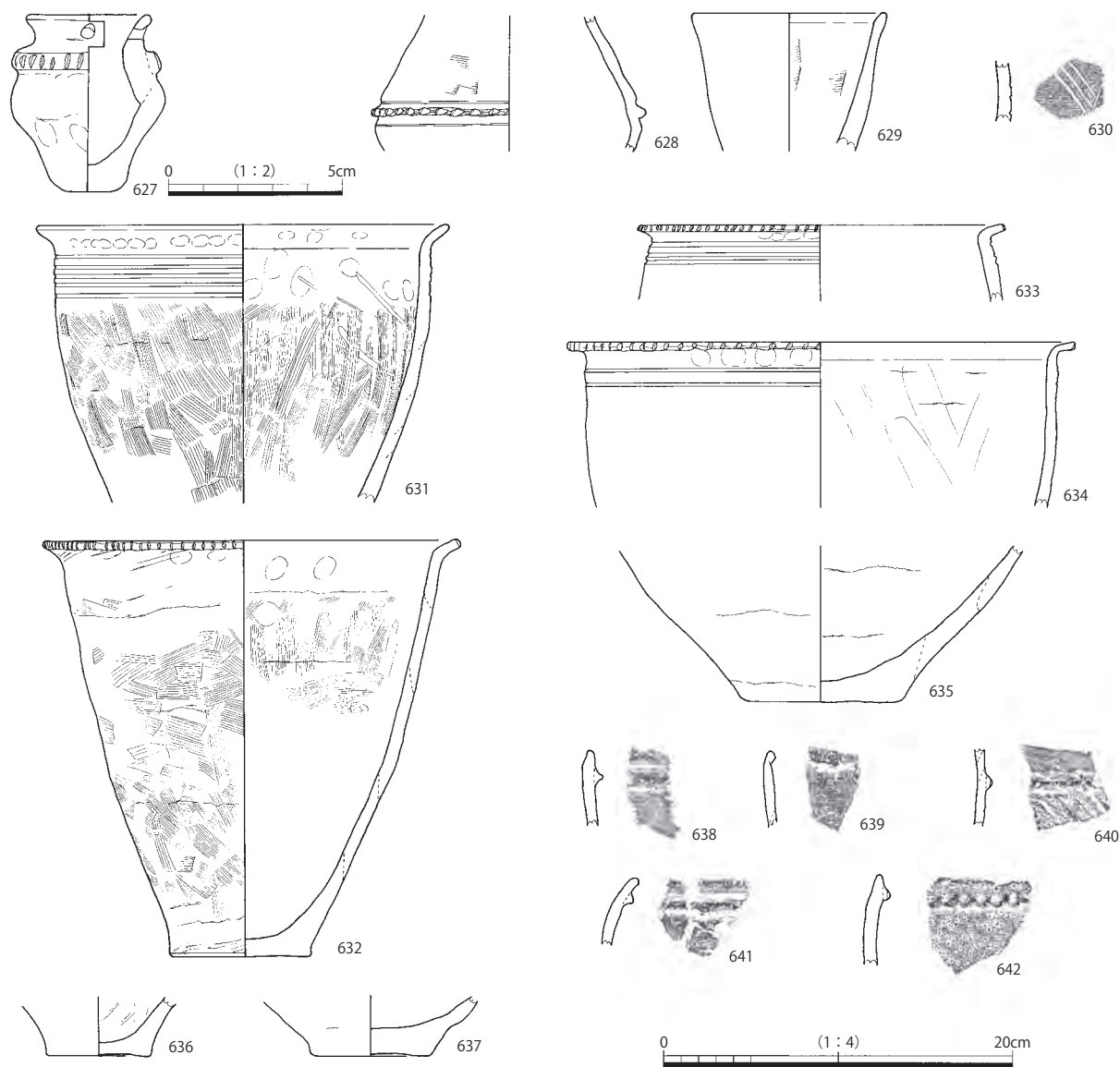


図 139 8層 出土遺物実測図(2)

白川上層1式か2式に属す。このほか、669と670は中期から後期前葉にかけての底部である。

後期の土器には、J字紋が施された初頭の中津式678、前葉から中葉にかけては、縦位沈線と渦巻紋の施された679、彦崎K I式に近似した紋様構成を持つ680と681が北白川上層1式、北白川上層1か2式に分類される682・683・685・686、北白川上層2式に分類される口縁部外面にLR縄紋による縁帯紋を施す689や690、無節のLR縄紋を施す687、浅鉢と考えられる688と691がみられる。このほか、北白川上層式と思われる699、初頭から前葉にかけての684、LR縄紋が施された697、前葉かとも思慮される693と694、後期の範疇で捉えられる698や、692・695・696・700・701

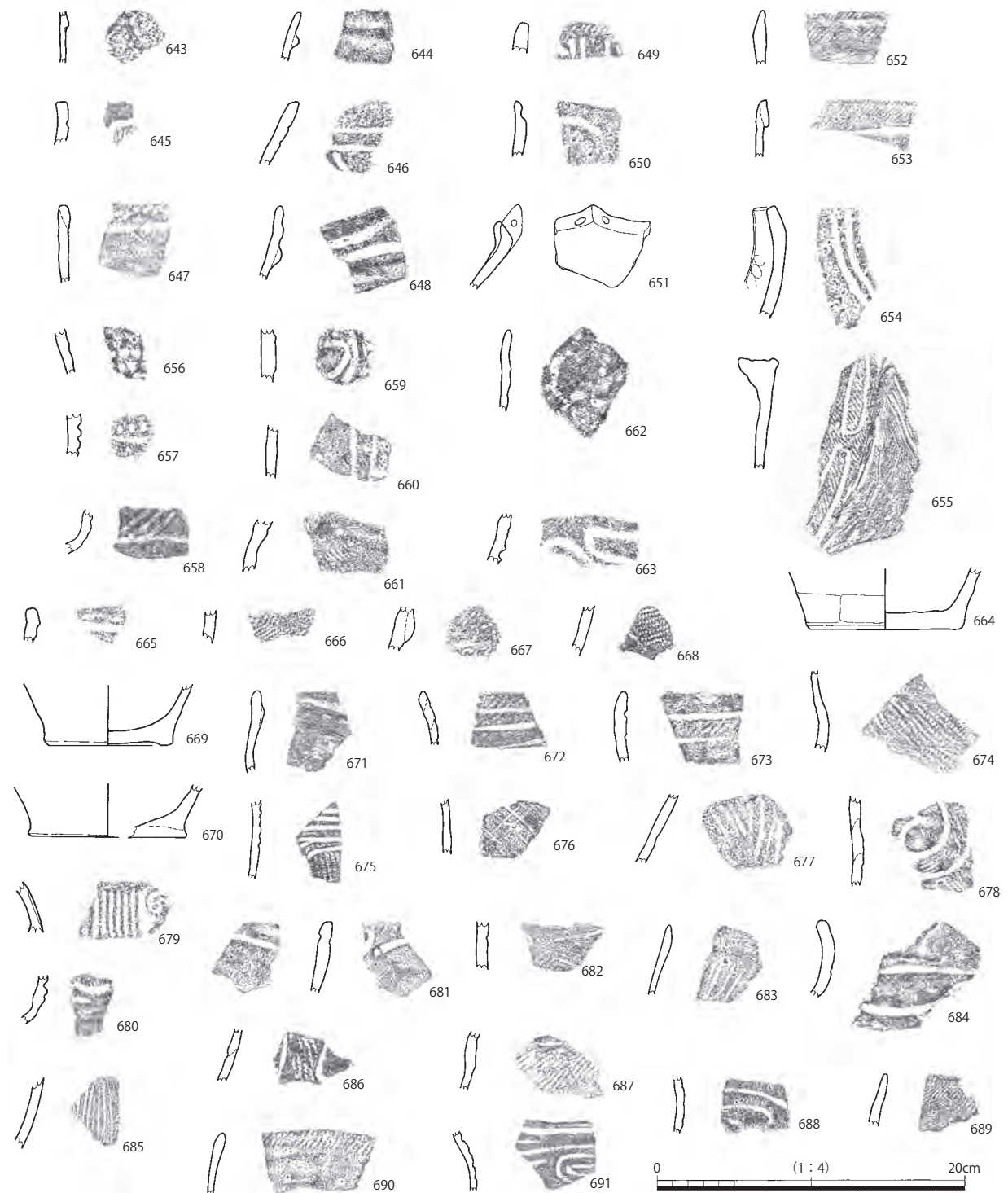


図140 下層確認トレンチ 出土遺物実測図(1)

の浅鉢片がみられる。

さらに、この段階の粗製土器には、北白川上層式に伴う 703 から 705 と 707、後期前葉から前半にかけての 702 と 718、後期と思しき 706・708 から 711・722・724、後期から晩期前葉にかけては巻貝条痕が施された 712・714・723 がある。浅鉢には、波状口縁となる 716 のほか、713 と 719 があり、715 は鉢か浅鉢の底部、717 も浅鉢となる可能性がある。

つづく中葉段階の元住吉山式には、I か II 式に分類される 725 と 726 があり、結節縄紋が施された

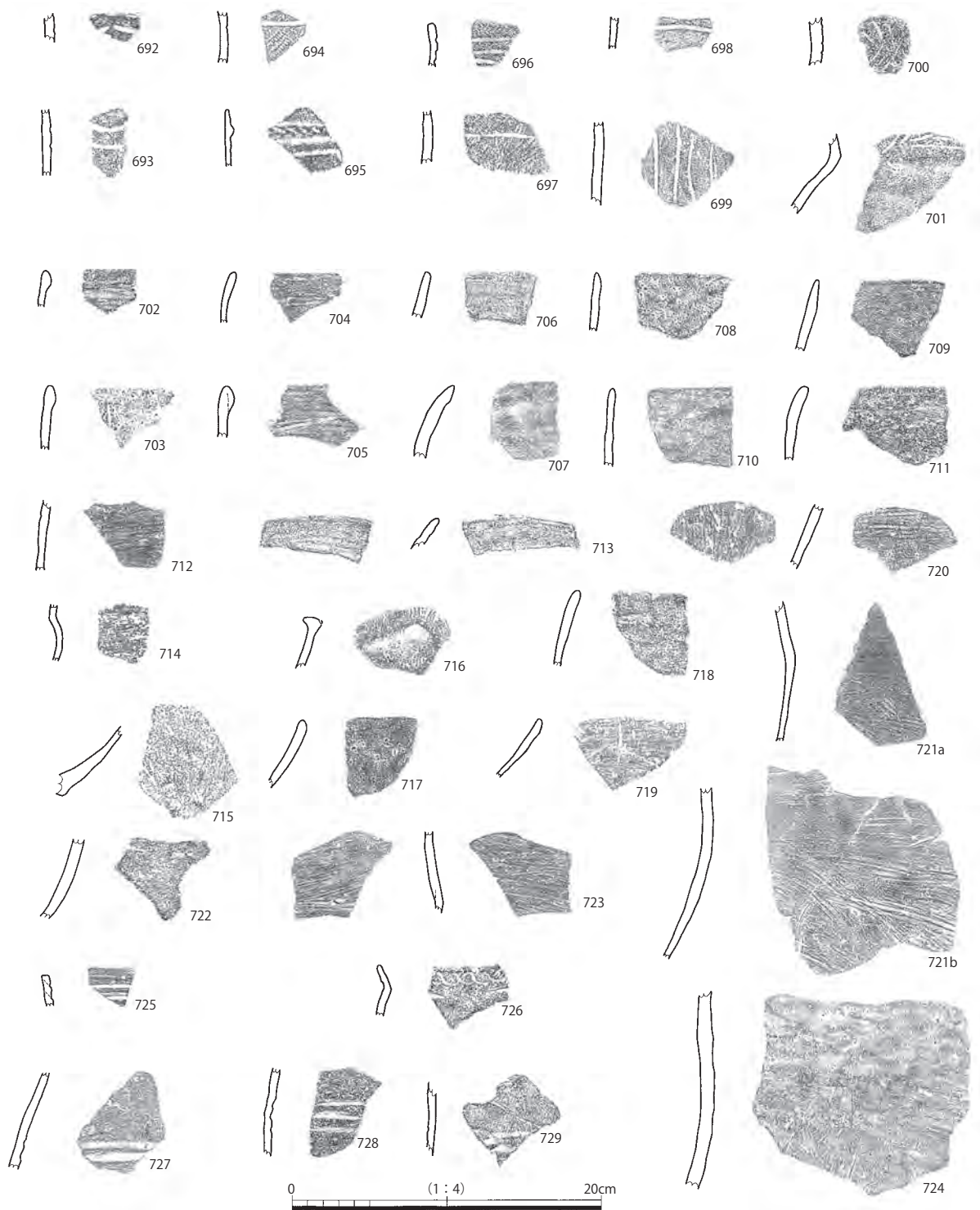


図 141 下層確認トレンチ 出土遺物実測図 (2)

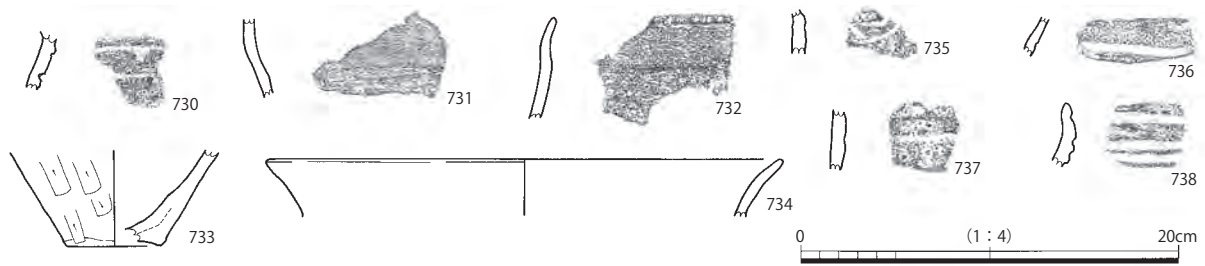


図 142 下層確認トレンチ 出土遺物実測図 (3)

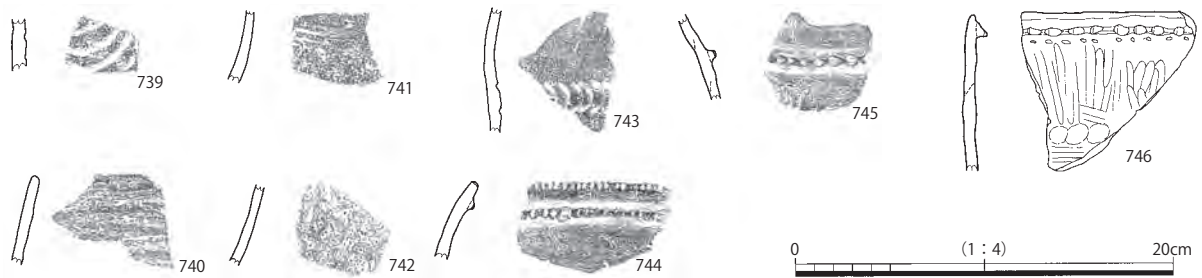


図 143 9層 出土遺物実測図

726 は注口土器の可能性もある。727 は凹線紋の窪みにミガキを施すため、元住吉山Ⅱ式から宮滝Ⅰ式に分類され、728 は断面レ字形の凹線紋、729 は巻貝による扇形圧痕紋が施されるため宮滝Ⅱ式に分類される。巻貝条痕が施された 721 の a と b は宮滝式から晩期の滋賀里Ⅲ a 式までの中におさまる。

晩期の土器には、三角形の削り込みを入れた 730、滋賀里Ⅱ式に分類される 732 のほか、当該期のものとも考えられる 731 の深鉢、733 の底部、734 の口縁部がある。

9層出土遺物 (図 143)

739 は太い沈線紋からみて北白川 C 式から北白川上層式、740 は後期の粗製土器と思しき口縁部片、743 は C 字状の爪形紋をめぐらすため、東部瀬戸内地域の黒土 B Ⅱ式の深鉢、742 と 745 は突帯と刻目の様相より船橋式から長原式の深鉢、746 は船橋式の口縁部、744 は滋賀里Ⅳ式の口縁部である。

これらのうち、最新段階が船橋式から長原式のため、層準の時期が縄紋時代晩期末葉と判断される。

10層出土遺物 (図 144)

747 は L R 縄紋が施された北白川 C 式に分類される深鉢の口縁部片である。748 と 749 は浅鉢で、前者は形態や調整からみて晩期前半から滋賀里Ⅲ a 式に分類され、後者は口縁部内面上端部に 1 条の沈線紋が施されているため、元住吉山Ⅱ式から滋賀里式にかけての時期と考えられる。

これらのうち、最新のものが滋賀里Ⅲ b 式であるため、本層の時期を晩期前半とすることが可能となり、さらに、これと第 8 面で検出した先述の 857 g 流路との時期関係を比較しても齟齬は生じない。

11層出土遺物 (図 145)

中期以降の土器などが出土した。中期前半では、船元Ⅱ式と思われる L R 縄紋と押し引き竹管紋が施された 750 の深鉢、中期末葉の北白川 C 式の深鉢では、波状口縁を有する A 類の 751、B 類の 752、C 類の突起状山形口縁を持

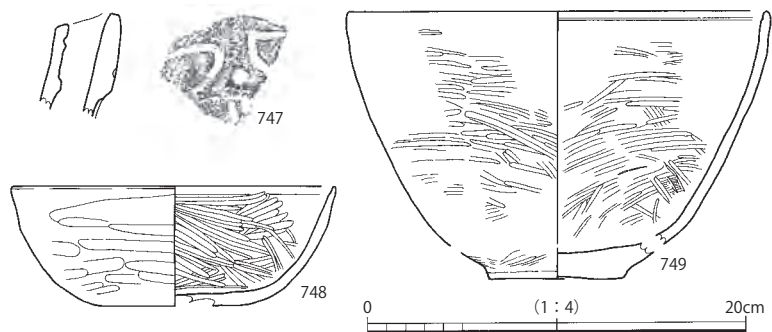


図 144 10層 出土遺物実測図

つ 753 がある。後期では垂下沈線を施す 762、2 種類の縄を撚った L R 縄紋原体で施紋する 768 が北白川上層 1 から 2 式、綾杉状の縄紋を施す 758、蛇行する沈線を垂下させることや、バケツ形の器形から堀之内 2 式との関連や影響を窺わせる 759 と 761、鉢の口縁部である 764、鉢に分類される 766 と 769 が北白川上層 2 式に帰属し、浅鉢と思しき 767 と 760 が北白川上層 3 式に位置づけられる。

このほか、765 も北白川上層式とみなされ、763 も後期の範疇で捉えられよう。また、この段階に伴う粗製土器に 756 と 757・770 があり、754 と 755 もこれに属するとも考えられる。なお、771 の浅鉢は唯一、晩期まで下がる可能性を持つ。

本層準の時期は、769 に付着する煤の遺存状態が非常に良いことから、後期中葉と考えられる。

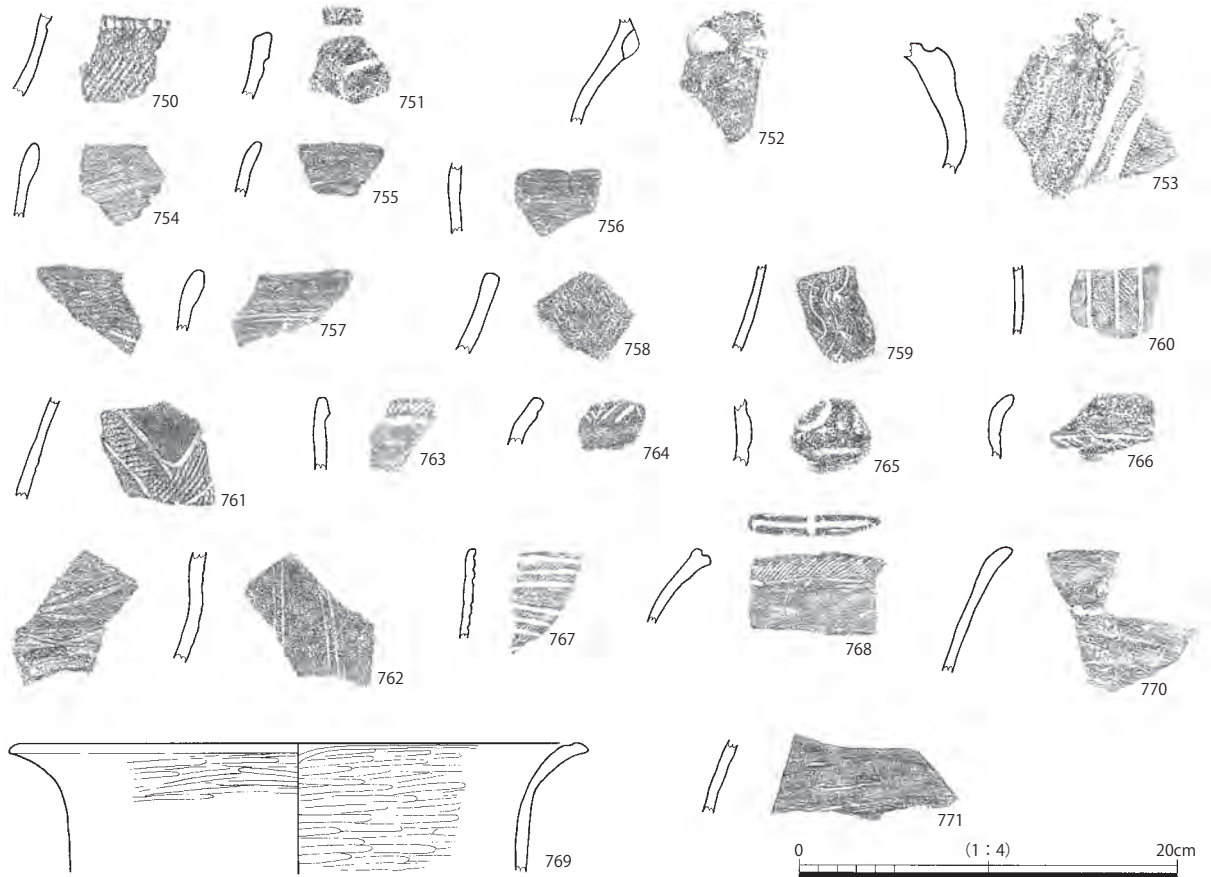


図 145 11 層 出土遺物実測図

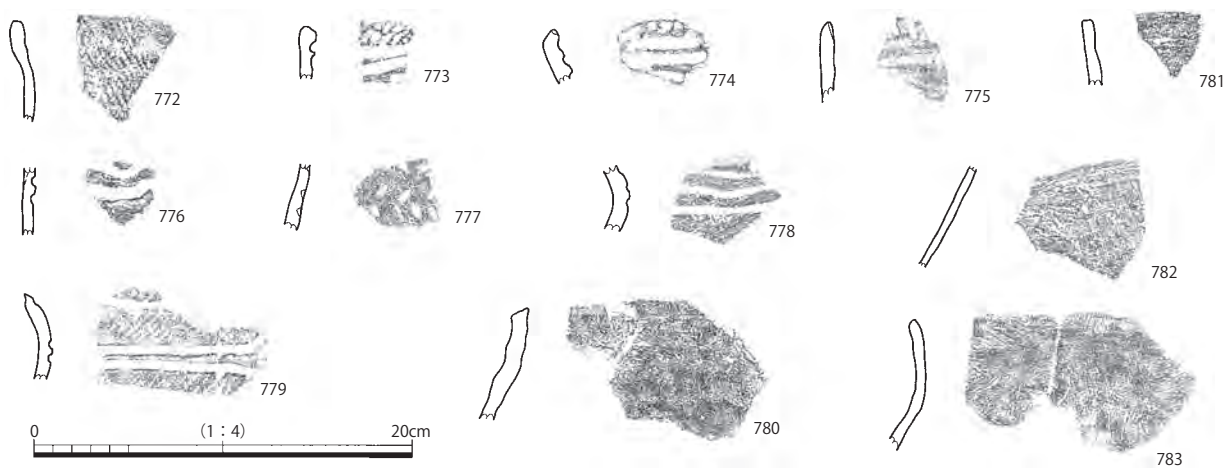


図 146 12 層 出土遺物実測図

12層出土遺物（図146）

772はR L縄紋が施された船元Ⅱ式の深鉢口縁部。773・774・778、矢羽状の刺突紋を施す777や776、L R縄紋を施す779は北白川C式で、779は深鉢A類に分類され、777と776も深鉢となろう。また、775も中期末頃と思われ、繊維束状の原体による条痕を施す780の深鉢も中期後半に分類される。そして、783は後期後葉から晩期の鉢、782は晩期中葉から後葉頃と考えられるが、781は不明である。

これらの土器は、一部に後期後葉から晩期後葉のものまでを含むが、北白川C式のものを中心とし、上位に堆積する11層が後期中葉と考えられるため、中期末以降、後期中葉以前の中におさめられる。

第16項 木器・木製品

農具（図147・148、図版24・25）

784から786は第6面890土坑から出土した。784は握りの欠損したサカキ製曲柄鍬台部で、残存長21.9cm、幅16.5cm、厚さ2.6cmを測る。785はアカガシ亜属材により製作された曲柄又鍬の身CⅡで、

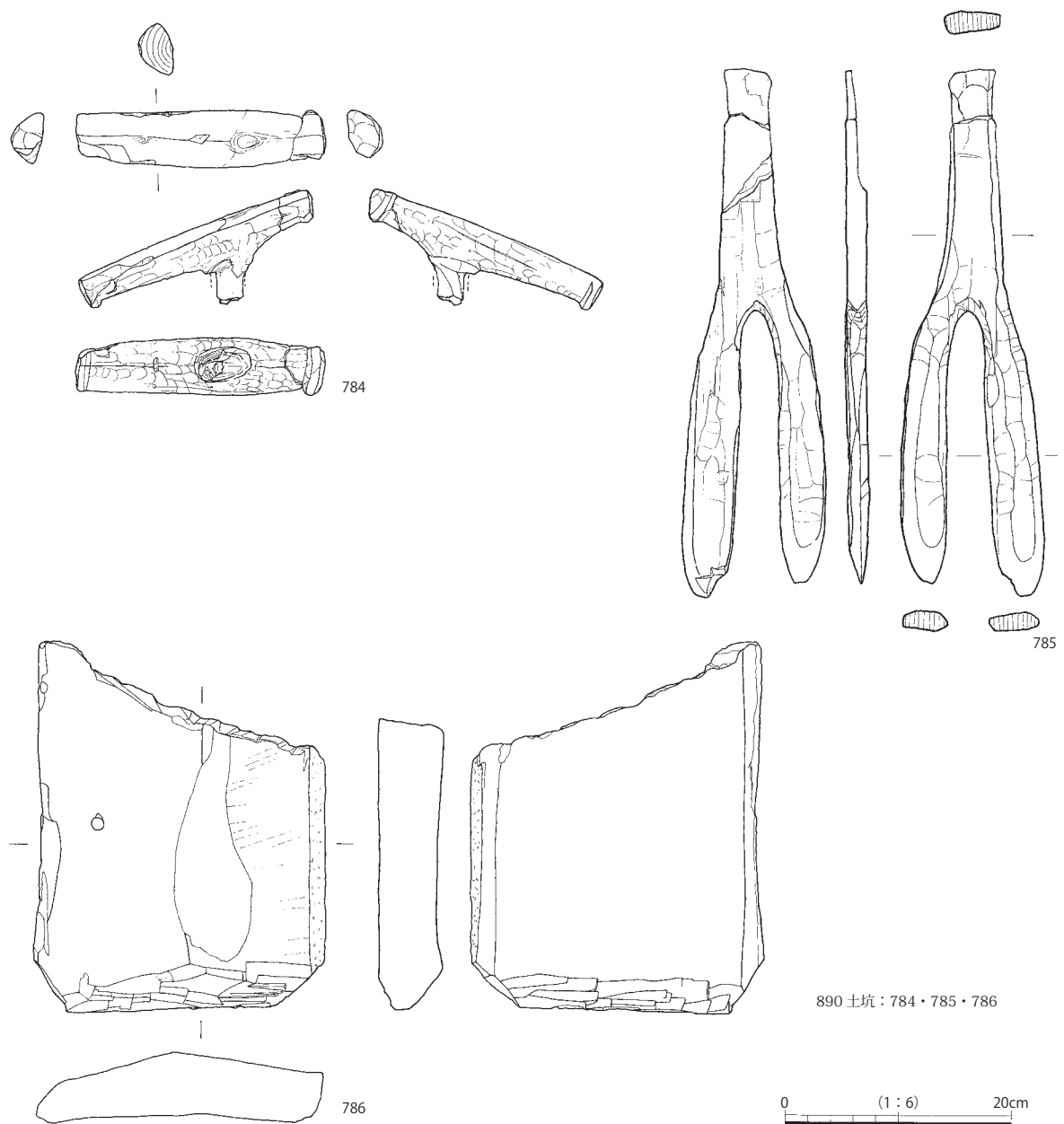
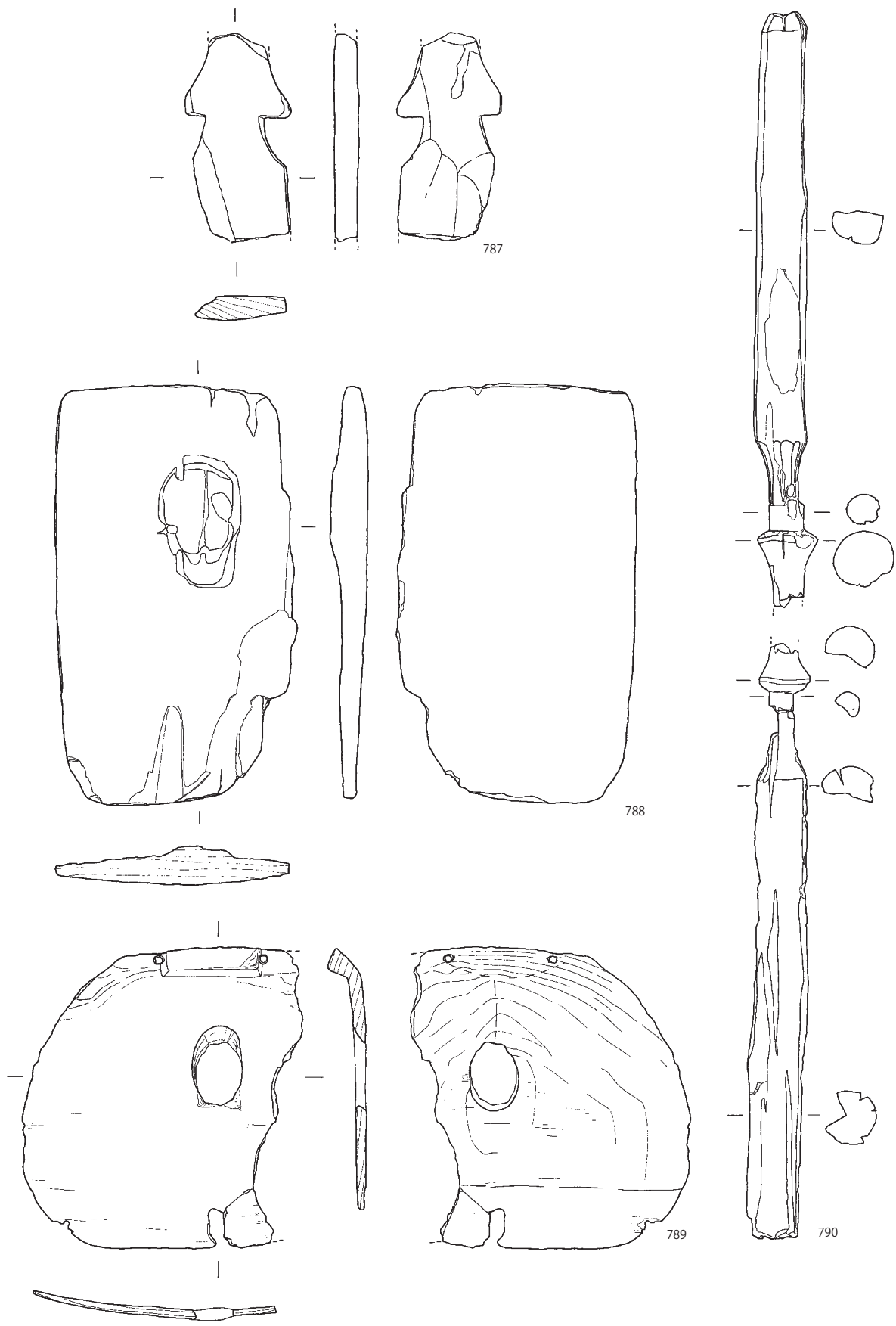


図147 木製品実測図（1）



308 b 流路 : 787・789 859 b 流路 : 788 側溝 : 790

0 (1:4) 20cm

图 148 木製品実測图 (2)

長さ 46.8 cm、幅 6.8 cm、厚さ 1.8 cm を測り、紐かけの大きさからみて、784 の曲柄鋤台部と一対であったとも考えられる。786 はミカン割りした原材に粗い加工を施すカシ材で、長さ 33.2 cm、幅 6.8 cm、厚さ 5.6 cm を測る。全長は短い、中央部が膨らむことから広鋤未成品とも察せられる。

787 はアカガシ垂属を材として作られた曲柄平鋤あるいは又鋤の身の頂部で、残存長 14.5 cm、残存幅 6.4 cm、厚さ 6.8 cm を測る。第 5-1 面の 308 b 流路南肩から出土し、頂部の脇に笠部が作り出される D 類に大別されることから、この形式の中では比較的古い段階の資料となる。788 は第 5-2 面 859 b 流路から出土した直柄平鋤、広鋤 II A 式の身の未成品で、長さ 29.3 cm、幅 16.5 cm、厚さ 2.6 cm を測り、柄穴周囲の舟形突起は A 型隆起をなし、その細分は A 3 ないし A 5 型となるが、類例的には前者となる蓋然性が高い。789 は第 5-1 面 308 b 流路から出土した III 式の泥除で、カシ材が用いられている。790 は 8 層から出土したサカキの芯持材を用いた竖杵で、長さ 85.8 cm、直径 6.8 cm を測る。

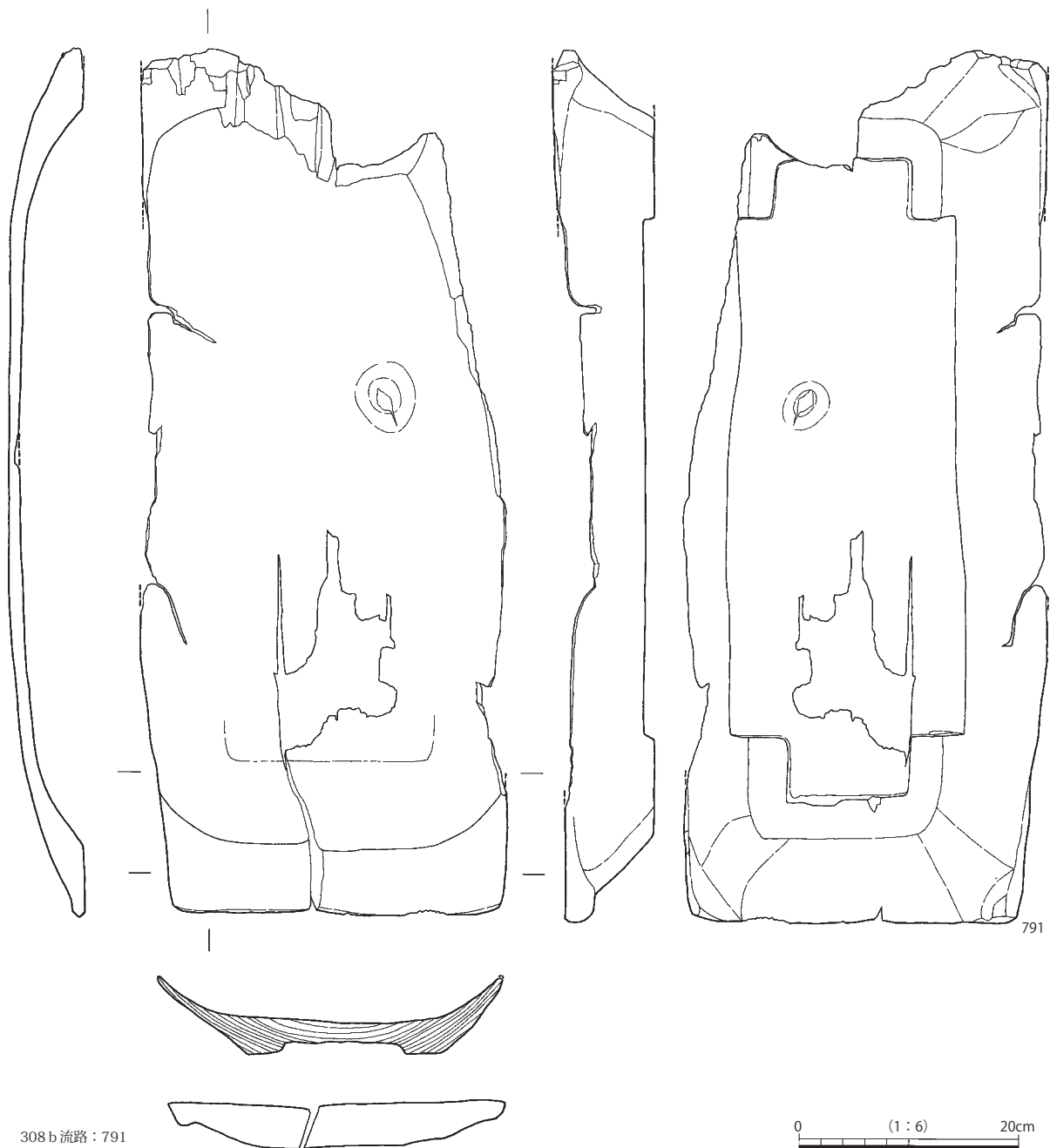


図 149 木製品実測図 (3)

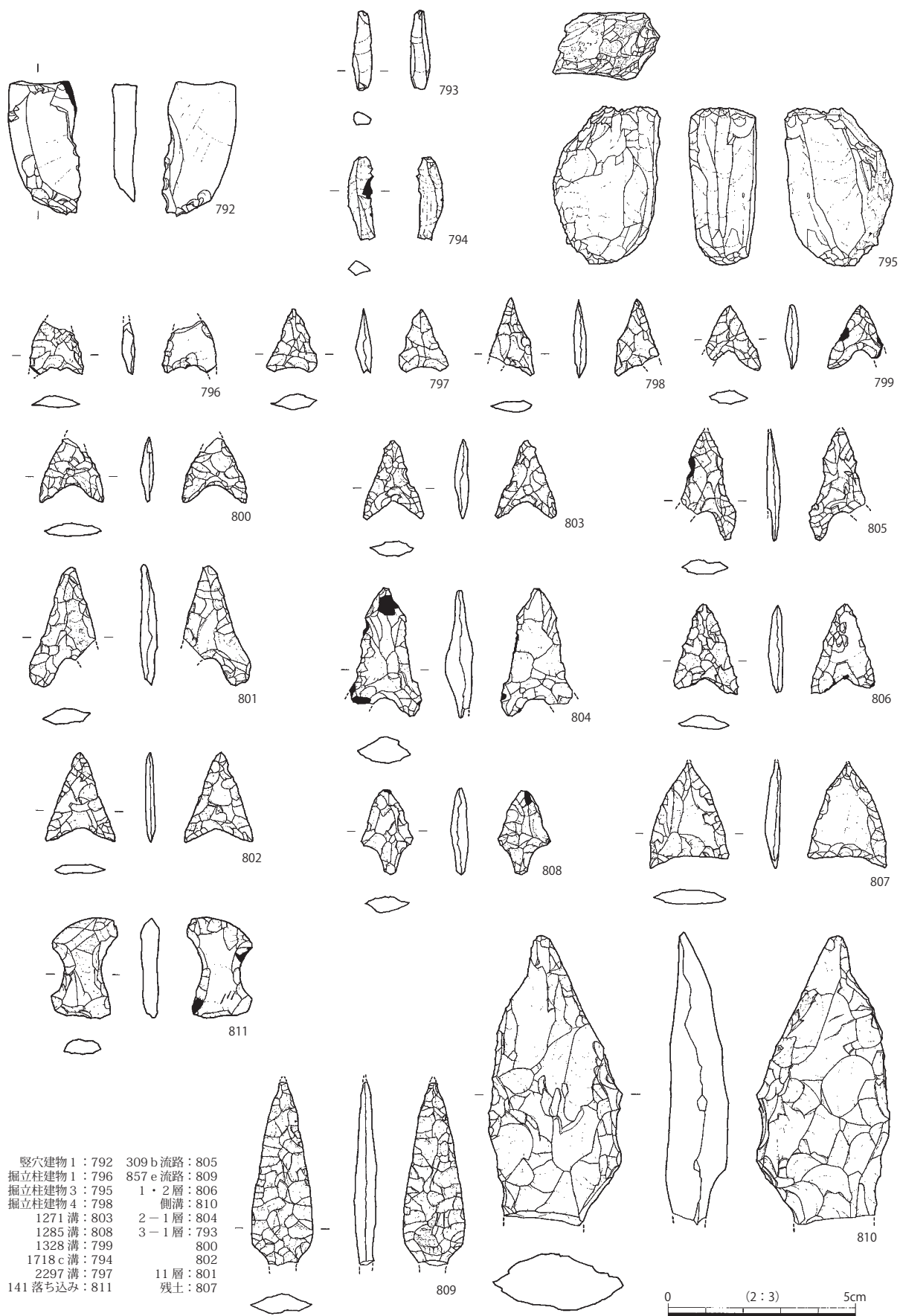


图 150 石器実測图 (1)

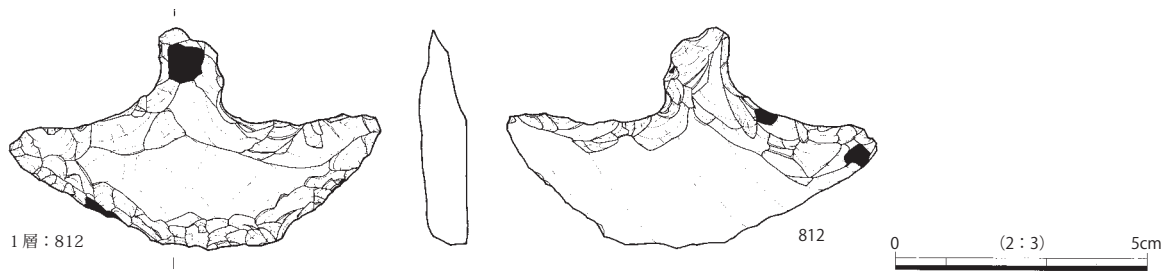


図 151 石器実測図 (2)

節帯の形からA類に分類され、これと8層の年代観である弥生時代前期との間に齟齬はみられない。

容器 (図 149、図版 25)

791は第5-1面308b流路のシガラミ2339附近から出土し、長さ80.7cm、幅33.5cm、高さ7.3cmを測る。用材はクリの一木で、その木裏を削り込んで形作られている。裏面の短辺側にはコの字形を呈した一対の高台を削り出し、四隅は面取を行うことにより稜を除去している。

第17項 石器・石製品

打製石器 (図 150・151、図版 26・27)

すべてサヌカイトを用いて製作され、792は古墳時代の竪穴建物1埋土から出土した上半部が欠損したサヌカイトの剥片、793と794の2点は、それぞれ基本層序第3層と第2面2104溝から出土した細石刃の可能性を持つ剥片、そして、795は古墳時代後期と思われる掘立柱建物3の145柱穴から出土した細石刃核で、これらは原位置を離れ後世の遺構や包含層に混入したものだが、795の細石刃核は、府内では羽曳野市青山遺跡・誉田白鳥遺跡・城山遺跡などでのみ知られる希少な資料である。

796から809は石鏃で、796は第3面掘立柱建物1の162柱穴、797は第3面2297溝、798は2区第3面221溝、799は5区1328溝、800は第3-2面、803は第1-2面1271溝、805は第5面309流路、801は11層、804は2層、806は1-2層、802は4層、807は排土、808は第1-2面1285溝、809は第7-1面857e流路から出土し、これらのうち、ほぼ原位置をとどめていると考えられるのは、縄紋時代後期中葉までに属する801と、弥生時代中期後半段階とみられる809のみである。他は、形態的特徴から808が弥生時代と考えられるほかは、縄紋時代中期から後期に分類され、当調査区で出土した当該期の土器と相関関係にはあるが、いずれも後世の包含層や遺構に遊離した状態で混入していたものであるため、より以上の詳細は知り得ない。

このほか、810は側溝掘削時に出土した時期不明の尖頭器未成品、811は第1面141落ち込みから出土した両側縁加工の施された縄紋時代の製品、812は1層出土の縄紋時代に帰属する横形の石匙だが、これらについても原位置をとどめていない。

磨製石器 (図 152・153、図版 17・27・28)

813は3層から出土した点紋片岩製の石斧で、形態や用材からみて縄紋時代晩期のものと考えられる。814は第5-2面859b流路から出土した泥質片岩製の石刀で、これら2点は、後世の包含層などに混入して出土した。815は8層出土の泥質片岩製の石棒で、表面には炭化物が付着する部分も観察される。

816は6層から出土した輝石安山岩製の磨製石器で、両面を丁寧に研磨し刃部を研ぎ出すが、基部のそれは引かれている。裏面には基部方向からの加撃による大きな剥離面がみられ、その状況や形態からみて磨製石戈の可能性もある。817は弥生時代前期の包含層である8層より出土した用途不明の板

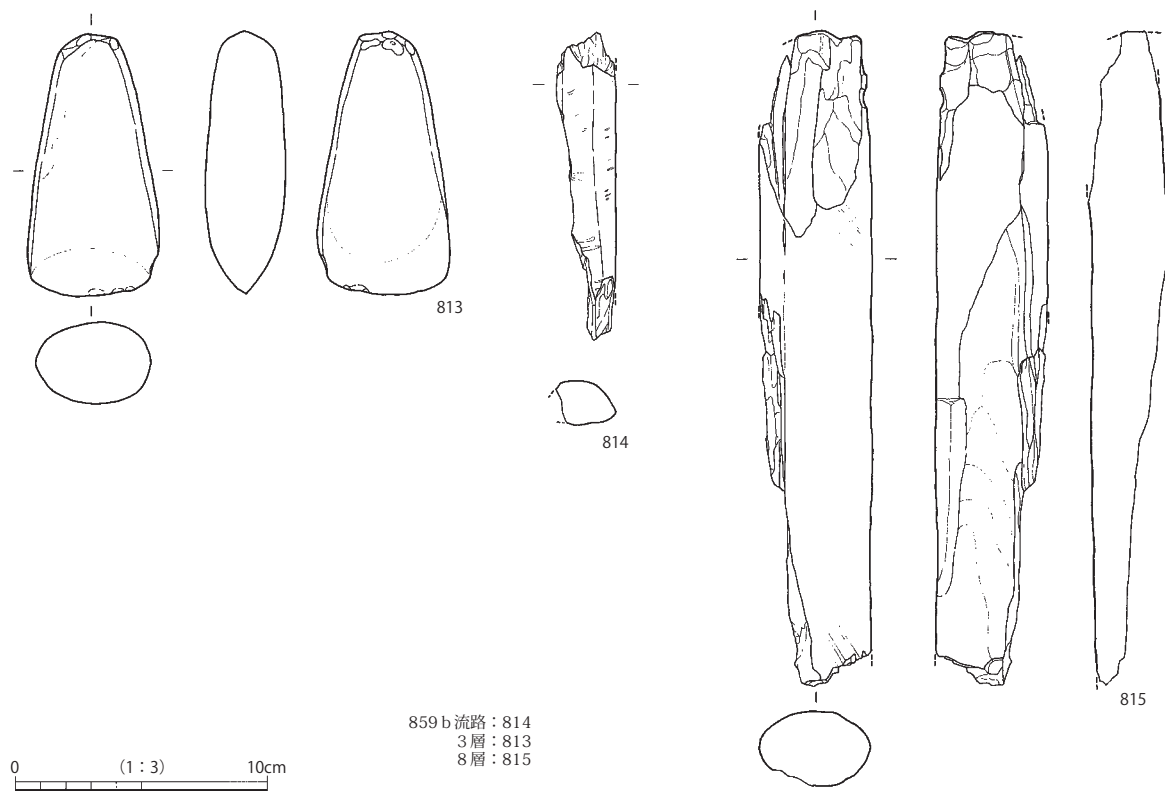


図 152 石器実測図 (3)

状石製品で、泥質片岩が用いられるため、石庖丁からの転用または、その素材を利用したとも考えられる。818 から 822 は石庖丁で、818 は 7 - 1 層上面で検出され、耳成山産流紋岩を用いることや形態から見て、弥生時代前期となる可能性が高い。819 は江戸時代中期までの遺物を包含する 1 - 1 層から出土し、泥質ホルンフェルスが用いられている。820 は角閃石安山岩製の半月形直線刃で、第 8 面で検出された弥生時代前期新段階の 859 e 流路から出土した。821 は流紋岩質溶結凝灰岩を用いた半月形直線刃で、8 層から出土し、先端部に円孔を穿つ。同層準からは弥生時代前期新段階までの土器が出土しているため、この資料も当該期に帰属させ得る。822 は泥質片岩を素材として直線刃に仕上げられ、第 8 面 859 e 流路から出土したため、弥生時代中期前半頃と思慮される。

礫石器 (図 154・155、図版 29)

823 から 827 の 5 点は叩石で、両面のほぼ中央部に 1 ないし 2 箇所叩打痕が観察され、さらに、すべての周縁にもこれが観察される。うち、826 には周縁部の一部に滑沢を持つ平坦面が形成されているため、磨石としても使用されたことが窺える。用材は 823 が片麻状柘榴石黒雲母花崗岩、824 と 826 が砂岩、825 が流紋岩、827 が石英安山岩質溶結流紋岩で、出土位置は 823 と 826 が下層確認トレンチ内 983 流路、824 が 8 層、825 が第 7 - 2 面 857 f 流路、827 が第 8 面 859 e 流路である。

828 と 829 は凹石で、双方とも両面の中央部附近に叩打により窪みを形作っている。素材は 828 が柘榴石アプライト、829 が白雲母黒雲母花崗岩で、828 と 829 は 8 層から出土した。

台石 (図 155、図版 30)

830 から 834 および、図版 30 - 929 から 932 の 9 点がある。材質は、830 が片麻状黒雲母花崗岩、831・833・834・929・932 が柘榴石黒雲母花崗岩、832 が砂岩、930・931 が黒雲母花崗岩である。出土位置は、830 が 7 - 1 層、831・834 が第 7 - 1 面 857 e 流路、832・929・932 が第 8 面

857 g 流路、833 は堅穴建物 3、930 が下層確認トレンチ内 983 流路、931 は第 8 面 859 e 流路である。

また、832 の上面には平滑な部分が観察され、833 は表面が赤化しているため、被熱する環境におかれていたことを示しているため、既述した 3 点の砥石と共に建物の性格を知る上で有為となる。

なお、縄紋時代晩期滋賀里Ⅲ b 式を中心とする土器が出土した 857 g 流路出土資料は、周囲の砂礫の粒径からみて人為的に持ち込まれたことは確実であり、堅果類などの集積こそ検出されなかったが、周辺の水辺でこれらなどの処理を行う作業場として利用されていた状況を彷彿とさせ、5 点のうち 4 点までが同じ石材を用いていることも相まって、往時の活動様式や物資の調達を知る上で興味深い。

砥石 (図 156)

合計 8 点が出土した。835 は第 2 - 3 面 1557 溝から出土し、流紋岩を用いている。836 は珪質頁岩を素材とし、第 1 - 3 面 342 耕作溝より出土した。837 は 2 層、838 は 1 層から出土し、双方とも珪質頁岩を用いている。839 と 840 および、842 は堅穴建物 3 から出土した。前 2 者には流紋岩、後者には中粒砂岩が用いられ、842 には、穿孔貝の生痕による管状の窪みが観察されるため、海岸の転

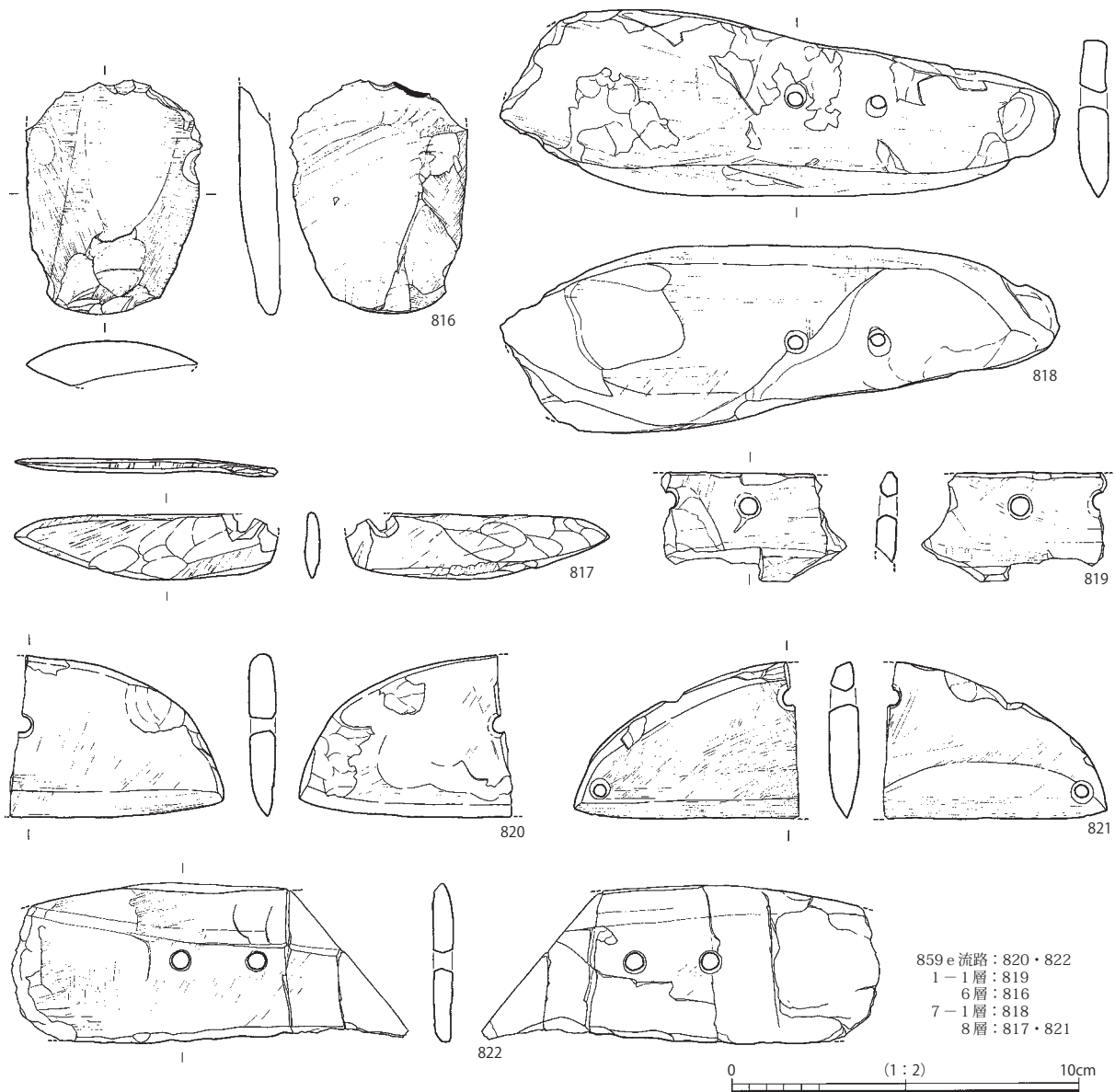


図 153 石器実測図 (4)



图 154 石器実測図 (5)

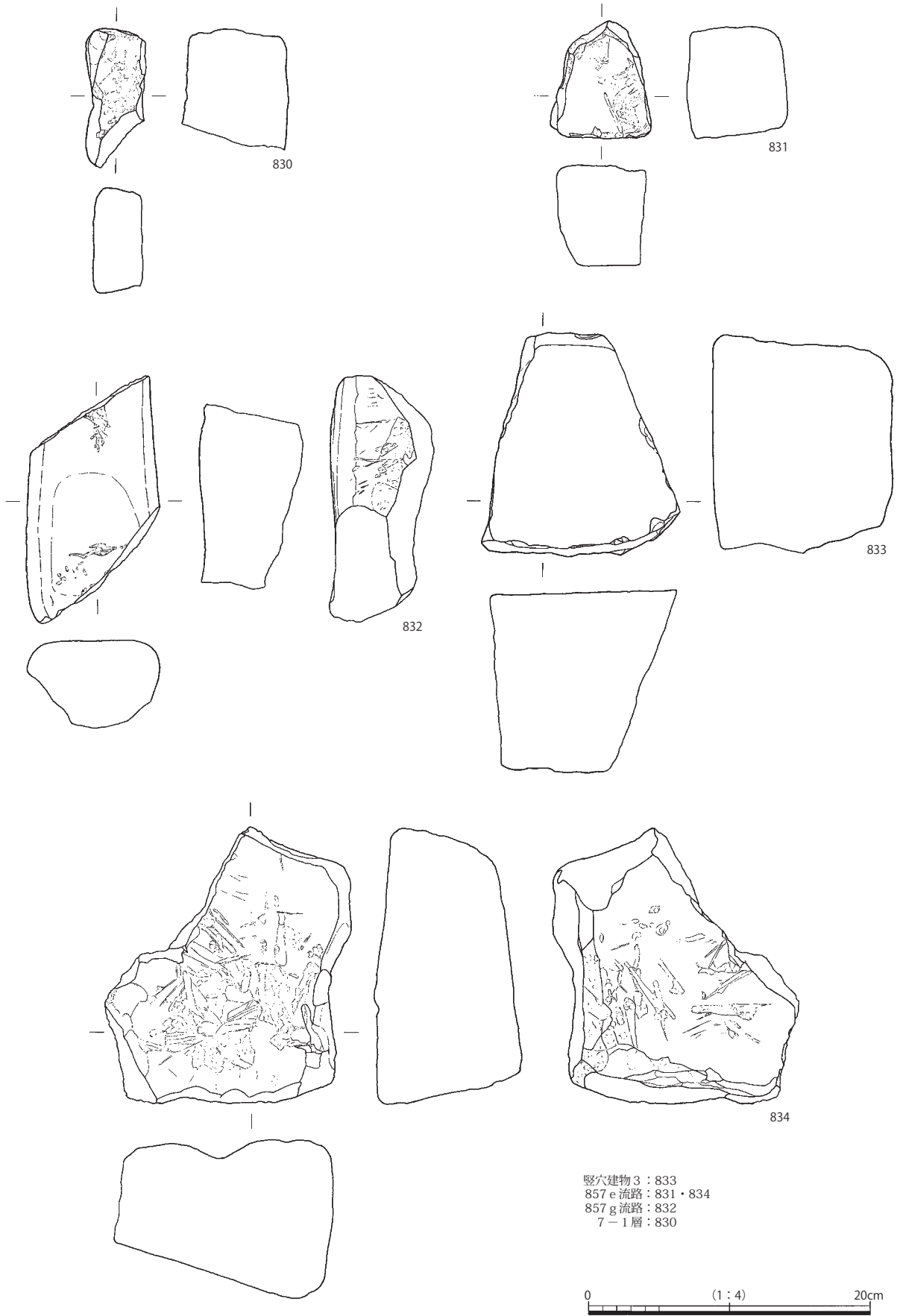


图 155 石器実測図 (6)

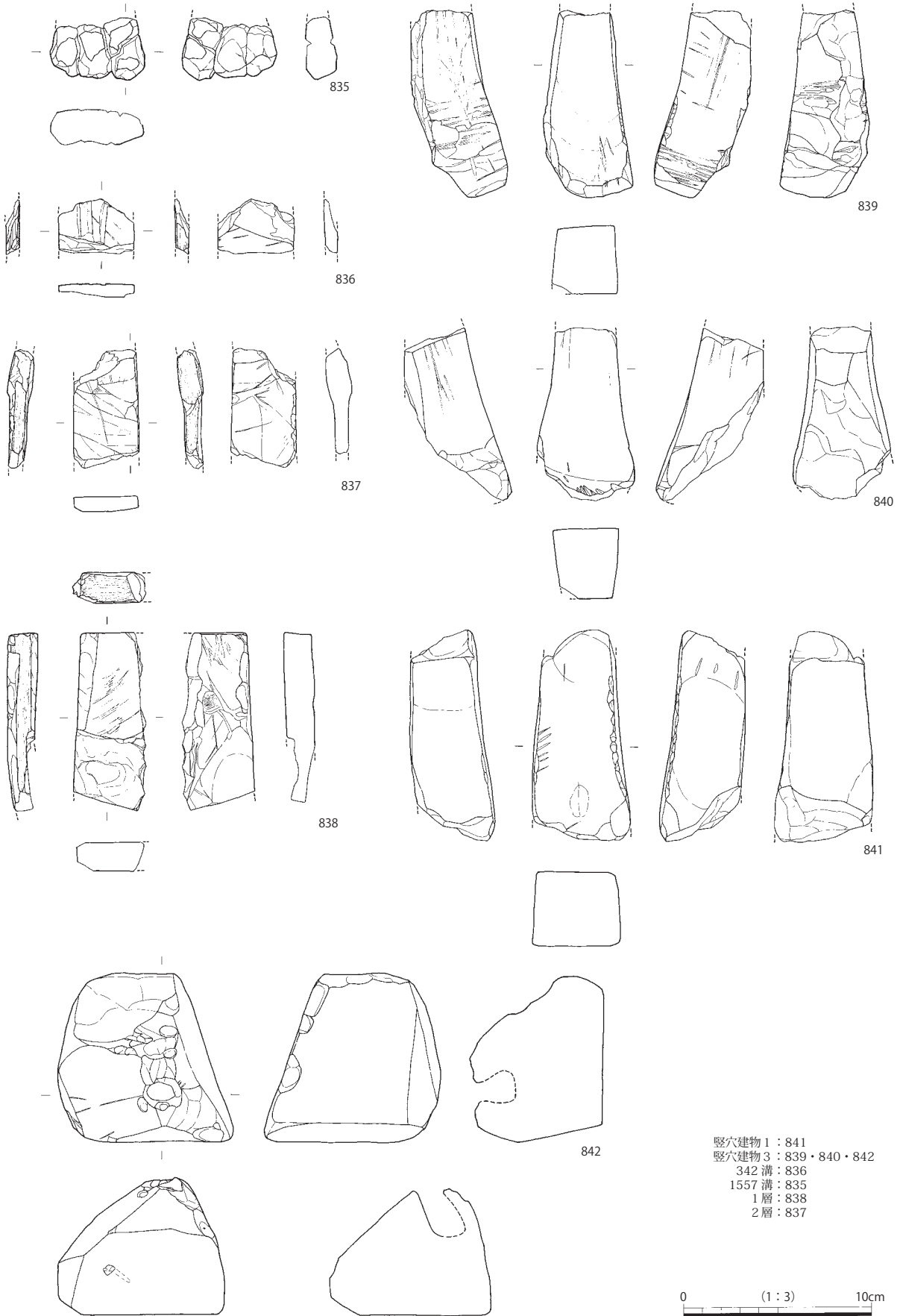


图 156 石器実測图 (7)

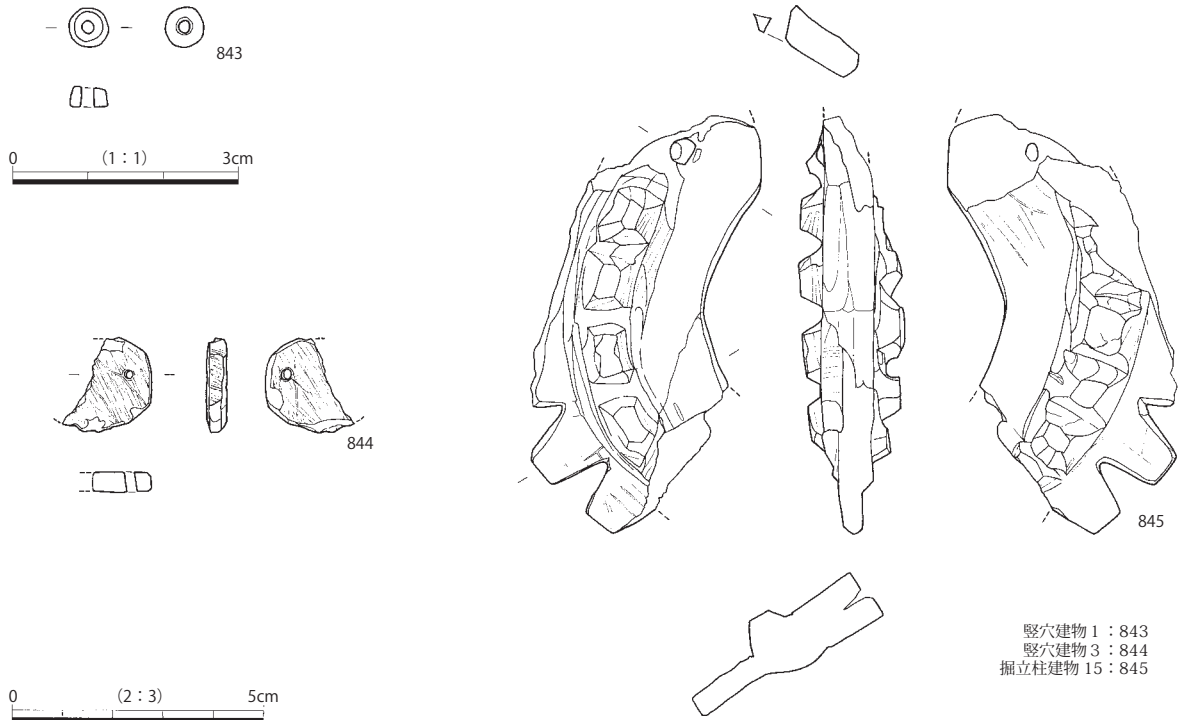


図 157 石製品実測図

石を採取したと考えられる。これらの遺物は建物の性格を知る上で示唆的である。841 は竪穴建物 1 の造り付けカマドの上位から出土し、材質は細粒砂岩である。

滑石製品 (図 157、図版 26)

3 点が出土した。これらのうち、843 と 844 は、それぞれ竪穴建物 1 と 3 の造り付けカマド内堆積土を洗浄中に検出したものである。843 は白玉で、直径 0.5 cm、厚さ 0.3 cm を測り、その中心には直径 0.2 cm 弱の円孔が片面から行われている。844 は約半分が欠損する有孔円板で、長さ 1.2 cm 以上、幅 1.2 cm、厚さ 0.3 cm を測り、側方には直径 0.1 cm の円孔を片面より穿つ。

845 は子持勾玉で、掘立柱建物 15 の柱穴の一つである 185 柱穴埋土内から出土した。両端と背面の一部を欠失するが、扁平な本体の頂部には直径 0.5 cm の円孔を両面から穿ち、残存長 8.3 cm、幅 4.6 cm、厚さ 2.1 cm を測る。その両脇に 4 箇所、背面に 3 箇所以上の突起を作り出し、残存部位より推察して背面の突起は最低 5 箇所あったと復原される。

この資料に関しては、掘立柱建物を構成する他の柱穴掘方内より、MT-15 型式の須恵器片が出土していることから、6 世紀前半頃の年代を付与することが可能で、時期比定の根拠が乏しい中で、貴重な資料を提示することができた。また、上記以外に、第 3-1 面 2297 溝から 6 世紀中頃の須恵器と共に紅簾石片岩 1 点が出土した。

第 18 項 金属製品

銭貨 (図 158)

1-1 層から 3 層より貨幣などの青銅製品が出土した。銭種は方孔円形銭のみで、日本銭と渡来銭の別がある。後者は北宋銭で占められ、これらすべての背面は無文となる。以下、個々について述べる。

846 は江戸時代に鑄造された寛永通寶銅銭で、書体から新寛永の元文期 (1736 ~) 秋田銭に分類され、ここから 1-1 層の定点が知れることは第 1 項で述べた。以下は北宋銭となり、847 は 1-1 層出土の嘉祐元寶で、鑄造は 1056 から 1063 年間である。848 は 1-2 層出土の熙寧元寶で、初鑄は 1068

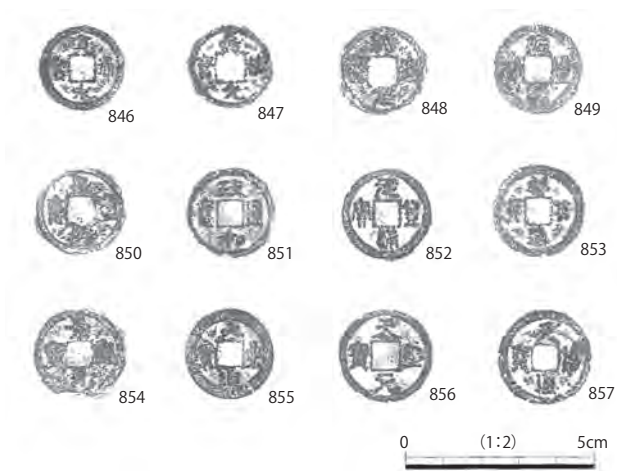


図 158 銭貨実測図

846 と 853 が楷書、847・851・856 が隷書、848 から 850・857 が篆書、854・855 が行書となる。

これら以外に、未掲載ではあるが 1 - 1 層より戸尻が遺存する山金製小刀柄が 1 点出土している。

年である。849 は 2 層出土の元豊通寶で、初鑄は 1078 年である。850 は 1 - 1 層出土の皇宗通寶で、初鑄は 1039 年である。851 は側溝出土の政和通寶で、初鑄は 1111 年である。852 は 1 - 1 層出土の元豊通寶で、初鑄は 1078 年である。853 は 2 層出土の祥符通寶で、初鑄は 1008 年である。854 は 1 - 2 層出土の景德元寶で、初鑄は 1008 年である。855 は側溝出土の元豊通寶で、初鑄は 1078 年である。856 は 2 面出土の天聖元寶で、初鑄は 1023 年である。857 は 1 - 2 層出土の元祐通寶で、初鑄は 1093 年で、

第 3 節 4 区で検出した遺構と遺物

第 1 面

911 土坑 (図 159)

調査区南部で検出され、北端部は耕作溝によって損壊される。平面は、北東から南西にやや長い不整円形を呈し、規模は長径 2.0 m 以上、短径 2.0 m、深さ 0.5 m で、埋土は 3 層に細分される。

出土遺物には 858 の 16 世紀代と思われる土師器小皿があるため、これに後出する遺構と判明する。

915 土坑 (図 159)

911 土坑の南西側において、これに接するような位置で検出された。平面は東西に長い楕円形を呈し、規模は一部が調査区外となるが、長径 1.7 m、短径 1.0 m、深さ 0.25 m と判明する。

埋土は 3 層に細分され、特徴ある遺物は含まれていなかった。これ単独の遺構であることも相まって時期は不明である。

894 溝 (図 159・160)

調査区南辺で検出された。北西から南東にまっすぐのびて、この溝の北東肩がそのまま基盤層の下降線に相当し、これを境として南西側には氾濫原が広がる。北西側は攪乱により失われ、南東側は調査区の外に広がるため、確認できる規模は、長さ 13.0 m、幅 1.5 m、深さ 0.3 m を測る。埋土は 4 層に細分され、図 159 下段の断面図に示すように、上位は第 1 面に伴う作土層に覆われているため、本来は 2 面に伴う溝であると理解される。

埋土からは土器などの遺物が出土し、この中から図 160 - 860 の古墳時代後期頃の須恵器、861 の 17 世紀初頭の肥前焼系陶器皿、862 の 15 世紀中頃の備前焼播鉢を図化した。

時期は、遺物のうち最新のものが 17 世紀初頭であるためこれが上限とみなされるが、下層の第 2 面から 17 世紀中頃の肥前焼系磁器が出土しているため、ここからやや下がる段階とみなされる。

耕作溝 [909・910・914 溝] (図 159・160)

894 溝の北東側でこれと平行するような形と矢羽状に交差する形で検出され、断面の形状や埋土の

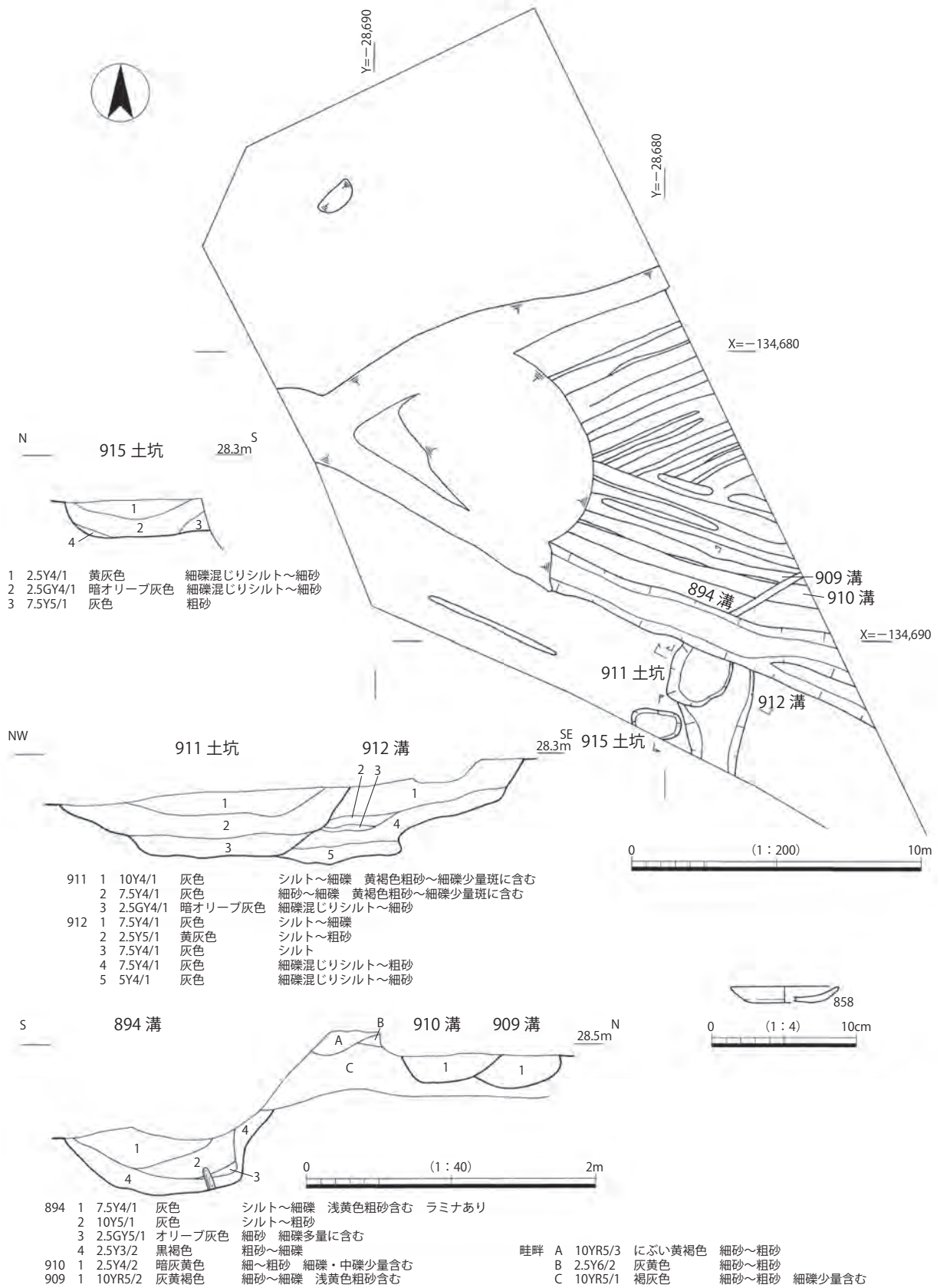


図 159 第 1 面 遺構全体図、911・915 土坑、909・910 溝 断面、及び 911 土坑 出土遺物実測図

様相から、犁跡を含む耕作痕と考えられる。うち914溝からは、図160-859の土師器小皿が出土した。時期は、その土師器小皿からみて17世紀と考えられ、他の耕作溝もこれに近似する時期となろう。

1から3層出土遺物（図161）

上記の第1面に至るまでに包含層が4層確認され、各層から遺物の採取とそれぞれの層界で遺構検出を行った。その結果、3層までには871のような丸手紋を施す18世紀中頃以降の肥前焼系磁器が出土したため本報告書にはこれらを詳述せず、来歴を示すと思われる遺物のみを掲載する。

1-2層からは865に示す時期不詳の鞆の送風管、868と869の16世紀代の瀬戸美濃窯系陶器小皿、870の17世紀の肥前焼系陶器、前述した871の18世紀後半の肥前焼系磁器、872の土師器羽釜が出土し、2層からは874のTK-217型式の甕、3層からは866の16世紀代の龍泉窯系青磁碗、875の細蓮弁紋が施された16世紀代の青磁、同じく15から16世紀に属する876の高台部、877の16世紀代の瀬戸美濃窯系陶器、878の17世紀代の肥前焼系陶器、879の17世紀中頃の備前播鉢が出土した。また、攪乱からは873の14世紀前半頃の常滑焼播鉢、867の13世紀前半頃の華南沿海窯系白磁碗、さらに、側溝からは、863の弥生時代第II様式の甕、864に示すTK-43型式に分類される蓋杯の蓋が出土した。

4-1層出土遺物（図162）

第1面を覆う包含層出土遺物から4点を抽出して図化した。880は15世紀代かとも思慮される土師

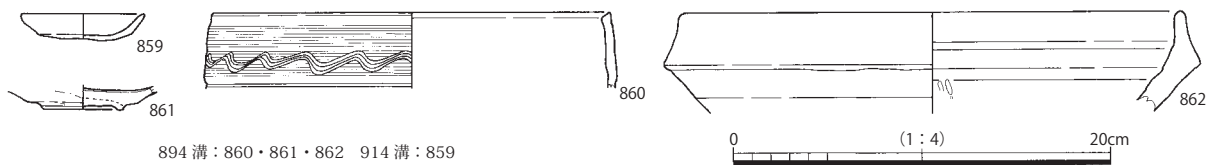


図160 第1面 894溝・耕作溝 出土遺物実測図

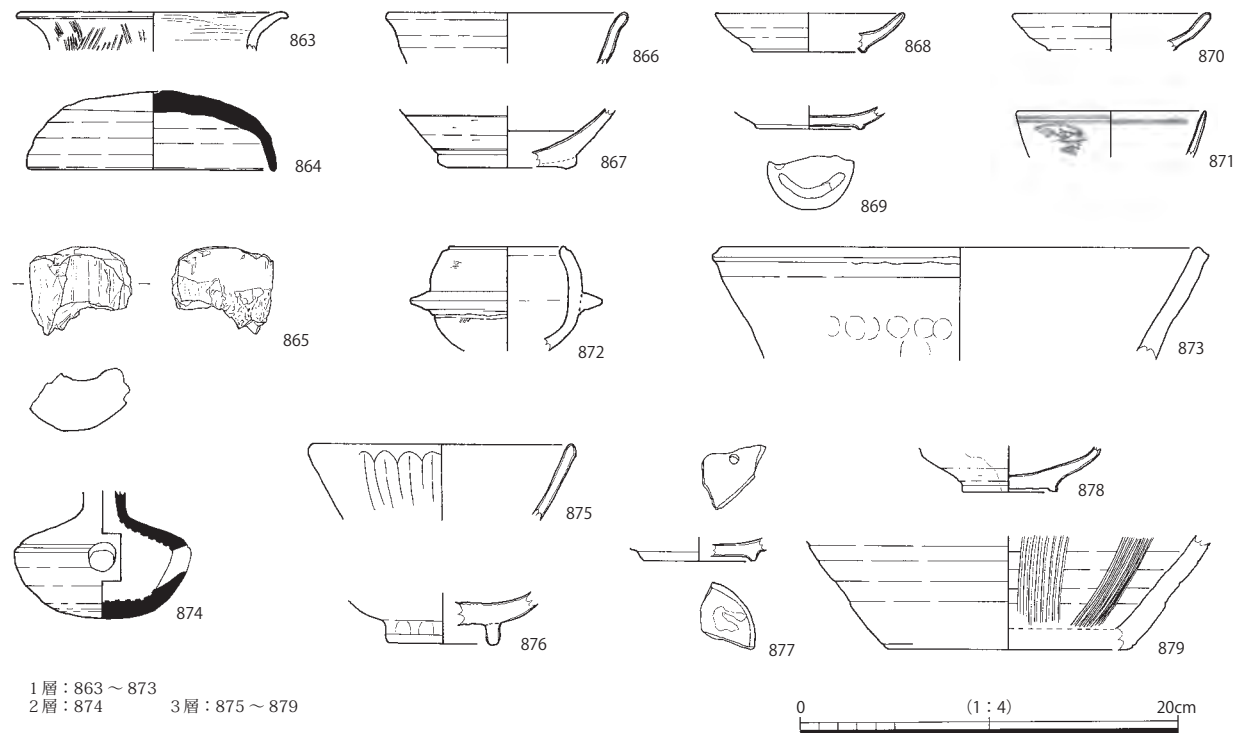


図161 1~3層 出土遺物実測図

器小皿、881 は 16 世紀代の龍泉窯系青磁細蓮弁紋碗、882 は瓦質の火舎で 15 世紀代の大和系の製品、883 は備前焼播鉢で 14 世紀後半の所産である。この中で最も新しいものは 881 の 16 世紀の青磁碗だが、図 159 下段に示すように、本層序に覆われる 894 溝から 17 世紀代の遺物が出土しているため、この時期を以て直ちに時期決定は行えず、第 2 面とその上位を覆う 3 層までの時間幅、すなわち、17

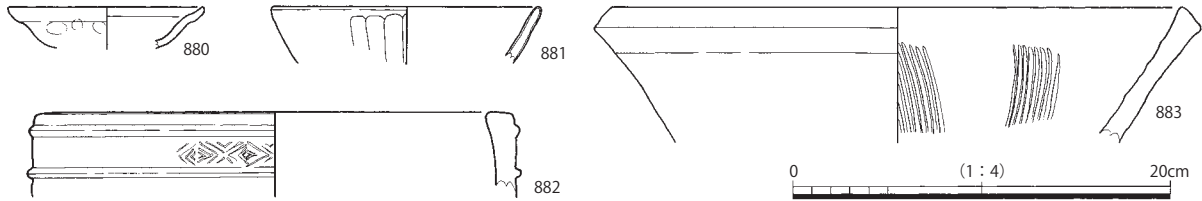


図 162 4-1 層 出土遺物実測図

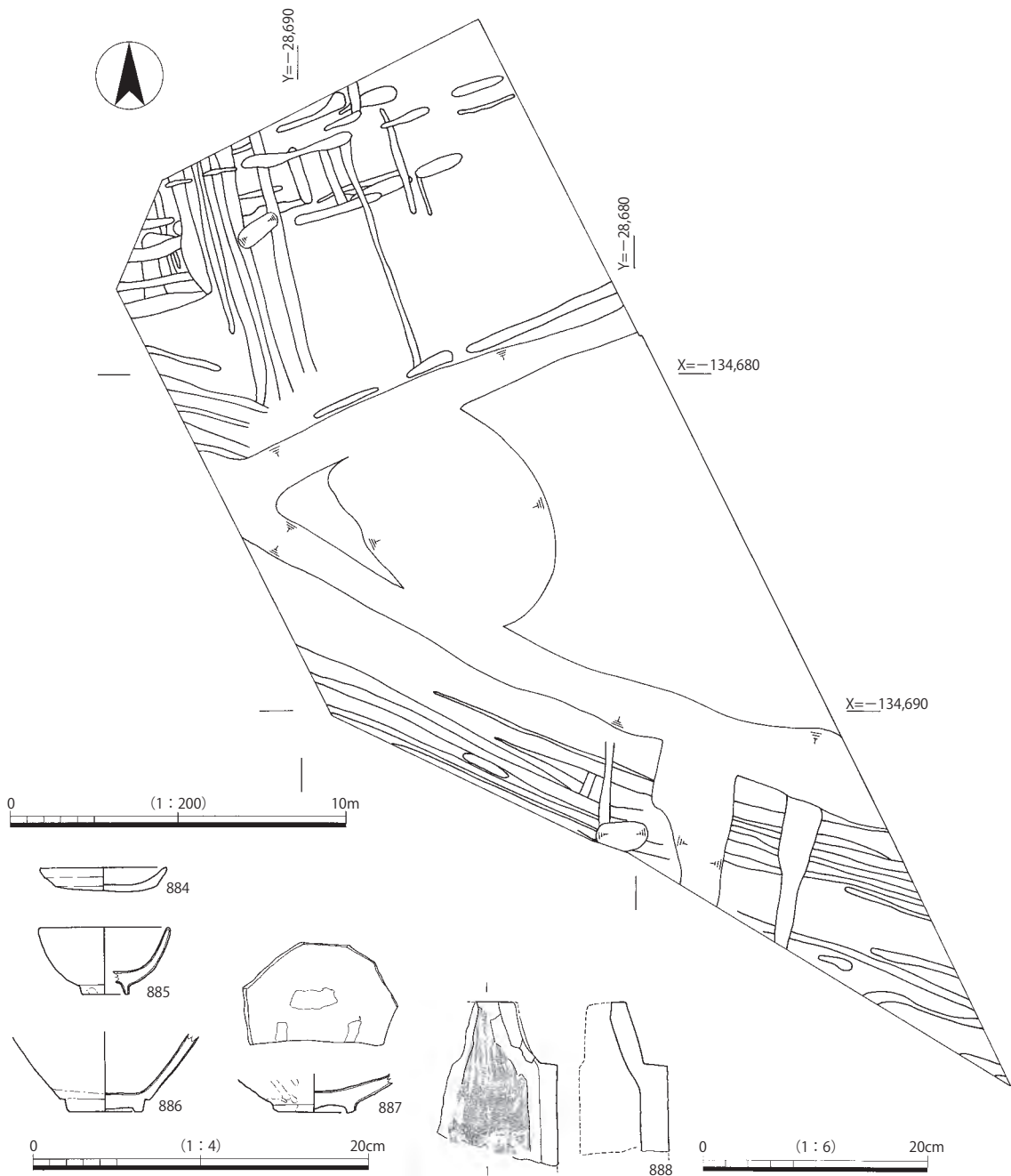


図 163 第 2 面 遺構全体図、及び耕作溝 出土遺物実測図

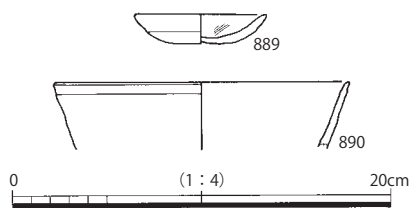


図 164 4-2層 出土遺物実測図

世紀中頃以降 18 世紀中頃以前の時間幅の中に 4 層と第 1 面の時期を設定しておきたい。

第 2 面

耕作溝 (図 163、図版 17)

調査区中央の基盤層が露呈した微高地を挟んだ北と南で耕作溝群を検出した。それらは、北部が三方向、南部が基盤層に沿う一方向を示し、うち幾条かから図 163 左下に示す遺物が出土した。884 は土師器の小皿、885 は肥前焼系磁器の碗で、形態や、圏線のみを描出する技法から 17 世紀中頃に位置づけられる。886 は瀬戸美濃窯系陶器の天目茶椀で、高台脇の切り回しがみられるため 16 世紀中葉以降となる。887 は肥前焼系陶器で、砂目が観察されるため 17 世紀前葉に位置づけられ、888 は丸瓦の玉縁部で成形技法からみて室町後期と思われる。以上は、884 が 948 耕作溝、それ以外が 945 耕作溝出土である。

当該遺構面の時期は、上記の遺物からみて、最も新しい 884 の指し示す 17 世紀中頃と考えられる。

4-2層出土遺物 (図 164)

上記の第 2 面を覆う包含層より土器などが出土し、そのうち 2 点を図 164 に図化した。889 は 17 世紀頃の土師器小皿、890 は 8 から 9 世紀の須恵器杯 B の口縁部破片である。

第 3 面

966・967 流路 (図 165・166)

調査区北側を北東から南西に流下して、両端は調査区外となり、途中北東側から合流する流路を 966 流路とした。確認される規模は、長さ 14.5 m、幅 1.5 から 6.0 m、深さ 0.5 から 1.0 m 前後となり、内部は砂礫からなる氾濫堆積層で充填されていた。

出土遺物には図 166 に示す土器などがある。これらのうち、966 流路からは 894 に示す T K-209 型式から 217 型式に分類される須恵器の甕、967 流路からは 892 に掲載する弥生時代時代第 II 様式の壺、北東側壁面の流路内堆積層中位からは 9 世紀後半に位置づけられる 893 の須恵器瓶子が出土し、この瓶子によって流路の年代が平安時代前期以降であることが判明した。

なお、調査区中央から南東の位置において、図 165 右上のように口縁を北に向けた T K-209 型式の須恵器の甕が横位置の状態出土した。土器棺の可能性を考慮し周囲を注意深く観察したが、掘方などは確認できず、また、内部の土壌を水洗したが骨や副葬品は検出されず、さらに、復元の結果、完形には戻せたが、蓋と考えられる別の土器片は存在せず、甕自体にも焼成後の穿孔や口縁部の打ち欠きが見られなかった。このため、棺とする根拠は皆無で、どのような意図を以て置かれたのかは不明である。

第 4 面

970 土坑 (図 167)

調査区北東壁際のほぼ中央で検出され、大半は調査区外となる。北端は 969 溝により欠失し、現況での規模は長軸、短軸共に 1.7 m 以上、深さ 0.2 m を測る。埋土は 2 層に細分され、遺物は出土しなかった。

重複関係から 969 溝より古いのは確実だが、双方とも時期を知る資料がないため特定はできない。

971 土坑 (図 167)

調査区南東部で検出された。南部は攪乱により失われるが、南東から北東に長軸を持ち、長さ 4.5 m 以上、幅 1.5 m 以上、深さ 0.4 m となる。埋土はほぼ水平に堆積する 3 層からなり、そこから 895 に図示する甕などが出土した。

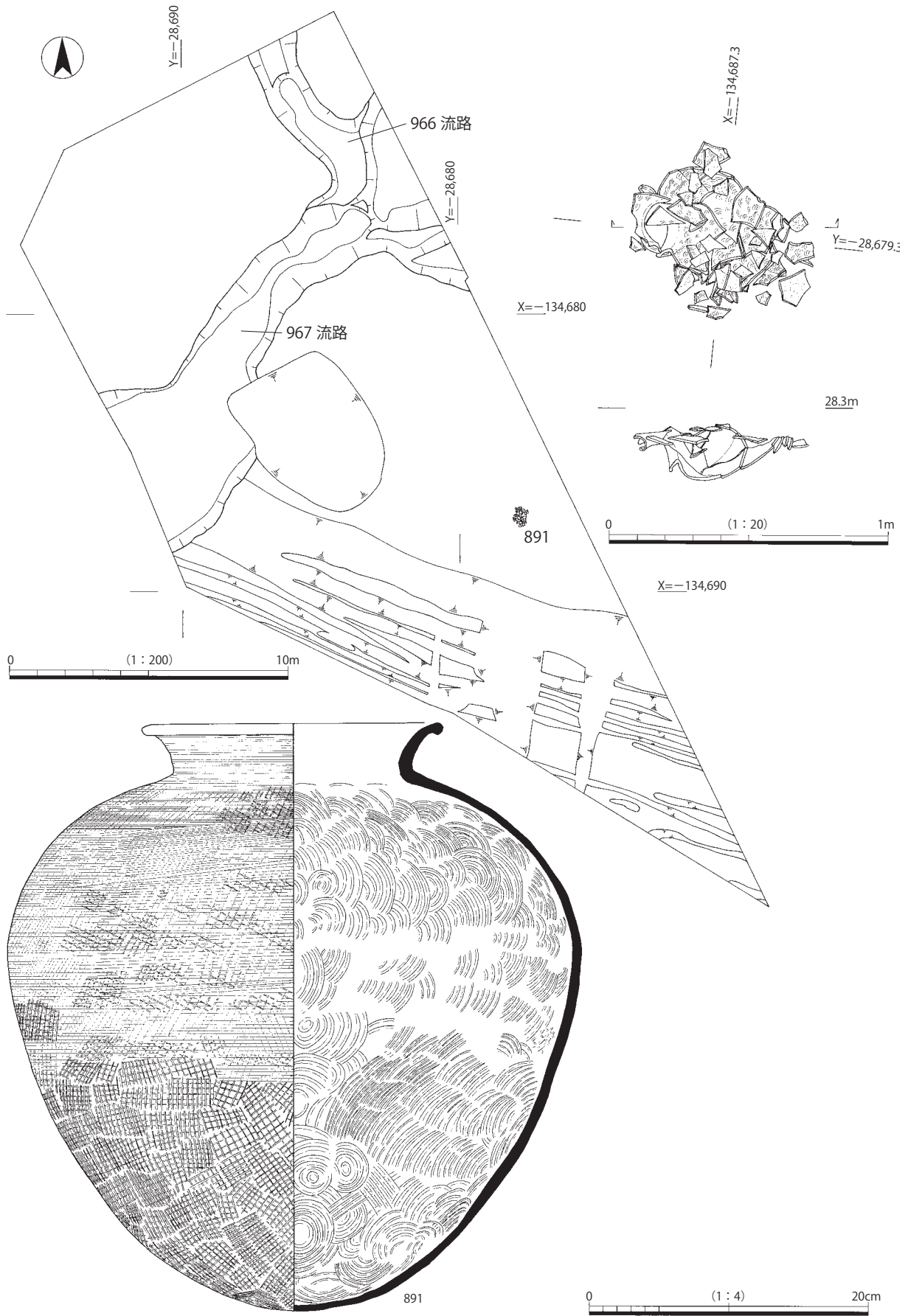


图 165 第 3 面 遺構全体図、土器出土状況、及び出土遺物実測図

この土器からみて遺構の時期は、6世紀から7世紀代にかけてと思慮される。

972 土坑 (図 167)

上記2基の土坑に挟まれるような位置で検出され、平面は楕円形を呈する。規模は長径 0.9 m、短径 0.7 m、深さ 0.2 m弱を測り、埋土は単一層となる。そこに遺物は含まれていないため時期は不明である。

968 溝 (図 167)

調査区のほぼ中央を北東から南西方向に流下する。両端は攪乱と調査区外になるため知れないが、現況での規模は、長さ 12.5 m、幅 0.3 m前後、深度は幅に比して深く 0.3 mを測り、南西側については、既往の 04-1 調査第 1-2 a 面で検出された溝と接続することで、総延長 29 mに達する。埋土は 2 層に細分され、時期の特定できる遺物は含まれていなかった。よって、遺構の時期は不明である。

969 溝 (図 167)

上記 968 溝の南東約 1.5 mの位置で、それと相似形をなすような形で検出された。現況では長さ 6.0 m、幅 0.4 から 0.7 m、深さ 0.3 m前後を測る。この溝も 04-1 調査で延長部が検出され、それを含めた長さは約 18 mに達する。埋土は 2 層に分かれ、遺物はなかった。よって時期は不明である。

5 層出土遺物 (図 167)

896 の須恵器の甕などが第 4 面を覆う包含層から出土した。形態からみて 7 世紀前半代と思われる。

第 5 面

976・977 溝 (図 168、図版 18)

調査区のほぼ中央で検出され、基盤層の縁辺に沿うようにして北西から南東方向にのびる。攪乱により分断されるが、本来は同一の溝であったと考えられるため 1 条として報告する。規模は、長さ 30 m 以上、幅 0.2 から 0.7 m、深さ 0.2 m前後を測り、遺物は出土しなかった。そのため時期は不明である。

978 溝 (図 168、図版 18)

調査区南東際で一部のみが検出された。北東から南西にのび、規模は、長さ 1.5 m以上、幅 0.7 m、深さ 0.2 mを測る。南西側は 04-1 調査の第 6-1 a 面で確認された溝に接続し、東から西に 28 m 以上にわたって流下して、さらに西にのびる。時期は、埋土中に遺物が含まれていないため不明である。

畦畔 (図 168、図版 18)

調査区南西隅において、Y 字形を呈する形で 3 条検出し、これを 04-1 調査第 6-1 a 面で検出された畦畔と比較したところ、互いがつながり寸胴形を呈する水田区画を形作ることが判明した。

遺物が出土していないため時期は不明だが、これを覆う 6 a 層からの出土遺物を参考としたい。

6 a 層出土遺物 (図 168)

第 5 面を覆う 6 a 層より 897 の弥生時代第 II 様式の鉢が出土した。これにより、第 5 面の時期が弥生時代中期初頭に位置づけられ、これを 04-1 調査と比較しても時期的に整合している。

第 6 面

979 土坑 (図 169、図版 18)

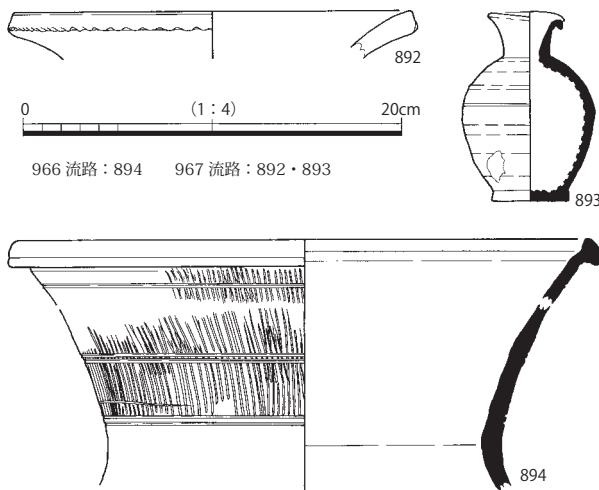


図 166 第 3 面 966・967 流路 出土遺物実測図

調査区北東の基盤層から氾濫原に移行する傾斜

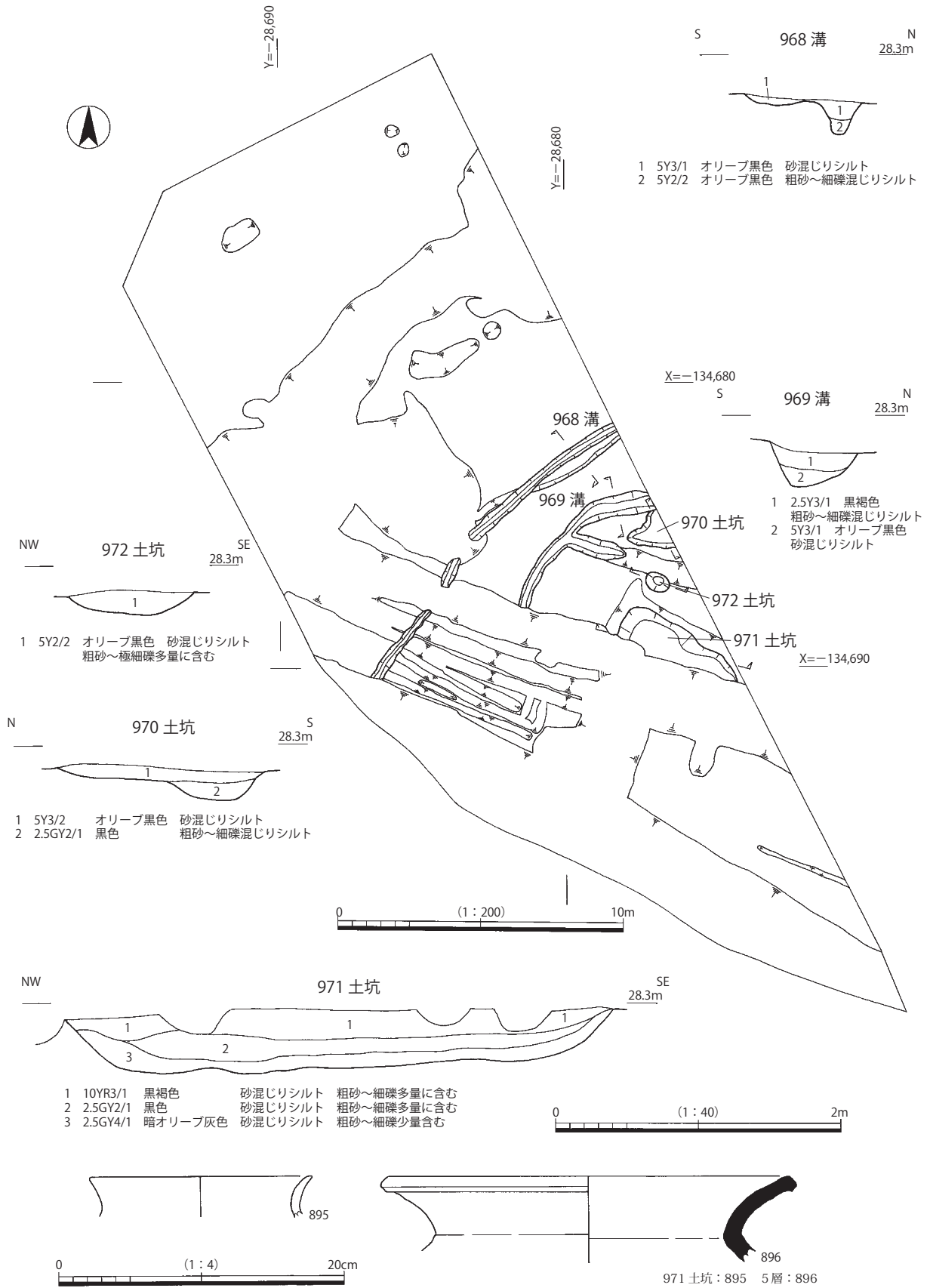


図 167 第 4 面 遺構全体図、970～972 土坑、968・969 溝 断面、及び 971 土坑・5 層出土遺物実測図

変換点において、これと平行して北西から南東に長軸を楕円形に開削されている。規模は、長径 2.2 m、短径 1.0 m、深さ 0.1 m で、埋土は 2 層に分けられ、そこから 898 に図示する弥生時代の土器が出土した。土器は形態や紋様からみて第Ⅱ様式に位置づけられ、よって、この土坑が弥生時代中期初頭のものと考えられることとなる。

7-1 層出土遺物 (図 170・182)

基盤層裾部を中心として第 6 面を覆う包含層がみられ、図 170 や 182 の弥生土器や石器が出土した。899 は櫛描紋と円形竹管紋を併用した第Ⅱ様式の壺、900 は第Ⅰ様式の壺、901 は第Ⅱ様式の甕蓋である。石器には図 182 - 927 のサヌカイト製不定形刃器があり、コーングロスのような滑沢はないが、打製石庖丁のようにもみえる。土器からみて包含層の時期は、弥生時代中期初頭と考えられる。

第 7 面

980 流路 (図 171)

調査部南壁際のほぼ中央で、基盤層縁辺部をえぐるような形で検出された。既往の 04 - 1 調査の成

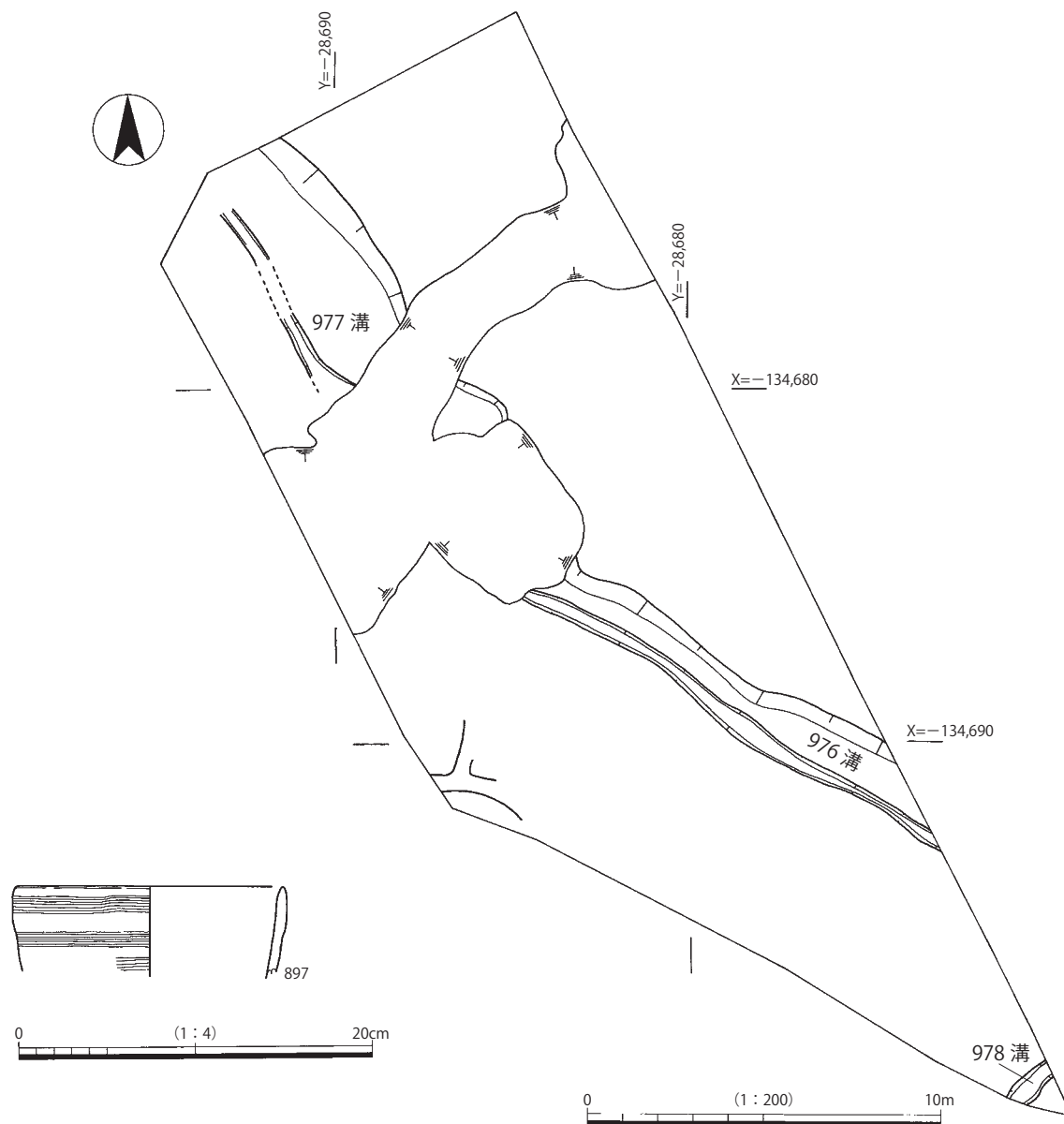


図 168 第 5 面 遺構全体図、及び 5 層 出土遺物実測図

果と比較したところ、第8-1 a面で検出された196流路が北側に大きく蛇行する部分に相当することが判明した。時期は、出土遺物がなく、他の遺構とも重複していないため不明である。

7-2層出土遺物 (図172・182)

流路上位と基盤層縁辺部に包含層が堆積し、そこから出土した土器を図172、石器を図182に掲載した。902は瘤状隆起を作出する第I様式の甕、903から905は第II様式の甕で、うち、904は紋様や調整の特徴から大和型に分類される。これらの中では第II様式のもの新しいため、これが示す弥生時代中期初頭が包含層の時期となり、さらに、980流路の時期もこの段階以前とみなされる。石器に

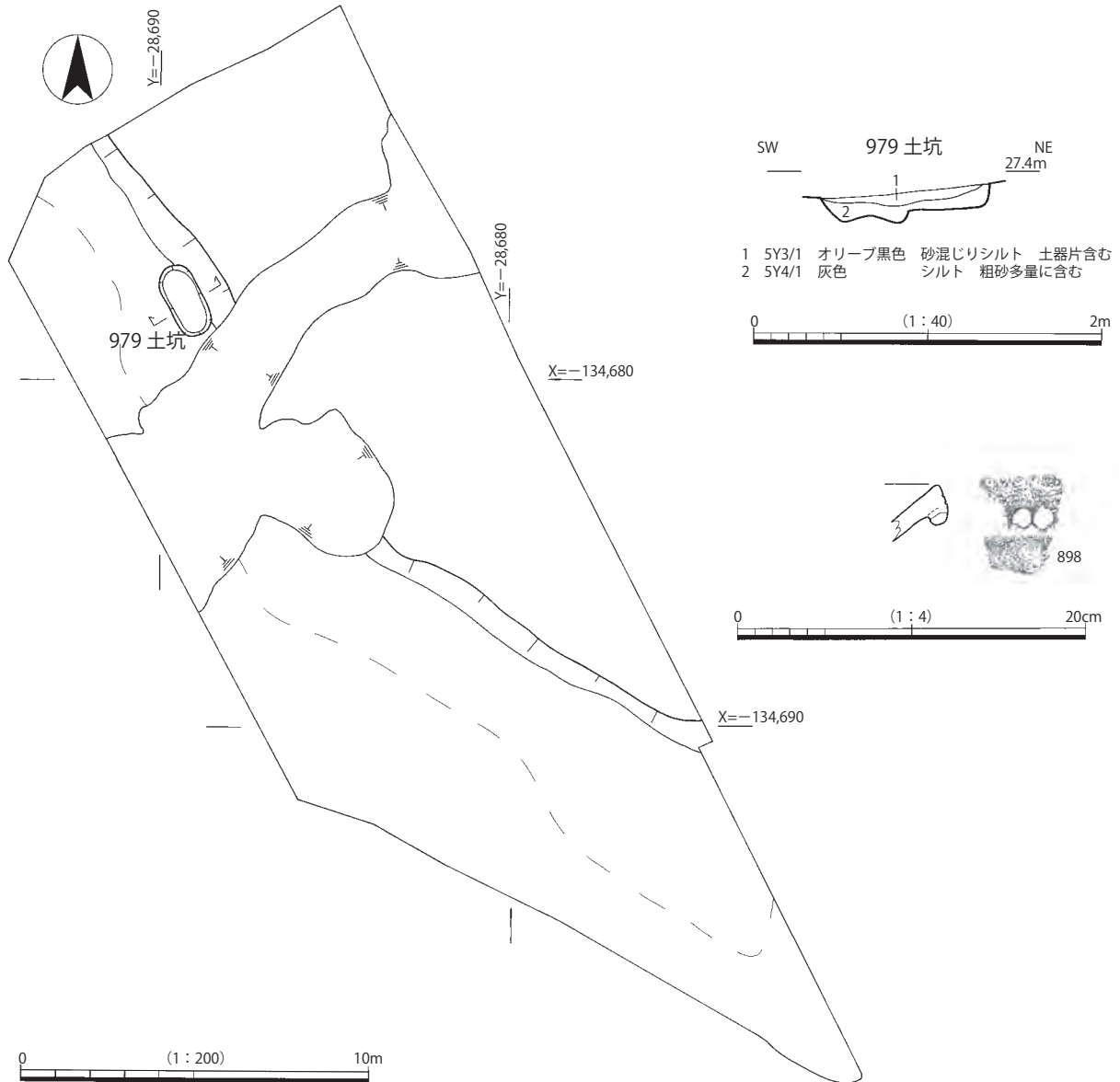


図169 第6面 遺構全体図、979土坑 断面、及び出土遺物実測図

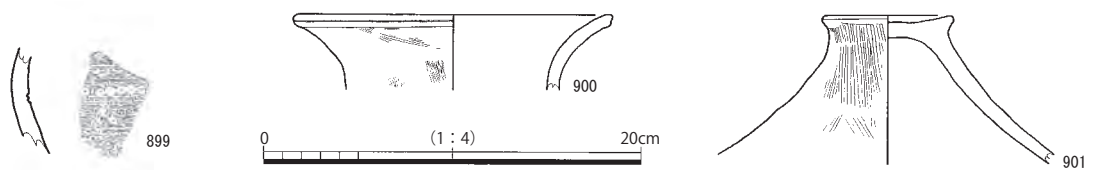


図170 7-1層 出土遺物実測図

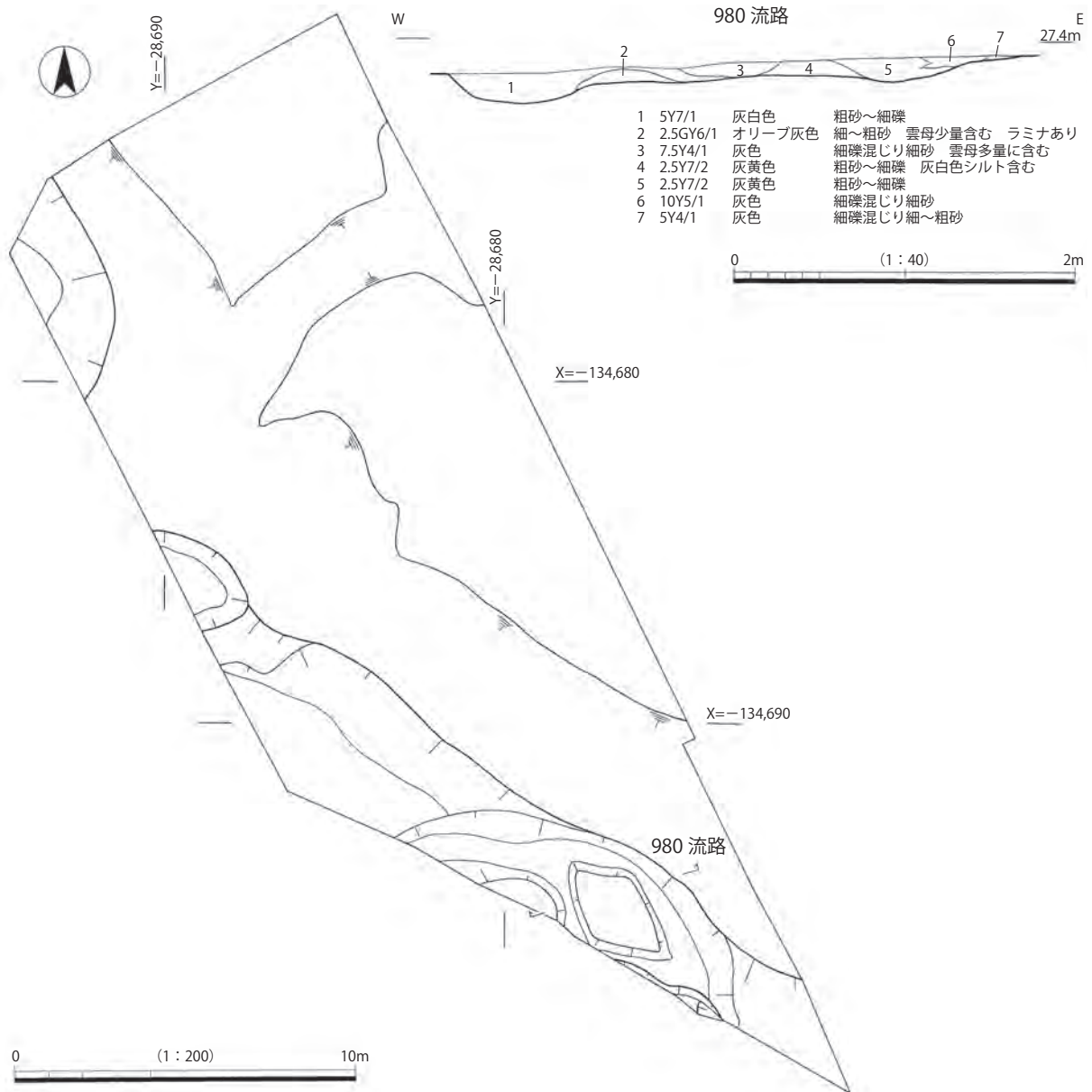


図 171 第 7 面 遺構全体図、及び 980 流路断面図



図 172 7-2層 出土遺物実測図

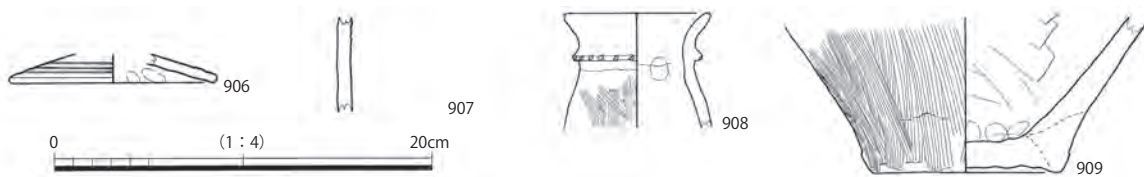


図 173 7-3層 出土遺物実測図

は 928 に示すサヌカイト製の縦形の石匙があるが、これは縄紋時代の遺物が混入したものである。

7-3層出土遺物 (図 173)

基盤層縁辺部を中心として第7面と第8-1面との間に遺物包含層が堆積し、そこから出土した遺物のうち、図化可能なものを図 173 に掲げた。これらは、形態や紋様から、906 が第 I 様式の壺蓋、907 が第 II 様式の壺、908 が第 I 様式新段階のミニチュアの壺、909 が第 II 様式の甕の底部で、これらの土器から堆積の時期が弥生時代中期初頭であることが判明する。

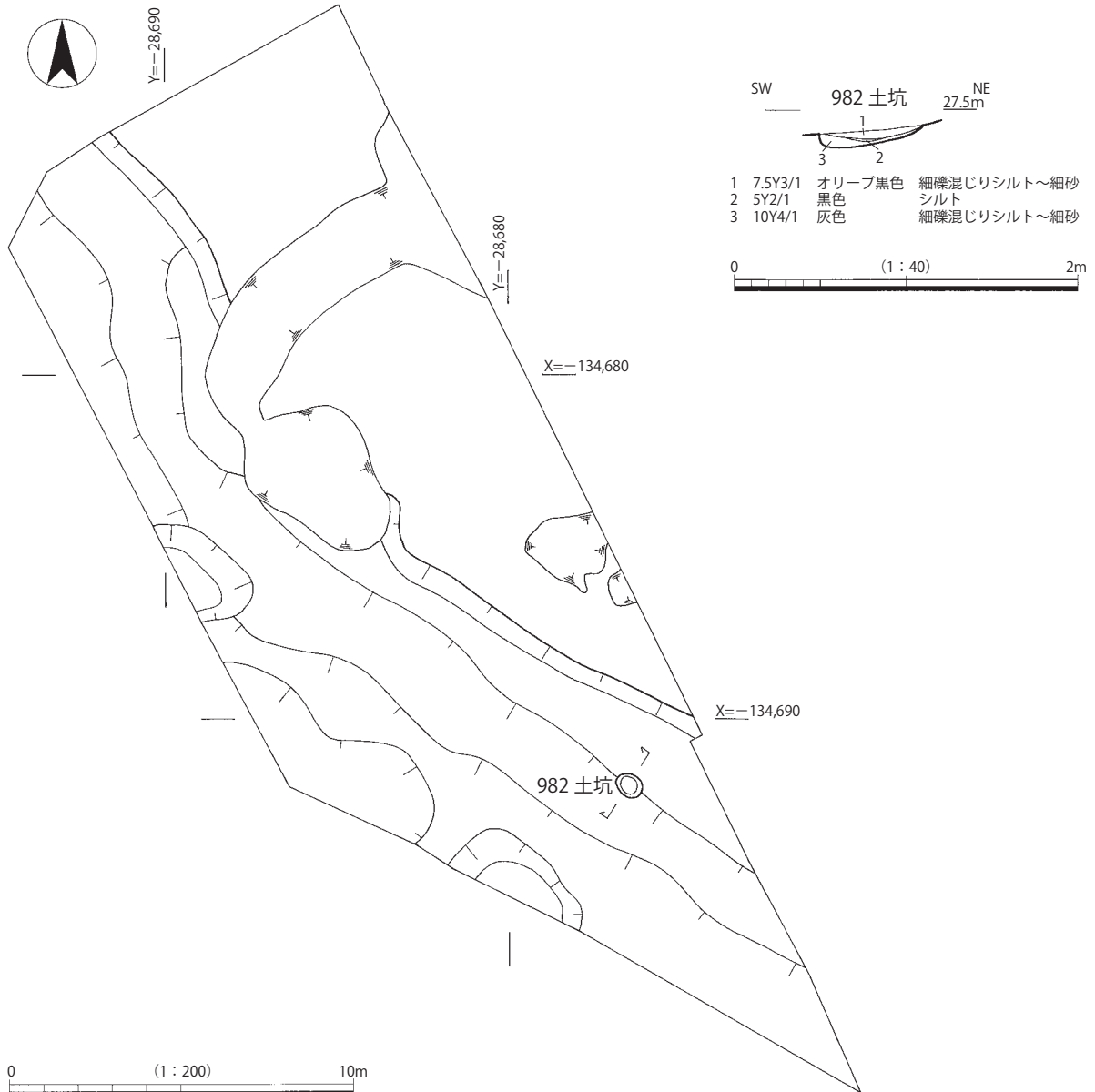


図 174 第 8-1 面 遺構全体図、及び 982 土坑 断面図

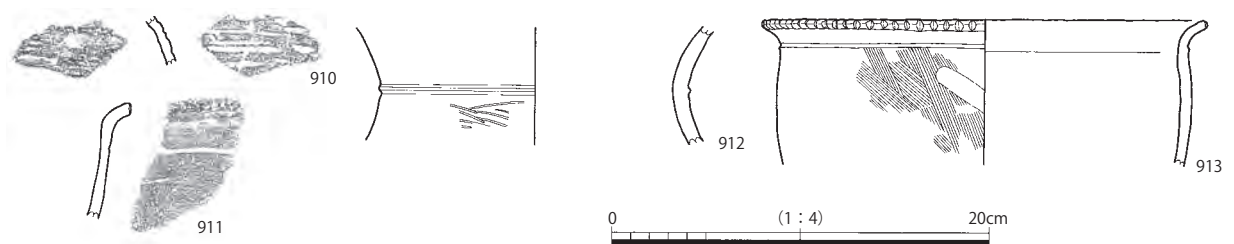


図 175 8-1 層 出土遺物実測図

第8-1面

982土坑 (図174)

調査区南東部の傾斜変換点において検出された。平面は北西に頂部を持つ倒卵形を呈し、規模は長径0.7 m、短径0.6 m、深0.1 mを測る。埋土は2層に分けられ、ここから遺物は出土していない。

8-1層出土遺物 (図175・182)

基盤層周辺から910から913に示す土器や、図182-926のサヌカイト製石錐が出土した。910

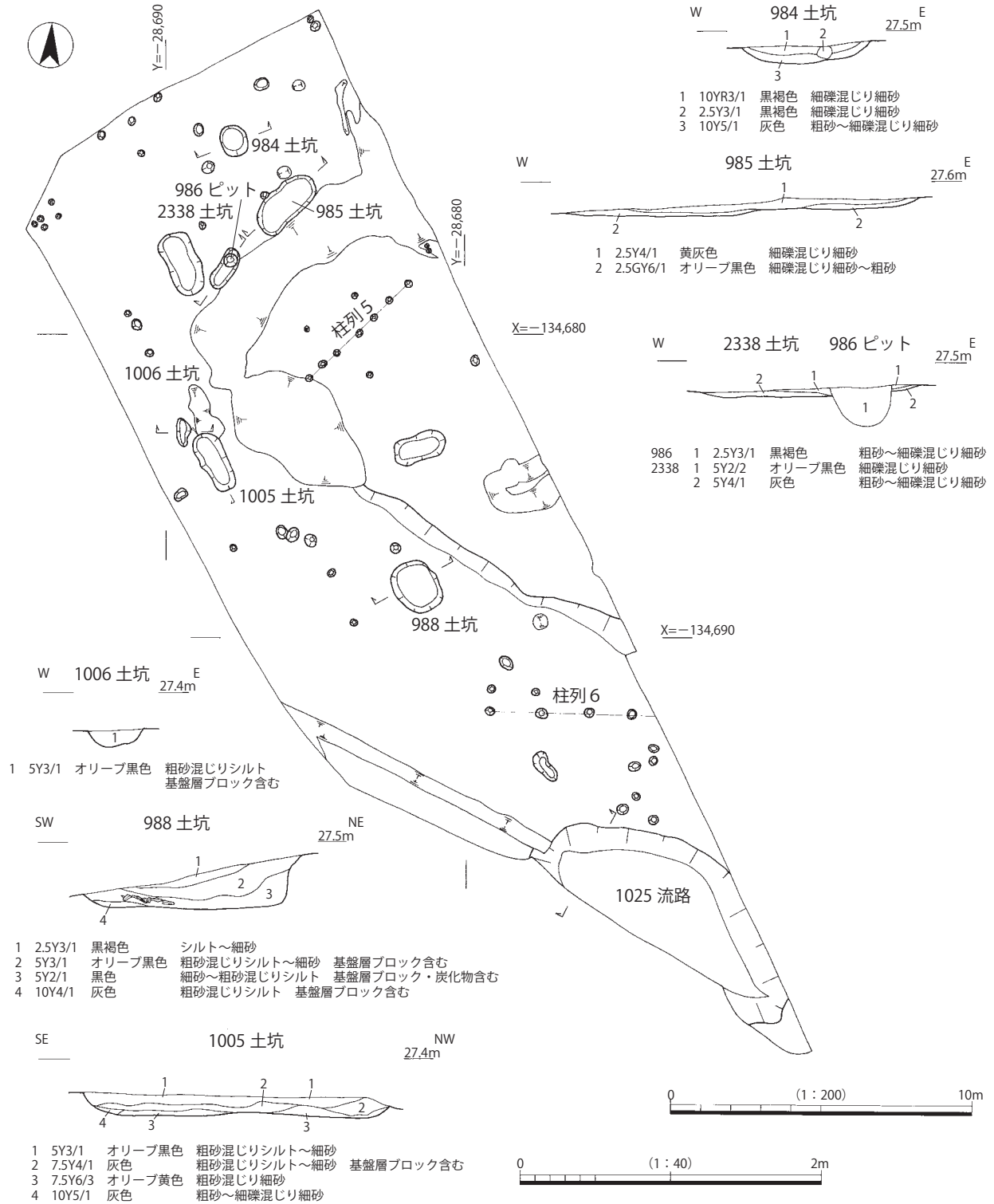


図176 第8-2面 遺構全体図、及び984・985・988・1005・1006・2338土坑・986ピット 断面図

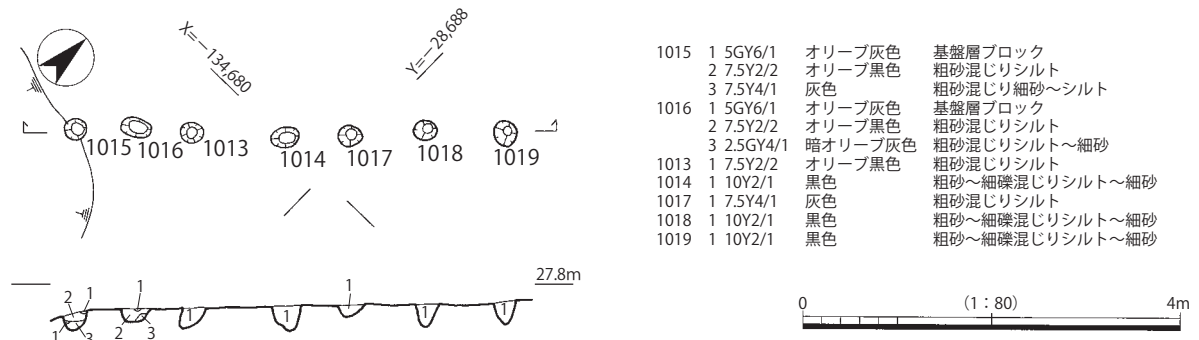


図 177 第 8-2 面 杭列 5 平・断面図

は縄紋時代晩期と思しき体部片、911 は弥生時代第 I 様式の甕、912 は同じく壺、913 も同時期の甕で、これらのうち弥生土器は沈線紋の数や貼付凸帯紋からみて、前期新段階までに位置づけられる。

第 8-2 面

柱列 5 (図 176・177、図版 19)

調査区中央から北東で検出され、その位置は基盤層からなる微高地の北西辺にも相当する。7 基の柱穴が北東から南西に向かって 0.6 から 1.0 m の柱間寸法を保ちながらまっすぐ並ぶため柱列とし、総延長は 4.6 m、深さ 0.2 m 前後を測る。埋土中から遺物が出土していないため、時期は不明である。

柱列 6 (図 176・178、図版 19)

調査区南部で 4 基以上の柱穴が東西方向に一直線に並ぶことから柱列と認識した。その長さは 5.5 m 以上、柱間寸法は 1.5 から 1.7 m で、深さは傾斜面に合わせるかの状態で 0.05 m 弱を測るが、深度が極めて浅いため削平されたとも考えられる。各柱穴から遺物が出土しておらず、時期は不明である。

984 土坑 (図 176、図版 19)

調査区北部で検出され、楕円形を呈す。規模は、長径 1.0 m、短径 0.9 m、深さ 0.1 m を測り、埋土は図のように 3 層に細分される、特徴を持つ遺物が出土していないため、詳細な時期は知り得ない。

985 土坑 (図 176、図版 19)

調査区北部で検出され、平面は北東から南西に軸を持つ長楕円形を呈す。規模は長径 2.3 m、短径 1.1 m、深さ 0.05 m で、埋土は 2 層に細分される。遺物がほとんど出土しておらず、時期は不明である。

988 土坑 (図 176・179、図版 19・23)

調査区中央からやや南で検出され、他と同様に基盤層の周縁部に設けられる。平面は北西から南東にやや長い楕円形を呈し、規模は、長径 1.8 m、短径 1.5 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は 3 層に細分され、下位から図 179-915 の壺、916 から 921 に示す甕などの弥生土器がまとまって出土した。

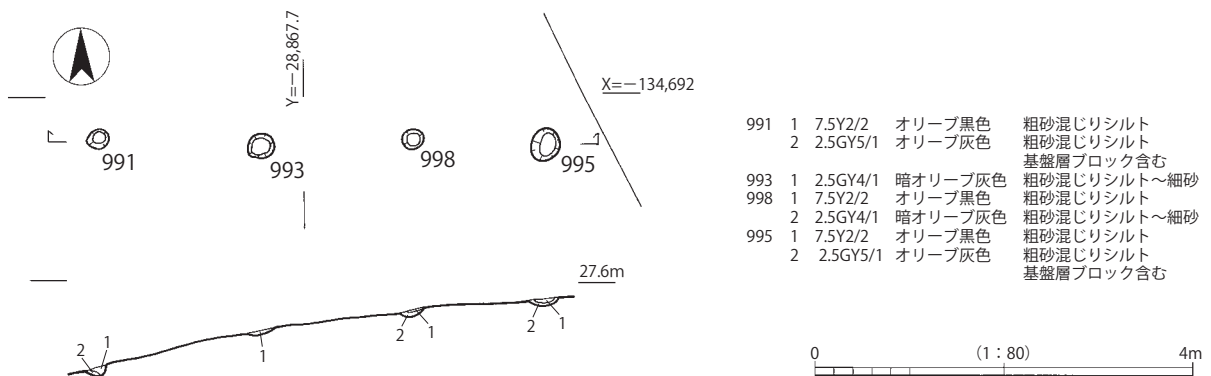


図 178 第 8-2 面 柱列 6 平・断面図

遺構の時期は、土器が第 I 様式新段階の特徴を持つため、弥生時代前期後半と考えられる。

1005 土坑 (図 176、図版 19)

調査区西半のほぼ中央で検出され、平面は北西から南東に軸を持つ長楕円形を呈す。規模は長径 2.0 m、短径 1.0 m、深さ 0.1 m で、埋土は 4 層に分け得るが、遺物がみられないため時期は不明である。

1006 土坑 (図 176、図版 19)

1005 土坑の北西でこれに接するようにして検出された。平面は南北に長い不整形をなし、規模は、長径 0.9 m、短径 0.4 m 弱、深さ 0.1 m を測る。埋土は 1 層で、遺物を含まないため時期は特定できない。

2338 土坑 (図 176、図版 19)

調査区北部で検出され、平面は北東から南西に細長い楕円形を呈す。規模は、長径 1.5 m、幅 0.5 m、深さ 0.05 m で、埋土は 2 層に細分される。遺物が出土していないため時期は特定できないが、この遺構を掘り込む 986 ピットから 913 に示す弥生時代前期の甕が出土したため、これよりは古くなる。

1025 流路 (図 176・180、図版 19)

調査区南東隅で検出され、以南は 04 - 1 調査の第 8 - 2 a 面で検出された 196 流路につながる。確認される長さは 10.0 m 以上、幅 3.5 m 以上、深さ 1.0 m で、堆積層は図 180 のような状態であった。

溢流堆積層から、特徴を持つ遺物が出土していないため、詳細な時期を知ることはできない。

8 - 2 層出土遺物 (図 181)

基盤層周辺の傾斜面などから若干の遺物を採取し、図化可能なものを図 181 に掲載した。922 は円環状の土製品で、近辺では寝屋川市に所在する高宮八丁遺跡での類例がある。923 と 924 は壺、925 は甕で、形態や紋様から第 I 様式新段階に位置づけられ、さらに、これらの土器と、当該面の遺構出土遺物とを勘案することによって、第 8 - 2 面の時期を弥生時代前期後半とみなすことが可能となる。

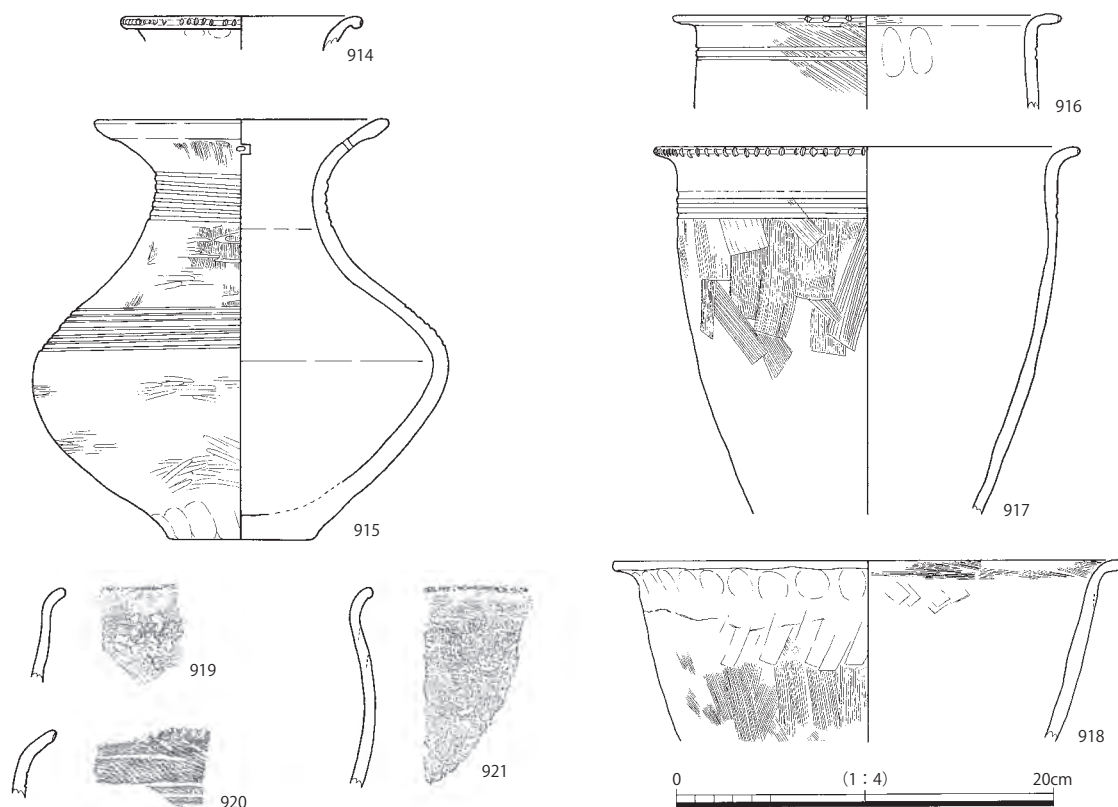


図 179 第 8 - 2 面 988 土坑・986 ピット 出土遺物実測図

石器 (図 182、図版 27)

いずれもサヌカイトを用材とし、926 は 8 - 1 層出土の石錐、927 は 7 - 1 層出土の不定形刃器、928 は 7 - 2 層出土の縦形の石匙で、形態からみて縄紋時代中期の船元式に伴う可能性がある。

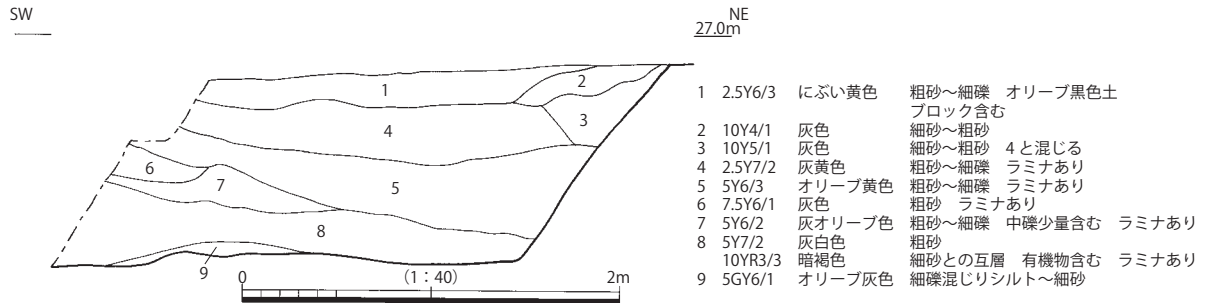


図 180 第 8 - 2 面 1025 流路 断面図

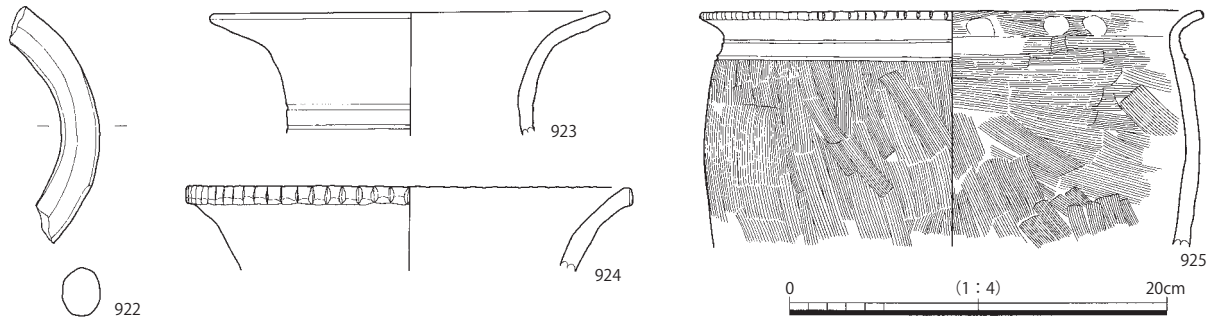


図 181 8 - 2 層 出土遺物実測図

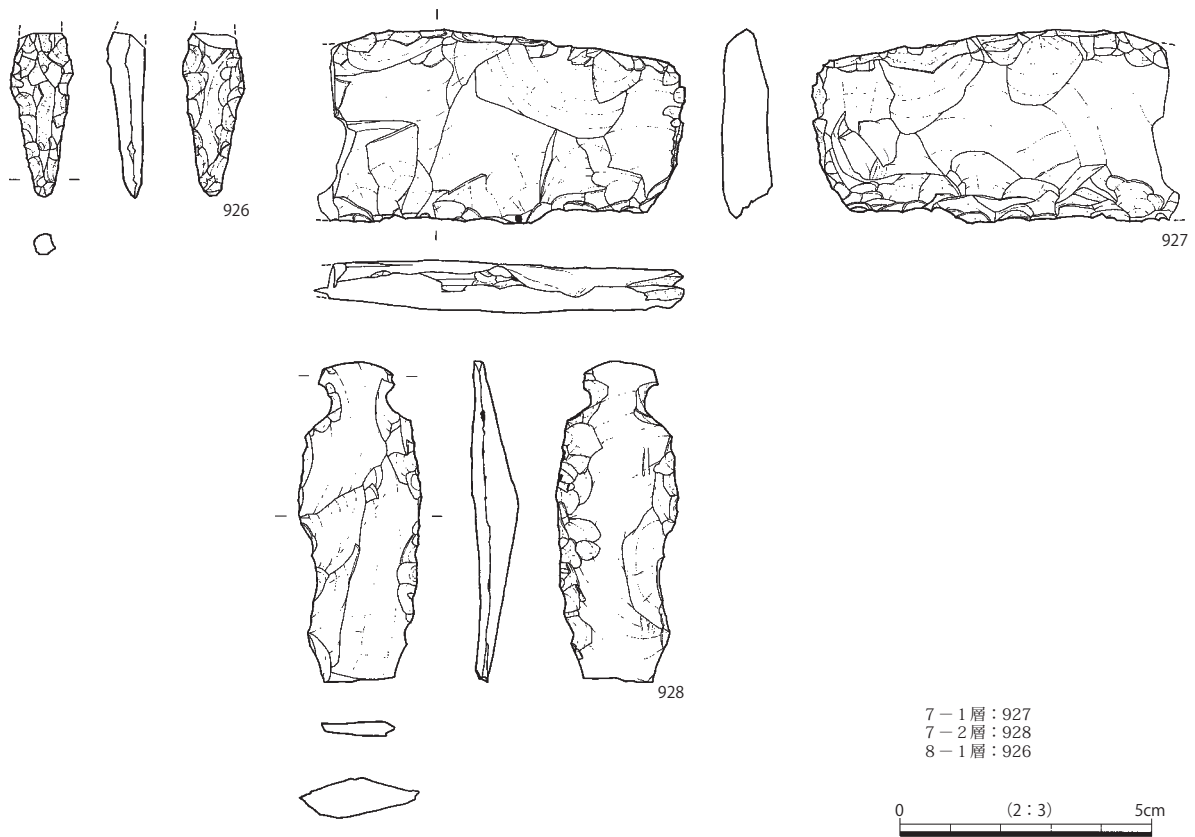


図 182 石器実測図

第4節 小結

06－2調査の報告をこれまでに述べた。ここではその中で得られた新知見や顧慮しておかなければならない点について古い時代よりまとめておきたい。

まず、旧石器時代では終末期に属するサヌカイトの細石刃核と、細石刃の可能性を持つ縦長の小剥片が注目される。双方とも、後世の遺構や包含層から出土したため原位置を保ってはいないが、周辺で細石刃核の出土が確認されているのは、南河内の羽曳野市城山遺跡と青山遺跡でサヌカイトの例が、誉田白鳥遺跡でチャートの例が知られているのみであった。今回の例は大阪府内で4例目となるが、西日本全体に視野を広げても非常に例が少なく、新例を付け加えたという点で重要というのみならず、用材や剥片採取素材成形技術などの系譜をとらまえる上においても非常に高い資料的価値を持つ。

縄紋時代では、遺物量は多いとはいえないが、中期前半の船元式から晩期末葉の長原式までの遺物がみられる。この中でも中期末葉から後期の北白川C式段階には、調査地南東側に遺物の供給源が存在するかの状態で遺物が出土した。04－1調査でも晩期終末のそれが存在する可能性が指摘されたことに続いて、この段階にも集落が営まれた可能性が高く、今後も充分注意する必要がある。

また、晩期の土器の胎土に注目した場合には、生駒山西麓産胎土を持つ土器の割合が非常に高いことが特徴的といえる。この状況は、河内湖東縁部の集落との間に密接な交流があったことをうかがわせる事象であると共に、当地域への弥生文化流入経路をたどる上において示唆的である。

弥生時代前期では、流路から新段階に属する大量の土器が得られたことが第一にあげられる。このほか、壺の中に段を形作るものや、赤彩が施されたものが含まれており、この地においても前期中段階の後半には稲作文化を獲得していたことを証明する資料として刮目に値する。なお、壺には、底部が生焼で、特に内面にその様相が顕著な資料が散見され、ここに当遺跡の特徴をみい出せる。また、石棒の存在は、弥生文化を受容しながらも、縄紋文化的精神を継承する二面性を表徴する形代として興味深い。

さらに、当該地域では初出となる中期前葉初頭の本製農具などの貯蔵穴、後期には灌漑用水路を確保するためのシガラミなど、水稲耕作用具と技術の具体相と発展を垣間見る遺構や遺物もみられた。

後期では、流路の脇から出土した動物形土製品が注目される。類例は東海から近畿、山陽、四国、北部九州の広い地域で確認され、弥生時代に限っても、その数は20余例に達する。用途については、犬や猪が多産であることに関連付け、豊穰を託したとの見解も見られるが詳らかではない。

古墳時代では、前期の資料が皆無なのが一つの特徴といえる。中期では後半段階の鍛冶工房を付随させる竪穴建物群の存在が特筆され、近隣に存在する森遺跡との間で、製鉄を中心とした関連性を追究することが今後の検討課題となろう。後期では掘立柱建物の柱穴掘方から出土した子持勾玉が注目され、時期の不明確な遺物に対し、須恵器から一定点を付与できたという点において評価される。

奈良・平安時代では、須恵器や土師器のほか、緑釉・灰釉陶器の小片などの遺物が微量のみで、明確な遺構は検出されなかった。当時の状況が耕作地など、集落周辺に位置していたことが窺えよう。

鎌倉から室町時代では、耕作溝や包含層から遺物が出土したが、この中には各種日常雑器に混じって、青磁の香炉や、その蓋とも考えられる透穴を穿つ製品など、一般集落にはみられない瀟洒な品物が含まれていることに注意しなければならず、北側に現在もお堀割などの姿を明瞭にとどめている私部城の存在と共に、これらを所有していたであろう有力在地層の姿を暗示させる。

以上、今回の06－2調査で得られた調査所見を列挙して、小結としておきたい

第5章 私部南遺跡 07－1 の調査

第1節 基本層序

調査地は、生駒山地から派生する開析谷と、開析谷内を流れる河川（北川・前川）による土砂の堆積作用によって地層と地形が形成されている。本章では、基本層序を記述するにあたって、図 186 に示すように調査地内を南東から北西に延びる開析谷を谷 1、南から延びて谷 1 に取り付く開析谷を谷 2、前川が流れる開析谷を谷 3、京阪電車交野線付近に位置する開析谷を谷 4 として便宜上呼称し記述を行う。また、調査区外に位置し北川が流れる位置にも小規模な開析谷が存在すると考えられ、図には表示していないが、これを谷 5 とする。

地層の観察および層序においては、井上(2002・2007b)に示された考えに基づき行った。地層のうち、古土壌・作土を a 層、母材となる自然堆積層を b 層としている。調査区の大部分では、a 層の連続堆積で上位層からの土壌化作用や、耕作に伴う攪拌が下位層まで及んでおり、下位層の本来の地表面は失われている。

遺構検出面である遺構面の呼称については、○層の上面を第○面としている。

また、基本層序の記述にあたっては、調査対象地北側に位置する調査地の北壁を使って調査対象地の南東から北西方向への地層観察図を作成した図面を基に行った。その際に、調査対象地南側の南壁や橋脚部、調整池部分の地層も併せて、検討を行った。

以下、谷の埋没過程と平坦面の地層について概観する。

谷内では古墳時代の古土壌（4 a 層）の下層に、谷部堆積層とした自然堆積層と古土壌の累重がみられる。その内の最上層で、かつ 4 a 層直下には暗色化の弱い土壌層がみられる。層中からは、出土場所も限られてはいるが、縄紋時代中期から晩期の土器片が若干出土している。

その下層からは、遺物が出土していない。

弥生時代の古土壌としている 5 a 層は、22－1・2 区と私部南遺跡 06－1 で検出した旧流路内でみられる。5 a 層は複数に分層でき、各々の上面で弥生時代中期の土器が出土する小規模な流路や、弥生時代前期の土器が出土する流路などを検出している。なお、この旧流路は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての自然堆積層で埋没し、微高地化している。また、5 a 層は旧流路以外ではみられないが、周辺で当該期の遺構や遺物を検出していることから、谷内および平坦面では上位層である 4 a 層の土壌化により、5 a 層は取り込まれてしまったと考えられる。

3 a 層は、基本的に中世段階の作土で、4 a 層及びその下位層と 3 a 層の形成段階に堆積した自然堆積層を母材とする。3 a 層は、谷内では 1 m 前後を測る厚さがみられるが、平坦面においては非常に薄く 10 cm 前後である。これは開析谷内に堆積した自然堆積層が、谷の外側である平坦面にまで及ばないことが一因であり、また耕作面積を広げるため平坦面の地層を削り、谷内へ盛ったためでもあろう。このように厚く堆積した 3 a 層は、谷 1・2・3 内でみられ層中に粗砂から極粗砂粒を多く含むのが特徴である。出土遺物から 3 a 層は、9 世紀から 10 世紀の遺物も含まれるが 12 世紀を中心とし、16 世紀後半頃までの時期に考えられる。なお、平坦面部分では当該時期の掘立柱建物を検出しており、耕作域では作土、居住域では古土壌として捉えることができる。

谷1の中央部分では、3 a層の上層に厚さ20 cmから10 cmの2 b層とする自然堆積層がみられる。

層中には、攪拌は弱いものの作土化した層もみられる。この洪水堆積層に対応する層が、谷1北西部分や谷3では2 mを超える層厚となっている。この時期、谷5・3内を流れる北川と前川の土砂供給作用が増大したためであろう。なお、谷2と谷1の南東部分には、この層に対応する自然堆積層はごく薄くか、踏込みの中にしか確認できず、当該部分には河川からの堆積物が及んでいなかったことが窺える。

以上の点から谷1・2・3は、11世紀頃までゆっくりと埋没が進み、12世紀頃から河川や谷伝いの堆積物の流入の増加と、その作土化を繰り返しながら埋没を加速。やがて17世紀後半以降になると、谷3・5の中を流れる河川からの土砂供給はさらに拡大し、河川の天井川化と自然堤防・人口堤防が成立すると共に、吐き出された土砂は、谷1の北西側を埋没させたと考えられる。その結果、谷1の南東側は取り残され、谷の名残を留める暗部となったと考えられる。

このような谷に対し、平坦面部分は、大きく古墳時代中期から後期以降、竪穴建物や掘立柱建物などが造られ居住域として利用される一方、耕作域としても利用されている。また、平坦面では3 a層形成時に基盤層まで達するような攪拌を行っており、4 a層・5 a層の堆積はほとんど見られないうえに、3 a層自体も上位の2 a層に、2 a層も1 a層に、1 a層も現代の作土層により削平を受けている。

以下には、層毎の特徴を記す。

現代作土層以下の地層を、層相や出土遺物などから大きく6層に分けている。1・2層は安土桃山時代以降。3層は平安・鎌倉・室町時代。4層は古墳時代中期、飛鳥・奈良時代。5層は弥生時代から古墳時代前期。6層は無遺物層の基盤層である。縄紋時代の古土壌については層としての連続性が確認できず谷内堆積層とし、層序名を付していない。

各層はさらに細分することができ、その場合例えば3-1層や3-2層というように一で数字をつなげて表記している。なお、層を表すアラビア数字は上位から下位へ数字が大きくなる。

現代造成層・現代作土層

現代作土上面は、昭和40年代の宅地造成層により覆われており、昭和36年(1961年)に撮影された航空写真で造成以前の土地利用の状況を見ることができる。

1 a層 江戸時代以降の作土である。中砂から細砂混じりシルトで、粗砂から細礫が混じる。酸化する際、白っぽく見える。2から3層に細分することができる。

2 a層 安土・桃山時代以降の作土である。細砂混じりシルトで、中砂から極粗砂が混じる。1層より砂粒の混じりが少ない。3から4層に分層できる。細分した層間には洪水堆積層が見られ、堆積状況が良い部分ではa層とb層のセット関係を見ることができる。谷1南西部・谷3内では、層中に、2から3 m自然堆積層がみられる。自然堆積層中には、土壌化は弱いが作土化した層が認められた。なお、2層を細分した中の最下層はシルトを主とし、砂粒の含有量が少ない。部分的には、3層を巻き上げるため粗砂を多く含むシルトブロックが混じるが、基本的には非常にシルト質が強い。最下層中からは、青花などの16世紀後半の遺物が出土している。

3 a層 平安・鎌倉・室町時代の作土・古土壌である。粗砂混じりシルトで、中砂から極粗砂を多く含む。谷内では、3から5層に細別され、3-1層から3-5層として枝番号を付して調査を行った。層間には洪水堆積層はほとんど見られず、作土の連続堆積である。各層の上面では、主として耕作痕跡や畦畔・溝が検出されている。全体に2層に比べ、砂粒を多く含むシルトである点が特徴で、2層最下層のシルト主体の作土層との対比が容易である。

4 a層 古墳時代中期から奈良時代に属する古土壤層である。極粗砂混粘質シルトで、暗色化が著しい。

多くは単一層であったが、谷部のごく一部では2から3層に細別され、層間に自然堆積層を見ることが出来る。平坦部では、3層形成時の攪拌により削平され、ほとんど見られない。

5 a層 平坦面1の旧流路内で確認できた層で、古墳時代前期から弥生時代に属する古土壤である。層厚は約1.5mを測り、4層以上に細分可能である。調査においては、面的な広がりを実に追える層を、5-1層・5-2層として上・下面で調査を行った。粗砂から細砂混じりシルトで、有機物を含む。

谷部堆積層 谷内でみられる5層より以前に形成された古土壤と自然堆積層で、最上部の古土壤から縄文時代中期から晩期の土片が少量出土している。6 a層が確認できない谷部内では、本層の最上層を除去した面で調査を終了とした。

6 a層 古土壤層である。無遺物層で、青灰色細砂からシルトである。本層を基盤層として、上面で調査終了とした。

表3-1 北壁地層模式図土色

番号	土色	番号	土色
A 1	5G3/1 暗緑灰 粘質微砂 (細礫含む、現代耕作土)	B 10	10YR6/4 にぶい黄褐 砂 (堤Ⅲ)
A 1'	5G5/1 褐灰 シルト (現代耕作土)	B 11	10YR8/3 浅黄褐 砂 (堤Ⅲ)
A 2	7.5Y5/2 灰オリーブ 粘質微砂 (現代耕作土床土)	B 12	5Y7/1 明オリーブ灰 シルト (微砂~細砂とのラミナ)
A 3	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 粘質微砂 (φ3~5mmの礫含む、近現代耕作土)	B 13	10YR4/4 褐色 シルト~細砂 (堤Ⅱ)
A 4	2.5Y6/2 灰黄 細砂 (2.5Y6/1 黄灰 細砂と互層に堆積、φ3~5mmの礫含む、中~近世耕作土)	B 14	10YR6/4 にぶい黄褐 シルト~細砂 (ブロック状に灰色シルト含む) (堤Ⅱ)
A 5	5Y6/2 灰オリーブ 細砂 (細礫含む、鉄斑あり)	B 15	5B5/1 青灰 粘質シルト (ブロック) (堤Ⅱ)
A 6	10YR6/4 にぶい黄褐 細砂 (黄灰 2.5Y6/1 細砂をブロック状に含む)	B 16	5Y6/2 灰オリーブ (砂・ブロック状に灰色シルト含む) (堤Ⅱ)
A 7	10YR4/1 褐灰 シルト (上部ほど黒褐色を帯びる、細礫含む、古墳時代以前遺物包含層、上面は第2遺構面)	B 17	10YR6/1 灰 シルト (10Y6/2 オリーブ灰シルトブロック含む) (堤Ⅱ)
A 8	10YR6/6 明黄褐 粘質シルト (部分的に灰色粘質シルトブロック状に含む、上部は若干の土壌化により褐色斑をもつ、地山土、第3遺構面ベース)	B 18	7.5Y6/1 灰 粘質シルト (細~中粒砂含む) (堤Ⅱ)
A 9	2.5Y5/4 黄褐 シルト (細礫多く含む、現代耕作土床土)	B 19	2.5GY6/1 オリーブ灰 シルト (細~中粒砂含む) (堤Ⅱ)
A 10	5Y6/1 灰 1 シルト (2.5Y5/3 黄褐 砂質シルトをブロック状に含む、中世~近世耕作土)	B 20	7.5Y6/3 オリーブ黄 シルト (細~中粒砂含む) (堤Ⅱ)
06-11区 A 11	5Y7/1 灰白 砂質シルト (φ3~5mmの砂礫含む、畦状の高まり)	06-11区 B 21	5Y6/3 オリーブ黄 細砂 (2.5Y7/2 灰黄 砂との互層) (堤Ⅱ)
A 12	2.5Y6/3 にぶい黄 砂質シルト (2.5Y5/1 黄灰 シルト含む、中世耕作土)	B 22	10YR8/1 灰白 砂 (中~粗砂含む) (堤Ⅱ)
A 13	2.5Y5/6 黄褐 粘質シルト	B 23	10Y6/1 灰 粘質シルト (堤Ⅱ)
A 14	5Y5/1 灰 シルト (中世遺構埋土、第2面下層遺構)	B 24	5GY6/1 オリーブ灰 シルト (5Y6/4 オリーブ黄 細砂・2.5Y8/3 淡黄 砂をラミナ状に含む)
A 15	2.5Y5/3 黄褐 シルト (14層の下層部分)	B 25	10YR8/1 灰 細~極粗砂~細礫 (7.5GY6/1 緑灰 シルトをラミナ状に含む)
A 16	10YR6/4 シルト にぶい黄褐 (現代耕作土床土)	B 26	N5/0 灰 粘質シルト (5B6/1 青灰 粘質シルト・5PB3/1 暗青灰 粘土ブロック含む)
A 17	5Y7/3 浅黄 砂 (洪水砂層)	B 27	5Y8/1 灰白 砂 (2.5GY7/1 明オリーブ灰 シルト・2.5Y6/4 にぶい黄シルト~細砂とのラミナ)
A 17'	5Y6/3 オリーブ黄 粗砂 (洪水砂層)	B 28	5Y6/2 灰オリーブ 砂 (灰色シルト~細砂含む) (堤Ⅱ)
A 18	N4/ 灰 粘質微砂 (鉄斑あり、中世水田耕作土、15方形区画)	B 29	10BG6/1 青灰 粘質シルト (堤Ⅱ)
A 19	7.5Y5/1 灰 粘質シルト	B 30	5Y6/4 オリーブ黄 シルト (5Y7/2 灰白 砂・N6/0 灰 粘質シルト含む) (堤Ⅱ)
A 20	2.5GY5/1 オリーブ灰 粘質シルト	B 31	10Y6/1 灰 シルト (細~中粒砂含む) (堤Ⅱ)
A 21	5GY5/1 オリーブ灰 砂質シルト	B 32	5B6/1 青灰 粘質シルト (細~中粒砂含む) (堤Ⅱ)
A 22	10GY6/1 緑灰 砂礫 (堅緻な砂礫層)	B 33	10YR8/1 灰白 砂 (堤Ⅱ)
A 23	10Y6/1 粗砂 灰 (中礫含む、洪水砂礫)	B 34	10YR7/3 にぶい黄橙 砂 (灰白色細~粗砂ラミナ状に含む)
A 24	10GY6/1 緑灰 砂 (中礫含む、洪水砂礫)	B 35	10YR7/1 灰白色砂 ラミナあり 部分的に鉄分沈着
A 25	10GY5/1 緑灰 粘質シルト	B 36	2.5Y7/2 灰黄 砂 (緑灰5G6/1シルトとのラミナ)
A 26	7.5Y5/1 灰 粘質砂	B 37	10Y6/1 灰 粘質シルト (砂含む)
A ※1	近~現代溝	B 38	N6/ 灰 粘質シルト (灰色シルト・砂含む、炭化物・植物遺体混入)
A ※2	近~現代畦	B 39	5BG3/1 暗青灰 粘土 (シルト・砂含む)
A ※3	中世遺構	B 40	2.5Y8/2 灰白 砂
A ※5	古墳時代遺構	B 41	青灰シルト (炭化物・植物遺体混入、グライ化)
A ※6	弥生時代以前遺構	B ※1	近~現代溝
B 1	現代盛土	B ※3	中世遺構
B 2	10Y4/1 灰 細砂 (中粒砂・φ3mm大の礫多く含む、鉄斑若干あり、h-h'18層に対応)		
B 3	10Y4/1 灰 砂 (粗砂・中粒砂含む、h-h'29層に対応)		
B 4	10YR6/6 明黄褐 細~砂礫 (流水堆積砂、h-h'35層に対応)		
B 5	5P4/1 暗紫灰 粘質砂 (シルト・細礫含む)		
B 6	6Y6/3 オリーブ黄 砂 (2.5Y6/2 灰 黄砂・2.5Y8/1 灰白 砂とのラミナ)		
B 7	2.5Y7/3 浅黄 砂 (2.5Y6/1 灰黄砂・2.5Y8/1 灰白 粗砂とのラミナ)		
B 8	2.5Y6/3 灰黄 砂		
B 9	2.5Y6/2 灰黄 シルト~粗砂 (ラミナ)		

表 3 - 2 北壁地層模式図土色

番号	土色	番号	土色
C 1	現代造成土 ※機械掘削対象土のため図なし周辺調査から復元	G 1	現代の盛土層
C 2	旧耕土 ※機械掘削対象土のため図なし周辺調査から復元	G 2	5B6/1 青灰色 粘質シルト
C 3	近世作土 ※機械掘削対象土のため図なし周辺調査から復元	G 3	N4/0 灰色 砂礫混シルト
C 4	近世洪水堆積層 ※機械掘削対象土のため図なし周辺調査から復元	G 4	10BG5/1 青灰色 粘質シルト 機能時堆積層
C 5	5GY7/1 明オリーブ灰色 細砂シルト 中砂粒やや入る	G 5	N5/0 灰色 粘質シルト
C 6	N7/0 灰白 中砂～粗砂 シルトブロック混じり	G 6	7.5GY6/1 緑灰色 細砂混シルト
C 7	5GY6/1 オリーブ灰色 細砂シルト・中砂～粗砂粒多く入る	G 7	5BG6/1 青灰色 細砂混粘質シルト
C 8	N6/0 灰色 中砂シルト	G 8	5Y6/1 灰色 粘質シルト 粘性強くなる シルト混粘質中砂～粗砂
C 9	2.5GY6/1 オリーブ灰色 中砂シルト混じり 粗砂～極粗砂粒多く入る	G 9	5B5/1 青灰色 砂礫混粘質シルト
C 10	2.5GY6/1 オリーブ灰色 細砂シルト混じり 若干中砂粒入る	G 10	5BG6/1 青灰色 粗砂混粘質シルト
C 11	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 細砂シルト 中砂やや入る 上層よりやや暗色化強い	G 11	5BG7/1 明青灰色 粘質シルト
C 12	2.5GY8/1 灰白色 中砂～粗砂 ラミナあり・2.5GY6/1 オリーブ灰色 細砂ブロック入る(ラミナあり)	G 12	5G7/1 明緑灰色 砂礫混シルト
C 13	2.5GY5/1 オリーブ灰色 細砂シルト・中砂粒入る。中砂～粗砂ブロック(ラミナあり)のブロック土層 ※東へ行くと層境に中砂～粗砂があり、2～3層に分層できる	G 13	5Y7/2 灰白色
C 14	7.5Y8/1 灰白色 中砂～粗砂 ラミナあり 断続的に見られる	G 14	10GY8/1 明緑灰色 極細砂混粘質シルト 砂礫を多く含む 斜面堆積物
C 15	2.5GY5/1 オリーブ灰色 シルト中砂混じり	G 15	10Y7/2 灰白色 極細砂混粘質シルト
C 16	2.5GY7/1 明オリーブ灰色 中砂シルト中砂 粗砂～極粗砂粘土入る	G 16	5G4/1 暗緑灰色
C 17	7.5Y8/1 灰白色 中砂～粗砂 ラミナあり	G 17	5G6/1 緑灰色 砂礫混シルト
24-C 18	7.5Y4/1 灰色 中砂シルト 上面に中砂～粗砂ラミナありの層が部分的にあり	G 18	10G6/1 緑灰色 粘質シルト
6・7区 C 19	5Y6/1 灰色 細砂シルト 極粗砂入る	G 19	5BG6/1 青灰色 粗砂混粘質シルト
C 20	5Y5/1 灰色 中砂シルト	G 20	10BG6/1 青灰色 粗砂混粘質シルト
C 21	2.5Y5/1 黄灰 中砂シルト(溝作土)	G 21	N5/0 灰色 シルト混極細砂 2.5Y5/1 黄灰色 砂礫混シルト
C 22	5Y6/1 灰色 細砂シルトブロック	G 22	10Y7/2 灰白色 シルト混細砂～極細砂
C 23	10G4/1 暗緑灰色 細砂シルト 中砂混じり 粗砂～極粗砂粒入る	G 23	5Y6/2 灰オリーブ色 細砂混粘質シルト
C 24	10G5/1 緑灰色 細砂シルト	G 24	5Y6/1 灰色 砂礫混粘質シルト
C 25	10G5/1 緑灰色 細砂シルト	G 25	2.5Y7/1 灰白色 粘質シルト
C 26	5BG4/1 暗青灰色 細砂シルト 中砂混じり 下層の4-1層巻き上がる やや暗色化	G 26	5BG7/1 明青灰色 粘質シルト 5Y8/2 灰白色 極細砂の薄層挟む
C 27	2.5GY8/1 灰白色 中砂～細砂 ラミナあり	G 27	10GY8/1 明緑灰色 粘質シルト
C 28	N4/0 灰色 シルト 若干中砂入る	G 28	5Y7/2 灰白色 砂礫混シルト 5BG5/1 青灰色 砂礫混シルト
C 29	2.5GY8/1 灰白色 粗砂～極粗砂 ラミナあり 上部はやや土壌化	G 29	10G5/1 緑灰色 砂礫混シルト 盛土
C 30	7.5Y6/1 灰色 中砂～粗砂シルト混じり 土壌化弱い	G 30	盛土
C 31	7.5Y8/1 灰白色 細砂・中砂～極粗砂 ラミナあり	G 31	10Y6/1 灰色 砂礫混シルト
C 32	7.5Y4/1 灰色 シルト 有機物層	G 32	10Y8/2 灰白色 砂礫混シルト 盛土?
C 33	7.5Y7/2 灰白色 中砂～粗砂 ラミナあり	G 33	5Y7/1 灰白色 砂礫混シルト
C 34	2.5Y7/4 浅黄 極粗砂～細礫(基盤層)	G 34	5Y8/3 淡黄色 砂礫
C 35	2.5Y5/1 黄灰 細砂シルト 中砂～粗砂粒若干入る	G 35	2.5Y7/1 灰色 シルト混砂礫 5B5/1 青灰色 砂礫混粘質シルト
C 36	2.5Y8/1 灰白色 中砂～粗砂 やや土壌化	11区 G 36	10Y8/1 灰白色 砂礫 弱い土壌化
C 37	2.5Y3/1 黒褐色 中砂～粗砂シルト	G 37	10Y7/2 灰白色 粘質シルト
C 38	7.5GY7/1 明緑灰色 細砂シルト 中砂～粗砂入る	G 38	7.5GY7/1 明緑灰色 極細砂混シルト 粗砂～極粗砂を含む 砂礫を微量に含む
C 39	2.5Y3/1 黒褐色 中砂シルト	G 39	5Y8/3 淡黄色 砂礫
C 40	シルト～細砂 有機物層	G 40	5GY7/1 明オリーブ灰色 極細砂 砂礫を含む 砂が堆積した際の古土壌シルト質になる 極細砂～シルト
C 41	7.5GY7/1 明緑灰色 細砂シルト 中砂～粗砂入る	G 41	5BG5/1 青灰色 極細砂 砂礫を多く含む
C 42	現代造成土・旧耕土 ※機械掘削対象土のため図なし周辺調査から復元	G 42	10G6/1 緑灰色 極細砂
D 1	近世作土 ※機械掘削対象土のため図なし周辺調査から復元	G 43	5GY7/1 明オリーブ灰色 粘質シルト
D 2	2.5Y8/1 灰白色 中砂～粗砂 ラミナあり	G 44	10Y8/2 灰白色 砂礫 N6/0 灰色 粘質シルトの薄層を挟む
D 3	2.5Y5/1 黄灰色 中砂シルト 粗砂粒混じる シルトブロック混じる	G 45	10GY6/1 緑灰色 粘質シルトの薄層を挟む
D 4	2.5Y4/1 黄灰色 中砂シルト 粗砂粒多く混じる	G 46	5Y8/3 淡黄色 極細砂
24-D 5	5Y6/2 灰オリーブ色 中砂～粗砂シルト 水分を多く含むプロヨ	G 47	5Y6/1 灰色 粘質シルト
2区 D 6	5Y5/2 灰オリーブ色 中砂シルト 上層よりシルトがやや多く混じる	G 48	5BG6/1 青灰色 極細砂 粘質シルトに側方変化する
D 7	2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂～粗砂シルト 下層9の土壌化著しい部分か? 土器小片若干入る	G 49	10G6/1 緑灰色 粗砂混粘質シルト 極細砂を少量含む
D 8	2.5Y6/2 灰黄色 中砂～粗砂シルト	G 50	10Y7/2 灰白色 極細砂混シルト
D 9	7.5Y5/1 灰色 中砂シルト 粗砂混じる 耕作溝埋土	G 51	10Y7/2 灰白色 砂礫
D 10	5Y5/3 灰オリーブ 中砂～粗砂シルト シルト多く含む	G 52	2.5Y5/1 黄灰色 砂礫混シルト
D 11	2.5GY7/1 明オリーブ灰色 細礫	G 53	5Y6/1 灰色 砂礫混粘質シルト 2.5Y6/1 灰色 砂礫混シルト
D 12	現代の盛土層	G 54	2.5Y6/2 灰黄色 砂礫混シルト
E 1	現代の作土層	G 55	5Y6/2 灰オリーブ色 砂礫混シルト
E 2	2.5GY6/1 明オリーブ灰色 中砂～極粗砂シルト混じり	G 56	5Y5/1 灰色 粗砂混シルト
E 3	2.5GY7/1 明オリーブ灰色 細砂シルト 中砂～粗砂粒若干入る	G 57	2.5Y6/2 灰黄色 粗砂混シルト
E 4	細礫入る	G 58	2.5Y5/1 黄灰色 粗砂混シルト
24-E 5	5BG6/1 青灰色 細砂シルト 中砂～極粗砂粒やや入る 上面凹凸あり(細砂ラミナありが入る)	G 59	7.5Y2/1 黒色 砂礫混シルト
E 6	7.5Y5/1 灰色 中砂～極粗砂 細砂シルト混じり 砂っぽい	G 60	5Y5/1 灰色 砂礫混シルト
E 7	N8/0 灰白色 中砂～極粗砂 細砂シルト ラミナあり	G 61	62 10Y8/1 灰白色 細砂
E 8	10G6/1 緑灰色 細砂シルト やや中砂入る 上面凹凸(ふみ込み)著しい 上面リバースグレーディング認められる	G 62	N4/0 灰色 細砂混シルト
E 9	N6/0 灰色 シルト 下部に中砂やや入る 上面凹凸あり シルトあり 中砂入る	G 63	10G6/1 緑灰色 砂礫混シルト
		G 64	5B5/1 青灰色 粗砂混シルト
		G 65	5Y5/1 灰色 細砂混シルト
		G 66	2.5Y5/1 黄灰色 砂礫混シルト
		G 67	5Y8/3 淡黄色 砂礫
		G 68	5Y6/1 灰色 粗砂混粘質シルト
		G 69	10Y7/2 灰白色 粘質シルト
		G 70	N6/0 灰色 粗砂混粘質シルト
		G 71	2.5Y7/1 灰白色 粘質シルト
		G 72	2.5Y7/1 灰白色 粘質シルト
		G 73	10Y7/1 灰白色 粘質シルト
		G 74	10Y7/1 灰白色 細砂～中砂 粗砂 粒形細かくなる 粗砂～極粗砂 砂礫

表 3 - 3 北壁地層模式図土色

番号	土色				
H 1	現代の盛土層				
H 2	5B4/1 暗青灰色 粘土～シルト (粗砂を少し含む) 現代の作土層	J	5	7.5Y8/1 灰白色 中砂～粗砂 部分的にラミナ見られるが攪拌されている	
H 3	5B5/1 青灰色 粗砂混じり粘土	J	6	5B6/1 暗青灰色 中砂～極粗砂シルト	
H 4	5B5/1 青灰色 粗砂混じり粘土 3より粗砂多く含む	J	7	5B7/1 明青灰色 細砂 ラミナあり	
H 5	5B5/1 青灰色 粗砂混じりシルト	J	8	10G4/1 暗緑灰色 中砂～極粗砂シルト 細礫混じる	
H 6	2.5Y7/3 浅黄色 中砂～粗砂 ラミナあり	6-1	9	7.5Y8/1 灰白色 中砂～粗砂 シルト～細砂ブロック入る 部分的にラミナ見られるが攪拌されている	
H 7	10G6/1 緑灰色 シルト～極細砂 ラミナあり	区	10	5B7/1 明青灰色 細砂 ラミナあり	
H 8	5B6/1 青灰色 粘質土	J	11	5B7/1 明青灰色 5B6/1 青灰色 中砂～粗砂シルトとシルトブロック入る	
H 9	5B6/1 青灰色 極細砂混じりシルト (下層の細砂～粗砂のまきあげを多く含む)	J	12	N8/1 灰白色 N7/1 灰白色 中砂～極粗砂シルトブロック入る 部分的にラミナ見られるが攪拌されている	
H 10	2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂～粗砂多く含むシルト (小礫を少し含む、炭の小片を少し含む)	J	13	10B6/1 青灰色 シルト 粗砂～極粗砂若干入る	
H 11	5B5/1 青灰色 中砂～粗砂混じり粘土	J	14	10B6/1 青灰色 シルト 粗砂混じる	
H 12	10YR4/2 灰黄褐色 粗砂を多く含むシルト	J	15	10B6/1 暗青灰色 シルト 粗砂～極粗砂多く含む 細砂ブロック入る	
H 13	10YR4/1 褐色 細砂～粗砂混じりシルト	J	16	10B6/1 暗青灰色 中砂～極粗砂シルト 細砂ブロック入る	
H 14	10YR2/1 黒色 粗砂混じりシルト	6-1	17	10Y4/1 灰色 中砂～極粗砂 細礫シルト混じり	
H 15	16と同一層と思われるが母材と思われる直下層が砂層のため土質が、極細砂(細砂～中砂含む)	区	18	5G7/1 明緑灰色 細砂シルト混じり 極粗砂～細礫混じる	
H 16	N4/0 灰色 粗砂少し含む粘土 (炭の小片少し含む)	J	19	5B3/1 暗青灰色 粗砂～極粗砂シルト	
H 17	16と同一層と思われるが粘土ではなく極細砂主体	J	20	5B6/1 明青灰色 粗砂 ラミナあり	
H 18	5Y6/1 灰色 粗砂少し含む粘土 (炭の小片少し含む)	K	1	現代の盛土層	
H 19	7.5GY5/1 緑灰 極細砂 (シルト含む)	K	2	現代の作土層	
H 20	2.5Y6/2 灰黄 中砂～粗砂(上部) 10G6/1 緑灰 シルト～極細砂 (ラミナあり)	K	3	10YR3/1 灰白色 粗砂～極粗砂と5B2/1青黒色のブロック土 下部に粗砂～極粗砂あり ラミナあり	
H 21	10G5/1 緑灰 シルト～極細砂 (ラミナあり、炭小片少し含む)	K	4	5B2/1 青黒色 中砂～粗砂粒混じりシルト	
H 22	10G4/1 暗緑灰 シルト (極細砂を少し含む、炭の小片を少し含む、弱く土壌化している 縄文時代後期土器片包含 10G6/1 緑灰 シルト～極細砂 (上部はシルト、下部は極細砂) <特に東西断面の点線以下> 炭小片少し含む、最下部に木片等の植物遺体含む、ラミナあり)	K	5	5G4/1 明緑灰色 中砂混じりシルト	
H 23	5Y7/2 灰白 細砂～粗砂 (木片を少し含む、ラミナあり)	K	6	5Y8/1～7/1 灰白色 粗砂～細砂 ラミナあり	
H 24	現代の盛土層	K	7	2.5Y6/1～5/1 黄灰色 中砂～極粗砂混じりシルト 小礫含むシルトブロック含む	
I 1	5PB4/1 暗青灰色 シルト (有機物をラミナ状に含む) 旧表土層	K	8	N4/0 灰色 中砂～極粗砂シルト混じり	
I 2	5B5/1 青灰色 粗砂混じり粘土	K	9	2.5GY5/1 オリーブ灰色 中砂～極粗砂シルト混じり 小礫多く含む	
I 4	5B5/1 青灰色 粗砂混じりシルト	K	10	2.5Y8/1～7/1 灰白色 極粗砂～細砂シルト ラミナあり	
I 5	5Y6/1 灰色 中砂～粗砂 (5B6/1 青灰色 ブロックを多く含む)	K	11	7.5Y6/1 灰色 シルト 極粗砂粒含む	
I 7	2.5Y7/3 浅黄色 中砂～粗砂 ラミナあり	5-2	12	5GY5/1 オリーブ灰色 中砂～極粗砂シルト混じり	
I 8	10G6/1 緑灰色 シルト～極細砂 ラミナあり	区	13	5GY5/1 オリーブ灰色 中砂～極粗砂シルト混じりに細砂ブロック入る	
I 9	5B6/1 青灰色 粘質土	K	14	5G5/1 オリーブ灰色 細砂ブロックに N8/0 灰白色 粗砂～極粗砂ブロックのブロック土	
I 10	5B6/1 青灰色 極細砂混じりシルト	K	15	5G5/1 オリーブ灰色 細砂ブロックと 5G5/1 オリーブ灰色 中砂～シルト混じりのブロック土	
I 11	5B6/1 青灰色 極細砂混じりシルト (下層の細砂～粗砂のまきあげを多く含む)	K	16	N4/0 灰色 中砂シルト混じり 極粗砂～小礫多く含む シルト～極細砂のブロック多く含む	
I 12	2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂～粗砂多く含むシルト (小礫を少し含む、炭の小片を少し含む)	K	17	N4/0 灰色 灰色 中砂シルト混じり 極粗砂～小礫多く含む	
I 13	2.5Y7/3 浅黄色 中砂～粗砂	K	18	N5/0 灰色 中砂シルト混じり 粗砂～極粗砂含む 細砂～シルトブロック多く含む	
I 14	2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂～粗砂多く含むシルト (小礫を少し含む、炭の小片を少し含む)	K	20	N3/0 暗灰色 中砂～粗砂シルト混じり 極粗砂～小礫多く含む	
I 15	5B5/1 青灰色 中砂～粗砂混じり粘土	K	21	5G6/1 緑灰色 細砂 シルト混じり	
I 16	5B5/1 青灰色 中砂～粗砂混じりシルト (炭の小片を少し含む)	K	22	N4/0 灰色 中砂シルト混じり	
I 17	10B6/1 青灰色 細砂～粗砂混じり粘土～シルト	K	23	10GY6/1 緑灰色 細砂	
I 18	10YR4/2 灰黄褐色 粗砂を多く含むシルト	L	1	現代の盛土層	
I 19	10YR4/1 褐色 細砂～粗砂混じりシルト	L	2	現代の作土層	
I 20	10YR2/1 黒色 粗砂混じりシルト	L	3	5B6/1 青灰色 粗砂混じりシルト	
I 21	N5/0 灰色 細砂～粗砂混じり粘土 (5Y6/3 オリーブ黄色 中砂～粗砂をブロック状に含む)	L	4	5B6/1 青灰色 粗砂混じりシルト	
I 22	N4/0 灰色 粗砂少し含む粘土 (炭の小片少し含む)	L	5	5G5/1 緑灰色 中砂～細砂シルト 極粗砂～小礫含む	
I 23	5Y6/1 灰色 粗砂少し含む粘土 (炭の小片少し含む)	L	6	2.5Y5/2 明灰黄色 中砂シルト 粗砂粒入る	
I 24	5B6/1 青灰色 粗砂多く含むシルト	L	7	2.5Y5/1 黄灰色 中砂～粗砂シルト	
I 25	5B6/1 青灰色 粗砂 (縄文土器少し含む) 部分的にラミナ見られる	L	8	7.5YR4/2 灰褐色 中砂～細砂シルト 粗砂粒入る	
I 26	N4/0 灰色 シルト～極細砂 (炭の小片含む、縄文時代後期土器片含む) 部分的に弱く土壌化している	L	9	7.5YR6/1 褐色 中砂シルト	
I 27	10YR6/2 灰オリーブ色 粗砂 ラミナ部分的に見られる	L	10	10YR6/1 褐色 中砂～粗砂シルト 10Y7/6 明黄褐色 シルトブロック入る 基盤層のブロック入る	
I 28	7.5GY7/1 明緑灰色 シルト～極細砂	L	11	2.5Y5/1 黄灰色 シルトブロックと基盤層のブロック土	
I 29	5Y7/2 灰白色 粗砂 (ラミナあり、西肩に31層の土壌化した部分のまきあげを含む、土器片含む) 流路内堆積層	L	12	7.5YR7/6 橙色 中砂～極粗砂シルト	
I 30	10YR2/1 黒色 シルト～極細砂 土壌化している=26	M	1	現代の盛土層	
I 31	N4/0 灰色 シルト～極細砂 (炭の小片含む、縄文土器片含む) 土壌化している=26	M	2	現代の作土層	
I 32	10GY5/1 緑灰色 極細砂 (粗砂、炭の小片を少し含む) 弱く土壌化している=26	M	3	2.5Y7/2～5/2 灰黄色～暗灰黄色 細砂シルト 粗砂～極粗砂小礫混じる	
I 33	10GY6/1 緑灰色 シルト・極細砂～細砂 (炭の小片を少し含む、ラミナあり)	M	4	2.5Y7/4～6/4 浅黄色～にぶい黄色 細砂シルト 粗砂～極粗砂混じる	
I 34	10YR4/1 褐色 シルト～極細砂 (木片含む、ラミナあり)	M	5	2.5Y3/2～6/2 灰白色～灰黄色 細砂シルトと灰白色細砂シルトブロックのブロック土層	
I 35	10YR4/1 褐色 極細砂 (有機物をラミナ状に含む)	M	6	10YR3/1 黒褐色 細砂シルト 粗砂入る	
I 36	5Y6/2 灰オリーブ色 粗砂 ラミナあり	M	7	5YR5/4 にぶい赤褐色 細砂シルト 酸化マンガン沈着著しい 粗砂～極粗砂小礫混じる	
J 1	現代の盛土層	M	8	10YR4/1 褐色 細砂シルト 粗砂入る 酸化マンガン沈着あり	
J 2	現代の作土層	M	9	2.5Y7/6 明黄褐色 細砂シルト 粗砂～極粗砂混じる	
6-1	5B4/1 暗青灰色 中砂～粗砂シルト 旧耕地 近代	M	10	2.5Y5/1 黄灰色 細砂～中砂シルト 粗砂～極粗砂多く含む	
区	5B3/1 暗青灰色 中砂～粗砂シルト 旧耕地 近代	M	11	2.5Y6/1 黄灰色 細砂～中砂シルト 粗砂～極粗砂多く含む	
J		M	12		

表 3 - 4 北壁地層模式図土色

番号	土色		
4-2区	M 13	2.5Y6/3 にぶい黄色 細砂～中砂シルト 粗砂～極粗砂多く含む	0 44
	M 14	2.5Y4/1 黄灰色 細砂～中砂シルト 粗砂～極粗砂多く含む 細砂ブロック含む	0 45
	N 1	現代の盛土層	0 46
	N 2	2.5Y3/1 黒褐色 細砂 やや粘質 粗砂含む	0 47
	N 3	10YR4/4 褐色 砂質シルト やや粘質 粗砂含む	0 48
	N 4	2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂 粗砂含む	0 48
	N 5	7.5YR4/4 褐色 粘質シルト 粗砂含む 少量の酸化マンガン含む	0 49
	N 6	10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粗砂と多量の酸化マンガン含む	0 49
	N 7	2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂 やや粘質 粗砂含む	0 50
4-1区	N 8	2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂 粗砂含む	0 50
	N 9	10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 粗砂含む	0 51
	N 10	2.5Y5/3 黄褐色 粘質シルト 粗砂 酸化マンガン沈着含む (中世の地下げ・整地土)	22-0
	N 11	10YR4/4 褐色 粘質シルト 粗砂含む 基盤層ブロック含む (中世の地下げ・整地土)	2区
	N 12	2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂 やや粘質	0 52
	N 13	2.5Y5/3 黄褐色 細～粗砂	0 52
	N 14	2.5Y6/2 灰黄色 細砂 やや粘質	0 52
	N 15	2.5Y5/2 暗灰黄色 細～粗砂	0 52
	N 16	2.5Y5/2 暗灰黄色 細～粗砂	0 52
	N 17	10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粗砂含む	0 53
	N 18	10YR4/4 褐色 細砂 粗砂と径1cm以下の基盤層のブロック含む	0 54
	O 1	現代の盛土層	0 55
	O 2	2.5Y4/1 黄灰色 細砂～中砂混シルト	0 55
	O 3	2.5Y7/1 灰白色 細砂～中砂混シルト	0 56
	O 4	2.5Y7/4 浅黄色 細砂～粗砂混シルト	0 56
	O 5	10YR7/4 にぶい黄褐色 細砂混シルト	0 57
	O 6	10YR7/1 灰白色 中砂～粗砂混シルト	0 58
	O 7	10YR7/2 にぶい黄褐色 粗砂混シルト (小礫少し含む)	0 58
O 8	5Y5/1 灰色 細砂～中砂混シルト (ラミナあり)	0 58	
O 9	2.5Y4/1 黄灰色 細砂～粗砂混シルト	0 58	
O 10	10YR6/1 褐灰色 細砂多く含むシルト (粗砂少し含む)	0 58	
O 11	10YR6/1 褐灰色 細砂多く含むシルト	0 58	
O 12	5Y6/1 灰色 細砂～粗砂混シルト<第3-1層下面溝>	0 58	
O 13	2.5Y6/1 黄灰色 細砂～中砂多く含むシルト (細～中砂のラミナあり)	0 58	
O 14	2.5Y6/4 にぶい黄色 細砂～粗砂混シルト	0 58	
O 15	5Y6/2 灰オリーブ色 中砂～粗砂多く含むシルト	0 58	
O 16	5Y8/4 淡黄色 中砂～粗砂 (東部では2.5Y7/1 灰白色 シルト含む)	0 58	
O 17	5Y5/1 灰色 中砂～粗砂混シルト	0 58	
O 18	5Y8/4 淡黄色 中砂～粗砂	0 58	
O 19	2.5Y3/1 黒褐色 中砂～粗多く含むシルト	0 58	
O 20	7.5Y6/1 灰色 シルト・2.5Y7/2 黄灰色 中砂～粗砂が混じる	0 58	
O 21	2.5Y7/2 黄灰色 中砂～粗砂 (5Y5/1 灰色 シルトをラミナ状に含む)	0 58	
O 22	2.5Y7/4 浅黄色 細砂～粗砂・10BG5/1 青灰色 シルトがブロック状に混じる	0 58	
O 23	5Y6/2 灰オリーブ色 細砂～粗砂・5Y5/1 灰色 シルトが混じる※やや土壌化しているか	0 58	
22-2区	O 24	2.5Y7/3 浅黄色 細砂～粗砂	0 58
	O 25	10YR4/1 褐灰色 細砂～粗砂混シルト	0 58
	O 26	5B4/1 暗青灰色 中砂～粗砂少し含むシルト	0 58
	O 27	10BG6/1 青灰色 細砂～中砂少し含むシルト (上部に炭化物小片を含む、部分的に細砂～中砂の層を含む)	0 58
	O 28	2.5Y7/2 黄灰色 中砂～粗砂 (シルトを少し含む) ※少し土壌化している	0 58
	O 29	5BG5/1 青灰色 シルト、2.5Y8/3 淡黄色 中砂～粗砂が混じる	0 58
	O 30	2.5Y8/3 淡黄色 中砂～粗砂 (下部に5G5/1 緑灰色 シルトをラミナ状に含む・ラミナ有り)	0 58
	O 31	10Y5/1 灰色 シルト (ラミナ有り) ※第5-1面を覆う堆積層	0 58
	O 32	10Y5/1 灰色 粗砂混細砂 (2.5Y8/3 淡黄色 中砂～粗砂ブロック状に含む、肩部分にラミナ有り)	0 58
	O 33	2.5Y8/1 灰白色 粗砂 (ラミナ有り)	0 58
	O 34	2.5Y5/1 黄灰色 極細砂 (有機物を含む、肩部分の細砂～粗砂が混じるラミナ有り)	0 58
	O 35	5G4/1 暗緑灰色 粗砂混シルト (下部に粗砂のブロック・シルトブロックを含む)	0 58
O 36	5B5/1 青灰色 中砂～粗砂混シルト	0 58	
O 37	7.5Y5/1 灰色 中砂～粗砂混シルト<第5-1 b面20溝>	0 58	
O 38	7.5GY5/1 緑灰色 シルト～極細砂・2.5Y7/2 黄灰色 細砂～粗砂が混じる (一部にラミナ有り) シルト	0 58	
O 39	10Y6/1 灰色 粗砂混シルト	0 58	
O 40	2.5Y8/1 灰白色 細砂～粗砂 (シルト小礫を含む・ラミナ有り)	0 58	
O 41	7.5Y4/1 灰色 細砂～中砂混シルト (有機物含む)	0 58	
O 42	2.5Y8/4 淡黄色 中砂～粗砂・小礫 (ラミナ有り)	0 58	
O 43	2.5GY5/1 オリーブ灰色 中砂混シルト	0 58	

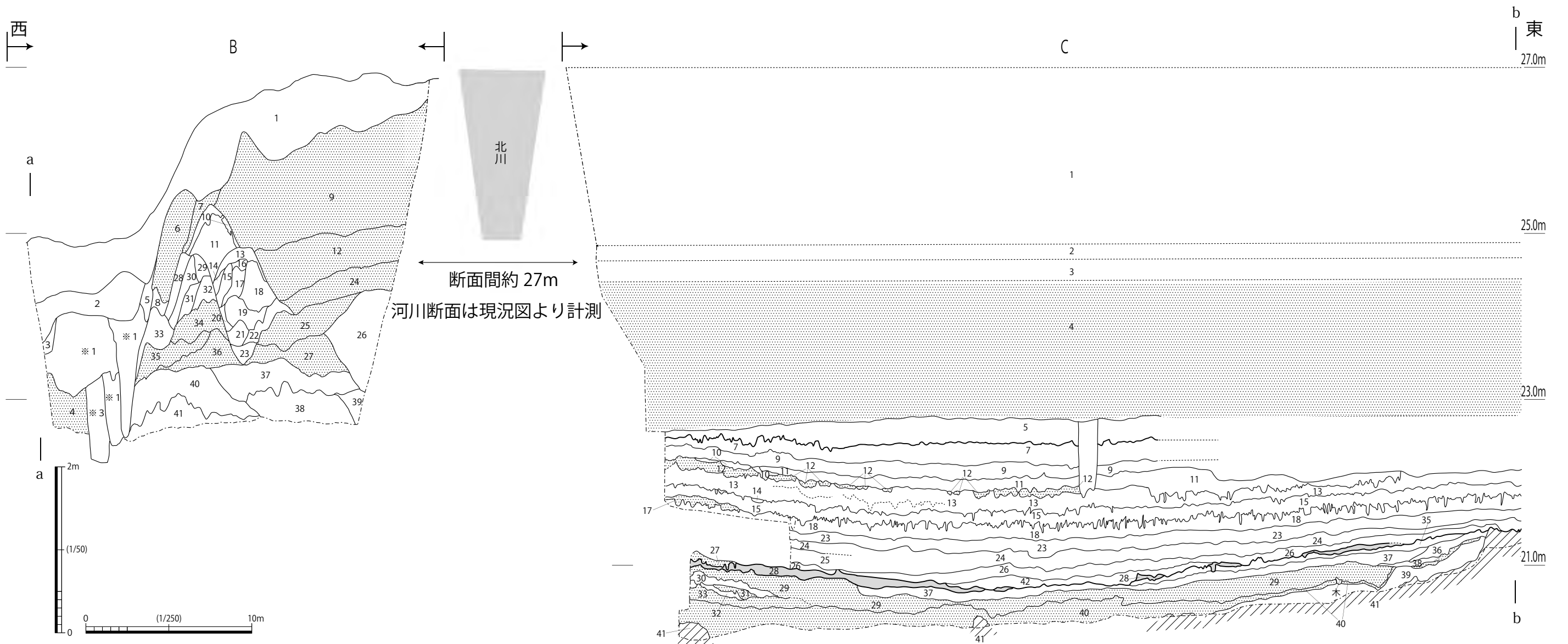
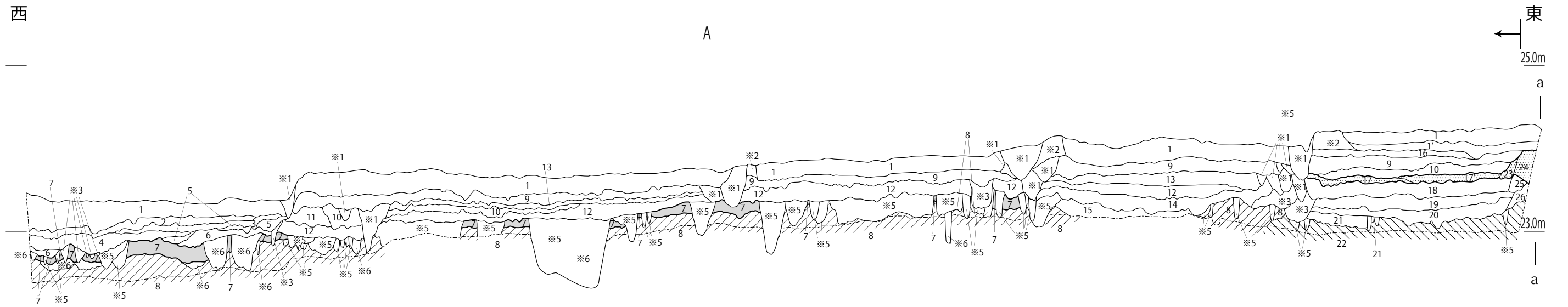


図 183 北壁地層模式図 1

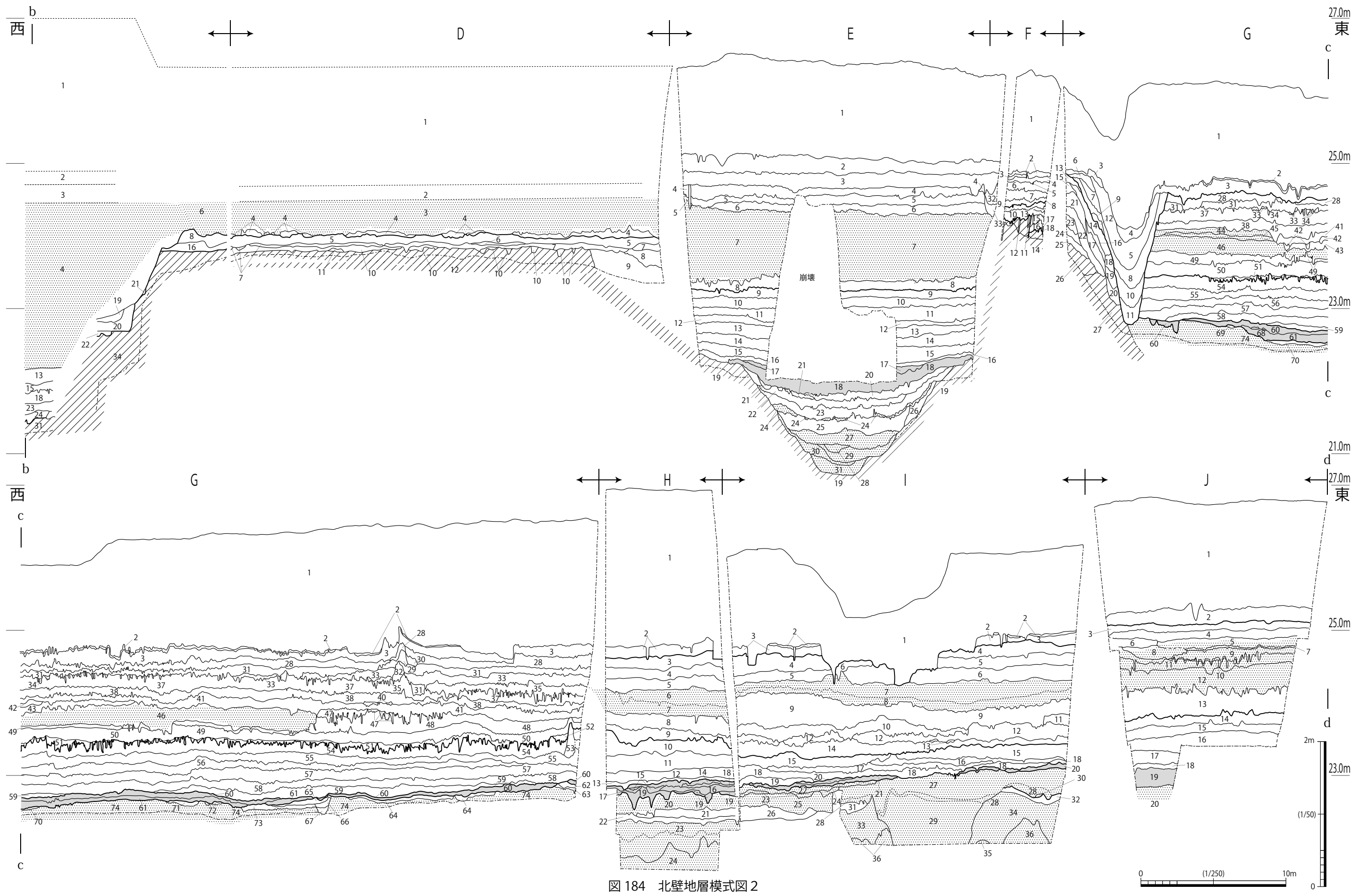


图 184 北壁地層模式图 2

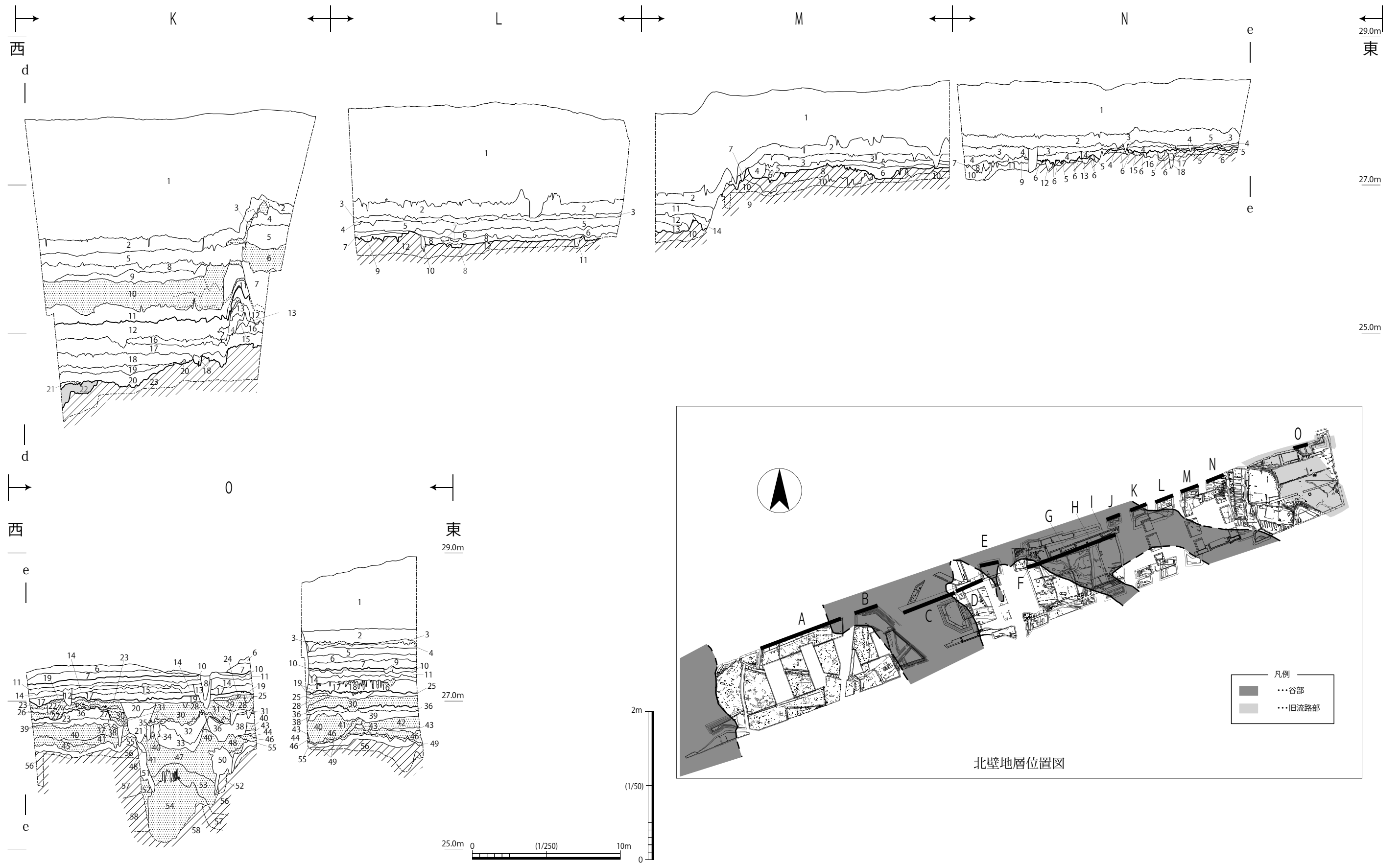


图 185 北壁地層模式图 3

第2節 検出した遺構と遺物

基本層序で述べたように、調査地内には谷部分や、谷と谷との間の平坦部から成る地形がみられる。微細で局地的ではあるが、このような地形環境が当調査地の土地利用に大きく影響を与えている。このため本章では、検出した遺構と遺物を谷と呼称する部分と、谷と谷との間の平坦面と呼称する部分とに区分し、帰属する時期別（層毎）に記述する。谷と平坦面は、図186に掲げるように、谷1・谷2・谷3・谷4、平坦面1・平坦面2・平坦面3・平坦面4とした。谷2は、南東から北西方向へ延びる谷1に取り付き収束する。なお、平坦面1では谷1・2・3・4よりも古い段階に完全に埋没し、微高地化した旧流路を含んでおり、この部分では弥生時代の地層（5a層）がみられる。

第1項 中世（3a層）（図版31-1~8）

昭和40年代の宅地造成土と現代作土、および近代の作土である1a層、近世の作土である2a層を除去すると、3a層が検出される。3a層は、基本層序で述べたように、谷部分では水田もしくは畠の作土である。平坦面部分では、基盤層上面で中世の耕作に伴う遺構と共に、中世の掘立柱建物などの遺構が検出されることから、水田もしくは畠の作土と、古土壌と考えられる。時期は出土遺物から、平安時代から室町時代と考えられる。

また3a層は、平坦面では1から2層に、谷部では1から5層に細分することができる。細分した層は3-1a層、3-2a層と言うように枝番号で層準を示しており、各々の層上面で遺構検出を行ったが、平坦面と谷部分で細分した層が、平面的に連続する層として捉えることは難しく、例えば平坦面での3-1a層が谷部分の3-1a層と対応し、かつ3-2a層も対応することも考えられる。このため、検出した遺構の平面的なつながりと、出土遺物や埋土に注意して調査を行った。

さらに3a層は、基本的に作土・土壌の連続堆積であり、細分した各層とも上面は大きく削られている。

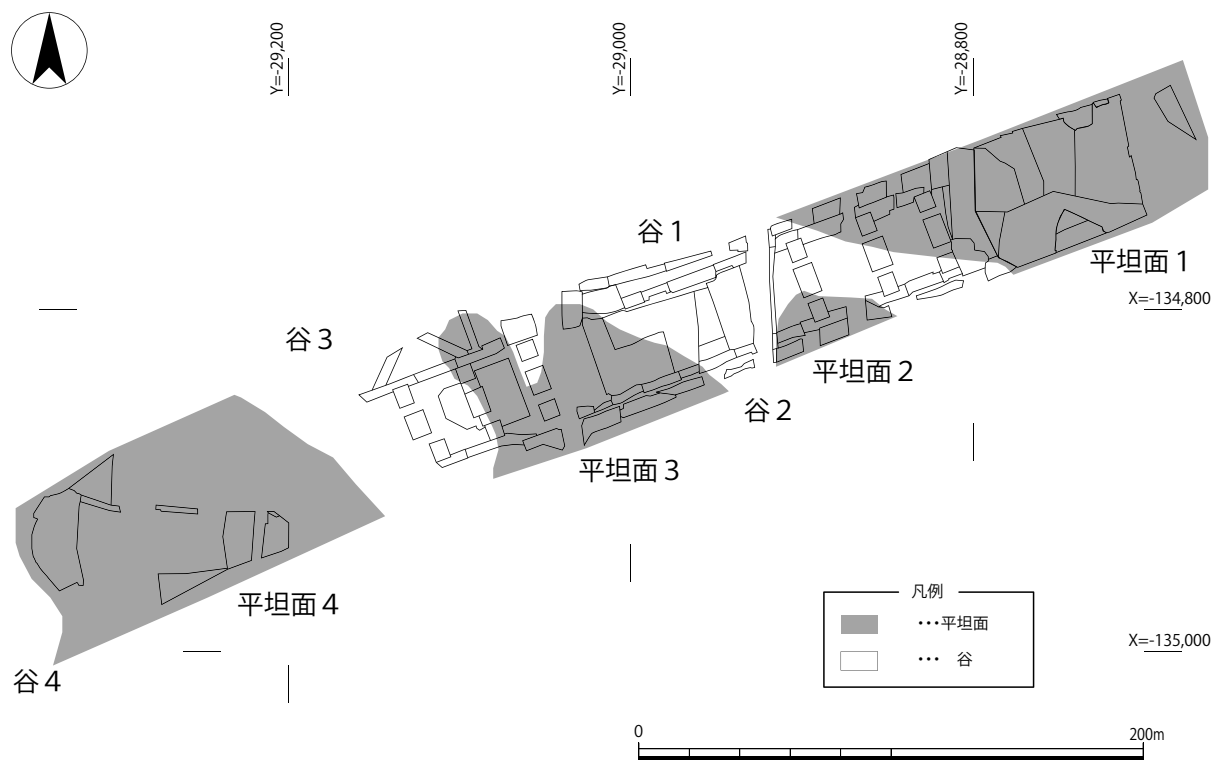


図186 平坦面・谷 位置図

このため、検出した遺構は上面に帰属する遺構か、検出面に帰属する遺構かの検討が必要であり、調査時に埋土の観察を十分にを行い決定した。しかし、同一遺構でも検出箇所の違いから帰属面が異なる場合があり、整理段階の検討から改めて帰属面を変更・決定した場合もある。

図 188 に第 3-1 面の遺構配置図を示す。図の作成にあたっては、2 a 層除去面であり 3 a 層を細分した最上層の 3-1 a 層上面で作成することを前提として作業を行った。しかし、平坦面 1・2・3・4 では、3 a 層自体が薄く良好な状況で 3 a 層上面を検出できなかったため、基盤層上面である第 6 面（6 a 層上面）で検出した遺構の内、第 3 面に帰属する耕作溝などの遺構を抽出している。また、谷部に関しては地層の観察が不十分である、もしくは 3-1 a 層が薄く良好な状態で検出できないなどの理由により、さらに下層の第 3-2 面（3-2 a 層上面）で検出した遺構を載せている調査区もあるが、大きく第 3-1 面の景観を表すものとして作図した。表 4 には、第 3-1 面として作成した各調査区の遺構面名を示す。第 3-1 面は、室町時代を中心とする時期であり、調査地全体が耕作域・居住域として利用されていたと考えられる。

段 (図 188)

谷部分では主に畦畔や溝を、平坦面部分では耕作に伴う小溝を検出している他、谷部分と平坦面部分との境に明確な段を検出している。段は上面が削平され残存高でしか示せないが、おおむね 50 から 60 cm の比高を測る。

段 1 は、17-3 区から 19-3 区・20-2 区・5-3 区を経て、5-2 区の北東隅を通過して調査外へ延びており、南東-北西方向である。段 2 は、9-2 区から弧を描くように 21-3 区・15-2 区・15-4 区を経て、15-4 区から調査区外南へと延びている。段 3 は、7-1 区と 7-2 区の間から、11-1 区・6-6 区・6-5 区を経て調査区北西へ延びる。段 1 同様、南東-北西方向である。段 4 は、23-2 区からほぼ北へ延び 2-3 区・2-2 区・24-7 区を経て南東方向へ曲がり、24-4 区・24-3 区を経て 24-1 区と 24-2 区の間を抜け、1-2 区へ延びる。1-2 区からは、現道下で未調査の部分のため、不明であるが、おそらく段 3 とつながると考えられる。

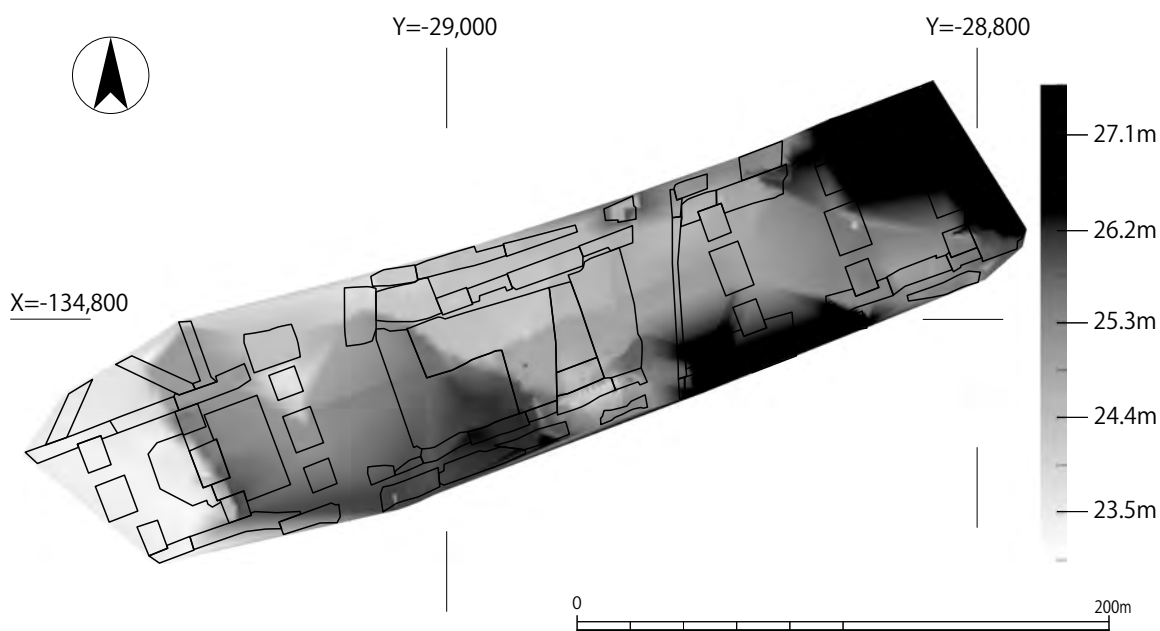


図 187 第 3-1 面 段彩図

図 187 に調査地中心部分の、第 3 - 1 面の遺構面の標高から作成した段彩図を示す。凡例に示すように標高によって色の濃さを変えており、黒が標高の高い部分、白が標高の低い部分を表す。図 187 と図 188 を比較すると、段 1・2・3・4 が、図 187 で色の濃さが著しく異なる部分にあたるのが読み取れる。このことから、平坦面から急激に低くなる谷への落ち肩に段が位置していることが判る。

なお、図 187 に示した標高を表 5 に示す。

畦畔 (図 188)

当調査区内で主要な区画が、谷地形の高低差を利用した段と考えるならば、水がかりを良くし水田として利用するためには、さらに細かな区画をする畦畔が必要である。このような畦畔は、段 1 と段 2・段 3 で区画された谷 1 および、段 4 の西側の谷 3 で検出している。

谷 1 で検出した畦畔は、図 187 から判るように、大きく南西から北東へ低くなる地形を区画するため、この地形に対し直行・並行する方向に造られている。

畦畔 1・畦畔 2・畦畔 3 は、北東から南西方向に延びる畦畔で、段 3 に取り付く。段 1・段 2 付近では、

表 4 第 3 - 1 面全体図 調査区別遺構面一覧

平坦面 1		平坦面 2		平坦面 3		平坦面 4		谷 1		谷 2		谷 3	
4-1区	第6面	8-1区	第6面	1-3区	第6面	12-1区	第3-1面	1-1区	第3-4面	7-1区	第3-1面	2-2区	第6面※
4-2区	第6面	8-2区	第3-1面	2-1区	第3-1面	12-2区	第6面	1-2区	第3-1面	7-4区	第3-1面	2-3区	第6面※
4-3区	第6面	8-3区	第6面	7-2区	第2面 第6面□	13区	第3-1面	5-2区	第3-1面※	7-5区	第3-2面※	3-1区	-
4-4区	第6面	8-4区	第3-1面	7-3区	第3-1面 第6面□	14区	第3-1面	5-3区	第3-1面※	11-5区	第3-1面	3-2区	-
5-1区	第6面	9-2区	第3-1面△	7-6区	第6面	16-1区	第6面	5-4区	第3-1面	15-2区	第3-1面※	3-3区	-
10-1区	第6面	21-3区	第6面	7-7区	第6面	16-2区	第6面	6-1区	第3-2面	15-3区	第6面	23-3区	第3-1面
10-2区	第6面			7-8区	第6面	18-1区	第6面	6-2区	第3-1面	15-4区	第6面	24-5区	第3-1面
17-1区	第6面			7-9区	第6面	18-2区	第6面	6-3区	第3-1面			24-6区	第3-1面
17-2区	第6面			7-10区	第6面	18-3区	第6面	6-4区	第3-1面			24-7区	第3-1面※
19-1区	第6面			11-2区	第6面△			6-5区	第3-1面※			25-2区	第3-1面
19-2区	第6面			23-1区	第6面			6-6区	第6面 第3-1面※○				
20-1区	第6面			23-2区	第6面△			6-7区	第3-1面				
22-1区	第3-2面			24-2区	第3-1面			6-8区	第3-1面				
22-2区	第3-1面			24-3区	第3-1面△			6-9区	第3-1面				
				24-4区	第3-1面△			6-10区	第3-1面				
				25-1区	第6面			9-1区	第3-3面				
								9-3区	第3-1面				
								9-4区	第3-2面				
								9-5区	第3-1面※				
								10-3区	第3-1面※				
								11-1区	第3-1面※				
								11-3区	第3-1面				
								11-4区	第3-1面				
								15-1区	第3-1面				
								17-3区	第3-1面 第6面※○				
								19-3区	第3-1面※				
								20-2区	第3-1面※				
								20-3区	第3-1面				
								21-1区	第3-1面				
								21-2区	第3-1面※				
								24-1区	第4面				

□ 近・現代の耕作等により、遺構面の遺存状況悪く、異なる遺構面から遺構を抽出・合成したため遺構面名を併記している

※ 谷に区分している調査区であるが、一部平坦面がかかる

△ 平坦面に区分している調査区であるが、一部谷がかかる

○ 谷と平坦面の両方を検出した調査区で、平坦面の遺構を抽出・合成したため遺構面名を併記している

これらの畦畔続きを検出していないが、おそらく段1・段2に取り付いていたと考えられ、谷1内を横断する基幹の畦畔と考えられる。畦畔自体の高さは、上面からの削平によりほとんどないが、畦畔を境に北側と南側では10から30cmの比高がみられる。畦畔には、粗朶を打ち込んでおり、畦畔の崩壊を防いでいたと考えられる。なお、粗朶による畦畔の補強がみられるのは、谷を横断するこれらの基幹畦畔のみである。

畦畔4・畦畔5は、畦畔2と畦畔3の間を東西に区画する畦畔で、畦畔9は畦畔3と段3に取り付けて区画を形成している。各畦畔によって区画された田面は、東から西への比高がみられる。

畦畔6・畦畔7・畦畔8は、畦畔3からほぼ北へ延びており、畦畔3から北側の田面を東西に区画している。畦畔3に畦畔8と畦畔9が取り付くやや東側に幅約12cmの水口が設けられている。田面の比高から見て、南から北へ水を配っていたと考えられる。

谷3で検出した畦畔は、削平によりほとんど高さはない。畦畔13・畦畔14・畦畔15・畦畔16は、ほぼ北東から南西方向に延びる畦畔で、段4に取り付いていたと考えられる。いずれの畦畔にも粗朶が打ち込まれ補強がなされており、特に畦畔14には多く認められた。畦畔12は、地形の傾斜に対して並行する畦畔でおそらく畦畔13に取り付くと考えられるが、削平が著しく痕跡のみの検出であった。

表5 第3-1面段彩 調査区別標高一覧

平坦面1		平坦面2		平坦面3		平坦面4		谷1		谷2		谷3	
4-1区	27.36	8-1区	26.40	1-3区	25.60	12-1区	23.70	1-1区	23.74	7-1区	25.24	2-2区	23.73
4-2区	27.29	8-2区	26.52	2-1区	25.40	12-2区	23.76	1-2区	24.99	7-4区	25.09	2-3区	24.67
4-3区	27.20	8-3区	26.40	7-2区	26.07	13区	23.54	5-2区	25.19	7-5区	24.44	3-1区	-
4-4区	27.10	8-4区	26.59	7-3区	25.93	14区	23.35	5-3区	24.89	11-5区	24.63	3-2区	-
5-1区	25.33	9-2区	26.44	7-6区	25.60	16-1区	22.70	5-4区	24.61	15-2区	25.10	3-3区	-
10-1区	27.30	21-3区	26.35	7-7区	26.00	16-2区	22.70	6-1区	24.68	15-3区	25.80	23-3区	23.40
10-2区	27.37			7-8区	26.20	18-1区	22.55	6-2区	24.47	15-4区	25.50	24-5区	23.53
17-1区	27.80			7-9区	25.80	18-2区	22.70	6-3区	24.33			24-6区	23.44
17-2区	28.00			7-10区	25.80	18-3区	22.70	6-4区	24.09			24-7区	23.63
19-1区	27.20			11-2区	25.97			6-5区	23.91			25-2区	23.46
19-2区	27.20			23-1区	25.80			6-6区	24.30				
20-1区	26.60			23-2区	25.70			6-7区	24.25				
22-1区	27.37			24-2区	25.01			6-8区	24.26				
22-2区	27.32			24-3区	24.94			6-9区	24.34				
				24-4区	24.99			6-10区	24.59				
				25-1区	25.40			9-1区	25.33				
								9-3区	25.49				
								9-4区	25.03				
								9-5区	25.33				
								10-3区	26.44				
								11-1区	24.57				
								11-3区	25.09				
								11-4区	24.68				
								15-1区	24.90				
								17-3区	25.80				
								19-3区	25.43				
								20-2区	25.47				
								20-3区	25.42				
								21-1区	24.47				
								21-2区	24.94				
								24-1区	24.34				

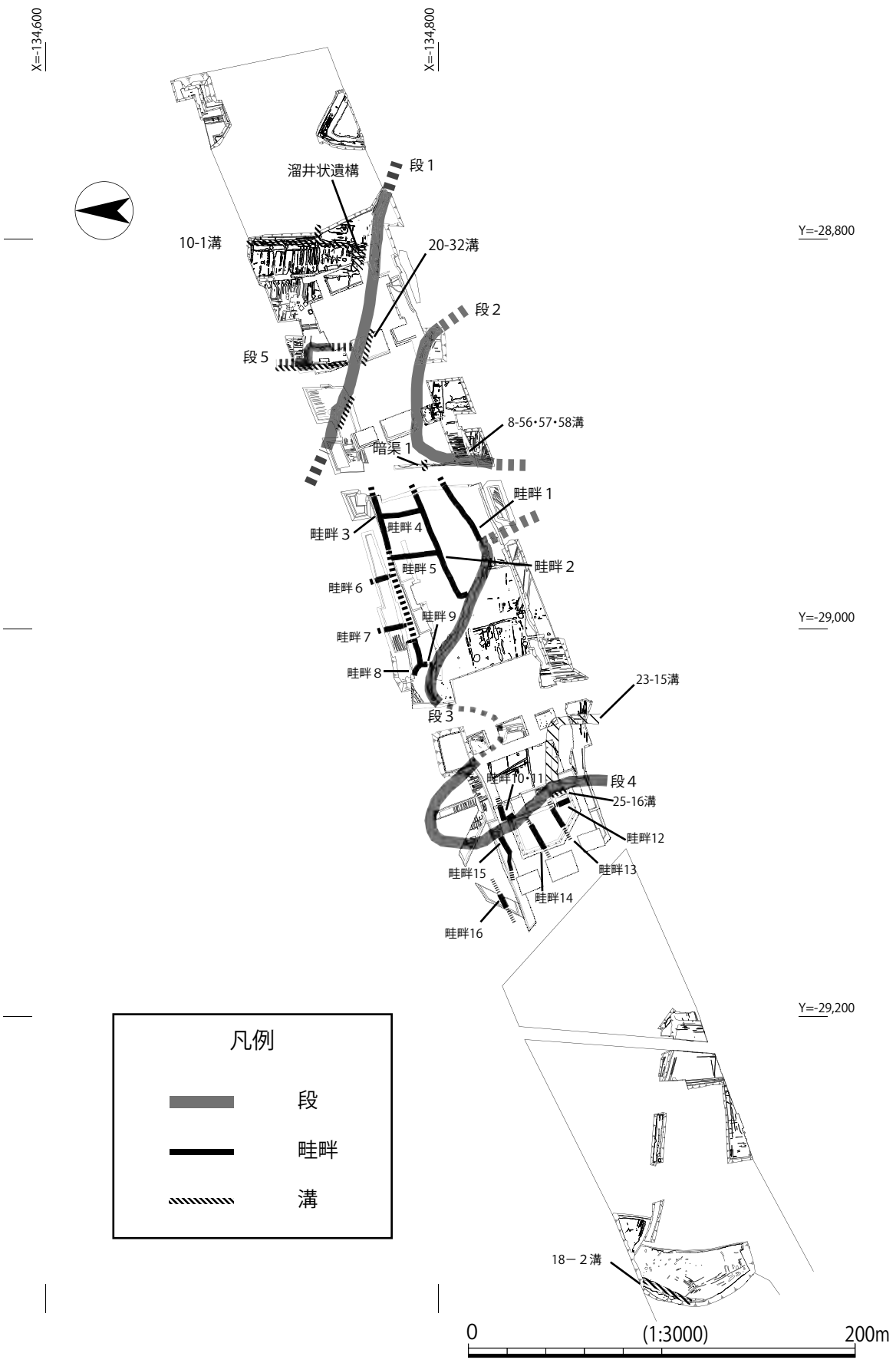


图 188 第 3-1 面 遺構配置图

平坦面3では、谷3への落ち際付近で畦畔10・畦畔11を検出した。平坦面3においては、北西へ舌状に飛び出した部分が南側より低くなっており、谷1や谷3に供給された自然堆積層が及んでいる。

このため、自然堆積層下で畦畔を検出できた。畦畔10は、北東から南西方向に延びており、畦畔11はこれに直行する畦畔である。畦畔11は段4に伴う畦畔で、この部分でしか検出できていないが、本来は段4に沿って延びていたと考えられる。

溝

平坦面1

10-1溝 (図188・189)

10-1溝は、幅約2.12mで深さは平均0.43m、検出長は53.4mを測り、ほぼ南北方向に延びる。

規模から見て、おそらく平坦面1上の基幹水路と考えられる。埋土は、底部付近にラミナがみられるシルトと中砂から粗砂、その上部はブロック土の層が堆積している。出土遺物は、陶器・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦・サヌカイト片など、中世から近世の遺物が出土している。近世もしくは近代に、廃絶・埋め戻されたと考えられる。なお、10-1溝の南端は、平面形が長方形を呈する溜井状遺構に取り付いており、取り付け部分は瓦製土管を使った暗渠が設けられていた。おそらく、この遺構も10-1溝が埋められたのと同時期に埋め戻されたと考えられる。

平坦面3

8-56溝 (図188・189)

8-56溝は、幅約10.7cmで深さは約19cm、検出長は約5.88mを測る。埋土は、細砂混じりシルトで、機能時の堆積はみられない。図化はしていないが、13世紀後半の楠葉型瓦器碗片と、瓦質土器・須恵器・土師器の破片が出土している。

8-57溝 (図188・189)

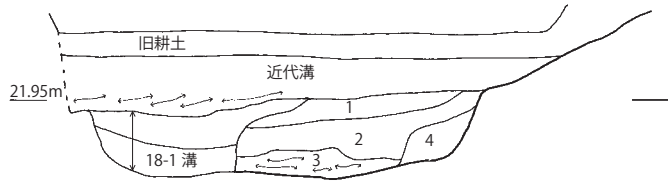
8-57溝は、幅約41cmで深さは約8cm、検出長は約6.04mを測る。埋土は、細砂混じりシルトで機能時の堆積はみられない。遺物は、瓦器・須恵器・土師器の破片が出土しているが、時期を特定できる資料はない。

8-58溝 (図188・189・214 図版73・32-1)

8-58溝は、幅約1.06mで深さは約8cm、検出長は約6.23mを測る。埋土は、最下層に細砂層が堆積しており機能時の堆積と考えられる。上層は、微砂混じりシルトと細砂混じりシルトで、埋め戻し土であろう。溝の東肩から、24・25の瓦器碗が重なった状態で出土している。他にも18から23と26・27に示す、瓦質羽釜・土師質羽釜・土師器皿・瓦器碗・須恵器甕・白磁高台が出土している。13世紀全般の遺物が出土しているが、もっとも新しい13世紀後半頃に埋められたと考えられる。

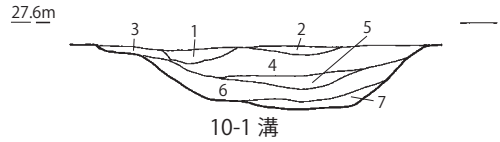
23-15溝 (図188・216、図版32-3・4)

23-15溝は、谷3から東へ約28m延び、南へ曲がる溝で、谷3を背後におそらくコの字を描くと考えられる大規模な溝である。幅は約5.1mで、谷3への取り付け部分では6.47mと広くなる。深さは2.41mで、谷3への取り付け部分では浅くなり2.13mを測る。延長は、51.45mを検出しており、南へさらに延びている。断面はV字上を呈し、斜度は溝の南・西側が約50度、北・東側が約40度を測り、一度溝内に入ると上がることが非常に難しい傾斜である。埋土の下部は、機能時堆積と考えられるラミナのみられる極細砂と細砂から極細砂層が約60cm堆積している。その上部は、シルトブロックを含む砂礫混じりシルトなどが堆積している。堆積状況から内側から一気に埋められたと考えられる。



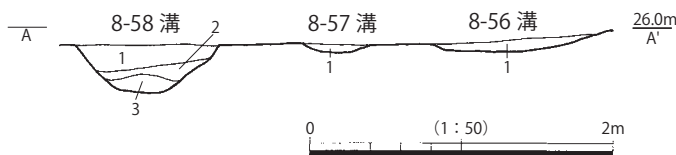
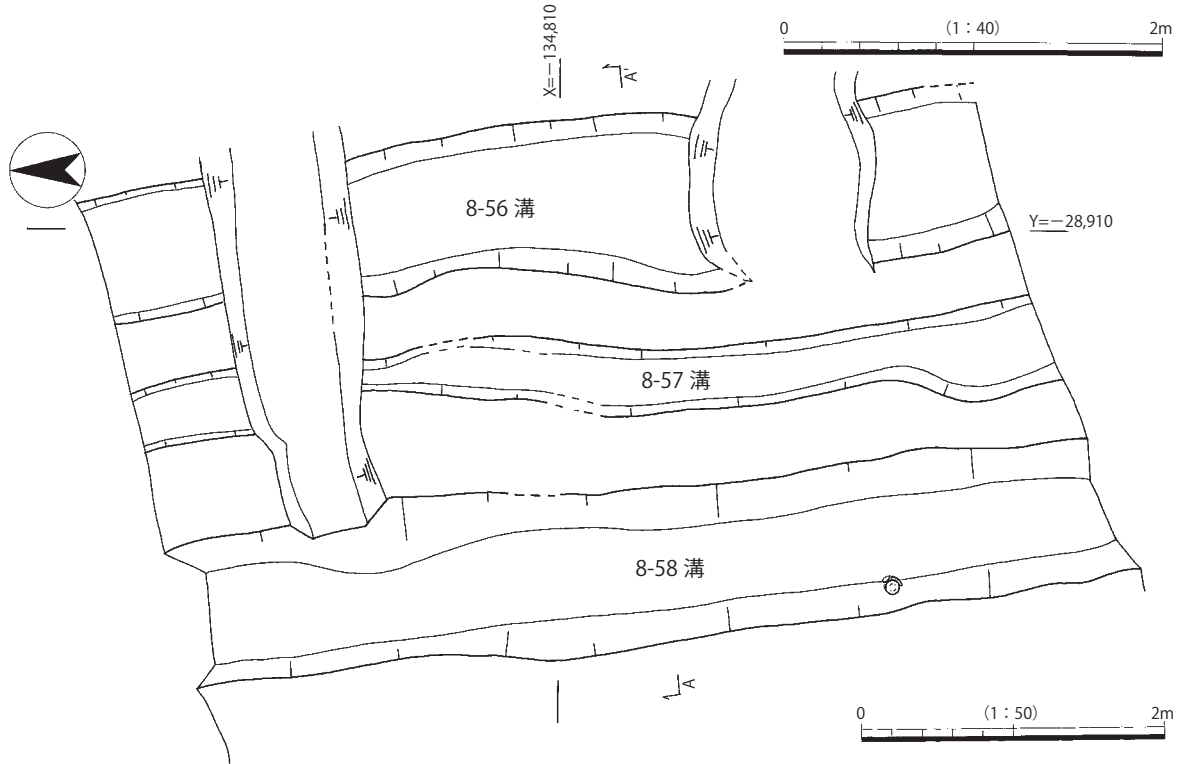
18-2 溝

- 1 7.5Y3/1 オリーブ黒色土
- 2 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 (平安期の土器含む)
- 3 10YR7/2 にぶい黄褐色砂層 部分的にシルト入る ラミナあり
- 4 N31 暗灰色粘質土砂礫混じり (5mm 以下)

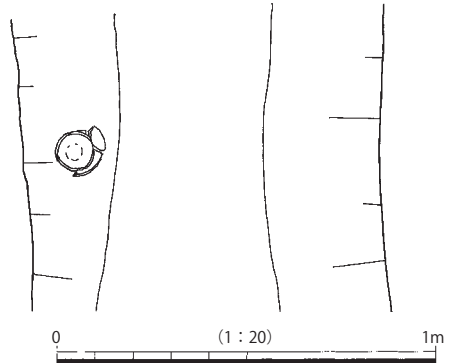


10-1 溝

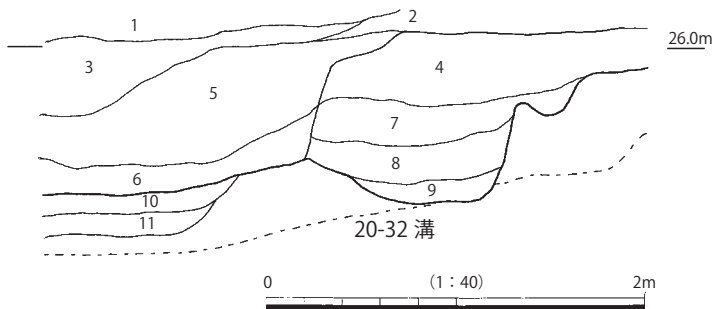
- 1 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂混 シルト～細砂
マンガン粒含む
- 2 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂混 細砂 マンガン粒含む
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗砂混 シルト～細砂 (鋤溝)
- 4 2.5Y6/2 灰黄色 粗砂混 シルト～細砂 鉄分沈着
- 5 10YR7/2 灰黄色 シルト～細砂 中砂含む ラミナあり
- 6 5Y6/1 灰色 粗砂混 シルト～細砂 ラミナあり
- 7 2.5GY5/1 オリーブ灰色 粗砂混 シルト～細砂 ラミナあり



- 8-58 溝 1 2.5Y6/1 黄灰色 細砂混シルト
- 2 10YR6/2 灰黄褐色 微砂混シルト
- 3 10YR5/1 褐灰色 細砂
- 8-57 溝 1 10YR6/2 灰黄褐色 細砂混シルト
- 8-56 溝 1 10YR6/2 灰黄褐色 細砂混シルト



8-58 溝 遺物出土状況図



- 1 5GY7/1 明緑灰色 砂礫混シルトブロックを含む
作土 2a 層の上面溝埋土
- 2 7.5Y6/1 灰色 砂礫混じりシルト 極細砂～細砂を多く含む
作土 2a 層
- 3 10Y6/1 灰色 砂礫混粘質シルト 作土 2a 層の上面溝埋土
- 4 10Y6/1 灰色 細砂～中砂混シルト 作土 2a 層
- 5 5BG5/1 青灰色 細砂～中砂混粘質シルト
作土 2a 層上面の溝埋土
- 6 5B6/1 青灰色 細砂混粘質シルト 作土 2a 層上面の溝埋土
- 7 5Y6/1 灰色 砂礫混シルト 20-32 溝埋土
- 8 2.5Y6/1 黄灰色 粗砂混シルト 20-32 溝埋土
- 9 N51 灰色 砂礫混粘質シルト 20-32 溝埋土
- 10 N51 灰色 細砂～極粗砂混シルト 作土 3-1a 層
- 11 N41 灰色 細砂混粘質シルト 作土 3-2a 層

図 189 10-1 溝 8-56・57・58 溝 18-2 溝 20-32 溝 平・断面図

規模に対し出土遺物は非常に少なく10点前後で、88から90、102に示す14世紀と考えられる土師器皿、13世紀後半の楕葉型瓦器椀、鉄釘、砥石などが出土しているが、17世紀代の陶器片が1点出土しており、埋没年代は17世紀代と考えられる。農業用水路として考えることは難しく、当該時期における一種の防御施設の可能性も考えられる。

平坦面4

18-1・2溝 (図188・189・216、図版75・84・85)

18-2溝(18-447溝)は、南東-北西方向の溝で、この溝を掘り込んで18-1溝があり、18-2溝の西肩は失われている。18-2溝の残存幅は約0.9m、深さ0.93m、検出長は27.4mを測る。

埋土は、下部に機能時堆積のラミナがみられる砂層が堆積しており、その上部に粘質土が2層堆積している。上部の堆積層は、おそらく18-1溝を作る際に溝を埋めた層と思われる。

18-2溝の埋土中からは、115から129に示す底部に線刻がみられる黒色土器B類椀、製塩土器口縁部、土師器杯・椀・小皿・皿・甕、太型蛤刃石斧、石庖丁や、図化はしていないが土師質羽釜・瓦質土器・瓦器・須恵器・土師器片が出土している。古墳時代や弥生時代の遺物は、周辺の土を削って溝を埋めた際、混入したと考えられる。

18-1溝は、18-2溝を埋めた後、掘削されており埋土中から、114に示す平安時代の須恵器壺底部が出土している。18-2溝に替わって、水路としての機能を果たしたと考えられる。

谷1

20-32溝 (図188・189)

段1の下端に沿って、20-32溝を検出している。幅は約1.7mで深さ約0.3m、検出長は13.5mを測る。埋土は、上層が灰粗砂から極粗砂混じりシルト、下層が灰細砂混じり粘質シルトである。いずれの層にもラミナは見られない。出土遺物は、図化できなかったが瓦・瓦質播鉢・土師器・須恵器片が出土している。段1の北西延長上に、20-32溝の延長と考えられる溝を検出している。

暗渠

谷2

暗渠1 (図188・347、図版80・32-2)

暗渠1では、瓦質土管と組み合わせた986・987に示す須恵質土製品が出土している。この須恵質土製品は、古墳の檣の構築材を転用したものである。破片ではあるが2個体が出土している。

986は、やや残りが良く幅33cm、残存高38cmの板状の粘土に、長径23cmの半円筒を接合した形状の土製品である。断面は、板状の粘土が鱗状に飛び出した、カマボコ形を呈している。円筒部外面はタテ方向のハケ調整、板状の部分は基本的にタテ方向のユビナデと粗い縦方向のハケ調整がみられる他、赤色顔料が塗布されている。

987は、残存幅10cm、残存高12cmで残りは悪いが986と良く似た形状・調整でさらに、986の鱗状の飛び出しに並行するように板状の鱗が付け加えられている。986の飛び出した一枚の鱗を、987の並行する2枚の鱗に差し込み、円筒部を外側にし、986と987を交互に組み合わせ、檣を構築したと考えられる。

同様な形状のものは、京田辺市堀切古墳群において、7世紀前半とされる7号横穴墓から出土している。近世の暗渠に転用していたことから、当遺跡周辺にこのような檣構築材を使用した古墳が存在していた可能性が考えられる。

次に、平坦面や谷内の落ち際付近で検出した遺構について記す。これらの遺構は、3 a層を除去した基盤層上面で検出しているが、出土遺物から多くは、平安時代から鎌倉時代に帰属する遺構である。これらの遺構は、本来3 a層として捉えられる土壌層上面から掘り込まれた遺構と考えられるものである。

平坦面 1

掘立柱建物

掘立柱建物 13 (図 191・213、図版 33-1)

掘立柱建物 13 は、梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟である。梁行寸法は 3.5 m、桁行寸法は 5.0 m で、身舎の面積は 17.5 m²を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.7 m と 1.8 m、桁行方向は 1.6 m と 1.8 m である。

棟筋は、北で東へ約 3° 振れる。柱穴の平面形は、楕円形から不整形円形を呈し、直径もしくは長径は 28 から 64 cm、深さはおおむね 8 から 16 cm を測るが、10-59 柱穴のみ 42 cm で他の柱穴より 2.5 倍深い。10-55 柱穴・10-58 柱穴には、柱痕跡が見られた。特に 10-55 柱穴の掘方底面には、柱の自重と建物の荷重が柱にかかって生じた圧痕がみられた。掘方埋土は、大きく黄褐色系の粗砂混じりシルトである。

10-59 柱穴から、1 に示す 8 世紀前半と考えられる須恵器杯口縁片が出土している他、他の柱穴から土師器・須恵器片やサヌカイト片が出土している。出土遺物から、平安時代前半の建物と考えられる。



図 190 3 a層帰属 建物等遺構配置図 (平坦面 1 中世)

ピット

4-98ピット (図190・194・213)

4-98ピットは、掘方の平面形がほぼ円形を呈し、直径は約28cmを測る。深さは約45cmで、埋土は大きく上下2層に分層できる。上層は、灰黄褐細砂で粗砂と直径3cm以下の基盤層ブロックが入る。

下層は、オリーブ褐細砂から粗砂とやや粘質で粗砂を含むにぶい黄褐細砂である。建物を構成するものではない。上層内から、正立した状態で5に示す11世紀末から12世紀初頭の土師器皿が出土している他、6の11世紀後半の黒色土器B類と、図化していないが土師器皿が出土している。上中下と約4cmの間隔で出土しており、おそらくピットを埋めながら、順に土器を納めたと考えられる。

4-90ピット (図190・194・213、図版71・32-5)

4-90ピットは、掘方の平面形が楕円形を呈し、長径は約24cm、短径は約21cmを測る。深さは約15cmと浅い。抜き取り穴がみられるが、周辺にはこのピットと共に建物を構成するピットは検出できなかった。埋土は、掘方が浅黄砂礫混じりシルトで、抜き取り穴埋土は灰粗砂混じりシルトである。

抜き取り穴内から、2から4の11世紀後半の土師器小皿・皿が出土している。

平坦面2

掘立柱建物47 (図192・193)

掘立柱建物47は、調査区の端で検出しており全体は明らかでないが、南北棟と考えられる。梁行2間、

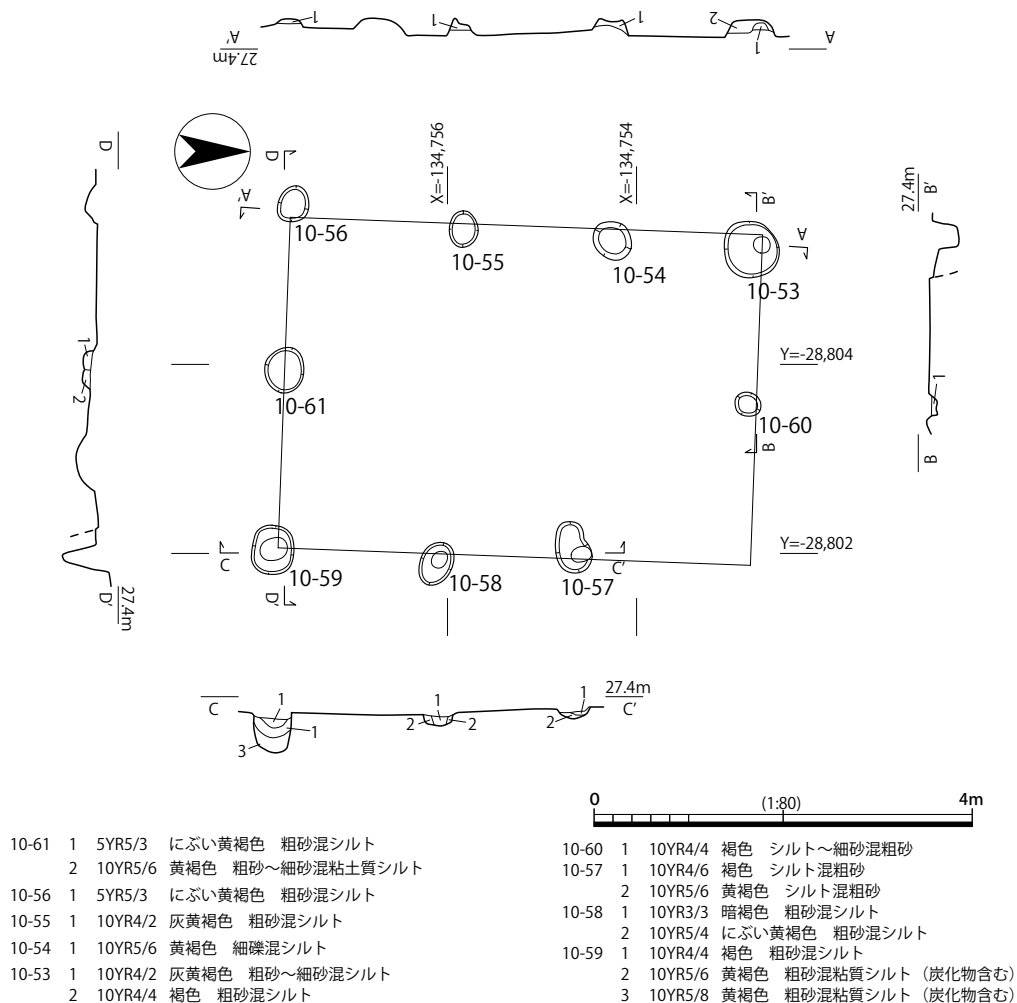


図191 掘立柱建物13 平・断面図

桁行2間を検出している。梁行寸法は3.4 m、桁行寸法は3.8 mである。柱間寸法は、梁行方向1.4 mと2.0 m、桁行方向は1.9 mを測る。建物は、南北方向に向き振れはない。

柱穴の平面形は、方形を呈し、一辺20から30 cm、深さは浅く15 cm前後を測る。掘方底面は、標高26.3 m前後でほぼ揃っている。柱痕跡は21 - 4柱穴以外に見られ、掘方埋土は、灰黄色系の中砂から粗砂を多く含む細砂が主である。出土遺物はなく時期は特定できないが柱穴埋土と、掘方が方形で小振りであることなどから平安時代から鎌倉時代に考えられる建物である。

ピット

8 - 48ピット (図192・213)

8 - 48ピットは、耕作溝に上部を削平されている。掘方の平面形は楕円形を呈し、長軸が約15 cm、短軸は約25 cm、深さは約14 cmを測る。13に示す13世紀前半の土師器小皿が出土している。

8 - 51ピット (図192・213)

8 - 51ピットは、掘方の平面形が円形を呈し、直径26 cm、深さ15 cmを測る。14に示す13世紀後半に考えられる土師器皿が出土している。

8 - 68ピット (図192・213)

8 - 68ピットは、掘方の平面形が円形を呈し、直径30 cm、深さ21 cmを測る。15に示す13世紀初めと考えられる土師器皿が出土している。

21 - 21ピット (図192・213)

21 - 21ピットは、掘方が不整楕円形を呈し、長径80 cm、短径60 cm、深さ10 cmを測る。17に示す13世紀中頃の楠葉型瓦器碗と、16の13世紀の土師器小皿が出土している。

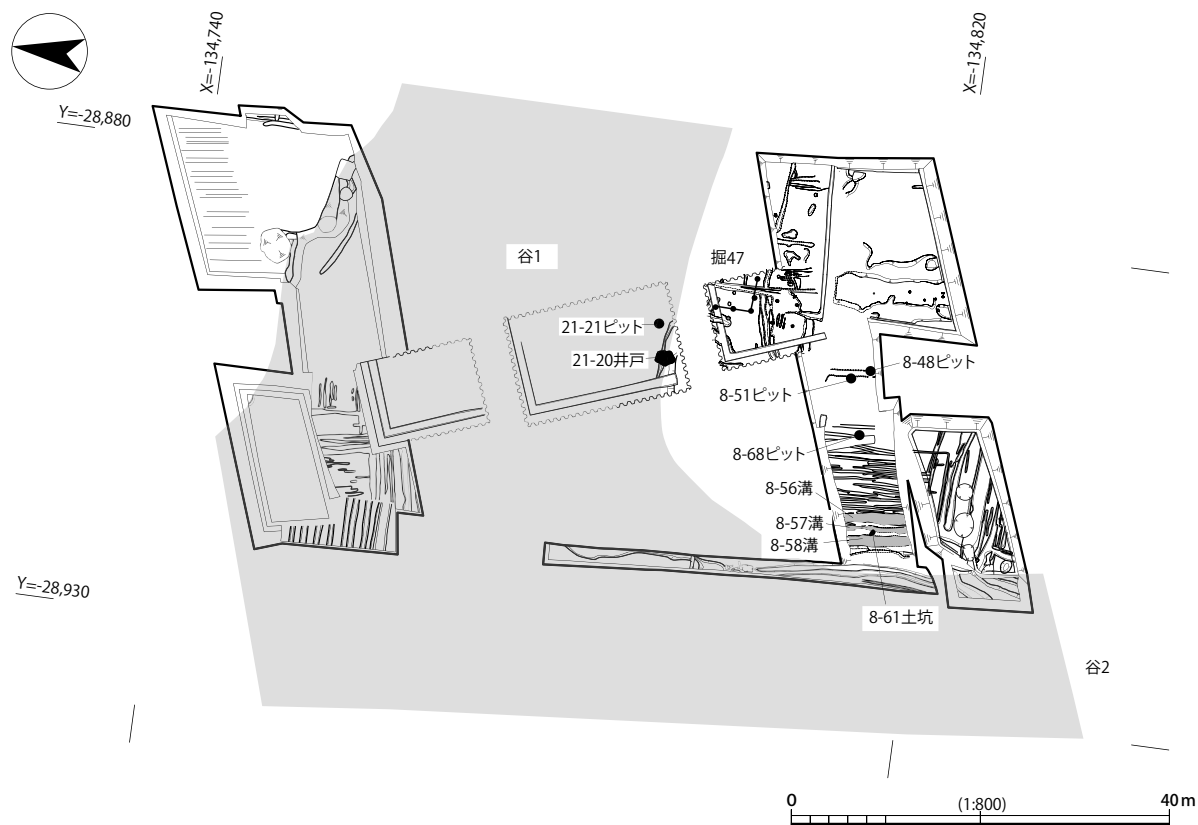
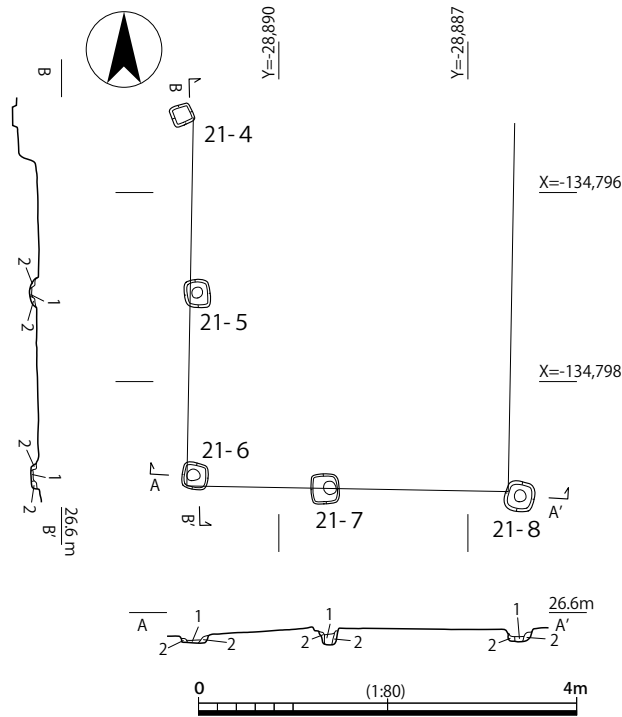
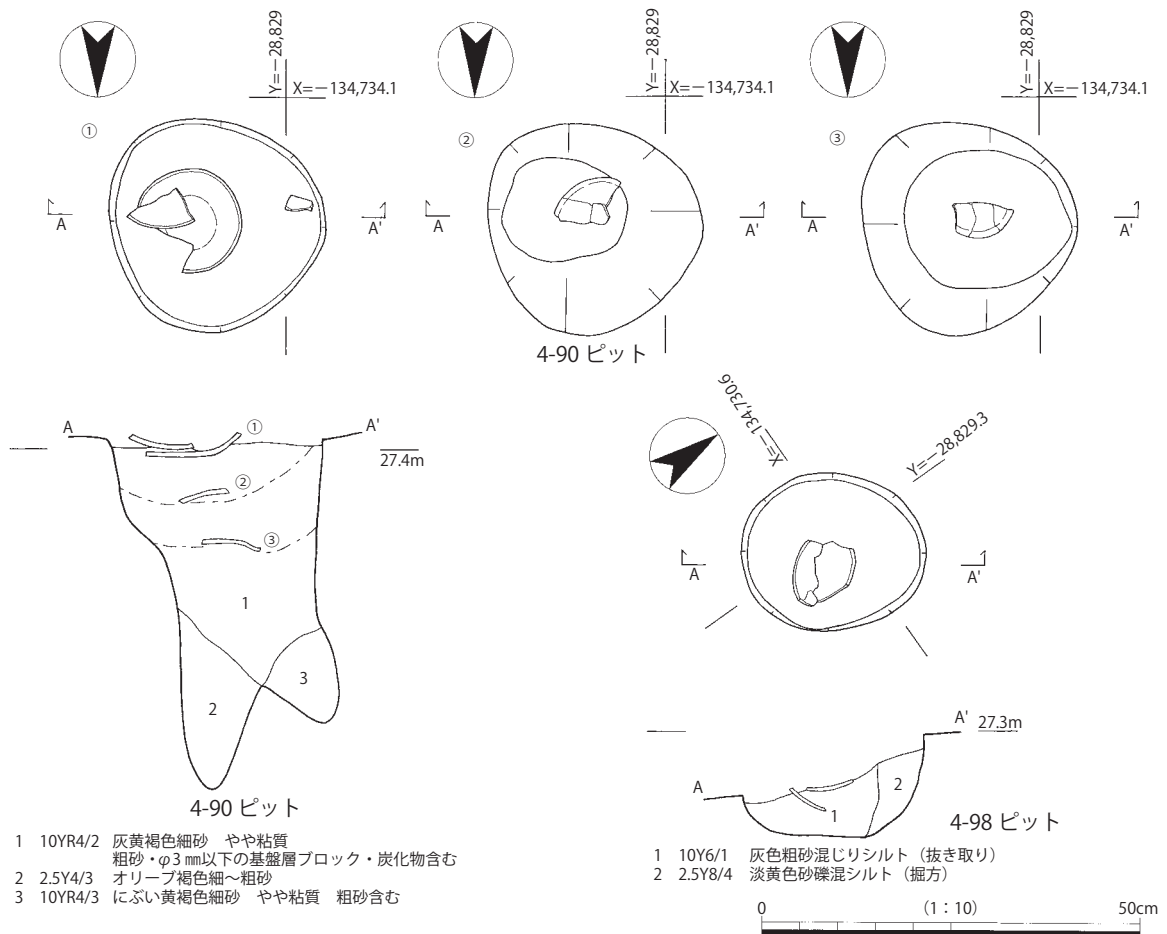


図192 3 a層帰属 建物等遺構配置図 (平坦面2 中世)



- 21-6 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂
中～粗砂を含む (柱痕)
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂
中～粗砂を多量に含む 地山土含む (掘方)
- 21-7 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト
砂質シルト 微～細砂を多量に含む
微～細砂を多量に含む 粗砂を少量含む (柱痕)
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂 中～粗砂を多量に含む
地山土含む (掘方)
- 21-8 1 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルト
微～粗砂を多量に含む (柱痕)
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト
微～粗砂を少量含む (掘方)
- 21-5 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘質シルト
微～粗砂を多量に含む (柱痕)
- 2 2.5Y5/3 黄褐色 細砂 中～粗砂を多量に含む
中～粗砂を多量に含む 地山土含む (掘方)

図 193 掘立柱建物 47 平・断面図



- 1 10YR4/2 灰黄褐色細砂 やや粘質
粗砂・φ3mm以下の基盤層ブロック・炭化物含む
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色細～粗砂
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 やや粘質 粗砂含む

- 1 10Y6/1 灰色粗砂混じりシルト (抜き取り)
- 2 2.5Y8/4 淡黄色砂礫混シルト (掘方)

図 194 4-90ピット 4-98ピット 平・断面図

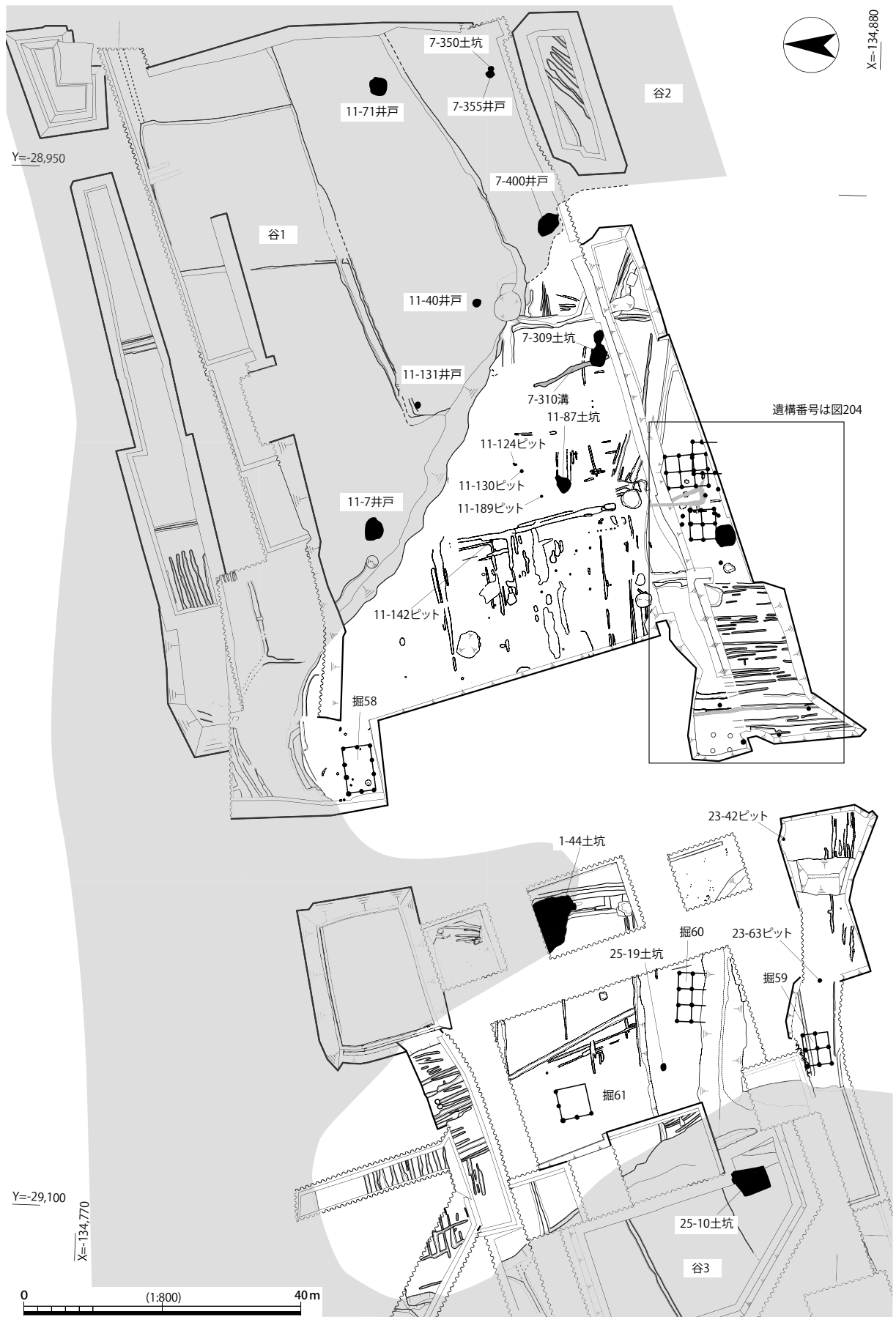


図 195 3 a層帰属 建物等遺構配置図 (平坦面3 中世)

土坑

8-61 土坑 (図 192・213、図版 73)

8-61 土坑は、掘方の前後関係から 8-57 溝と 8-58 溝よりも、新しい遺構である。掘方の平面形は楕円形を呈し、長径は約 84 cm、短径は約 65 cm を測るが、深さは約 15 cm と浅い。

埋土から 13 世紀中頃と考えられる 12 の楠葉型瓦器椀が出土している他、図化していないが土師器皿・甕片が出土している。

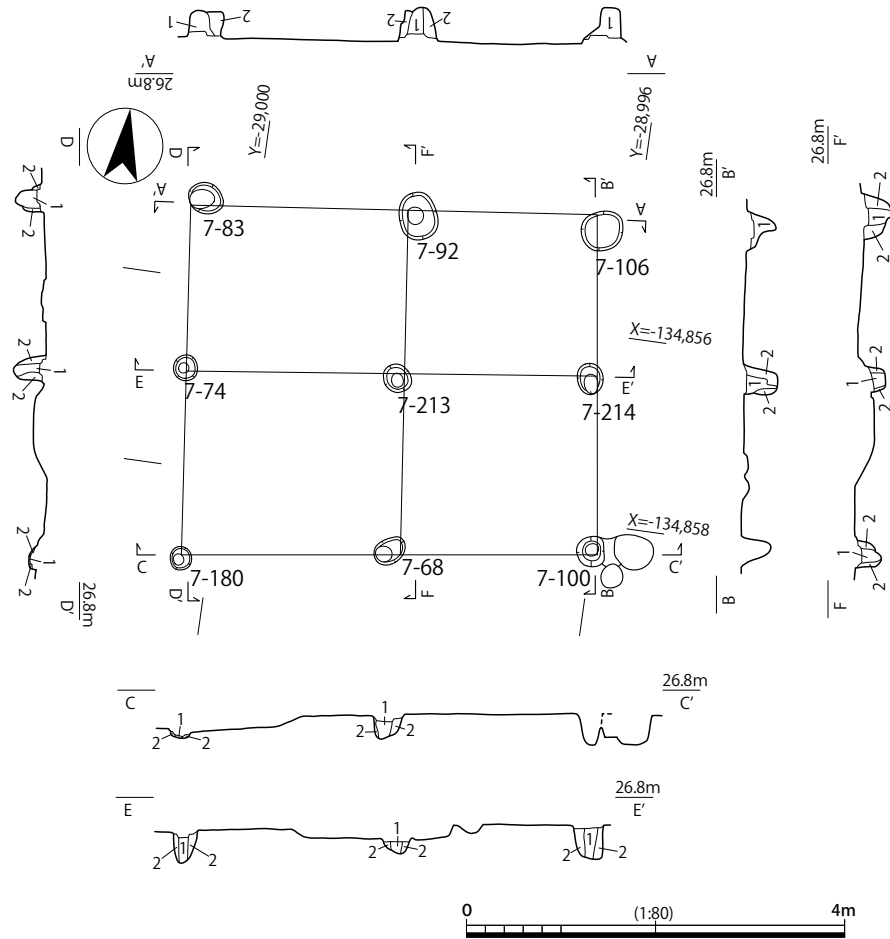
平坦面 3

掘立柱建物

掘立柱建物 18 (図 196・204・213、図版 214・33-2)

掘立柱建物 18 は、梁行 2 間、桁行 2 間の東西棟の総柱の建物である。梁行寸法は 3.6 m と 3.7 m、桁行寸法は 4.3 m と 4.4 m で、身舎の面積は 15.9 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.7 から 1.9 m、桁行方向が 2 から 2.3 m である。棟筋は、西で南へ約 7° 振れる。

柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が 25 から 50 cm、深さは他の遺構によ



7-83	1	10YR4/2	灰黄褐色	細砂	やや粘質	粗砂含む
	2	2.5Y5/4	黄褐色	粘質シルト	粗砂	基盤層土含む
7-92	1	10YR4/2	灰黄褐色	細砂	やや粘質	粗砂と炭化物含む
	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	粗砂	炭化物
						4 cm以下の基盤層ブロック含む
7-106	1	2.5Y5/2	暗灰黄色	細砂	粗砂と	5 cm以下の基盤層ブロック含む
7-214	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	細砂	やや粘質	粗砂含む
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粗砂と	3 cm以下の基盤層ブロック含む	
7-68	1	2.5Y5/2	暗灰黄色	細砂	やや粘質	粗砂含む
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	粗砂と	3 cm以下の基盤層ブロック含む
7-180	1	10YR4/2	灰黄褐色	細砂	やや粘質	粗砂含む
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	細砂	5 cm以下の基盤層ブロック含む	
7-74	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	粗砂と炭化物含む	
	2	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	粗砂と	基盤層土含む
7-213	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	細砂	やや粘質	粗砂含む
	2	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	粗砂と	3 cm以下の基盤層ブロック含む

図 196 掘立柱建物 18 平・断面図

り削平を受けている7-180柱穴以外で、35 cm前後を測る。

抜き取り穴が掘方底面まで達している7-83柱穴や、7-106柱穴・7-100柱穴以外には、直径10から20 cm柱痕跡がみられる。掘方埋土は、おおむね黄褐色系の砂質シルトで基盤層のブロックを含む。

7-214柱穴から、32に示す13世紀前半の土師器の小皿が出土している他、いずれも破片ではあるが瓦器碗片が7-68柱穴・7-83柱穴・7-92柱穴・7-100柱穴・7-106柱穴・7-180柱穴から出土している。また、7-100柱穴からは白磁の破片が出土している。これらの出土遺物から、鎌倉時代の建物と考えられる。

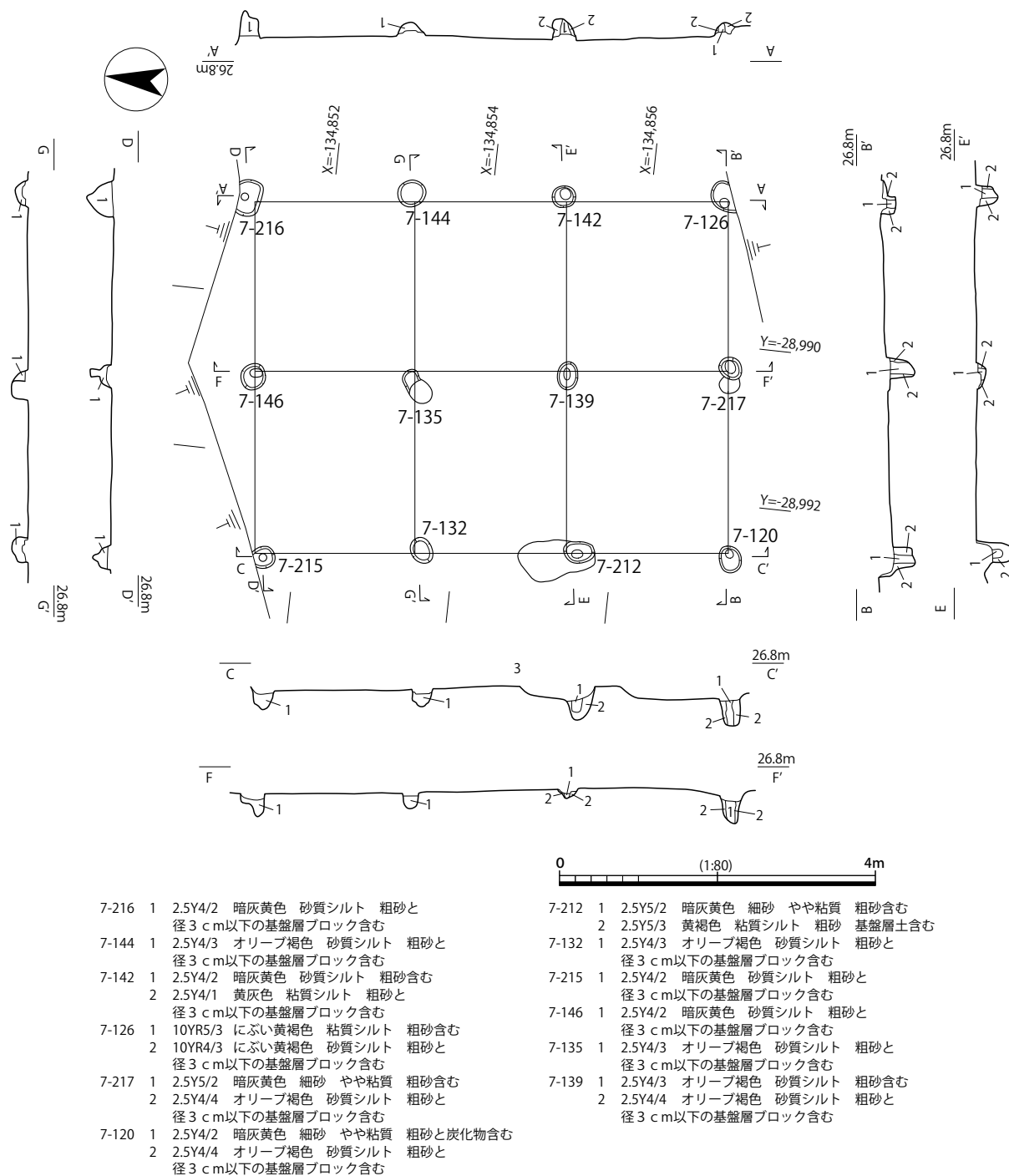


図 197 掘立柱建物 19 平・断面図

掘立柱建物 19 (図 197・204、図版 33 - 3)

掘立柱建物 19 は梁行 2 間、桁行 3 間の総柱の南北棟で、梁行寸法は 4.6 m、桁行寸法は 6.0 m、身舎の面積は 27.6 m²を測る。柱間寸法は、梁行方向 2.3 m、桁行方向が 2 m と揃っており、柱筋の通りが良い。棟筋は、北で東へ約 6° 振れる。

柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径は 31 から 46 cm と揃いである。深さは、7 - 216 柱穴や 7 - 120 柱穴など、40 cm を越えるものもあるが総じて浅く、大きく削平を受けていると考えられる。柱穴埋土は、大きく褐色系の砂質シルトで 6 a 層 (基盤層) のブロックを含む。柱痕跡は約半数に見られ、直径 12 cm 前後を測る。

7 - 126 柱穴・7 - 132 柱穴から土師器の小皿や瓦器碗片が出土しているが図化できる個体はなかった。出土遺物や掘方埋土、建物の向きなどから掘立柱建物 18 と同様、鎌倉時代に属すると考えられよう。

掘立柱建物 58 (図 195・198、図版 33 - 4)

掘立柱建物 58 は、梁行 2 間、桁行 3 間の東西棟である。梁行寸法は西妻側が 3.9 m、東妻側が 4 m。

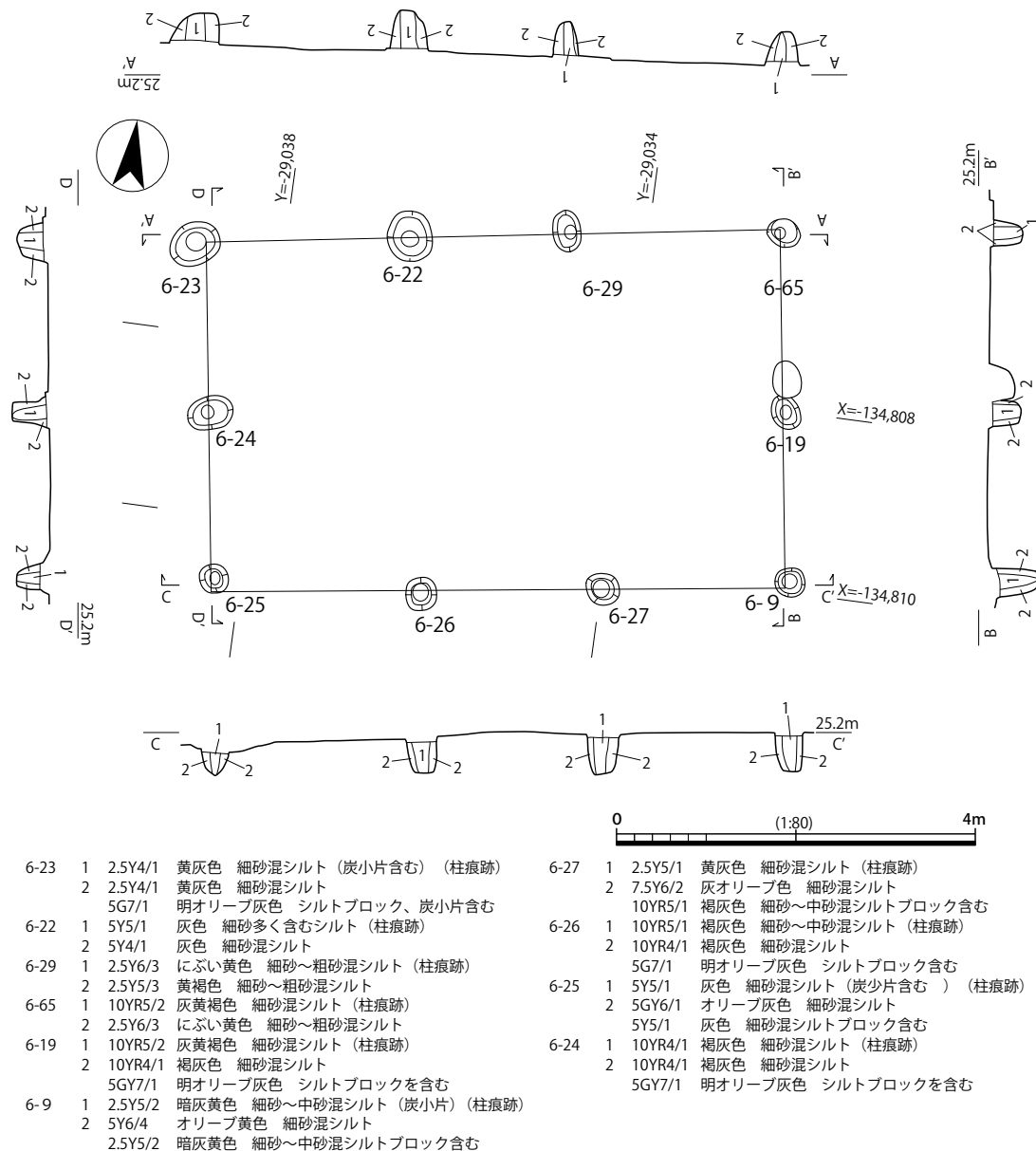
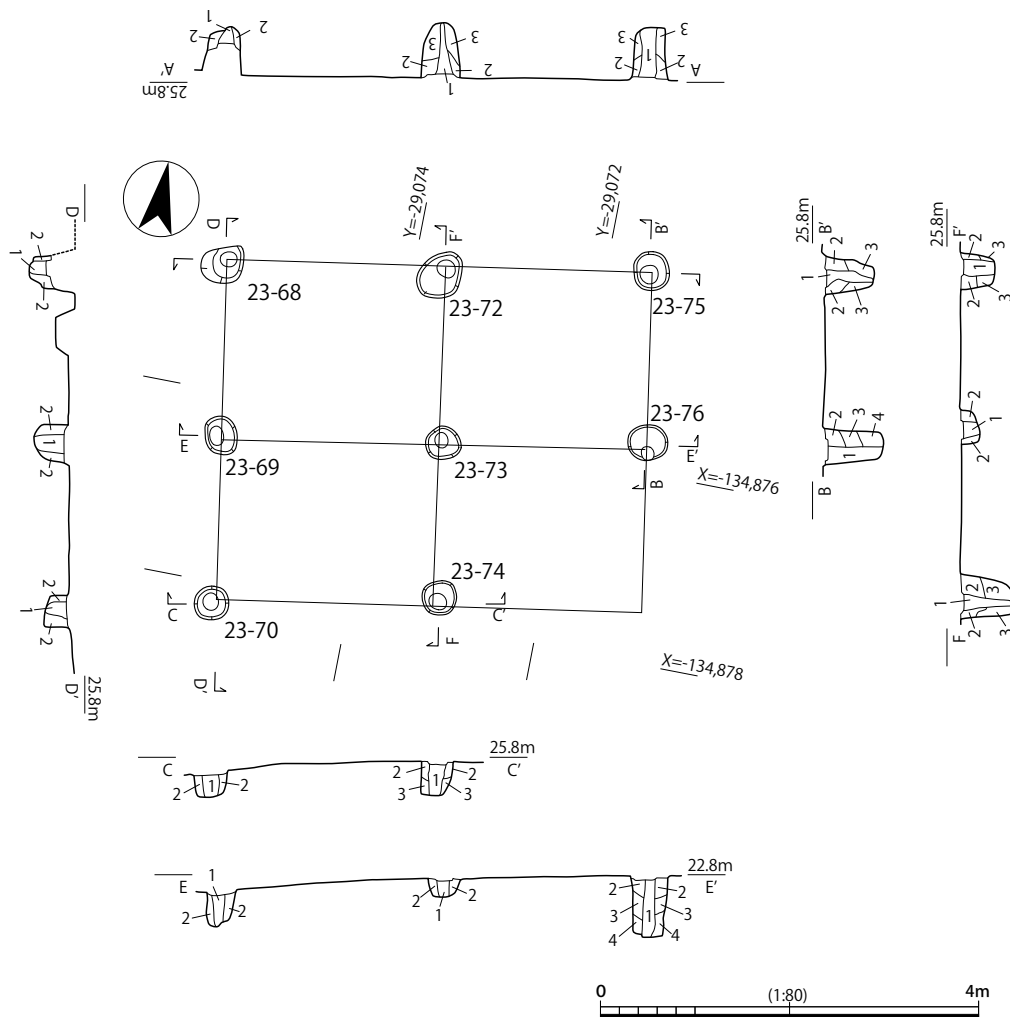


図 198 掘立柱建物 58 平・断面図

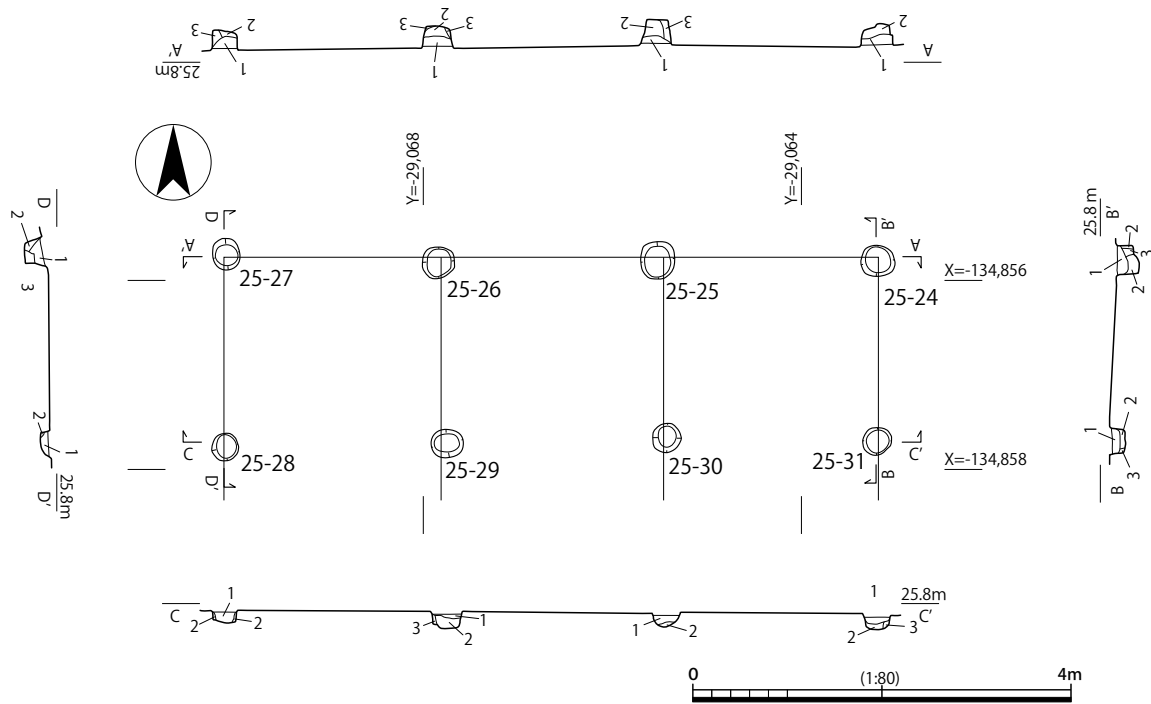
桁行寸法は 6.4 m で、身舎の面積は 25.3 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向は東西両側とも 1.9 m と 2.0 m、桁行方向は 1.8 から 2.3 m を測る。棟筋は西で南へ約 8° 振れる。

柱穴の平面形は、円形および楕円形を呈し、直径もしくは長径は 35 から 60 cm を測るが、北側柱筋の柱穴は、南側柱筋の柱穴に比べやや大きい傾向を示す。深さは、0.3 から 0.44 m を測る。全ての柱穴に、直径 13 から 27 cm の柱痕跡が認められる。掘方埋土は、黄褐色系の色調の細砂から中砂混じりシルトで基盤層のブロックを含むものが多い。6-9 柱穴から黒色土器 B 類片、6-25 柱穴からは黒色土器 A 類片が出土している他、土師器片が出土しているが、図化できる遺物はない。出土遺物から平安時代の建物と考えられる。



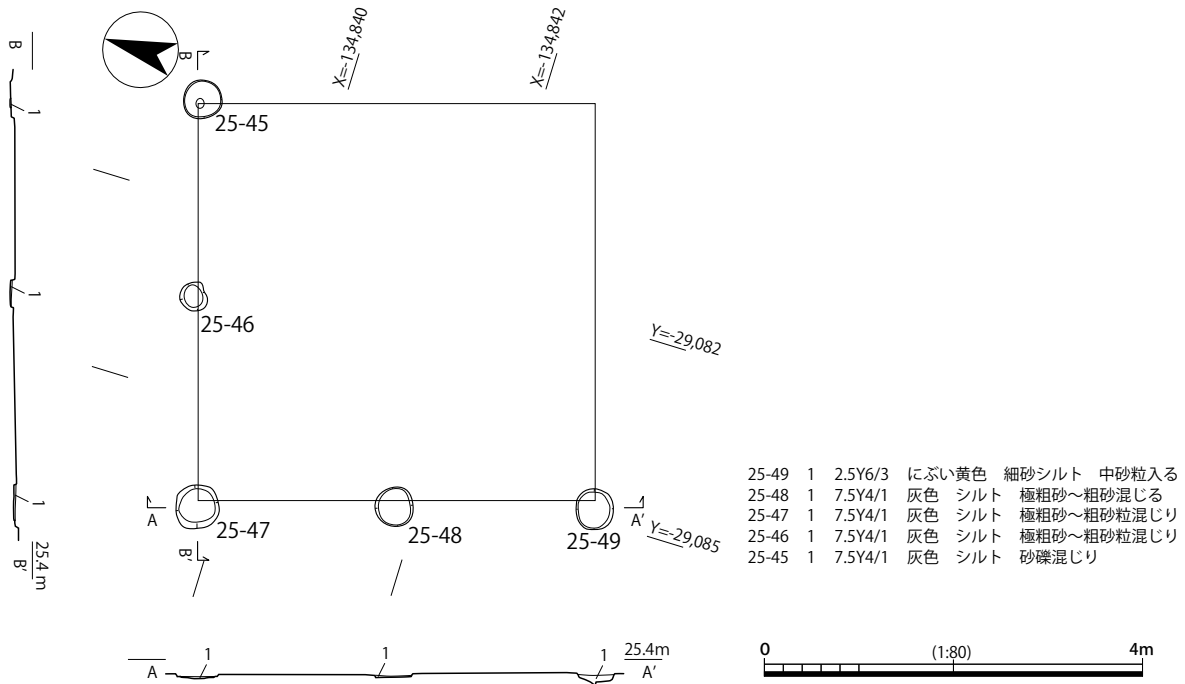
23-68	1	10GY6/1	緑灰色	粗砂混シルト	23-74	1	10YR6/1	灰色	粗砂混粘質シルト
	2	10BG7/1	明青灰色	極粗砂		2	10YR6/1	灰色	砂礫混シルト
		5Y6/1	灰色	シルトを少量含む		3	5Y5/1	灰色	粗砂混シルト
23-72	1	10YR5/1	褐灰色	粗砂混粘質シルト	23-70	1	10YR5/1	褐灰色	粗砂混粘質シルト
	2	2.5Y6/1	黄灰色	粗砂混シルト		2	2.5Y6/1	黄灰色	粗砂～極細砂混シルト
		2.5Y8/4	淡黄灰色	砂礫を含む			5Y8/4	淡黄色	砂礫ブロックを含む
	3	5Y5/1	黄灰色	砂礫混シルト	23-69	1	10YR5/1	褐灰色	粗砂混シルト
23-75	1	5Y6/1	灰色	粗砂混シルト		2	10Y5/1	灰色	極粗砂混シルト
	2	5Y6/1	灰色	砂礫混シルト			5Y8/4	淡黄色	砂礫ブロックを含む
	3	2.5Y6/1	黄灰色	粗砂混シルト	23-73	1	10Y6/1	灰色	粗砂混粘質シルト
		10Y8/2	灰白色	極粗砂ブロックを含む		2	2.5Y6/1	灰色	砂礫混シルト
23-76	1	2.5Y6/1	黄灰色	粗砂混粘質シルト					
	2	5Y6/1	灰色	細砂混シルト 粗砂を微量に含む					
	3	N5/0	灰色	砂礫混シルト					
	4	10Y6/1	灰色	砂礫混シルト					
		10Y8/2	灰白色	極粗砂ブロックを含む					

図 199 掘立柱建物 59 平・断面図



- | | |
|--|--|
| <p>25-27 1 10YR6/4 にぶい黄褐色 細砂シルト 中砂粒入る
 2 10YR6/2 灰黄褐色 細砂シルト 中砂粒入る
 3 10YR6/1 褐灰色 細砂シルト 中砂粒入る</p> <p>25-26 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂シルト
 粗砂～極粗砂粒入る 炭化物入る
 2 10YR4/2 灰黄褐色 細砂シルト 中砂粒入る
 3 10YR6/4 にぶい黄褐色 細砂シルト</p> <p>25-25 1 10YR6/4 にぶい黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 2 10YR6/2 灰黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 3 10YR5/2 灰黄褐色 細砂シルト やや粘質強い</p> <p>25-24 1 10YR4/2 灰黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 2 10YR5/2 灰黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 土器据えられている層</p> | <p>25-31 1 10YR6/3 にぶい黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 2 10YR6/4 にぶい黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 3 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る</p> <p>25-30 1 10YR5/2 灰黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る</p> <p>25-29 1 10YR6/6 明黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 2 10YR6/3 にぶい黄褐色 細砂シルト 粗砂～細砂粒入る
 マンガン
 3 10YR6/2 灰黄褐色 細砂シルト</p> <p>25-28 1 10YR5/2 灰黄褐色 細砂混シルト
 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂シルト混じり</p> |
|--|--|

図 200 掘立柱建物 60 平・断面図



- | |
|--|
| <p>25-49 1 2.5Y6/3 にぶい黄色 細砂シルト 中砂粒入る
 25-48 1 7.5Y4/1 灰色 シルト 極粗砂～粗砂混じり
 25-47 1 7.5Y4/1 灰色 シルト 極粗砂～粗砂粒混じり
 25-46 1 7.5Y4/1 灰色 シルト 極粗砂～粗砂粒混じり
 25-45 1 7.5Y4/1 灰色 シルト 砂礫混じり</p> |
|--|

図 201 掘立柱建物 61 平・断面図

掘立柱建物 59 (図 195・199)

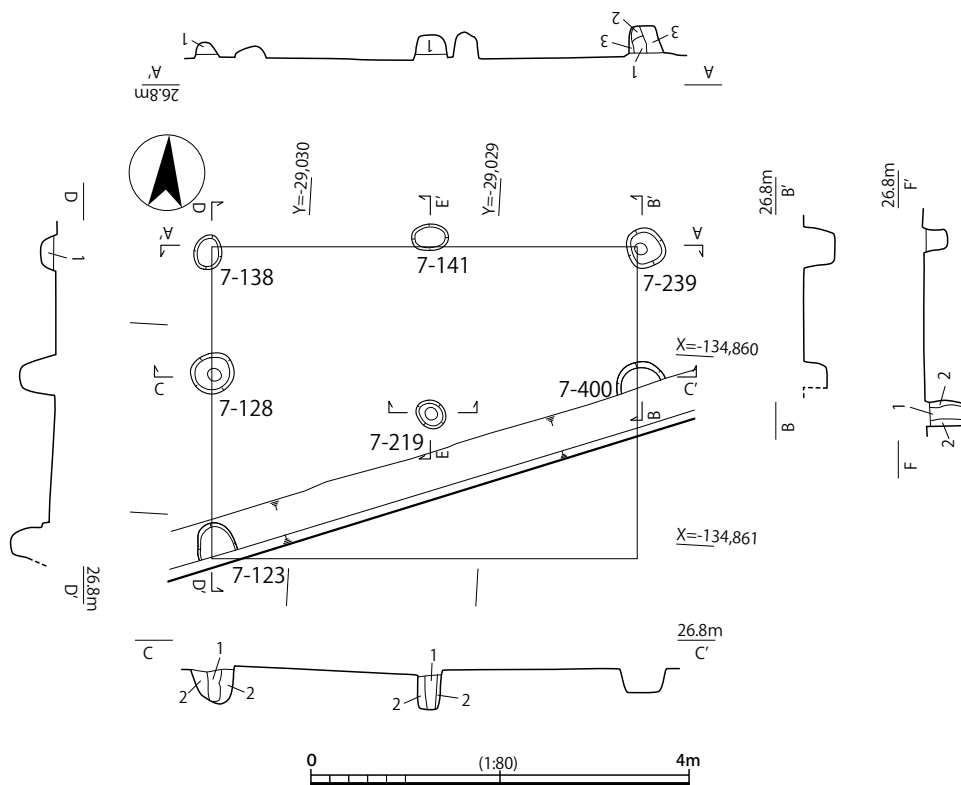
掘立柱建物 59 は、梁行 2 間、桁行 2 間の東西棟の総柱の建物である。南東隅柱は検出できなかった。

梁行寸法は 2.2 m、桁行寸法は 2.3 m で、身舎の面積は 16.2 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.7 m と 1.9 m、桁行方向が 2.2 m と 2.3 m である。棟筋は、西で南へ約 10° 振れる。柱穴の平面形は、円形から不整形円形を呈し、直径もしくは長径が 34 から 54 cm、深さは 20 から 65 cm を測る残りの良い柱穴である。全ての柱穴に、15 cm 前後の柱痕跡が見られ、23 - 68 柱穴・23 - 69 柱穴・23 - 74 柱穴・23 - 76 柱穴は、柱の自重と建物の荷重が柱にかかって生じた圧痕が掘方底面に認められる。掘方埋土は灰から黄灰色系の粗砂混じりシルトが主である。出土遺物には、図化していないが鎌倉時代以降の土師器皿片・土師器破片があり、鎌倉時代の建物と考えられる。

掘立柱建物 60 (図 195・200・213、図版 73・33 - 5)

掘立柱建物 60 は、25 - 15 溝に南側を削平されており、建物全体の規模は不明であるが梁行 2 間以上、桁行 3 間の総柱の東西棟である。梁行寸法は、2.0 m 以上、桁行寸法は 6.9 m。柱間寸法は、梁行方向 2.0 m、桁行方向は 2.3 m を測り、柱筋の通りは良い。北側柱筋は、ほぼ東西方向に向き、振れはない。

柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径は北平側柱が 35 cm 前後、他が 30 cm 前後を測る。深さは、北側柱筋が 25 cm 前後で、他が 15 cm 前後と浅い。柱痕跡は 25 - 24 柱穴にみられるのみで、他の柱穴は抜き取り穴が掘方底面まで達している。掘方埋土は灰黄褐色系の細砂シルトである。



7-138	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色 砂質シルト	粗砂と3mm以下の地山ブロック含む
7-141	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色 砂質シルト	粗砂と3mm以下の地山ブロック含む
7-239	1	2.5Y4/2	暗灰黄色 砂質シルト	粗砂含む
	2	5Y4/2	灰オリーブ色 砂質シルト	粗砂含む
	3	2.5Y5/3	黄褐色 砂質シルト	粗砂と地山土含む
7-219	1	2.5Y4/2	暗灰黄色 砂質シルト	粗砂と炭化物含む
	2	2.5Y5/2	暗灰黄色 砂質シルト	粗砂含む
7-128	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色 砂質シルト	粗砂含む
	2	2.5Y4/4	オリーブ褐色 粘質シルト	粗砂と3mm以下の地山ブロック含む

図 202 掘立柱建物 68 平・断面図

る。柱穴からは33の11世紀後半の土師器杯が出土している他、図化はできないが25-25柱穴から黒色土器B類片、25-28柱穴から字状口縁の土師器皿が出土しており、平安時代の建物と考えられる。

掘立柱建物 61 (図 195・201・213、図版 88・33-6)

掘立柱建物 61 は、削平を受け柱穴が検出できない箇所があるものの復元規模で、2間×2間の建物である。柱間寸法は一間が2.1 mで、4.2 m×4.2 mの建物規模に復元でき、身舎の面積は17.6 m²である。

柱穴の平面形は、円形で直径は、25-46柱穴がやや小さく29 cmである他は、35 cm前後を測る。

深さは、いずれも非常に浅く4から9 cmで、埋土は灰シルトである。25-49柱穴から、34に示す延喜通宝が1枚出土している。延喜通宝は、907年初鑄の皇朝十二銭の一つである。このことから、平安時代前半に年代の1点を置く建物と考えられる。

掘立柱建物 68 (図 202・204)

掘立柱建物 68 は、調査区端で検出しており全体は明らかではないが、梁行2間、桁行は2間の東西棟と考えられる。また、柱穴の先後関係はないが身舎の先後関係を、掘立柱建物 19 と有する建物である。

梁行寸法は3.3 m、桁行寸法は検出長4.5 mを測る。柱間寸法は、梁行方向1.9 mと1.4 m、桁行方向は2.2 mと2.3 mである。建物の振れは、西で南へ約4°振れる。

柱穴の平面形は楕円を主とし、長軸は40から50 cm、深さは18から40 cmを測る。7-123柱穴・7-219柱穴・7-239柱穴には直径約10 cmの柱痕跡がみられる。掘方埋土は、褐色系の砂質シルトで基盤層のブロックを含む。

7-234柱穴から、図化はしていないが東播系須恵器摺鉢と瓦質土器の破片が出土している他、他の柱穴から土師器の破片が出土している。掘方の埋土や建物の向きが掘立柱建物 19 と同じであることから、鎌倉時代の建物と考えられる。

土坑

7-66 土坑 (図 203・204・214、図版 73)

7-66土坑は、平面形がほぼ長方形に近い形状を呈し、長径は3.11 m、短径は2.91 mと規模は大きい。深さは浅く11 cmを測る。埋土は、基盤層のブロックを多く含む黄褐色から黄灰色系の中砂混じりのシルトである。本土坑を完掘した底面で、掘立柱建物 18 の柱穴を検出している。埋土中からは、12世紀末から13世紀中頃に考えられる36から42に示す楠葉型瓦器椀、瓦器小皿、土師器小皿が出土している。

7-309 土坑 (図 203・204・214、図版 75)

7-309土坑は、平面形が不定形な形状を呈する。長径は5.39 m、短径は2.28 mと規模は大きい。深さは浅く17 cm程である。埋土は、緑灰色の中砂から粗砂を多く含むシルトである。埋土中から、43の13世紀前半の楠葉型瓦器椀、44の竈の破片が出土している他、図化していないが瓦質土器・灰釉陶器・土師器・須恵器の破片が出土している。なお、底面では7-310溝を検出している。

7-371 土坑 (図 203・204・214)

7-371土坑は、平面形がほぼ円形を呈し、直径は約70 cm、深さは約24 cmを測る。埋土中から子供の頭大位から拳大位の石がほぼ壁際に沿うような形で出土している。石の一部には二次焼成を受けた痕がみられる石と共に、45の9世紀の灰釉陶器椀が出土している他、図化していないが黒色土器B類・瓦質土器・土師器・須恵器片が出土している。なお、底面で、7-310溝を検出している。

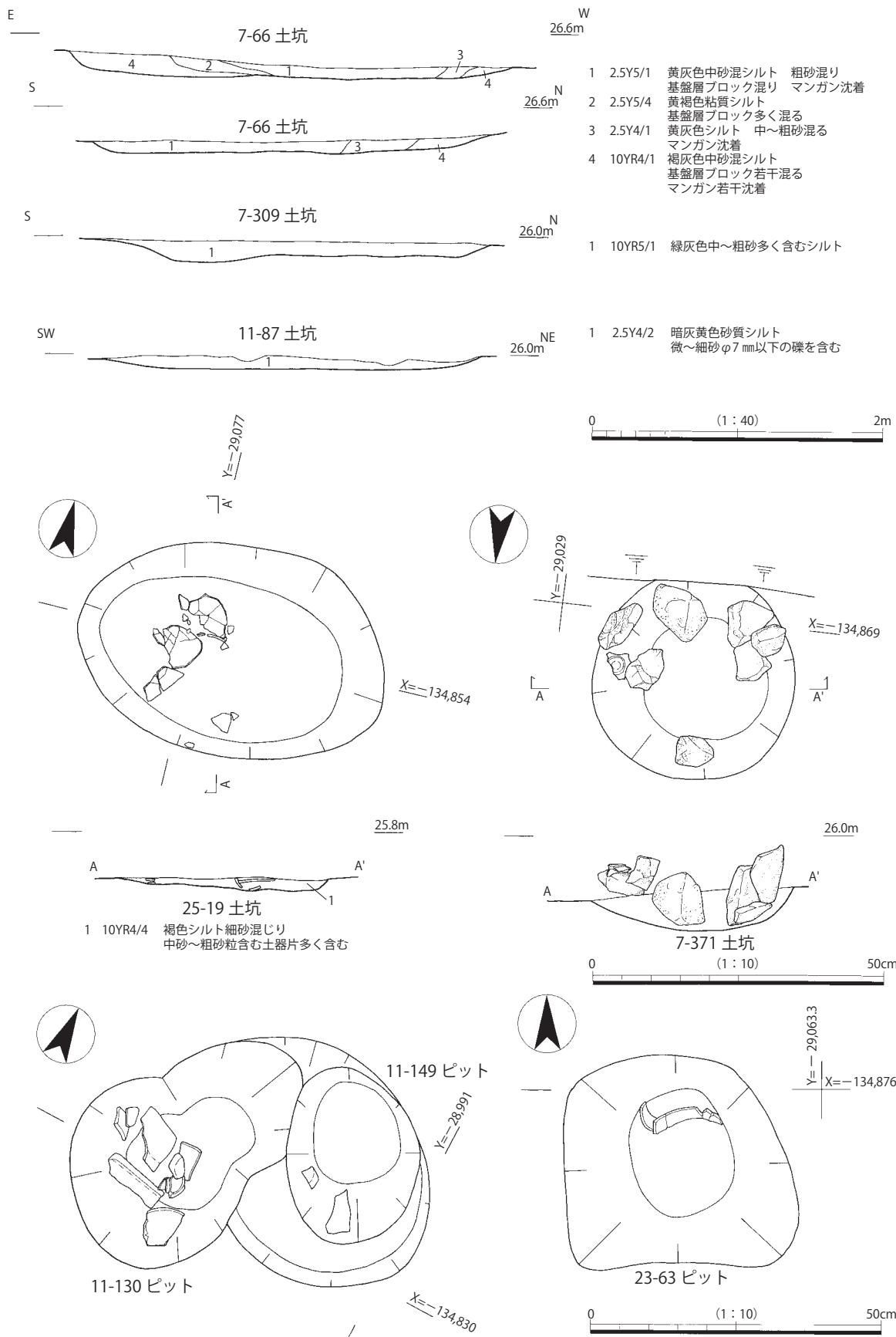


図 203 7-66 土坑 7-309 土坑 11-87 土坑 25-19 土坑 7-371 土坑 11-130 土坑
11-149 ピット 23-63 ピット 平・断面図

11－87 土坑（図 195・203・214）

11－87 土坑は、7－309 土坑同様に平面形は不定形な形状で、深さも浅い。長径は 2.67 m、短径は 1.96 m、深さは 10 cm を測る。埋土は、暗灰黄色の微砂から細砂と直径 7 mm 以下の礫を含む砂質シルトである。埋土中から、46 に示す 13 世紀と考えられる瓦器の高台部分を残し、立上り部分を打ち欠いて円形に整形したものが出土している。

25－19 土坑（図 195・203・214）

25－19 土坑は、平面形が楕円形を呈し、長径 1.06 m、短径 0.77 m で、深さは 5 cm を測る浅い遺構である。周辺の遺構の深さなどからみても、上部は大きく削平を受け消失していると考えられる。埋土中からは、47・48 に示す 12 世紀末から 13 世紀初頭の土師器小皿、土師質羽釜が出土している他、図化はしていないが瓦器椀・瓦器小皿・瓦質土器の破片が出土している。

ピット

11－130 ピット（図 195・203・215、図版 32－6）

11－130 ピットは、11－149 ピットと重複関係にあり 11－130 ピットが先行する遺構である。

11－130 ピットの平面形は不整形であり、断面観察から全体が抜き取り穴と考えられる。11－130 ピットの長径は約 18 cm、短径は約 9 cm で、深さは約 24 cm である。埋め戻される際に、66 から 68 に示す 12 世紀後半の楠葉型瓦器椀 2 点と土師質羽釜が廃棄されたと考えられる。11－149 ピットからも土師器と須恵器の破片が出土している。

23－63 ピット（図 195・203・215）

23－63 ピットは、平面形が隅丸の台形を呈し、長軸は 35 cm、短軸は 32 cm で深さは 18 cm を測る。

抜き取り穴の埋戻しの際に土師器皿片が廃棄されたと考えられる。抜き取り穴からは、73・74 の 13 世紀と考えられる土師器皿は 2 個体出土している。

以上のピットの他にも、図化可能な遺物が出土しているピットを検出している。これらのピットを一覧表にまとめ表 6 に示す。

また、表 7 にまとめた溝からは、主に平安時代から鎌倉時代の遺物が出土しているが、幅の広い狭い、または深い浅いがあるものの、いずれの溝も方向から考えて基本的に耕作に伴う溝の可能性が高い。出土した遺物もおそらく溝の時期を直接示すものではないが、図化できる遺物のため示しておく。

平坦面 4

掘立柱建物

掘立柱建物 23（図 205・206）

掘立柱建物 23 は、本調査分と私部南 06－1 調査区で検出した柱穴で構成する梁行 1 間、桁行 3 間の南北棟である。梁行寸法は北妻側で 4 m、南妻側で 3.6 m。桁行寸法は 5.2 m で、身舎の面積は約 20 m² である。妻柱はない。桁行方向の柱間寸法は 1.5 から 2 m を測る。西平側筋は、ほぼ南北を向き振れはない。

柱穴の平面形は、方形または不整形円形を呈し、直径もしくは長軸は 55 から 70 cm、深さは 20 から 48 cm を測る。柱穴埋土は、掘方埋土が黄灰色系の砂礫混じりシルトが主である。直径 15 cm 前後の柱痕跡が 14－96 柱穴・14－97 柱穴・3－621 柱穴・3－623 柱穴・3－624 柱穴にみられる。図化はできなかったが、14－97 柱穴から 8 世紀の須恵器杯と、10 世紀と考えられる土師器小皿が出土している。出土遺物から平安時代の建物と考えられる。

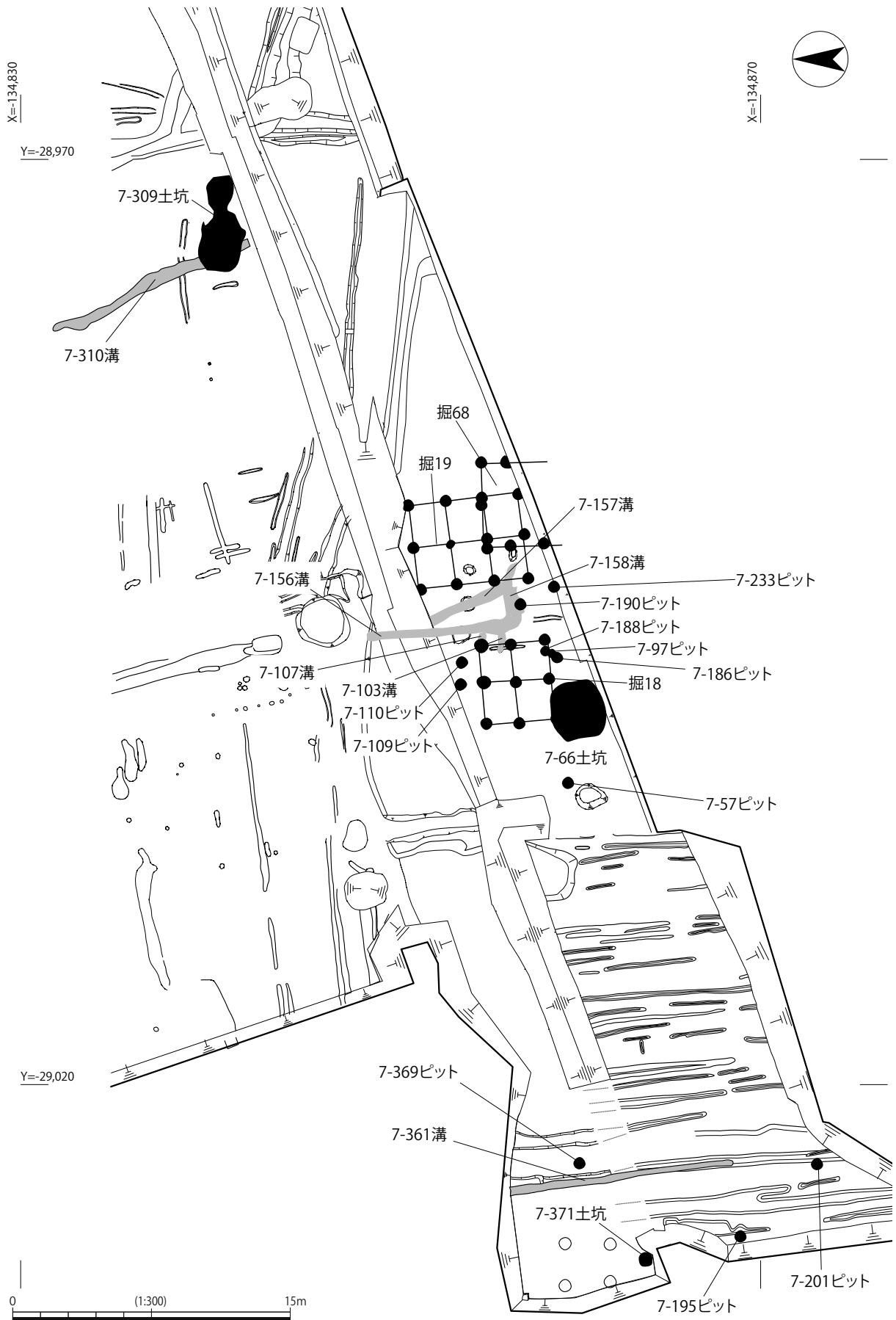


図 204 3 a層帰属 7区付近建物等遺構配置図(平坦面3 中世)

掘立柱建物 33（図 205・207、図版 33－7）

掘立柱建物 33 は、梁行 2 間、桁行 3 間の東西棟である。なお、西妻柱は検出できなかった。梁行寸法は 3.0 m、桁行寸法は 3.8 m で、身舎の面積は約 11.4 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.5 m、桁行方向は 1.1 から 1.4 m と不揃いである。棟筋は、西で南へ約 8° 振れる。柱穴の平面形は、楕円形から円形を呈し、直径もしくは長径が 35 から 68 cm を測る。深さは、21 から 34 cm である。掘方の底面

表 6 ピット一覧（平坦面 2）

ピット番号	平面形	長径/cm	短径/cm	深さ/cm	遺物番号	出土遺物	時期	図・図版
7-57	楕円形	56	47	44	49	土師器皿	10世紀	215
7-97	楕円形	33	27	40	50	楠葉型瓦器椀	12世紀末～13世紀初頭	215
7-109	楕円形	51	32	21	51	楠葉型瓦器椀	12世紀末～13世紀初頭	215
7-110	円形	55		27	732	製塩土器	5世紀	339・73
7-186	楕円形	45	39	68	52	楠葉型瓦器椀	13世紀前半	215
7-188	楕円形	40	38	58	53	瓦器椀	13世紀前半	215
7-190	楕円形	47	34	27	54	土師器小皿	13世紀前半	215
					55	土師器小皿	13世紀前半	215・73
					56	瓦質火鉢		215
					57	瓦質火鉢		215
7-195	円形	30		27	58	土師器小皿	11世紀末～12世紀初頭	215
					59	黒色土器B類	11世紀前半	215
					60	板状鉄斧		215・88
7-201	円形	25		32	61	黒色土器B類	11世紀前半	215
7-233	円形	30		23	62	土師器皿	13世紀前半	215
7-369	円形	23		12	63	楠葉型瓦器椀	13世紀初頭	215
11-189	円形	12		6	71	白磁皿	11世紀後半～12世紀前半	216
11-124	不定形	63	20	34	64	東播系須恵器摺鉢	11世紀後半	215
					65	樟葉型瓦器椀	12世紀中頃	215
					69	土師器皿	11世紀	216
11-142	楕円形	35	30	4	70	土師器小皿	11世紀	216
					72	瓦器椀	12世紀後半	216

※ 平面形円形は、長径を直径に読み替え

表 7 溝一覧（平坦面 2）

溝番号	方向	遺物番号	出土遺物	時期	図・図版	
※ 6-2	南北	158	瓦器椀	13世紀前半	218	
※ 6-7	南北	159	青磁碗	14世紀初頭～15世紀前半	218・78	
※ 6-31		東西	160	備前甕	15世紀中頃	218
※ 6-33		東西	161	土師器小皿	13世紀	218
※ 6-36		東西	162	丸瓦	14世紀中頃～16世紀	218
※ 6-103		南北	163	三重弧文軒平瓦	8世紀後半	218・79
※ 6-103	南北	164	土師器皿	13世紀	219	
※ 6-33		東西	165	土師器皿	13世紀	219
※ 6-103	南北	166	土師器皿	13世紀	219	
※ 6-103		南北	169	備前摺鉢	15世紀後半	219
7-103	東西	171	丸瓦	14世紀中頃～16世紀	219	
		75	土師器小皿	12世紀後半	216	
7-107	東西	76	楠葉型瓦器椀	12世紀後半～13世紀初頭	216	
		77	土師器小皿	12世紀末～13世紀前半	216	
7-156	南北	78	土師器小皿	13世紀後半	216	
7-157	南北	79	楠葉型瓦器椀	13世紀前半	216	
		80	用途不明鉄製品		216	
7-158	東西	81	土師器皿	13世紀	216	
		82	土師器小皿	13世紀	216	
		84	土師器小皿	13世紀前半	216	
7-310	南北	86	土師器台付鉢	10世紀後半～11世紀初	216	
		87	大和型瓦器椀	12世紀末～13世紀初	216	
7-361	南北	85	楠葉型瓦器椀	13世紀後半	216・73	
※ 7-189	南北	13	楠葉型瓦器椀	13世紀前半	214	
※ その他耕作小溝		167	瓦質火鉢	15世紀～16世紀	219	
※ その他耕作小溝		168	土馬	7世紀	219・79	
※ その他耕作小溝		170	土玉		219	

※ 平面図に図示なし

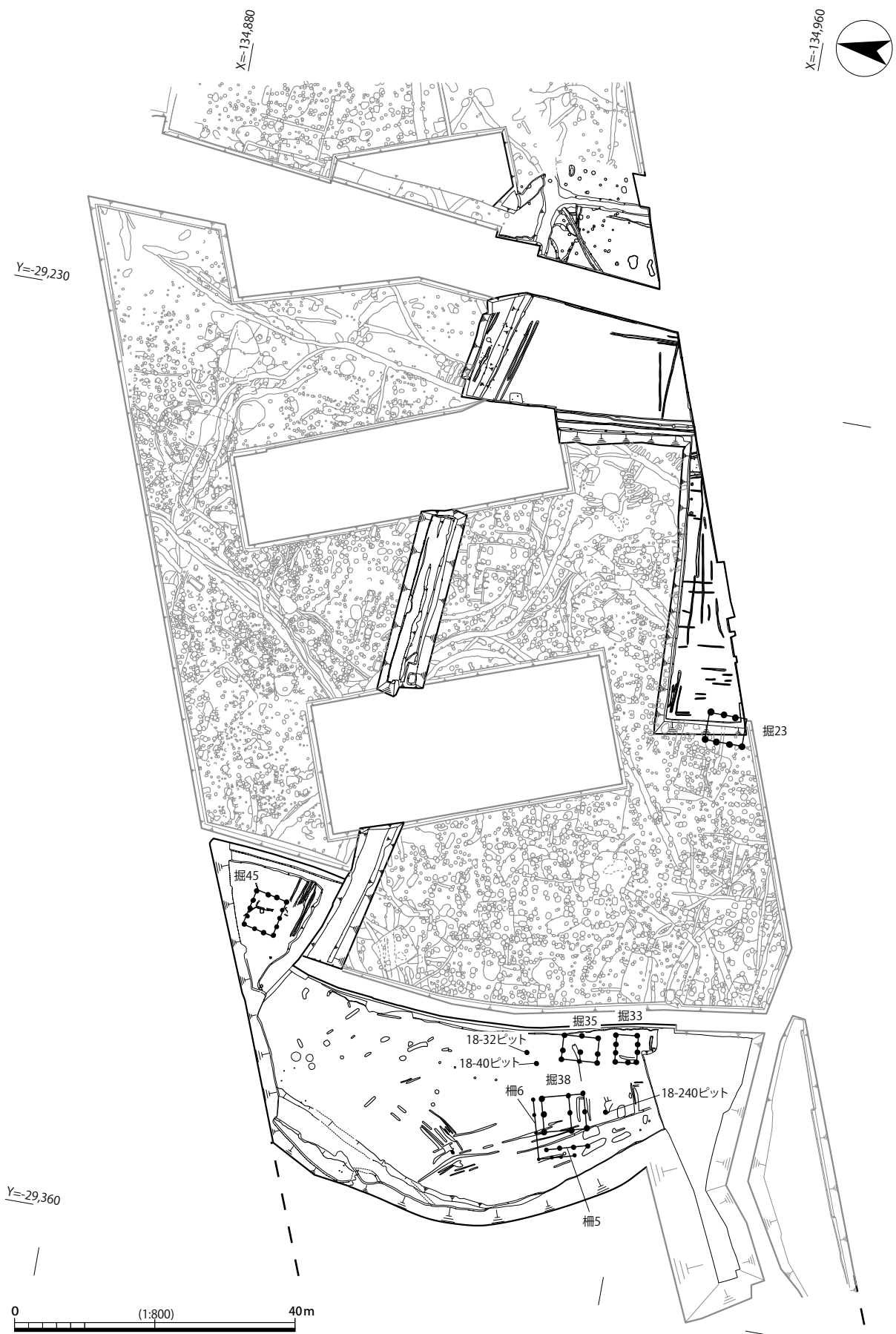


図 205 3 a層帰属 建物等遺構配置図 (平坦面4 中世)

は東妻側の柱穴よりも西妻側の柱穴が約 10 cm 深い。柱痕跡は 18 - 172 柱穴と 18 - 173 柱穴以外に認められる。掘方埋土は、灰黄褐色系の粗砂から中砂混じりシルトが主である。

図化はできなかったが、18 - 12 柱穴からて字状口縁の土師皿、18 - 124 柱穴から黒色土器 B 類椀の底部片が出土している他、土師器・須恵器の破片が出土している。出土遺物から平安時代の建物と考えられる。

掘立柱建物 35 (図 205・208、図版 33 - 8)

掘立柱建物 35 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱の南北棟である。梁行寸法は北妻側で 3.4 m、南妻側で 3.6 m。桁行寸法は西平側で 5 m、東平側で 4.8 m を測る歪な平面形を呈する建物である。身舎の面積は約 17.1 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.2 から 2.4 m、桁行方向は 2.4 m と 2.5 m である。棟筋は、北で西へ約 4° 振れる。

柱穴の平面形は、不整円形を呈する。平面規模は直径もしくは長径が、東平側柱と棟筋の柱が 30 cm から 46 cm、西平側柱が小振りりで 26 から 29 cm の 2 種に区分できる。深さも同様で、西平側柱が他に比べ約 20 から 30 cm 浅く、11 から 20 cm を測る。なお、西平側柱を除くと、掘方の底面は標高約 22.2 m で揃う。柱痕跡は 18 - 20 柱穴・18 - 25 柱穴・18 - 179 柱穴・18 - 180 柱穴にみられる。掘方埋土は、黄灰色系の細砂混じりシルトが主である。

図化はできなかったが、18 - 20 柱穴・18 - 25 柱穴・18 - 179 柱穴・18 - 182 柱穴から瓦器椀片、18 - 245 柱穴から黒色土器片が出土している他、土師器・須恵器の破片が出土している。出土遺物から、平安時代の建物と考えられる。

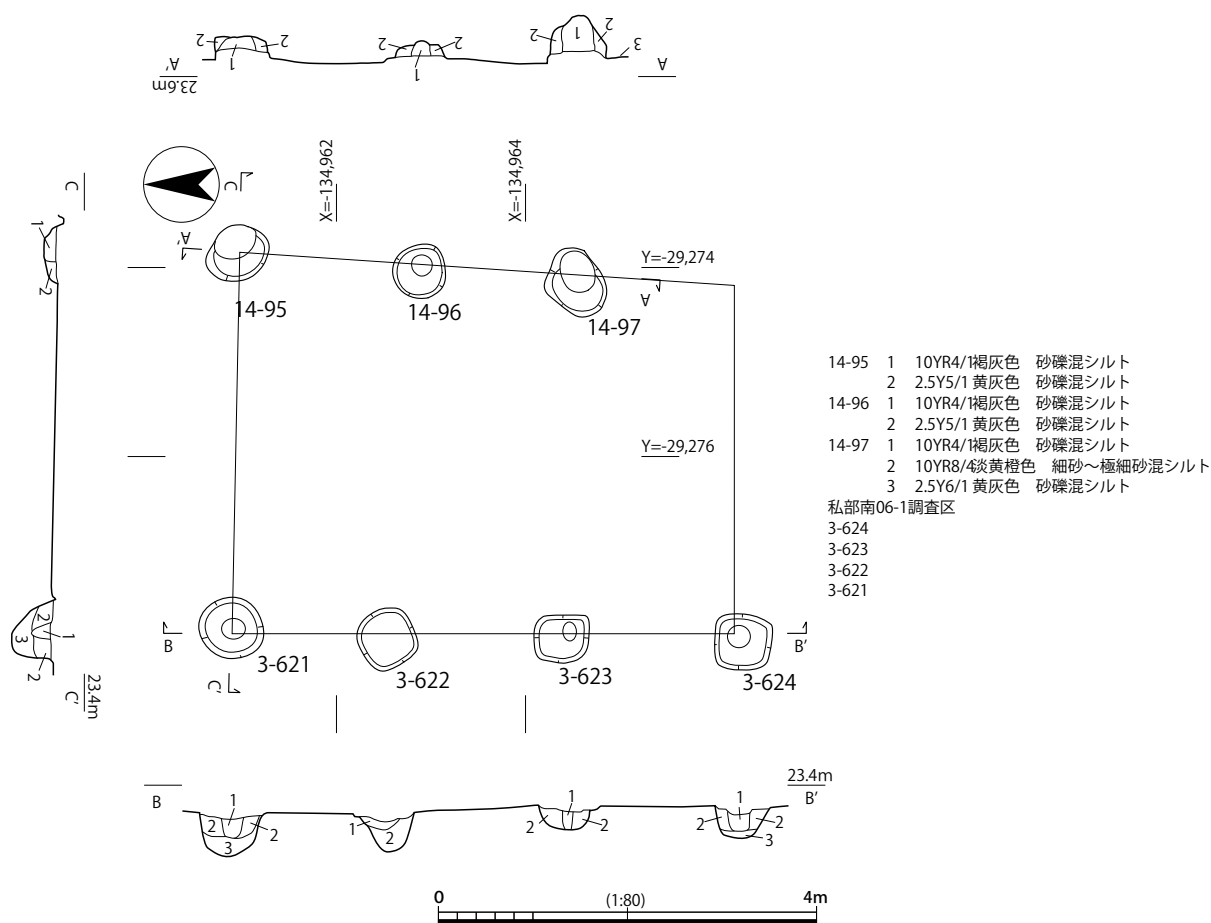


図 206 掘立柱建物 23 平・断面図

掘立柱建物 38 (図 205・209・216、図版 34 - 1)

掘立柱建物 38 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱の南北棟で、柵 5 と L 字の柵 6 が伴う。建物の梁行寸法は北妻側で 4.7 m、南妻側で 4.9 m、桁行寸法は 5.9 m を測る、やや歪な平面形を呈する建物である。

身舎の面積は約 28.3 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 2.3 から 2.6 m、桁行方向は 3.8 と 2.1 m である。棟筋は、北で西へ約 15° 振れる。柱穴の平面形は、不整円形を呈し、直径もしくは長径は、26 から 34 cm を測る。18 - 196 柱穴・18 - 197 柱穴を除く柱穴には、柱痕跡がみられる。掘方埋土は、黄灰色系の細砂から粗砂混じりシルトが主である。

18 - 49 柱穴から、110 に示す 12 世紀前半の土師器小皿が出土している他、黒色土器・瓦器・土師器・須恵器の破片が出土している。出土遺物から、平安時代末頃の建物と考えられる。

掘立柱建物 45 (図 205・210、図版 34 - 2)

掘立柱建物 45 は、梁行 3 間、桁行 4 間の東西棟である。梁行寸法は 4.5 m、桁行寸法は 5.1 m で、柱筋の通りの良い建物である。身舎の面積は 23 m² である。梁行の柱間寸法は 1.7 m、1.3 m、1.5 m で、桁行寸法は 1.2 m、1.3 m、1.4 m を測る。柱穴の平面形は楕円形と方形を呈し、長辺ないし長軸は 35 から 48 cm を測る。深さは、12 から 53 cm である。掘方の底面は、四隅の柱穴がやや深い傾向を示す。

柱痕跡は、全ての柱穴に見られ、掘方埋土は黒褐色系の微砂から細砂を含む粘質シルトが主である。

18 - 105 柱穴・18 - 189 柱穴・18 - 193 柱穴・18 - 195 柱穴にみられる。掘方埋土は、黄褐色系の極細砂混じりシルトが主である。図化はできなかったが、18 - 430 柱穴から弥生土器片と共に

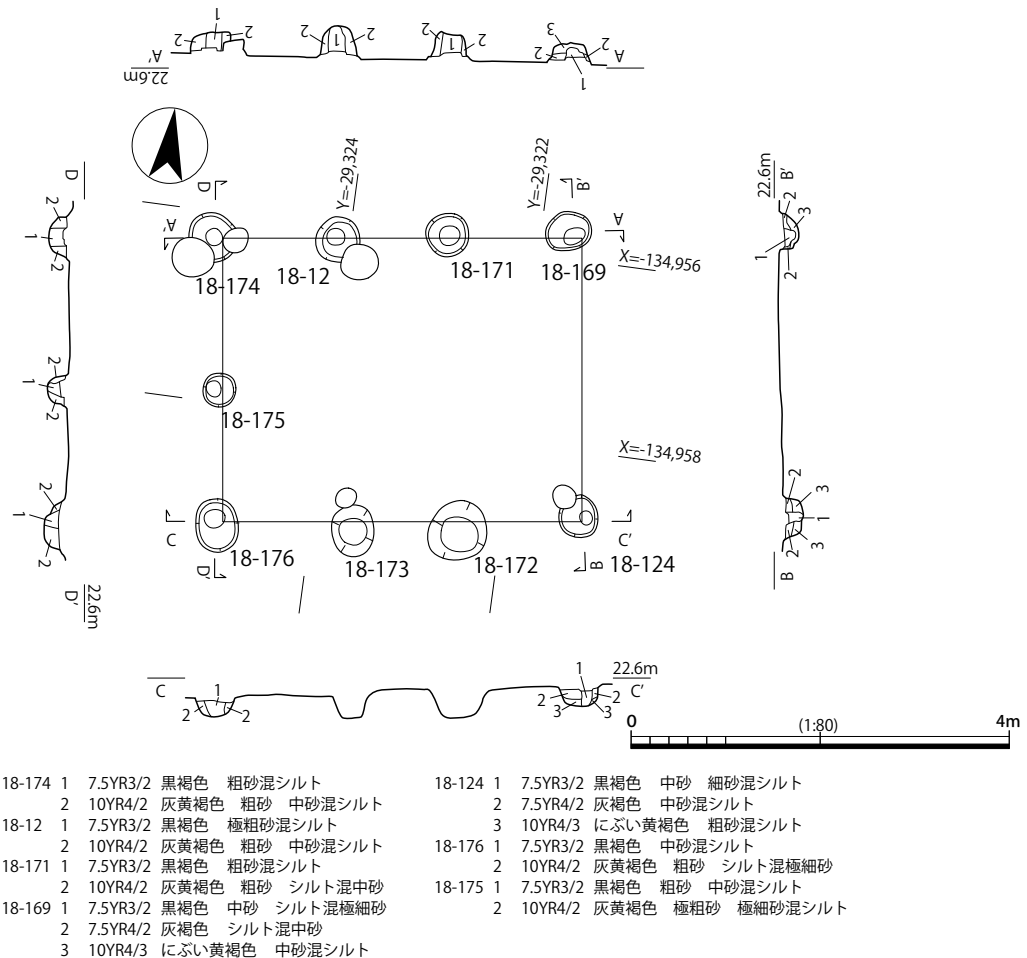


図 207 掘立柱建物 33 平・断面図

12世紀から13世紀の小皿の口縁片が出土している他、土師器・須恵器片やサヌカイト片が出土している。出土遺物から、平安時代末から鎌倉時代初めの建物と考えられる。

柵

柵5 (図205・209)

柵5は、延長6mの3間を検出しており、柱間寸法は北から2m等間である。柱穴の平面形は円形から不整形円形、隅丸方形と多様で、直径もしくは長軸・長辺長は44から76cm、深さは浅く15cm前後である。18-225柱穴と18-222柱穴には、直径12cm前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、灰色系の粗砂から細砂が混じるシルトである。18-225柱穴と18-222柱穴が、それぞれ掘立柱建物38の妻側柱筋と揃っており、掘立柱建物38に伴う柵と考えられる。また、柱筋と掘立柱建物38の西平側筋の間隔は、約2.5mを測る。

柱穴からは、土師器・須恵器の破片が出土しているが、図化できる遺物はない。掘立柱建物38に伴うことから、平安時代末頃の遺構と考えられよう。

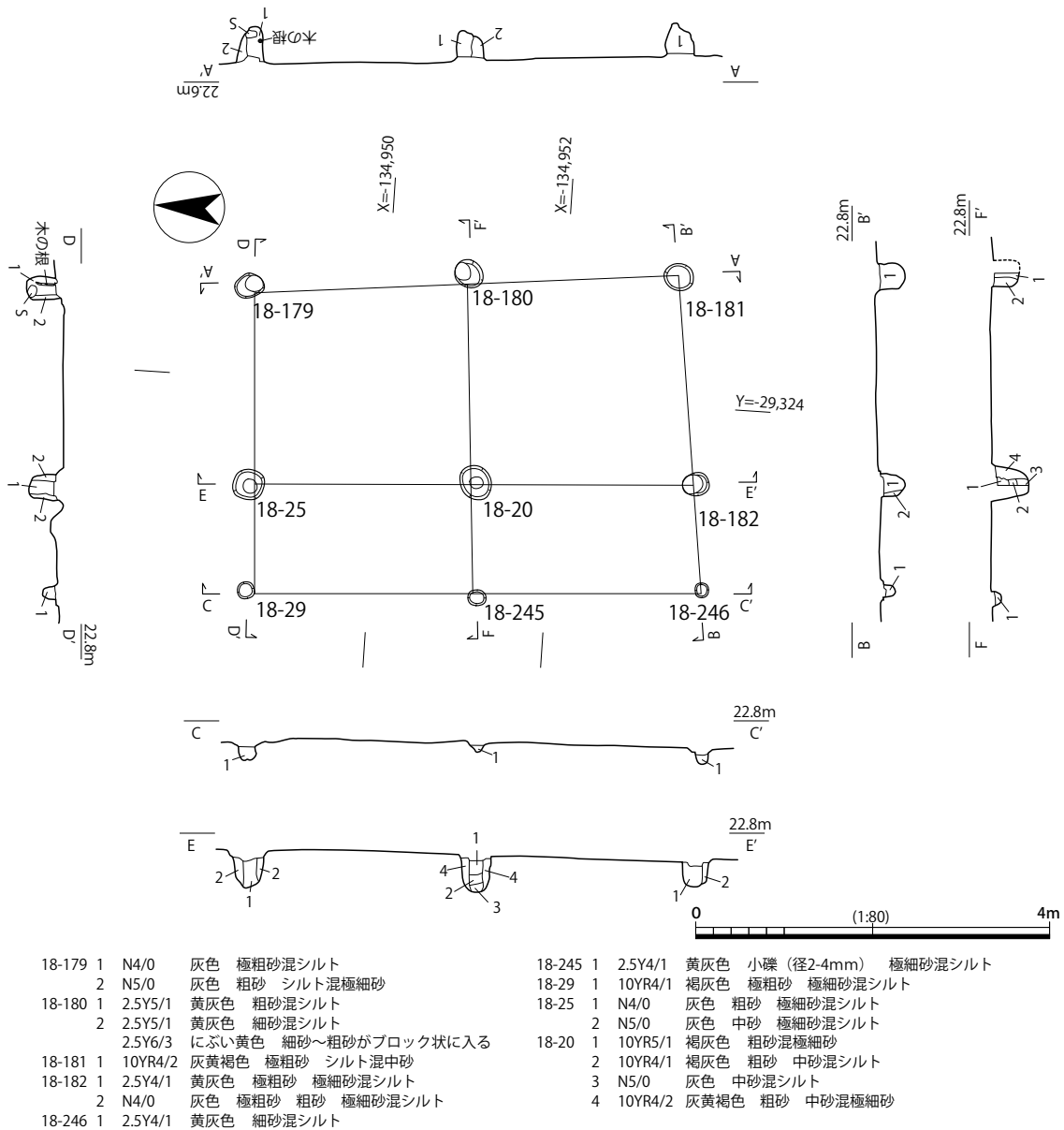
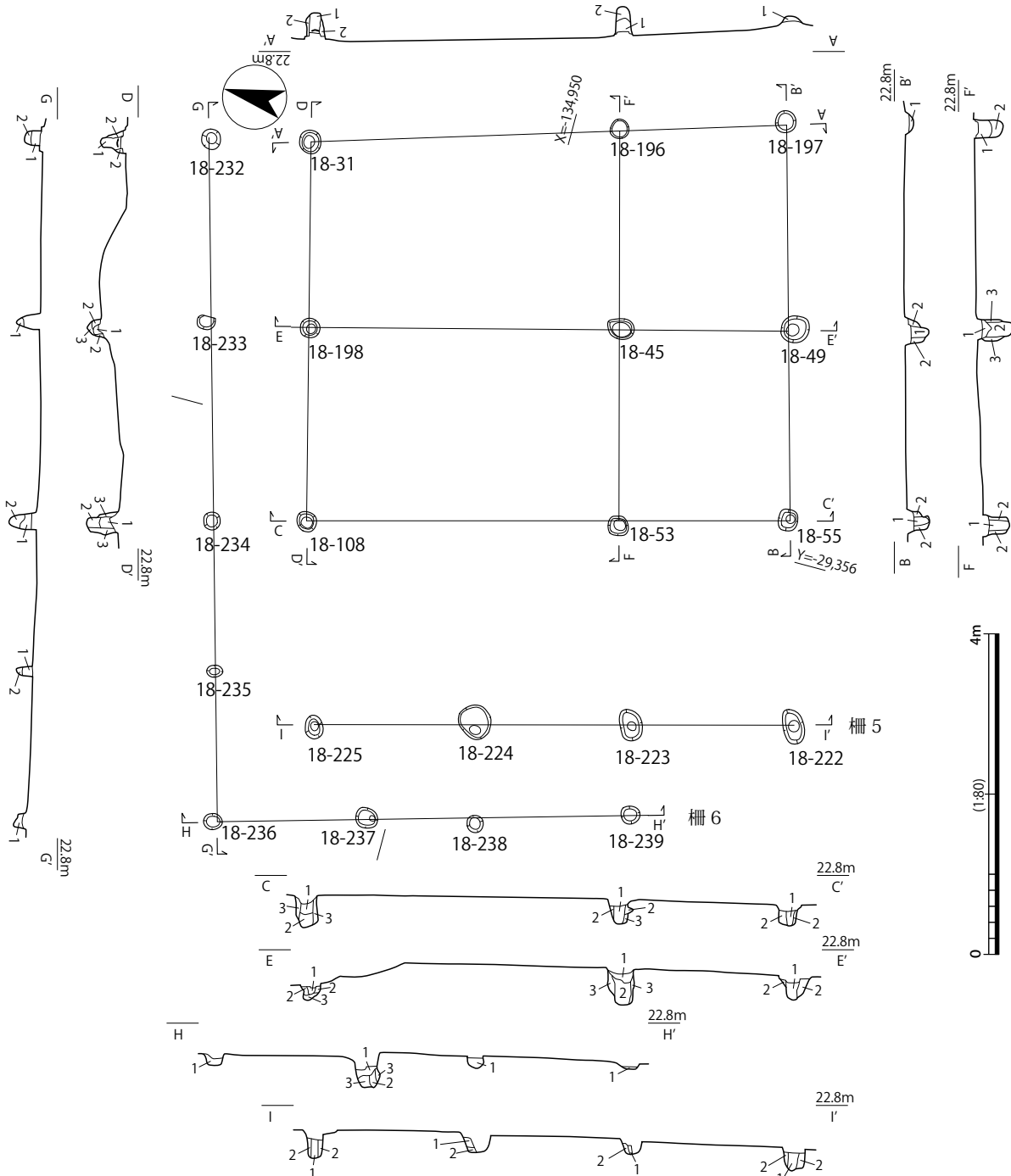


図208 掘立柱建物35 平・断面図



18-31	1	10YR4/1	褐灰色	極粗砂	粗砂混シルト	18-232	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	細砂	粗砂
	2	2.5Y4/1	暗灰黄色	中砂	細砂混極細砂		2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	細～粗砂含む
18-196	1	10YR4/1	褐灰色	中砂	シルト混極細砂	18-233	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	5mm以下の礫含む
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粗砂	中砂混シルト	18-234	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	粗砂
18-197	1	10YR3/1	黒褐色	小礫	中砂混極細砂		2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	粗砂
18-49	1	10YR3/1	黒褐色	中砂	極細砂混シルト	18-235	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	粗砂
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粗砂	粗砂混シルト		2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	粗砂
18-55	1	10YR3/1	黒褐色	粗砂	極細砂混シルト	18-236	1	2.5Y3/3	黄褐色	砂質シルト	粗砂少量含む
	2	10YR4/2	灰黄褐色	中砂	混極細砂	18-237	1	2.5Y4/2	オリーブ褐色	砂質シルト	粗砂少量含む
18-53	1	10YR4/1	褐灰色	粗砂	極細砂混シルト		2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘質シルト	細～粗砂少量含む
	2	10YR5/1	褐灰色	極粗砂	シルト混極細砂		3	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂質シルト	細～粗砂含む
	3	10YR4/2	灰黄褐色	極粗砂	混シルト	18-238	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	極細砂
18-108	1	10YR3/1	黒褐色	粗砂	極細砂混シルト	18-239	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	極細砂
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粗砂	中砂混シルト	18-225	1	10YR4/1	褐灰色	粗砂	極細砂混シルト
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	極粗砂	粗砂混シルト		2	10YR3/2	黒褐色	粗砂	中砂混シルト
18-198	1	10YR3/1	黒褐色	粗砂	極細砂混シルト	18-224	1	10YR4/2	灰黄褐色	粗砂	シルト混極細砂
	2	10YR4/2	灰黄褐色	中砂	細砂混シルト		2	10YR3/2	黒褐色	粗砂	中砂混シルト
	3	5Y4/2	灰オリーブ色	小礫	極細砂混シルト	18-223	1	10YR4/1	褐灰色	粗砂	中砂混シルト
18-45	1	10YR4/1	褐灰色	粗砂	混極細砂		2	10YR3/2	黒褐色	粗砂	中砂混シルト
	2	10YR4/1	褐灰色	中砂	シルト混極細砂	18-222	1	10YR4/1	褐灰色	極粗砂	粗砂混シルト
	3	10YR4/2	灰黄褐色	中砂	極細砂混シルト		2	10YR3/2	黒褐色	粗砂	中砂混シルト

図 209 掘立柱建物 38 平・断面図

柵6 (図 205・209)

柵6は、L字状を呈し、南北3間で5 m、東西4間で8.4 mを測る。掘立柱建物38に伴う遺構である。柵5の外側に位置している。柵5とは並存する関係ではなく、建替えの関係にあると考えられる。

掘立柱建物38からは、西側柱筋に並行に西へ約3.6 m、北妻側からは1.2 mの位置にある。南北方向の柱間寸法は、北から1.8 m、1.4 m、1.8 m。東西方向の柱間寸法は西から、2.2 m、2.4 m、2 m、1.8 mを測る。

掘立柱建物38に伴うことから、平安時代末頃の遺構と考えられよう。

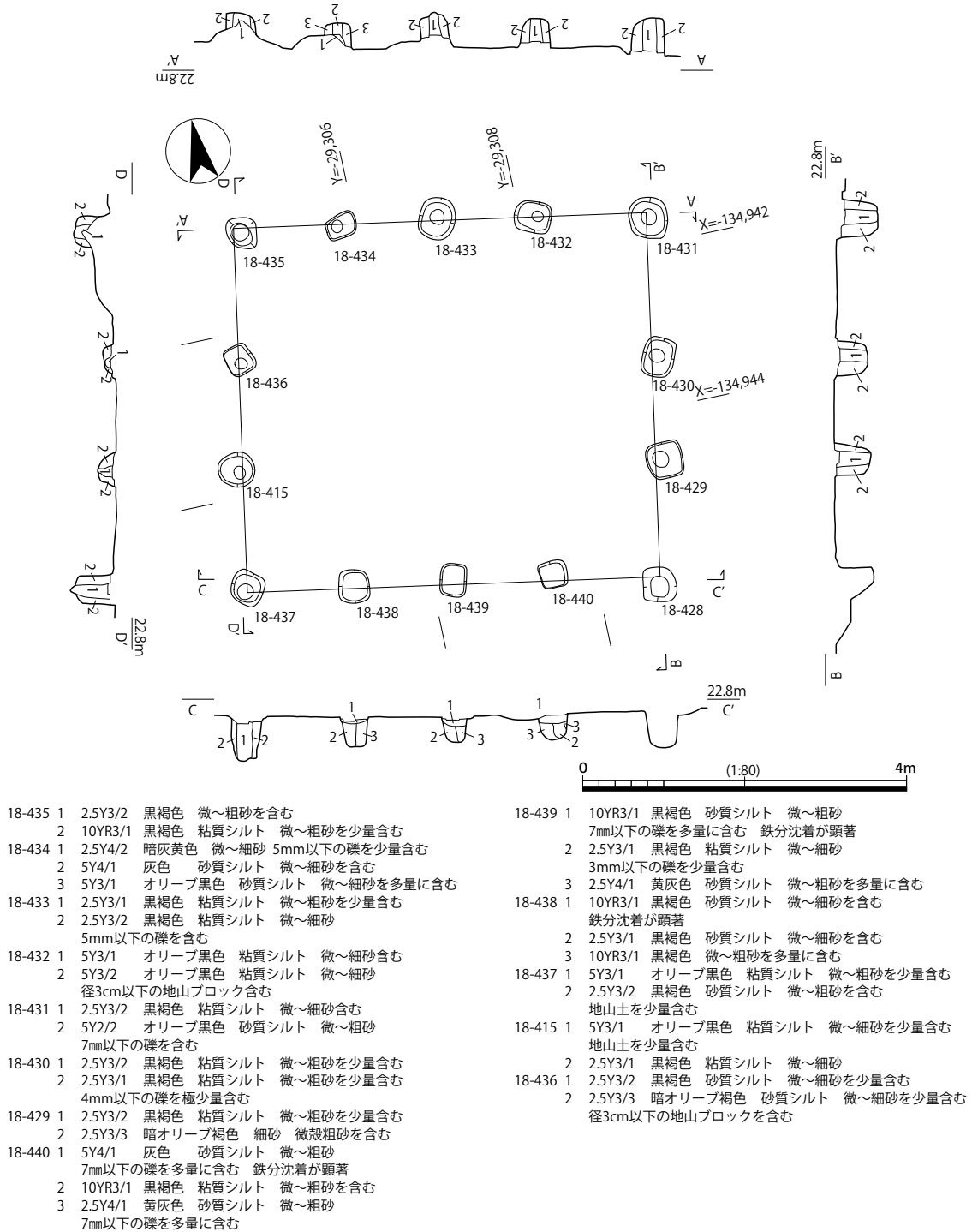


図 210 掘立柱建物 45 平・断面図

ピット

18－32ピット（図205・216）

18－32ピットは、掘方の平面形がほぼ円形を呈し、直径25cm、深さ15cmを測る。111に示す11世紀末から12世紀初頃の土師器小皿が出土している。

18－40ピット（図205・216）

18－40ピットは、掘方の平面形がほぼ円形を呈し、直径は30cmで、深さは18cmである。11世紀前半の112の土師器小皿が出土している。

18－240ピット（図205・216、図版75）

18－240ピットは、掘方の平面形がほぼ円形を呈し、直径約40cm、深さは15cmを測る。113に示す12世紀後半から13世紀前半の白磁碗が出土している。

井戸

井戸は、素掘りのものを含め10基以上検出している。これらの井戸は、谷内でも段に近い位置で検出している。検出面は、ほとんどが基盤層である6a層上面での検出であり、廃棄後は埋め戻されている。出土遺物から時期の特定できる井戸もあるが、そうでないものもある。

時期の判るものでは、おおむね平安時代末から鎌倉時代前半に埋め戻されている。使用時に異物を入れることは考えにくいので掘削・使用時期は平安時代後半に考えられよう。また、井戸の配置状況から考えて、時期の特定できない井戸も同様の時期と考えられる。

7－355井戸（図195・211）

7－355井戸は、深さ約42cmで直径約0.9m、円形の掘方を呈し、曲物を井筒に転用している。井筒は掘方の北東端に寄せて据えられている。掘方の底面であり井筒の底部は、谷1内に堆積している縄紋時代後期から晩期に堆積したと考えられる砂層に達している。

井筒内を埋める堆積物は、中砂から粗砂シルト混じりでありラミナは見られない、埋戻土であろう。

井筒は、腐蝕により脆弱化しており断面及び底部付近でのみ痕跡を確認でき、取り上げることはできなかった。井筒内の堆積物から土師器片が1点出土しているのみで、時期は不明である。

7－400井戸（図195・211）

7－400井戸は、深さ約0.5mで長軸3.7m、短軸2.5mの楕円形の掘方を呈する。掘方の底面は、基盤層である6a層に達している。掘方の端には、杭や材が残っているものの井戸枠は検出しておらず、抜き取られたものと考えられる。掘方埋土の内、6a層直上に堆積しているシルト層2層と細砂層は機能時の堆積と考えられる。上方の2層は、6a層のブロックを含むことから埋戻土であろう。

遺物は、図化はできなかったが12世紀後半の瓦器椀片や須恵器甕片、瓦質甕片、土師器細片が出土している。12世紀後半以降に、井戸枠が抜き取られ井戸としての機能停止と共に埋め戻されたと考えられる。また混入品ではあるが、5世紀中頃の須恵器壺口縁も出土している。

11－7井戸（図195・211・217、図版79）

11－7井戸は、深さ約1.06mで長軸3.3m、短軸2.28mの楕円形の掘方を呈する。掘方は、谷1内に堆積している縄紋時代後期から晩期に堆積したと考えられる砂層を掘込み、基盤層である6a層に達している。このため、調査中も湧水が著しく、常時排水を行っていた。掘方内から、おそらく井戸枠であったであろう板材が、長辺50cm前後の野面石と共に出土している。掘方埋土は、東側から埋められたような堆積をしており、井戸枠が抜き取られた後、その残材と共に埋め戻されたと考えられる。

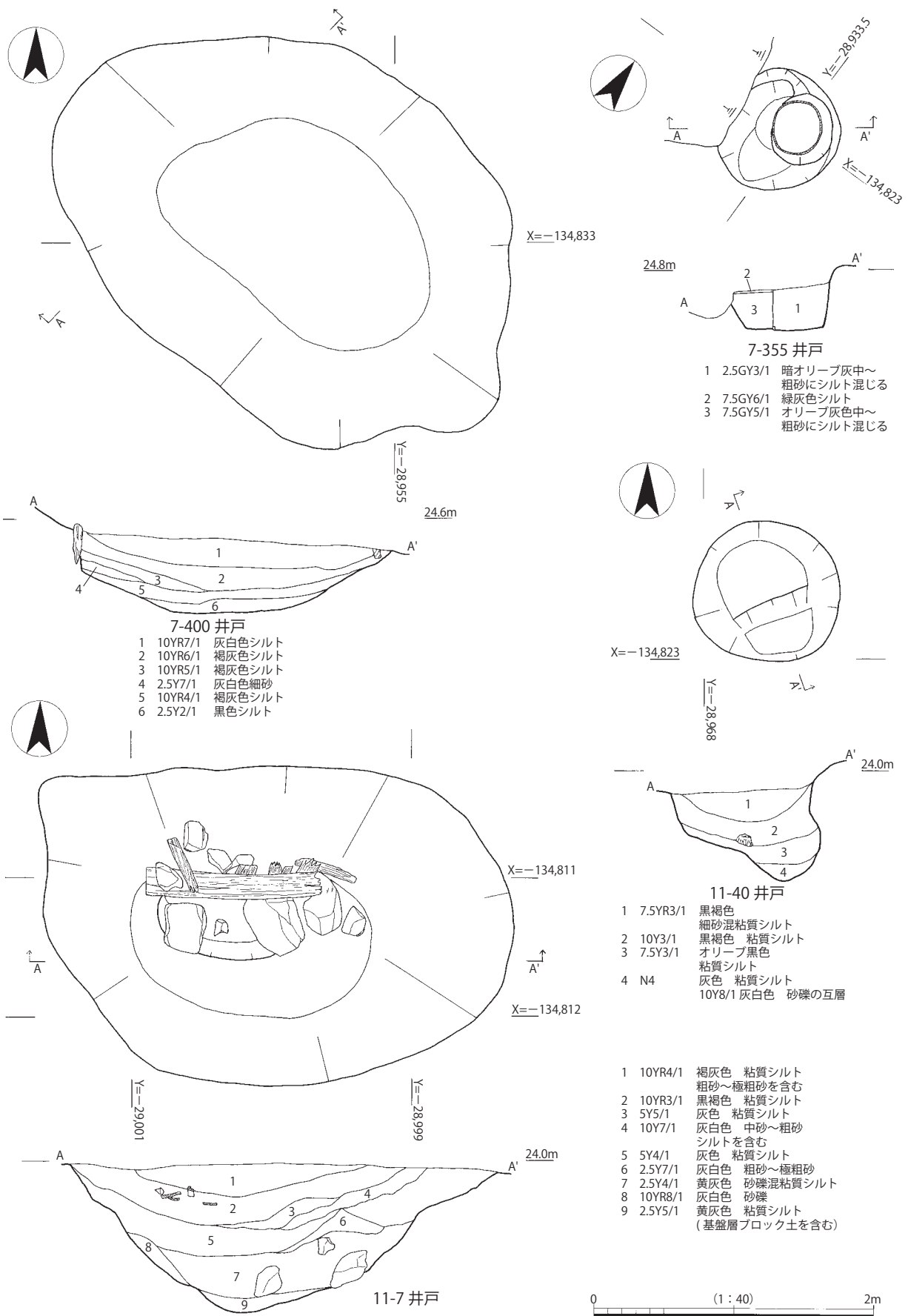


図 211 7-355・400 井戸 11-7・40 井戸 平・断面図

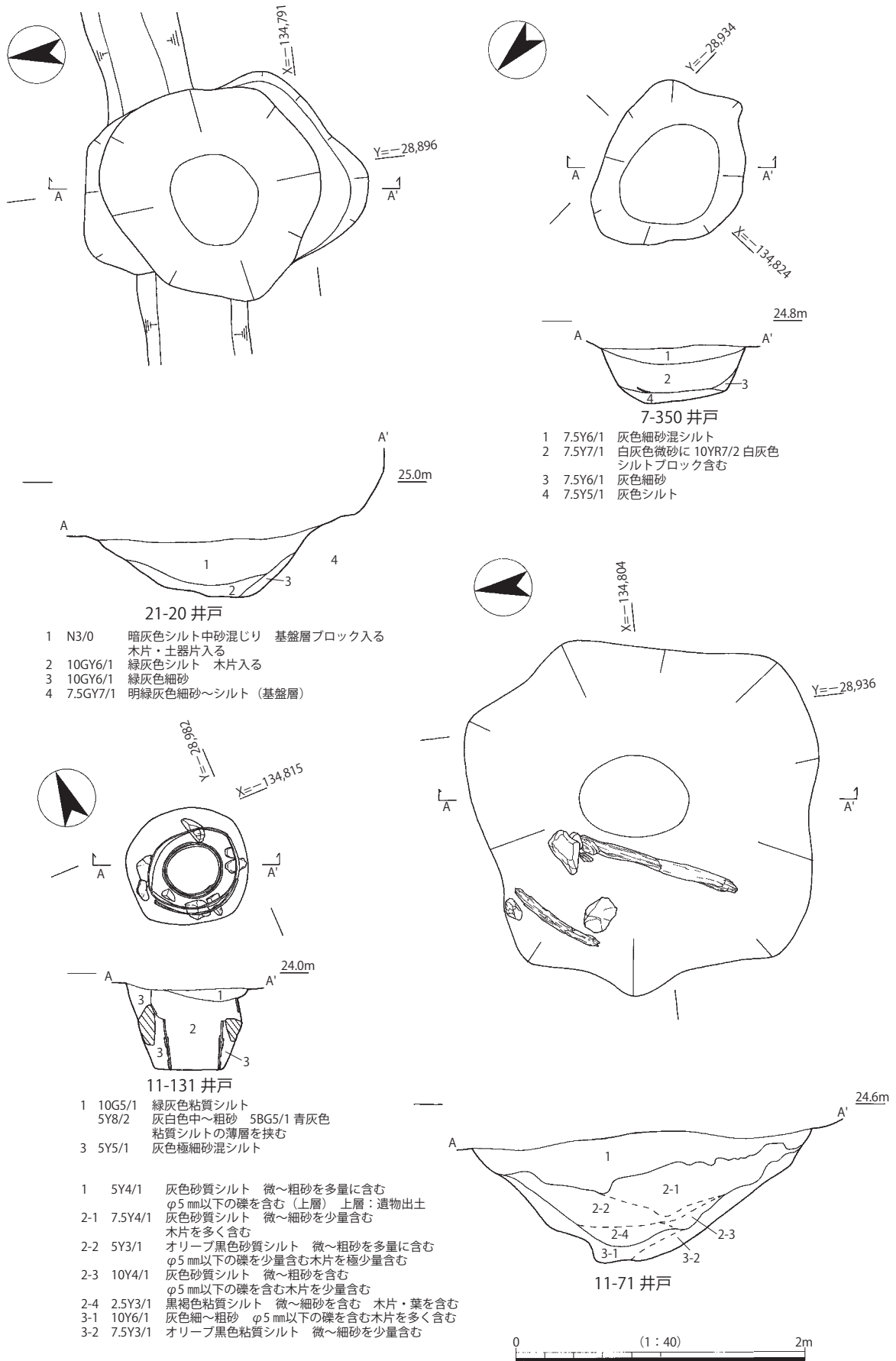


図 212 11-71・131 井戸 21-20 井戸 7-350 土坑 平・断面図

遺物は、上層部分から 146 の 14 世紀の常滑の甕、155 の瓦質羽釜、中・下層から 147 から 154 に示す 12 世紀後半から 13 世紀初頭の瓦器碗・土師器小皿が出土している。おそらく 13 世紀初頭頃には、土器が廃棄され、井戸内はある程度土砂で埋まっていた状態であったと考えられる。その後、井戸枠が抜き取られ、その廃材や石と共に甕が廃棄され、14 世紀には完全に埋め戻されたと考えられる。

11 - 40 井戸 (図 195・211)

11 - 40 井戸は、深さ約 0.55 m で直径約 1.05 m の円形の掘方を呈する。南東側の底面が 20 cm 程深くっており、この位置に井筒が据えられていた可能性がある。この部分は、6 a 層に達している。

埋土は、最下層が粘質シルトと砂礫の互層であり機能時の堆積であろう。上部の堆積層は、ブロック混じりの粘質シルト層と細砂混じりシルト層であり、埋戻土と考えられる。

遺物は、須恵器・土師器の破片が出土しているが、時期を特定できるものでない。

11 - 71 井戸 (図 195・212・217)

11 - 71 井戸は、深さ約 0.87 m で直径約 2.4 m の不整円形の掘方を呈する。底面は 6 a 層に達している。埋土は、最下層が微砂から細砂を含む粘質シルトと細砂から粗砂で機能時の堆積と考えられる。

上層は、微砂から細砂を含む粘質シルトで埋戻土と考えられる。最下層の上面に乗るように面取りの有る角材や人頭大の野面石が出土しており、他の井戸と同じく井戸枠を抜き一部を廃棄、埋戻しを行ったと考えられる。

他の出土遺物に、156 の 13 世紀前半の土師器小皿や、図化はできなかったが 13 世紀の楠葉型瓦器碗片の他、瓦・羽釜片などがある。13 世紀代に井戸の廃棄・埋め戻しが行われたと考えられる。

11 - 131 井戸 (図 195・212・213、図版 89・32 - 7)

11 - 131 井戸は、深さ約 0.6 m で直径約 0.85 m の円形の掘方を呈し、掘方の東側に寄せて曲物転用した井筒を据えている。6 a 層を約 60 cm 掘った深さまで達している井筒は、大きさの異なる 3 つの曲物を重ねており、上から下へ順に径が小さくなっている。

上段の曲物は幅約 9 cm、直径は約 55 cm である。幅が狭く、おそらく曲物下端の帯であろう。中段の曲物は、幅約 18 cm、直径約 40 cm である。下端には幅約 6 cm の帯を巻いてある。35 に示す下段の曲物は、直径 37.5 cm で幅は 20 cm である。下端には幅約 4.3 cm の帯を巻いている。曲物の中ほどに幅 5.5 cm の帯があるが、おそらく上端部に巻かれていたものが、ずり落ちたと考えられる。

井筒内を埋める堆積物は、下層が中砂から粗砂で粘質シルトの薄層が挟在するラミナがみられる堆積層である。機能時の堆積と考えられる。上層は、粘質シルトで埋戻土であろう。時期の判る遺物は、出土していない

21 - 20 井戸 (図 192・212・217)

21 - 20 井戸は、長軸 1.95 m、短軸 1.55 m で不整楕円形の掘方を呈する。井戸は、段 2 の斜面を掘り込んで造っており、深さは平坦面から 1.15 m、谷内の遺構面からは 0.42 m を測る。埋土は下層が細砂とシルト層、上層は中砂混じりのシルトである。

上層から、157 の 13 世紀中頃の楠葉型瓦器碗片が、瓦質土器・須恵器・土師器の破片と共に出土しており、おそらく 13 世紀後半以降に埋め戻されたと考えられる。

7 - 350 土坑 (図 195・212・224、図版 81・32 - 8)

7 - 350 土坑は、掘方の重複から 7 - 355 井戸の廃棄後に造られた遺構である。土坑としているが、掘方が湧水層である 6 層の砂層に達していること、掘方の北東が円形にやや窪んでおり井筒を据えた

可能性があることなどから、井戸の可能性の高い遺構とした。規模は、深さ約 37 cm、長軸約 1.32 m で短軸約 1.0 m の不整楕円形の掘方を呈する。埋土は、底面付近がシルトと細砂層、その上部が微砂混じりシルトと細砂混じりシルト層である。遺物は、掘方底面に正立して、406 に示す 12 世紀後半の土師器皿が完形で出土している他、同じく 12 世紀後半の 407 の土師皿と 408 の瓦器椀が出土している。

出土遺物から、12 世紀後半に埋め戻されたと考えられる。

谷 3

土坑

25 - 10 土坑 (図 195・225)

25 - 10 土坑は、掘方の平面形が長方形を呈し、長辺は 4.91 m、短辺 3.68 m を測る。432 から 434 に示す 13 世紀の土師器小皿の他、初期須恵器の杯蓋と甕が出土している。

2 a 層・3 a 層出土遺物 (図 213・215・216・218 ~ 225、図版 75・78・79・81 ~ 84・86・88・91 ~ 93)

平坦面 1 から 4、谷 1 から 3 ごとに、2 a 層・3 a 層の順で主な出土遺物について記載する。

平坦面 1

2 a 層出土遺物で図化したものに、10・11 に示す 14 世紀から 15 世紀の龍泉窯系青磁の転用円盤がある他、2 a・3 a 層下面の耕作に伴う小溝から 8 の天禧通宝、機械掘削中に 9 の腐蝕で文字の判明しない銭貨出土がある。なお、3 a 層の出土遺物で図化できたものは、古墳時代の遺構を検出する際に出土した遺物であり、当該時期のものであるため第 2 項で記述している。

平坦面 2

2 a 層からは、29 に示す 16 世紀末から 17 世紀初頭の玉取獅子が描かれた青花皿。3 a 層からは、28 に示す 11 世紀と考えられる台付き皿の皿部。30・31 の 11 世紀末から 12 世紀初の土師器小皿と 13 世紀前半の土師器皿がある。

平坦面 3

2 a 層からは、91 の 16 世紀末から 17 世紀初めの瀬戸美濃の天目碗、92 の 17 世紀後半の唐津皿の転用円盤。調査時に 2 a 層の下部と 3 a 層を同時に掘削した際に出土した遺物に、94 から 101 に示す外面に蓮弁文が施された 14 世紀初頭から 15 世紀前半の青磁碗・青磁碗の転用円盤、13 世紀の瓦質羽釜の口縁部、12 世紀末から 13 世紀初頭の瓦器小皿、12 世紀後半の大和型瓦器椀、6 世紀後半の須恵器甕、洪武通宝、鉄釘がある。

3 a 層からは、103 の 9 世紀の灰釉陶器段皿がある他、須恵器には 104 の 5 世紀中頃の杯蓋、105 の 8 世紀初頭の壺底部、106 の 10 世紀の甕、108 の初期須恵器甕、109 の 6 世紀後半の甕がある。また、107 の初鑄 976 年の北宋銭である太平通宝も出土している。この他、93 の 13 世紀前半の白磁碗がある。

平坦面 4

平坦面 4 は、2・3 層が薄く耕作による攪拌が基盤層まで及んでいるため、17 世紀から弥生時代の遺物まで含んでいる。また、調査時に 3 a 層として取り上げた遺物の内、古墳時代の遺構を検出する際に出土した遺物は、第 2 項で記述している。

1 a 層から 3 a 層出土として図化した遺物に、130・131 の 16 世紀後半から 17 世紀初頭の瀬戸美濃皿・天目碗、132・133 の転用円盤に加工された 17 世紀前半の唐津碗と 16 世紀後半の白磁小碗、

134 の 12 世紀後半の白磁碗、135 の 12 世紀の山茶碗。須恵器では、136 から 141 の 6 世紀から 7 世紀の杯・杯蓋・鉢。142 の移動式竈片、143 の石庖丁、144 と 145 のサヌカイト製品がある。

谷 1

調査時に分離できず 1 a 層を含む 2 a 層を掘削した層中から出土した遺物で図化したものに、172 から 174・176 から 232 がある。主なものに、17 世紀前半の朝鮮唐津壺口縁、16 世紀から 17 世紀の陶器（志野・唐津・備前・瀬戸美濃）、16 世紀の青花碗、12 世紀後半から 15 世紀の青・白磁の碗・皿、15 世紀から 16 世紀の瓦質土器、12 世紀後半の瓦器碗、12・13 世紀の土師器小皿・羽釜、縄紋時代後期初頭の中津式深鉢、鎌倉時代の巴文軒丸瓦、釘、火打金、下駄、木製紡錘車、不明木製品などがある。

3 a 層からの出土遺物で図化したものに、233 から 404 がある。主なものに 16 世紀の青花碗・皿、12 世紀から 16 世紀の青・白磁の碗・皿・盤・合子・香炉蓋、12 世紀から 16 世紀の陶器（瀬戸美濃、瀬戸、常滑、備前）、14 世紀から 16 世紀の瓦質土器、12 世紀から 13 世紀の瓦器碗・小皿、9 世紀から 16 世紀の土師器皿・小皿・羽釜、6 世紀代の須恵器系土師器高杯、初期須恵器から 8 世紀の須恵器壺・甕・器台・高杯・杯・杯蓋・長頸壺・短頸壺・提瓶・甗・鉢、13 世紀の東播系須恵器、製塩土器、鞆の羽口、土製紡錘車、竈、ミニチュア土器、軒平・丸瓦、丸瓦、銭貨、刀子、小柄、鉄鏃、錐、釘、他金属製品、砥石、石鍋、木製品がある。この他、中・近世の土器が出土する 10 - 156 溝から、図 213 - 7 に示す角杯の体部片が出土している。おそらく掘削時に下層の 4 a 層まで掘り抜いたため、混入したと考えられる遺物である。この角杯は、MT - 15 型式段階の福井県興道寺窯出土の角杯に調整などが類似している。

谷 2

谷 2 内の 3 面耕作溝から出土した遺物で図に示したものに、409 から 411 の 12 世紀後半から 13 世紀前半の土師器小皿がある。

2 a 層内から出土した遺物で図化したものに 412 から 422 がある。主なものに 17 世紀の唐津碗、12 世紀後半から 15 世紀の青・白磁の碗、12 世紀から 13 世紀の褐釉壺、16 世紀の瓦質鉢、12 世紀から 13 世紀の瓦器碗・小皿、16 世紀の土師器小皿がある。3 a 層から出土した遺物では、423 から 431 がある。主なものに 12 世紀から 13 世紀の褐釉壺、12 世紀後半の瓦器碗、8 世紀から 9 世紀の製塩土器、竈、5 世紀後半から 6 世紀の須恵器壺・高杯がある。

谷 3

2 層内から出土した遺物で図化したものに 437 の 16 世紀前半の青花碗、438 の初期須恵器鉢、用途不明の 436 の木製品が出土している。3 a 層内からは、440 から 465 が出土している。主なものに、12 世紀後半から 15 世紀の青・白磁の碗・皿、青白磁の合子、12 世紀後半から 13 世紀初めの瓦器小皿、12 世紀から 14 世紀の土師器小皿・皿、土師器器台、10 世紀の篠窯系須恵器の鉢、7 世紀末の須恵器杯、5 世紀中頃の須恵器杯蓋・杯・把手付甗・樽型甗、重弧紋軒平瓦、漆器碗、木製品、鉄釜、釘、砥石、温石などがある。なお、458 は上部と下部が接合できないため、下部の上方への伸びと径を勘案して図には配置している。土師器の器台である。脚部には現存で上下 2 段の貼り付けた凸帯が巡り、その間には長方形の透かしが 3 方に空けられている。なお、下方の段は剥がれており、接合の痕跡が残るのみである。内外面には、赤彩が施されている。杯部は、外側へやや丸みを帯びながら、斜め上方へ真っ直ぐに伸び、途中には段が認められる。口縁端部は丸く収めている。良く似た胎土・器形は岡山県の中山遺跡から出土している。

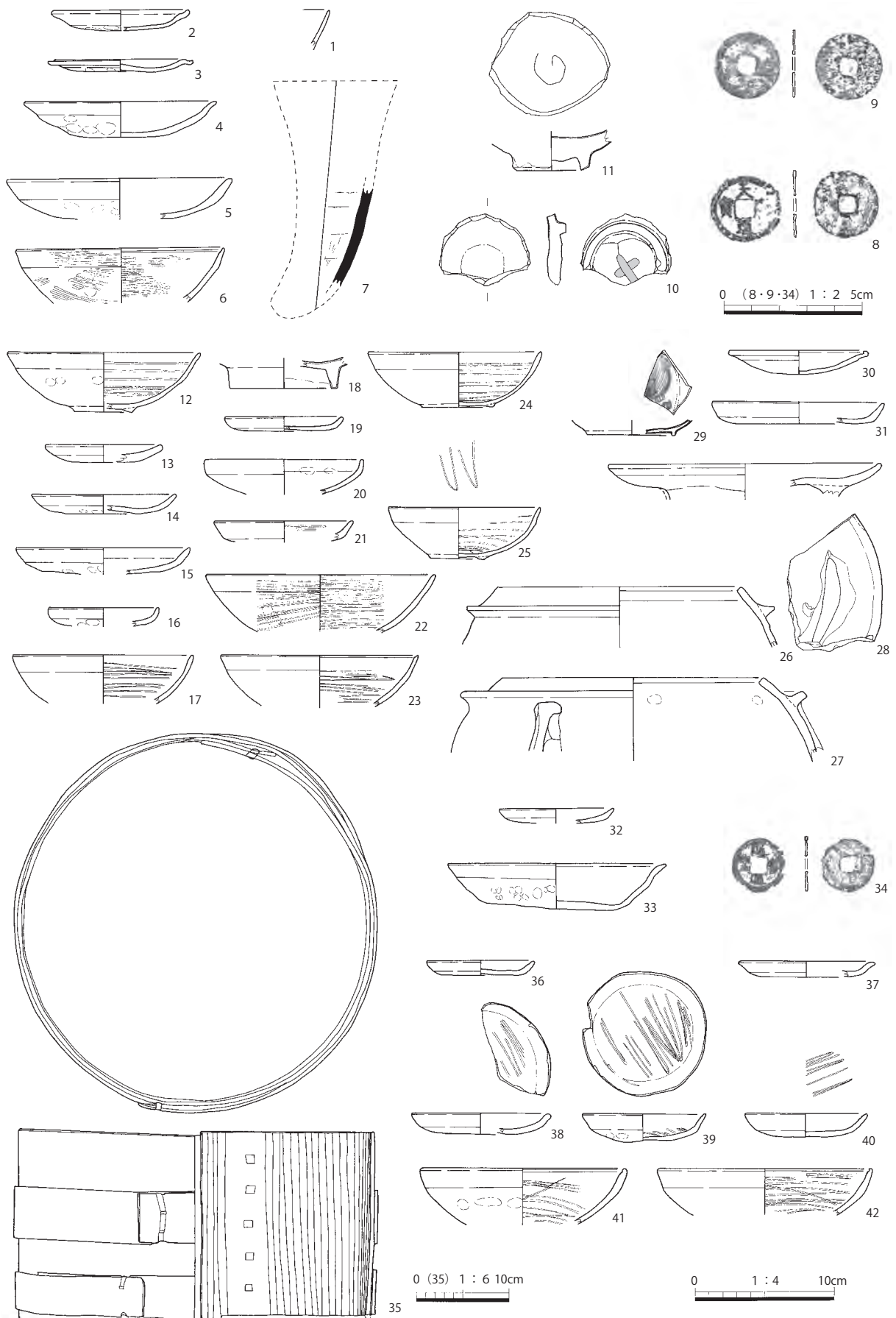


图 213 中世出土遺物 (1)

(平坦面 1~3)



图 214 中世出土遺物 (2)

(平坦面 3)

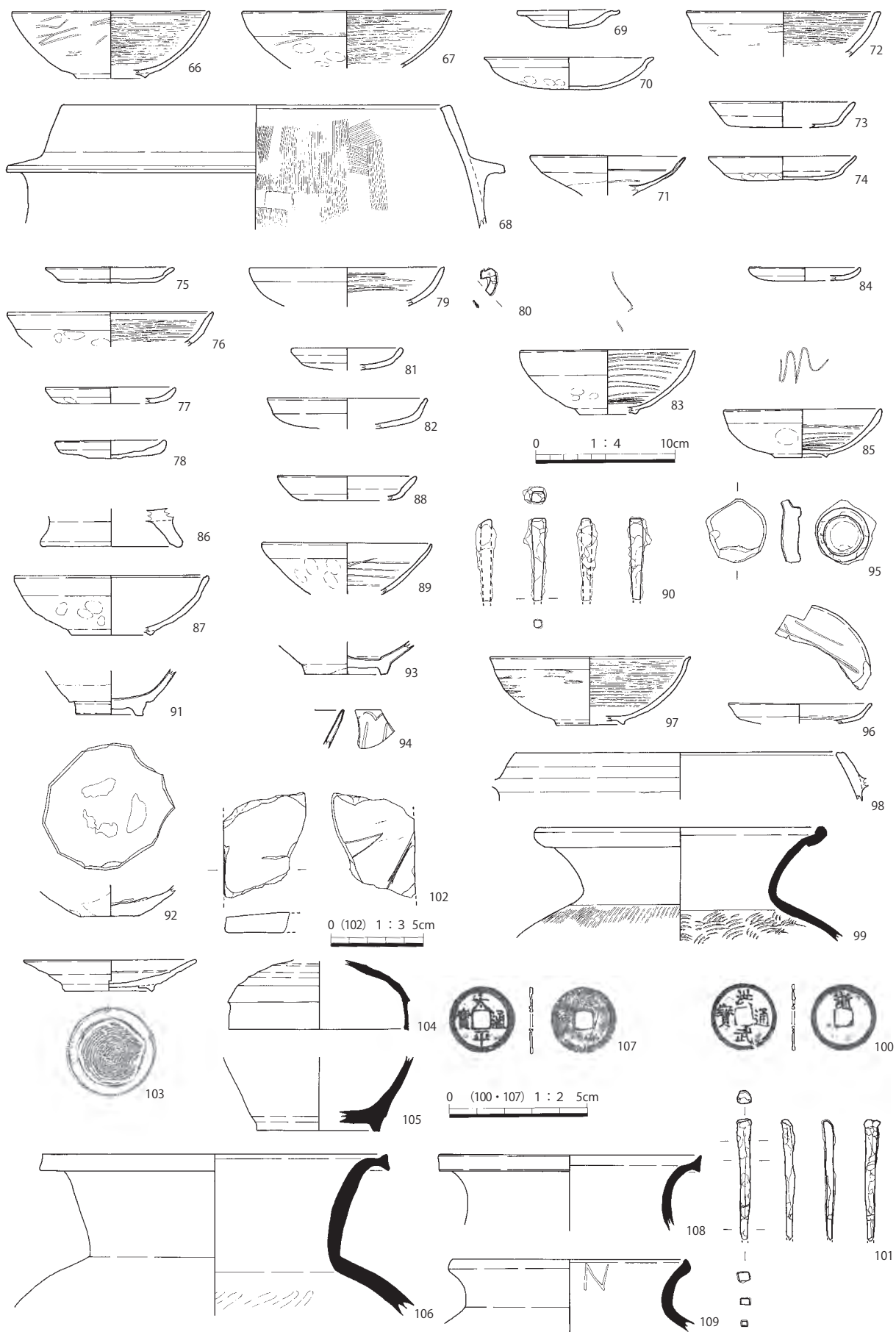


图 215 中世出土遺物 (3)

(平坦面 3)

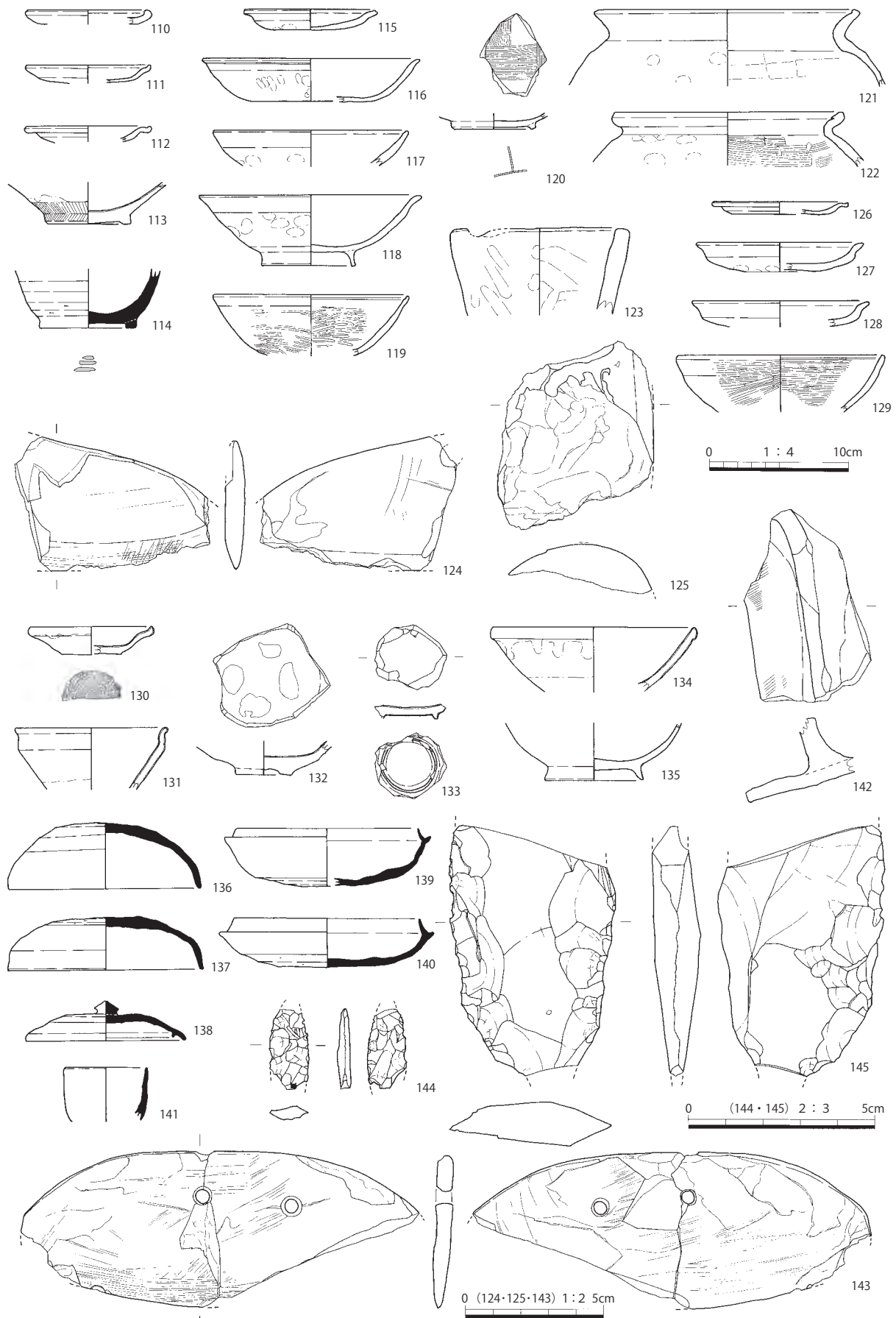


图 216 中世出土遺物 (4)

(平坦面 4)

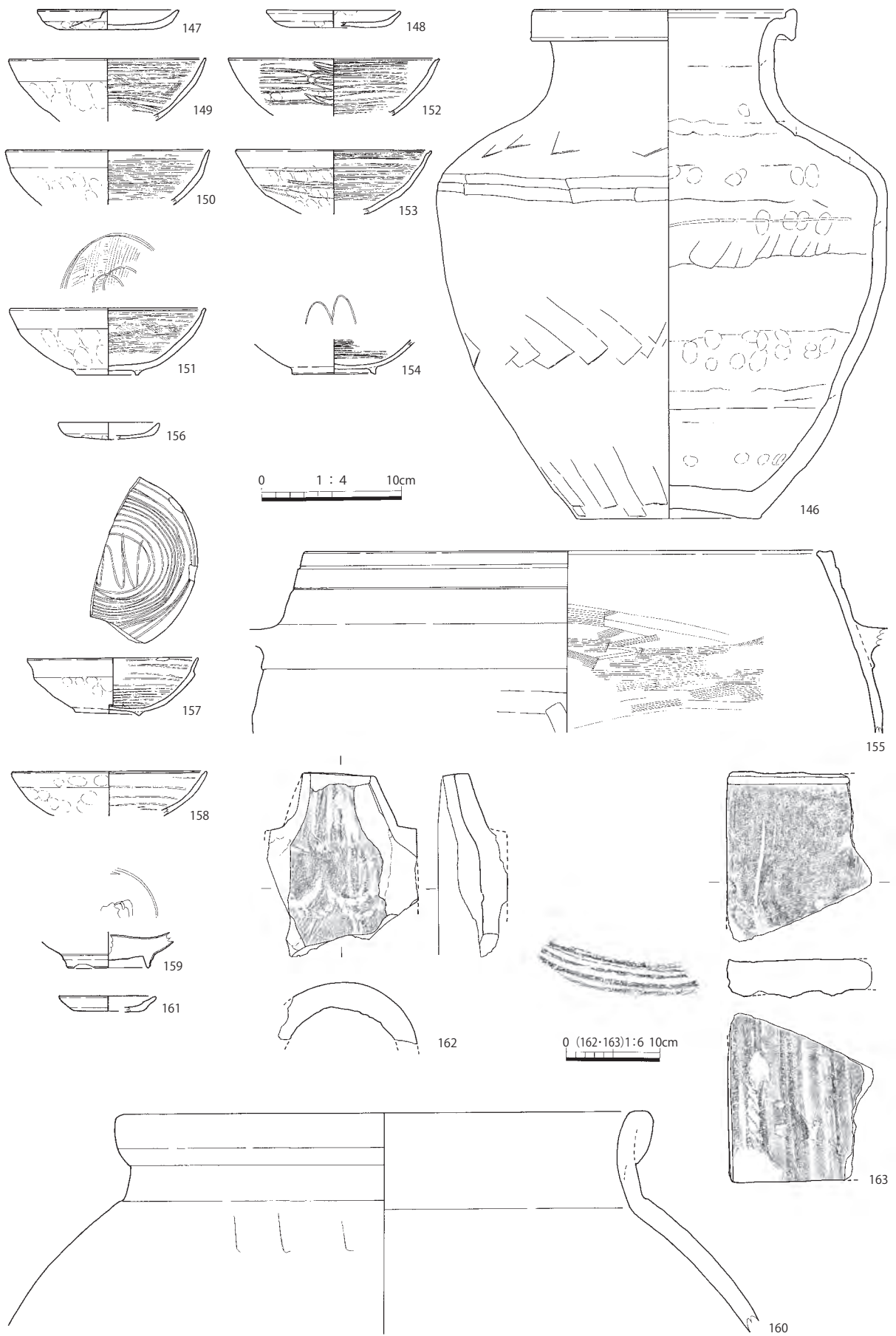


图 217 中世出土遺物 (5)

(谷 1)

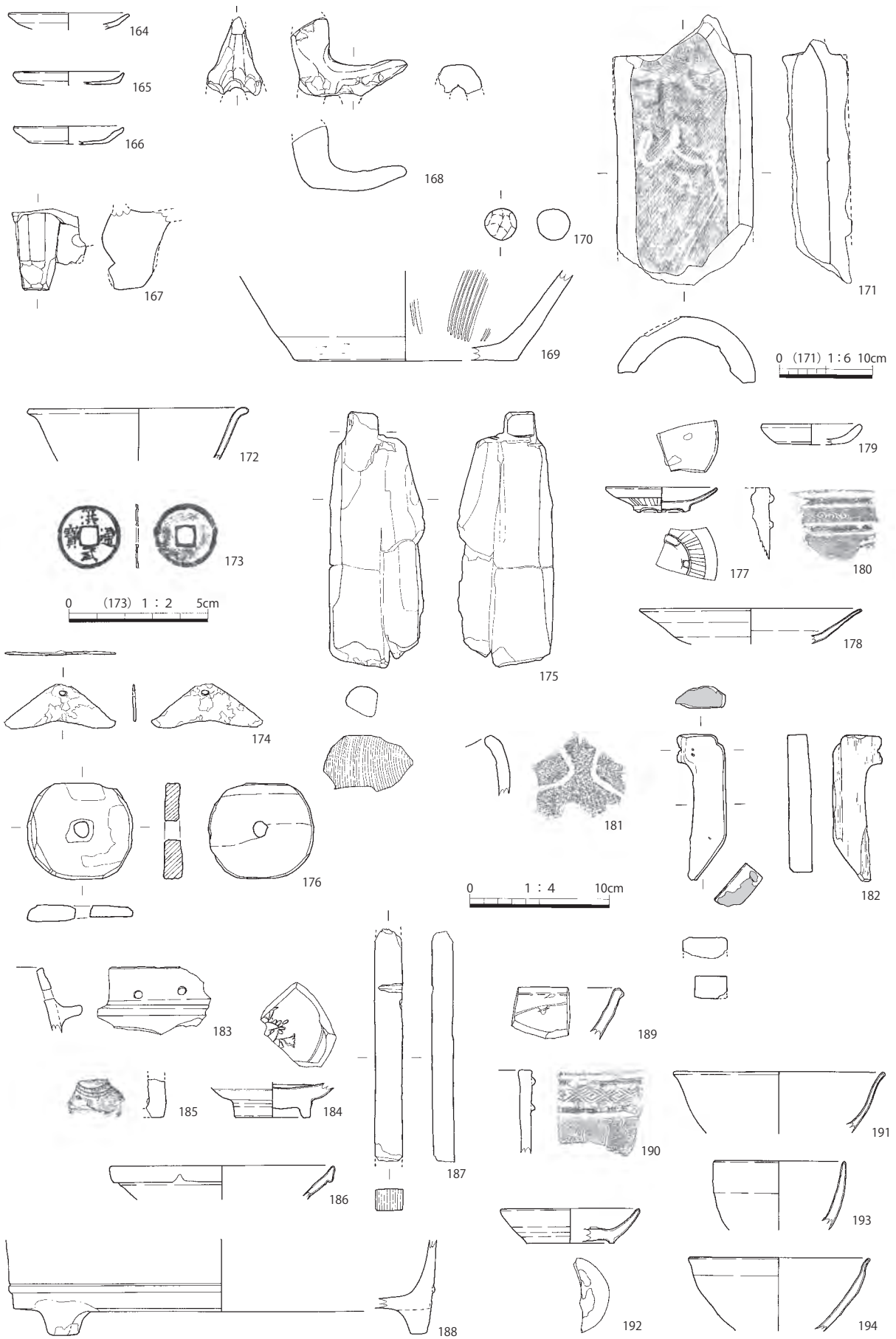


图 218 中世出土遺物 (6)

(谷 1)

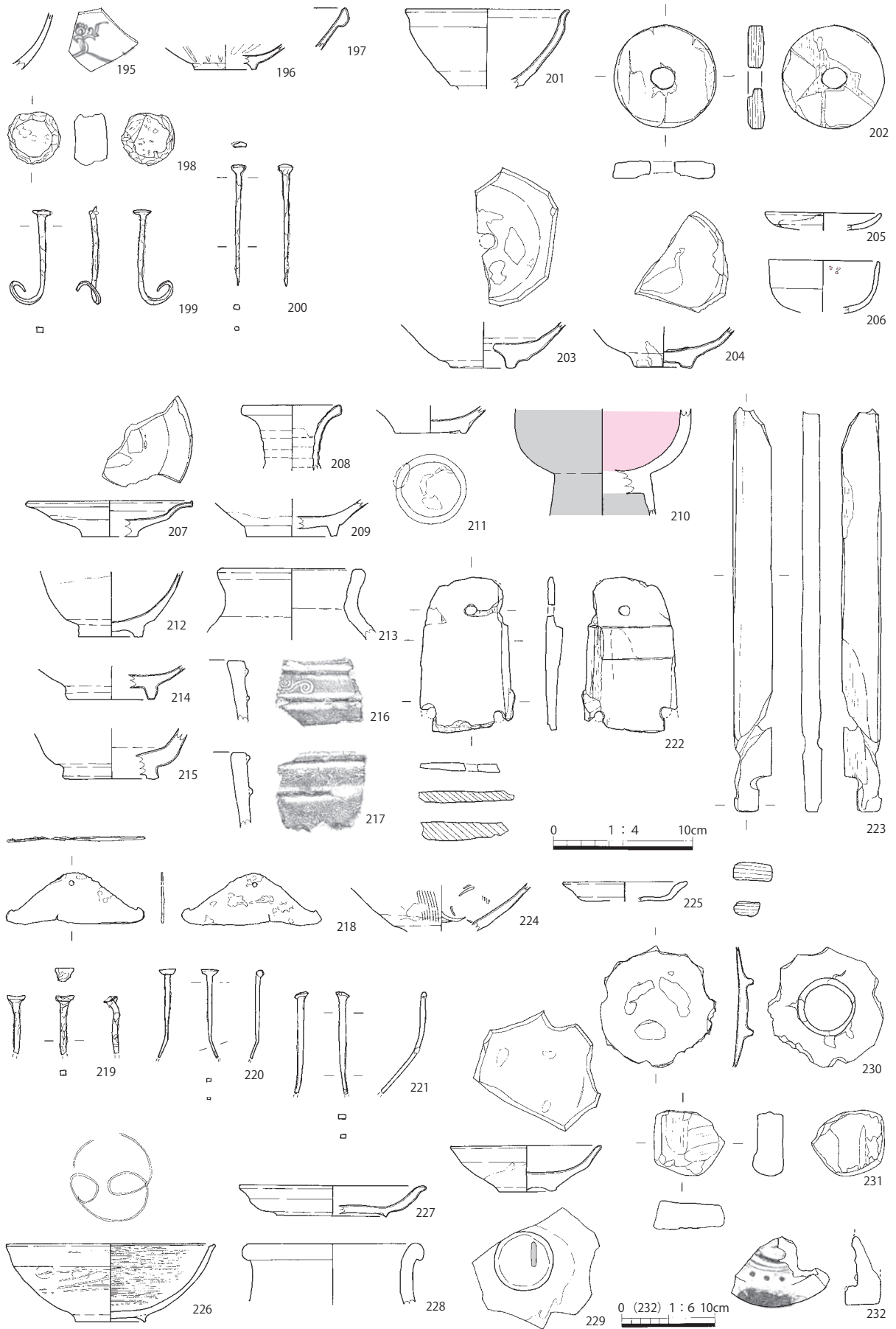


图 219 中世出土遺物 (7)

(谷 1)

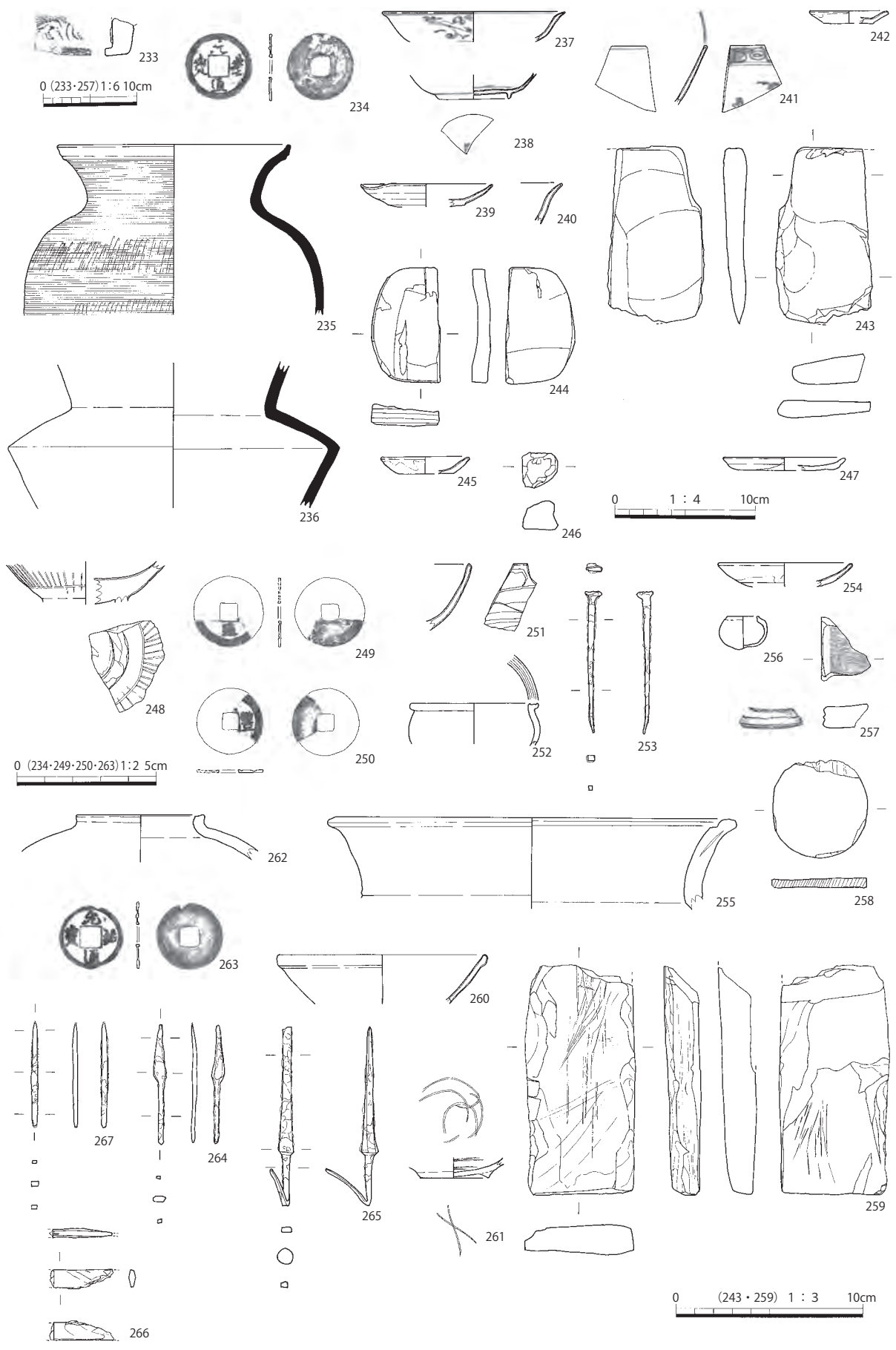


图 220 中世出土遺物 (8)

(谷 1)

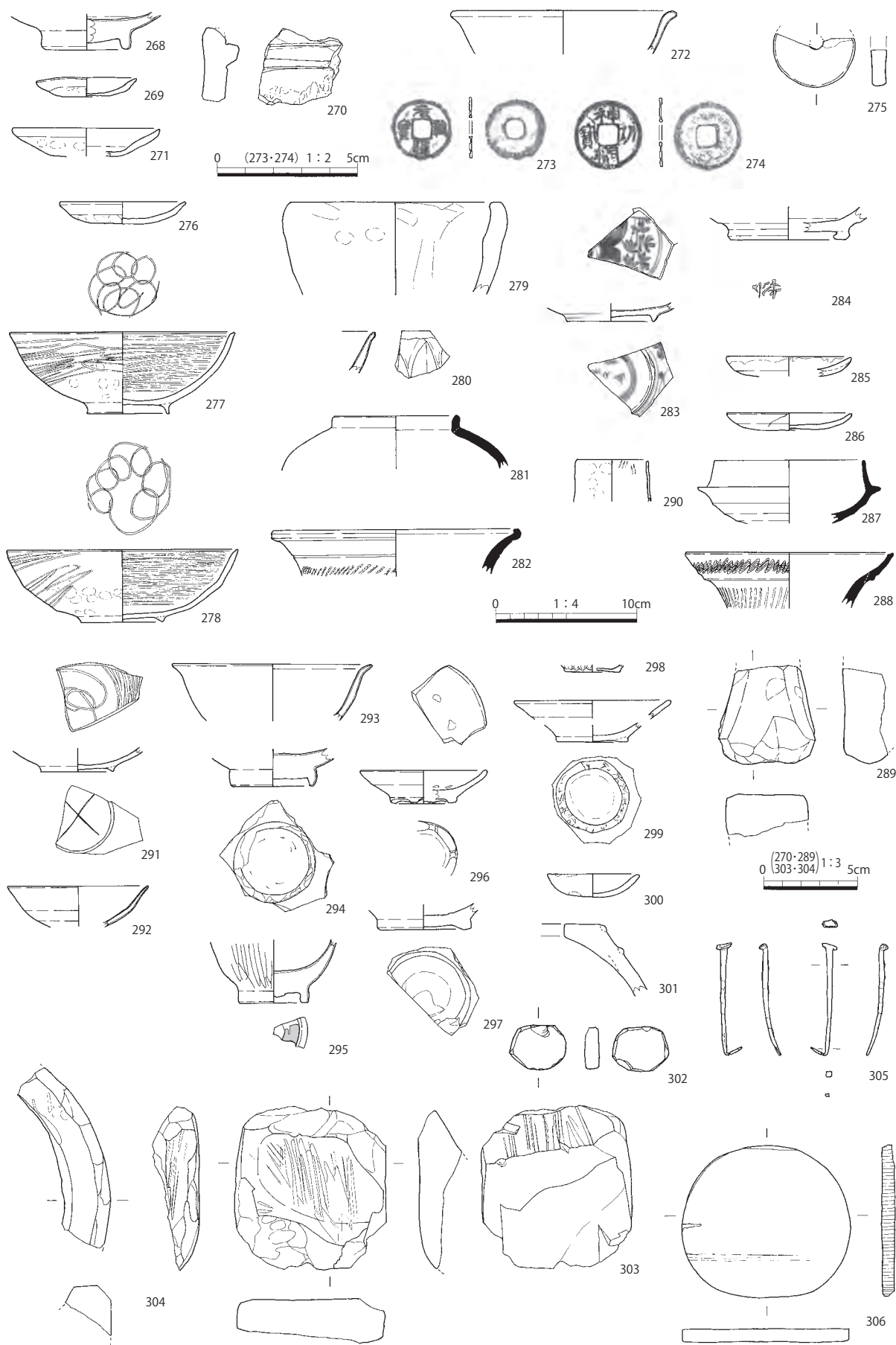


图 221 中世出土遺物 (9)

(谷 1)

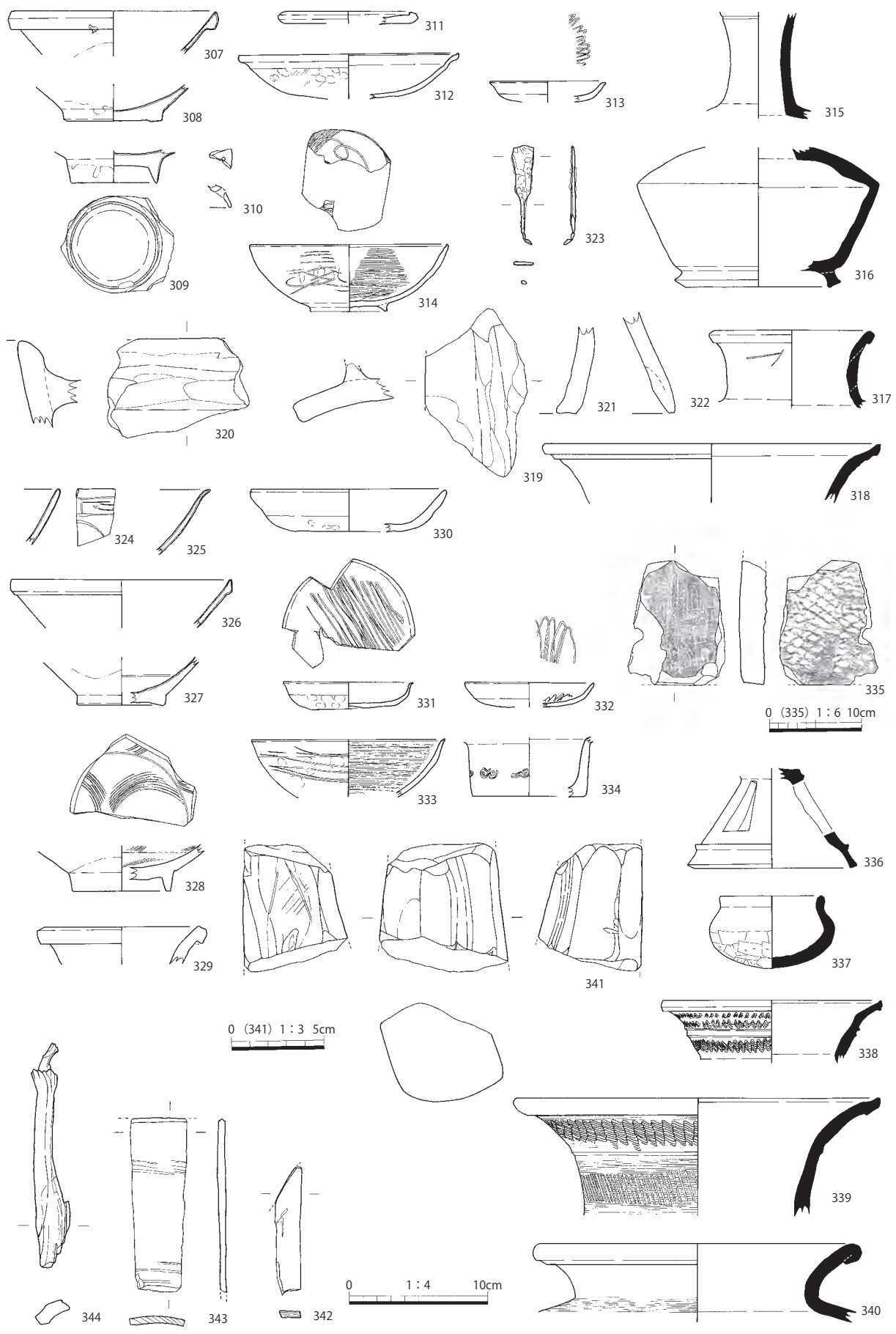


图 222 中世出土遺物 (10)

(谷 1)

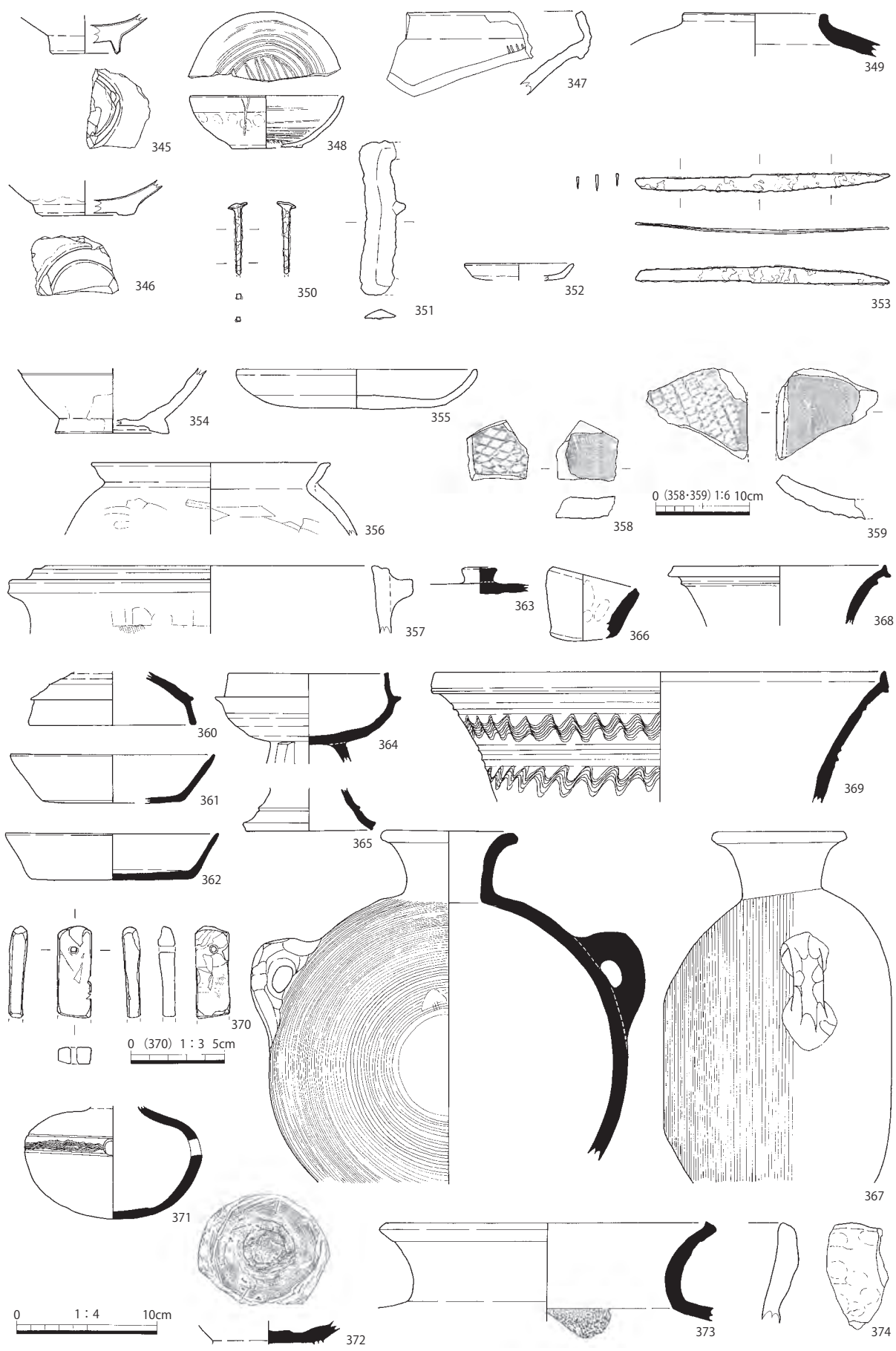


图 223 中世出土遺物 (11)

(谷 1)

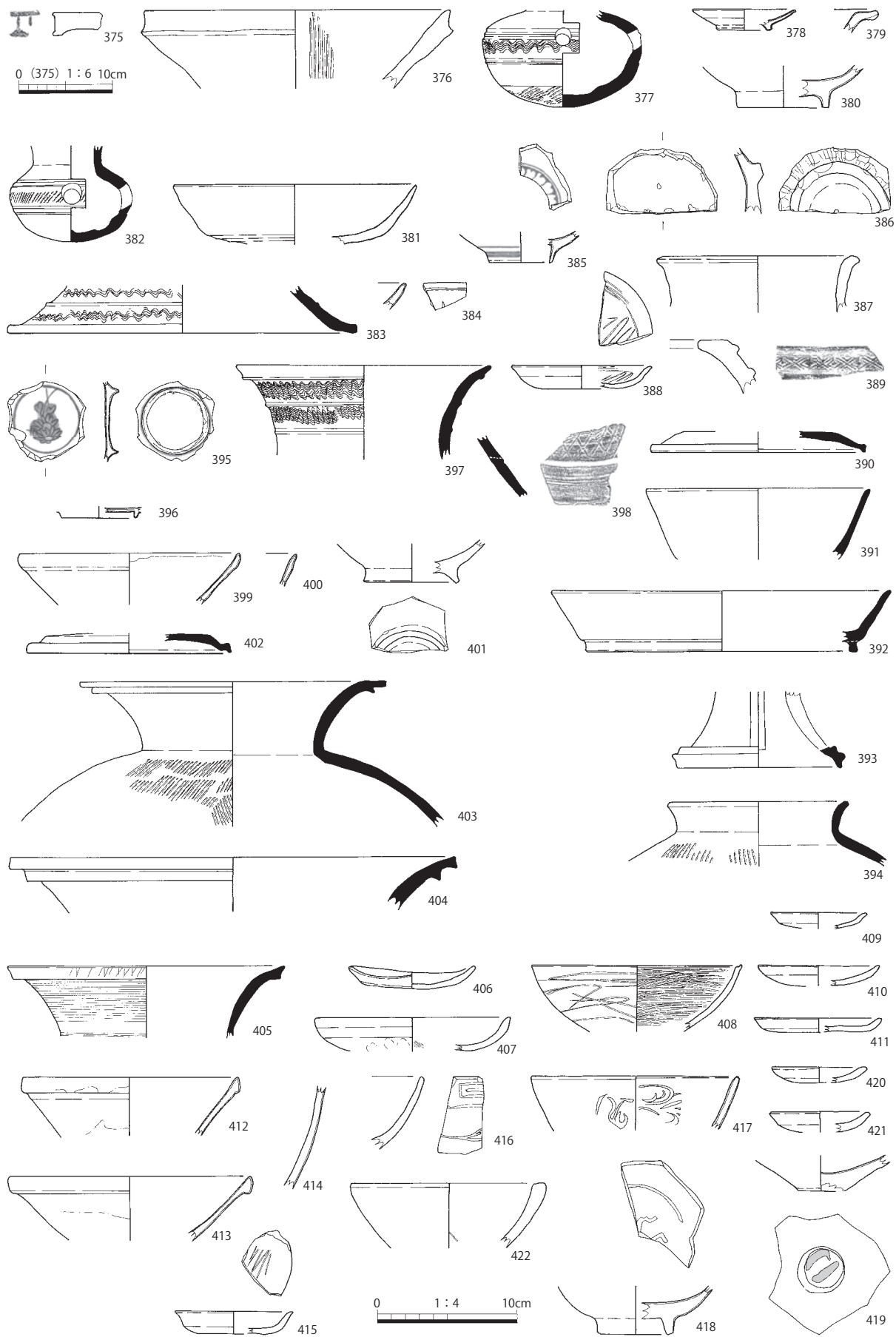


图 224 中世出土遺物 (12)

(谷 1・2)

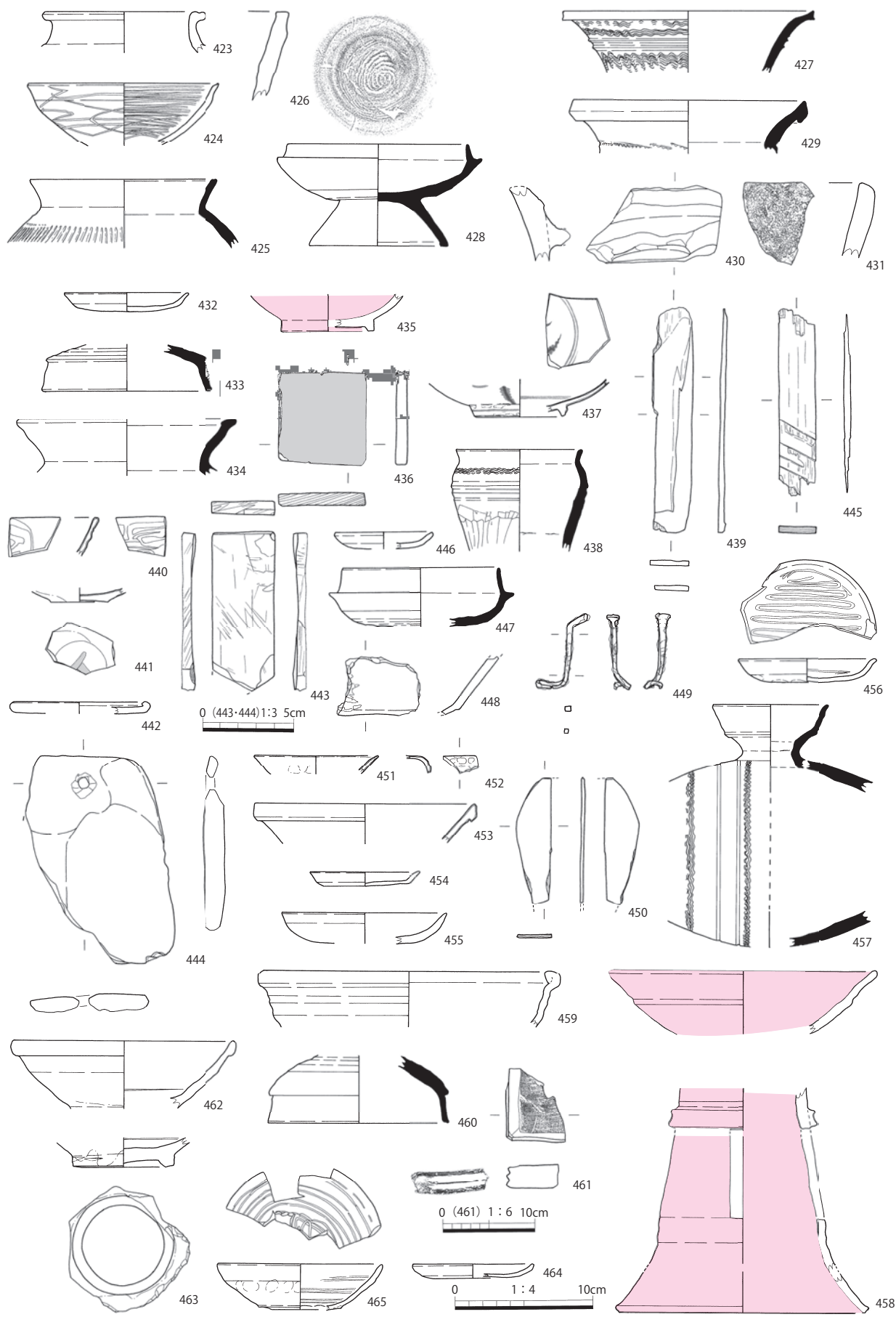


图 225 中世出土遺物 (13)

(谷 2・3)

第2項 奈良時代から古墳時代（4 a層）（図版35・36・37・38・39－1～5）

4 a層は、出土遺物から奈良時代から古墳時代に相当する古土壌で上面が第4面である。4 a層は、平坦面の大部分で耕作による攪拌のため3 a層に取り込まれ、失われている。このため、層が遺存している箇所は平坦面1の旧流路部分と、平坦面4の一部、それから谷部分に限定される。また、4 a層は暗色化が著しく第4面では遺構を検出することが難しく、専ら下層の6 a層上面である第6面で遺構の多くを検出することとなった。

平坦面1

竪穴建物

竪穴建物4（図226・227・326、図版83・39－6・40－1・2）

竪穴建物4は、近世段階の耕作に伴う段の造築により大きく削平を受けている。残存している平面形から、方形の竪穴建物と考えられる。残存部分は、東辺と北辺の一部で、東辺の残存長は5 m、北辺の残存長は1.3 m、検出面から床面までの深さは10 cmを測る。建物は、ほぼ南北方向を向いている。

壁際には壁溝を検出しており幅15 cm、深さは8 cmである。柱穴やカマド、土坑などの竪穴建物内の遺構は検出していない。建物は基盤層を掘り下げて造られており、基盤層上には、機能時の堆積と考えられる土器片や焼土、炭化物が入る褐灰色中砂から粗砂混じりシルトがみられる。その上層には埋土である灰褐色中砂から粗砂混じりシルトが堆積しており、層中から土器片が出土している。出土した遺物に、466のTK-216型式の須恵器杯、467・468の5世紀後半の土師器高杯、469・470・471の土師器甕、472砥石がある。出土遺物から、5世紀後半以降に考えられる竪穴建物である。

竪穴建物6（図226・228、図版39－7）

竪穴建物は、現代の攪乱坑により一部失われているが、長辺3.25 m、短辺2.32 mの長方形の竪穴建物である。上部は大きく削平を受けているため、検出面からの深さは5 cmと非常に浅い。建物は、長辺がほぼ東西方向を向いている。平面規模は小さく、面積は約7.5 m²で、壁溝や柱穴は検出していない。

柱穴が建物内になくことから、上部構造は単純なテント構造で、骨組をなす柱も据えるような、簡易な建物ではないかと思われる。埋土中から、細かな時期は不明だが、古墳時代と考えられる土師器甕片が出土している。

竪穴建物7（図226・229・326、図版86・39－8・40－3～8）

竪穴建物7は、ガス管により一部削平を受けているが、一辺4.1から4.15 mの方形の竪穴建物で、面積は約17 m²を測る。検出面からの深さは、15から20 cmである。建物は、北で西へ約30°振れている。建物は基盤層を掘り下げて造られており、基盤層上には埋土である炭化物や黄褐色系の砂質シルトブロックを含む、褐灰色系の中砂から粗砂が混じる細砂シルトの堆積が3層みられる。埋土除去面では、上部構造を支える支柱穴10-141 柱穴・10-142 柱穴・10-143 柱穴・10-144 柱穴を検出した。柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が30 cmから40 cm、深さは25 cmから50 cmを測る。いずれの柱穴にも直径15 cm前後の柱痕跡が見られた。掘方埋土は、上層がにぶい黄褐色系中砂混じりシルトから細砂、下層が灰黄褐色粗砂から細礫混じる細砂で、2層とも基盤層のブロックを含む。建物の埋土中からは、473のTK-23型式の甕、同じくTK-23型式の474の高杯脚部、477の5世紀後半の土師器高杯、476の土師器の丸底の壺、478の土師器鉢、480の長さ1.5 cmで断面が円形の鉄製品が出土している。この他、図化できなかつたが、製塩土器片、鋳滓、不明鉄製品などが出土している。また、混入ではあろうが、初期須恵器片も出土している。出土遺物から、5世

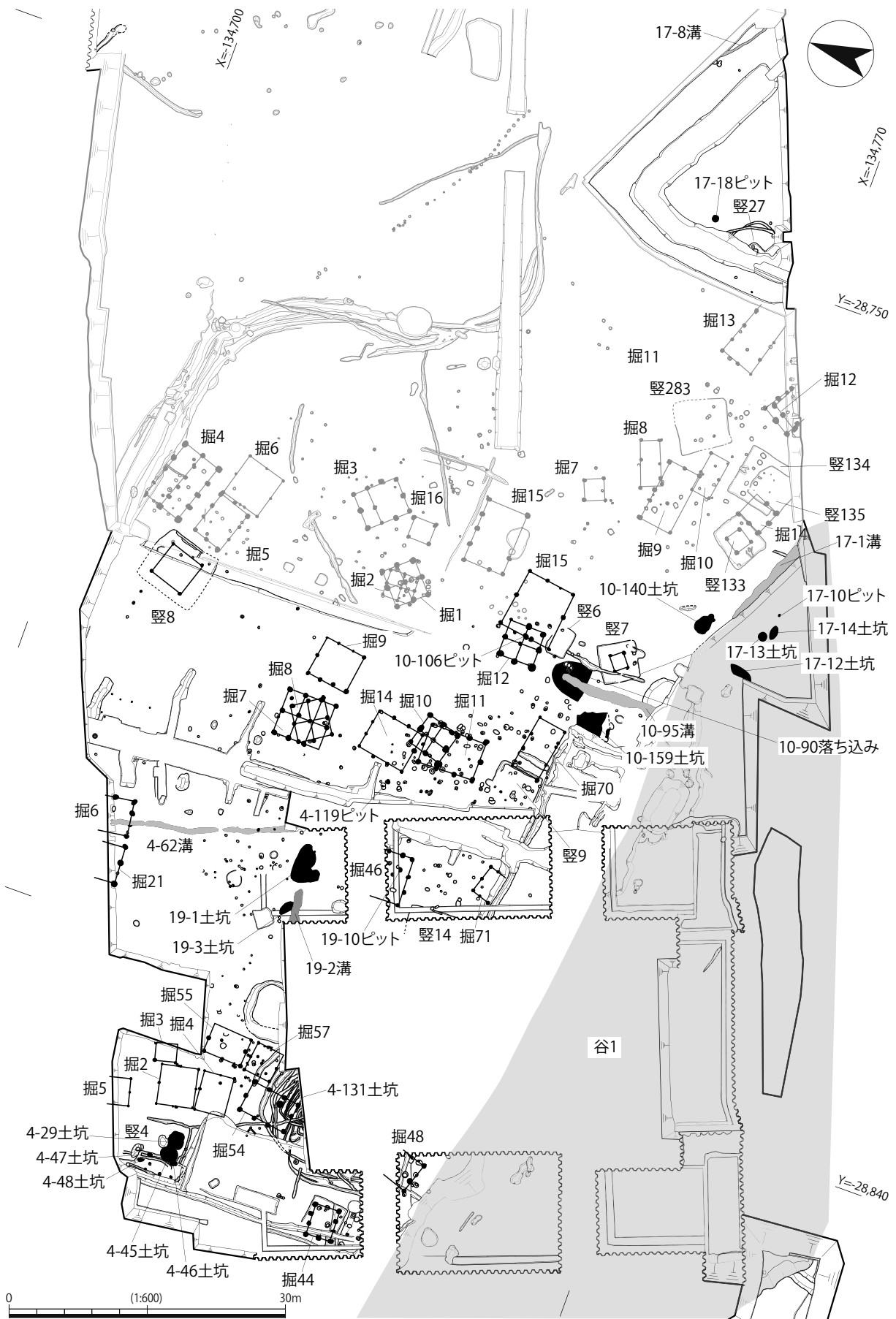


図 226 第 6 面検出 4 a 層帰属遺構配置図 (平坦面 1 古代～古墳時代)

紀後半段階の竪穴建物と考えられる。

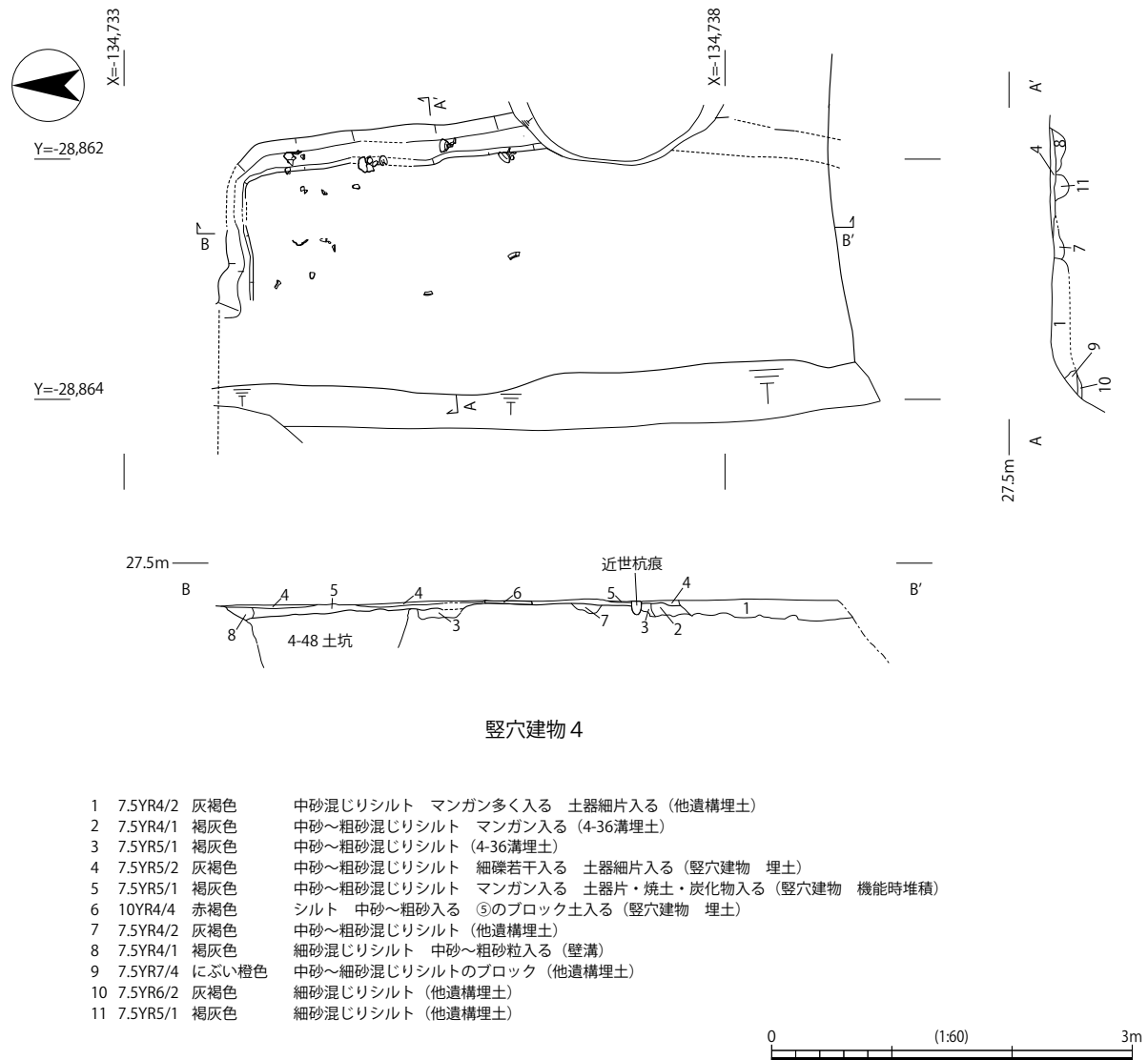
この他、竪穴建物の南東辺で焼土坑を検出している。調査時にカマドと考えていたが、焼土を含む埋土が竪穴建物の壁からさらに外側へ広がっていること。断面観察から、建物埋土を掘り込んでいる可能性が考えられることなどから、竪穴建物7に伴わない別遺構とした。埋土内からは、焼土や炭化物の他、475のMT-15型式の杯蓋、479のサヌカイト製石鏃、図化していないが製塩土器片、須恵器・土師器片が出土している。出土遺物の時期からも、竪穴建物7が先行することが言える。

竪穴建物8（図226・230・231・326、図版41-1）

竪穴建物8は、私部南06-2調査区で検出した部分を合わせて1棟となる方形の竪穴建物である。

約3分の2は、近世の耕作に伴う段の造築と、同じく近世の水路により削平され失われている。このため支柱穴の内、10-171柱穴・10-172柱穴は、近世水路底面で検出している。

残存している北辺長は2.5m、東辺長は6.5m、南辺長は1.4mで、深さは10cmを測る。残存部分と支柱穴の位置から全体を考えると、東西長7m、南北長6.5mに復元できる。建物は東壁でみると、北で東へ約17°振れている。竪穴埋土は、にぶい黄橙色粗砂から際礫混じり細砂からシルトで、基盤



竪穴建物4

- | | | | | | |
|----|----------|-------|------------------|----------|---------------------------|
| 1 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 中砂混じりシルト | マンガン多く入る | 土器細片入る (他遺構埋土) |
| 2 | 7.5YR4/1 | 褐灰色 | 中砂～粗砂混じりシルト | マンガン入る | (4-36溝埋土) |
| 3 | 7.5YR5/1 | 褐灰色 | 中砂～粗砂混じりシルト | | (4-36溝埋土) |
| 4 | 7.5YR5/2 | 灰褐色 | 中砂～粗砂混じりシルト | 細礫若干入る | 土器細片入る (竪穴建物 埋土) |
| 5 | 7.5YR5/1 | 褐灰色 | 中砂～粗砂混じりシルト | マンガン入る | 土器片・焼土・炭化物入る (竪穴建物 機能時堆積) |
| 6 | 10YR4/4 | 赤褐色 | シルト | 中砂～粗砂入る | ⑤のブロック土入る (竪穴建物 埋土) |
| 7 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 中砂～粗砂混じりシルト | | (他遺構埋土) |
| 8 | 7.5YR4/1 | 褐灰色 | 細砂混じりシルト | 中砂～粗砂粒入る | (壁溝) |
| 9 | 7.5YR7/4 | にぶい橙色 | 中砂～細砂混じりシルトのブロック | | (他遺構埋土) |
| 10 | 7.5YR6/2 | 灰褐色 | 細砂混じりシルト | | (他遺構埋土) |
| 11 | 7.5YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混じりシルト | | (他遺構埋土) |

図227 竪穴建物4 平・断面図

層のブロックを含むことから加工時の堆積の可能性も考えられる。層中からは、土師器・須恵器片が出土している。竪穴建物内では、壁溝とカマド、支柱穴を検出している。

壁溝は幅約 24 cm、深さは 3 cm で、東壁に沿って延長 3.7 m 検出している。なお一部、壁溝が 2 本並行して掘削されている箇所があり、壁溝を造り替えたと考えられる。10 - 112 カマドは、竪穴建物のほぼ中央で北辺に近い部分で検出している。カマドの上部構造や、袖などは失われており、基盤層をやや掘り窪めた部分と、壁であったであろう焼土塊を検出している。カマド内と考えられる長軸 90 cm、短軸 74 cm の窪み付近は、被熱により赤色を呈している。この部分から炭化物と共に、481 に示す 5 世紀後半の須恵器高杯の杯部や、図化はできなかったが土師器甕が出土している。

支柱穴は、10 - 171 柱穴・10 - 172 柱穴・10 - 173 柱穴・7 - 379 柱穴を検出している。掘方の平面形は、ほぼ円形で直径 28 から 50 cm、深さ 24 から 64 cm を測る。遺物は出土していない。

出土遺物から、5 世紀後半の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 9 (図 226・230・232・326、図版 71・41 - 2)

竪穴建物 9 は西側が削平されて失われており、かつ偶然ではあるが図に示すように、中世の耕作溝が、北辺に重なっていたため、調査時に壁溝と誤認して掘り下げてしまっている。このため、カマドが竪穴建物から外に飛び出すような平面形となっている。ここで、改めて残りの良い状態で検出したカマドを手がかりに、カマド北端を竪穴建物の北辺として考えると、平面形は方形で、南北長 5.5 m、東西長 6 m に復元できる。また、建物は検出した東壁でみると、北で東へ約 7° 振れる。深さは、検出面から 4 cm と非常に浅い。竪穴建物埋土は、明黄褐粗砂混じりシルトから細砂である。埋土を除去すると幅 35 cm、深さ 6 cm の壁溝を、東壁に沿って延長 4 m を検出している。支柱穴は検出しておらず、想定した平面規模から考えると、上部構造を支える支柱穴が検出できなかったことが気になる点である。

以上を考えると、検出した竪穴建物の規模も構造も非常に不確定なものであることが言える。ただ、カマドは遺構として確かなものであり、遺物も伴っていることから、本遺構を竪穴建物として考えるのは妥当だと思われる。

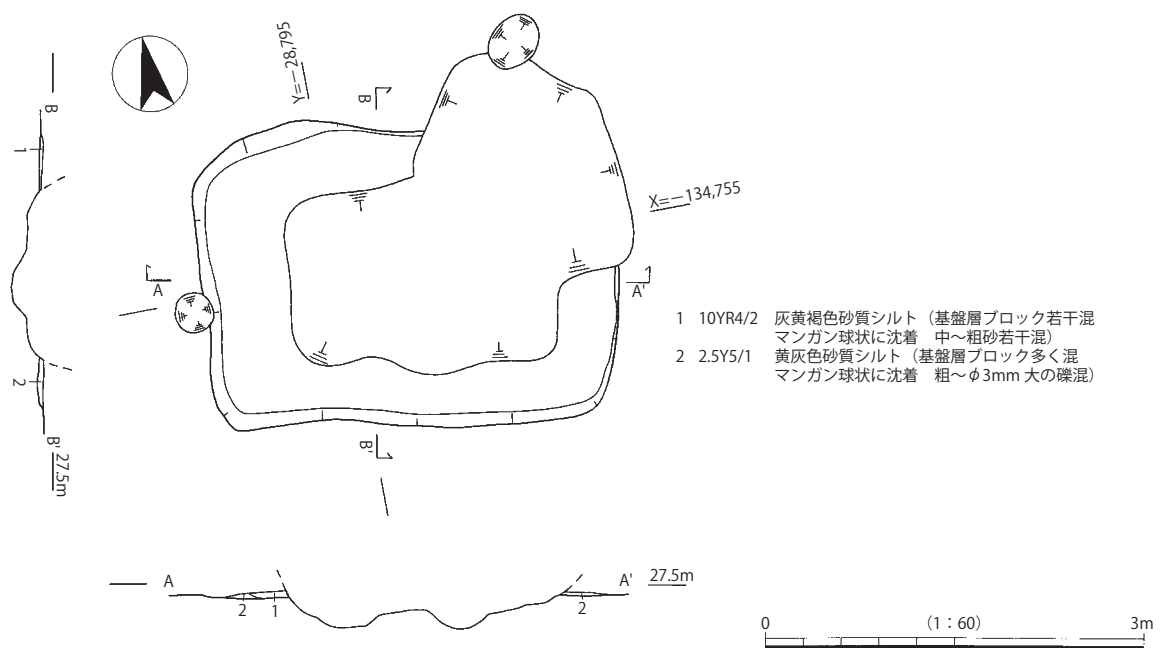


図 228 竪穴建物 6 平・断面図

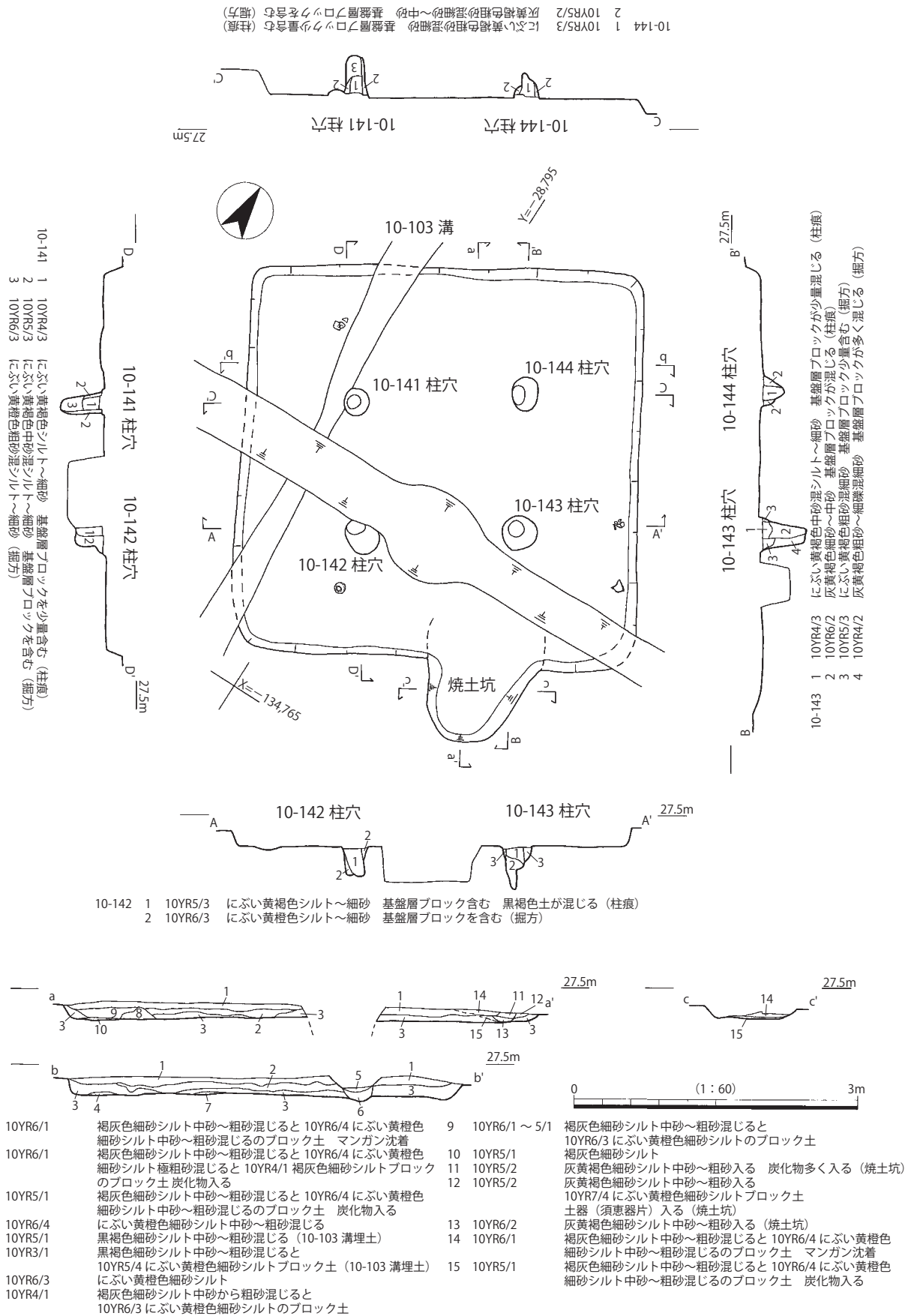


図 229 竪穴建物 7 平・断面図

検出した 10-85 カマドは、上部構造は失われているものの、壁体であったと考えられる焼土塊と炭化物を除去すると、長軸長 35 cm、深さ 5 cm を測る掘り窪められ被熱した火床部がみられる。また、その下部には大きな掘込みがあり、基盤層のブロックを含む土で埋められている。カマド構築の補強作業と考えられる。なお、埋土中には焼土塊や炭化物などがみられないことから、カマド構築前の遺構と言えよう。上部の焼土塊と炭化物と共に、482 に示す T K-208 型式の杯、484・485 の土師器ミニチュア土器、483 の土師器甑が出土している。出土した甑はおそらく、このカマドで使用したものではないかと考えられ、ミニチュア土器はカマド廃棄時の祭祀遺物の可能性が考えられる。

竪穴建物 14 (図 226・233・326、図版 41-4)

竪穴建物 14 は、調査区の端で検出しており、東辺と北辺の一部分を検出したのみである。平面形から方形の竪穴建物と考えられる。検出延長は、東辺が 5 m、北辺が 1.55 m で、検出面からの深さは、

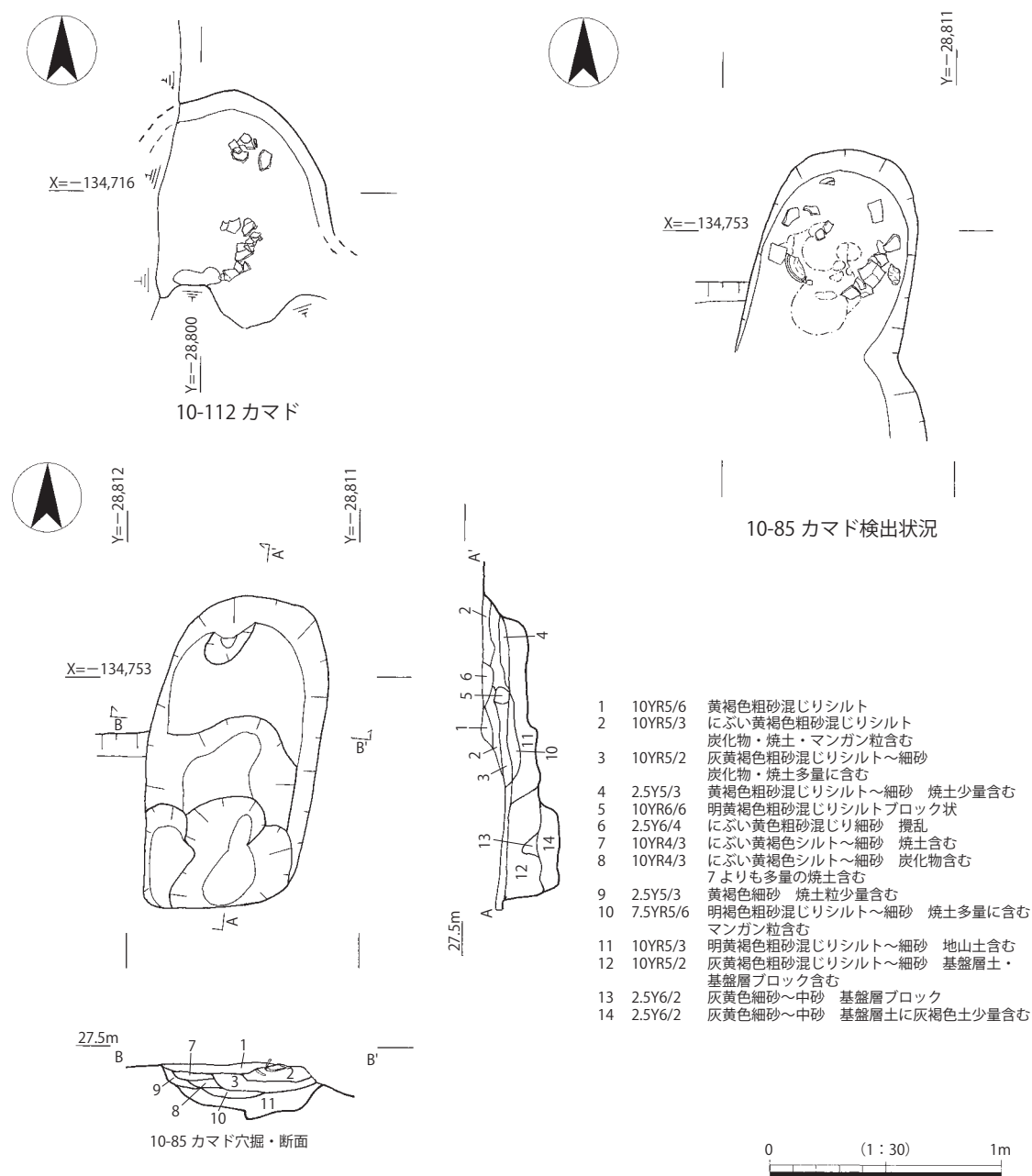


図 230 竪穴建物 8 10-112 カマド 竪穴建物 9 10-85 カマド 平・断面図

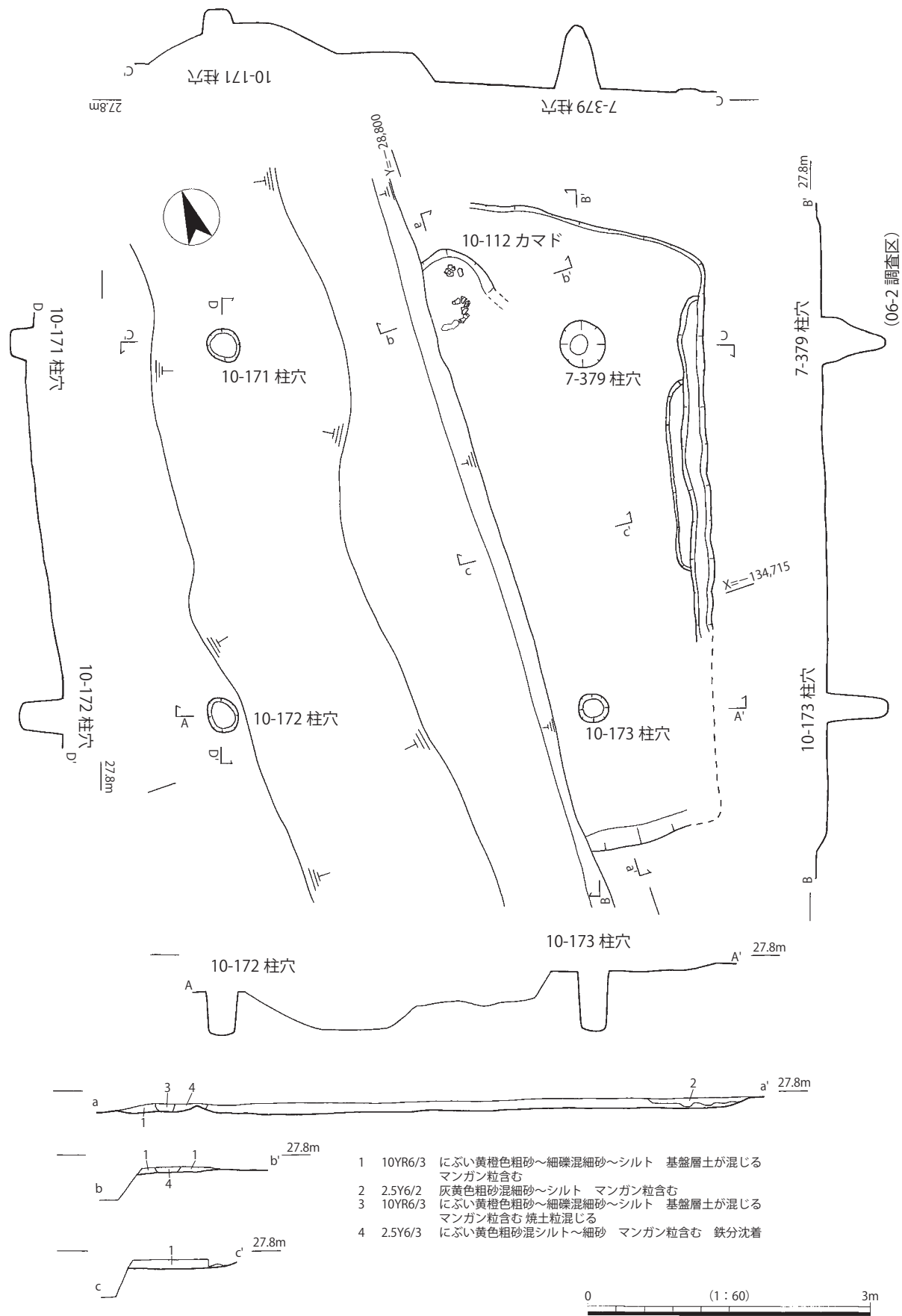


図 231 竪穴建物 8 平・断面図

8 cmを測る。建物は、ほぼ南北方向を向いている。建物内では、壁際で部分的に幅 16 cm、深さ 5 cm、検出長 1.1 mを測る壁溝を検出している。壁溝は、基盤層上にみられる灰色土を掘り込んでおり、この層が機能時の堆積であったと考えられる。灰色土上には、埋土である中砂を多く含む暗灰黄色土が堆積しており、層中から 486・487 の須恵器杯、488 の須恵器壺が出土している他、韓式系土器・移動式竈・製塩土器・土師器・須恵器破片が出土している。

出土遺物から 6 世紀初頭から中頃の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 23 (図 226・235・239)

竪穴建物 23 は、近世の耕作に伴う段の造築により大きく削平を受けており、北東隅部分のみ検出できた方形の竪穴建物である。東辺の残存長は 80 cm、北辺の残存長は 60 cm、検出面からの深さは 30 cmを測る。建物は、北で東へ約 25° 振れる。建物内には、幅 10 cm、深さ 3 cmの壁溝が設けられている。

竪穴埋土は、褐色極細砂から細砂混じりシルトで砂礫を少量含む。図化はしていないが、層内から製塩土器片が出土している。古墳時代の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 27 (図 226・234・327、図版 41 - 3)

竪穴建物 27 は、現代のコンクリート擁壁及び水路により削平されており、北東隅部分のみ検出できた外周溝を伴う、方形の竪穴建物である。東辺の残存長は 1.5 m、北辺の残存長は 80 cm、検出面からの深さは 22 cmを測る。建物は、北で東へ約 25° 振れる。建物内では、ピットを検出しているが柱穴とするには浅い。竪穴建物埋土は、2 層に分層でき上層は、粗砂から極粗砂を含む灰黄褐色中砂シルトに、にぶい黄褐色のシルトブロックが入る。下層は、シルトブロックが入る、中砂から粗砂含む灰黄褐色中砂から粗砂である。

外周溝である 17 - 5 溝は、幅 30 cm、深さ 14 cmで、竪穴から約 1.9 m離れた位置に掘削されており、検出形からおそらく円形に近い平面形を呈すると考えられる。埋土は暗褐色または灰褐色の中砂シルトで粗砂から極粗砂が混じる。遺物は出土していない。また 17 - 5 溝に先行する 17 - 6 溝も検出しており、同じ竪穴建物に伴う古い段階の外周溝か、もしくはもう 1 棟竪穴建物が存在する可能性が考えられる。

竪穴建物埋土中からは、502 に示す韃の羽口片、鉾滓や須恵器・土師器片が出土している。17 - 5 溝内からは、小片ではあるが 5 世紀後半と考えられる須恵器壺体部片と土師器片、鉾滓の他、501 に示す初期須恵器の器台片も出土している。出土遺物から、5 世紀後半以降の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 19 から竪穴建物 22・竪穴建物 24 から竪穴建物 26・竪穴建物 28

(図 226・235・242、図版 41 - 5)

竪穴建物 19 から竪穴建物 22・竪穴建物 24 から竪穴建物 26・竪穴建物 28 は、出土遺物から 6 世紀中頃から後半に、ほぼ同位置に造られており、頻繁に立て替えを行っていたと考えられる。支柱穴も検出しておらず、通常の竪穴建物ではなく特殊な用途のために建てられた建物と考えられる。このため、竪穴部分や壁溝、外周溝は複雑に重なり合っておりかつ、各遺構の埋土は非常に類似している。最初に検出した際には、黄色系の基盤層に褐灰色系の埋土が不定形に一面に広がっている状態であり、その層の上部を掘り下げてようやく外周溝や竪穴建物の輪郭を検出できた。

調査時には、埋土の色調や質を手がかりに順に掘り分けている。その変遷を図式に表すと、新しい順に竪穴建物 19 → 竪穴建物 20 → 竪穴建物 21 → 竪穴建物 24 → 竪穴建物 22 → 竪穴建物 25 → 竪穴建物 26 → 竪穴建物 28 となる。また、調査区端で検出しているため、平面規模が不明な竪穴建物の一群である。

以下、変遷の図式に沿って順に述べる。

竪穴建物 19 (図 236・326、図版 41 - 6・42 - 1)

竪穴建物 19 は、4 - 91 溝を外周溝として伴う方形の竪穴建物である。残存長は北辺 3.8 m、西辺長は 3.1 m を測る。深さは 10 cm である。暗灰黄色砂礫混じりシルトを掘り下げ床面を検出している。

床面には、壁溝がみられ幅は 13 cm、深さは床面から北辺の壁溝で 20 cm、西辺の壁溝で 5 cm を測る。

埋土は、北辺の壁溝で見ると上層が灰黄褐色シルト混じり細砂、下層が黄灰色粗砂混じりシルトである。調査時には、この壁溝を検出した高さを床面として認識している。また、壁溝と 4 - 150 溝の重複から、4 - 151 溝を外周溝とする竪穴建物 25 に先行する竪穴建物であることが判る。

支柱穴は、床面及び床面を形成する層の下面でも検出していない。床面を形成する層は、灰黄褐色の粗砂混じりシルトで砂礫を微量含む。埋土中からは、489・490 の須恵器杯が出土している。

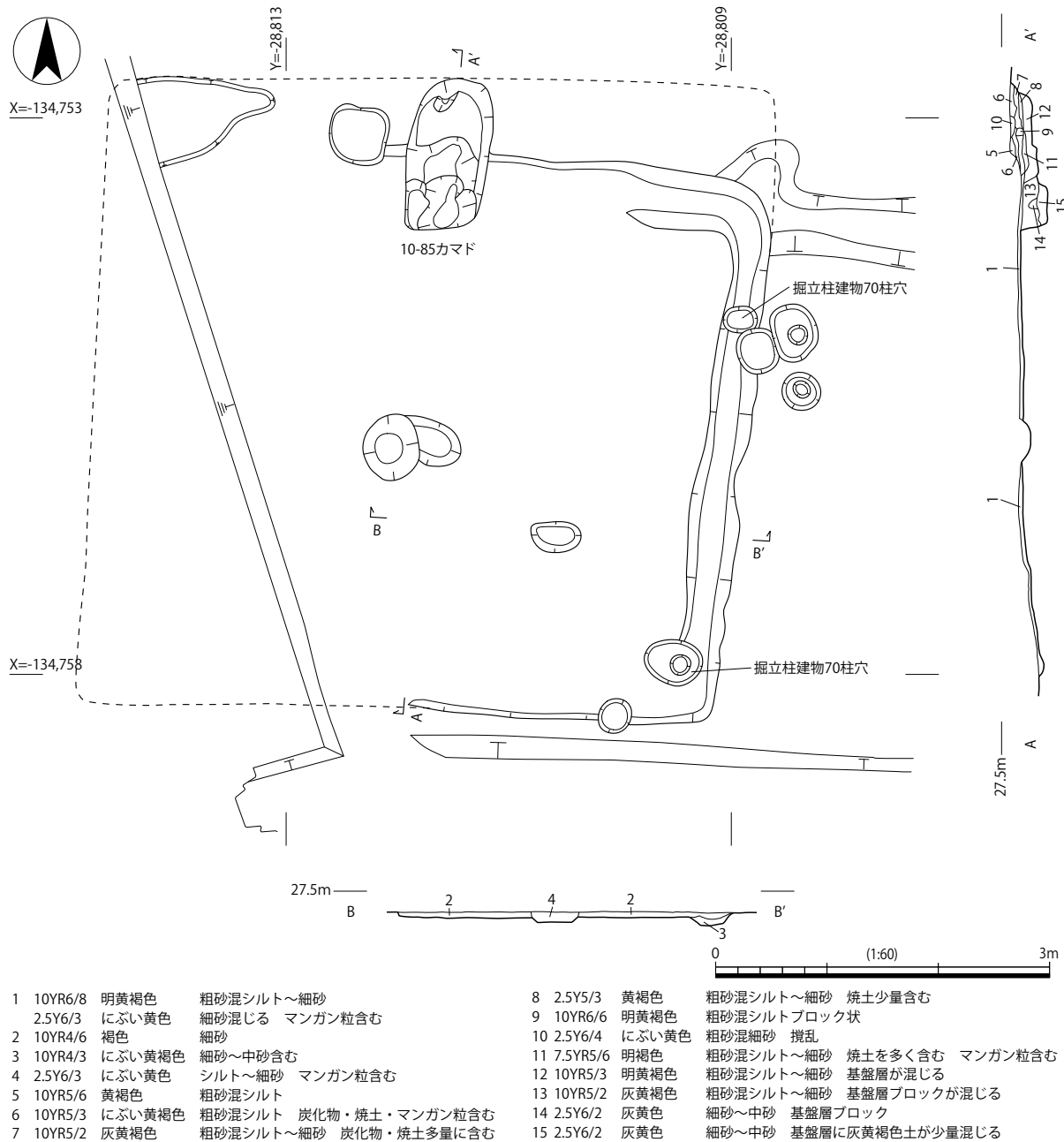
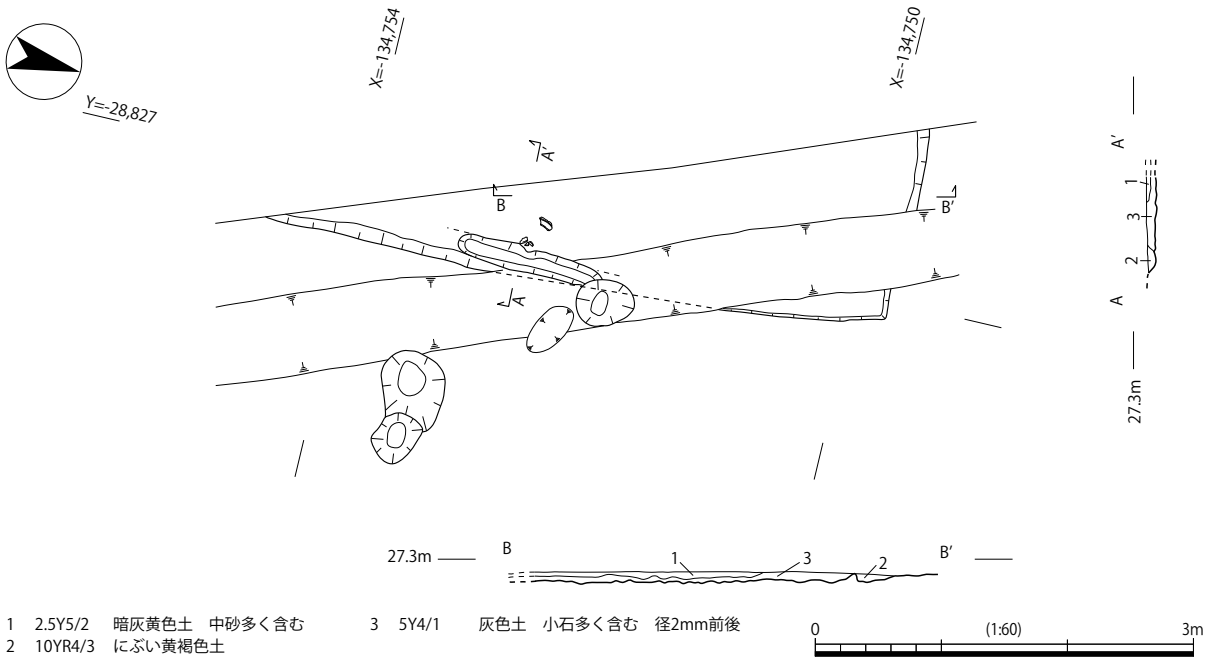


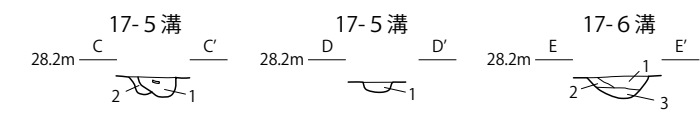
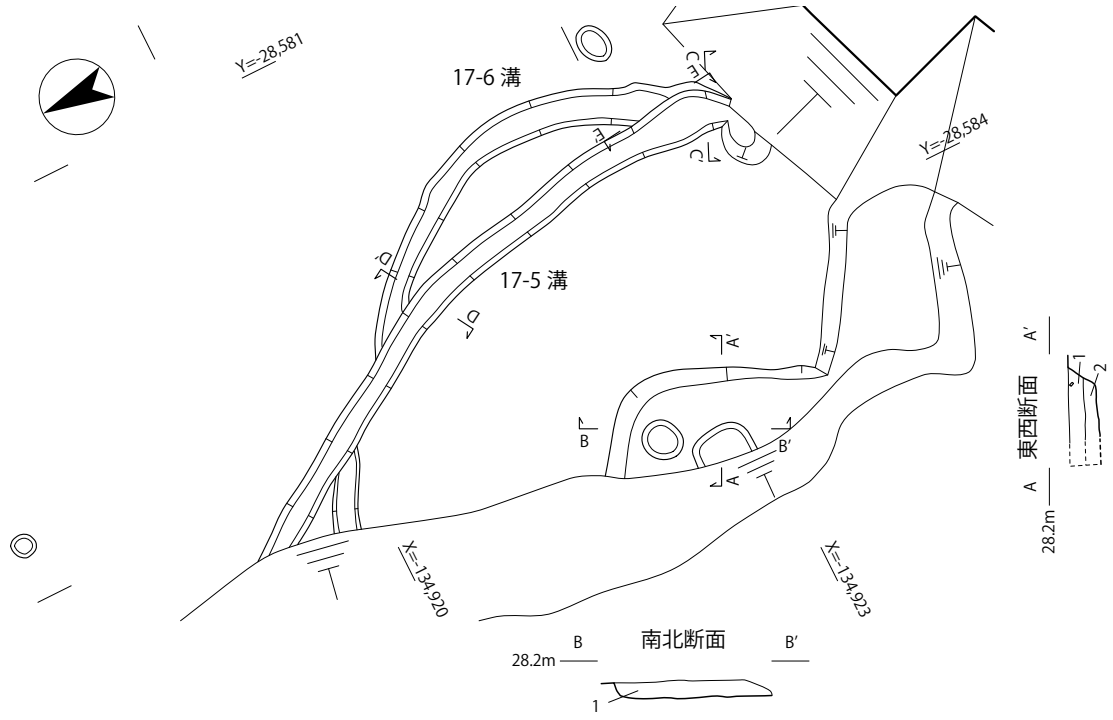
図 232 竪穴建物 9 平・断面図



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色土 中砂多く含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土

- 3 5Y4/1 灰色土 小石多く含む 径2mm前後

図 233 竪穴建物 14 平・断面図



- 竪穴27
 - 1 10YR4/2 灰黄褐色 中砂シルト 粗砂～極粗砂含む
 - 10YR7/4 にぶい黄褐色 シルトブロック状入る
 - 上半部にマンガン沈着あり 土器細片若干入る
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色 中砂～粗砂 シルトブロック入る
 - 下面の凹凸著しい
- 17-5溝C-C'
 - 1 7.5YR4/3 暗褐色 中砂シルト 粗砂～極粗砂入る マンガン沈着
 - 2 7.5YR5/3 にぶい褐色 中砂シルト マンガン沈着 6溝埋土
- 17-5溝D-D'
 - 1 10YR5/1 灰褐色 中砂シルト 粗砂入る
- 17-6
 - 1 10YR5/1 灰褐色 中砂～極粗砂 シルト混じり
 - 2 10YR6/4 にぶい黄褐色 細砂 シルト混じり 鉄沈着
 - 3 10YR6/3 黄褐色 細砂 シルト混じり

図 234 竪穴建物 27 平・断面図

外周溝である 4-91 溝は、延長 4.3 m を検出しており、幅は 34 cm、深さ 11 cm である。また、外周溝と竪穴部の間は、約 3.7 m を測る。埋土は、上層が砂礫を微量に含む灰色粗砂混じりシルト、下層が淡黄色砂礫混じりシルトブロックを含む灰色極細砂混じりシルトである。埋土からは図化はできなかったが、初期須恵器甕片を含む、土師器・須恵器片が出土している。出土遺物から、6 世紀後半の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 20 (図 236・237・326、図版 41-6)

竪穴建物 20 は、4-130 溝を外周溝として伴う方形の竪穴建物である。残存長は北辺 2.8 m、西辺長は 2 m を測る。深さは、20 cm である。竪穴建物 19 の床面を形成する層を掘り下げて床面を検出している。床面には、壁溝がみられ幅 12 から 25 cm、深さ 10 から 15 cm を測る。埋土は、北辺の壁溝で見ると上層が灰白細砂から中砂混じりシルト砂礫を多量に含む、下層は淡黄シルトブロックを含む灰粗砂混じりシルトである。支柱穴は、竪穴建物 19 同様に床面及び床面を形成する層の下面でも検出していない。床面を形成する層は、淡黄シルトブロックを多量に含む、灰オリーブ粗砂混じりシルトである。

床面からわずかに上で、491・492 の T K-10 型式の杯・杯蓋、493・494 土師器甕が出土している。

外周溝である 4-130 溝は、延長 7.8 m を検出しており幅 45 cm、深さ 8 cm を測る。弧を描いて、竪穴部を囲み、外周溝と竪穴部の間は約 2.6 m を測る。埋土は、上層が黄灰色粗砂混じりシルト、下層が灰黄色砂礫混じりシルトブロック含む褐灰色細砂混じりシルトである。埋土中からは、時期を表すものではないが、495 に示す初期須恵器杯蓋が出土している。

出土遺物から、6 世紀中頃の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 21 (図 237・327、図版 71・41-7)

竪穴建物 21 は、4-153 溝を外周溝とする方形の竪穴建物である。平面図では復元位置にトーンをかけているため残りが良いようにみえるが、大部分は竪穴建物 20 により失われている。図 242 にみられるようにわずかに、竪穴の壁と竪穴建物 20 の間を検出できたのみである。残存長は北辺で 3.3 m、西辺で 1.4 m を測る。深さは 6 cm である。竪穴建物 19 の床面を形成する層を掘り下げて検出している。

床面には削平を受けていない北辺部分で壁溝がみられた。幅は 28 cm、深さは 23 cm である。埋土は、上層が淡黄シルトブロックを多量に含む黄灰粗砂混じりシルト、中層が炭化物を微量に含む暗灰黄細砂混じりシルト、下層が灰白砂礫混じりシルトである。支柱穴は検出していない。竪穴内からは、須恵器・土師器片とサヌカイト片が出土しているが、時期を示すことのできる資料はない。

外周溝である 4-153 溝は、延長 2.2 m、幅 55 cm、深さ 18 cm を測る。また、外周溝と竪穴部の間は、約 1.9 m を測る。埋土は、灰黄褐色細砂混じりシルトである。底面やや上から、504 に示す M T-15 型式の杯、505 の T K-10 型式の杯、506 の土師器甕が出土している。

建物の時期は、遺構の先後関係や出土遺物から 6 世紀中頃以前と考えられる。

竪穴建物 22 (238・239・327、図版 71・42-2~5)

竪穴建物 22 は、4-152 溝を外周溝とする方形の竪穴建物である。東側は竪穴建物 24 に、西側は近世の段により削平を受け消失しており、検出長東西幅 1.1 m、南北幅 1.9 m の中にカマドと壁溝を検出しているのみである。竪穴建物の平面形は、竪穴建物 19 の床面と同レベルで検出しており、埋土を若干掘り下げた段階で、カマドの壁体が崩壊した焼土塊を検出した。検出面から床面までの深さは 8 cm で壁溝は検出していない。平面検出の段階で、壁面に板材が粘土に置き換わったような痕跡を検出していることから、一旦床面を掘り下げ板材を壁際に立て掛けその後板材を固定するために埋め戻した可能

性も考えられる。この視点に立てば、掘り下げた層は竪穴建物 22 の床面を形成する層であったことも考えられる。層中からは、498 に示した鉄鏝が出土している他、図化はしていないが土師器・須恵器片が出土している。

4-154 カマドは、竪穴の壁に接するように造られているが、煙道は検出していない。調査時には、竪穴内を掘り下げているため、長辺 1 m、短辺 1.1 m の両袖式のカマドとなっている。カマド内の底面は被熱により赤変しており、カマド手前部分には炭化物が多くみられる。燃烧部と焚口部を示す痕跡であろう。崩壊した壁体と考えられる焼土塊や、カマド廃棄時に廃棄されたと考えられる土器片を除去すると、やや窪んだ部分の中央で、土師器高杯が倒立した状態で出土した。口縁端部がやや下層に食い込

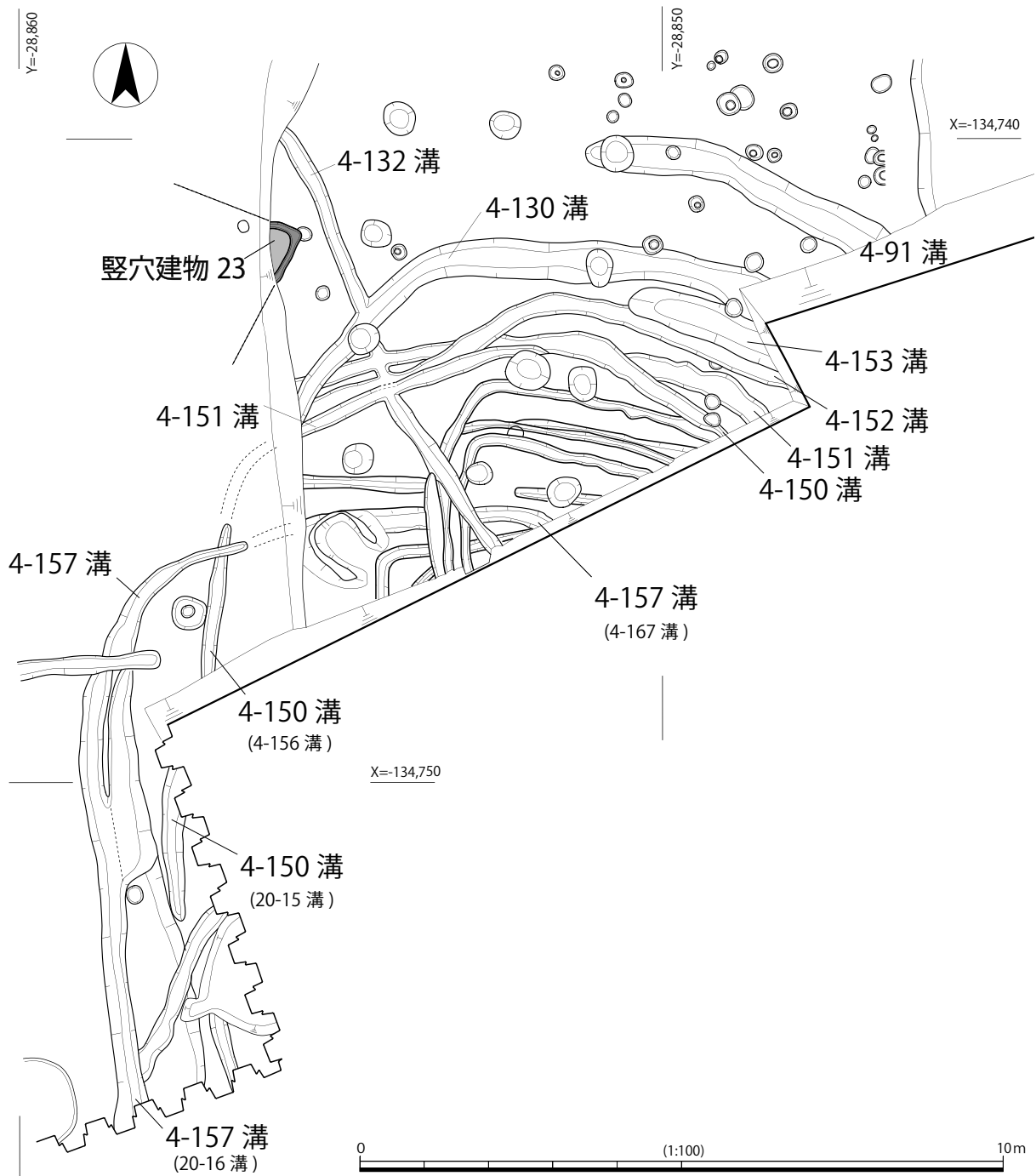
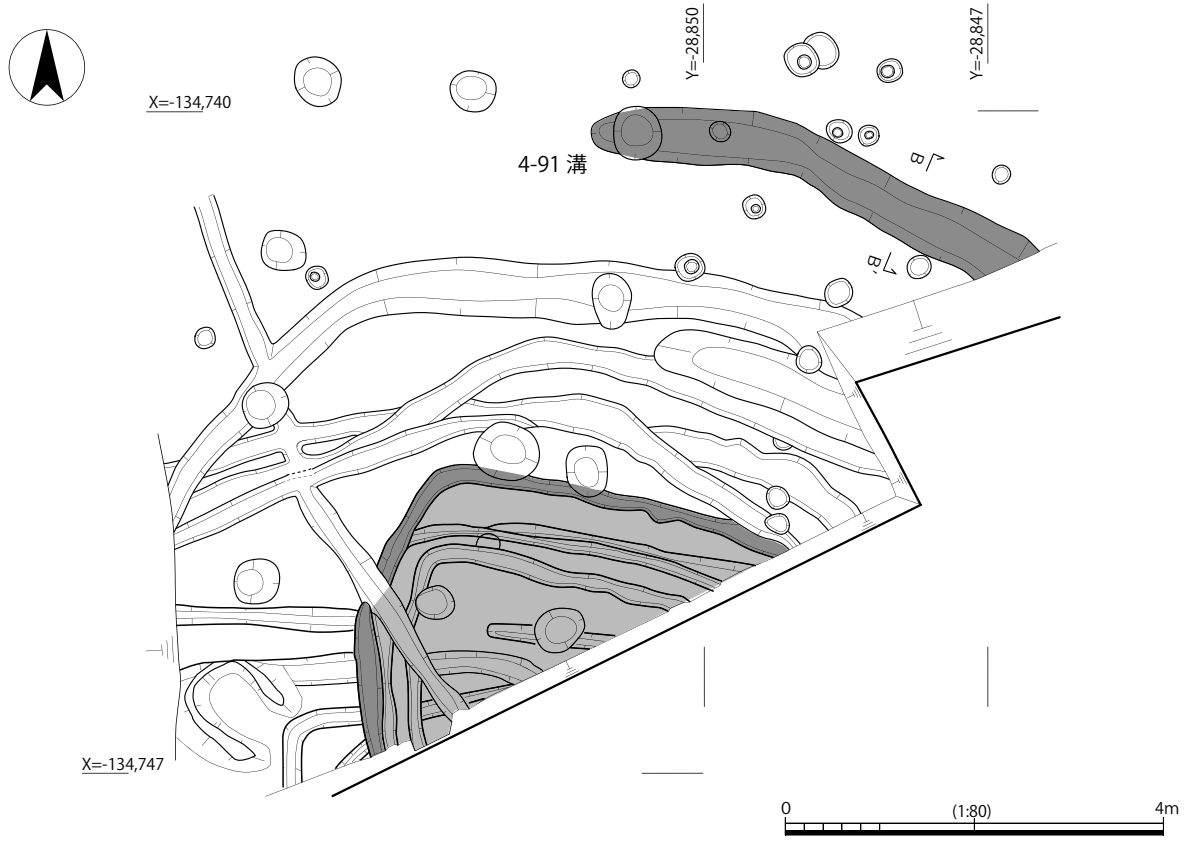
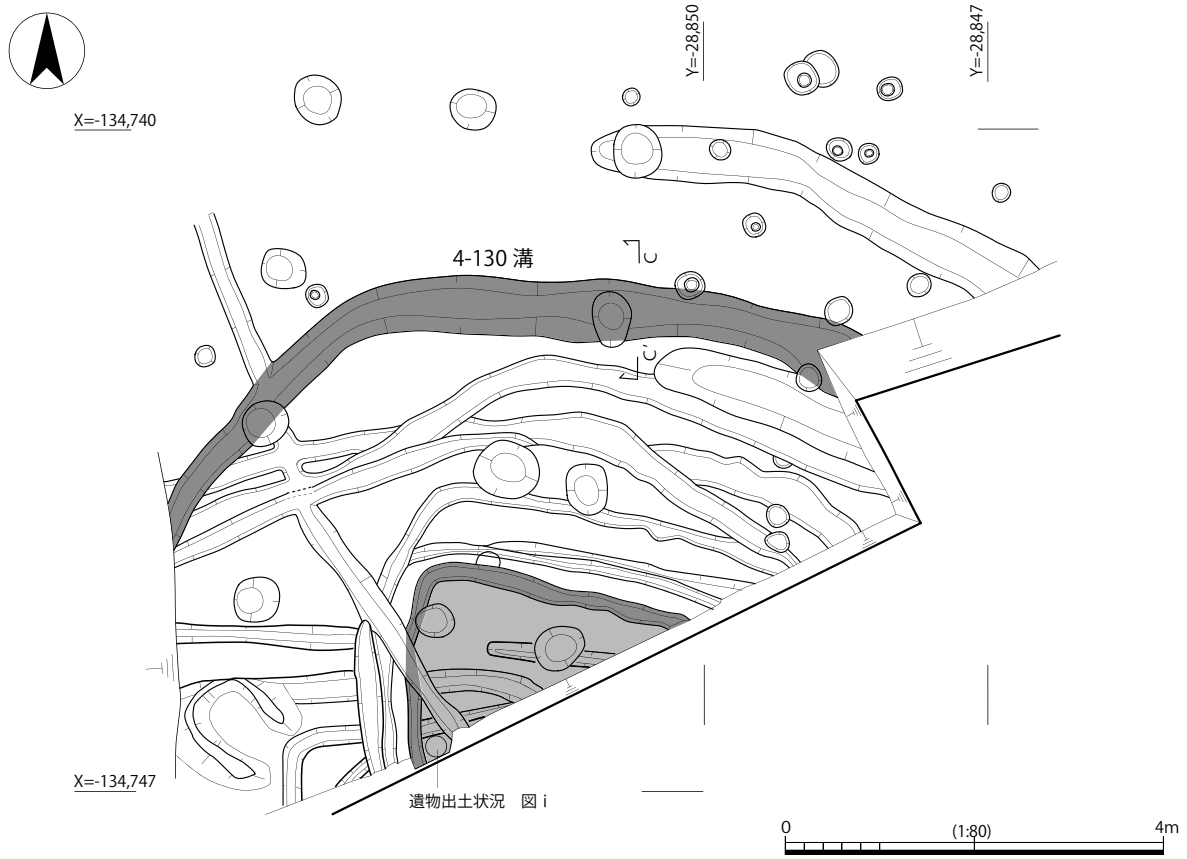


図 235 竪穴建物 19～26・28 外周溝・溝 全体図



竖穴建物 19



遺物出土状況 図 i

竖穴建物 20

图 236 竖穴建物 19・20 平・断面图

んでおり、支脚の可能性が考えられる。他の出土遺物には、496 に示した須恵器甕体部と、497 の支脚と考えられる土師器高杯と、図化はしていないが土師器・須恵器片と鉾滓が出土している。

外周溝である 4 - 152 溝は、溝の幅 42 cm、深さは 18 cm を測る。外周溝と竪穴部の間は、壁が残存している北辺で約 1.7 m を測る。埋土は黄褐細砂混じりシルトである。埋土中からは図化はできなかったが、須恵器把手付鉢片の他、土師器・須恵器片が出土している。カマドの出土遺物から竪穴建物 22 は、出土遺物から 6 世紀段階に考えられる。

竪穴建物 24 (図 239、図版 41 - 7)

竪穴建物 24 は、図 239 では検出した部分から復元して網をかけ表示しているが、竪穴建物 21 により大部分が削平されており、わずかに北辺と東辺の壁と壁溝を検出しているのみである。検出長は北辺が 3.3 m、西辺が 1.5 m で、深さは 5 cm を測る。床面は、竪穴建物 19 の床面を形成する層を除去して検出している。床面では壁溝が見られ、幅 30 cm、深さ 8 cm を測る。埋土は、淡黄シルトブロック少量含む褐灰細砂混じりシルトである。

遺物は、土師器片が出土しているのみで時期を特定できる資料はないが、遺構の重複関係から 6 世紀中頃以前と考えられる竪穴建物 21 に先行する竪穴建物である。

竪穴建物 25 (図 240・327、図版 88・41 - 8・42 - 6 ~ 8)

竪穴建物 25 は、4 - 151 溝を外周溝とする方形の竪穴建物である。大部分が、竪穴建物 24 と竪穴建物 22 に削平されており、検出長 2 m の北辺壁と壁溝、床の一部を検出したのに留まる。深さは 15 cm である。壁溝は幅 15 cm、深さ 5 cm で、埋土は浅黄シルトである。壁溝の壁際には、竪穴建物 22 と同様の、木質が粘土に置き換わったような痕跡がみられた。建物内からは 498 に示す鉄鏃が 1 点出土している。

外周溝である 4 - 151 溝は、4 - 150 溝など他の溝に削平されており延長は約 3 m を検出できたのみで幅は 20 cm、深さ 20 cm を測る。埋土は、にぶい黄色細砂混じりシルトである。

溝内から、503 に示す土師器甕の把手部が出土している。竪穴建物 22 に先行することから 6 世紀中頃以前に年代の 1 点を置くと考えられる。

竪穴建物 26 (図 241・327)

竪穴建物 26 は、竪穴建物 25 および竪穴建物 24 の床面を形成する層を除去して検出している。

検出できたのは壁溝のみである。壁溝の幅は 5 cm、深さは 7 cm である。埋土は黄灰色粗砂混じりシルトである。499・500 に示す TK - 10 型式の杯蓋と MT - 85 型式の杯が出土している。

本竪穴建物は、遺構の重複から 6 世紀中頃以前と考えられることから、おそらく 500 は掘り下げ時に、混じり込んだものと考えられる。

竪穴建物 28 (図 241)

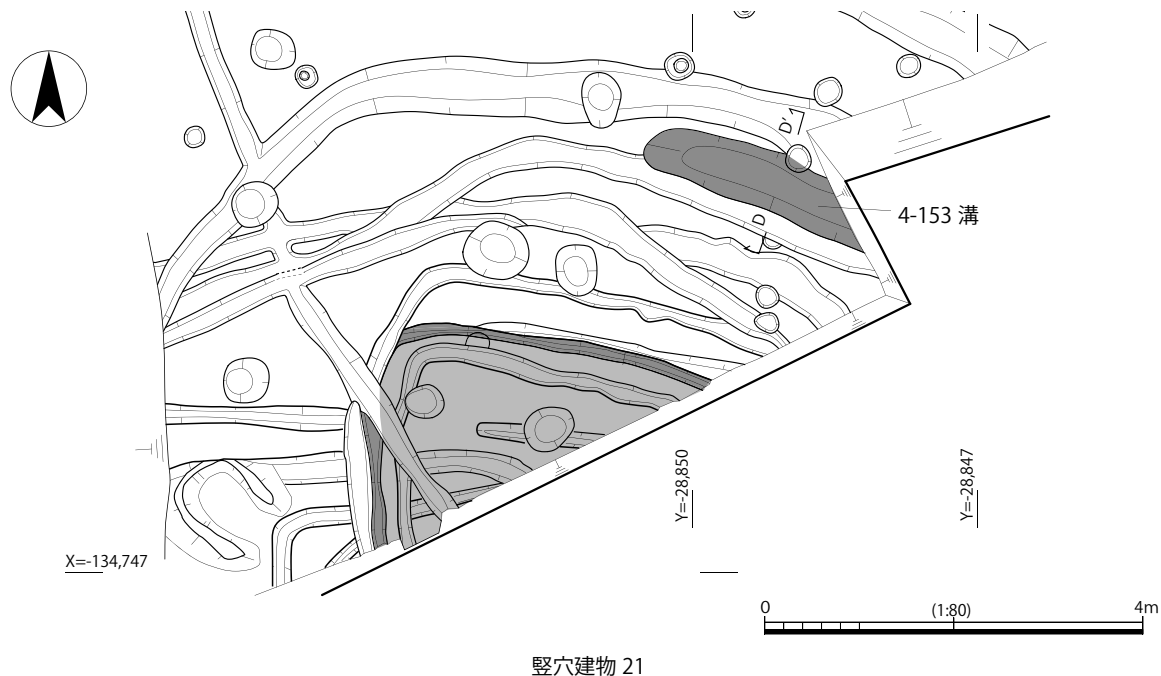
竪穴建物 28 は、竪穴建物 26 の床面を形成する浅黄橙シルトを少量含む灰砂礫混じりシルト層を除去して検出している。検出できたのは壁溝のみで、幅 7 cm、深さ 3 cm、延長は約 1.8 m を測る。壁溝埋土は黄灰色粗砂混じりシルトである。時期は、竪穴建物 26 に先行する 6 世紀中頃以前と考えられる。

竪穴建物 19 から竪穴建物 22・竪穴建物 24 から竪穴建物 28 を検出した場所では、この他、4 - 150 溝 (4 - 156 溝・20 - 15 溝)、4 - 157 溝 (4 - 167 溝・20 - 16 溝) を検出している。これらの溝は、いずれも竪穴建物を検出した部分を中心に隅丸方形を描いており、おそらく調査区外で今回

検出できていない竪穴建物の、外周溝となる可能性の高い溝である。

4-150 溝 (4-156 溝・20-15 溝) (図 235)

4-150 溝は、方向からみると 4-156 溝・20-15 溝と一連の溝になると考えられる。溝は 4-150 溝でみると幅 35 cm、深さ 12 cm で、埋土は粘性の強い灰黄褐色細砂混じりシルトである。時期

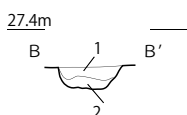


竪穴建物 21

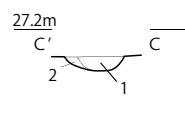
4-91 溝 (竪穴建物 19)

- 1 2.5Y4/1 灰色 粗砂混シルト 砂礫を微量に含む
- 2 5Y6/1 灰色 極細砂混シルト
- 2.5Y8/3 淡黄色 砂礫混シルト ブロック含む

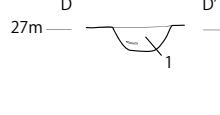
4-91 溝



4-130 溝



4-153 溝

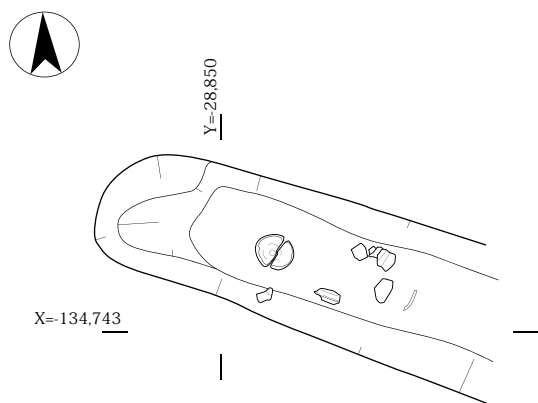
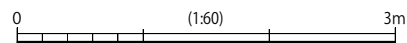


4-130 溝 (竪穴建物 20)

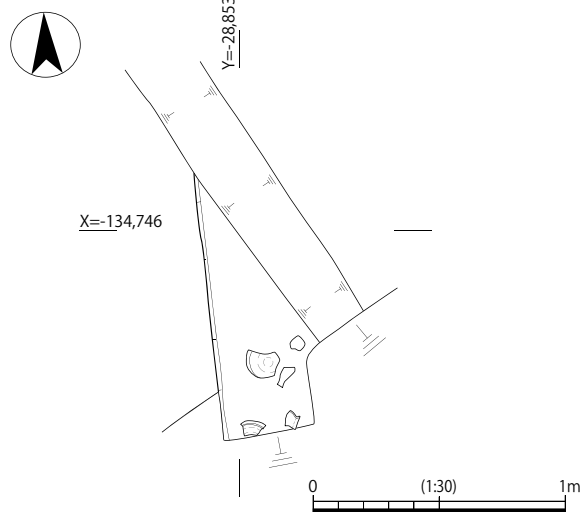
- 1 2.5Y5/1 黄灰色 粗砂混じりシルト
- 2 10YR 褐灰色 細砂混じりシルト
- 2.5Y6/2 灰黄色 砂礫混じりシルトブロック含む

4-153 溝 (竪穴建物 21)

- 1 10YR6/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト

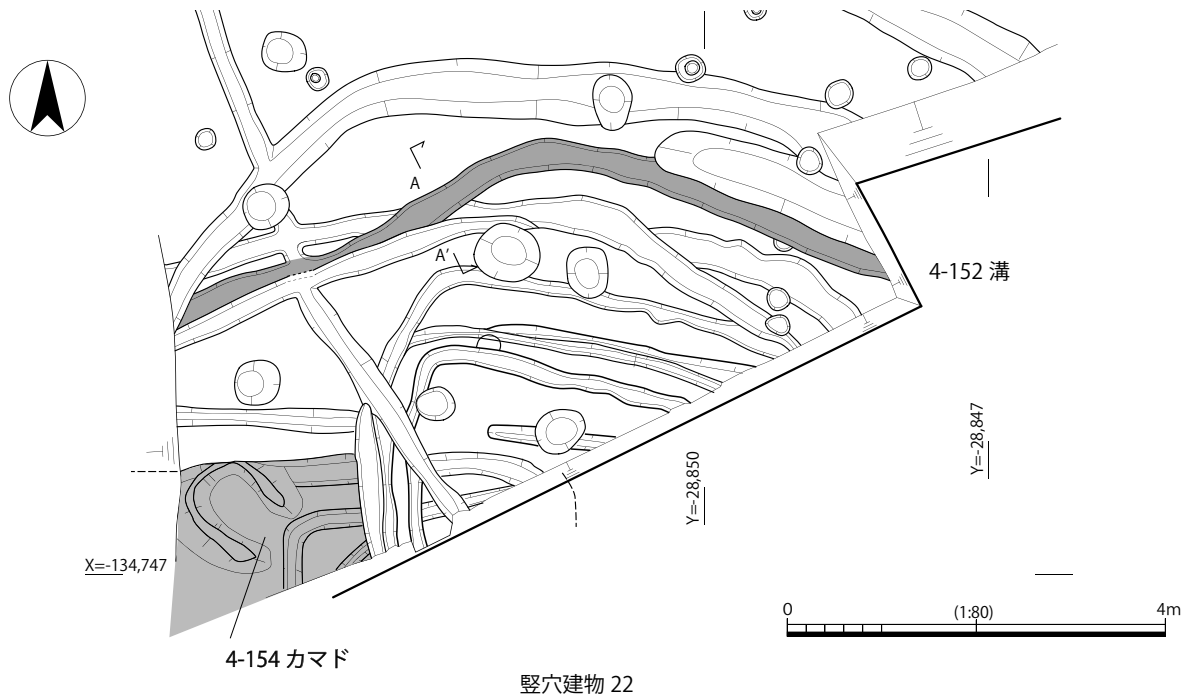


竪穴建物 20 4-135 溝 遺物出土状況

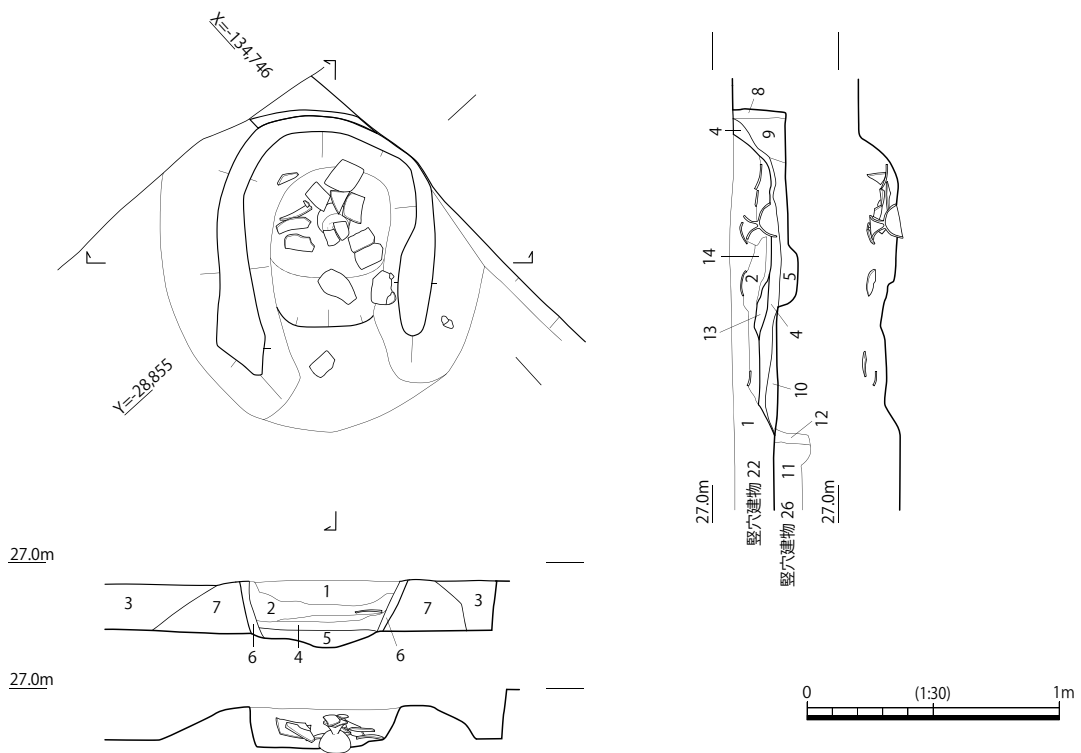


竪穴建物 20 内 遺物出土状況 i

図 237 竪穴建物 21 平面図 竪穴建物 20 遺物出土状況図・外周溝 遺物出土状況図



竪穴建物 22



- | | | | | | | | | |
|---|---------|-------|---------------------|------------|----|----------|--------|----------------------|
| 1 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 極細砂～細砂混じりシルト | 粗砂～極粗砂少量含む | 8 | 10Y7/1 | 灰白色 | 粗砂混じりシルト 砂礫微量に含む |
| 2 | 5YR5/1 | 褐灰色 | 細砂～中砂混じりシルト | 炭化物微量に含む | 9 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 細砂～中砂混じりシルト 炭化物微量に含む |
| | 5YR7/6 | 橙色 | 粗砂混じりシルトブロック(焼土塊)含む | | 10 | 2.5Y5/1 | 黄灰色 | 細砂混じりシルト |
| 3 | 10YR6/1 | 褐灰色 | 細砂～極細砂混じりシルト | 粗砂～極粗砂少量含む | 2 | 5Y8/4 | 淡黄色 | 基盤層ブロック含む |
| 4 | 5YR6/1 | 褐灰色 | 中砂～粗砂混じりシルト | | 11 | 5Y5/1 | 灰色 | 極細砂～細砂混じりシルト 砂礫微量に含む |
| | 2.5Y8/4 | 淡黄色 | 基盤層ブロック含む | | 12 | 2.5Y5/1 | 黄灰色 | 細砂混じりシルト |
| 5 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 細砂～中砂混じりシルト | | | 10YR7/4 | にぶい黄橙色 | シルト含む |
| | 2.5Y8/4 | 淡黄色 | 基盤層ブロック含む | | 13 | 7.5YR7/6 | 橙色 | シルト(焼土塊) |
| 6 | 5YR6/3 | にぶい橙色 | 細砂～中砂混じりシルト | 土師器細片含む | 14 | 2.5Y6/1 | 黄灰色 | シルト 炭化物多量に含む |
| 7 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混じりシルト | | | | | |
| | 2.5Y8/4 | 淡黄色 | 基盤層ブロック含む | | | | | |

図 238 竪穴建物 22 平面図・カマド 平・断面図

を把握できる遺物は出土していないが、他の外周溝との重複関係から、竪穴建物 22 より古く竪穴建物 25 より新しい 6 世紀中頃段階の溝である。

4-157 溝 (4-167 溝・20-16 溝) (図 235・327)

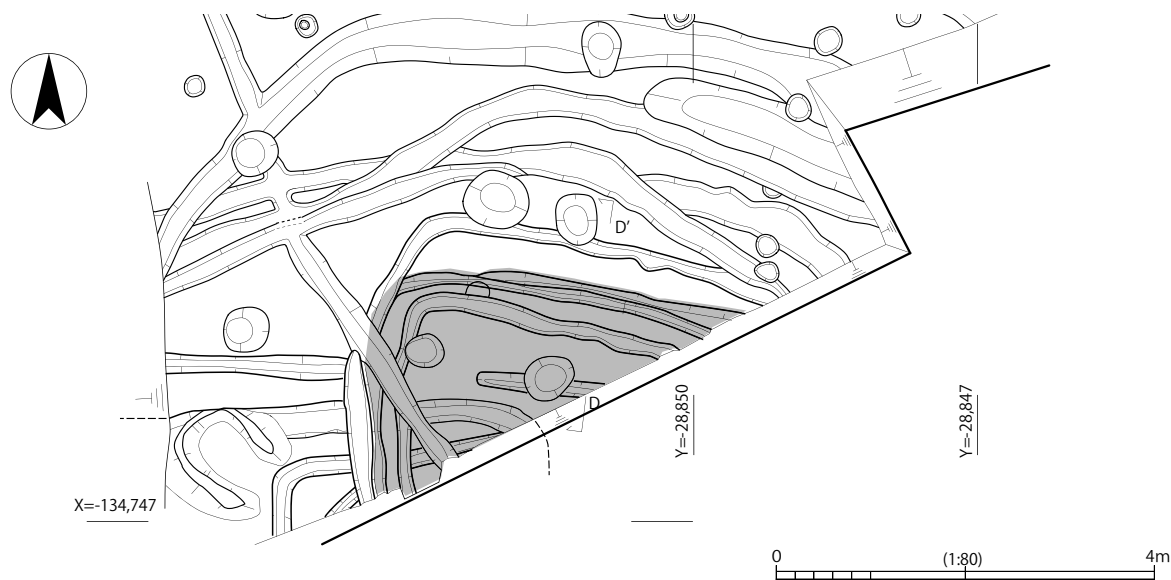
4-157 溝は、方向からみると 4-167 溝・20-16 溝と一連の溝になると考えられる。4-157 溝で見ると幅 18 cm、深さ 14 cm を測る。埋土は褐灰細砂混じりシルトで、下部に黄色シルトブロックを含む。一連と考えられる 4-167 溝は、竪穴建物 22 のカマドの下で検出していることから建物 22 以前の溝、6 世紀中頃以降の遺構であることが重複関係から考えられる。

なお、20-16 溝から出土している、507 と 508 に示す 6 世紀後半の須恵器壺蓋と甕口縁は、溝の途中で二股に分かれる様な部分の内側の溝から出土しており、この部分は、溝が幅広になるのではなく、土器が示す 6 世紀後半段階に、別の溝が掘削されたと考えられる。

掘立柱建物

掘立柱建物 2 (図 226・243、図版 43-1)

掘立柱建物 2 は、梁行 2 間、桁行 2 間の建物である。梁行寸法は 4 m、桁行寸法は 4.3 m で、身舎の面積は 17.2 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 2 m、桁行方向が 2.1 から 2.3 m である。棟筋は、西



竪穴建物 24

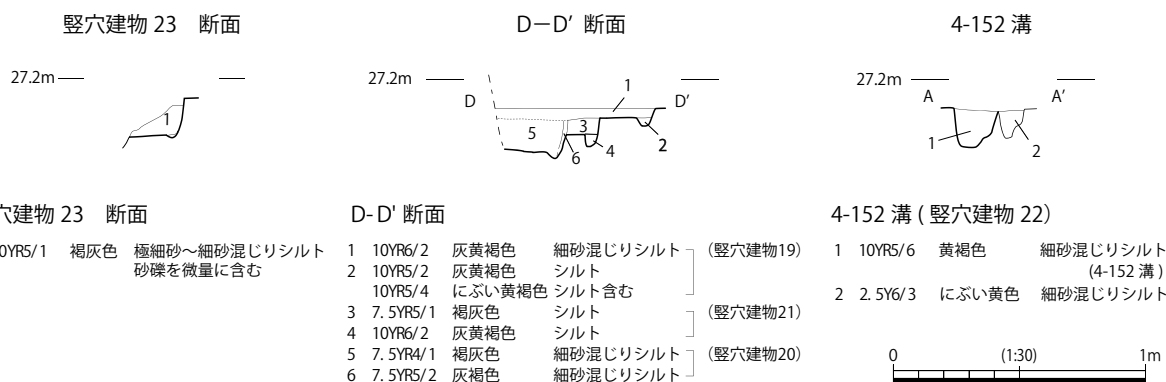


図 239 竪穴建物 22 外周溝 断面図 竪穴建物 24 平面図 竪穴建物 23 断面図

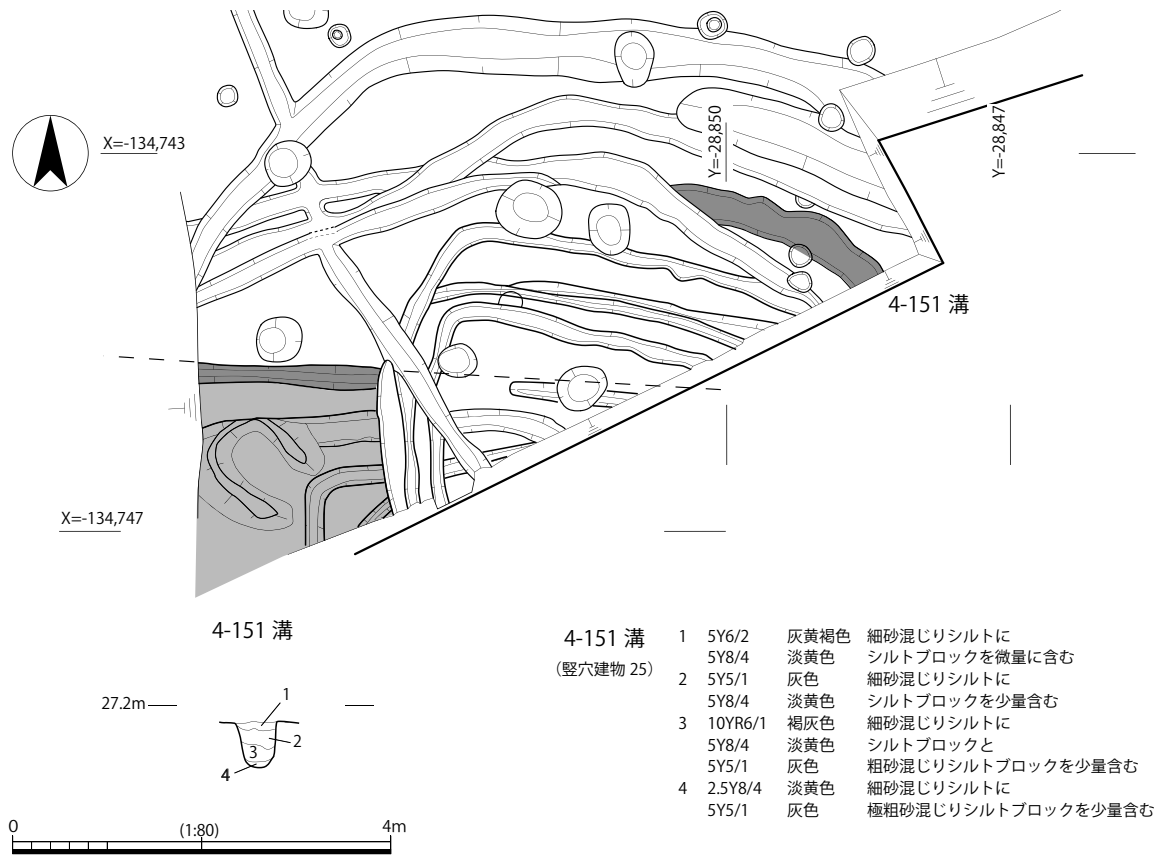


図 240 竪穴建物 25 平面図・外周溝断面図

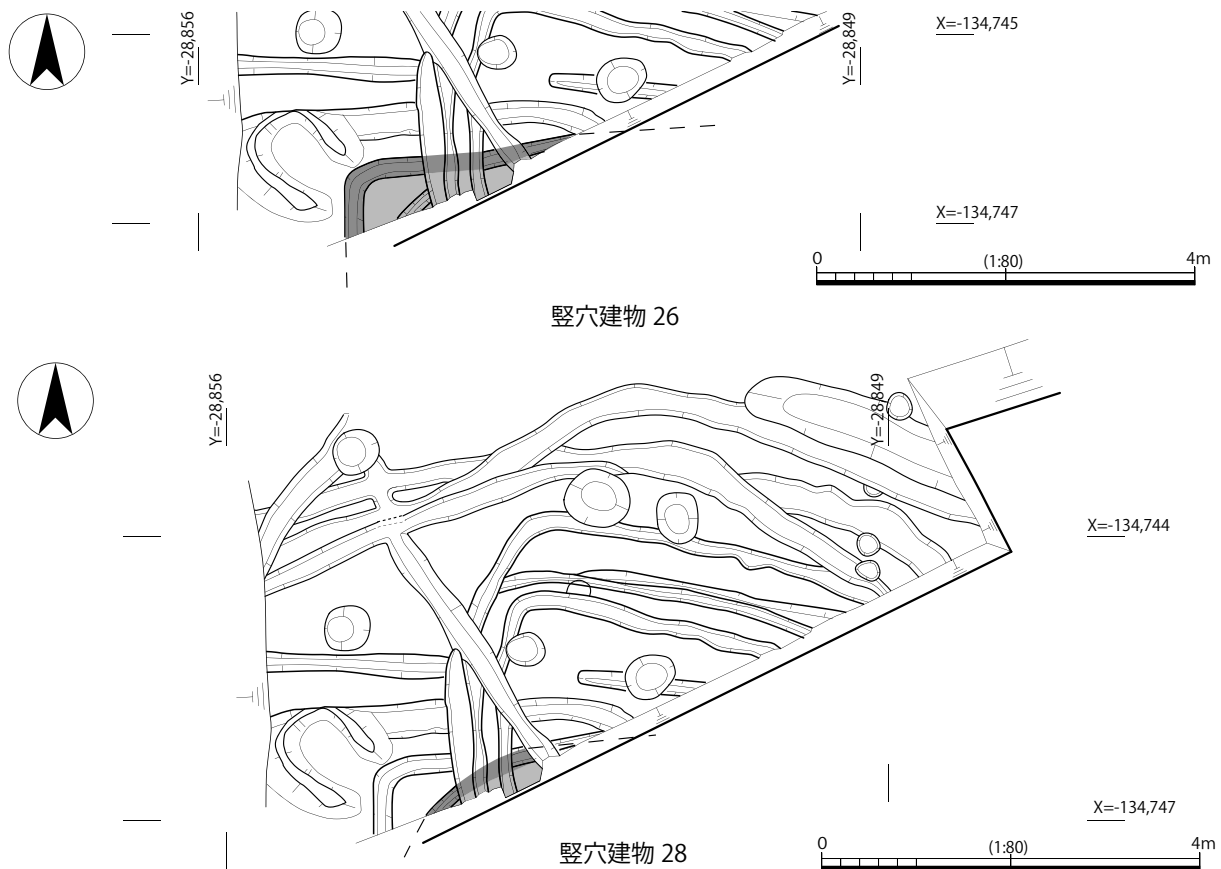


図 241 竪穴建物 26・28 平面図

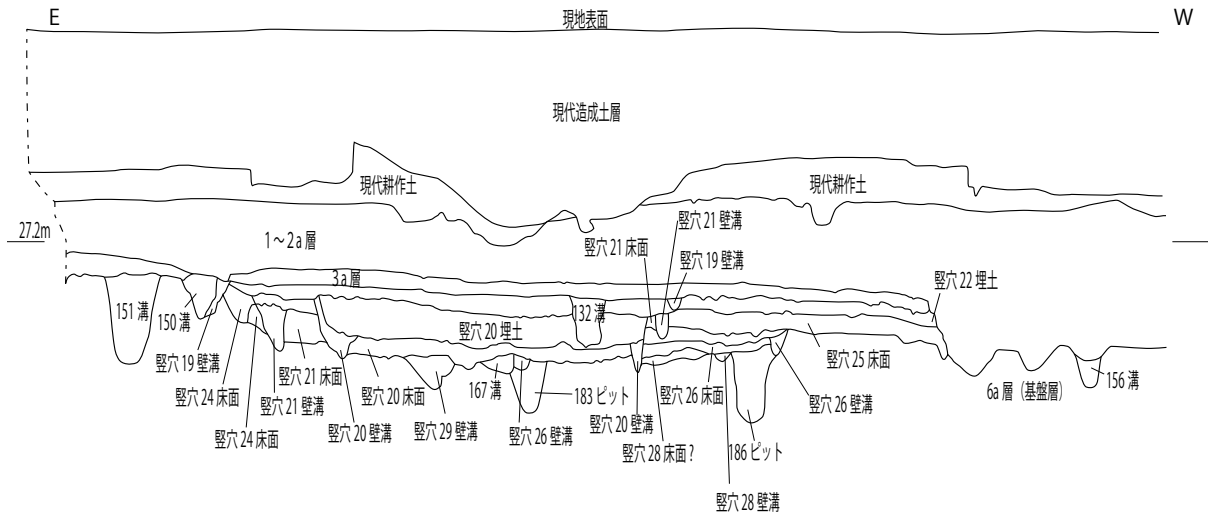
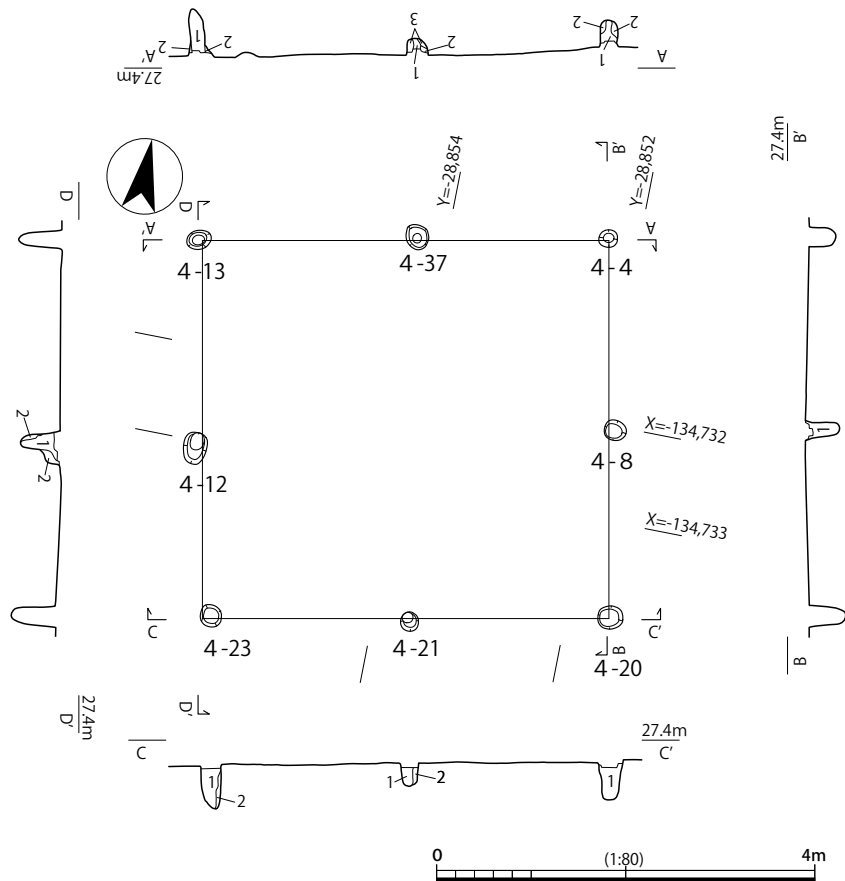


図 242 竪穴建物 19・20・21・22・24・25・26・28 断面図



- | | |
|---|--|
| <p>4-13 1 10YR4/4 褐色 シルト 粗砂
基盤層ブロック (径4cm以下) 含む
2 10YR4/2 灰黄褐色 細砂
径3cm以下の基盤層ブロック含む</p> <p>4-37 1 10YR5/2~4/2 灰黄褐色 細砂 径3mm以下の礫
径2cm以下の基盤層ブロック含む
2 10YR5/3~5/4 にぶい黄褐色 粘質シルト
基盤層ブロック (径3cm以下) 含む
3 10YR4/2~3/2 灰黄褐色~黒褐色 細砂 粗砂含む</p> <p>4-4 1 10YR4/2 灰黄褐色 細砂
径3mm以下の礫ごくわずかに含む
やや粘質 基盤層ブロック (径3cm以下) 含む
2 2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂</p> <p>4-8 1 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト
径2cm以下の基盤層ブロック含む</p> | <p>4-20 1 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 径2mm以下の礫
径2cm以下の基盤層ブロック含む</p> <p>4-21 1 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト
径2cm以下の基盤層ブロック含む
2 2.5Y5/4 黄褐色 粘質シルト
径2cm以下の基盤層ブロック含む</p> <p>4-23 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粗砂 基盤層土含む
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質シルト 径3mm以下の礫
径3cm以下の基盤層ブロック含む</p> <p>4-12 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
径2cm以下の基盤層ブロック含む
2 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト
径2cm以下の基盤層ブロック含む</p> |
|---|--|

図 243 掘立柱建物 2 平・断面図

で北へ約 11° 振れる。柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が 20 から 34 cm を測る。深さは、19 から 50 cm を測る。4-8 柱穴と 4-20 柱穴以外には、直径約 12 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、基盤層のブロックが混じる黄褐色系の粘質シルトが主である。図化はできなかつたが 4-6 柱穴から、須恵器杯蓋片が出土している。古墳時代の建物である。

掘立柱建物 4 (図 226・244)

掘立柱建物 4 は、西妻側と南平側の柱穴を一部検出していないが、梁行 2 間、桁行 2 間の東西棟と考えられる。梁行寸法は 3.3 m、桁行寸法は 4.33 m で、身舎の面積は約 14.2 m² である。柱間寸法は、梁行方向 1.8 m と 1.3 m、桁行方向が 2 から 2.3 m を測る。棟筋は、西で南へ約 5° 振れる。柱穴の平面形は、おおむね楕円形を呈し、長径は 17 から 33 cm、深さは 5 から 31 cm を測る。4-22 柱穴に直

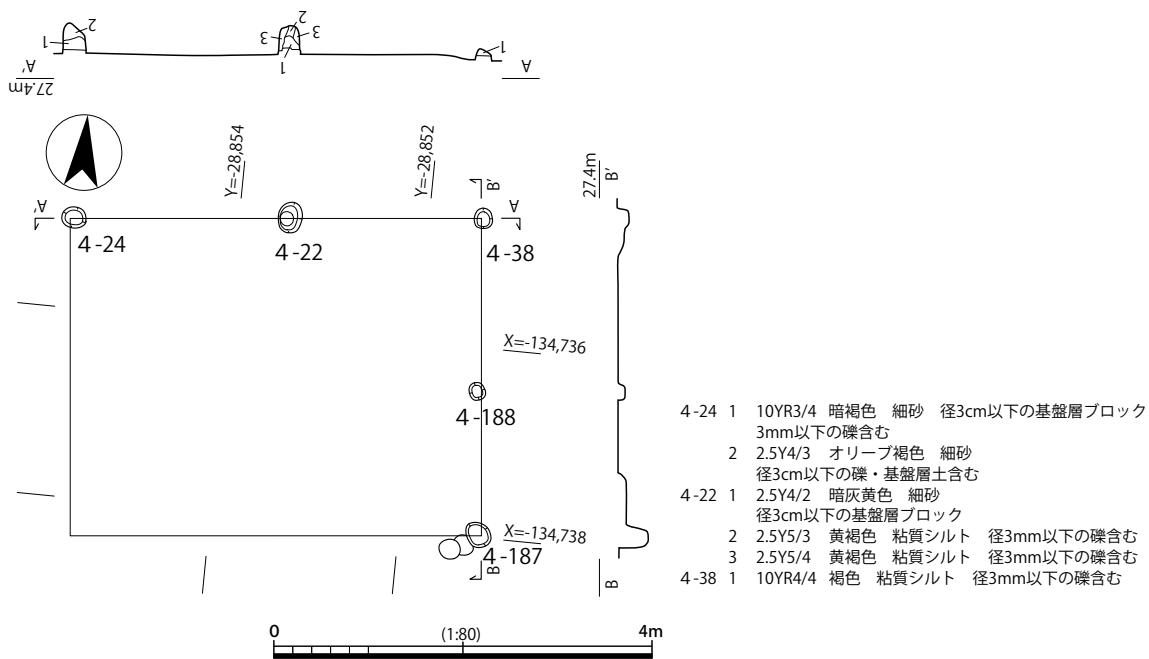


図 244 掘立柱建物 4 平・断面図

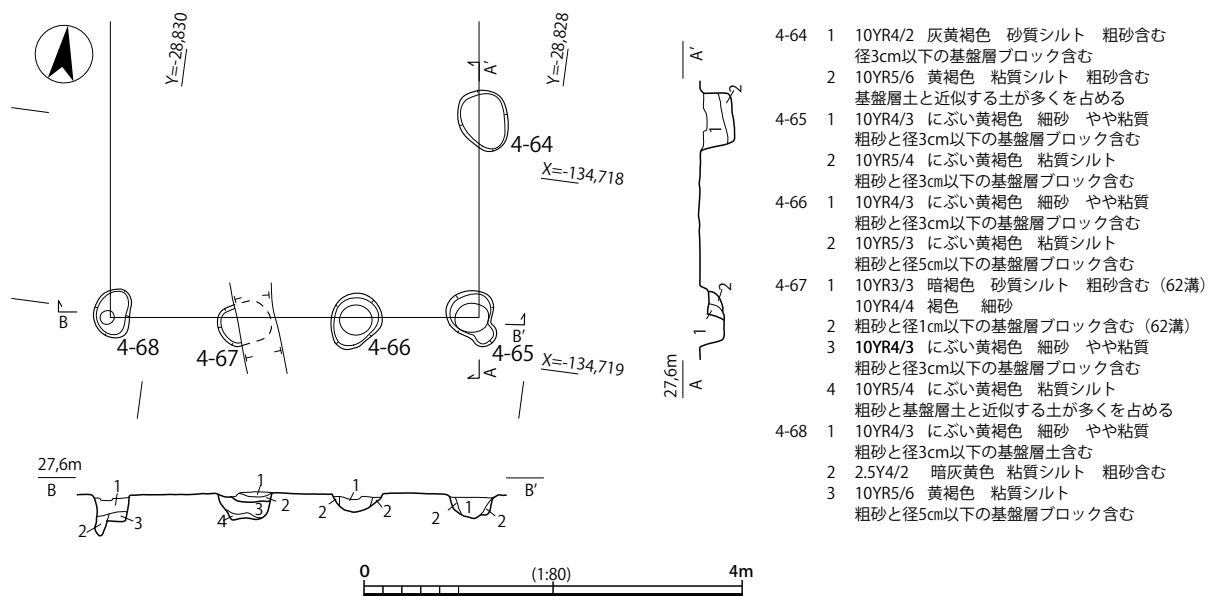


図 245 掘立柱建物 6 平・断面図

径約 10 cm の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、黄褐色粘質シルトである。遺物は出土していないが、埋土などから古墳時代に属する建物と考えられる。

掘立柱建物 6 (図 226・245)

掘立柱建物 6 は、調査区端で検出したため全体は明らかではないが、隣接する掘立柱建物 21 同様、北へ延びる建物になると考えられる。建物は、柱間寸法から南北棟と考えられ、梁行 3 間、桁行 1 間以上の規模である。梁行寸法は、3.9 m、桁行寸法は 2.1 m 以上を測る。梁行の柱間寸法は、1.2 m と 1.5 m、桁行は 2.1 m である。東平側柱筋は、北で西へ約 7° 振れる。

柱穴の平面形は、不整楕円形で長径は 50 から 68 cm、深さは 18 から 36 cm を測る。4 - 68 柱穴にのみ柱痕跡が認められる。掘方埋土は、黄褐色系の粘質シルトで基盤層のブロックが混じる。柱穴からは、図化できなかったが古墳時代と考えられる須恵器の破片が出土しており、当該時期の建物である。

掘立柱建物 7 (図 226・246、図版 43 - 2)

掘立柱建物 7 は、梁行 2 間、桁行 3 間の総柱の南北棟で、10 - 5 柱穴が掘立柱建物 8 の柱穴との重複関係から、掘立柱建物 8 に先行する建物である。なお、南西隅柱穴は検出できなかった。梁行寸法は 5 m、桁行寸法は 5.4 m で、身舎の面積は 27 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 2.5 m 等間、桁行方向は 1.7 m、1.8 m、1.9 m で、柱筋の通りの良い建物である。棟筋は、ほぼ南北に揃っており振れはない。

柱穴の平面形は、ほぼ楕円形から円形を呈し、直径もしくは長径は 47 から 61 cm、深さは 20 から 48 cm を測る。柱穴掘方埋土・抜き取り穴埋土は、炭化物が混じる灰褐色系の色調を呈する。10 - 5 柱穴・10 - 6 柱穴・10 - 117 柱穴・10 - 154 柱穴は、抜き取り穴により掘方は完全に失われている。

10 - 3 柱穴・10 - 4 柱穴・10 - 7 柱穴・10 - 8 柱穴・10 - 9 柱穴・10 - 10 柱穴には、直径 13 cm 前後の柱痕跡がみられ、10 - 3 柱穴・10 - 7 柱穴・10 - 8 柱穴・10 - 9 柱穴・10 - 10 柱穴には、柱痕跡と掘方底面の間に、掘方埋土と考えられる層が堆積している。これは、一旦掘り上げた掘方内に、掘り上げた土を入れ、それから柱を据えて掘方を埋めたためと考えられる。

柱穴からは、細かな時期は不明であるが、古墳時代と考えられる土師器・須恵器片が出土している。

掘立柱建物 8 (図 226・247、図版 43 - 3)

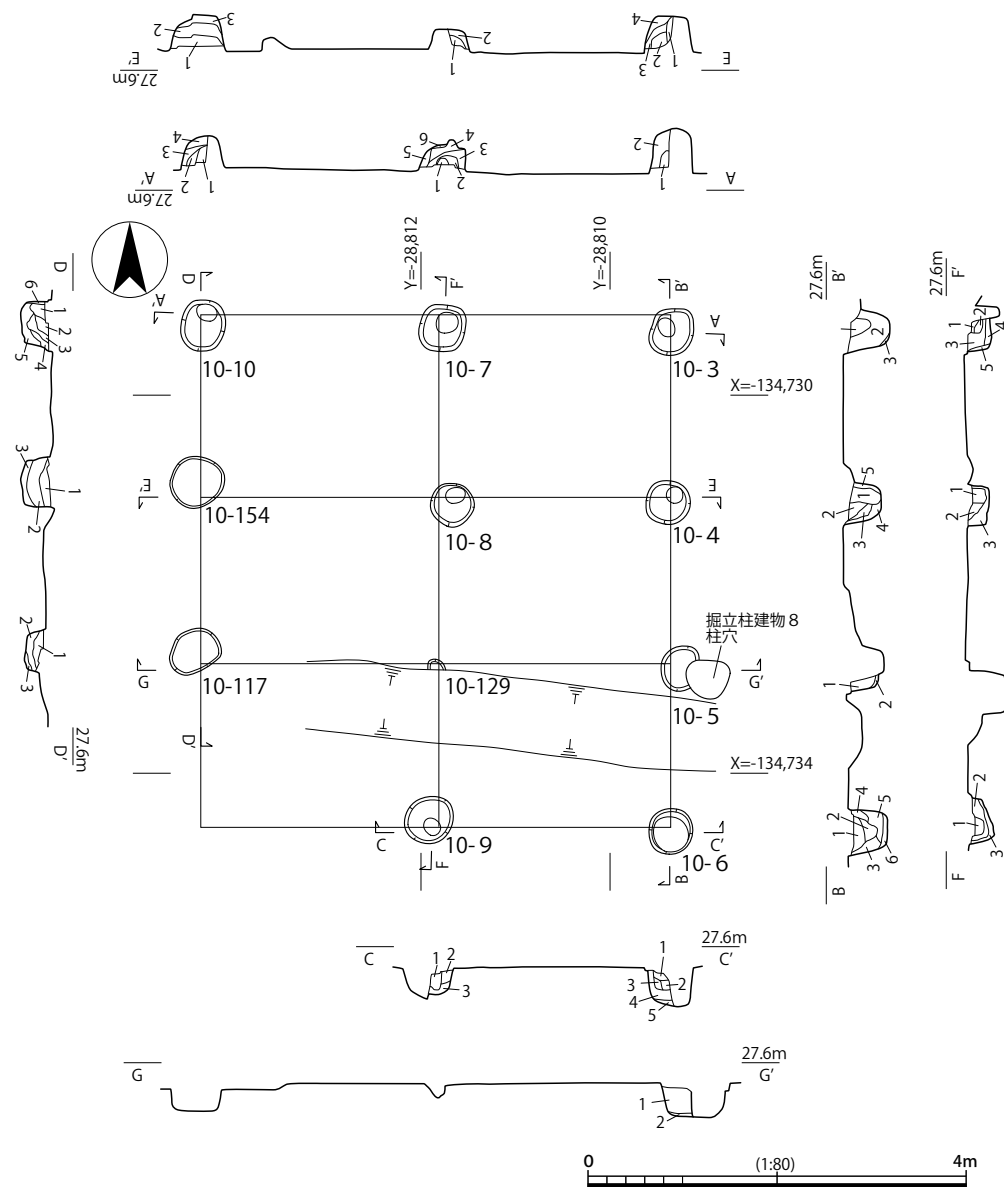
掘立柱建物 8 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物である。10 - 13 柱穴が、掘立柱建物 7 の 10 - 5 柱穴との重複関係から、掘立柱建物 7 より新しい時期の建物である。梁行寸法は 3.6 m、桁行寸法は 4.1 m で、身舎の面積は 14.8 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.7 m と 1.9 m、桁行方向は 2.1 m と 2 m で、柱筋の通りの良い建物である。棟筋は、西で南へ約 32° 振れる。

柱穴の平面形は、楕円形から不整円形を呈し、直径もしくは長径は 41 から 56 cm、深さは 13 から 40 cm を測る。10 - 13 柱穴・10 - 18 柱穴以外の柱穴には、直径 10 cm 前後の柱痕跡がみられる他、10 - 11 柱穴の底面には、柱の自重と建物の荷重が、柱にかかって生じた圧痕が認められる。掘方埋土は、主に黄褐色系の色調で中砂から粗砂混じりの細砂シルトである。

遺物は出土していないが、埋土などから古墳時代の建物と考えられる。

掘立柱建物 9 (図 226・248、図版 43 - 4)

掘立柱建物 9 は、梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟である。南妻側の柱穴は検出されていない。梁行寸法は 4.4 m、桁行寸法は 4.6 m で、身舎の面積は 20.2 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向が 2.2 m、桁行方向は 1.5 m と 1.6 m で、柱筋の通りの良い建物である。建物は、東平側の柱筋で北で東へ 7° 振っている。



- | | | | | | | | | | |
|-------|---|----------------|--------|---------------------------|--------|---------|---------|--------|----------------------|
| 10-10 | 1 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粗砂混シルト | 10-5 | 1 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粗砂混シルト (炭化物少量含む) |
| | 2 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 粗砂混粘質シルト (基盤層掘削土) に | | 2 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | 粗砂混シルト |
| | | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | | 10-6 | 1 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 粗砂混シルト ベース土含む |
| | 3 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粗砂混シルト | 10-9 | 1 | 10YR4/4 | 褐色 | 粗砂混シルト |
| | | 粗砂混シルトブロック状に含む | | | 2 | 10YR3/4 | 暗褐色 | 粗砂混シルト | |
| | 4 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粗砂混シルト | 3 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 粗砂混シルト | |
| | 5 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 粗砂混粘質シルトに | 10-117 | 1 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 粗砂混シルト |
| | | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | | | 2 | 5Y8/4 | 淡黄色 | 砂礫混シルトブロックを少量含む |
| | 6 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | 粗砂混粘質シルトに | | 2 | 2.5Y5/1 | 黄灰色 | 細砂混シルト |
| | | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | 粗砂混シルト・ブロック状に含む | | 3 | 5Y8/4 | 淡黄色 | 細砂混シルト |
| 10-7 | 1 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粗砂混粘質シルト | 10-154 | 1 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 細砂〜中砂混シルト |
| | 2 | 10YR4/4 | 褐色 | 粗砂混シルトに | | 2 | 2.5Y7/8 | 黄色 | 細砂混シルトのブロックを非常に多く含む |
| | | 10YR6/8 | 明黄褐色 | 粘質シルト (基盤層) ブロックをブロック状に含む | | 2 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | 細砂〜中砂混シルト |
| | 3 | 10YR4/6 | 褐色 | 粗砂混粘質シルト | | 2 | 2.5Y7/8 | 黄色 | 細砂混シルトのブロックを少し含む |
| | 4 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 粗砂混シルト | | 3 | 2.5Y7/8 | 黄色 | 細砂混シルト |
| | 5 | 10YR4/4 | 褐色 | 粗砂混粘質シルト | | 3 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | (細砂〜中砂混シルト) のブロックを含む |
| | 6 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粗砂混シルト 基盤層に | 10-8 | 1 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粗砂混シルト |
| | | 10YR6/8 | 明黄褐色 | 粗砂混シルト | | 2 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粗砂混シルト |
| 10-3 | 1 | 10YR4/4 | 褐色 | 粗砂混シルト | | 3 | 10YR3/4 | 暗褐色 | 粗砂混シルト |
| | 2 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | 粗砂混粘質シルト | | | | | |
| | 3 | 10YR6/6 | 明黄褐色 | 粗砂混粘質シルト | | | | | |
| 10-4 | 1 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粗砂混シルト | | | | | |
| | 2 | 10YR4/1 | 褐灰色 | 粗砂混シルト | | | | | |
| | 3 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | シルト混粗砂 | | | | | |
| | 4 | 10YR5/8 | 黄褐色 | シルト混粗砂 | | | | | |
| | 5 | 10YR4/4 | 褐色 | シルト混粗砂に | | | | | |
| | | 10YR6/6 | 明黄褐色 | シルト混粗砂 (基盤層) をブロック状に含む | | | | | |

図 246 掘立柱建物 7 平・断面図

柱穴は、不整形円形・楕円形・円形と多様な平面形を呈し、直径もしくは長径が 19 から 51 cm と不揃いである。特に、東平側の柱穴は小さい。深さは、7 から 24 cm を測る。平面規模の大小による深さの差は見られない。10 - 23 柱穴・10 - 24 柱穴には、柱痕跡がみられる他、10 - 27 柱穴底面には、柱の自重と建物の荷重が柱にかかって生じた圧痕が認められる。その他の柱穴には、柱痕跡は見られない。柱穴の深さから考えると柱穴上部は、大きく削平を受けていることが想定でき、そのため、検出できなかったと思われる。掘方埋土は、灰黄褐色粗砂混じり細砂である。

10 - 26 柱穴からは、細かな時期は不明であるが、古墳時代と考えられる土師器片が出土している。
掘立柱建物 10 (図 226・249・327、図版 43 - 5)

掘立柱建物 10 は、掘立柱建物 14 と身舎が重なる重複関係にある、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物である。梁行寸法は 3.6 m。桁行寸法は 3.7 m、身舎の面積は 13.3 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.7 m と 1.9 m、桁行方向が 1.8 m と 1.9 m である。建物は、棟筋でみると北で東へ約 17° 振れる。

柱穴の平面形は、不整形円形から楕円形を呈し、長径が 48 から 72 cm、深さは 14 から 48 cm を測る。

10 - 29 柱穴・10 - 33 柱穴・10 - 35 柱穴・10 - 36 柱穴には、直径 14 cm から 20 cm の柱痕跡

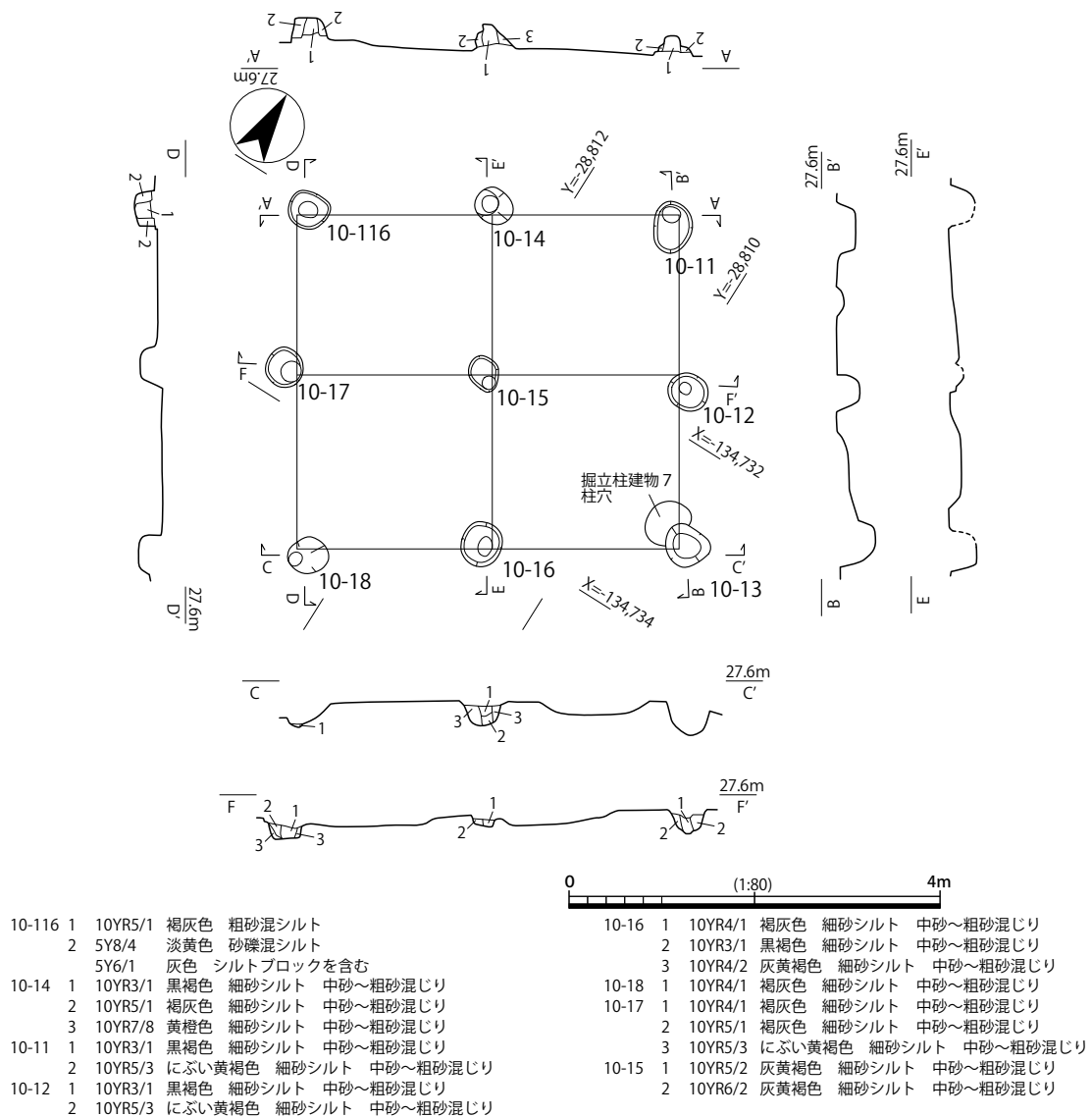


図 247 掘立柱建物 8 平・断面図

がみられる他、10-35 柱穴・10-28 柱穴に、柱の自重と建物の荷重が柱にかかって生じた圧痕が認められる。なお、10-35 柱穴は、断面にみられる柱痕跡と掘方底面にみられる圧痕の位置が異なっており、断面観察の誤認か掘方底面の圧痕が、別の理由により生じたと思われる。掘方埋土は主として、中砂混じりの褐灰色系の細砂シルトである。

10-81 柱穴から、509 に示すMT-15 型式の杯蓋が出土している他、土師器・須恵器片が出土している。6 世紀中頃の建物と考えられる。

掘立柱建物 11 (図 226・250、図版 43-6)

掘立柱建物 11 は、梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟である。梁行寸法は 4.4 m と 4.2 m。桁行寸法は 6.4 m と 6.1 m で、やや歪な平面形を呈する。身舎の面積は 26.9 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 2 m と 2.2 m、桁行方向は 1.8 から 2.2 m である。棟筋は、北で西へ約 3° 振れる。

柱穴の平面形は、楕円形から不整形円形を呈し、直径もしくは長軸が 34 から 66 cm、深さは 10 から 24 cm を測る。10-40 柱穴・10-41 柱穴・10-44 柱穴・10-45 柱穴には柱痕跡がみられる。

掘方埋土は、黄褐色系の中砂混じりの細砂シルトが主である。

図化はできなかったが、10-37 柱穴から 6 世紀後半の須恵器杯蓋片が出土している。出土遺物から 6 世紀後半以降の建物と考えられる。

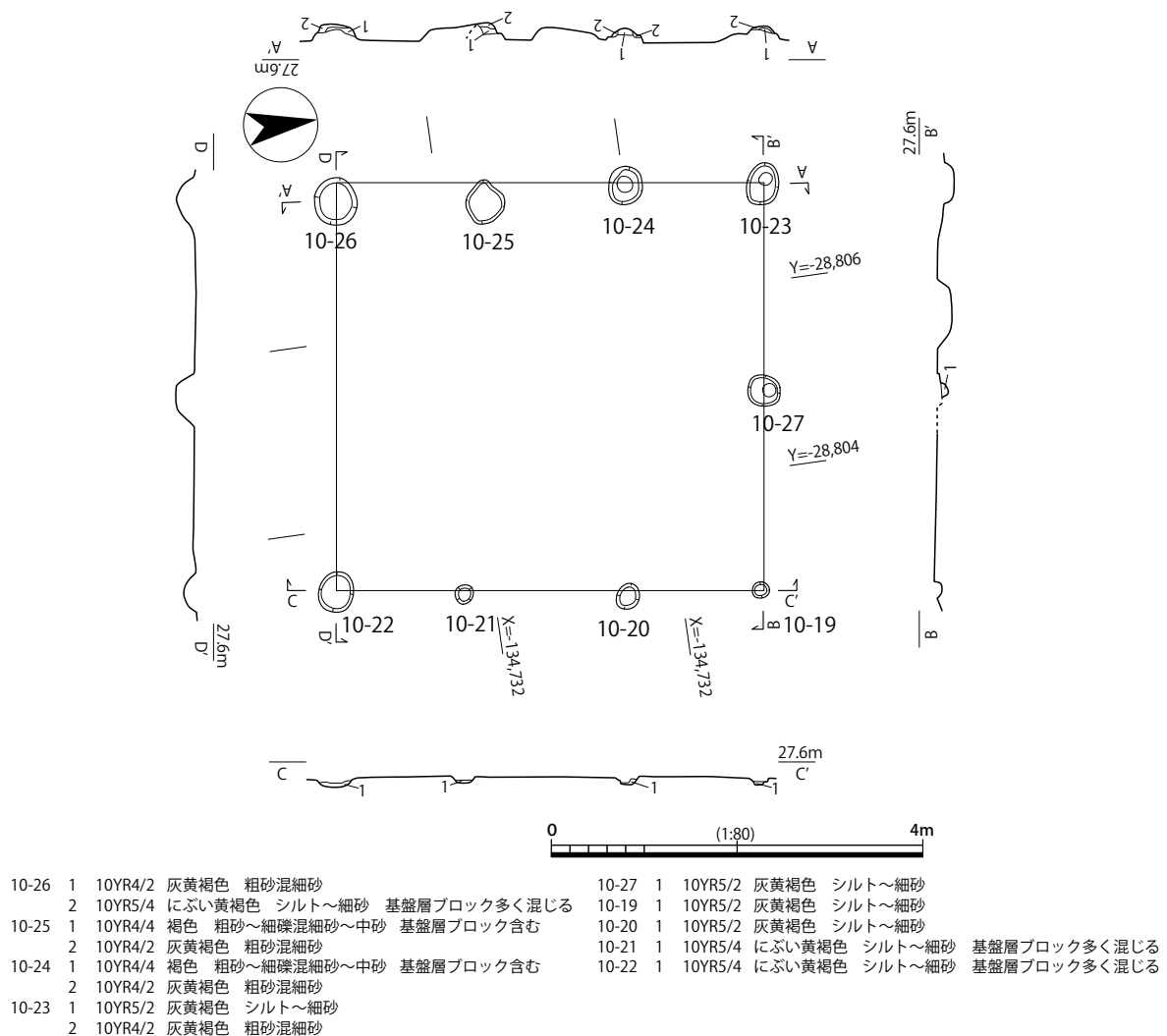


図 248 掘立柱建物 9 平・断面図

掘立柱建物 12 (図 226・251)

掘立柱建物 12 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物である。梁行寸法、桁行寸法とも 4 m で、柱筋の通りの良い建物である。身舎の面積は 16 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向、桁行方向とも 2 m 等間である。建物は、ほぼ東西南北に揃っており振れはない。

柱穴の平面形は、不整円形を呈し長径は 40 cm から 85 cm、深さは 5 から 38 cm を測る。10 - 48 柱穴と 10 - 51 柱穴以外は、平面規模に対し深さが非常に浅く、柱穴上部が大きく削平を受けていることが窺える。10 - 48 柱穴と 10 - 51 柱穴には直径 16 cm 前後の柱痕跡がみられる他、10 - 48 柱穴の底面に、柱の自重と建物の荷重が、柱にかかって生じた圧痕が認められる。掘方埋土は、主に褐色系の細砂から中砂シルト混じりである。10 - 48 柱穴・10 - 49 柱穴・10 - 51 柱穴・10 - 52 柱穴からは、細かな時期は不明であるが古墳時代と考えられる土師器・須恵器片が出土している。

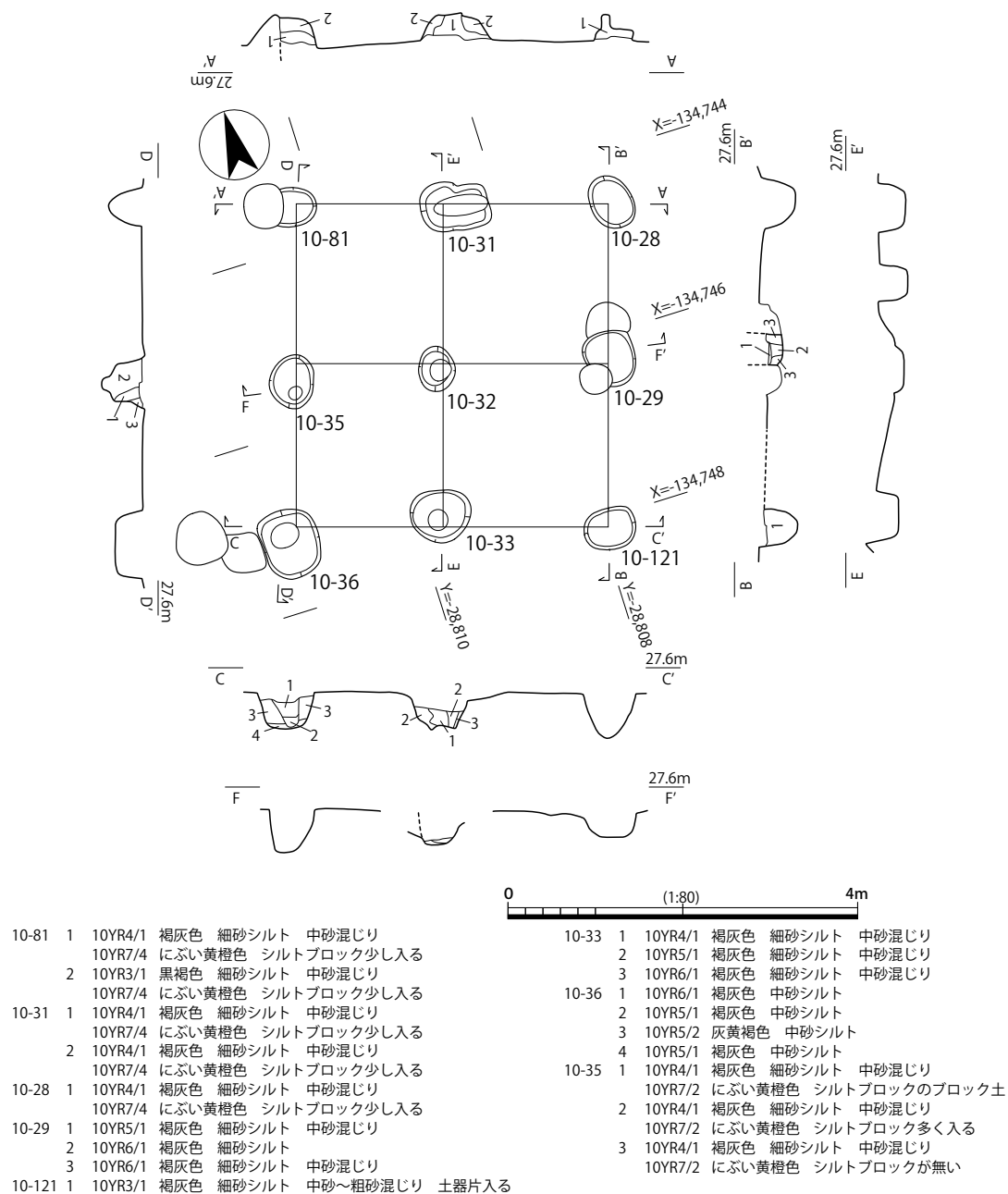


図 249 掘立柱建物 10 平・断面図

掘立柱建物 14 (図 226・252・328、図版 71・43 - 7)

掘立柱建物 14 は、妻側の柱数が異なっており南妻梁行 2 間、北妻梁行 3 間となる。桁行は 3 間の南北棟である。柱穴の重複はないが、身舎が掘立柱建物 10 と重複しており、また掘立柱建物 11 と妻が接している。梁行寸法は 4.5 m、桁行寸法は 5.3 m で、身舎の面積は 23.9 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向北妻側が 1.3 m と 1.6 m、南妻側が 2 m と 2.5 m。桁行寸法は、1.7 m と 1.8 m を測る。建物は、西平側柱筋で見ると、北で東へ約 10° 振れる。

柱穴の平面形は、おおむね円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が 29 から 55 cm で、深さは 10 から 45 cm を測る。10 - 63 柱穴・10 - 66 柱穴・10 - 68 柱穴・10 - 106 柱穴には、直径 10 cm 前後の柱痕跡がみられる。特に、10 - 62 柱穴・10 - 64 柱穴は、掘方底面に柱の自重と建物の荷重が、柱にかかって生じた圧痕が認められる。掘方埋土は黄澄から黄褐色系の細砂シルトを主とする。

10 - 106 柱穴からは 526 に示す、TK - 208 型式の礎が出土している。出土遺物から、5 世紀中頃以降の建物である。

掘立柱建物 15 (図 226・254)

掘立柱建物 15 は、私部南遺跡 06 - 2 調査区で検出し、柱列としていた 7 - 2319 柱穴から 7 -

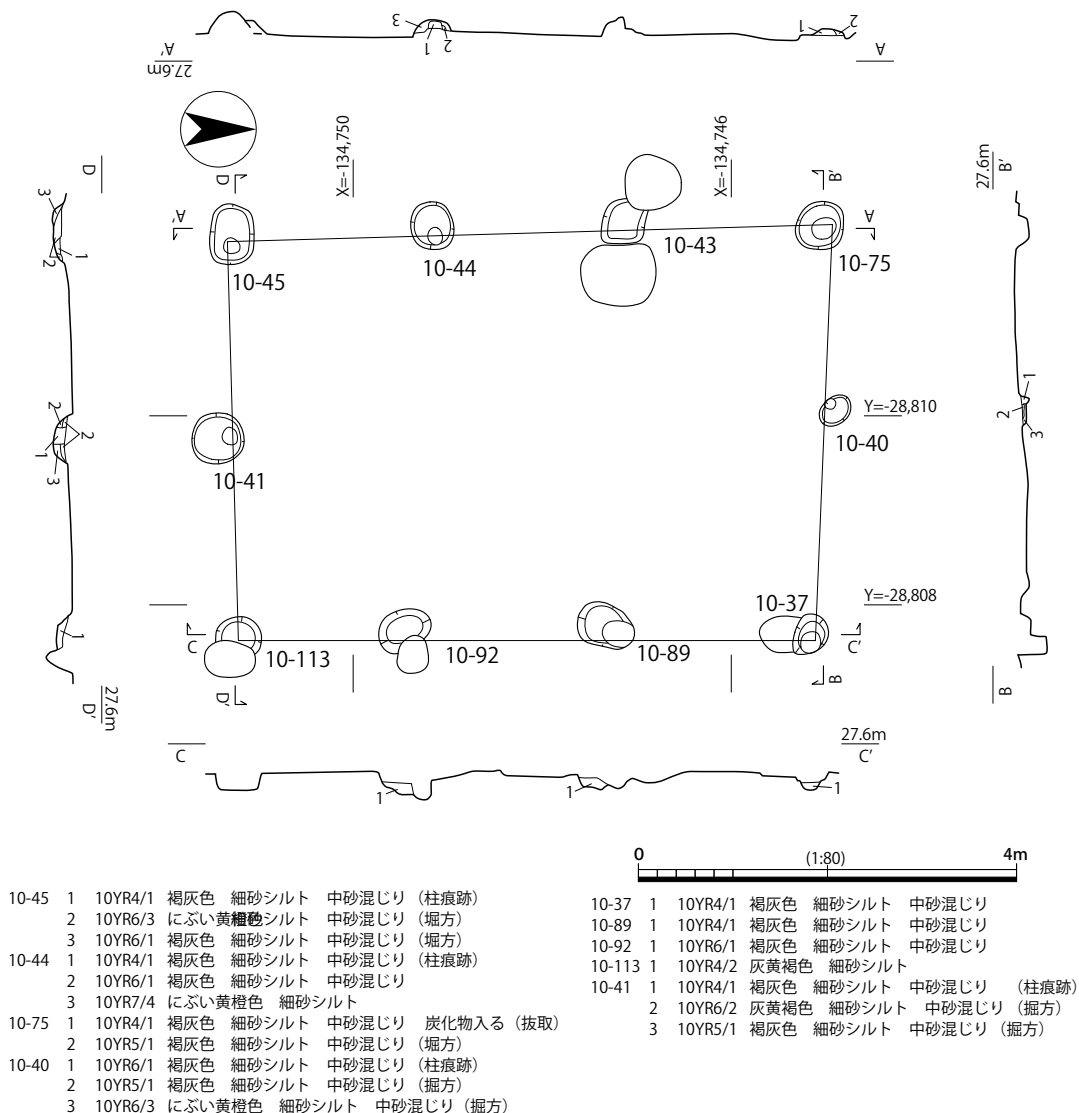


図 250 掘立柱建物 11 平・断面図

2322 柱穴・7 - 2313 柱穴・7 - 2314 柱穴と、今回検出した 10 - 71 柱穴から 10 - 73 柱穴・10 - 170 柱穴・10 - 102 柱穴からなる東西棟の掘立柱建物である。

また、7 - 2313 柱穴は、06 - 2 調査区の発掘調査が完了した翌年度に、隣接する 07 - 1 の発掘調査が予定されていたことから、掘立柱建物となる可能性を考慮して、7 - 2313 柱穴の埋土を写真測量に耐え得る最小限のみ掘り窪めて一旦埋め戻しており、私部南遺跡 07 - 1 調査時に再発掘を行い、10 - 71 柱穴としている。なお、前章の私部南遺跡 06 - 1 調査の報告では、本建物は掘立柱建物 17 として報告している。ここに記して確認しておく。

掘立柱建物 15 は、梁行 3 間、桁行 2 間で、梁行寸法は 5.4 m、桁行寸法は 6.5 m、身舎の面積は 35.1 m² である。柱間寸法は、梁行方向が 1.6 から 2.1 m、桁行方向は 2.6 から 3.9 m を測る。建物は、北平側の柱筋で見ると、西で北へ約 10° 振れる。

柱穴は、不整形円形・楕円形・円形と多様な平面形を呈し、長径もしくは直径が 21 から 48 cm、深さは 5 から 38 cm を測る。中でも 7 - 2322 柱穴は、短径 15 cm、長径 20 cm と非常に小形である。検出

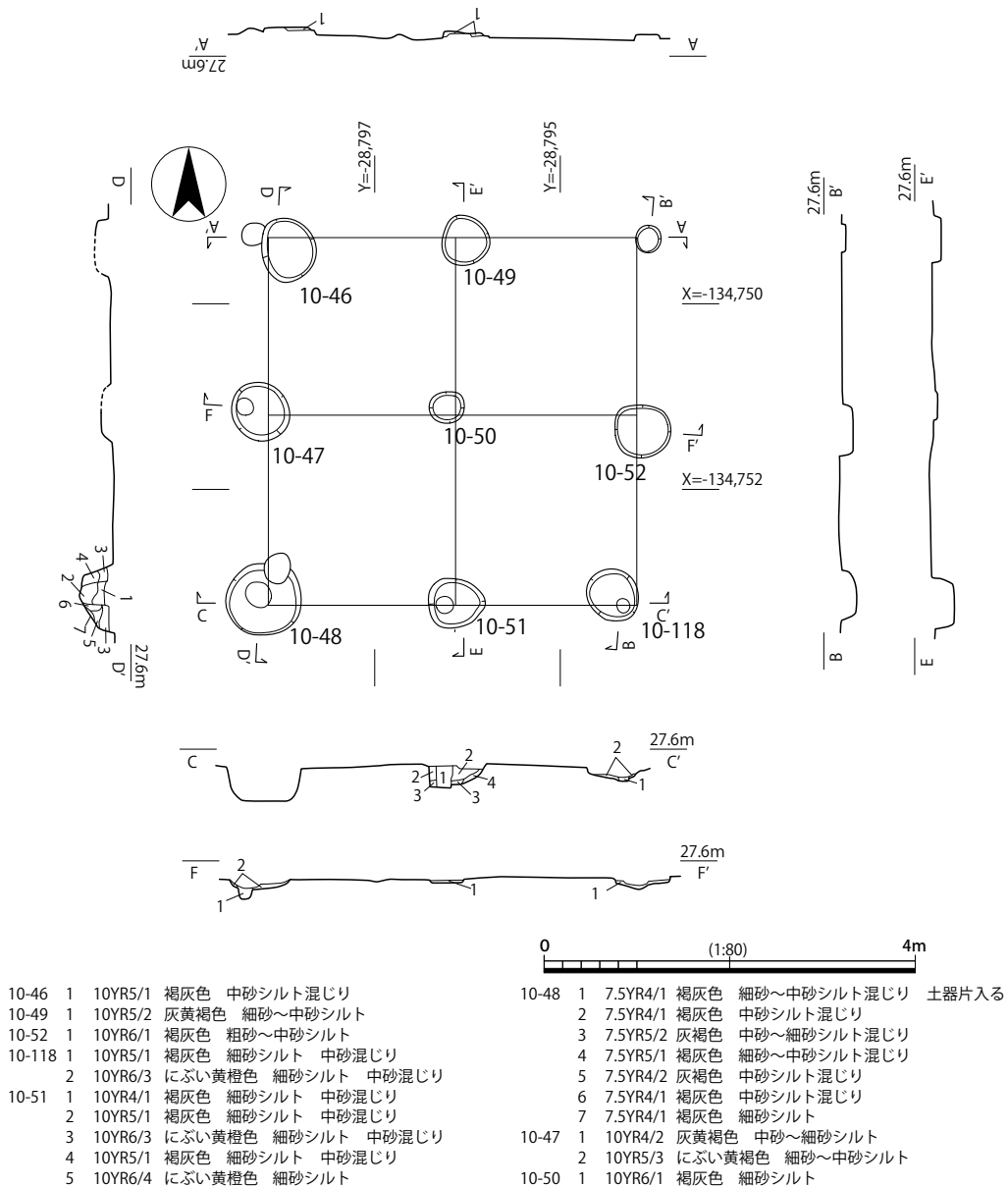


図 251 掘立柱建物 12 平・断面図

した柱穴の内、半数に直径 10 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方の埋土は、褐色系の細砂シルトから中砂シルトや細砂から粗砂シルト混じりが主である。

7 - 2314 柱穴の掘方から、300 に示す T K - 10 型式の杯蓋（図 74 - 300）が出土している。出土遺物から、掘立柱建物 15 は、6 世紀中頃と考えられる。

掘立柱建物 44（図 226・254、図版 43 - 8）

掘立柱建物 44 は、梁行 2 間、桁行 3 間の東西棟である。梁行寸法は 2.8 m、桁行寸法は 3.4 m、身舎の面積は 9.5 m² である。柱間寸法は、梁行方向 1.5 m と 1.3 m、桁行方向が 1 から 1.3 m を測る。北側柱筋は、西で北へ約 6° 振れる。

柱穴の平面形は、ほぼ隅丸方形を呈し、一辺約 50 cm 前後でやや大きめの掘方である。深さは 2 から 32 cm を測る。20 - 5 から 7 柱穴と 20 - 9・10 柱穴には、柱痕跡が見られた。掘方埋土は、淡黄色砂礫混じりシルトである。20 - 3 柱穴から 5 世紀から 6 世紀と考えられる土師器甕口縁片が出土している他、土師器・須恵器片と弥生土器細頸壺片が出土している。

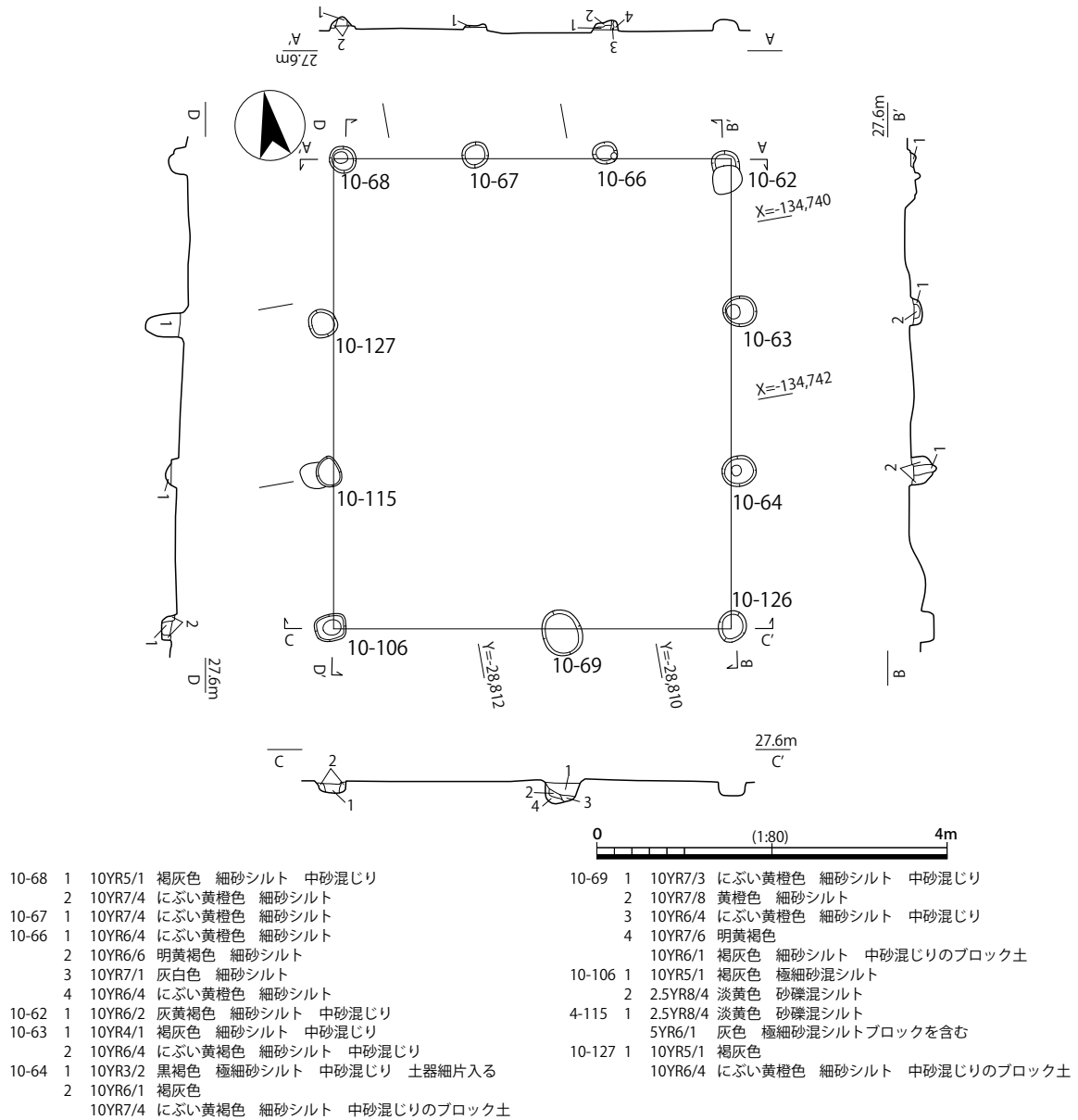


図 252 掘立柱建物 14 平・断面図

掘立柱建物 46 (図 226・255)

掘立柱建物 46 は、調査区端で検出したため全体は明らかではないが、おそらく梁行 2 間、桁行 3 間の東西棟と考えられる。梁行寸法は 2.9 m、桁行寸法は 5.2 m で、身舎の面積は 15.1 m² となる。梁行の柱間寸法は、東妻側が 1.5 m と 1.4 m、西妻側は 1.1 m、桁行の柱間寸法は、1.6 m と 2.0 m を測り、非常に不揃いである。建物は、南平側の柱筋で見ると、ほぼ東西方向で振れない。

柱穴は、不整形円形や楕円形・隅丸方形と多様な平面形を呈し、長径または直径は 40 から 56 cm、深さは 13 から 20 cm を測る。19 - 16 柱穴・19 - 17 柱穴・19 - 18 柱穴・19 - 44 柱穴には、直径 10 cm 前後の柱痕跡が見られ、掘方埋土は、黄灰色土および灰色土である。19 - 44 柱穴から細かな時期は不明だが、古墳時代に考えられる土師器・須恵器片が出土している。

掘立柱建物 54 (図 226・256・327、図版 44 - 1)

掘立柱建物 54 は、4 - 136 柱穴・4 - 140 柱穴と竪穴建物 21 の外周溝の先後関係から、竪穴建

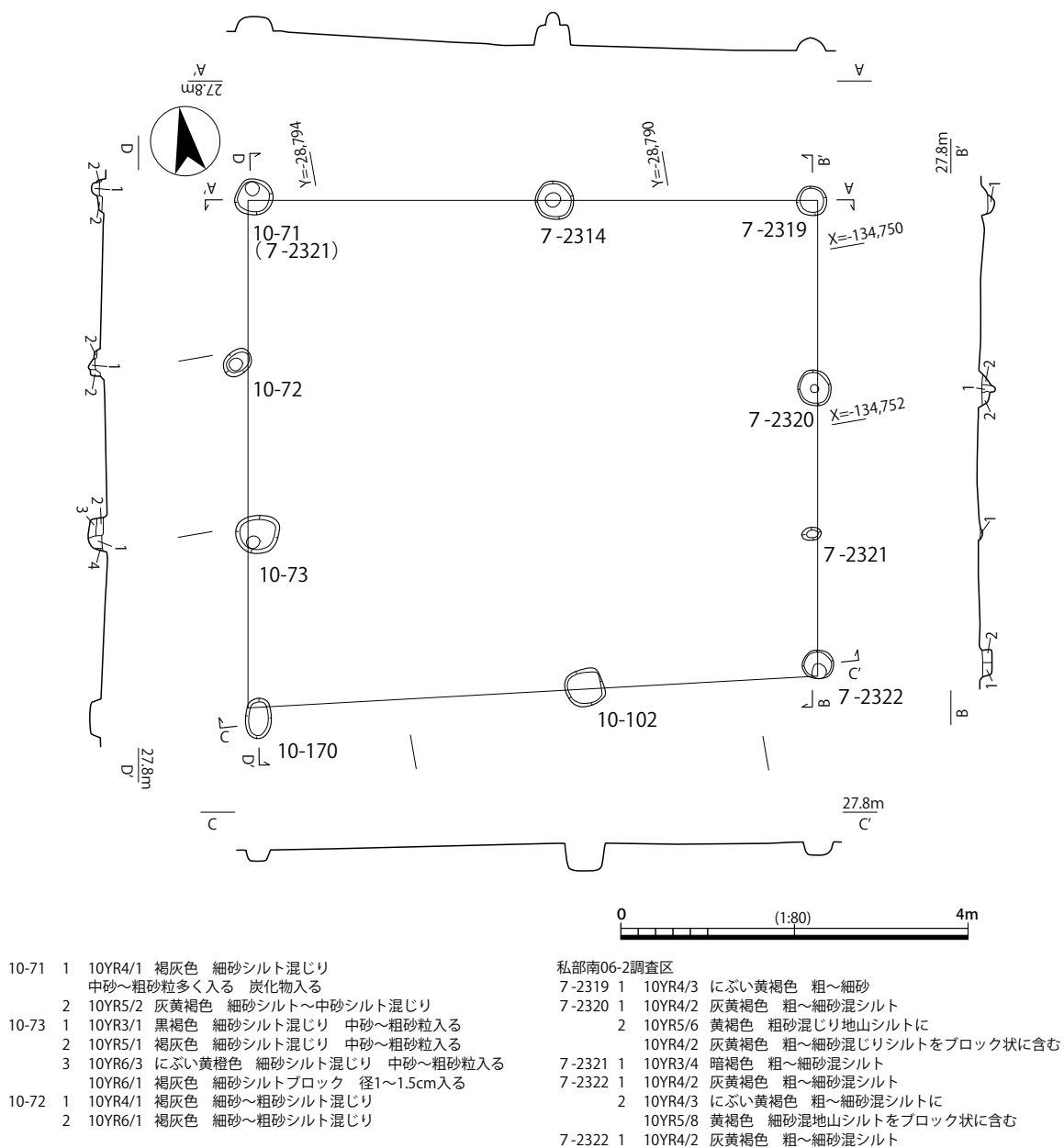


図 253 掘立柱建物 15 平・断面図

物 21 より新しい建物である。建物は、梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟で、梁行寸法は 3.4 m、桁行寸法は 5.4 m、身舎の面積は 18.4 m²を測る。柱間寸法は、梁行方向の北妻側が 1.7 m、南妻側が 20 m と 1.4 m、桁行方向は、1.8 m である。建物は棟筋で見ると、北で東へ約 8° 振れる。

柱穴の平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈し、長辺が 50 cm 前後で、深さは 38 cm から 56 cm を測る。全ての柱穴には、直径 20 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は淡黄色系のシルトブロックを少量含む、灰オリーブ色系の細砂混じりシルトが主である。

4-142 柱穴から 510 に示す 5 世紀後半の高杯杯部が出土している他、土師器・須恵器の破片とサヌカイト片が出土しているが、遺構の重複関係から 6 世紀中頃以降の建物と考えられる。

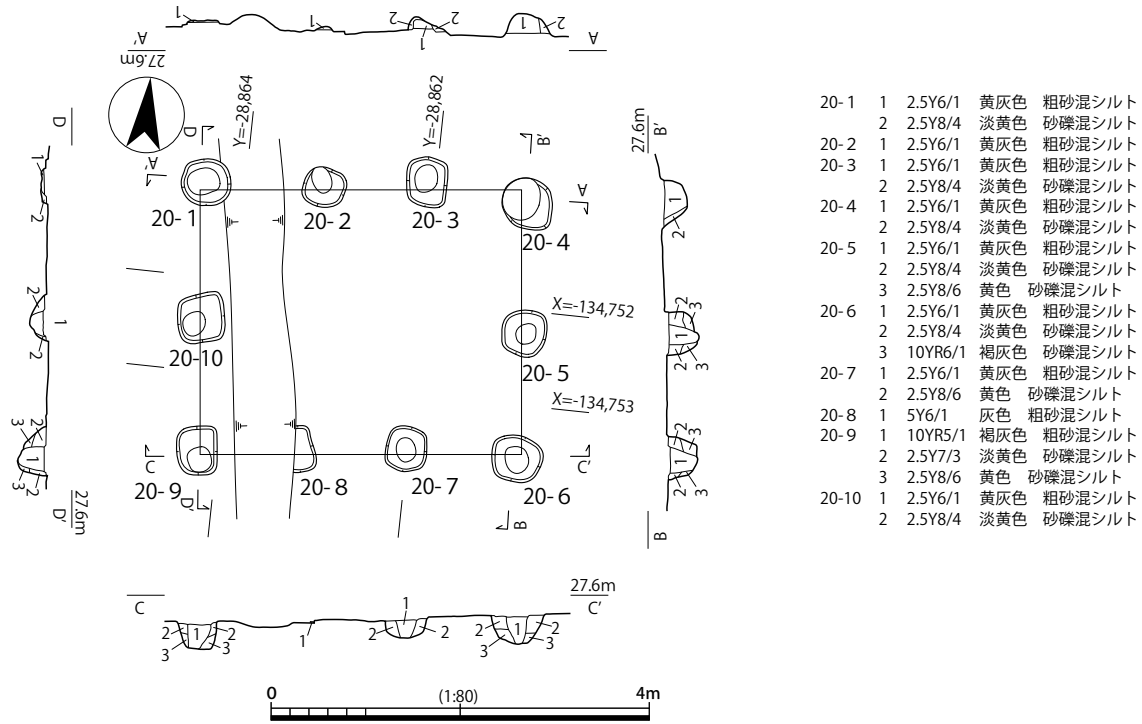


図 254 掘立柱建物 44 平・断面図

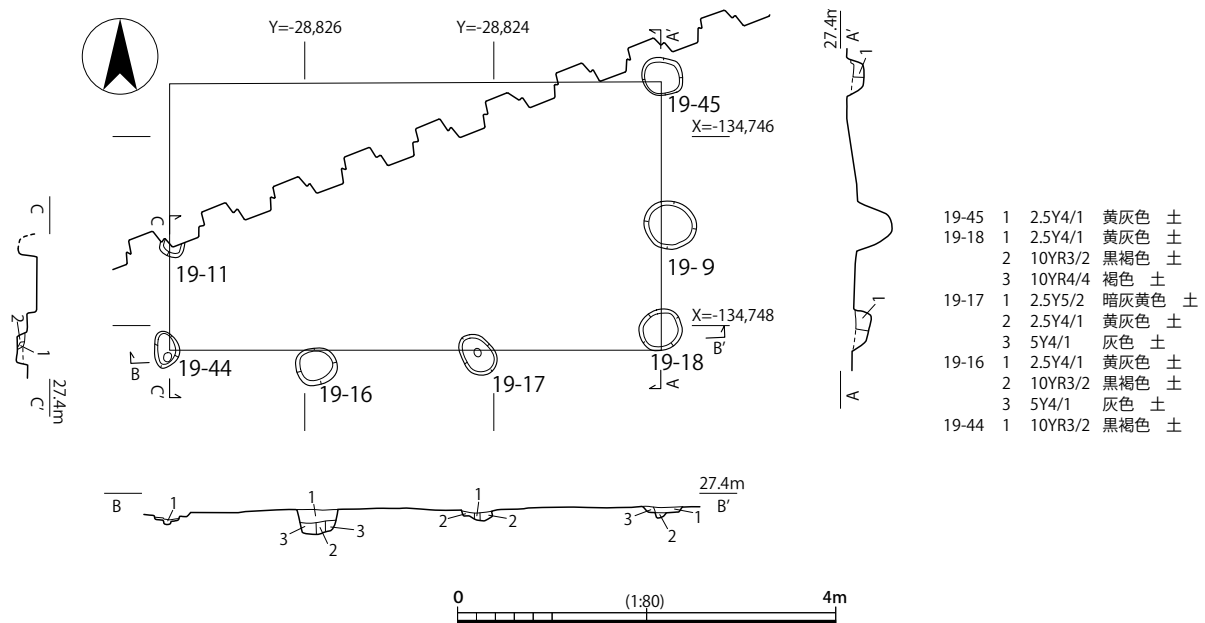


図 255 掘立柱建物 46 平・断面図

掘立柱建物 55 (図 226・257、図版 44 - 2)

掘立柱建物 55 は、東平側柱が一部現代の攪乱により失われているが、梁行 2 間、桁行 2 間の南北棟と考えられる。梁行寸法は 3 m、桁行寸法は 4.4 m と 4.3 m で、身舎の面積は約 13.2 m² である。柱間寸法は、梁行方向 1.4 m から 1.6 m、桁行方向が 2.1 から 2.2 m を測る。棟筋は、北で東へ約 2° 振れる。

柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が 37 から 44 cm 前後、深さは 13 cm 前後を測る。検出した全ての柱穴に直径約 10 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、褐灰色系の粗砂混じりシルトが主である。遺物は出土していないが、埋土などから古墳時代の建物と考えられる。

掘立柱建物 57 (図 226・259)

掘立柱建物 57 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱の東西棟である。南東隅柱は、調査区外にあたり検出できなかった。梁行寸法は 3 m、桁行寸法は 3.4 m で、身舎の面積は 10.2 m² である。柱間寸法は、梁行方向が 1.3 m、1.5 m、1.7 m で、桁行方向は 1.6 m、1.7 m、1.8 m を測る。北平側の柱筋は西で南へ約 10° 振れる。

柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が 24 から 37 cm、深さは 20 から 41 cm を測る。検出した全ての柱穴に直径 10 cm 前後の柱痕跡がみられた。埋土は、主に黄灰色系の粗砂混じりシルトである。柱穴からは、細かな時期は不明であるが、古墳時代に考えられる土師器甕体部片が出土している。

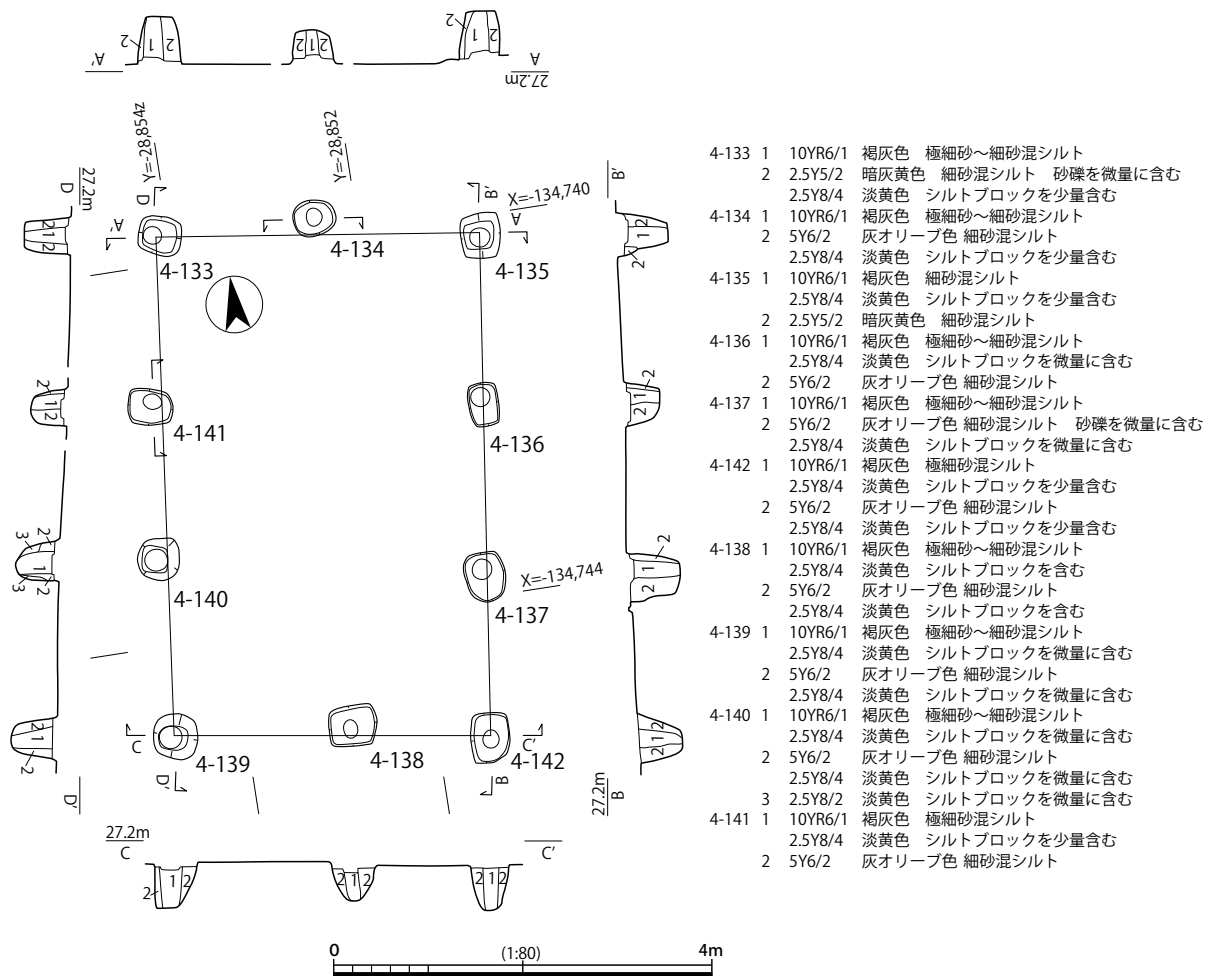


図 256 掘立柱建物 54 平・断面図

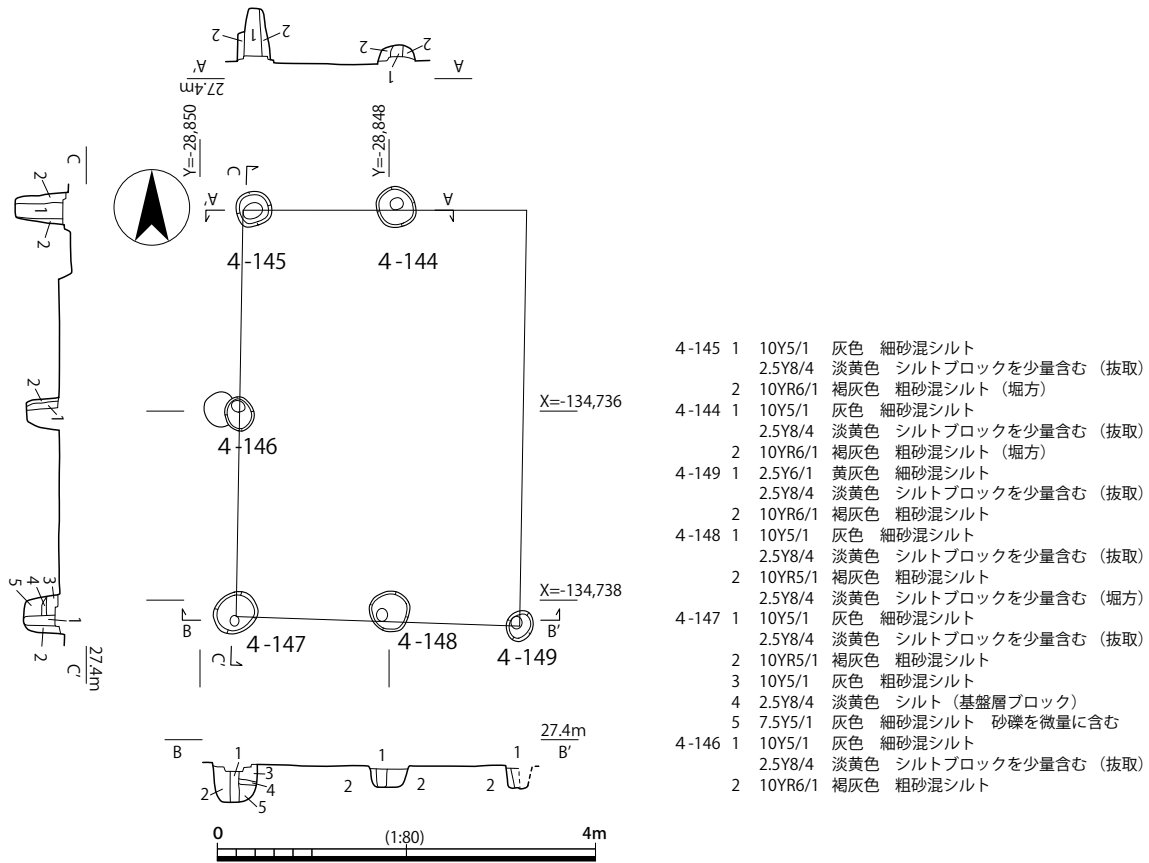


図 257 掘立柱建物 55 平・断面図

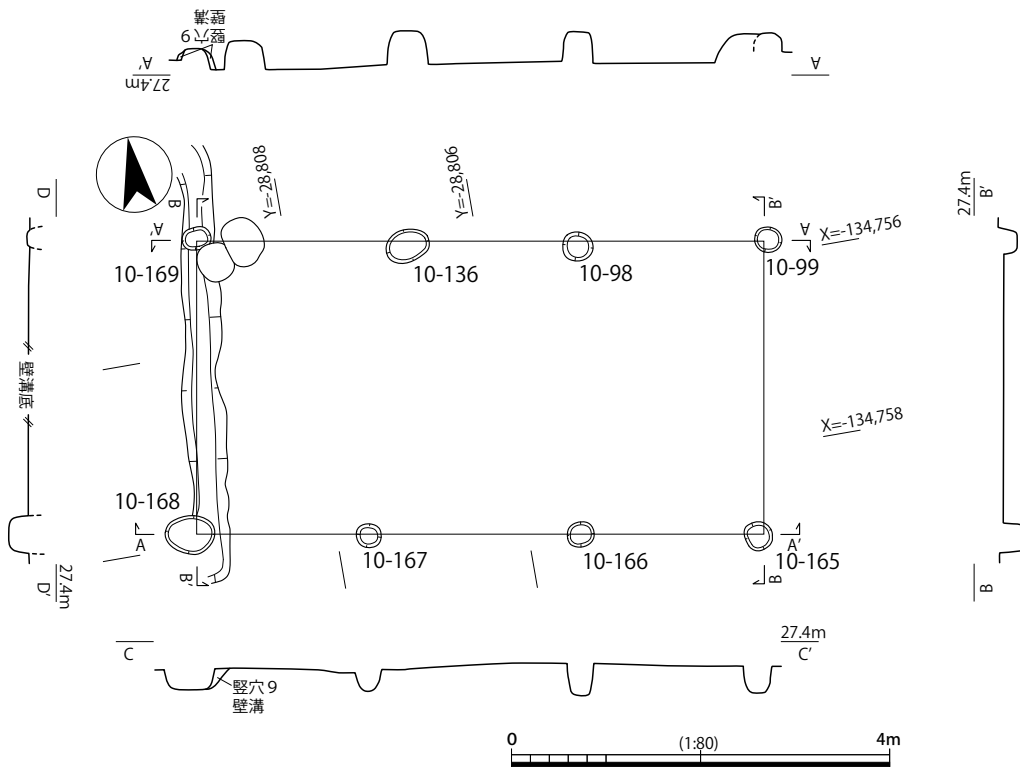


図 258 掘立柱建物 70 平・断面図

掘立柱建物 70 (図 226・258)

掘立柱建物 70 は、梁行 1 間、桁行 3 間の東西棟である。妻柱は検出していない。梁行寸法は、3.1 m、桁行寸法は 6 m で、身舎の面積は 18.6 m² である。柱間寸法は、桁行方向が 1.8 から 2.2 m を測る。北平側の柱筋は西で南へ約 10° 振れる。

柱穴の平面形は楕円形から円形を呈し、長径は 28 から 48 cm、深さは 20 から 50 cm を測る、いずれの柱穴にも柱痕跡は見つからなかった。柱穴の埋土は、灰褐色系の中砂から粗砂を含むシルトである。

10 - 99 柱穴から、図化はしていないが 6 世紀中頃の須恵器杯蓋が出土している他、10 - 98 柱穴・10 - 136 柱穴から古墳時代と考えられる土師器・須恵器片が出土している。また、西妻側の 10 - 169 柱穴と 10 - 168 柱穴が、竪穴建物 6 の壁溝との重複関係から、竪穴建物 6 が掘立柱建物 70 に先行する遺構である。

土坑

4 - 29 土坑 (図 226・260・327)

4 - 29 土坑は、一部現代の攪乱で削平されているが、平面形が不整形を呈し長径約 1.88 m、短

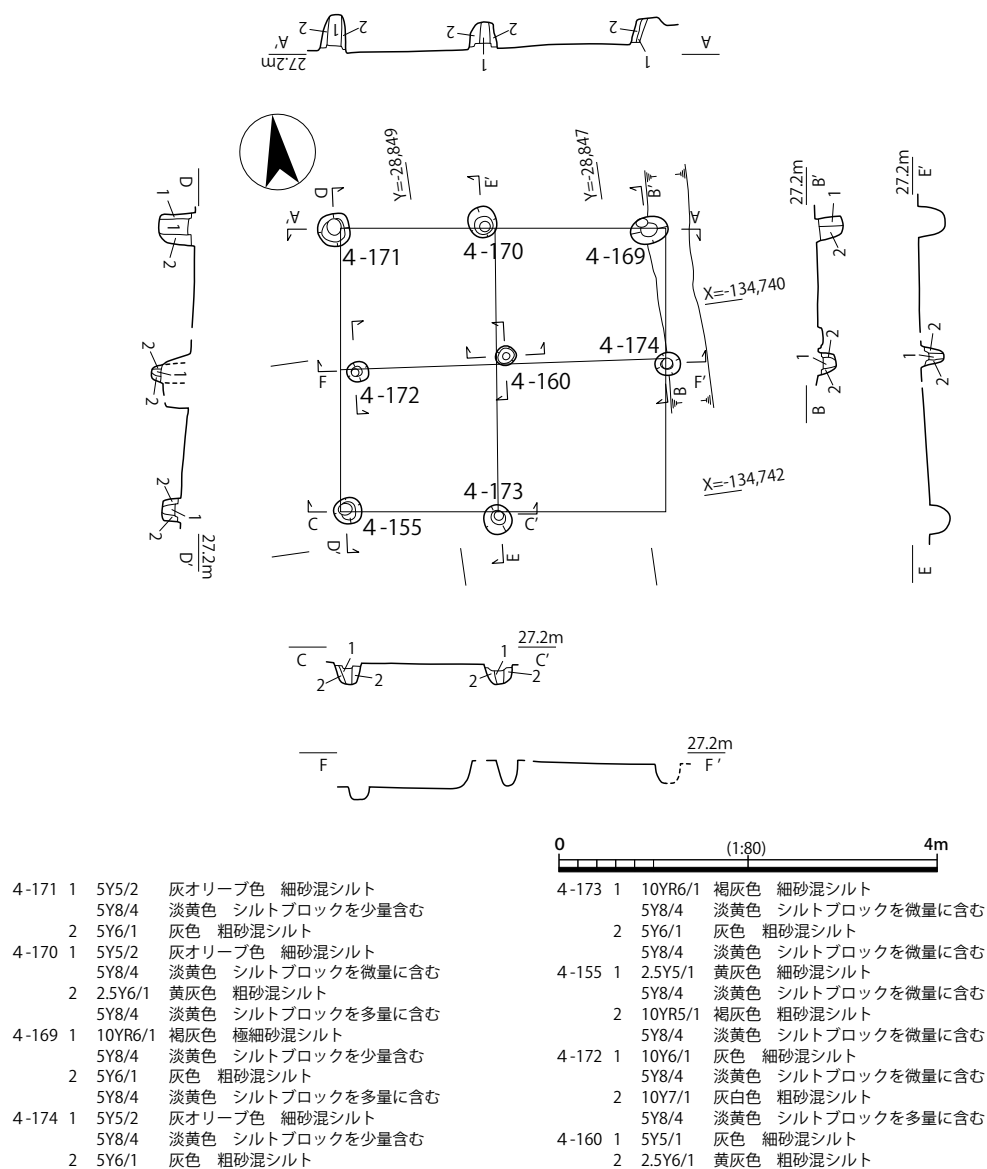


図 259 掘立柱建物 57 平・断面図

径約 1.62 m、深さは約 20 cmを測る。埋土は、褐色系の極粗砂・中砂混じりの細砂から極細砂で、基盤層のブロックを含む。埋土中から、514 に示す T K - 217 型式の杯が出土している。

4 - 45 土坑 (図 226・260)

4 - 45 土坑は、竪穴建物 4 の埋土および機能時の堆積と考えられる層を除去して検出している。大部分が、現代の攪乱で失われており全体の規模は不明であるが、残存長 67 cm、幅 12 cm、深さ 6 cmを測る。埋土は、中砂混じりの黒褐色シルトのブロック土で、焼土ブロックと炭化物が混じる。埋土内からは、古墳時代の土師器片が出土している。

4 - 46 土坑 (図 226・260・327)

4 - 46 土坑は、竪穴建物 4 の埋土および機能時の堆積と考えられる層を除去して検出している。一部、現代の攪乱で失われているが、掘方の平面形は楕円形を呈し、長軸 82 cm、短軸約 52 cm、深さは 22 cmを測る。埋土は、黒褐色中砂混じりシルトのブロック土で、基盤層のブロックが底面付近にみられる。埋土内からは、515 に示す 5 世紀後半の把手付鉢の他、土師器甕片が出土している。

4 - 47 土坑 (図 226・260・262・327)

4 - 47 土坑は、遺構の重複から竪穴建物 4 の壁溝 (4 - 52 溝) よりも新しい土坑である。掘方の平面形は楕円形を呈し、長径 54 cm、短径 39 cm、深さは 33 cmを測る。埋土は、主として中砂から粗砂が入る黒褐色細砂シルトである。埋土中位付近から、516 に示す 6 世紀の土師器高杯が出土している他、土師器甕片も出土している。

4 - 48 土坑 (図 226・260・263・327、図版 61 - 1)

4 - 48 土坑は、竪穴建物 4 の埋土および機能時の堆積と考えられる層を除去して検出している。平面形は、ハート形のような不定形を呈する。長軸は 1.85 m、短軸は 1.34 mで深さは 44 cmを測る。埋土は、主に灰黄色から褐灰色を呈する砂質土で、シルトブロックを多く含む。土坑内から、517 に示す 5 世紀後半と考えられる口縁部から体部にかけての土師器甕が出土している。

4 - 131 土坑 (図 226・262・327)

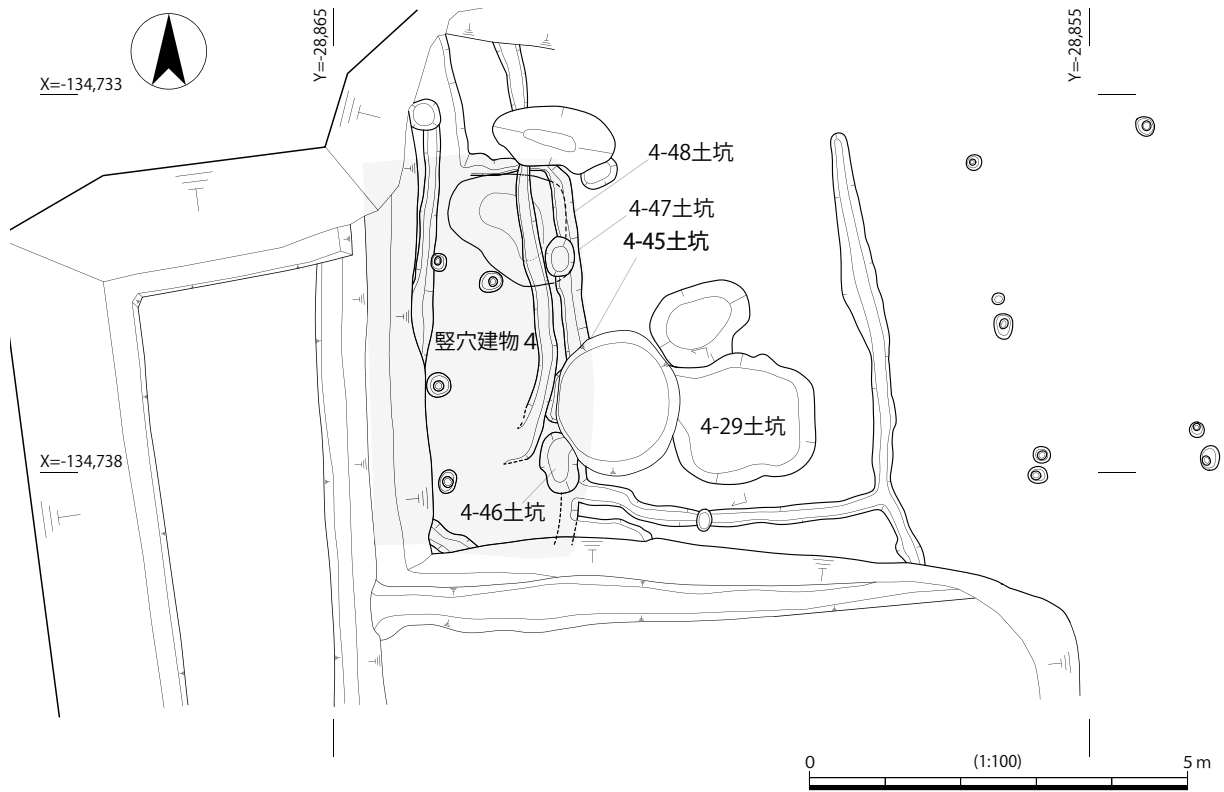
4 - 131 土坑は、遺構の重複関係から、竪穴建物 19 の外周溝である 4 - 91 溝よりも新しい遺構である。平面形は楕円形を呈し、長径 67 cm、短径 60 cm、深さ 33 cmを測る。埋土は、3 層に分層でき、上層が基盤層のブロックが少量混じる褐灰色極細砂混じりシルト。中層が基盤層のブロックを含む粗砂から極粗砂含む黄灰色シルト、下層が基盤層のブロックを含む褐灰粗砂混じりシルトである。埋土中から、518 に示す 7 世紀前半の杯蓋が出土している。

10 - 140 土坑 (図 226・261・327、図版 71)

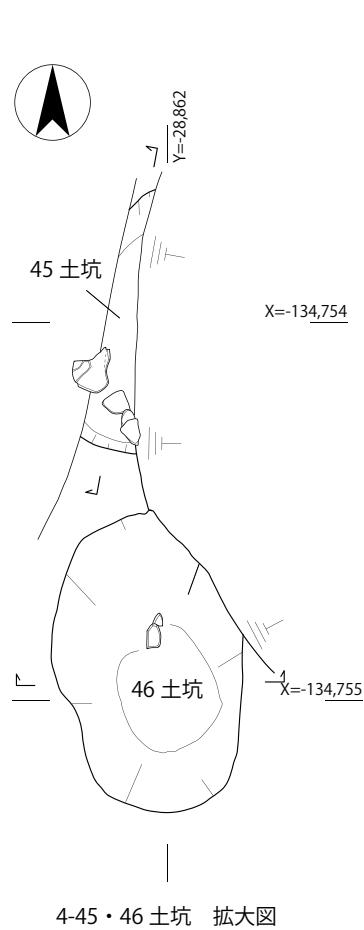
10 - 140 土坑は、平面形が不整円形を呈する。長径 2 m、短径 1.6 m、深さ 74 cmを測り、断面は摺鉢状を呈する。埋土は基盤層ブロックを含む灰黄褐色系の砂混じりシルトである。土坑内の底面付近から人頭大の石と共に、511 から 513 に示す T K - 216 型式の杯、5 世紀中頃から後半の土師器高杯が出土している。井戸の可能性が考えられる遺構である。

10 - 159 土坑 (図 226・264・328)

10 - 159 土坑は、近世の溜井状遺構で削平されているが、平面形が方形を呈し、残存長で長辺 3.7 m、短辺 2.14 mを測る。深さは浅く、14 cmである。埋土は、中砂から粗砂が入る灰黄褐色細砂シルトで、炭化物が混じる。土坑内からは、519 に示す T K - 23 型式の高杯の杯部やミニチュア土器の底部、鉄釘の他、破片であるが製塩土器・土師器・須恵器が多く出土している。

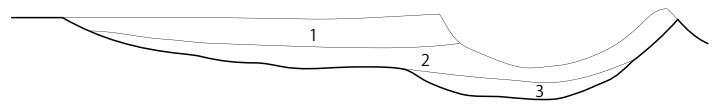


4-29・45・46・47・48 土坑 全体図



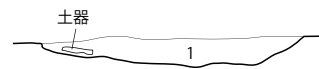
4-45・46 土坑 拡大図

S 4-29土坑 N
27.3m



- 1 10YR4/1 褐灰色 極粗砂 中砂混じり 細砂(土器片を含む) 土師器・須恵器杯
- 2 10YR5/1 褐灰色 極粗砂混じり 極細砂 径1~5cm 10YR6/6 明黄褐色 基盤層ブロックを含む
- 3 2.5Y5/1 黄灰色 粗砂 中砂混じり 極細砂 径1~3cm 10YR6/6 明黄褐色 基盤層ブロックを含む

S 4-45 土坑 N
27.2m



- 1 7.5YR3/2 黒褐色 シルト 中砂混じり (7.5YR3/1 黒褐色 中砂混じり シルトのブロック土)

W 4-46 土坑 E
27.2m



- 1 7.5YR3/2 黒褐色 中砂混じりシルトと7.5YR3/1 黒褐色 中砂混じりシルトのブロック土
7.5YR6/6 橙色 シルトのブロック底付近に若干入る 炭化物・土器片入る

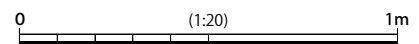


図 260 4-29・45・46・47・48 土坑 平・断面図

17-12 土坑 (図 226・264・328)

17-12 土坑は、検出位置が平坦面 1 から谷 1 へ落ちた下端付近にあたるが、ここで記述する。なお、調査区境に位置しており約半分しか検出できなかったが、ほぼ楕円形の平面形を呈すると考えられる。

長径は 2.92 m、短径は 1.12 m、深さは 18 cm を測る。埋土は、2 層に分層でき上層が明青灰色シルトブロックと砂礫を少量含む青灰色粗砂混じり粘質シルト、下層はラミナが部分的にみられる細砂から中砂を含む暗青灰粘質シルトである。下層は機能時の堆積と考えられる。埋土中から、522・523 に示す 5 世紀後半から 6 世紀と考えられる土師器高杯脚部が出土している。

17-13 土坑 (図 226・264・328、図版 71)

7-13 土坑は、17-12 土坑同様、検出位置が平坦面 1 から谷 1 へ落ちた下端付近にあたるが、ここで記述する。楕円形の平面形を呈し、長径は 86 cm、短径は 72 cm、深さは、21 cm を測る。埋土は、上層が青灰粗砂混じりシルト、下層が青灰シルト混じり砂礫である。上層から、524 に示す TK-73 型式から TK-216 型式の須恵器杯蓋が出土している他、土師器片とサヌカイト片が出土している。

17-14 土坑 (図 226・264・366)

17-14 土坑も、17-12 土坑同様に検出位置が平坦面 1 から谷 1 へ落ちた下端付近にあたるが、ここで記述する。平面形は楕円形を呈し、長径 1.24 m、短径 0.96 m、深さは 25 cm を測る。埋土は、上層が暗青灰砂礫混じりシルト、下層は明青灰粗砂混じりシルトである。埋土中から、古墳時代の土師器片と共に、1174 に示す縄紋土器深鉢片が出土している。

19-1 土坑 (図 226・262・329、図版 72・61-2)

19-1 土坑は、不定形の平面形を呈しており、長軸 4.2 m、短軸 1.7 m、深さ 10 cm を測る。土坑底面には、溝状に掘り込まれた部分があり、この部分は幅 60 cm、長さ 3.3 m、深さ 26 cm を測る。埋土は、主として褐色系の極粗砂から中砂混じりシルトである。埋土中からは、585 から 597 に示す須恵器杯・高杯・器台・甕・鉢、土師器甕と、移動式竈の裾部が出土している。時期は 5 世紀中頃から 6 世紀後半に考えられる。出土遺物の時期を見るとまとまりがなく、溝部と土坑が別遺構であったことが考えられる。

19-3 土坑 (図 226・262・363)

19-3 土坑は、19-2 溝と重複関係にあり 19-2 溝に先行する遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長径 1.6 m、短径 80 cm、深さ 20 cm を測る。埋土は、灰黄色系の細砂混じりシルトを主とし、

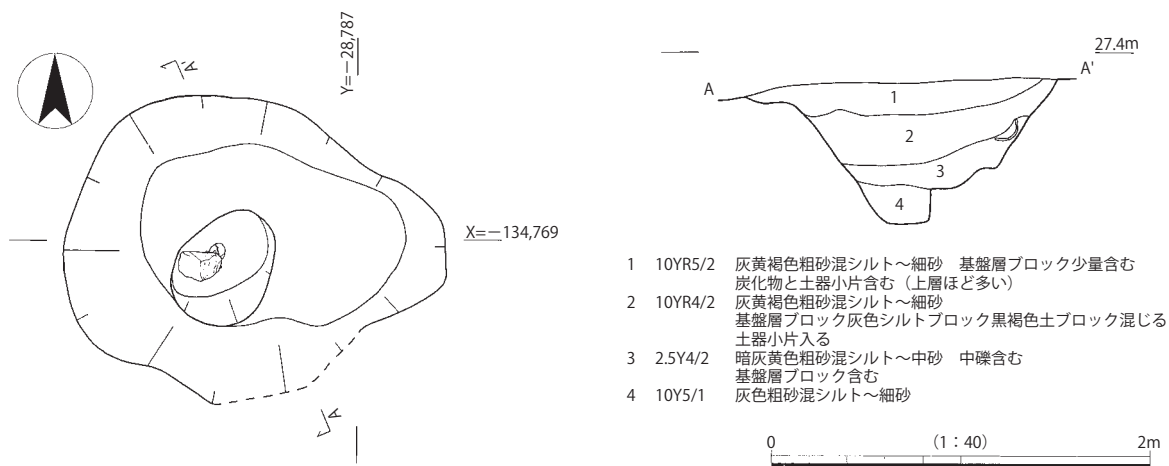
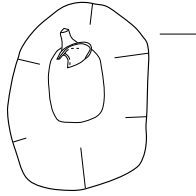


図 261 10-140 土坑 平・断面図



Y=28,842

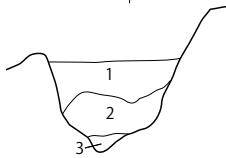
X=-134,732



W

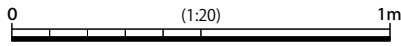
27.2m

E



- 1 10YR3/2 黒褐色 細砂混シルト 中砂～粗砂入る
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト 中砂～粗砂入る
土器細片シルトブロック入る
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト

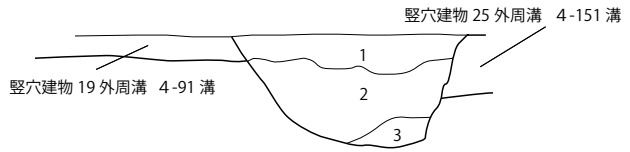
4-47 土坑



S

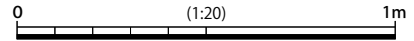
27.1m

N



- 1 10YR5/1 褐灰色 極細砂混シルト
- 2.5Y6/2 灰黄色 シルトブロックを少量含む
- 2 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 粗砂～極粗砂を含む
- 2.5Y6/2 灰黄色 シルトブロックを少量含む (基盤層)
- 3 5Y6/1 灰色 シルト

4-131 土坑



S

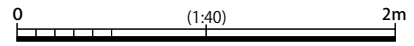
27.4m

N



- 1 2.5Y6/2 灰黄色 砂礫混シルト
- 2 2.5Y7/2 灰黄色 細砂混シルト
- 3 7.5YR6/2 灰褐色 シルト 焼土塊径1～3cm大を含む
- 4 2.5Y6/1 黄灰色 極細砂混シルト

19-2 土坑

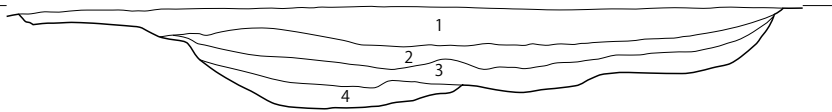


W

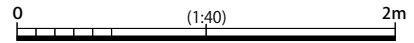
27.4m

19-1 土坑

E



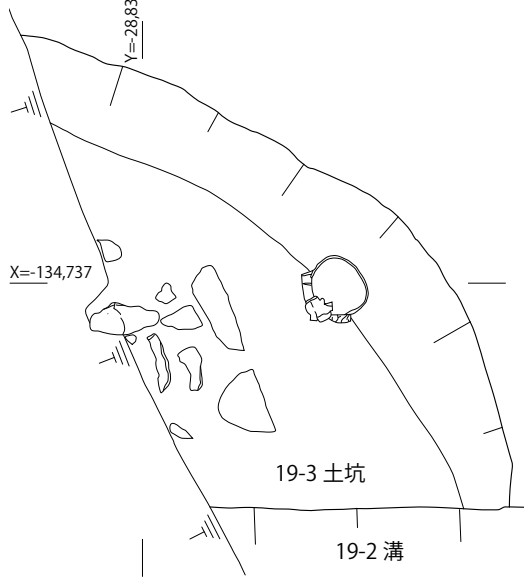
- 1 10YR5/1 褐灰色 極粗砂 極細砂混じりシルト 土器片を含む
- 2 10YR5/1 褐灰色 中砂 極細砂混じりシルト
- 10YR7/6 明黄褐色 粗砂混じりシルト
基盤層ブロック (径1～5cm) を多く含む
- 3 10YR4/1 褐灰色 粗砂 細砂混じり極細砂 炭・土器片を含む
- 4 2.5Y5/1 黄灰色 中砂シルト混じり極細砂
- 10YR7/6 明黄褐色 極粗砂混じりシルト
地山ブロック (径1～5cm) を含む



19-3 土坑遺物出土状況

Y=28,832

X=-134,737



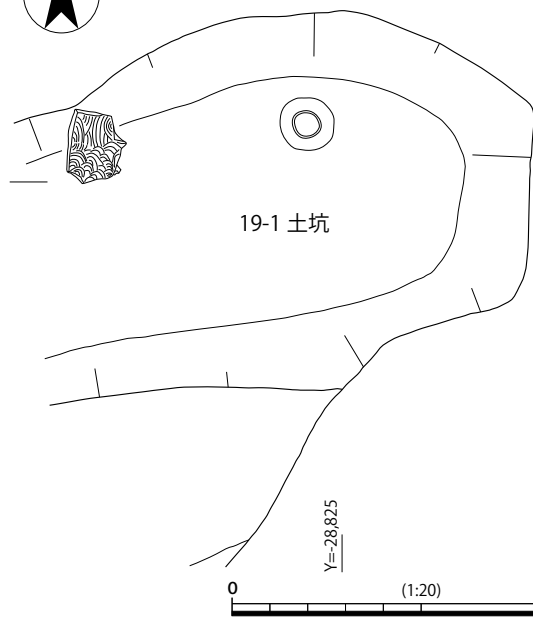
19-3 土坑

19-2 溝



19-1 土坑遺物出土状況

X=-134,737



19-1 土坑

Y=28,825

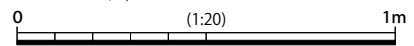


図 262 4-47・131 19-1・3 土坑 平・断面図

焼土塊がみられる。土坑内からは、1126 に示す庄期の鉢が出土している。

ピット

4-119ピット (図 226・328)

4-119ピットは、楕円形の掘方平面形を呈し長径 43 cm、短径 38 cm、深さは 37 cmを測る。525 に示すMT-15 型式の須恵器杯が出土している。

17-10ピット (図 226・328)

17-10ピットは、検出位置が平坦面 1 から谷 1 へ落ちた下端付近にあたるが、ここで記述する。

掘方の平面形が円形を呈し、直径 20 cm、深さ 10 cmを測る。527 に示すMT-15 型式の杯蓋が出土している。

17-18ピット (図 226・328)

17-18ピットは、掘方の平面形が円形を呈し、直径 19 cm、深さ 10 cmを測る。528 に示す土師器甕が出土している他、サヌカイト片も出土している。

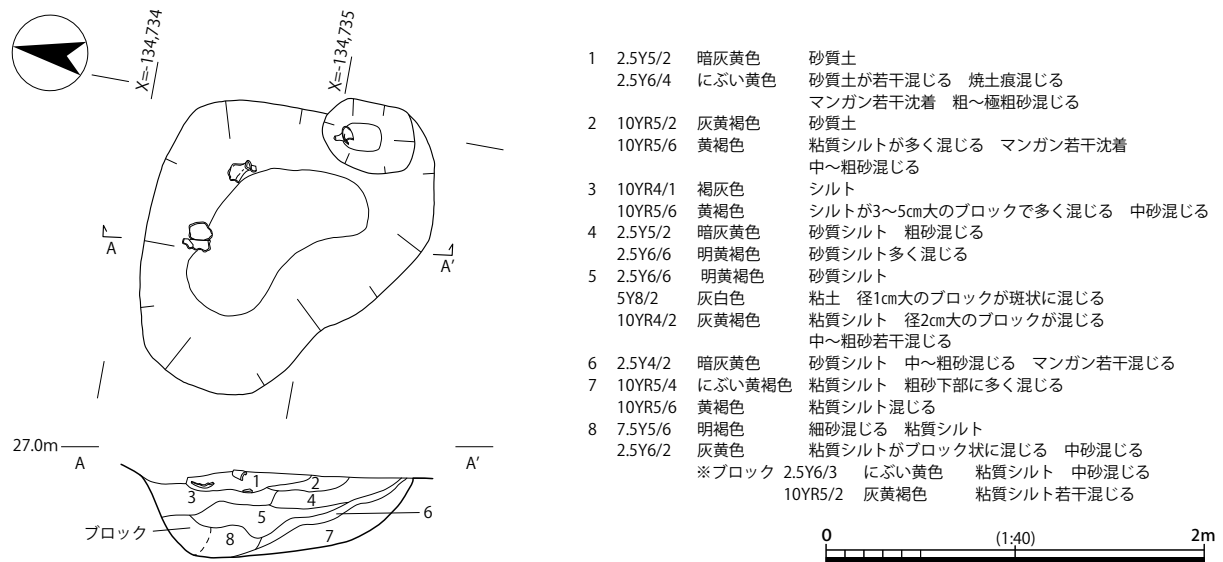


図 263 4-48 土坑 平・断面図

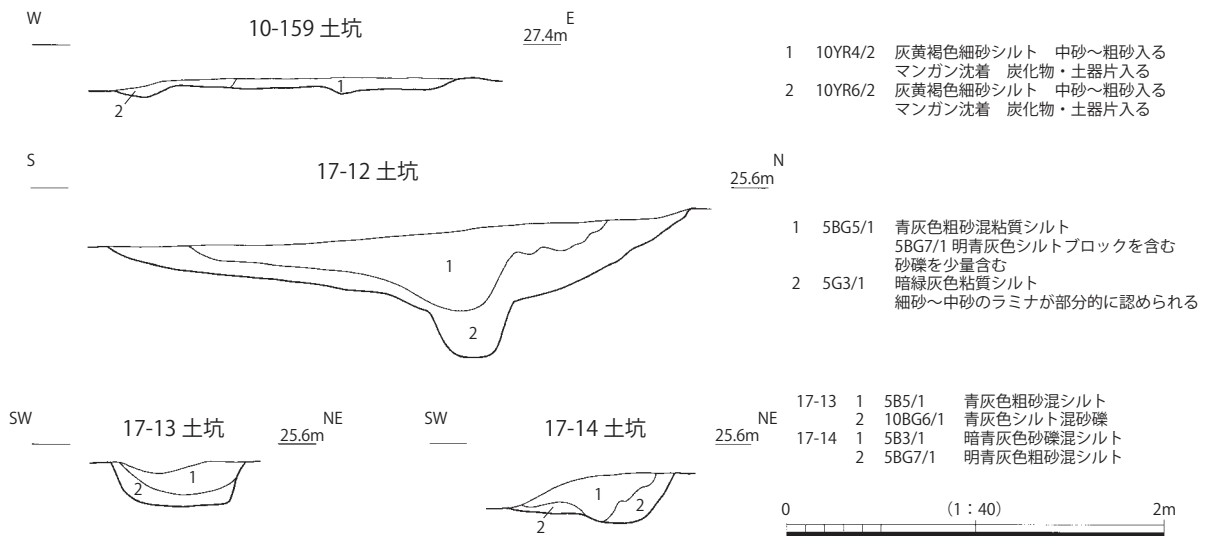


図 264 10-159・17-12・13・14 土坑 断面図

19－10ピット（図226・328）

19－10ピットは側溝により削平されているが、掘方の平面形は円形を呈すると考えられる。

直径は約46cm、深さは19cmを測る。529に示すTK47－73からTK216型式の杯蓋が出土している。

溝

4－62溝（図226・265・328、図版61－3・4）

4－62溝は、北で西へ約17°振れる南北溝である。延長は約20mを検出しており、南と北へさらに延びる。幅は56cm、深さは20cmを測り、溝底の標高は北端が27.16m、南端が27.18mとわずかではあるが南へ低くなっている。

埋土は3層に分層でき、上層が細礫を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト、中層が直径3cm以下の基盤層のブロックと細礫を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト、下層が黄褐色粘質シルトである。溝内からは、530に示すMT－15型式の杯と甌が出土している。

10－95溝（図226・266・328・329、図版72・83・61－5・6）

10－95溝は、竪穴建物7の西側に位置する南北溝である。遺構の重複から、4－90落ち込みよりも新しい遺構である。規模は、幅70cm、深さ42cm、延長は10.3mを測る。北・南端では比高差はみられない。

埋土は、上半が黒褐色系の微砂から細砂、下半は基盤層のブロックを多く含む粘質シルトで、上半から多くの遺物が出土している。なお、溝底には水流による堆積はみられない。

溝内からはまとめて遺物が出土しており、鍛冶関連遺物も多く出土している。出土遺物を、532から547に示す。

532はTK－208型式の須恵器杯蓋、533・534・535はTK－10型式の杯蓋・杯、536から538は須恵器脚付壺の脚部・提瓶・甕体部、539から541は土師器鉢・甕である。542から544は製塩土器であるが、図化できない細片も含めると10個体前後は出土している。鍛冶関連遺物として545から547の鞆の羽口がある。

この他、鋳滓が多数出土することから、土壤の水浄選別を行ったところ、鍛造剥片や粒状滓が出土した。また水選では、548から575の滑石製白玉、576・577の滑石製有孔円盤、578の滑石製の剣形石製品や579の滑石製勾玉石製品が発見された。

鍛造剥片や粒状滓・鞆の羽口・鋳滓などの出土遺物から、周辺の住居址では、小鍛冶を行っていたことが考えられる。出土遺物から、6世紀中頃以降に考えられる溝である。

17-1溝（図226・329）

17－1溝は、谷1への落ち肩に並行して掘削されている。検出長10m、幅73cm、深さ40cmを測る。

溝内から、580・581に示すTK－10型式の杯蓋、582の土師器鉢が出土している。

17－8溝（図226・329）

17－8溝は、検出長5.5m、幅18cm、深さ3cmを測る。溝内からは、583に示す須恵器壺口縁部が出土している。

17－150溝（図329・338、図版61－7）

17－150溝は、検出長2.8m、幅は断面位置で1.08m、深さ18cmを測る。584・767に示すMT－85型式とTK－209型式の杯が出土している。

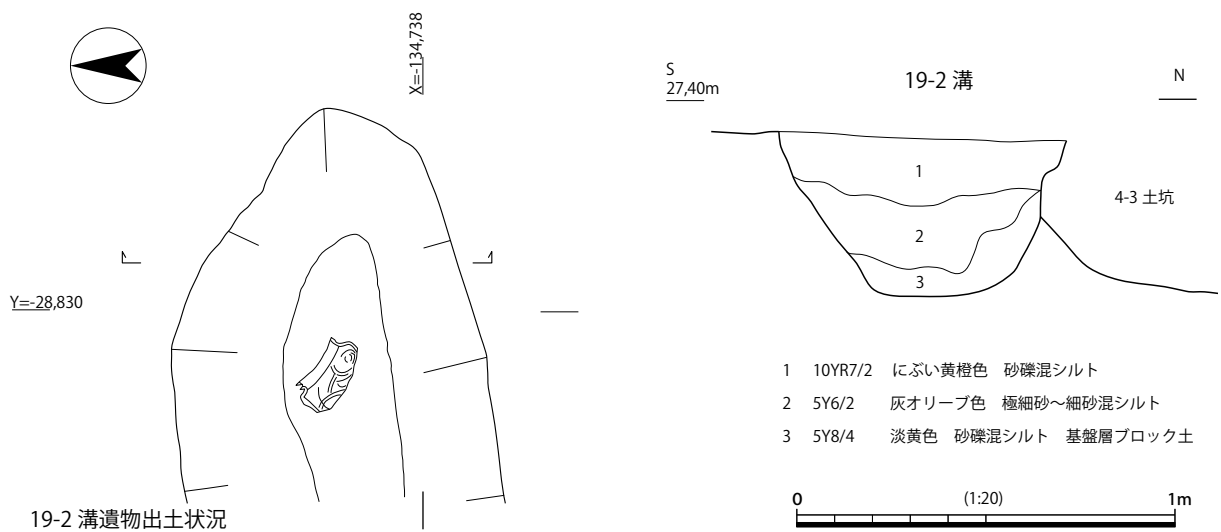
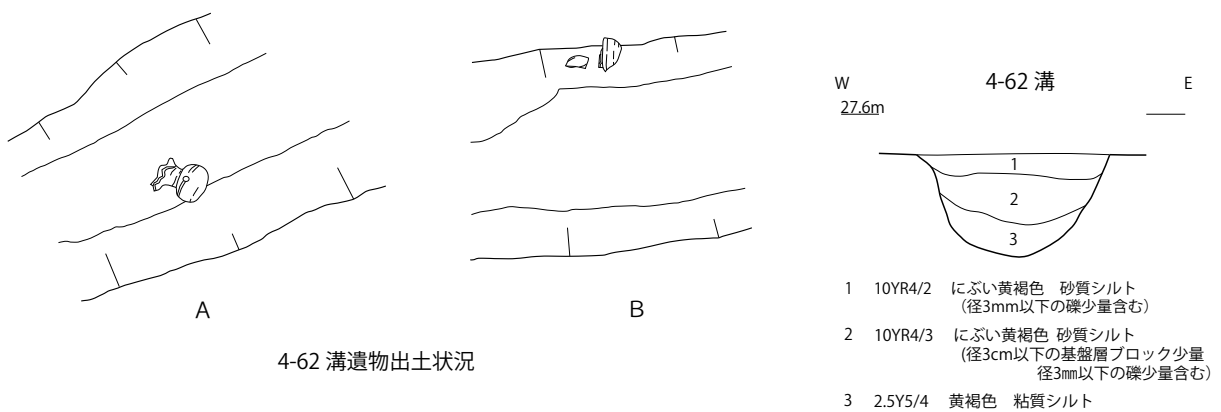
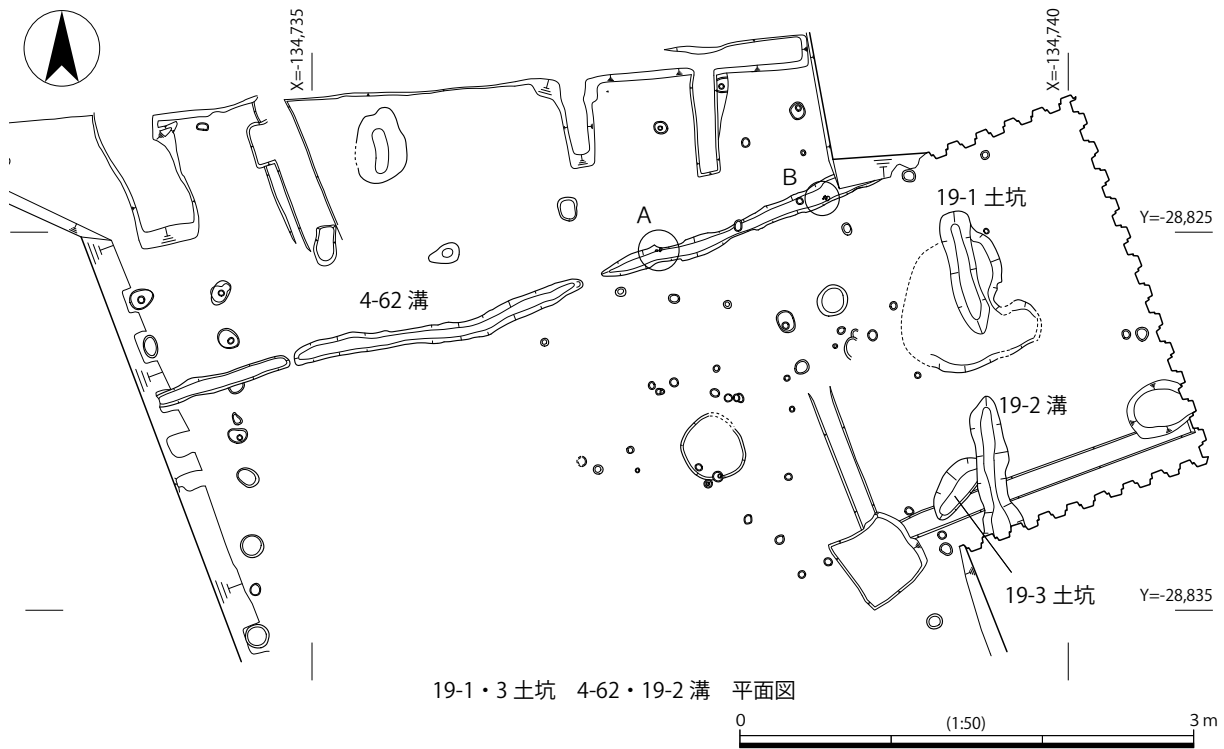


図 265 19-1・3 土坑 4-62 溝 19-2 溝 平・断面図

落ち込み

10-90 落ち込み (図 226・266・329、図版 72)

10-90 落ち込みは、不定形の浅い遺構で、重複関係から 10-95 溝に先行するが、埋土の状況から考えるとさほど時期差はないように感じられる。埋土は、上層が粗砂を含む暗褐色細砂、下層が基盤層のブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルトである。

遺構内からは、598 の T K-47 型式の杯蓋、599 の O N-46 型式の高杯蓋など時期の古い遺物が出土しているが、600 に示す製塩土器や 601 の轆の羽口が出土するなど、10-95 溝の出土遺物の構成と類似している。

平坦面 2

竪穴建物

竪穴建物 15 (図 267・268)

竪穴建物 15 は、上部が完全に削平されており、主柱穴のみ検出できた竪穴建物である。検出した主柱穴は、21-9 柱穴・21-10 柱穴・21-15 柱穴・21-16 柱穴である。

柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が 30 cm 前後、深さは 16 から 28 cm を測る。

いずれの柱穴にも、直径 13 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、主として粗砂を含むオリーブ褐色細砂もしくは砂質シルトで、基盤層のブロックを含む。

柵

柵 1 (図 267・269)

柵 1 は、4 間分を検出しており、北で東へ約 34° 振れる。周辺には、伴う建物は検出していない。延長寸法は 6 m で、柱間寸法は 1.3 から 1.8 m と不揃いである。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈し直径は約 60 cm 前後を測る。深さは、15 から 40 cm で掘方底面は、8-18 柱穴が 16 cm 他より深いものの、

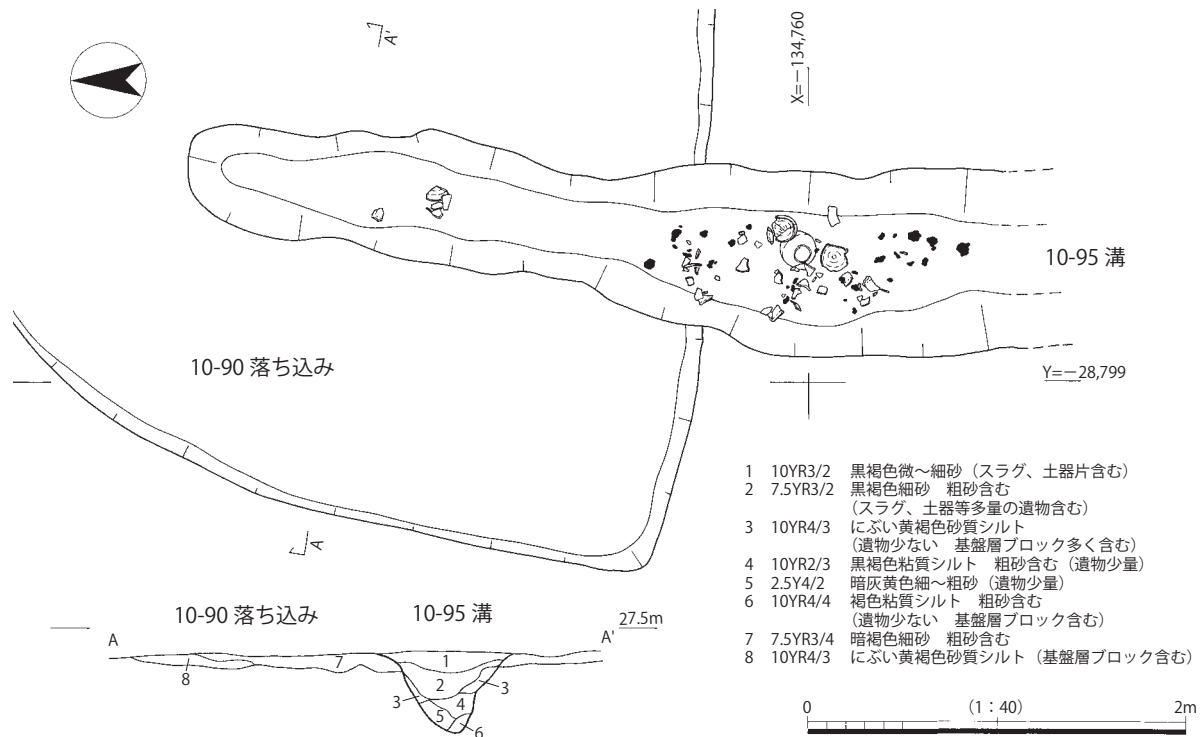


図 266 10-95 溝 平・断面図

標高 26.2 m 前後で揃う。柱痕跡は全ての柱穴にみられる。掘方埋土は、褐灰色系の砂質シルトを主とする。出土遺物には、古墳時代と考えられる須恵器・土師器の破片があるが図化できるものはない。

ピット

8-44ピット (図 267・330)

8-44ピットは、掘方の平面形が楕円形を呈し、長径 36 cm、短径 29 cm、深さ 24 cm を測る。スラッグと共に、624 に示す T K-10 型式の杯が出土している。

21-2溝 (図 267・330)

21-2溝は、南北方向の溝で検出長 2.2 m、幅 97 cm、深さ 28 cm を測る。625 に示す 5 世紀後半の須恵器杯蓋が出土している。

落ち込み

21-18落ち込み (図 267・330、図版 73)

21-18落ち込みは、調査区端で検出しているため全体は、明らかではないが、南から北へ向かって緩やかに落ち込む遺構である。埋土上部から、626 に示す M T-15 型式の杯が出土している。

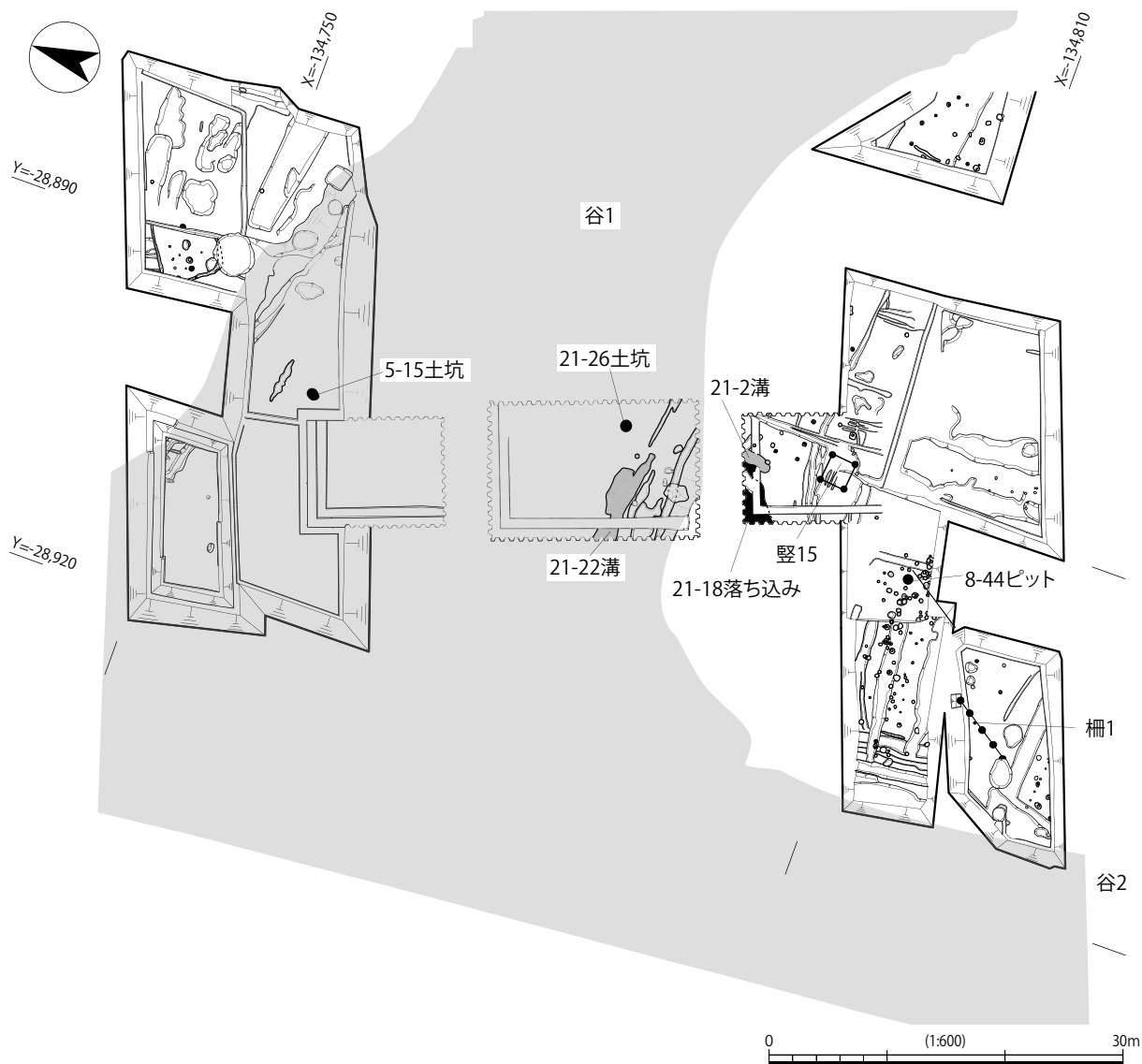
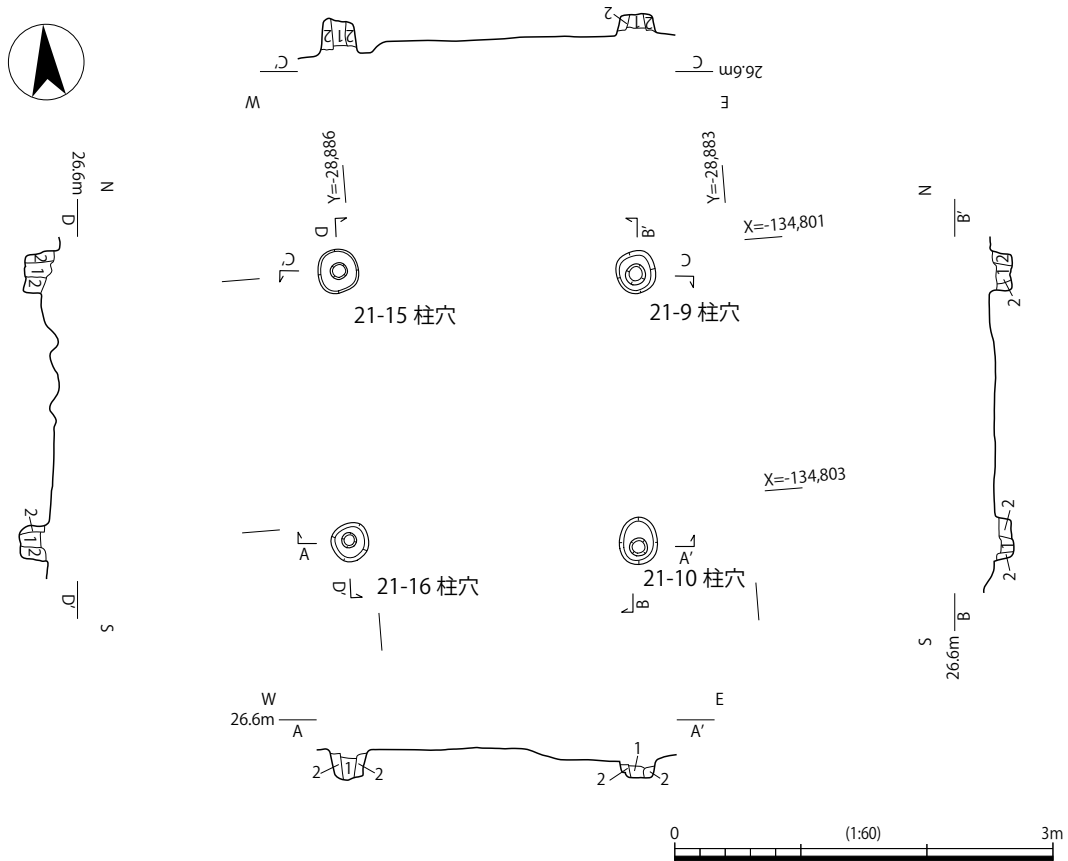
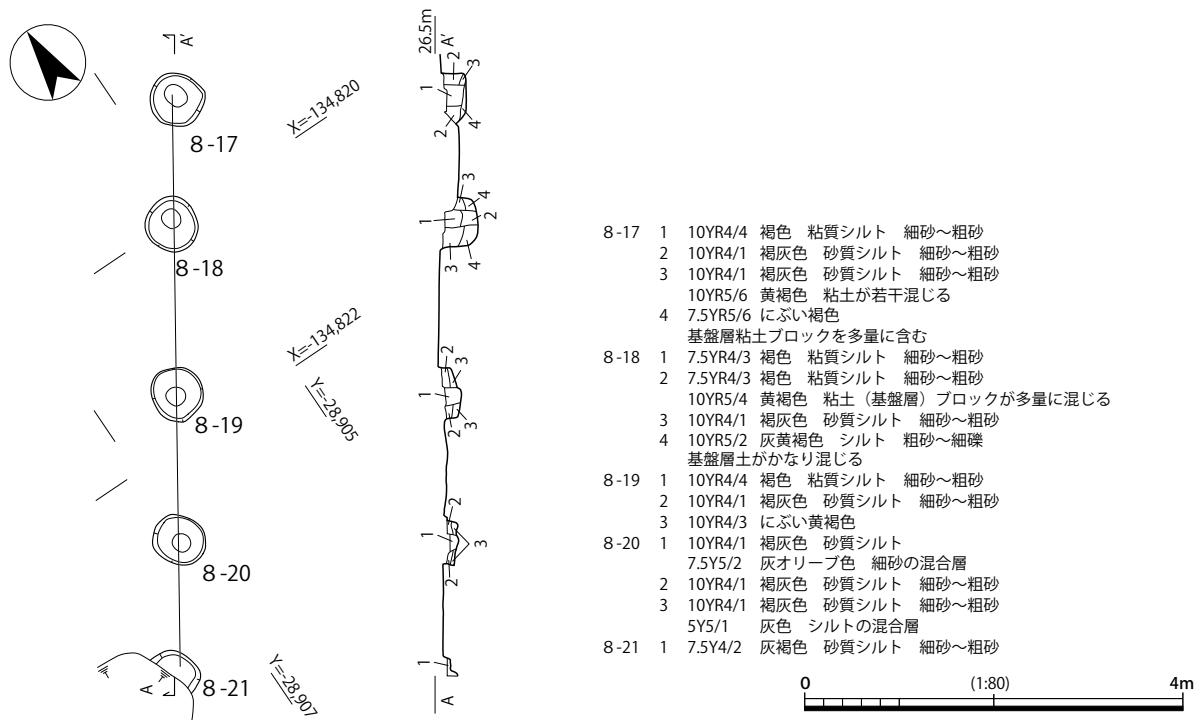


図 267 第 6 面検出 4 a 層帰属遺構配置図 (平坦面 2 古代～古墳時代)



- | | | | | | | | | | |
|-------|---|---------|--------------|-----------------|-------|---|---------|------------|--------------|
| 21-9 | 1 | 2.5Y5/3 | 黄褐色 砂質シルト | 微～細砂を含む | 21-10 | 1 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 砂質シルト | 微～粗砂を含む |
| | 2 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 砂質シルト | 微～細砂を含む 粗砂を少量含む | | 2 | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色 細砂 | 粗砂 基盤層を多量に含む |
| 21-15 | 1 | 5Y4/3 | オリーブ褐色 細砂 | 少量の粗砂を含む | 21-16 | 1 | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色 細砂 | 中～粗砂を含む |
| | 2 | 5Y4/4 | オリーブ褐色 細砂 | 少量の粗砂 基盤層を含む | | 2 | 2.5Y5/3 | 黄褐色 細砂 | 粗砂 基盤層を含む |

図 268 縦穴建物 15 平・断面図



- | | | | | |
|------|---|----------|-----------------|-------------|
| 8-17 | 1 | 10YR4/4 | 褐色 粘質シルト | 細砂～粗砂 |
| | 2 | 10YR4/1 | 褐灰色 砂質シルト | 細砂～粗砂 |
| | 3 | 10YR4/1 | 褐灰色 砂質シルト | 細砂～粗砂 |
| | | 10YR5/6 | 黄褐色 粘土が若干混じる | |
| | 4 | 7.5YR5/6 | にぶい褐色 | |
| | | | 基盤層粘土ブロックを多量に含む | |
| 8-18 | 1 | 7.5YR4/3 | 褐色 粘質シルト | 細砂～粗砂 |
| | 2 | 7.5YR4/3 | 褐色 粘質シルト | 細砂～粗砂 |
| | | 10YR5/4 | 黄褐色 粘土（基盤層） | ブロックが多量に混じる |
| | 3 | 10YR4/1 | 褐灰色 砂質シルト | 細砂～粗砂 |
| | 4 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 シルト | 粗砂～細礫 |
| | | | 基盤層土がかなり混じる | |
| 8-19 | 1 | 10YR4/4 | 褐色 粘質シルト | 細砂～粗砂 |
| | 2 | 10YR4/1 | 褐灰色 砂質シルト | 細砂～粗砂 |
| | 3 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | |
| 8-20 | 1 | 10YR4/1 | 褐灰色 砂質シルト | |
| | | 7.5Y5/2 | 灰オリーブ色 細砂の混合層 | |
| | 2 | 10YR4/1 | 褐灰色 砂質シルト | 細砂～粗砂 |
| | 3 | 10YR4/1 | 褐灰色 砂質シルト | 細砂～粗砂 |
| | | 5Y5/1 | 灰色 シルトの混合層 | |
| 8-21 | 1 | 7.5Y4/2 | 灰褐色 砂質シルト | 細砂～粗砂 |

図 269 柵 1 平・断面図

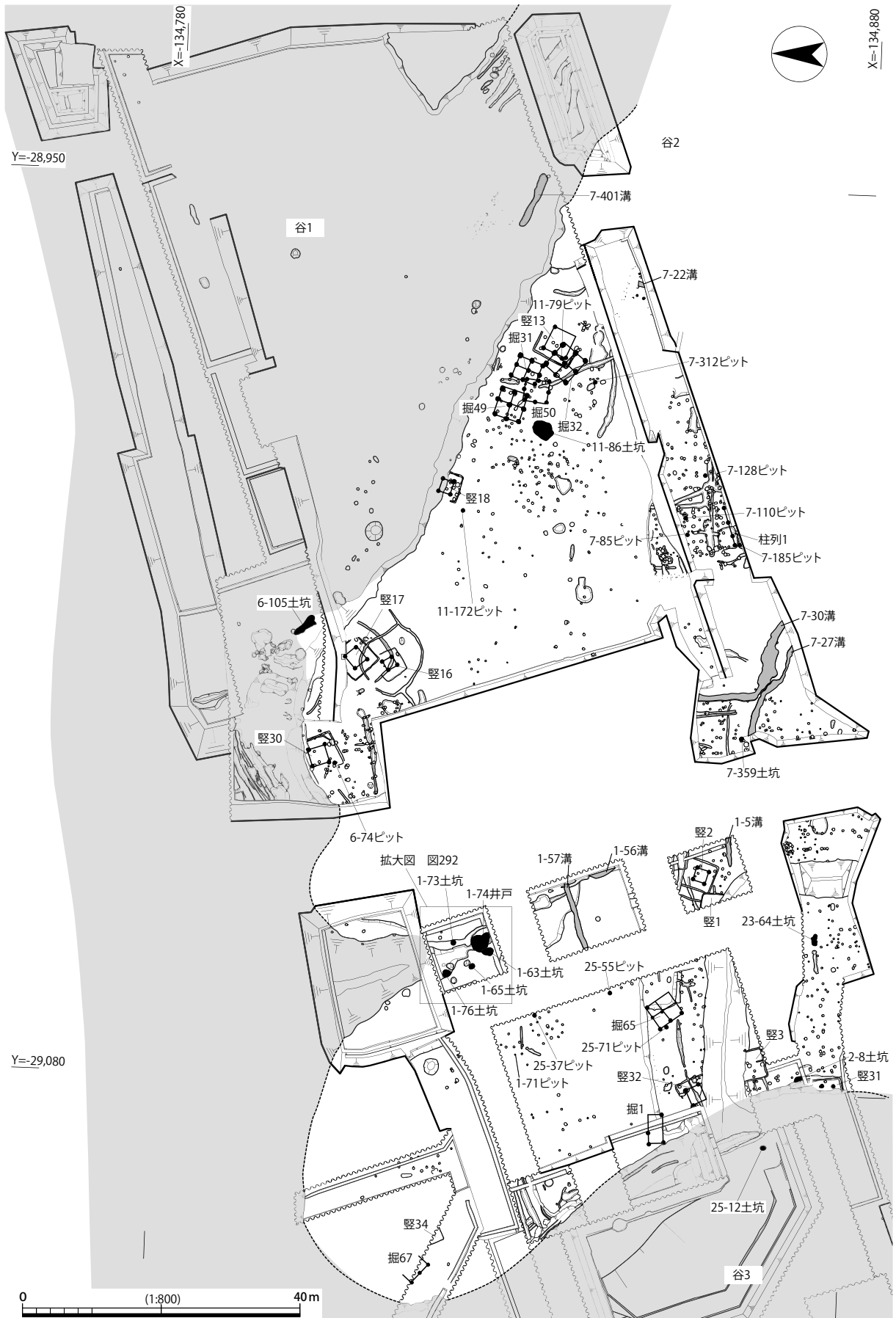


図 270 第 6 面検出 4 a 層帰属遺構配置図 (平坦面 3 古代～古墳時代)

平坦面 3

竪穴建物

竪穴建物 1 (図 270・271・331、図版 45-1)

竪穴建物 1 は、調査区端で検出しているため全体は不明であるが、方形の竪穴建物である。重複関係から竪穴建物 2 よりも新しい建物である。規模は東辺の検出長が 3 m、北辺の検出長は 2.1 m を測る。

深さは、検出面から 8 cm である。土器片や焼土塊を含む灰黄褐色粗砂・シルト混じり極細砂と黒褐色粗砂混じりシルトの埋土を除去した面で壁溝を検出している。幅は約 13 cm で、深さは 4 cm を測る。

埋土は、灰黄褐色中砂混じりシルトである。支柱穴は検出していない。竪穴建物埋土中に、焼土塊はみられるが、カマドは検出していない。

竪穴建物埋土中から、土師器甕や高杯片がまとめて出土しているが、図化できたのは 629 の土師器高杯の脚部のみである。出土遺物から 5 世紀前半から中頃に考えられる竪穴建物である。

竪穴建物 2 (図 270・272、図版 45-2)

竪穴建物 2 は、壁溝と支柱穴のみ検出できた方形の竪穴建物で、北辺は溝によって失われている。壁溝の重複から、竪穴建物 1 に先行する竪穴建物である。壁溝から見ると、建物の平面規模は南北検出長 4.2 m、東西長 4.35 m を測る。壁溝は幅 28 cm、深さ 5 cm で、埋土はにぶい黄褐色極細砂混じりである。

支柱穴は、1-24 柱穴・1-26 柱穴・1-29 柱穴・1-31 柱穴で、竪穴部内のやや南側に偏る。

柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が 23 から 35 cm、深さは 26 から 35 cm を測る。全ての柱穴に直径約 10 cm の柱痕跡がみられる。掘方埋土は黄褐色系の粗砂から細礫シルト混じりである。出土遺物には、図化はできなかったが、初期須恵器甕片の他、土師器壺・甕片が出土している。重複関係と出土遺物から、5 世紀前半から中頃以前に考えられる竪穴建物である。

竪穴建物 3 (図 270・273・331、図版 83・46・47)

竪穴建物 3 は、近世の溝で約 3 分の 1 が削平されている方形の竪穴建物で、西辺の壁溝からは谷 3 へ向かって排水溝が延びている。平面規模は、東西長が 4.45 m、南北長は検出長で 3.4 m、検出面か

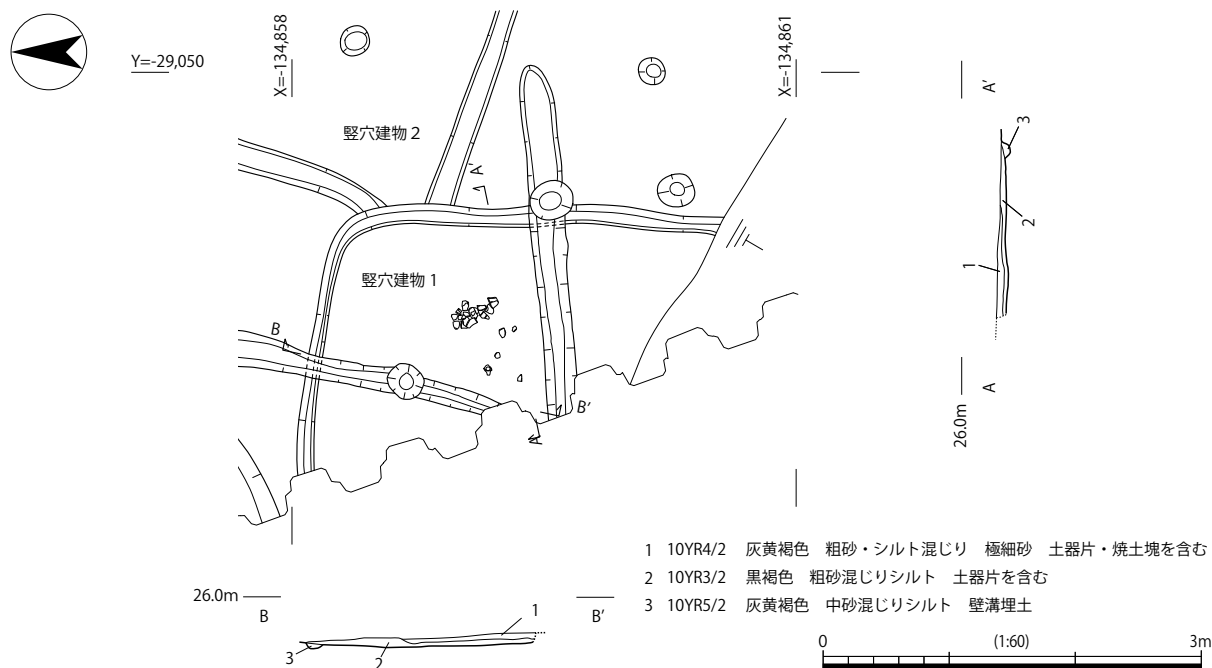


図 271 竪穴建物 1 平・断面図

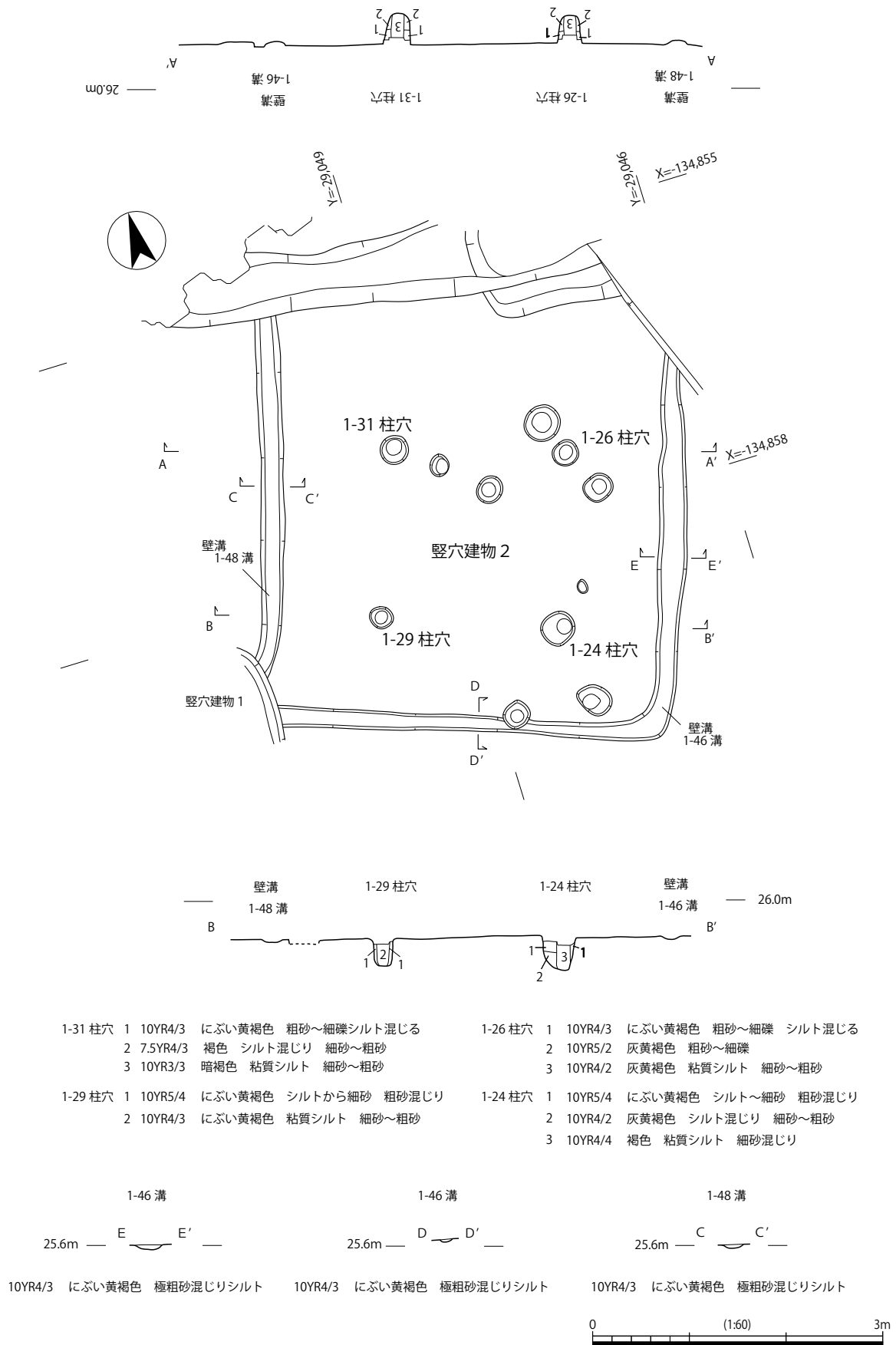


図 272 竪穴建物 2 平・断面図

ら壁溝検出面までの深さは 23 cm である。竪穴建物埋土は、大きく黄橙色から黄褐色系の細砂混じりシルトで炭化物や焼土塊・土器を含む。炭化物・焼土塊や土器は、25 - 58 炉・25 - 66 炉・22 - 65 炉周辺にまとまって出土している。

25 - 58 炉は、平面形が円形を呈し、直径 35 cm を測る。埋土上層の土器や炭化物が入る灰褐色シルトを除去すると炭化物層がみられ、その下面は被熱し赤色を呈している。また、その下部には深さ 50 cm の掘込みがあり、灰や炭が混じる中砂から細砂が混じるシルトで埋められている。おそらく炉の下部構造と考えられる。

埋土中からは、634 に示す小型の丸底壺の体部、635 複合口縁壺の口縁部、636 甕の体部上半から口縁部が出土している他、鉍滓が出土している。また、土壌を水選したところ、土器細片と共に鍛造剥片と粒状滓が数点ではあるが出土している。出土遺物や構造から鍛冶炉と考えられる。

25 - 65 炉の平面形は、不整楕円形を呈し、竪穴の壁面に取り付くようにして壁溝の上に造られている。長軸は 74 cm、短軸は 70 cm を測る。炉体は、砂混じりのシルト層を 4 層積み重ねて造られており、床面からの高さは 10 cm を測る。炉床部分は、盛り上げた部分から 4 cm ほど窪んでおり、被熱により赤変している。その上面には、炭化物の薄層が見られその上には焼土ブロックの層が堆積している。

層中からは鉍滓や土師器高杯などの土師器細片と共に、鍛造剥片と粒状滓が出土している。出土遺物から鍛冶炉と考えられる。

25 - 66 炉は、25 - 58 炉に接するように造られており、遺構の重複から 25 - 58 炉→25 - 66 炉の順で造られたと考えられる。平面形は円形を呈し、直径は 33 cm で床面からの深さは 5 cm を測る。

底面は被熱による赤変が認められる。埋土は、炭化物混じりのシルトである。出土遺物はない。

25 - 69 土坑は、25 - 65 炉を除去して検出した遺構で、壁溝に取り付くように造られており、ほぼ円形の一部を切ったような平面形を呈する。直径は 50 cm で、深さは 3 cm で非常に浅く焼土が少量入るのみである。25 - 65 炉の構築に関係する、事前作業の遺構の可能性も考えられる。

25 - 68 溝は、25 - 69 土坑と同様に 25 - 65 炉を除去して検出した遺構で、幅 10 cm、延長 1 m、深さ 3 cm を測る。壁溝に取り付く溝であることから、25 - 65 炉に関連する遺構で、水抜きか、湿気抜きのための遺構である可能性が考えられる。

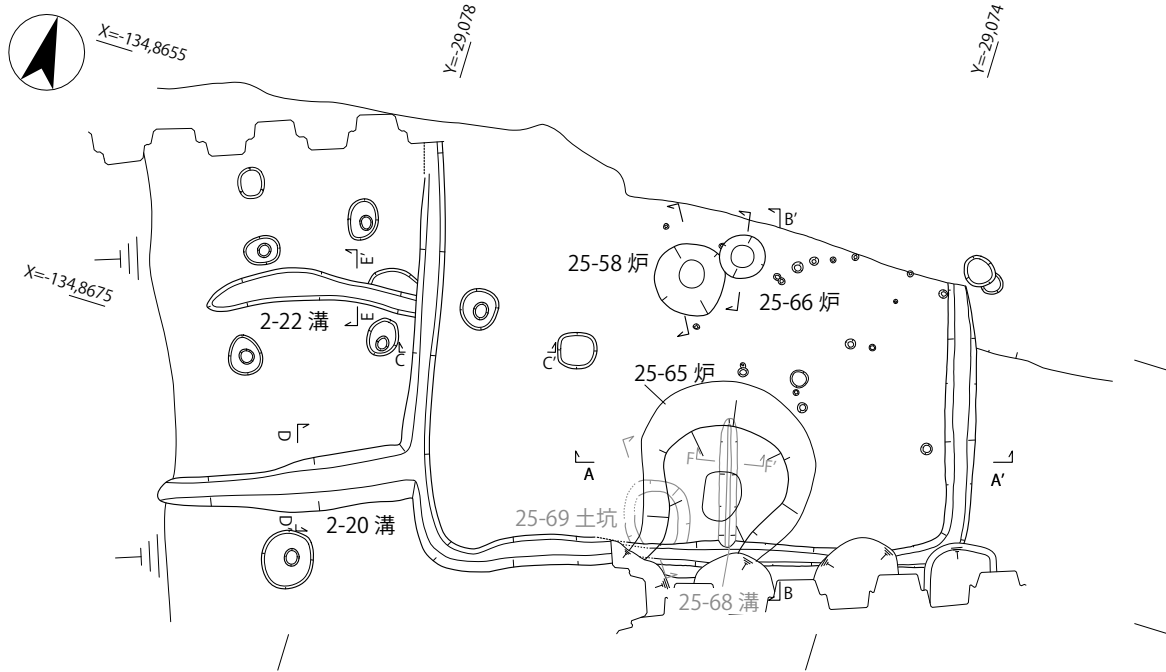
壁溝は幅 25 cm、深さ 8 cm を測る。埋土は基盤層のブロックが入る黄色シルトである。基盤層ブロックが入ることから、掘削後に埋められた可能性が考えられる。

また、西辺の壁溝からは谷 3 へ向かって延びる 2 - 22 溝と 2 - 20 溝の排水溝を検出している。

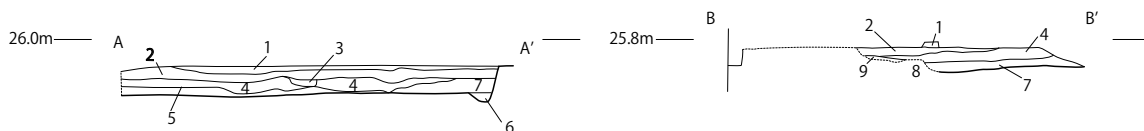
2 - 22 溝は、延長 1.2 m、幅 15 cm から 20 cm、深さ 5 cm を測る。2 - 20 溝は、延長 2 m、幅 23 cm から 45 cm、深さ 26 cm を測る。断面に円形の粘土がみられ木か筒状のものを溝内に埋めていたことも考えられる。2 - 22 溝は壁溝と若干埋土が異なり、2 - 20 溝は類似していたため、2 - 22 溝は先後関係を表すように図面に示している。埋土の違いは、2 - 22 溝と 2 - 20 溝の時期差を示し、排水溝としての造り替えを示すと考えられる。支柱穴は検出していない。

竪穴の埋土内からは、630 から 633・637 から 651 の遺物が出土している。630・631・632 は土師器高杯で、いずれも 5 世紀中頃に考えられる。633 は土師器甕である。651 はサヌカイト製石鏃である。

この他、土壌の洗浄により、637 から 650 に示す滑石製白玉が出土している。また、図化はしていないが、鉍滓や鍛造剥片、粒状滓、サヌカイト剥片が出土している。出土遺物や検出した鍛冶炉から、小鍛冶を行う竪穴建物であったと考えられる時期は、出土遺物から 5 世紀中頃以降に考えられる。

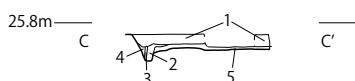


竪穴建物 3



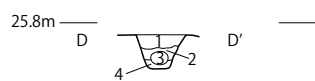
- | | | | | | | | |
|---|----------|--------|--------------------------------------|---|---------|------|-------------------|
| 1 | 10YR6/4 | にぶい黄橙色 | 細砂多く含むシルト (中砂少し含む) | 5 | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトに |
| 2 | 10YR6/3 | にぶい黄橙色 | 細砂混シルト | | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | シルトブロックを含む (炭片含む) |
| | 10YR7/6 | 明黄褐色 | シルトがブロック状に混じる | 6 | 2.5Y8/6 | 黄色 | シルト・基盤層のブロック入る |
| 3 | 7.5YR6/3 | にぶい褐色 | シルト | 7 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色 | シルト (炭小片含む) |
| | 2.5YR5/6 | 明赤褐色 | 焼土塊多く含む | 8 | 5YR6/8 | 橙色 | 焼土 |
| 4 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 細砂混シルト | 9 | 10YR2/1 | 黒色 | 炭層 |
| | 10YR7/6 | 明黄褐色 | シルトブロックが混じる 炭の薄層部分的にあり 全体的に焼土小塊を少し含む | | | | |

竪穴建物 3 東西セクション



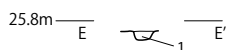
- | | | | |
|---|----------|--------|-----------------------------------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 細砂混シルト 土器片・炭化物多く入る 径2~3の褐灰色ブロック入る |
| 2 | 2.5YR5/4 | オリーブ褐色 | 極粗砂 中砂混じりシルト 炭化物を含む |
| | 10YR7/4 | にぶい橙色 | シルト (基盤層) 混じる |
| 3 | 10YR3/1 | 黒褐色 | 極粗砂 中砂混じりシルト |
| 4 | 10YR4/1 | 褐灰色 | 中砂混じりシルト |
| 5 | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 極粗砂 シルト混じり極細砂 |
| | 5Y5/3 | 灰オリーブ色 | 極粗砂混じりシルトブロック (径1~5cm) を含む 整地層貼床 |

2-20 溝



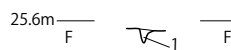
- | | | | |
|---|---------|------|-------------|
| 1 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粗砂・中砂混じりシルト |
| 2 | 10BG4/1 | 暗青灰色 | 中砂混じりシルト |
| 3 | 5G4/1 | 暗緑灰色 | シルト |
| 4 | N4/0 | 灰色 | 粗砂 シルト混じり細砂 |

2-22 溝



- | | | | |
|---|---------|------|--------------|
| 1 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | シルト 径3mm細礫含む |
|---|---------|------|--------------|

25-68 溝



- | | | | |
|---|---------|-----|-------------------------------|
| 1 | 10YR6/1 | 褐灰色 | 細砂混シルトと |
| | 2.5Y7/3 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土 中砂~粗砂粒入る (炭化物入る) |

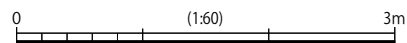
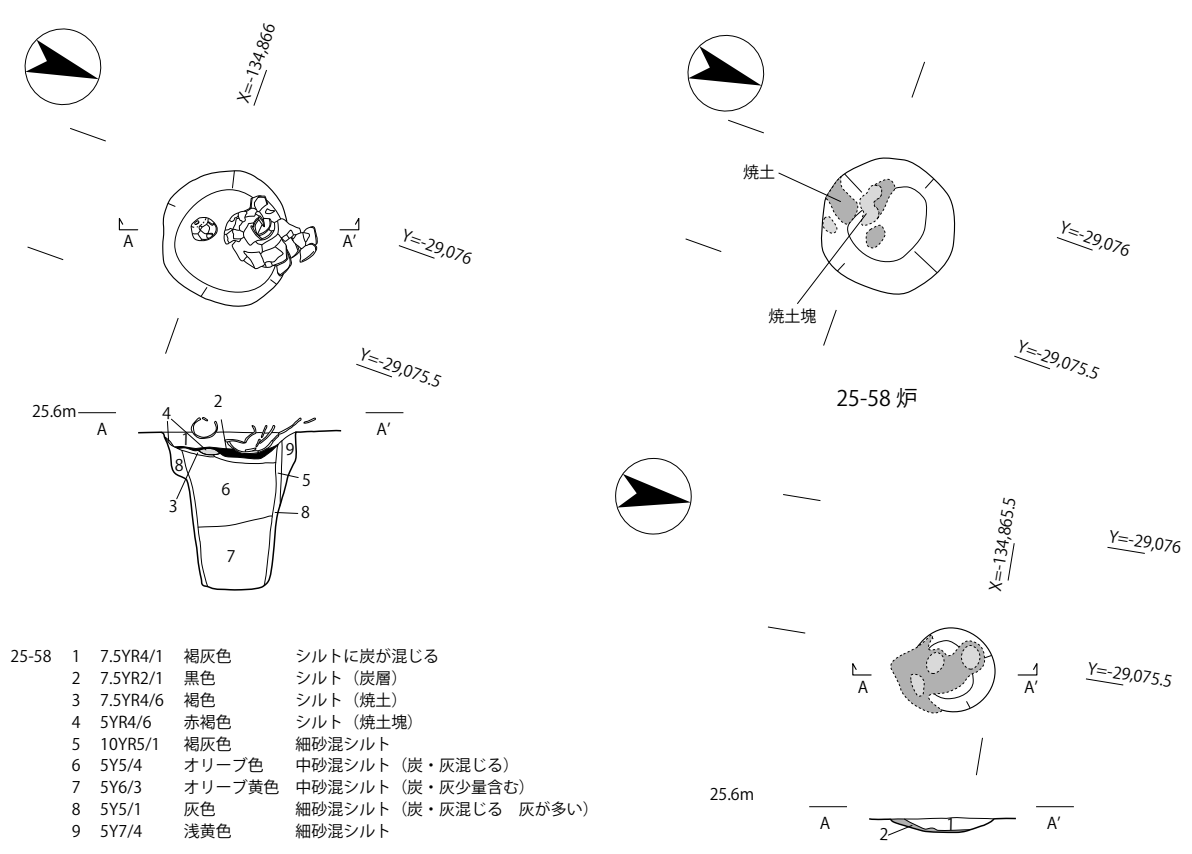


図 273 竪穴建物 3 平・断面図

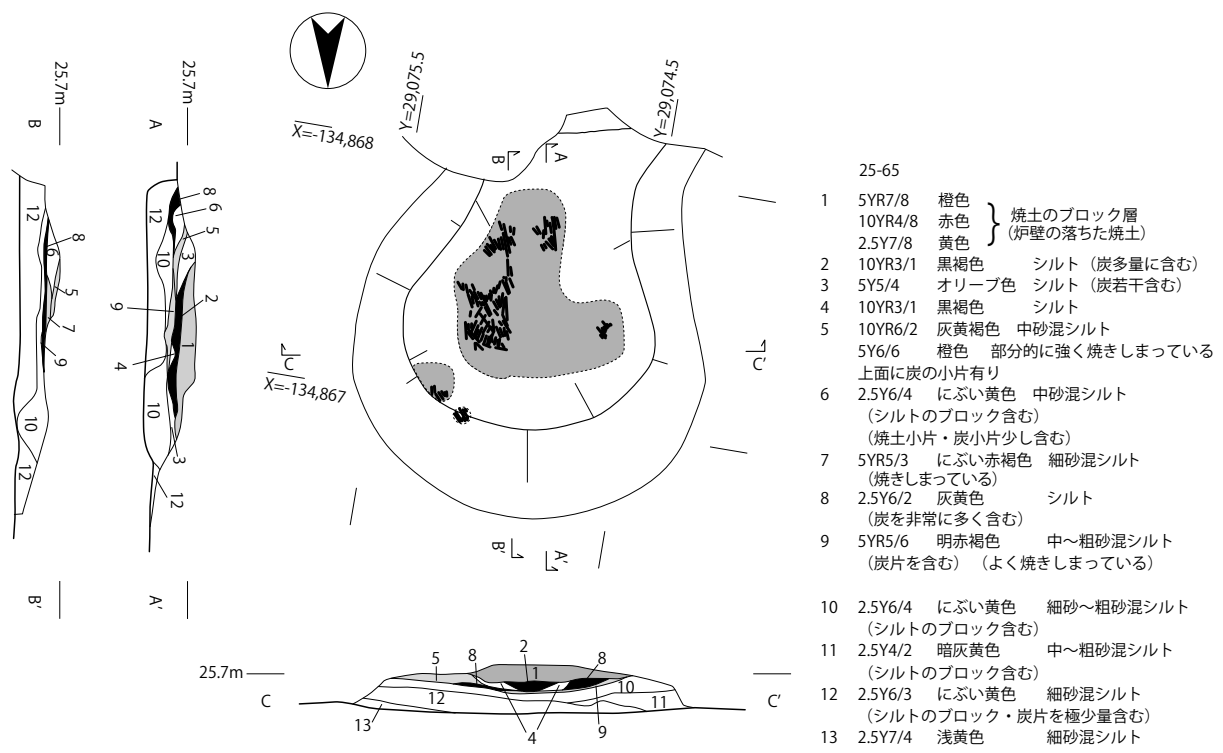


- 25-58
- | | | | |
|---|----------|--------|----------------------|
| 1 | 7.5YR4/1 | 褐灰色 | シルトに炭が混じる |
| 2 | 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト (炭層) |
| 3 | 7.5YR4/6 | 褐色 | シルト (焼土) |
| 4 | 5YR4/6 | 赤褐色 | シルト (焼土塊) |
| 5 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト |
| 6 | 5Y5/4 | オリーブ色 | 中砂混シルト (炭・灰混じる) |
| 7 | 5Y6/3 | オリーブ黄色 | 中砂混シルト (炭・灰少量含む) |
| 8 | 5Y5/1 | 灰色 | 細砂混シルト (炭・灰混じる 灰が多い) |
| 9 | 5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルト |

- 25-66
- | | | | |
|---|---------|--------|--------------|
| 1 | 5YR4/2 | 灰オリーブ色 | シルト (炭・灰混じる) |
| 2 | 10YR4/6 | 赤色 | シルト (焼土) |

25-58 炉

25-66 炉



- 25-65
- | | | | |
|----|---------|--------|--|
| 1 | 5YR7/8 | 橙色 | 焼土のブロック層
(炉壁の落ちた焼土) |
| | 10YR4/8 | 赤色 | |
| | 2.5Y7/8 | 黄色 | |
| 2 | 10YR3/1 | 黒褐色 | シルト (炭多量に含む) |
| 3 | 5Y5/4 | オリーブ色 | シルト (炭若干含む) |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐色 | シルト |
| 5 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 中砂混シルト |
| | 5Y6/6 | 橙色 | 部分的に強く焼きしまっている
上面に炭の小片有り |
| 6 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色 | 中砂混シルト
(シルトのブロック含む)
(焼土小片・炭小片少し含む) |
| 7 | 5YR5/3 | にぶい赤褐色 | 細砂混シルト
(焼きしまっている) |
| 8 | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | シルト
(炭を非常に多く含む) |
| 9 | 5YR5/6 | 明赤褐色 | 中～粗砂混シルト
(炭片を含む) (よく焼きしまっている) |
| 10 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色 | 細砂～粗砂混シルト
(シルトのブロック含む) |
| 11 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 中～粗砂混シルト
(シルトのブロック含む) |
| 12 | 2.5Y6/3 | にぶい黄色 | 細砂混シルト
(シルトのブロック・炭片を極少量含む) |
| 13 | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルト |

25-65 炉

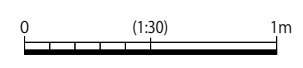


図 274 25 - 58・65・66 炉 平・断面図

竪穴建物 13 (図 270・275、図版 48 - 1 ~ 5)

竪穴建物 13 は、掘立柱建物 32 の柱穴と壁溝の重複から、掘立柱建物 32 に先行する建物である。

上部は大きく削平を受けており、壁溝と主柱穴のみの検出でありかつ、壁溝も全体の二分の一のみであった。検出できた壁溝は西辺 5.6 m、南辺の検出長 3 m、北辺の検出長は 2.3 m を測る。幅は 25 cm、深さは 4 cm である。埋土は淡黄色砂礫含むシルトである。西辺と南辺の一部には、壁溝の底面に平面形が楕円形で深さが 2 から 4 cm を測る小穴を検出している。竪穴建物の壁を立ち上げ、内側から支える杭跡の可能性が考えられる。

主柱穴は、11 - 11 柱穴、11 - 47 柱穴、11 - 141 柱穴を検出しており、残り 1 基は検出できなかった。柱穴の平面形は不整円形を呈し、直径 37 cm から 44 cm、深さ 55 cm から 74 cm と非常に深い。全ての柱穴に直径 10 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は灰色から黄灰色の粗砂から砂礫混じりシルトである。

床面を形成する層から、図化はしていないが初期須恵器の甕体部片や 5 世紀後半と考えられる須恵器高杯脚部片が出土した他、土師器・須恵器片が出土している。出土遺物から、5 世紀後半以降の建物と考えられる。

竪穴建物 16 (図 270・276・277・279・331、図版 73・49 - 1 ~ 5)

竪穴建物 16 は、重複関係から竪穴建物 17 より新しい、外周溝を伴う方形の建物である。竪穴部の規模は、一部削平により失われているものの、一辺 3.4 から 3.5 m で、深さは 12 cm を測る。埋土は、黄褐色中砂から極粗砂が多く入る細砂シルトに褐灰色シルトブロックが混じる。層の上部付近から、652 から 659 に示す土器の他、須恵器・土師器・サヌカイト片がまとめて出土している。

埋土を除去した面で主柱穴と土坑を検出している。壁溝は存在しない。

主柱穴は、11 - 75 柱穴・11 - 76 柱穴・11 - 77 柱穴・11 - 78 柱穴で、やや建物内南東隅へ寄っている。平面形は不整円形を呈し、長径は 35 cm 前後、深さは 38 cm 前後を測る。柱穴には全て直径 12 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、大きく上層が黄褐色の中砂から粗砂が入る細砂シルト、下層が灰黄褐色の中砂混じる細砂シルトである。11 - 75 柱穴からは、658 に示す製塩土器が出土している。

11 - 73 土坑は、南東の壁を一部掘り込んで掘削されており、平面形は楕円形を呈する。長径は 59 cm、短径は 37 cm で、深さは 8 cm を測る。埋土は、上層が炭化物を含む灰黄褐色粗砂混じりシルト、下層が粗砂から極粗砂を微量に含む極粗砂混じりシルトである。土坑内からは、660 に示す 5 世紀後半の須恵器壺口縁と、時期は不明であるが土師器壺片、製塩土器片が出土している。

外周溝である 11 - 70 溝は、竪穴の壁から一番離れている部分で 1.9 m、一番近い部分で 96 cm 離れた位置に掘削されており、やや方形に近い円を描く外周溝の中央には、竪穴部分は位置していない。

また、外周溝には北東と南西へ向かって延びる溝が取り付いており、おそらく北東の谷 1 への排水の目的を持つ溝と考えられる。南西へ向かって延びる溝については不明である。

外周溝の幅は、均一でないが、断面位置で見ると 12 から 50 cm を測る。深さは 8 から 23 cm である。

埋土は、大きく褐色から黄褐色系の中砂から極粗砂を含む砂質シルトである。溝内からは、図化していないが初期須恵器甕体部片の他、土師器壺・高杯片が出土している。竪穴埋土から出土した土器には 652 から 657・659 がある。652 は T K - 208 型式の杯蓋、653 は O N - 46 型式の杯蓋、654・655 は T K - 23 型式の杯蓋、656 は土師器鉢、657 は土師器甕、659 は製塩土器である。出土遺物

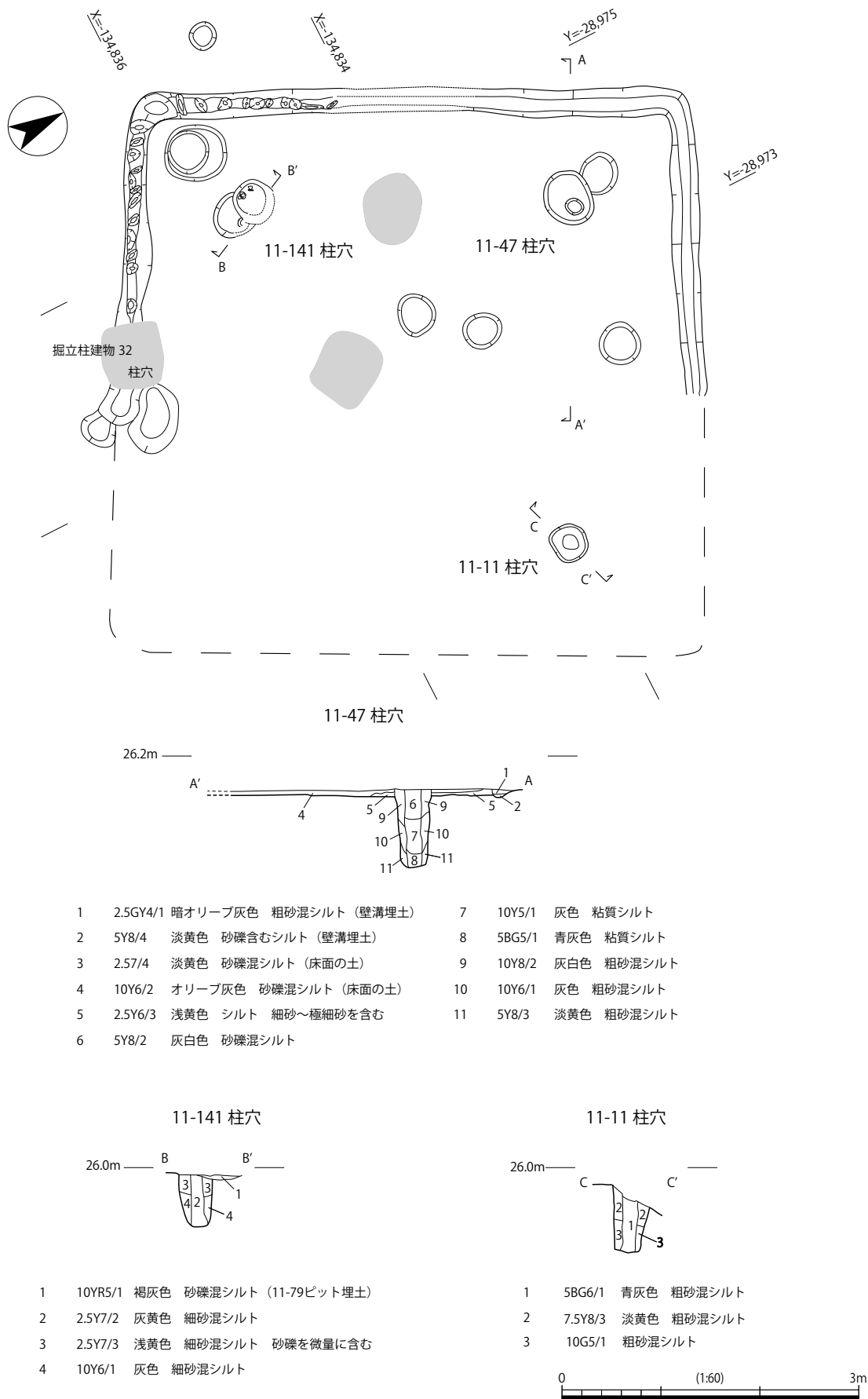


図 275 竪穴建物 13 平・断面図

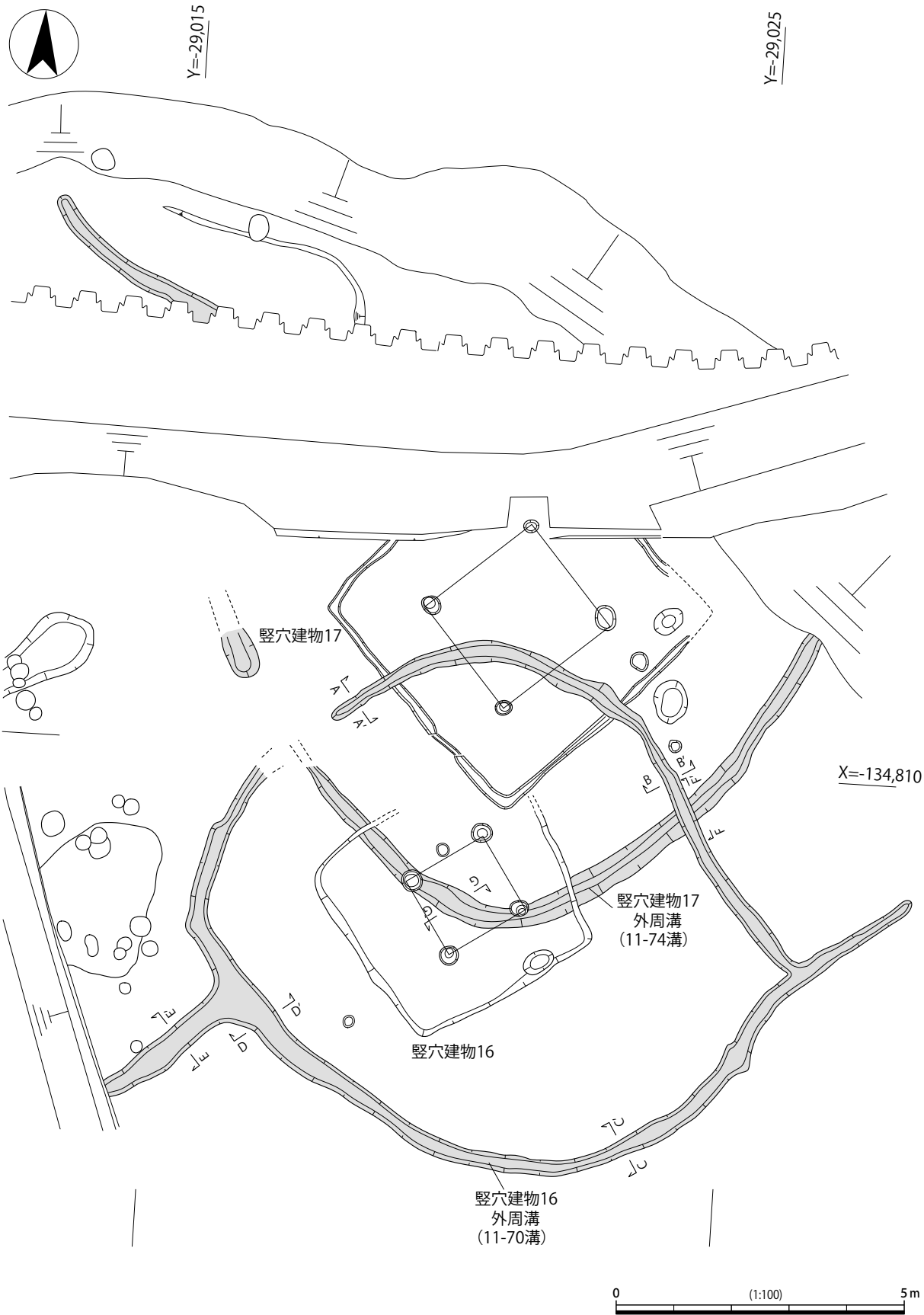
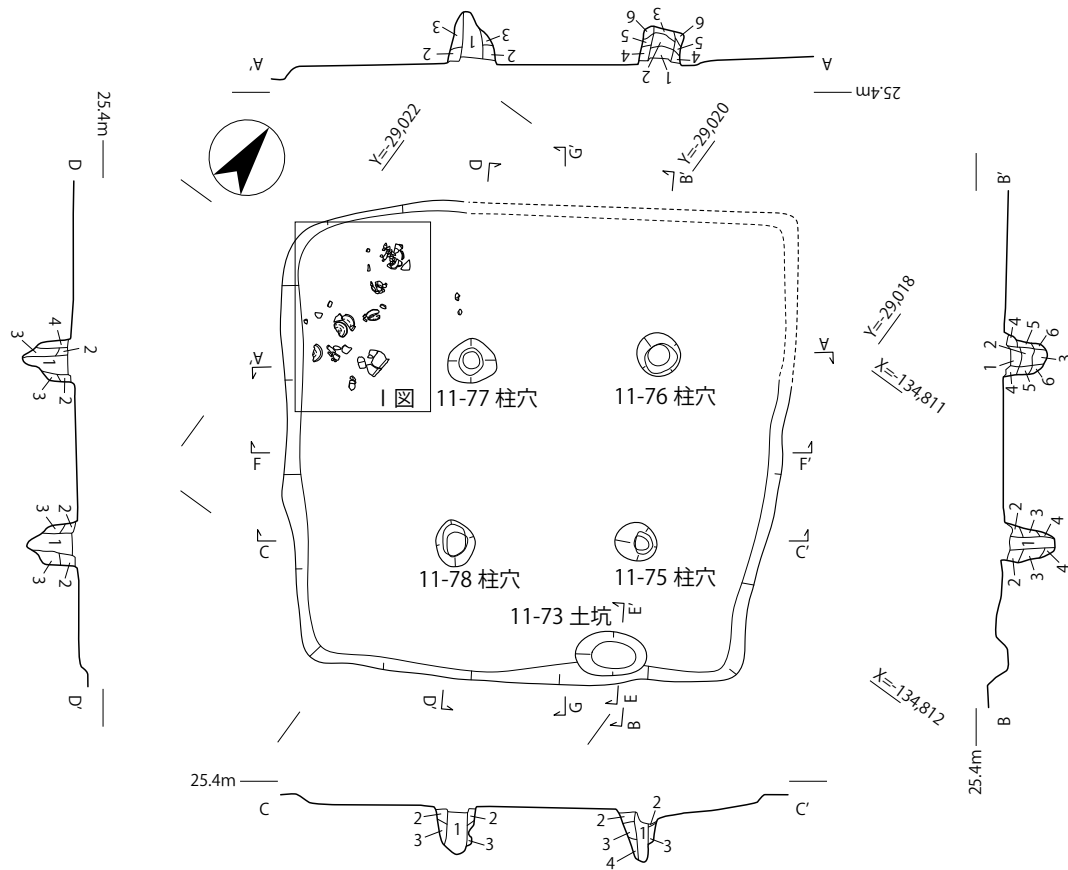
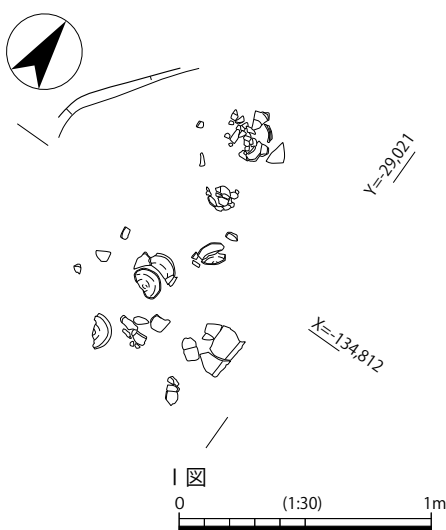
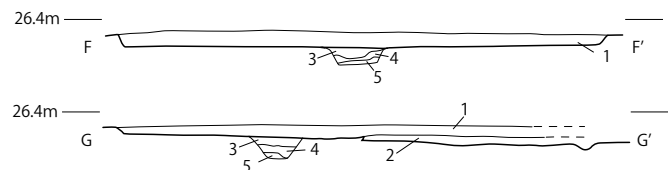


图 276 竪穴建物 16・17 全体平面図



- | | | | | | |
|-------|---|---------|--------|-------------|----------|
| 11-77 | 1 | 10YR7/1 | にぶい黄褐色 | 細砂 | 中砂～粗砂入る |
| | | 5YR5/2 | 灰白色 | シルトブロック混じる | |
| | | 10YR7/6 | 灰褐色 | 細砂シルトブロック入る | |
| | 2 | 10YR7/4 | にぶい黄褐色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂混じる |
| 11-76 | 3 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 細砂シルト | 中砂若干混じる |
| | 4 | 10YR5/3 | 灰黄褐色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂混じる |
| | 1 | 10YR7/4 | にぶい黄褐色 | 細砂シルト | 中砂入る |
| | 2 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂入る |
| | 3 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | シルト | 中砂～粗砂入る |
| | 4 | 10YR7/2 | にぶい黄褐色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂入る |
| | 5 | 10YR7/2 | にぶい黄褐色 | 中砂シルト | |
| | 6 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 中砂～細砂シルト | |

- | | | | | | |
|-------|---|---------|--------|-------------|----------|
| 11-75 | 1 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂入る |
| | 2 | 10YR6/3 | 黄褐色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂混じる |
| | 3 | 10YR6/1 | 褐灰色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂混じる |
| | 4 | 10YR5/2 | 褐灰色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂混じる |
| 11-78 | 1 | 10YR7/1 | にぶい黄褐色 | 細砂 | 中砂～粗砂入る |
| | | 5YR5/2 | 灰白色 | シルトブロック混じる | |
| | | 10YR7/6 | 灰褐色 | 細砂シルトブロック入る | |
| | 2 | 10YR7/4 | にぶい黄褐色 | 細砂シルト | 中砂～粗砂混じる |
| | 3 | 10YR6/2 | 灰黄褐色 | 細砂シルト | 中砂若干混じる |



- | | | | | |
|---|----------|--------|---------|------------------------|
| 1 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細砂シルト | 中砂～極粗砂多く入る |
| | 10YR6/1 | 褐灰色 | シルトブロック | 径2～3cm多く入る |
| | | | | 小礫若干入る 鉄分、マンガン沈着 土器片入る |
| 2 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 細砂シルト | 粗砂～極粗砂多く含む |
| | | | | 基盤層の擾乱を受ける |
| 3 | 2.5YR4/3 | オリーブ褐色 | 粘質土 | (74溝埋土) |
| 4 | 2.5YR5/4 | 黄褐色 | 砂質土 | (74溝埋土) |
| 5 | 2.5YR5/4 | 黄褐色 | 砂質土 | に基盤層の小礫が混じる (74溝埋土) |

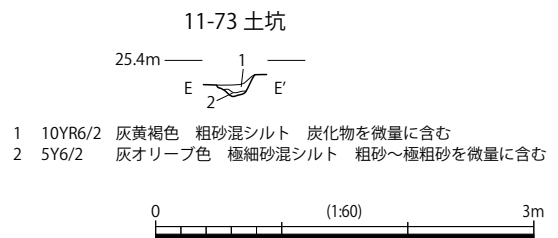
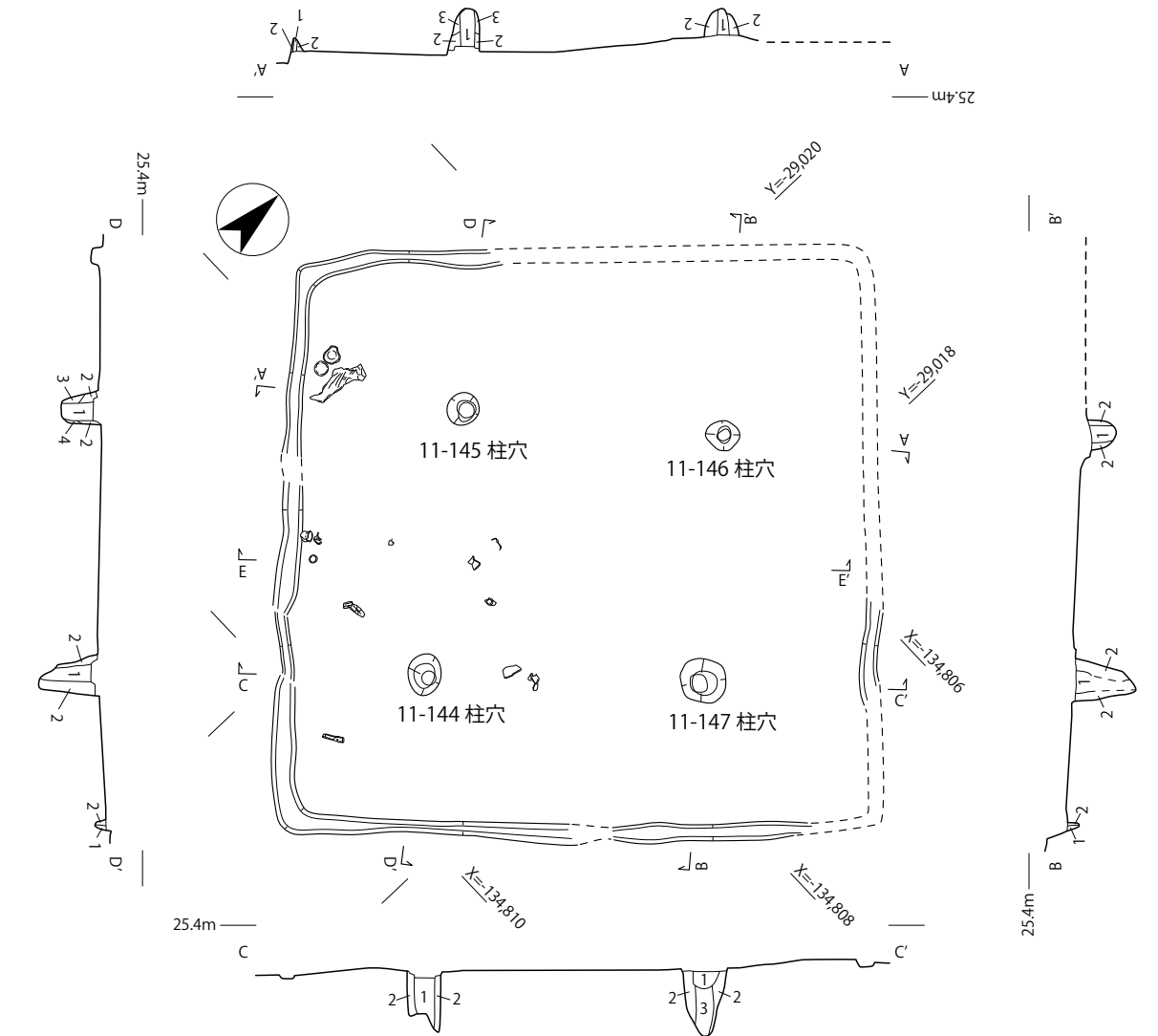
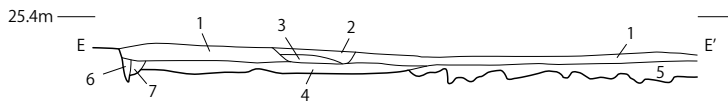


図 277 竪穴建物 16 平・断面図



- | | |
|--|---|
| <p>A-A'壁溝 1 2.5YR6/3 にぶい黄色 シルト 中砂混じりに
2.5YR6/1 黄灰色 シルト ブロック混じる 全体に細礫若干混じる
2 2.5YR6/2 灰黄色 細砂シルト
11-145 1 7.5YR5/1 褐灰色 細砂シルト 粗砂～極粗砂入る
炭化物入る
2 7.5YR7/1 明褐灰色 細砂シルト 粗砂～中砂入る
3 7.5YR7/1 明褐灰色 シルト 粗砂～中砂入る
11-146 1 7.5YR3/1 黒褐色 シルト 中砂混じり
2 2.5YR5/1 褐灰色 中砂シルト 粗砂混じる
11-147 1 N4/0 灰色 細砂シルト 粗砂～極粗砂入る
炭化物入る
2 2.5YR6/3 にぶい黄色 細砂シルト 粗砂～極粗砂入る</p> | <p>B-B'壁溝 1 2.5YR6/3 にぶい黄色 シルト 中砂混じりに
2.5YR6/1 黄灰色 シルト ブロック混じる 全体に小礫若干混じる
7.5YR5/3 にぶい褐色 シルト
2 2.5YR6/2 灰黄色 細砂シルト
11-144 1 2.5YR5/1 黄灰色 細砂シルト 中砂～粗砂含む
2 2.5YR6/3 にぶい黄色 細砂シルト 中砂～粗砂含む
C-C'壁溝 1 2.5YR6/3 にぶい黄色 シルト 中砂混じりに
2.5YR6/1 黄灰色 シルト ブロック混じる 全体に小礫若干混じる
7.5YR5/3 にぶい褐色 シルト
2 2.5YR6/2 灰黄色 細砂シルト</p> |
|--|---|



- 1 10YR3/2 黒褐色 細砂シルトに
10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂シルトブロック 径2～3cm入る
粗砂～小礫入る 土器、土器細片、炭化物入る
- 2 10YR4/4 褐色 細砂シルト 中砂～極粗砂多く含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 細砂シルト 極粗砂若干含む
炭化物若干混じる
- 4 10YR7/3 にぶい黄褐色 極細砂シルト (やや擾乱受ける基盤層)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色 細砂シルト 粗砂混じる 炭化物混じる
- 6 2.5YR6/3 にぶい黄色 シルト 中砂混じりに
2.5YR6/1 黄灰色 シルト ブロック混じる 全体に小礫若干混じる
7.5YR5/3 にぶい褐色 シルト
- 7 2.5YR6/2 灰黄色 細砂シルト

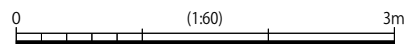


図 278 竪穴建物 17 平・断面図

から 5 世紀後半前後の建物である。

竪穴建物 17 (図 270・276・278・279・331、図版 74・88・50 - 1 ~ 5)

竪穴建物 17 は、竪穴建物 16 に先行する外周溝を伴う方形の竪穴建物である。竪穴の規模は、一部調査区外になるが一辺 4.2 m 以上、深さは 20 cm を測る。埋土は、にぶい黄褐色細砂シルトブロックが混じる黒褐色細砂シルトで、土器片・炭化物も混じる。層の下部、床面を形成するにぶい黄褐色極細砂シルト層のやや上から小型の丸底壺や炭化した材が出土している。床面では、支柱穴と壁際に壁溝を検出している。

支柱穴は、11 - 144 柱穴・11 - 145 柱穴・11 - 146 柱穴・11 - 147 柱穴の 4 基である。柱穴の平面形は、不整円形を呈し、長径 26 から 36 cm、深さは 25 から 48 cm を測る。全ての柱穴には直径 15 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、中砂から粗砂が混じる黄褐色・褐灰色・黄色の細砂シルト・中砂シルトである。11 - 147 柱穴からは、665 に示す土師器高杯杯部が出土している。

壁溝は幅 18 cm、深さ 15 cm を測る。埋土は灰黄褐色細砂シルトである。また、壁溝内には壁内側から支える板材を立てたと考えられる痕跡がみられた。

外周溝である 11 - 74 溝は、幅 34 から 40 cm、深さ 12 から 15 cm を測る。埋土は最上層がオリブ褐色砂質土、下層は黄褐色砂質土である。溝内から、668 に示す土師器壺口縁が出土している他、図化していないが初期須恵器甕体部片、須恵器高杯口縁片、土師器高杯杯部片が出土している。

竪穴埋土から出土した土器には、661 から 664・666・667 がある。661 は T K - 216 型式の壺口縁、662 から 664 は、5 世紀中頃の土師器小型の丸底壺、666 土師器高杯杯部・脚部、669 は鉄製の曲刃鎌である。出土遺物から、5 世紀中頃前後の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 18 (図 270・280・331、図版 51 - 1)

竪穴建物 18 は、谷 1 の肩に位置しているため、中・近世段階削平を受け約半分が失われており、南半部のみ検出できた、方形の竪穴建物である。建物の平面規模は、南辺が 4 m、西辺の検出長が 4.5 m、東辺の検出長は 2.2 m を測る。深さは検出面から壁溝検出面まで 5 cm である。埋土は、砂礫を多量に含む褐灰色極細砂混じりシルトである。埋土中の床面よりやや上から、土師器甕が出土している。埋土を除去すると、一部床面を形成する灰色砂礫混じりシルト層がみられるが、大部分では基盤層上面となっ

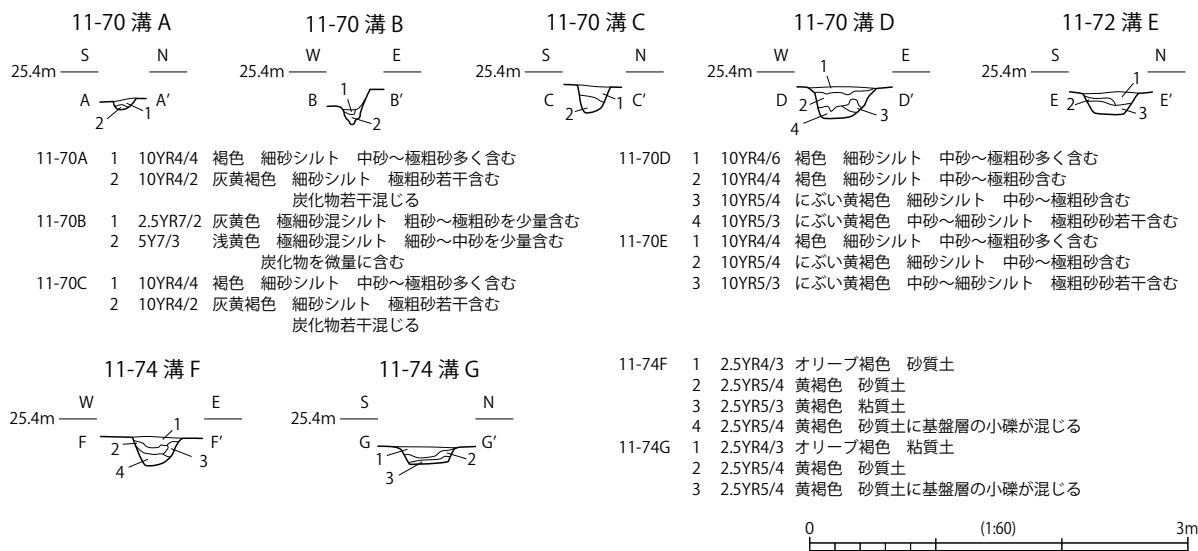


図 279 竪穴建物 16・17 外周溝 断面図

ている。この面で、壁溝と支柱穴を検出している。

支柱穴は 11-133 柱穴、11-134 柱穴、11-135 柱穴、11-136 柱穴である。柱穴の平面形は不整形円形を呈し、長径 25 cm から 58 cm、深さ 20 cm から 49 cm を測る。11-133 柱穴・11-134 柱穴の底面は、1-135 柱穴・11-136 柱穴に比べ 25 cm 程深い。おそらく、谷へ下がる斜面の下側に位置するため、上部部構造をしっかり受け止めるよう、深く掘削した可能性が考えられる。1-135 柱穴・11-136 柱穴には、直径 17 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、灰オリーブ色砂礫混じりシルトである。図化はできなかったが、11-136 柱穴から 5 世紀後半の須恵器杯片が出土している。

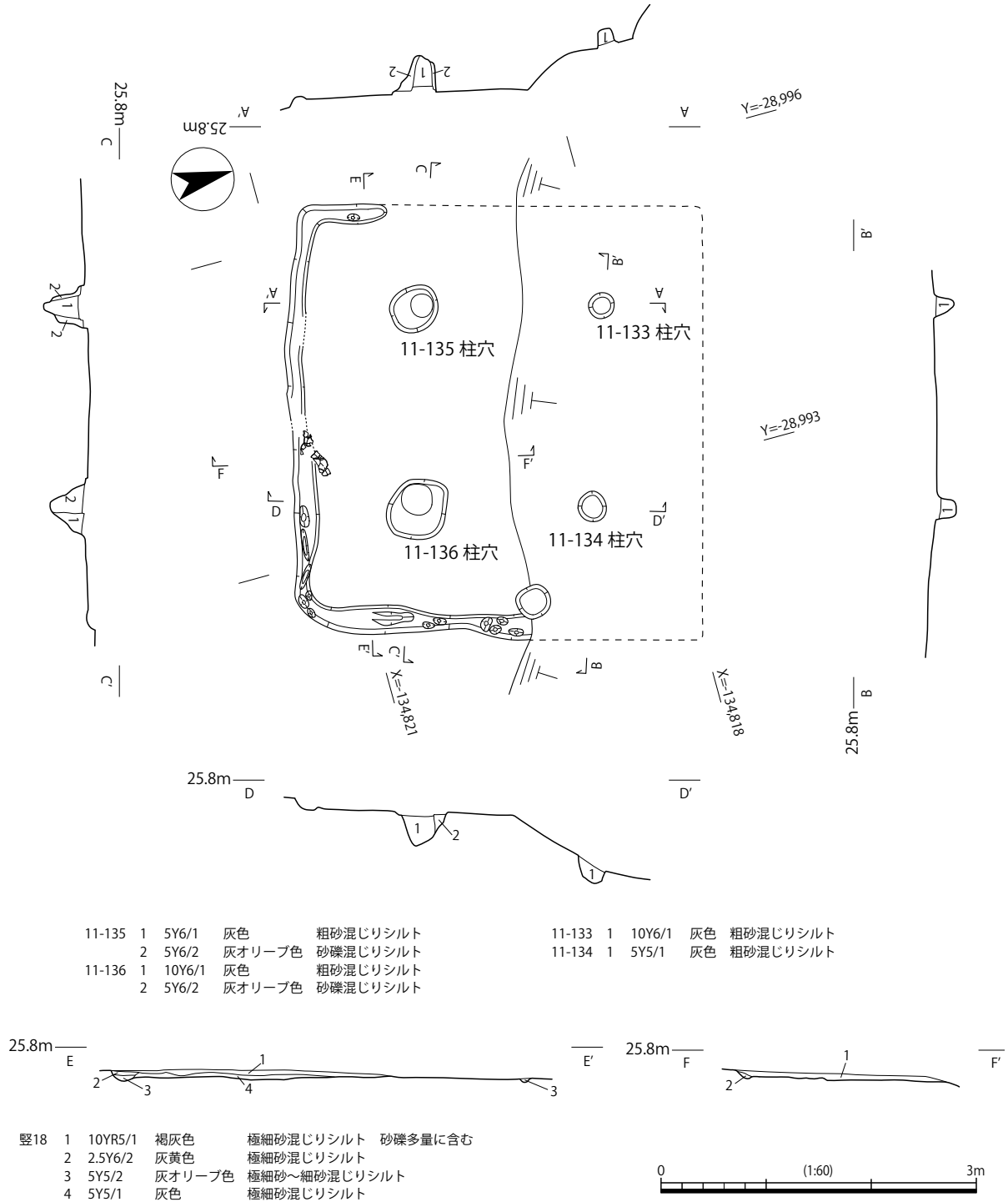
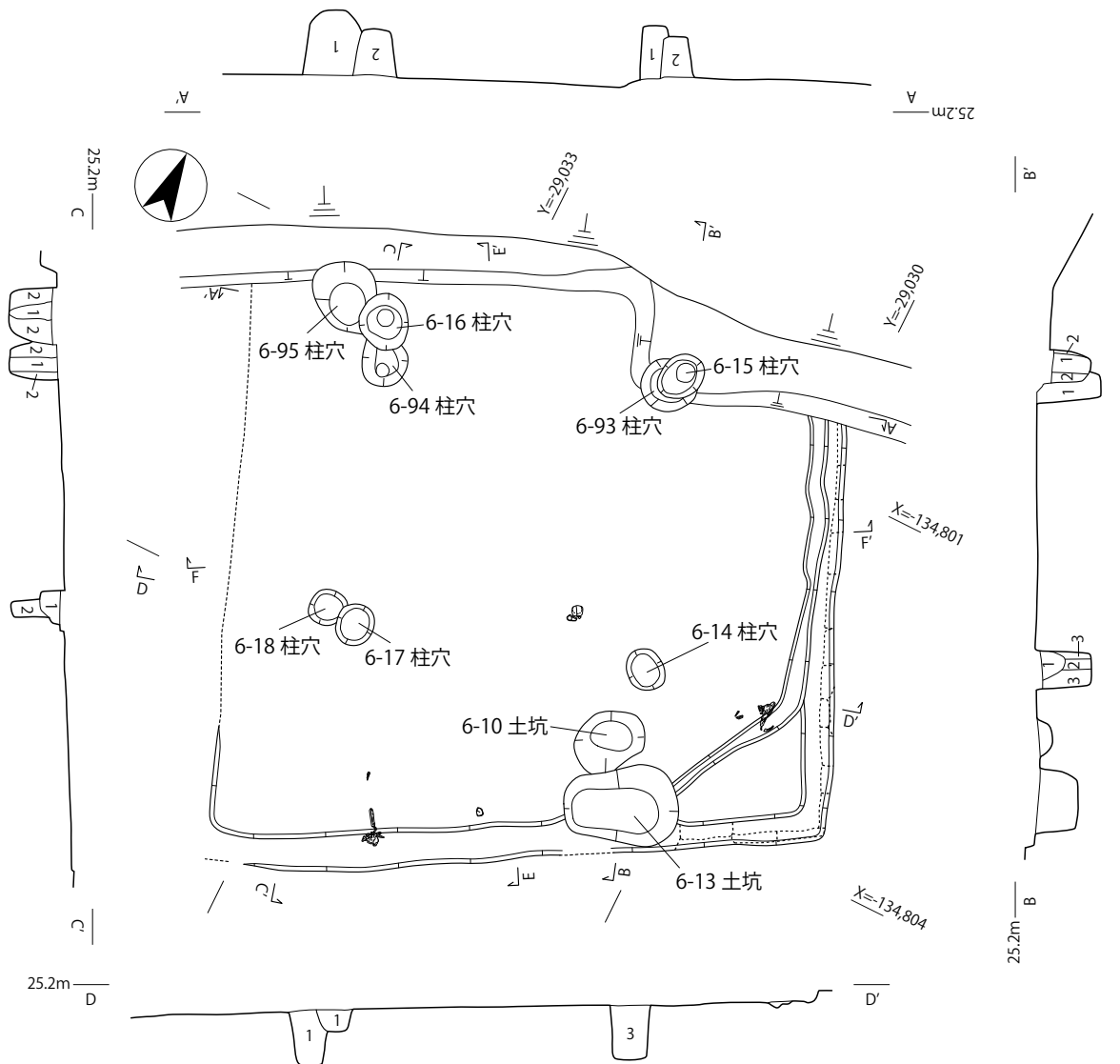
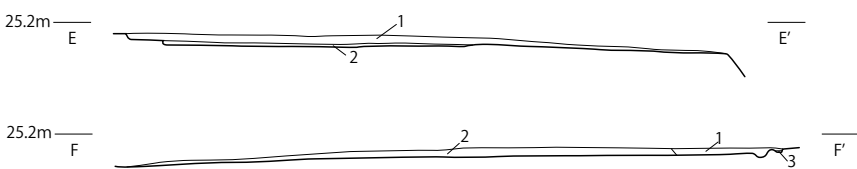


図 280 竪穴建物 18 平・断面図



6-14	1	10YR5/1	褐灰色	細砂混シルト (炭化物を微量に含む)	6-16	1	10Y5/1	灰色	極細砂混粘質シルト (炭化物を微量に含む)
	2	5Y5/1	灰色	細砂混粘質シルト		2	5BG5/1	青灰色	極細砂混粘質シルト
	3	10Y5/1	灰色	極細砂混シルト (粗砂を微量に含む)				5Y8/4	淡黄色
6-15	1	5Y8/4	淡黄色	シルトブロックを含む	6-17	1	2.5Y5/1	黄灰色	細砂混シルト
		2.5Y5/1	黄灰色	極細砂混粘質シルト	6-18	1	10YR5/1	褐灰色	細砂混シルト (炭化物を微量に含む)
		5BG7/1	明オリーブ灰色	シルトブロック多量に含む	2	2.5Y8/6	黄色	極細砂混シルト	
6-13	2	5BG5/1	青灰色	極細砂混粘質シルト	6-93	1	7.5Y4/1	灰色	極細砂~中砂混シルト
		5Y8/4	淡黄色	シルトブロックを含む	6-94	1	10YR3/2	黒褐色	極細砂混シルト
				6-95	1	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	極細砂混粘質シルト	



豎30	E-E'	1	10YR6/2	灰黄褐色	細砂混シルト (粗砂を微量に含む)
		2	10YR6/1	褐灰色	細砂混シルト (粗砂を微量に含む)
		2.5Y8/4	淡黄色	シルトブロック多量に含む	
F-F'	1	10YR6/2	灰黄褐色	極細砂混シルト (炭化物を微量に含む)	
		7.5Y7/6	橙色	シルトブロック少量含む	
		10YR6/2	灰黄褐色	細砂混シルト (粗砂を微量に含む)	
	2	10YR6/2	灰黄褐色	細砂混シルト (粗砂を微量に含む)	
		10YR7/1	灰白色	極細砂~細砂混シルト	
	3	2.5Y8/4	淡黄色	シルトブロック少量含む	

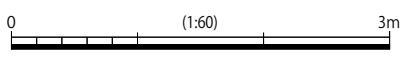


図 281 竪穴建物 30 平・断面図

壁溝は幅 15 から 23 cm、深さ 4 cm を測る。埋土は灰黄色極細砂混じりシルトである。竪穴建物 13 と同様に、溝底には部分的ではあるが楕円形の窪みがみられた。竪穴埋土から出土した遺物は、670 に示す TK-47 型式の杯蓋、671 の土師器甔、672 の土師器鍋がある。出土遺物から、5 世紀後半前後の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 30 (図 270・281・282・331、図版 51-2)

竪穴建物 30 は、谷 1 への落ち肩に位置する方形の竪穴建物で、近世段階の削平により一部失われている。東辺の検出長は 3.5 m、南辺は 5.15 m、深さは検出面から壁溝検出面まで 9 cm を測る。埋土は粗砂を微量に含む灰黄褐細砂混じりシルトである。埋土を除去すると床面を形成すると考えられる粗砂を微量に含み、淡黄色シルトブロックを多量に含む褐灰色細砂混じりシルトが堆積している。埋土中、床面に近い位置から土師器の小型の丸底壺片や炭化材が出土している。床面では支柱穴と壁溝、土坑を検出している。

支柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、直径または長径は 37 cm から 51 cm、深さは 20 cm から 53 cm を測る。6-14 柱穴・6-15 柱穴・6-16 柱穴・6-18 柱穴・6-94 柱穴・6-95 柱穴には、直径 12 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は灰色から青灰色の極粗砂混じりシルトが主である。南東隅の 6-14 柱穴以外の 3 基の柱穴には、各柱穴とも 2 基以上の柱穴が重複しており、少なくとも 2 回以上の改築が行われたことが考えられる。

壁溝は、削平されており痕跡ではある東辺で、2 本検出しており、支柱穴が 2 基以上重複している事象と合致している。外側の壁溝は幅 8 cm で、深さは 3 cm で、壁溝自体はほとんど遺存していないが壁際には幅約 15 cm 前後、厚さ 4 cm 前後の板状の材を立てたと考えられる痕跡がみられた。竪穴壁を内側から支えた材の痕跡と考えられる。内側の壁溝は幅 8 cm から 15 cm、深さは 4 cm を測る。

6-10 土坑は、壁溝との位置をみると、おそらく内側の壁溝使用時に伴ういわゆる壁際土坑であろう。

平面形は不整形円形を呈し、長径 59 cm、短径 43 cm、深さは 15 cm を測る。埋土は、レンズ上の堆積を呈し、焼土を少量含む。土師器細片が出土している。重複関係から 6-13 土坑に先行する遺構である。

6-13 土坑は、外側の壁溝使用時に伴う、壁際土坑である。平面形は楕円形を呈し、長径 95 cm、短径 61 cm、深さは 32 cm を測る。埋土はレンズ状の堆積を呈し、焼土を多量に含む。土師器細片が

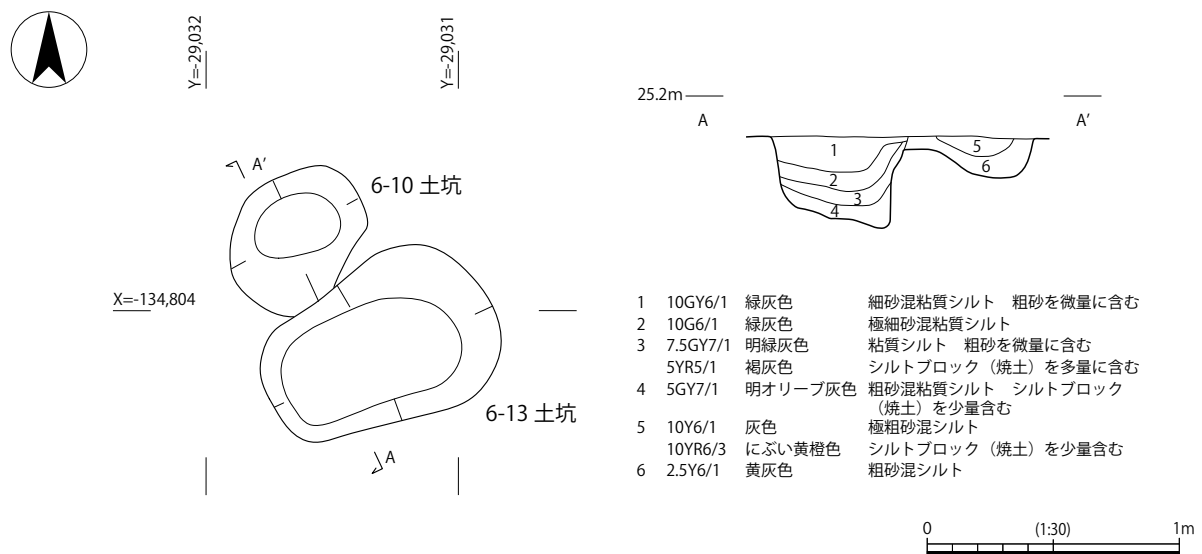


図 282 竪穴建物 30 6-10・13 土坑 6-8 溝 平・断面図

土している。

竪穴部から4.1 mから4.6 m離れた位置に、やや西で南に振れる溝を検出している。溝の延長は2.4 m、幅は25 cmから70 cm、深さは20 cmを測る。埋土は、上層が褐灰色粗砂混じりシルト、下層は淡黄色シルトブロックを多量に含む黄灰色細砂混じりシルトである。図化はできないが、須恵器高杯片と、土師器細片が出土している。

竪穴埋土・床面上から出土した遺物は、炭化材と673・674に示す5世紀中頃に考えられる土師器鉢がある。出土遺物から、5世紀中頃前後の時期に考えられる竪穴建物である。

竪穴建物 31 (図 270・283・332、図版 85・52 - 1)

竪穴建物 31 は、谷 3 への落ち肩にある方形の竪穴建物で、中・近世段階削平を受け 3 分の 2 が失われている。建物の平面規模は、検出長で東辺 4 m、南辺 1.85 m、深さは検出面から壁溝・主柱穴を検出した面まで 45 cm を測る。埋土は褐灰・黄褐色から灰色系の砂粒を含む細砂混じりシルトなどの 8 層を確認しており、層中中程より土師器・須恵器が出土している。埋土を除去した、床面を形成する明青灰色極細砂ブロックを含む灰色極細砂混じりシルト上面では、壁溝・主柱穴を検出している。主柱穴は 4 基存在すると考えられるが、竪穴内では 23 - 80 柱穴・23 - 79 柱穴を検出しており、他の 2 基は削平され失われている。柱穴の平面形は不正楕円形を呈し、長径は 40 cm、深さは 42 から 50 cm を測る。

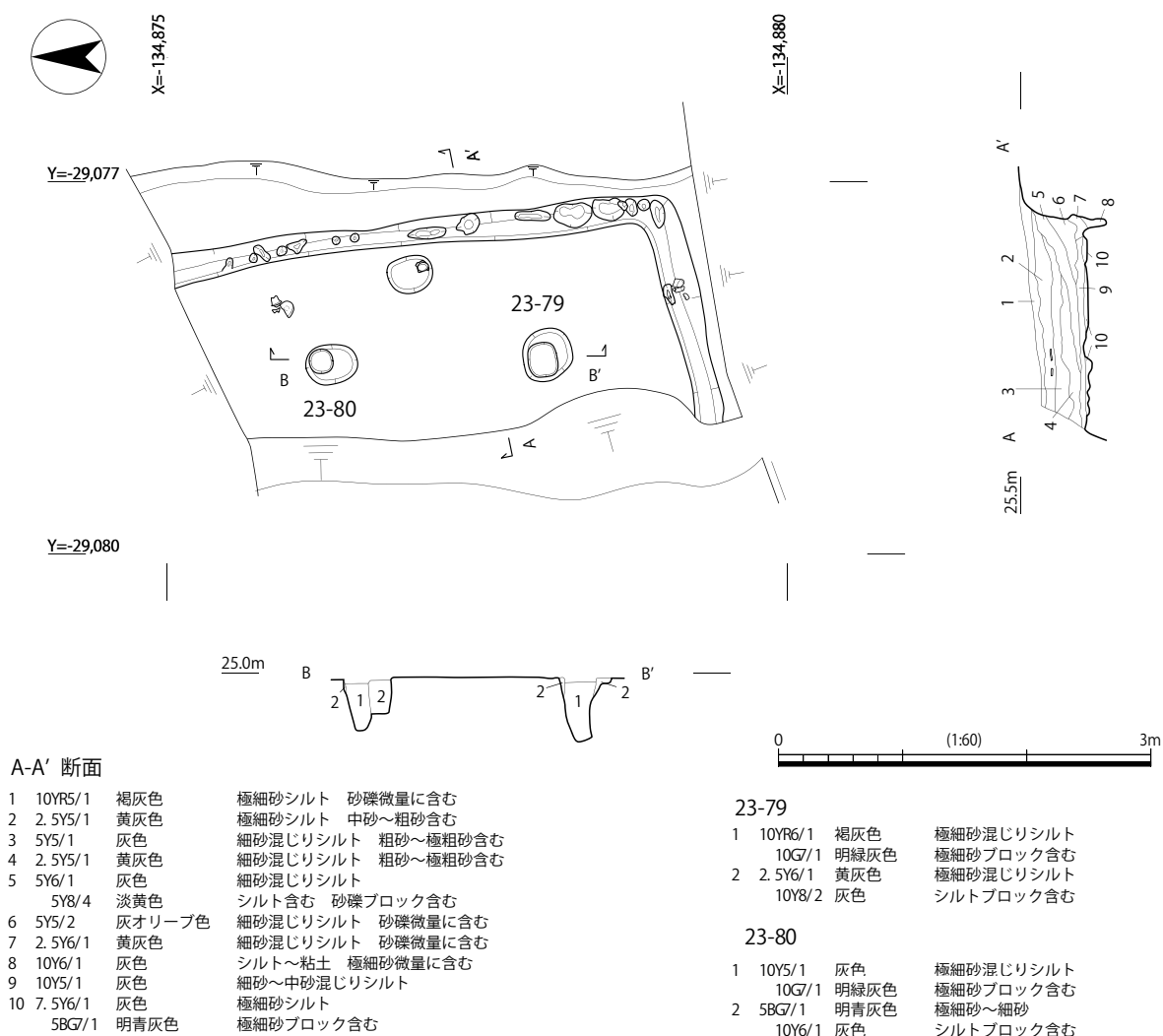
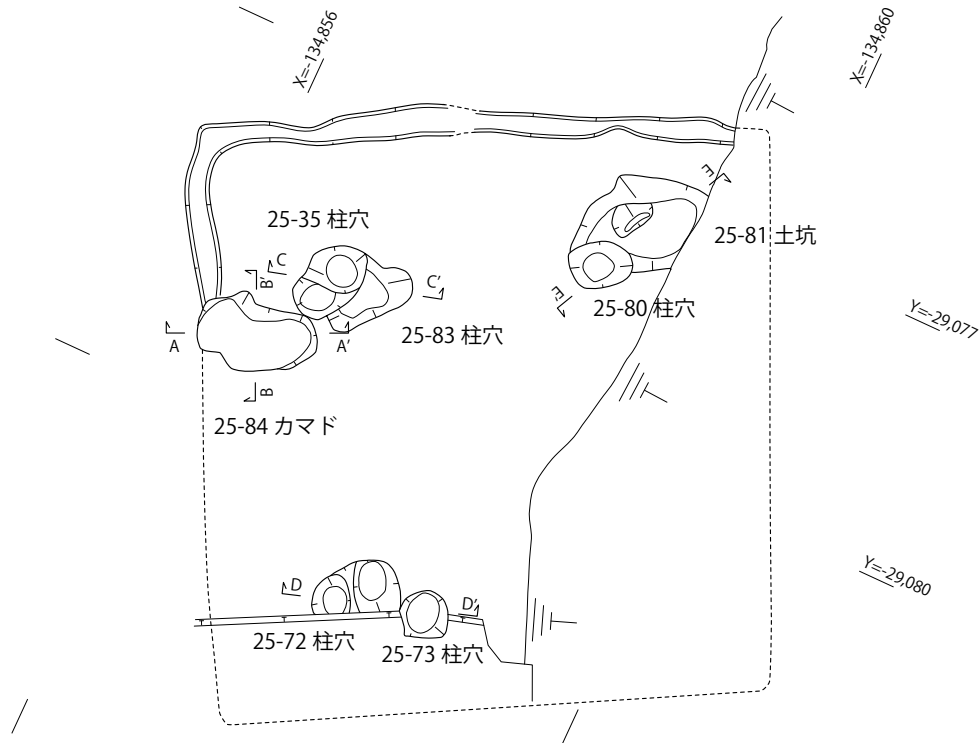


図 283 竪穴建物 31 平・断面図

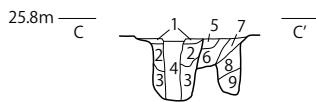


25-84 カマド



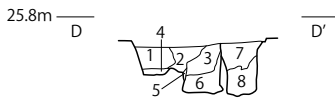
- | | | | | | | | |
|-------|---|---------|------|--------|--------|--------|----------|
| 25-84 | 1 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色 | 細砂混シルト | 中砂粒混じる | 焼土塊混じる | 炭化物若干混じる |
| | 2 | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルト | (基盤層) | | |

25-35 柱穴 25-83 柱穴



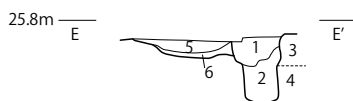
- | | | | | | | | |
|---|---------|-----|--------------|---------|---------|-----------------|--------------------|
| 1 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト | 中砂粒入る | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土混じる |
| 2 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト | 中砂粒入る | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土が少量混じる |
| 3 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト | 中砂粒入る | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土混じる |
| | 10YR6/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト | ブロック入る | | | |
| 4 | 10YR5/1 | 褐灰色 | シルトブロックが多く入る | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土混じる | |
| 5 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック入る | |
| 6 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土入る | |
| 7 | 10YR5/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック少量入る | |
| 8 | 10YR6/1 | 褐灰色 | 細砂混シルト | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土混じる | |
| 9 | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土 | | | | |

25-72 柱穴 25-73 柱穴



- | | | | | | | | |
|---|-----------|------|----------------|--------------|---------------|-----|------------------|
| 1 | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 中砂混シルト | | | | |
| | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | 中砂混シルトのブロック土 | 土器片入る | | | |
| | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック | 径1~2cm若干入る | | | 炭化物細片入る |
| 2 | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 中砂混シルトと2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土層 | | |
| 3 | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | 中砂混シルト | | | | |
| | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 中砂混シルト | ブロック若干入る | | | |
| 4 | 7.5GY7/1 | 明緑灰色 | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック層 | | |
| 5 | 2.5Y6/1 | 黄灰色 | 細砂混シルト | | | | |
| | 1と2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルト | 径2~3cmのブロック層 | | | |
| 7 | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | 中砂混シルト | ブロック | | | |
| | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 中砂混シルト | ブロック | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土 |
| 8 | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | 中砂混シルト | ブロック | | | |
| | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 中砂混シルト | ブロック | 2.5Y7/4 | 浅黄色 | 細砂混シルトのブロック土多く含む |

25-81 土坑 25-80 柱穴



- | | | | | | | | |
|---|-----------|-------|-------------|------------|--|--|--------|
| 1 | 2.5Y5/1 | 黄灰色 | 細砂混シルト | 中砂~粗砂粒混じり | | | |
| | 3・4のブロック土 | | 炭化物・土器小片入る | | | | |
| 2 | 3・4のブロック土 | | に1のブロック若干入る | | | | |
| 3 | 2.5Y6/3 | にぶい黄色 | 細砂混シルト | | | | |
| 4 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色 | 細砂混シルト | 混じり | | | |
| 5 | 2.5Y6/3 | にぶい黄色 | 細砂混シルト | | | | |
| | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | シルト | ブロック若干入る | | | |
| 6 | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 細砂混シルト | 粗砂混シルト若干入る | | | 土器細片入る |

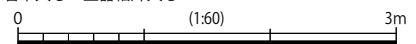


図 284 竪穴建物 32 平・断面図

いずれも直径 15 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、灰色シルトブロック含む黄灰色極細砂混じりシルトと、灰色シルトブロック含む明青灰色極細砂から細砂である。

壁溝は、幅 18 から 30 cm、深さは 18 cm を測る。埋土は、極細砂を微量に含む灰色シルトから粘土である。図化はできなかったが、溝内から土師器小型の丸底壺が出土している。

竪穴建物埋土から出土した遺物を 675 から 684 に示す。675 は、TK-73 型式の杯蓋、676・678 は TK-208 型式の蓋杯、677 は ON-46 型式の杯蓋、679・680・681 は須恵器高杯脚部、682 は土師器鍋の把手、683 は製塩土器口縁部、684 は敲石である。出土遺物から、5 世紀中頃前後の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 32 (図 270・284、図版 52-2)

竪穴建物 32 は、削平が著しくほとんど深さがなく、壁溝・カマドの一部と、支柱穴を検出している。平面規模は、壁溝の検出長で東辺 4.25 m、北辺 1.85 m を測る。埋土・床面も削平されている。

カマドは北辺やや東よりに、壁溝の上に造られている。上部はほとんど失われており、基盤層に掘り窪められた部分のみの検出である。平面形は不整楕円形を呈し長軸は 95 cm、短軸 50 cm、深さは 9 cm である。埋土は、焼土塊と炭化物が若干混じる、中粒砂混じりの暗灰黄色細砂混じりシルトである。

支柱穴は、4 基の内 1 基が近世の溝により失われている。25-81 土坑は、他の柱穴に比べ非常に浅く、柱穴と考えづらいがこれを柱穴と想定すると、検出した支柱穴 3 基は、2 基の柱穴が重複していることになり、2 回以上の建て替えが考えられる。この点に立ち、組み合わせを考えると、当初が 25-83 柱穴・25-72 柱穴・25-81 土坑、2 回目が 25-35 柱穴・25-72 柱穴・25-80 柱穴となる。

これらの柱穴は重複・抜き取りが行われているため、不定形な平面形を呈し、深さは 45 cm 前後を測る。柱痕跡は、25-35 柱穴にみられるのみである。

壁溝は幅 12 から 45 cm で、深さは 3 cm を測る。柱穴からは、図化はできなかったが、土師器の小型の丸底壺片が出土している。出土遺物から、5 世紀中頃の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 34 (図 270・285)

竪穴建物 34 は調査区端で検出しており、南西隅のみ検出した方形の竪穴建物である。検出長は西辺 2 m、南辺 1.8 m で、検出面から壁溝を検出した面までの深さは 18 cm を測る。埋土は、炭化物混じり

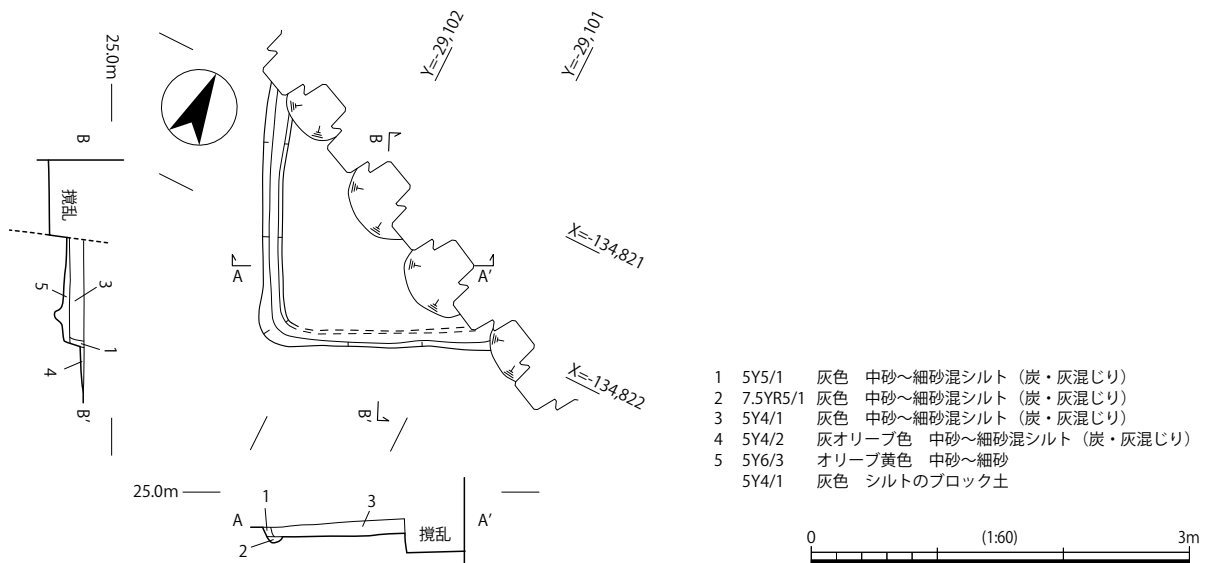


図 285 竪穴建物 34 平・断面図

の灰色中砂から細砂シルトである。壁溝は、西辺のみで検出しており、幅 10 cm で、壁溝検出面からの深さ 5 cm を測る。埋土は、炭化物混じりの灰色中砂から細砂シルトである。柱穴は検出していない。

埋土中からは図化できる遺物は出土していないが、土師器壺・甕片が出土している。

掘立柱建物

掘立柱建物 31 (図 270・286)

掘立柱建物 31 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物で、11 - 108 柱穴と掘立柱建物 32 の 11 - 109 柱穴との先後関係から、掘立柱建物 32 より新しい建物である。梁行寸法は北側が 3.1 m、南側が 2.8 m、桁行寸法は 3.7 m である。柱間寸法は梁行が 1.4 から 1.6 m、桁行は 1.7 から 2.0 m と不揃いである。

身舎の面積は約 11.5 m² である。棟筋は、北で東へ 29° 振れる。柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈しており、直径もしくは長径は 44 から 66 cm を測る。柱穴の深さは、14 から 50 cm を測る。掘方底面は、北東側の谷 1 へ向かって徐々に深くなる傾向を示す。11 - 25 柱穴・11 - 178 柱穴に柱痕跡が認められる。掘方埋土は掘立柱建物 32 と同様の灰色系の砂礫から細砂混じりシルトである。

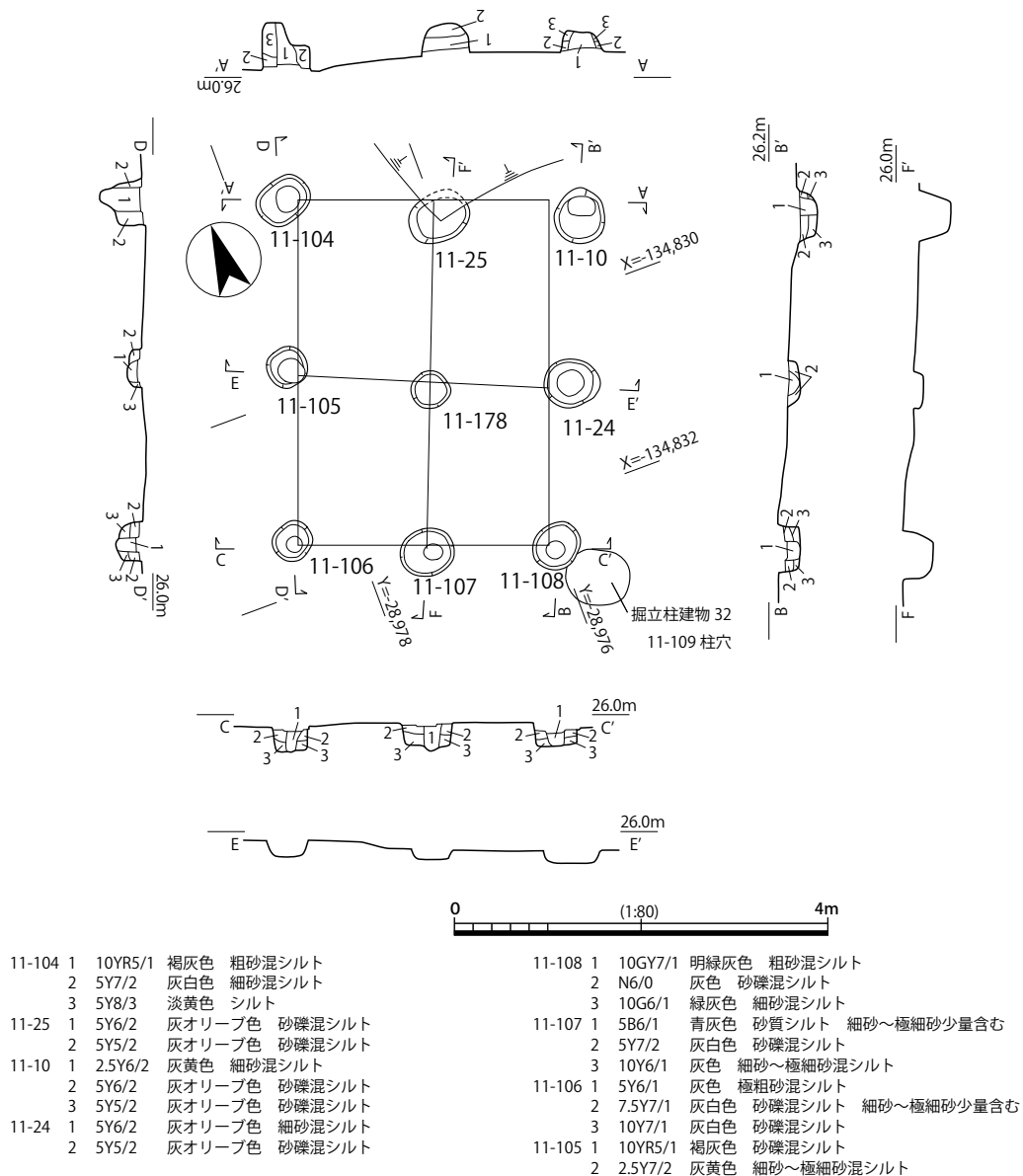


図 286 掘立柱建物 31 平・断面図

柱穴からは、図化はできなかったが土師器・須恵器の破片と初期須恵器の甕体部片が出土している。
掘立柱建物 32 (図 270・287・332、図版 53 - 1)

掘立柱建物 32 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物である。梁行寸法は 4.0 m、桁行寸法は北側 3.9 m、南側 4.1 m と不揃いである。柱間寸法は梁行が 2.0 m、桁行は 2.1 から 3.9 m を測る。身舎の面積は約 16.4 m² である。棟筋は、西で北へ 51° 振れる。柱穴の平面形は、円形から隅丸方形を呈しており、おそらく隅丸方形を指向している。長軸は 70 から 80 cm、短軸は 50 から 60 cm を測る。掘立柱建物 49 同様やや大きな掘方を呈する建物である。柱穴の深さは、20 から 48 cm を測り、掘方底面はほぼ 25.6 m 前後で揃う。11 - 314 柱穴・11 - 319 柱穴以外には柱痕跡が認められる。掘方埋土は灰色系の粗砂から細砂が混じるシルトが主である。

出土遺物は、須恵器と土師器の破片が出土している他、11 - 109 柱穴から 685 に示す TK - 23 型式の高杯脚部が出土しており、5 世紀中頃以降の建物である。

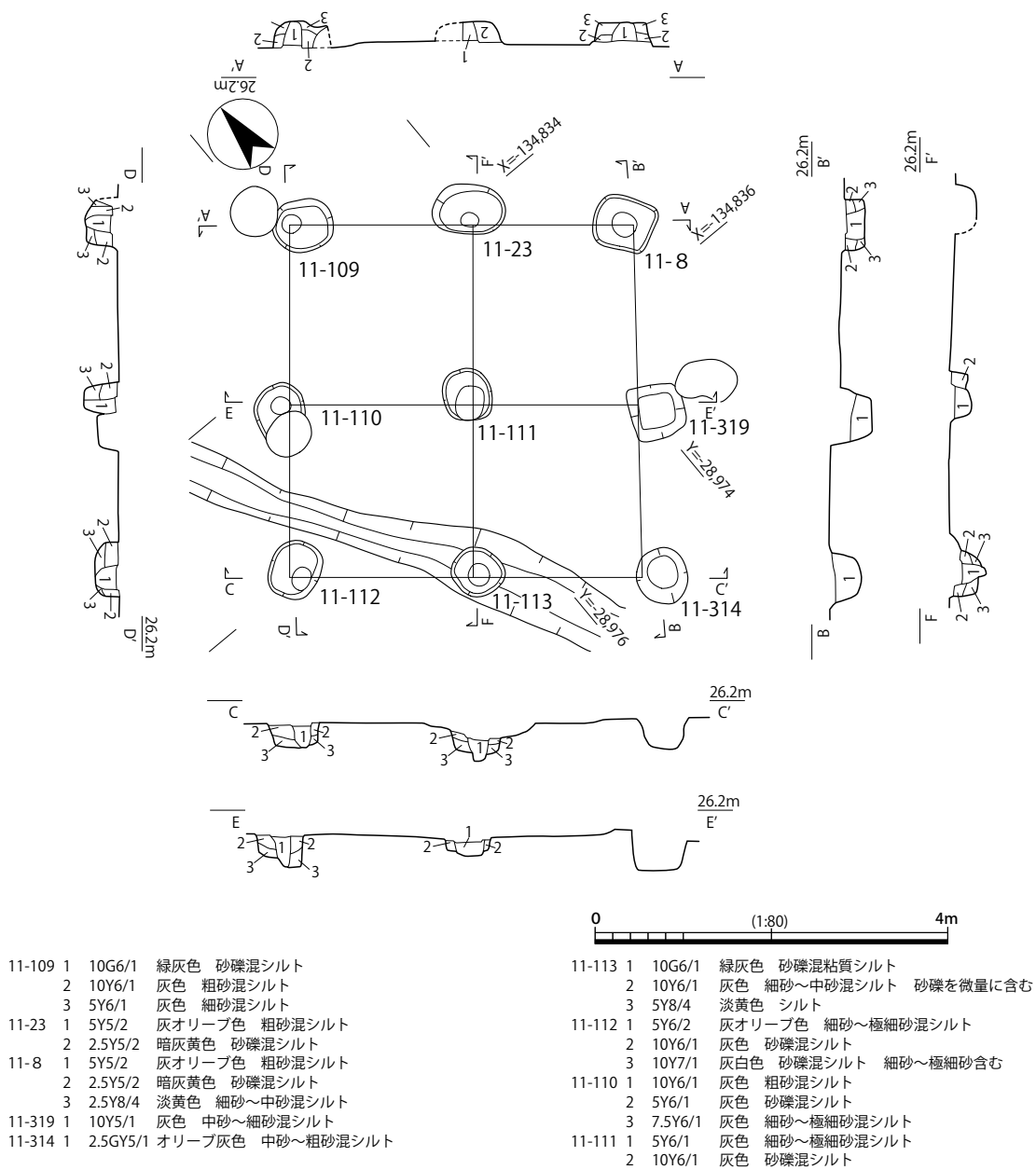


図 287 掘立柱建物 32 平・断面図

掘立柱建物 49 (図 270・288、図版 53 - 2)

掘立柱建物 49 は、梁行 2 間、桁行 2 間のやや東西に長い総柱建物である。梁行寸法は 3.6 m、桁行寸法は 3.9 m、身舎の面積は 14.0 m²を測る。柱間寸法は、梁行方向両側とも 1.9 m 等間、桁行方向は 1.6 から 2.3 m と不揃いである。棟筋は、西で北へ 17° 振れる。

柱穴の平面形は、ほぼ円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径は 58 から 68 cm を測り、掘立柱建物 19 と比べ大きい。中でも 11 - 97 柱穴は、隅丸方形を呈し長軸 68 cm 短軸 55 cm を測る。柱穴の深さは、20 から 39 cm を測る。柱痕跡は 11 - 98 柱穴・11 - 101 柱穴・11 - 100 柱穴・11 - 102 柱穴・11 - 103 柱穴に見られ、他の柱穴には抜き取り穴がみられる。掘方埋土は黄色系の粗砂混じりシルトと灰白色系の細砂混じりシルトが主である。出土遺物は、須恵器と土師器の破片のみで図化できるものはないが柱穴埋土などから古墳時代に考えられる建物である。

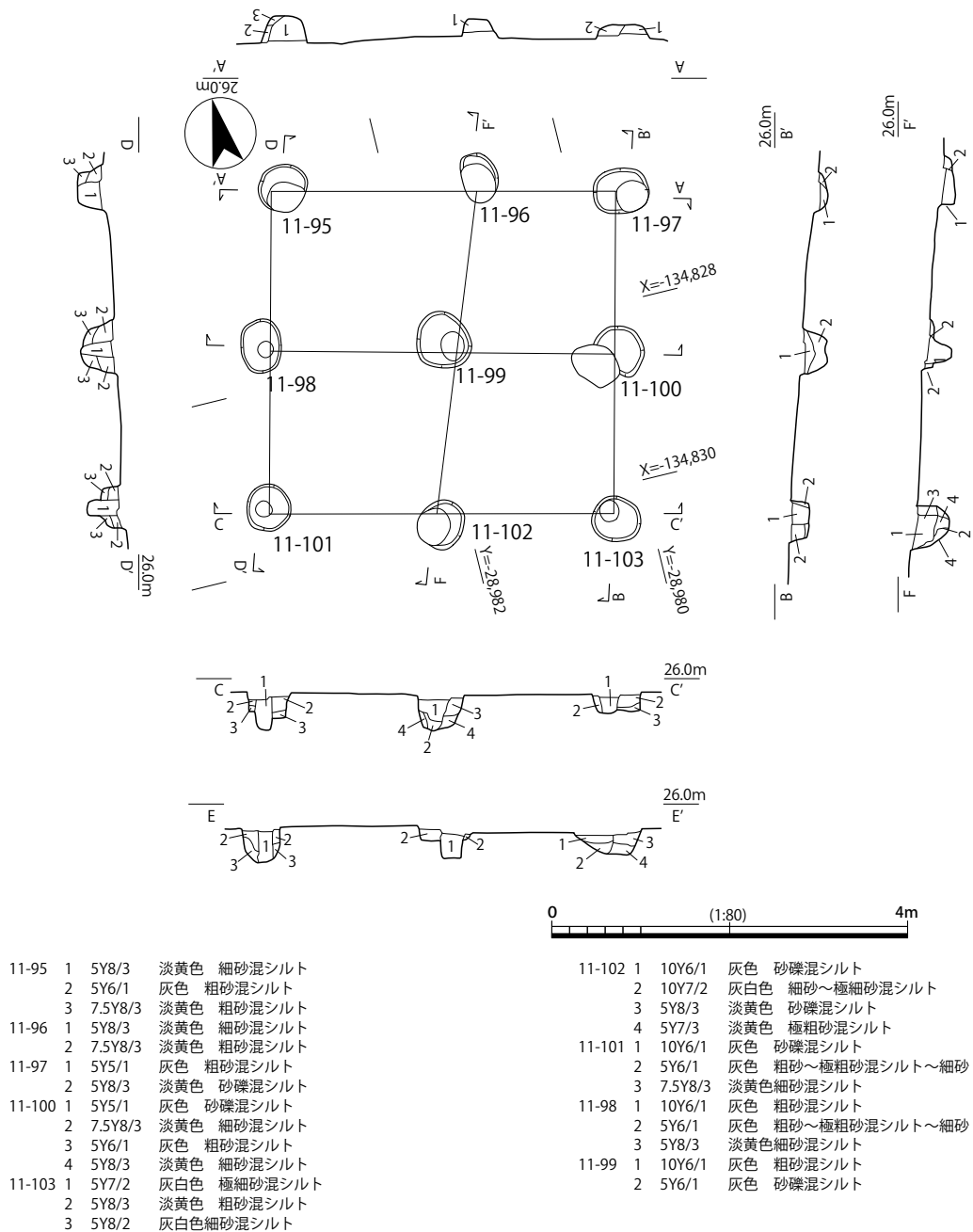


図 288 掘立柱建物 49 平・断面図

掘立柱建物 50 (図 270・289、図版 54 - 1)

掘立柱建物 50 は、梁行 2 間、桁行 2 間の南北棟で、身舎が掘立柱建物 49 と掘立柱建物 31 と重複関係にある建物である。梁行寸法は 3.0 m、桁行寸法は 3.4 m で、身舎の面積は 10.2 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.5 m、桁行方向が 1.6 m と 1.8 m である。棟筋は、北で東へ約 5° 振れる。柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈し、直径もしくは長径が 32 から 46 cm、深さは 10 から 36 cm を測る。

11 - 154 柱穴と 11 - 158 柱穴では図化できていないが、この 2 つを含む全ての柱穴で、柱痕跡が見られた。また、11 - 155 柱穴には、掘方底面に柱の圧痕が認められた。掘方埋土は、主に灰色系の砂礫混じりシルトである。柱穴からは、土師器の破片が出土しているが、時期は不明である。埋土などから、古墳時代に考えられる建物である。

掘立柱建物 65 (図 270・290)

掘立柱建物 65 は、削平を受け柱穴を検出できない箇所があるものの梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物と考えられる。梁行寸法は 3.6 m、桁行寸法は 3.5 m と 3.8 m で柱筋の通りの悪い建物である。身舎の面積は 12.3 m² を測る。柱間寸法は、梁行・桁行方向 1.4 m から 2.0 m と不揃いである。建物の軸は北で西へ 35° 振れる。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈し、直径は 26 から 39 cm を測る。深さは、深いものでも 10 cm 前後、浅いものでは 7 cm と非常に浅く、上部を大きく削平されていると考えられる。柱穴には、柱痕跡が認められるものもあり、直径は 10 cm 前後を測る。掘方埋土は、灰黄褐色系の色調の細砂シルトで中砂から粗砂が入る。25 - 63 柱穴から、土師器の破片が出土しているが、時期を特定できる資料ではないが、埋土などから古墳時代の建物と考えられる。

柱列

柱列 1 (図 270・291)

柱列 1 は、3 間で延長 5.6 m を測る。柱筋は西で南へ 18° 振れる。柱穴の平面形は楕円で、長軸が

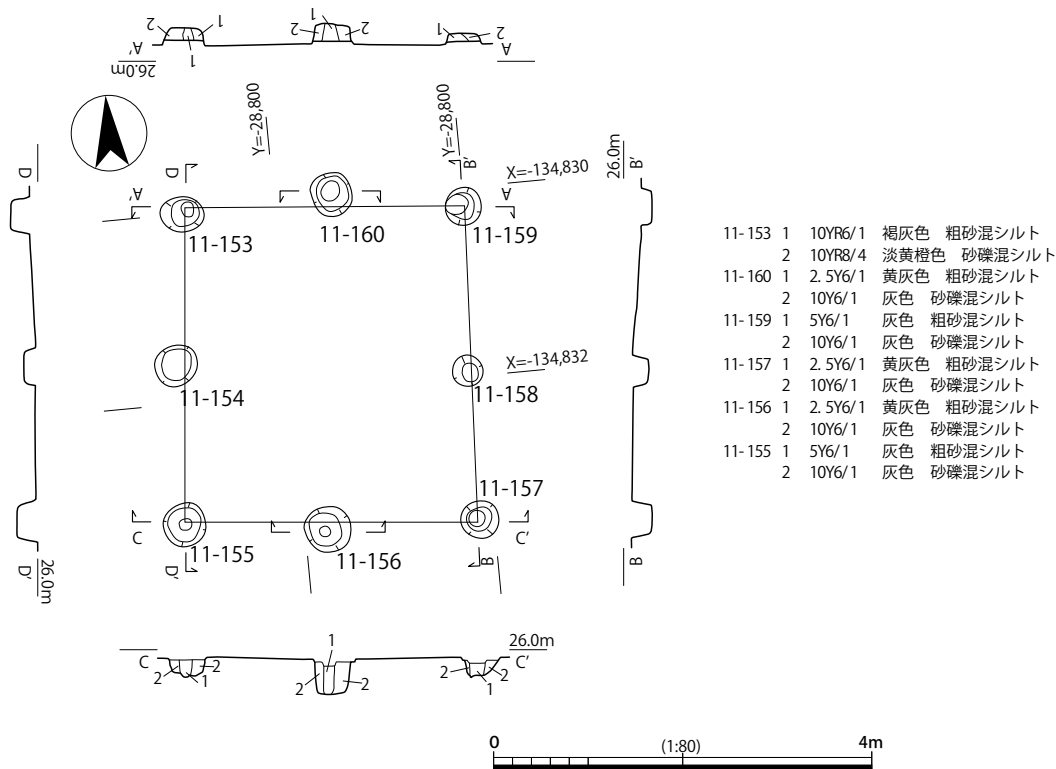


図 289 掘立柱建物 50 平・断面図

30 cm前後のもの、50 cm前後のもの二種に分かれる。深さも同様に二種に区分できることから、柱筋の通りの良い遺構ではあるが、7-399 柱穴と7-232 柱穴、7-170 柱穴と7-99 柱穴は別遺構の可能性も考えられる。7-170 ピットから、734 に示す6世紀頃に考えられる土師器甕頸部から口縁部が出土している。

井戸

1-74 井戸 (図 270・292・293・332～335、図版 89～91・61-8・62-1～2)

1-74 井戸は、谷2から南へ派生するごく小規模な谷状地形の底に位置する1-62 溝の底面で検出している。掘方の平面形は不定形で長軸 3.1 m、短軸 2.5 m、深さは検出面から 90 cmを測る。

掘方のやや北西よりに、一辺はおよそ 90 cmの方形の木組みの井戸枠を検出している。井戸枠上部は、

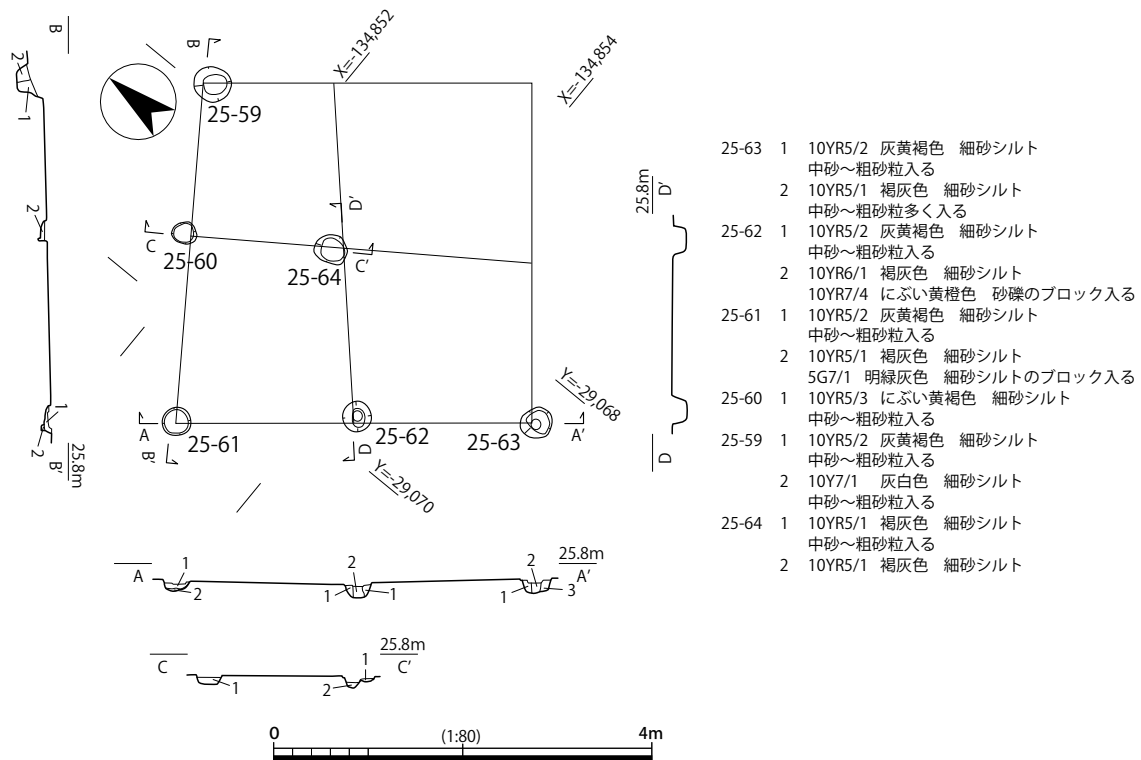


図 290 掘立柱建物 65 平・断面図

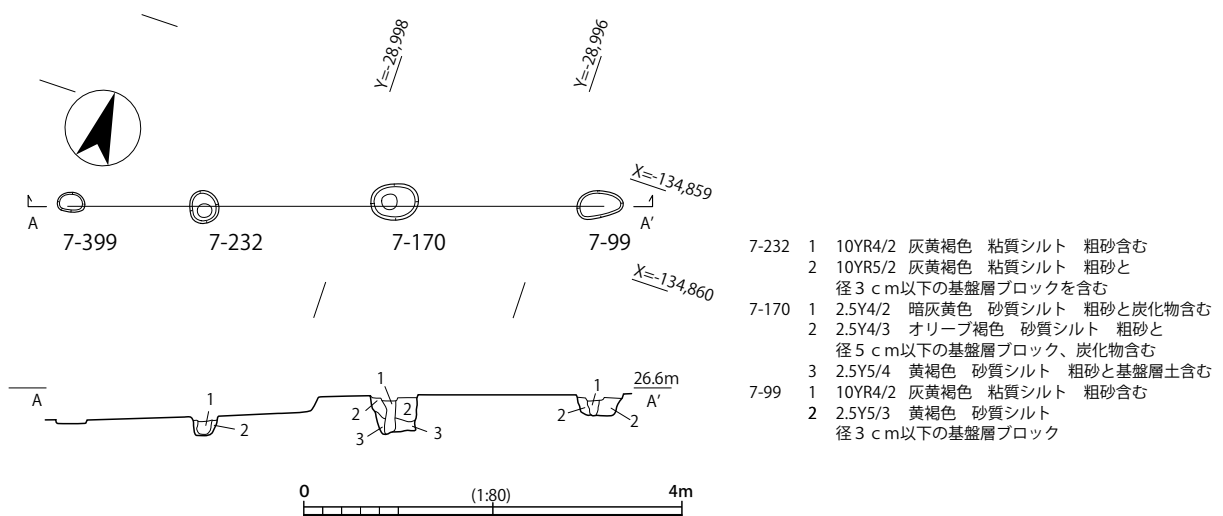


図 291 柱列 1 平・断面図

抜き取られており、残存長は70から76cmを測る。井戸枠の板組は、扉の転用材や板材を用いた縦板組で、構築方法には横棧留めを用いている。角柱はなく、ごく簡単な構造である。図293に示す井戸断面図の1から11の地層は井戸廃棄時の井戸枠抜き取り及び埋め戻しの埋土である。12・13は機能時の堆積、14から18は井戸枠設置時の掘方埋土である。

抜き取り内からは、687から711に示す遺物が出土している。687は、初期須恵器壺口縁部、688は土師器丸底の小壺、689は土師器高杯杯部、690は土師器甕口縁部、691は土師器高杯脚部である。

いずれも5世紀前半と考えられる。692は木錘である。698・700・705・708・711は井戸枠の縦板で、検出時には設置された状況で出土している。また、711は、扉の転用材で、冠木または蹴放しの軸穴にはめ込む軸が遺存している。701は、井戸枠の横棧に転用された材である。693から697・699・702から704・706・707・709・710は、井戸枠の抜き取り穴内から出土した井戸枠転用材で、抜き取り穴を埋める際廃棄されたものである。

土坑

1-63土坑（図270・294・332・336、図版74・62-3~4）

1-63土坑は、1-74井戸の南西に接するように掘削されている。平面形は楕円形を呈し、長径1.6m、短径9.4m、深さは60cmを測る。埋土は3層に分層しているが、上位層出土と下位層出土の須恵

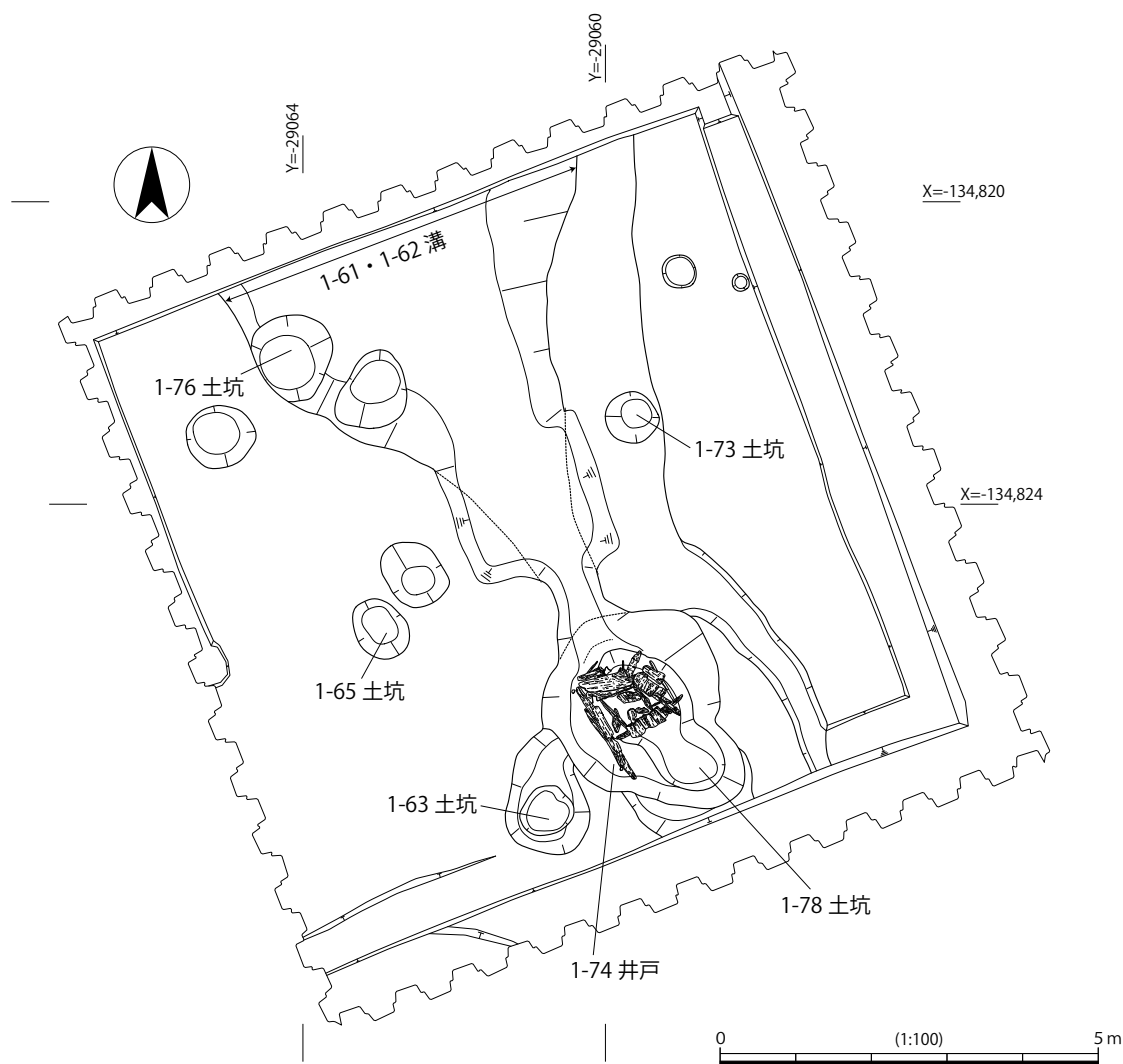


図292 1-74井戸 周辺遺構図

器甕片が接合できることから、同時に埋められた際の土質の違いである。土坑内からは、TK-73以前に考えられる713に示す甕と、714に示す5世紀後半の甕体部口縁が出土している。713の甕は、底部がなく、意図的に打ち欠かれ土坑内に据えられていた可能性があり、転用井筒の可能性も考えられる。したがって当土坑は、井戸もしくは溜井の可能性が考えられる。

1-65土坑(図270・294・336、図版62-5)

1-65土坑は、平面形が楕円形を呈し、長径94cm、短径75cm、深さ47cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は炭(炭化物)と土器片を含む細砂混じりシルト、下層は基盤層のブロックを含む暗灰色極細砂混じりシルトである。土坑内からは、715・716に示す5世紀前半に考えられる土師器甕上半部が出土している。

1-73土坑(図270・294・336、図版62-6)

1-73土坑は、平面形が楕円形を呈し、長径70cm、短径65cm、深さは50cmを測る。埋土は3層

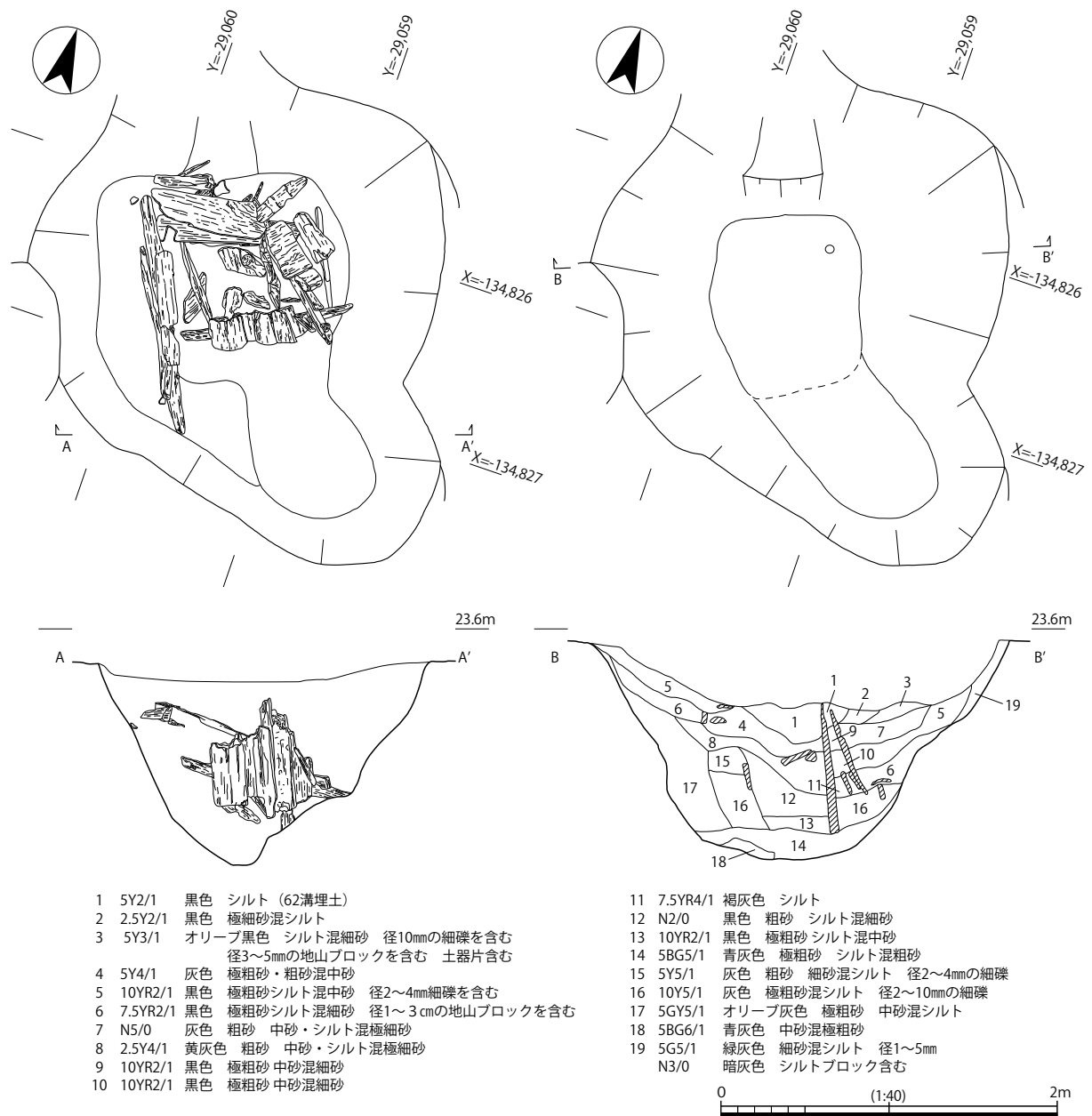


図293 1-74井戸 平・断面図

に分層できる。上層は暗灰色粗砂シルト混じり中砂、中層は黒色シルト、下層は基盤層ブロック含む黒色シルトである。下層から、723 に示す土師器小型の壺、724 の土師器甕上半部が出土している。

いずれも 5 世紀前半の所産と考えられる。

1-76 土坑 (図 270・294・336、図版 74・91)

1-76 土坑は、平面形が不整楕円形を呈し、長径 11.5 m、短径 1.04 m、深さ 57 cm を測る。埋土中から 717 から 722 に示す遺物が出土している。717・718 は土師器の小型の丸底壺、719 は土師器高杯杯部、720 は土師器高杯脚部である。721・722 は用途不明の、木製品の部材である。721 は長さ 26.3 cm、幅 9.1 cm、厚さ 1.9 cm を測る柁目の板材で、片側の長辺部の中央に台形の割り込みがみられる。722 は長さ 26.4 cm、幅 5.7 cm、厚さ 2.1 cm の柁目の板材である。割り込みは見られない。出土土器は 5 世紀前半と考えられる。

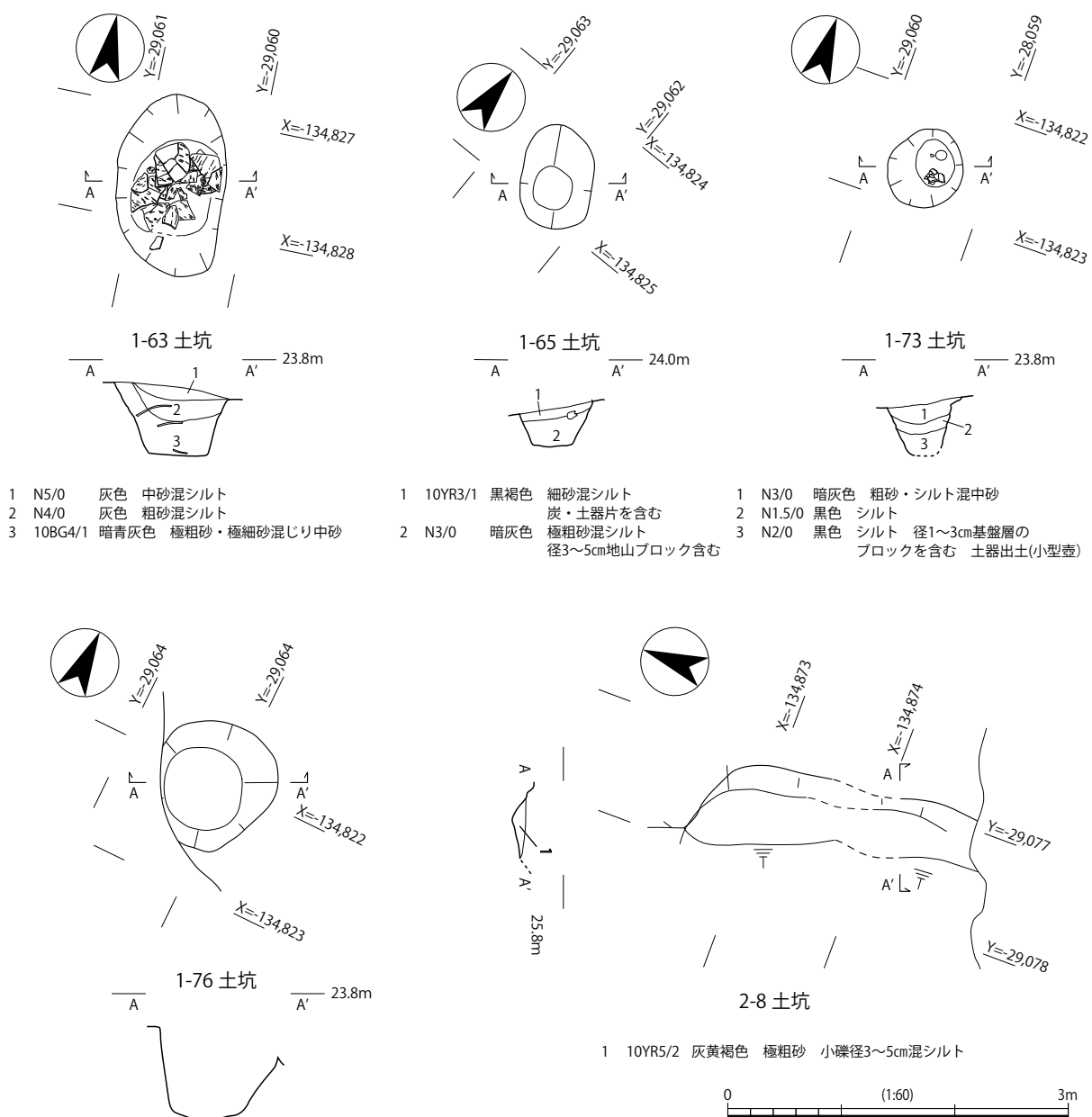


図 294 1-63・65・73・76 土坑 2-8 土坑 平・断面図

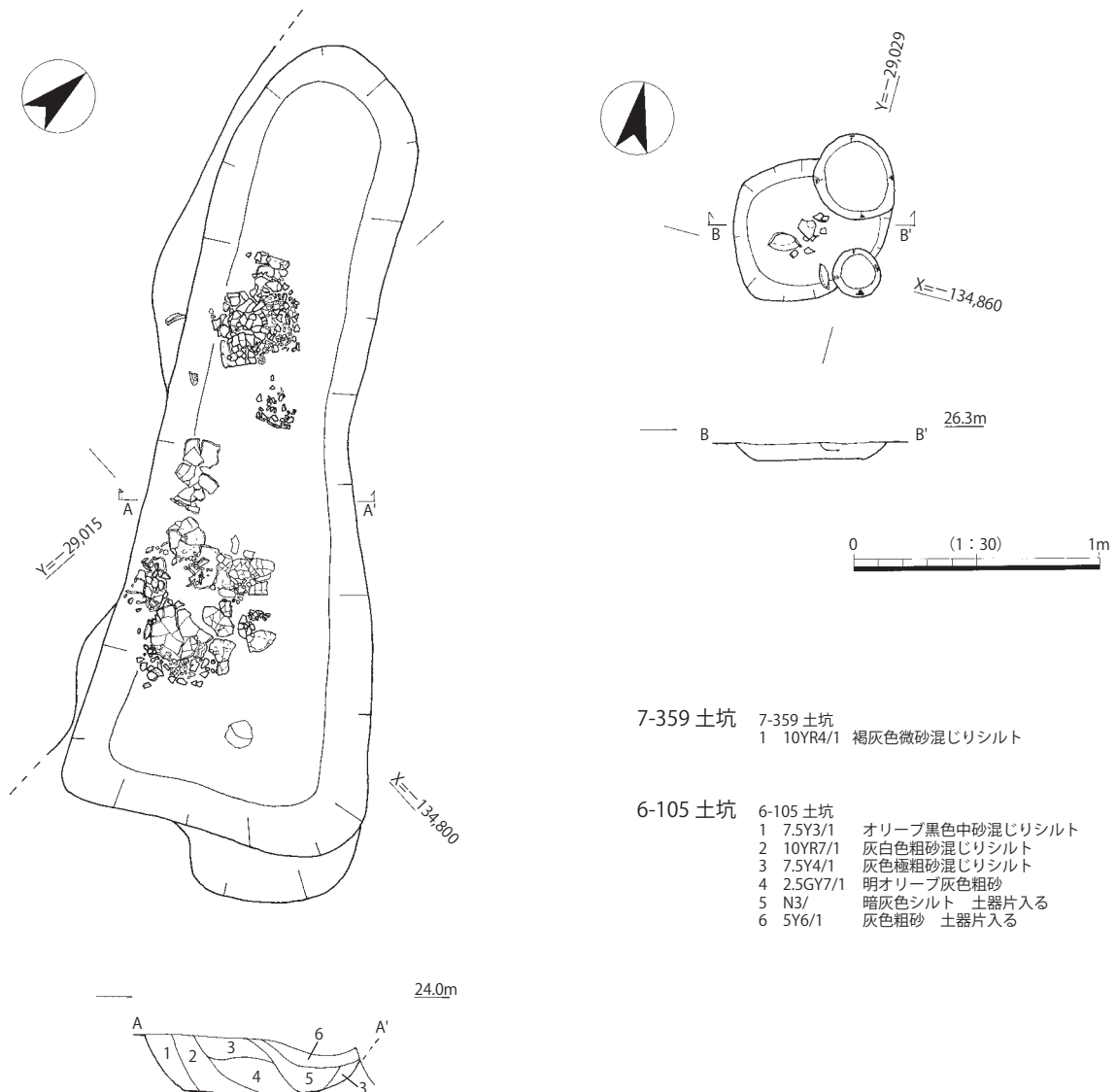
2-8土坑 (図 270・294・336)

2-8土坑は、谷3への落ち肩に位置しており、近世段階の削平で半分のみを検出である。

検出規模は、長軸 2.4 m、短軸 53 cm、深さは 13 cmを測る。埋土は灰黄色極細砂小礫混じりシルトである。土坑内から、725に示す5世紀後半の須恵器高杯が出土している

6-105土坑 (図 270・295、図版 79・85・63-1)

6-105土坑は、上部が大きく削平を受けている溝状を呈する土坑である。長軸は 3.24 m、短軸は 0.88 mを測る。検出面からの深さは 19 cmである。埋土は極粗砂から粗砂が混じるシルトで、暗灰色から灰色を呈する最上層の埋土から、996・997に示す5世紀後半に考えられる土師器甕が、土圧により押しつぶされたような状態で出土している他、993から995・998から1000に示す遺物が出土している。993は初期須恵器甕口縁、994は5世紀後半の土師器高杯杯部、995も同じく5世紀後半の土師器鉢、998・999は5世紀代の製塩土器、1000は敲石である。出土遺物の時期は、5世紀後半にまとまっており一括廃棄の可能性が高い土坑である。またこの土坑は、竪穴建物 30・16・17から、9から15 mの位置にある土坑で、これらの竪穴建物と関係のある、廃棄土坑ではないかと考えられる。



7-359 土坑 7-359 土坑
1 10YR4/1 褐灰色微砂混じりシルト

6-105 土坑 6-105 土坑
1 7.5Y3/1 オリーブ黒色中砂混じりシルト
2 10YR7/1 灰白色粗砂混じりシルト
3 7.5Y4/1 灰色極粗砂混じりシルト
4 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粗砂
5 N3/ 暗灰色シルト 土器片入る
6 5Y6/1 灰色粗砂 土器片入る

図 295 6-150土坑 7-359土坑 平・断面図

7-359 土坑 (図 270・295)

7-359 土坑は、2 基のピットにより一部失われているが、平面形は楕円形を呈し、長径 70 cm、短径 55 cm、深さ 7 cm を測る。埋土は褐灰色微砂混じりシルトである。土坑内からは、底面やや上から図化はできなかったが初期須恵器甕体部片、土師器甕・壺片が出土している。

11-86 土坑 (図 270・296・336、図版 74・62-7~8)

11-86 土坑は、重複関係から 11-129 溝より新しい遺構である。平面形は不整形円で長径 3 m、短径 2.15 m、深さ 18 cm を測る。埋土は大きく上層が灰黄色・灰黄褐色の粗砂混じりシルト、下層は灰黄色極細砂混じりシルトである。下層から 726 から 728 に示す土器が出土している。726 は MT-15 型式の杯蓋、727 は土師器高杯、728 は土師器鍋である。

23-64 土坑 (図 270・296・336、図版 75)

23-64 土坑は、不定形な平面形を呈する。長軸は 1.64 m、短軸は 66 cm、深さは 24 cm を測る。埋土は大きく上半が黄灰から灰色の極細砂混じりシルトから粘質シルトで、下半は基盤層の黄色シルトに灰色極細砂混じりシルトのブロックを含む。土坑内からは、TK-73 型式の 729 に示す高杯杯部と、730 の甕体部が出土している。

ピット

以下に記すピットは、建物を構成する柱穴とらなかったが、時期が特定できる遺物や柱根が出土している。

7-85 ピット (図 270・337)

7-85 ピットは、平面形が楕円形を呈し、長径 31 cm、短径 28 cm、深さ 22 cm を測る。埋土は褐灰

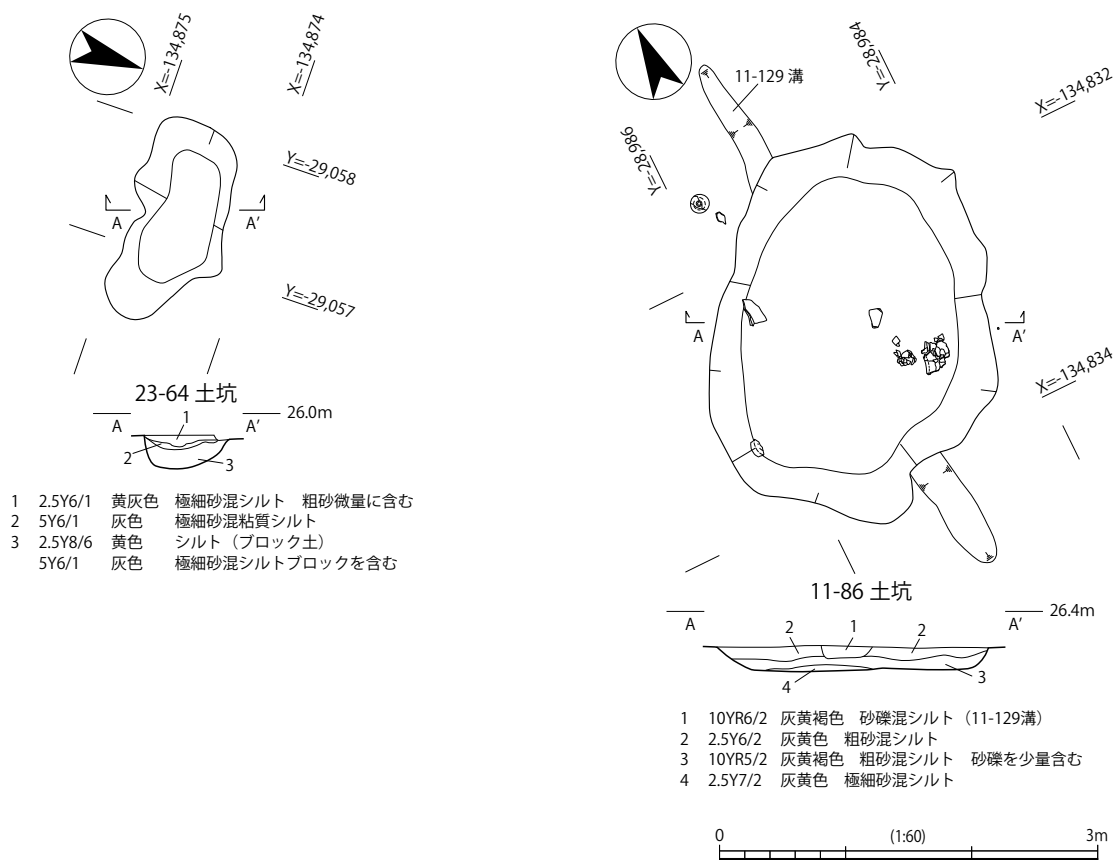


図 296 11-86 土坑 23-64 土坑 平・断面図

色系を呈する。ピット内から、731 に示す T K - 23 型式の杯が出土している。

7-110 ピット (図 270・337)

7-110 ピットは、平面形が円形を呈し、直径 53 cm、深さ 27 cm を測る。埋土は褐灰色系を呈する。ピット内から 732 に示す 5 世紀に考えられる製塩土器底部が出土している。

7-128 ピット (図 270・337)

7-128 ピットは、平面形が円形を呈し、直径 30 cm、深さ 36 cm を測る。埋土は褐灰色系を呈する。ピット内から 733 に示す M T - 15 型式の杯が出土している。

7-185 ピット (図 270・297・337、図版 91)

7-185 ピットは、他の遺構で上部が削平されているものの、平面形は円形を呈すると考えられる。直径は 36 cm、深さは 50 cm を測る。埋土は褐灰色系を呈する。ピット内には、735 に示す柱根が遺存していた。上部は切り取られ、根本部分が残されたのであろう。

7-312 ピット (図 270・337)

7-312 ピットは、平面形が楕円形を呈し、長径 30 cm、短径 25 cm、深さ 19 cm を測る。埋土は褐灰色系を呈する。ピット内から 736 に示す T K - 10 型式の杯蓋、737 の竈の把手片が出土している。

11-79 ピット (図 277・337)

11-79 ピットは、調査区境にあり半分が失われてしまっているが、平面形はほぼ円形を呈すると考えられる。検出長径は 30 cm、深さは 10 cm である。埋土は褐灰色系を呈する。ピット内から 738 に

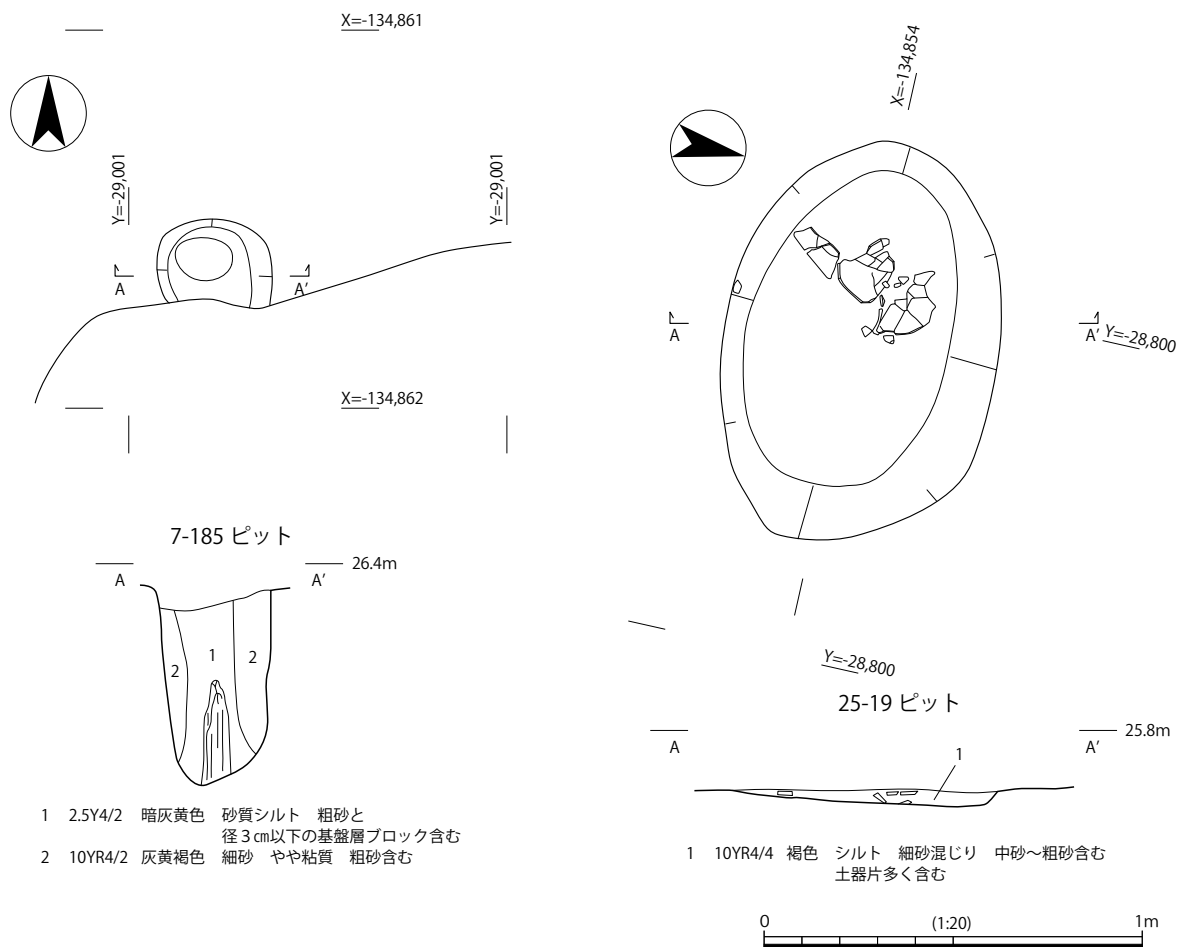


図 297 7-185 ピット 25-19 ピット 平・断面図

示す、5世紀前半と考えられる土師器高杯脚部が出土している。

11 - 172 ピット (図 270・337)

11 - 172 ピットは、平面形が円形を呈し、直径 42 cm、深さ 20 cmを測る。埋土は褐灰色系を呈する。ピット内から 739 に示す不明鉄製品が出土している。

25 - 37 ピット (図 270・337、図版 63 - 2)

25 - 37 ピットは、平面形が楕円形を呈し、長径 50 cm、短径 44 cm、深さ 15 cmを測る。埋土は灰黄褐色系を呈する。ピット内上部から、740 の土師器高杯杯部が出土している。

25 - 55 ピット (図 270・332、図版 85)

25 - 55 ピットは、平面形が円形を呈し直径 40 cm、深さ 12cm を測る。埋土は、中砂から粗砂が混じる暗黄灰色細砂シルトである。ピット内から、686 に示す敲石が出土している。

25 - 71 ピット (図 270・337)

25 - 71 ピットは、平面形が円形を呈し、直径 30 cmを測る。埋土は灰黄褐色系を呈する。ピット内から、741 に示す刀子の一部と考えられる板状の鉄製品が出土している。

溝

1 - 5 溝 (図 210・301・339、図版 63 - 3)

1 - 5 溝は、調査区内から、東へ向かって延び調査区外へと続く東西溝である。検出長は 4.23 m、断面位置で幅 68 cm、深さ 17 cmを測る。埋土は褐灰極細砂混じりシルトである。溝底面より若干上から土器がまとまって出土している。出土した土器は 742 に示す 6 世紀頃の土師器甕口縁部片の他、図化はできなかったが、須恵器杯・壺片、土師器碗・甕片が出土している。

1 - 56 溝 (図 270・299・337)

1 - 56 溝は、調査区東端で検出しており、全体は明らかではない。検出長 3.68 m、検出最大幅 70 cm、深さ 10 cmを測る。溝内から、743 に示す 5 世紀前半の土師器の丸底の壺が出土している。

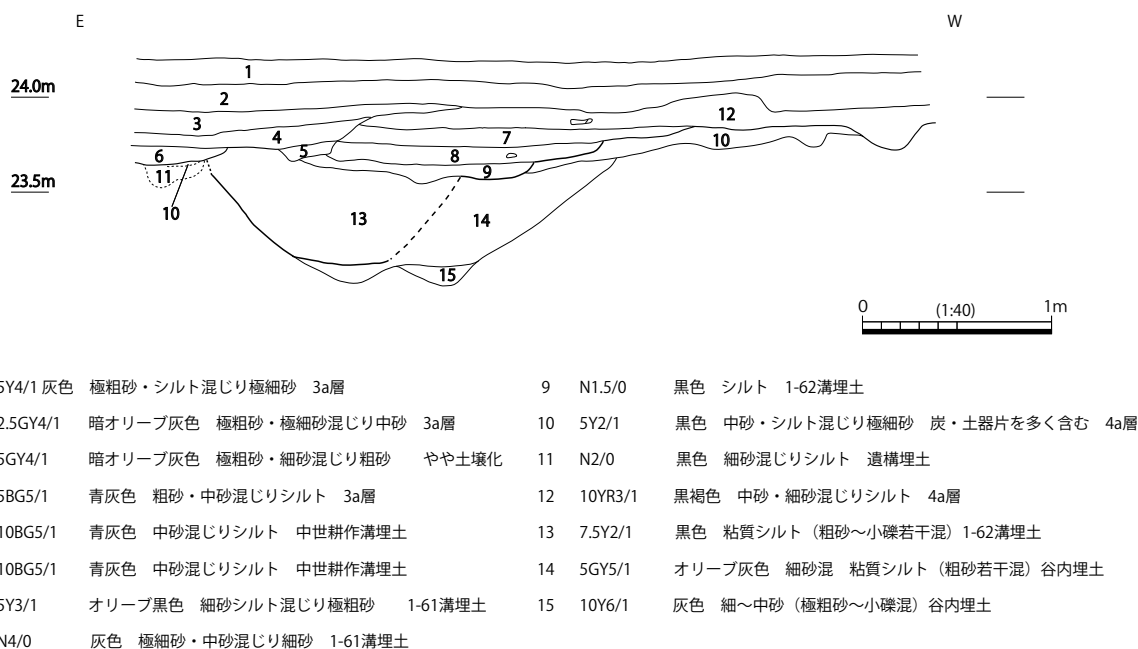
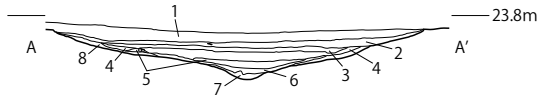
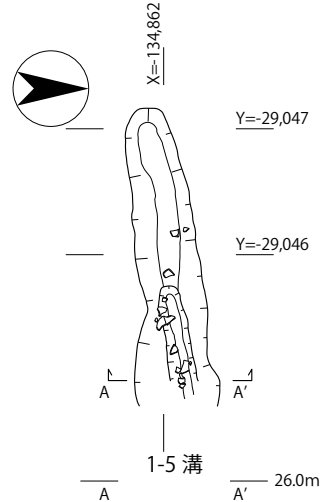


図 298 1 - 61・62 溝 断面図

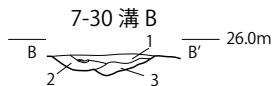
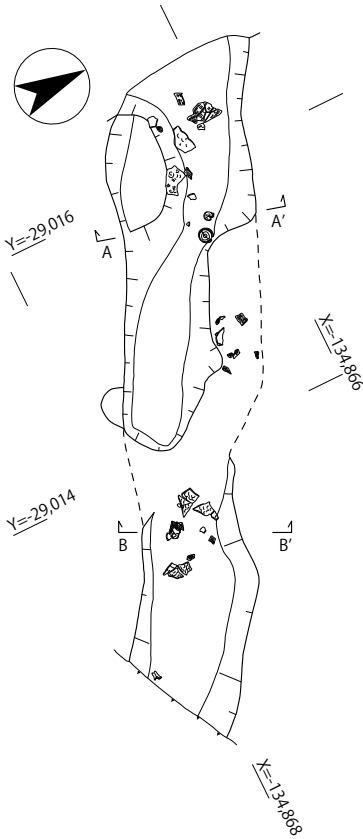


1-62 溝 (調査区北壁)

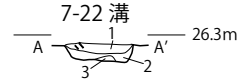
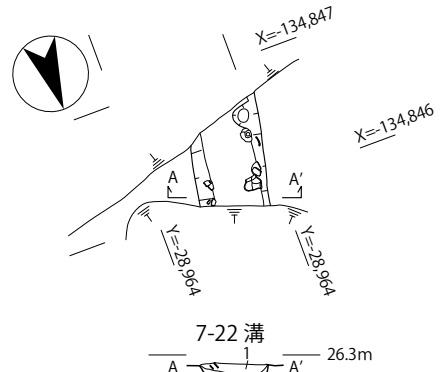
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色 極粗砂混シルト
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト混細砂 土器片含む
- 3 N3/0 暗灰色 シルト 土器片含む
- 4 7.5YR6/1 褐灰色 中砂～極粗砂 細礫(径5mm)を含む
- 5 N4/0 灰色 極細砂混細砂 炭を多く含む
- 6 10YR4/1 褐灰色 細砂混シルト 炭・中礫(径1cm大)を含む
- 7 10YR7/1 灰白色 砂礫層 粗砂～中礫(径1cm大)
- 8 5B5/1 青灰色 極粗砂混シルト



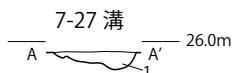
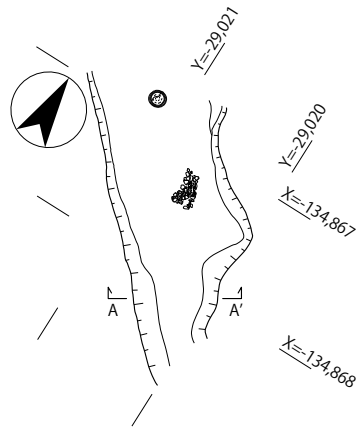
- 1 7.5Y4/1 褐灰色 極細砂混シルト 炭・土器片を含む



- 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト マンガンと基盤層斑状に含む 中砂若干混
- 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト若干含む
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト 鉄分沈着 基盤層若干混じる 細～中砂混 極粗砂若干混じる
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト 基盤層ブロック状に多く混じる 中砂多く混じる 極粗砂混じる



- 1 10YR5/1 褐灰色 極粗砂・極細砂混中砂
- 2 7.5YR4/1 褐灰色 粗砂・シルト混中砂
- 3 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂・中砂混シルト



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト 基盤層ブロック状に混じる 鉄分多く含む 中～粗砂多く混じる

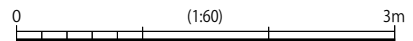


図 299 1-5・1-62・7-5・22・27・30 溝 平・断面図

1-57 溝 (図 270・337)

1-57 溝は調査区内を横断する西でやや南へ振れる東西溝である。延長 10.1 m、幅 51 cm から 22 cm、深さ 16 cm を測る。溝底の高さは、西端で 24.8 m、中央部で 24.4 m、東端で 24.25 m を測り、西から東へ傾斜している。なお、東・西に隣接する調査区では 25-1 区では溝の延長は検出していない。

溝内からは、744 に示す 5 世紀後半の無蓋高杯杯部、745・746 の 5 世紀前半に考えられる土師器高杯・甕が出土している

1-61 溝・1-62 溝 (図 292・298・299・337)

1-61 溝・1-62 溝は、調査時に付した遺構番号をそのまま使用しているが、その後の検討から同一の溝の、上部と下部とであることが判っている。また、1-74 井戸で述べたように、谷 2 から南へ派生する極小規模な谷状地形の底に位置する溝である。溝は調査区南端から始まり北へ延びる。北に位置する 24-1 区では、溝はなく谷となっており、谷へ注ぐ延長わずか 8.77 m の溝である。上面の幅と深さは、南端で 1.32 m、深さ 86 cm。北端で 5.12 m、深さ 77 cm を測る。溝底の傾斜は、南から北である。図 298・299 に溝断面を示すが、この図は断面位置が悪く位置が異なる断面を合成した模式図である。

埋土は上部が灰極細砂・中砂混じり細砂、下部が粗砂から小礫混じる黒シルトである。

上部 (1-61 溝) から出土した遺物は、747 から 753、下部 (1-62 溝) からは 754・755 である。

747・749 は須恵器杯・甕、748 は T K-208 型式の甕、750 から 755 は、大きく 5 世紀後半に考えられる土師器高杯脚部・甕口縁部・甕体部・甕体部下半部・小型の丸底壺上半部・複合口縁壺口縁部である。なお当遺構は、前述のような 24-1 区の状況から考えると、意図的に掘削された溝というよりも、単に狭小な谷部と、谷部内の埋積土とも考えることもできよう。

7-22 溝 (図 270・299・337)

7-22 溝は、攪乱により北部分が削平されており、南は調査区外へ延びている。検出長は 69 cm、断面位置での幅は 55 cm、深さは 15 cm を測る。埋土は下層に基盤層のブロックが入るが 2 層に分層できる。上層は褐灰色極粗砂・極細砂混じり中砂、下層は褐灰色粗砂・シルト混じり中砂である。上層から、756 に示す T K-23 型式の無蓋高杯杯部、5 世紀末から 6 世紀中頃と考えられる 757 の土師器高杯杯部、758 の土師器甕が出土している。

7-27 溝 (図 270・299・338、図版 74・63-4)

7-27 溝は、南東-北西方向に蛇行しながら延びる溝である。検出長は 13.51 m、幅は広い部分で 1 m 狭い部分で 24 cm を測る。溝底の標高は、南東端で 25.8 m、中央部分で 25.7 m、北西端で 25.7 cm を測り、やや北西へ下がる傾向が窺える。断面位置での検出面からの深さは 9 cm を測る。埋土は、基盤層のブロックを含む黄灰色粘質シルトで、中砂から粗砂を多く含み、流水による堆積はみられず、埋め戻しを示す基盤層ブロックがみられる。埋土上部付近からは、土師器を含む土器が出土しているが非常に脆く、図化できたのは 759 に示す、須恵器杯のみである。T K-216 型式と考えられる。

7-30 溝 (7-360 溝) (図 270・299・338、図版 74・63-5~8)

7-360 溝は、7-30 溝と同一遺構であり 7-30 溝に含めて記述する。7-30 溝は、7-27 溝の東側に位置し蛇行しながら南東-北西方向へ延びる溝である。検出長は約 21 m、幅は広い部分で 2.21 m、狭い部分では 33 cm を測る。溝底の標高は南東端で 25.78 m、中央部分で 25.74 m、北西端で 25.62 m を測り南東から北西へ下がる。断面位置で、検出面からの深さは 13 cm を測る。埋土

は大きく、基盤層のブロックを含む灰黄褐色・黄灰色を呈する中砂から極粗砂混じるシルトで、下部には基盤層ブロックを多く含む。流水による堆積はみられず、7-27溝同様に埋め戻しを示す基盤層のブロックがみられる。遺物は、主に埋土上部から760から766に示す土器が出土している。760は、MT-15型式の杯蓋、761はTK-208型式の杯、762はON-46型式の高杯脚部、763・764は土師器壺、765は土師器高杯、766は土師器甕である。土師器は5世紀前半に考えられる。

平坦面4

竪穴建物

竪穴建物10(図300・301・338・341)

竪穴建物10は、近・現代の素掘り水路により大きく削平を受けており、南西角部分のみの検出である。検出長は南辺1.3m、西辺1.9mを測り、検出面からの深さは15cmである。埋土は、上層が炭の小片や土器片を含む褐灰色粗砂混じりシルト、下層はにぶい黄橙色粗砂混じりシルト(基盤層)のブロックが混じる黄褐色シルトである。下層には基盤層ブロックが混じることから、床面を形成する層の可能性が考えられる。壁溝・支柱穴は検出していない。なお、隣接する私部南06-1調査区では、この竪穴建物の延長は検出されていない。

埋土中から、776に示すTK-23型式の高杯脚部と、5世紀前半に考えられる土師器小型の丸底壺口縁片が出土している。

竪穴建物11(図300・302~304・316・338・339・344、図版76・83・88・54-2・55・56)

竪穴建物11は、柱穴の重複関係から柵4に先行する遺構である。平面規模は、長辺6.4m、短辺4.95mの方形の竪穴建物で、西辺中央やや南寄りにカマドが設けられている。検出面から壁溝検出面までの深さは4cmを測る。竪穴部埋土は、褐灰色細砂から粗砂混じりシルトで炭化物や焼土塊・遺物を含む。

床面を形成する層は、灰黄褐細砂混じりシルトで明黄褐色細砂から粗砂混じりシルトのブロックが混じる。埋土からは、床面のやや上から土師器甕や鉄製の曲刃鎌、人頭大の石が出土している。

18-462カマドは、上部は失われているが袖部と奥壁は遺存している。平面形は方形を呈し、幅1.2m、奥行き1.05mを測る。焚口・燃烧部は袖部より12cm程低い。カマドは、壁溝を黄灰色細砂混じりシルトで埋めた後、須恵器甕片を外面向下に向けて敷き並べ、その上から焼土塊小片や炭の小片を含む、土灰褐色粗砂多く含むシルトと灰褐色細砂混じるシルトを積んで、奥壁そして袖部を構築している。

奥壁・袖部とも良く焼けており赤色化・硬化している。また、燃烧部も赤色化が著しい。支脚などは見つからない。カマド内からは、794に示す構築材である前述の須恵器甕の他、788に示す7世紀末頃と考えられる土師器甕が出土している。

壁溝は、幅25cm前後、検出面からの深さ17cmから20cm、床面からの深さ9cmを測る。断面形は西半分が二段掘りを呈し、東半分は段掘りを行っていない。埋土は二段掘りを呈する箇所では上層が焼土・炭小片少量含む褐灰色細砂混じりシルト、下層が炭小片わずかに入る黄灰色細砂混じりシルトである。

溝内からは、779・780・782・784に示すTK-217型式の杯・短頸壺が出土している。また、壁溝からは、18-135溝が西へ蛇行しながら延びている。

18-135溝は、延長約6m、幅48cm、深さ37cmを測る。溝底の標高は、竪穴部付近が21.9m、中央付近が21.82m、西端付近が21.81mを測り、東から西へ傾斜している。溝内から、908に示す須恵器杯蓋が出土しているが、竪穴部から出土した遺物の時期よりも古く、混入の可能性が考えられる。

支柱穴は18-249柱穴・18-251柱穴・18-252柱穴・18-278柱穴を検出している。平面形は、

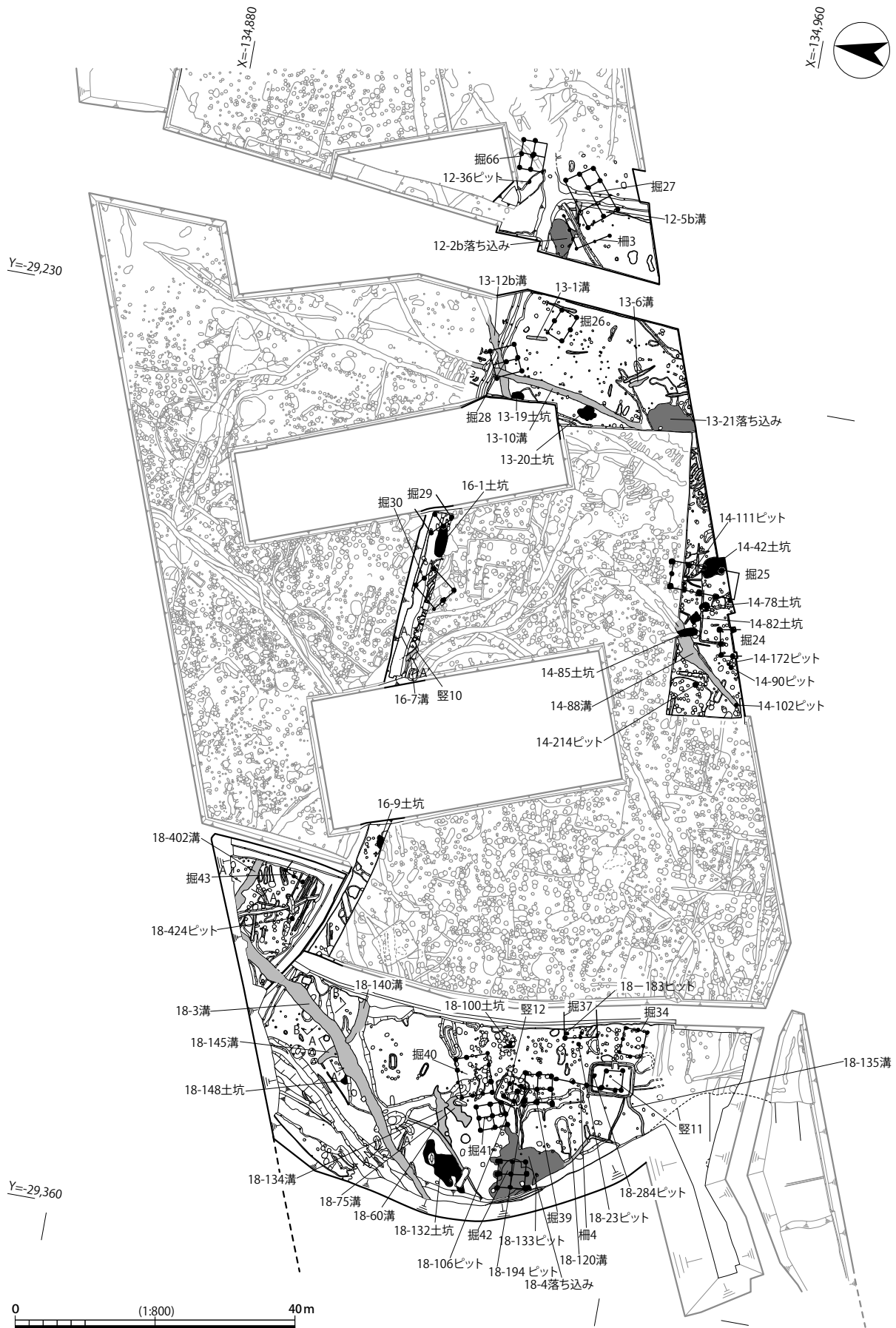


図 300 第 6 面検出 4 a 層帰属遺構配置図 (平坦面 4 古代～古墳時代)

不整円形を呈し、長径は 39 から 67 cm、深さは 22 から 30 cmを測る。18 - 278 柱穴以外の柱穴には、直径約 13 cm前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、黄灰色粗砂混じりシルトのブロックを含む灰褐色粗砂混じりシルトやにぶい黄橙色細砂混じりシルトから極細砂である。

竪穴部ほぼ中心には、長径 2.15 m、短径 1.5 m、深さ 10 cmの 18 - 253 土坑が検出されているが、床面を形成する層が土坑上面を覆っており、竪穴建物 11 構築時に伴う遺構と考えられる。土坑内からは、792 に示す T K - 217 型式の杯蓋、793 の 7 世紀後半の土師器皿が出土している。

竪穴建物の埋土からは、778・781・783、785 から 787、789 から 791・793、795 から 797 の遺物が出土している。778・781 は T K - 217 型式の杯蓋・杯、783 は須恵器鉢口縁部、785 は T K - 217 型式の台付壺の脚部、786・787・789・790 は 7 世紀後半の土師器杯・甕口縁部・把手付甕上半部、791 は土師器羽釜、795・796 は滑石製白玉、797 は鉄製の曲刃鎌である。また、鉾滓も 3 点出土している。出土遺物から 7 世紀後半前後の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物 12 (図 300・305・316・339、図版 76・57 - 1 ~ 5)

竪穴建物 12 は、一辺約 4.2 m の方形の竪穴建物である。南へ約 8.7 m の位置にある竪穴建物 11 とは異なり、埋土からの遺物も少なく、カマドも痕跡のみの検出であった。埋土は、炭化物を少量、細礫を多量に含むにぶい黄褐灰砂質シルトである。検出面から床面を形成する、細礫を多量に含む黄褐色砂質シルト層まで 8 cm を測る。

カマドは、おそらく燃焼部と考えられる被熱により赤色化した部分を検出するに留まり、袖部などは検出できなかった。

壁溝は、西辺で検出できなかったものの幅 30 cm 前後、床面からの壁溝の深さは 8 cm を測る。埋土は、微砂から細砂を含み、細礫をごく少量含む灰黄褐色粘質シルトである。

主柱穴は 18 - 137 柱穴・18 - 257 柱穴・18 - 263 柱穴・18 - 269 柱穴である。平面形は円形を呈し直径 44 cm、深さ 20 から 43 cm を測る。全ての柱穴に直径 10 cm 前後の柱痕跡がみられる。掘方埋土は、主に黄褐色系の砂質シルトから細砂で細礫を含む。柱穴からは、土師器の破片が出土しているが図化できる遺物はない。

竪穴建物の埋土中からは、798 に示す M T - 85 型式の杯蓋、799 の T K - 217 型式の杯蓋、800 から 802 の T K - 217 型式の杯、803 の須恵器鉢、804 の 7 世紀初頭の土師器杯、805 の土師器甕

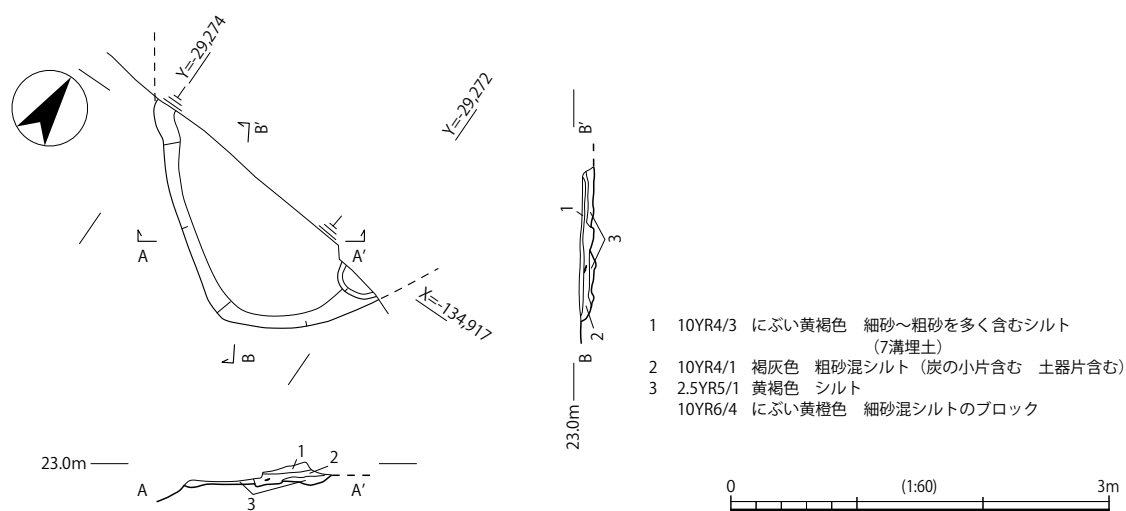


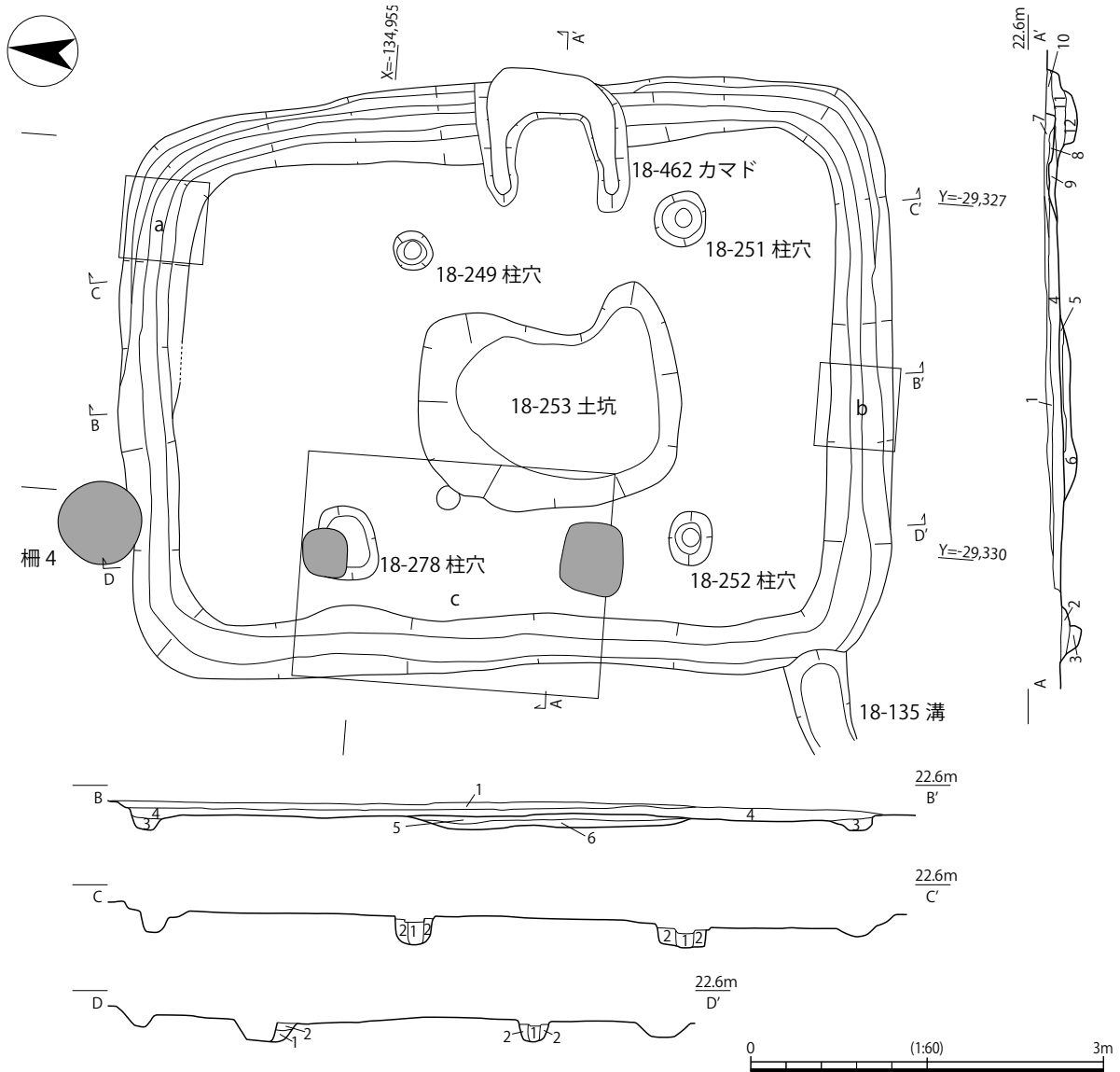
図 301 竪穴建物 10 平・断面図

口縁部片が出土している。出土遺物から7世紀後半前後の竪穴建物と考えられる。なお、竪穴建物11出土土器が竪穴建物12よりもやや古相を示しており、併存もしくは竪穴建物11→竪穴建物12の順で存在したと考えられる。

掘立柱建物

掘立柱建物24（図300・306・316・340、図版58-1）

掘立柱建物24は、調査区外へ延びる建物で全体は明らかではないが、梁行2間で、桁行2間以上の



18-249	1	10YR6/2	灰黄褐色	シルト～細砂（粗砂を少し含む）	4	10YR5/2	灰黄褐色	細砂混シルト
	2	10YR6/3	にぶい黄橙色	細砂混シルト～極細砂		10YR6/6	明黄褐色	細砂～粗砂混シルトがブロック状に混じる（粗砂～小礫を多く含む）
18-251	1	10YR5/2	灰黄褐色	シルト～極細砂（粗砂を少し含む）	5	10YR4/2	灰黄褐色	細砂混シルト
	2	10YR5/1	褐灰色	粗砂混シルト		10YR6/6	明黄褐色	細砂～粗砂混シルトがブロック状に混じる（4層よりブロック塊大きい）
18-252	1	2.5Y5/1	黄灰色	細砂混シルト	6	10YR4/1	褐灰色	細砂混シルト
	2	10YR5/1	褐灰色	粗砂混シルト		10YR5/6	明褐色	細砂混シルトの小ブロックを少し含む
		2.5Y5/3	黄褐色	粗砂混シルトのブロック含む	7	10YR4/2	灰黄褐色	細砂混シルト（炭片）
18-278	1	2.5Y5/1	黄灰色	細砂混シルト		5YR4/8	赤褐色	細砂～粗砂混シルト（径1～2cmブロック多量に混じる）
	2	2.5Y4/1	黄灰色	細砂混シルト	8	7.5YR4/1	灰褐色	シルト（炭の小片・焼土の小片含む）
竪穴11	1	10YR4/1	褐灰色	細砂～粗砂混シルト	9	10YR5/2	灰黄褐色	細砂混シルト
	2	10YR4/2	灰黄褐色	細砂～粗砂混シルト		10YR6/6	明黄褐色	細砂～粗砂混シルトがブロック状に混じる（粗砂・小礫を含む）
		10YR5/6	黄褐色	シルトのブロックを含む	10	7.5YR4/2	灰褐色	粗砂多く含むシルト（焼土 径1cmまでの小片・炭の小片を多く含む）
	3	2.5Y4/1	黄灰色	細砂混シルト	11	10YR4/1	褐灰色	細砂混シルト（焼土小片・炭の小片少し含む）
					12	2.5Y4/1	黄灰色	細砂混シルト（炭小片ごくわずかに含む）

図302 竪穴建物11 平・断面図

南北棟である。梁行寸法は 3.4 m、桁行寸法は 1.7 m 以上である。柱間寸法は、梁行方向 1.5 m と 1.9 m、桁行方向が 1.7 から 1.8 m である。棟筋は、北で西へ約 12° 振れている。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈し、直径が 50 から 73 cm を測る。深さは、39 から 65 cm である。柱穴埋土は、掘方埋土がおおむね灰黄褐色の砂礫混じりのシルトで、14 - 69 柱穴以外には柱痕跡がみられる。

14 - 69 柱穴から 806 に示す T K - 10 型式の杯が出土している。出土遺物から 6 世紀中頃以降の時期に考えられる掘立柱建物である。

掘立柱建物 25 (図 300・307・316、図版 58 - 2)

掘立柱建物 25 は、本調査分と私部南 06 - 1 調査区で検出した柱穴で構成される建物であるが、南妻柱と南東隅柱は調査区外のため検出しておらず、全体は明らかではない。おそらく梁行 2 間、桁行 4 間の南北棟の建物と考えられる。梁行寸法は北妻側 3.9 m、南妻側は復元で 4.1 m。桁行寸法は西平側が 8.7 m、東平側が 9.0 m を測る。身舎の面積は 34.4 m² である。柱間寸法は、梁行方向 1.8 から 1.9 m、

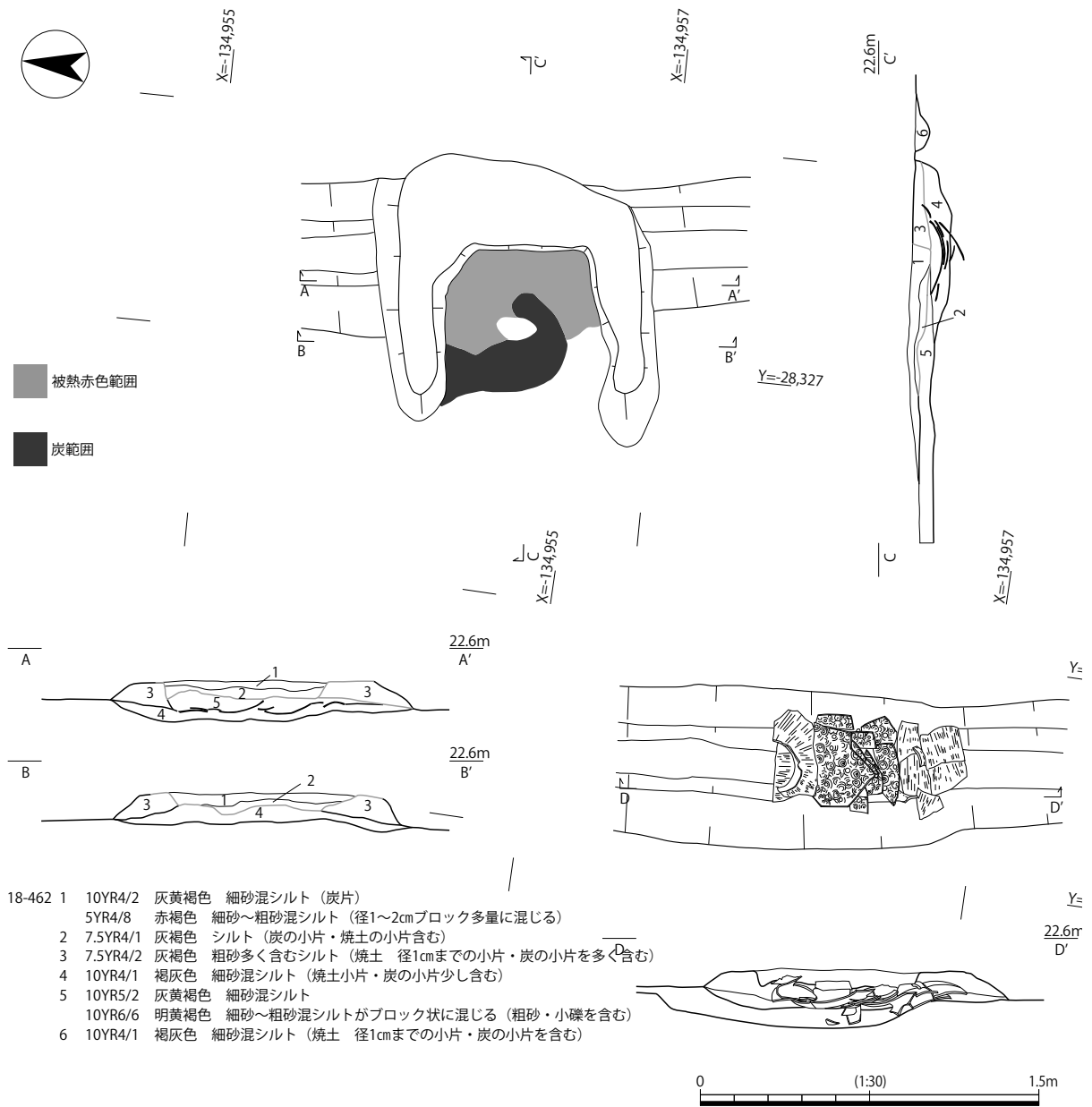


図 303 竪穴建物 11 18 - 462 カマド 平・断面図

桁行方向が 1.9 から 2.5 m を測る。東平側の柱筋は、ほぼ南北方向で振れはない。

柱穴の平面形は、方形から不整形円形を呈し、直径もしくは長径が 42 から 82 cm、深さは 10 から 46 cm を測る。14 - 56 柱穴・14 - 57 柱穴・14 - 58 柱穴・14 - 59 柱穴・14 - 61 柱穴には直径 16 cm 前後の柱痕跡がみられる。図化はできなかったが、14 - 61 柱穴から MT - 21 型式の杯が出土している他、6 世紀の須恵器杯・杯蓋片や土師器・須恵器片が出土している。出土遺物から、7 世紀末から 8 世紀初頭以降の建物と考えられる。

掘立柱建物 27 (図 300・308・316)

掘立柱建物 27 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物である。梁行寸法は 3.9 m と 4.2 m、桁行寸法は 7.3 m と 6.6 m、非常に歪な平面形を呈する建物である。身舎の面積は約 31.5 m² を測る。柱間寸法は、梁行方向 2.1 から 2.7 m、桁行方向が 2 から 2.6 m で、柱筋の通りは悪い。棟筋は、西で南へ約 40° 振れる。

柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈し、直径が 22 から 52 cm、深さは、14 から 30 cm を測る。柱痕跡は検出した 12 基の内、7 基の柱穴に見られた。柱穴の掘方埋土は褐色系の粗砂混じりシルトが主で基盤

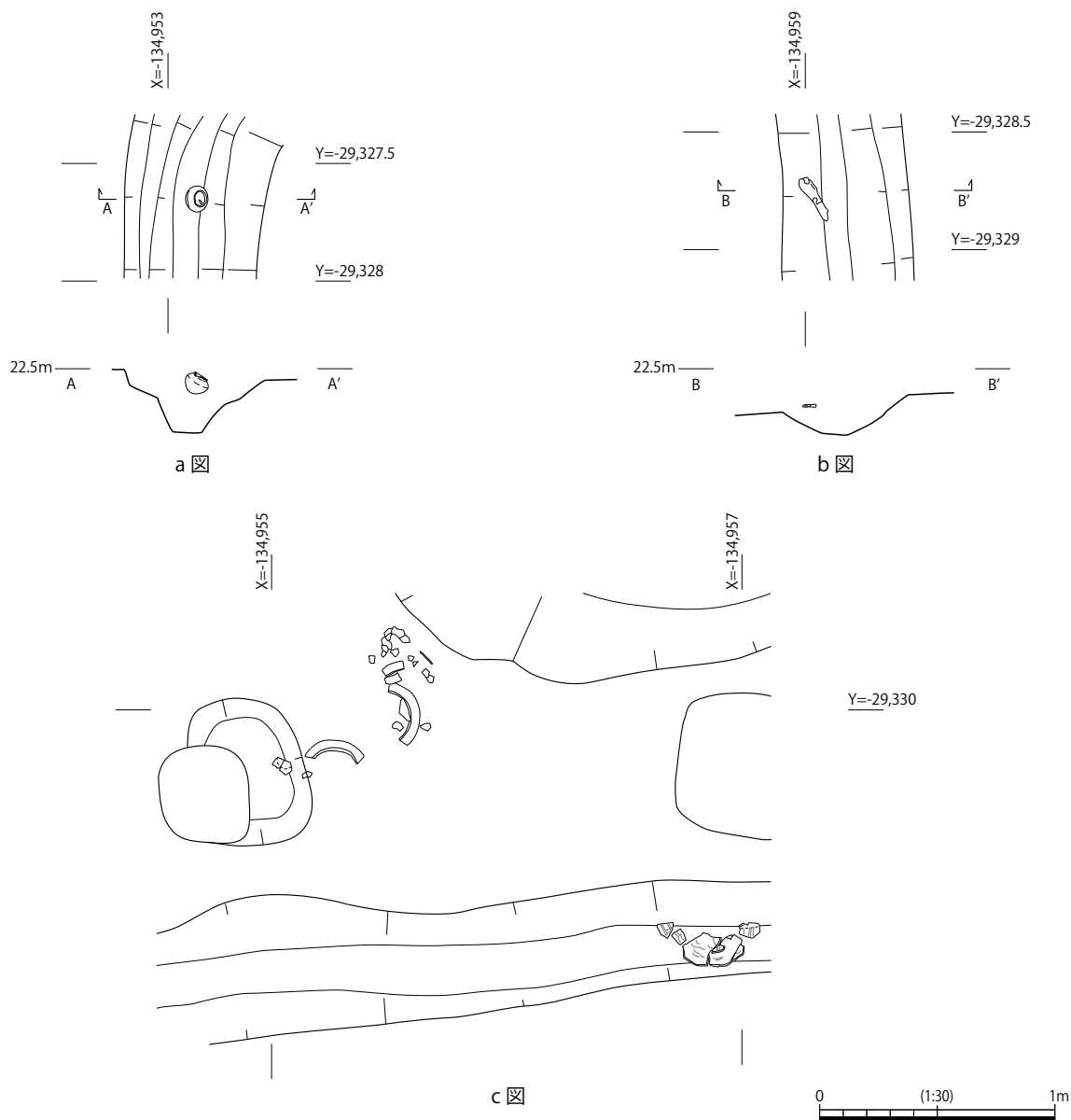
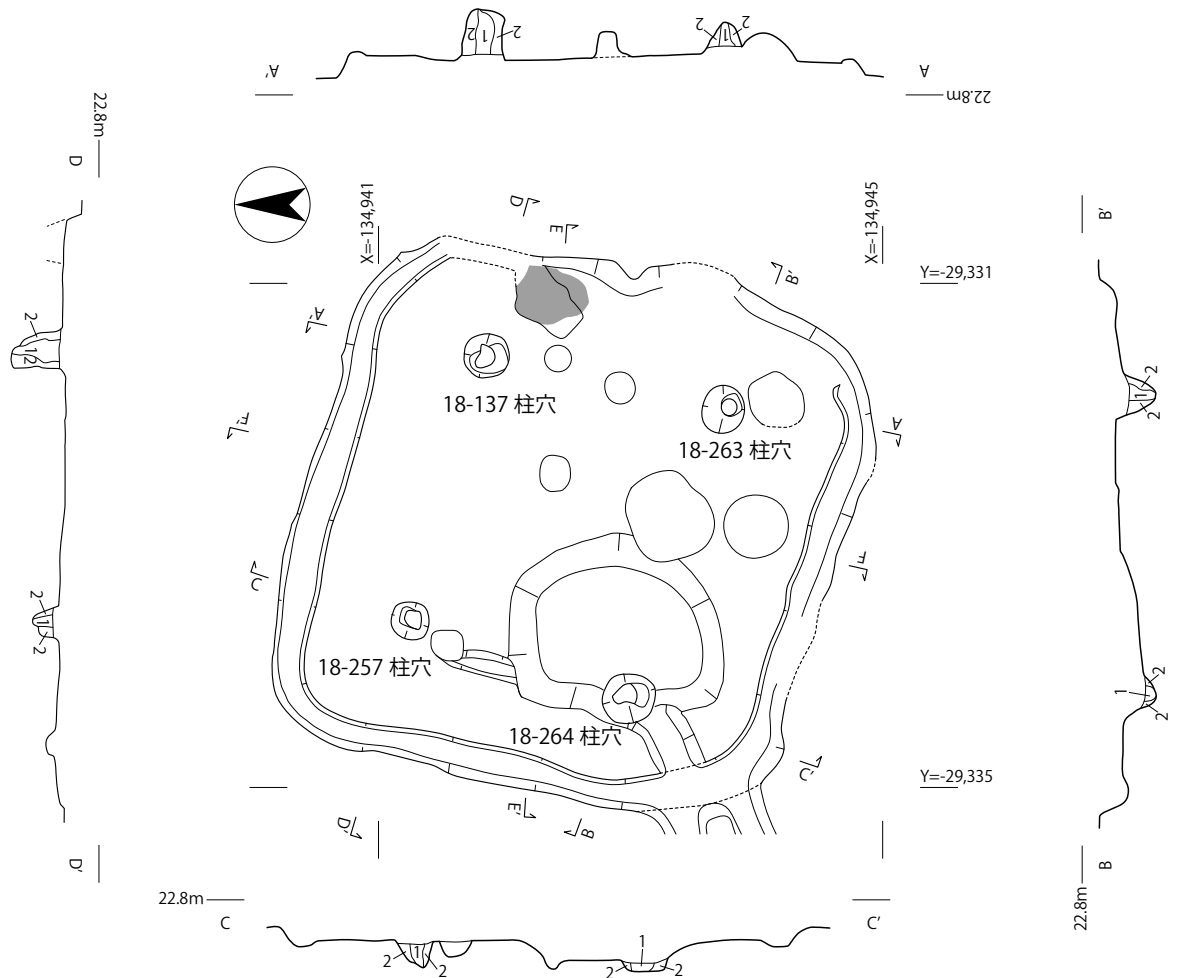
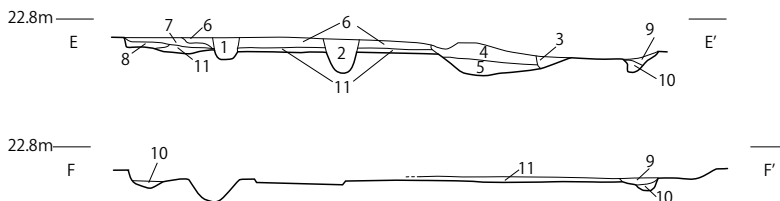


図 304 竪穴建物 11 遺物出土状況図



18-137	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	細～粗砂	5mm以下の礫を少量含む	18-263	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	細～粗砂	5mm以下の礫を少量含む	炭化物含む
	2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	細～粗砂	5mm以下の礫を少量含む		2	10YR4/3	にぶい黄褐色	細～粗砂	5mm以下の礫を多量に含む	基盤層多量に含む	
18-257	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂	粗砂	5mm以下の礫を含む	18-264	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂	粗砂	5mm以下の礫を多量に含む	基盤層多量に含む
	2	2.5Y5/3	黄褐色	細砂	粗砂	5mm以下の礫を多量に含む		2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	細～粗砂	5mm以下の礫を含む	



縦12	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	炭化物	径1cmの礫含む
	2	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	径5mm以下の礫を少量含む	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	微～細砂	径5mm以下の礫を含む	
	4	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	炭化物	径1cm以下の礫を多量に含む
	5	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘質シルト	径5mm以下の礫を少量含む	
	6	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を少量	径1cm以下の礫を多量に含む
	7	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂質シルト	炭化物を少量	径5mm以下の礫を多量に含む
	8	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	径5mm以下の礫を少量含む	
	9	10YR4/3	暗灰色	砂質シルト	径1cm以下の礫を少量含む	
	10	2.5Y4/3	オリーブ褐色	微～細砂	径5mm以下の礫を少量含む	
	11	2.5Y5/4	黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の礫を多量に含む	被熱している

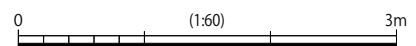


図 305 竪穴建物 12 平・断面図

層のブロックが混じるものもある。

12 - 19 柱穴から、庄内式土器と考えられる破片が出土している他、土師器片が出土している。掘方埋土などから、古墳時代から奈良時代頃に考えられる建物である。

掘立柱建物 30 (図 300・309・340)

掘立柱建物 30 は、本調査分と私部南 06 - 1 調査区で検出した柱穴で構成する梁行 2 間、桁行 1 間の建物である。梁行寸法は 3.5 m、桁行寸法は 4.1 m である。梁行の柱間寸法は 1.7 m と 1.8 m、桁行寸法は 4.1 m で、身舎の面積は 14.4 m² を測る。棟筋は西で南へ約 50° 振れる。柱穴の平面形は不整形から楕円形で、直径もしくは長軸長が 38 から 75 cm、深さは 30 から 66 cm を測る。16 - 17 柱穴と 16 - 18 柱穴に柱痕跡が見られ、掘方埋土は黄褐色系の細砂から粗砂混じりシルトである。

16 - 18 柱穴から、808 に示す MT - 15 型式の杯、809 の 6 世紀に考えられる須恵器甕が出土している。出土遺物から、6 世紀前半以降の建物と考えられる。

掘立柱建物 34 (図 300・310・316)

掘立柱建物 34 は、梁行 2 間、桁 2 行間の東西棟である。南西隅柱は 18 - 158 土坑により削平され検出できなかった。12 - 68 柱穴と 12 - 72 柱穴は、私部南 06 - 1 調査区で検出している遺構で、本調査において掘立柱建物 34 を構成する柱穴と認識できた遺構である。柱筋は通りが悪く、平面形も歪である。梁行寸法は西妻側が 3.0 m、東妻側が 3.1 m。桁行寸法は北平側が 3.6 m、南平側が 4.0 m を測る。身舎の面積は約 11.6 m² である。柱間寸法は、梁行方向 1.1 から 2.0 m、桁行方向は 1.7 から 2.0 m と不揃いである。棟筋は、東西で振れはない。柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、直径は 35 cm 前後を測る。

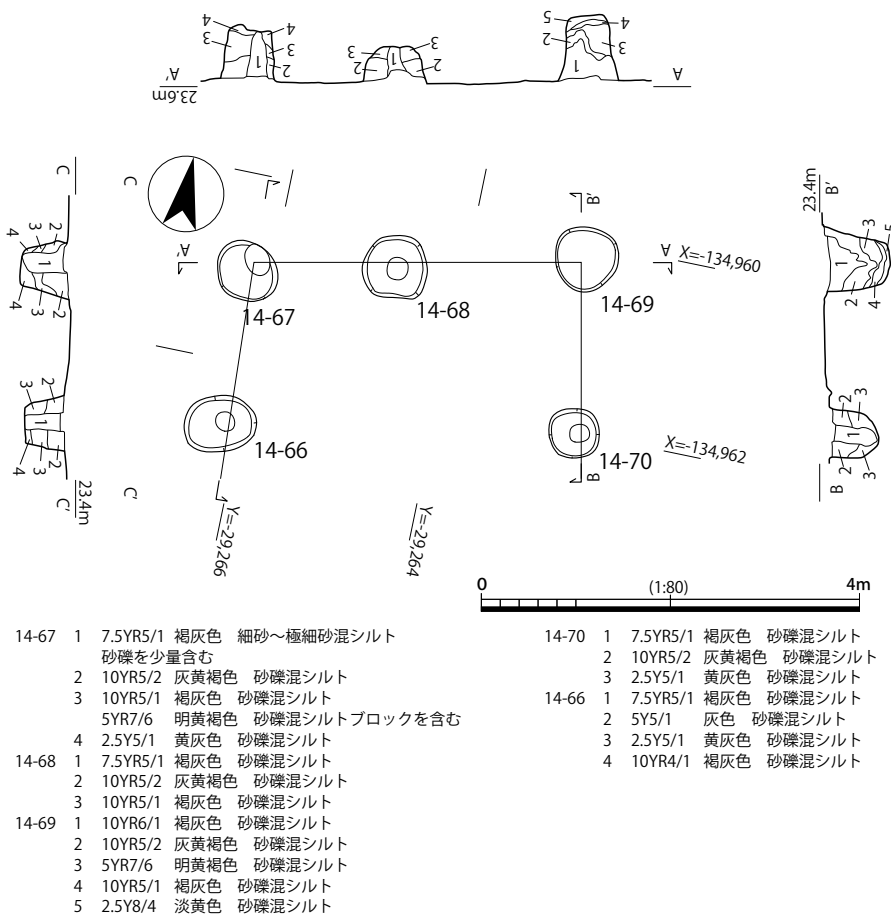
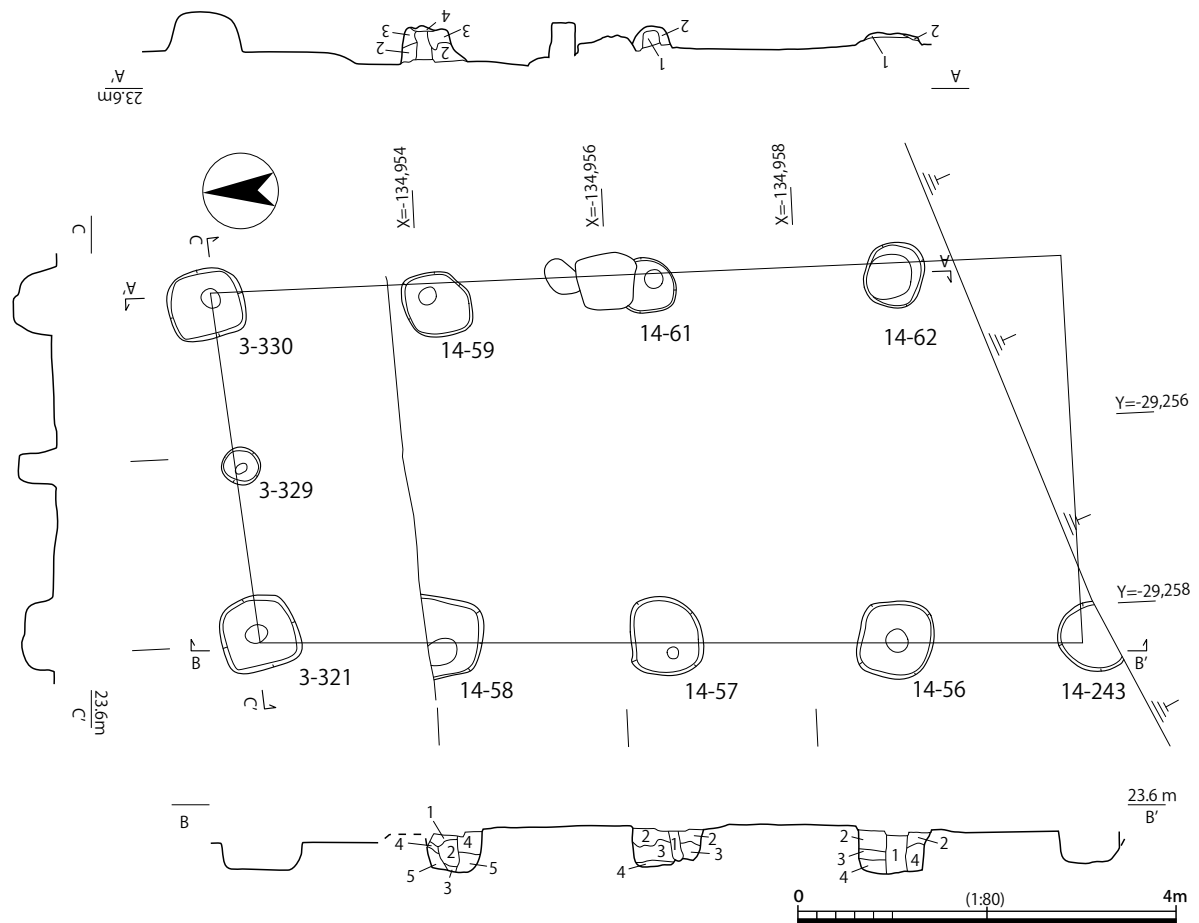


図 306 掘立柱建物 24 平・断面図



14-59	1	5Y6/1	灰色 粗砂混シルト	14-56	1	2.5Y5/1	黄灰色 粗砂混シルト	14-57	1	5Y6/1	灰色 粗砂混シルト	
	2	2.5Y5/1	黄灰色 極粗砂混シルト		2	2.5Y8/4	淡黄色 砂礫混シルト		2	2.5Y6/1	黄灰色 砂礫混シルト	
	3	10YR8/4	淡黄橙色 細砂粘質シルト		3	5Y5/1	灰色 細砂混シルト		3	10YR6/1	褐灰色 細砂～中砂混シルト	
	4	10YR8/4	淡黄橙色 粘質シルト		4	5Y7/4	淡黄色 細砂混シルト		4	10YR8/4	淡黄橙色 極細砂混粘質シルト	
14-61	1	10YR8/4	淡黄橙色 粗砂混シルト		14-58	1	2.5Y8/4	淡黄色 粗砂混シルト		1	2.5Y8/4	淡黄色 粗砂混シルト
	2	10YR5/2	灰黄褐色 粗砂混シルト			2	2.5Y5/1	黄灰色 粗砂混シルト		2	2.5Y5/1	黄灰色 粗砂混シルト
14-62	1	2.5Y6/1	黄灰色 細砂混シルト			3	5Y5/1	灰色 細砂混シルト		3	5Y5/1	灰色 細砂混シルト
	2	2.5Y8/3	浅黄色 粘質シルト			4	10YR5/1	褐灰色 細砂～中砂混シルト		4	10YR5/1	褐灰色 細砂～中砂混シルト
14-243	1	10YR5/1	褐灰色 砂礫混シルト			5	2.5Y6/2	黄灰色 細砂混シルト		5	2.5Y6/2	黄灰色 細砂混シルト
	2	2.5Y6/1	黄灰色 砂礫混シルト									

図 307 掘立柱建物 25 平・断面図

掘立柱建物 27 土色

12-9	1	10YR4/2	灰黄褐色 砂質シルト	微～細砂	12-20	1	10YR4/4	褐色 砂質シルト	5mm以下の礫多量含む
						2	10YR4/2	灰黄褐色 砂質シルト	微～細砂
12-10	1	2.5Y4/2	暗灰黄色 砂質シルト	微～細砂含む					5mm以下の礫多量を含む
				やや粘質	12-21	1	5Y4/2	灰オリーブ色 砂質シルト	細～粗砂
12-11	1	10YR5/1	灰黄褐色 中砂混シルト～細砂			2	2.5Y4/1	灰色 細砂	微砂～粗砂少量含む
	2	10YR4/2	灰黄褐色 粗砂混細砂～中砂		12-22	1	10YR4/2	灰黄褐色 粗砂混細砂	
	3	10YR5/2	灰黄褐色 粗砂～極粗砂混シルト～細砂			2	7.5YR4/6	褐色 粗砂～極粗砂混細砂	
12-15	1	10YR4/3	にぶい黄褐色 粗砂混細砂	径～1cm基盤層ブロックを含む					10YR6/2 灰黄褐色 シルト～細砂が混じる
	2	10YR5/2	灰黄褐色 粗砂混細砂～中砂	径～2cm基盤層ブロックを含む	12-23	1	10YR4/1	褐灰色 砂質シルト	微～細砂含む
12-19	1	10YR5/2	灰黄褐色 粗砂混シルト～細砂			2	10YR4/2	灰黄褐色 細砂 粗砂と3cm以下の基盤層ブロック含む	
					12-24	1	10YR4/4	褐色 細砂 粗砂と3cm以下の礫	
						2	10YR4/2	灰黄褐色 細砂 粗砂と5cm以下の基盤層ブロック含む	
					12-25	1	10YR4/2	灰黄褐色 シルト (微～粗砂含む 3mm以下の礫含む)	
						2	10YR3/3	暗灰色 シルト (粗砂 3mm以下の礫 基盤層土含む)	
					12-26	1	2.5Y4/2	暗灰黄色 シルト (微～粗砂含む 3mm以下の礫含む)	
12-18	1	10YR4/2	灰黄褐色 微～細砂	5mm以下の礫多量含む		2	10YR4/4	褐色 微～細砂混シルト (粗砂 3mm以下の礫 基盤層土含む)	
	2	10YR4/6	褐色 粗砂と5mm以下の礫を多量に含む		12-27	1	2.5Y4/2	暗灰黄色 シルト (微～粗砂 3mm以下の礫 基盤層土含む)	
12-16	1	5Y5/2	灰オリーブ色 砂質シルト	5mm以下礫含基盤層土		2	2.5Y4/1	黄灰色 シルト (微～粗砂 3mm以下の礫 基盤層土含む)	
									(径3cm以下の基盤層ブロック含む)
					12-28	1	10YR4/4	褐色 微～粗砂混シルト (3mm以下の礫と基盤層土)	
						2	10YR4/1	褐灰色 細砂 (粗砂と3mm以下の礫を多量に含む	
									径3mm以下の基盤層ブロック多量に含む)

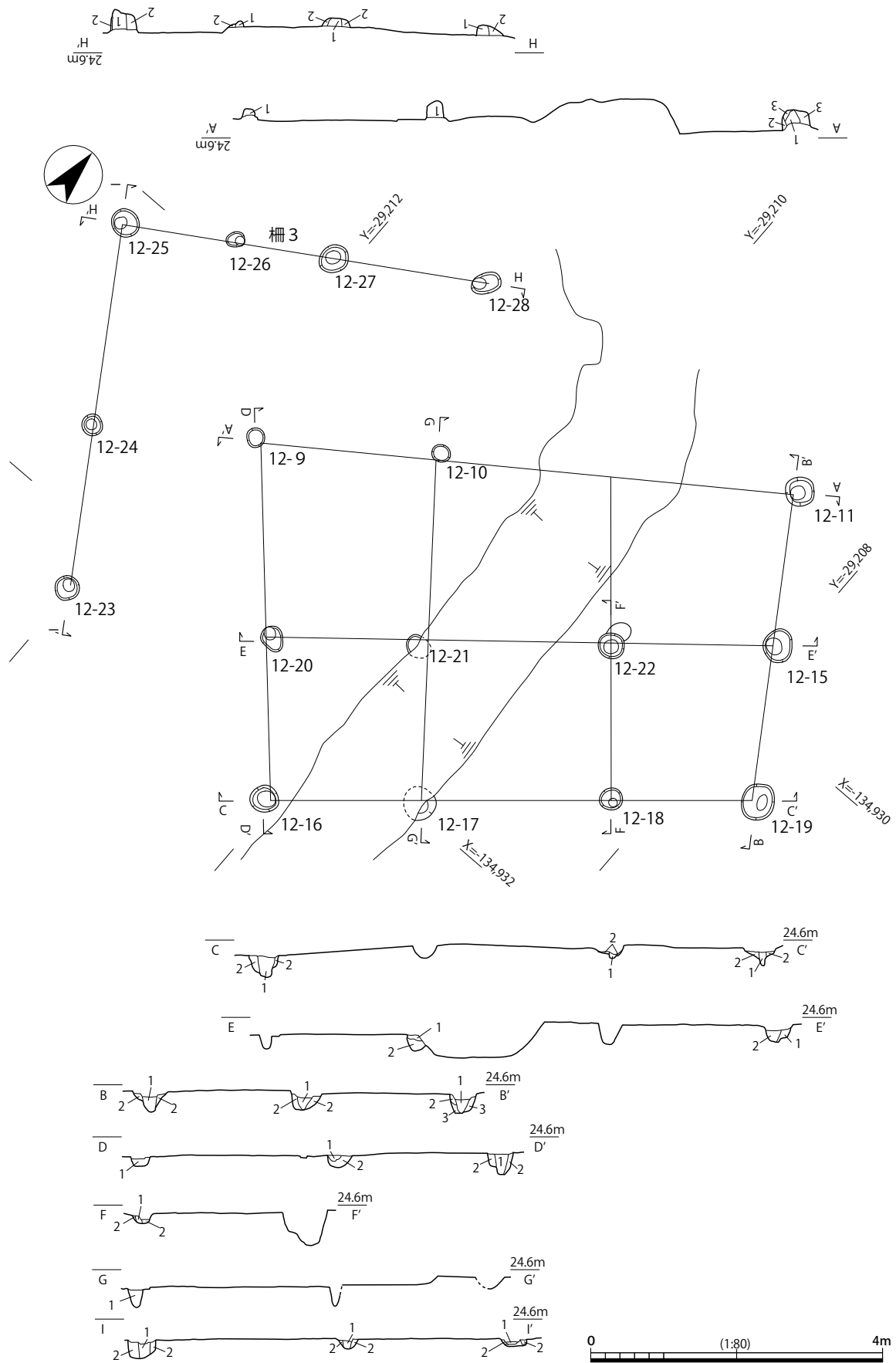


图 308 掘立柱建物 27 平·断面图

深さは 10 から 39 cm である。掘方埋土は黄褐色系の極粗砂混じりシルトを主とする。

図化はできなかったが、18 - 14 柱穴から 6 世紀初頭の須恵器杯、18 - 178 柱穴から 6 世紀後半の須恵器杯蓋が出土している他、土師器・須恵器の破片が出土している。建物の時期は、6 世紀後半以降に考えられる。

掘立柱建物 39 (図 300・311・316・340、図版 59 - 1)

掘立柱建物 39 は、遺構の重複関係から竪穴建物 12 よりも新しい、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物である。東西長が南北長に比べやや長いことから、南北方向を梁行として記述する。梁行寸法は 3.8 m と 3.9 m、桁行寸法は 4 m で、身舎の平面形はほぼ平行四辺形を呈し、面積は 15.5 m² である。梁行の柱間寸法は 1.8 m・1.9 m・2 m、桁行寸法は 1.7 m・1.8 m・2.2 m・2.3 m を測る。

柱穴の平面形は、隅丸方形から不整楕円形を呈し、長辺ないし長軸は 40 から 80 cm を測る。深さは 8 から 40 cm であるが、掘方の底面を比較すると、西平側柱が他の柱穴よりやや深く掘削されている。

柱痕跡は 18 - 105 柱穴・18 - 189 柱穴・18 - 193 柱穴・18 - 195 柱穴にみられる。掘方埋土は、黄褐色系の極細砂混じりシルトが主である。

18 - 105 柱穴から、812 に示す、TK - 217 型式の無蓋高杯杯部、813 の 6 世紀後半以降の須恵器高杯脚部が出土している。また 18 - 190 柱穴から、814 に示す 5 世紀後半の須恵器無蓋高杯の杯

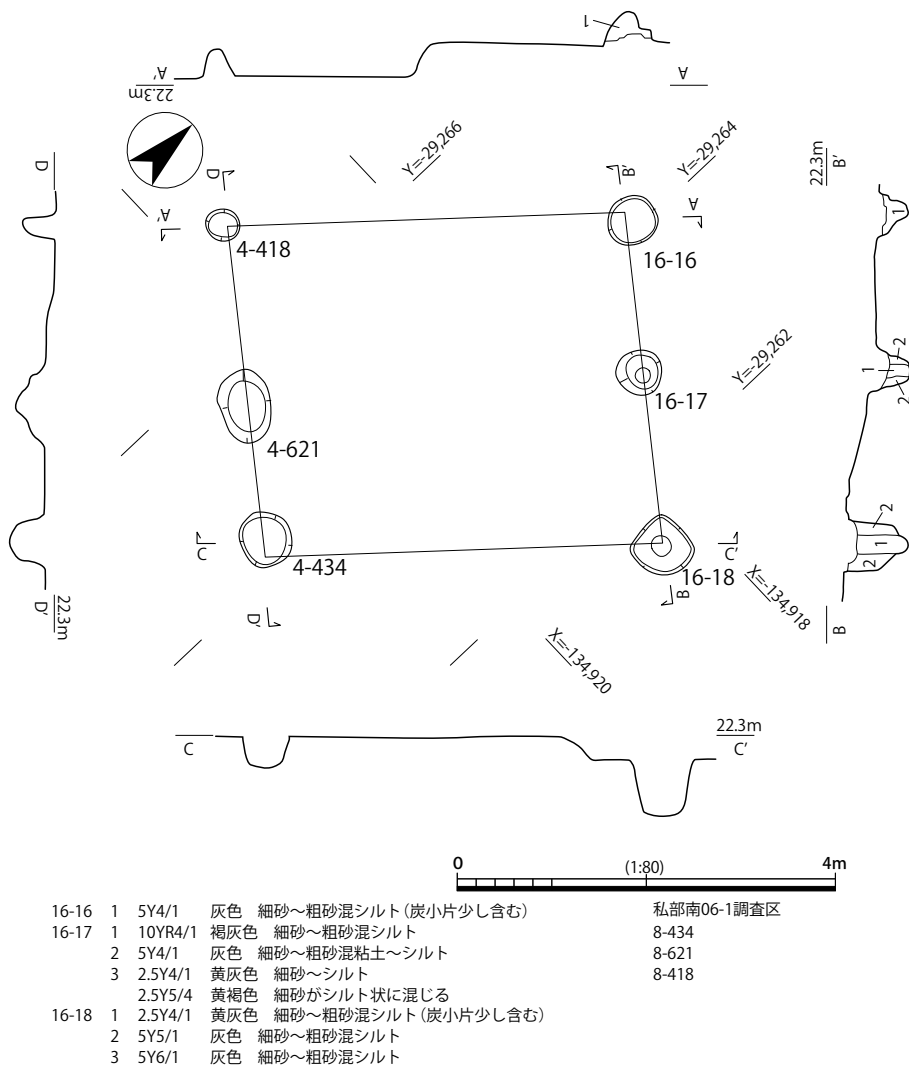


図 309 掘立柱建物 30 平・断面図

部片が出土している。出土遺物から7世紀中頃以降の建物と考えられる。

掘立柱建物 40 (図 300・312・316、図版 59 - 2)

掘立柱建物 40 は、梁行3間、桁行3間の南北棟である。梁行寸法は 4.4 m、桁行寸法は 5.4 mを測るやや歪な平面形の建物で、身舎の面積は、23.7 m²である。梁行の柱間寸法は 1.4 から 1.6 m、桁行の柱間寸法は 1.4 から 2.4 mを測る。棟筋は西で南へ 21° 振れる。柱穴の平面形は不整円形を呈し、直径は 42 から 69 cmで、深さは 10 から 36 cmを測る。南平側の柱穴と西妻側の柱穴の、掘方底面の標高が他よりもやや深い傾向がみられる。柱穴の約半数に、柱痕跡が見られた。掘方の埋土は、黒褐色系の粗砂混じりの砂質シルトに基盤層のブロックを含むものが主である。

初期須恵器を含む須恵器・土師器・弥生土器片が出土している。時期を特定できるものはないが、掘方埋土や、建物の振れが掘立柱建物 41 と類似していることなどから、6世紀初頭以降に考えられる建物である。

掘立柱建物 41 (図 300・313・316・340、図版 60 - 1)

掘立柱建物 41 は、梁行2間、桁行2間の南北棟の総柱の建物である。梁行寸法は北妻側が 3.4 m、南妻側が 3.2 m。桁行寸法は西平側 4.0 m、東平側が 3.6 mを測り、非常に歪な平面形を呈する。身舎の面積は約 12.5 m²を測る。柱間寸法は、梁行方向 1.5 mと 1.7 m、桁行方向が 2.0 mと 1.6 mである。

棟筋は、北で西へ約 20° 振れる。柱穴の平面形は、楕円形から円形を呈し、直径もしくは長径が 58 から 67 cmを測る。深さは、16 から 46 cmである。北妻側の柱穴が、南妻側よりも掘方が深く掘削されている。全ての柱穴に柱痕跡が認められる。掘方埋土は、黒褐から灰黄褐色系の粗砂から細砂混じりシルトが主である。

出土遺物は、図化はできなかったが 18 - 65 柱穴と 18 - 66 柱穴から 6世紀初頭の須恵器杯片、18 - 63 柱穴から 815 に示す鉄釘が出土している他、土師器・須恵器の破片が出土している。出土遺

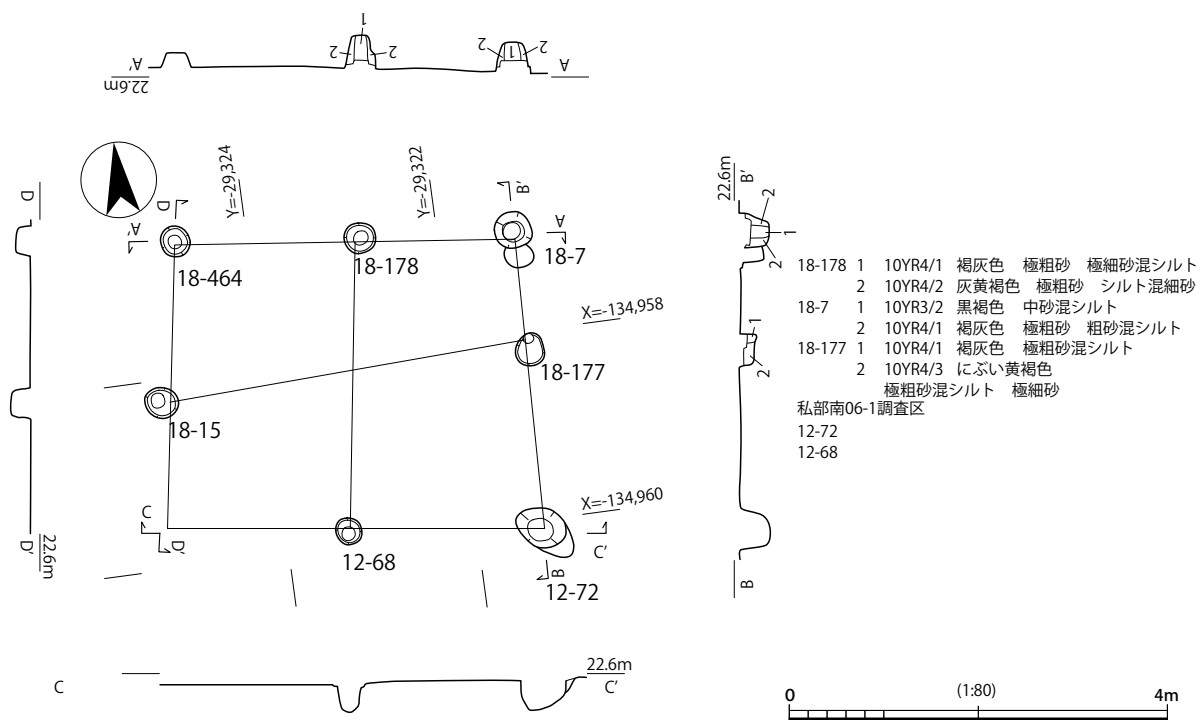


図 310 掘立柱建物 34 平・断面図

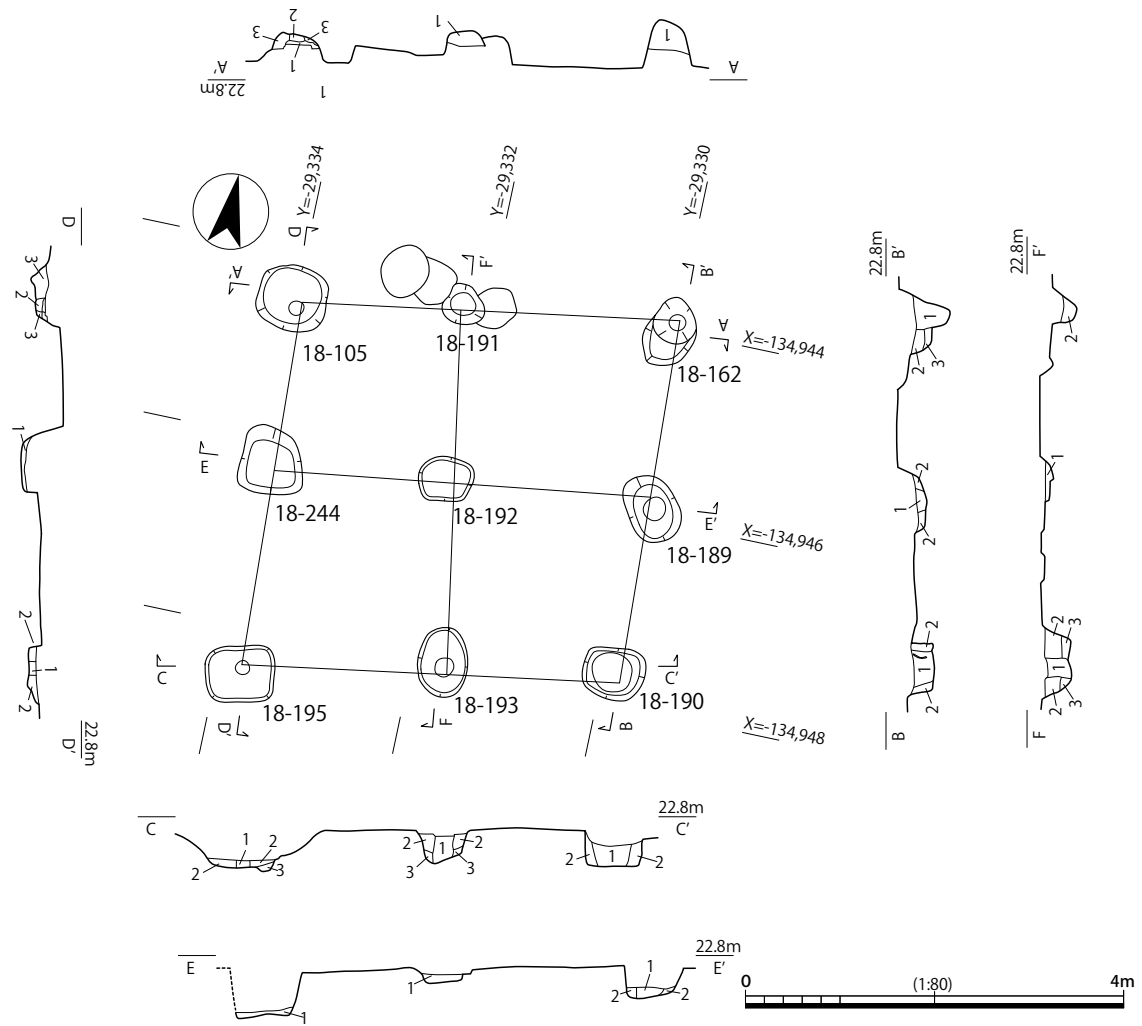
物から 6 世紀初頭以降の建物と考えられる。

掘立柱建物 42 (図 300・314・316、図版 60-2)

掘立柱建物 42 は、梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物である。梁行寸法は 3.8 m、桁行寸法は 3.9 m で、身舎の面積は 14.8 m² を測る。梁行の柱間寸法は 2 m と 1.8 m、桁行の柱間寸法は 2 m と 1.9 m である。

棟筋は北で西へ 8° 振れる。柱穴の平面形は方形を呈し、長軸は 90 から 40 cm、短軸は 60 から 40 cm である。深さは 5 から 40 cm と浅いものから、やや深いものまでであるが掘方底面の標高はほぼ揃う。深さが不揃いなのは、後述するように 18-4 落ち込みの底面で検出したことによる。柱痕跡は 18-216 柱穴と 18-219 柱穴に見られ、他の柱穴は、掘方底面まで抜き取り穴が達している。掘方土は灰から黄灰色系の極細砂混じりシルトである。

18-164 柱穴から 6 世紀後半の須恵器杯・杯蓋片が出土している他、土師器・須恵器片が出土して



18-105	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	小礫 (径2-4mm)	極細砂	シルト混中砂	18-190	1	10YR3/1	黒褐色	小礫 (径2-4mm)	シルト混極細砂	
	2	10YR3/2	黒褐色	極粗砂混シルト				2	10YR3/2	黒褐色	粗砂	細砂混シルト	
	3	10YR4/2	灰黄褐色	小礫 (径2-4mm)	極細砂	シルト混細砂	18-193	1	10YR3/1	黒褐色	極粗砂	中砂混シルト	
18-191	1	2.5Y5/3	黄褐色	小礫 (径2-4mm)	極細砂混中砂			2	10YR3/2	黒褐色	小礫 (径2-4mm)	極細砂混シルト	
18-162	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	微~粗砂			3	10YR4/2	灰黄褐色	小礫 (径2-4mm)	粗砂混シルト	
					径5cm以下の基盤層ブロック含む		18-195	1	10YR3/1	黒褐色	粗砂混シルト		
	2	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	微~粗砂を少量含む			2	10YR4/2	灰黄褐色	極粗砂	極細砂混シルト	
	3	10YR4/4	褐色	砂質シルト	微~細砂	5mm以下の礫少量含む		3	2.5Y4/2	暗灰黄色	小礫 (径2-4mm)	中砂混シルト	
18-189	1	10YR3/1	黒褐色	小礫 (径2-4mm)	極粗砂	粗砂混極細砂	18-244	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	小礫 (径2-4mm)	中砂混シルト	
	2	10YR4/2	灰黄褐色	小礫 (径2-4mm)	極粗砂	粗砂混細砂	18-192		10YR4/2	灰黄褐色	小礫 (径2-4mm)	極粗砂	中砂混シルト

図 311 掘立柱建物 39 平・断面図

いる。出土遺物から6世紀後半以降の建物と考えられる。なお柱穴は、18-4落ち込みの底面で検出しており、掘立柱建物42が先行する遺構である。

掘立柱建物66(図300・315・316)

掘立柱建物66は、本調査分と私部南06-1調査区で検出した柱穴で構成する建物であるが、近世の溝により2基の柱穴は削平されている。梁行2間、桁行2間の総柱建物に復元できる。梁行寸法は3.4m、桁行寸法は4mで、身舎の面積は13.6㎡である。柱間寸法は、梁行方向1.7m、桁行方向が2.0mを測る。棟筋は、ほぼ東西で振れはない。

平面形は、円形から楕円形を呈し、直径もしくは長軸は40から84cm、深さは24から44cmを測る。

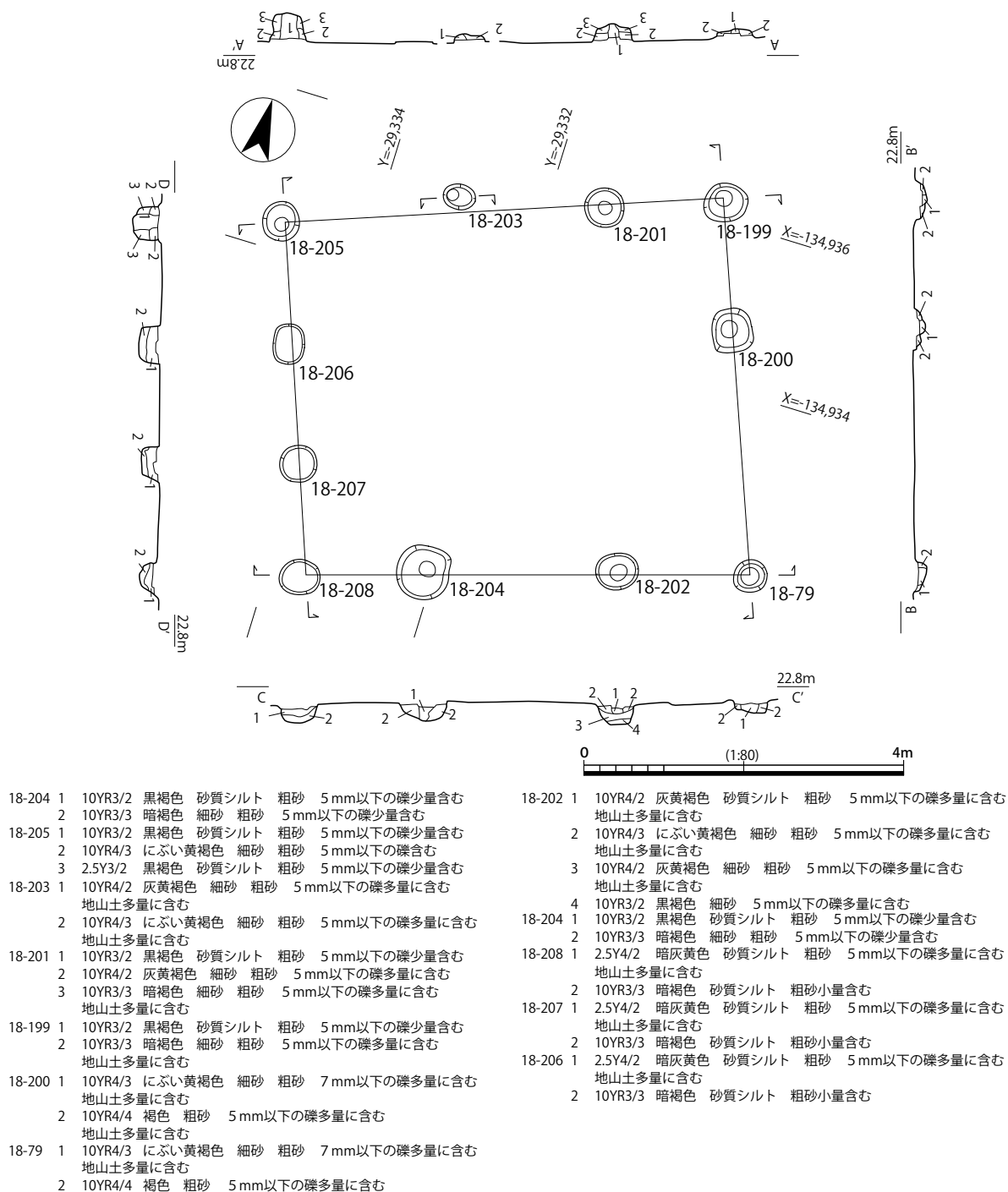


図312 掘立柱建物40 平・断面図

4-381 柱穴以外の検出した柱穴には全て、直径 15 cm 前後の柱痕跡が認められる。掘方埋土は灰色系の中砂から粗砂が混じるシルトから粘質シルトである。

柱穴からは、土師器片出土しているが、時期は特定できない。おそらく、古墳時代の建物であろう。

柵

柵 3 (図 300・308・316)

柵 3 は、L 字状を呈し、位置関係から掘立柱建物 27 に付随する遺構と考えられるが、柱筋が揃うなどの傾向はうかがえない。5 間を検出している。柱間は不揃いで 1.3 から 2.8 m を測る。

柱穴の平面形は円形から不整形円形で、直径もしくは長軸は 24 から 42 cm、深さは 12 から 30 cm を測る。平面規模は掘立柱建物 27 と類似する。柱穴からは、初期須恵器甕体部片を含む土師器・須恵器の破片が出土しているが、図化できる遺物はない。掘立柱建物 27 と同時期の古墳時代から奈良時代の遺構であろう。

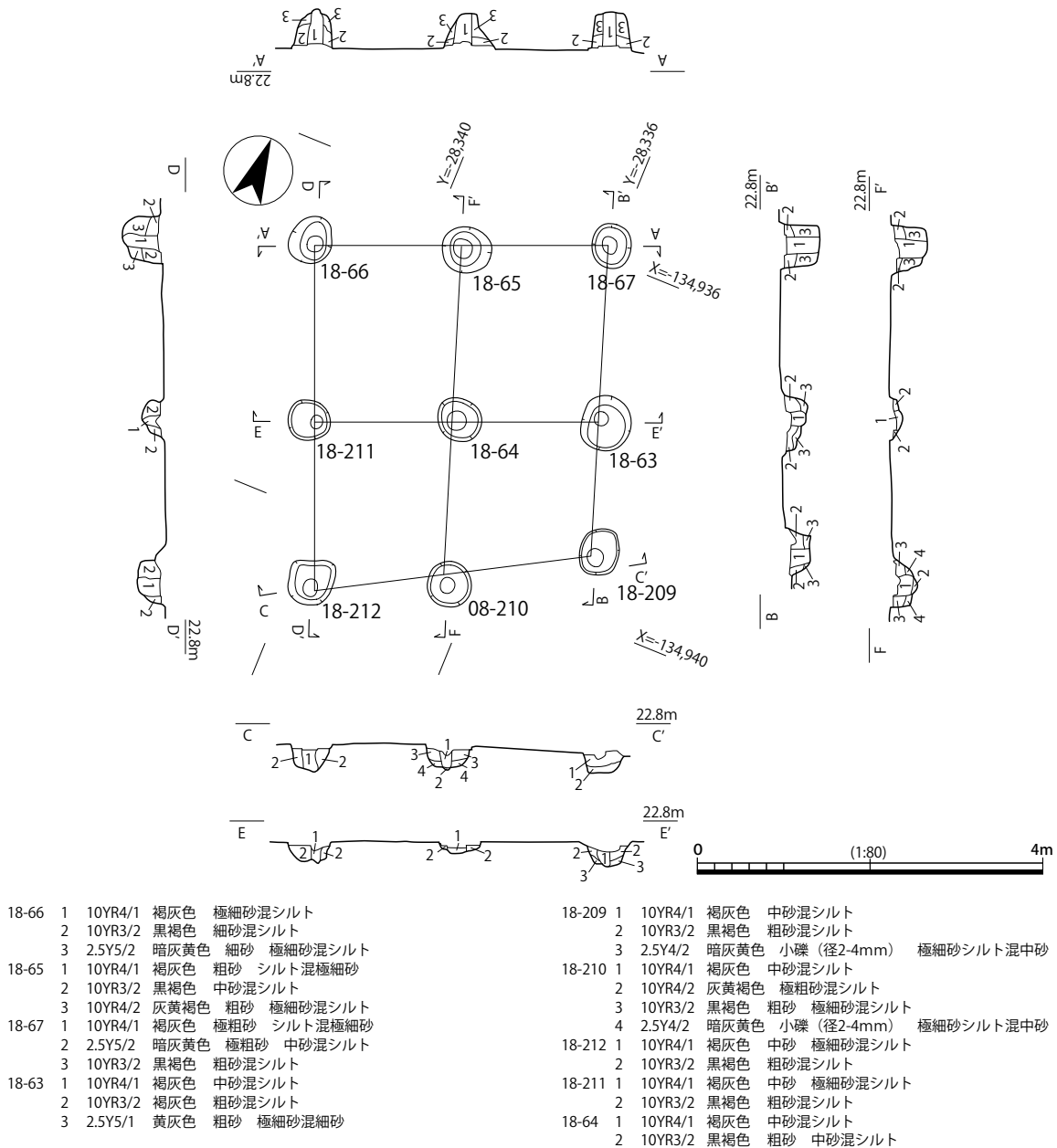
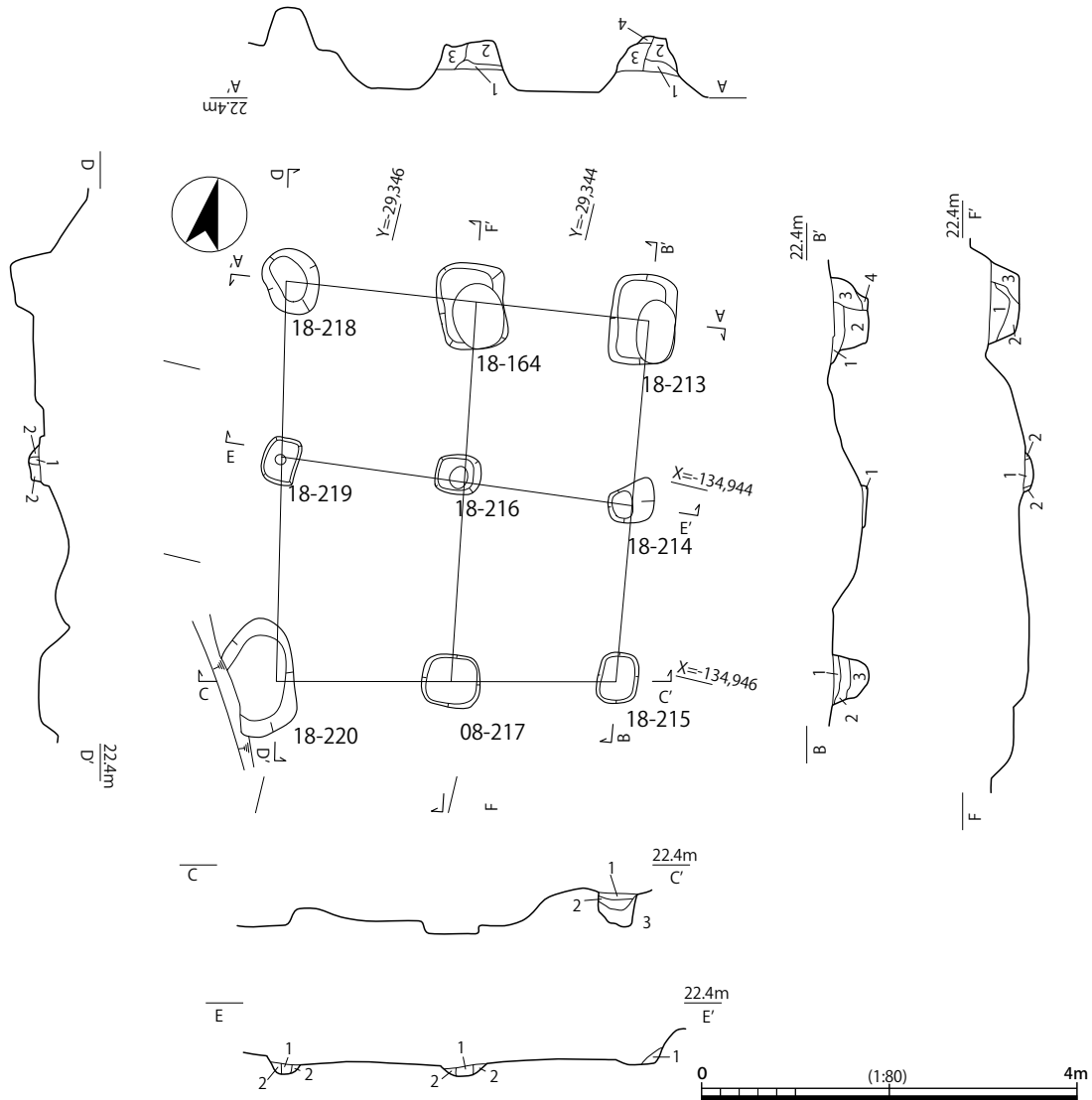


図 313 掘立柱建物 41 平・断面図

土坑

13 - 19 土坑 (図 300・316・317・340、図版 76)

13 - 19 土坑は、調査区端で検出しており、かつ近代の攪乱により一部削平されているため全体は不明であるが、おそらく平面形が方形を呈する遺構である。検出長は南辺 2.34 m、東辺 1.35 m、深さ 17 cmを測る。底面は平らである。埋土は灰黄褐色系と褐灰色・黒褐色を呈する粗砂混じりシルトである。土坑内からは、816 に示す T K - 73 型式の杯蓋、817 の T K - 216 型式の杯、818・819 の 5 世紀前半に考えられる土師器高杯脚部・甕上半部が出土している。なお、平・断面形状から考えると、方形の竪穴建物になる可能性を有する遺構である。



- 18-164 1 5Y4/1 灰色 極粗砂 シルト混極細砂
径1~3 cm地山ブロックを多く含む 炭を含む
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂 中砂混シルト
炭・焼土塊を含む
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 中砂混シルト
径1~3 cm地山ブロックを含む
- 18-213 1 10YR6/1 褐灰色 中砂混シルト
径1~3 cm地山ブロックを含む
- 2 10YR5/1 褐灰色 粗砂混シルト
径1~3 cm地山ブロックを含む
- 3 10YR3/1 黒褐色 中砂 極細砂混シルト
- 4 10YR3/2 黒褐色 極粗砂 粗砂混シルト

- 18-214 1 10YR5/1 褐灰色 中砂混シルト
径1~3 cm地山ブロックを含む
- 18-215 1 10YR5/1 褐灰色 中砂混極細砂
径1~3 cm地山ブロックを含む
- 2 2.5Y5/1 黄灰色 粗砂 極細砂混シルト
- 3 10YR4/1 褐灰色 中砂 極細砂混シルト
- 18-219 1 5Y4/1 灰色 中砂混シルト
- 2 5Y5/1 灰色 粗砂 極細砂混シルト
径1~3 cm地山ブロックを含む

図 314 掘立柱建物 42 平・断面図

13 - 20 土坑 (図 300・316・317・340)

13 - 20 土坑は不定形な平面形を呈し、長軸 2.23 m、短軸 1.91 m、深さ 20 cmを測る、断面形が皿状の土坑である。埋土は大きく、灰黄褐色系の粗砂混じりシルトである。土坑内からは、820 に示す砥石が出土している他、図化はできなかつたが土師器・須恵器片やサヌカイト片も出土している。

14 - 42 土坑 (図 300・316・340)

14 - 42 土坑は、掘立柱建物 25 の柱穴と重複関係から、掘立柱建物 25 に先行する遺構である。

平面形は不整楕円形を呈し、長径 3.11 m、短径 2.53 m、深さ 18 cmを測る。断面は皿状を呈する。土坑内から 821 に示す M T - 85 型式の高杯蓋、822 の須恵器器台上部が出土している。

14 - 78 土坑 (図 300・316・317・340)

14 - 78 土坑は、平面形が楕円形を呈し長径 1.44 m、短径 1.24 m、深さ 10 cmを測る。断面形は皿状を呈している。埋土は、褐灰色砂礫混じりシルトである。土坑内から、823 に示す T K - 217 型式の杯が出土している。

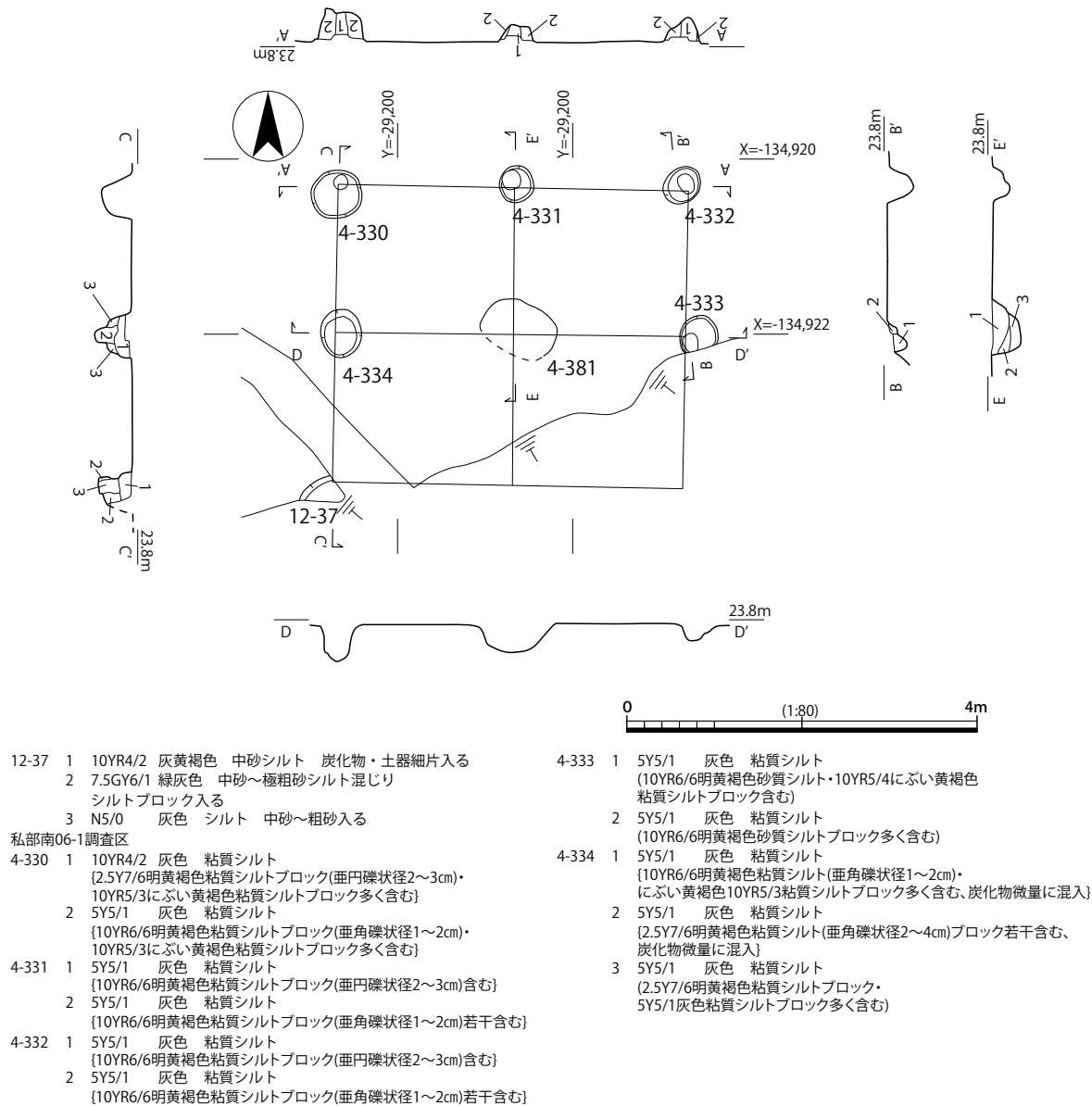


図 315 掘立柱建物 66 平・断面図



図 316 12・13・14・18区 拡大平面図

14-82 土坑 (図 300・316・317・340、図版 64-1)

14-82 土坑は不定形の平面形を呈し、長軸 1.64 m、短軸 99 cm、深さは 10 cm を測る。土坑底面には凹凸がみられる。埋土は上層が灰黄褐色砂礫混じりシルト、下層がにぶい黄橙色砂礫混じりシルトブロックを含む褐灰色砂礫混じりシルトである。土坑内から 824 に示す TK-73 型式の杯蓋、825 の 5 世紀前半の高杯、826 は弥生時代前期の甕底部が出土している。

14-85 土坑 (図 300・316・317・340)

14-85 土坑は、私部南遺跡 06-2 の遺構へつながり、総延長約 5 m、幅 99 cm、深さ 37 cm を測る、溝状の土坑である。断面形は楕円形を呈する。埋土は、上層が灰黄褐色細砂から中砂混じりシルト、下層が黄灰砂礫混じり粘質シルトである。

主に土坑内埋土上層から 827 から 829 に示す遺物が出土している。827 は 5 世紀末から 6 世紀初め頃に考えられる土師器高杯脚部、828・829 は 5 世紀から 6 世紀に考えられる土師器甕である。

16-1 土坑 (図 300・340)

16-1 土坑は、近代の素掘り水路により大きく削平されているが、私部南遺跡 06-2 の遺構とつながる遺構である。平面形は不定形で、延長約 7 m、最大幅 4.3 m、深さ 28 cm を測る。土坑内からは、830 に示す TK-47 型式の杯が出土している。

16-9 土坑 (図 300・341、図版 76)

16-9 土坑は、調査区南端で検出している遺構である。私部南遺跡 06-2 で検出している遺構に

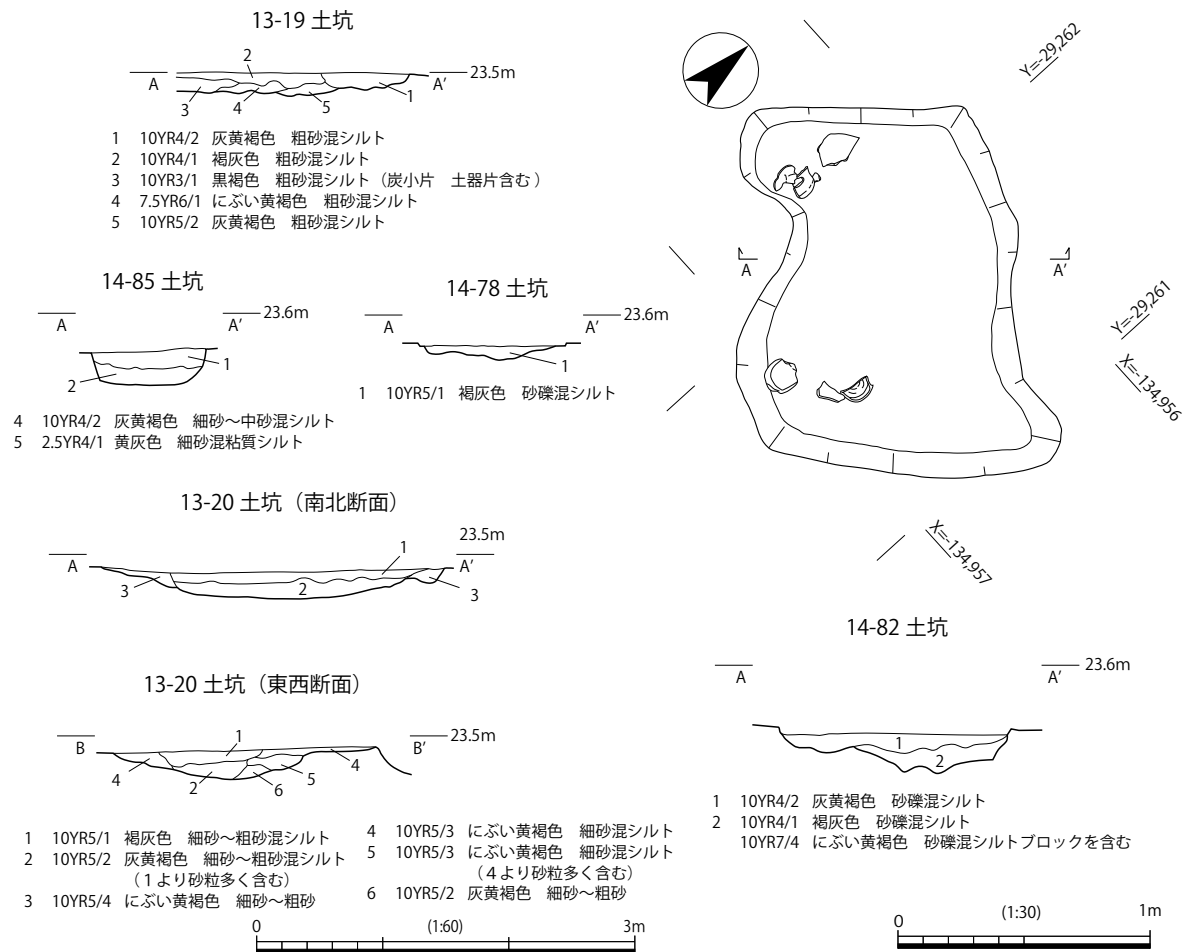


図 317 13-19・20 土坑 14-78・85 土坑 断面図 14-82 土坑 平・断面図

つながり、全体では溝の北東端の部分となる。本調査区での検出長は 1.27 m、幅 1.08 m、深さ 36 cm を測る。

土坑内からは、831・832・833 に示す T K - 43 型式の杯蓋・高杯杯部、834 の須恵器甕口縁部、835 の須恵器器台脚部、836 の土師器甕口縁部、837 の竈片が出土している。

18 - 100 土坑 (図 300・316・341)

18 - 100 土坑は、不定形な平面形を呈し、長軸 6.19 m、短軸 3.3 cm、深さ 7 cm を測る。土坑内からは、838 に示す M T - 85 型式の杯が出土している。

18 - 132 土坑 (図 300・316・341)

18 - 132 土坑は、不定形な平面形を呈し、長軸 1.8 m、短軸 91 cm、深さ 20 cm を測る。土坑内からは、839 に示す M T - 85 型式の杯、840 の弥生時代中期前葉の壺体部が出土している。

18 - 148 土坑 (図 300・318・341)

18 - 148 土坑は、重複関係から 18 - 156 溝よりも新しい時期の遺構である。不定形な平面形を呈し、長軸 89 cm、短軸 91 cm、深さ 12 cm を測る。埋土は上層が明黄褐色細砂シルトブロックと中砂から極粗砂含む灰オリーブ色細砂シルト、下層がにぶい黄色細砂シルトブロックと極粗砂が若干混じる灰色細砂シルトである。土坑内から、841 に示す初期須恵器壺口縁片が出土している。

18 - 424 土坑 (図 300・318・341)

18 - 424 土坑は、平面形が不整な楕円形を呈し、長径 1.27 m、短径 84 cm、深さ 30 cm を測る。埋土は、上層が微砂から細砂・細礫を多く含む暗灰黄色砂質シルト、下層が微砂から細砂を少量含む黒褐色粘質シルトである。上・中層にかけての位置から、842 に示す 6 世紀代に考えられる土師器甕が出土している。

12 - 36 ピット (図 300・316・341、図版 77)

12 - 36 ピットは、近世の溝により削平を受けているが、掘方の平面形は隅丸方形と考えられる。一辺は検出長で約 50 cm、深さは約 16 cm を測る。埋土は灰黄褐色系の砂混じり砂質シルトである。ピット内から 843・844 に示す 5 世紀と考えられる製塩土器片が出土している。

14 - 90 ピット (図 300・316・341)

14 - 90 ピットは、平面形が円形を呈し、直径 50 cm、深さ 41 cm を測る。埋土は灰黄褐色系の砂混じり砂質シルトである。ピット内から 845 に示す 5 世紀と考えられる製塩土器下半部が出土している。

14 - 102 ピット (図 300・316・341)

14 - 102 ピットは、平面形が楕円形を呈し長径 50 cm、短径 46 cm、深さ 31 cm を測る。埋土は灰黄褐色系の砂混じり砂質シルトである。ピット内から、846 に示す 6 世紀に考えられる土師器鉢口縁が出土している。

14 - 111 ピット (図 300・316・341、図版 76)

14 - 111 ピットは、一部失われているが、平面形が不整な方形を呈し長辺 43 cm、短辺 38 cm、深さ 53 cm を測る。埋土は灰黄褐色系の砂混じり砂質シルトである。ピット内から、847 に示す 5 世紀に考えられる土師器鉢が出土している。

14 - 172 ピット (図 300・316・341)

14 - 172 ピットは、平面形が円形を呈し、直径 39 cm、深さ 40 cm を測る。埋土は灰黄褐色系の砂混じり砂質シルトである。ピット内から 848 に示す、T K - 208 型式の高杯杯部が出土している。

14－214ピット（図300・316・341）

14－214ピットは、平面形が楕円形を呈し、長径75cm、短径69cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色系の砂混じり砂質シルトである。ピット内から、849に示す5世紀に考えられる製塩土器が出土している。

18－23ピット（図300・316・341）

18－23ピットは、平面形が円形を呈し、直径48cm、深さ28cmを測る。埋土は、大きく暗灰黄色から黒褐色系の粗砂混じり砂質シルトである。ピット内から850に示すTK－209型式の杯蓋が出土している。

18－106ピット（図300・316・341）

18－106ピットは、平面形が隅丸の方形を呈し、長辺71cm、短辺62cm、深さ28cmを測る。埋土は、大きく暗灰黄色から黒褐色系の粗砂混じり砂質シルトである。ピット内から、851に示す6世紀に考えられる土師器甕口縁部が出土している。

18－133ピット（図300・316・341）

18－133ピットは、平面形が楕円形を呈し、長径32cm、短径29cm、深さ22cmを測る。埋土は、大きく暗灰黄色から黒褐色系の粗砂混じり砂質シルトである。ピット内から、852に示す6世紀後半に考えられる須恵器壺口縁部が出土している。

18－183ピット（図300・316・341）

18－183ピットは、平面形が楕円形を呈し、長径58cm、短径38cm、深さ38cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂シルト混じり極細砂である。ピット内から、810・811に示す5世紀後半の須恵器杯蓋と6世紀の土師器直口壺が出土している。

18－194ピット（図300・316・341）

18－194ピットは、平面形が楕円形を呈し、長径61cm、短径51cm、深さ34cmを測る。埋土は、大きく暗灰黄色から黒褐色系の粗砂混じり砂質シルトである。ピット内から853に示す、MT－85型式の杯蓋が出土している。

18－247ピット（図300・316・341、図版91）

18－247ピットは、平面形が円形を呈し、直径28cm、深さ26cmを測る。埋土は、大きく暗灰黄

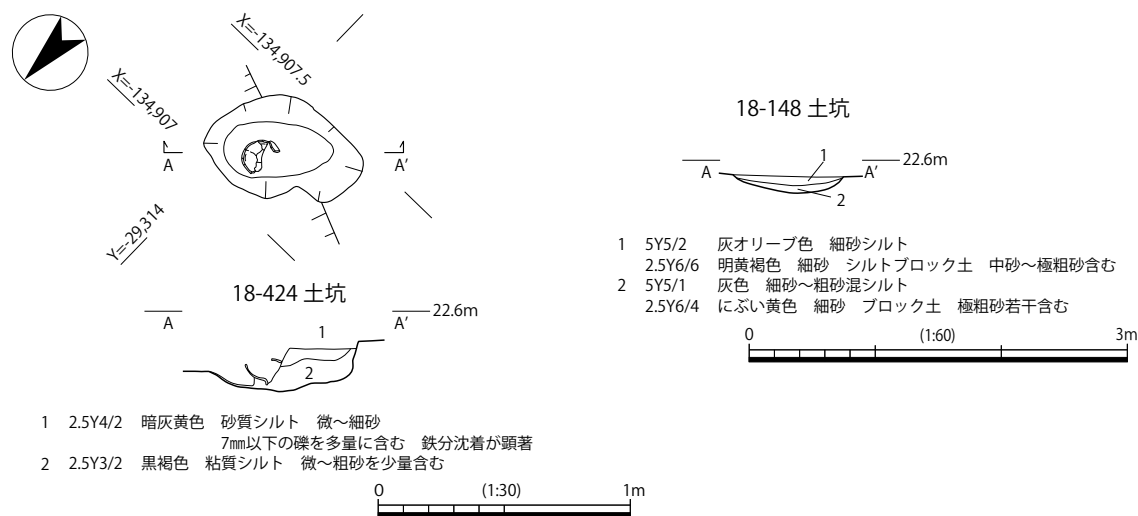


図318 18－148土坑 平・断面図 18－424土坑 断面図

色系の粗砂混じり砂質シルトである。ピット内からは、855 に示す柱根が出土している。

18 - 284 ピット (図 300・316・341、図版 76)

18 - 284 ピットは、重複関係から竪穴建物 11 よりも新しい遺構である。平面形は楕円形を呈し、長径 73 cm、短径 45 cm、深さ 5 cm を測る。埋土は大きく暗灰黄色から黒褐色系の粗砂混じり砂質シルトである。ピット内から、854 に示す MT - 15 型式の杯蓋が出土している。

溝

12 - 5 b 溝 (図 300・316・341)

12 - 5 b 溝は、東西溝で延長 2.34 m、最大幅 82 cm、最小幅 14 cm、深さ 4 cm を測る。埋土は褐色系の細砂混じりシルトである。溝内からは、856 に示す 6 世紀に考えられる土師器甕口縁が出土している。

13 - 1 溝 (図 300・316・319・341)

13 - 1 溝は、延長 2.91 m、幅 40 cm、深さ 10 cm を測る。埋土は主に、黄褐色系の粗砂混じり極細砂から細砂である。溝内から 857 に示す TK - 216 型式の杯、858 の MT - 15 型式の杯が出土している。出土遺物から、6 世紀前半に考えられる溝である。

13 - 6 溝 (図 300・316・319・341)

13 - 6 溝は、延長 2.95 m、幅 65 cm、深さ 8 cm を測る。埋土は、基盤層のブロックが若干混じるにぶい黄褐灰中砂から粗砂混じりシルトである。溝内から、859 に示す MT - 21 型式の杯が出土している。出土遺物から、7 世紀末から 8 世紀初頭の遺構である。

13 - 10 溝 (図 300・316・320・341・342、図版 76・77・83・64 - 2 ~ 3)

13 - 10 溝は、延長 25.23 m、幅 90 cm、深さ 32 cm を測る、北でやや東へ振れる南北溝である。埋土は上層が、基盤層のブロックを含む灰黄褐色細砂から細礫混じるシルト、下層が灰黄褐色中砂から粗砂混じりシルトである。下層の上部付近から遺物がまとまって出土している。

出土した遺物には 860 から 864 に示す、TK - 10 型式の杯蓋・杯・高杯蓋・礎、865・866 の須恵器提瓶、867 の 5 世紀前半と考えられる土師器の小型の丸底壺、868 の土師器長胴甕、869 土師器甕体部、870 の鞆の羽口、871 の滑石製白玉がある。また、鉦滓も出土しており、周辺に鍛冶工場の存在が想定できる。出土遺物から、6 世紀中頃前後に考えられる溝である。

13 - 12 b 溝 (図 300・316・319、図版 64 - 4・5)

13 - 12 b 溝は、北でやや東へ振れる南北溝で、私部南 06 - 1 調査区の溝につながる。検出延長は 24.65 m、幅は 55 から 1 m、深さは 90 から 1.05 m を測る。溝の断面は、底面の幅が 10 cm 前後を測り、上場幅に対し深さが深い形状を呈する。底面の標高は、南端で 23.1 m、中央部で 23.18 m、北端部で 23.24 m を測り、北から南へ傾斜している。埋土は 4 層から 5 層に分かれ、最上層が暗灰黄色を呈し、下層は灰色から灰オリーブ色系を呈する細砂から極細砂混じりのシルトである。

図化はできなかったが、溝内からは弥生土器の底部、初期須恵器甕体部片、土師器片が出土している。

出土遺物から、5 世紀前半から中頃にかけての遺構と考えられる。

14 - 7 溝・14 - 16 溝 (図 342)

14 - 7 溝・14 - 16 溝は、東 - 西・南 - 北方向の溝で、溝の方向・埋土などから考えると、中世段階の耕作溝であるが、深く掘削されたことと、古墳時代の遺物が出土したため、ここで記す形となったが、溝自体は中世の耕作溝である。よって、平面図に図示はしていない。溝内からは、872 に示す 6 世紀

代の土師器杯、873 に示すMT-21 型式の杯蓋が出土している。

14-88 溝 (図 300・316・321・342、図版 77・64-6)

14-88 溝は、南西-北東方向の溝で、私部南 06-2 の溝とつながる遺構である。検出長は 14.06 m、幅は南西端で 70 cm 前後であるが、北西部では、広くなり最大幅 2.52 m を測る。深さは 20 から 30 cm を測る。断面形は皿形を呈する。溝底の標高は、南西端で 23.05 m、中央部で 23.02 m、北東端で 22.99 m を測り、南西から北東へ傾斜している。

埋土は大きく 2 層に分かれ、上層が砂礫を多く含む褐灰色砂礫混じりシルト、下層が黄灰色極細砂から細砂混じりシルトである。溝内からは土器がまとまって出土している。

出土した土器には、874・875 に示すMT-85 型式の杯・杯蓋、876 の 5 世紀後半の須恵器短頸壺、877 の 6 世紀後半の須恵器壺、878・879 の須恵器甕口縁部・甕、880 から 882 に示す 5 世紀前半に考えられる土師器の小型の丸底壺・直口壺・高杯、883 の 5 世紀に考えられる土師器高杯、6 世紀に考えられる 884 の土師器甕がある。出土遺物から 6 世紀後半前後に埋没した溝である。

16-7 溝 (図 300・343)

16-7 溝は、南東-北西方向で私部南 06-1 の溝とつながる遺構である。検出長 2.18 m、幅 49 cm、深さ 35 cm を測る。溝内から、885 に示すTK-47 型式の杯が出土している。出土遺物から 5 世紀後半前後の溝である。

18-3 溝 (18-418 溝) (図 300・316・319・343・366、図版 85・64-7~8)

18-3 溝は、南西-北東方向に延びる、延長 44.75 m を測る溝である。18-2 調査区では調査時に 18-418 溝としているが一連の溝であるので 18-3 溝として記述する。

幅はおおむね 1.8 m で部分的に幅の広い窪み、もしくは溝を再掘削したような重複を呈する箇所がみられる。深さは 1.27 から 1.37 m を測る。溝底幅は 10 cm 前後を測り、溝上端幅に比べ極端に狭く、断面形はいわゆる V 字形を呈する。

埋土は、堆積と掘り直しを繰り返しながら、徐々に埋まり、最終的にシルトブロックを含む褐色・黒色を呈する細砂シルトで埋められたようである。

溝内からは、886 から 896・1182・1184 に示す弥生時代前期末から 5 世紀前半までの遺物が出土しているが、重複する遺構に方形周溝墓の周溝があること、またこの溝に先行する 18-145 溝の時期が 5 世紀後半頃と考えられることなどから、弥生時代の土器は埋没時の混入である可能性が考えられる。おそらく、5 世紀前半以降に掘削されたと考えられる。

18-60 溝 (図 300・316・319・343、図版 31)

18-60 溝は、検出長 15.95 m を測り、西へ湾曲しながら南西-北東方向に延びる幅 12 から 57 cm、深さ 2 から 30 cm を測る溝である。溝底の標高は南西端が 22.21 m、中央部では 22.2 m、北東端で 22.23 m と、わずかではあるが北東から南西へ傾斜している。

断面形は椀形を呈し、埋土は褐灰色から灰黄褐色を呈する砂粒を含む砂質シルトである。

溝内からは、899 と 900 に示す 6 世紀後半に考えられる須恵器高杯脚部と鉢が出土している。

18-75 溝 (図 300・316・319・343、図版 77)

18-75 溝は、18-61 溝から南東へ延びる部分で 18-61 溝との先後関係は、確認することができなかった。検出長 3.82 m、幅 1.27 m、深さ 20 cm を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は上層が灰黄褐色小礫から粗砂混じり極細砂、下層がにぶい黄褐色中砂・極細砂混じりシルトである。

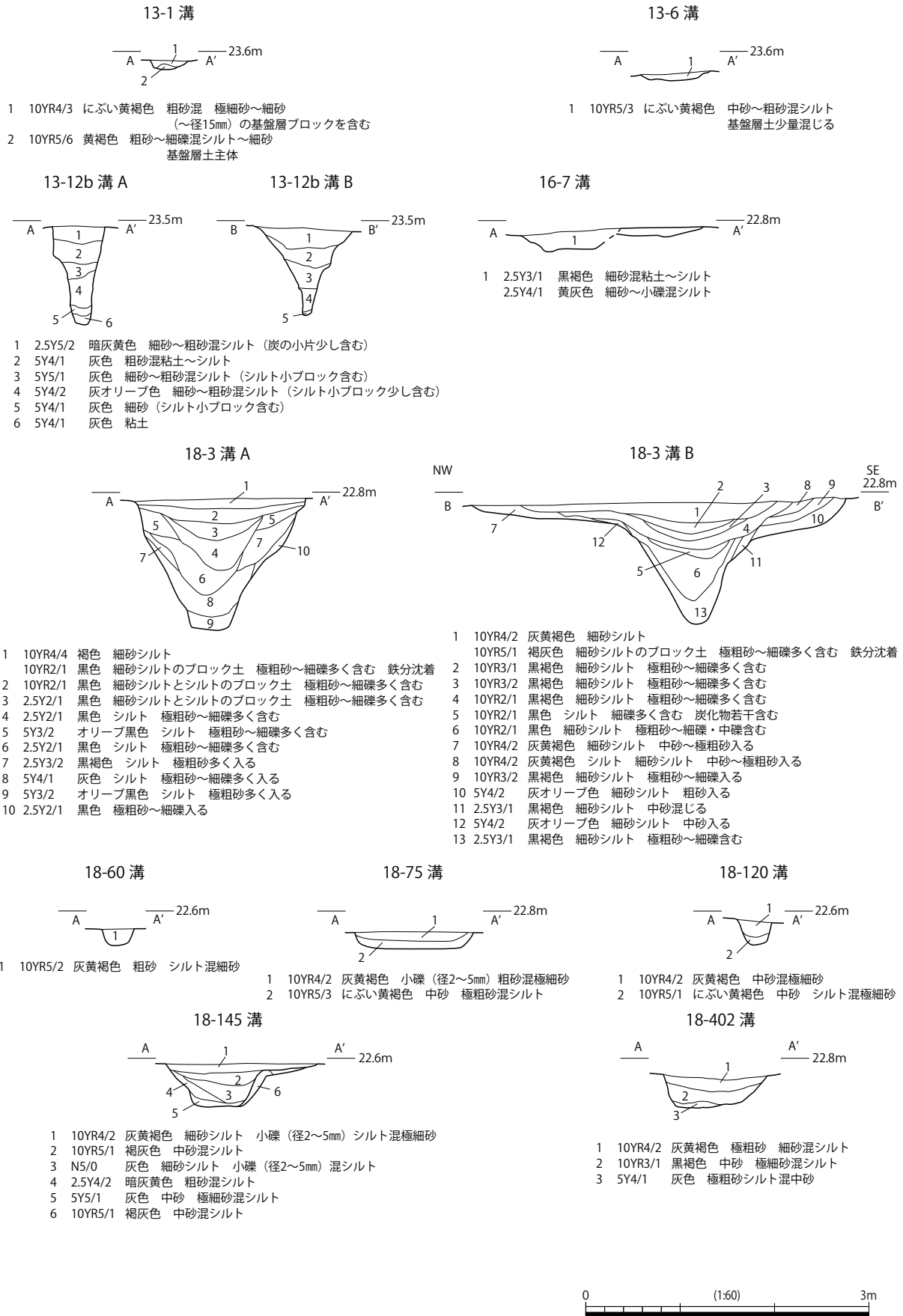
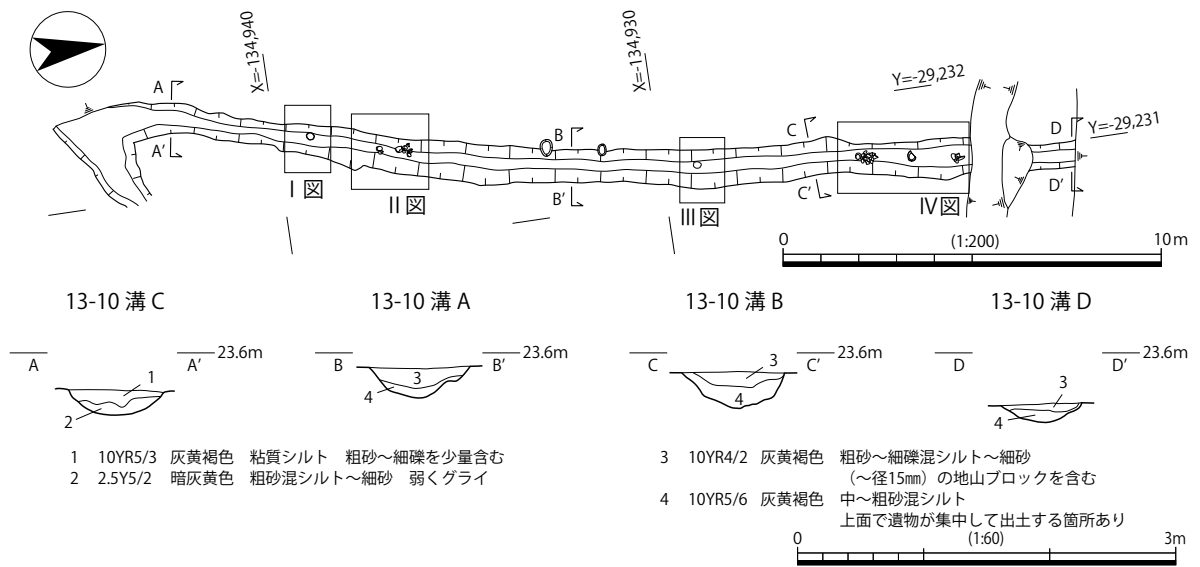


図 319 13-1・6・12b 溝 16-7 溝 18-3・60・75・120・145・402 溝 断面図

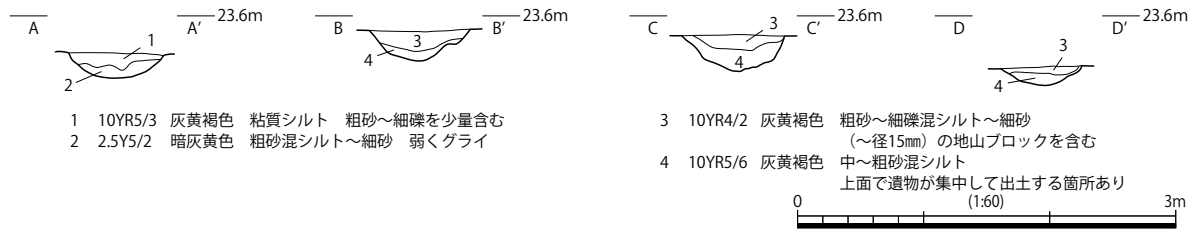


13-10 溝 C

13-10 溝 A

13-10 溝 B

13-10 溝 D



- 1 10YR5/3 灰黄褐色 粘質シルト 粗砂～細砂を少量含む
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 粗砂混シルト～細砂 弱クグライ

- 3 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂～細砂混シルト～細砂
(～径15mm)の地山ブロックを含む
- 4 10YR5/6 灰黄褐色 中～粗砂混シルト
上面で遺物が集中して出土する箇所あり

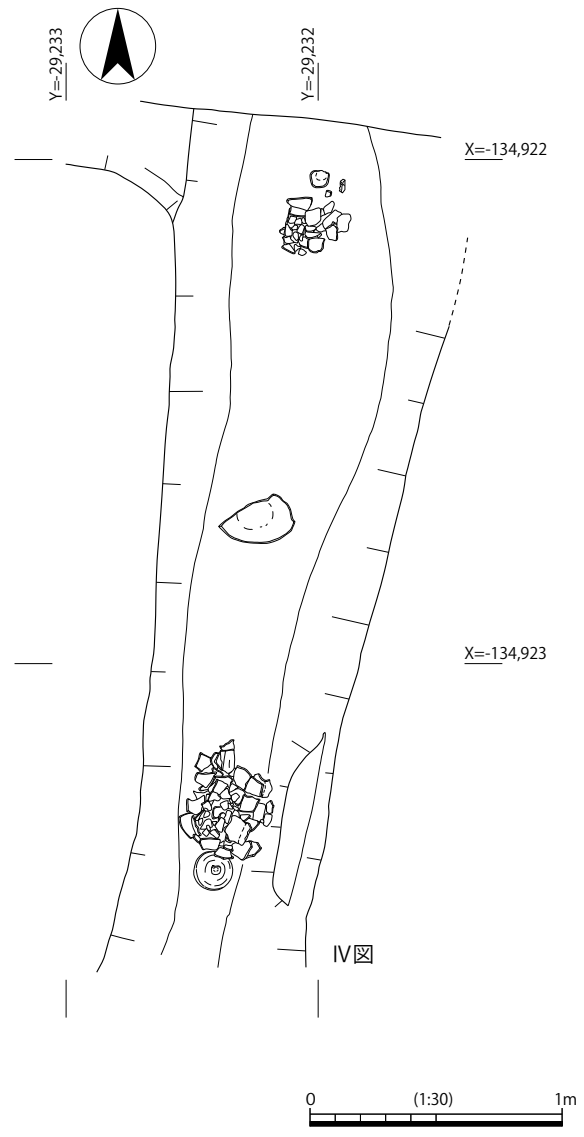
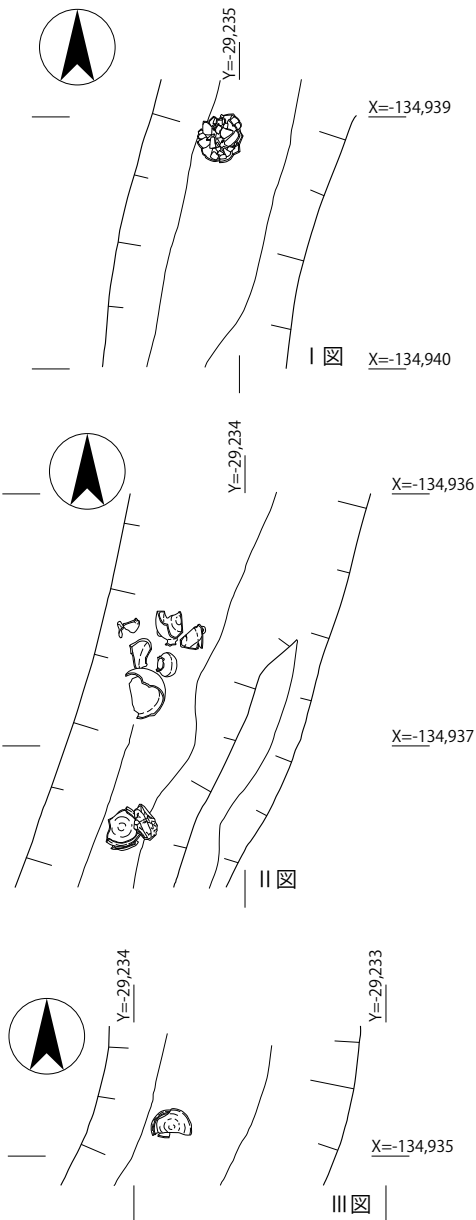


図 320 13-10 溝 平・断面図

主に上層から 901 から 905 に示す遺物が出土している。901・903 は T K - 10 型式の杯蓋・甕、902 は T K - 43 型式の杯、904 は 6 世紀代の須恵器脚付壺脚部、905 は土師器鍋の把手部分である。出土遺物から、6 世紀後半前後の遺構である。

18 - 120 溝 (図 300・316・319・344)

18 - 120 溝は、延長 8.36 m を測る中央部が屈曲する溝である。幅は 35 cm、深さは 25 cm を測り、断面形は椀型を呈する。埋土は、上層が灰黄褐色中砂混じり極細砂、下層がにぶい黄褐色中砂・シルト混じり極細砂である。溝内から、906 に示す M T - 85 型式の杯蓋が出土していることから、6 世紀後半の遺構と考えられる。

18 - 134 溝 (図 300・316・344、図版 78)

18 - 134 溝は、重複関係から 18 - 61 溝よりも新しく、18 - 60 溝よりも古い遺構である。平面規模は延長 6.88 m、幅 1.32 m で、ほぼ南北方向に延びる。深さは、10 から 30 cm を測る。埋土は、灰褐色から灰黄褐色系の細砂混じりシルトで中砂から粗砂を多く含む。

溝埋土上部から 907 に示す M T - 43 型式の杯蓋が出土している。出土遺物からと遺構の重複から、6 世紀後半前後で 18 - 60 溝よりも古い溝である。

18 - 145 溝 (18 - 140 溝) (図 300・319・343)

18 - 145 溝は、18 - 140 溝につながる溝で 18 - 3 溝に先行する遺構である。延長は 11.1 m、幅 83 から 1.47 m、深さ 35 から 49 cm を測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は大きく灰黄褐色から褐灰色の砂礫まじりのシルトで、中層付近には灰色小礫混じりシルトの層がみられる。溝内からは 897・898 に示す 5 世紀後半と考えられる須恵器鍋の把手部が出土している。898 は、外面タタキ後カキ目、内面には同心円の当具痕がみられる。出土遺物から、5 世紀後半に考えられる遺構である。

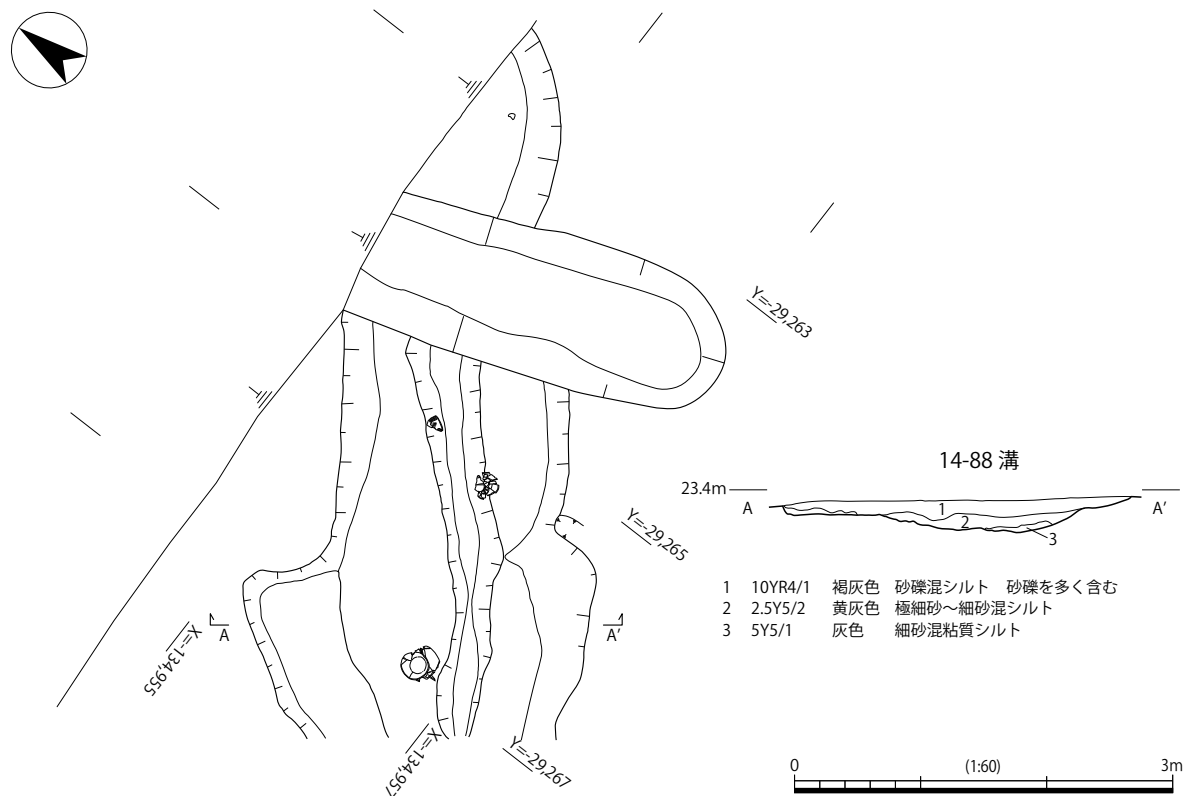


図 321 14 - 88 溝 平・断面図

18 - 402 溝 (図 300・319・344、図版 78)

18 - 402 溝は、北西-南東方向に延びる延長 6.48 m を測り、私部南 06 - 1 の溝につながる。幅は 1.1 m、深さ 37 cm を測る。溝底の標高は北西端で 22.34 m、南東端で 22.22 m を測り、北西から南東方向へ傾斜している。溝内からは、909 に示す T K - 10 型式の杯蓋、910 の M T - 85 型式の杯蓋が出土している。出土遺物から、6 世紀中頃の遺構と考えられる。

落ち込み

12 - 2 b 落ち込み (図 300・316・322・344、図版 78)

12 - 2 b 落ち込みは、不定形な平面形を呈し長軸 5.15 m、短軸 3.11 m、18 cm を測る。断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色中礫を多く含む。埋土上部から 911 から 917 に示す遺物が出土している。

913 は O N - 46 型式の杯。911・912 は T K - 216 型式の杯蓋・杯、914 は T K - 208 型式の有蓋高杯蓋、915 は 5 世紀代の土師器の小型の丸底壺、916・917 は土師器鉢・甕口縁である。出土遺物から、5 世紀中頃の遺構である。

13 - 21 落ち込み (図 300・316・322・344、図版 65 - 1)

13 - 21 落ち込みは、私部南 06 - 2 とつながる遺構で、不定形な平面形を呈する。長軸は 6.4 m、短軸は 4 m、深さは 24 cm を測る。断面形は皿型を呈し、埋土は、炭化物が混じる灰黄褐色系の細砂混じりシルトが主である。埋土上部から子供の人頭大位の石が、落ち込みのほぼ中央からまとまって出土している。石の大半は平坦面を上にして出土している。また、被熱を受けた痕跡が認められる石もあるが、埋土中からは焼土塊は出土していない。

石の他に出土した遺物に、918 に示す 8 世紀の杯 B 蓋、919 の平城 I に考えられる皿 A、921 の 7 世紀末から 8 世紀初頭の須恵器壺頸部、920・922 の須恵器高杯脚部・甕口縁部、923・924 の土師器甕上半部、925 の丸瓦がある。925 の丸瓦は欠損しているが玉縁式で、凸面はナデ調整、凹面の布目はやや粗く、吊り紐の痕跡はみられない。側面端面のケズリ幅は狭い。出土遺物は、8 世紀を中心とした遺物が出土しているが、丸瓦がやや新しく、9 世紀代に考えられる遺構である。

18 - 4 落ち込み (図 300・316・323・344・345、図版 65 - 2・78・83)

18 - 4 落ち込みは、不定形の平面形を呈し長軸 6.81 m、短軸 4.38、深さ 43 cm を測る。断面形は浅い皿型を呈し、底面は凹凸が著しい。埋土は、上層が極粗砂が混じる灰黄褐色シルト混じり極細砂、下層が植物遺体を多く含む灰色から緑灰色を呈する極細砂混じりシルトである。

落ち込み内からは、926・927 に示す M T - 43 型式・M T - 85 型式の杯蓋、928 の M T - 15 型式の杯、929・930 の T K - 10 型式の杯、933 の T K - 43 型式の甕、931 の飛鳥Ⅲの杯 B 脚部、934 から 936 の 6 世紀後半に考えられる須恵器提瓶口縁部・甕、932・937 の須恵器摺鉢底部・甕口縁部、940 の土師器甕、939 の弥生土器壺底部、934 の砥石が出土している。出土遺物は 6 世紀代を中心とした遺物が出土しているが、931 の杯 B が出土していることから 7 世紀後半以降に考えられる遺構である。

また底面で、掘立柱建物 42 の柱穴を検出していることと矛盾しない。

谷 1

ピット

6 - 74 ピット (図 270・348)

6 - 74 ピットは、平面形が楕円形を呈し、長径 31 cm、短径 29 cm、深さ 22 cm を測る。ピット内から、1005 に示す 5 世紀後半の須恵器高杯杯部が出土しており、当該期の遺構と考えられる。

土坑

5-15 土坑 (図 267・324・348)

5-15 土坑は、平面形が楕円形を呈し長径 1.4 m、短径 1 m、深さ 17 cmを測る。断面形は皿型を呈し、埋土は暗灰中砂混じりシルトである。土坑内から、992 に示す 5 世紀前半の高杯脚部が出土しており、

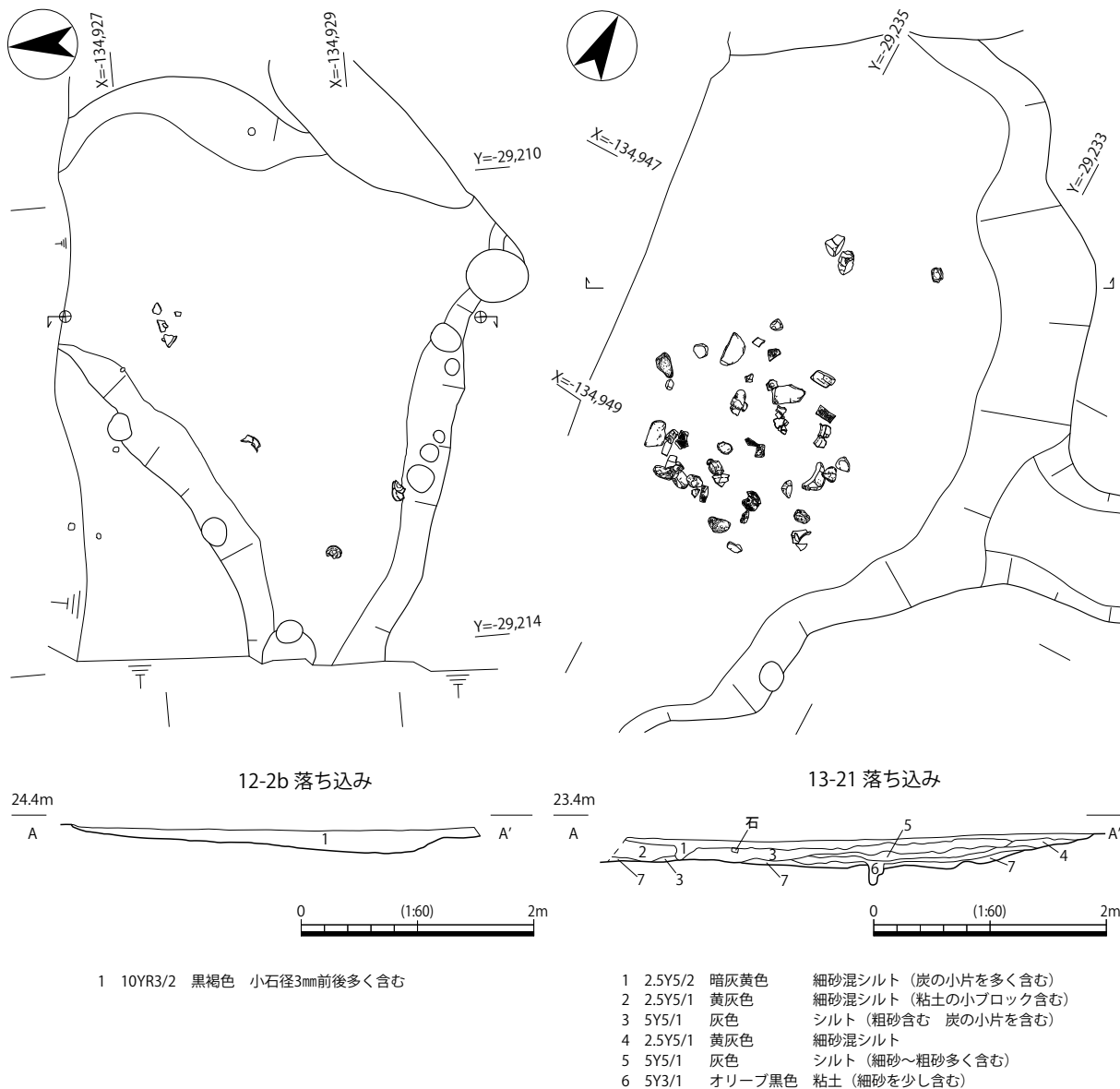


図 322 12-2b・13-21 落ち込み 平・断面図

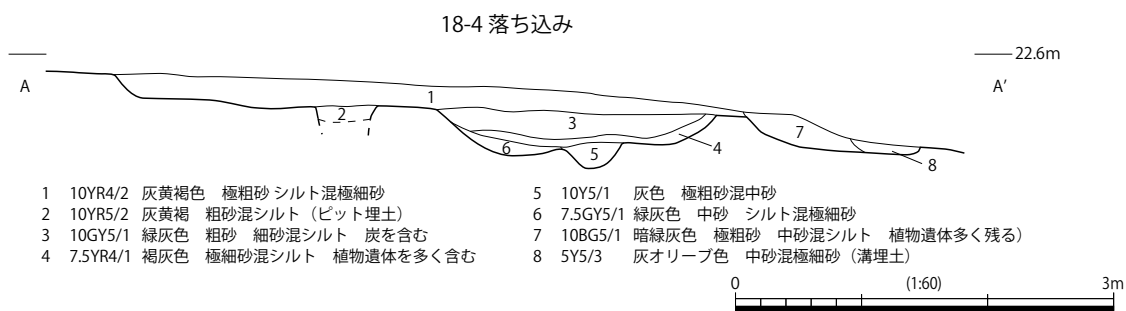


図 323 18-4 落ち込み 断面図

当該時期に考えられる遺構である。

20-47 土坑 (図 226・348・324、図版 79)

20-47 土坑は、不定形な平面形を呈し、長軸 2.08 m、短軸 0.83 cm、深さ 10 cmを測る。埋土は、明緑灰シルトブロックを含む灰砂礫混じりシルトである。土坑内から 1001 に示す須恵器の把手付平底鉢が完形で出土している。体部には 3 条の凸線が巡り、底部は横方向のケズリ後ナデを施している。T K-73 型式に考えられる土器である。この土器から 5 世紀前半の遺構と考えられる。

20-49 土坑 (図 226・324・348、図版 80)

20-49 土坑は、平面形が楕円形を呈し長径 2 m、短径 1.7 m、深さは 53 cmを測る。埋土は、細分できるが、大きくは 2 層に分けられる。上層は、黒褐色から黒色を呈する砂礫混じりの砂質シルト、下層は多量の基盤層ブロックを含む、細砂から微砂を少量含むオリブ黒色砂質シルトである。土坑内からは 1002 に示す T K-216 型式の甕が出土している。

20-53 土坑 (図 226・348・324、図版 81)

20-53 土坑は調査区端で検出しているため約半分を検出したのにとどまり、全体は不明であるが、おそらく円形の平面形を呈する。長径は 2.1 m、短径は検出長で 1.1 m、深さは 77 cmを測る。埋土は、基盤層の明緑灰砂質砂礫混じりシルトのブロック層を含む灰色の粗砂混じり粘質シルトを主とする。土坑内から、988・989 に示す T K-10 型式の杯・杯蓋、990 の 5 世紀後半に考えられる、外面に斜格子タタキのある韓式系土器甕体部片、991 の 6 世紀代の土師器甕口縁部が出土している。出土遺物から 6 世紀頃の遺構と考えられる。

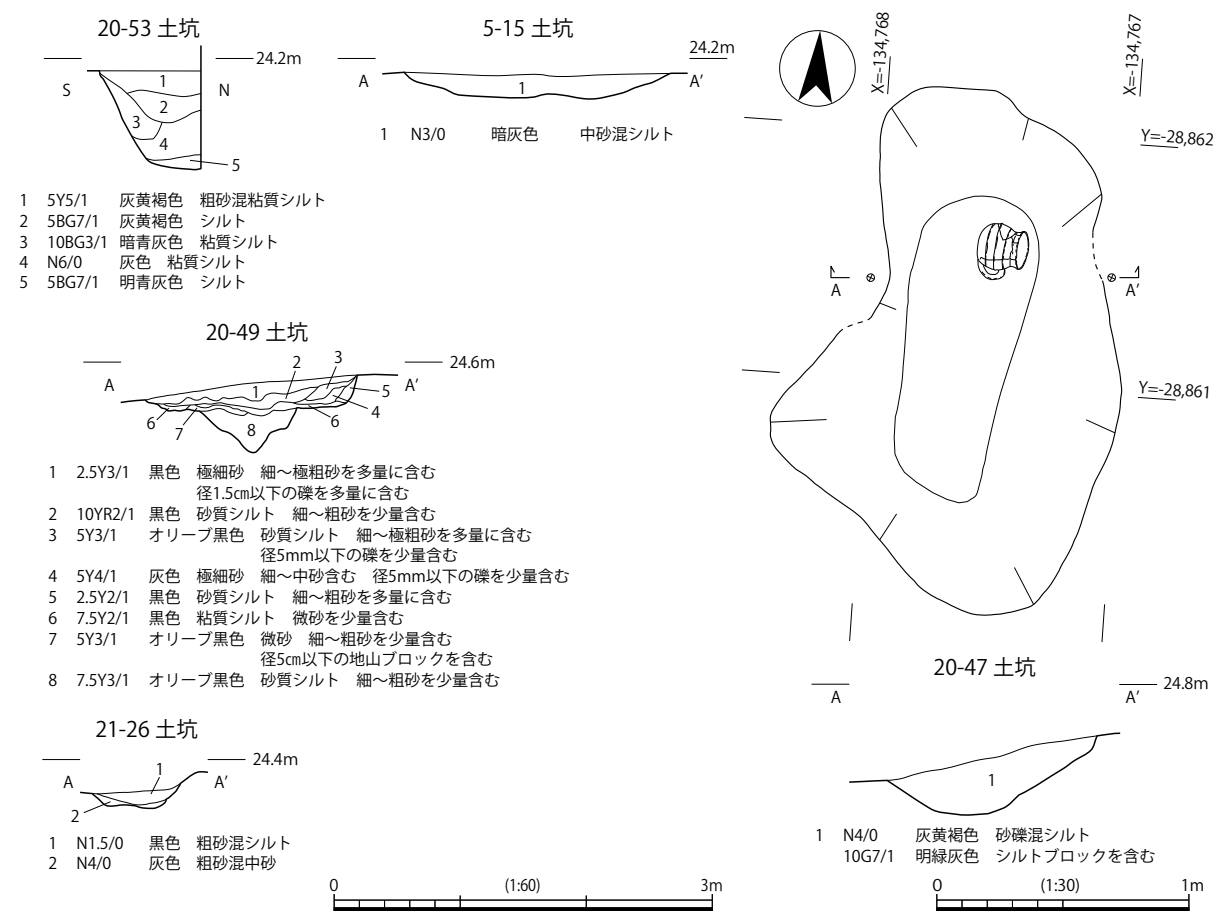


図 324 20-53・5-15・20-49・21-26 土坑 断面図 20-47 土坑 平・断面図

21 - 26 土坑 (図 267・324・348)

21 - 26 土坑は、平面形が楕円形を呈し、長径 0.95 m、短径 78 cm、深さ 15 cmを測る。埋土は主に黒色粗砂混じりシルトである。土坑内から 1003 に示す T K - 47 型式の杯蓋、1004 に示す土師器甕が出土している。出土遺物から 5 世紀代に考えられる遺構である。

溝

21 - 22 溝 (図 267・348)

21 - 22 溝は、平坦面 2 の下端に沿って延びる幅 40 cm から 2 m、深さは 4 cm から 12 cm を測るが、幅・深さとも不定形である。溝内からは 1006・1007・1008 に示す、5 世紀後半の須恵器高杯蓋片・甕口縁部が出土している。

谷 2

7 - 401 溝 (図 270・325・353、図版 81)

7 - 401 溝は、平坦面 3 の下端に沿って約 3 m 離れた位置で検出した、幅 70 cm、深さ 15 cm、延長 7.5 m を測る溝である。断面形は浅い皿状で、埋土はオリーブ黒中砂混じりシルトである。溝内には破片ではあるが、土器が散在して出土している。

出土した土器には 1095 に示す T K - 23 型式の高杯、1096 の初期須恵器壺口縁の他、図化はできなかったが、須恵器杯・杯蓋・高杯・壺・甕・破片や土師器高杯・甕片も出土している。出土遺物から 5 世紀後半に考えられる遺構である。

谷 3

25 - 12 土坑 (図 270・353)

25 - 12 土坑は、平面形が楕円形を呈し長径 77 cm、短径 63 cm、深さ 24 cm を測る。埋土は 4 層に分層できるが大きく上層の黒褐色から黒色を呈する中砂から粗砂混じりシルトと、下層の黄灰色の中砂から粗砂混じりシルトである。土坑内からは、1102 に示す 5 世紀前葉頃の土師器甕が出土しており、当該期に考えられる遺構である。

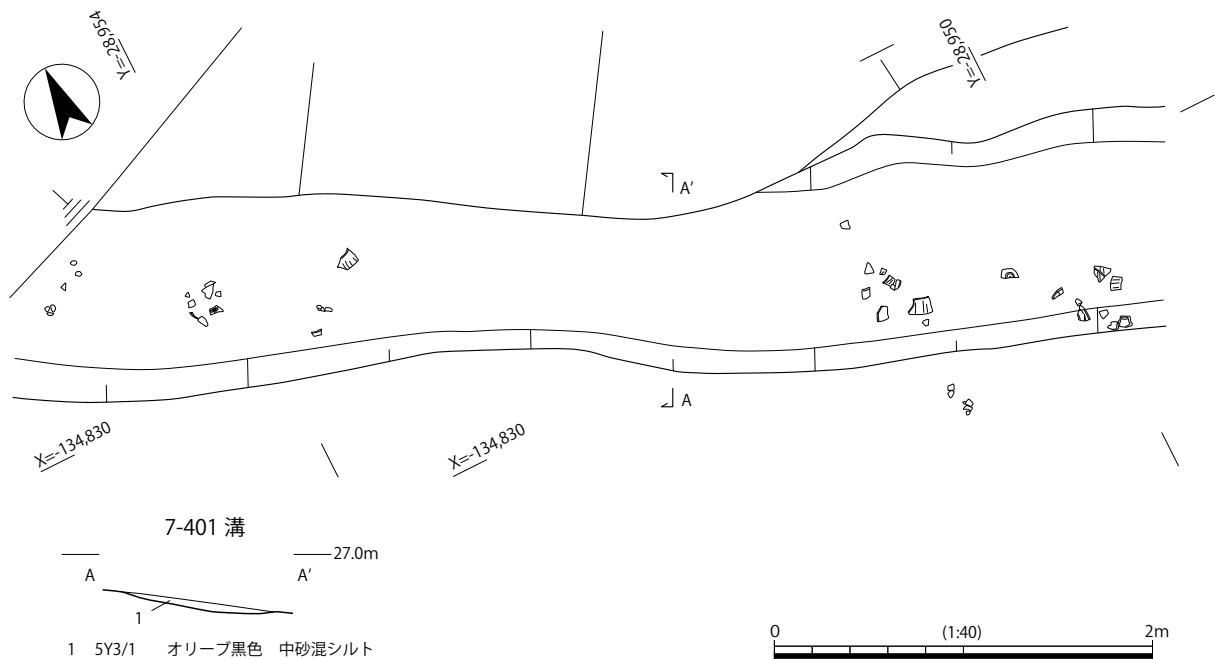


図 325 7 - 401 溝 平・断面図

4 a 層出土遺物

4 a 層から出土した主な遺物について、平坦面・谷ごとに記す。

平坦面 1・2・3 (図 330・338、図版 71・75・84)

基本的に 4 a 層は存在しないが、僅かな窪みや遺構の輪郭を検出する際に掘り下げた明らかに 3 a 層ではない層から出土した遺物も、ここで 4 a 層出土遺物として示す。602・603・773 は初期須恵器 (T K - 73 型式) の杯蓋、606 は T K - 216 型式以前の壺口縁片であろう。608 は T K - 208 型式以前の把手付無蓋高杯である。768 は、底面にゲタ跡が残る須恵器杯である。775 は須恵器甕、616 は T K - 23 型式の杯、628 は M T - 15 型式の高杯脚部、627 は T K - 10 型式の杯蓋、611 は 6 世紀後半の甕である。

土師器では、5 世紀代に考えられる 769 の土師器高杯杯部、770 の土師器甕。外面に格子タタキがみられる 607 の韓式系甕、610 の 6 世紀の土師器鉢。613 は小型の土師器壺口縁、612 は土師器鉢、614 は土師器甕、617 は土師器直口壺口縁、618・619 は土師器高杯、620 は土師器高杯杯部、622 は土師器壺、615 は土師器甕である。609 は土師器のミニチュア土器である。771 は土師器器台脚部で、3 a 層から出土した 458 と胎土・器形が類似しており同器種である。

772 は土師質の土製紡錘車、774 は鞍が表現された土馬である。7 世紀に考えられる。

石製品では、604 の軟質で緑色を呈する滑石を用いた 5 世紀後半の子持勾玉や、605 の側面と上面に、鋸歯文が線刻された滑石製紡錘車がある。623 は土師器片を転用した紡錘車である。

平坦面 4 (図 345 ~ 347、図版 77・78・82 ~ 87)

平坦面 4 は、本遺跡内でも特に遺構が密集する場所であり、そのため細かな整地をその都度行っていたと考えられる。その結果、基盤層上面で遺構検出を行う際掘り下げた、遺構として取り扱わないごく浅い窪みから弥生時代から平安時代初頭までの多様な遺物が出土している。ここでは、平坦面 1・2・3 と同様に、窪み内に残された層を 4 a 層として捉え、4 a 層出土遺物として記す。

966・984 は弥生時代前期の甕底部である。須恵器には、941 に示す T K - 216 型式の杯蓋、942・944 は初期須恵器壺口縁部・樽型甕、952 は 5 世紀中頃の把手付鉢、946・964 は T K - 10 型式の杯・甕、947・948 は M T - 85 型式の杯・杯蓋、950・963・977 は M T - 85 型式の杯、979 から 981 は 6 世紀後半の須恵器壺・甕、953 は須恵器壺蓋、954・955 は須恵器壺口縁がある。978 は 7 世紀前半の須恵器杯 G、976 は 7 世紀中頃の須恵器杯 G 蓋、975 は 7 世紀後半の須恵器杯 B 蓋、949 は 8 世前半の須恵器杯 B 蓋、968・969 から 971 は、7 世紀末頃の須恵器杯 B 蓋・杯 B・杯 A、951 は 8 世紀末から 9 世紀初頭の須恵器皿 C である。

土師器では、943 に示す 5 世紀と考えられる製塩土器口縁部、957 の 6 世紀代の土師器甕、982 は 8 世紀初め頃の土師器椀 C、972 は 8 世紀末頃の土師器皿 A、956 は 8 世紀末 9 世紀初頭の土師器皿 C、967 は土師器鍋口縁部、973・974 は土師器甕、983 は土師器甕である。

石製品では、960 は後期旧石器時代に考えられるサヌカイト製の角錐状石器、965 は点紋片岩製の石棒、961 はサヌカイト製の石鏃、985 はサヌカイト製スクレイパー、945 は石庖丁、958・959 は滑石製白玉、962 は砥石である。

谷 1 (図 349 ~ 353、図版 79・80・82・83・86・87・91 ~ 93)

縄紋時代の土器では、1093・1094 に示す縄紋時代晩期前半の深鉢底部が出土している。

弥生時代の土器では、1024 の弥生中期の脚台部、1065 の手捏の鉢が出土している。

古墳時代の遺物では、1066・1104・1105のTK-73型式の杯蓋、1023・1028・1040・1060・1067・1074・1090・1091の初期須恵器壺口縁部・甕口縁片・壺肩部片、1012・1062に示すTK-216型式の杯蓋、1069・1080・1085・1086・1088はTK-208型式の杯蓋・高杯蓋・高杯脚部・甕体部、1013・1070・1071・1073・1075のTK-23型式の杯蓋・杯・高杯蓋・杯、1014・1030・1068・1076・1087の5世紀後半に考えられる須恵器把手付鉢・壺口縁部・器台脚部・壺口縁部、1031のKM-1型式の杯、1072・1078・1082のMT-15型式の杯・杯蓋、1027・1043・1083・1084はTK-10型式の杯蓋・杯、1022・1044・1063・1089は6世紀後半に考えられる須恵器壺口縁部・提瓶口縁部、1015の須恵器甕口縁片、1021は須恵器脚部、1054は韓式土器壺体部片、1058は杯部外面に鋸歯文が2段に施された器台杯部と、同一個体と考えられる波状文が施された脚部が出土している。

土師器では、1016に示す5世紀前半の甕、5世紀後半と考えられる高杯脚部1039・1045・1092の5世紀後半から6世紀の土師器鉢、1064は5世紀代の高杯脚部、1057の土師器壺もしくは鉢の体部片、1046の製塩土器片が出土している。

土製品では、1017・1025に示す竈片、1026・1061・1079の鞆の羽口片が出土している。

木製品では、1018・1081の枠型の田下駄の横棧と考えられる木製品、1019・1020・1034・1036・1037・1048から1052・1055・1056・1059の用途不明木製品、1041は一木鋤の把手の形状を呈するが、端部に組み合わせを思わせる突起を削り出しており、転用の二次加工品と考えられる。用途は不明である。1042は曲刃鎌の柄で完存している。1047は指物腰掛の脚が出土している。

石製品では、1011のサヌカイト製スクレイパー、1009に示すサヌカイト製の凹基式石鏃、1010の両側面鋸歯縁状剥離のみられる凹基I式石鏃、1038のサヌカイト製の有茎式石鏃、1029の二次焼成を受け煤の付着した砥石、1032の6面を使用した砥石、1033の下げ砥石。その他、1077に示す椀形滓が出土している。

谷2（図353、図版81）

谷2内からは、5世紀後半以前に考えられる1098・1101の須恵器壺口縁、5世紀後半に考えられる1099の土師器高杯脚部、1100に示すMT-85型式の杯、1097の須恵器捏鉢が出土している

谷3（図355、図版82・85・93）

須恵器には、1104・1105・1108・1109から1111のTK-73型式の杯蓋・高杯蓋・無蓋高杯杯部、1103に示すTK-216型式の高杯杯部、1112・1113・1116・1117は初期須恵器に考えられる大型高杯杯部・高杯脚部・壺口縁部、1114はTK-23型式の把手付鉢、1106のMT-15型式の杯蓋、1107のTK-10型式の杯蓋、1115の須恵器小型壺が出土している。1118は瓦質の陶質土器片である。石製品には、欠損しているが1119の石棒がある。木製品では、1120は四角のほぞ孔穴を開けた、用途不明木製品がある。

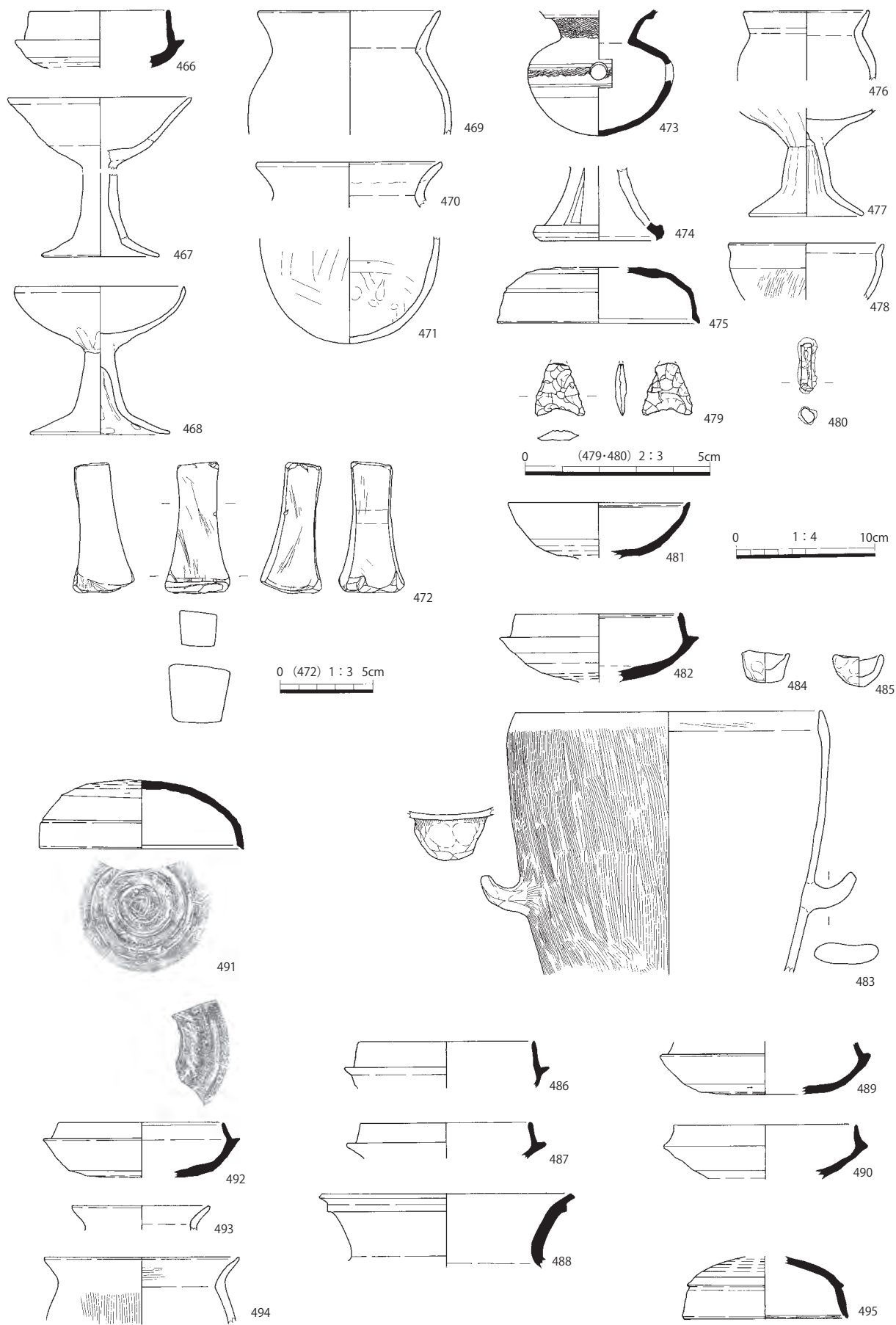


图 326 古代~古墳時代出土遺物 (1)

(平坦面1 竪穴建物)

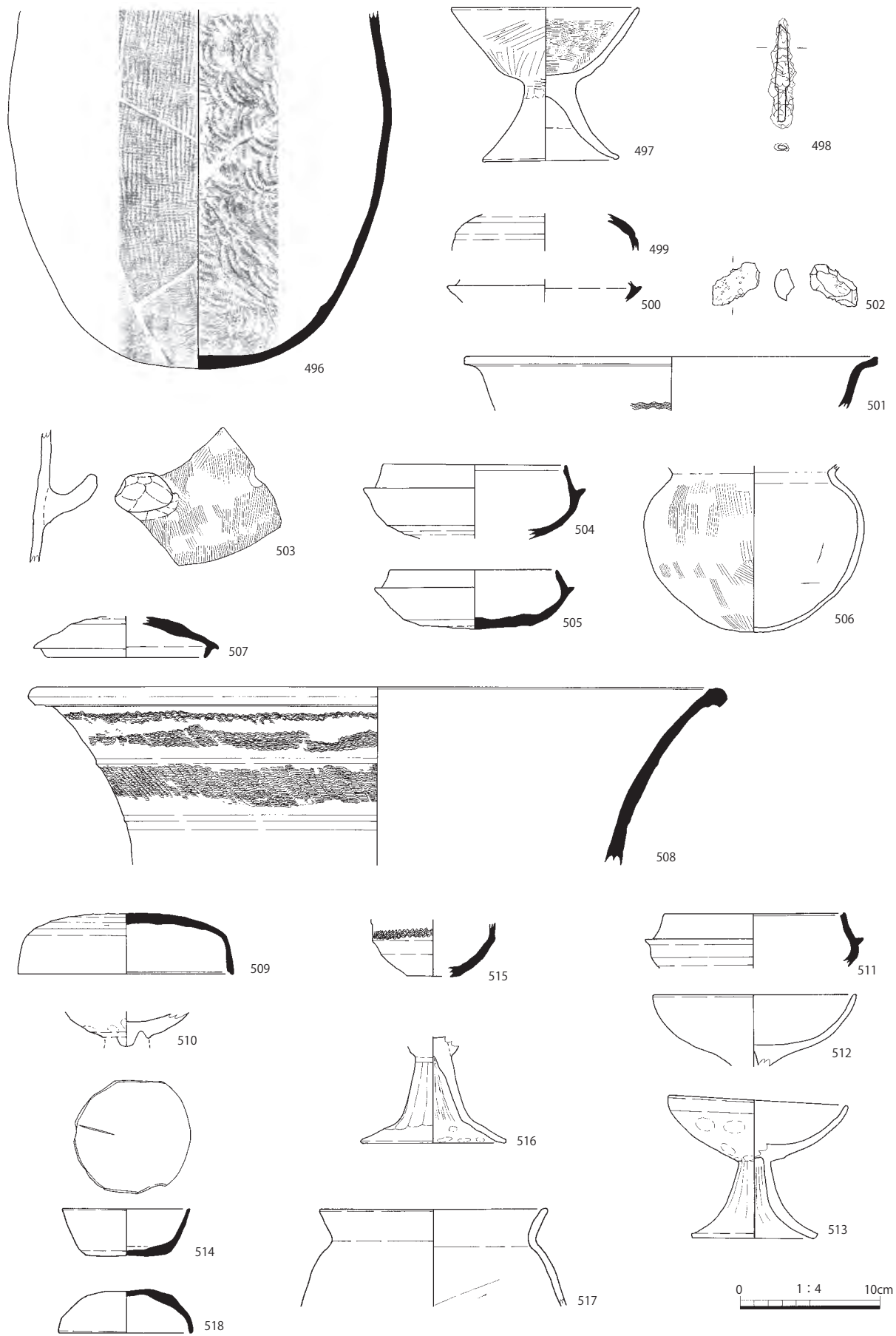


图 327 古代~古墳時代出土遺物 (2)

(平坦面1 竪穴建物・掘立建物・土坑)

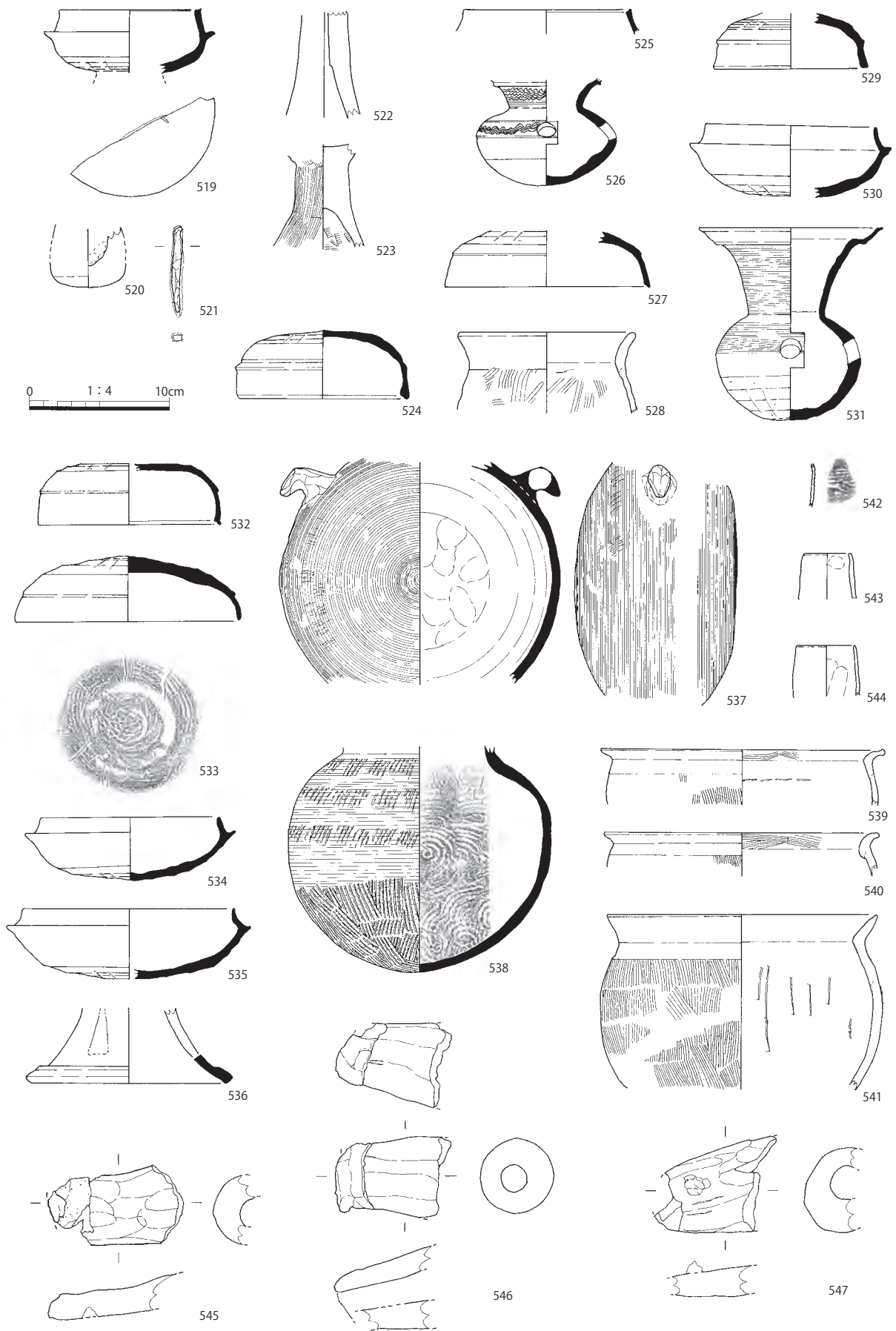


図 328 古代～古墳時代出土遺物 (3)

(平坦面1 土坑・ピット・溝) * 526は掘立建物

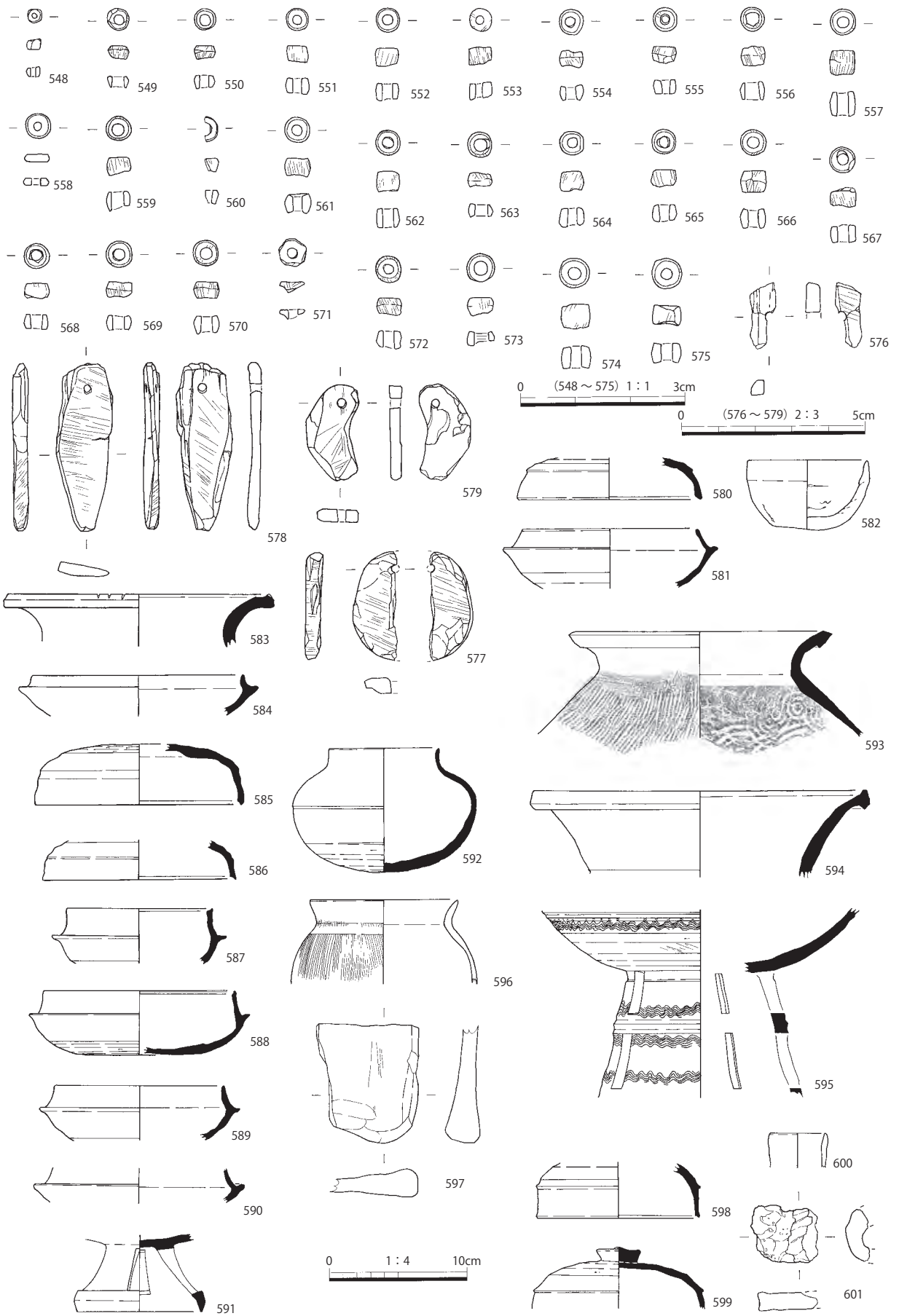


図 329 古代～古墳時代出土遺物（4）

（平坦面1 溝・落ち込み） * 584は平坦面3 溝

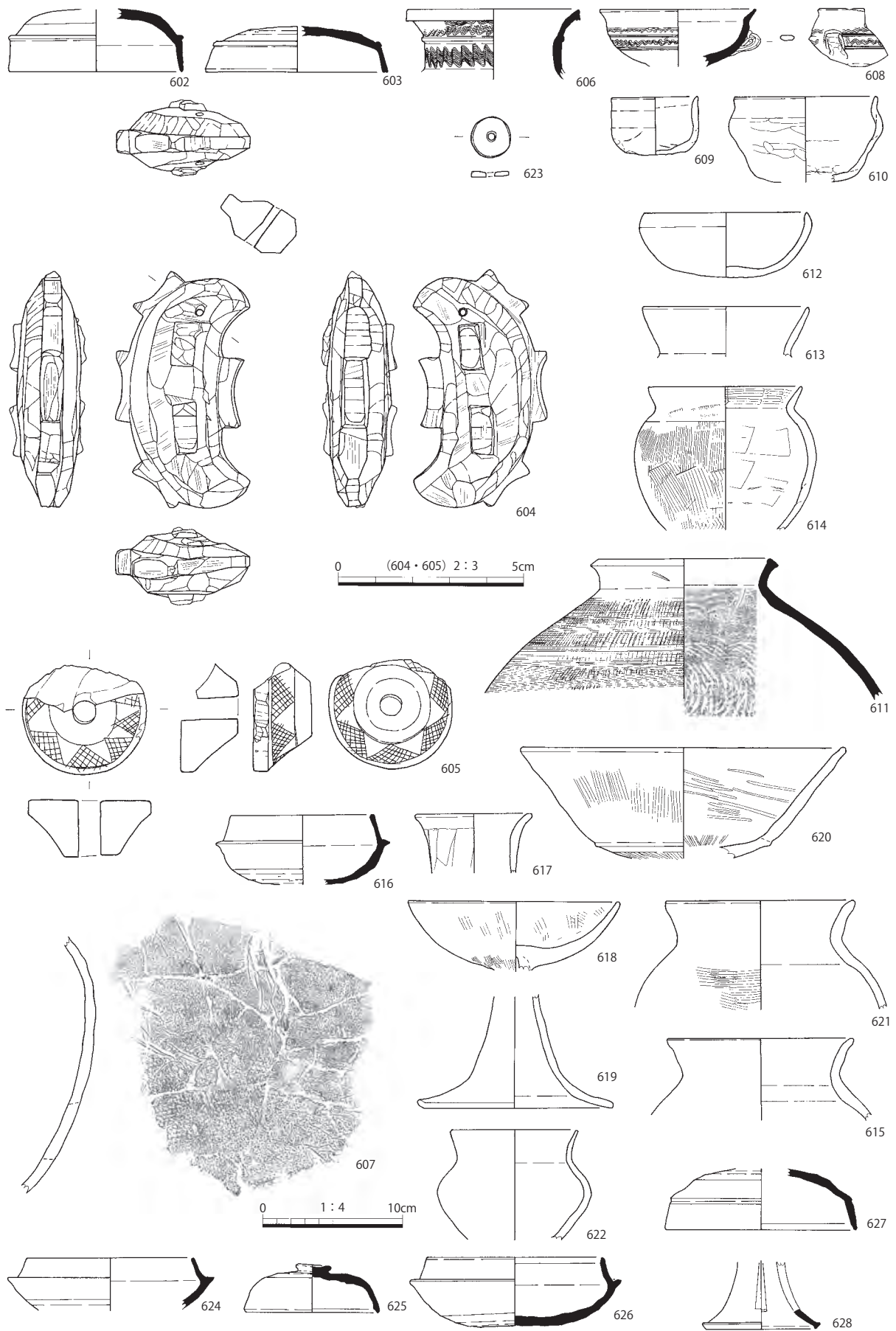


図 330 古代～古墳時代出土遺物 (5)

(平坦面1 包含層、平坦面2 ピット・溝・落ち込み・包含層)

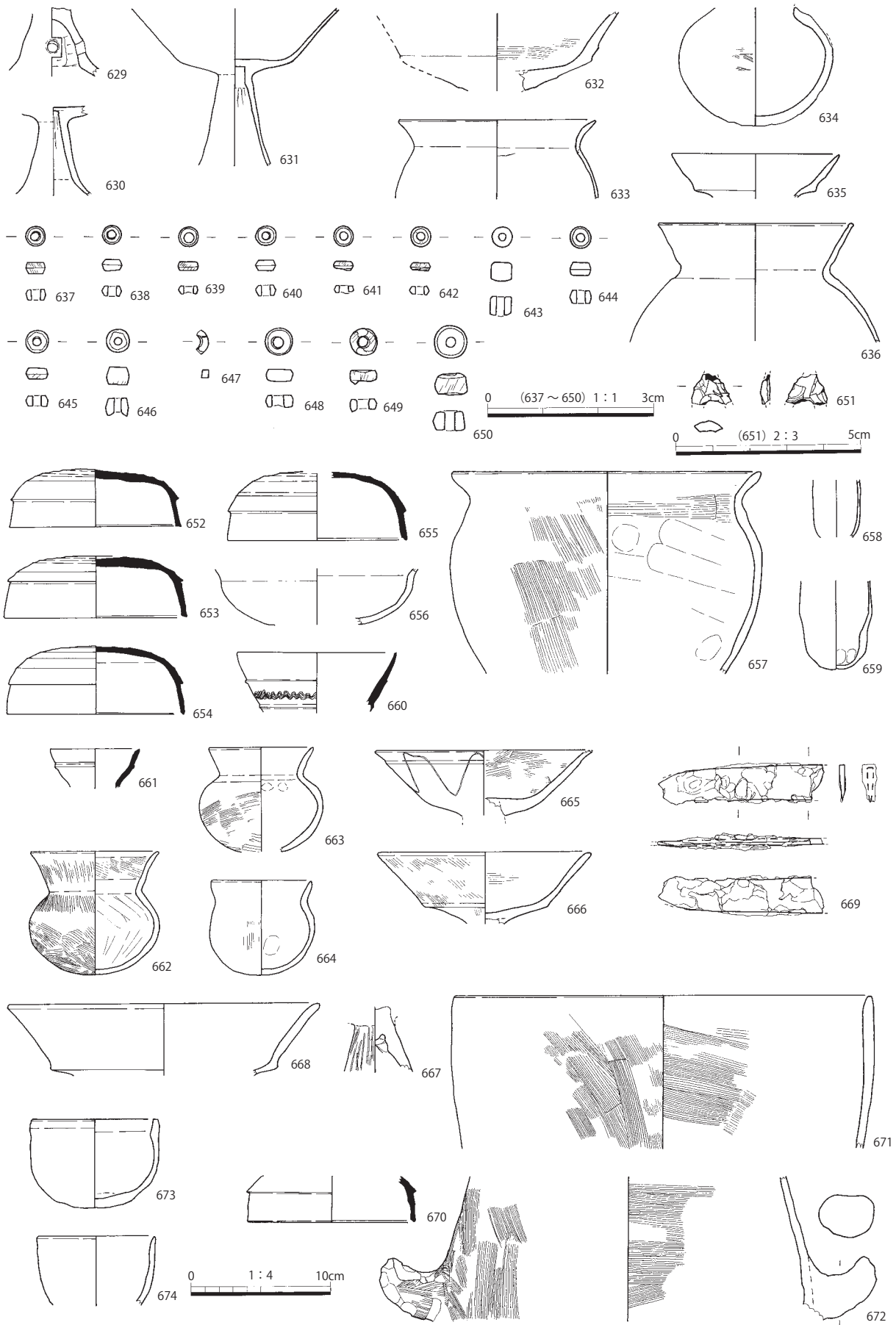


图 331 古代~古墳時代出土遺物 (6)

(平坦面3 竪穴建物)

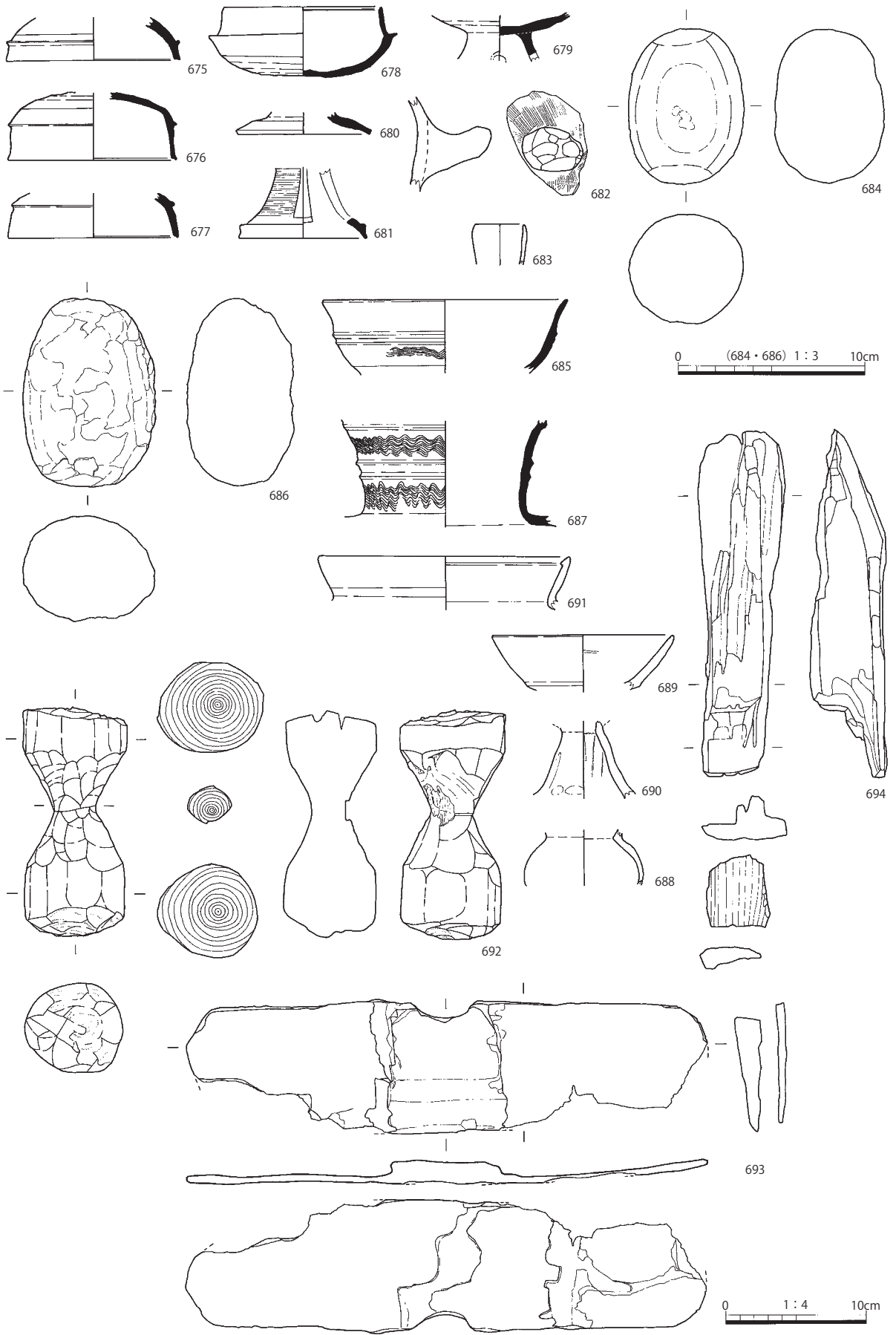


図 332 古代～古墳時代出土遺物（7）

（平坦面3 竪穴建物・掘立建物・井戸）

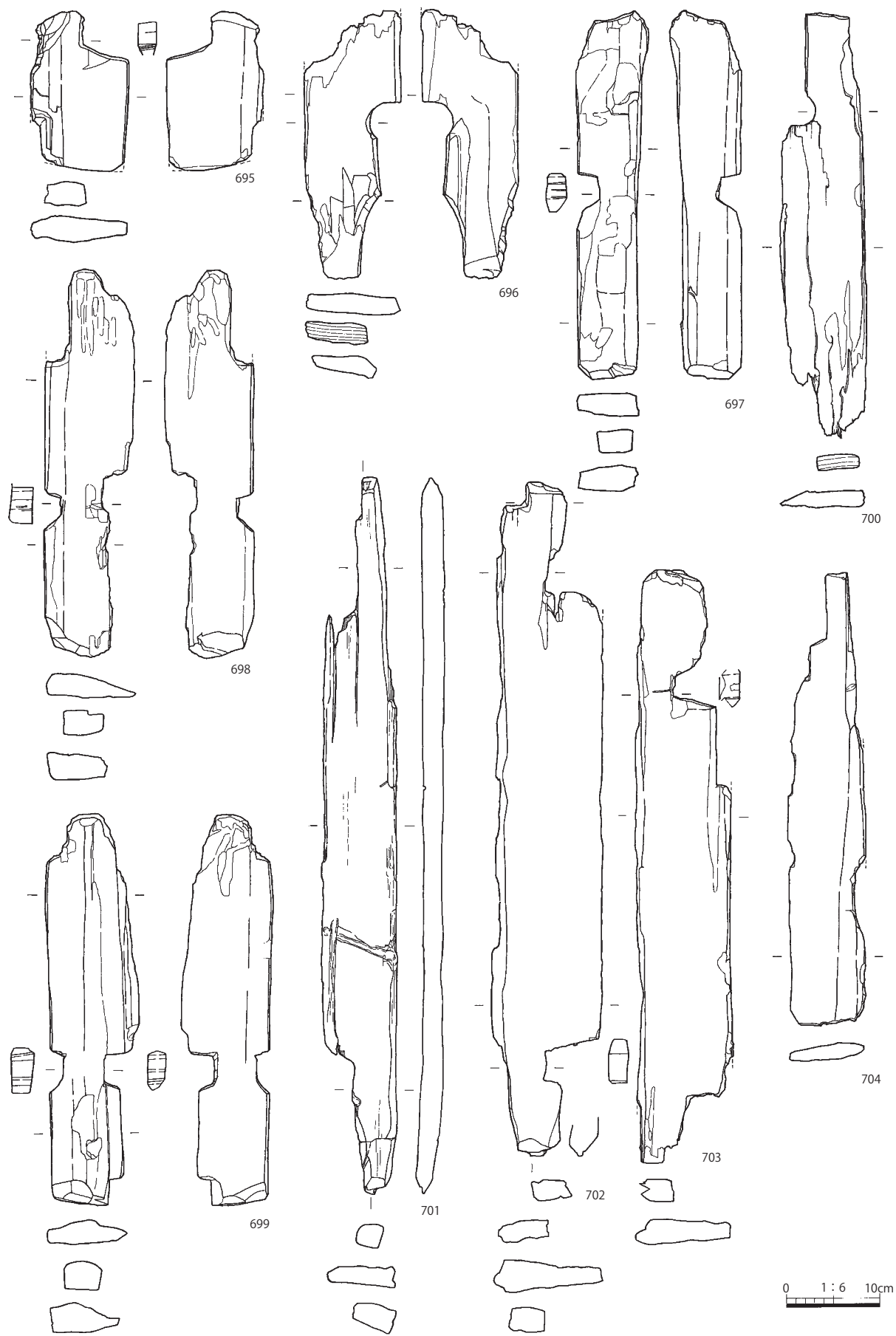


図 333 古代～古墳時代出土遺物 (8)

(平坦面3 井戸)

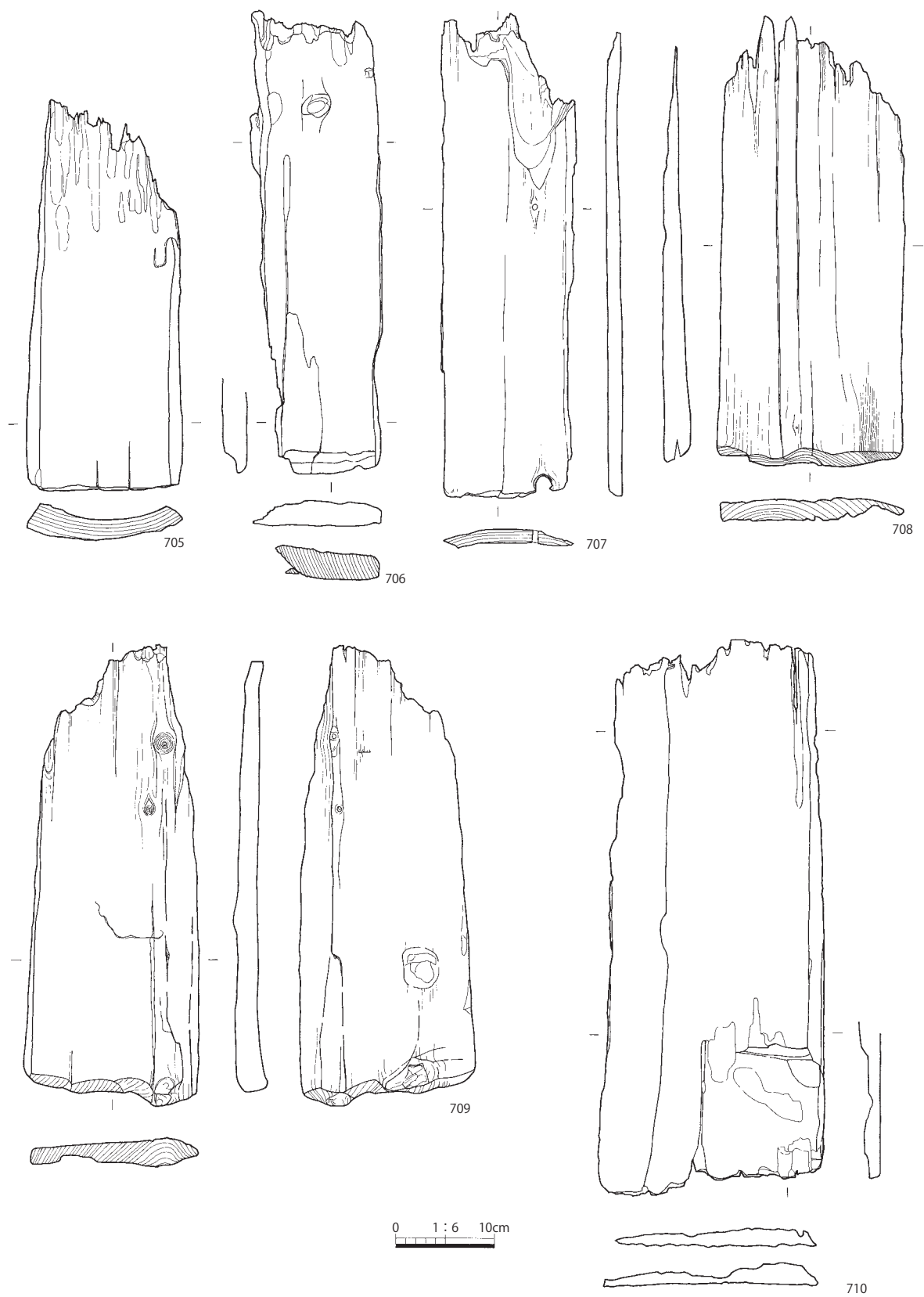


図 334 古代～古墳時代出土遺物（9）

（平坦面3 井戸）

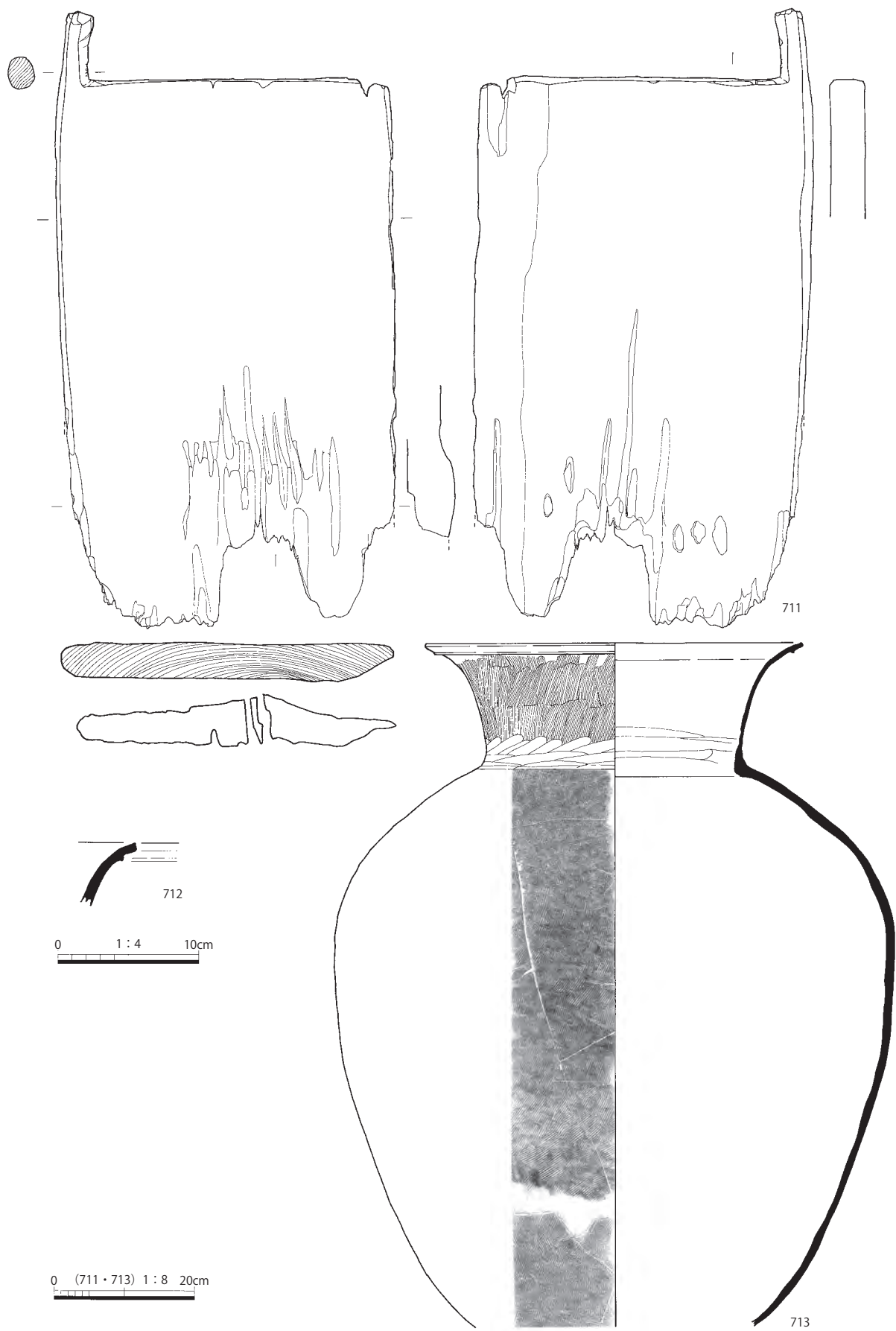


図 335 古代～古墳時代出土遺物 (10)

(平坦面3 井戸・土坑) * 712は谷1 土坑

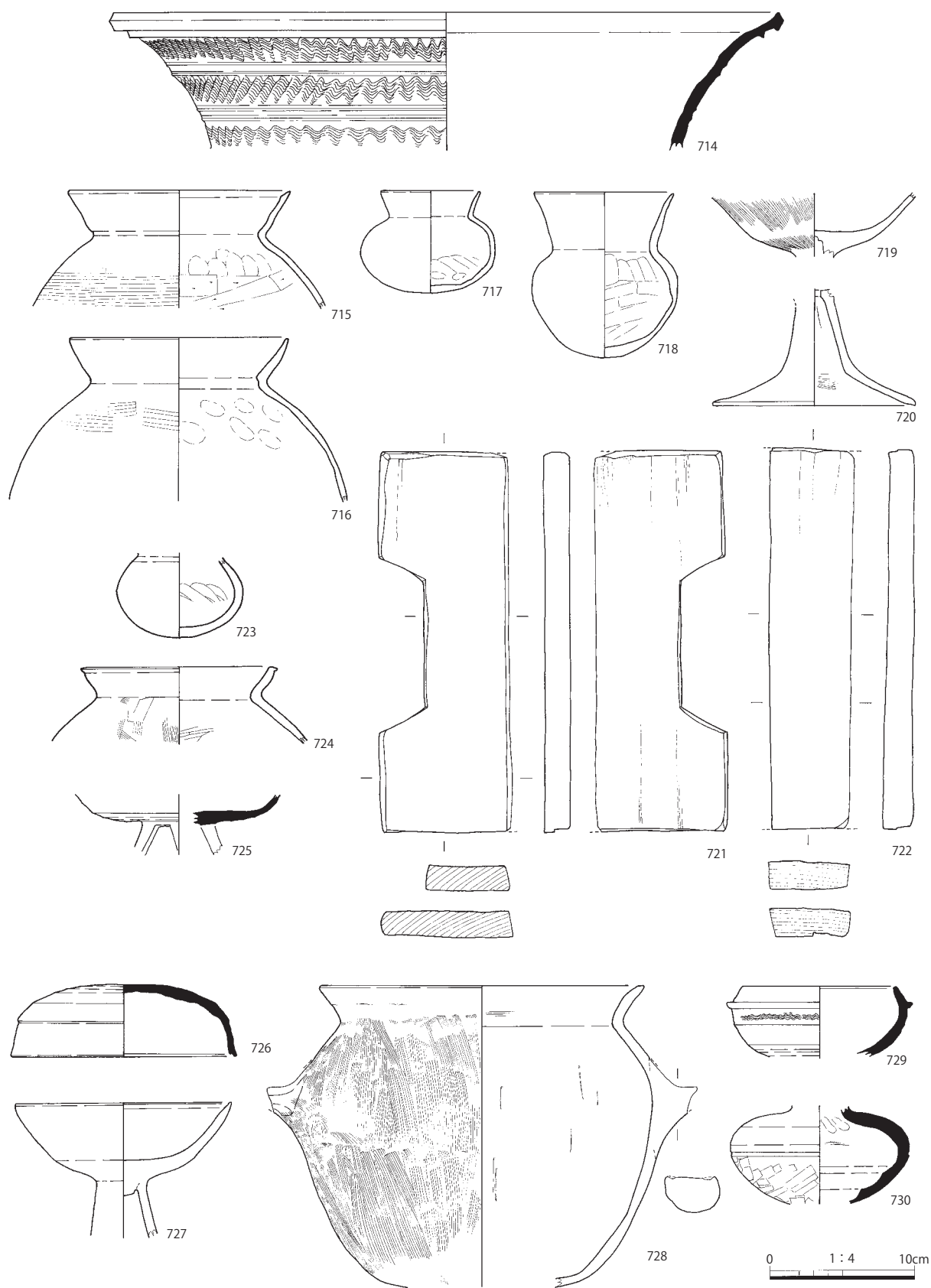


图 336 古代~古墳時代出土遺物 (11)

(平坦面3 土坑)

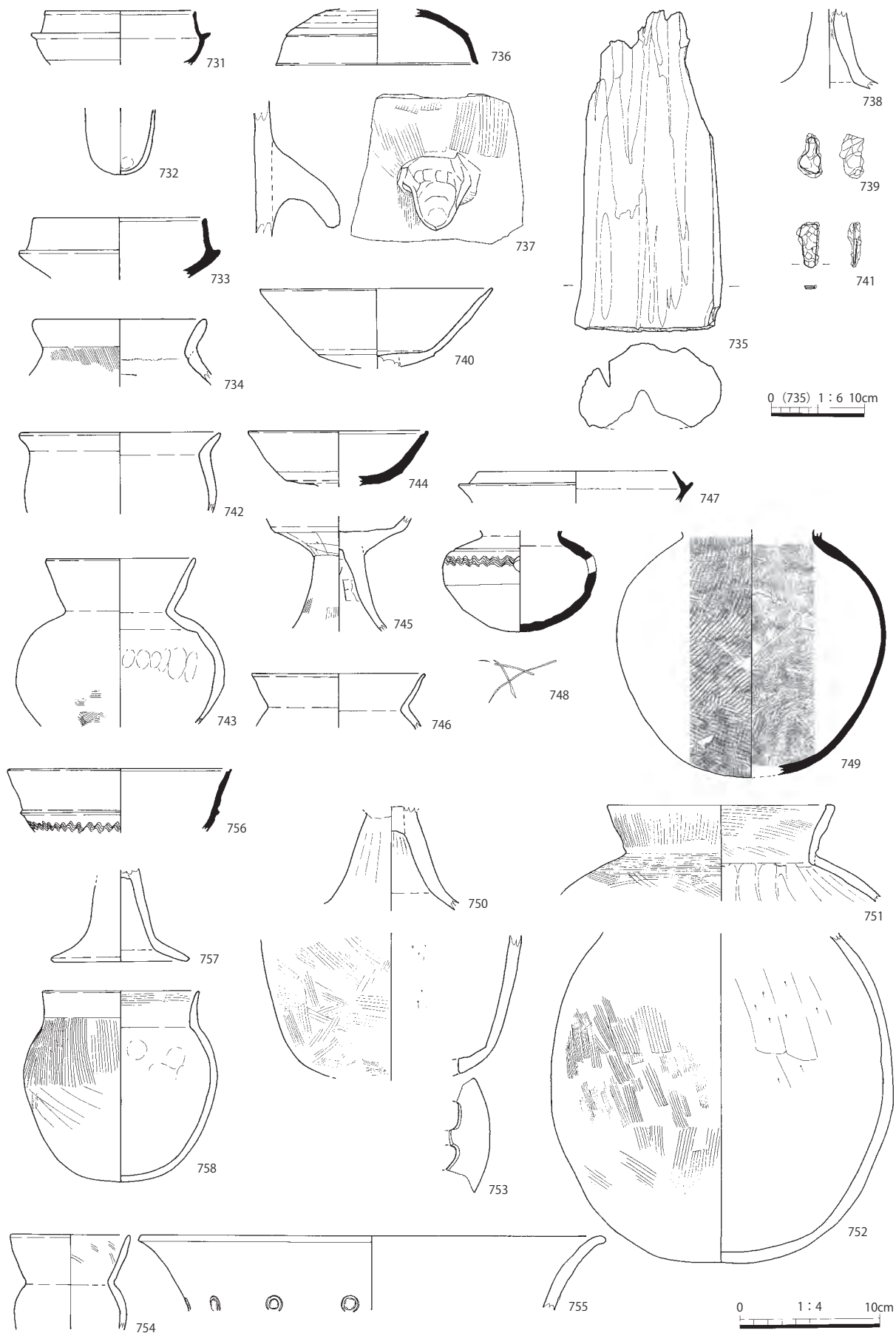


図 337 古代～古墳時代出土遺物 (12)

(平坦面3 ピット・溝)

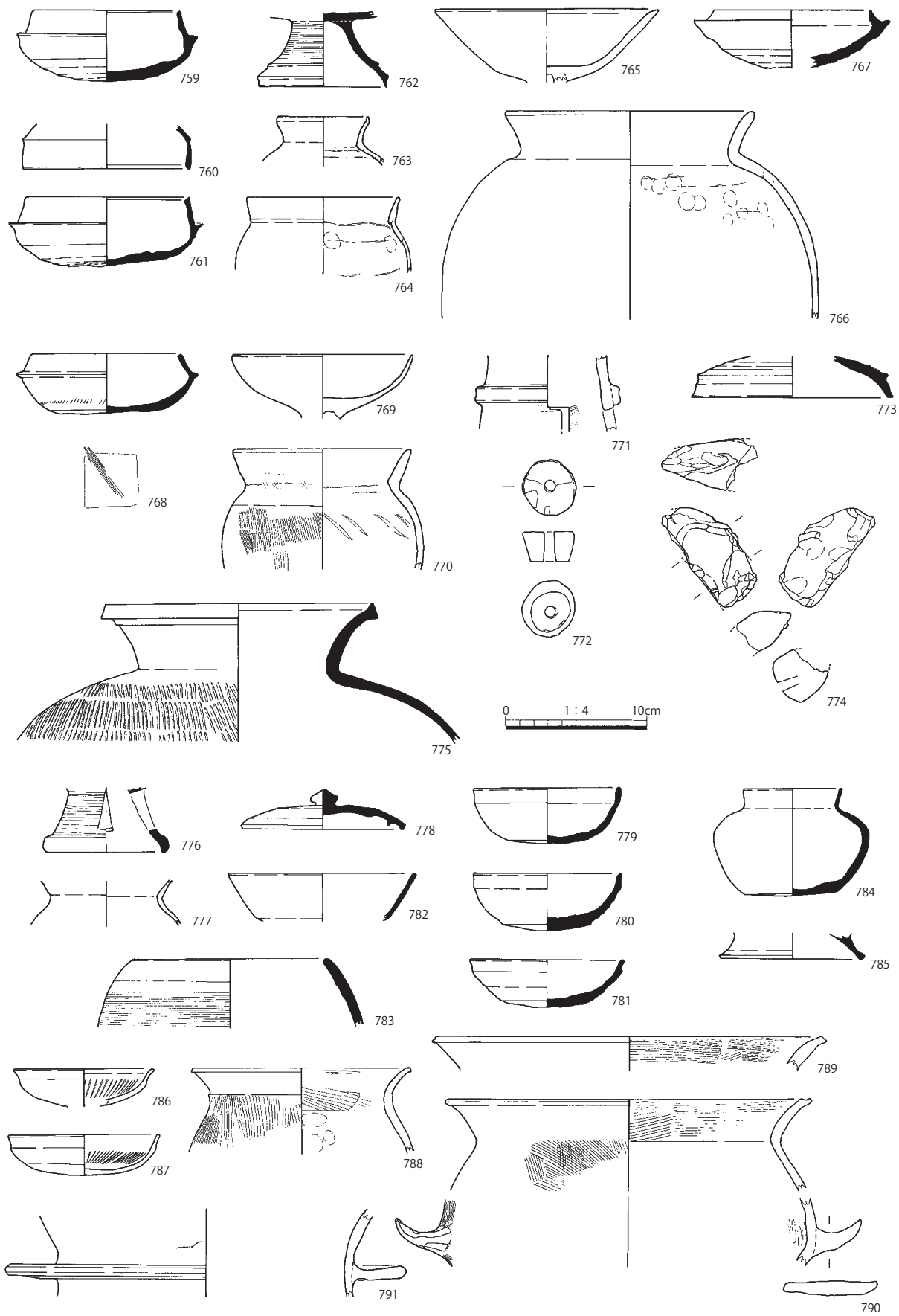


图 338 古代~古墳時代出土遺物 (13)

(平坦面3 溝・包含層、平坦面4 竪穴建物)

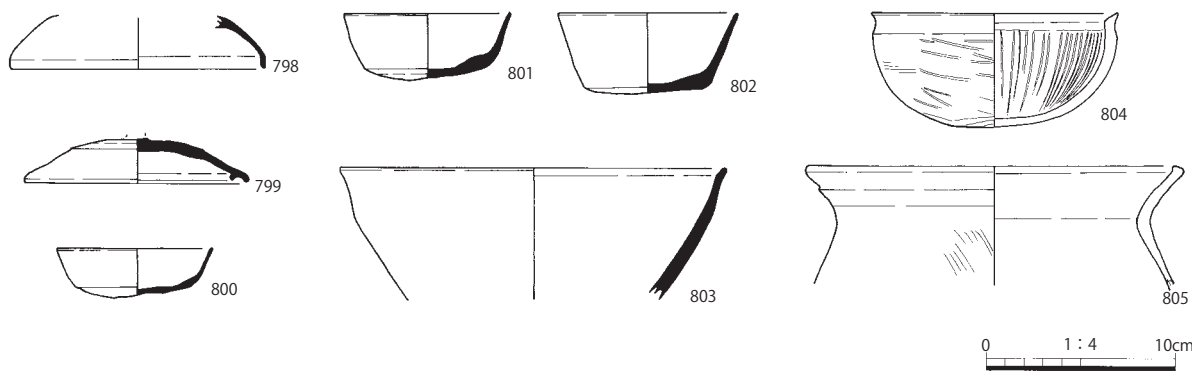
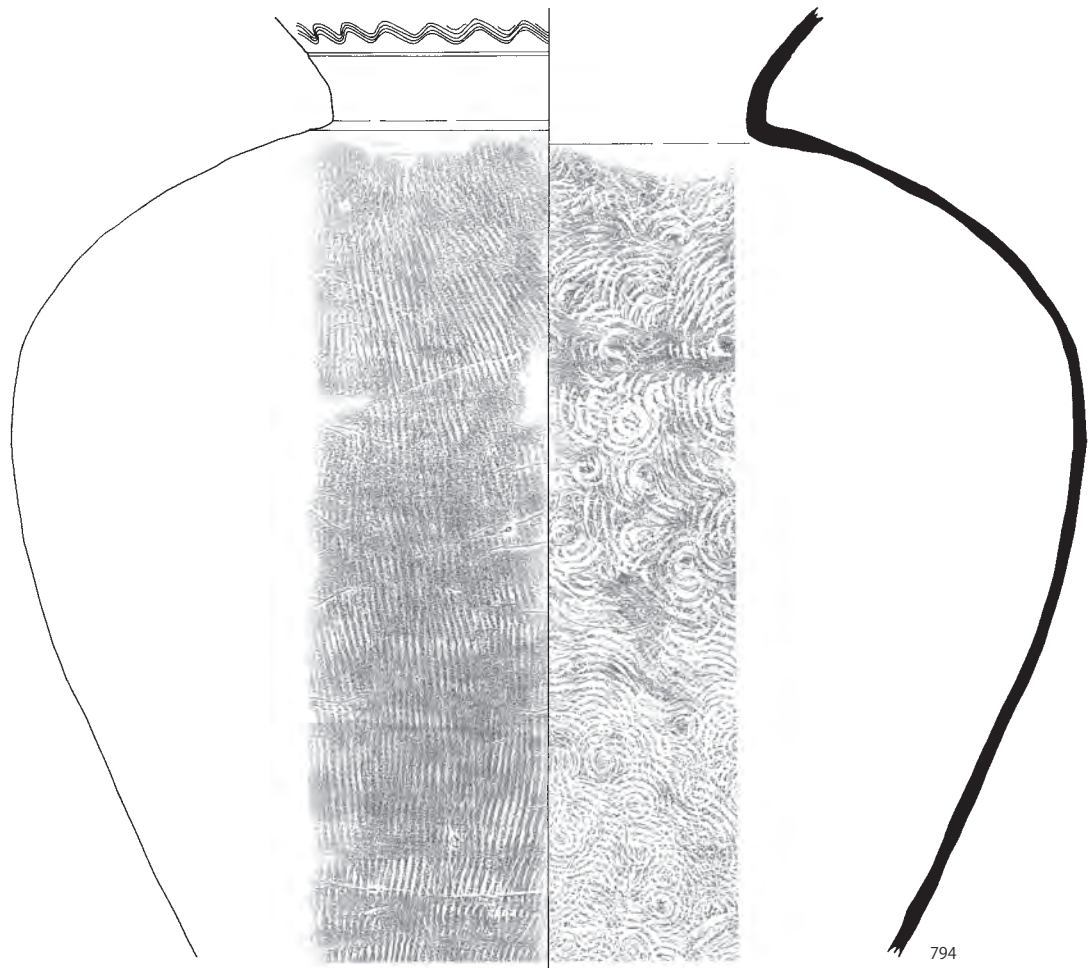
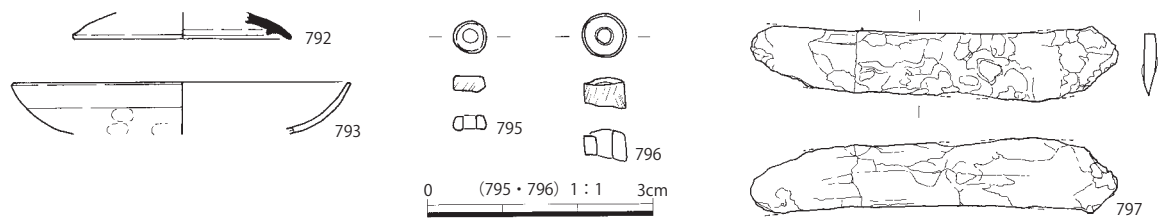


图 339 古代~古墳時代出土遺物 (14)

(平坦面 4 竪穴建物)

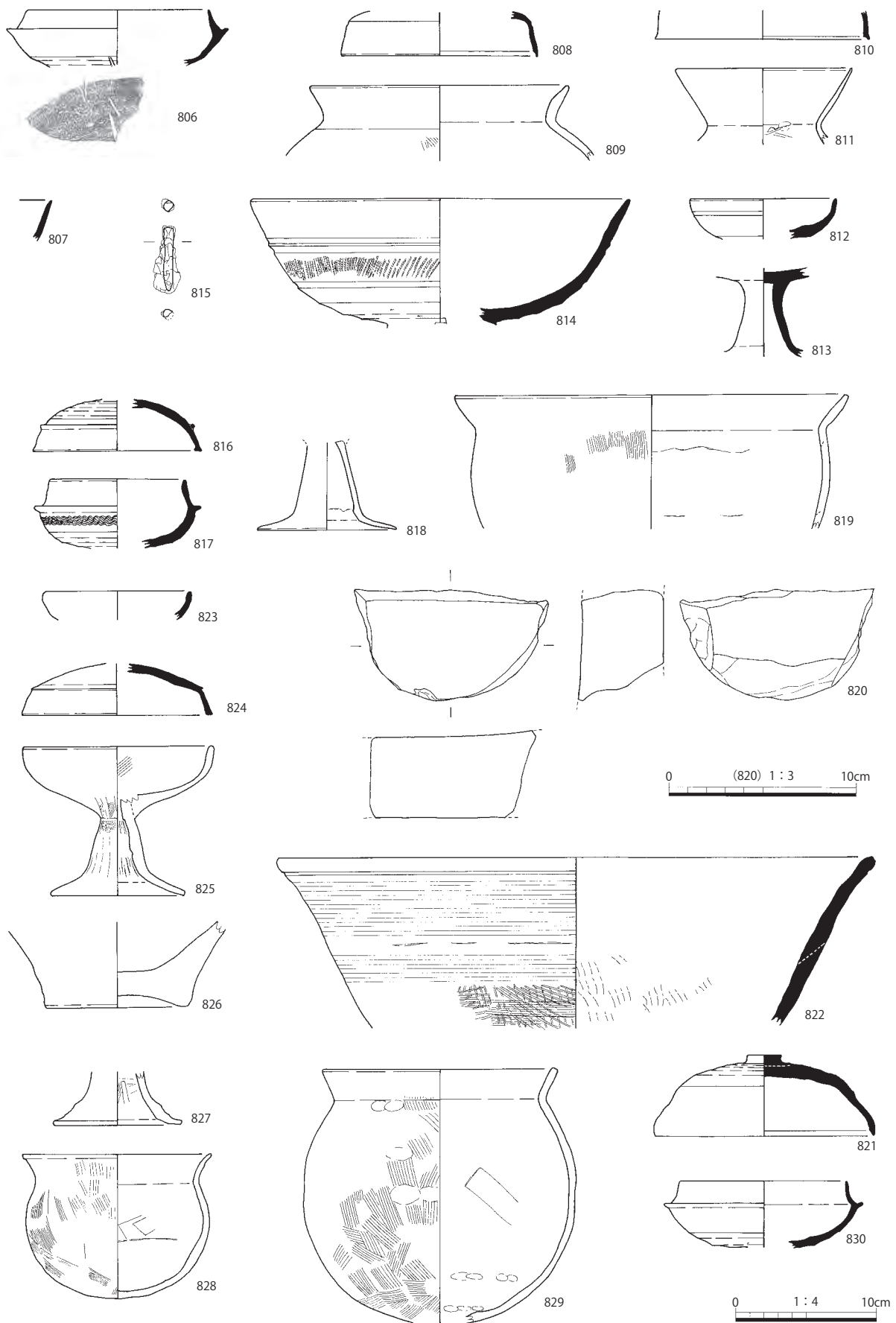


图 340 古代~古墳時代出土遺物 (15)

(平坦面4 掘立建物・土坑)

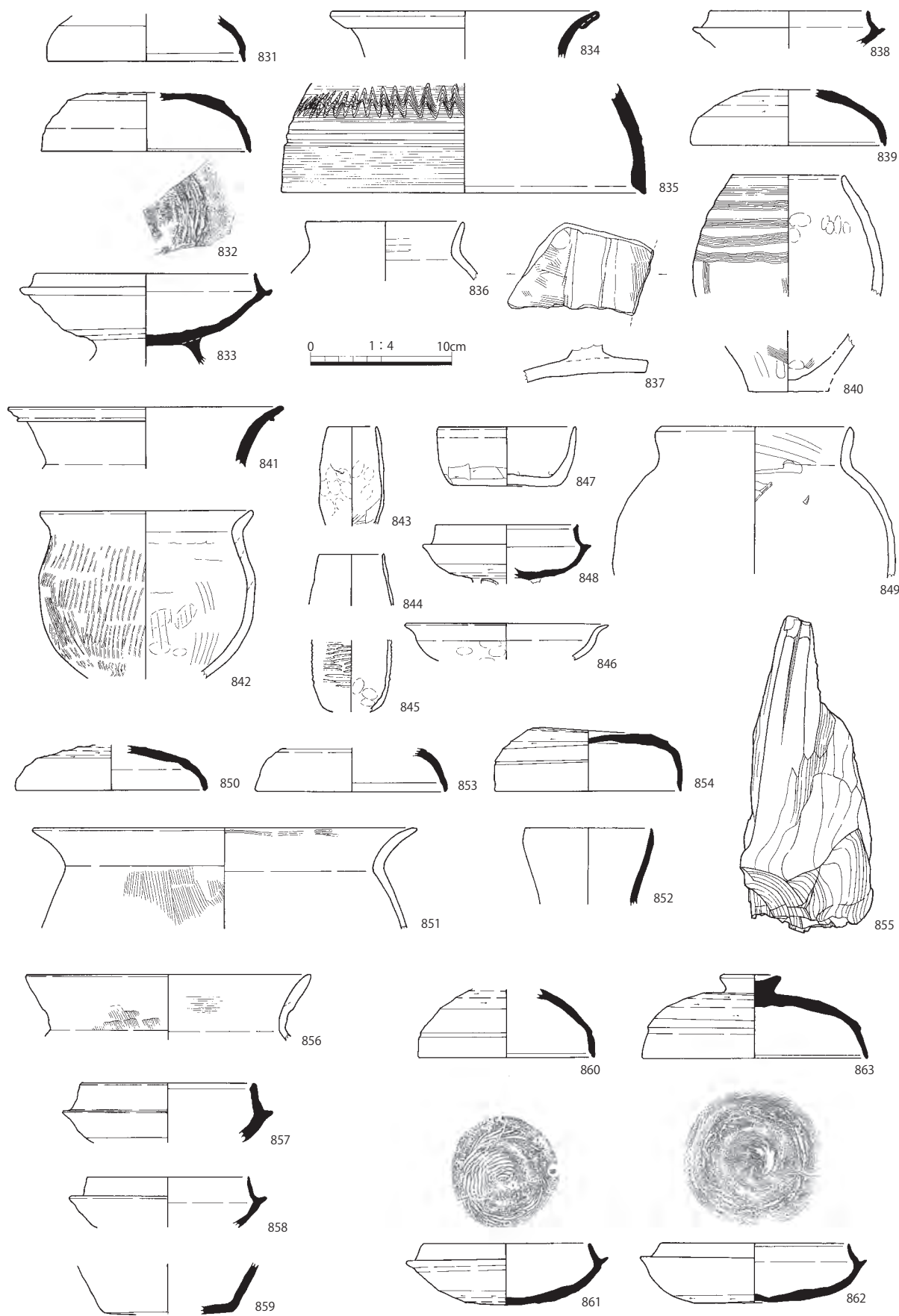


図 341 古代～古墳時代出土遺物 (16)

(平坦面4 土坑・ピット・溝)

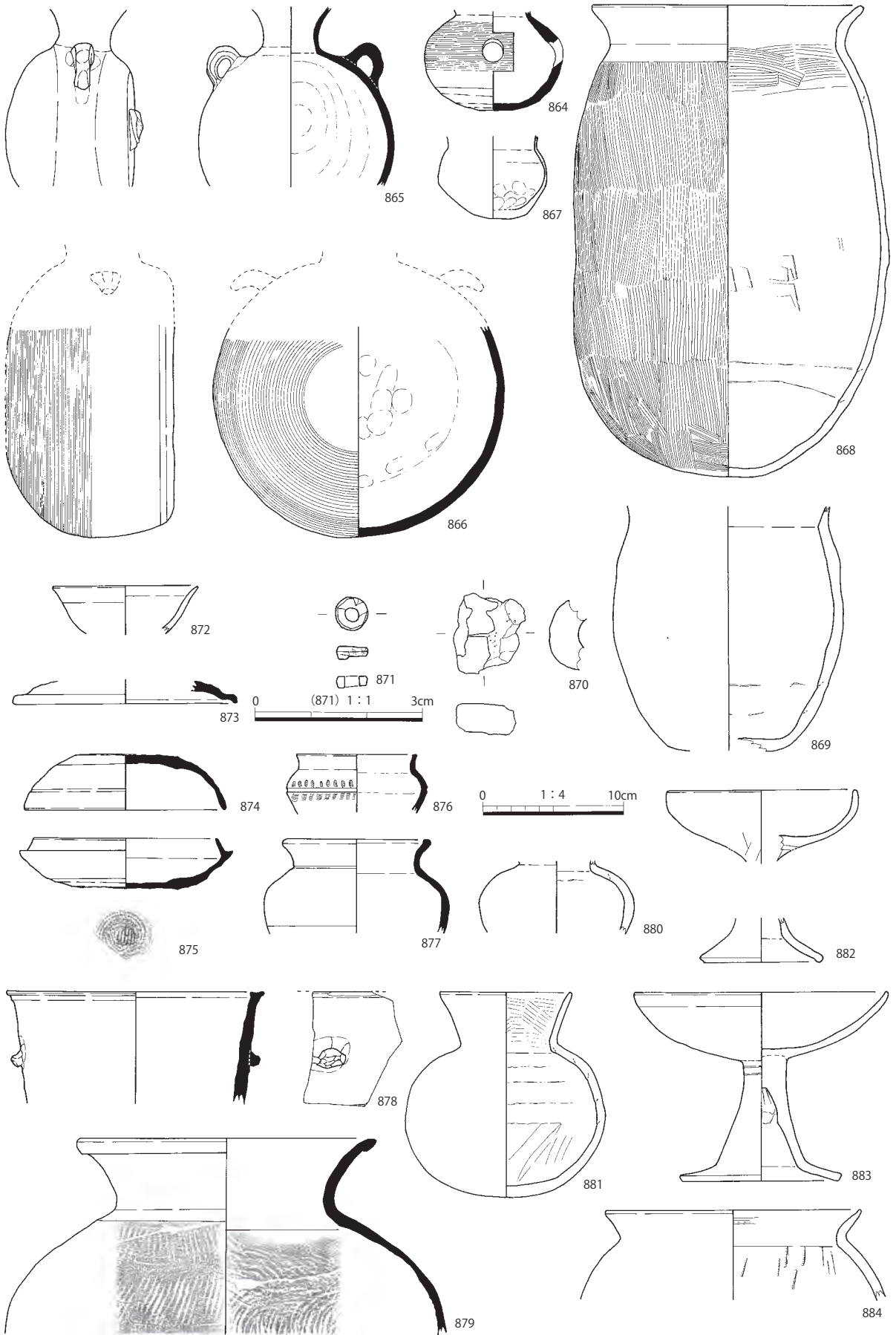


图 342 古代~古墳時代出土遺物 (17)

(平坦面 4 溝)

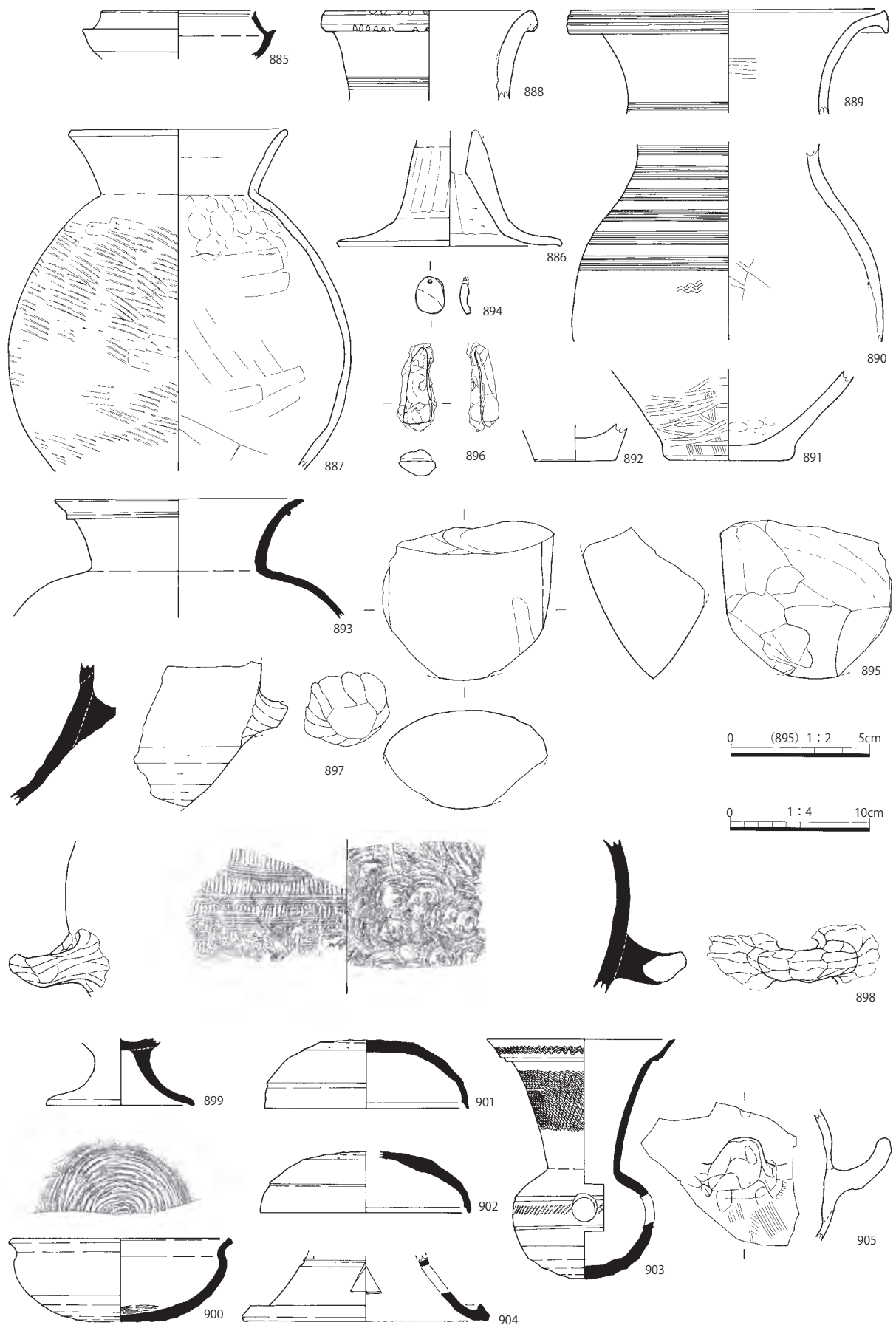


图 343 古代~古墳時代出土遺物 (18)

(平坦面 4 溝)

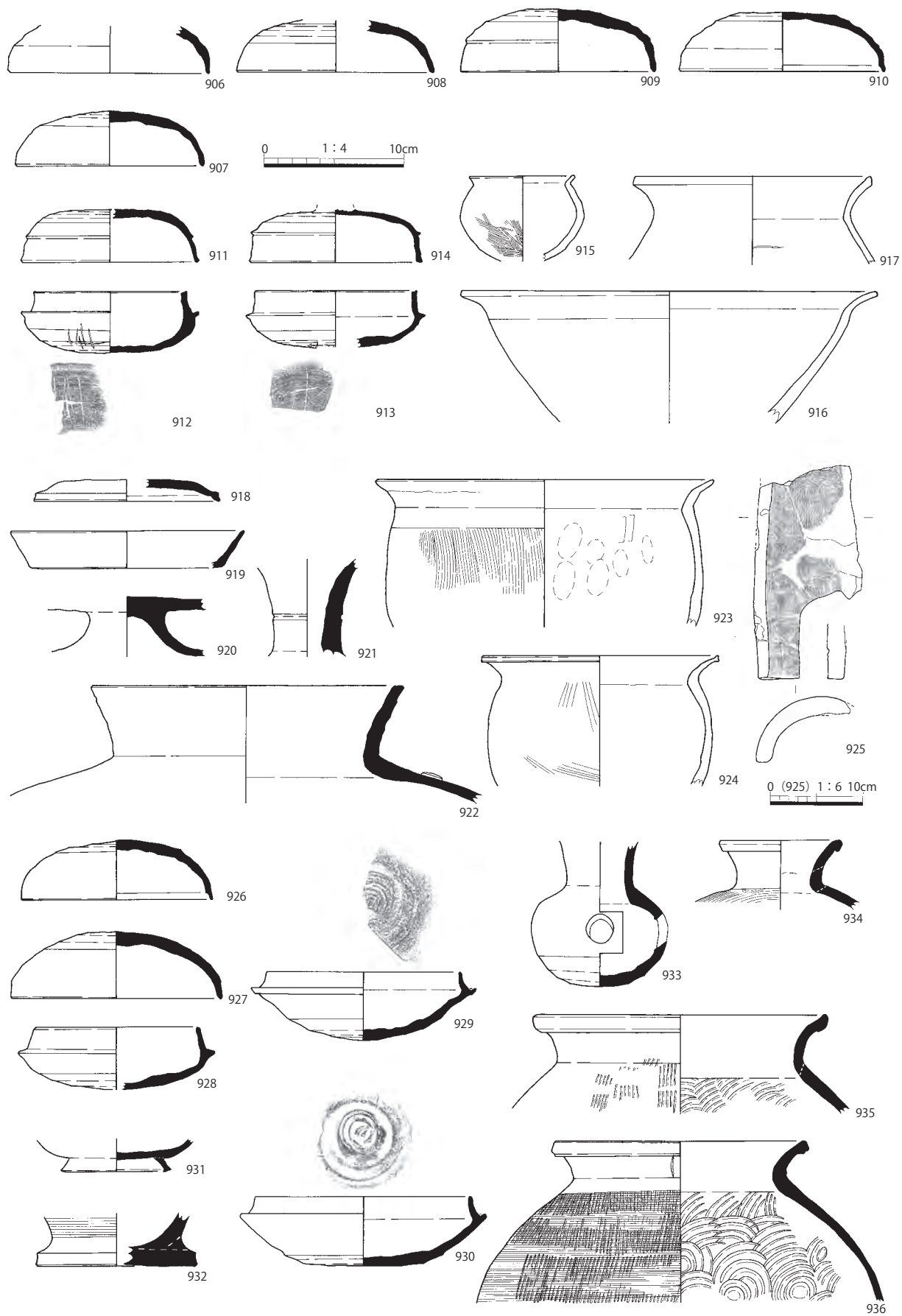


図 344 古代～古墳時代出土遺物 (19)

(平坦面 4 溝・落ち込み)

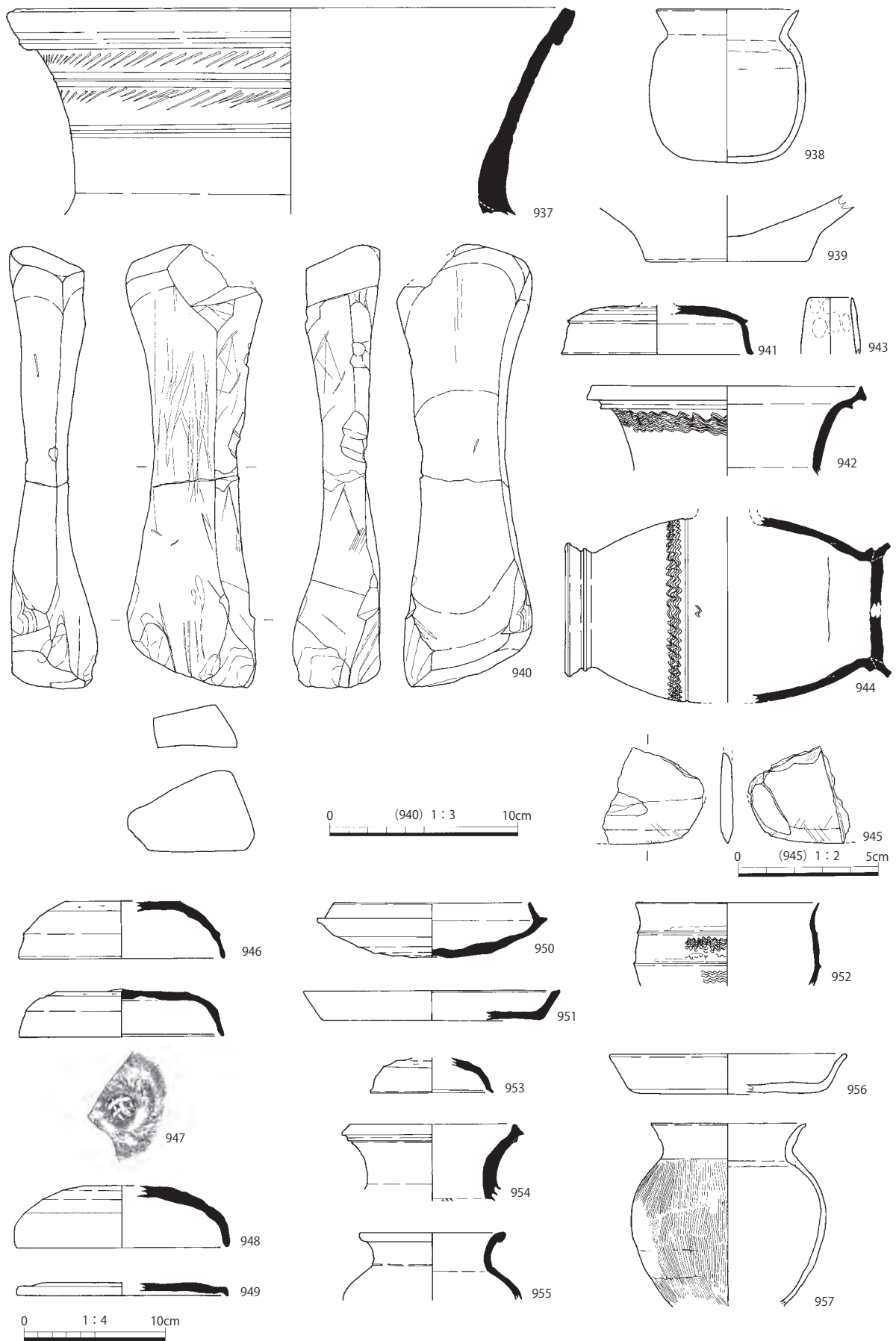


図 345 古代～古墳時代出土遺物 (20)

(平坦面4 落ち込み・包含層)

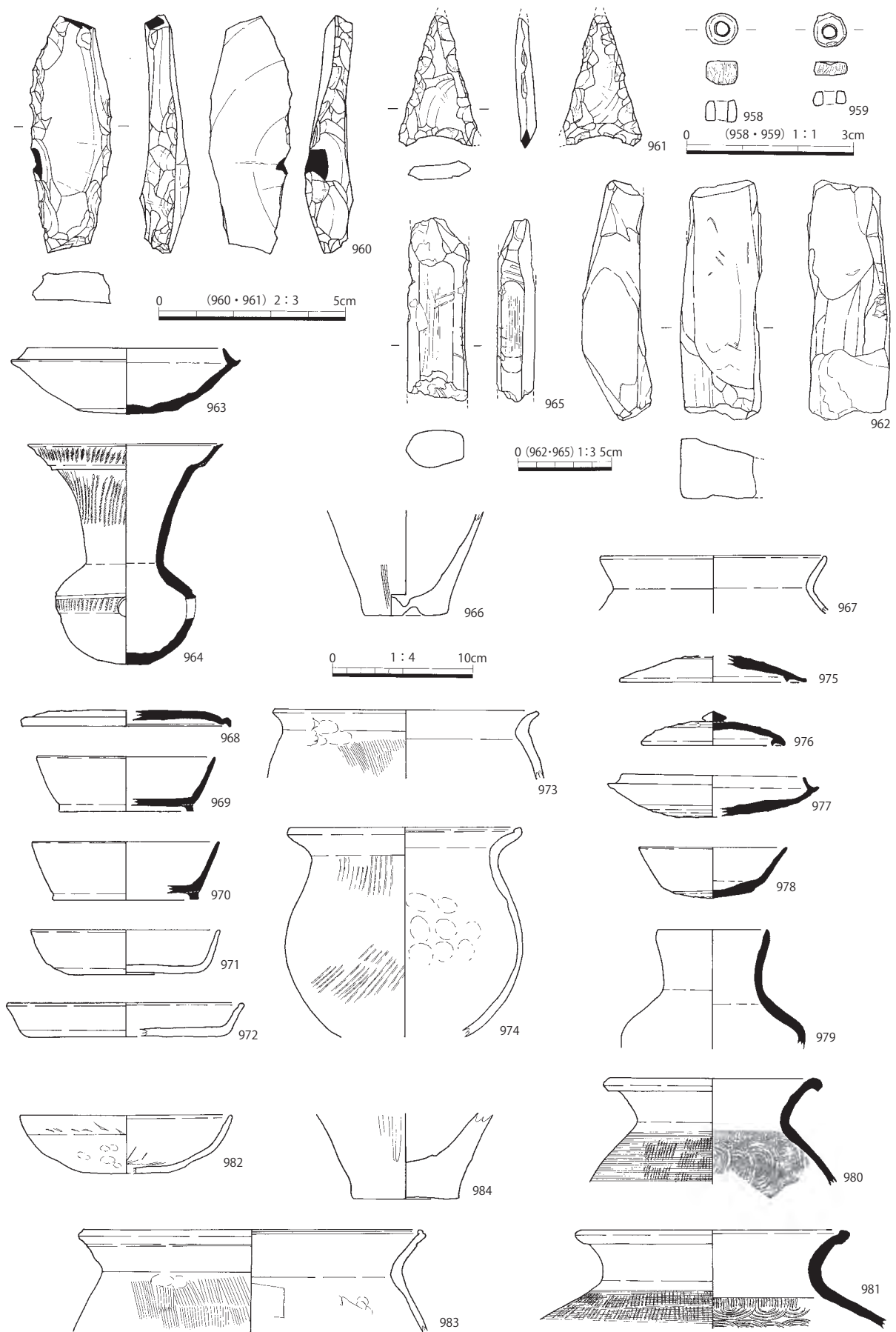


图 346 古代~古墳時代出土遺物 (21)

(平坦面 4 包含層)

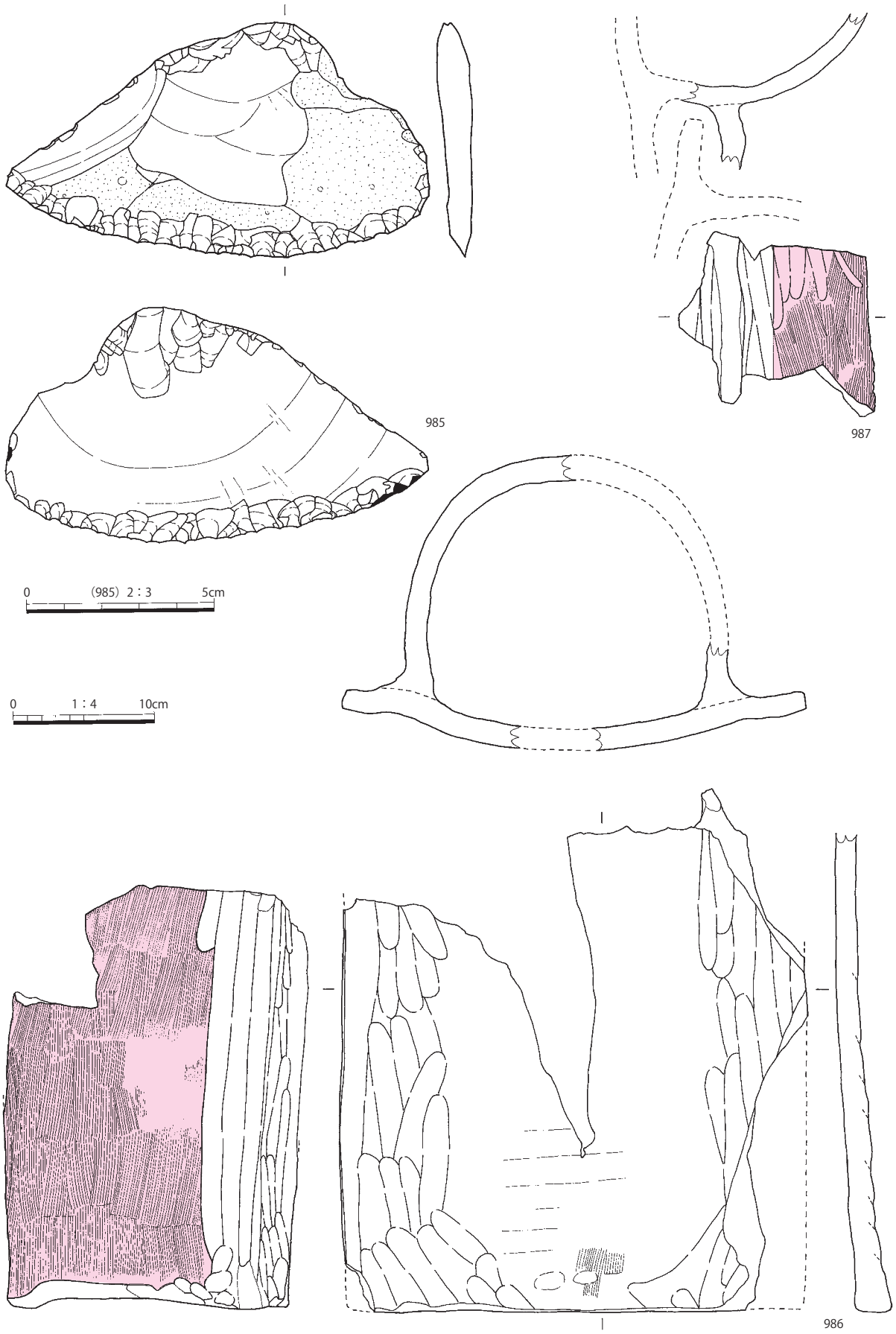


图 347 古代~古墳時代出土遺物 (22) (平坦面4 包含層、谷2 暗渠)

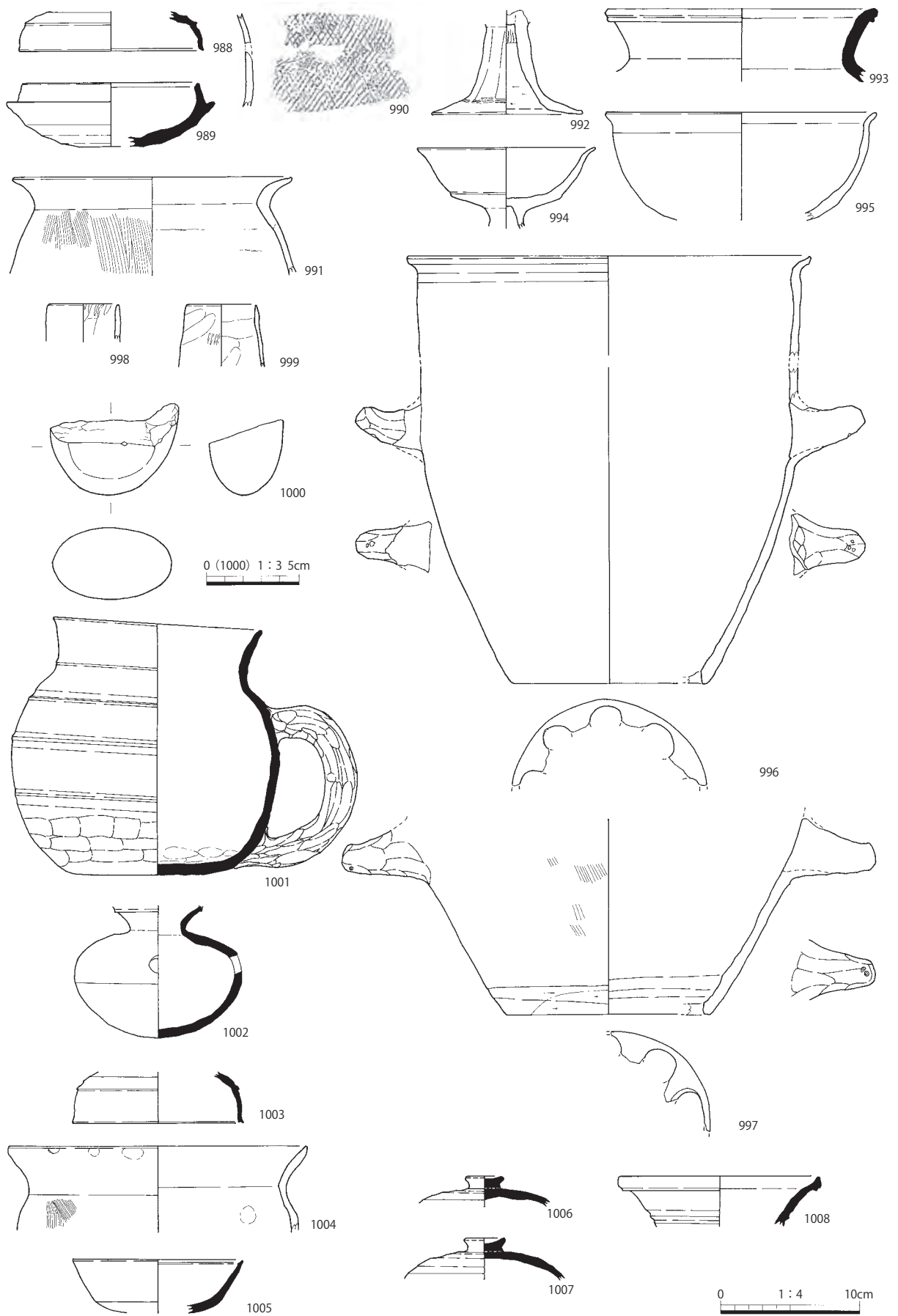


図 348 古代～古墳時代出土遺物 (23)

(谷 1 土坑・ピット・溝) * 993～1000 は平坦面 3 土坑

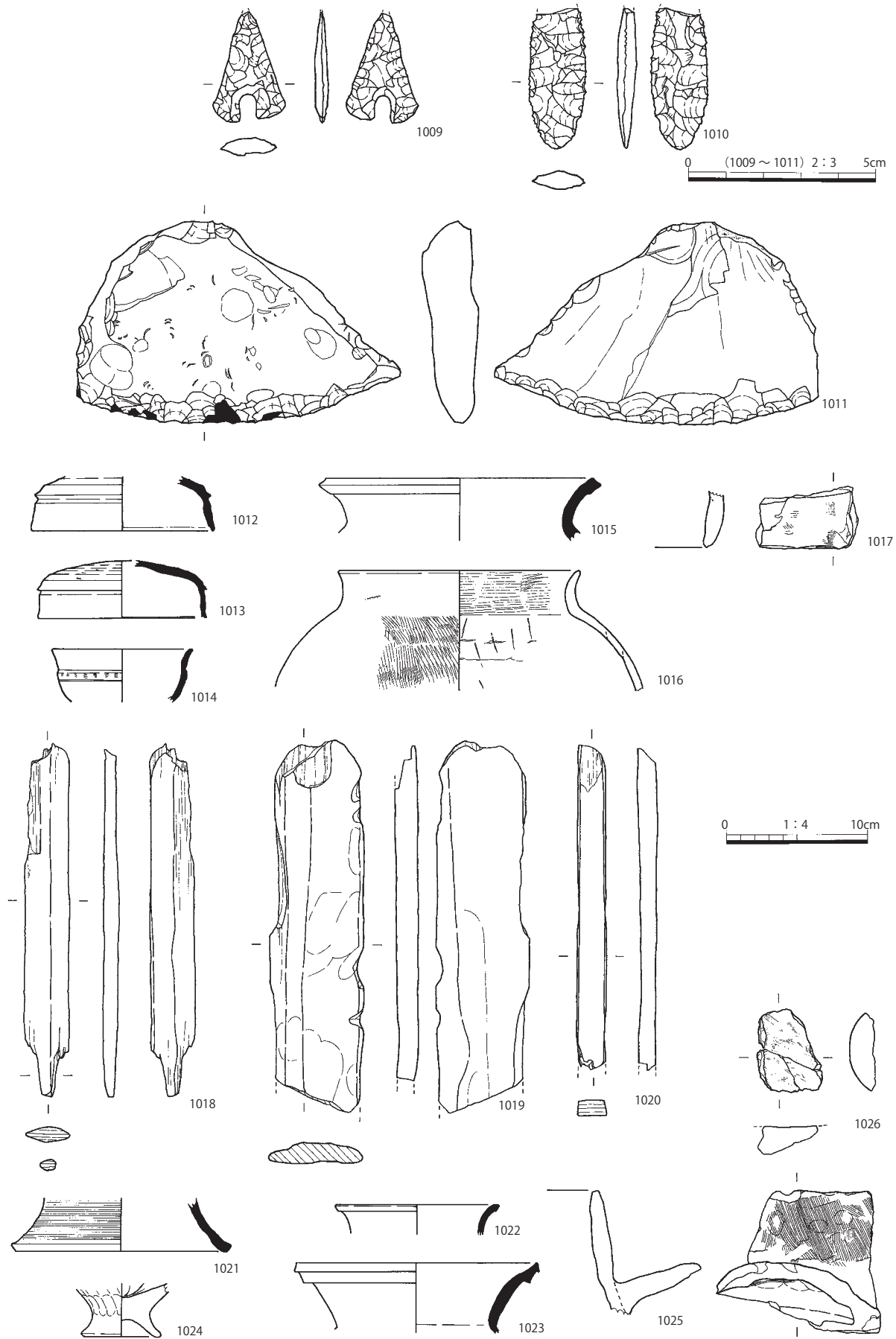


图 349 古代~古墳時代出土遺物 (24)

(谷1 包含層)

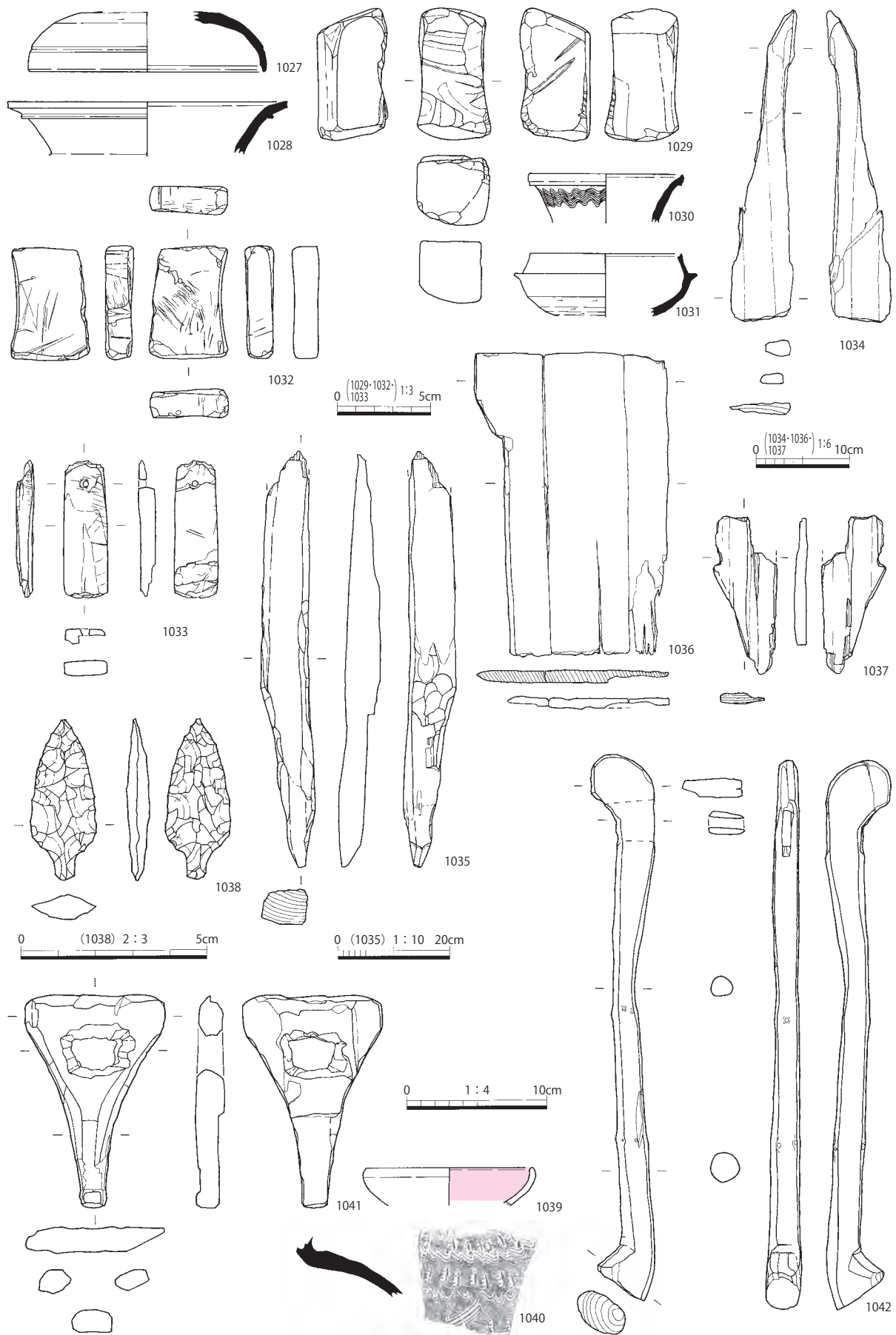


图 350 古代～古墳時代出土遺物 (25)

(谷 1 包含層)

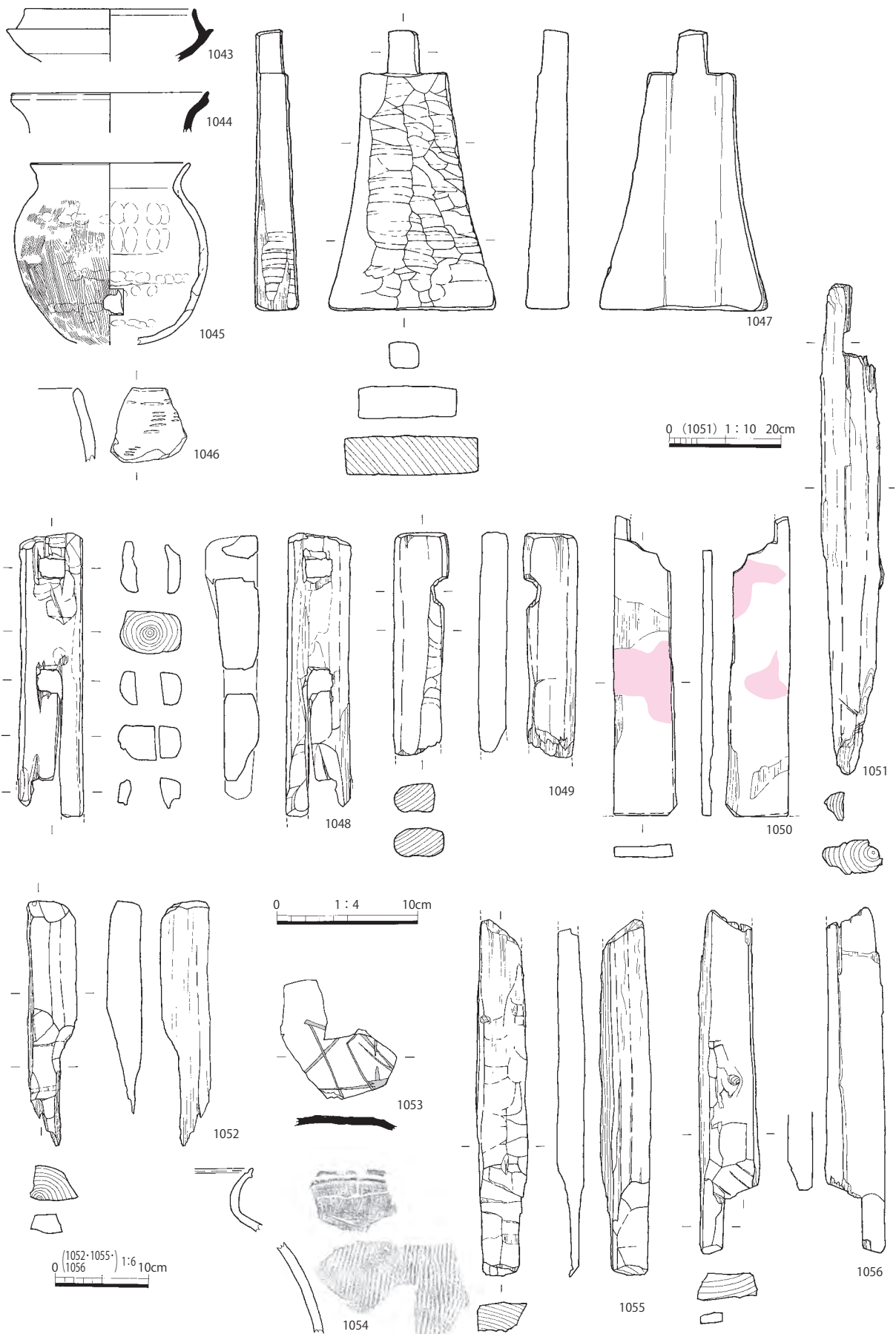


图 351 古代~古墳時代出土遺物 (26)

(谷1 包含層)

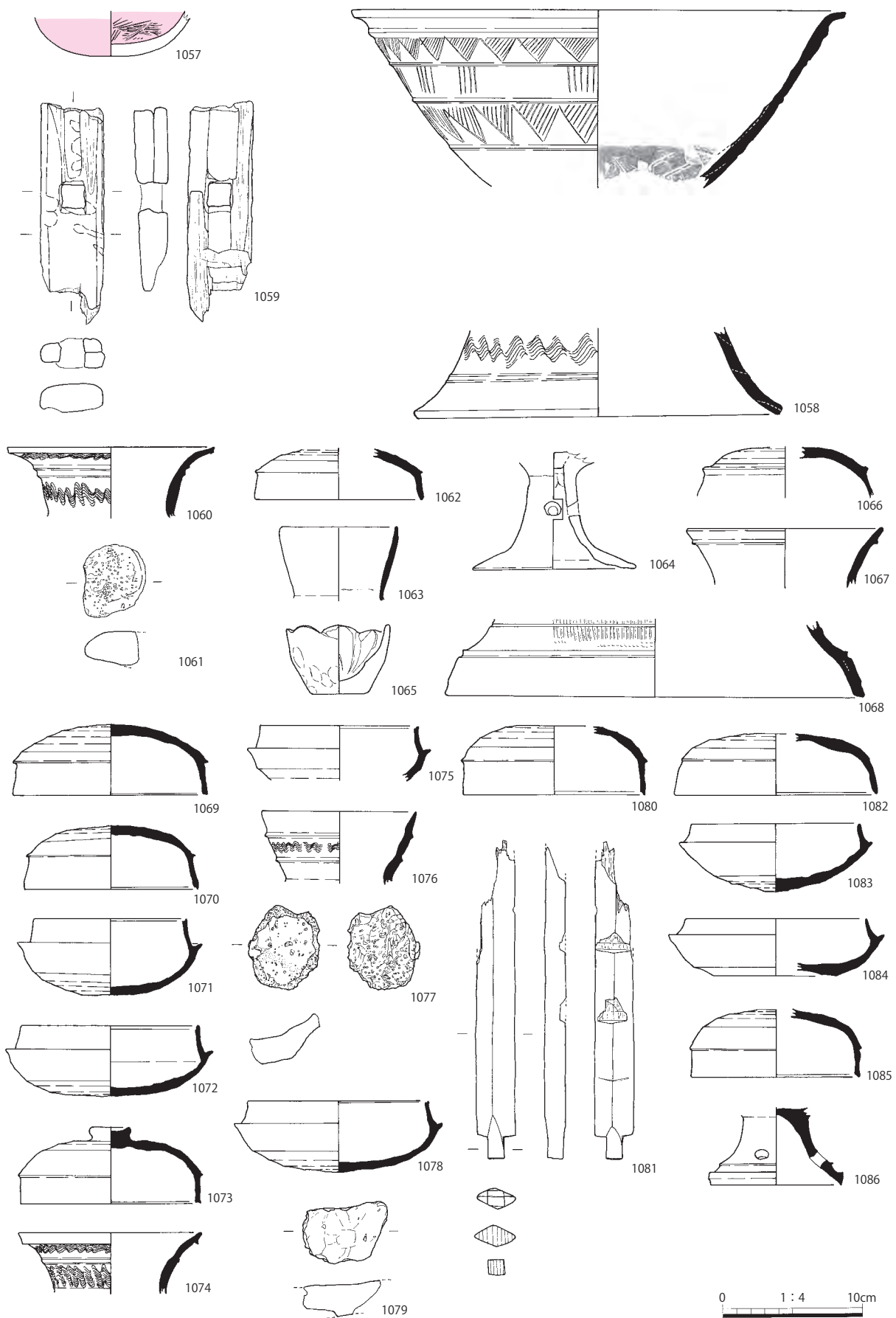


图 352 古代~古墳時代出土遺物 (27)

(谷 1 包含層)

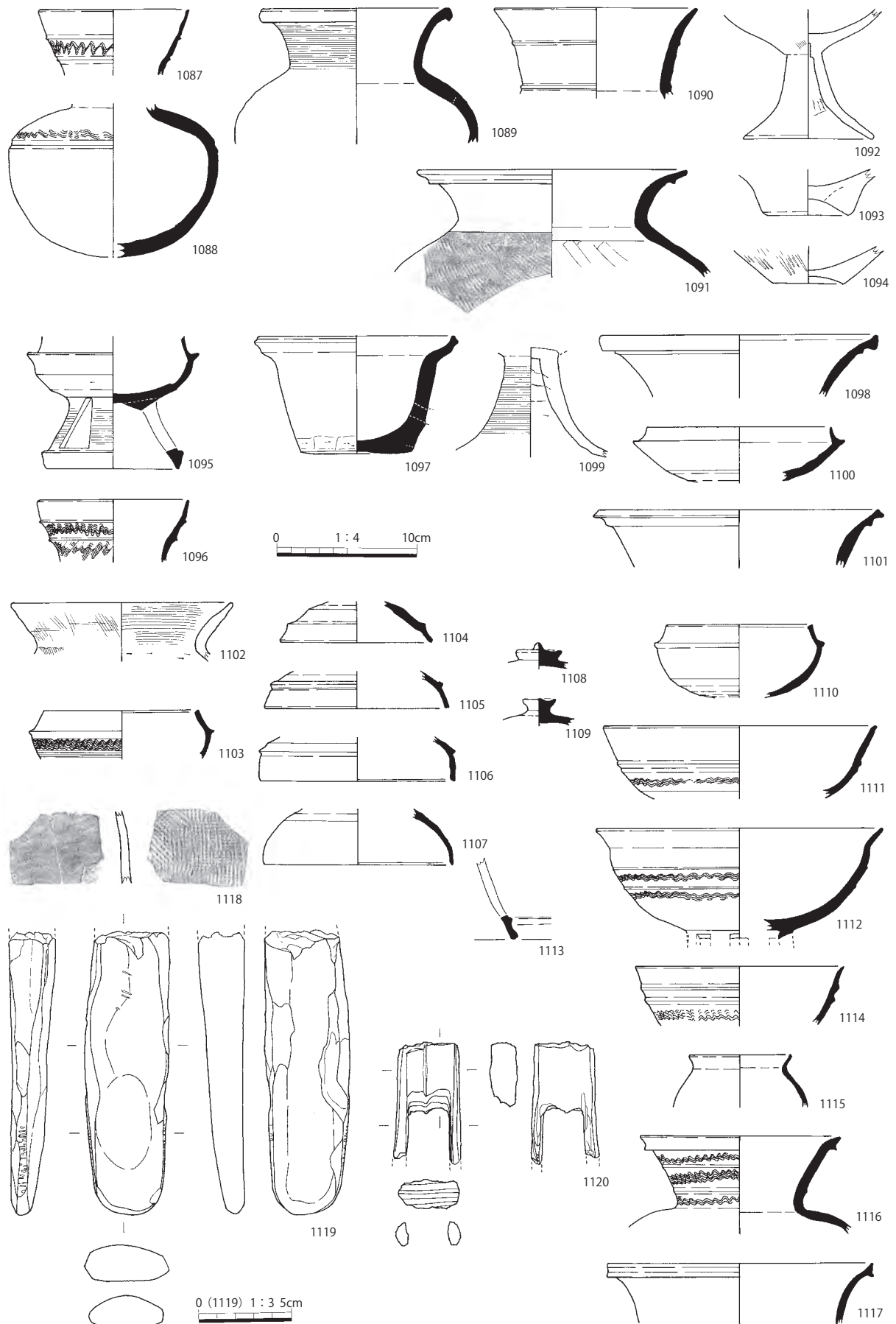


图 353 古代~古墳時代出土遺物 (28)

(谷1 包含層、谷2 溝・包含層、谷3 土坑・包含層)

第3項 弥生時代（5 a層）

基本層序でも触れたように、5 a層の面としての広がり、層としての重なりは、旧流路内に位置する22-1区と22-2区でしか検出していない。この旧流路は、下層に縄紋時代中期の土器を含む堆積層があり、その上部に縄紋時代後・晩期の堆積層、弥生時代前期から中期にかけての古土壌と自然堆積層が累重している。さらに弥生時代後期後半に自然堆積層で完全に埋没・微高地化している。

なお、私部南06-2調査では、同流路内を流れる流路に弥生時代後期前半のシガラミが3箇所みつまっている。また、旧流路が埋没し微高地化した以降には、古墳時代後期の水田や竪穴建物・掘立柱建物が検出されている。

以下22-2区で検出した弥生時代の遺構について述べる。

22-17溝（図354・356・363）

22-17溝は、層中からの出土遺物から弥生時代後期に考えられる第5-1面で検出した遺構である。

第5-1面の標高は、平均で26.61 mである。溝は、調査区ほぼ中央で南東-北西に伸び、延長11 m、幅3.5 m、深さ53 cmを測る。埋土は、上層が淡黄中砂から粗砂ブロックを含む灰色粗砂混じり細砂で肩部にラミナがみられる。下層はラミナのみられる灰白粗砂である。

溝内からは、1127に示す弥生時代前期末の壺が出土しているが、おそらく下層からの巻き上げ・混入と考えられる。なお、本調査では溝としているが、私部南遺跡06-2調査の867流路につながる流路である。

22-50流路（図354・356・363・364、図版68-6～8・72・73・87）

22-50流路は、層中からの出土遺物から弥生時代前期に考えられる第5-2面で検出している。

第5-2面の標高は、平均で26.437 mである。流路は南東からと西から流路が合流し北へ延びるような平面形状を呈する。埋土は礫を含むシルトブロックを含む粗砂から細砂でラミナがみられる。

流路内からは、1137から1155に示す、弥生時代前期の壺・甕やサヌカイト片が出土している。特に1137に示す弥生時代前期末の壺は、流路底付近より完形で出土している。この流路は、私部南06-2調査の859 e流路につながるものである。

この他、他の調査区でも基盤層上で弥生時代の遺構を検出しており、以下に述べる。

平坦面1

竪穴建物5（図354・357・358・363、図版65-3～5・66-2～3）

竪穴建物5は、基盤層上面で検出した遺構である。北西隅は現道部下のため検出できなかった。また、南西隅は現代の攪乱で、東辺は中世段階の耕作に伴う攪拌が基盤層にまで達しており削平されていた。

検出できた竪穴建物の平面形は方形を呈し、北辺の検出長は4.1 m、西辺は2.5 mを測る。壁溝と主柱穴の位置関係から規模を復元すると、一辺5.5 m前後に考えられる竪穴建物である。

検出面から、床面を形成する層上面までの深さは5から10 cmを測る。竪穴部埋土は大きく、焼土・炭化物・灰を多量に含む粗砂から細礫混じりのオリーブ褐色細砂と、粗砂から細礫多量に含むにぶい黄褐色細砂からシルトである。埋土中から、1121に示す弥生時代後期の小型の壺下半部が出土している。

床面を形成する層は大きく、粗砂から細礫多量に含むオリーブ褐色砂質シルトと、細砂から粗砂、暗褐色ブロック含む暗オリーブ灰粘質シルトである。

床面では壁溝と主柱穴、土坑を検出している。壁溝は、幅15から30 cm、深さ40 cmを測る。埋土は、

北側の壁溝でみると、焼土を若干含む灰黄褐色細砂からシルト粗砂を含む層である。

主柱穴は、5-4柱穴・5-8柱穴で、2本の柱で棟木を支え垂木をふき降ろす上屋構造と考えられる。

5-4柱穴は平面形が円形を呈し、直径53cm、深さ60cm。5-8柱穴も平面形が円形を呈し、直径35cm、深さ48cmを測る。2基とも直径10cm前後の柱痕跡がみられる。

掘方埋土は大きく、オリーブ褐色・黄褐色・暗褐色など褐色系の色調を呈し、土質はシルトから砂質シルトである。

5-3土坑は、竪穴部北西隅で検出しており、重複関係から壁溝に先行する遺構である。規模は、長軸1.2m、短軸85cmを測る。深さは床面から8cmで、断面形状は皿形を呈する。

埋土は大きく灰黄褐色細砂からシルトで、焼土や炭化物を含み、1122に示す弥生時代後期の高杯が

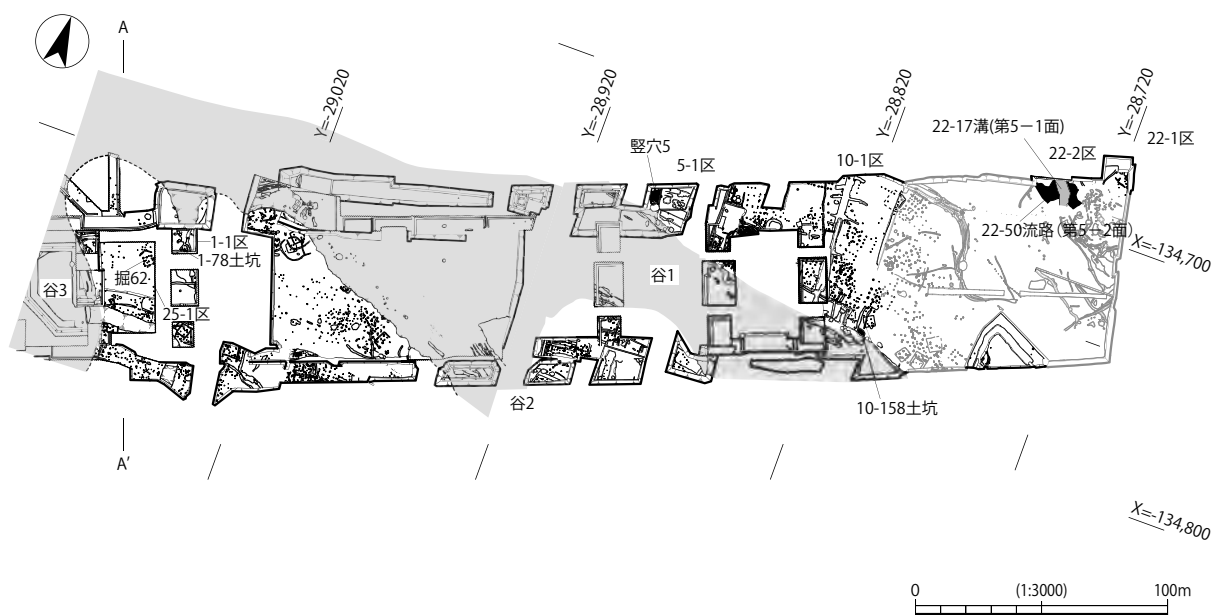


図 354 第6面検出 5a層帰属遺構配置図-1 (弥生～縄紋時代)

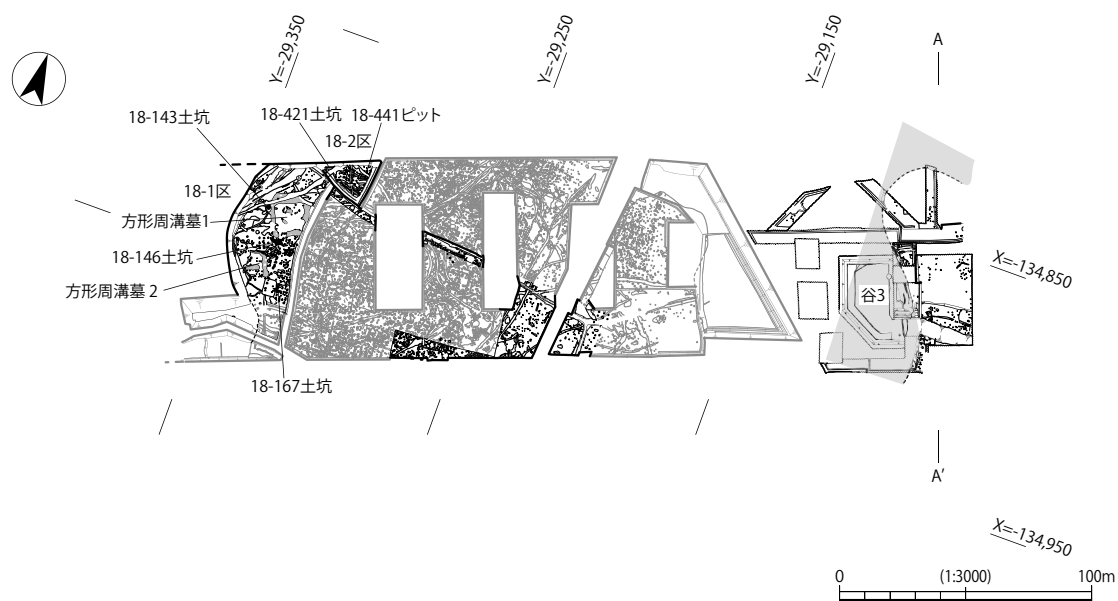
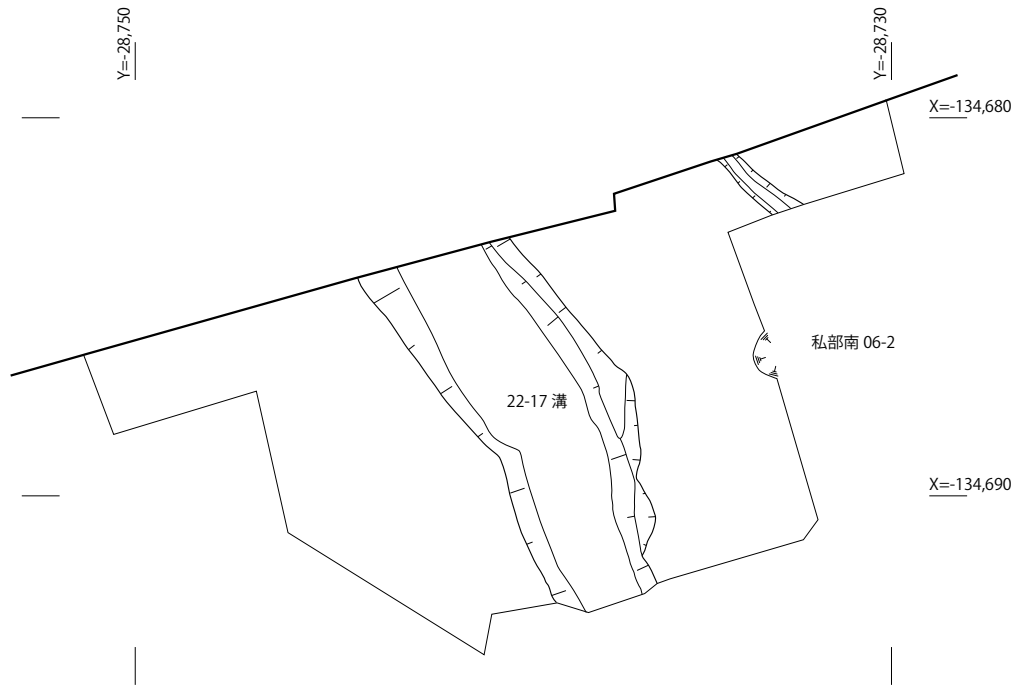
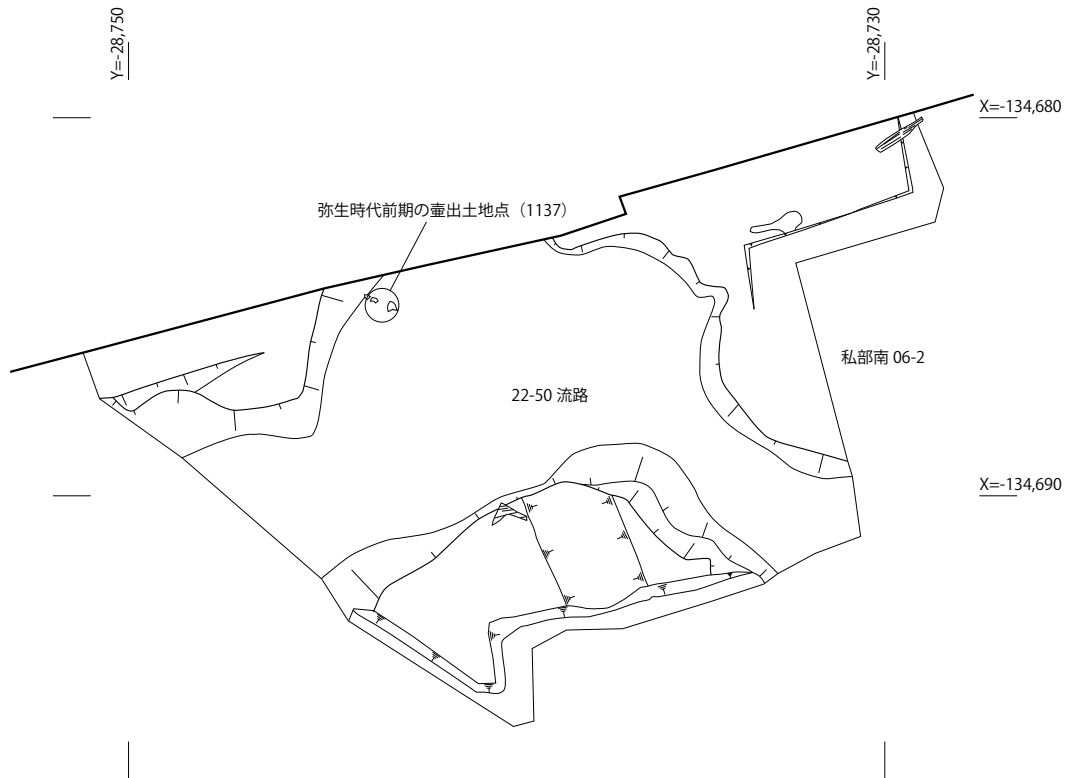


図 355 第6面検出 5a層帰属遺構配置図-2 (弥生～縄紋時代)



22-2区 第5-1面



22-2区 第5-2面

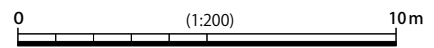
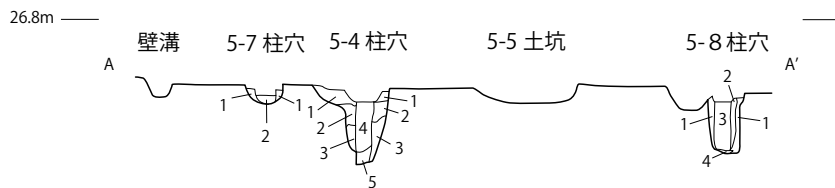
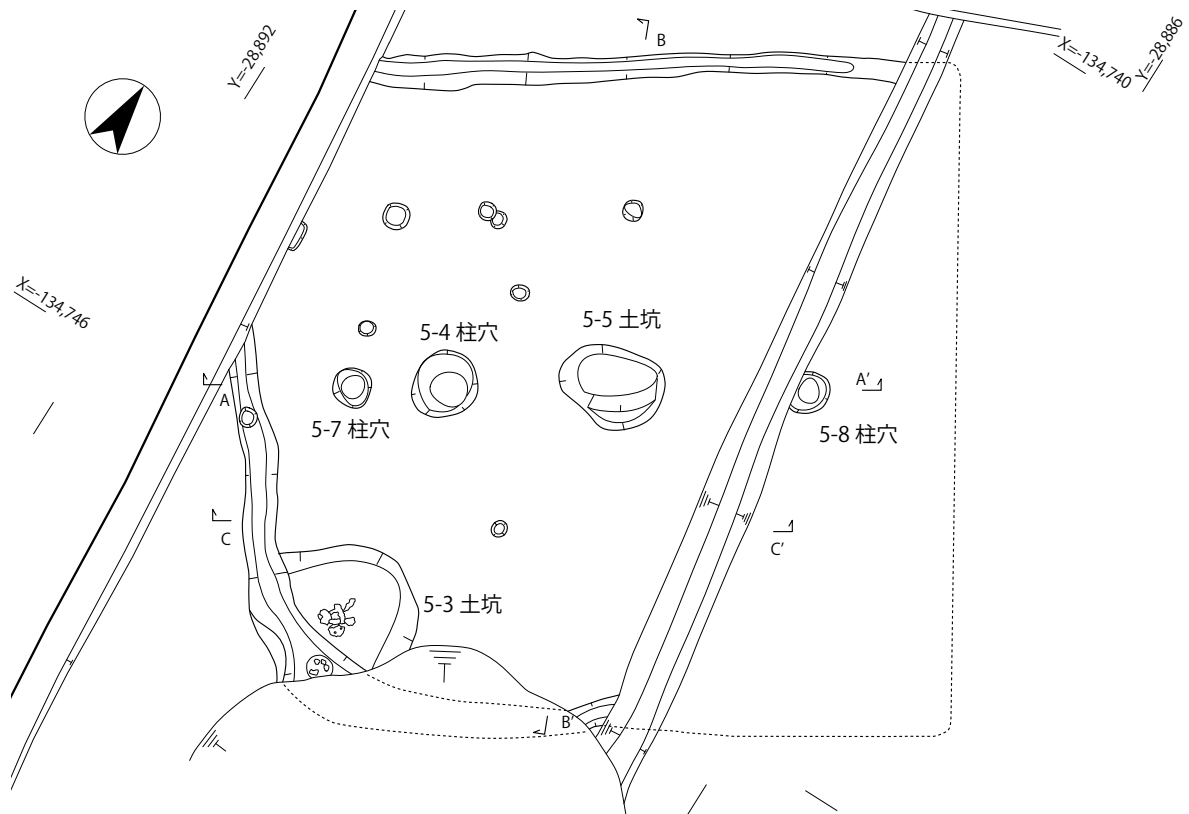


図 356 平坦面 1 旧流路内 第 5-1・2 面 平面図 (22-2 区)



5-7 柱穴

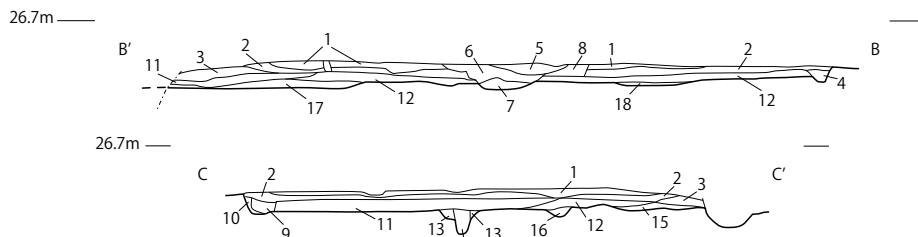
- 1 10YR4/4 褐色 砂質シルト 細砂～細礫含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 細砂～粗砂多量に含む

5-4 柱穴

- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂～細礫 暗褐色シルトをブロック状に含む
- 2 2.5Y5/3 黄褐色 粘土 暗褐色シルトとの混合層
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質シルト 細砂含む 暗褐色シルトブロック含む
- 4 10YR4/1 褐灰色 砂質シルト 細砂～粗砂
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 細砂～細礫多量に含む

5-8 柱穴

- 1 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 細礫若干含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂 シルト 砂質シルト
- 3 10YR3/2 黒褐色 細砂～粗砂含む 炭化物少量含む
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質シルト 細砂～粗砂含む



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂～シルト 粗砂～細礫混じり
- 2 10YR4/3 黒褐色 焼土・炭化物・灰多量に含む
- 3 2.5Y4/3 にぶい黄褐色 細砂～シルト 粗砂～細礫多量に含む 良く締まる
- 4 10YR4/2 オリーブ褐色 シルト 細砂～粗砂含む 粘質強い
- 5 10YR3/3 灰黄褐色 細砂～シルト 粗砂含む 焼土若干含む
- 6 10YR3/3 暗褐色 シルト 細砂～粗砂含む 焼土・炭化物若干含む
- 7 10YR4/3 黒褐色 シルト 細砂含む 焼土・炭化物・灰多量に含む
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂～シルト 粗砂～細礫含む
- 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質シルト 粗砂若干含む 炭化物含む
- 10 7.5YR4/3 褐色 粘質シルト 細砂～粗砂若干含む 焼土多量に含む

- 10 10YR3/2 黒褐色 粘質シルト 細砂～粗砂含む 炭化物含む
- 11 5Y4/3 暗オリーブ色 粘質シルト 細砂～粗砂 暗褐色ブロック含む
- 12 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト 粗砂～細礫多量に含む
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 細砂～細礫
- 14 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質シルト 細砂若干含む
- 15 5Y5/3 灰オリーブ色 粗砂～細礫 シルト含む
- 16 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質シルト 細砂～粗砂
- 17 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト 粗砂～細礫多量に含む
- 18 10YR3/2 黒褐色 粘質シルト 粗砂～細礫

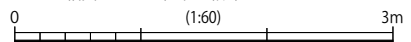


図 357 竪穴建物 5 平・断面図

出土している。また、土坑の底面で検出した壁溝内から 1123 に示す弥生時代後期の鉢がほぼ完形で出土している。

5-5土坑は、竪穴部ほぼ中央で検出している、平面形が楕円形を呈し長径 92 cm、短径 63 cmで、深さは 15 cmを測る。埋土は、焼土塊や炭化物を多く含むシルトである。土坑は、竪穴部埋土の上から掘り込まれており、竪穴建物が廃棄・埋没後の遺構と考えられる。

出土遺物から、弥生時代後期に考えられる竪穴建物である。

10-158土坑 (図 354・359・363、図版 68-3・72)

10-158土坑は、谷 1 への落ち肩付近で検出しており、コンクリート製水路の掘方により南半分が失われている。また、重複関係から 6 世紀中頃以降に考えられる 10-95 溝に先行する土坑である。

削平のため約半分しか検出できなかったが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。長軸は 3.92 m、短軸は 2.11 mで、深さは 30 cmを測る。埋土は大きく中砂から粗砂混じりの灰黄褐色系の細砂シルトである。

土坑内からは、平らな面を持つ人頭大の石と、1124 に示す弥生時代後期の鉢底部と、同じく 1125 の弥生時代後期の器台が出土している。出土遺物から、弥生時代後期の遺構である。

平坦面 3

掘立柱建物 62 (図 354・359・365、図版 66-1・66-4・85)

掘立柱建物 62 は、梁行 2 間、桁行 2 間の建物である。梁行寸法は 3.1 と 3.3 m、桁行寸法は 3.4 と 3.6 mで、身舎の面積は 11.2 m²を測る。柱間寸法は梁行方向 1.3 から 1.8 m、桁行方向は 1.4 から 1.9

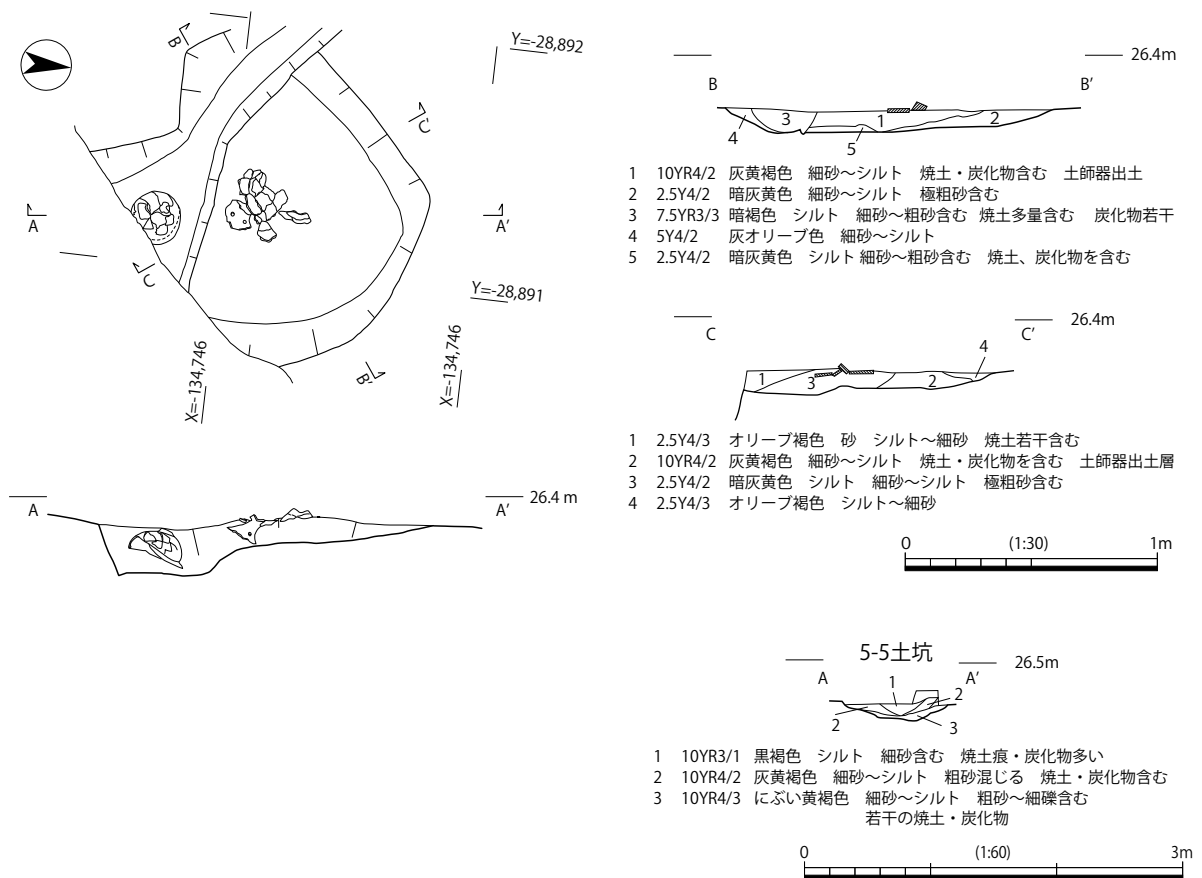


図 358 5-3・5土坑 平・断面図

mと不揃いである。棟筋は西で南へ約 32° 振れる。

柱穴の平面形は、ほぼ円形で直径が 30 cm前後を測る。深さは、25 - 40 柱穴と 25 - 41 柱穴が 40 cmを超えるのに対し、他の柱穴は浅く 12 cm前後である。柱痕跡が 25 - 38 柱穴・25 - 39 柱穴にみられる他、25 - 21 柱穴の掘方底面には、柱の自重と建物の荷重が柱にかかって生じた圧痕がみられる。

他の柱穴は完全に抜き取られており、特に 25 - 41 柱穴は、柱を完全に抜き取った後、1162 に示す弥生時代中期末の甕、1163 の太型蛤刃石斧と共に埋め戻されている。

掘方埋土は褐灰色系の中砂から粗砂混じる細砂シルトで、抜き取り穴埋土は、黄橙色系の粗砂から極粗砂混じりの中砂シルトである。

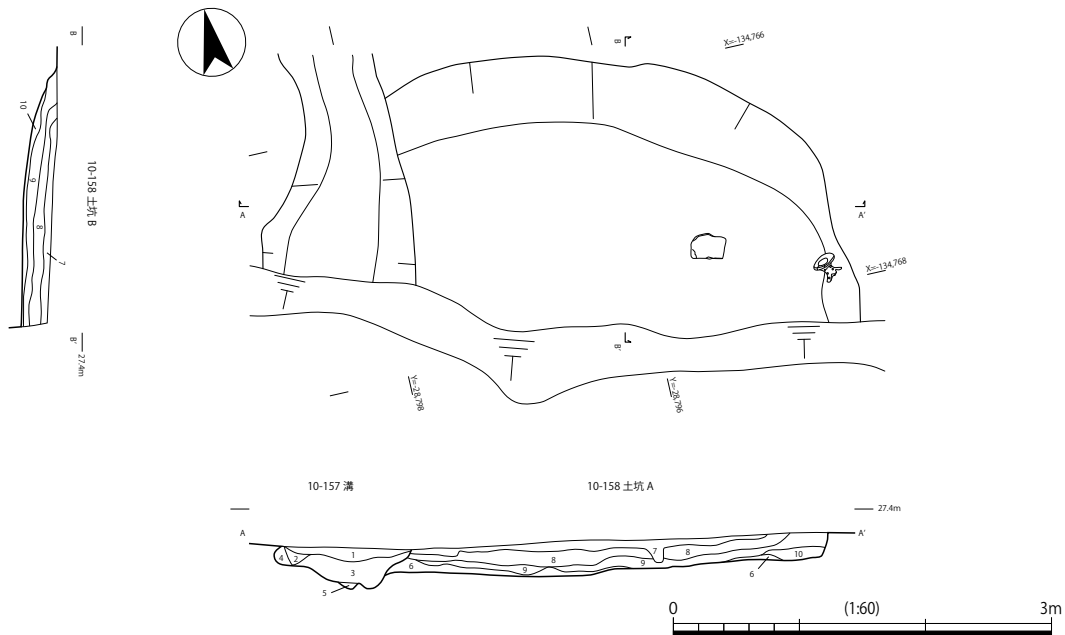
出土遺物から、弥生時代中期末以降の建物と考えられる。

平坦面 4

方形周溝墓 1 (図 355・361・365、図版 66 - 5・67 - 1・68 - 1・84・88)

方形周溝墓 1 は、整理段階において認識された遺構である。調査当初、18 - 57・58 土坑は土壇墓としての認識はあったが、18 - 61 溝・18 - 156 溝・18 - 155 溝を周溝とする方形周溝墓の認識はなく、溝の重複関係も十分な検討がなされないまま調査を行っている。そのため、遺物の混入や周溝の平面形など非常に曖昧な形状となっている。しかし、周溝内側部分の墳丘部分では上面が大きく削平を受けているものの、周辺部分に比べ非常に遺構が少ないこと、また周辺の他の遺構に比べ周溝内からは、大きな破片の弥生時代の土器が出土することなどからみて、改めて方形周溝墓とし記述する。

前述したように周溝は、18 - 61・156・155 溝からなる。



- | | | | |
|-----------------|---------------------------|-------------------|--------------------------|
| 1 2.5Y5/3 黄褐色 | 細砂シルト 中砂～極粗砂混じる炭化物・土器細片入る | 6 2.5Y7/4 浅黄色 | 細砂シルトのブロック土 (158土坑第2層) |
| 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 細砂シルト | 7 10YR4/2 灰黄褐色 | 細砂シルト 中砂～粗砂混じり炭化物・土器細片入る |
| 3 2.5Y4/2 暗灰黄色 | 細砂シルト 中砂～極粗砂混じる土器細片入る | 8 10YR2/1 黒色 | 細砂 中砂～粗砂混じると |
| 4 2.5Y5/2 細砂シルト | 灰褐色 細砂シルト | 10YR4/2 灰黄褐色 | 細砂 中砂～粗砂混じりのブロック土 |
| 5 2.5Y6/2 灰黄色 | 細砂シルト | 9 10YR5/1 褐灰色 | 細砂シルト 器台入る層 |
| | | 10 10YR7/4 にぶい黄褐色 | 細砂シルト |

図 359 10 - 158 土坑 平・断面図

復元すると、一辺約 15 m に考えられ、幅・深さは、18 - 61 溝でみると幅 1.57 m、深さ 25 cm を測り、18 - 155 溝では、幅 2.18 m、深さ 45 cm を測る。埋土は 18 - 155 溝でみると、上層が小礫混じる黒色中砂混じり極細砂、中層が礫混じるオリブ黒色極細砂混じりシルト、下層が小礫混じる灰色極細砂混じり極粗砂である。断面形は皿形であるが、墳丘部側の立ち上がりやや急な形状を呈する。周溝および墳丘部は、周溝西辺の 18 - 61 溝でみると、北で西へ約 25° 振れている。

周溝内からは、18 - 155 溝から 1165 に示す壺口縁、1166 に示す壺体部、1167 に示す壺底部、18 - 61 溝から 1168 に示す甕底部など弥生時代中期前葉の土器が出土している他、18 - 156 溝から 1169 石庖丁、18 - 155 溝から 1170 のサヌカイト剥片が出土している。

主体部には 18 - 57・58 土坑が考えられる。18 - 57 土坑は、楕円形に近い方形を呈する平面形で、長軸 1.98 m、短軸 77 cm、深さは 39 cm を測る。長軸は西で北へ約 15° 振れる。土坑内には長軸 1.52 m、短軸 43 cm の色調が異なる部分がみられた。

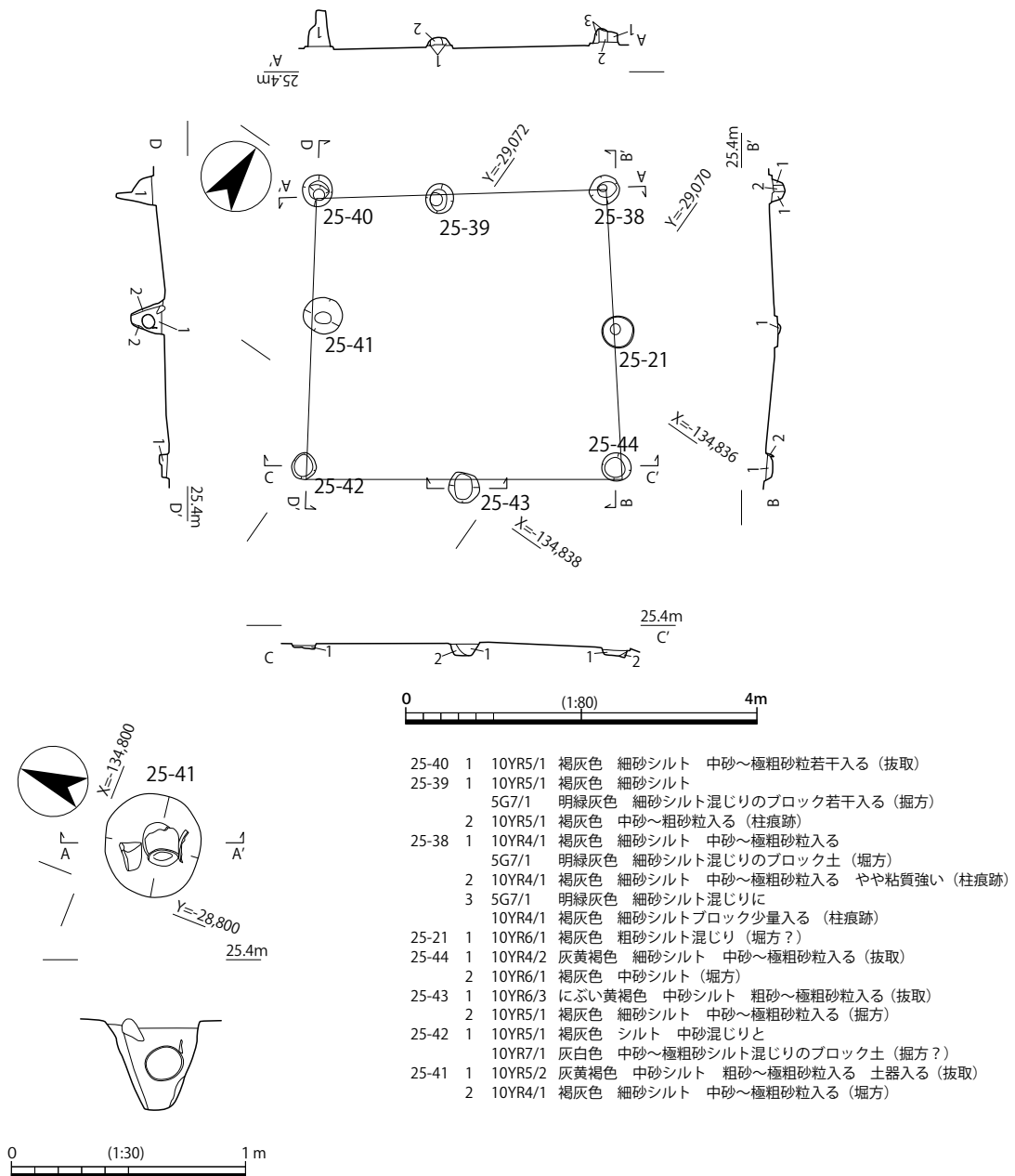


図 360 掘立柱建物 62 平・断面図

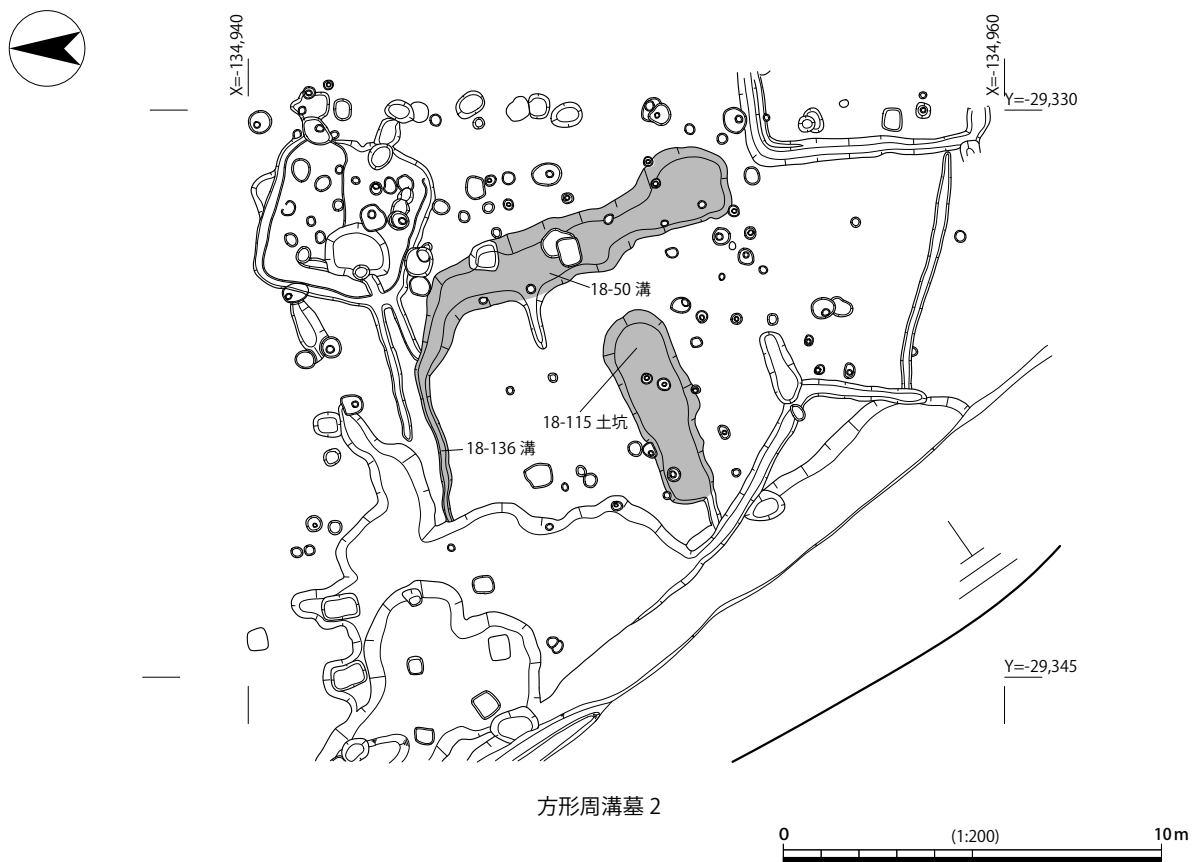
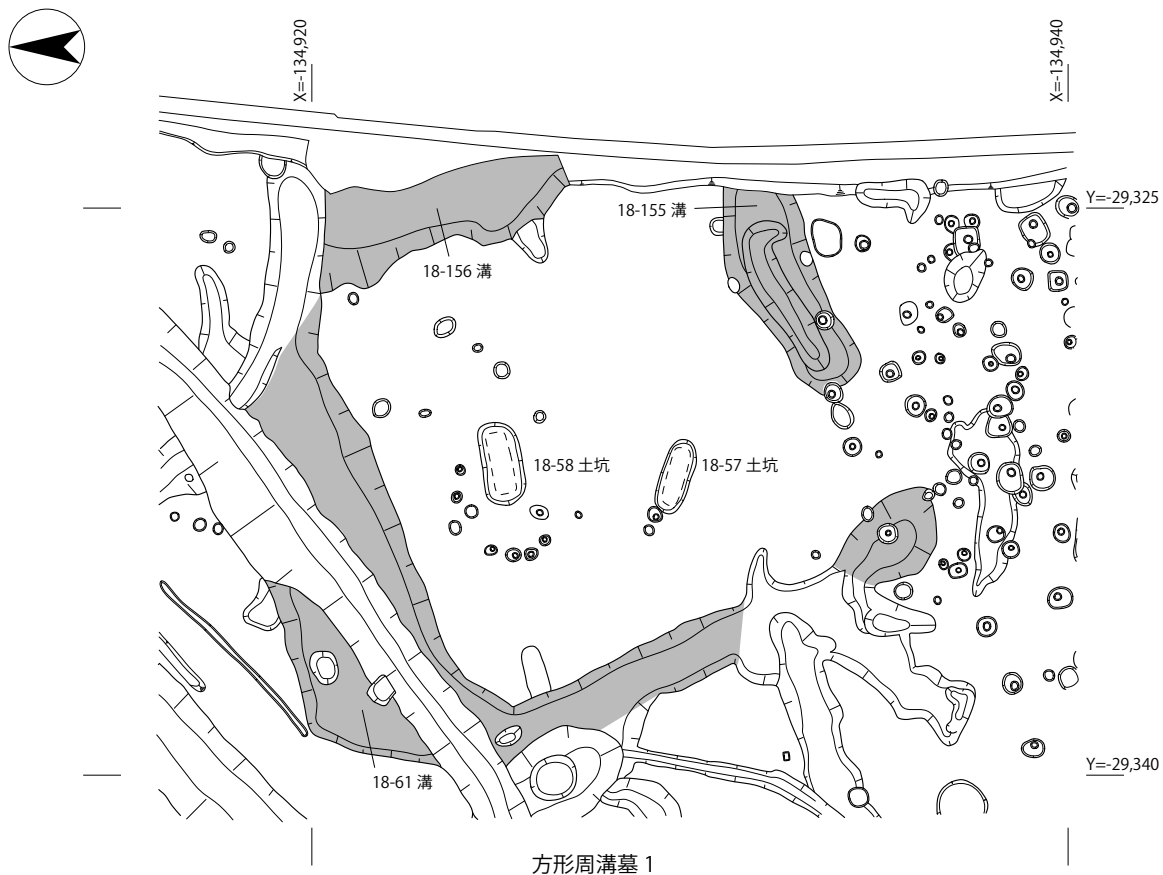


图 361 方形周溝墓 1·2 平面图

18－56 土坑は、18－57 土坑から北へ 3.68 m の位置で検出している。長軸の方位が異なり西で南へ 10° 振っている。平面形は、楕円形に近い方形を呈するで、長軸 2.23 m、短軸 1.09 m を測る。土坑内には長軸 1.64 m、短軸 56 cm の色調が異なる部分がみられた。

いずれの土坑も、色調の異なる部分を検出したが、断面観察や掘り下げた結果、明確な木棺痕跡はなく出土遺物もないため、あるいは主体部底面のわずかな痕跡を検出したに留まり、掘り下げることができない遺構であった可能性も考えられる。

周溝からの出土遺物より、方形周溝墓 1 は、弥生時代中期前葉と考えられる。

方形周溝墓 2 (図 355・361・365、図版 67－2・68－2)

方形周溝墓 2 も同様に、調査時には単に溝・土坑として調査を行った遺構であるが、整理段階において 18－136 溝 (18－50 溝) を周溝とし、18－115 土坑を主体部とする方形周溝墓として認識した遺構である。

周溝である 18－136 溝は、東側は検出延長 8.73 m、幅約 1.7 m、深さ 45 cm で、北側は検出延長 5.8 m、幅 28 cm、深さ 14 cm と、北側が幅・深さとも極端に小さくなる。また、北側の西端は 18－4 落ち込みによって削平されている。溝内からは、1172・1173 に示す弥生時代中期前葉の壺・甕が出土している。

主体部と考えられる 18－115 土坑は、長さ 5.25 m、幅 1.65 m、深さ 32 cm を測る、長楕円の平面形を呈する。埋土は、3 層に分層でき、上層が微砂から細砂と細礫を含む暗灰黄色砂質シルト、中層が細礫を含む黒褐色微砂、下層が炭化物と微砂から細砂・細礫を含む黄灰色粘質シルトで、中層から、1171 に示す弥生時代中期前葉の壺が出土している。

土坑は、主体部とするに適した位置にはあるが、規模が大きく土器の出土状態も違和感がある。したがって、仮にこの位置に主体部があったとしても、二次的な掘削により、主体部は失われていると考えるのが妥当であろう。

周溝および土坑からの出土遺物より、方形周溝墓 2 は、弥生時代中期前葉に考えられることから、方形周溝墓 1・2 は、同時期に存在していることが言える。また、隣接する私部南 06－1 調査でも同時期の遺物や溝などの遺構が検出されていることから、当該時期には墓域にあたる場所であった可能性が考えられる。

ピット

18－441 ピット (図 355・366)

18－441 ピットは、平面形が円形を呈し、直径 28 cm、深さ 45 cm を測る。直径 17 cm の柱痕跡がみられ、掘方埋土は粗砂多く含む暗灰黄色シルトである。ピット内からは 1181 に示す、混じりこみと考えられる弥生時代中期前葉に考えられる底部片が出土している。

18－143 土坑 (図 355・366、図版 68－4)

18－143 土坑は、平面形が円形を呈し、長径 1.12 cm、深さ 10 cm を測る。埋土は灰色中砂から極細砂のシルト混じりである。土坑内から、1175・1176 に示す弥生時代中期前葉の甕と底部片が出土している。

18－146 土坑 (図 355・366)

18－146 土坑は、不定形な平面形を呈する浅い窪み状の土坑である。長軸は 4.75 m、短軸は 1 m、深さは 15 cm を測る。埋土は主に小礫・細砂混じりの暗青灰色極細砂である。

土坑内からは、1177 に示す弥生時代中期前葉の甕底部が出土している。

18 - 167 土坑 (図 355・366)

18 - 167 土坑は、竪穴建物 11 により削平を受けており、検出長軸 2.11 m、短軸 92 cm を測る。
土坑内からは、1178 に示す弥生時代中期前葉の壺口縁部が出土している。

18 - 421 土坑 (図 355・366)

18 - 421 土坑は、調査区端で検出しており全体は明らかではないが、検出長軸 3.5 m、短軸 36 cm を測る。埋土は、上層が微砂から粗砂と細礫を少量含む黒褐色粘質シルト、下層が微砂から粗砂を少量含むオリーブ黒粘質シルトである。

土坑内からは、1179・1180 に示す弥生時代中期後葉の水差しの把手部と甕が出土している。

第 4 項 縄紋時代

22 - 1・2 区の 5 a 層内や、谷内堆積層中から縄紋時代中期から晩期の土器が出土している他、以下の遺構が基盤層上面で検出している。

1 - 78 土坑 (図 354・365、図版 68 - 5・75)

1 - 78 土坑は、1 - 62 溝の西肩で検出した遺構である。1 - 74 井戸調査時に、井戸埋土と共に窪みとして掘り下げており、遺物が出土したため土坑とした遺構である。土坑内から出土した土器は 1164 に示す、縄紋時代後期末の滋賀里 I 式の深鉢である。

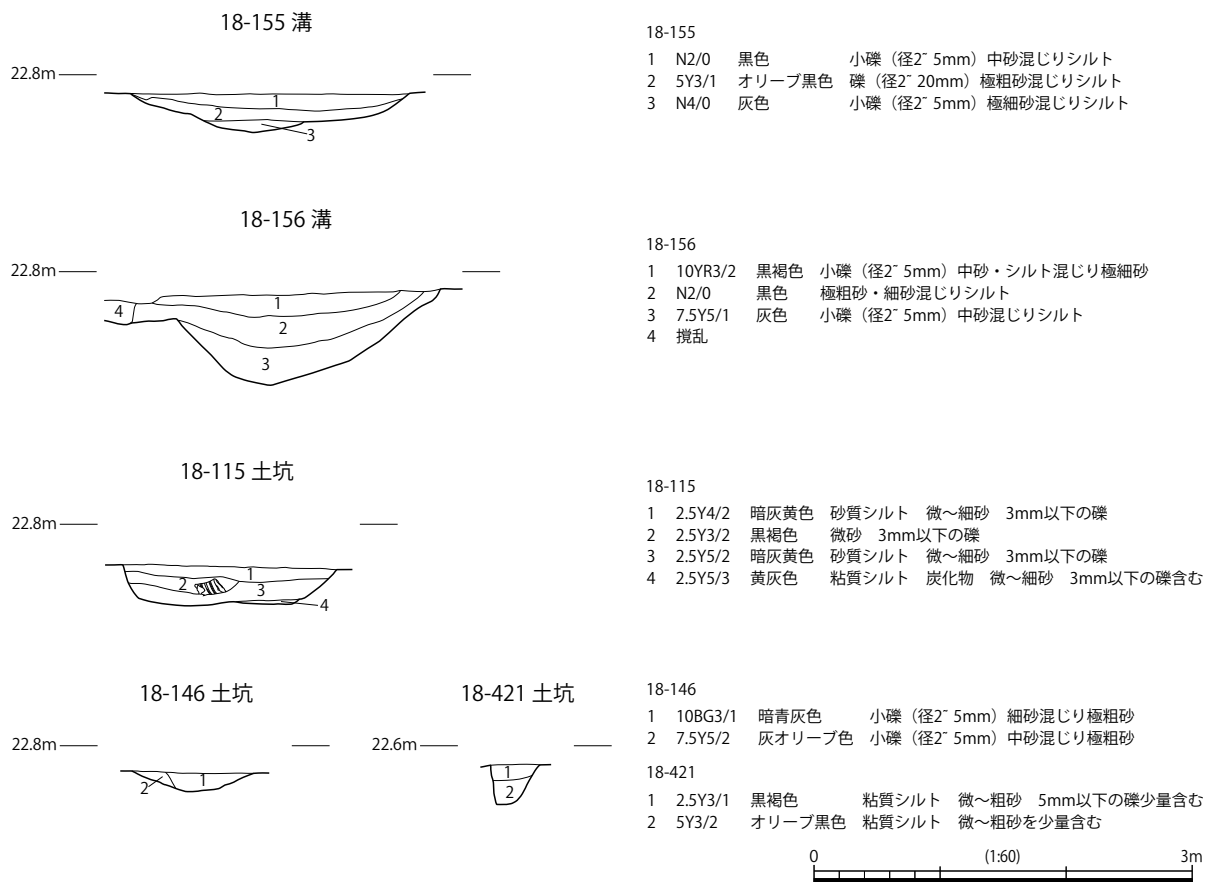


図 362 8 - 155・156 溝 18 - 115・146・421 土坑 断面図

5 a 層・谷内堆積層他出土遺物

5 a 層・谷内堆積層他から出土した主な遺物について、平坦面・谷ごとに記す。

平坦面 1 旧流路内 (図 363・364、図版 72・87・89)

1131 から 1136・1183 は 5 層出土の遺物で、弥生時代前期の壺体部片・口縁片、甕口縁片、弥生時代中期前葉の壺口縁、サヌカイト製石製品である。1156 から 1158 は、弥生時代前期の壺・甕、1159 は縄紋時代晩期の深鉢口縁片、1160・1161 はサヌカイト製石製品である。

1128・1130 は 5 - 2 b 層出土遺物で、縄紋時代晩期中葉の深鉢である。1129 は 5 - 2 b 層として取り上げたが、弥生時代の可能性がある木製品である。

平坦面 1 (図 366)

1183 は、弥生時代中期前葉の壺である。

谷 1 (図 366・367。図版 81・85・86)

1202 は、弥生時代前期の壺上半部である。1185 から 1190、1192 から 1201、1203 から 1213 は、縄紋時代後期から晩期の土器。1191 はサヌカイト製石鏃、1214 は石斧、1215 は敲石、1216 は凹石、1217・1219 はサヌカイト製石製品、1218 は金山産のサヌカイト製石製品である。

谷 3 (図 368、写真 84・86)

1226・1228 は弥生時代前期末の甕底部。1220・1223・1224・1227・1229 から 1238 は縄紋時代晩期の深鉢。1221 は石斧、1222 は砥石、1225 は石棒、1239 は太型蛤刃石斧、1240 は凹石である。

第3節 小結

以上、今回の調査で出土した遺構と遺物について記した。以下、後期旧石器時代・縄紋時代から順に簡単にまとめておきたい。

今回の調査では、平坦面4の3a層から出土した遺物の中に、後期旧石器時代の角錐状石器が1点あり、当遺跡内での人の活動の初現の痕跡を、後期旧石器時代に見ることができる。ただ、中世耕作層からの出土であり、今後の周辺調査に期待したい。

縄紋時代で、遺構に伴う遺物として検出できたのは、縄紋時代後期末の滋賀里I式の深鉢が出土した1-78土坑のみで、他は遺構から遊離した古土壌中や自然堆積層中から遺物である。時期的には、縄紋時代中期の北白川C式が1点、平坦面4の土坑内から混入遺物として出土している。これは、平坦面4に位置する私部南06-1で当該時期の土坑が出土していることから考えても矛盾はない。他の平坦面や谷では、縄紋時代後期から晩期の遺物が、まばらにはあるが見つかっている。花粉・珪藻分析を4a層以下の谷部堆積層で行った所、谷部は水草などが生育する流水域から湿地の様相が示されるとされており、当該期にはおそらく谷部や平坦面は狩猟や採集を行う活動範囲として利用されていたのではないかと考えられる。なお、11-1区で縄紋時代後期後半から晩期前半の土器が出土した谷内堆積層から採取した、木片の年代測定を行ったところ2σ: cal BC 3700~3510・cal 3420~3380の年代が得られており、ほぼ遺物の時期とも合致している。

弥生時代になると、平坦面1の旧流路内から弥生時代前期の完形の土器が出土、弥生時代中期前葉には、平坦面4で方形周溝墓がみられることから、平坦面1・2上では、弥生時代から積極的な活動がみられる。

古墳時代では、谷1内の4a層が4-1・2・3層と3層確認されており、花粉・珪藻分析を実施したところ、珪藻がほとんど検出されなくなり比較的乾燥した状況の後、水田を営める湿潤な環境が推定されている。また同時に、植物珪酸体分析も行ったところ、いずれの層準も水田作土であった可能性が高いという結果が得られている。これは、私部南06-2調査で古墳時代後期の水田が検出されていることから考えても、谷部で水田が営まれていたことは当然のことと言えよう。

古墳時代中期から後期に入ると、各平坦面で竪穴建物や掘立柱建物がみられるようになる。また、平坦面1と平坦面2の間の谷からは、破片ではあるが特に初期須恵器が多くみられる他、指物腰掛の脚や、曲刃鎌の柄などが出土していることから、谷1を挟んだ平坦面1の南延長部には、当該時期の居住域の存在が考えられる。

また平坦面1の10-95溝からは、韃の羽口や鉄滓・鍛造剥片・粒状滓が出土し、小鍛冶を行っていた痕跡がみられる他、平坦面3で検出した5世紀後半以降に考えられる竪穴建物13でも韃の羽口や鉄滓・鍛造剥片・粒状滓が出土、さらに鍛冶炉が検出されており、各平坦面では小規模ではあるが鍛冶工房を伴う集落が展開していたと考えられる。

飛鳥・奈良時代の遺構・遺物は少ないものの、平坦面1・4を中心に見つかっている。

平安時代以降になると、掘立柱建物も検出される他、谷内や平坦面では溝や畦畔・段など耕作に係わる遺構が多く検出されており、現在にいたる水田景観の基礎が当該期から作られ始めたと考えられる。

これ以降、調査地内では水田の景観が、宅地造成によって見られなくなった現代まで、連綿と営まれていることが明らかになった。

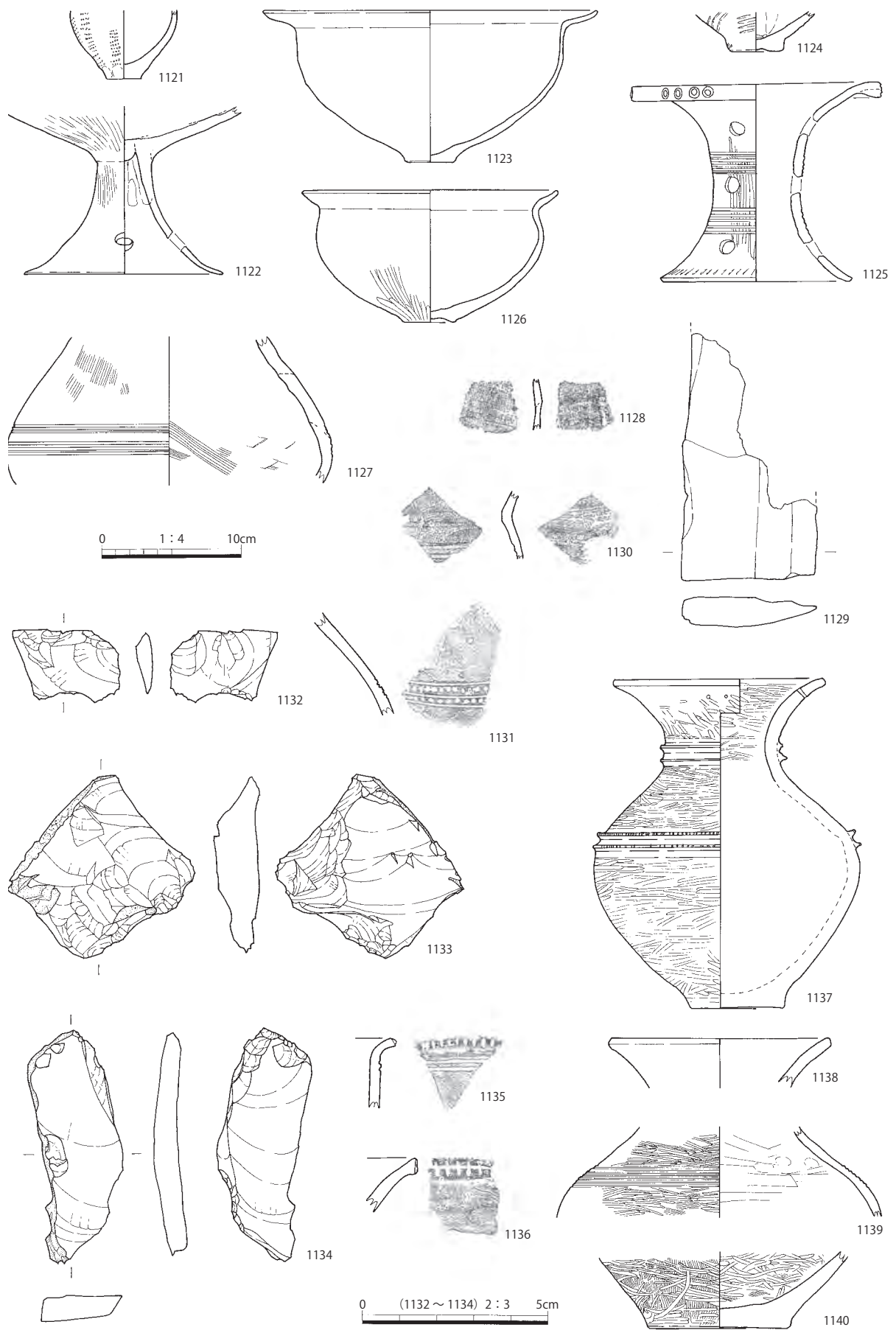


图 363 弥生~縄紋時代出土遺物 (1)

(平坦面1 豎穴建物・土坑・溝・流路・包含層)

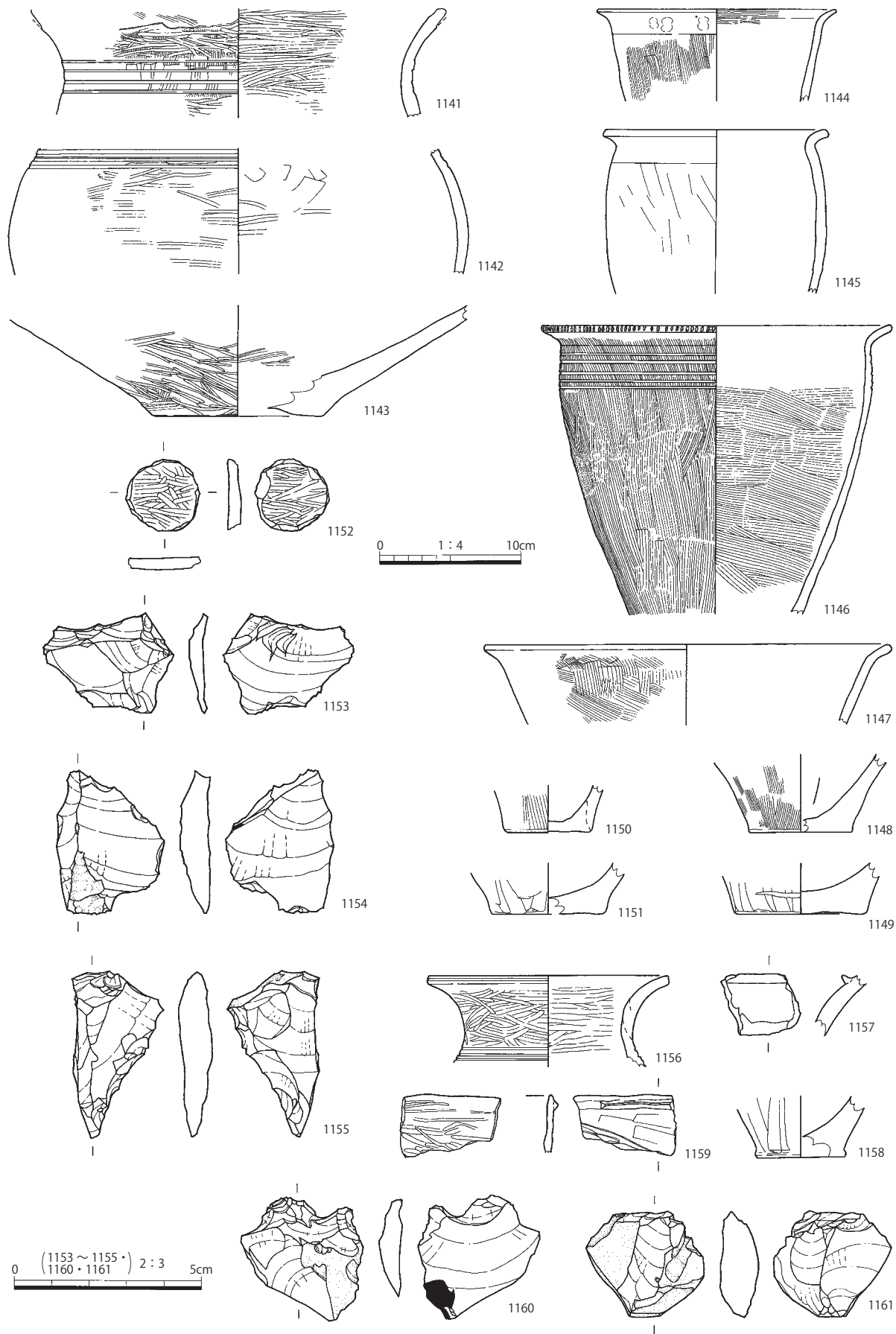


图 364 弥生~縄紋時代出土遺物 (2)

(平坦面1 包含層)

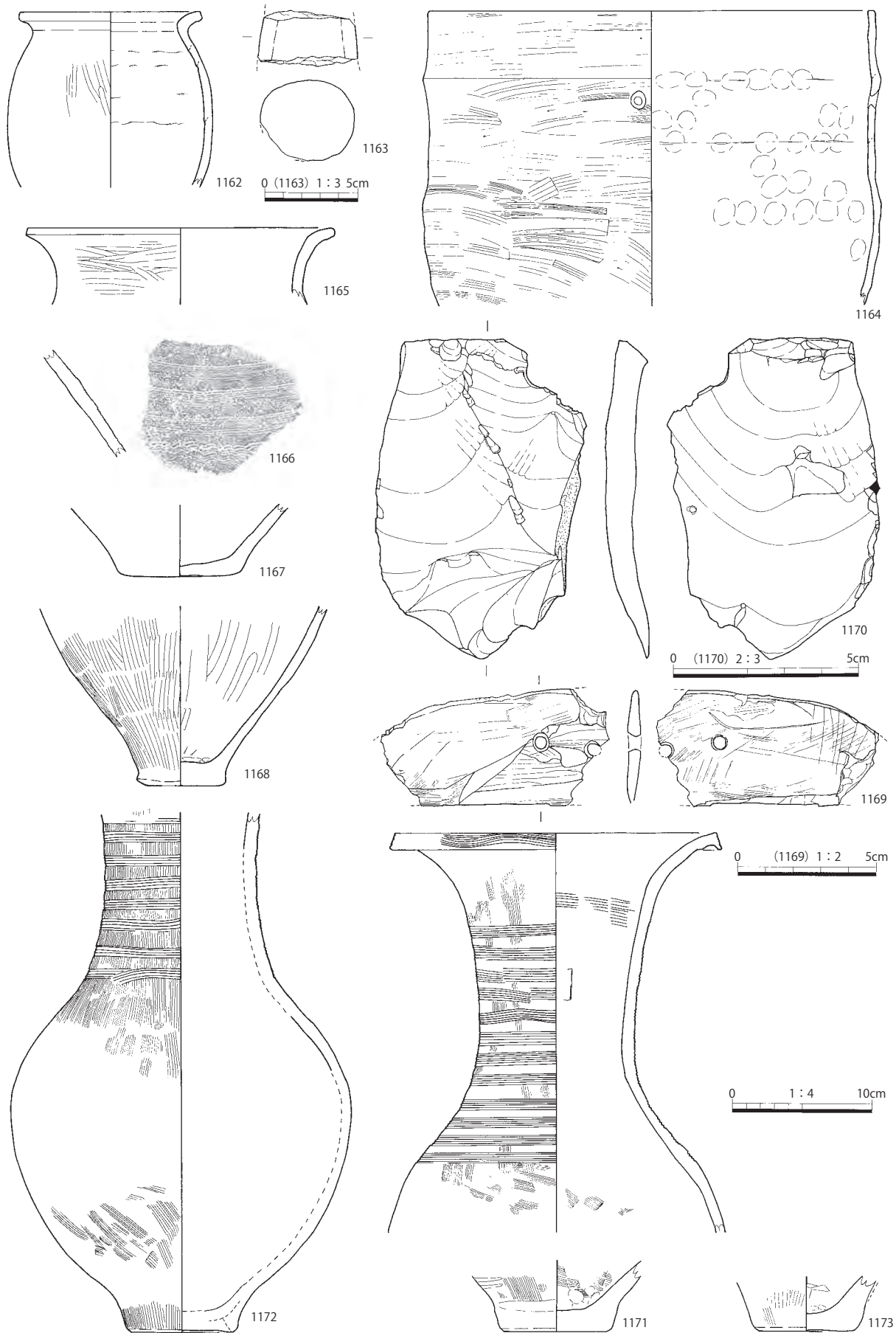


图 365 弥生～縄紋時代出土遺物 (3)

(平坦面4 掘立建物・土坑・方形周溝墓)

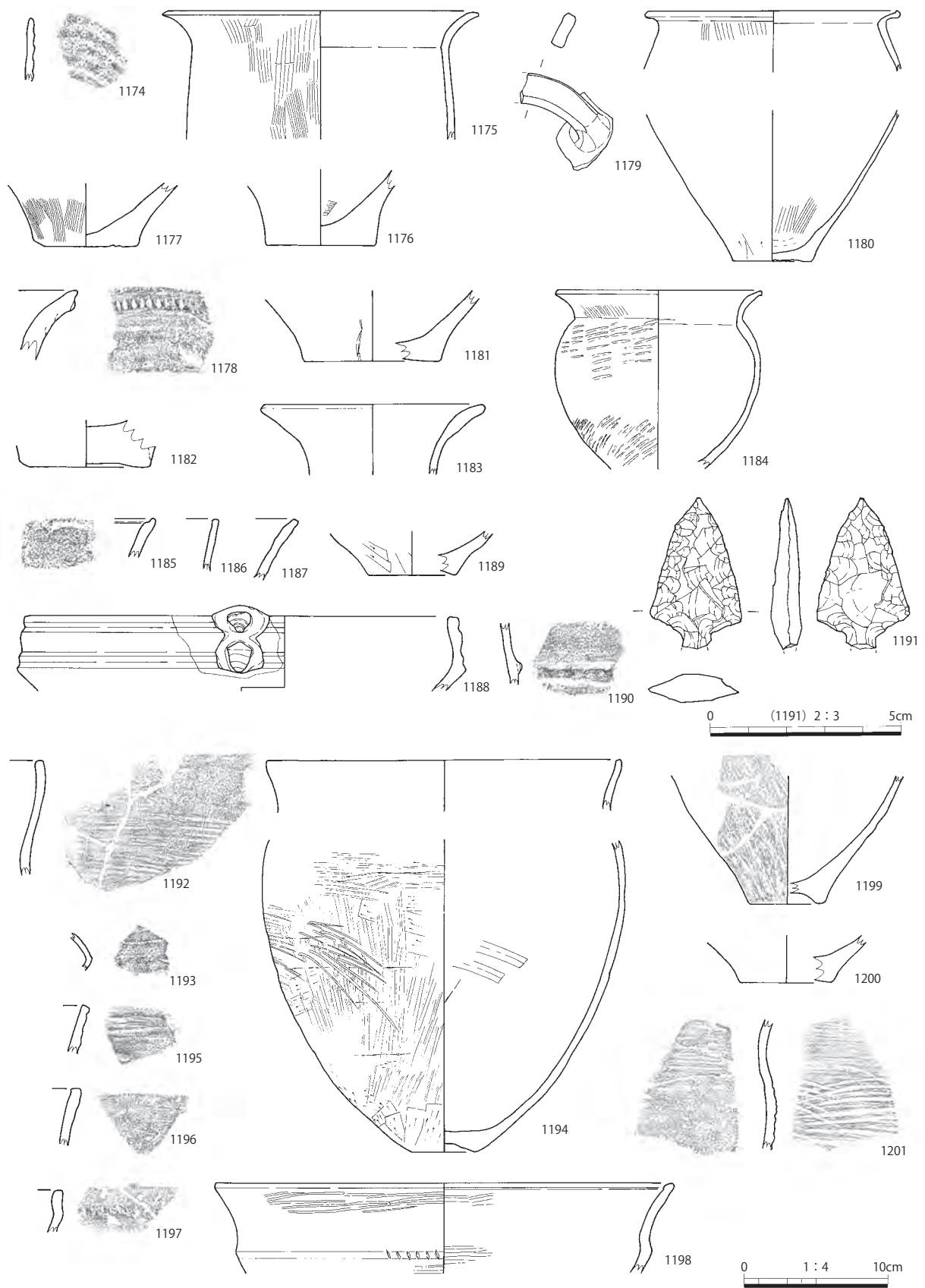


図 366 弥生～縄紋時代出土遺物（4）

（平坦面4 土坑・ピット・溝・包含層、谷1 包含層）

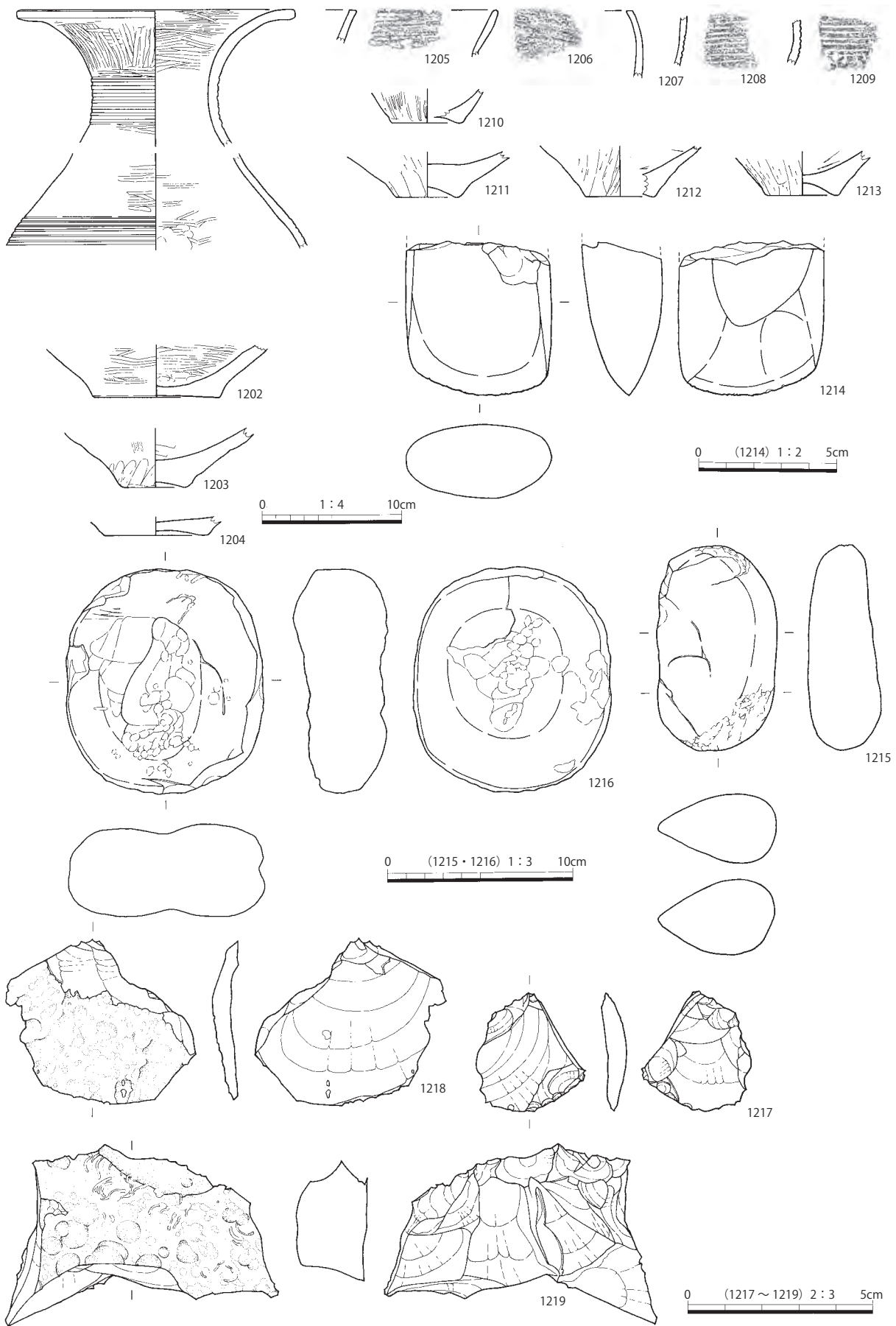


図 367 弥生～縄紋時代出土遺物 (5)

(谷 1 包含層)



図 368 弥生～縄紋時代出土遺物 (6)

(谷3 包含層)

第6章 上の山遺跡 08 - 1 の調査

基本層序

当調査区は東高野街道部分にあたることから、地層の堆積は、中世から近世までに大きく4回にわたる道路脇の側溝埋土や道路拡幅に伴う堆積が確認された。

第1・2面に伴う堆積層中より陶磁器等が出土しており、近世での堆積と考えられる。第3面に伴う堆積層からは瓦器の細片などが出土しており、中世（13世紀）において近くの基盤層を削って道路整備を行ったと考えられる。第4面は基盤層上面で中世以前の面と考えられる。

遺構と遺物（図369、図版69）

近・現代の表土層および道路盛土、さらに攪乱について重機で掘削を行った後、人力掘削を行った。

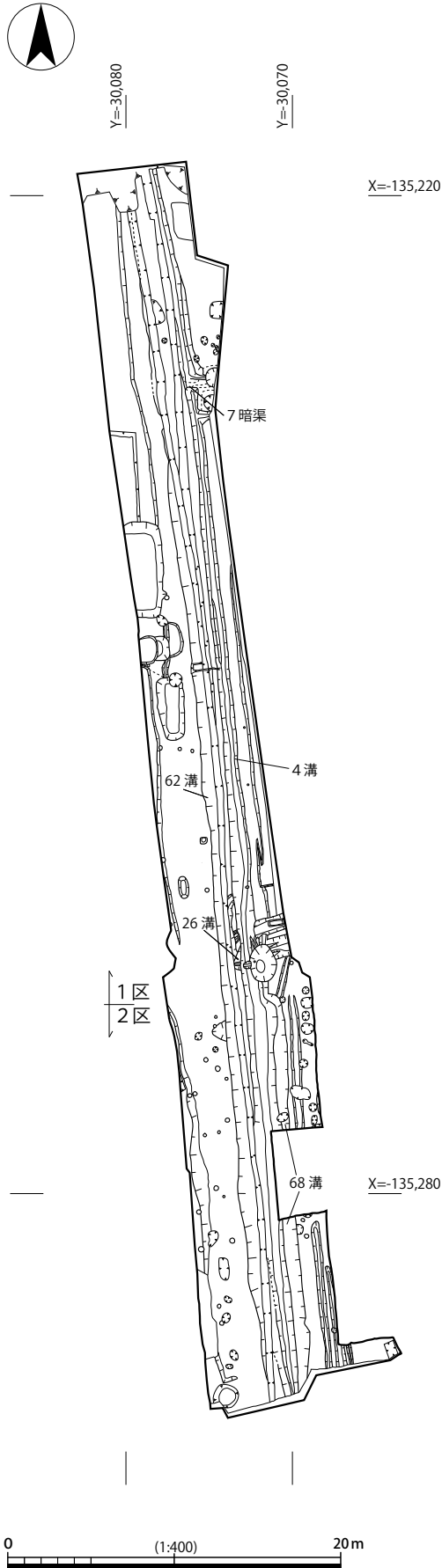
その結果、検出した遺構は、道路遺構、ピット、土坑、溝などであるが、今回の調査における成果として特筆すべきは中世から近世にかけて、道路形状の変遷の様子が確認できたことである。道路遺構は上の山遺跡が立地する中位段丘の東側縁辺部をほぼ南北方向に延びる。道路遺構は平・断面を観察した結果、大きく4面に分けることができた。

第4面は、中世以前に敷設されたものである。道路の西側に広がる中位段丘面から比高10cm程度の段がみられる。これは第1面段階でも存在した可能性もあるが、上層の堆積状況などから、中世段階（第3面）の道路の西端部と考えられる。

幅員については不明であるが、東側に深さ約50cmから60cmの側溝（62溝）をもつ。この第4面が今回の調査の中ではこの道路遺構の初現にあたりと考えられる。路盤面についても中世道路敷設（第3面）の際に地山層が削平を受けたため確認できなかったが、既往の調査によって今回の調査区の北東側低位段丘面に続く緩斜面となっていることや、南東側には天野川へ注ぐ開析谷が大きく抉り込んでいる地形を考慮すれば、道路東側に位置する62溝は道路に伴う側溝と考えられる。この62溝は14世紀の幅員拡幅時の盛土によって埋め立てられる。溝の規模については後世の削平により不明であるが、路盤面との比高は0.3から0.4mと考えられる。路盤面の標高は南側で28.7m、北側で28.8mを測る。

第3面は、14世紀から18世紀前半まで機能していた面である。第4面の62溝を弥生時代の包含層や地山のシルト層によって埋め立てて東側へ幅員拡張をはかる。一方、道路西端部については中位段丘面を削り込んで10cm程度の段差を造って路肩としていたようである。これによって第3面における道路の幅員は約3から4m程度と考えられる。68溝は道路の東辺側溝である。溝は調査区北側では検出されなかったが、中央部より南側で検出した。溝の西肩部は道路拡幅時の埋め立て土である。溝の規模はX= -135,270付近で幅1.3m、深さ40cm、溝底場の標高28.1mを測る。62溝埋め立て土中より弥生土器、須恵器片、瓦質羽釜片などが出土した。

第2面は、18世紀前半から近代まで機能していた面である。第3面の68溝を地山のブロック層などで埋め立てる。さらに、その西側に碎石や地山のブロック土の互層で高さ40から50cmの盛土を行って道路面を構築するが、少なくとも3回程度の路盤面が確認でき、頻繁に道路整備を行った様子が窺えた。また、調査区の南東部では耕作土層の堆積が確認できた。なお、この面以降の道路景観は現代まで踏襲される。4溝は道路の東辺側溝である。溝の規模は調査区北側で幅60cm、深さ50cm、溝底場の



標高 28.6 m、南側で幅 1.5 m 以上、深さ 50cm、溝底場の標高 28.5 m を測る。4 溝は $X = -135,230$ 付近と $X = -135,265$ 付近で東に延びる溝が取り付く。既往の調査成果と合わせてみると、 $X = -135,230$ 付近を東へ延びる溝は東側に棚田状に広がる田面に供給するための溝と考えられる。しかし、この溝からの給水はうまく機能しなかったのか、溝を塞ぎ止めて瓦質の土管 2 本を入れ子状に並べて暗渠（7 暗渠）として南へ流下する水を制限し、より多くの水が東側の田面に流れるよう改良される。また、 $X = -135,265$ 付近を東に延びる溝は天野川の氾濫原へと続く谷頭部に取り付く。さらに 26 溝の水が落下する箇所は滝壺状に窪む。26 溝は調査区中央部の道路東肩部で検出した。削平を受けていたため詳細については不明であるが、路肩部に丸瓦を使用して樋状に置き、路面より約 80 cm 下に位置する 4 溝に雨水を落とし込むための施設である。4 溝との接点部は雨水の落下による侵食を受けて滝壺状に窪んでおり、底から染付碗が出土した。

第 1 面は、近代以降の道路面である。第 2 面の道路面を芯として碎石や地山のブロック土の互層で高さ 30 から 40 cm の盛土整形を行う。1 層中よりサヌカイト製の剥片が出土した。

まとめ

今回の調査では、現在「東高野街道」と呼ばれる道路遺構の初現が、中世以前に求められることが確認できた。さらに、現在のように路盤を台形状に盛土を行った構造をもつようになるのは近世（18 世紀）になってからであることも判明した。

ただ、今回は既往の調査で隣接する調査区で検出された弥生時代や古墳時代の遺構については検出されなかったが、これは中世以前の道路遺構面が主に基盤層を削り込んで造られていたことから、削平された可能性が考えられる。

図 369 遺構平面図

第7章 上の山遺跡 09 - 1 の調査

基本層序

今回の調査範囲における土層序は、隣接地における既往の調査成果とほぼ同様であり、現代の盛土、現代の耕作土の下に近世段階と考えられる水田作土層があり、この下に遺構面が検出される。近世段階の水田作土層は上層からの攪乱や削平により残存範囲が限られ、調査範囲東寄りには一定の層厚が認められたが、西寄りに層厚を減じ、西端では全く残存していない部分も広くみられた。したがって、機械掘削の段階においてすでに遺構面が現れる部分も多くみられた。

土層・遺構面の呼称としては、近世作土層を1層とし、検出遺構面を第1面とした。

遺構と遺物（図 370、図版 70 - 1）

今回の調査範囲では遺構の分布は希薄であり、第1層残存範囲に残された鋤溝を除くと、掘立柱建物1棟（建物1 5柱穴から11柱穴）、柱穴の可能性のある土坑1基（1土坑）、ピット3基（2から4ピット）、溝1条（12溝）を検出したにとどまる。

建物1はほぼ東西南北方向に主軸を持つもので、柱穴7基を検出した。柱配置については南側が近世段階の造成により失われている可能性も考慮されたが、柱穴の深度を確認したところ、建物四隅以外の柱穴が極めて浅い様相が認められたため、2間×2間の柱配置をもち、南側中央の柱穴が失われた可能性が高いものと判断した。建物規模は芯々距離で南北3.5m、東西3.2mを測り、面積は約11㎡となる。柱穴平・断面の観察から一部の柱穴に柱痕跡を残すものが認められ、柱の抜き取り痕跡はみられない。柱穴からは土師器の細片がわずかに出土したが、器形や時期を知るには至らない。

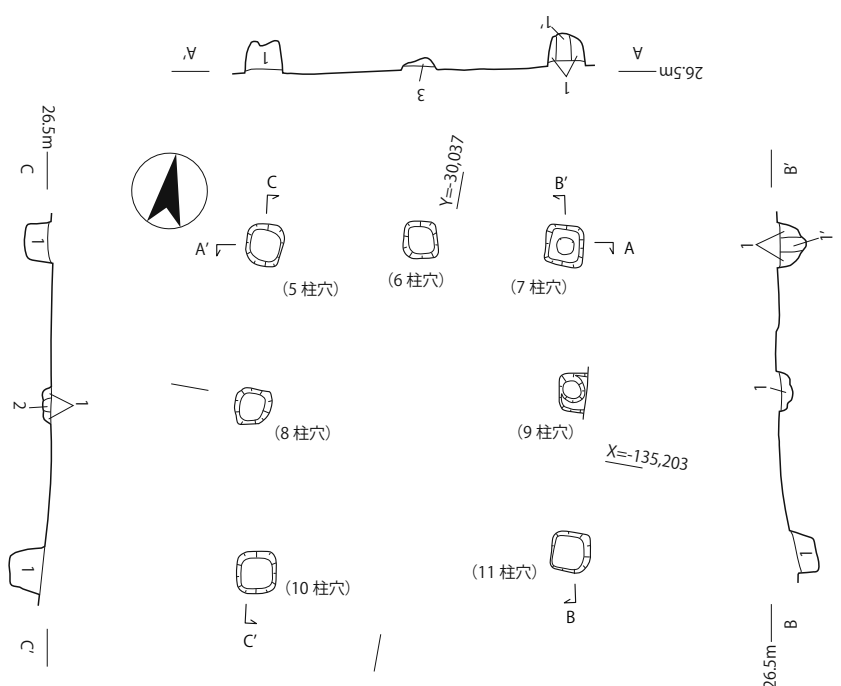
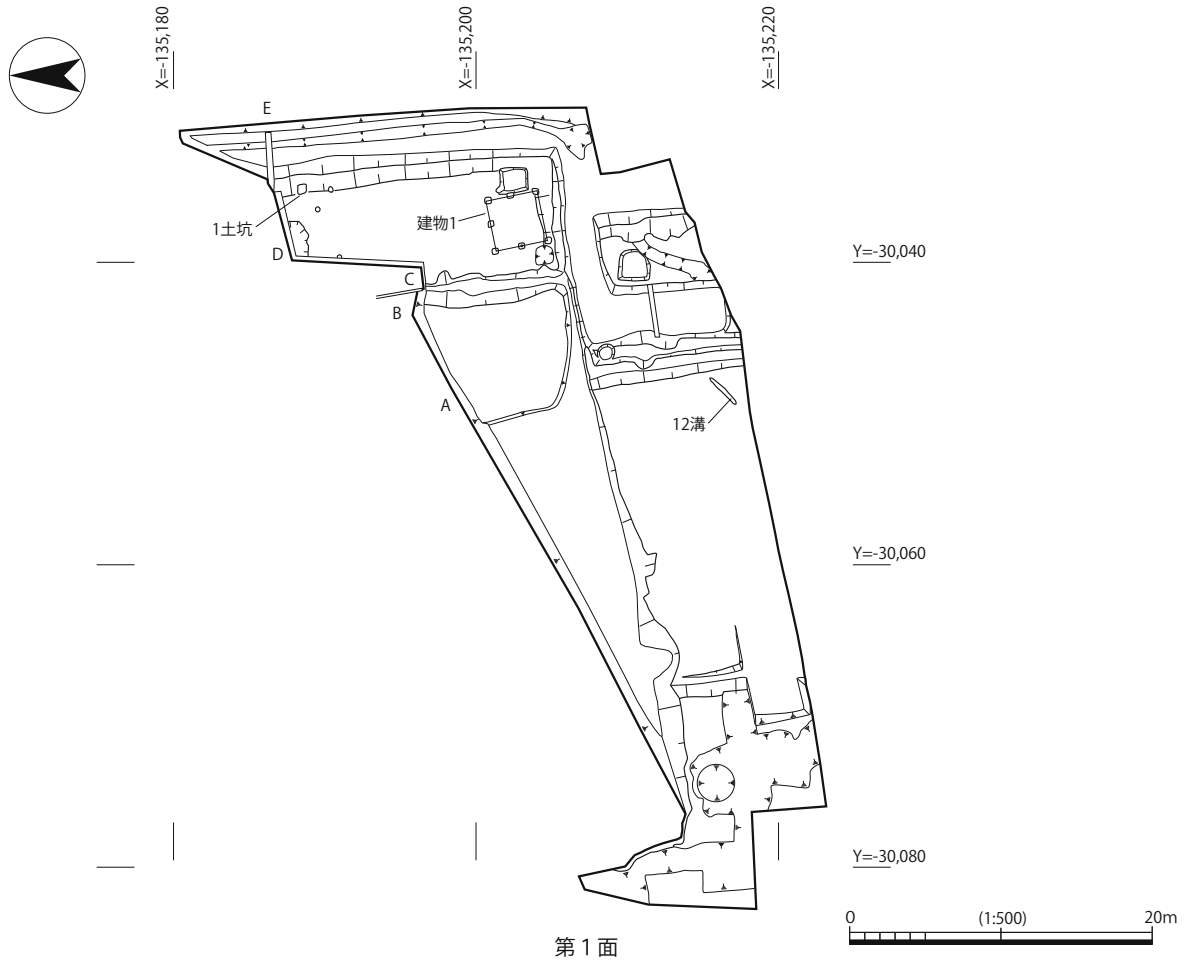
1土坑は60cm×60cmのほぼ正方形の平面形をみせる土坑で、深さ70cmを測る。埋土に柱根や柱痕は認められなかったものの、その形状と規模から掘立柱建物を構成する柱穴の可能性も想定されたが、調査範囲内には対となる柱穴はみられない。掘立柱建物であれば北側から東側に展開すると考えざるを得ないが、近世の棚田造成により遺構面が失われていることから、検証は難しい。土坑内部からは土師器の細片1点がわずかに出土したのみである。

ピット、溝はいずれも小規模なもので、遺物の出土はみられない。

近世段階の水田造成により旧地表面は失われており、それ以前の遺物包含層も遺存していないことから、層出土遺物も極めて少量である。近世以前に遡るものとしては第1層から須恵器、土師器の細片が数点出土したのみである。

まとめ

今回検出した遺構に関しては、出土遺物が限られており、時期を明確にすることはできないが、周辺の調査成果に倣うと、建物1や1土坑は飛鳥から奈良時代に帰属するものと考えられる。集落を構成する可能性の高い建物遺構でありながら密集しない分布を取ることは、既往の調査成果と調和的であり、かかる集落の範囲がこれまでの調査範囲より北西側に広がるものであることが明らかとなった。



1. 黒褐 7.5YR3/2 シルト 細～粗粒砂多く混じる ベースのシルトブロックわずかに混じる
1' . 1と同じ ベースのシルトブロックの割合が高い 柱痕跡か？
2. 黒褐 7.5YR3/1 シルト 細～粗粒砂多く混じる 柱痕跡か？
3. 灰褐 7.5YR4/2 シルト 細～粗粒砂多く混じる

建物1 平・断面図

図 370 遺構平面図 建物1 平・断面図

第8章 上私部遺跡 09－1 の調査

基本層序・遺構と遺物（図 371、図版 70－2）

今回の調査地全域が、谷地形の内側に該当することが判明した。また、上私部遺跡 03－1 調査区で確認された谷南肩の延長は、調査区内では確認できなかった。このため層序は、谷を埋めている堆積層となる。層序は以下のとおりであり、同時に各層から出土した遺物の概要も示す。

1～3層 現代の作土層および盛土層と考えられる。いずれも機械掘削にて除去した層である。なお、混入ながら、3層からは古墳時代後期と考えられる須恵器杯身片が出土している。

4～7層 粗砂～礫が多く混じる層で、ベースは細砂を中心とする。ラミナは見られず、攪拌を受けている。出土遺物は少ないが、近世を含んでおり、近世の耕作に伴い形成された層と思われる。4から6層は、人力にて掘削を行った。

8～10層 9層は砂礫が多く混じるシルト層、10層は砂礫層である。一部、9層の直上に8層の砂礫混じり細砂が見られ、10層の側方変化した層と考えられる。9層は下部の一部に砂礫層が薄く見られ、シルトをベースにこの砂礫層を巻き上げていると推測される。耕作に関連し、形成された層であろう。9・10層からは中世から近世の遺物が出土している。ただし、近世の遺物は上層の近世作土層からの混入の可能性も考えられる。近世以外に出土している中世遺物の時期は、15世紀頃で後述する下層の砂層に含まれる時期より新しい様相である。これらから、中世後半から近世頃の層と考えておく。

14層 調査区南側で確認できたシルト層で、砂はほとんど混じらない。今回の調査区では南側で安定して見られたが、03－1 調査区では観察できていないようであり、狭い範囲にのみみられる層と考えられる。ラミナは明瞭に観察できなかったが、砂礫など粗粒の堆積がみられる間の比較的安定していた時期に堆積した層であろう。出土遺物は皆無であり、時期不明だが、中世後半頃と推測される。

12・13層 後述する砂礫層の直上にみられる、ラミナが不明瞭な砂礫層である。弱く攪拌を受けているように見えるが、作土層とは考えにくい。砂礫層堆積後、一定期間地表面となっていた層と思われる。出土遺物には、14世紀頃と思われる土師器皿片などが見られ、この頃に形成された層であろう。

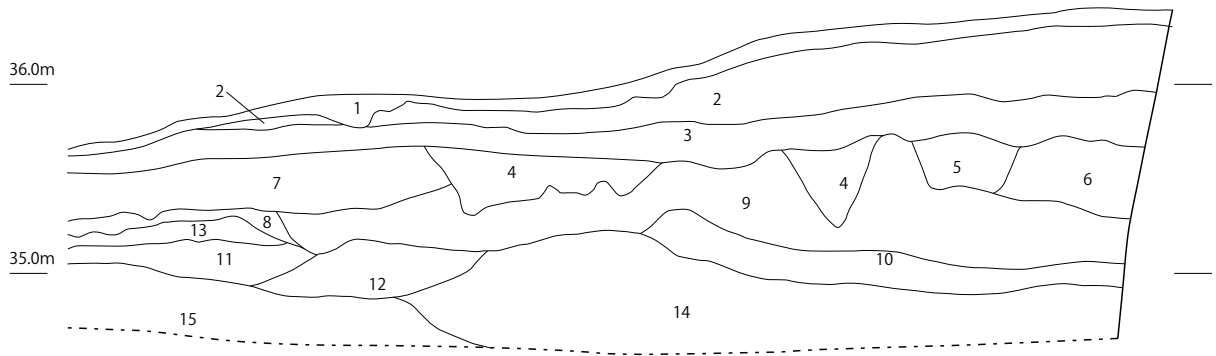
なお、この層以下が 03－1 調査区で溝 21 の第 1 層とされている層である。

11・15・16層 調査区全域の下層で見られた砂礫層である。複数の単位が断面で観察でき、調査区外南側の肩から北へ向かい、順次堆積している。出土遺物には、瓦器片や土師器片がみられる。瓦器片は、暗文の密度が粗いものであり、13世紀後半から14世紀頃と考えられる。一方、土師器片は、14世紀頃中頃までと思われる。

17・18層 調査区の平面ではごく一部でのみ確認できた程度だが、調査区南西端断面で確認できたシルト細砂層である。当該部分は、肩に近い部分であり、16層などの砂礫層以前に堆積した層と推測される。出土遺物はないが、16層などと大きな時期差はないと思われる。

まとめ

今回の調査地である上私部遺跡 09－1 調査区は、全域が 03－1 調査区の溝 21 延長で、肩は検出されなかった。ただし、03－1 調査区成果および、最終面で確認できた砂礫の層境からは、調査区南側に比較的近接して肩が存在すると考えられる。掘削深度における層の堆積時期については、03－1 調査区溝 21 の第 1 層の時期を 14 世紀中頃とされており、今回の出土遺物もこれと矛盾するものではない。



- | | | | | | | | |
|---|---------|--------|---|----|---------|-------|---------------------------------------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐色 | 粗砂～礫 (3mm～1cm大) 混シルト
(全体的に砂質で軟質) | 9 | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | 粗砂～礫 (~2mm)
(ラミナ見られる) |
| 2 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 粗砂～礫 (3mm～1cm大) 混シルト
(1同様だが、色調淡くしまりあり) | 10 | 2.5Y7/2 | 灰黄色 | 粗砂～礫 (~3mm) (主に上部) と
シルト～細砂 (主に下層) |
| 3 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 粗砂～礫 (3mm～1cm大) 混シルト
(2同様だが、砂礫多く混じる) | 11 | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | 粗砂～礫 (~8mm) 混細砂
(ラミナ見られない) |
| 4 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 | 粗砂～礫 (~5mm) 混細砂 | 12 | 2.5Y6/3 | にぶい黄色 | 粗砂～礫 (~5mm)
(ラミナ見られない) |
| 5 | 2.5Y5/3 | 黄褐色 | 粗砂～礫 (~5mm) 混細砂
(4と同様だが、比較的細粒) | 13 | 10YR4/1 | 褐灰色 | シルト (砂ほとんど混じらない) |
| 6 | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色 | 粗砂～礫 (~5mm) 混シルト～細砂
(砂礫少ない) | 14 | 2.5Y5/3 | 黄褐色 | 粗砂～礫 (~1.5cm)
(ラミナ見られる) |
| 7 | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 粗砂～礫 (~8mm) 混細砂 | 15 | 2.5Y6/2 | 灰黄色 | 細～粗砂と極粗砂～礫 (~5mm) の互層 |
| 8 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 粗砂～礫 (~3mm) 混シルト
(砂礫多く混じる) | | | | |

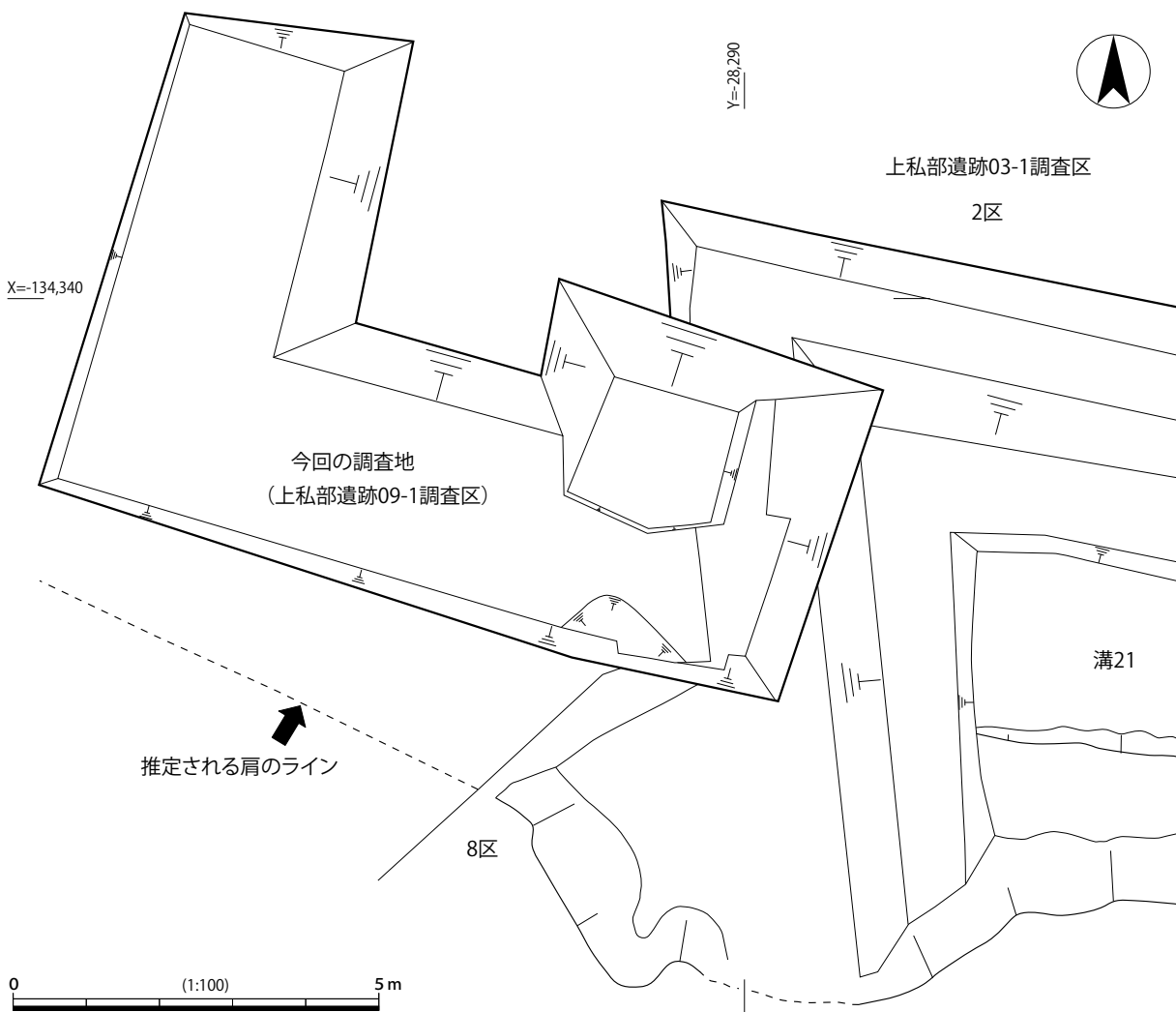


図 371 地層断面図 遺構平面図

第9章 有池遺跡 09 - 1 の調査

基本層序

有池遺跡その1の調査時には、現代の耕作土・床土の下に、中世から近世にかけて形成された耕作土層が数枚堆積し、その下で遺構面が検出されている。今回の調査では、遺構面直上にわずかに残っていた中世作土をI層とした。また調査区の北端部で検出した、段落ち部分に堆積する作土をII層とした。遺構と遺物（図372、図版70-3）

今回の調査範囲は南北方向に細長く、調査区南辺は有池遺跡02-1に接する。有池遺跡02-1の調査では、掘立柱建物2棟と柵を検出した他は、ほぼ全域にわたって鋤溝を検出したことから中世以降、主に生産域として利用されたことが窺える

今回の調査区でも溝や鋤溝をほぼ全面にわたって検出したことから、有池遺跡02-1の調査で検出した生産域が、さらに北へ延長していたことがわかった。検出した溝はおおむね南北方向を指向するが、調査区北端部分の地盤が一段下がる部分では、東西方向を指向する。したがって、段から北側の部分では、水田の区画が異なるとみられる。

有池遺跡02-1の調査区では、鋤溝や土坑が検出された中で、南北方向に長い掘立柱建物が2棟検出されたが、今回の調査区でも南北方向に3基のピットが並ぶのを認めた。これらは有池遺跡02-1で検出された建物1の西側に位置し、主軸方向も近似することから、建物の東辺にあたりと考えられる。まとめ

今回検出した遺構に関しては、出土遺物が限られており、時期を明確にすることはできないが、鋤溝群や土坑に関しては、おそらく13世紀以降に形成されたものと考えられる。建物の東辺を構成するとみられる柱穴列に関しては、遺構埋土から遺物が出土しなかったため、さらに時期の特定は難しいが、有池遺跡02-1の調査で検出された建物と同時期のものと考えられるなら、集落の成立当初に建てられたものである可能性が指摘できる。そうであれば、少数の小規模な建物が散在していたにすぎない段階の集落の居住域が、考えられていたよりもさらに北および東側へと広がっていた可能性が考えられる。

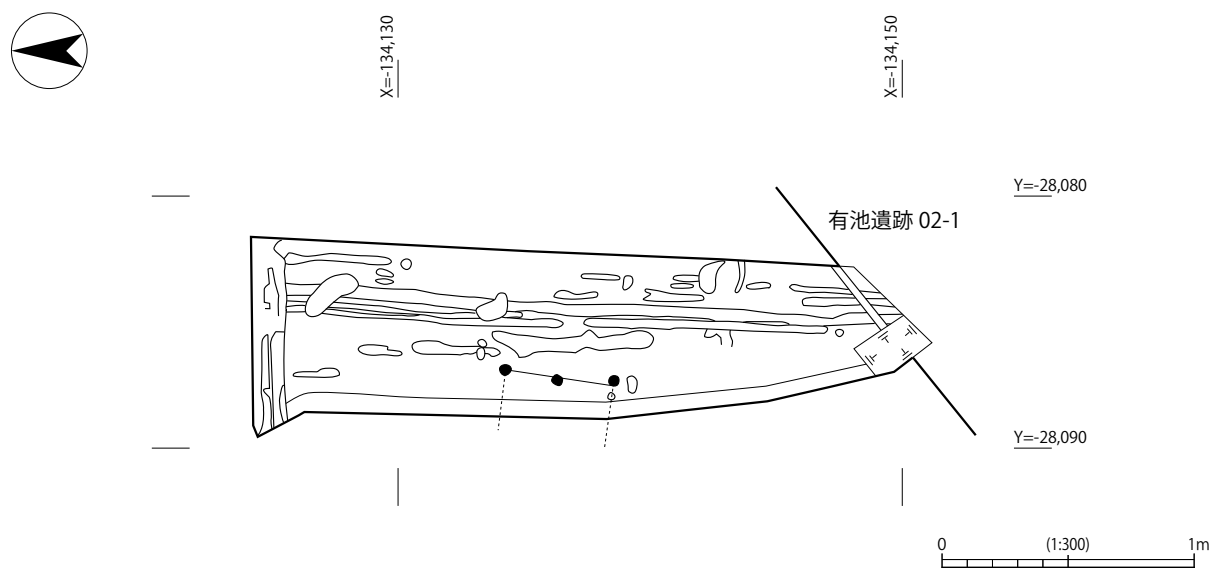


図 372 遺構平面図

第10章 総括

以上、第二京阪道路建設予定地内における発掘調査と遺物整理の殿となった私部南・上の山・有池・上私部の各遺跡の報告を行った。

このうち、上の山・有池・上私部遺跡については、既往の調査成果の内容を大きく変更するものではないため、これまでに上梓された各発掘調査報告書を参考として頂くこととし、ここでは、収録した遺跡の中でも最も頁数を割いた私部南遺跡06－2および、07－1調査の調査成果を中心としてとりまとめておくこととしたい。以下、時代ごとにそれを記す。

旧石器時代：06－2調査でサヌカイト製細石刃核と細石刃の可能性を持つサヌカイトの剥片、07－1区からサヌカイト製角錐状石器が出土した。いずれも後世の包含層内から遊離した状態で採取されたものだが、細石刃核は大阪府内では、羽曳野市に所在する城山遺跡、誉田白鳥遺跡、青山遺跡に続いて4例目となった。なお、この資料は西日本地域を視野に入れても僅少で、その持つ意義は新資料を付け加えることができたというのみばかりではなく、当該資料の分布や技術的系譜を列島や大陸との関係の中で評価する今日的状況の中において、その持つ資料的価値は非常に高い。

縄紋時代：検出された確実な遺構は、07－1調査で検出された後期末の滋賀里I式の深鉢を伴う1－78土坑のみで、以前の06－1調査で確認された中期末葉から後期初頭の北白川C式の3個体の深鉢が出土した貯蔵穴かとも思われる1－2262土坑を含めても非常に少ない。

しかし、今回の調査地全域で、遺物量は決して多くはないが、中期前半の船元式以降、晩期末葉の長原式にいたる連綿と続く各時期の土器や石器が、調査地全体の総延長約700m余の流路や谷地形などから散発的に出土している。また、06－1調査では当該期のものとなる可能性が高い翡翠と黒曜石も出土しており、規模や内容からみた場合においては、偏狭なものではないと考えられる。このような遺物の出土状況と、07－1調査の谷部堆積層を試料とした花粉・珪藻分析からは、水草などが生育する流水域から湿地の様相が看取されるとの結果を考え合わせると、集落縁辺部の活動領域と推測される。

さらに、07－1調査では北川の前身に想定される旧流路から中期末葉から後期にかけての遺物が比較的まとまって出土していることから、調査地の南東に遺構が存在する可能性も考えられ、少なくとも主たる居住域は調査地外であるとしても、一過的な活動の痕跡と過小評価することは差し控えたい。

弥生時代：前期では04－1調査で検出された同一遺構面に連続する流路から、大量の土器が得られたことが特筆される。また、段を形成したり、赤彩が施されたりする壺の存在も囁目され、河内湖縁辺から内陸部に入ったこの地域でも、四條畷市雁屋遺跡や寝屋川市讃良郡条里遺跡に後続する前期中段階の後半にはすでに弥生文化が定着していたという、従来まったく想像だにできなかった徴証が得られた。また、石棒の存在は、石庖丁には耳成山産流紋岩を使用するという弥生文化的要素を取り入れながらも、精神的側面には縄紋時代的要素を色濃く継承している証左として評価されよう。

中期初頭では、07－1調査の平坦面4で方形周溝墓が、06－1調査で竪穴建物のほか、木棺墓や土壙墓が検出されるなど活発化する。そして、この事象から上の山遺跡で検出された同時期の方形周溝墓群や独立棟持柱を持つ大形掘立柱建物がこの段階に突如として存立したのではなく、前期段階からすでにこの地に定着していた集団との相互的關係の中で伸暢してきた結果とみなされることもなった。

後期では、06－2調査より、前期から受け継いできた稲作技術をさらに発展させるため、シガラミ

を併用した灌漑用水路を設けている状況が明らかとなり、この地における水利施設の維持管理形態の変遷をたどることを可能とする具体的な資料を提示することができた。

古墳時代：前期の遺構や遺物は皆無で、森古墳群との関係で注意しておかなければならない事実である。

中期には、中頃を境として竪穴建物を中心とする集落が形成されはじめ活動が極度に活発化する。また07－1調査で検出された谷部からは、初期須恵器や木製品も多数出土し、さらに、調査地全域から少量ではあるものの縄蓆紋や格子目タタキが施される韓式系土器もみられる。06－1調査では、この他にも轆轤を用い窖窯で酸化炎焼成された土師器、土製当具が出土したことで、渡来人との強い関係を示唆する遺物が多いと注視されてきたが、今回の調査では、さらに、後半以降の竪穴建物の中に、鞆の羽口や鉄滓、鍛造剥片・粒状滓を伴う例や、鍛冶炉が検出されたことから、小規模ではあるが鍛冶工房を伴っていたと考えられる例があり、この事実は、06－1調査で検出された鉄鋌や、森遺跡の状況と共に、製鉄関連資料が多いというこの地域の特徴をさらに際立たせることとなった。

後期では、掘立柱建物群が展開されはじめ、特徴的な遺物には角杯形土器とおぼしき須恵器の破片がある。これまでの諸例と調整が異なるため、福井県興道寺窯出土の角杯形土器約50点と比較したところ、ただ1例だが同様の調整を施す例を実見したため、全国で23例目、府内では東大阪市西岩田遺跡に続く2例目とみなした。この土器についても、その源流は朝鮮半島から大陸東北部に求められるため、前段階の韓式系土器や、上私部遺跡の新羅土器と共に、当時の国際交流を示す資料として重要視される。

飛鳥から奈良時代：飛鳥時代では07－1調査で造り付けカマドの構築状況に特徴を持つ掘立柱建物が検出されたが、奈良時代では、06－1調査では規格性を持って配置された掘立柱建物群が検出され、遺物にも青銅製腰带金具の巡方、円面硯など、一般集落にはみられないものが出土し、公的施設の存在を推定させる成果を得ていたが、今回の調査区ではこれに関連するものは確認されなかった。

平安から鎌倉時代：平安時代では07－1調査で掘立柱建物が検出され、調査区全域から緑釉陶器、灰釉陶器などのほか、鉛成分の多い小形の皇朝銭が出土した。06－1調査では奈良時代に引き続いて掘立柱建物が構築され、遺物にも緑釉花紋陽刻三足壺片など特徴的な遺物も認められる。

鎌倉時代では、調査地のほぼ全域で溝や畦畔、そして、段などが検出された。これらの大多数は耕作に係わるものであるため、耕作地化が進行した段階と考えられる。

室町時代から安土・桃山時代：調査地のほぼ全体が耕地とされ、前段階までみられた耕地の段差を平準化する活動も盛んとなる。この中で、07－1調査で検出された矩形を呈する大規模な溝の存在が注視される。その堆積層からみて開削後、時間を経ずして一気に埋め戻されており、防御施設であった可能性が考えられる。北側には私部城が位置するため、この攻防に関連する可能性もあろう。また、出土遺物の中には06－2調査で出土した青磁の香炉やその蓋とも考えられる透穴を穿つ製品、06－1で出土した天目台が特徴的で、周辺に禅宗系をはじめとする有力寺院が存在しないと踏まえるならば、周辺に唐物文物を賞翫し、喫茶を嗜む武士階級の存在が推定され、これも先の私部城に関連するとも考えられる。

江戸時代：前段階に引き続き全域に耕地が展開し、この景観は、昭和時代後半まで受け継がれた。

以上、概括的な内容に終始したが、今回の私部南遺跡の調査成果を述べた。この内容がこれまで知られてきた当地域の歴史像をより一層、具体的かつ鮮明に叙述する糧となることを願い、結びとしたい。

私部南遺跡 07 - 1 調査区 遺物観察表

図番	押印番号	図録番号	種別	器形	時期	法量(単位cm、臼玉はmm) ○/○は残存率	調整(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	遺構種別	区域	調査区名	
1	213		須恵器	杯	8世紀前半	破片		5Y6/1 灰		10-59柱穴(掘立13)	平1	10-1	
2	213		土師器	小皿	11世紀後半	口径9.8(2/5) 器高1.5	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	2.5Y6/2 灰黄	て字状	4-90ビット	平1	4-1	
3	213		土師器	小皿	11世紀後半	口径10.2(1/4強) 器高0.9	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR8/3 浅黄橙	て字状	4-90ビット	平1	4-1	
4	213	71	土師器	皿	11世紀後半	口径13.7 器高2.6 完形	外面:ユビオサエナデ、スス付着 内面:端部やや凹む、ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		4-90ビット	平1	4-1	
5	213		土師器	皿	11世紀末か	口径16.0(1/6)	外面:ユビオサエナデ、スス付着 内面:摩滅	10YR6/2 灰黄褐		4-98ビット	平1	4-3	
6	213		黒色土器	角杯	11世紀後半	口径14.9(1/5)	外面:ユビオサエナデ、スス付着 内面:沈線文1、ヘラミガキ	N3/ 暗灰	B類	4-98ビット	平1	4-3	
7	213	72	須恵器	角杯	不明	破片		N6/ 灰		10-156溝	平1	10-3	
8	213	88	金属製品	天箱通寶	北宋1017年初鑄	径2.4 厚0.1 重さ2.8g						4-1	
9	213		金属製品	銭貨	北宋1017年初鑄	径2.45 厚0.1 重さ2.7g			○元貨?	機械研削面	平1	10-1	
10	213	71	磁器	青磁転用円盤	14~15世紀前半?	径6×4.6×1.4	外面:施釉、底面露胎・漆書き「x」 内面:施釉、中央露胎	5G5/1 オリーブ灰		龍泉窯系IV類 2層	平1	20-1	
11	213	71	磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	口径4.7(一部欠け)	外面:施釉(貫入)、底露胎 内面:施釉(貫入)、削り痕 転用円盤か	5G5/1 オリーブ灰		龍泉窯系IV類 2層	平1	22-2	
12	213	73	瓦器	椀	13世紀中頃か	口径13.7(3/4) 底径4.0 器高4.3	外面:ユビオサエナデ 内面:まばらなヘラミガキ	N5/ 灰		8-61土坑	平2	8-4	
13	213		土師器	小皿	13世紀前半	口径8.2(1/5) 器高1.3	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		8-49ビット	平2	8-3	
14	213		土師器	皿	13世紀後半	口径10.4(1/7) 器高1.4	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙		8-51ビット	平2	8-3	
15	213		土師器	皿	13世紀初か	口径12.4(1/8)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙		8-68ビット	平2	8-4	
16	213		土師器	小皿	13世紀	口径7.8(1/8)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		21-21ビット	平2	21-2	
17	213		瓦器	椀	13世紀中頃	口径12.8(1/7)	外面:ユビオサエナデ 内面:まばらなヘラミガキ	N5/ 灰		21-21ビット	平2	21-2	
18	213	73	磁器	白磁碗	13世紀前半	口径7.5(1/4)	外面:施釉、底面露胎 内面:施釉	7.5Y7/1 灰白		華南沿海窯系V類	平2	8-4	
19	213		土師器	小皿	13世紀前半	口径8.4(1/4) 器高1.1	外面:施釉(貫入)、底露胎 内面:スス付着	10YR7/2 にぶい黄橙		8-58溝	平2	8-4	
20	213		土師器	皿	13世紀後半	口径11.1(1/5)	外面:摩滅 内面:ユビオサエナデ	10YR6/3 にぶい黄橙		8-58溝	平2	8-4	
21	213		瓦器	小皿	13世紀初か	口径9.8(1/6)	内面:ヘラミガキ	N5/ 灰		8-58溝	平2	8-4	
22	213		瓦器	椀	12世紀中頃か	口径16.2(1/9)	外面:ユビオサエナデ、スス付着 内面:沈線文1、密なヘラミガキ	N6/ 灰		8-58溝	平2	8-4	
23	213		瓦器	椀	13世紀前半	口径14.0(1/6)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR5/1 褐灰		大和型	8-58溝	平2	8-4
24	213	73	瓦器	椀	13世紀前半	口径12.2~12.7 底径5.0 器高4.0 完形	外面:まばらなヘラミガキ、見込みジグザグ状暗文	N5/ 灰 N7/ 灰白		補葉型	8-58溝	平2	8-4
25	213	73	瓦器	椀	13世紀後半	口径11.5 底径4.0 器高3.7 ほぼ完形	内面:沈線文1(細い)、まばらなヘラミガキ、見込みジグザグ状暗文	N5/ 灰		8-58溝	平2	8-4	
26	213		瓦質土器	三足羽釜	13世紀	口径17.2(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	N6/ 灰		8-58溝	平2	8-4	
27	213		瓦質土器	三足羽釜	13世紀	口径18.6(1/4弱)	外面:ユビオサエナデ、スス付着 内面:ユビオサエナデ	5YR6/1 褐灰		8-58溝	平2	8-4	
28	213		土師器	台付き皿	11世紀か	口径19.2(1/6)		10YR6/2 灰黄褐		3面	平2	8-2	
29	213	73	磁器	青花皿	17世紀初か	口径6.1(1/4弱)	外面:施釉、高台一部に離れ砂あり 内面:施釉、玉取り獅子	5Y8/1 灰白		2層	平2	8-4	
30	213		土師器	小皿	12世紀初か	口径9.7(1/8) 器高1.9	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/2 にぶい黄橙		3層	平2	8-4	
31	213		土師器	皿	13世紀前半	口径12.2(1/6) 器高1.6	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/2 にぶい黄橙		3層	平2	8-4	
32	213		土師器	小皿	13世紀前半	口径8.1(1/6)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR8/2 灰白		7-214柱穴(掘立18)	平3	7-2	
33	213	73	土師器	皿	11世紀後半	口径15.1~15.4(ほぼ完) 器高3.4	外面:ユビオサエナデ	10YR8/3 浅黄橙		25-25柱穴(掘立60)	平3	25-1	
34	213	88	金属製品	延喜通寶	907年初鑄	径2.0 厚0.1 重さ2.5g				銅、鉛	25-49柱穴(掘立61)	平3	25-1
35	213	89	木製品	曲物		上幅直径39.8~40.3 高20.6	切り込み線			ヒノキ	11-131戸	平3	11-2
36	213		土師器	小皿	13世紀前半	口径7.6(1/5) 器高1.1		10YR7/3 にぶい黄橙		7-66土坑	平3	7-2	
37	213		瓦器	小皿	13世紀初か	口径9.4(1/5) 器高1.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	5YR7/3 にぶい橙		7-66土坑	平3	7-2	
38	213		瓦器	小皿	13世紀初か	口径9.8(1/4) 器高1.5	外面:ユビオサエナデ 内面:見込みジグザグ状暗文	2.5Y7/1 灰白		7-66土坑	平3	7-2	
39	213	73	瓦器	小皿	13世紀初か	口径8.7 器高2.0 ほぼ完形	外面:ユビオサエナデ 内面:見込みジグザグ状暗文	N5/ 灰		7-66土坑	平3	7-2	
40	213		瓦器	小皿	13世紀前半	口径8.6(1/5) 器高1.7	外面:型つくり?(布状痕跡あり) 内面:見込みジグザグ状暗文	N6/ 灰		7-66土坑	平3	7-2	
41	213		瓦器	椀	13世紀初か	口径14.4(1/10)	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、まばらなヘラミガキ	N6/ 灰		7-66土坑	平3	7-2	
42	213		瓦器	椀	13世紀初か	口径15.2(1/4)	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、まばらなヘラミガキ	N5/ 灰		7-66土坑	平3	7-2	
43	214		瓦器	椀	13世紀前半	口径13.0(1/4) 底径4.6 器高4.1	外面:摩滅 内面:沈線文1、鈍なヘラミガキ?(摩滅)	N5/ 灰		7-309土坑	平3	7-7	
44	214	75	土師器	壺		掛け口片	外面:把手痕跡あり、ハケメ 内面:ユビオサエナデ	7.5YR6/3 にぶい橙		7-309土坑	平3	7-7	
45	214		灰釉陶器	椀	9世紀	口径6.0(3/4)	外面:底面糸切り痕 内面:自然釉付着	10YR7/1 灰白		7-371土坑	平3	7-10	
46	214		瓦器	椀転用円盤	13世紀か	口径5.9×5.4×1.0 重さ23.4g	内面:見込み連続輪状暗文	10Y6/1 灰		11-87土坑	平3	11-2	
47	214		瓦器	小皿	13世紀初か	口径9.8(1/4) 器高1.4	外面:ユビオサエナデ 内面:見込みジグザグ状暗文	N4/ 灰		25-19土坑	平3	25-1	
48	214		土師器	羽釜	13世紀か	口径27.0(1/4)	外面:摩滅、スス付着 内面:ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙		25-19土坑	平3	25-1	
49	214		土師器	小皿	10世紀か	口径14.0(1/7)	外面:ナデ	10YR8/1 灰白		7-57ビット	平3	7-2	
50	214		瓦器	椀	13世紀初か	口径14.6 底径5.4(1/3) 器高5.4	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、ヘラミガキ	N3/ 暗灰		7-97ビット	平3	7-2	
51	214		瓦器	椀	13世紀初か	口径13.6(1/6弱) 底径4.4 器高4.8	外面:ヘラミガキ(摩滅) 内面:沈線文1、ヘラミガキ	N4/ 灰		7-109ビット	平3	7-2	
52	214		瓦器	椀	13世紀前半	口径13.4(1/6)	外面:ナデ 内面:沈線文1(細い)、まばらなヘラミガキ	N5/ 灰		7-186ビット	平3	7-2	
53	214		土師器	皿	13世紀前半	口径9.8(1/3) 器高1.4	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙		7-186ビット	平3	7-2	
54	214		土師器	小皿	13世紀前半	口径8.0(1/4強) 器高1.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙		7-190ビット	平3	7-2	
55	214	73	土師器	小皿	13世紀前半	口径8.4(2/3) 器高1.3	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	7.5YR6/4 浅黄橙	ひずむ	7-190ビット	平3	7-2	
56	214		瓦質土器	火鉢	13~14世紀	口径40.6(若干のみ)	外面:ヘラズリ、スス付着 内面:ヘラミガキ、暗文?	10YR5/2 灰黄褐		7-190ビット	平3	7-2	
57	214		瓦質土器	火鉢	13~14世紀	口径52.0(1/8)	外面:ヘラズリ、スス付着 内面:ナデ後部ヘラミガキ	10YR4/1 褐灰		7-190ビット	平3	7-2	
58	214		土師器	小皿	12世紀初か	口径9.1(1/3) 器高1.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	2.5Y7/2 灰黄		て字状	7-195ビット	平3	7-3
59	214		黒色土器	椀	11世紀前半	口径5.6(1/6)	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	2.5Y3/1 黒褐	B類	7-195ビット	平3	7-3	
60	214	88	金属製品	板状鉄斧		長4.5 幅4.8 厚1.1				鍛造	7-195ビット	平3	7-3
61	214		黒色土器	椀	11世紀前半	口径10.5(1/4) 底径5.4 器高3.5	外面:ヘラミガキ 内面:沈線文1、ヘラミガキ、見込み平行線状ヘラミガキ上ジグザグ状暗文	N2/ 黒		7-201ビット	平3	7-3	
62	214		土師器	皿	13世紀前半	口径10.2(1/6) 器高1.8	外面:ユビオサエナデ 内面:摩滅	10YR8/1 灰白		7-233ビット	平3	7-2	
63	214		瓦器	椀	13世紀初か	口径13.8(1/8)	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、まばらなヘラミガキ	N4/ 灰		7-369ビット	平3	7-7	
64	214		瓦器	椀	12世紀中頃	口径5.7(完)	外面:ユビオサエナデ後まばらなヘラミガキ、底面にヘラ記号 内面:ヘラミガキ、見込み連続輪状暗文	N6/ 灰		補葉型	11-124ビット	平3	11-2
65	214		須恵器	播鉢	11世紀後半	口径26.2(1/10)		5Y7/1 灰白		東播系	11-124ビット	平3	11-2
66	215		瓦器	椀	12世紀後半	口径14.2(1/6) 底径5.0 器高4.8	外面:ヘラミガキ(摩滅) 内面:沈線文1、ヘラミガキ	N5/ 灰		補葉型	11-130ビット	平3	11-2
67	215		瓦器	椀	12世紀後半	口径15.0(1/8)	外面:一部ヘラミガキ 内面:沈線文1、ヘラミガキ	N3/ 暗灰		補葉型	11-130ビット	平3	11-2
68	215		土師器	羽釜	12世紀後半	口径27.8(1/9)	外面:摩滅 内面:ハケメ	10YR7/1 灰白		山城Ⅱ	11-130ビット	平3	11-2
69	215		土師器	小皿	11世紀後半	口径7.2(1/6) 器高1.3	外面:ナデ 内面:ナデ	2.5Y7/3 淡黄		て字状	11-142ビット	平3	11-2
70	215		土師器	皿	10世紀後半	口径12.0 器高2.3 口縁付近1/6	外面:ユビオサエナデ 内面:摩滅	10YR8/2 灰白		11-142ビット	平3	11-2	
71	215		磁器	白磁皿	13世紀前半	口径10.1(1/8)	外面:施釉、下半部露胎 内面:施釉、浅い線1	5Y7/3 浅黄		華南沿海窯系VIa類	11-189ビット	平3	11-2
72	215		瓦器	椀	12世紀後半	口径14.0(1/7)	外面:ヘラミガキ? 内面:沈線文1、ヘラミガキ	N3/ 暗灰		大和型	23-42ビット	平3	23-1
73	215	73	土師器	皿	13世紀か	口径10.4(1/4) 器高1.9	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	2.5Y7/2 灰黄		23-63ビット	平3	23-2	
74	215		土師器	皿	13世紀か	口径10.4(1/4) 器高1.8	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙		23-63ビット	平3	23-2	
75	215		土師器	小皿	12世紀後半	口径9.0(1/4) 器高1.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙		7-103溝	平3	7-2	
76	215		瓦器	椀	13世紀初か	口径14.8(1/7)	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、まばらなヘラミガキ	N5/ 灰		補葉型	7-103溝	平3	7-2
77	215		土師器	小皿	13世紀前半	口径9.4(1/4) 器高1.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR6/3 にぶい橙		7-107溝	平3	7-2	
78	215		土師器	小皿	13世紀後半	口径7.6~7.9 器高1.3 完形	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	7.5YR6/2 灰黄褐		7-156溝	平3	7-2	
79	215		瓦器	椀	13世紀前半	口径13.9(1/7)	外面:ユビオサエナデ 内面:まばらなヘラミガキ	10YR6/1 褐灰		7-157溝	平3	7-2	
80	215		金属製品	不明		長2.0 幅1.1 厚0.1(サビなし)				鉄製	7-157溝	平3	7-2
81	215		土師器	小皿	13世紀前半	口径7.8(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/3 にぶい橙		7-158溝	平3	7-2	
82	215		土師器	皿	13世紀前半	口径11.4(1/6)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR6/3 にぶい橙		7-158溝	平3	7-2	

図番号	押通番号	図版番号	種別	器形	時期	流量(単位cm、白玉はmm) ○/○は残存率	調整(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	溝槽種類	区域	調査区名	
93	215	73	磁器	白磁碗	13世紀前半	底径6.0(1/2弱)	外面:施釉(釉のちぢれ)、高台底面露胎 内面:施釉	2.5Y7/2 灰黄	華南沿海窯系Ⅳ類	層不明	平3	11-2	
94	215	73	磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	口縁破片	外面:施釉、蓮弁文 内面:施釉	7.5Y6/1 灰		2・3層	平3	11-2	
95	215	73	磁器	青磁転用円盤	15世紀後半	口径4.5×4.4×1.5 重さ29.6g	外面:施釉、高台底面露胎 内面:施釉	7.5YR6/3 にぶい黄緑	土龍泉小碗	2・3層	平3	11-2	
96	215	73	瓦器	小皿	13世紀初め	口径10.2(1/4弱)	外面:ユビオサエナデ 内面:見込み平行線状暗文	N4/ 灰		2・3層	平3	11-2	
97	215	73	瓦器	碗	12世紀後半	口径14.2(1/3弱) 底径4.6 器高4.9	外面:まぼらなへらミガキ 内面:沈線文1、へらミガキ	N5/ 灰		2・3層	平3	11-2	
98	215	73	土師器	羽釜	13世紀か	口径23.6(1/4弱)	外面:ユビオサエナデ?、スス付着 内面:ナデ?、スス付着	10YR4/1 褐灰		2・3層	平3	11-2	
99	215	88	須恵器	盃	6世紀後半	口径20.4(2/5)	外面:平行タタキ後回転ナデ 内面:同心円状当て具痕	N6/ 灰		2・3層	平3	11-2	
100	215	88	金属製品	洪武通寶	明1368年初鑄	径2.4 厚0.1 重さ3.0g				2・3層	平3	11-2	
101	215	88	金属製品	鉄釘		長8.8 頭幅1.1 体幅1.0				2・3層	平3	11-2	
102	215	88	石製品	砥石		長5.7 幅4.5 厚1.1	3面使用、左側面の欠けた後加工?		流紋岩	23-15溝	平3	23-1	
103	215	75	灰釉陶器	段皿	9世紀前半	口径12.4(1/2) 底径6.2 器高2.2	外面:糸きり底	10YR7/1 灰白		3層	平3	6-5	
104	215	75	須恵器	杯蓋	TK208	口径13.0(1/5)	外面:回転ヘラケズリ	N5/ 灰		3層	平3	11-2	
105	215	75	須恵器	盃	7世紀末	底径8.8(1/3)		N6/ 灰		3層	平3	11-2	
106	215	75	須恵器	盃	10世紀	口径14.8(1/8以下)	外面:タタキ後ナデ、自然釉付着 内面:自然釉付着	N7/ 灰白		3層	平3	11-2	
107	215	88	金属製品	太平通寶	北宋976年初鑄	径2.4 厚0.1 重さ2.6g				3層	平3	15-1	
108	215	88	須恵器	盃	5世紀後半以前	口径18.8(1/10)		N4/ 灰		3-2層	平3	7-3	
109	215	88	須恵器	盃	6世紀後半	口径16.8(1/4)	内面:へら記号	N4/ 灰		3-3層	平3	1-1	
110	216	75	土師器	小皿	12世紀前半	口径8.6(1/8)	外面:ナデ	10YR7/3 にぶい黄緑		18-49柱穴(楕立38)	平4	18-1	
111	216	75	土師器	小皿	12世紀初め	口径8.8(1/6)		7.5YR8/2 灰白	て字状	18-32ビット	平4	18-1	
112	216	75	土師器	小皿	11世紀前半か	口径8.7(1/8)		10YR6/2 灰黄緑	て字状	18-40ビット	平4	18-1	
113	216	75	磁器	白磁碗	13世紀前半か	底径5.9(完)	外面:施釉、下半部露胎でヘラケズリ痕 内面:施釉	7.5Y7/1 灰白	華南沿海窯系Ⅳ類	18-240ビット	平4	18-1	
114	216	75	須恵器	盃	平安	底径6.8(1/4)	外面:回転ヘラケズリ(右)、底面墨書「三」	N6/ 灰		18-1溝	平4	18-1	
115	216	75	土師器	小皿	11世紀後半か	口径9.4(一部欠け) 器高1.5	外面:ユビオサエナデ 内面:ハケメ後ナデ	2.5Y8/1 灰白	て字状	18-2溝	平4	18-1	
116	216	75	土師器	杯	11世紀前半か	口径15.6(1/12) 器高3.0	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄緑		18-2溝	平4	18-1	
117	216	75	土師器	碗	11世紀か	口径13.8(1/7)	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文?1、ユビオサエナデ	10YR7/2 にぶい黄緑		18-2溝	平4	18-1	
118	216	75	土師器	碗	10世紀後半か	口径15.9(1/2) 底径6.4 器高5.1	外面:ユビオサエナデ、スス付着 内面:スス付着	10YR5/2 灰黄緑		18-2溝	平4	18-1	
119	216	75	黒色土器	碗	11世紀	口径14.0(1/9)	外面:へらミガキ 内面:沈線文1、へらミガキ	N4/ 灰		18-2溝	平4	18-1	
120	216	75	黒色土器	碗	11世紀か	底径5.8(1/3)	外面:底面へら記号 内面:暗文	N4/ 灰	日類	18-2溝	平4	18-1	
121	216	75	土師器	盃	11世紀か	口径18.2(1/5)	外面:ユビオサエナデ 内面:ヘラナデ	10YR7/2 にぶい黄緑		18-2溝	平4	18-1	
122	216	75	土師器	羽釜	11世紀後半か	口径16.2(1/7)	外面:ユビオサエナデ、スス付着 内面:ハケメ	10YR4/1 褐灰		18-2溝	平4	18-1	
123	216	75	土師器	製塩土器	8~9世紀	口径12.8(1/8)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR6/2 灰褐		18-2溝	平4	18-1	
124	216	84	石製品	石彫丁	弥生	長7.0 幅4.85 厚0.7	Ⅱ類 刃片、使用痕?		泥質ホルンフェルス	18-2溝	平4	18-1	
125	216	85	石製品	大型蛤刃石斧	弥生	長6.8 幅5.6 厚2.2	表面剥離多い		玄武岩	18-2溝	平4	18-1	
126	216	85	土師器	小皿	11世紀前半か	口径9.7(1/4) 器高0.9	外面:ユビオサエナデ	10YR8/2 灰白	て字状	18-447溝	平4	18-3	
127	216	85	土師器	皿	11世紀前半	口径11.9(1/6) 器高2.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	10YR8/2 灰白		18-447溝	平4	18-3	
128	216	85	土師器	皿	11世紀前半	口径12.5(1/8)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ?	10YR8/2 灰白		18-447溝	平4	18-3	
129	216	85	黒色土器	灰釉皿	11世紀か	口径15.9(1/9)	外面:密なへらミガキ 内面:沈線文1、密なへらミガキ	N3/ 暗灰	日類	18-447溝	平4	18-3	
130	216	85	陶器	灰釉皿	16世紀後半か	口径8.6(1/4弱) 底径4.0 器高2.0	外面:口縁部施釉、露胎、糸きり底 内面:施釉	2.5Y8/2 灰白		1・2層	平4	13-1	
131	216	85	陶器	天目碗	16世紀中	口径11.0(1/8強)	外面:施釉、下半部露胎 内面:施釉	7.5YR5/2 灰褐	瀬戸業濃	1・2層	平4	13-1	
132	216	85	陶器	碗	17世紀前半	高台径4.0(完)	外面:露胎、畳付糸きり底 内面:施釉、胎土目4、転用円盤か	10YR7/2 にぶい黄緑		唐津	1・2層	平4	13-1
133	216	85	磁器	白磁転用円盤	16世紀後半	径5.1×4.6×1.1 重さ26.2g	外面:施釉(貫入)、畳付露胎 内面:施釉	5Y7/1 灰白		景徳鎮窯系小碗	1・2層	平4	13-1
134	216	75	磁器	白磁碗	12世紀後半	口径14.6(1/6)	外面:施釉(釉だまりあり)、下半部露胎 内面:施釉	10Y7/1 灰白	華南沿海窯系Ⅳ類	2・3層	平4	18-1	
135	216	75	陶器	山茶碗	12世紀か	底径6.9(ほぼ完)		2.5Y7/1 灰		2・3層	平4	18-1	
136	216	75	須恵器	杯蓋	MT85	口径13.6(3/4) 器高4.8	外面:回転ヘラケズリ(右)	N5/ 灰		2・3層	平4	18-1	
137	216	75	須恵器	杯蓋	TK10	口径13.8(1/3) 器高3.8	外面:回転ヘラケズリ(左)	N7/ 灰白		2・3層	平4	18-1	
138	216	75	須恵器	杯蓋	7世紀後半	口径9.6(1/4) 器高2.9	外面:回転ヘラケズリ(右)後、一部ナデ、自然釉付着	N7/ 灰白		2・3層	平4	18-1	
139	216	75	須恵器	杯	MT85	口径13.0(1/2) 器高4.2	外面:回転ヘラケズリ(左) 内面:当て具痕	N6/ 灰		2・3層	平4	18-1	
140	216	75	須恵器	杯	MT85	口径13.4(7/10) 器高3.6	外面:回転ヘラケズリ(右)	2.5Y7/1 灰白		2・3層	平4	18-1	
141	216	75	須恵器	鉢		口径6.0(1/6)		N6/ 灰		2・3層	平4	18-1	
142	216	75	土師器	甕		焚き口破片	外面:ハケメ、ナデ 内面:ナデ、スス付着	10YR7/3 にぶい黄緑		2・3層	平4	18-1	
143	216	84	石製品	石彫丁	弥生	長14.3 幅4.7 厚0.7 孔径0.7	Ⅲ類 2孔両面から穿孔し、孔周縁磨耗、糸貫通孔1		泥質ホルンフェルス	2・3層	平4	18-1	
144	216	86	石製品	石鏃	弥生	長2.1 幅1.0 厚0.4 重さ0.87g	左側面鋸歯状剥離、基部側の欠けは風化		サスカイト	2・3層	平4	18-1	
145	216	86	石製品	未製品		長6.7 幅4.4 厚1.3 重さ38.24g			サスカイト	2・3層	平4	18-1	
146	217	79	陶器	盃	14世紀	口径18.5 底径13.0 器高36.8 宛形	外面:工具ナデ、ナデ、底面ナデ、一部スス付着、自然釉付着 内面:ユビオサエナデ、炭化物付着、自然釉付着	7.5YR5/1 褐灰	常滑	11-7井戸	谷1	11-1	
147	217	79	土師器	小皿	12世紀後半か	口径10.0(1/4) 器高1.4	外面:ユビオサエナデ、切り込み円板技法の痕跡 内面:ナデ	10YR6/2 灰黄緑		11-7井戸	谷1	11-1	
148	217	79	土師器	小皿	13世紀初め	口径9.4(1/2) 器高1.3	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ、口縁部スス付着	7.5YR6/2 灰褐		11-7井戸	谷1	11-1	
149	217	79	土師器	碗	13世紀初め	口径14.0(1/4)	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、ハケメ後へらミガキ	N5/ 灰		11-7井戸	谷1	11-1	
150	217	79	瓦器	碗	13世紀初め	口径14.6(1/3)	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、まぼらなへらミガキ	10YR7/2 にぶい黄緑		11-7井戸	谷1	11-1	
151	217	79	瓦器	碗	13世紀初め	口径13.8(1/3) 底径5.0 器高4.8	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、ハケメ後まぼらなへらミガキ、見込み連続線状暗文	N5/ 灰		11-7井戸	谷1	11-1	
152	217	79	瓦器	碗	12世紀後半	口径15.0(1/7)	外面:ユビオサエナデ後へらミガキ 内面:沈線文1、へらミガキ	N4/ 灰		11-7井戸	谷1	11-1	
153	217	79	瓦器	碗	13世紀初め	口径13.8(1/6弱)	外面:一部へらミガキ 内面:沈線文1、へらミガキ	N4/ 灰		11-7井戸	谷1	11-1	
154	217	79	瓦器	碗	12世紀後半か	底径5.6(1/2)	外面:ナデ 内面:ハケメ後へらミガキ、見込み連続線状暗文?	N5/ 灰		11-7井戸	谷1	11-1	
155	217	79	瓦質土器	羽釜	14世紀	口径37.6(1/7)	外面:2段、板ナデ、スス付着 内面:細かいかへらミガキ、板ナデ	N4/ 灰		11-7井戸	谷1	11-1	
156	217	79	土師器	小皿	13世紀前半か	口径7.2(1/4弱) 器高1.3	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄緑		11-7井戸	谷1	11-3	
157	217	79	土師器	碗	13世紀中頃	口径12.2(2/5) 底径4.6 器高4.2	内面:まぼらなへらミガキ、見込みジグザグ状暗文	N5/ 灰		11-20井戸	谷1	21-2	
158	217	79	瓦器	碗	13世紀前半	口径14.0(1/4)	外面:ユビオサエナデ 内面:沈線文1、まぼらなへらミガキ	N4/ 灰		6-32溝	谷1	6-5	
159	217	79	磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	底径5.7(1/3)	外面:施釉(貫入)、底面露胎 内面:施釉(貫入)、圈線	10Y6/2 オリーブ灰		6-7溝	谷1	6-5	
160	217	79	陶器	盃	15世紀中頃	口径37.0(1/6)	外面:面的タタキ後ナデ 内面:ナデ	5YR4/1 褐灰		6-7溝	谷1	6-5	
161	217	79	土師器	小皿	13世紀か	口径6.8(1/7) 器高1.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄緑		6-7溝	谷1	6-4	
162	217	79	瓦	丸瓦	室町	玉縁端幅(最大)1.5 凸面狭端縁縁結面高2.0	凸面:繻目タタキ後ナデ 凹面:布目痕後板ナデ、面取り幅広い、吊り紐痕	N5/ 灰		6-7溝	谷1	6-5	
163	217	79	瓦	野平瓦	室町	瓦当幅3.7 側面幅3.1~3.5	三重文瓦 凸面:額面施文 凹面:布目痕	N5/ 灰		6-7溝	谷1	6-4	
164	218	78	土師器	小皿	13世紀か	口径8.0(1/4)	外面:ユビオサエナデ	2.5Y7/2 灰黄		6-31溝	谷1	6-5	
165	218	78	土師器	小皿	13世紀	口径7.9(1/4) 器高0.9	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	5Y7/1 灰白		6-33溝	谷1	6-5	
166	218	78	土師器	小皿	13世紀	口径7.8(1/3) 器高1.3	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄緑		6-36溝	谷1	6-5	
167	218	78	瓦質土器	火鉢	15~16世紀	脚部破片		N5/ 灰		溝群	谷1	6-5	
168	218	79	土製品	土馬		長8.4 幅3.9 高5.6		10YR6/2 灰黄緑		溝群	谷1	6-5	
169	218	79	陶器	播磨	15世紀後半	底径15.2(1/8)	外面:回転ヘラケズリ 内面:スリ目(7条)	N5/ 灰		6-103溝	谷1	6-6	
170	218	79	土製品	玉		径2.4×2.3 重さ12.23g 宛形	外面:ナデ	10YR6/3 にぶい黄緑		6-103溝	谷1	6-6	
171	218	79	瓦	丸瓦	室町	側面幅1.5~1.8	凸面:ナデ 凹面:布目痕、面取り広い、吊り紐痕	2.5Y6/1 黄灰		6-103溝	谷1	6-6	
172	218	88	磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	口径15.6(1/8)	外面:施釉(貫入) 内面:施釉(貫入)	2.5Y6/3 にぶい黄		1~3層	谷1	21-2	
173	218	88	金属製品	洪武通寶	明1368年初鑄	径2.3 厚0.1 重さ3.3g				北側溝	谷1	11-1	
174	218	88	金属製品	火打金		長2.6 幅0.9 厚0.2 孔径0.5				側溝	谷1	11-1	
175	218	92	木製品	不明		長18.4 幅6.8 厚4.0	上端に加工痕		ケヤキ	4-1b層			

図番号	押印番号	図録番号	種別	器形	時期	法量(単位cm、白玉はmm) ○/○は残存率	調査(ヨコナテ、回転ナテは省略)	外面色調	備考	遺構種類	区域	調査区名
181	218	79	縄紋土器	深鉢	中津式(縄紋後期初期)	口縁破片	外面:波状口縁、半藪竹管による区画文、縄紋 内面:摩滅	10YR4/1 褐灰	生駒山西麓産	2層	谷1	5-3
182	218	93	木製品	不明		長10.5 幅3.5 厚1.6	黒漆塗り		ヒノキ	2層	谷1	5-3
183	218		土師器	羽釜	13世紀か	口縁破片	外面:焼成前穿孔2(1対)、スス付着 内面:ハケメ	10YR6/2 灰黄褐		2層	谷1	5-4
184	218	78	磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	口径5.1(1/3)	外面:施釉、畳付軸ノズリ、底面露胎・付着物あり 内面:施釉、圏線	5Y4/2 灰オリーブ	龍泉窯系IV類	2層	谷1	6-2
185	218		瓦	軒丸瓦	鎌倉(古い)	瓦当厚1.9	外面:巴文、圏線1~2本、外縁幅狭い 内面:ナデ?	10YR5/1 褐灰		2~3層	谷1	6-2
186	218	78	磁器	白磁碗	12世紀後半	口径16.0(1/10)	外面:施釉 内面:施釉	5Y6/2 灰オリーブ	華南沿海窯系IV1b類	2層	谷1	6-3
187	218		木製品	榑状		長16.7 幅2.0 厚1.5			スギ	2層	谷1	6-3
188	218		瓦質土器	火鉢	15~16世紀	底径29.7(1/8)	外面:突帯文1、脚1残存、ナデ 内面:ナデ	N4/ 灰		2層	谷1	6-4
189	218	78	磁器	青磁盤	15世紀	口縁破片	外面:施釉、印刷 内面:施釉	7.5Y5/1 緑灰	龍泉窯系	2層	谷1	6-6
190	218		瓦質土器	火鉢	15世紀後半	口縁破片	外面:突帯文2間雲気文スタンプ、ナデ 内面:ナデ	N3/ 暗灰		2層	谷1	6-6
191	218	78	磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	口径15.6(1/8)	外面:施釉 内面:施釉	2.5Y6/1 オリーブ灰	龍泉窯系IV類	2層	谷1	6-6
192	218		陶器	丸皿	16世紀	口径9.8(1/4強) 底径6.2 器高2.5	外面:施釉、畳付軸ノズリ、底面露胎・付着物あり 内面:施釉、圏線	5Y6/2 灰オリーブ	瀬戸	2層	谷1	6-6
193	218		陶器	碗	16~17世紀	口径9.6(1/5)	外面:施釉 内面:施釉	2.5YR5/2 灰赤	瀬戸美濃	2層	谷1	6-6
194	218		陶器	天目碗	16世紀	口径13.0(1/14)	外面:施釉、下半部露胎 内面:施釉	N4/ 灰	瀬戸美濃	2層	谷1	6-6
195	219		磁器	青花碗	16世紀前半	破片	外面:施釉、アラベスク文様 内面:施釉	5Y8/1 灰白	景德鎮窯系	2層	谷1	6-9
196	219		磁器	青磁皿or杯	14~15世紀	底径4.4(1/4)	外面:施釉(貫入) 底面露胎 内面:施釉(貫入)、焼成不良	10Y7/1 灰白	龍泉窯系	2層	谷1	6-9
197	219		磁器	白磁碗	13世紀前半	口縁破片	外面:施釉(軸だまり) 内面:施釉	5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV2類	2層	谷1	6-9
198	219		瓦	転用円盤		径3.8×3.8×2.3 重さ33.2g	凹面:ナデ?	N5/ 灰		2層	谷1	6-9
199	219		金属製品	鉄釘		長11.2 体幅0.5 体厚0.5	下半部折れ曲がる		頭巻釘?	2層	谷1	6-9
200	219		金属製品	鉄釘		長8.8 体幅0.6 体厚0.4			頭巻釘?	2~3-4a層	谷1	6-9
201	219		陶器	天目碗	16世紀後半	口径11.8(1/8)	外面:施釉(鉄軸)、下半部露胎 内面:施釉	7.5YR2/1 黒	瀬戸美濃	2層	谷1	9-1
202	219	91	木製品	紡錘車		径7.4×7.3 厚1.3 孔径1.5×1.7			ア力方巾風	2層	谷1	9-1
203	219		陶器	碗	17世紀後半	底径4.4(1/2弱)	外面:施釉、畳付軸ノズリ、底面露胎後穿孔 内面:施釉、砂目	5Y7/1 灰白	唐津	2層	谷1	9-5
204	219		陶器	碗	17世紀後半	底径4.2(1/2)	外面:施釉、畳付軸ノズリ 内面:施釉、砂目	5Y6/2 灰オリーブ	唐津	2層	谷1	9-5
205	219		土師器	小皿	13世紀か	口径8.2(1/2)	外面:ユビオサエナデ、切り込み円板技法の痕跡	10YR7/2 にぶい黄橙		2層	谷1	9-5
206	219	92	木製品	漆器碗		口径8.0(1/5)	赤漆一部に剥ける		トチノキ	2層	谷1	9-5
207	219		陶器	清縁皿	17世紀前半	口径11.8(1/10) 底径4.0 器高2.6	外面:施釉、下半部露胎、糸きり底 内面:施釉、砂目	7.5YR6/2 灰褐	唐津	2層	谷1	10-3
208	219		陶器	壺	17世紀前半	口径7.2(1/4強)	外面:施釉(発泡) 内面:施釉、下半部露胎	N7/ 灰白	朝鮮唐津	2-1層	谷1	11-1
209	219	78	磁器	白磁碗	13世紀前半	底径6.4(2/5)	外面:施釉(貫入)、下半部露胎 内面:施釉(貫入)、蛇の目軸ハギ	2.5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV類	2-1層	谷1	11-1
210	219	93	木製品	漆器碗	17世紀か	高台基部径6.8(1/4)	外面:黒漆塗り 内面:黒漆の上赤漆塗り		トチノキ	2-1層	谷1	11-1
211	219		陶器	碗	17世紀	底径5.0(完)	外面:施釉(貫入)、重ね焼痕、軸だまり 内面:施釉(貫入)	10YR6/2 灰黄褐	瀬戸美濃	2-2層	谷1	11-1
212	219		陶器	碗	17世紀後半	底径4.5(1/2)	外面:施釉(貫入)、下半部露胎 内面:施釉(貫入)	2.5YR6/3 にぶい橙	唐津	2-2層	谷1	11-1
213	219		陶器	種壺	17世紀	口径11.0(1/9)	外面:自然軸付着	10YR5/1 褐灰	備前	2-2層	谷1	11-1
214	219		磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	底径6.2(1/6)	外面:施釉 内面:施釉	10Y6/1 灰	龍泉窯系青磁碗IV類	2-2層	谷1	11-1
215	219	78	磁器	青磁碗	13世紀前半	底径7.4(1/7)	外面:施釉、畳付軸ノズリ 内面:施釉	2.5Y6/1 オリーブ灰	龍泉窯系IV類	2-2層	谷1	11-1
216	219		瓦質土器	火鉢	15~16世紀	口縁破片	外面:突帯文2間雲気文スタンプ 内面:ナデ	7.5YR7/2 明緑灰	灰素が未付着	2-2層	谷1	11-1
217	219		瓦質土器	火鉢	15~16世紀	口縁破片	外面:突帯文2間雲気文スタンプ 内面:摩滅	5Y6/1 灰		2-2層	谷1	11-1
218	219	88	金属製品	火打金		長3.6 幅10.0 厚0.2 孔径0.4			鉄製	2-2層	谷1	11-1
219	219		金属製品	鉄釘		長4.2 体幅0.4 体厚0.4	二次焼成受ける		頭巻釘?	2-2層	谷1	11-1
220	219		金属製品	鉄釘		長6.5 体幅0.4 体厚0.3			頭巻釘?	2-2層	谷1	11-1
221	219		金属製品	鉄釘		全長8.3 体幅0.5 体厚0.4			頭巻釘?	2-2層	谷1	11-1
222	219	93	木製品	下駄		長10.9 幅6.7 厚1.3 脚差径0.9 横軸孔径1.0	遺歯下駄		スギ	2-2層	谷1	11-1
223	219	93	木製品	刀形?		長29.1 幅2.8 厚1.4	下端部と上端部に加工痕		スギ	2-2層	谷1	11-1
224	219		磁器	青磁碗	13世紀前半か	破片	外面:施釉、下半部露胎、描帯文 内面:施釉	5Y6/2 灰オリーブ	同安窯系I1b類	2層	谷1	11-3
225	219		土師器	小皿	12世紀	口径8.8(1/4)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		2層	谷1	11-3
226	219		瓦器	椀	12世紀後半	口径15.0(1/3) 底径5.1 器高5.3	外面:一部ヘラミガキ 内面:沈線文1、ヘラミガキ、見込み連結輪軸暗文	N4/ 灰	大和型	2層	谷1	17-3
227	219		陶器	皿	16世紀	口径13.4 底径7.9(1/4) 器高2.2	外面:施釉(貫入)、底面露胎 内面:施釉(貫入)	2.5Y7/1 灰白	志野	2-3層	谷1	19-3
228	219		陶器	壺	16世紀前半	口径12.2(1/5)	外面:施釉(貫入)、底面露胎 内面:施釉(貫入)	10R5/1 赤灰	備前	2-3層	谷1	19-3
229	219		陶器	皿	17世紀前半	口径10.7 底径3.6(完) 器高3.3	外面:施釉、下半部露胎、底面磨書「一」 内面:施釉、重ね焼痕	2.5Y7/2 灰黄	唐津	2層	谷1	21-2
230	219		陶器	転用円盤	17世紀後半	径9.6×8.3×1.5 重さ66.55g	外面:施釉、高台に砂目痕 内面:施釉、砂目	10YR6/3 にぶい黄橙	唐津	2層	谷1	21-2
231	219		瓦	転用円盤		径4.5×5.1×2.1 重さ52.5g	凸面:ナデ、一部瓦の側面以外周縁研磨 凹面:ナデ	N3/ 暗灰		2層	谷1	21-2
232	219		瓦	軒丸瓦	鎌倉	外縁幅2.05 外縁高1.3	巴文、外縁幅広い	N4/ 灰		2層	谷1	21-2
233	220		瓦	軒平瓦	室町	横凸面幅2.3 外縁幅0.9	唐草文	N5/ 灰		3-1層	谷1	5-2
234	220	88	金属製品	元豊通寶	北宋1078年初鑄	径2.4 厚0.1 重さ2.9g				3-1層	谷1	5-3
235	220		須恵器	壺	5世紀後半以前	口径16.4 頸部1/4	外面:凸線文1、平行タキ後キカメ	N5/ 灰		3-2層	谷1	5-3
236	220		須恵器	壺	8世紀前半	頸部径14.6(1/6)	外面:自然軸付着 内面:自然軸付着	N6/ 灰		3-2層	谷1	5-3
237	220	78	磁器	青花碗反皿	16世紀後半	口径13.0(1/10弱)	外面:施釉、牡丹唐草 内面:施釉	5G7/1 明緑灰	景德鎮窯系	3-1層	谷1	5-4
238	220		磁器	青花碗	16世紀後半	底径5.0(1/4)	外面:施釉 内面:施釉、界線	10G8/1 明緑灰	景德鎮窯系	3-1層	谷1	5-4
239	220		磁器	白磁皿	12世紀	口径9.3(1/5)	外面:輪花?、施釉、下半部露胎 内面:施釉	N8/ 灰白	景德鎮窯系	3-1層	谷1	5-4
240	220		磁器	白磁碗	13世紀前半	口縁細片	外面:施釉 内面:施釉	7.5G8/1 明緑灰	華南沿海窯系IV4類	3-1層	谷1	5-4
241	220		磁器	青花碗	16世紀前半	口縁細片	外面:施釉 内面:施釉	5G7/1 明緑灰	景德鎮窯系	3-1層	谷1	6-2
242	220		陶器	灰釉小皿	15世紀後半	口径5.6(1/5) 底径3.3 器高0.9	外面:口縁端部施釉、露胎、糸きり底 内面:施釉	2.5Y7/2 灰黄	瀬戸美濃	3-1層	谷1	6-2
243	220	82	石製品	砥石		長9.5 幅5.2 厚1.7	2面使用		泥質ホルンフェルス	3-1層	谷1	6-2
244	220	93	木製品	不明		長8.2 幅4.9 厚1.6	中央を窪ませる		スギ	3-1層	谷1	6-3
245	220		陶器	鉄軸小皿	16世紀後半	口径6.3(1/4弱) 底径4.0 器高1.2	外面:口縁部施釉、露胎、糸きり底 内面:施釉	10YR7/1 灰白	瀬戸美濃	3-2層	谷1	6-3
246	220		土製品	輪郭小皿		破片	外面:火ぶくれ		2.5Y5/1 黄灰	3-3層	谷1	6-3
247	220		土師器	小皿	12世紀後半か	口径8.8(1/4) 器高0.9	外面:ユビオサエナデ、切り込み円板技法の痕跡 内面:ナデ	2.5Y7/2 灰黄		3-3層	谷1	6-4
248	220		磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	高台基部径6.2(1/4)	外面:施釉、蓮弁文、底面露胎 内面:施釉、転用円盤か	2.5G7/1 明オリーブ灰	龍泉窯系IV類	3-1層	谷1	6-5
249	220	88	金属製品	〇通〇		径2.5 厚0.1 重さ1.0g			250と同出	3-1層	谷1	6-5
250	220	88	金属製品	元豊通寶	北宋1078年初鑄	径2.4 厚0.1 重さ1.0g			249と同出	3-1層	谷1	6-5
251	220		磁器	青磁碗	15世紀	口縁破片	外面:施釉、雷文帯蓮弁文 内面:施釉		龍泉窯系	3-1層	谷1	6-6
252	220		土師器	ミニチュア土器	13世紀か	口径10.4(1/12)	外面:摩滅 内面:口縁端部凹線2、摩滅	2.5Y6/1 黄灰	瓦質羽釜?	3-1層	谷1	6-6
253	220		金属製品	鉄釘		長10.2 体幅0.5 体厚0.4			頭巻釘?	3-1層	谷1	6-6
254	220	78	磁器	白磁皿	13世紀前半か	口径9.4(1/5強)	外面:施釉、下半部露胎 内面:施釉(輪だまり)	2.5Y8/1 灰白	華南沿海窯系IV類	3-2層	谷1	6-6
255	220		陶器	壺	12世紀	口径28.0(1/9)	外面:自然軸付着 内面:沈線文1、火ぶくれ	7.5Y4/2 灰オリーブ	常滑	3-2層	谷1	6-6
256	220		土師器	ミニチュア土器		口径2.0~2.2 器高2.4 ほぼ完形	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	10YR7/1 灰白		3-2層	谷1	6-6
257	220	79	瓦	軒平瓦	奈良		三重弧文 凸面:ヘラケズリナデ 凹面:布目痕	N6/ 灰		3-2層	谷1	6-6
258	220	93	木製品	蓋?		径7.0×6.8 厚0.7			スギ	3-2層	谷1	6-6
259	220	82	石製品	砥石		長12.5 幅5.9 厚2.0	5面使用か		珪質頁岩	3-4層	谷1	6-6
260	220		磁器	白磁碗	12世紀後半	口径14.6(1/6)	外面:施釉 内面:施釉	5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV1b類	4層下面	谷1	6-6
261	220		瓦器	椀	13世紀前半	底径4.9(端部欠)	外面:底面へラ記号 内面:見込み連結輪軸暗文	N3/ 暗灰		4層下面	谷1	6-6
262	220		灰釉陶器	短頸壺	平安	口径9.0(1/9) 器高2.7	外面:施釉 内面:口縁部施釉、体部露胎	5Y6/1 灰		3-1層	谷1	6-7
263	220	88	金属製品	元祐通寶	北宋1086年初鑄	径2.4 厚0.1 重さ3.5g				3-1層	谷1	6-7
264	220	88	金属製品	鉄鏝?		長8.7 幅0.9 厚0.4 重さ6.6g				3-1層	谷1	6-7
265	220	88	金属製品	鉄鏝?		長17.1 幅1.1 厚1.1 重さ32.1g	基部折れ曲がる			3-1層	谷1	6-7
266	220	88	金属製品	小柄	室町後半	長4.5 幅1.3 厚0.7	柄、胴に金メッキ、身は鉄			3-1層	谷1	6-7
267	220		金属製品	四つ目鍔		長7.5 幅0.5 厚0.4</						

図番号	押通番号	図版番号	種別	器形	時期	流量(単位cm、白玉はmm) ○/○は残存率	調整(ヨコナテ、回転ナテは省略)	外面色調	備考	溝槽種類	区域	調査区名	
271	221		土師器	皿	15世紀前半	口径10.4(1/4強) 器高2.0	外面: ユビオサエナテ	10YR7/2 にぶい黄橙		3-2層	谷1	6-9	
272	221		磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	口径16.0(1/12)	外面: 施釉 内面: 施釉	10Y7/1 灰白	龍泉窯系IV類	3-1層	谷1	6-10	
273	221	88	金属製品	元祐通寶	北宋1086年初鑄	径2.2 厚0.1 重さ2.2g				3-1層	谷1	6-10	
274	221	88	金属製品	神功開寶	765初鑄	径2.45 厚0.1 重さ3.0g				「長刀」	3-3層	谷1	6-10
275	221	75	土製品	紡錘車		径5.8 孔径1.0 厚1.2 1/2強	外面: 穿孔焼成前に裏から	7.5YR6/2 灰褐		3-2層	谷1	9-1	
276	221		土師器	小皿	13世紀初	口径8.8(1/4) 器高1.6	外面: ユビオサエナテ 内面: ナテ	7.5YR7/2 明褐灰		9-7層	谷1	9-2	
277	221		瓦器	椀	12世紀後半	口径16.0(1/8) 底径5.6 器高5.8	外面: まばらなヘラミガキ 内面: 沈線文1、密なヘラミガキ、見込み連結輪状暗文	N5/ 灰	大和型	9-7層	谷1	9-2	
278	221		瓦器	椀	12世紀後半	口径16.4(1/2強) 底径5.8 器高5.2	外面: まばらなヘラミガキ 内面: 沈線文1、密なヘラミガキ、見込み連結輪状暗文	N5/ 灰	大和型	9-7層	谷1	9-2	
279	221	79	土師器	製土器	8~9世紀	口径14.8(1/8弱)	外面: ユビオサエナテ 内面: ユビオサエナテ	7.5YR7/2 明褐灰		3-3層	谷1	9-3	
280	221		磁器	青磁碗	13世紀後半	口縁細片	外面: 施釉、連弁文 内面: 施釉	5Y5/2 灰オリーブ	龍泉窯系I 5b類	3-1層	谷1	9-4	
281	221		須恵器	短頸壺	6世紀後半	口径8.8(1/8以下)	外面: 自然釉付着	N6/ 灰	共蓋焼成	3-4層	谷1	9-4	
282	221		須恵器	壺	6世紀後半	口径17.4(1/7)	外面: 沈線文1、列点文	N6/ 灰		3-4層	谷1	9-4	
283	221	78	磁器	青花皿	16世紀後半	口径6.2(1/6)	外面: 施釉、太湖石竹子文、量付露胎、「長命富貴」の銘 内面: 施釉 漆線ぎ	10B67/1 明青灰	景德鎮窯系	3層	谷1	9-5	
284	221	79	陶器	灰釉鉢	15世紀	口径8.2(1/3)	外面: 露胎、糸きり底(高台付)、底面に墨書 内面: 施釉	2.5Y7/2 灰黄	瀬戸美濃	3-1層	谷1	9-5	
285	221		土師器	灯明皿	13世紀か	口径8.8(1/5)	外面: 口縁端部スス付着 内面: 口縁端部スス付着	7.5YR6/2 灰褐		3-1層	谷1	9-5	
286	221		土師器	小皿	12世紀後半	口径9.0(1/4弱) 器高1.2	外面: 切り込み内被技法の痕跡 内面: ナテ 一部赤色化	10YR7/3 にぶい黄橙		3-2層	谷1	9-5	
287	221		須恵器	杯	TK23	口径10.6(1/8)	外面: 回転ヘラズリ(左)	N5/ 灰		3-2層	谷1	9-5	
288	221		須恵器	ハソウ	TK10	口径14.8(1/8以下)	外面: 波状文、凸線文1、列点文	5P66/1 青灰		3-2層	谷1	9-5	
289	221		石製品	磁石		長さ5.3 幅5.2 厚2.4	3面使用		砂岩	3-2層	谷1	9-5	
290	221	79	土師器	製土器	5世紀	口径5.0(1/8強)	外面: ユビオサエナテ 内面: シボリメ? ナテ?	5YR8/1 灰白	丸底1 b 式	3-3層	谷1	9-5	
291	221		瓦器	椀	12世紀後半	口径5.2(1/3強)	外面: 底にへら記号 内面: 密なヘラミガキ、見込み連結輪状暗文	N5/ 灰	大和型?	3-2層	谷1	10-3	
292	221		磁器	白磁皿	12世紀	口径9.8(1/7強)	外面: 施釉 内面: 施釉	2.56Y7/1 明オリーブ灰	景德鎮窯系	3-3層	谷1	10-3	
293	221	78	磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	口径14.0(1/8)	外面: 施釉 内面: 施釉	5G6/1 オリーブ灰	龍泉窯系IV類	3-1層	谷1	11-1	
294	221		磁器	青磁碗	16世紀	口径5.6(1/6)	外面: 施釉(貫入)、底面露胎 内面: 施釉 転用円盤か	2.5Y6/1 黄灰	土龍泉	3-1層	谷1	11-1	
295	221		磁器	青磁碗	16世紀	口径4.8(1/7)	外面: 施釉、編連弁文、底面露胎、墨書? 付着物 内面: 施釉	10Y5/2 オリーブ灰	龍泉窯系	3-1層	谷1	11-1	
296	221		磁器	白磁皿	15世紀後半	口径8.8(1/5) 底径3.8 器高2.4	外面: 施釉、割高台(4) 内面: 施釉、重ね焼痕2	7.5Y8/1 灰白	中国南方	3-1層	谷1	11-1	
297	221		磁器	白磁碗	13世紀前半	口径6.0(1/2弱)	外面: 露胎 内面: 施釉 転用円盤か	2.5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV類	3-1層	谷1	11-1	
298	221		磁器	青白磁合子	14世紀	口径3.8(1/4)	外面: 施釉、底面露胎 内面: 施釉(一部貫入)	2.5Y7/1 灰白	景德鎮窯系	3-1層	谷1	11-1	
299	221		陶器	山茶碗	14世紀	口径11.0 底径4.3~4.8(完)	外面: 高台端部乾燥時痕跡	2.5Y7/1 灰白	東遠型?	3-1層	谷1	11-1	
300	221		土師器	灯明皿	16世紀か	口径6.4(4/5) 器高1.7	外面: ユビオサエナテ、口縁端部スス付着	7.5YR7/1 明褐灰	ゆがみあり	3-1層	谷1	11-1	
301	221		瓦質土器	火鉢	14~15世紀		外面: 凸帯文2、ヘラミガキ、円形カシシ1残 内面: 炭化物付着	N5/ 灰		3-1層	谷1	11-1	
302	221		土師器	転用円盤		径3.3×4.0×1.0 重さ14.67g	外面: 周縁研磨	10YR6/1 褐灰		3-1層	谷1	11-1	
303	221		石製品	磁石		長さ8.7 幅8.1 厚2.5	3面使用 表面: スス付着			3-1層	谷1	11-1	
304	221	86	石製品	茶臼		長さ10.2 幅3.4 厚2.7	右側面丸みあり		中粒砂岩	3-1層	谷1	11-1	
305	221		金属製品	鉄釘		長さ9.3 体幅0.4 体厚0.4			頭巻釘?	3-1層	谷1	11-1	
306	221	93	木製品	蓋?		径10.8×11.9 厚0.9			ヒノキ(スキ)	3-1層	谷1	11-1	
307	222		磁器	白磁碗	13世紀前半	口径14.7(1/8)	外面: 施釉、下半部露胎 内面: 施釉	10Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV類2類	3-2層	谷1	11-1	
308	222		磁器	白磁碗	13世紀前半	口径5.6(1/2)	外面: 施釉、高台部露胎 内面: 施釉	2.5Y8/1 灰白	華南沿海窯系IV類	3-2層	谷1	11-1	
309	222		磁器	白磁鉢	13世紀前半	口径6.15(一部欠)	外面: 施釉、高台部露胎 内面: 施釉 転用円盤か	5Y7/1 灰白	華南沿海窯系V類	3-2層	谷1	11-1	
310	222		磁器	白磁香炉	12~13世紀	口縁細片	外面: 施釉(貫入)、穿孔1(表から後に穿孔、施釉) 内面: 露胎	7.5Y7/1 灰白	景德鎮窯系	3-2層	谷1	11-1	
311	222		土師器	小皿	12世紀	口径8.9(1/6弱) 器高0.95	外面: ナテ 内面: ナテ	2.5Y7/2 灰黄		3-2層	谷1	11-1	
312	222		土師器	皿	10世紀後半	口径15.8(1/4強)	外面: ユビオサエナテ後板ナテ 内面: 板ナテ	7.5YR6/3 浅黄橙	字状	3-2層	谷1	11-1	
313	222		瓦器	小皿	12世紀後半	口径8.4(1/5強)	外面: ユビオサエナテ 内面: 見込みジグザグ状暗文	N5/ 灰		3-2層	谷1	11-1	
314	222		瓦器	椀	12世紀後半	口径14.4 底径5.5(3/4) 器高4.9	外面: ユビオサエナテ後まばらなヘラミガキ 内面: 沈線文1、密なヘラミガキ、見込み連結輪状暗文	N5/ 灰	桶粟型	3-2層	谷1	11-1	
315	222		須恵器	長頸壺	7世紀末	頸部径5.5(完)	外面: 沈線文1	N7/ 灰白		3-2層	谷1	11-1	
316	222		須恵器	長頸壺	8世紀前半	最大径17.4 底径10.4(1/3)	外面: 接合面	N6/ 灰		3-2層	谷1	11-1	
317	222		須恵器	壺	不明	口径11.2(1/8)	外面: へら記号?	5YR5/1 褐灰		3-2層	谷1	11-1	
318	222		須恵器	壺	5世紀後半以前	口径24.0 破片	外面: 凸線文1	5P65/1 紫灰		3-2層	谷1	11-1	
319	222	79	土師器	壺		炎きり側面破片	外面: 磨滅 内面: 磨滅	10YR6/2 灰黄褐		3-2層	谷1	11-1	
320	222	79	土師器	壺		掛け口破片	外面: 磨滅 内面: 磨滅	7.5YR6/2 灰褐		3-2層	谷1	11-1	
321	222	79	土師器	壺		底部破片	外面: 磨滅	7.5YR7/3 にぶい橙		3-2層	谷1	11-1	
322	222	79	土師器	壺		底部破片	外面: 磨滅、一部赤色化 内面: 磨滅、スス? 付着	7.5YR6/3 にぶい橙		3-2層	谷1	11-1	
323	222	88	金属製品	鉄鏃		長さ7.7 幅1.5 厚0.3 重さ7.6g				3-2層	谷1	11-1	
324	222		磁器	青磁碗	15世紀前半	口縁破片	外面: 施釉、雷文連弁文 内面: 施釉	10Y6/1 灰	龍泉窯系	3層	谷1	11-3	
325	222		磁器	白磁碗	13世紀前半	口縁破片	外面: 施釉 内面: 施釉、沈線文1、圈線	5Y8/1 灰白	華南沿海窯系V類	3層	谷1	11-3	
326	222		磁器	白磁碗	12世紀後半	口径15.6(1/8)	外面: 施釉 内面: 施釉	5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV 1a類か	3層	谷1	11-3	
327	222		磁器	白磁碗	13世紀前半	口径6.0(1/2弱)	外面: 施釉、下半部露胎 内面: 施釉、圈線	5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV類	3層	谷1	11-3	
328	222		磁器	白磁碗	13世紀前半	口径6.5(1/4)	外面: 施釉(貫入)、高台部露胎 内面: 施釉(貫入)、圈線、櫛指文	2.5Y7/2 灰黄	華南沿海窯系V類	3層	谷1	11-3	
329	222		陶器	灰釉四耳壺	13~14世紀	口径11.2(1/12)	外面: 施釉 内面: 施釉	10YR6/2 灰黄褐		3層	谷1	11-3	
330	222		土師器	皿	12世紀後半	口径14.0(1/5) 器高3.0	外面: ユビオサエナテ	10YR7/2 にぶい黄橙		3層	谷1	11-3	
331	222		瓦器	小皿	12世紀後半	口径9.3(1/2) 器高2.0	外面: ユビオサエナテ 内面: 見込みジグザグ状暗文	N5/ 灰	大和型?	3層	谷1	11-3	
332	222		瓦器	小皿	13世紀初	口径9.2(1/4) 器高1.8	外面: ユビオサエナテ 内面: 見込みジグザグ状暗文	N5/ 灰		3層	谷1	11-3	
333	222		瓦器	椀	12世紀後半	口径14.0(1/6)	外面: まばらなヘラミガキ 内面: 沈線文1、やや密なヘラミガキ	N5/ 灰	大和型	3層	谷1	11-3	
334	222		瓦質土器	漆鉢	15~16世紀	口径8.0(1/8)	外面: 墨気文スタンプ	N5/ 灰		3層	谷1	11-3	
335	222		瓦質土器	平瓦	奈良	端面径2(0)	凸面: 格子タタキ 凹面: 布目痕後板ナテ	N6/ 灰		3層	谷1	11-3	
336	222		須恵器	高杯	TK216以前	脚部径11.2(1/4)	外面: 凸線文1、方形スカン3方向、接合面	10R5/1 赤灰		3層	谷1	11-3	
337	222		須恵器	短頸壺	5世紀後半以前	口径7.3(1/5) 器高5.2	外面: へらナテ、手持ちヘラズリ、内面: ナテ	N5/ 灰	坩	3層	谷1	11-3	
338	222		須恵器	壺	5世紀後半以前	口径15.8(1/8)	外面: 波状文、凸線文2、波状文 内面: 自然釉付着	N6/ 灰		3層	谷1	11-3	
339	222		須恵器	壺	6世紀後半	口径26.2(1/5)	外面: 波状文、凸線文1、列点文、カキメ	5YR6/1 褐灰		3層	谷1	11-3	
340	222		須恵器	壺	6世紀後半	口径22.6(1/6)	外面: タタキ後カキメ 内面: 同心円状当て具痕後ナテ	N6/ 灰		3層	谷1	11-3	
341	222	82	石製品	磁石		長さ7.0 幅7.1 厚5.7	6面使用、右側面にスス付着		中粒砂岩	3層	谷1	11-3	
342	222		木製品	底板?		長さ9.4 幅1.9 厚0.5			スギ	3層	谷1	11-3	
343	222		木製品	曲物?		長さ12.7 幅4.2 厚0.5			スギ	3層	谷1	11-3	
344	222		木製品	火付桶		長さ16.3 幅2.4 厚1.0	下端部炭化		マツ科	3層	谷1	11-3	
345	223		磁器	青磁碗	15~16世紀	口径5.0(1/3強)	外面: 施釉、底面露胎 内面: 施釉 転用円盤か	7.5Y7/1 灰白	土龍泉	3層	谷1	11-4	
346	223		磁器	白磁碗	12世紀後半	口径6.0(1/5)	外面: 施釉、下半部露胎 内面: 施釉	5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV 1a類	3層	谷1	11-4	
347	223		陶器	擂鉢	12世紀後半	口縁破片	外面: 口縁端部凸線文3 内面: スリ目	10R5/2 灰赤	備前	3層	谷1	11-4	
348	223		瓦器	椀	13世紀後半	口径10.8(1/2弱) 底径5.0 器高3.7	外面: へら記号? 内面: まばらなヘラミガキ、見込みジグザグ状暗文	N5/ 灰	桶粟型	3層	谷1	11-4	
349	223		須恵器	短頸壺	6世紀後半以降	口径10.0 破片	外面: 自然釉付着	2.5Y7/1 灰白	東海系	3層	谷1	11-4	
350	223		金属製品	鉄釘		長さ5.3 体幅0.4 体厚0.5			頭巻釘	3層	谷1	11-4	
351	223		金属製品	不明		長さ10.9 幅2.9 厚0.5			コンロ付属か?	3層	谷1	11-4	
352	223		土師器	小皿	13世紀か	口径7.0~7.8(1/3強)	外面: ユビオサエナテ 内面: ナテ	10YR7/2 にぶい黄橙		3-2層	谷1	15-1	
353	223	88	金属製品	刀子		長さ18.2 幅1.2 厚0.3				3-4~4層	谷1	15-1	
354	223		陶器	壺	13世紀	口径8.0(1/2)	外面: 沈線文1、自然釉付着、量付磨滅 内面: 少し自然釉付着	5YR4/1 褐灰	常滑	3-2層	谷1	17-3	
355	223	79	土師器	皿	9世紀か	口径16.9(2/3) 器高2.8	外面: ナテ 内面: ナテ、スス付着	2.5YR7/4 淡赤橙		3-2層	谷1	1	

図番号	棟号	図番	種別	器形	時期	法量(単位cm、白土はmm) ○/○は残存率	調査(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	遺構種類	区域	調査区名
361	223		須恵器	杯	8世紀前半	口径14.4 底径10.0 器高3.5		2.5Y8/1 灰白		3-2層	谷1	17-3
362	223		須恵器	杯	8世紀前半	口径15.0(1/4) 底径11.6 器高3.4	外面:底面回転ヘラズリ(右)	10YR6/1 褐灰		3-2層	谷1	17-3
363	223		須恵器	高杯蓋	5世紀後半	つまみ径2.5	外面:回転ヘラズリ(左)	N4/ 灰		3-2層	谷1	17-3
364	223		須恵器	高杯	TK208	口径11.4(1/8)	外面:回転ヘラズリ(左)、方形スカシ3方向	N5/ 灰		3-2層	谷1	17-3
365	223		須恵器	高杯	TK216	脚端部径8.8(1/4)	外面:凸線文1	N5/ 灰		3-2層	谷1	17-3
366	223		須恵器	鉢	不明	口径6.0 底径5.0 器高5.3	外面:ナデ、自然軸付着 内面:ユビオサエ	N4/ 灰		3-2層	谷1	17-3
367	223	79	須恵器	提瓶	6世紀後半	口径9.0 最大径25.4 肩部1/2	外面:把手1、カキメ 内面:ユビオサエナデ	N6/ 灰		3-2層	谷1	17-3
368	223		須恵器	壺	5世紀後半以前	口径15.0(1/7)	外面:凸線文1、自然軸付着、スス付着	N6/ 灰		3-2層	谷1	17-3
369	223		須恵器	壺	5世紀後半	口径32.0(1/9)	外面:凸線文3、波状文(12条)、波状文(12条) 内面:自然軸付着	N4/ 灰		3-2層	谷1	17-3
370	223	83	石製品	下げ砥石		長4.95 幅1.8 厚0.9 孔径0.4	4面使用			3-2層	谷1	17-3
371	223		須恵器	鉢	TK216	最大径12.6	外面:沈線文2間波状文(8条)、円形スカシ1、ヘラズリ後ナデ、滑着、自然軸付着	10Y5/1 灰		3-3層	谷1	17-3
372	223		須恵器	壺?	7世紀末	高台基部径7.8	内面:ナデ、当て具痕 転用内盤か	N5/ 灰		3-4層	谷1	17-3
373	223		須恵器	壺	6世紀後半	口径23.0(1/3)	内面:同心円状当て具痕	N4/ 灰		3-4層	谷1	17-3
374	223	79	土師器	製塩土器	8~9世紀	口縁破片	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ?	2.5YR6/3 に近い黄緑		3-4層	谷1	17-3
375	224		瓦	軒平瓦	平安後半~鎌倉	瓦当面積2.5 額凸面積1.0	額頭文 凸線ナデ、工具痕 凹面ナデ	N5/ 灰		3層	谷1	19-3
376	224		須恵器	播鉢	13世紀か	口径21.8(1/10)	内面:スリ目(6条)	7.5Y6/2 灰オリーブ	東播系	3層	谷1	20-2
377	224		須恵器	鉢	TK208	頸部径5.2 最大径11.4(1/2)	外面:沈線文2と1間波状文(9条)、円形スカシ1、平行タタキ、自然軸付着 内面:底面ユビオサエ、自然軸付着	N7/ 灰白		3層	谷1	20-2
378	224	78	磁器	白磁皿	15世紀後半	口径7.2(1/7) 底径3.6 器高1.5	外面:割高台、施釉、畳付露胎 内面:施釉、重ね焼痕あり	5Y8/1 灰白	中国南方	3-1・2層	谷1	20-2
379	224	78	磁器	青磁壺	15世紀	口径破片	外面:施釉(貫入)、底面露胎 内面:施釉(貫入)	2.56Y6/1 オリーブ灰	龍泉窯系	3-1・2層	谷1	20-2
380	224		磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	高台径6.4(1/6強)	外面:施釉(貫入)、底面露胎 内面:施釉(貫入)	7.5GY7/1 明緑灰	龍泉窯系IV類	3-1・2層	谷1	20-2
381	224		土師器	高杯	6世紀か	口径17.4(1/16)	外面:回転ナデ、回転ヘラズリ(右) 内面:回転ナデ、ナデ?	10YR6/2 灰黄褐	須恵器系	3層	谷1	20-3
382	224		須恵器	鉢	6世紀後半	最大径8.8(完)	外面:沈線文2・2間別点文、円孔スカシ1、ヘラズリ後ナデ、自然軸付着 内面:自然軸付着	N5/ 灰		3-4層	谷1	20-3
383	224		須恵器	脚台	5世紀後半以前	脚端部径24.6(1/8)	外面:波状文(3条)、凸線文1、波状文(7条)	N6/ 灰		3-4層	谷1	20-3
384	224		磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	口縁破片	外面:施釉、蓮弁文 内面:施釉	2.56Y6/1 オリーブ灰	龍泉窯系IV類	3層	谷1	21-2
385	224	78	磁器	青花碗	16世紀前半	底径4.4(1/4)	外面:施釉(粗い貫入)、畳付露胎 内面:施釉(粗い貫入)、輪花文	7.5GY8/1 明緑灰	景德鎮窯系	3層	谷1	21-2
386	224		磁器	白磁転用内盤	13世紀前半	径8×4.7×2 重さ70.6g	外面:施釉、蓮弁文、高台部露胎 内面:施釉、粘土付着	5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV2類	3層	谷1	21-2
387	224		陶器	壺	14世紀	口径13.5(1/8弱)		7.5YR5/1 褐灰	備前	3層	谷1	21-2
388	224		瓦器	小皿	12世紀後半か	口径10.2(1/5) 器高1.7	内面:まげらなヘラミガキ、見込みジグザク状噴文	N5/ 灰		3層	谷1	21-2
389	224		瓦質土器	火鉢	15世紀か	口縁破片	外面:突帯文2間波状文スタンプ	N4/ 灰		3層	谷1	21-2
390	224		須恵器	杯蓋	8世紀前半	口径15.2(1/8)	外面:回転ヘラズリ後ナデ	N6/ 灰		3-2層	谷1	21-2
391	224		須恵器	杯	8世紀前半	口径15.8(1/8)		N5/ 灰		3-2層	谷1	21-2
392	224		須恵器	杯	不明	口径24(1/8) 高台径19.2 器高4.4		N7/ 灰白		3-2層	谷1	21-2
393	224		須恵器	高杯	5世紀後半	脚端部径11.6(1/8)	外面:凸線文1、方形スカシ4方向	N5/ 灰		3-2層	谷1	21-2
394	224		須恵器	壺	5世紀後半	口径12.7(1/8以下)	外面:口縁端部面取り、平行タタキ、自然軸付着	7.5R6/1 赤灰		3-4層	谷1	21-2
395	224	78	磁器	青花転用内盤	16世紀後半	径5.7×5.6×1.4 重さ27.51g	外面:施釉、畳付離れ砂あり 内面:施釉、菊文	5G7/1 明緑灰	景德鎮窯系	3-1層	谷1	24-1
396	224		磁器	白磁端反皿	16世紀後半	高台径5.4(1/10)	外面:施釉(虫喰い多い)、畳付露胎 内面:施釉	N8/ 灰白		3-1層	谷1	24-1
397	224		須恵器	壺	TK216以前	口径18.0	外面:凸線文3間波状文2帯(11条、10条)	N5/ 灰		3-2層	谷1	24-1
398	224		須恵器	脚台	TK73以前	破片	外面:斜格子文、沈線文2	7.5YR5/1 褐灰		3-3層	谷1	24-1
399	224	78	磁器	白磁碗	12世紀後半	口径16.0(1/6)	外面:施釉 内面:施釉(口縁端部厚め)	2.5Y7/1 灰白		3-3層	谷1	24-1
400	224		磁器	白磁碗	13世紀前半	口縁破片	外面:施釉 内面:施釉	7.5Y8/1 灰白	華南沿海窯系II類	3-3層	谷1	24-1
401	224		陶器	山茶碗	12~13世紀	高台径6.8(1/4弱)	外面:畳付露胎 内面:磨減(使用痕) 転用内盤か	10YR7/1 灰白	瀬戸	3-3層	谷1	24-1
402	224		須恵器	杯蓋	8世紀前半	口径14.5(1/8以下)	外面:回転ヘラズリ後ナデ	N6/ 灰		3-3層	谷1	24-1
403	224		須恵器	壺	TK216以前	口径21.6	外面:凸線文1、平行タタキ 内面:ナデ	5Y8/1 灰白		3-3層	谷1	24-1
404	224		須恵器	壺	5世紀後半以前	口径31.6(1/8以下)		N6/ 灰		3-3層	谷1	24-1
405	224		須恵器	壺	5世紀後半か	口径19.8(1/4)	外面:口縁端部線刻?、カキメ	N5/ 灰		7-400井戸	谷2	17-5
406	224	81	土師器	小皿	12世紀後半か	口径9.0(一部欠) 器高1.7	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	10YR7/2 に近い黄緑	ゆがみあり	7-350土坑	谷2	7-4
407	224		土師器	皿	12世紀後半か	口径14.0(1/4)	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ、一部ハケメ	2.5Y8/2 灰白		7-350土坑	谷2	7-4
408	224		瓦器	碗	12世紀後半	口径15.0(1/5)	外面:まげらなヘラミガキ 内面:沈線文1、密なヘラミガキ	N5/ 灰		7-350土坑	谷2	7-4
409	224		土師器	小皿	13世紀前半か	口径6.8(1/7)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 に近い黄緑		7-46溝	谷2	7-1
410	224		土師器	小皿	12世紀後半か	口径8.6(1/4)	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	10YR7/2 に近い黄緑		7-47溝	谷2	7-1
411	224		土師器	小皿	12世紀後半か	口径8.8(1/4) 器高1.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR6/3 に近い黄緑		7-49溝	谷2	7-1
412	224	81	磁器	白磁碗	12世紀後半	口径16.0(1/8以下)	外面:施釉(釉だまり、貫入)、下半部露胎 内面:施釉(貫入)	2.5Y8/2 灰白		1・2層	谷2	7-4
413	224	81	磁器	白磁碗	13世紀前半	口径17.0(1/9)	外面:施釉、下半部露胎 内面:施釉	5Y7/1 灰白		2-5層	谷2	7-1
414	224	81	陶器	褐釉壺	12~13世紀	脚端破片	外面:施釉 内面:斑状に釉が落ちる	2.5Y5/3 黄褐		2層	谷2	7-4
415	224		瓦器	小皿	13世紀初か	口径8.4(1/8) 器高1.65	外面:ユビオサエナデ 内面:見込みジグザク状噴文	N5/ 灰		2-2層	谷2	11-5
416	224	81	磁器	青磁碗	15世紀	口縁破片	外面:施釉、雷文 内面:施釉	10GY7/1 明緑灰	龍泉窯系	2層	谷2	11-5
417	224	81	磁器	青磁碗	15世紀前半	口径14.9(1/12)	外面:施釉、印花 内面:施釉、印花 漆継ぎ	2.56Y6/1 オリーブ灰	龍泉窯系	2層	谷2	11-5
418	224	81	磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	高台部径4.6(1/4)	外面:施釉(粗い貫入)、底面露胎 内面:施釉(粗い貫入)	5GY6/1 オリーブ灰	龍泉窯系IV類	2層	谷2	11-5
419	224		陶器	碗	17世紀前半	底径3.4(完)	外面:露胎、底面墨書「口」 内面:施釉	7.5YR6/3 に近い黄緑	唐津	2層	谷2	11-5
420	224		土師器	小皿	16世紀か	口径6.8(1/4) 器高1.2	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/3 に近い黄緑	いびつ	2層	谷2	11-5
421	224		土師器	小皿	16世紀か	口径7.0(1/5) 器高1.4	外面:ナデ 内面:口縁部スス付着	5YR7/3 に近い黄緑		2層	谷2	11-5
422	224		瓦質土器	鉢鉢	16世紀か	口径13.6(1/8)	外面:摩滅 内面:摩滅、工具痕	2.5Y4/1 黄灰		2層	谷2	11-5
423	225	81	陶器	褐釉壺	12~13世紀	口径11.4(1/4)	外面:施釉、口縁端部に重ね焼痕 内面:露胎	10YR5/2 灰黄褐		3-3層	谷2	7-1
424	225		瓦器	碗	12世紀後半	口径13.8(1/5)	外面:まげらなヘラミガキ 内面:沈線文1、密なヘラミガキ	N5/ 灰		3-5層	谷2	7-1
425	225		須恵器	壺	5世紀後半	口径13.2(1/4)	外面:平行タタキ	N6/ 灰		3-6層	谷2	7-1
426	225	81	土師器	製塩土器	8~9世紀	口縁破片	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	N7/ 灰白		3-3層	谷2	7-4
427	225		須恵器	壺	5世紀後半	口径18.2(1/4)	外面:波状文(16条)、凸線文2、波状文(16条)	N5/ 灰		3-3層	谷2	7-5
428	225	81	須恵器	高杯	TK43	口径13.0 脚端径10.0 器高7.4	外面:回転ヘラズリ 内面:当て具痕	N5/ 灰		3-4層	谷2	7-5
429	225		須恵器	壺	6世紀後半	口径16.9(1/5)	外面:頸部に列点文?	7.5YR5/1 褐灰		3-4層	谷2	7-5
430	225		土師器	壺		掛け片	外面:ナデ 内面:ナデ、スス?付着	10YR6/2 灰黄褐		3-4層	谷2	11-5
431	225	81	土師器	製塩土器	8~9世紀	口縁破片	外面:ユビオサエナデ 内面:布目痕	7.5YR5/1 褐灰		3-4層	谷2	11-5
432	225		土師器	小皿	13世紀か	口径9.0(1/6弱) 器高1.4	外面:欠損 内面:不定方向のナデ	5YR7/4 に近い黄緑		25-10土坑	谷3	25-2
433	225		須恵器	杯蓋	TK73	口径11.7(1/9)	外面:回転ヘラズリ(右)	N5/ 灰		25-10土坑	谷3	25-2
434	225		須恵器	壺	TK216以前	口径15.6(1/12)		N6/ 灰		25-10土坑	谷3	25-2
435	225	89	木製品	漆器碗		高台基部径6.6(2/5)	両面:黒漆の上赤漆塗り			2面流路	谷3	2-2
436	225	93	木製品	不明		長6.75 幅6.3 厚0.9	両面:黒漆塗り(側面に無)			1・2層	谷3	3-2
437	225	82	磁器	青花鉢	16世紀前半	高台部6.2(1/4)	外面:施釉、釉のちりれり、高台端部露胎、漆継ぎ 内面:施釉	5G7/1 明緑灰	景德鎮窯系	2層	谷3	2-2
438	225		須恵器	把手付鉢	TK73	口径9.0 口縁~体部3/10	外面:波状文、3段階のヘラズリ 内面:ナデ	N5/ 灰		2-4層	谷3	25-2
439	225		木製品	板状		長24.6 幅4.4 厚3.8	右側面に孔1			2-4層	谷3	25-2
440	225		磁器	青磁碗	15世紀	口縁破片	外面:施釉、雷文帯 内面:施釉	7.5GY7/1 明緑灰		3-2層	谷3	24-4
441	225	82	磁器	白磁皿	13世紀前半か	底径3.8(1/2弱)	外面:施釉(貫入)、下半部露胎、底面に墨書 内面:施釉(貫入)	5Y7/1 灰白		3-3層下	谷3	24-6
442	225		土師器	小皿	12世紀前半	口径9.4(1/4弱) 器高0.9	外面:ナデ 内面:ナデ	10YR6/2 灰黄褐		3-3層下	谷3	24-6
443	225	82	石製品	砥石		長8.8 幅3.5 厚0.8	5面使用か裏:欠損			3-2層	谷3	24-7
444	225		石製品	温石		長11.6 幅8.2 厚1.2 孔径0.6	表面:表面欠損			3-1層	谷3	25-2
445	225		木製品	板状		長20.6 幅4.1 厚0.7				3-3層	谷3	25-2
446	225		土師器	小皿	14世紀か	口径7.0(2/7) 器高1.2	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	2.5				

図番号	押出番号	図版番号	種別	器形	時期	流量(単位cm、白玉はmm) ○/○は残存率	調整(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	溝槽種類	区域	調査区名
450	225	93	木製品	漆桶?		長9.2 幅2.5 厚0.3			スギ	3-4層	谷3	25-2
451	225		磁器	白磁皿	15世紀	口径9.0(1/6)	外面:施釉 内面:施釉、ロハゲ	10Y7/1 灰白	中国	3-5層	谷3	25-2
452	225	82	磁器	青白磁合子	12~13世紀	口縁破片	外面:施釉 内面:露胎	7.5GY7/1 明緑灰	景德鎮窯系	3-5層	谷3	25-2
453	225		磁器	白磁碗	13世紀前半	口径16.0(1/6)	外面:施釉 内面:施釉	5Y7/1 灰白	華南沿海窯系IV2類	3-5層	谷3	25-2
454	225		土師器	小皿	13世紀	口径9.0(1/2強) 器高1.1	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR8/3 浅黄橙	ゆがみあり	3-5層	谷3	25-2
455	225		土師器	小皿	13世紀初	口径12.0(1/6)	外面:ユビオサエナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		3-5層	谷3	25-2
456	225		瓦器	小皿	13世紀初	口径9.9(1/3) 器高1.7	外面:ユビオサエナデ 内面:見込みジグザク状暗文	2.5Y7/1 灰白		3-6層	谷3	25-2
457	225		須恵器	樽形碗	TK73~TK216	口径8.4(4/5) 器高17.7	外面:波状文(6条)、沈線文2、波状文(5条+α) 内面:ナデ	N7/ 灰白		3-6層	谷3	25-2
458	225	82	土師器	器台		口径19.2(1/10)	外面:凸帯2残存、方形スカシ4方向、摩滅、赤色顔料塗布 内面:ナデ、一部ハケメ残る、赤色顔料塗布	7.5YR6/3 にぶい褐		3-6層	谷3	25-2
459	225		須恵器	鉢	10世紀後半	口径21.0(1/7)		5Y7/1 灰白	篠窯	3-7層	谷3	25-2
460	225		須恵器	杯蓋	TK216	口径12.9(1/5)	外面:回転ヘラズリ	N5/ 灰		3-7層	谷3	25-2
461	225	82	瓦	軒平瓦	奈良	瓦当面幅2.5	三重弧文 凹面:布目痕一部ナデ	10YR6/1 褐灰		3-7層	谷3	25-2
462	225		磁器	白磁碗	12世紀後半	口径16.0(若干のみ)	外面:施釉、下半部露胎 内面:施釉、圈線	5Y6/2 灰オリーブ	華南沿海窯系IV1b類	4層直上層	谷3	25-2
463	225		磁器	白磁碗	13世紀前半	高台部径6.0(一部欠)	外面:施釉、高台露胎 内面:施釉、圈線 転用皿盛か	5Y7/2 灰白	華南沿海窯系IV2類	4層直上層	谷3	25-2
464	225		土師器	小皿	12世紀後半	口径9.0(1/4強) 器高1.1	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR5/1 褐灰		4層直上層	谷3	25-2
465	225		瓦器	碗	13世紀後半	口径12.0(1/4) 器高3.3	内面:まばらなラミガキ、見込みジグザク状暗文	N4/ 灰	桶栗型	4層直上層	谷3	25-2
466	326		須恵器	杯	TK216	口径10.0(1/5)	外面:回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰		竪穴建物4	平1	4-2
467	326		土師器	高杯	5世紀後半	口径13.2(1/6) 脚部径8.2	外面:摩滅 内面:摩滅、接合面	5YR7/6 橙		竪穴建物4	平1	4-2
468	326		土師器	高杯	5世紀後半	口径12.2(1/10) 脚部径10.0 器高10.7	外面:ユビナデ、摩滅 内面:摩滅、シボリメ、ユビオサエナデ	10YR5/1 褐灰		竪穴建物4	平1	4-2
469	326		土師器	盃	6世紀初	口径13.0 頸部径11.0(1/5)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR8/4 浅黄橙		竪穴建物4	平1	4-2
470	326		土師器	盃	6世紀後半~7世紀	口径13.2(1/3)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶい橙		竪穴建物4	平1	4-2
471	326		土師器	盃	6世紀初	最大径12.9(完)	外面:板ナデ、ナデ 内面:ユビオサエナデ、一部ヘラズリ	10YR5/2 灰黄褐		竪穴建物4	平1	4-2
472	326	83	石製品	砥石		長7.1 幅3.6 厚3.3	4面使用			竪穴建物4	平1	4-2
473	326	71	須恵器	鉢	TK23	最大径10.5(完)	外面:凸線文1、波状文(11条)、沈線文2間波状文(5条)、円形スカシ1、回転ヘラズリ後ナデ	N5/ 灰		竪穴建物7	平1	10-1
474	326		須恵器	高杯	TK23	脚部径8.4(1/8)	外面:三角スカシ3方向	N6/ 灰		竪穴建物7	平1	10-1
475	326		須恵器	杯蓋	MT15	口径14.4(1/5) 器高4.0	外面:回転ヘラズリ(右)	N5/ 灰		10-145カマド	平1	10-1
476	326		土師器	小型丸底壺	希聖IV~V	口径9.0(1/3)	外面:ナデ 内面:ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙		竪穴建物7	平1	10-1
477	326		土師器	高杯	TK216	脚部径8.2(1/2)	外面:ユビナデ、ナデ 内面:摩滅、シボリメ	5YR6/8 橙		竪穴建物7	平1	10-1
478	326		土師器	鉢	5世紀中頃	口径11.0(1/4)	外面:ハケメ 内面:摩滅	5YR6/6 橙		竪穴建物7	平1	10-1
479	326	86	石製品	石鏡		長1.4 幅1.3 厚0.3 重さ0.42g	凹皿式			10-145カマド	平1	10-1
480	326		金属製品	不明		長3.45 幅0.85 厚1.1(サビなし)			鉄製	竪穴建物7	平1	10-1
481	326		須恵器	無蓋高杯	5世紀後半以前	口径13.0(1/4)	外面:回転ヘラズリ(右)	N4/ 灰		10-112カマド(竪穴8)	平1	10-1
482	326		須恵器	杯	TK208(ON46)	口径12.0 器高4.9 1/2	外面:回転ヘラズリ	10YR7/1 灰白		10-85カマド(竪穴9)	平1	10-1
483	326	71	土師器	瓶	5世紀後半	口径22.0(1/4)	外面:把手1残存、ハケメ 内面:ハケメ、摩滅	7.5YR7/6 橙		10-85カマド(竪穴9)	平1	10-1
484	326		土師器	ミニチュア土器		口径2.8~3.3 器高2.3 完形	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	5YR6/3 にぶい橙		10-85カマド(竪穴9)	平1	10-1
485	326		土師器	ミニチュア土器		口径3.2 器高2.3 完形	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	7.5YR6/3 にぶい褐		10-85カマド(竪穴9)	平1	10-1
486	326		須恵器	杯	MT85	口径12.2 破片		N5/ 灰		竪穴建物14	平1	19-2
487	326		須恵器	杯	TK47	口径12.6(1/15)		N6/ 灰		竪穴建物14	平1	19-2
488	326		須恵器	盃	TK216以前	口径17.8	外面:凸線文1	10YR5/1 褐灰		竪穴建物14	平1	19-2
489	326		須恵器	杯	TK10	受部径15.2(1/4)	外面:回転ヘラズリ(左)	2.5Y6/2 灰黄		竪穴建物19	平1	4-4
490	326		須恵器	杯	TK43	口径13.2(1/5)	外面:回転ヘラズリ	5Y6/1 灰		竪穴建物19	平1	4-4
491	326		須恵器	杯蓋	TK10	口径14.6(1/2) 器高5.0	外面:回転ヘラズリ(右) 内面:当て具痕	10YR5/1 褐灰		竪穴建物20	平1	4-4
492	326		須恵器	杯	TK10	口径12.0(1/4) 器高3.9	外面:回転ヘラズリ(左) 内面:当て具痕	N5/ 灰		竪穴建物20	平1	4-4
493	326		土師器	小型壺	5世紀初	口径9.9(1/7)		5YR5/6 明赤褐		竪穴建物20	平1	4-4
494	326		土師器	盃	6世紀初	口径13.9(1/8)	外面:ハケメ 内面:ハケメ、摩滅	5YR6/6 橙		竪穴建物20	平1	4-4
495	326		須恵器	杯蓋	TK216	口径11.9(1/3)	外面:回転ヘラズリ	5Y5/1 灰		4-130溝(竪穴20外周溝)	平1	4-4
496	327		須恵器	盃	6世紀後半	最大径27.5	外面:平行タキ後カキメ 内面:同心円文状当て具痕	5Y5/1 灰		4-154カマド(竪穴22)	平1	4-4
497	327	71	土師器	高杯	6世紀初	口径13.6 脚部径10.0 器高11.4 ほぼ完形	外面:ヘラズリ、ヘラズリ、ユビオサエナデ 内面:ハケメ、ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙		4-154カマド(竪穴22)	平1	4-4
498	327	88	金属製品	鉄釘?		長6.8 幅1.0 厚0.3(サビなし)				竪穴建物25	平1	4-4
499	327		須恵器	杯蓋	TK10	最大径13.2 破片	外面:回転ヘラズリ	N5/ 灰		竪穴建物26	平1	4-4
500	327		須恵器	杯	MT85	受部径13.8 破片		N5/ 灰		竪穴建物26	平1	4-4
501	327		須恵器	器台	TK216以前	口径29.4	外面:波状文(4条+α)	N5/ 灰		17-5溝(竪穴27外周溝)	平1	17-2
502	327		土製品	編羽口		口縁破片	外面:火ぶくれ 内面:火ぶくれ、赤色に着色	5Y5/1 灰		竪穴建物27	平1	17-2
503	327		土師器	瓶	6世紀初	把手破片	外面:把手1残存、ハケメ、ユビオサエナデ 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙		4-151溝(竪穴25)	平1	4-4
504	327		須恵器	杯	MT15	口径13.1 受部径15.9(1/4)	外面:回転ヘラズリ(左)	N6/ 灰		4-153溝(竪穴21)	平1	4-4
505	327	71	須恵器	杯	TK10	口径11.9(9/10) 器高4.2	外面:回転ヘラズリ(左)後ナデ	10YR6/1 褐灰		4-153溝(竪穴21)	平1	4-4
506	327		土師器	盃	6世紀初	最大径15.8(1/4)	外面:ハケメ(6条/cm) 内面:摩滅、工具痕	10YR5/3 にぶい黄褐		4-153溝(竪穴21)	平1	4-4
507	327		須恵器	盃蓋	6世紀後半	口径11.2(1/10)	外面:回転ヘラズリ、自然釉付着	2.5Y6/2 灰黄		20-16溝	平1	20-1
508	327		須恵器	盃	不明	口径48.6	外面:波状文(32条)、凸線文1、波状文(32条)、凸線文1	N6/ 灰		20-16溝	平1	20-1
509	327		須恵器	杯蓋	MT15	口径14.4(1/3) 器高4.3	外面:回転ヘラズリ(右)	10YR6/1 褐灰		10-81柱穴(掘立10)	平1	10-1
510	327		土師器	高杯	5世紀後半	杯部片	外面:ユビオサエナデ 内面:接合面、摩滅	7.5YR6/3 にぶい褐		4-142柱穴(掘立54)	平1	4-4
511	327		須恵器	杯	TK216	口径12.8(1/8以下)	外面:回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰		10-140土坑	平1	10-1
512	327		土師器	高杯	5世紀後半	口径14.3(1/2)	外面:摩滅、赤色化 内面:摩滅、スス?付着	2.5YR5/6 明赤褐		10-140土坑	平1	10-1
513	327	71	土師器	高杯	5世紀末	口径12.6(3/4) 脚部径8.6 器高10.3	外面:ユビオサエナデ、ナデ 内面:ナデ、シボリメ、ユビオサエ	10YR8/2 灰黄褐		10-140土坑	平1	10-1
514	327		須恵器	杯	7世紀中頃	口径9.0(7/10) 器高3.4	外面:底部ヘラズリ後ナデ 内面:ヘラ記号?	2.5Y6/1 黄灰		4-29土坑	平1	4-2
515	327		須恵器	把手付鉢	5世紀後半	最大径8.8 底径4.0	外面:波状文(11条?)、回転ヘラズリ後ナデ 内面:自然釉付着	N6/ 灰		4-46土坑	平1	4-2
516	327		土師器	高杯	6世紀	脚部径10.0(3/4)	外面:ヘラナデ、ナデ 内面:シボリメ、ユビオサエナデ	7.5YR8/6 浅黄橙		4-47土坑	平1	4-2
517	327		土師器	盃	5世紀後半	口径16.0(1/3)	外面:摩滅、スス?付着 内面:ヘラズリ、炭化物?付着	10YR6/3 にぶい黄橙		4-48土坑	平1	4-2
518	327		須恵器	杯蓋	7世紀前半	口径9.4(1/2) 器高3.1	外面:ヘラおこし	10Y6/1 灰	ひずむ	4-131土坑	平1	4-4
519	328		須恵器	高杯	TK23	口径10.0(1/4)	外面:回転ヘラズリ(左)、ヘラ記号?	N4/ 灰		10-159土坑	平1	10-3
520	328		土師器	ミニチュア土器		最大径5.4(ほぼ完)	外面:ナデ?、底部未調整? 内面:ユビオサエナデ	5YR6/4 にぶい橙		10-159土坑	平1	10-3
521	328		金属製品	鉄釘?		長6.15 幅0.6 厚0.6(サビ否)				10-159土坑	平1	10-3
522	328		土師器	高杯	5世紀後半	脚部径3.7(完)	外面:ナデ 内面:工具ナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙		17-12土坑	平1	17-3
523	328		土師器	高杯	6世紀初	脚部径3.7(完)	外面:ハケメ 内面:ナデ後一部ハケメ、ナデ、ハケメ	10YR6/3 にぶい黄橙	生駒山西麓産	17-12土坑	平1	17-3
524	328	71	須恵器	杯蓋	TK73~TK216	口径12.0(2/3) 器高4.8	外面:回転ヘラズリ(右)	N5/ 灰		17-13土坑	平1	17-3
525	328		須恵器	杯	MT15	口径11.8(1/6)	外面:回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰		4-119ピット	平1	4-3
526	328	71	須恵器	鉢	TK208	最大径10.0(4/5)	外面:凸線文1、カキメ後波状文(9条)、沈線文2間波状文(5条)、円形スカシ1、回転ヘラズリ後ナデ	N5/ 灰		10-106柱穴(掘立14)	平1	10-1
527	328		須恵器	杯蓋	MT15	口径14.6(1/8)	外面:回転ヘラズリ(左)	N6/ 灰		17-10ピット	平1	17-3
528	328		土師器	盃	6世紀初	口径12.3(1/6)	外面:粗いハケメ後ヘラミガキ? 内面:粗いハケメ	10YR6/2 灰黄褐		17-18ピット	平1	17-2
529	328		須恵器	杯蓋	TK73~TK216	口径10.8 脚部径10.6(1/6)	外面:回転ヘラズリ(右)後回転ナデ、自然釉付着	N7/ 灰白		19-10ピット	平1	19-2

図番	探図番号	図録番号	種別	器形	時期	法量(単位cm、臼玉はmm) ○/○は残存率	調査(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	遺構種類	区域	調査区名	
530	328		須恵器	杯	MT15	口径12.0(1/2) 器高5.1	外面:回転ヘラズリ(左)	2.5Y6/1 黄灰		4-62溝	平1	4-1	
531	328	71	須恵器	鉢	MT15	口径12.2(1/3) 器高13.9	外面:円形スカシ、カキメ、回転ヘラズリ(左)	N6/ 灰		4-62溝	平1	4-1	
532	328		須恵器	杯蓋	TK208	口径13.0(1/2) 器高4.4	外面:回転ヘラズリ(左)	N5/ 灰		10-95溝	平1	10-1	
533	328	72	須恵器	杯蓋	TK10	口径15.9(4/5) 器高4.6	外面:回転ヘラズリ後ナデ 内面:当て具痕	2.5Y6/1 黄灰		10-95溝	平1	10-1	
534	328	72	須恵器	杯	TK10	口径12.6(4/5) 器高4.5	外面:回転ヘラズリ(左)	N5/ 灰		10-95溝	平1	10-1	
535	328		須恵器	杯	TK10	口径15.0(1/2) 器高5.0	外面:回転ヘラズリ	5Y6/1 灰		10-95溝	平1	10-1	
536	328		須恵器	脚付壺	不明	脚部径13.8(1/5)		N4/ 灰		10-95溝	平1	10-1	
537	328		須恵器	提瓶	6世紀後半	最大径20.0(4/5)	外面:把手2、カキメ後ナデ 内面:中心部ユビオサエ	N6/ 灰		10-95溝	平1	10-1	
538	328		須恵器	壺	6世紀後半	頸部径10.8 最大径18.7(9/10)	外面:平行タタキ後カキメ 内面:同心円状当て具痕	2.5Y6/1 黄灰		10-95溝	平1	10-1	
539	328		土師器	鉢	5世紀後半	口径20.0 頸部1/9	外面:ハケメ(7条/cm) 内面:ハケメ(7条/cm)、ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙		10-95溝	平1	10-1	
540	328		土師器	鉢	5世紀後半	口径18.4 頸部1/9	外面:ハケメ(7条/cm) 内面:ハケメ(7条/cm)、ナデ	5YR6/4 にぶい橙		10-95溝	平1	10-1	
541	328		土師器	壺	6世紀か	口径19.0(1/4)	外面:ハケメ(6~9条/cm) 内面:工具痕	7.5YR6/4 にぶい橙		10-95溝	平1	10-1	
542	328		土師器	製塩土器	5世紀	破片	丸底1b式 外面:平行タタキ 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶい橙	生駒山西麓産	10-95溝	平1	10-1	
543	328	72	土師器	製塩土器	5世紀	口径3.2 体部1/4	外面:摩滅 内面:ユビオサエ?	2.5Y7/2 灰黄	丸底1b式	10-95溝	平1	10-1	
544	328	72	土師器	製塩土器	5世紀	口径4.0(1/5)	外面:摩滅 内面:ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	丸底1b式	10-95溝	平1	10-1	
545	328	72	土師器	輪郭口		口縁破片	外面:火ぶくれ、灰色に変色、ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙		10-95溝	平1	10-1	
546	328	72	土師器	輪郭口		口径約4.0(1/2弱) 孔径1.8	外面:火ぶくれ、灰色に変色、ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙		10-95溝	平1	10-1	
547	328	72	土師器	輪郭口		口縁破片	外面:火ぶくれ、灰色に変色、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙		10-95溝	平1	10-1	
548	329	83	石製	臼玉		径2.7 孔径1.2 厚2.0 重さ0.02g				滑石	10-95溝	平1	10-1
549	329	83	石製	臼玉		径4.0 孔径2.0 厚2.4 重さ0.05g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
550	329	83	石製	臼玉		径4.1 孔径1.8 厚2.5 重さ0.03g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
551	329	83	石製	臼玉		径4.2 孔径1.8 厚3.0 重さ0.08g				滑石	10-95溝	平1	10-1
552	329	83	石製	臼玉		径4.3 孔径2.0 厚3.5 重さ0.08g				滑石	10-95溝	平1	10-1
553	329	83	石製	臼玉		径4.3 孔径1.6 厚3.2 重さ0.09g				滑石	10-95溝	平1	10-1
554	329	83	石製	臼玉		径4.4 孔径2.0 厚3.2 重さ0.06g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
555	329	83	石製	臼玉		径4.4 孔径1.9 厚3.1 重さ0.07g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
556	329	83	石製	臼玉		径4.5 孔径2.4 厚3.7 重さ0.08g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
557	329	83	石製	臼玉		径4.5 孔径2.0 厚4.6 重さ0.12g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
558	329	83	石製	臼玉		径4.6 孔径1.5 厚1.7 重さ0.06g				滑石	10-95溝	平1	10-1
559	329	83	石製	臼玉		径4.6 孔径2.3 厚3.4 重さ0.09g				滑石	10-95溝	平1	10-1
560	329	83	石製	臼玉		径4.6 孔径2.4 厚2.5 重さ0.02g	半欠け			滑石	10-95溝	平1	10-1
561	329	83	石製	臼玉		径4.6 孔径1.8 厚3.6 重さ0.11g				滑石	10-95溝	平1	10-1
562	329	83	石製	臼玉		径4.7 孔径2.2 厚3.7 重さ0.11g				滑石	10-95溝	平1	10-1
563	329	83	石製	臼玉		径4.7 孔径2.3 厚2.7 重さ0.07g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
564	329	83	石製	臼玉		径4.7 孔径1.9 厚3.7 重さ0.11g				滑石	10-95溝	平1	10-1
565	329	83	石製	臼玉		径4.8 孔径2.1 厚3.1 重さ0.08g				滑石	10-95溝	平1	10-1
566	329	83	石製	臼玉		径4.8 孔径1.9 厚4.2 重さ0.12g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
567	329	83	石製	臼玉		径4.8 孔径2.1 厚3.7 重さ0.11g				滑石	10-95溝	平1	10-1
568	329	83	石製	臼玉		径4.9 孔径2.4 厚2.9 重さ0.09g				滑石	10-95溝	平1	10-1
569	329	83	石製	臼玉		径4.9 孔径2.1 厚3.2 重さ0.1g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
570	329	83	石製	臼玉		径5.0 孔径2.8 厚3.1 重さ0.08g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
571	329	83	石製	臼玉		径5.1 孔径1.9 厚2.0 重さ0.07g	下半部欠損			滑石	10-95溝	平1	10-1
572	329	83	石製	臼玉		径5.1 孔径2.1 厚3.3 重さ0.1g	側面:上下両面から加工			滑石	10-95溝	平1	10-1
573	329	83	石製	臼玉		径5.1 孔径2.6 厚3.3 重さ0.09g				滑石	10-95溝	平1	10-1
574	329	83	石製	臼玉		径5.5 孔径2.1 厚4.9 重さ0.2g				滑石	10-95溝	平1	10-1
575	329	83	石製	臼玉		径5.5 孔径2.1 厚3.7 重さ0.16g				滑石	10-95溝	平1	10-1
576	329	83	石製	有孔円盤		径1.8 幅1.2 厚0.4	1孔残			滑石	10-95溝	平1	10-1
577	329	83	石製	有孔円盤		径3.0 幅1.2 厚0.5	1孔残			滑石	10-95溝	平1	10-1
578	329	83	石製	刻形		径4.6 幅1.4 厚0.3 孔径0.3 重さ4.01g				滑石	10-95溝	平1	10-1
579	329	83	石製	勾玉		径2.8 幅1.4 厚0.3 孔径0.3 重さ2.02g				滑石	10-95溝	平1	10-1
580	329		須恵器	杯蓋	TK10	口径13.1(1/9)	外面:回転ヘラズリ、自然釉付着	N5/ 灰		17-1溝	平1	17-3	
581	329		須恵器	杯	TK10	口径12.6 受部径15.6(1/4)	外面:回転ヘラズリ(左)	N5/ 灰		17-1溝	平1	17-3	
582	329		土師器	鉢	6世紀か	口径8~8.4(1/2) 器高5.1	外面:ナデ 内面:ユビオサエナデ	7.5YR7/3 にぶい橙		17-1溝	平1	17-3	
583	329		須恵器	壺	不明	口径19.0(1/4)	外面:口縁部刻目、自然釉付着 内面:自然釉付着	N5/ 灰		17-8溝	平1	17-2	
584	329		須恵器	杯蓋	MT15	口径15.3 受部径17.4(1/6)		N6/ 灰		7-150溝	平3	7-2	
585	329		須恵器	杯蓋	MT15	口径15.0(1/3) 器高4.4	外面:回転ヘラズリ(左) 内面:当て具痕	10YR5/1 褐灰		19-2溝	平1	19-1	
586	329		須恵器	杯蓋	TK43	口径14.0(1/12)	外面:回転ヘラズリ	N6/ 灰		19-2溝	平1	19-1	
587	329		須恵器	杯	TK47	口径10.6(1/3)	外面:回転ヘラズリ	5YR7/1 明褐灰	セット焼	19-1土坑	平1	19-1	
588	329		須恵器	杯	TK47	口径13.9(1/5) 器高4.7	外面:回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰		19-1土坑	平1	19-1	
589	329		須恵器	杯	TK10	口径12.2(1/4)	外面:回転ヘラズリ	N5/ 灰		19-1土坑	平1	19-1	
590	329		須恵器	杯	TK10	受部径15.3		N6/ 灰		19-2溝	平1	19-1	
591	329		須恵器	高杯	TK23(KM1)	脚部径9.0(1/4)	外面:方形スカシ4方向	N5/ 灰		19-1土坑	平1	19-1	
592	329	72	須恵器	壺	6世紀後半	口径7.9 器高9.0 体部ほぼ完	外面:回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰		19-1土坑	平1	19-1	
593	329		須恵器	壺	6世紀後半以降	口径18.0(1/4)	外面:平行タタキ後カキメ 内面:同心円状当て具痕	N5/ 灰		19-2溝	平1	19-1	
594	329		須恵器	壺	6世紀後半	口径24.0(1/6)		N6/ 灰		19-1土坑	平1	19-1	
595	329	72	須恵器	器台	5世紀後半	脚部径11.0	外面:凸線文1、平行タタキ後回転ヘラズリ?、波状文(8条)3段、凸線文1、方形スカシ5方向2段	N5/ 灰		19-1土坑	平1	19-1	
596	329		土師器	壺	6世紀	口径10.6 頸部1/4	外面:ハケメ(8条/cm)	7.5YR7/6 橙		19-1土坑	平1	19-1	
597	329	72	土師器	壺		脚部破片	外面:ハケメ?	7.5YR6/6 橙		19-2溝	平1	19-1	
598	329		須恵器	杯蓋	TK47	口径11.8	外面:回転ヘラズリ	N6/ 灰		10-90落ち込み	平1	10-1	
599	329		須恵器	高杯蓋	TK208(OM46)	つまみ径3.1(完)	外面:回転ヘラズリ(左)	10YR6/1 褐灰		10-90落ち込み	平1	10-1	
600	329	72	土師器	製塩土器	5世紀	口径3.9(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	N7/ 灰白		10-90落ち込み	平1	10-1	
601	329		土師器	輪郭口		破片	外面:火ぶくれ、灰色に変色 内面:火ぶくれ、灰色に変色	5P85/1 灰		10-90落ち込み	平1	10-1	
602	330		須恵器	杯蓋	TK73	口径12.4(1/5) 器高4.5	外面:ヘラズリ後ナデ	5Y6/1 灰		3層	平1	10-1	
603	330		須恵器	杯蓋	TK73	口径13.0(1/5) 器高3.3	外面:回転ヘラズリ	5Y6/1 灰		3層	平1	10-1	
604	330	84	石製	子持勾玉		径6.4 幅3.6 厚2.1 孔径0.4 重さ49.0g	両側から穿孔1			滑石	4層	谷1	10-1
605	330	84	石製	紡錘車		径3.4 厚1.6 孔径0.6 重さ18.12g	上面・側面・下面に鋸歯文刻線、			滑石	4層	谷1	10-1
606	330		須恵器	壺	TK216以前	口径12.2(1/14)	外面:波状文(14条)、凸線文1、波状文(14条)	N7/ 灰白		3層	平1	10-3	
607	330		世系土器	壺		破片	外面:格子状タタキ、ナデ、スス付着 内面:ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	敷賀	谷の肩部	平1	17-1	
608	330		須恵器	無蓋高杯	TK208以前	口径11.2(1/8以下)	外面:板状把手1、波状文(3条?)、凸線文4 内面:自然釉付着	N6/ 灰		3-1層	平1	17-3	
609	330		土師器	ミニチュア土器		口径6.2(1/3) 器高4.2	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ、工具痕?	10YR6/3 にぶい黄橙		3-1層	平1	17-3	
610	330		土師器	鉢	6世紀か	口径10.2(1/4)	外面:ユビオサエナデ 内面:ユビオサエナデ	7.5YR7/4 にぶい橙		3-3層	平1	17-3	
611	330		須恵器	壺	6世紀後半	口径12.2(9/10)	外面:ヘラズリ、平行タタキ後カキメ 内面:同心円状当て具痕	N5/ 灰		4層	平1	17-3	
612	330		土師器	鉢	5世紀後半	口径11.4~12.0(3/4) 器高4.7	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/3 にぶい橙		4層	平1	17-3	
613	330		土師器	小型壺	布留IV~Vか	口径12.0(1/4)		7.5YR7/4 にぶい橙		4層	平1	17-3	
614	330		土師器	壺	6世紀か	口径11.0(1/4弱)	外面:ハケメ(7条/cm) 内面:ハケメ、板ナデ	7.5YR6/3 にぶい橙		4層	平1	17-3	
615	330		土師器	壺	布留IV~Vか	口径13.3(1/4強)	外面:摩滅 内面:ヘラズリ?	5YR6/4 にぶい橙		4-1層	平1	20-1	
616	330		須恵器	杯	TK23	口径10.1 器高5.0 受部径1/4	外面:回転ヘラズリ(右)	N5/ 灰		4-2層	平1	20-1	
617													

図番号	押出番号	図版番号	種別	器形	時期	法量(単位cm、白玉はmm) 〇/△は残存率	調整(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	遺構種類	区域	調査区名
632	331		土師器	高杯	布留IV	径13.8(1/4弱)	外面:摩滅 内面:ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙		竪穴建物3	平3	25-1
633	331		土師器	壺	5世紀か	口径14.0 頸部径12(1/3)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶい黄橙		竪穴建物3	平3	25-1
634	331		土師器	小型丸底壺	布留IV~V	頸部径5.6 最大径11.1(1/3)	外面:摩滅、細かいハケメ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		25-58土坑(竪穴3)	平3	25-1
635	331		土師器	複合口縁壺	布留IIIか	口径12.0(1/8)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/3 にぶい黄橙		25-58土坑(竪穴3)	平3	25-1
636	331		土師器	壺	布留前半	口径14.0(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR5/4 にぶい赤褐		25-58土坑(竪穴3)	平3	25-1
637	331	83	石製品	白玉		径3.4 孔径1.8 厚2.1 重さ0.03g	側面:上下両面から加工		滑石	竪穴建物3	平3	25-1
638	331	83	石製品	白玉		径3.6 孔径1.7 厚2.1 重さ0.03g	側面:上下両面から加工		滑石	竪穴建物3	平3	25-1
639	331	83	石製品	白玉		径3.7 孔径1.8 厚1.7 重さ0.02g			滑石	竪穴建物3	平3	25-1
640	331	83	石製品	白玉		径3.8 孔径1.6 厚2.1 重さ0.04g	側面:上下両面から加工		滑石	竪穴建物3	平3	25-1
641	331	83	石製品	白玉		径3.9 孔径1.6 厚1.8 重さ0.03g	下半部欠損		滑石	竪穴建物3	平3	25-1
642	331	83	石製品	白玉		径3.9 孔径1.6 厚1.7 重さ0.03g	側面:上下両面から加工		滑石	竪穴建物3	平3	25-1
643	331	83	石製品	白玉		径4.0 孔径1.5 厚3.5 重さ0.09g			滑石	竪穴建物3	平3	25-1
644	331	83	石製品	白玉		径4.1 孔径1.8 厚2.4 重さ0.06g	側面:上下両面から加工		滑石	竪穴建物3	平3	25-1
645	331	83	石製品	白玉		径4.1 孔径1.7 厚2.0 重さ0.05g	側面:上下両面から加工		滑石	竪穴建物3	平3	25-1
646	331	83	石製品	白玉		径4.3 孔径1.6 厚3.4 重さ0.08g			滑石	竪穴建物3	平3	25-1
647	331	83	石製品	白玉		径推5.0 孔径推2.0 厚1.6 重さ0.02g 2/3欠損			滑石	竪穴建物3	平3	25-1
648	331	83	石製品	白玉		径5.0 孔径2.1 厚2.3 重さ0.08g			滑石	竪穴建物3	平3	25-1
649	331	83	石製品	白玉		径5.1 孔径2.1 厚2.6 重さ0.07g			滑石	竪穴建物3	平3	25-1
650	331	83	石製品	白玉		径6.0 孔径2.0 厚4.0 重さ0.2g			滑石	竪穴建物3	平3	25-1
651	331	86	石製品	石鏡		長0.8 幅1.0 厚0.3 重さ0.2g			凹蓋式	竪穴建物3	平3	25-1
652	331	73	須恵器	杯蓋	TK208	口径12.3(3/4) 器高4.2	外面:回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰		竪穴建物16	平3	11-2
653	331		須恵器	杯蓋	TK208(ON46)	口径13.2(1/4) 器高4.4	外面:回転ヘラズリ(左)	N6/ 灰		竪穴建物16	平3	11-2
654	331		須恵器	杯蓋	TK208	口径12.8(1/2) 器高4.9	外面:回転ヘラズリ(左)	N5/ 灰		竪穴建物16	平3	11-2
655	331		須恵器	杯蓋	TK208	口径12.8(1/3) 器高4.9	外面:回転ヘラズリ(左)	N6/ 灰		竪穴建物16	平3	11-2
656	331		土師器	鉢	5世紀中頃か	頸部径14.0(1/6)	外面:ナデ? 内面:ナデ?	7.5YR7/4 にぶい黄橙		竪穴建物16	平3	11-2
657	331		土師器	壺	5~6世紀	口径21.7(1/6)	外面:ハケメ(8条/cm) 内面:ハケメ、ユビオサエナデ	2.5Y7/2 灰黄		竪穴建物16	平3	11-2
658	331	73	土師器	製塩土器	5世紀	最大径3.5(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	5Y7/1 灰白		11-75柱穴(竪穴16)	平3	11-2
659	331	73	土師器	製塩土器	5世紀	最大径5.2(1/4)	外面:摩滅 内面:ユビナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		丸底1b式 竪穴建物16	平3	11-2
660	331		須恵器	壺	5世紀後半	口径12.4(1/11)	外面:凸線文2、波状文(5条)	N6/ 灰		11-73土坑(竪穴16)	平3	11-2
661	331		須恵器	鉢	TK216	口径6.4(1/8以下)	外面:凸線文1	N7/ 灰白		竪穴建物17	平3	11-2
662	331	74	土師器	小型丸底壺	布留IV~V	口径9.1(1/2) 器高8.8	外面:タテハケメ後ヨコナデ、ハケメ(8条/cm) 内面:ハケメ、ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙		竪穴建物17	平3	11-2
663	331	74	土師器	小型丸底壺	布留IV~V	口径7.6(1/4) 最大径8.8	外面:ハケメ(9条/cm)、ヘラズリ 内面:ユビオサエナデ	7.5YR6/3 にぶい黄橙		竪穴建物17	平3	11-2
664	331		土師器	小型丸底壺	布留IV~Vか	口径7.2 最大径7.5(3/5) 器高6.9	外面:ハケメ、ナデ 内面:ユビオサエナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		竪穴建物17	平3	11-2
665	331		土師器	高杯	布留IV	脚柱基部径3.0(完)	外面:ナデ、線刻? 内面:ハケメ	7.5YR7/4 にぶい黄橙		11-147柱穴(竪穴17)	平3	11-2
666	331		土師器	高杯	5世紀後半か	口径15.4(1/4)	外面:ハケメ(6+α条/cm)後ナデ 内面:ハケメ、ナデ	7.5YR7/3 にぶい黄橙		竪穴建物17	平3	11-2
667	331		土師器	高杯	布留Vか	脚柱基部径3.0(完)	外面:細かいタテハラミガキ 内面:ヘラズリ	7.5YR6/4 にぶい黄橙		竪穴建物17	平3	11-2
668	331		土師器	複合口縁壺	布留IIIか	口径22.2(1/6弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/2 にぶい黄橙		11-74溝(竪穴17外周溝)	平3	11-2
669	331	88	金属製品	曲刃鎌		長11.9 幅2.6 厚0.4				鉄製 竪穴建物17	平3	11-2
670	331		須恵器	杯蓋	TK47	口径12.0(1/8)		N6/ 灰		竪穴建物18	平3	11-2
671	331		土師器	甔	6世紀か	口径29.8(若干のみ)	外面:把手1 残存、ハケメ(9条/cm) 内面:ハケメ(8条/cm)	10YR6/3 にぶい黄橙		竪穴建物18	平3	11-2
672	331		土師器	鉢	6世紀か	体部径24.0(1/4)	外面:把手1 残存、ハケメ、ユビオサエナデ 内面:ハケメ、ナデ	7.5YR6/6 橙		竪穴建物18	平3	11-2
673	331		土師器	鉢	5世紀か	口径9.0(1/5) 器高6.4	外面:摩滅 内面:ユビナデ、爪痕あり	7.5YR7/3 にぶい黄橙		竪穴建物30	平3	6-5
674	331		土師器	鉢	5世紀か	口径8.4(1/4)	外面:摩滅、スス付着 内面:摩滅	10YR6/2 灰黄褐		竪穴建物30	平3	6-5
675	332		須恵器	杯蓋	TK73	口径12.4 口縁~天井部1/5	外面:平行タテ後ヨコナデ、ヘラズリノ後ナデ	10R4/1 暗赤褐		竪穴建物31	平3	23-2
676	332		須恵器	杯蓋	TK208	口径12.0 器高4.8	外面:回転ヘラズリ(左)	N5/ 灰		竪穴建物31	平3	23-2
677	332		須恵器	杯蓋	TK208(ON46)	口径12.1		N5/ 灰		竪穴建物31	平3	23-2
678	332		須恵器	杯	TK208	口径11.2 器高5.0 3/5	外面:回転ヘラズリ(右)	N5/ 灰		竪穴建物31	平3	23-2
679	332		須恵器	高杯	5世紀後半	脚柱基部径4.6(完)	外面:円形スカシ4方向、回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰		竪穴建物31	平3	23-2
680	332		須恵器	高杯	5世紀後半	脚柱基部径9.4(1/5)		N6/ 灰		竪穴建物31	平3	23-2
681	332		須恵器	高杯	TK208	脚柱基部径9.0(1/6)	外面:スカシ2方向、カキメ	N5/ 灰		竪穴建物31	平3	23-2
682	332		土師器	鉢		把手破片	外面:ハケメ、ユビオサエナデ 内面:摩滅	10YR6/3 にぶい黄橙		竪穴建物31	平3	23-2
683	332		土師器	製塩土器	5世紀	口径3.4(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/3 にぶい黄橙		丸底1b式 竪穴建物31	平3	23-2
684	332	85	石製品	敲石		長8.4 幅6.3 厚5.9 重さ474.51g				竪穴建物31	平3	23-2
685	332		須恵器	高杯	TK23	口径17.4 杯部1/8	外面:凸線文2、波状文(摩滅)、回転ヘラズリ	10Y4/1 灰		11-109柱穴(竪穴32)	平3	11-2
686	332	85	石製品	敲石		長10.2 幅7.1 厚5.7 重さ588g	表面剥離多い		中粒黒雲母花崗岩	25-55ピット	平3	25-1
687	332		須恵器	壺	TK73~TK216	頸部径12.0	外面:凸線文3、波状文(13条、16条)2帯 内面:ユビナデ	5Y5/1 灰		1-74井戸	平3	1-1
688	332		土師器	小型丸底壺	布留IV~V	頸部径5.4(1/4)	外面:ナデ 内面:ナデ	2.5Y6/2 灰黄		1-74井戸	平3	1-1
689	332		土師器	高杯	布留III	口径12.7(1/8)	外面:摩滅 内面:ハケメ?	10YR7/2 にぶい黄橙		1-74井戸	平3	1-1
690	332		土師器	高杯	布留IVか	脚柱基部径3.0(完)	外面:ナデ、ユビオサエ 内面:ヘラズリ	10YR6/2 灰黄褐		1-74井戸	平3	1-1
691	332		土師器	布留式壺	布留II~III	口径17.8(1/7)	外面:スス一部付着	7.5YR6/2 灰褐		1-74井戸	平3	1-1
692	332	89	木製品	木鏝		長16.4 幅7.6 厚6.6	紐ずれ痕なし		アカガシ重層	1-74井戸	平3	1-1
693	332	90	木製品	不明		長9.2 幅3.8 厚1.8	中央部突出、突出部上端孔になるのか		アカガシ重層	1-74井戸	平3	1-1
694	332	91	木製品	不明		長24.8 幅6.2 厚5.3	中央部突出		アカガシ重層	1-74井戸	平3	1-1
695	332	90	木製品	不明		長16.5 幅10.5 厚2.5	左側面上方加工痕、右側面上方加工痕?		クリ	1-74井戸	平3	1-1
696	333	89	木製品	不明		長29.0 幅10.4 厚2.3	表:右側面孔状に加工、下半部表面加工 裏:左側面下半加工、下端部の加工は再利用時		スギ	1-74井戸	平3	1-1
697	333	90	木製品	不明		長39.7 幅7.8 厚2.7	表:右側面形状に窪ませ加工		アカガシ重層	1-74井戸	平3	1-1
698	333	90	木製品	不明		長42.0 幅9.8 厚3.0	表:右側面・左側面形状に窪ませ加工、下端部加工は再利用時		アカガシ重層	1-74井戸	平3	1-1
699	333	90	木製品	不明		長42.3 幅9.6 厚3.3	表:右側面形状に窪ませ加工、左側面も同じように加工か、下端部の加工は再利用時		アカガシ重層	1-74井戸	平3	1-1
700	333	91	木製品	不明		長60.4 幅12.2 厚2.6			スギ	1-74井戸	平3	1-1
701	333	89	木製品	不明		長102.8 幅10.7 厚3.3	右側面下端加工		クリ	1-74井戸	平3	1-1
702	333	89	木製品	不明		長96.5 幅15.5 厚4.5	左側面下方加工痕、下端部加工、上方両側面加工痕?		クリ	1-74井戸	平3	1-1
703	333	89	木製品	不明		長85.5 幅13.6 厚3.6	左側面上方加工痕		クリ	1-74井戸	平3	1-1
704	333	91	木製品	不明		長64.8 幅11.3 厚2.5			クリ	1-74井戸	平3	1-1
705	334	91	木製品	井戸枠		長40.0 幅16.0 厚2.9			スギ	1-74井戸	平3	1-1
706	334		木製品	板状		長63.0 幅17.4 厚3.5	709と同一個体		スギ	1-74井戸	平3	1-1
707	334		木製品	板状		長65.8 幅1.5 厚1.7			スギ	1-74井戸	平3	1-1
708	334		木製品	板状		長61.0 幅25.1 厚2.9	下端部加工痕		スギ	1-74井戸	平3	1-1
709	334		木製品	板状		長62.7 幅23.7 厚3.8	706と同一個体、下端部加工痕?		スギ	1-74井戸	平3	1-1
710	334		木製品	板状		長75.1 幅30.5 厚2.7			スギ	1-74井戸	平3	1-1
711	335	90	木製品	扉		長88.0 幅47.5 厚7.2	原輪が残る、門受はあるが門柱は未検出		スギ	1-74井戸	平3	1-1
712	335		須恵器	壺	TK216以前	口縁破片	外面:凸線文1	N4/ 灰		1-44土坑	谷1	1-2
713	335	74	須恵器	壺	TK73以前	口径53.5(1/2) 最大径80.0	外面:凸線文1、ハケメ(10条/cm)、平行タテ後強いナデ消し 内面:ナデ、同心内文状当て具痕後強いナデ消し	5P6/1 青灰		1-63土坑	平3	1-1
714	336		須恵器	壺		口径46(1/5)	外面:凸線文5、波状文(13条)、波状文(9条)	N4/ 灰		1-63土坑	平3	1-1
715	336		土師器	布留式壺	布留II・III	口径15.2 頸部径11.8(1/4)	外面:タテハケメ後ヨコナデ(5条/cm)、一帯スス付着 内面:ヘラズリ	2.5Y6/3 にぶい黄		1-65土坑	平3	1-1
716	336		土師器	壺	布留II~IIIか	口径15(1/6)	外面:ハケメ(摩滅) 内面:ユビオサエナデ	2.5Y7/3 浅黄		1-65土坑	平3	1-1
717	336	74	土師器	小型丸底壺	布留IVか	口径6.8(ほぼ完) 器高7.1	外面:ナデ 内面:ユビオサエナデ	2.5Y7/2 灰黄		1-76土坑	平3	1-1
718	336		土師器	小型丸底壺	布留IVか	頸部径7.2(1/4) 器高11.5	外面:ナデ 内面:ユビオサエ、ヘラズリ	2.5Y7				

図番	押印番号	図番	種別	器形	時期	法量(単位cm、臼玉はmm) ○/○は残存率	調査(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	遺構種類	区域	調査区名	
722	336	91	木製品	不明		長26.4 幅5.7 厚2.1				ヒノキ	1-76土坑	平3 1-1	
723	336		土師器	小型丸底壺	布留IV~V	頸部径6.0(完) 最大径8.8	外面:ナデ、摩滅 内面:ナデ、ユビナデ	10YR7/2 にぶい黄橙			1-73土坑	平3 1-1	
724	336		土師器	甕	布留IV~Vか	口径13.6 (1/4)	外面:ユビオサエ後ナデ 内面:ナデ、ヘラナデ	10YR6/2 灰黄褐			1-73土坑	平3 1-1	
725	336		須恵器	高杯	5世紀後半	脚柱基部径5.4(1/3)	外面:回転ヘラズリ、スカシ3方向	10YR5/1 褐灰			2-8土坑	平3 2-3	
726	336		須恵器	杯蓋	MT15	口径15.4(1/3) 器高5.0	外面:回転ヘラズリ(右)	N5/ 灰			11-86土坑	平3 11-2	
727	336		土師器	高杯	布留IV~Vか	口径14.9(1/2)	外面:摩滅、ナデ 内面:ていねいなナデ、ヘラズリ?	10YR7/3 にぶい黄橙			11-86土坑	平3 11-2	
728	336	74	土師器	鉢	5世紀後半~6世紀前半	口径22.0(1/2)	外面:把手1残存、ハケメ(8条/cm) 内面:ハケメ後ナデ、工具痕	7.5YR6/3 にぶい褐			11-86土坑	平3 11-2	
729	336	75	須恵器	高杯か	TK73	口径10.6 3/10	外面:波状文(5条)、沈線文1、回転ヘラズリ	N6/ 灰			23-64土坑	平3 23-2	
730	336		須恵器	鉢	TK73	最大径12.4 体部2/5	外面:沈線文1、手持ちヘラズリ 内面:ユビオサエ後ヨコナデ	N8/ 灰白 N5/ 灰			23-64土坑	平3 23-2	
731	337		須恵器	杯	TK23	口径10.8 受部径12.8(1/8)	外面:回転ヘラズリ	N6/ 灰			7-85ビット	平3 7-2	
732	337	73	土師器	製塩土器	5世紀	最大径5.0(1/4)	外面:摩滅 内面:ユビオサエナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	丸底1b式		7-110ビット	平3 7-2	
733	337		須恵器	杯	MT15	口径12.4(1/8)		N7/ 灰白			7-128ビット	平3 7-2	
734	337		土師器	甕	6世紀か	口径12.2 頸部径11.0(1/4弱)	外面:ハケメ、剥離、スス一部付着 内面:剥離、ユビオサエナデ	7.5YR5/4 にぶい褐				平3 7-2	
735	337	91	木製品	柱根		長34.7 幅15.8 厚9.1				クリ	7-185ビット	平3 7-2	
736	337		須恵器	杯蓋	TK10	口径14.4(1/5)	外面:回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰			7-312ビット	平3 7-7	
737	337		土師器	甕		破片	外面:把手1、ハケメ 内面:スス一部付着	7.5YR6/6 橙			7-312ビット	平3 7-7	
738	337		土師器	高杯	布留IV~Vか	脚柱基部径2.5(1/2強)	外面:ナデ 内面:ヘラズリ、ナデ	7.5YR6/6 橙			11-79ビット	平3 11-2	
739	337		金属製品	不明		長2.6 幅1.5 厚1.6 (サビ含)				鉄製	11-172ビット	平3 11-2	
740	337		土師器	高杯	布留Iか	口径16.6(1/4)	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/4 にぶい橙			25-37ビット	平3 25-1	
741	337		金属製品	不明		長3.05 幅1.3 厚0.1(サビなし)				鉄製	25-71ビット	平3 25-1	
742	337		土師器	鉢	6世紀か	口径14.2(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR5/3 にぶい赤褐			1-5溝	平3 1-3	
743	337		土師器	小型丸底壺	布留IV~V	口径10.6 最大径15.0(1/3)	外面:摩滅、ハケメ 内面:ユビオサエナデ	5YR6/4 にぶい黄橙			1-56溝	平3 1-2	
744	337		須恵器	無蓋高杯	5世紀後半	口径13.0(1/8)	外面:回転ヘラズリ	N5/ 灰			1-57溝	平3 1-2	
745	337		土師器	高杯	布留IIIか	脚柱基部径3.6(完)	外面:ナデ、ヘラズリ、ハケメ後ナデ 内面:ヘラズリ	5YR6/4 にぶい橙			1-57溝	平3 1-2	
746	337		土師器	布留式壺	布留IIIか	口径12.4(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/2 明褐灰			1-57溝	平3 1-2	
747	337		須恵器	杯	TK208	口径13.9(1/8)		N5/ 灰			1-61溝	平3 1-1	
748	337		須恵器	杯	TK208	最大径11.0	外面:沈線文2間波状文(6条)、内形スカシ1、ヘラズリ後ナデ、ヘラ記号	N5/ 灰			1-61溝	平3 1-1	
749	337		須恵器	甕	6世紀後半	頸部径9.8 最大径19.3	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕後ナデ	N5/ 灰			1-61溝	平3 1-1	
750	337		土師器	高杯	布留IV~Vか	脚柱基部径3.6(完)	外面:ナデ 内面:ヘラズリ後ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙			1-61溝	平3 1-1	
751	337		土師器	甕	布留IV~V	口径16.0(1/4)	外面:タテハケメ(4条/cm)後ヨコナデ、ハケメ(4~5条/cm)、一部スス付着 内面:ハケメ後ナデ、ユビナデ	7.5YR6/3 にぶい褐			1-61溝	平3 1-1	
752	337		土師器	甕	布留IV~Vか	最大径24.6 底部1/4	外面:ハケメ(7条・6条/cm) 内面:ヘラズリ	10YR7/3 にぶい黄橙			1-61溝	平3 1-1	
753	337		土師器	甕	5~6世紀	体部中径径17.0(1/6)	外面:ハケメ、蒸気孔2残 内面:ヘラズリ	7.5YR7/3 にぶい橙			1-61溝	平3 1-1	
754	337		土師器	小型丸底壺	布留IV~V	口径8.4 腹部最大径8.0(1/6)	外面:摩滅 内面:ハケメ後ナデ、摩滅	10YR7/2 にぶい黄橙			1-62溝	平3 1-1	
755	337		土師器	複合口縁壺	布留IIIか	口径33.0(1/6弱)	外面:ヘラミガキ、竹文 内面:摩滅	7.5YR6/3 にぶい褐			1-62溝	平3 1-1	
756	337		須恵器	無蓋高杯	TK23	口径16.0(1/8)	外面:波状文1、沈線文(7条) 内面:自然釉付着	N6/ 灰			7-22溝	平3 7-2	
757	337		土師器	高杯	6世紀初か	脚柱基部径9.2(1/4)	外面:摩滅 内面:ヘラズリ	5YR6/4 にぶい橙			7-22溝	平3 7-2	
758	337		土師器	甕	6世紀か	口径11.2(1/4強) 器高13.7	外面:ハケメ、板ナデ、スス付着 内面:ハケメ、ユビオサエナデ	7.5YR6/2 灰褐			7-22溝	平3 7-2	
759	338	74	須恵器	杯	TK216	口径10.4 器高5.1 ほぼ完形	外面:回転ヘラズリ(左)	N6/ 灰			7-27溝	平3 7-3	
760	338		須恵器	杯蓋	MT15	口径11.8(1/4)		N5/ 灰			7-30溝	平3 7-3	
761	338	74	須恵器	杯	TK208	口径11.7(3/4) 器高5.0	外面:回転ヘラズリ	N5/ 灰			7-30溝	平3 7-3	
762	338		須恵器	高杯	TK208(ON46)	脚柱基部径4.2(4/5) 脚部径9.0	外面:カキメ、波状文1	N5/ 灰			7-30溝	平3 7-3	
763	338		土師器	小型丸底壺	布留IIIか	口径6.4(1/4)	外面:摩滅 内面:ユビオサエ	5YR5/2 灰褐			7-30溝	平3 7-3	
764	338		土師器	小型丸底壺	布留IVか	口径10.8(1/4)	外面:摩滅 内面:ユビオサエ	10YR7/3 にぶい黄橙			7-360溝	平3 7-10	
765	338		土師器	高杯	布留IV	口径15.8(1/2弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR6/2 灰黄褐			7-360溝	平3 7-10	
766	338		土師器	甕	布留後半か	口径17.0(1/7)	外面:摩滅 内面:ユビオサエ、ヘラズリ?	10YR6/3 にぶい黄橙			7-360溝	平3 7-10	
767	338		土師器	甕	TK209	口径11.2(2/5)	外面:回転ヘラズリ(右)、自然釉付着	2.5Y7/1 灰白			7-150溝	平3 7-2	
768	338	75	陶質土器?	杯	不明	口径10.6 器高4.3 9/10	外面:ハケメ後回転ナデ、底面回転ヘラズリ後ナデ、ゲタ痕	N5/ 灰			4層	平3 1-2	
769	338		土師器	高杯	5世紀	口径12.6(1/8)	外面:摩滅 内面:接合面、摩滅	7.5YR6/3 にぶい褐			4層	平3 1-2	
770	338		土師器	甕	5世紀	口径12.6(1/4)	外面:ハケメ(7条/cm) 内面:ヘラナデ、ヘラ痕、炭化物付着	10YR6/1 褐灰			4層	平3 1-2	
771	338	75	土師器	器台		凸部上方径8.8 体部1/4	外面:貼付凸部1、方形スカシ 内面:ハケメ(9条/cm)	7.5YR6/3 にぶい褐 突部帯: 10YR7/3 にぶい黄橙	体部と凸部の胎土が違う		4層	平3 1-2	
772	338	75	土製品	紡錘車		径2.8 孔径0.8 高さ2.2 重さ30.4g		7.5YR7/2 明褐灰			4層	平3 1-2	
773	338		須恵器	杯蓋	TK73	口径14.3(1/9)	外面:回転ヘラズリ	N5/ 灰			4-2層	平3 1-1	
774	338	75	土製品	土馬	7世紀	幅3.6 厚4.0 高さ7.0	外面:手綱の表現、焼成前に体部に穿孔、ユビオサエナデ	7.5Y8/1 灰白			4-6層	平3 1-1	
775	338		須恵器	甕	5世紀後半以前	口径19.0(2/3)	外面:波状文1、平行タタキ、自然釉付着	10YR5/1 褐灰			5層	平3 1-1	
776	338		須恵器	高杯	TK23	脚柱基部径8.4(1/10)	外面:三角スカシ3方向、カキメ	2.5Y6/1 黄灰			竪穴建物10	平4 16-1	
777	338		土師器	小型丸底壺	布留IV~V	頸部径8.0(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR6/3 にぶい黄橙			竪穴建物10	平4 16-1	
778	338	76	須恵器	杯蓋	7世紀中頃	口径11.4 器高2.8 ほぼ完形	外面:回転ヘラズリ	2.5Y6/1 黄灰			竪穴建物11	平4 18-1	
779	338	76	須恵器	杯	7世紀中頃	口径10.2(1/2) 器高4.2	外面:底部未調整	5YR6/4 にぶい橙			竪穴建物11(壁溝)	平4 18-1	
780	338		須恵器	杯	7世紀中頃	口径10.3(1/2) 器高4.1	外面:底部未調整	5Y7/1 灰白			竪穴建物11(壁溝)	平4 18-1	
781	338		須恵器	杯	7世紀中頃	口径10.7 器高3.4	外面:ナデ、自然釉付着	10Y5/1 灰			竪穴建物11	平4 18-1	
782	338		須恵器	杯	7世紀中頃	口径13.2		N5/ 灰			竪穴建物11(壁溝)	平4 18-1	
783	338		須恵器	鉢	7世紀中頃	口径13.6(1/5) 器高4.9	外面:カキメ	N5/ 灰			竪穴建物11	平4 18-1	
784	338	76	須恵器	短頸壺	7世紀中頃	口径6.8 底径11.0 器高7.7 完形	外面:底面ヘラズリ後ナデ	N4/ 灰 N5/ 灰			竪穴建物11(壁溝)	平4 18-1	
785	338		須恵器	台付壺	7世紀中頃	高合径9.6(1/4)		N5/ 灰			竪穴建物11	平4 18-1	
786	338		土師器	杯	7世紀後半	口径9.8(1/6)	外面:ナデ 内面:放射状暗文	7.5YR6/2 灰褐			竪穴建物11	平4 18-1	
787	338	76	土師器	杯	7世紀後半	口径10.7 器高2.9 ほぼ完形	外面:ナデ 内面:放射状暗文	5YR6/4 にぶい橙			竪穴建物11	平4 18-1	
788	338		土師器	甕	7世紀末か	口径17.6(1/4弱)	外面:ハケメ(4条/cm)、赤色化 内面:ハケメ(4条/cm)	2.5YR6/2 灰赤			18-462カマド(竪穴1)	平4 18-1	
789	338		土師器	甕	7世紀後半か	口径27.2(1/5)	内面:ハケメ(5条/cm)	5YR6/3 にぶい橙			竪穴建物11	平4 18-1	
790	338		土師器	把手付壺	7世紀後半か	口径25.8(1/4弱)	外面:把手1残、ハケメ(5条/cm)、スス付着 内面:ハケメ(5条/cm)	10YR6/2 灰黄褐			竪穴建物11	平4 18-1	
791	338		土師器	羽釜		頸径28.4(9/10)	外面:ナデ 内面:板ナデ?	7.5YR5/4 にぶい褐			生駒山西麓産	竪穴建物11	平4 18-1
792	339		須恵器	杯蓋	7世紀中頃	口径11.4		N7/ 灰白			18-253土坑(竪穴11)	平4 18-1	
793	339		土師器	皿	7世紀後半	口径18(1/11)	外面:ユビオサエナデ 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶい橙			18-253土坑(竪穴11)	平4 18-1	
794	339		須恵器	甕	6世紀後半	頸部径22.9(完)	外面:波状文(2~3条)、沈線文1、平行タタキ、自然釉付着 内面:同心円状当て具痕	N6/ 灰			18-462カマド(竪穴1)	平4 18-1	
795	339	83	石製品	臼玉		径4.5 孔径1.9 厚2.3 重さ0.07g				滑石	竪穴建物11	平4 18-1	
796	339	83	石製品	臼玉		径5.8 孔径2.3 厚4.1 重さ0.2g				滑石	竪穴建物11(内マド)	平4 18-1	
797	339	88	金属製品	曲刃鎌		長19.3 幅3.6 厚0.6				鉄製	竪穴建物11	平4 18-1	
798	339		須恵器	杯蓋	MT85	口径13.4(1/8)		2.5Y6/1 黄灰			竪穴建物12	平4 18-1	
799	339		須恵器	杯蓋	7世紀中頃	口径11.8 径径7.0(1/4)	外面:回転ヘラズリ(左)、自然釉付着	N6/ 灰			竪穴建物12	平4 18-1	
800	339		須恵器	杯	7世紀中頃	口径8.1(2/3) 器高2.6	外面:ヘラズリ後ナデ	N6/ 灰			竪穴建物12	平4 18-1	
801	339	76	須恵器	杯	7世紀中頃	口径8.7 器高3.6 3/4	外面:回転ヘラズリ	N6/ 灰			竪穴建物12	平4 18-1	
802	339	76	須恵器	杯	7世紀中頃	口径9.5(2/3) 器高4.3		N4/ 灰			竪穴建物12	平4 18-1	
803	339		須恵器	鉢	不明	口径20.2(1/12)		N7/ 灰白			竪穴建物12	平4 18-1	
804	339	76	土師器	鉢	7世紀初頃	口径13.0(3/4) 器高6.1	外面:ヘラミガキ、ヘラズリ 内面:放射状暗文	7.5YR6/3 にぶい褐			竪穴建物12	平4 18-1	
805	339		土師器	甕	7世紀後半か	口径19.0(1/7)	外面:ハケメ 内面:ナデ	2.5YR6/2 灰赤			竪穴建物12	平4 18-1	
806	340		須恵器	杯	TK10	口径13.0(1/5)	外面:回転ヘラズリ、ヘラ記号?	N6/ 灰			14-69柱穴(掘立24)	平4 14-1	
807	340		須恵器	杯	8世紀前半	口縁破片		10Y7/1 灰白</					

図番号	押出番号	図版番号	種別	器形	時期	法量(単位cm、白玉はmm) ○/○は残存率	調整(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	溝槽種類	区域	調査区名
812	340		須惠器	無蓋高杯	7世紀中頃	口径10.2(1/4)	外面:回転ヘラズリ、滑着	N6/ 灰		18-105柱穴(掘立39)	平4	18-1
813	340		須惠器	高杯	6世紀後半以降	脚柱基部径4.2		2.5Y7/1 灰白		18-105柱穴(掘立39)	平4	18-1
814	340		須惠器	無蓋高杯	5世紀後半	口径26.8(1/10)	外面:沈線文2と1間列点文、スカシあり、回転ヘラズリ(右)内面:杯底部不定方向ナデ	N5/ 灰		18-190柱穴(掘立39)	平4	18-1
815	340		金属製品	鉄釘		長4.65 幅0.7 厚0.7(サビなし)				18-63柱穴(掘立41)	平4	18-1
816	340	76	須惠器	杯蓋	TK73	口径11.8 最大径11.0(1/2)	外面:回転ヘラズリ(左)	N5/ 灰		13-19土坑	平4	13-1
817	340	76	須惠器	杯	TK216	口径9.6 器高4.9 受部1/5	外面:波状文(6条)、回転ヘラズリ(右)	10YR5/1 褐灰		13-19土坑	平4	13-1
818	340		土師器	高杯	布留後半	脚部径9.8(若干のみ)	外面:摩滅 内面:摩滅	10R6/4 にぶい黄橙		13-19土坑	平4	13-1
819	340		土師器	盥	5世紀前半	口径29.4(1/4)	外面:ハケメ、摩滅 内面:摩滅	5YR6/4 にぶい橙		13-19土坑	平4	13-1
820	340		石製品	砥石		長6.0 幅10.5 厚4.7	2面使用		砂岩	13-20土坑	平4	13-1
821	340		須惠器	高杯蓋	MT85	口径15.6(1/3) 器高5.8	外面:回転ヘラズリ(左)	N7/ 灰白		14-42土坑	平4	14-1
822	340		須惠器	器台	6世紀後半	口径42.0 体部1/6	外面:カキメ、平行タキ後カキメ 内面:同心円状当て具痕	5P6/1 紫灰		14-42土坑	平4	14-1
823	340		須惠器	杯	7世紀中頃	口径10.2(1/4)		N6/ 灰		14-78土坑	平4	14-1
824	340		須惠器	杯蓋	TK73	口径13.5(1/2) 器高3.7	外面:ヘラズリ後ナデ	N6/ 灰		14-82土坑	平4	14-1
825	340		土師器	高杯	5世紀前半	口径13.4(1/4) 脚部径9.4 器高10.6	外面:ハケメ、ヘラナデ 内面:ハケメ、シボリメ	2.5YR6/6 橙		14-82土坑	平4	14-1
826	340		弥生土器	弥生I		底径9.8(完)	外面:摩滅、底面ユビオサエナデ 内面:摩滅	10YR6/2 灰黄褐		14-82土坑	平4	14-1
827	340		土師器	高杯	6世紀初め	脚部径8.8(1/8以下)	外面:ナデ 内面:ヘラナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙		14-85土坑	平4	14-1
828	340		土師器	盥	6世紀か	口径13.2 器高10.3 体部1/2	外面:ハケメ、スス付着 内面:ナデ、板ナデ、工具痕?	10YR6/2 灰黄褐		14-85土坑	平4	14-1
829	340		土師器	盥	5世紀か	口径15.9(1/9) 最大径19.4	外面:ハケメ(4~5条/cm)、スス付着 内面:ヘラズリ	10YR7/2 にぶい黄橙		14-85土坑	平4	14-1
830	340		須惠器	杯	TK47	口径11.8 器高4.8 受部1/3	外面:回転ヘラズリ(右)、滑着、自然釉付着	N6/ 灰		16-9土坑	平4	16-1
831	341		須惠器	杯蓋	TK43	口径14.0(1/10)	外面:回転ヘラズリ	N6/ 灰		16-9土坑	平4	16-2
832	341		須惠器	杯蓋	TK43	口径14.8 器高4.2	外面:回転ヘラズリ(右) 内面:当て具痕	N6/ 灰		16-9土坑	平4	16-2
833	341	76	須惠器	高杯	TK43(MT85)	口径15.6(4/5)	外面:回転ヘラズリ(右) 内面:当て具痕	N6/ 灰		16-9土坑	平4	16-2
834	341		須惠器	盥	6世紀後半	口径18.8(1/4)		N5/ 灰		16-9土坑	平4	16-2
835	341		須惠器	器台	6世紀後半	脚部径25.6(1/8)	外面:カキメ後波状文(10条以上)、沈線文2、カキメ	N6/ 灰		16-9土坑	平4	16-2
836	341		土師器	盥	6世紀か	口径11.1(1/4)	外面:摩滅、スス付着 内面:摩滅、スス付着	7.5YR5/3 にぶい橙	生駒山西麓産?	16-9土坑	平4	16-2
837	341		土師器	盥		焚き口破片	外面:ハケメ 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶい橙		16-9土坑	平4	16-2
838	341		須惠器	杯	TK43(MT85)	口径11.2(1/6)	外面:自然釉付着	N5/ 灰		18-100土坑	平4	18-1
839	341		須惠器	杯蓋	TK43(MT85)	口径13.8(1/4) 器高4.0	外面:回転ヘラズリ(右)	7.5Y5/1 灰		18-132土坑	平4	18-1
840	341		弥生土器	無類弥生II-1か		口径7.9(1/8) 底径5.6	外面:直線文(6条)5帯、ハケメ、底面ナデ 内面:一部ハケメ	10YR6/2 灰黄褐		18-132土坑	平4	18-1
841	341		須惠器	盥	TK216以前	口径19.5(1/10)	外面:凸線文1、自然釉付着	5P6/1 青灰		18-148土坑	平4	18-1
842	341		土師器	盥	6世紀か	口径14.9(9/10)	外面:ハケメ(3条/cm)、スス付着 内面:口縁部スス付着	7.5YR6/4 にぶい橙		18-424土坑	平4	18-2
843	341	77	土師器	製塩土器	5世紀	口径3.4(1/10)	外面:赤色化 内面:ハケメ、ハケナデ	7.5YR6/2 褐橙	丸底1 b 式	12-36ピット	平4	12-2
844	341	77	土師器	製塩土器	5世紀	口径4.6(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙	丸底1 b 式	12-36ピット	平4	12-2
845	341		土師器	製塩土器	5世紀	最大径5.6(1/4)	外面:タタキ、ナデ 内面:ユビオサエナデ	2.5YR2/2 灰白	丸底1 b 式	14-90ピット	平4	14-1
846	341		土師器	鉢	6世紀か	口径14.3(1/10)	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ?	7.5YR6/2 灰褐		14-102ピット	平4	14-1
847	341	76	土師器	鉢	5世紀か	口径9.9(1/2) 底径7.6 器高4.2	外面:ヘラズリ、底面板ナデ? 内面:ナデ	2.5YR6/6 橙		14-111ピット	平4	14-1
848	341		須惠器	高杯	TK208	口径10.1 最大径12.0 杯部1/4	外面:回転ヘラズリ(右)、スカシ方向	10YR6/1 褐灰		14-172ピット	平4	14-1
849	341		土師器	製塩土器	5世紀	口径13.4(1/6)	外面:摩滅、赤色化 内面:板ナデ?板ナデ、赤色化	5YR5/2 灰褐	環形	14-214ピット	平4	14-1
850	341		須惠器	杯蓋	TK209	口径13.4(1/8) 器高3.2	外面:回転ヘラズリ(右)	N6/ 灰		18-23ピット	平4	18-1
851	341		土師器	盥	6世紀か	口径27.0(1/8)	外面:ハケメ(5条/cm)、スス付着 内面:ハケメ、摩滅	7.5YR6/3 にぶい橙		18-106ピット	平4	18-1
852	341		須惠器	直口壺	6世紀後半	口径9.0(1/10)	外面:自然釉付着	N7/ 灰白		18-133ピット	平4	18-1
853	341		須惠器	盥蓋	MT85	口径13.4(1/8)		5YR6/1 褐灰		18-194ピット	平4	18-1
854	341	76	須惠器	杯蓋	MT15	口径13.2(4/5) 器高4.6	外面:回転ヘラズリ(左)、中央未調整	10YR5/1 褐灰		18-284ピット	平4	18-1
855	341	91	木製品	柱根		長22.5 幅9.1 厚6.5			スギ	18-247ピット	平4	18-1
856	341		土師器	盥or鉢	6世紀か	口径20.0(1/3)	外面:ハケメ 内面:ハケメ後ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙		12-5 b 溝	平4	12-1
857	341		須惠器	杯	TK216	口径12.2 受部径15.0 1/4	外面:回転ヘラズリ(摩滅)	N6/ 灰		13-1溝	平4	13-1
858	341		須惠器	杯	MT15	口径:11.4 受部径14.1(1/6)		5P85/1 青灰		13-1溝	平4	13-1
859	341		須惠器	杯	8世紀前半	底径9.0(1/3)	外面:底面ナデ	2.5Y8/1 灰白		13-6溝	平4	13-1
860	341		須惠器	杯蓋	TK10	口径12.4(1/4)	外面:回転ヘラズリ(右)	N5/ 灰		13-10溝	平4	13-1
861	341	76	須惠器	杯	TK10	口径11.8 器高4.4 11/12	外面:回転ヘラズリ(右)、自然釉付着 内面:当て具痕	5Y6/1 灰		13-10溝	平4	13-1
862	341	76	須惠器	杯	TK10	口径13.4 器高4.2	外面:回転ヘラズリ(右) 内面:当て具痕	N6/ 灰		13-10溝	平4	13-1
863	341	76	須惠器	高杯蓋	TK10	口径15.9 器高6.0 ほぼ完形	外面:回転ヘラズリ(右)	2.5G7/1 明オリブ灰		13-10溝	平4	13-1
864	342		須惠器	鉢	TK10	最大径9.9(完)	外面:カキメ、回転ヘラズリ(左)、円形スカシ	5P86/1 青灰		13-10溝	平4	13-1
865	342	76	須惠器	提瓶	6世紀後半	最大径14.0 頸部径4.0(1/2)	外面:把手2、回転ヘラズリ、自然釉付着、滑着	2.5Y6/1 黄灰		13-10溝	平4	13-1
866	342		須惠器	提瓶	6世紀後半	最大径20.8	外面:カキメ、回転ヘラズリ 内面:ユビオサエ	N5/ 灰		13-10溝	平4	13-1
867	342		土師器	小型丸底壺	布留後半	最大径7.8(1/2弱)	外面:摩滅 内面:ユビオサエナデ?	5YR6/6 橙		13-10溝	平4	13-1
868	342	77	土師器	長頸壺	5世紀後半~6世紀	口径19.0 器高33.7 頸部2/3	外面:ハケメ(4条/cm) 内面:ハケメ(5条/cm)、摩滅	10YR5/3 にぶい黄褐		13-10溝	平4	13-1
869	342		土師器	盥	6世紀か	最大径16.4(1/2弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/3 にぶい橙		13-10溝	平4	13-1
870	342		土製品	難珉口		破片	外面:火ぶくれ、灰色に変色 内面:火ぶくれ、灰色に変色	5Y6/1 灰		13-10溝	平4	13-1
871	342	83	石製品	白玉		径5.9 孔径2.6 厚2.2 重さ0.08g			滑石	13-10溝	平4	13-1
872	342		土師器	杯	6世紀か	口径10.3(1/5)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙		14-7溝	平4	14-1
873	342		須惠器	杯蓋	8世紀前半	口径15.8(1/12)		N6/ 灰		14-16溝	平4	14-1
874	342	77	須惠器	杯蓋	MT85	口径14.2(2/3) 器高4.0	外面:稜線を意識した沈線、回転ヘラズリ(左)	N6/ 灰		14-88溝	平4	14-1
875	342		須惠器	杯	MT85	口径12.9 器高3.7 受部1/4	外面:回転ヘラズリ(左)、格子タタキ	N6/ 灰		14-88溝	平4	14-1
876	342		須惠器	短頸壺	5世紀後半	口径8.5 最大径10(1/4)	外面:列点文、波状文?、自然釉付着 内面:自然釉付着	5G3/1 暗オリブ灰		14-88溝	平4	14-1
877	342		須惠器	盥	6世紀後半	口径9.8(1/3) 最大径13.2	外面:沈線文1、回転ヘラズリ	N6/ 灰		14-88溝	平4	14-1
878	342	77	須惠器	盥	不明	口径18.2(1/12)	外面:把手1	2.5Y7/1 灰白		14-88溝	平4	14-1
879	342		須惠器	盥	6世紀後半	口径20.8(完)	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	N5/ 灰		14-88溝	平4	14-1
880	342		土師器	小型丸底壺	布留IV~V	頸部径5.4(1/3) 最大径11.0	外面:摩滅 内面:ユビオサエナデ	5YR7/4 にぶい橙		14-88溝	平4	14-1
881	342	77	土師器	直口壺	5世紀後半	口径9.5(2/5) 器高14.7	外面:ナデ 内面:ハケメ(4条/cm)、ユビオサエナデ、板ナデ	5YR6/4 にぶい橙		14-88溝	平4	14-1
882	342		土師器	高杯	TK10	口径13.1(1/8) 脚部径8.2(1/2)	外面:摩滅、ヘラズリ? 内面:摩滅、接合面	5YR6/6 橙		14-88溝	平4	14-1
883	342	77	土師器	高杯	5世紀か	口径17.9(完) 脚部径11.0 器高13.6	外面:摩滅、ヘラミガキ? 内面:接合面、シボリメ、ナデ	5YR7/4 にぶい橙		14-88溝	平4	14-1
884	342		土師器	盥	6世紀か	口径18.2(1/8)	外面:摩滅 内面:板ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙		14-88溝	平4	14-1
885	343		須惠器	杯	TK47	口径10.9(1/7)	外面:回転ヘラズリ	N6/ 灰		16-7溝	平4	16-1
886	343		土師器	高杯	布留Vか	脚部径15.8(1/6)	外面:ナデ 内面:ヘラズリ	7.5YR6/2 灰褐		18-3溝	平4	18-1
887	343		土師器	盥	布留IV~Vか	口径16.0 頸部径11.3(完)	外面:ハケメ(3条/cm)、一部ヘラズリ、スス付着 内面:板ナデ	5YR6/4 にぶい橙		18-3溝	平4	18-1
888	343		弥生土器	盥	弥生III-2か	口径14.7(1/8)	外面:口縁部端部凹線文、直線文(5条) 内面:摩滅	10YR8/4 にぶい黄橙		18-3溝	平4	18-1
889	343		弥生土器	盥	弥生III-2か	口径22.3(1/13)	外面:口縁部凹線文4条、直線文(7条+α) 内面:ハケメ?	10YR8/4 浅黄褐		18-3溝	平4	18-2
890	343		弥生土器	盥	弥生II	頸部近く14.0(1/6)	外面:直線文(7条)6帯、波状文(4条+α) 内面:ハケナデ	7.5YR7/2 明黄灰		18-3溝	平4	18-1
891	343		弥生土器	盥	弥生中期前半	底径8.0(完)	外面:ハケメ後ヘラミガキ 内面:ユビオサエナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		18-3溝	平4	18-1
892	343		弥生土器	盥	弥生中期前半	底径5.5~5.9(3/4)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙		18-3溝	平4	18-2
893	343		須惠器	盥	TK73~TK216	口径17.4(2/3)	外面:ナデ 内面:ナデ、自然釉付着	5P86/1 青灰		18-3・18-140溝	平4	18-1
894	343		土製品	有孔蓋	弥生?	径2.7×2.1×0.8 孔径0.3	外面:表:ナデ?、穿孔1 内面:裏:ナデ、ユビオサエ?	10YR7/3 にぶい黄橙		18-3溝	平4	18-1
895	343	85	石製品	大型蛤刃石斧	弥生	長5.7 幅6.1 厚4						

図番	押図番号	図原番号	種別	器形	時期	法量(単位cm、臼玉はmm) ○/○は残存率	調整(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	遺構種類	区域	調査区名
907	344	78	須恵器	杯蓋	TK43	口径13.4 器高4.0 完形	外面:回転ヘラケズリ(左)、未調整、自然釉付着	10YR6/1 褐灰		18-134溝	平4	18-1
908	344		須恵器	杯蓋	MT85	口径14(1/4)	外面:回転ヘラケズリ(左)	N5/ 灰		18-135溝	平4	18-1
909	344	78	須恵器	杯蓋	TK10	口径13.8(2/3) 器高4.5	外面:回転ヘラケズリ(左) 内面:ナデ	5P6/1 紫灰		18-402溝	平4	18-2
910	344		須恵器	杯蓋	MT85	口径14.6 器高4.3 胴部1/3	外面:回転ヘラケズリ(左) 内面:ナデ	N6/ 灰		18-402溝	平4	18-2
911	344		須恵器	杯蓋	TK216	口径12.6 器高3.8 胴部1/2	外面:回転ヘラケズリ(左)	N5/ 灰		12-2b落ち込み	平4	12-1
912	344	78	須恵器	杯	TK216	口径10.9 器高4.4 受部1/2強	外面:回転ヘラケズリ(右)、ヘラ記号	N6/ 灰		12-2b落ち込み	平4	12-1
913	344		須恵器	杯	OM46	口径11.5 器高4.1 受部1/8	外面:回転ヘラケズリ(右)、ヘラ記号、自然釉付着	N5/ 灰		12-2b落ち込み	平4	12-1
914	344		須恵器	有蓋高杯蓋	TK208	口径12.2 胴部径12.2(1/2)	外面:回転ヘラケズリ、自然釉付着	5Y6/1 灰		12-2b落ち込み	平4	12-1
915	344		土師器	小型丸底壺	5世紀か	口径6.0(1/6)	外面:ハケメ(10条/cm) 内面:ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙		12-2b落ち込み	平4	12-1
916	344		土師器	鉢		口径29.6 胴部径26.0(1/8)	外面:摩滅 内面:ナデ?	7.5YR7/2 明褐灰		12-2b落ち込み	平4	12-1
917	344		土師器	壺	5世紀か	口径16.8(1/4)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR8/3 浅黄橙		12-2b落ち込み	平4	12-1
918	344		須恵器	杯蓋	8世紀前半	口径13.2(1/10)		N6/ 灰		13-21落ち込み	平4	13-1
919	344		須恵器	皿A	8世紀前半	口径16.6(1/8) 器高2.7		N7/ 灰白		13-21落ち込み	平4	13-1
920	344		須恵器	高杯	6世紀後半	脚柱基部径5.8(完)		N5/ 灰		13-21落ち込み	平4	13-1
921	344		須恵器	壺	8世紀初か	胴部径5.0(1/2)	外面:沈線文1	N6/ 灰		13-21落ち込み	平4	13-1
922	344		須恵器	壺	6世紀後半	口径22.0(1/4)	外面:円形浮文、平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	N3/ 暗灰		13-21落ち込み	平4	13-1
923	344		土師器	壺	6世紀か	口径24.0(1/6)	外面:ハケメ(4条/cm) 内面:工具ナデ、ユビオサエ	7.5YR6/2 灰褐		13-21落ち込み	平4	13-1
924	344		土師器	壺	7世紀後半か	口径17.0(1/5)	外面:ハケメ、摩滅 内面:摩滅	5YR5/3 にぶい赤褐		13-21落ち込み	平4	13-1
925	344		瓦	丸瓦	9世紀	端部厚1.7	玉縁式 凸面:ナデ 凹面:端まで布目痕、縦目痕	7.5YR7/3 にぶい橙		13-21落ち込み	平4	13-1
926	344	78	須恵器	杯蓋	TK43	口径13.6(9/10) 器高4.4	外面:回転ヘラケズリ(右)、浴槽	N6/ 灰		18-4落ち込み	平4	18-1
927	344		須恵器	杯蓋	MT85	口径15.0(1/6) 器高4.9	外面:回転ヘラケズリ(左)	N7/ 灰白		18-4落ち込み	平4	18-1
928	344		須恵器	杯	TK15	口径11.6(1/3) 器高4.5	外面:回転ヘラケズリ(左)、未調整 内面:ナデ	N7/ 灰白		18-4落ち込み	平4	18-1
929	344		須恵器	杯	TK10	口径13.8(1/3) 器高5.0	外面:回転ヘラケズリ(右)、未調整 内面:当て具痕	N6/ 灰		18-4落ち込み	平4	18-1
930	344		須恵器	杯	TK10	口径15.4(1/4) 器高5.0	外面:回転ヘラケズリ 内面:当て具痕	N6/ 灰		18-4落ち込み	平4	18-1
931	344		須恵器	杯B	7世紀後半	高台部径7.0(1/2)		N6/ 灰		18-4落ち込み	平4	18-1
932	344		須恵器	楕鉢	不明	底径11.4(1/3)	外面:カキメ、底面ナデ	N7/ 灰白		18-4落ち込み	平4	18-1
933	344	78	須恵器	鉢	TK43	最大径9.9(完)	外面:円形スカシ2、回転ヘラケズリ(右)、自然釉付着	2.5Y7/1 灰白		18-4落ち込み	平4	18-1
934	344		須恵器	提瓶	6世紀後半	口径9.6(1/2)	外面:カキメ 内面:ナデ	N6/ 灰		18-4落ち込み	平4	18-1
935	344		須恵器	壺	6世紀後半	口径20.8(1/4)	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	2.5Y7/1 灰白		18-4落ち込み	平4	18-1
936	344		須恵器	壺	6世紀後半	口径17.8(完)	外面:ヘラ記号、平行タタキ後カキメ 内面:同心円状当て具痕	N7/ 灰白		18-4落ち込み	平4	18-1
937	345		須恵器	大壺	6世紀後半	口径38.8(2/3)	外面:列点文、沈線文4、列点文、自然釉付着 内面:自然釉付着	N7/ 灰白		18-4落ち込み	平4	18-1
938	345		土師器	壺	6世紀か	口径10.0 器高11.0	外面:摩滅 内面:ユビオサエ後板ナデ?	10YR6/2 灰黄褐		18-4落ち込み	平4	18-1
939	345		弥生土器	壺	弥生I	底径11.0(1/2弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/4 にぶい黄橙		18-4落ち込み	平4	16-1
940	345	83	石製品	砥石		長23.9 幅7.3 厚4.7	4面使用		細粒砂岩	3層	平4	18-1
941	345		須恵器	高杯蓋	TK216	口径13.5 胴部1/4	外面:回転ヘラケズリ(右)、自然釉付着	N7/ 灰白		3層	平4	12-1
942	345		須恵器	壺	5世紀後半以前	口径19.4(1/10)	外面:凸縁文1、波状文(17条)	N4/ 灰		3層	平4	12-1
943	345	77	土師器	製塩土器	5世紀	口径3.0(1/4)	外面:ユビオサエナデ、赤色化 内面:ユビオサエナデ、赤色化	7.5YR7/3 にぶい橙	丸底1b式	3層	平4	12-1
944	345		須恵器	樽形壺	TK73~TK216	側面部径9.0 胴部最大径13.2	外面:波状文(6条)、沈線文1、波状文(2条+α)、自然釉付着	5B5/1 青灰		3層	平4	13-1
945	345	84	石製品	石彫丁	弥生	長3.6 幅3.4 厚0.45	両刃、使用痕?		泥質ホルンフェルス	3層	平4	13-1
946	345		須恵器	杯蓋	TK10	口径14.4(1/6) 器高4.1	外面:回転ヘラケズリ(右)	10G6/1 緑灰		3層	平4	14-1
947	345		須恵器	杯蓋	MT85	口径14.4 器高3.4 2/5	外面:回転ヘラケズリ(左) 内面:当て具痕	N5/ 灰		3層	平4	14-1
948	345		須恵器	杯蓋	MT85	口径14.9(2/3) 器高4.4	外面:回転ヘラケズリ(左)	7.5Y7/1 灰白		3層	平4	14-1
949	345		須恵器	杯蓋	8世紀前半	口径14.8(1/8)		N6/ 灰		3層	平4	14-1
950	345		須恵器	杯	MT85	口径13.8(1/5) 器高3.9	外面:回転ヘラケズリ(左)	N6/ 灰		3層	平4	14-1
951	345		須恵器	皿C	8世紀末	口径18.2 器高2.1 1/8		10YR5/1 褐灰		3層	平4	14-1
952	345		須恵器	把手付鉢	TK208以前	口径13(1/8以下)	外面:凸縁文2間波状文(5条?)、自然釉付着	N6/ 灰		3層	平4	14-1
953	345		須恵器	壺蓋	6世紀後半	口径8.6 1/3	外面:回転ヘラケズリ(左)	2.5Y7/1 灰白		3層	平4	14-1
954	345		須恵器	壺	TK216以前	口径11.8(1/9)	外面:凸縁文1 内面:当て具痕?	N5/ 灰		3層	平4	14-1
955	345		須恵器	壺	6世紀後半	口径10.2(1/6)	外面:頸部一部に粘土片付着	N6/ 灰		3層	平4	14-1
956	345		土師器	皿C	8世紀末か	口径16.6(1/7) 器高2.8	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	7.5YR6/3 にぶい橙		3層	平4	14-1
957	345		土師器	壺	6世紀か	口径10.8(一部欠)	外面:ハケメ(7条/9.0cm) 内面:摩滅	5YR6/4 にぶい橙		3層	平4	14-1
958	346	83	石製品	臼玉		径5.7 孔径2.5 厚4.3 重さ0.18g			滑石	3層	平4	14-1
959	346	83	石製品	臼玉		径6.1 孔径2.4 厚2.4 重さ0.11g			滑石	3層	平4	14-1
960	346	86	石製品	角錐状石錘	後期旧石器	長6.3 幅2.1 厚1.1 重さ17.68g			サヌカイト	3層	平4	14-1
961	346	86	石製品	石錘		長3.5 幅2.1 厚0.4 重さ2.92g			サヌカイト	3層	平4	14-1
962	346	82	石製品	砥石		長13.0 幅4.4 厚3.2	3面使用		細粒砂岩	3層	平4	14-1
963	346		須恵器	杯	MT85	口径14.2 器高4.7 受部1/3	外面:ヘラケズリ後ナデ、未調整	2.5G6/1 オリーブ灰		3層	平4	16-2
964	346	78	須恵器	鉢	TK10	口径14.0(1/3) 器高15.8	外面:波状文(5条)、凸縁文1、波状文(16条?)、沈線文1、列点文、円形スカシ1、自然釉付着 内面:自然釉付着	N6/ 灰		3層	平4	16-2
965	346	85	石製品	石棒		長9.9 幅3.3 厚2.1			点紋片岩	4層上面	平4	18-1
966	346		弥生土器	壺	弥生Iか	口径5.7~6.0(一部欠)	外面:摩滅、未貫通孔1 内面:摩滅	10YR6/3 にぶい黄橙		3層	平4	18-2
967	346		土師器	鉢?	6世紀前半か	口径16.0(3/8)	外面:摩滅(ハケメ) 内面:摩滅	5YR6/3 にぶい橙		3層	平4	18-3
968	346		須恵器	杯蓋	8世紀前半	口径15.0(1/6)		N6/ 灰		3-2層	平4	13-1
969	346		須恵器	杯B	7世紀末	口径12.8(1/7) 底径9.6 器高3.9	外面:自然釉付着	N5/ 灰		3-2層	平4	13-1
970	346		須恵器	杯A	7世紀末	口径13.3(1/6) 底径10.4 器高4.5		N5/ 灰		3-2層	平4	13-1
971	346	78	土師器	杯	8世紀か	口径13.3(3/4) 器高3.2	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		3-2層	平4	13-1
972	346		土師器	皿A	8世紀末か	口径17.0(1/4弱) 器高2.4	外面:ユビオサエナデ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		3-2層	平4	13-1
973	346		土師器	壺	6世紀か	口径18.6(1/7)	外面:ハケメ 内面:ナデ	7.5YR6/2 灰褐		3-2層	平4	13-1
974	346		土師器	壺	7世紀	口径16.5(一部欠)	外面:ハケメ、スス付着 内面:ユビオサエナデ?	7.5YR4/1 褐灰		3-2層	平4	13-1
975	346		須恵器	杯蓋	7世紀後半	口径13.0 1/3	外面:回転ヘラケズリ(右)後、一部ナデ	N6/ 灰		4層	平4	18-1
976	346		須恵器	杯蓋	7世紀中頃	口径10.2 器高2.4 1/4	外面:回転ヘラケズリ(左)	N6/ 灰		4層	平4	18-1
977	346		須恵器	杯	MT85	口径12.9(1/3弱) 器高3.1	外面:回転ヘラケズリ	N6/ 灰		4層	平4	18-1
978	346		須恵器	杯G	7世紀中頃	口径10.6 器高3.7 1/2	外面:ヘラケズリ	N6/ 灰		4層	平4	18-1
979	346		須恵器	直口壺	6世紀後半	口径8.0(1/4)		N5/ 灰		4層	平4	18-1
980	346		須恵器	壺	6世紀後半	口径14.6(1/4)	外面:平行タタキ後カキメ 内面:同心円状当て具痕	N4/ 灰		4層	平4	18-1
981	346		須恵器	壺	6世紀後半	口径18.6(2/3)	外面:平行タタキ後カキメ 内面:同心円状当て具痕	N4/ 灰	ひずむ	4層	平4	18-1
982	346		土師器	椀C	8世紀初	口径15.0(1/7) 器高4.2	外面:工具痕、ユビオサエナデ 内面:暗文?	5YR7/6 橙		4層	平4	18-1
983	346		土師器	壺	7世紀か	口径24.0(1/4)	外面:ハケメ 内面:ユビオサエナデ後ヘラケズリ?	5YR6/6 橙		4層	平4	18-1
984	346		弥生土器	壺	弥生I	底径7.4(1/4)	外面:ハラミガキ、ナデ?、接合面、底面未調整 内面:ナデ?	10YR6/2 灰黄褐		4層	平4	18-1
985	347	87	石製品	スクレイパー		長6.3 幅11.0 厚0.9 重さ61.75g	表面:自然面残			4層	平4	18-1
986	347	80	土製品	棺構築材		最大径33.2	外面:一部ハケメ、ハケメ(11条/cm)、赤色顔料付着 内面:ナデ	N5/ 灰		暗渠1	谷2	15-2
987	347	80	土製品	棺構築材		破片	外面:ハケメ(9条/cm)後ナデ、ナデ、赤色顔料塗布 内面:ナデ	N5/ 灰		暗渠1	谷2	15-2
988	348		須恵器	杯蓋	TK10	口径13.2(1/8)	外面:回転ヘラケズリ	N5/ 灰		20-53土坑	谷1	20-2
989	348		須恵器	杯	TK10	口径14.2(1/7) 器高4.6	外面:回転ヘラケズリ(左)	N5/ 灰		20-53土坑	谷1	20-2
990	348		須恵器	壺	5世紀後半か	破片	外面:斜格子タタキ、内面:摩滅	7.5YR6/3 にぶい橙		20-53土坑	谷1	20-2
991	348		土師器	壺	6世紀	口径20.0(1/8)	外面:ハケメ(5~6条/cm)、スス付着 内面:摩滅	7.5YR6/3 にぶい橙		20-53土坑	谷1	20-1
992	348		土師器	高杯	布留IV-V	脚柱基部径10.8(2/3)	外面:ナデ、ハケメ? 内面:接合面、シロリメ、ヘラケズリ	10YR6/3 にぶい黄橙		5-15土坑	谷1	5-3
993	348		須恵器	壺	TK216~OM46	口径19.4(1/8)	外面:凸縁文1、自然釉付着	10YR5/1 褐灰		6-105土坑	谷3	6-6

図番号	探検番号	図版番号	種別	器形	時期	法量(単位cm、白玉はmm) O/Oは残存率	調査(ヨコナデ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	溝槽種類	区域	調査区名
1006	348		須恵器	高杯蓋	5世紀後半	つまみ径2.6	外面:自然釉付着、重ね痕	5YR6/1 褐灰		21-22溝	谷1	21-2
1007	348		須恵器	高杯蓋	5世紀後半	つまみ径2.6	外面:回転ヘラケズリ(左)、自然釉付着	10YR6/1 褐灰		21-22溝	谷1	21-2
1008	348		須恵器	壺	5世紀後半	口径14.4(1/6)	外面:凸線文1、自然釉付着	N5/ 灰		21-22溝	谷1	21-2
1009	349	86	石製品	石鏃		長2.9 幅1.9 厚0.4 重さ1.3g	凹基式			サヌカイト	4層	谷1 5-4
1010	349	86	石製品	石鏃	弥生	長3.8 幅1.5 厚0.5 重さ3.07g	凸基I式 両面側面歯状剥離			サヌカイト	4層	谷1 5-4
1011	349	87	石製品	スクレインパー		長5.4 幅0.6 厚1.3 重さ62.3g	表面:自然面残			サヌカイト	4層	谷1 6-10
1012	349		須恵器	杯蓋	TK216	口径12.9(1/7)	外面:回転ヘラケズリ(右)、口縁端部スス付着	2.5Y6/1 黄灰		4層	谷1 9-1	
1013	349		須恵器	杯蓋	TK23	口径12.0(1/8) 器高4.1	外面:回転ヘラケズリ(右)	N5/ 灰		4層	谷1 9-1	
1014	349		須恵器	把手付鉢	5世紀後半	口径9.6(1/16)	外面:刺突文、沈線文、タタキ・ヘラケズリ後ナデ、自然釉付着	N5/ 灰		4層	谷1 9-1	
1015	349		須恵器	蓮口縁	6世紀後半	口径19.0(1/4)		2.5Y7/1 灰白		4層	谷1 9-1	
1016	349		土師器	壺	布留後半か	口径17.0(1/7)	外面:ハケメ、薄くスス付着 内面:ハケメ、ナデ、工具ナデ	5YR6/6 橙		4層	谷1 9-1	
1017	349		土師器	甕		脚端部破片	外面:ナデ、一部ハケメ 内面:ナデ、一部ハケメ	2.5Y6/2 灰黄		4層	谷1 9-1	
1018	349	91	木製品	田下駄		長25.2 幅3.1 厚1.1				横棧、ヒノキ	4層	谷1 9-1
1019	349	91	木製品	不明		長26.5 幅6.6 厚1.5				スギ	4層	谷1 9-1
1020	349		木製品	棒状		長23.1 幅2.1 厚1.1				スギ	4層	谷1 9-1
1021	349		須恵器	脚部		脚端部径15.0(1/8)	外面:カキメ	N5/ 灰		4-1 b層	谷1 9-1	
1022	349		須恵器	壺	6世紀後半	口径11.6(1/8)		N5/ 灰		4-1 b層	谷1 9-1	
1023	349		須恵器	壺	TK216以前	口径17.0(1/8)	外面:凸線文1	N5/ 灰		4-1 b層	谷1 9-1	
1024	349		弥生土器	脚台	弥生VI	底径5.3(1/2)	外面:ナデ 内面:くもの巣状ハケメ痕、スス?付着	10YR7/2 にぶい黄橙	鉢か	4 b層	谷1 9-1	
1025	349	79	土師器	甕		掛け口片	外面:ハケメ、ナデ、スス付着 内面:ハケメ、ナデ、スス付着	2.5Y6/2 灰黄		4 b層	谷1 9-1	
1026	349		土製品	縄羽口		口縁細片	外面:火ぶくれ、ナデ?	5YR5/4 にぶい赤褐		4 b層	谷1 9-1	
1027	350		須恵器	杯蓋	TK10	口径16.8	外面:回転ヘラケズリ(右)	N5/ 灰		4層	谷1 9-3	
1028	350		須恵器	壺	TK216以前	口径20.0(1/4)	外面:凸線文1	N5/ 灰		4層	谷1 9-3	
1029	350	82	石製品	砥石		長7.2 幅4.0 厚3.8	5面使用、二次焼成のためスス付着			砂岩	4層	谷1 9-3
1030	350		須恵器	壺	5世紀後半	口径10.8(1/8)	外面:凸線文1、波状文(14条?)	N5/ 灰		4-1層	谷1 9-3	
1031	350		須恵器	杯	TK23(KM1)	口径10.8 1/3	外面:回転ヘラケズリ(左)	N6/ 灰		4-1 b層	谷1 9-3	
1032	350	82	石製品	砥石		長6.05 幅4.2 厚1.5	6面使用			流紋岩	4-1 b層	谷1 9-3
1033	350	83	石製品	下げ砥石		長7.4 幅2.4 厚0.9 孔径0.5				頁岩	4-1 b層	谷1 9-3
1034	350		木製品	不明		長33.5 幅6.5 厚1.5				アカガシ垂流	4-1 b層	谷1 9-3
1035	350	91	木製品	杭		長74.4 幅8.4 厚6.1	下端部加工			カヤ	4-1 b層	谷1 9-3
1036	350	91	木製品	不明		長32.6 幅20.7 厚1.2				ヒノキ	4-1 b層	谷1 9-3
1037	350	91	木製品	不明		長17.1 幅6.8 厚1.2	表:右側面上方加工痕、下方加工?、左側面上方加工?			アカガシ垂流	4-1 b層	谷1 9-3
1038	350	86	石製品	石鏃	弥生	長4.3 幅1.7 厚0.6 重さ3.74g	有蓋式			サヌカイト	4-2層	谷1 9-3
1039	350		土師器	鉢	5世紀後半か	口径11.9(1/10)	外面:厚減 内面:赤色顔料塗布、厚減	5YR5/4 にぶい赤褐		4-1層	谷1 9-4	
1040	350		須恵器	壺	TK216以前	破片	外面:波状文(4条、3条)2帯、列点文2帯	2.5Y7/1 灰白		4-1層	谷1 9-4	
1041	350	92	木製品	不明		長15.2 幅10.0 厚2.0	表:下端部が上方に突出完結 裏:下方一段低い			アカガシ垂流	4-2層	谷1 9-4
1042	350	92	木製品	鉢柄		長40.1 幅4.5 厚2.4	差し込み口あり			ヒノキ	4-2層	谷1 9-4
1043	351		須恵器	杯	TK10	口径12.2(1/6)	外面:回転ヘラケズリ(右)	10YR5/1 褐灰		4-1層	谷1 9-5	
1044	351		須恵器	壺	6世紀後半	口径14.0(1/8)		10YR6/1 褐灰		4-1層	谷1 9-5	
1045	351	80	土師器	壺	5世紀後半~6世紀か	口径11.3(1/2強)	外面:ハケメ(13条/cm・5条/cm)、焼成後穿孔1、一部赤色化	7.5YR6/3 にぶい褐		4-1層	谷1 9-5	
1046	351		土師器	製埴土器	8~9世紀	口縁破片	外面:平行タタキ、口縁端部スス?付着 内面:工具ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙		4-1層	谷1 9-5	
1047	351	92	木製品	腰掛脚		長20.2 幅11.9 厚3.1	表:加工痕			スギ	4-1層	谷1 9-5
1048	351	92	木製品	不明		長20.3 幅4.4 厚3.9 孔径2.1	表:3孔残、左側面炭化			スギ	4-1層	谷1 9-5
1049	351	92	木製品	不明		長16 幅3.5 厚2.0	表:左側面加工痕			ヒノキ	4-1層	谷1 9-5
1050	351	92	木製品	不明		長21.4 幅4.5 厚1.0	表:左側面加工痕、赤漆? 裏:赤漆?			スギ	4-1層	谷1 9-5
1051	351	93	木製品	不明		長87.7 幅10.3 厚5.9	左側面上方加工痕、下端部炭化			スギ	4-1層	谷1 9-5
1052	351		木製品	不明		長26.5 幅5.1 厚3.7	表:上端部加工痕、下半部加工痕			ヒノキ	4-1層	谷1 9-5
1053	351		須恵器	杯or杯蓋?		破片	外面:回転ヘラケズリ、火だすき	2.5Y7/1 灰白		4-1 b層	谷1 9-5	
1054	351		韓式系土器	壺		口縁破片 脚部破片	外面:平行タタキ 内面:当て具痕後ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙		軟質	4-1 b層	谷1 9-5
1055	351	93	木製品	不明		長38.4 幅5.84 厚3.1	表:加工痕 裏:下方加工痕			ヒノキ	4-1 b層	谷1 9-5
1056	351	93	木製品	不明		長37.15 幅6.3 厚2.8	表:下端部加工痕			ヒノキ	4-1 b層	谷1 9-5
1057	352		土師器	壺or鉢		底径31.7	外面:ヘラミガキ? 内面:ヘラミガキ 両面赤色顔料塗布	10YR7/2 にぶい黄橙		4-2 b層	谷1 9-5	
1058	352	80	須恵器	甕台	TK73以前	口径35.4 体部1/6 脚端部径25.8	外面:凸線文5、彫線文、縦線文、波状文(7条) 内面:接合面に格子状線刻	10Y7/2 灰白		4-3層	谷1 9-5	
1059	352	93	木製品	不明		長15.8 幅4.5 厚2.2 孔径1.7	表:2孔残			スギ	4-3 b層	谷1 9-5
1060	352		須恵器	壺	5世紀後半	口径14.8(1/8)	外面:波状文(6条)、凸線文2、波状文(8条)	N5/ 灰		4層	谷1 10-3	
1061	352		土製品	縄羽口		口縁破片	外面:火ぶくれ、灰色に変色 内面:灰色に変色、褐色に変色	2.5Y6/1 黄灰		4層	谷1 10-3	
1062	352		須恵器	杯蓋	TK216	口径11.8(1/6)	外面:回転ヘラケズリ(左)	5YR6/1 褐灰		4-1層	谷1 11-1	
1063	352		須恵器	提瓶	6世紀後半	口径8.2(1/4)		N5/ 灰		4-1層	谷1 11-1	
1064	352		土師器	高杯	5世紀	脚端部径11.4(3/4)	外面:円形スキャン1、厚減 内面:接合面、ヘラケズリ	10YR8/2 灰白		4-1層	谷1 11-1	
1065	352		弥生土器	鉢		口径7.2 底径3.8 器高3.9 1/3	外面:ユビオサエナデ 内面:強いユビナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	手づくね	4-1層	谷1 11-1	
1066	352		須恵器	杯蓋	TK73	積径11.8	外面:回転ヘラケズリ(右)	5YR5/1 紫灰		4層	谷1 11-3	
1067	352		須恵器	壺	TK216以前	口径14.0(1/6)	外面:凸線文1	N4/ 灰		4層	谷1 11-3	
1068	352		須恵器	甕台	TK23以降	脚端部径29.8(1/12)	外面:沈線文1、凸線文1、平行タタキ	N6/ 灰		4層	谷1 15-2	
1069	352		須恵器	杯蓋	TK208	口径13.8(1/10) 器高5.1	外面:回転ヘラケズリ(左)	2.5Y6/1 黄灰		4層	谷1 17-3	
1070	352		須恵器	杯蓋	TK23	口径12.4(1/4) 器高4.4	外面:回転ヘラケズリ(右)	N4/ 灰		4層	谷1 17-3	
1071	352	80	須恵器	杯	TK23	口径11.0(1/2) 器高5.5	外面:回転ヘラケズリ(右)	N6/ 灰		4層	谷1 17-3	
1072	352	80	須恵器	杯	MT15	口径12.5 器高5.6 9/10	外面:回転ヘラケズリ(右)	N6/ 灰		4層	谷1 17-3	
1073	352	80	須恵器	高杯蓋	TK23	口径13.0(1/3) 器高5.5	外面:回転ヘラケズリ(左)	N5/ 灰		4層	谷1 17-3	
1074	352		須恵器	壺	TK216以前	口径13.0(1/6)	外面:波状文(8条)、凸線文1、波状文(12条)、自然釉付着	N6/ 灰		4層	谷1 17-3	
1075	352		須恵器	杯	TK23	口径11.2(1/8)	外面:回転ヘラケズリ(左)	N5/ 灰		4層	谷1 19-3	
1076	352		須恵器	壺	5世紀後半	口径11.0(1/3)	外面:凸線文2間波状文(11条?)	N5/ 灰		4層	谷1 19-3	
1077	352	88	金屋	腕形漆		長6.0 幅5.0 厚1.8	外面:気泡あり 内面:気泡あり	5Y4/1 灰		4層	谷1 19-3	
1078	352		須恵器	杯	MT15	口径13.0 器高5.1 1/2	外面:回転ヘラケズリ(右)	N5/ 灰		4層	谷1 20-2	
1079	352		土製品	縄羽口		細片	外面:火ぶくれ、白色に変色 内面:赤色に変色	10YR6/3 にぶい黄橙		4層	谷1 20-2	
1080	352		須恵器	杯蓋	TK208	口径13.0 器高4.9	外面:回転ヘラケズリ(左)	N5/ 灰		4層	谷1 20-3	
1081	352	93	木製品	田下駄		長22.9 幅2.8 厚1.4				横棧、ヒノキ	4層	谷1 20-3
1082	352		須恵器	杯蓋	MT15	口径14.4(1/5) 器高4.4	外面:回転ヘラケズリ(右)	N5/ 灰		4層	谷1 21-2	
1083	352		須恵器	杯	TK10	口径12.2 器高4.9 1/2	外面:回転ヘラケズリ(右)、自然釉付着	N5/ 灰		4層	谷1 21-2	
1084	352		須恵器	杯	TK10	口径13.0 器高4.1 1/2	外面:回転ヘラケズリ(左)、自然釉付着	N6/ 灰		4層	谷1 21-2	
1085	352		須恵器	高杯蓋	TK208	口径12.0 4/5	外面:回転ヘラケズリ、自然釉付着	N6/ 灰		4層	谷1 21-2	
1086	352		須恵器	高杯	TK208	脚端部径9.4	外面:凸線文1、円形スキャン3方向、自然釉付着	N5/ 灰		4層	谷1 21-2	
1087	353		須恵器	壺	5世紀後半	口径10.7(1/2)	外面:凸線文2、波状文(7条、12条)2帯	N5/ 灰		4層	谷1 21-2	
1088	353		須恵器	鉢	TK208	最大径15.0(1/2)	外面:波状文(10条)、沈線文1、回転ヘラケズリ後ナデ	N6/ 灰		4層	谷1 21-2	
1089	353		須恵器	壺	6世紀後半	口径13.2(1/9)	外面:カキメ	N6/ 灰		4層	谷1 21-2	
1090	353		須恵器	壺	TK216以前	口径14.4(1/6)	外面:凸線文2	N6/ 灰		4層	谷1 24-1	
1091	353		須恵器	壺	TK216以前	口径19.2(1/8)	外面:凸線文1、平行タタキ 内面:ナデ	N5/ 灰		4層	谷1 24-1	
1092	353		土師器	高杯	5世紀後半か	脚端部径9.2(一部欠)	外面:厚減、一部ハケメ 内面:厚減、シボリメ	10YR7/2 にぶい黄橙		4層	谷1 24-1	
1093	353		縄紋土器	深鉢	縄紋晩前期	底径6.0(1/2弱)	外面:厚減 内面:ナデ	10YR5/1 褐灰		4層	谷1 24-1	
1094	353		縄紋土器	深鉢	縄紋晩前期	底径5.1(完)	外面:条痕、底面ナデ? 内面:ナデ	2.5Y5/1 黄灰		4層	谷1 24-1	
1095	353	81	須恵器	有蓋高杯	TK23	受部径12.4 脚端部径9.5 1/2	外面:回転ヘラケズリ(右)、カキメ、三角スキャン3方向	N5/ 灰		7-401溝	谷2 7-5	
1096	353		須恵器	壺	5世紀後半	口径10.8	外面:凸線文2、波状文(7条、12条)2帯	N6/ 灰		7-401溝	谷2 7-5	
1097	353	81	須恵器	鉢鉢	不明	口径13.8 底径8.0 器高8.5 3/5	外面:把手痕跡、ヘラケズリ後ナデ	N7/ 灰				

図番号	押図番号	図原番号	種別	器形	時期	法量(単位cm、臼玉はmm) ○/○は残存率	調査(ヨコナテ、回転ナテは省略)	外面色調	備考	遺構種類	区域	調査区名	
1106	353		須恵器	杯蓋	MT15	口径14.0(1/6)	外面:回転ヘラケズリ(左)	N5/ 灰 N4/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1107	353		須恵器	杯蓋	TK10	口径13.6(1/12)	外面:回転ヘラケズリ	N5/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1108	353		須恵器	高杯蓋	TK73	つまみ径3.2		N6/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1109	353		須恵器	高杯蓋	TK73	つまみ径2.3		5Y5/1 灰		4-1層	谷3	25-2	
1110	353		須恵器	杯	TK73	口径10.6 器高5.3 1/5	外面:回転ヘラケズリ	N6/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1111	353		須恵器	無蓋高杯	TK23	口径19.5(1/5)	外面:凸線文1、波状文(6条)、回転ヘラケズリ	N5/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1112	353	82	須恵器	大型高杯	5世紀後半	口径20.4(1/5)	外面:凸線文2間波状文(6条)、波状文(6条)、回転ヘラケズリ後ナデ、方形スカシ8方向	N5/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1113	353		須恵器	多窓高杯	TK216以前	破片	外面:スカシ	N6/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1114	353		須恵器	把手付鉢	TK23	口径14.9(1/12)	外面:凸線文2、波状文(4条)	N5/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1115	353		須恵器	小型壺	6世紀後半	口径7.2(1/4)	外面:自然釉付着	N5/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1116	353		須恵器	壺	TK216以前	口径14.4(1/3)	外面:凸線文1、波状文(4条、6条、5条)3帯、凸線文3	5PB6/1 青灰		4-1層	谷3	25-2	
1117	353		須恵器	壺	TK216以前	口径18.9(1/8)	外面:自然釉付着 内面:自然釉付着	N5/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1118	353	81	陶質土器	不明	5世紀後半以前	破片	外面:格子状タタキ 内面:当て具痕スリ消し	N4/ 灰		4-1層	谷3	25-2	
1119	353	85	石製品	石棒		長15.5 幅4.6 厚2.5	下端側面加工痕?			4-1層	谷3	25-2	
1120	353	93	木製品	不明		長8.8 幅4.8 厚2.0	孔1径			アカガシ重風	4-1層	谷3	25-2
1121	363		弥生土器	小型壺?	弥生VI	底径2.8(ほぼ完)	外面:縦方向に帯状列点文、ナデ 内面:ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙		整穴建物5	平1	5-1	
1122	363		弥生土器	高杯	弥生VI	脚部径14.2(1/6)	外面:ヘラミガキ、円形スカシ4方向 内面:摩滅、シボリメ	10YR6/2 灰黄褐		5-3土坑(整穴5)	平1	5-1	
1123	363		弥生土器	鉢	弥生VI	口径23.8(1/4) 器高10.9	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/4 にぶい橙		溝溝(整穴5)	平1	5-1	
1124	363		弥生土器	鏝or鉢	弥生VI	底径3.4~3.8(完)	外面:タタキ、ナデ 内面:工具痕	5YR7/4 にぶい橙		10-158土坑	平1	10-3	
1125	363	72	弥生土器	器台	弥生後期後半	口径17.5 器高14.4 脚部径13.2(1/2)	外面:竹管文(4個1単位で5単位)、沈線文(6、5条)、刺突文、円形スカシ3方向3段、ヘラミガキ 内面:ナデ	7.5YR/6 橙		10-158土坑	平1	10-3	
1126	363		土師器	鉢	庄内期	口径18.0(1/3) 底径3.4 器高9.5	外面:摩滅、ヘラミガキ、底面不明 内面:摩滅	7.5YR/4 にぶい橙		19-3土坑	平1	19-1	
1127	363		弥生土器	壺	弥生I-4	最大径23.4(1/5)	外面:沈線文3条2帯、ハケメ(6条/cm)、ヘラミガキ(摩滅) 内面:ナデ、ハケメ(7条/cm)	10YR5/3 にぶい黄褐		22-17溝	平1	22-2	
1128	363		縄紋土器	深鉢	篠原式	破片	外面:ナデ、ヘラケズリ、スス付着 内面:ナデ?、工具ナデ?	10YR6/2 灰黄褐		縄紋晩期中葉	5-2 b層	平1	22-1
1129	363	89	木製品	不明		長17.8 幅9.8 厚2.2				スギ(ヒノキ)	5-2 b層	平1	22-1
1130	363		縄紋土器	深鉢	篠原式	破片	外面:条痕?、ヘラケズリ、スス付着 内面:ナデ、条痕?	2.5Y5/3 黄褐		縄紋晩期中葉	5-2 b層	平1	22-1
1131	363		弥生土器	壺	弥生I-3か	体部破片	外面:沈線文3条間刺突文、ヘラミガキ?、黒色物質塗布	10YR5/2 灰黄褐		5層	平1	22-1	
1132	363	87	石製品	サヌカイト片		長2.0 幅2.9 厚0.5 重さ2.25g				5層	平1	22-1	
1133	363	87	石製品	サヌカイト片		長5.0 幅5.1 厚0.8 重さ24.67g	右側面に自然面残			5-1層	平1	22-1	
1134	363	87	石製品	サヌカイト片		長6.3 幅2.6 厚0.7 重さ13.86g	右側面に自然面残			5-1層	平1	22-1	
1135	363		弥生土器	壺	弥生I-2か	口縁破片	外面:口縁端部刻目、沈線文2条、ハケメ、スス付着	N2/ 黒		生駒山西麓産	5層	平1	22-2
1136	363		弥生土器	壺	弥生I	口縁破片	外面:口縁端部沈線文1条上刻目 内面:摩滅	10YR6/3 にぶい黄橙		5-1層	平1	22-2	
1137	363	73	弥生土器	壺	弥生I-4	口径14.8 底径6.5 器高23.8 ほぼ完形	外面:焼成前穿孔2個1対のみ、貼付凸帯2、貼付凸帯2上刻目、ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ 両面黒色物質塗布	7.5YR3/1 黒褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1138	363		弥生土器	壺	弥生I	口径15.2(1/8)		10YR6/3 にぶい黄橙		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1139	363		弥生土器	壺	弥生I-3か	最大径23.3 1/4	外面:削り出し凸帯上沈線文6条、ヘラミガキ、黒色物質塗布 内面:板ナデ	10YR3/1 黒褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1140	363		弥生土器	壺	弥生I	底径9.7~10.0(完)	内外面:ハケメ後ヘラミガキ、底面未調整	10YR5/2 灰黄褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1141	364		弥生土器	壺	弥生I-3	頸部径24.8(1/8以下)	外面:縦口縁、削り出し凸帯上沈線文2条、黒色物質塗布 内面:ヘラミガキ	7.5YR3/1 黒褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1142	364		弥生土器	壺	弥生I-4か	下の沈線径15.0(1/7)	外面:沈線文4条+α、ヘラミガキ、黒色物質塗布 内面:板ナデ後一部ヘラミガキ	10YR5/2 灰黄褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1143	364		弥生土器	壺	弥生I	底径11.8(1/5)	内外面:ヘラミガキ、底面ヘラミガキ、黒色物質塗布	10YR8/3 浅黄橙		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1144	364		弥生土器	壺	弥生I-4か	口径16.8(1/7)	外面:ハケメ(8条/cm)、スス付着 内面:ハケメ、炭化物付着	10YR5/2 灰黄褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1145	364		弥生土器	壺	弥生I-4か	口径15.6(1/4)	外面:板ナデ、スス付着 内面:炭化物付着	2.5Y4/1 黄灰		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1146	364		弥生土器	壺	弥生I-4か	口径24.4(1/7)	外面:口縁端部刻目、沈線文5条、ハケメ(5~7条/cm)、スス付着 内面:ナデ、ハケメ(7条/cm)、炭化物付着	10YR5/3 にぶい黄褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1147	364		弥生土器	壺	弥生I-4か	口径28.4(1/8)	外面:ハケメ(4~5条/cm)、スス付着 内面:炭化物付着	10YR3/1 黒褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1148	364		弥生土器	壺	弥生I	底径7.2(2/5)	外面:ハケメ(9条/cm)、底面ナデ 内面:工具痕、炭化物付着	2.5Y5/2 暗灰黄		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1149	364		弥生土器	壺	弥生I	底径9.0(1/2)	外面:板ナデ後一部ヘラミガキ 内面:炭化物付着	10YR5/2 灰黄褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1150	364		弥生土器	壺	弥生I	底径5.9(完)	外面:ハケメ(5条/cm)、底面ナデ、スス付着	2.5Y5/2 暗灰黄		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1151	364		弥生土器	壺	弥生I	底径7.7(1/4弱)	外面:板ナデ、底面未調整 内面:ナデ	10YR3/1 黒褐		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1152	364	72	弥生土器	土製円盤	弥生	径5.1×5.2×0.9 重さ24.3g	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	10YR6/3 にぶい黄橙		22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1153	364	87	石製品	サヌカイト片		長2.7 幅3.5 厚0.5 重さ4.02g				22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1154	364	87	石製品	サヌカイト片		長3.8 幅2.9 厚0.8 重さ7.79g	表面:自然面残			22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1155	364	87	石製品	サヌカイト片		長4.4 幅2.4 厚0.9 重さ9.17g	上面:自然面残			22-50流路(5-1 b層)	平1	22-2	
1156	364		弥生土器	壺	弥生I-3か	口径16.8 頸部径12.0(2/5)	外面:口縁端部沈線文1条、沈線文3条+α、ヘラミガキ、黒色物質塗布 内面:ヘラミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐		5-2層	平1	22-2	
1157	364		弥生土器	壺	弥生I	破片	外面:一部ヘラミガキ、黒色物質塗布 内面:貼付凸帯1、ナデ	7.5YR4/2 灰褐		5-2層	平1	22-2	
1158	364		弥生土器	壺	弥生I	口径6.2(1/7)	外面:板ナデ、ナデ、底面未調整 内面:ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄		5-2層	平1	22-2	
1159	364	72	縄紋土器	深鉢	長原式	口縁破片	外面:貼付凸帯1、条痕 内面:ナデ後ヘラミガキ	5Y4/1 灰		5-1 b層	平1	22-2	
1160	364	87	石製品	サヌカイト片		長3.5 幅3.3 厚0.8 重さ5.5g	表面:自然面残			5-2層	平1	22-2	
1161	364		石製品	サヌカイト片		長2.9 幅3.1 厚1.0 重さ9.78g	表面:自然面残			5-2層	平1	22-2	
1162	365		弥生土器	壺	弥生V-O	口径12.8(完)	外面:ヘラミガキ、スス付着 内面:摩滅、薄く炭化物付着	5YR4/2 灰褐		25-41柱穴(掘立62)	平3	25-1	
1163	365	85	石製品	大型蛤刃石斧		長3.1 幅5.4 厚4.5				25-41柱穴(掘立62)	平3	25-1	
1164	365	75	縄紋土器	深鉢	滋賀里I式	口径31.8 最大径32.8(1/8)	外面:焼成後穿孔1、ナデ?二枚貝?条痕 内面:ユビオサエナデ	10YR6/2 灰黄褐		1-78土坑	平3	1-1	
1165	365		弥生土器	壺	弥生II	口径21.8(1/8)	外面:ヘラミガキ 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙		方形周溝墓1(18-155溝)	平4	18-1	
1166	365		弥生土器	壺	弥生中期前半	破片	外面:波状文(4条+α)、直線文(8条)3帯、波状文(8条)	10YR6/2 灰黄褐		方形周溝墓1(18-155溝)	平4	18-1	
1167	365		弥生土器	壺	弥生II	底径8.6(1/3)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙		方形周溝墓1(18-155溝)	平4	18-1	
1168	365		弥生土器	壺	弥生II	底径5.6(完)	外面:ハケメ(2条/cm)、薄くスス付着 内面:ユビナデ	10YR6/3 にぶい黄橙		方形周溝墓1(18-155溝)	平4	18-1	
1169	365	84	石製品	石彫丁	弥生	長8.2 幅4.2 厚0.5 孔径0.7	II類 背潰れ痕あり、孔2(両側から穿孔)			泥質ホルンフェルス	方形周溝墓1(18-155溝)	平4	18-1
1170	365	88	石製品	サヌカイト片		長8.7 幅5.8 厚1.2 重さ45.34g	左側面自然面残			方形周溝墓1(18-155溝)	平4	18-1	
1171	365		弥生土器	壺	弥生III-1	口径23.0(1/8) 底径7.4(1/2)	外面:口縁端部直線文(6条)、直線文(6条)12帯、ハケメ、ハケメ後一部ヘラミガキ、底面工具ナデ 内面:ハケメ	10YR6/2 灰黄褐		方形周溝墓2(18-115土坑)	平4	18-1	
1172	365		弥生土器	壺	弥生II	最大径24.4 底径7.2(1/3)	外面:直線文(5条)8段、ハケメ 内面:ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙		方形周溝墓2(18-50溝)	平4	18-1	

図番号	押附番号	図版番号	種別	器形	時期	流量(単位cm、白玉はmm) ○/△は残存率	調査(ヨコナテ、回転ナデは省略)	外面色調	備考	構造種類	区域	調査区名	
1173	365		弥生土器	甕	弥生Ⅱ	底径6.6~7.2部(完)	外面:ハケメ、底面ナデ 内面:板ナデ、ユビオサエナデ	10R6/4 にぶい赤橙		方形周溝蓋2(18-136溝)	平4	18-1	
1174	366		縄紋土器	深鉢	北白川C式	破片	外面:凹線文4条 内面:摩滅	7.5YR6/3 にぶい緑	縄紋中期末葉		谷1	17-3	
1175	366		弥生土器	甕	弥生Ⅱか	口径21.2(1/8)	外面:口縁端部摩滅、ハケメ 内面:摩滅	2.5YR5/4 にぶい赤橙	大和型か		谷1	18-1	
1176	366		弥生土器	底甕	弥生Ⅱか	口径7.3(1/4)	外面:摩滅 内面:一部ハケメ	2.5Y6/2 灰黄			谷1	18-1	
1177	366		弥生土器	甕	弥生Ⅱか	底径7.0~7.4(完)	外面:ハケメ(7条/cm)、底面未調整? 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶい緑			谷1	18-1	
1178	366		弥生土器	甕	弥生Ⅱか	口縁破片	外面:口縁端部刻目	10YR6/3 にぶい黄橙			谷1	18-1	
1179	366		弥生土器	水差し	弥生Ⅳ	把手破片	外面:貫通孔2、摩滅 内面:摩滅	10YR6/3 にぶい黄橙	生駒山西麓産		谷1	18-2	
1180	366		弥生土器	甕	弥生Ⅳ-Ⅲか	口径17.6(1/12) 底径5.2~5.6	外面:ハケメ(4条/cm)、ヘラケズリ 内面:ハケメ(4条/cm)	5YR6/3 にぶい緑			谷1	18-2	
1181	366		弥生土器	底甕	弥生Ⅱ初	底径9.2(完)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/3 にぶい緑			谷1	18-2	
1182	366		弥生土器	甕	弥生Ⅰ	底径8.2(完)	外面:ナデ、底面ナデ 内面:ユビオサエナデ	2.5Y7/3 浅黄			谷1	18-2	
1183	366		弥生土器	甕	弥生Ⅱか	口径15.0(1/5)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙			谷1	18-1	
1184	366		弥生土器	甕	弥生Ⅴ	口径14.4(1/2弱)	外面:ハケメ後ヨコナテ、タタキ(3条/cm)、スス付着 内面:摩滅	7.5YR6/2 灰褐			谷1	18-2	
1185	366		縄紋土器	深鉢	縄紋後期後半	口縁破片	外面:摩滅 内面:沈線文1、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙		縄文包含層直上シルト層	谷1	6-10	
1186	366		縄紋土器	深鉢	縄紋後期後半~末	口縁破片	外面:ナデ、スス付着 内面:ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙		縄文包含層直上シルト層	谷1	6-10	
1187	366		縄紋土器	深鉢	縄紋後期~晩期	口縁破片	外面:摩滅 内面:ナデ?	10YR3/2 黒褐		縄文包含層直上シルト層	谷1	6-10	
1188	366	81	縄紋土器	鉢	宮滝式(縄紋後期後葉)	口径29.0 核部1/12	外面:凹線文3、扇形圧痕文、ナデ 内面:ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙		縄文包含層直上シルト層	谷1	6-10	
1189	366		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半	底径6.0(1/7)	外面:摩滅、ヘラケズリ、ナデ? 内面:摩滅	10YR5/1 褐灰		縄文包含層直上シルト層	谷1	6-10	
1190	366		縄紋土器	深鉢	長原式(縄紋晩期後葉)	口縁破片	外面:刻目凸帯1、摩滅 内面:摩滅	10YR4/2 灰黄褐	生駒山西麓産		谷1	9-3	
1191	366	86	石製品	石鏃	弥生	長4.0 幅2.4 厚0.7 重さ5.53g	有変型		サヌカイト		谷1	9-3	
1192	366		縄紋土器	深鉢	滋賀里Ⅲa式(縄紋晩期前葉)	口縁破片	外面:ヘラケズリ?、二枚貝条痕、スス付着 内面:ナデ	2.5Y6/2 灰黄	生駒山西麓産?		谷1	11-1	
1193	366		縄紋土器	注口土器?	縄紋後期	破片	外面:刺突文?、刺突文、凹線文1 内面:ナデ	10YR4/1 褐灰		下層トレンチ断面1層	谷1	11-3	
1194	366	81	縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半か	口径25.8 底径4.4~4.7(完)	外面:貝殻条痕一部ヘラケズリ、スス付着 内面:板ナデ?、炭化物付着	10YR5/2 灰黄褐		下層トレンチ断面3層	谷1	11-3	
1195	366		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半	口縁破片	外面:二枚貝条痕 内面:ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙		下層トレンチ断面4層	谷1	11-3	
1196	366		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半	口縁破片	外面:条痕 内面:ナデ	2.5Y7/3 浅黄		下層トレンチ断面4層	谷1	11-3	
1197	366		縄紋土器	深鉢	篠原式か	破片	外面:刻目文、摩滅 内面:摩滅、ヘラミガキ?	2.5Y6/3 にぶい黄	縄紋晩期中葉か	下層トレンチ断面4層	谷1	11-3	
1198	366		縄紋土器	浅鉢	篠原式か	口径32.0(1/8強)	外面:沈線文、ヘラミガキ?、刻目文、ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	2.5Y6/2 灰黄	縄紋晩期中葉か	下層トレンチ断面4層	谷1	11-3	
1199	366		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半か	底径5.0(1/5)	外面:条痕、薄くスス付着 内面:ナデ、炭化物付着	10YR7/3 にぶい黄橙		下層トレンチ断面4層	谷1	11-3	
1200	366		縄紋土器	深鉢	縄紋後期~晩期	底径6.2(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙		下層トレンチ断面4層	谷1	11-3	
1201	366		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半	破片	外面:二枚貝条痕、スス付着 内面:二枚貝条痕、ナデ	2.5Y7/2 灰黄		下層トレンチ断面4層	谷1	11-4	
1202	367		弥生土器	甕	弥生Ⅰ-Ⅲ	口径19.7(1/5) 底径9.0	外面:削り出し凸帯上沈線文6条、6条+α、ヘラミガキ、ハケメ後ヘラミガキ、黒色物質塗布 内面:ヘラミガキ、黒色物質塗布	10YR7/2 にぶい黄橙		谷部上層下部	谷1	24-1	
1203	367		縄紋土器	深鉢	縄紋後期末~晩期初	底径4.4~4.8(完)	外面:貝殻?条痕、ナデ 内面:ナデ、工具痕	5YR5/2 灰褐		谷部中層	谷1	24-1	
1204	367		縄紋土器	深鉢	縄紋後期末~晩期初	底径7.2(1/2)	外面:摩滅、底面ナデ 内面:ナデ	10YR6/1 褐灰		谷部中層	谷1	24-1	
1205	367		縄紋土器	深鉢	滋賀里Ⅲa~篠原(古)式	口縁破片	外面:貝殻条痕 内面:ナデ	10YR6/2 灰黄褐	縄文晩期前葉~後葉	谷部中層	谷1	24-1	
1206	367		縄紋土器	深鉢	滋賀里Ⅲa式	口縁破片	外面:条痕 内面:ナデ、スス付着	10YR5/2 灰黄褐	縄紋晩期前葉	谷部中層	谷1	24-1	
1207	367		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半?	口縁破片	外面:ナデ後一部ヘラミガキ 内面:ナデ後一部ヘラミガキ	2.5Y5/1 黄灰		谷部中層	谷1	24-1	
1208	367		縄紋土器	有文浅鉢?	滋賀里Ⅱ~Ⅲa式	破片	外面:沈線文8条+α 内面:ヘラミガキ	2.5Y4/2 暗灰黄	縄紋晩期前葉、生駒山西麓産	谷部中層	谷1	24-1	
1209	367		縄紋土器	有文浅鉢?	滋賀里Ⅱ~Ⅲa式	破片	外面:沈線文6条+α、条痕? 内面:ヘラミガキ?	10YR3/1 黒褐	縄紋晩期前葉	谷部中層	谷1	24-1	
1210	367		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半?	底径5.2(1/3)	外面:条痕、底面ナデ?、スス付着 内面:工具ナデ?	7.5YR5/1 褐灰		谷部中層	谷1	24-1	
1211	367		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半	底径4.5(完)	外面:ヘラケズリ、ナデ、底面ナデ 内面:ナデ	10YR6/2 灰黄褐		谷部中層	谷1	24-1	
1212	367		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半	底径5.0(1/4)	外面:ヘラケズリ 内面:ナデ、工具痕	7.5YR5/2 灰褐		谷部中層	谷1	24-1	
1213	367		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期前半	底径5.0(完)	外面:ヘラケズリ、底面ナデ? 内面:工具ナデ、工具痕	2.5Y6/1 黄灰		谷部中層	谷1	24-1	
1214	367	85	石製品	石斧		長5.6 幅5.2 厚2.6			玄武岩	谷部中層	谷1	24-1	
1215	367	85	石製品	敲石		長11.2 幅6.6 厚4.2 重さ419.4g	上・下面に叩いた痕跡		正建岩	谷部中層	谷1	24-1	
1216	367	86	石製品	凹み石		長12.3 幅10.8 厚5.3	両面に敲打痕		中粒砂岩	谷部中層	谷1	24-1	
1217	367	87	石製品	サヌカイト片		長3.2 幅3.0 厚0.7 重さ5.61g				谷部中層	平1	24-1	
1218	367	87	石製品	サヌカイト片		長4.5 幅5.2 厚0.7 重さ11.32g	表面:自然面残			谷部中層	谷1	24-1	
1219	367	87	石製品	サヌカイト片		長5.0 幅7.4 厚1.9 重さ66.71g	表面:自然面残			谷部中層	谷1	24-1	
1220	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期後半	底径4.6(1/5強)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR6/2 灰黄褐			谷3	24-5	
1221	368	85	石製品	石斧		長7.8 幅5.6 厚2.7			玄武岩	谷3	24-5		
1222	368	82	石製品	砥石		長7.6 幅4.2 厚3.9	4面使用		流紋岩	谷3	24-5		
1223	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径2.6(1/2弱)	外面:ヘラケズリ(摩滅) 内面:摩滅	10YR6/2 灰黄褐			谷3	25-2	
1224	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径5.0(完)	外面:摩滅、一部スス付着 内面:摩滅	7.5YR6/2 灰褐			谷3	25-2	
1225	368	85	石製品	石棒		長11.75 幅2.4 厚1.2	裏:欠損		頁岩	谷3	25-2		
1226	368		弥生土器	甕	弥生Ⅰ-4か	底径13.6(1/6)	外面:ハケメ、底面ナデ 内面:板ナデ	10YR6/2 灰黄褐			谷3	25-2	
1227	368		縄紋土器	底甕	縄紋晩期か	底径7.4(1/3)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR6/1 褐灰			谷3	25-2	
1228	368		弥生土器	甕	弥生Ⅰ-4か	底径7.4(1/2)	外面:口縁端部刻目、ハケメ、粘土接合面 内面:摩滅	10YR4/2 灰黄褐			谷3	25-2	
1229	368		縄紋土器	深鉢	滋賀里Ⅲa式か	口縁破片	外面:条痕後ナデ、工具痕、スス付着 内面:工具ナデ	10YR6/2 灰黄褐	縄紋晩期前葉か		谷3	25-2	
1230	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径5.2(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/2 にぶい黄橙			谷3	25-2	
1231	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	口縁破片	外面:条痕? 内面:凹線文1	10YR6/1 褐灰			谷3	25-2	
1232	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径3.8(完)	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y5/1 黄灰	生駒山西麓産		谷3	25-2	
1233	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径4.0(1/2)	外面:摩滅、一部スス付着	10YR5/1 褐灰			谷3	25-2	
1234	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径4.8(1/2強)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR5/1 褐灰	生駒山西麓産		谷3	25-2	
1235	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径破片	外面:条痕? 内面:ナデ	7.5YR5/1 褐灰	生駒山西麓産		谷3	25-2	
1236	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径破片	外面:ヘラケズリ	5YR6/2 灰褐			谷3	25-2	
1237	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径4.8(2/3)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR5/1 褐灰			谷3	25-2	
1238	368		縄紋土器	深鉢	縄紋晩期か	底径5.0(完)	外面:ヘラケズリ(摩滅)、薄くスス付着 内面:工具ナデ	10YR5/1 褐灰			谷3	25-2	
1239	368	84	石製品	大型蛤刃石斧	弥生	長8.1 幅6.15 厚4.15			玄武岩		谷3	25-2	
1240	368	86	石製品	凹み石		長7.3 幅7.25 厚5.0	両面に敲打痕		流紋岩質溶結凝灰岩		谷3	25-2	
1241	79		土師器	製塩土器	8~9世紀	口縁破片	外面:ユビオサエ、モミ痕? 内面:ナデ、モミ痕?	7.5YR7/2 明褐灰		2~3層	谷1	9-3	
1242	79		土師器	甕		口縁破片	外面:接合面	10YR6/2 灰黄褐		3~2層	谷1	11-1	
1243	81		磁器	白磁碗	13世紀前半か	高台径6.2(1/4)	外面:露胎、スス付着 内面:施釉(粗い貫入)	2.5YR/2 灰白		華南沿海窯系Ⅳ類	2層	谷2	7-4
1244	81		磁器	青磁碗	14~15世紀前半?	高台径5.7(3/4)	外面:施釉、蓮弁文、底面に付着物 内面:施釉、圈線、蕉?文様	10Y6/2 オリーブ灰		龍泉窯系Ⅳ類	1・2層	谷2	15-3

* 包含層はbが付いていないものはすべてa層である

報告書抄録

ふりがな	きさべみなみいせきさん ありいけいせき かみきさべいせき うえのやまいせき							
書名	私部南遺跡Ⅲ 有池遺跡 上私部遺跡 上の山遺跡							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第215集							
編著者名	三好孝一 奥和之 陣内暢子 村上富喜子 後藤信義 森本徹 若林幸子 市村慎太郎 佐伯博光							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2011年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
きさべみなみいせき 私部南遺跡	大阪府交野市 向井田一丁目・二丁目 交野市私部南一丁目 目・二丁目・向井田 一丁目	27320	36	34° 47' 04"	135° 40' 59"	2006年9月1 日～2010年3 月31日	20, 224㎡	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設
ありいけいせき 有池遺跡	大阪府交野市青山四丁目地内	27320	22	34° 46' 53"	135° 41' 35"	2009年4月1日～2010年3月31日	136㎡	
かみきさべいせき 上私部遺跡	大阪府交野市青山二丁目地内	27320	64	34° 47' 19"	135° 41' 27"	2009年4月1日～2010年3月31日	35㎡	
うえのやまいせき 上の山遺跡	大阪府枚方市茄子作南町 交野市私部西五丁目 交野市私部西五～七丁目	27210・ 27320	65	34° 46' 50"	135° 40' 17"	2009年4月1日～2010年3月31日	1, 514㎡	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
私部南遺跡	生産集落	室町～平安奈良～飛鳥 古墳時代 弥生時代 縄文時代 後期旧石器時代	掘立柱建物・田畠 掘立柱建物・堅穴建物 掘立柱建物・堅穴建物・鍛冶関連遺構 水田・シガラミ 土坑	陶磁器・輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師器・須恵器・土製品・動物形土製品・瓦・金属製品・木製品・石製品・鍛造剥片・粒状滓・鈹滓・サヌカイト製細石刃核・角錐状石器		後期旧石器時代の細石刃核・角錐状石器出土 弥生時代後期のシガラミを検出 古墳時代中期から後期の堅穴建物・掘立柱建物を検出 鍛冶関連遺構検出 中世の掘立柱建物・田畠跡を検出		
有池遺跡	集落生産	中世	田畠 掘立柱建物	陶磁器・瓦器・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦		既往の調査で検出した、居住域の範囲の広がりを確認		
上私部遺跡	生産	中世	田畠	陶磁器・瓦器・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦		既往の調査で検出した、谷地形の範囲確認		
上の山遺跡	生産集落 道路遺構	中世	掘立柱建物・土坑 道路遺構	陶磁器・瓦器・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦		東高野街道		
要約	<p>サヌカイト製細石刃核と細石刃の可能性を持つサヌカイトの剥片、サヌカイト製角錐状石器が出土した。細石刃核は大阪府内では、羽曳野市に所在する城山遺跡、菅田白鳥遺跡、青山遺跡に続いて4例目となった。河内湖縁辺から内陸部に入ったこの地域でも、弥生時代前期中段階の後半にはすでに弥生文化が定着していたという徴証が得られた。また、弥生時代後期では、シガラミを併用した灌漑用水路を設けている状況が明らかとなり、この地における水利施設の維持管理形態の変遷をたどることを可能とする具体的な資料を提示することができた。</p> <p>古墳中期には、中頃を境として堅穴建物を中心とする集落が形成されはじめる。初期須恵器や木製品も多数出土し、さらに、調査地全域から少量ではあるものの縄文紋や格子目タタキが施される韓式系土器もみられる。後半以降の堅穴建物の中には、輪の羽口や鉄滓、鍛造剥片・粒状滓を伴う例や、鍛冶炉が検出されている。特徴的な遺物には角杯形土器とおぼしき須恵器の破片があり、全国で23例目、府内では東大阪市西岩田遺跡に続く2例目となった。上私部遺跡の新羅土器と共に、当時の国際交流を示す資料として重要視される。</p>							

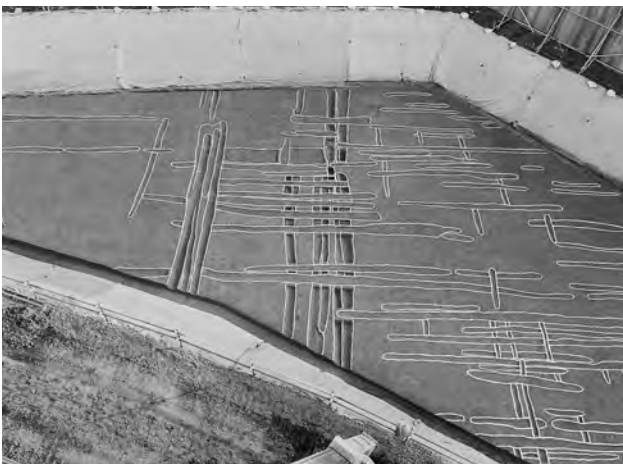
写真図版



1. 第1-1面 (1区東半: 東から)



5. 第1-3面 (3区北半: 南から)



2. 第1-1面 耕作痕全景 (1区東半: 北から)



6. 第2-1面 (3区北半: 東から)



3. 第1-1面 (7区: 北から)



7. 第2-1面 (5区: 南西から)



4. 第1-2面 (5区南半: 西から)



8. 第3-1面 (2区北半: 東から)



1. 第3-1面 (2区南半:北東から)



5. 第3-1面 (7区:東から)



2. 第3-1面 (3区:南から)



6. 第3-1面 (7区:北から)



3. 第3-1面 (5区:南から)



7. 竪穴建物1 断面 (1区:南から)



4. 第3-1面 (6区:南から)



8. 竪穴建物1 全景 (1区:北から)



1. 竪穴建物1～3 全景（1区：北から）



2. 竪穴建物1 カマド検出状況（1区：北から）



3. 竪穴建物1 カマド断面（2区：北から）



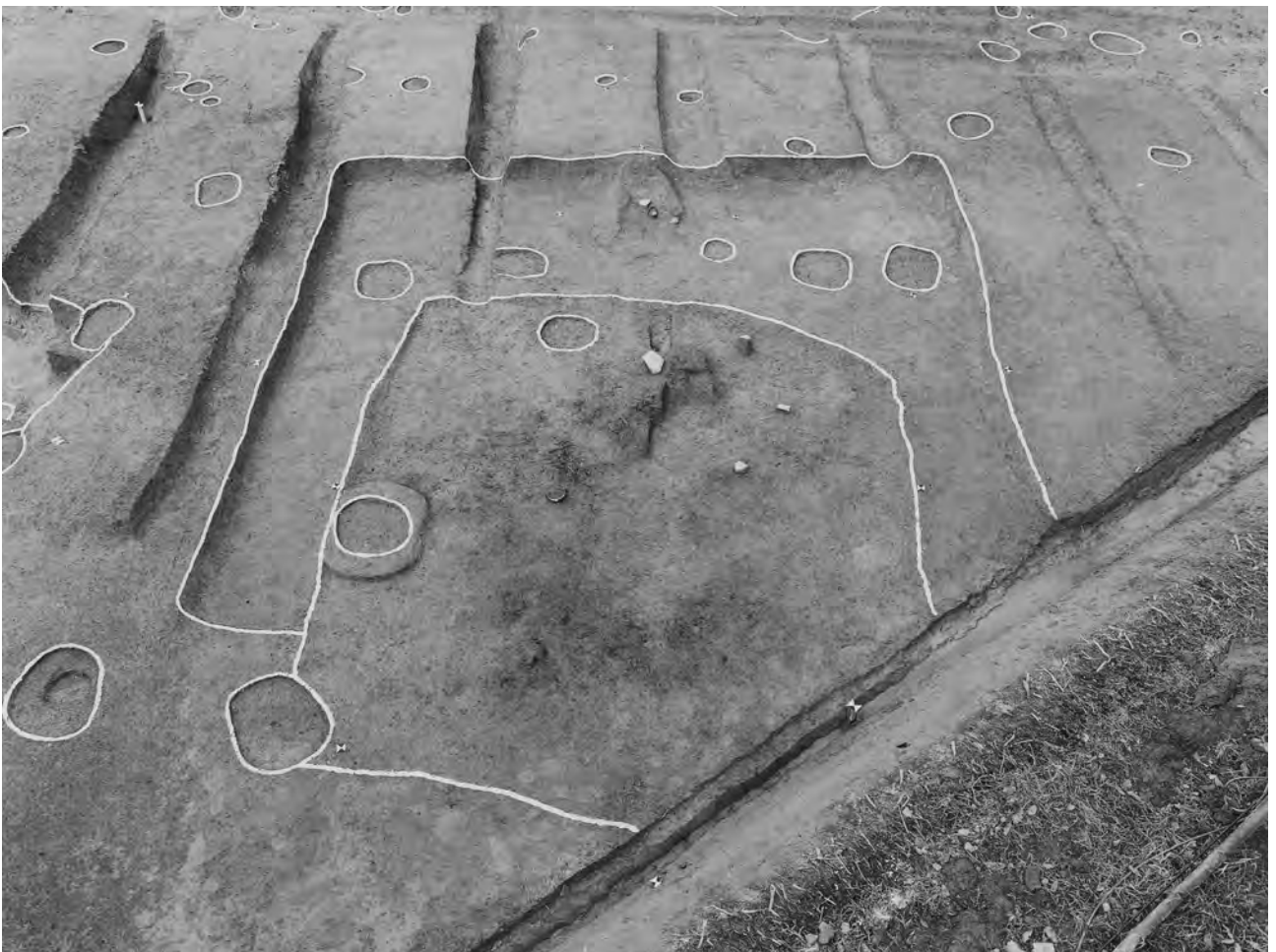
4. 竪穴建物1 カマド全景（1区：北から）



5. 竪穴建物1 柱穴検出状況全景（1区：南から）



1. 竪穴建物2・3 断面（1区：南から）



2. 竪穴建物2 全景（1区：南から）



1. 竪穴建物2
カマド内遺物
出土状況
(1区:南から)



2. 竪穴建物2
カマド内土器
設置状況
(1区:南から)



3. 竪穴建物2
カマド内土器
設置状況
(1区:南から)



1. 竪穴建物2 カマド部分 (1区:南から)



5. 竪穴建物2 カマド内遺物出土状況 (1区:南から)



2. 竪穴建物2 カマド断面 (1区:南から)



6. 竪穴建物2 カマド内遺物除去後 (1区:南から)



3. 竪穴建物2 カマド断面 (1区:南から)



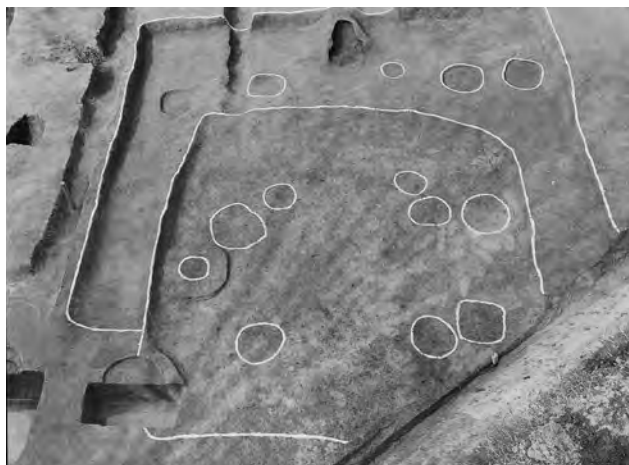
7. 竪穴建物2 カマド断ち割り状況 (1区:南から)



4. 竪穴建物2 カマド断面 (1区:南から)



8. 竪穴建物2 カマド完掘状況 (1区:南から)



1. 竪穴建物3 柱穴検出状況 (1区:南から)



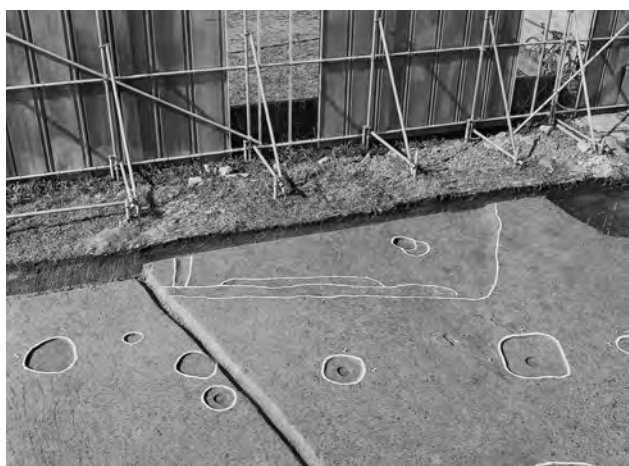
5. 掘立柱建物1・2・3 全景 (2区:北東から)



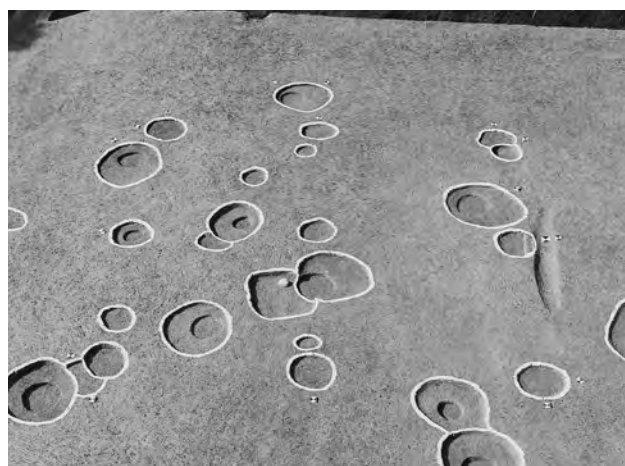
2. 竪穴建物4 全景 (1区:北東から)



6. 掘立柱建物1 全景 (2区:南東から)



3. 竪穴建物5 全景 (2区:東から)



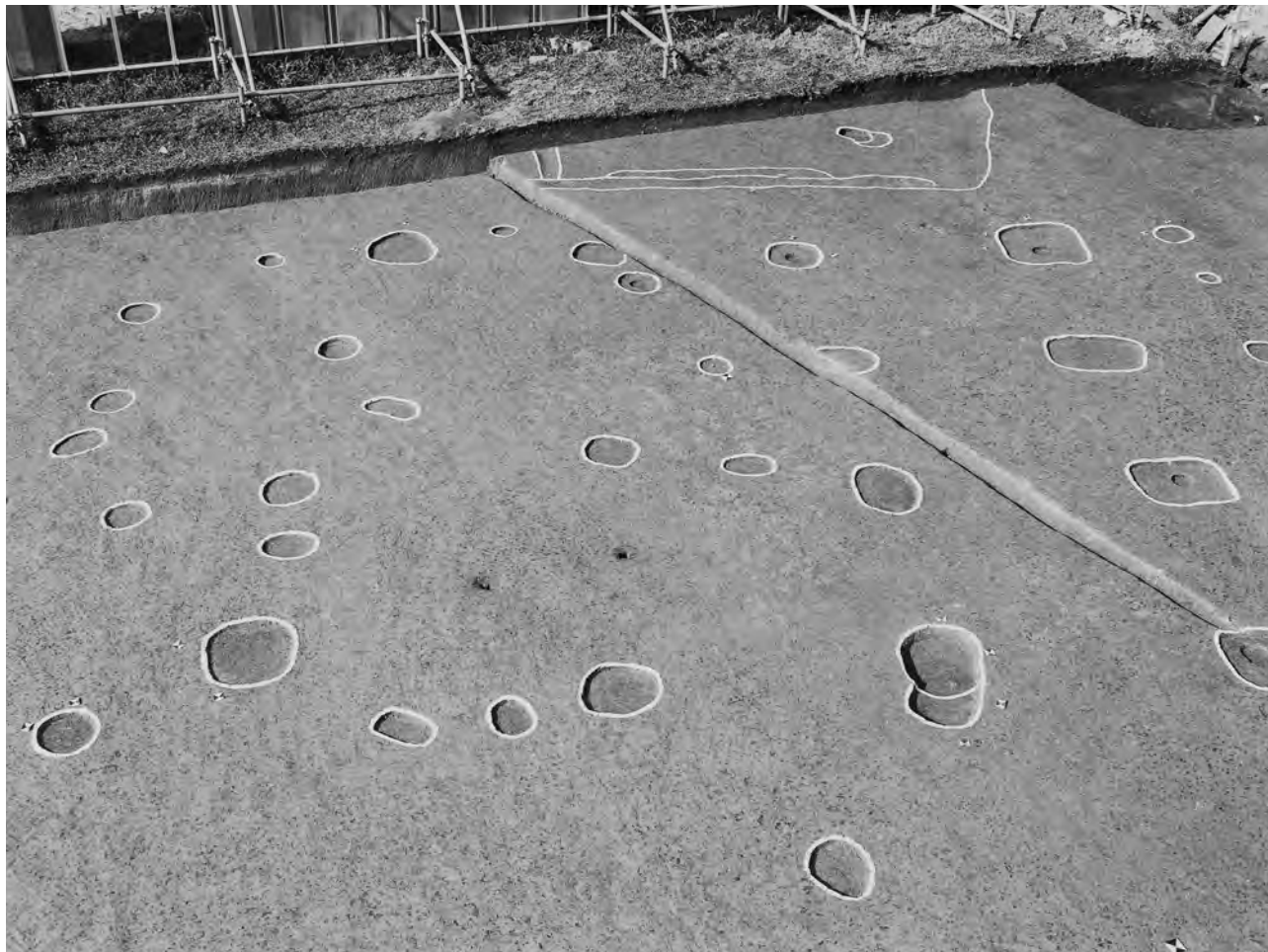
7. 掘立柱建物2 全景 (2区:東から)



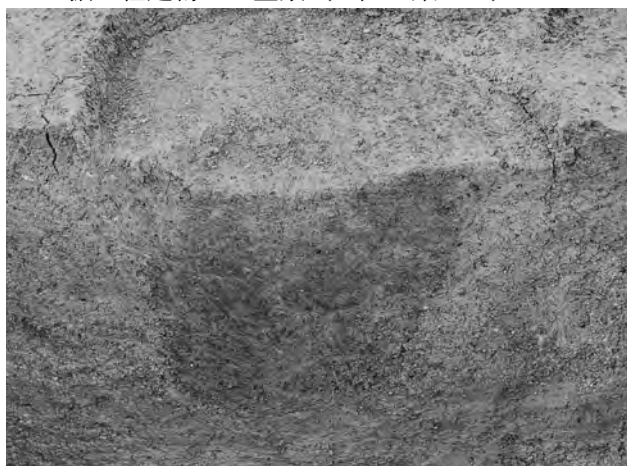
4. 掘立柱建物1・2・3・16、143溝 全景 (2区:北東から)



8. 掘立柱建物3 全景 (2区:南東から)



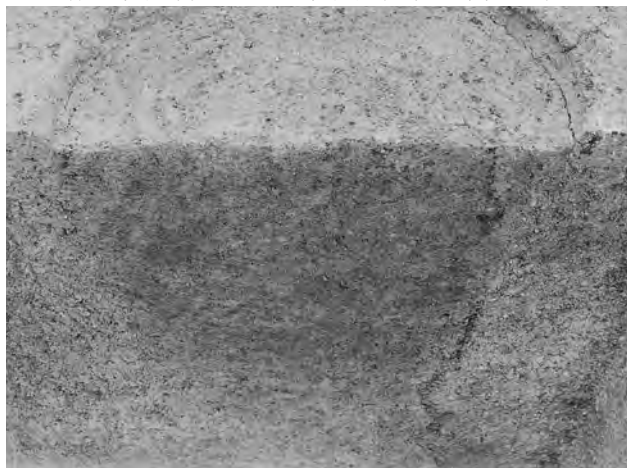
1. 掘立柱建物5 全景 (2区: 東から)



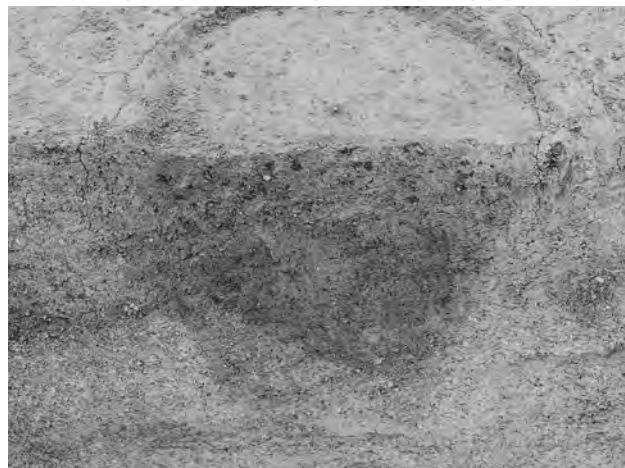
2. 掘立柱建物4 202 柱穴 (2区: 南から)



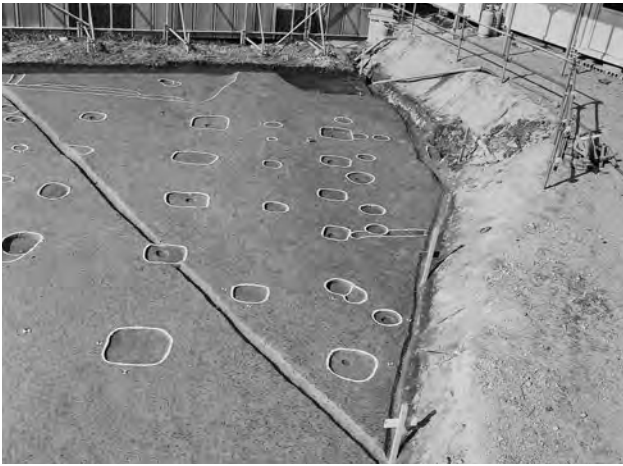
3. 掘立柱建物4 222 柱穴 (2区: 南東から)



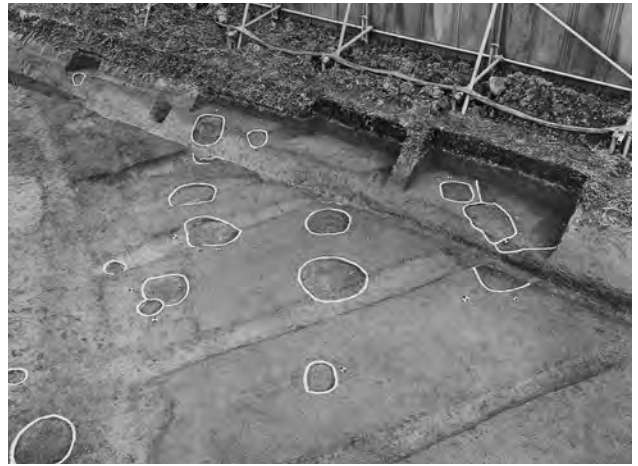
4. 掘立柱建物5 203 柱穴 (2区: 北から)



5. 掘立柱建物5 227 柱穴 (2区: 南から)



1. 掘立柱建物4 全景(2区:東から)



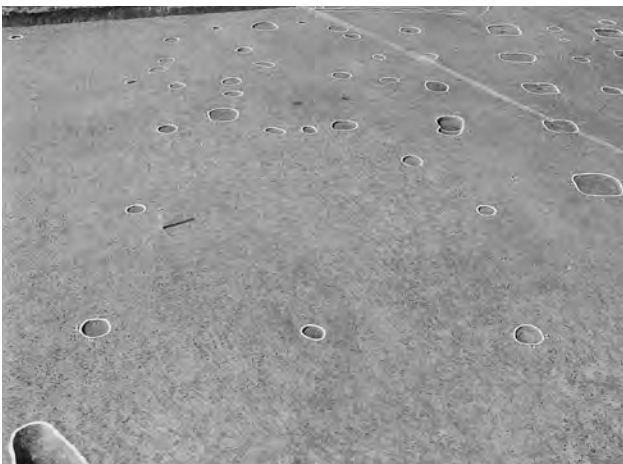
5. 掘立柱建物11・12 全景(1区:北西から)



2. 掘立柱建物5・6、柱列3・4 全景(2区:東から)



6. 掘立柱建物13 全景(1区:西から)



3. 掘立柱建物6 全景(2区:東から)



7. 掘立柱建物15 全景(7区:東から)



4. 掘立柱建物7 全景(1区:東から)



8. 掘立柱建物17 全景(7区:東から)



1. 掘立柱建物7 441柱穴(1区:南東から)



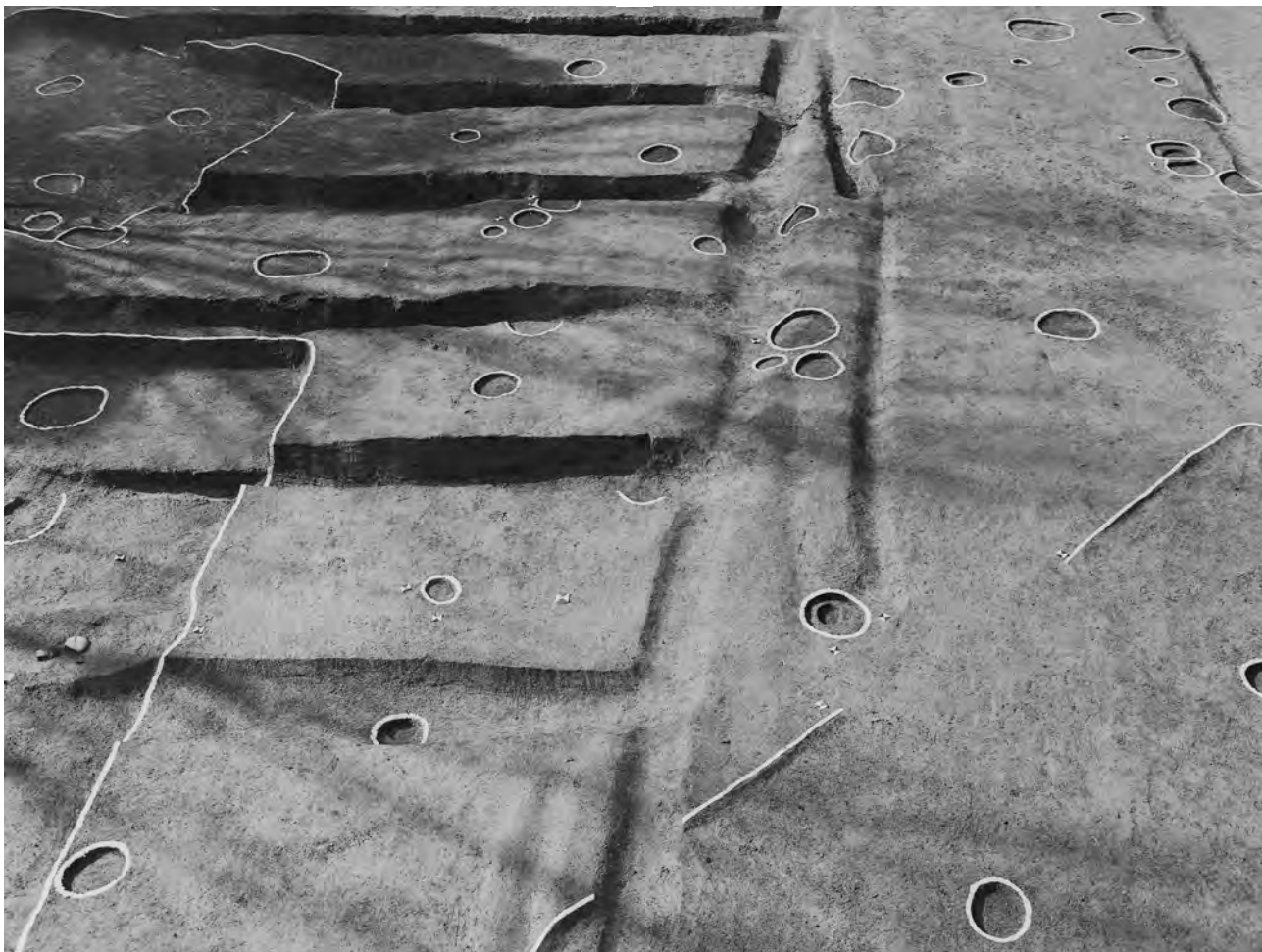
2. 掘立柱建物8 210柱穴(1区:北西から)



3. 掘立柱建物8 215柱穴(1区:南から)



4. 掘立柱建物9 455柱穴(1区:東から)



5. 掘立柱建物10 全景(1区:東から)



1. 掘立柱建物 10 469 柱穴 (1区:南から)



5. 487 ピット (1区:東から)



2. 掘立柱建物 11 253 柱穴 (1区:北から)



6. 175 ピット (2区:南西から)



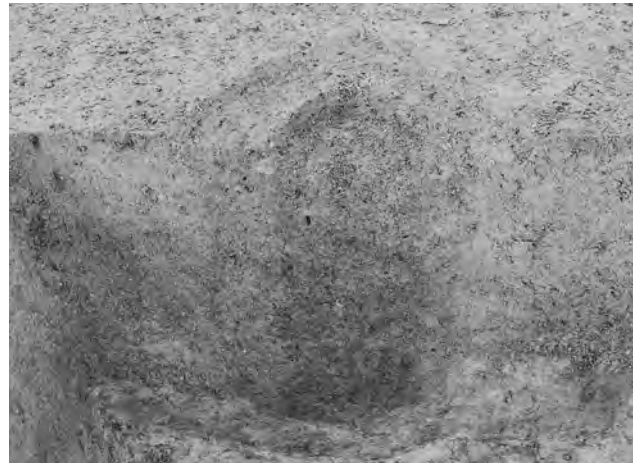
3. 掘立柱建物 14 272 柱穴 (1区:西から)



7. 395 ピット (2区:東から)



4. 掘立柱建物 16 412 柱穴 (2区:南西から)



8. 406 ピット (2区:南東から)



1. 2290 井戸 (6区:北から)



2. 143 溝 (2区:東から)



3. 143 溝西部 遺物出土状況 (2区:南から)



4. 2297 溝 遺物出土状況 (6区:西から)



5. 畦畔検出状況 (5区:南から)



1. 畦畔検出状況 (5区: 東から)



5. 309 c 流路 2340 シガラミ全景 (6区: 南から)



2. 第4面 (6区: 南東から)



6. 2342 流路 2341 シガラミ全景 (6区: 南から)



3. 第5-1面 (3区: 南東から)



7. 第8面 (1区: 北西から)



4. 第5-1面 (6区: 南から)



8. 第8面 (3区: 南から)



1. 308 a 流路 全景 (3区: 東から)



2. 308 a 流路 北側断面 (3区: 北西から)



3. 308 a 流路 南側断面 (3区: 南東から)



4. 308 a 流路 遺物出土状況 (3区: 北西から)



5. 第5-1面 (1区: 西から)



1. 308 b 流路 2339 シガラミ検出状況 (3区: 東から)



2. 308 b 流路 槽出土状況 (3区: 東から)



3. 308 b 流路 丸鋏出土状況 (3区: 東から)



4. 308 a 流路底部 土器出土状況 (3区: 東から)



5. 308 b 流路肩部 土器出土状況 (3区: 東から)



1. 第6面 (6区:南から)



2. 890 土坑 (3区:西から)



3. 890 土坑 檜材出土状況 (3区:西から)



4. 890 土坑 又鋤出土状況 (3区:南から)



5. 890 土坑 全景 (3区:南から)



1. 第8面 (5区:南から)



2. 第7-1層 縦杵出土状況 (3区:南東から)



3. 859 e流路 土器出土状況 (3区:南から)



4. 石棒出土状況 (5区:北から)



5. 第2面 (4区南半:南東から)



1. 第5面 (4区: 北から)



2. 第6面 (4区: 北から)



1. 第8-2面 (4区:北から)



2. 柱列5 全景 (4区:東から)



3. 1005土坑 全景 (4区:南から)



4. 986ピット、2338土坑 全景 (4区:東から)



5. 988土坑 全景 (4区:南から)









463



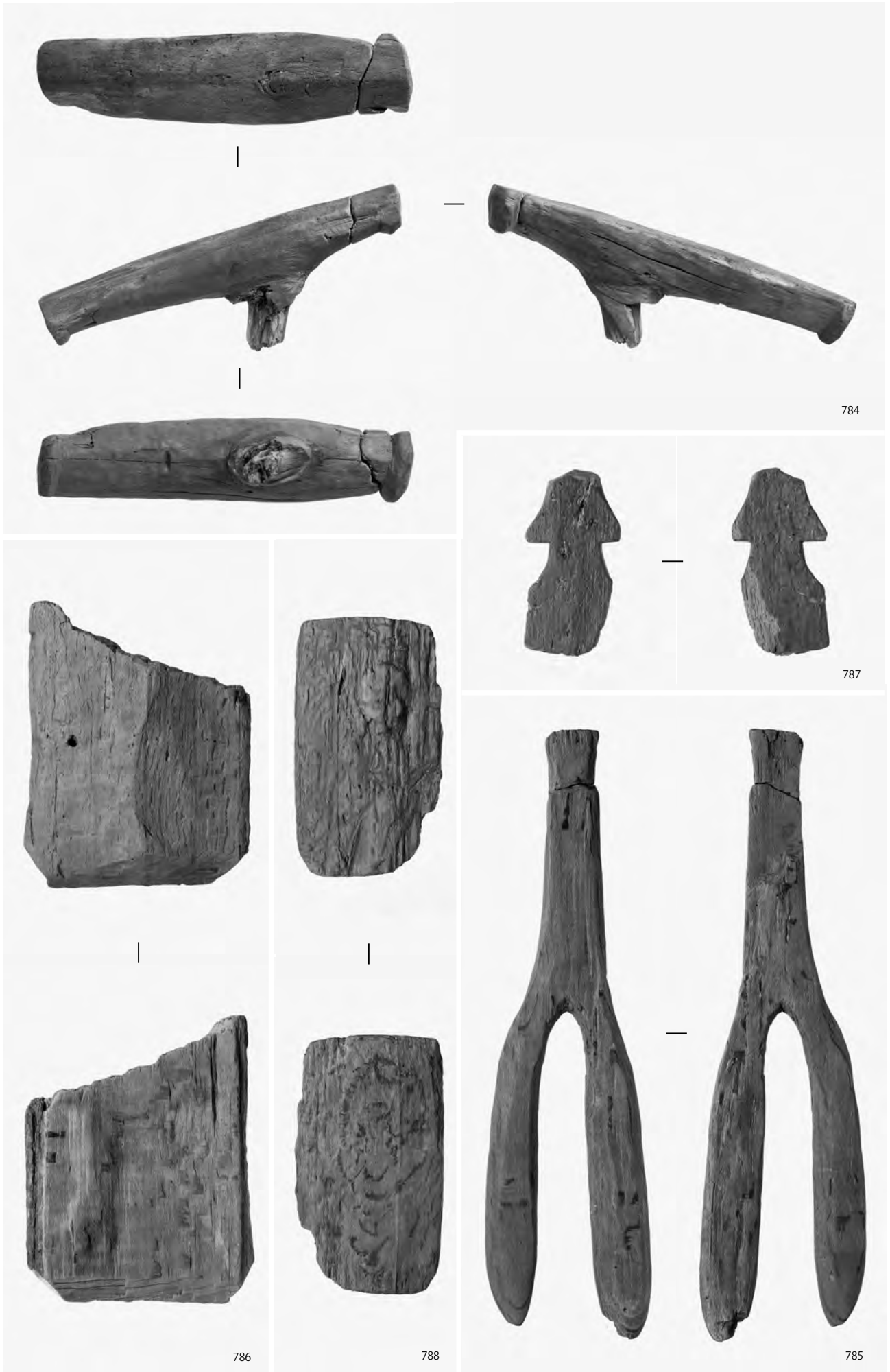
625

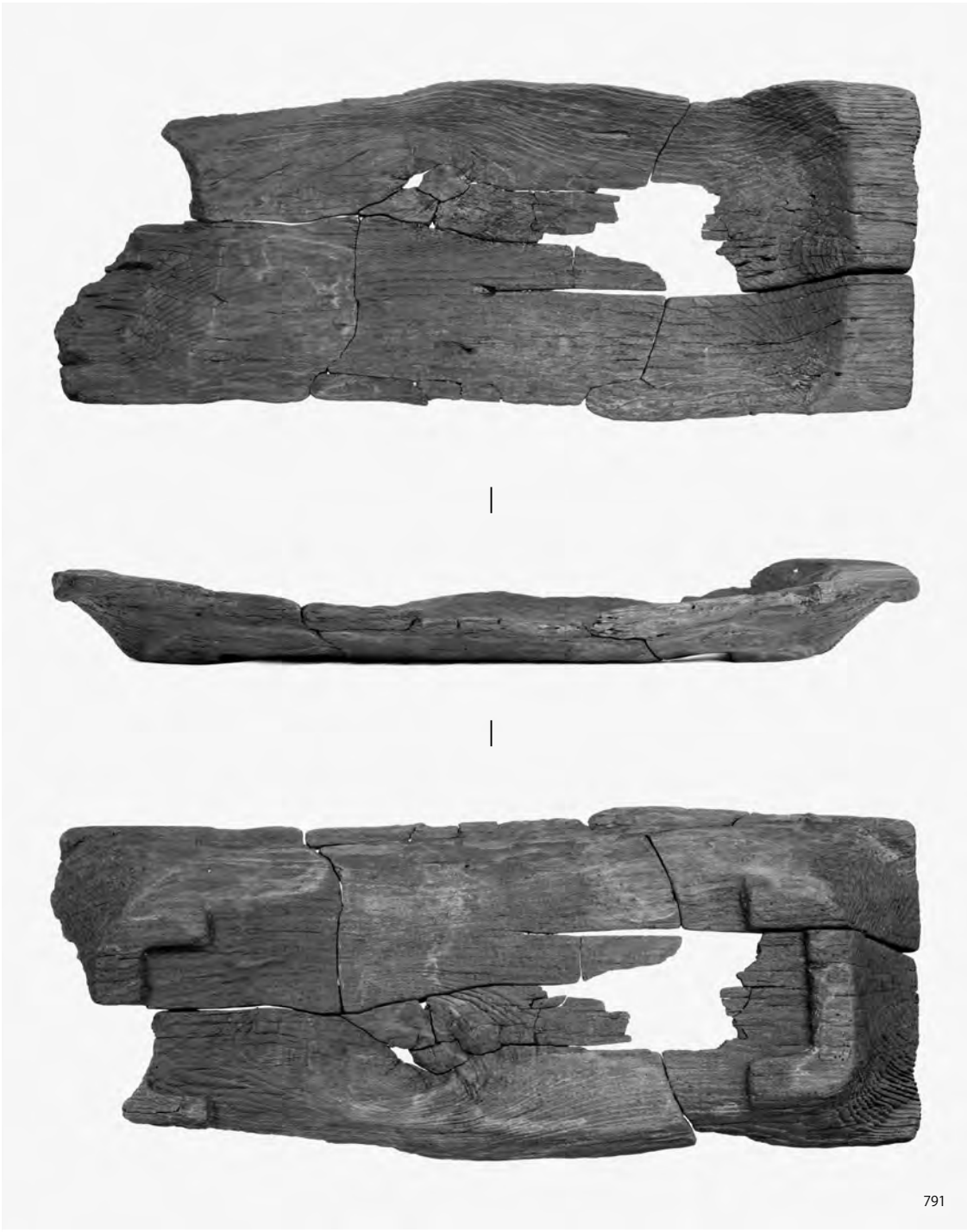


915

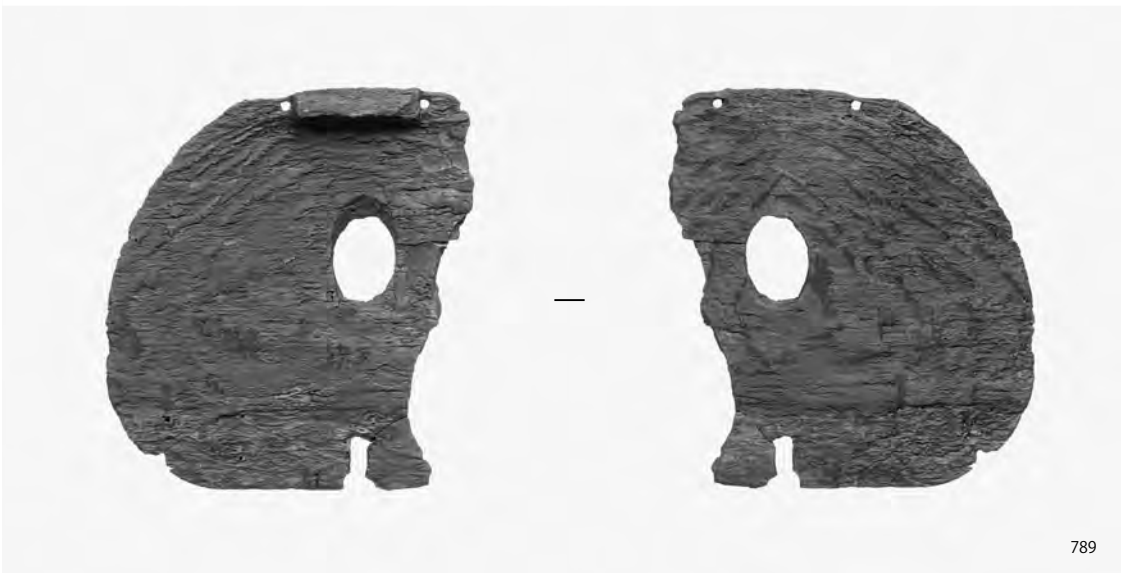


570

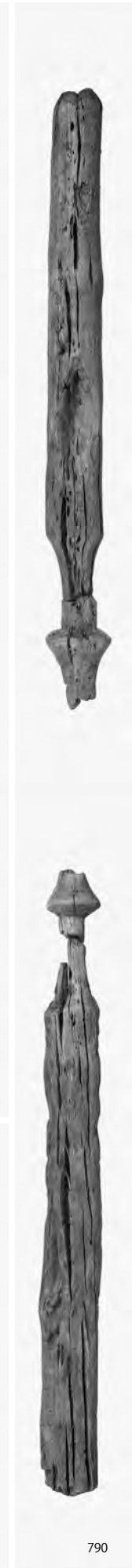




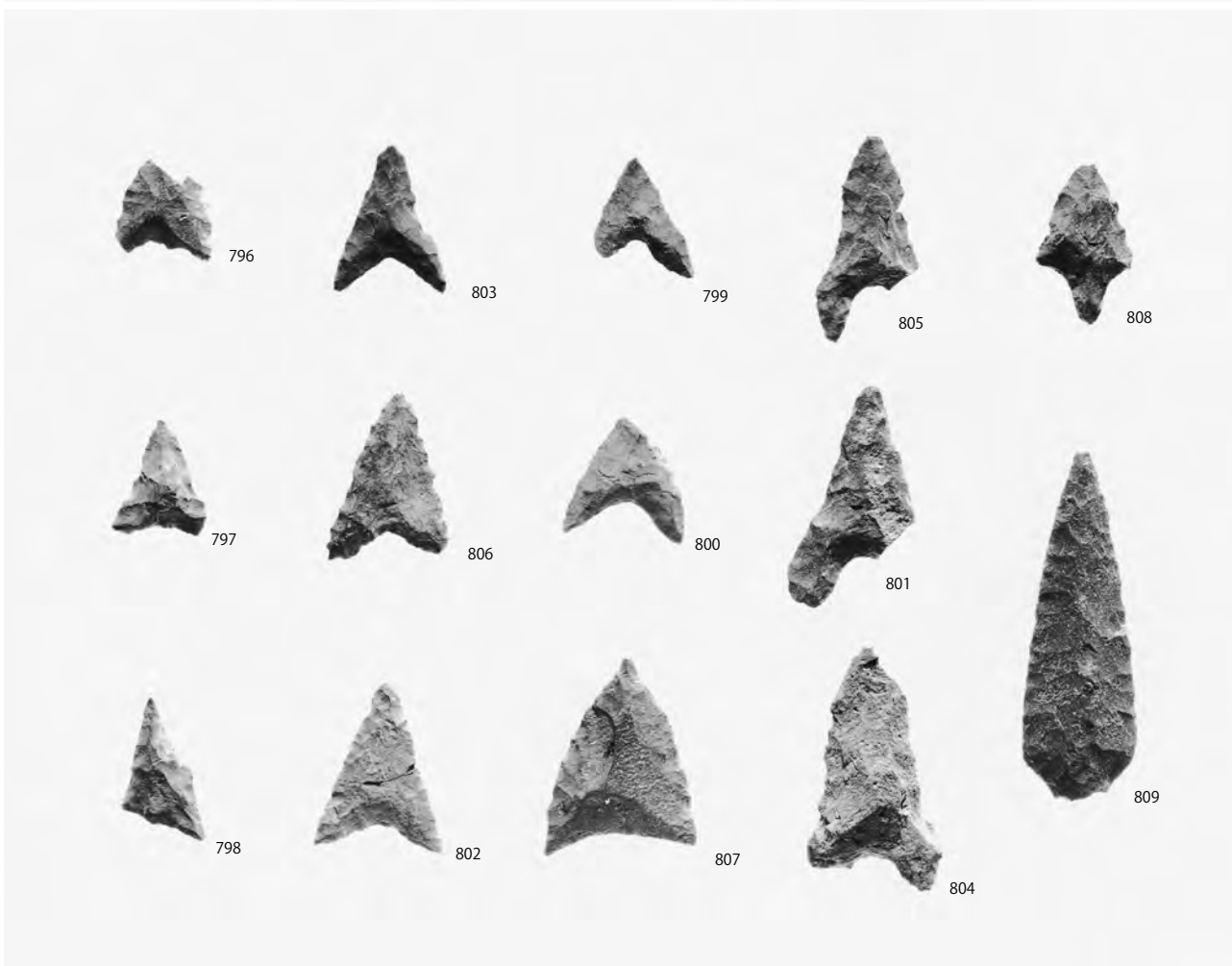
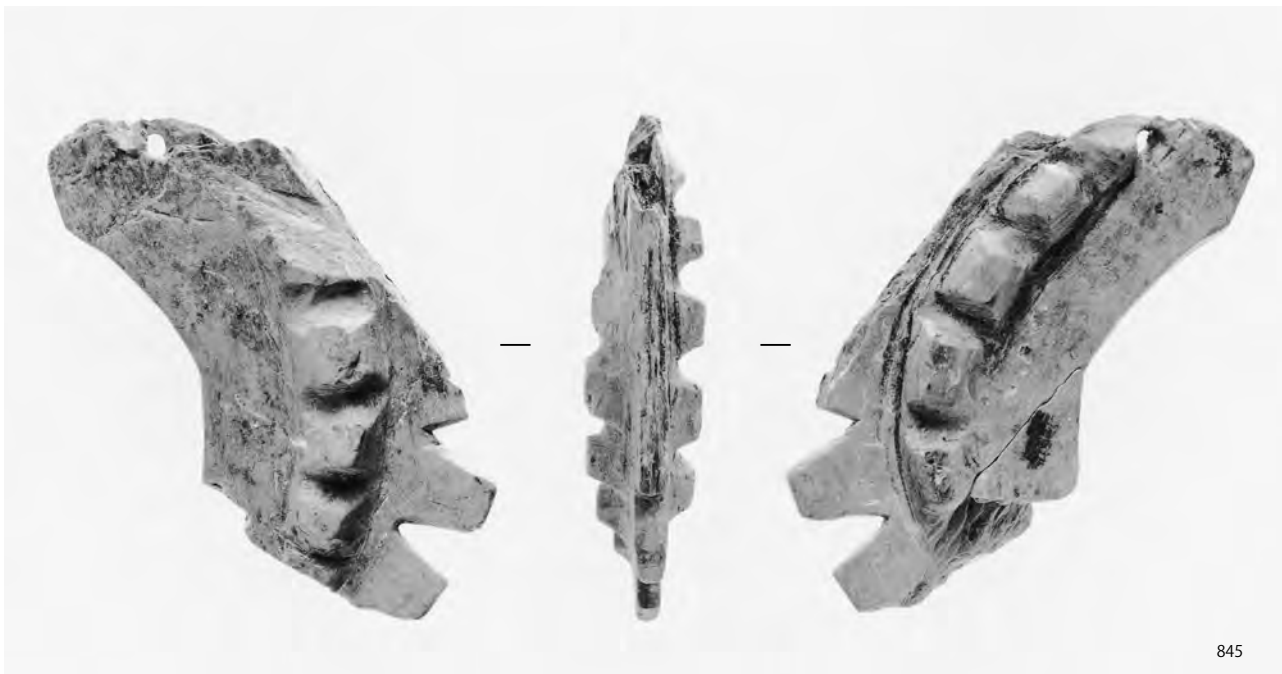
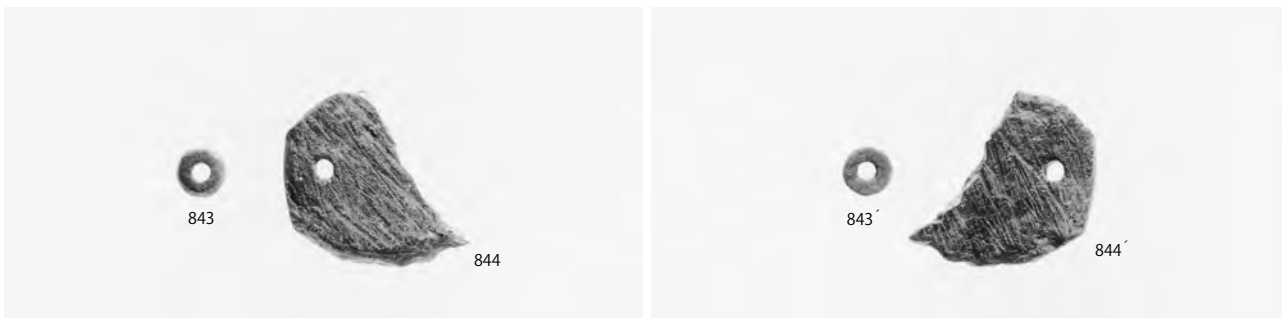
791

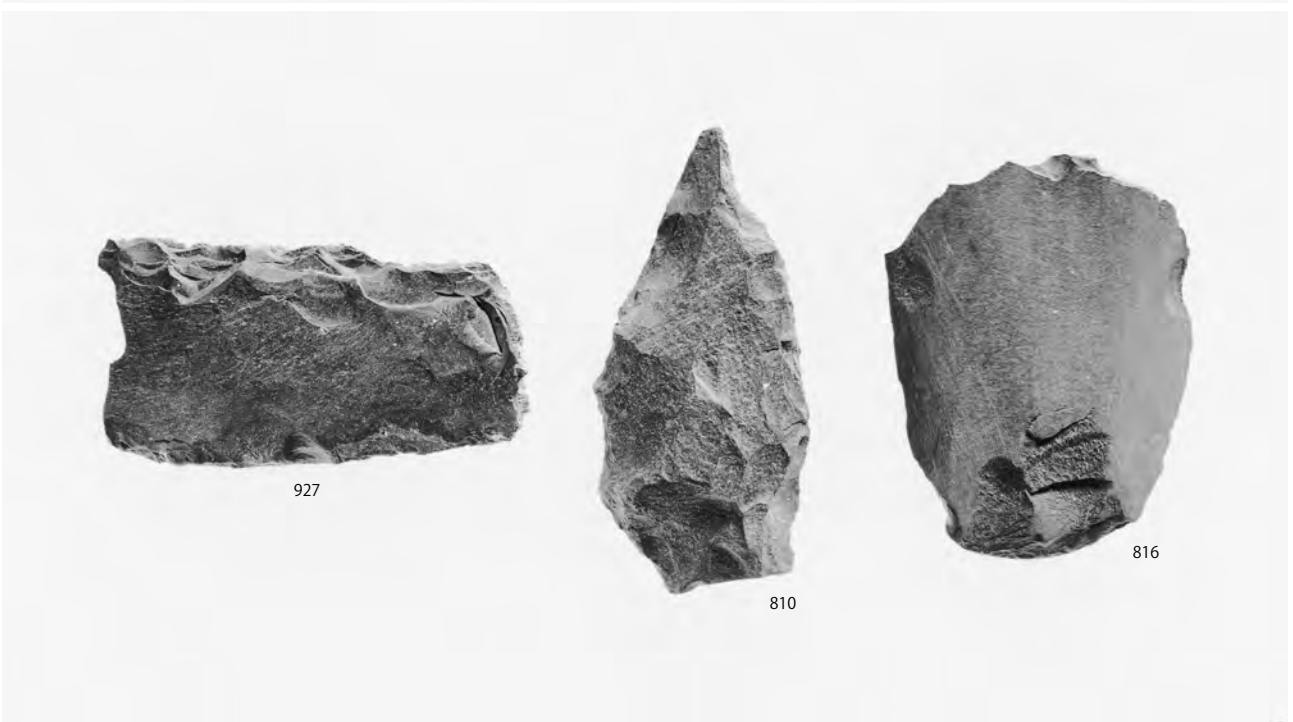


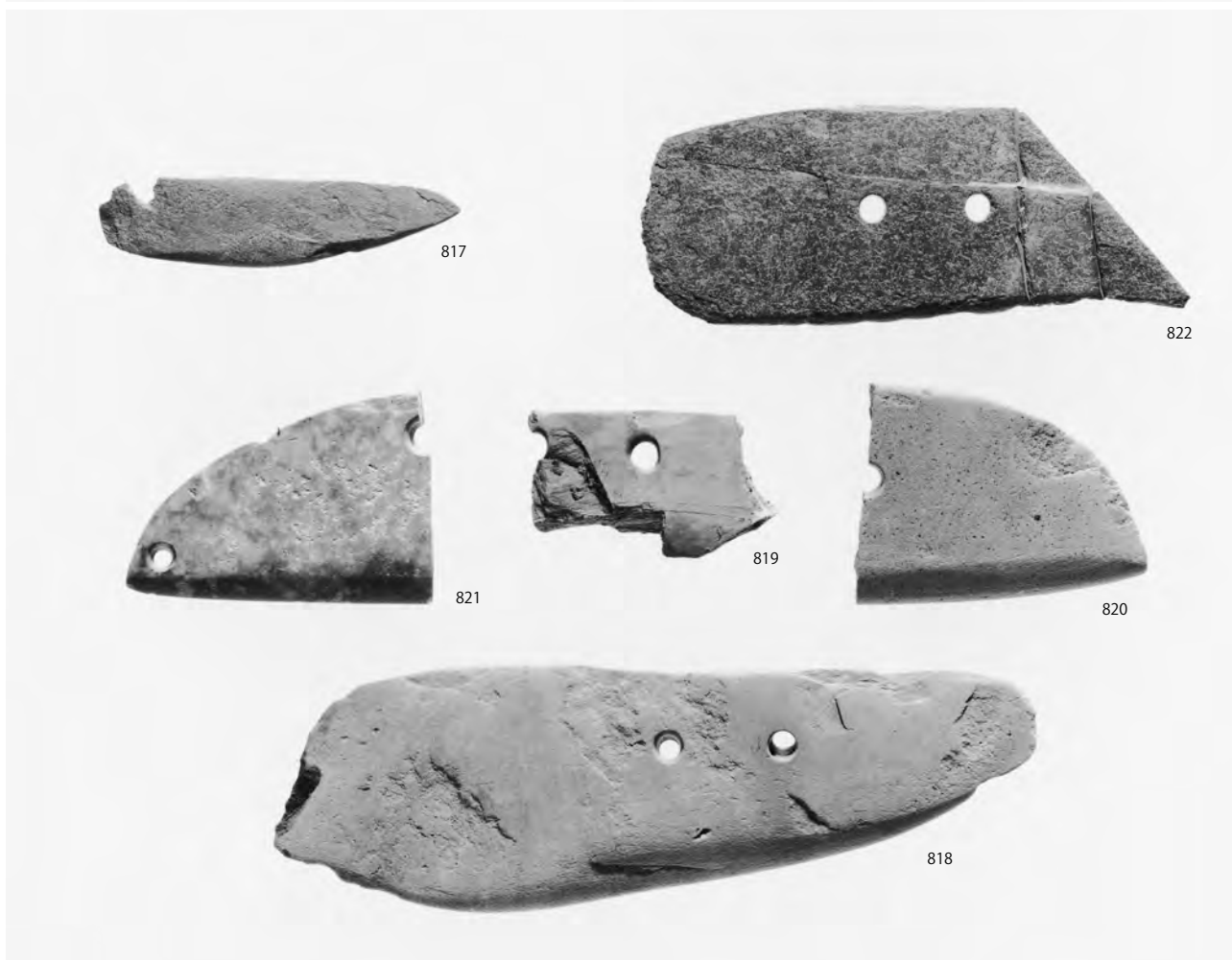
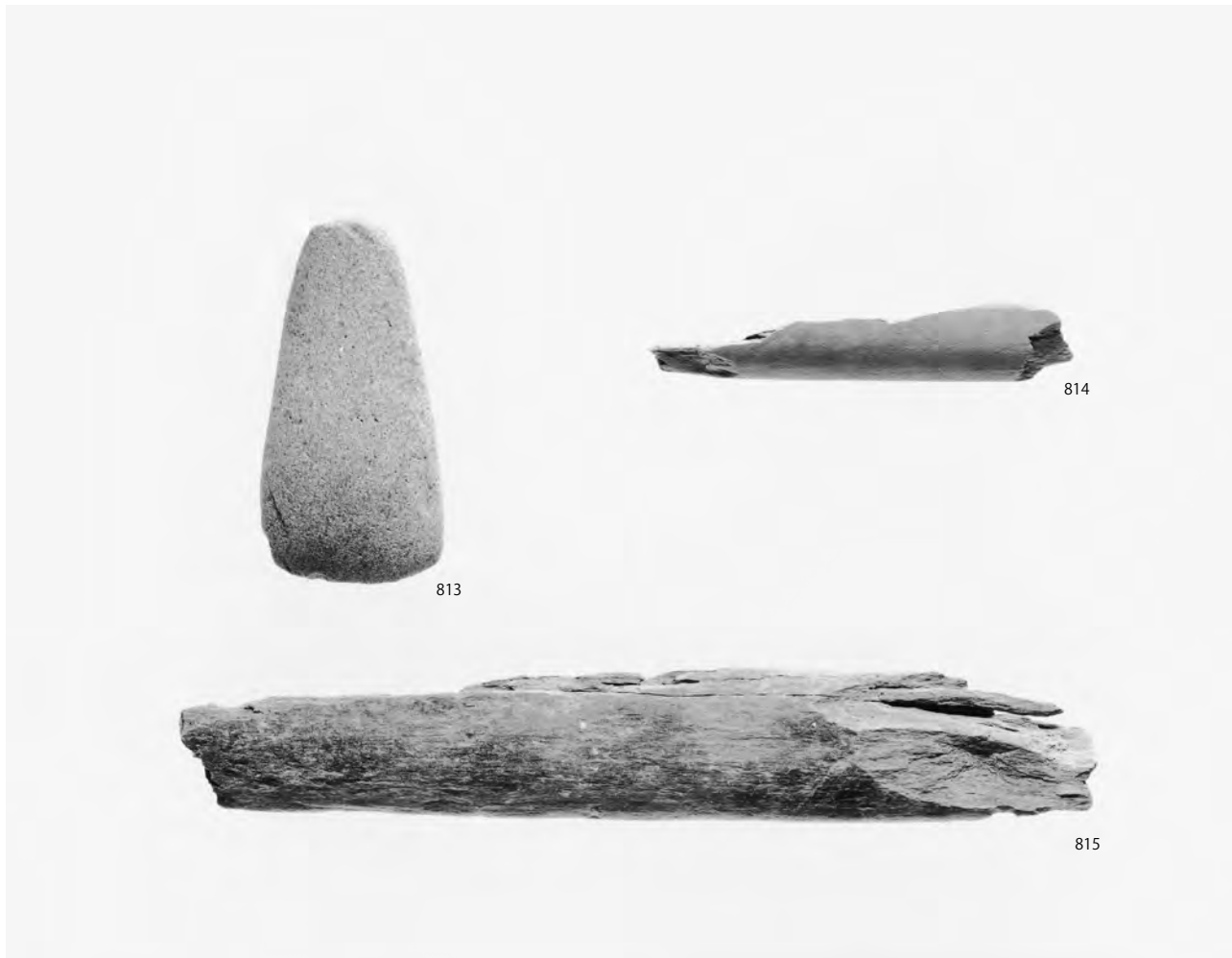
789



790









825



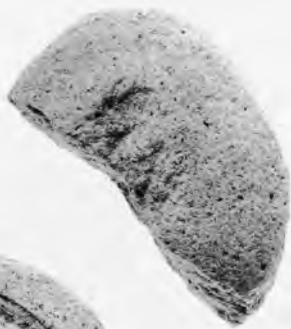
826



824



827



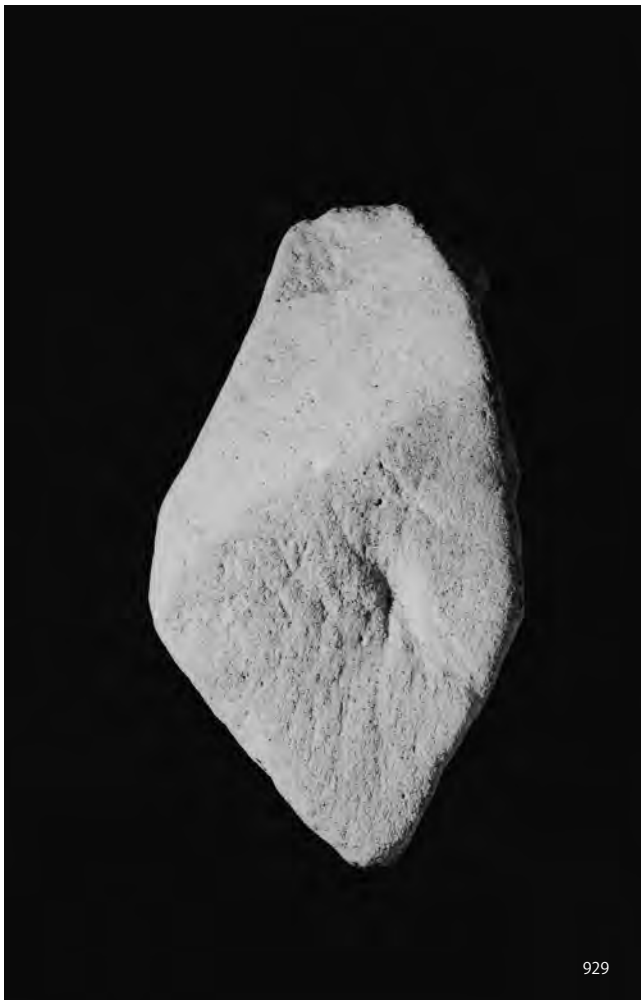
823



829



828





1. 第3-1面 (4-1区:北から)



2. 第3-1面 (10-3区:南西から)



3. 第3-1面 (11-1区東半:北から)



4. 第3-1面 (13区:北西から)



5. 第3-1面 (24-5区:南西から)



6. 第3-1面 (6-3区:西から)



7. 第3-1面 (6-5区:東から)



8. 第3-1面 (6-6区:東から)



1. 8-58 溝 (8-4区: 東から)



2. 暗渠 (15-2区: 南東から)



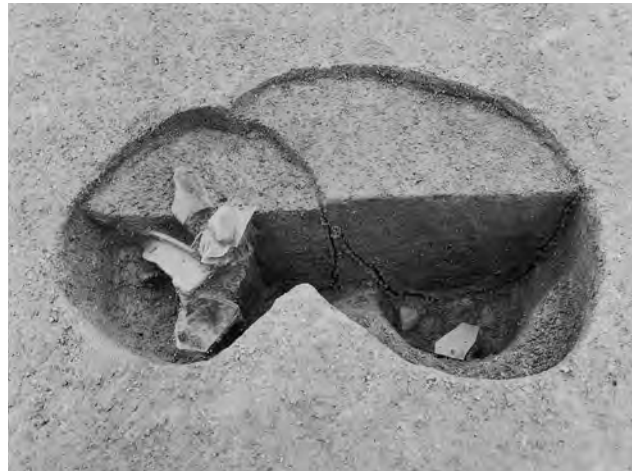
3. 23-15 溝 全景 (23-1区: 北から)



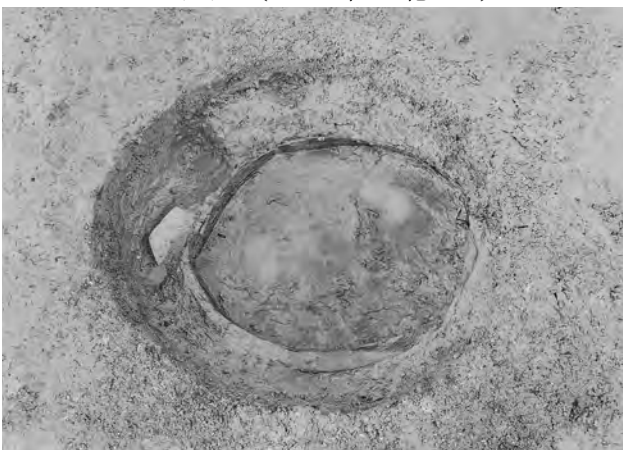
4. 23-15 溝 (23-1区: 南から)



5. 4-90 ピット (4-1区: 北から)



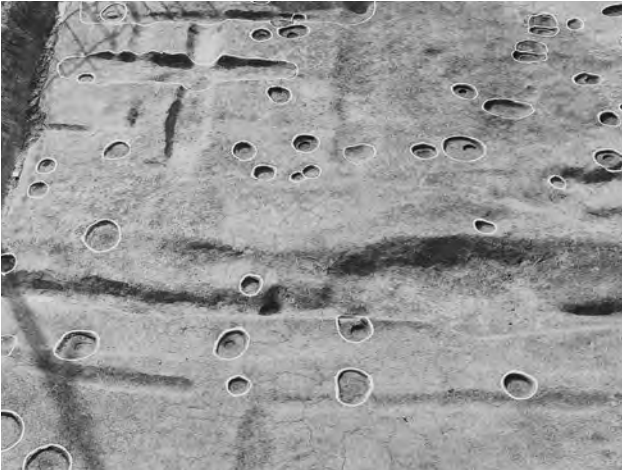
6. 11-130 ピット (11-2区: 南から)



7. 11-131 井戸 (11-2区: 南から)



8. 7-350 土坑 (7-4区: 北から)



1. 掘立柱建物 13 全景 (10-1区: 東から)



2. 掘立柱建物 18 全景 (7-2区: 北から)



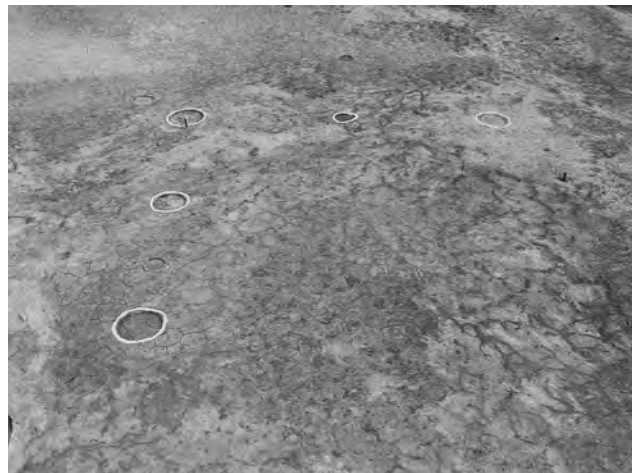
3. 掘立柱建物 19 全景 (7-2区: 北から)



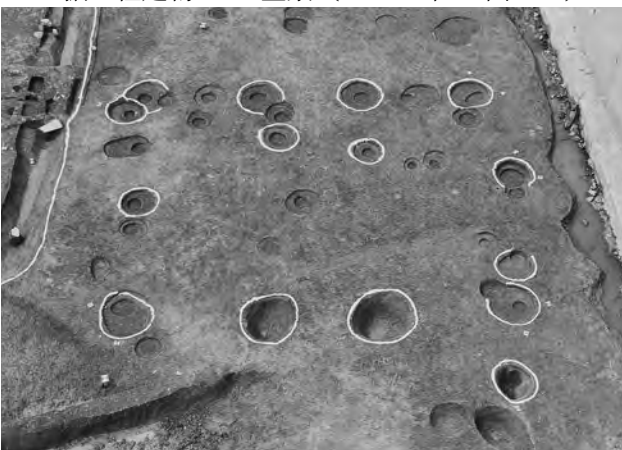
4. 掘立柱建物 58 全景 (6-5区: 南から)



5. 掘立柱建物 60 全景 (25-1区: 西から)



6. 掘立柱建物 61 全景 (25-1区: 南から)



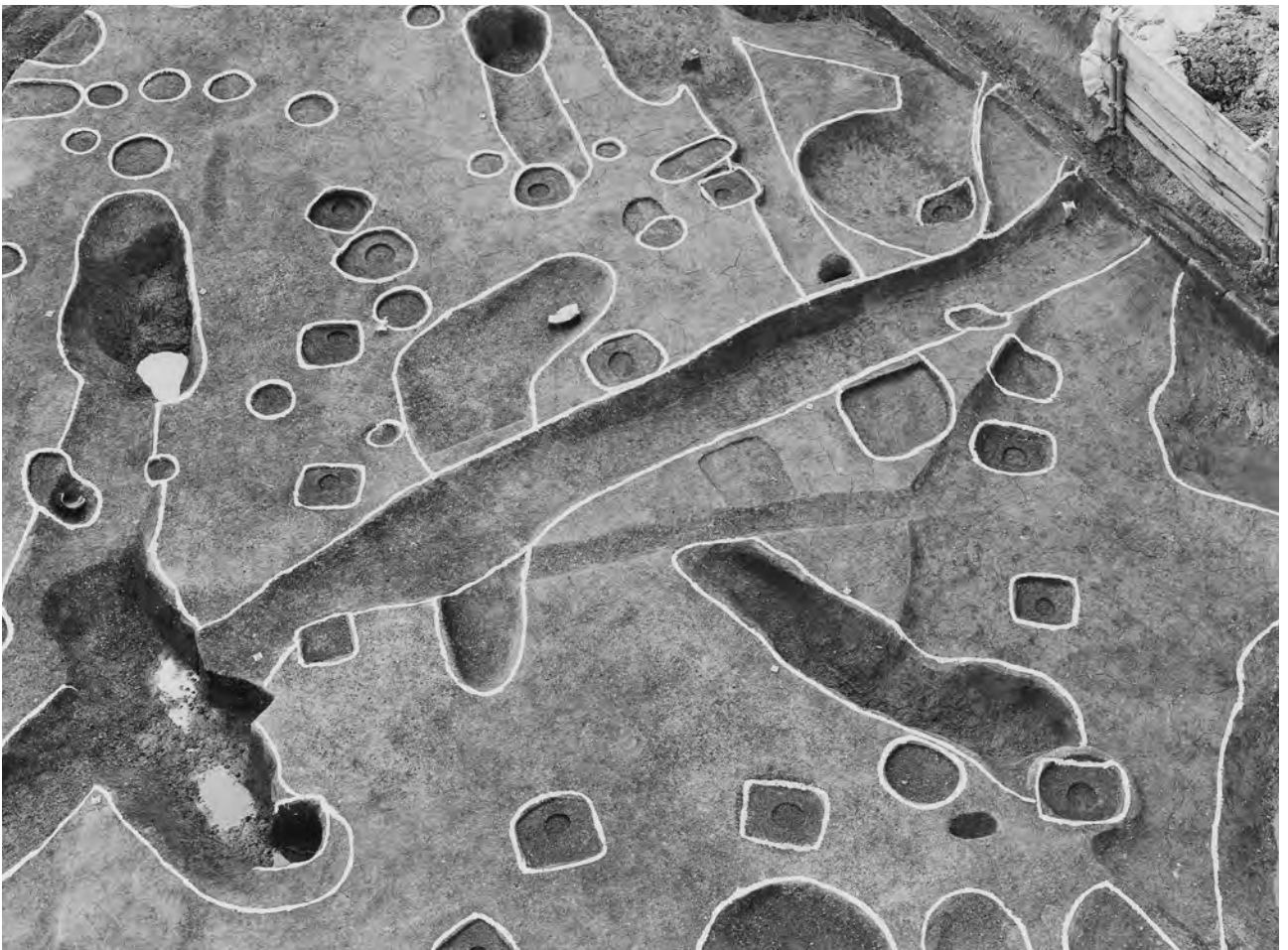
7. 掘立柱建物 33 全景 (18-1区: 南から)



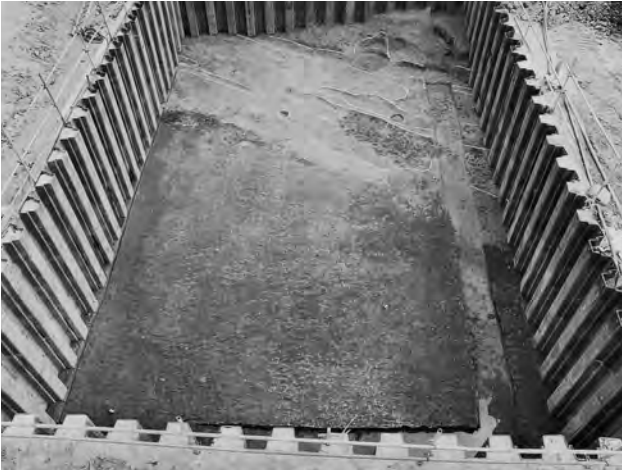
8. 掘立柱建物 35 全景 (18-1区: 南から)



1. 掘立柱建物 38 全景 (18-1区:西から)



2. 掘立柱建物 45 全景 (18-2区:東から)



1. 第4面 (21-2区:北から)



2. 第4面 (6-6区:東から)



3. 第4面 (11-1区東半:北から)



4. 第4面 (11-1区東半:南から)



5. 第4面 (11-3区:南から)



6. 第4面 (24-1区:西から)



7. 第4面 (24-5区:南西から)



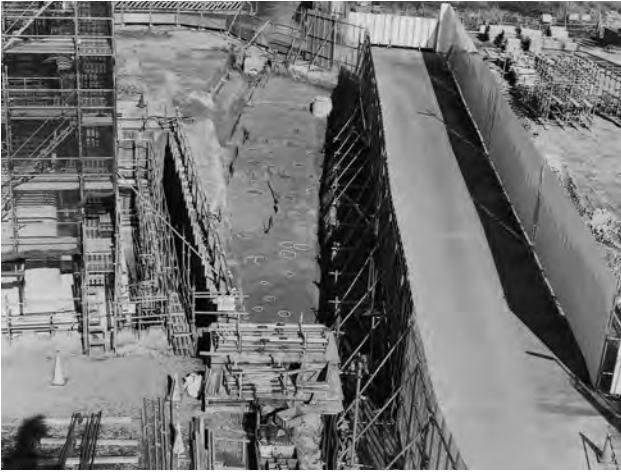
8. 第4面 (9-3区:西から)



1. 第6面 (10-1区:南から)



2. 第6面 (10-1区:北東から)



1. 第6面 (4-3区:南から)



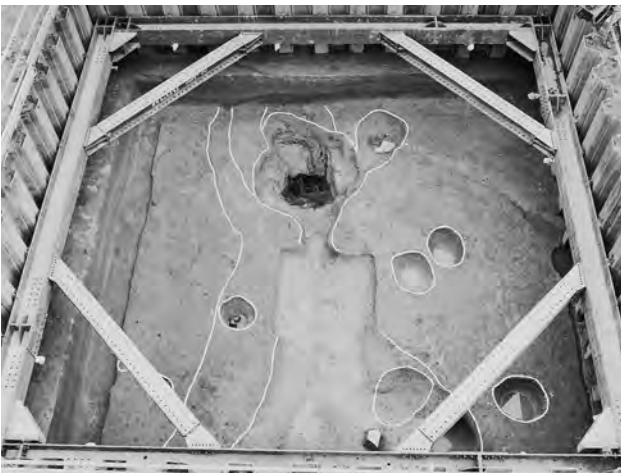
2. 第6面 (10-3区:南西から)



3. 第6面 (17-3区:北から)



4. 第6面 (22-2区:南東から)



5. 第6面 (1-1区:北から)



6. 第6面 (1-3区:西から)



7. 第6面 (2-2区:北から)



8. 第6面 (6-5区:南から)



1. 第6面 (7-2区東半部: 東から)



2. 第6面 (7-2区西半部: 東から)



3. 第6面 (7-3区東半部: 西から)



4. 第6面 (7-4区: 西から)



5. 第6面 (11-1区東半: 北から)



6. 第6面 (11-2区西半部: 南から)



7. 第6面 (11-3区: 南から)



8. 第6面 (11-4区: 南から)



1. 第6面 (11-2区東半部:南東から)



2. 第6面 (25-1区:南から)



3. 第6面 (13区:北西から)



4. 第6面 (14区:西から)



5. 第6面 (18-1区:南から)



6. 竪穴建物4 全景 (4-2区:南から)



7. 竪穴建物6 全景 (10区:北東から)



8. 竪穴建物7 全景 (10区:東から)



1. 竪穴建物 4 東西断面 (4-2区:南西から)



2. 竪穴建物 4 南北断面 (4-2区:南東から)



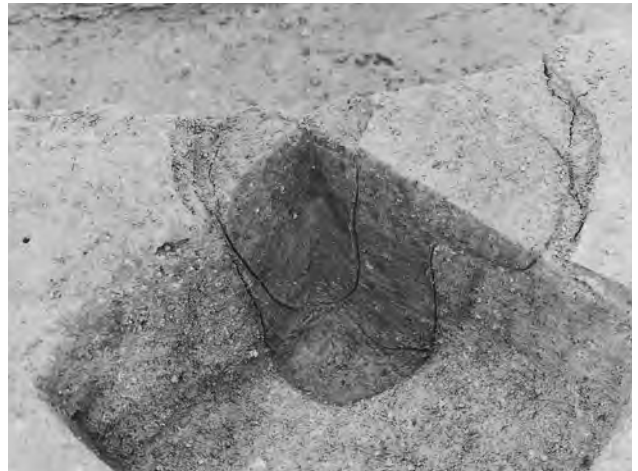
3. 竪穴建物 7 遺物出土状況 (10区:東から)



4. 竪穴建物 7 遺物出土状況 (10区:西から)



5. 竪穴建物 7 10-141 柱穴 (南東から)



6. 竪穴建物 7 10-142 柱穴 (南西から)



7. 竪穴建物 7 10-143 柱穴 (北東から)



8. 竪穴建物 7 10-144 柱穴 (北西から)



1. 竪穴建物 8 全景 (10区:南から)



2. 竪穴建物 9 全景 (10区:南から)



3. 竪穴建物 27 全景 (17-2区:北から)



4. 竪穴建物 14 全景 (19-2区:東から)



5. 竪穴建物 19~25 全景 (4-4区:西から)



6. 竪穴建物 19・20 全景 (4-4区:北から)



7. 竪穴建物 21・24 全景 (4-4区:北から)



8. 竪穴建物 25 全景 (4-4区:北から)



1. 竪穴建物 19 等 断面 (4-4区:北から)



2. 竪穴建物 22 4-153 溝 (東から)



3. 竪穴建物 22 4-153 溝 (東から)



4. 竪穴建物 22 4-154 カマド (南から)



5. 竪穴建物 22 4-154 カマド (南から)



6. 竪穴建物 25 検出状況 (4-4区:西から)



7. 竪穴建物 25 断面 (4-4区:東から)



8. 竪穴建物 25 4-151・152 溝 (東から)



1. 掘立柱建物 2 全景 (4-2区:南から)



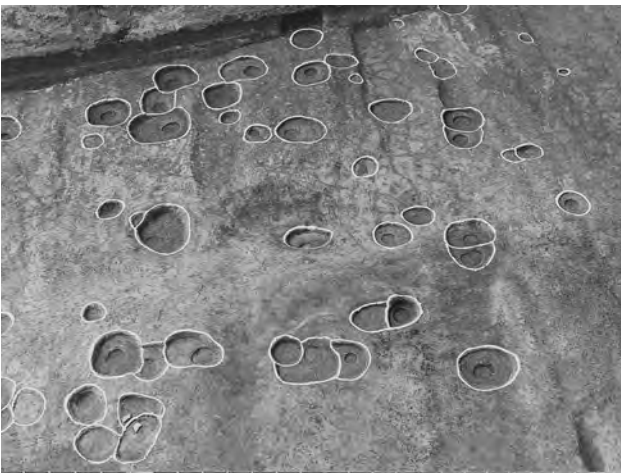
2. 掘立柱建物 7 全景 (10区:東から)



3. 掘立柱建物 8 全景 (10区:北東から)



4. 掘立柱建物 9 全景 (10区:東から)



5. 掘立柱建物 10 全景 (10区:南東から)



6. 掘立柱建物 11 全景 (10区:東から)



7. 掘立柱建物 14 全景 (10区:東から)



8. 掘立柱建物 44 全景 (20-1区:東から)



1. 掘立柱建物 54 全景 (4-4区:北から)



2. 掘立柱建物 55 全景 (4-5区:南から)



1. 竪穴建物1 全景（1-3区：北東から）



2. 竪穴建物2 全景（1-3区：北西から）



1. 竪穴建物3 全景 (25-1区:北から)



2. 竪穴建物3 全景 (25-1区:西から)



1. 竪穴建物 3 (25 - 1 区: 西から)



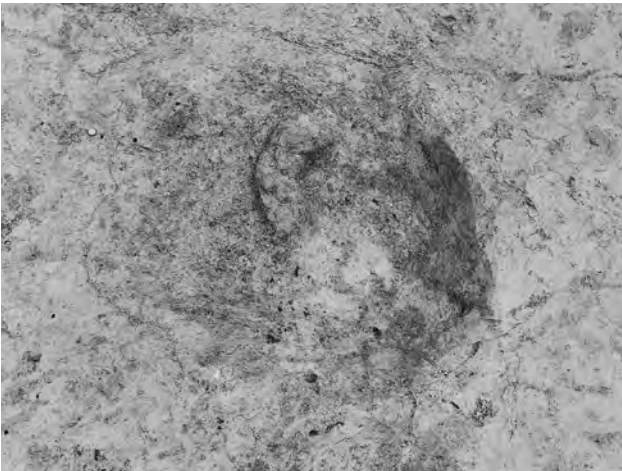
2. 竪穴建物 3 25 - 65 土坑 (東から)



3. 竪穴建物 3 25 - 65 土坑 (北から)



4. 竪穴建物 3 25 - 58 土坑 (西から)



5. 竪穴建物 3 25 - 58 土坑 (東から)



6. 竪穴建物 3 25 - 58 土坑 (東から)



7. 竪穴建物 3 25 - 66 土坑 (東から)



8. 竪穴建物 3 25 - 66 土坑 (東から)



1. 竪穴建物 13 全景 (11-2区:南西から)



2. 竪穴建物 13 11-79ピット (東から)



3. 竪穴建物 13 壁溝 (11-2区:南東から)



4. 竪穴建物 13 11-141柱穴 (東から)



5. 竪穴建物 13 断面 (11-2区:北東から)



1. 竪穴建物 16 全景 (11-2区:北西から)



2. 竪穴建物 16 遺物出土状況 (南西から)



3. 竪穴建物 16 南北断面 (11-2区:南から)



4. 竪穴建物 16 11-75 柱穴 (北から)



5. 竪穴建物 16 11-70 溝: D (南から)



1. 竪穴建物 17 全景 (11-2区:西から)



2. 竪穴建物 17 遺物出土状況 (北から)



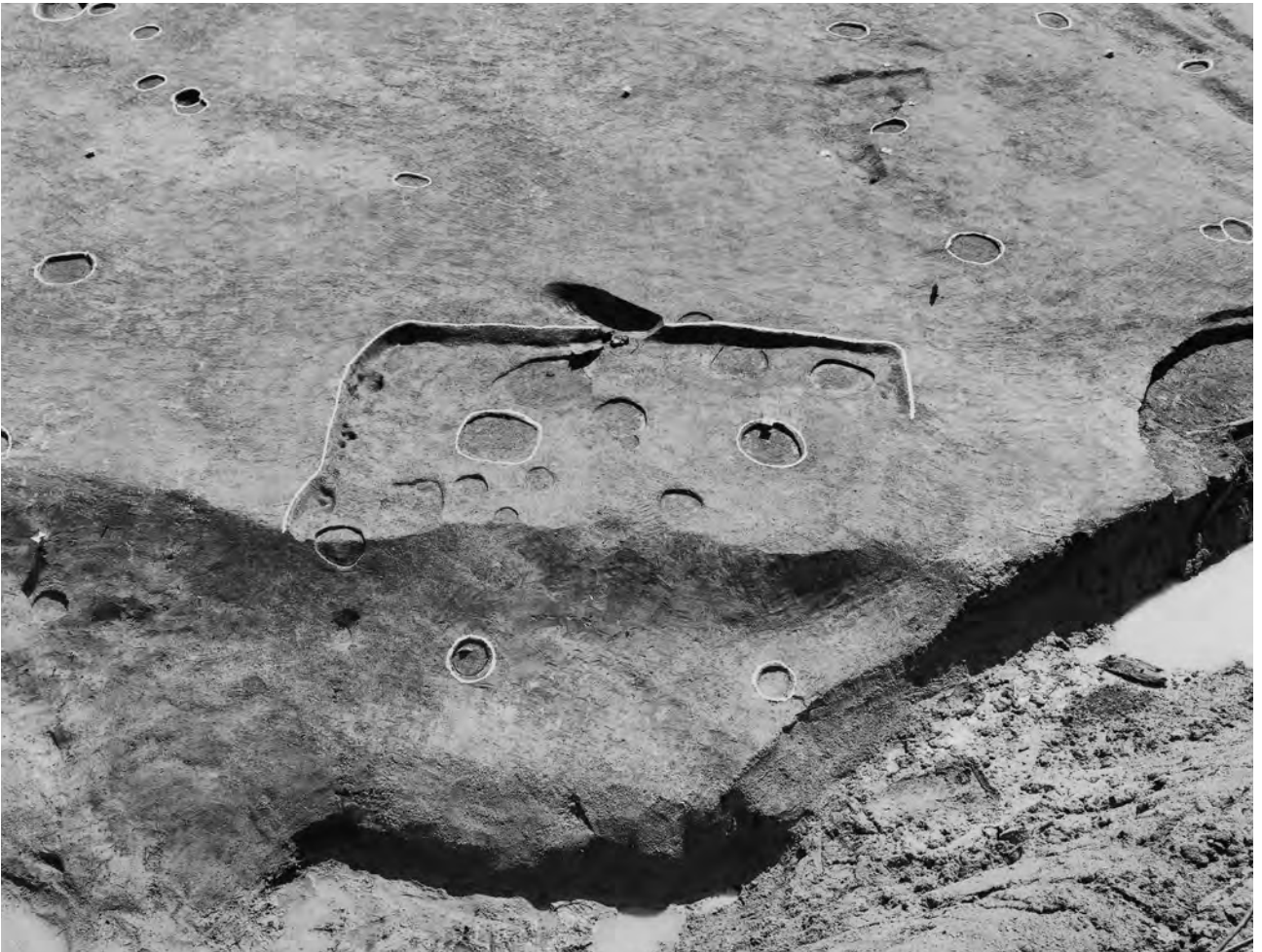
3. 竪穴建物 17 南北断面 (11-2区:南から)



4. 竪穴建物 17 東西断面 (11-2区:南から)



5. 竪穴建物 17 11-74溝:F (西から)



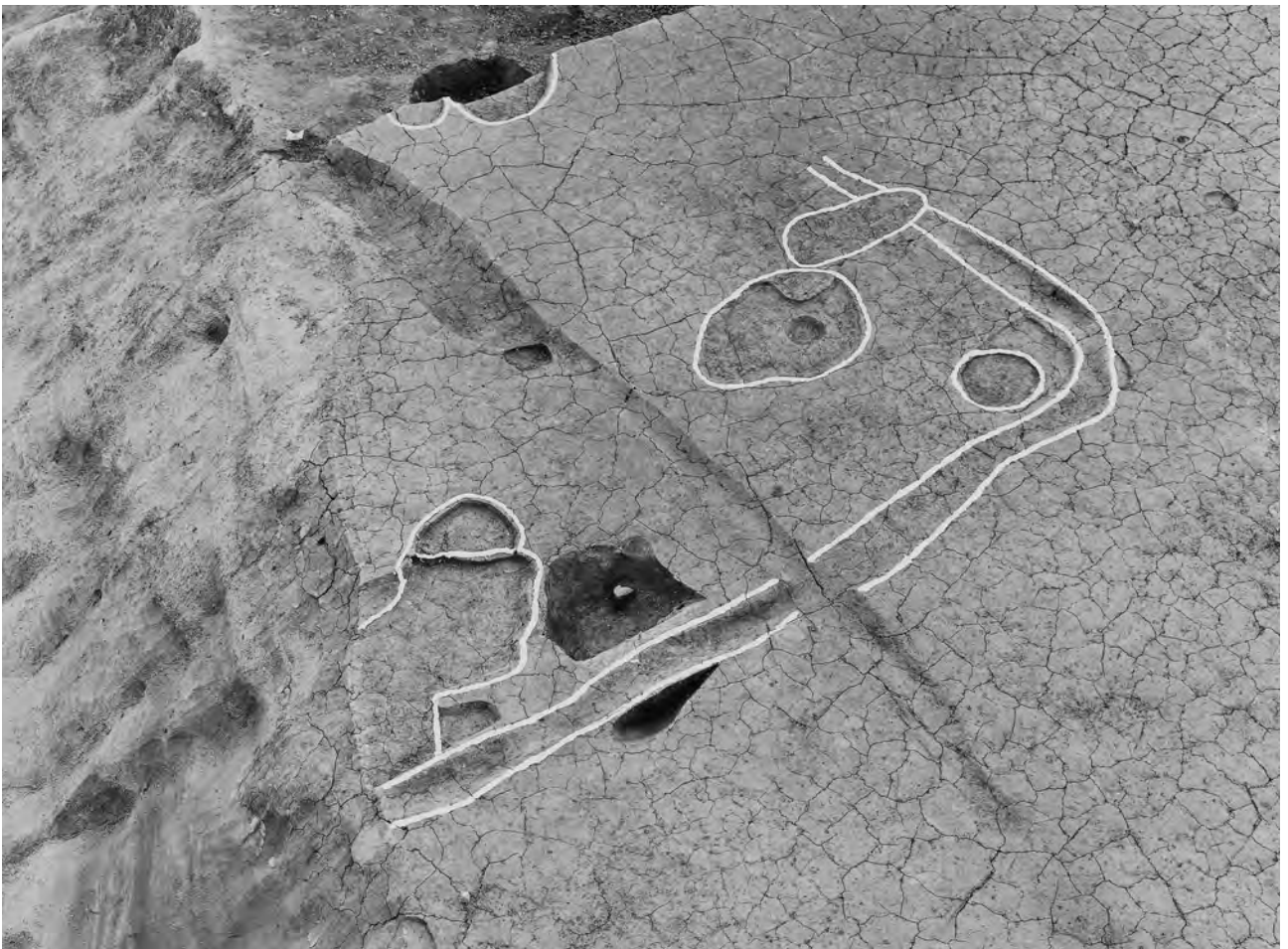
1. 竪穴建物 18 全景 (11-2区:北から)



2. 竪穴建物 30 全景 (6-5区:南から)



1. 竪穴建物 31 全景 (23 - 2 区 : 北西から)



2. 竪穴建物 32 全景 (23 - 2 区 : 東から)



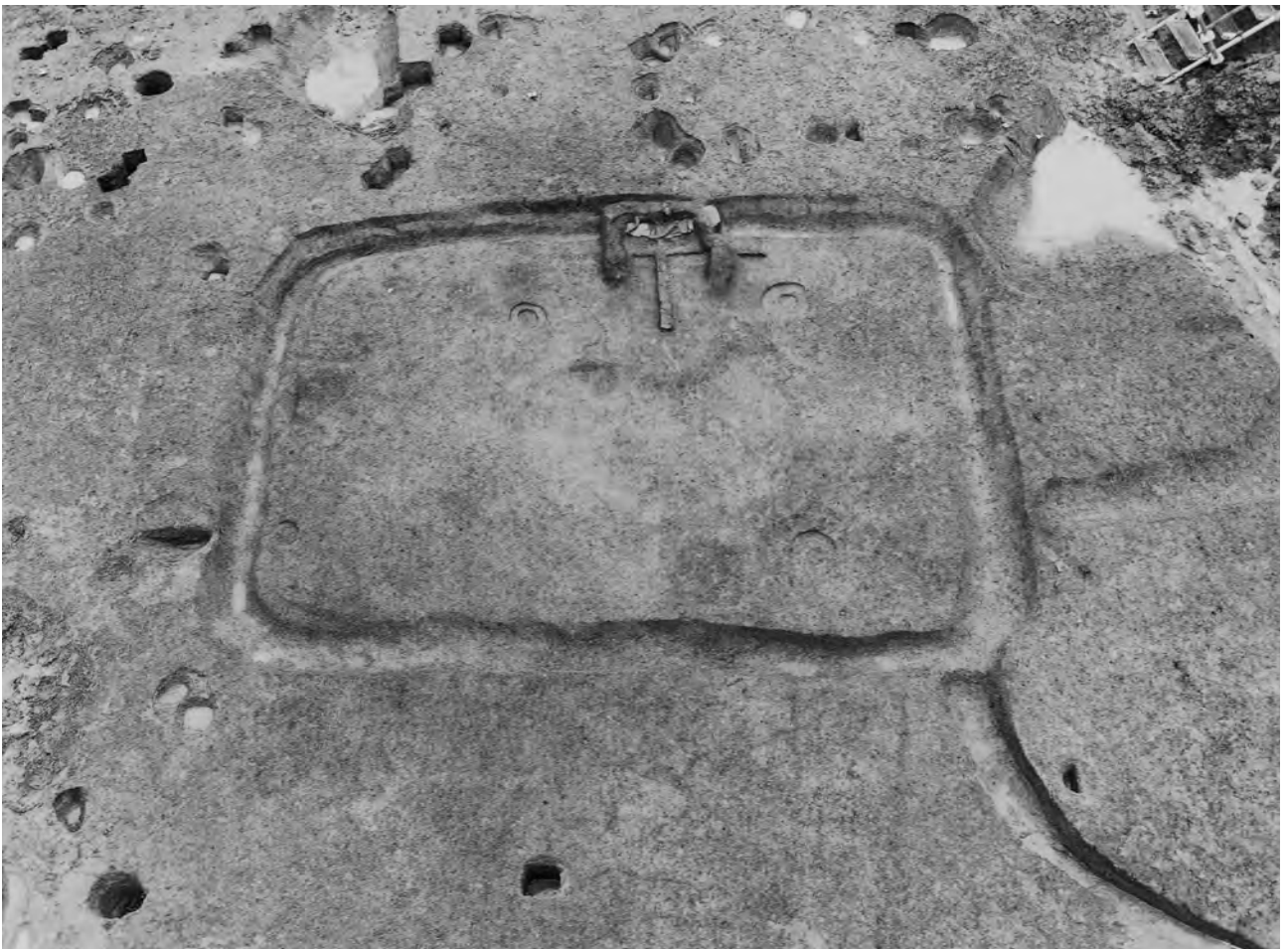
1. 掘立柱建物 32 全景 (11-2区:南西から)



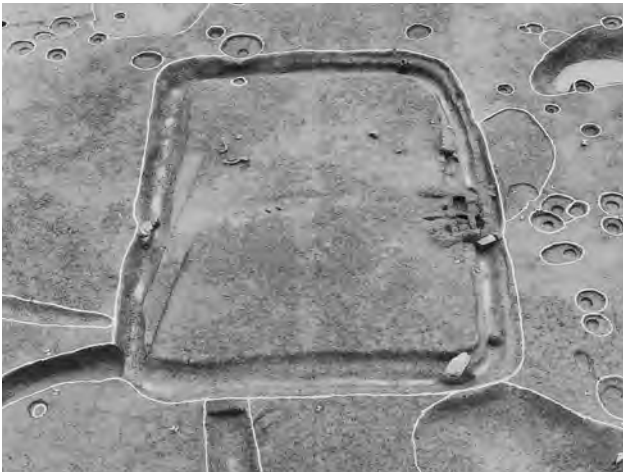
2. 掘立柱建物 49 全景 (11-2区:南西から)



1. 掘立柱建物 50 全景 (11 - 2 区 : 南から)



2. 竪穴建物 11 全景 (18 - 1 区 : 西から)



1. 竪穴建物 11 遺物出土状況 (南から)



2. 竪穴建物 11 遺物出土状況 C (西から)



3. 竪穴建物 11 壁溝内遺物出土状況 C (南から)



4. 竪穴建物 11 壁溝内遺物出土状況 (南東から)



5. 竪穴建物 11 壁溝 (18-1区:西から)



6. 竪穴建物 11 18-135 溝 (西から)



7. 竪穴建物 11 南北断面 1 (南東から)



8. 竪穴建物 11 東西断面 1 (西から)



1. 竪穴建物 11 南北断面 2 (西から)



2. 竪穴建物 11 東西断面 2 (南から)



3. 竪穴建物 11 18-462 カマド (西から)



4. 竪穴建物 11 18-462 カマド (南から)



5. 竪穴建物 11 18-462 カマド (西から)



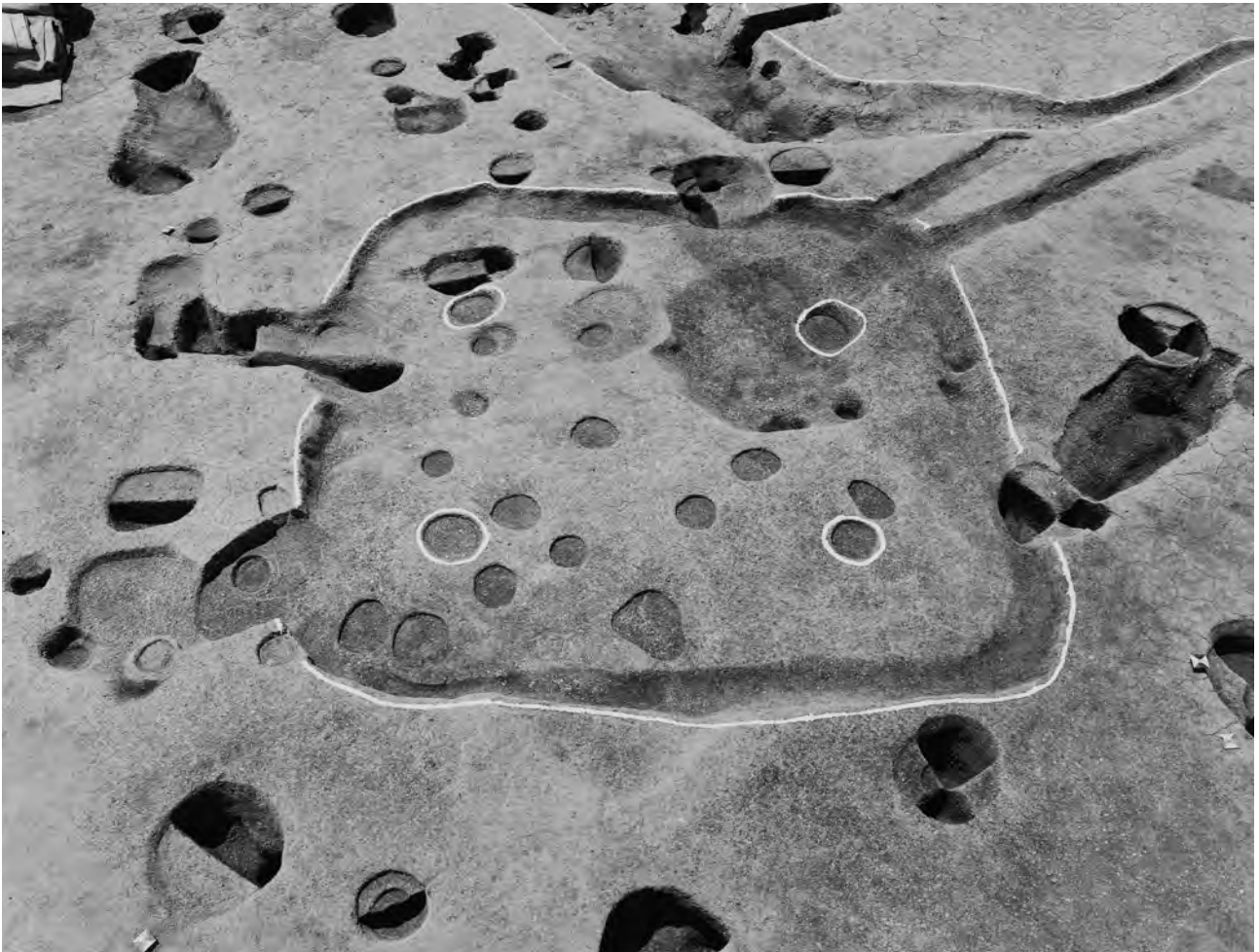
6. 竪穴建物 11 18-462 カマド (西から)



7. 竪穴建物 11 18-249 柱穴 (北東から)



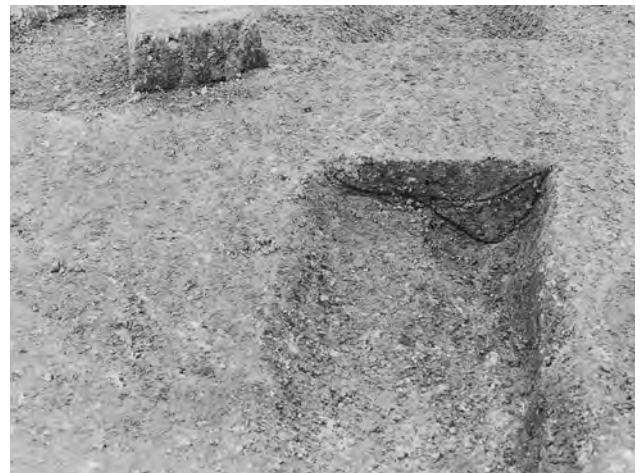
8. 竪穴建物 11 18-252 柱穴 (南東から)



1. 竪穴建物 12 全景 (18-1区:北から)



2. 竪穴建物 12 東西断面 (18-1区:南から)



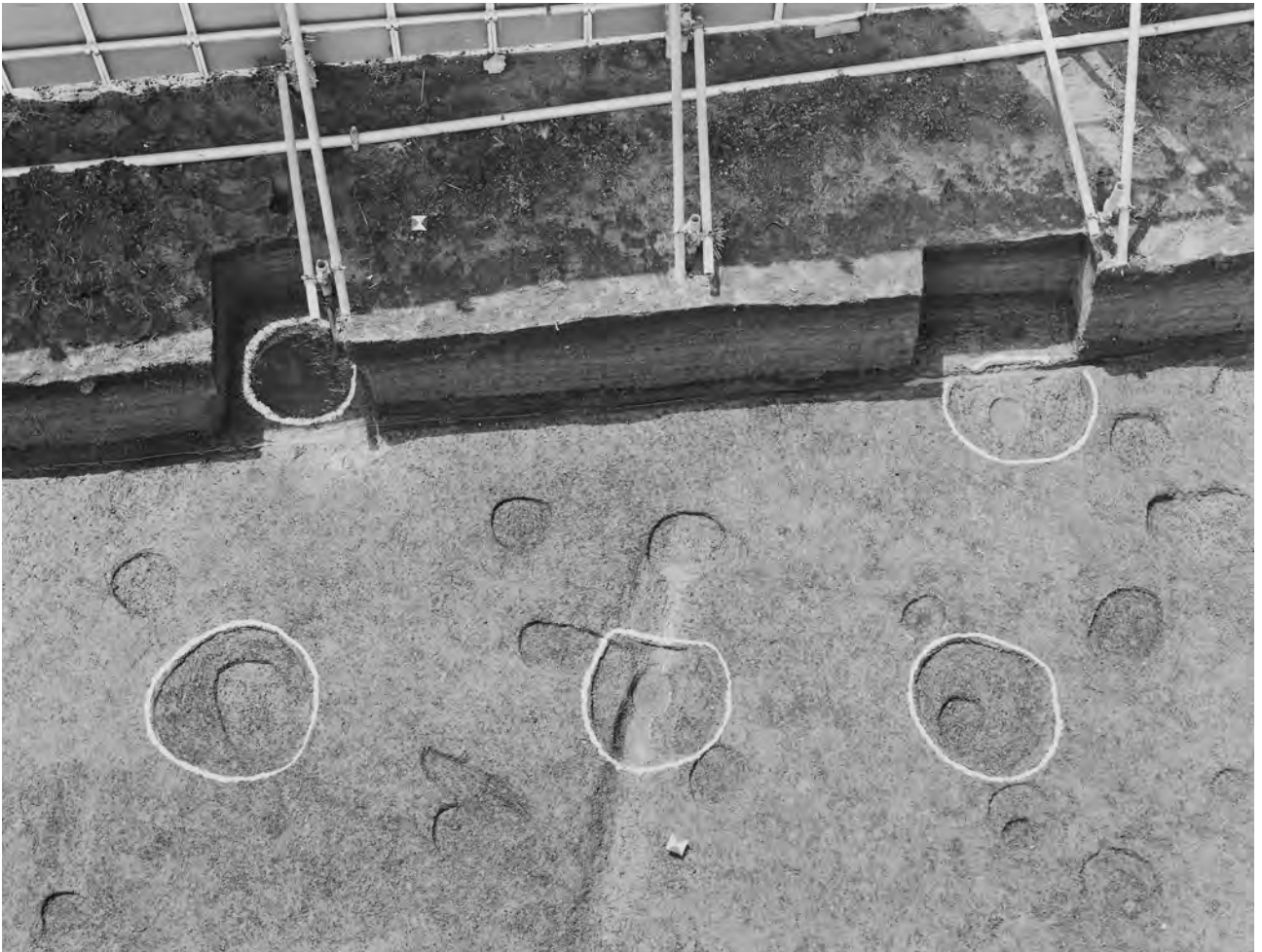
3. 竪穴建物 12 壁溝 (18-1区:東から)



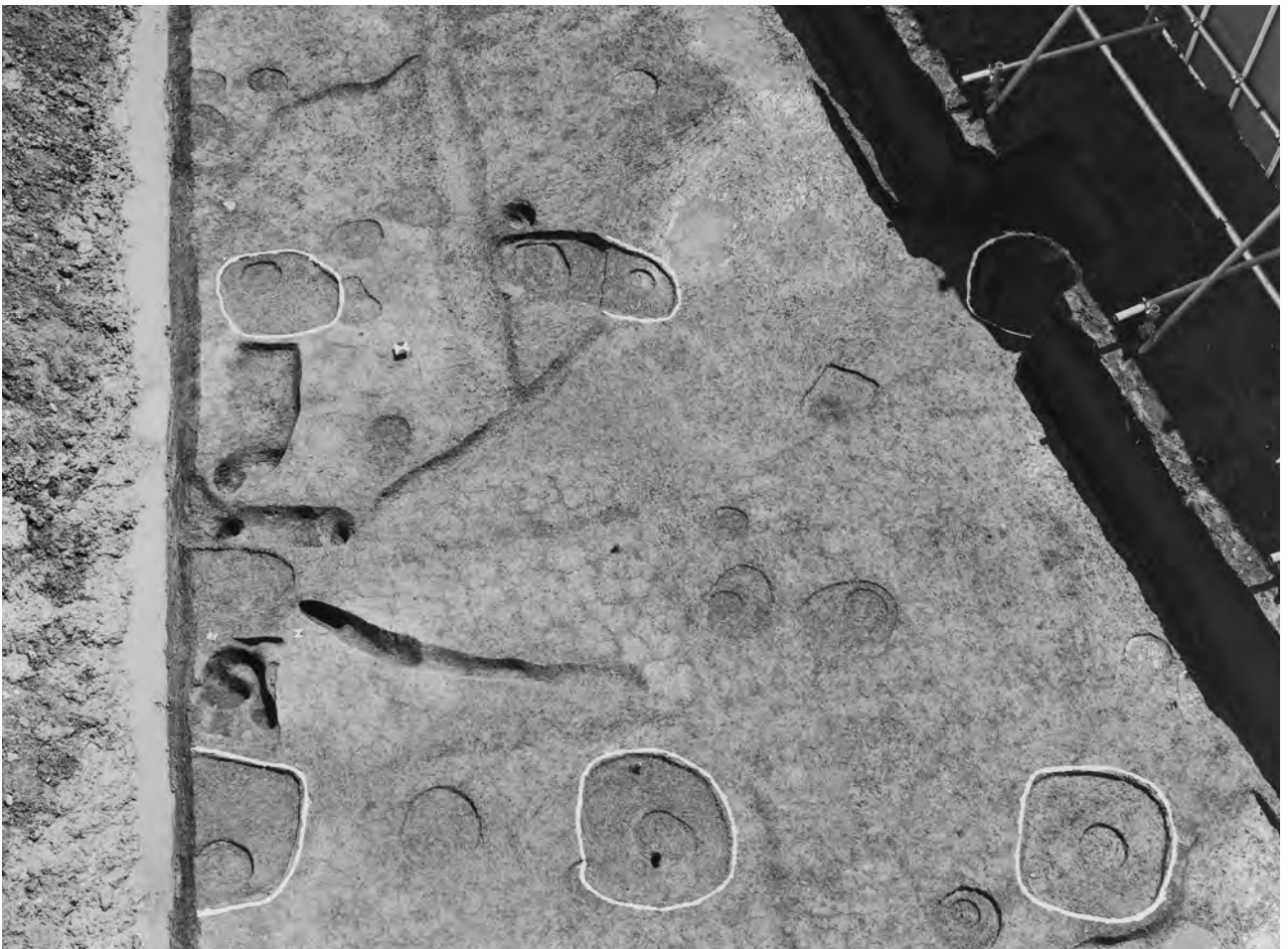
4. 竪穴建物 12 カマド (18-1区:西から)



5. 竪穴建物 12 18-137 柱穴 (北東から)



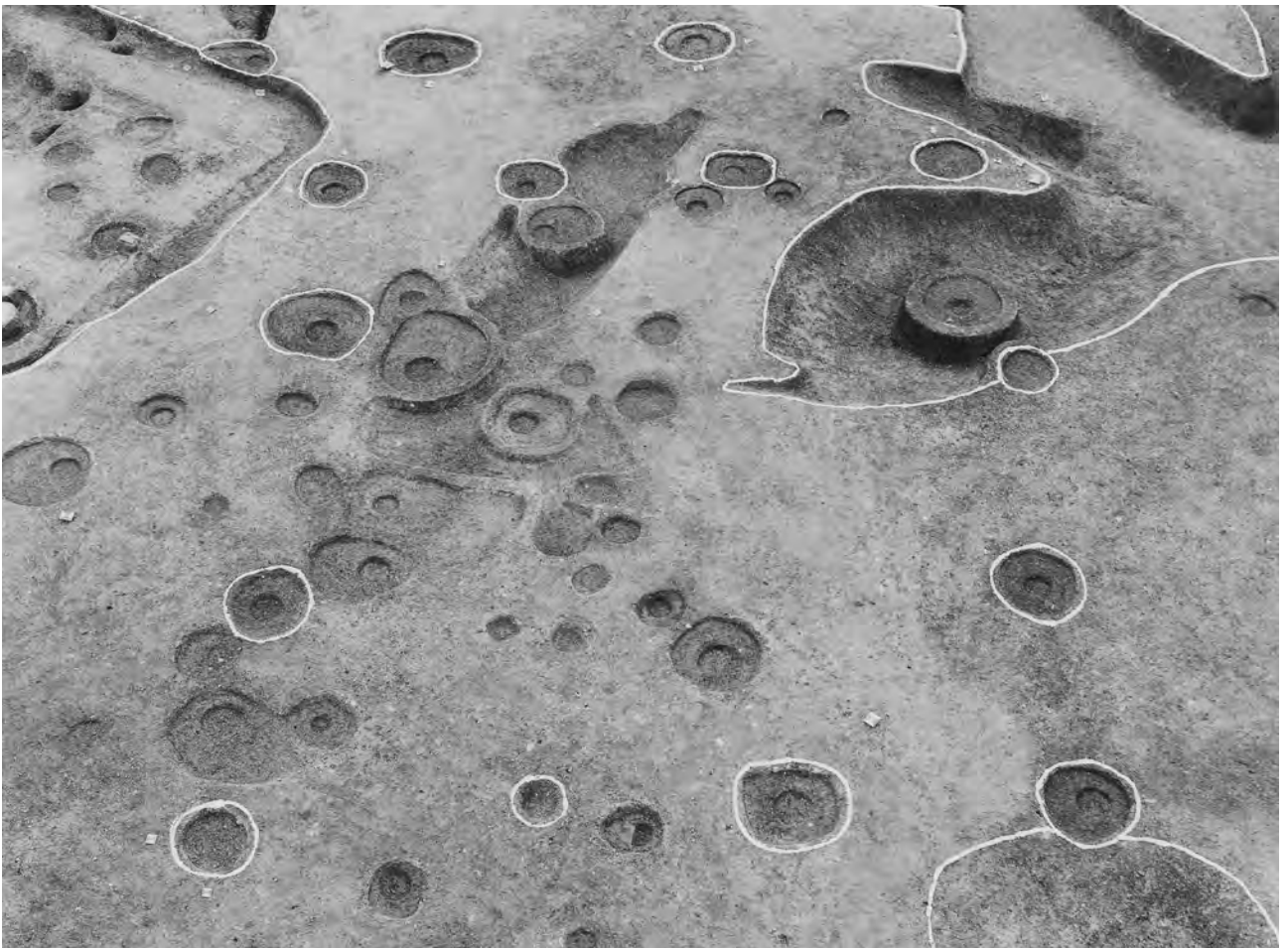
1. 掘立柱建物 24 全景 (14区:北から)



2. 掘立柱建物 25 全景 (14区:西から)



1. 掘立柱建物 39 全景 (18-1区:北から)



2. 掘立柱建物 40 全景 (18-1区:東から)



1. 掘立柱建物 41 全景 (18-1区: 東から)



2. 掘立柱建物 42 全景 (18-1区: 南から)



1. 4-48 土坑 (4-2区:北西から)



2. 19-1 土坑 (19-2区:北西から)



3. 4-62 溝 全景 (4-1区:南から)



4. 4-62 溝 (4-1区:北から)



5. 10-95 溝 (10-1区:南から)



6. 10-95 溝 (10-1区:西から)



7. 7-150 溝 (7-2区:東から)



8. 1-74 井戸 遠景 (1-1区:南から)



1. 1-74 井戸 近影 (1-1区:南から)



2. 1-74 井戸 (1-1区:南から)



3. 1-63 土坑 (1-1区:南西から)



4. 1-63 土坑 (1-1区:南から)



5. 1-65 土坑 (1-1区:北から)



6. 1-73 土坑 (1-1区:北から)



7. 11-86 土坑 (11-2区:南西から)



8. 11-86 土坑 (11-2区:南から)



1. 6-105 土坑 (6-6区: 東から)



2. 25-37 柱穴 (25-1区: 西から)



3. 1-5 溝 (1-3区: 北西から)



4. 7-27 溝 (7-3区: 北西から)



5. 7-30 溝 (7-3区: 北から)



6. 7-30 溝 (7-3区: 南西から)



7. 7-30 溝 (7-3区: 南から)



8. 7-360 溝 (7-10区: 北から)



1. 14 - 82 土坑 (14 - 1 区 : 南から)



2. 13 - 10 溝 (13 - 1 区 : 北東から)



3. 13 - 10 溝 (13 - 1 区 : 南から)



4. 13 - 12 b 溝 (13 - 1 区 : 西から)



5. 13 - 12 b 溝 全景 (13 - 1 区 : 南西から)



6. 14 - 88 溝 全景 (14 - 1 区 : 北東から)



7. 18 - 3 溝 全景 (18 - 2 区 : 南西から)



8. 18 - 3 溝 (18 - 2 区 : 西から)



1. 13-21 落ち込み (13-1区:西から)



2. 18-4 落ち込み (18-1区:南西から)



3. 竪穴建物 5 5-3 土坑 (5-1区:北から)



4. 竪穴建物 5 5-5 土坑 (5-1区:北から)



5. 竪穴建物 5 全景 (5-1区:南から)



1. 掘立柱建物 62 全景 (25-1区:西から)



2. 竪穴建物 5 5-4 柱穴 (5-1区:南から)



3. 竪穴建物 5 5-8 柱穴 (5-1区:南から)



4. 掘立柱建物 62 25-41 柱穴 (北から)



5. 方形周溝墓 1 18-58 主体部 (東から)



1. 方形周溝墓1 全景 (18-1区: 東から)



2. 方形周溝墓2 全景 (18-1区: 西から)



1. 方形周溝墓1 18-57 土坑 (東から)



2. 方形周溝墓2 18-115 土坑 (西から)



3. 方形周溝墓2 10-158 土坑 (南から)



4. 18-143 土坑 (18-1区: 南東から)



5. 1-78 土坑 (1-1区: 北から)



6. 第5-2面 (22-2区: 南から)



7. 第5-2 b面 (22-2区: 南から)



8. 旧流路 (南東から)



1. 上の山遺跡
08 - 1 調査区
北半部
(南西から)



2. 上の山遺跡
08 - 1 調査区
南半部
(北西から)



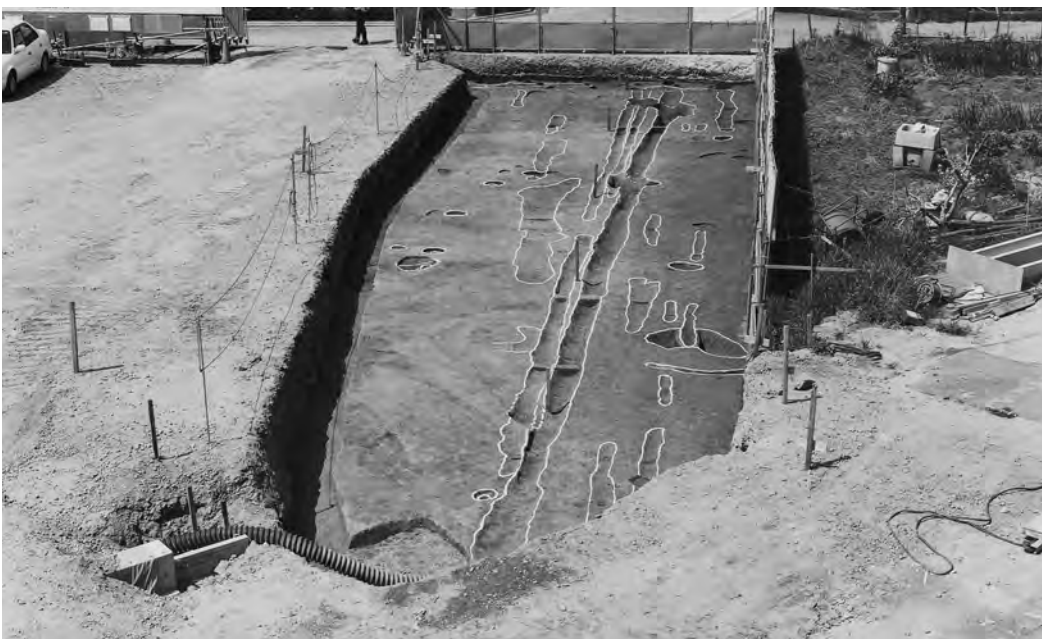
3. 上の山遺跡
08 - 1 調査区
西半部
(南東から)



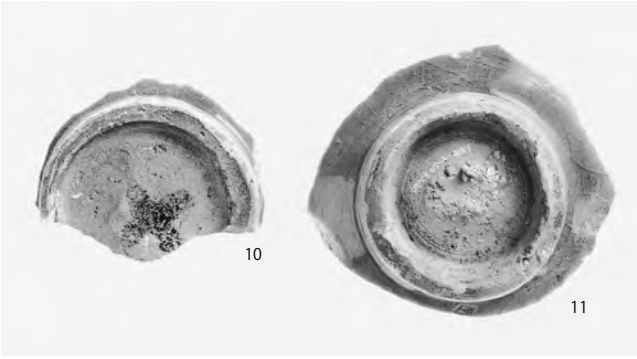
1. 上の山遺跡
09 - 1 調査区
東半部
(南西から)

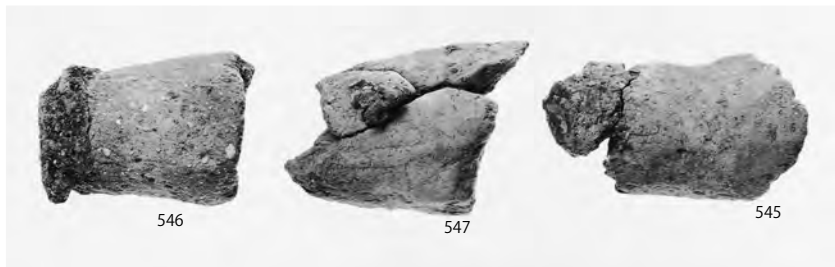
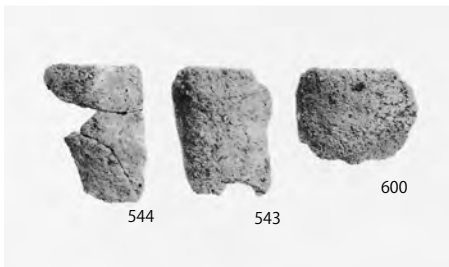


2. 上私部遺跡
09 - 1 調査区
全景
(東から)

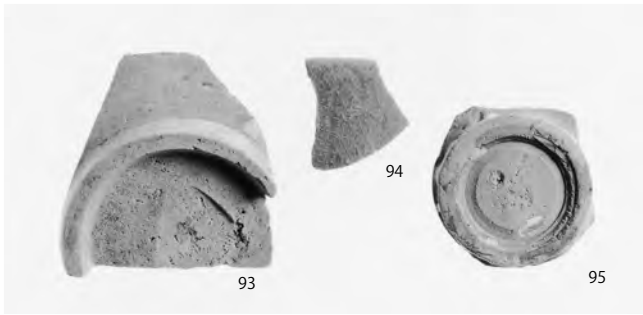
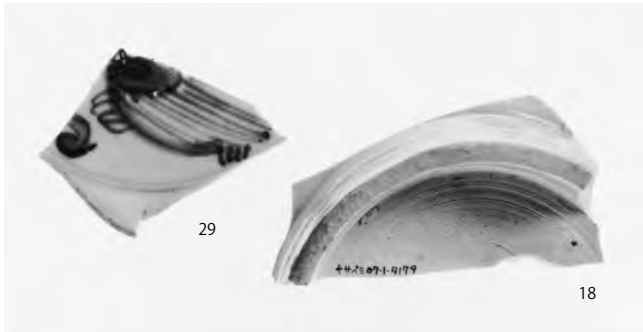


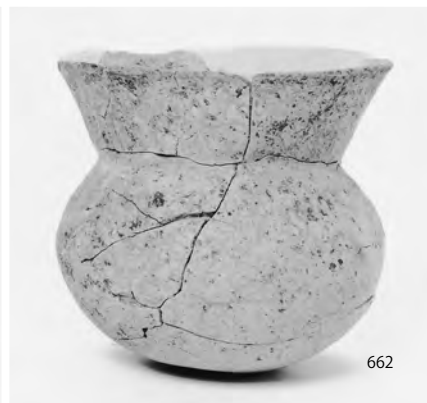
3. 有池遺跡
09 - 1 調査区
全景
(南から)





土器・土製品 (平坦面 1 ③・平坦面 2・平坦面 3 ①)







44



771



772 (裏)

275



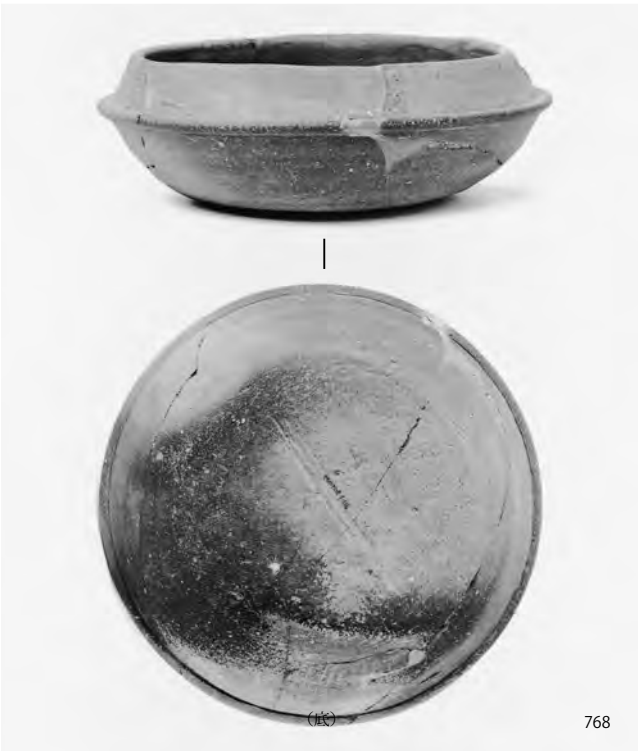
123



114



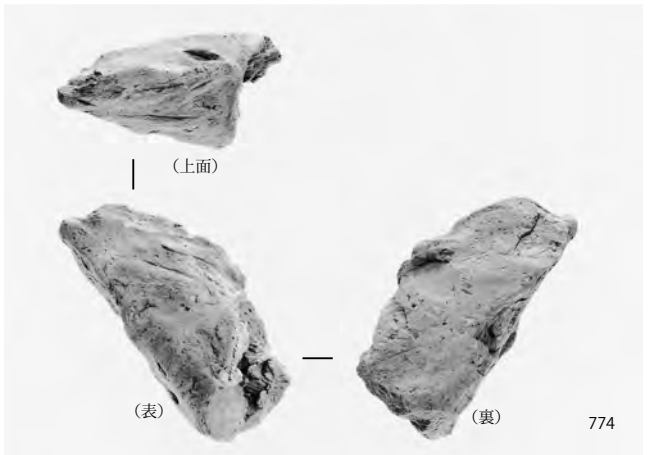
142



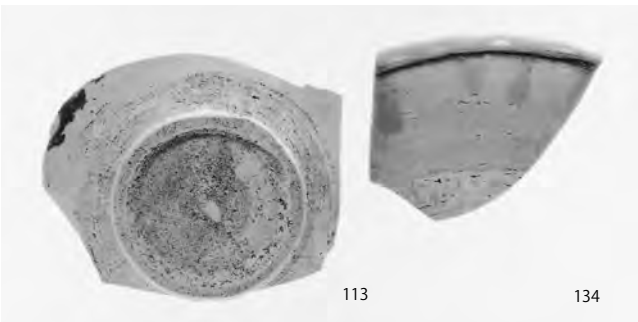
768



103



774



113

134



729



118



1164





土器・土製品 (平坦面④、谷①②)



907



926



909



933

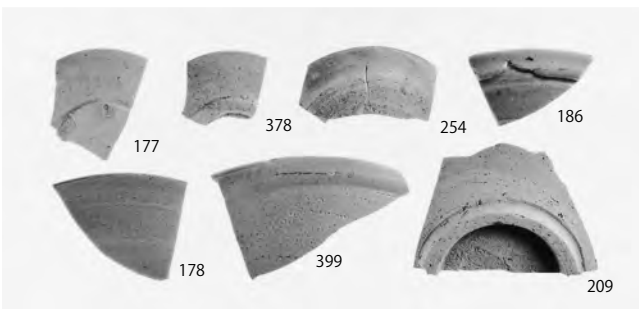


912

(底)



964



177

378

254

186

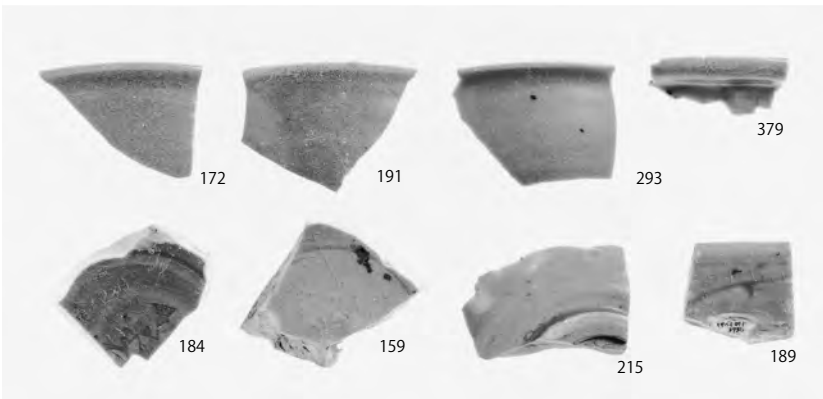
178

399

209



971



172

191

293

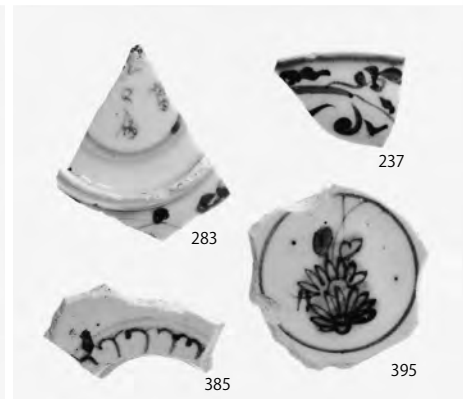
379

184

159

215

189



237

283

385

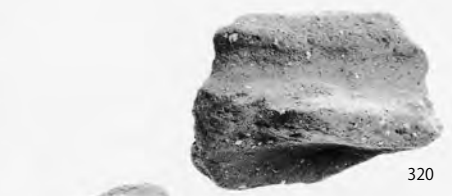
395



284



1025



320



1242



181



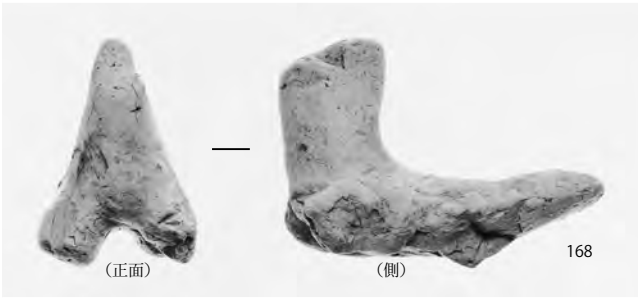
322



321



319

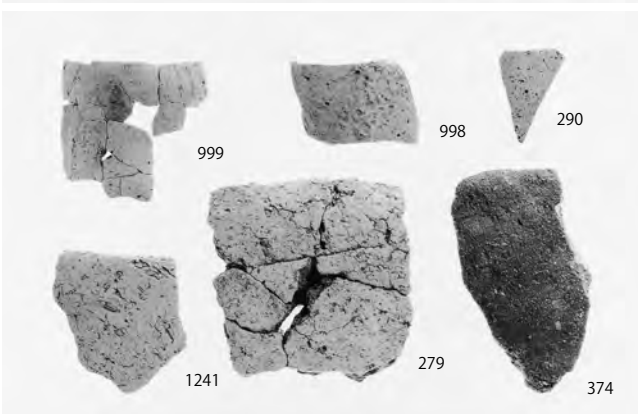


168



163

257



999

998

290

1241

279

374



146



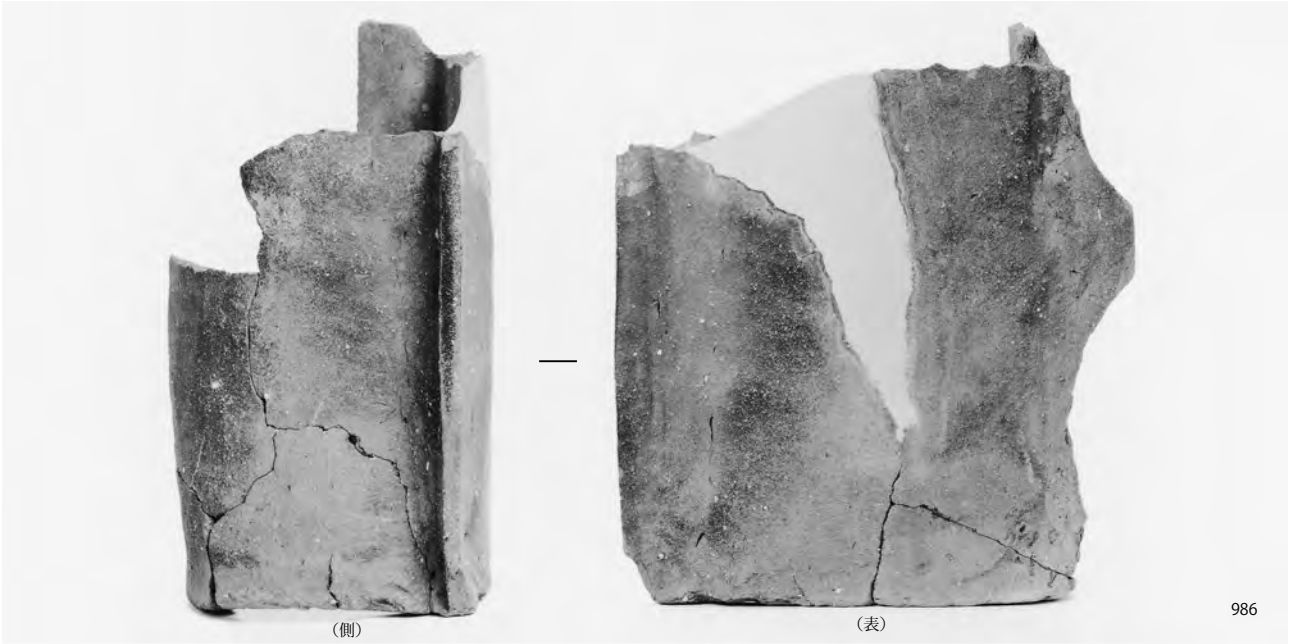
355

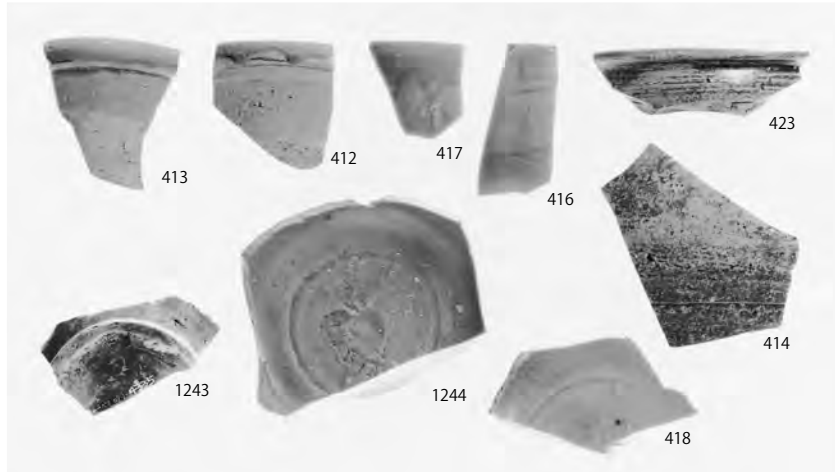


1001

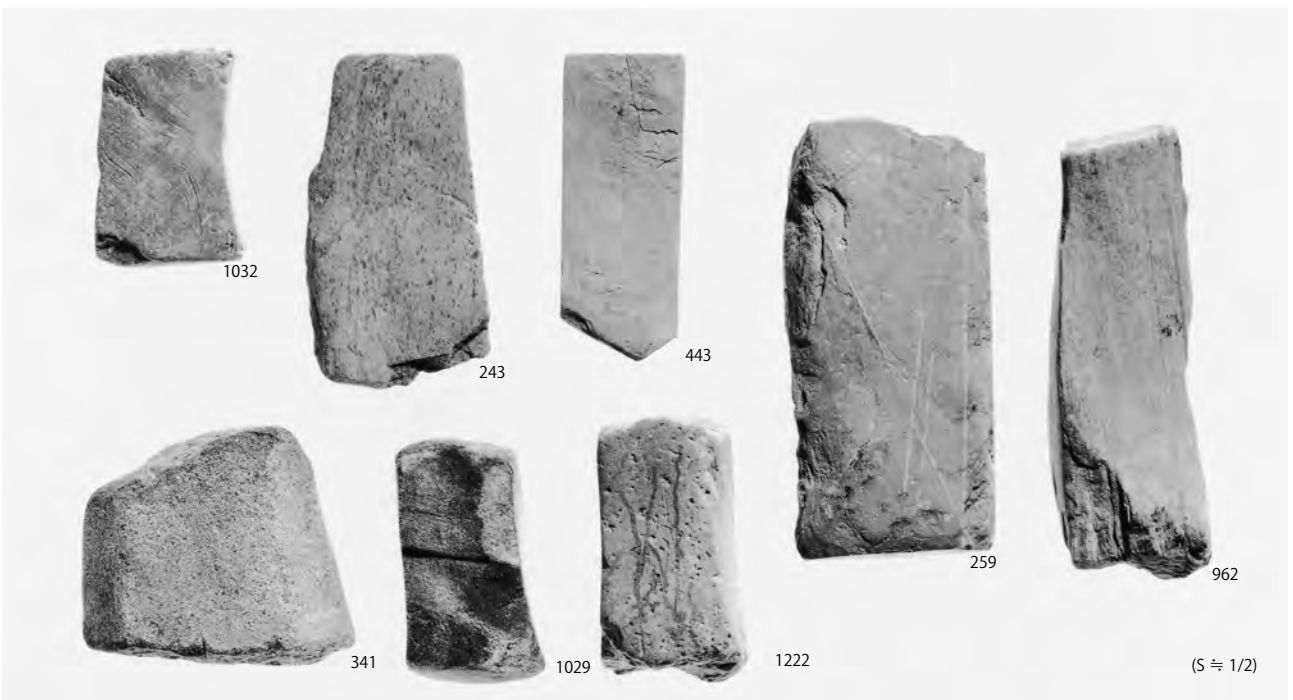
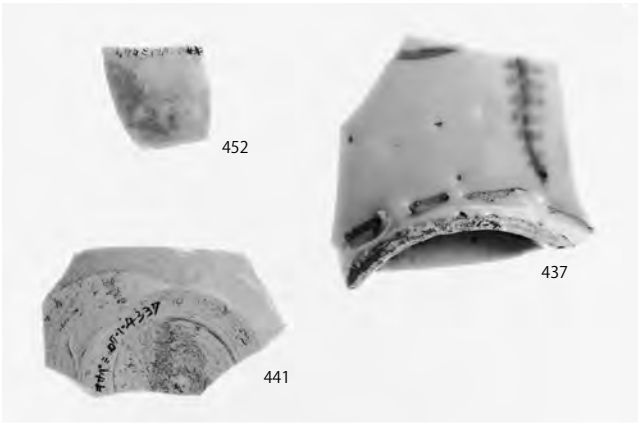


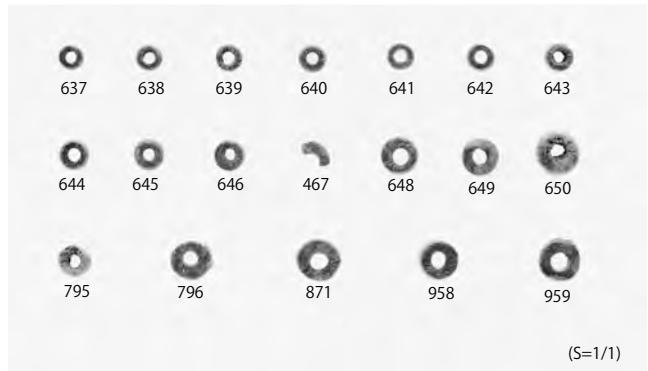
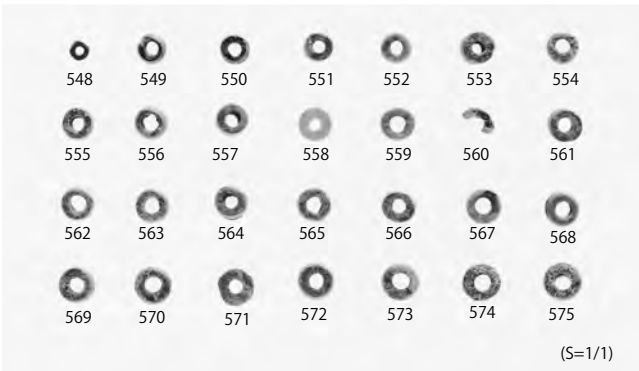
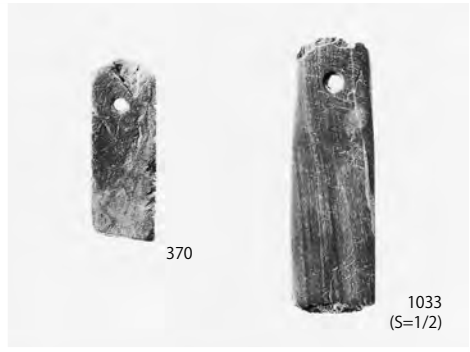
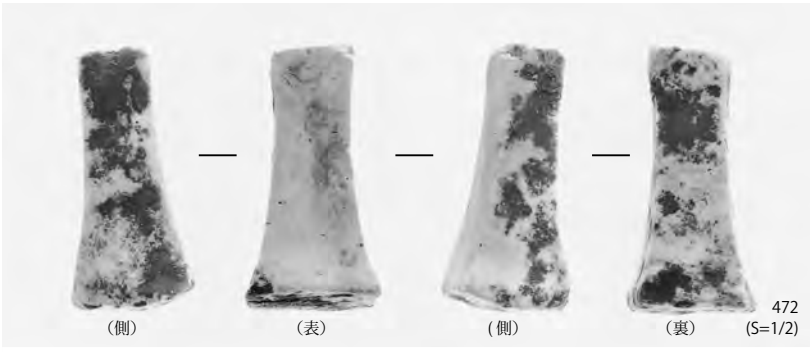
367

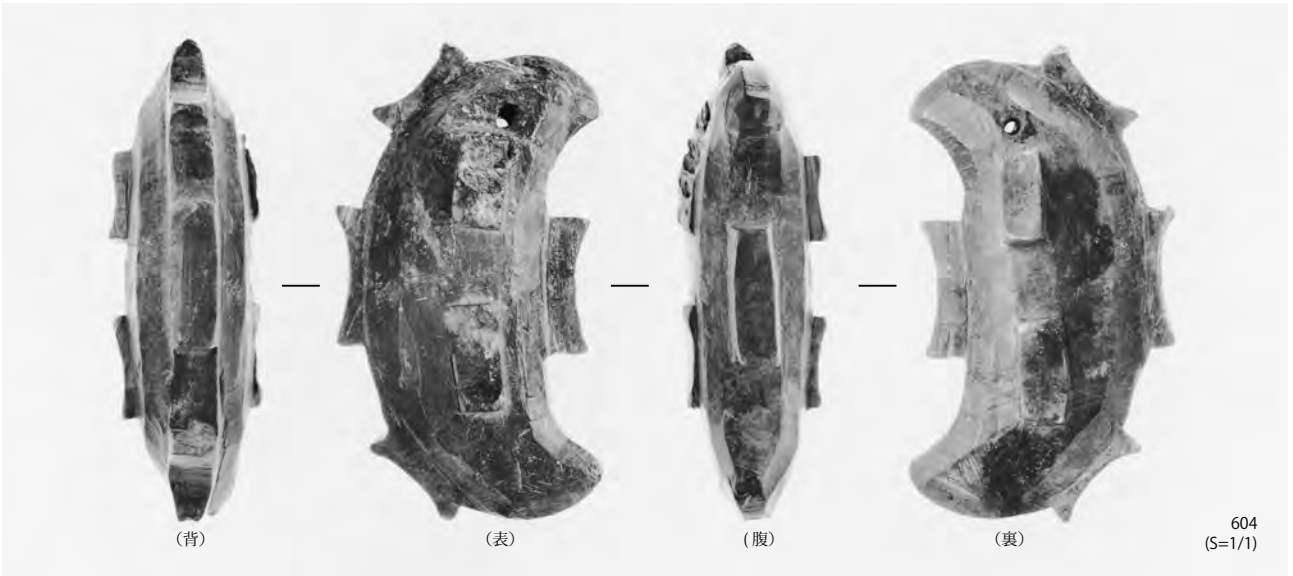




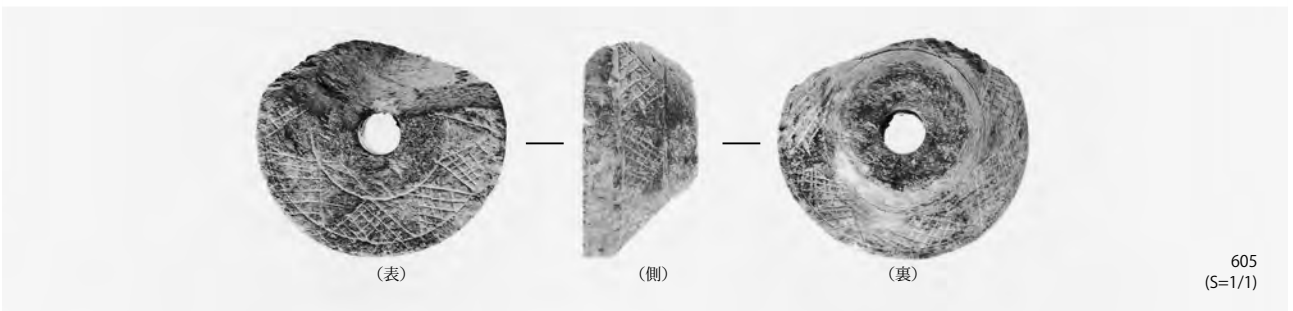
土器・土製品 (谷3②)、石製品 (1)



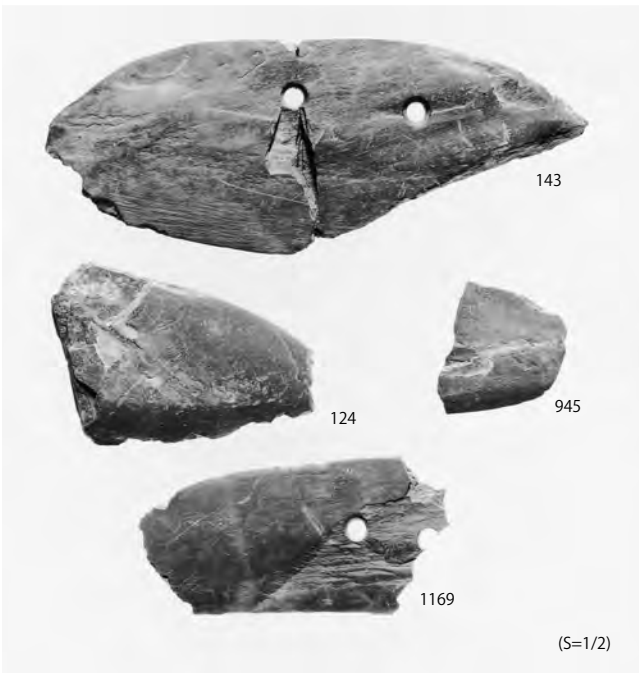




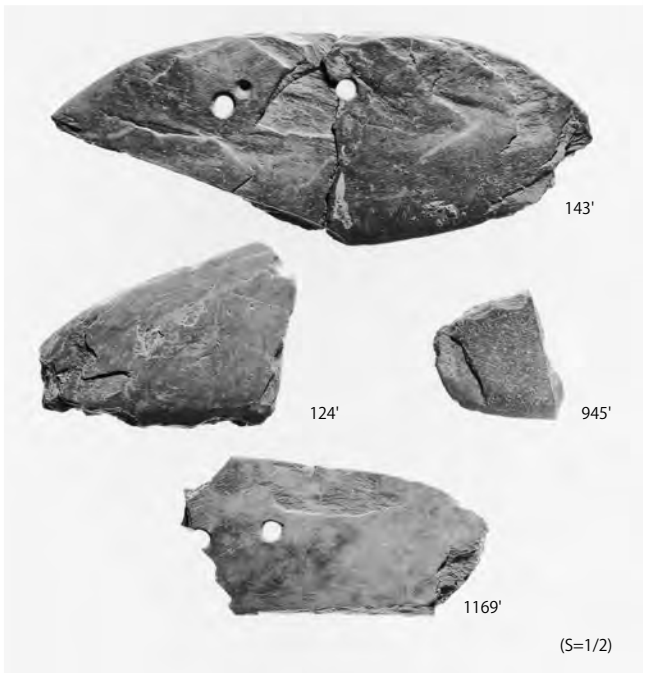
604 (S=1/1)



605 (S=1/1)



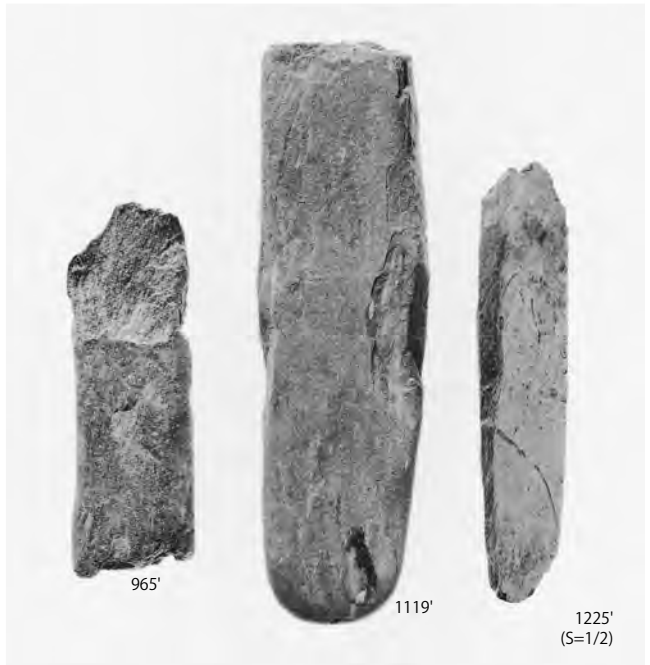
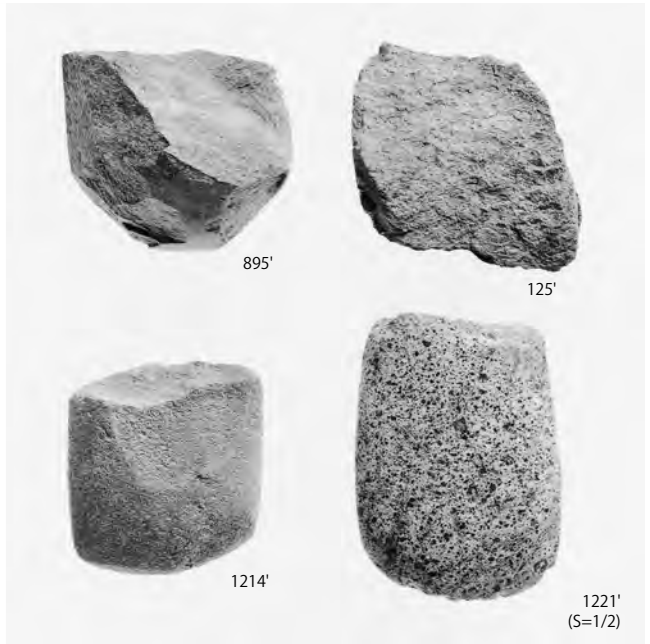
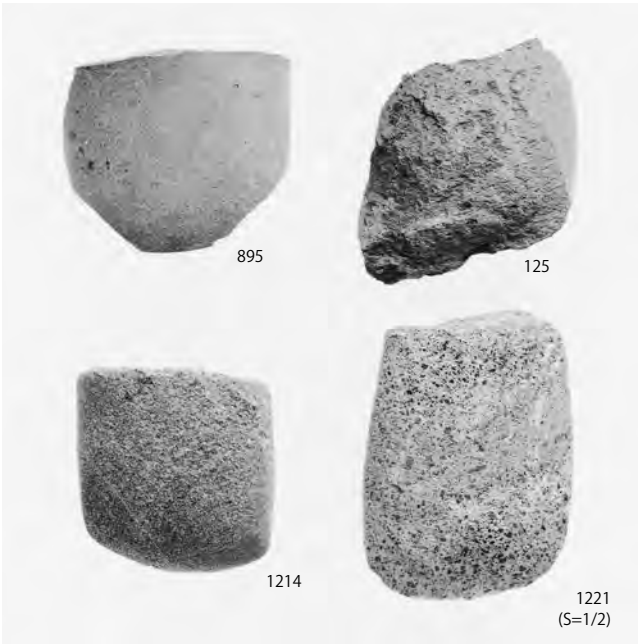
(S=1/2)

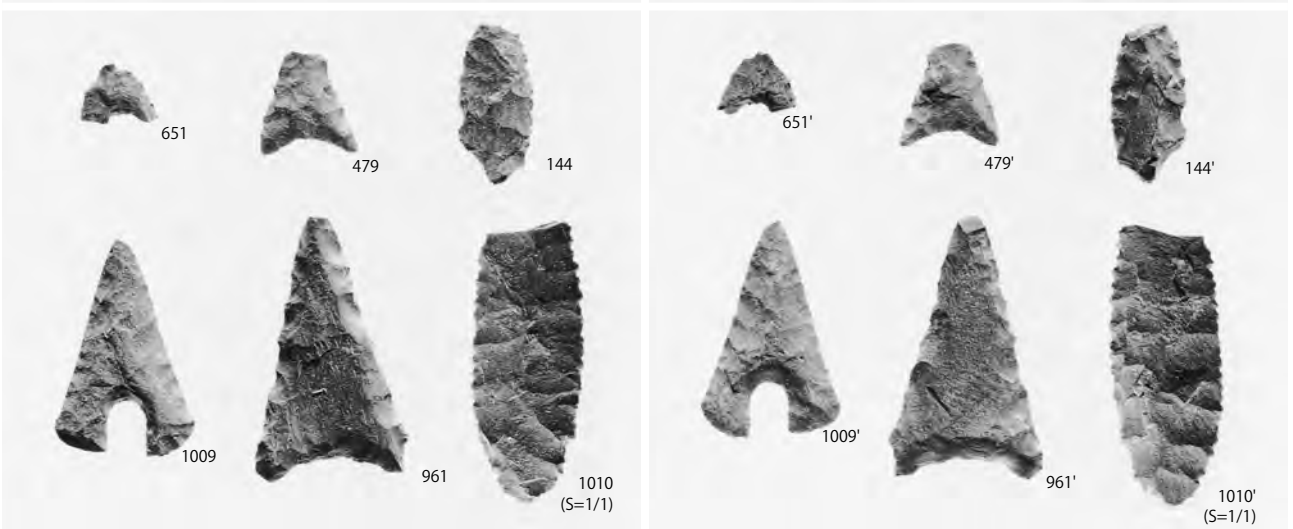
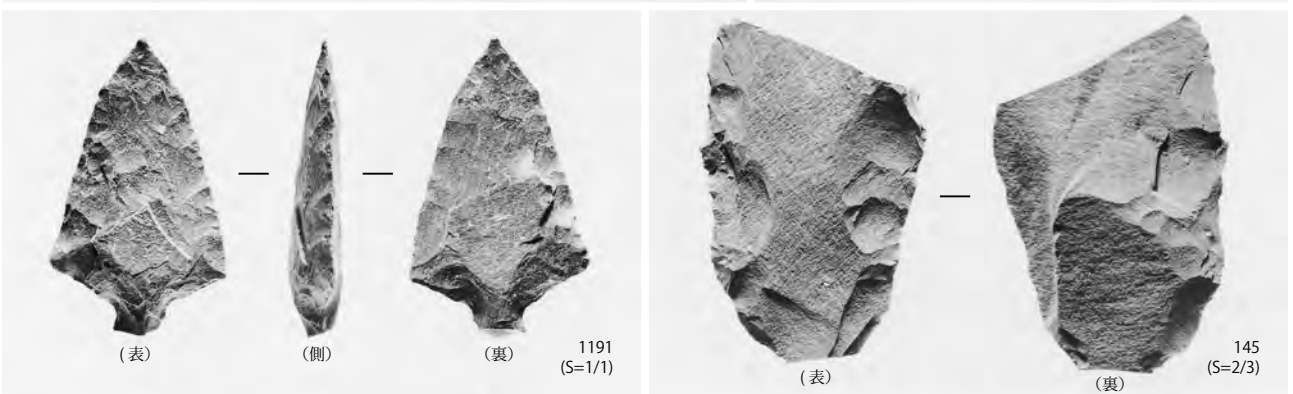
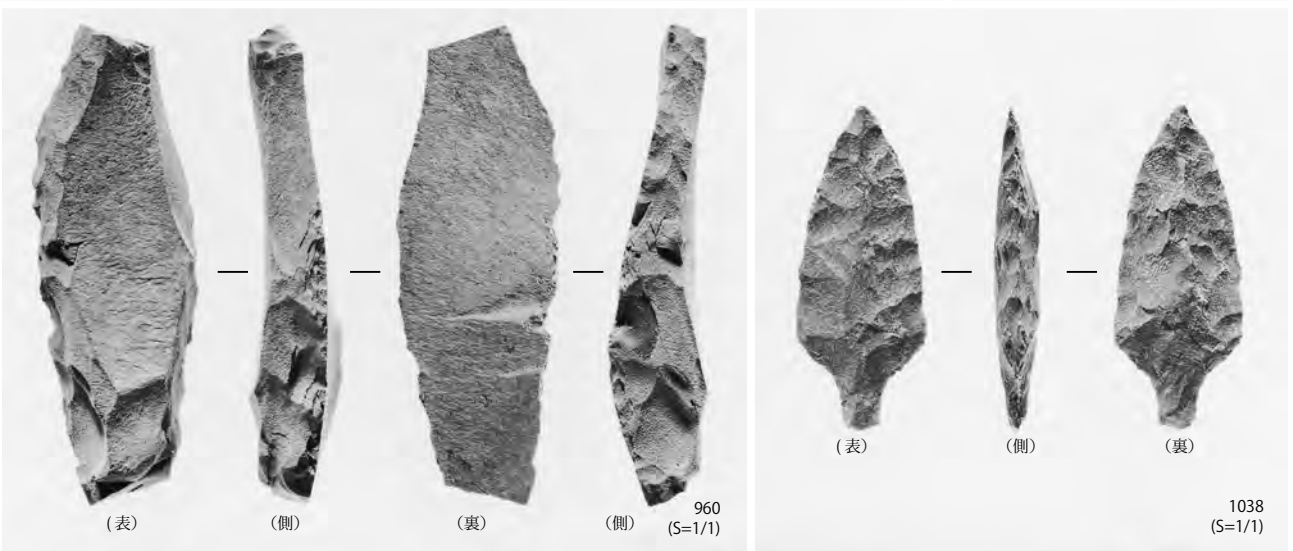
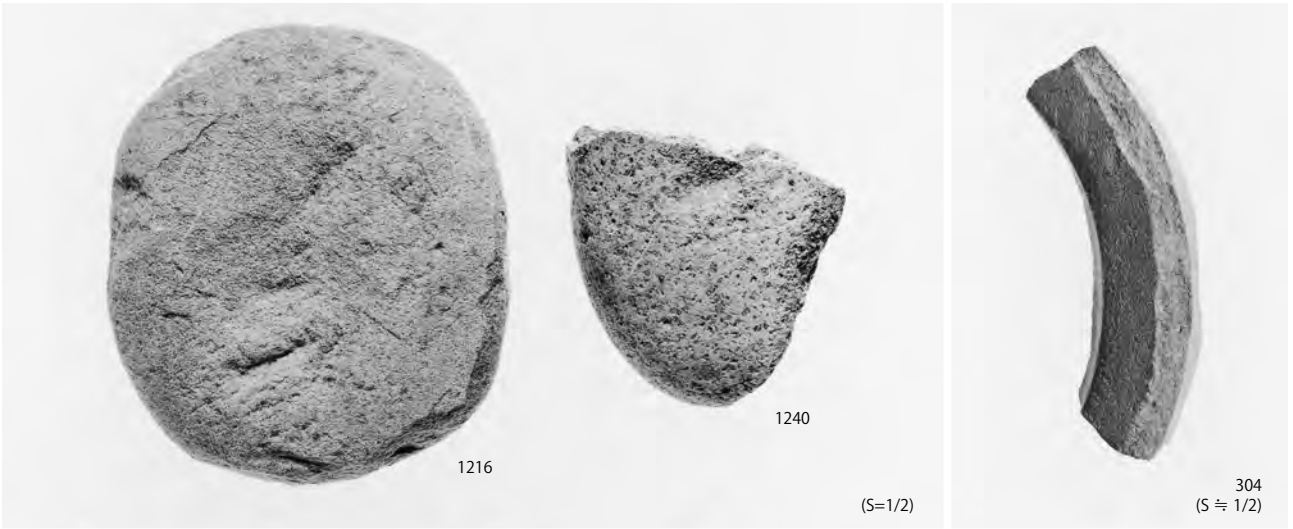


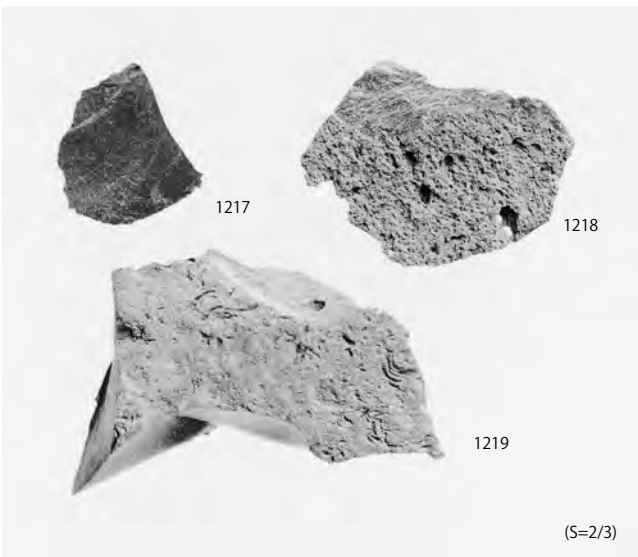
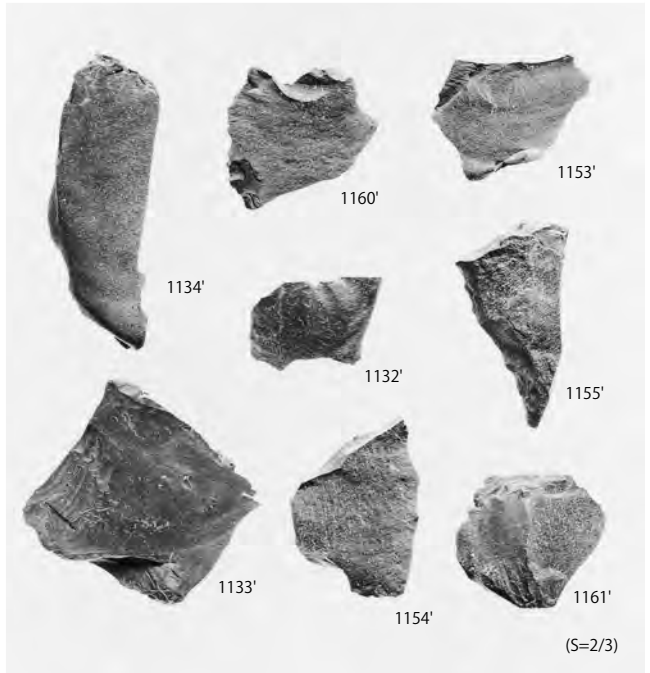
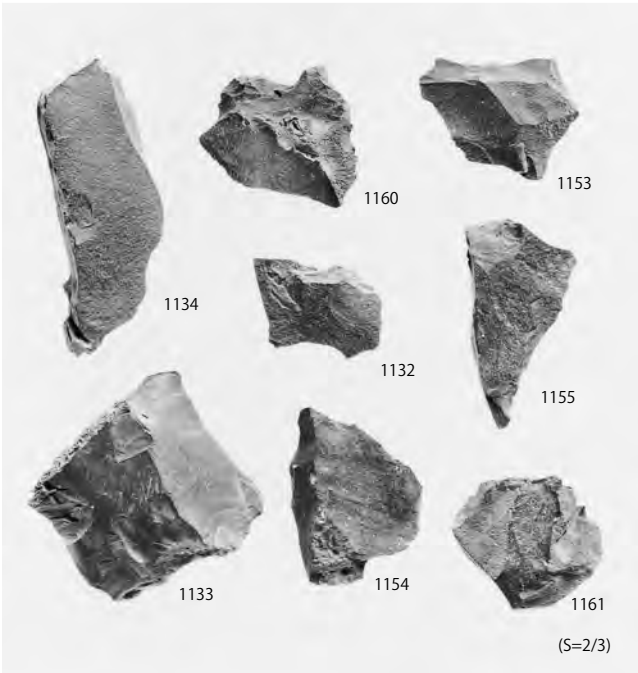
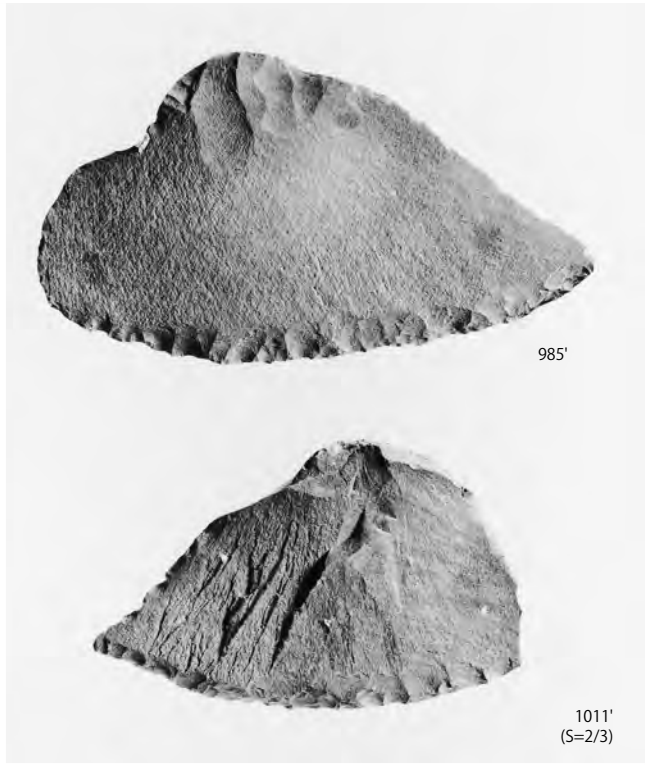
(S=1/2)



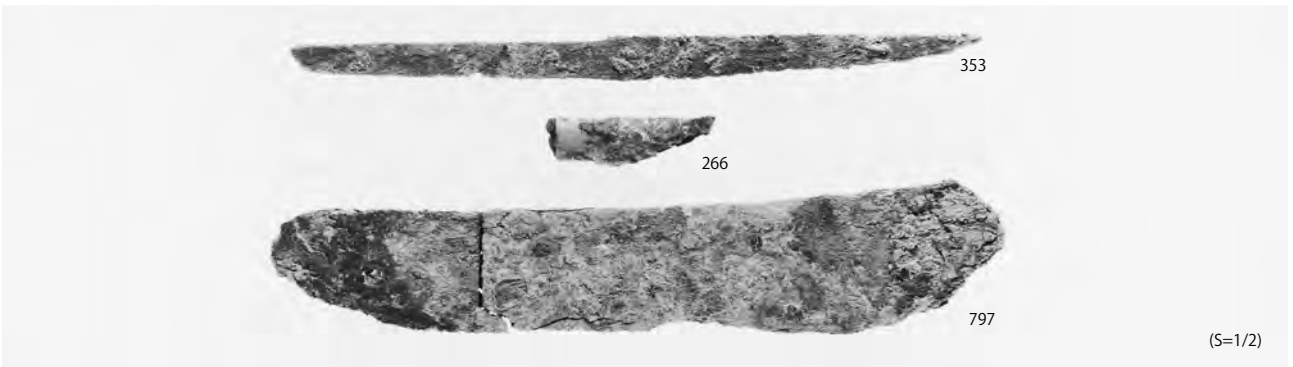
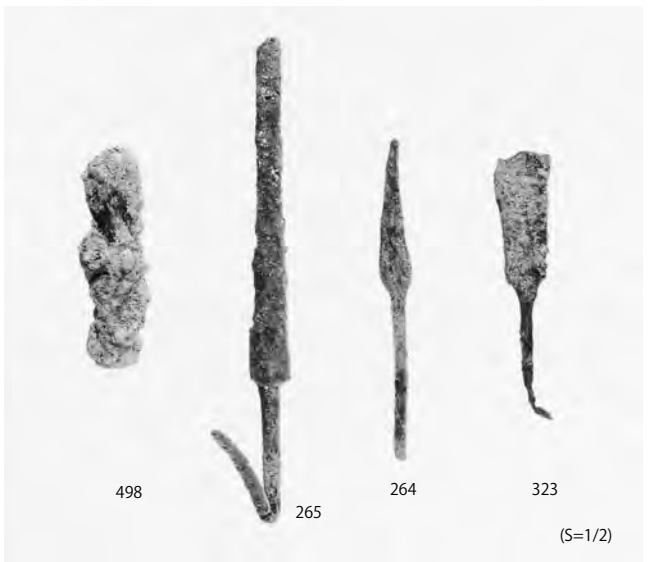
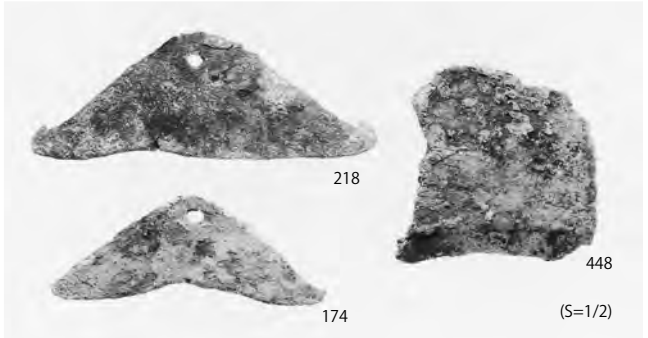
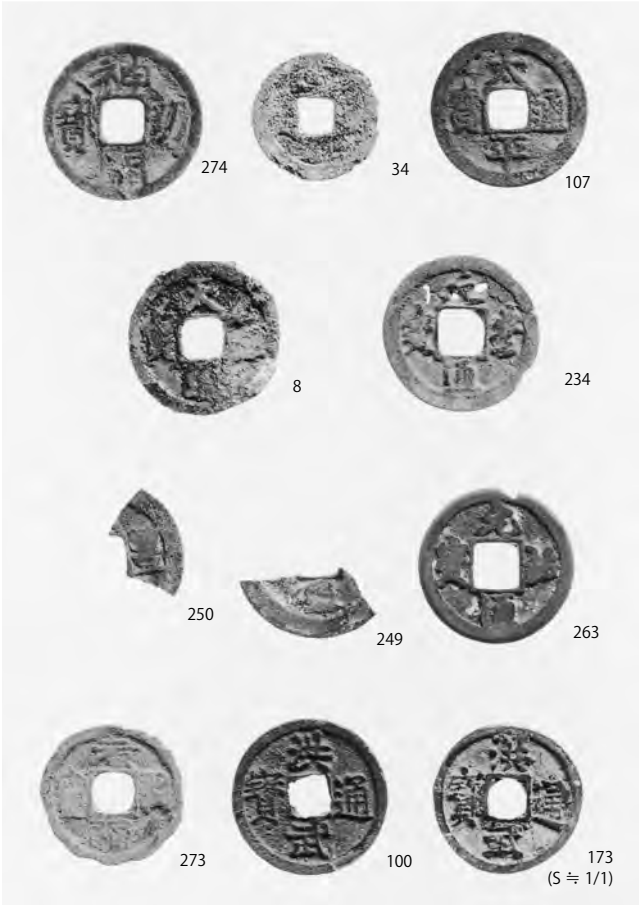
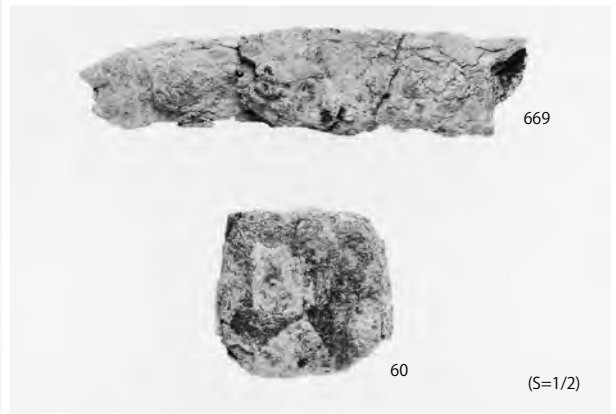
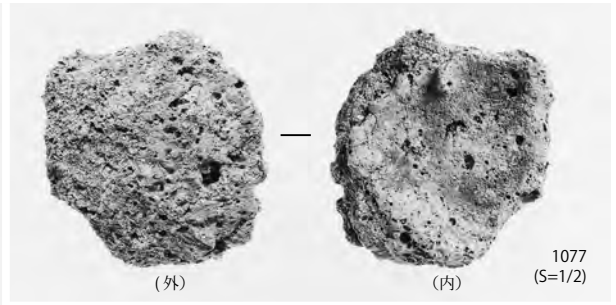
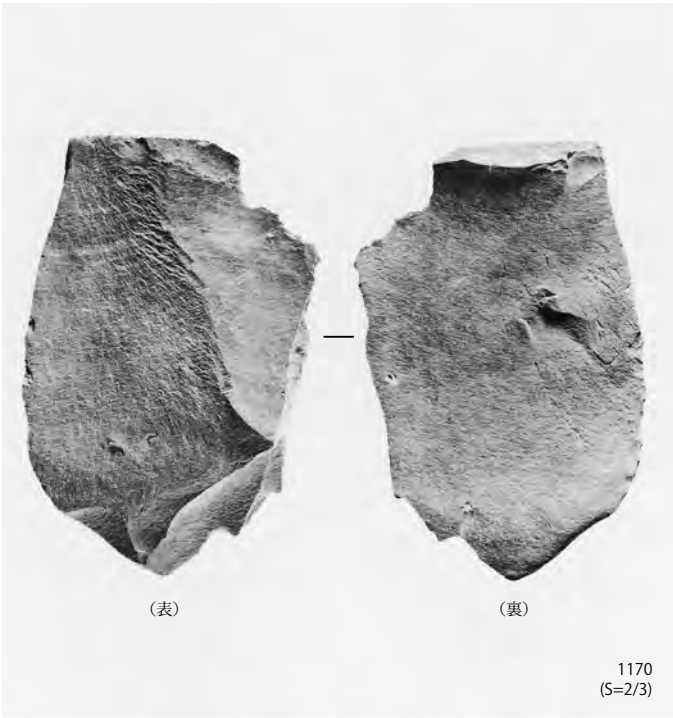
1239 (S=1/2)

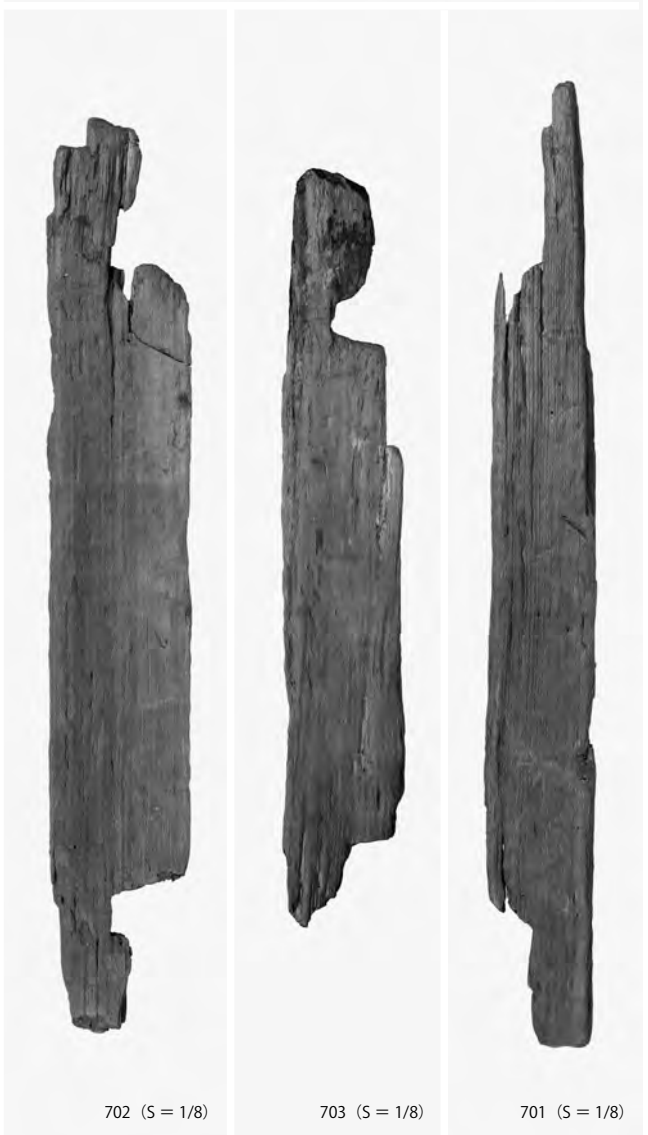
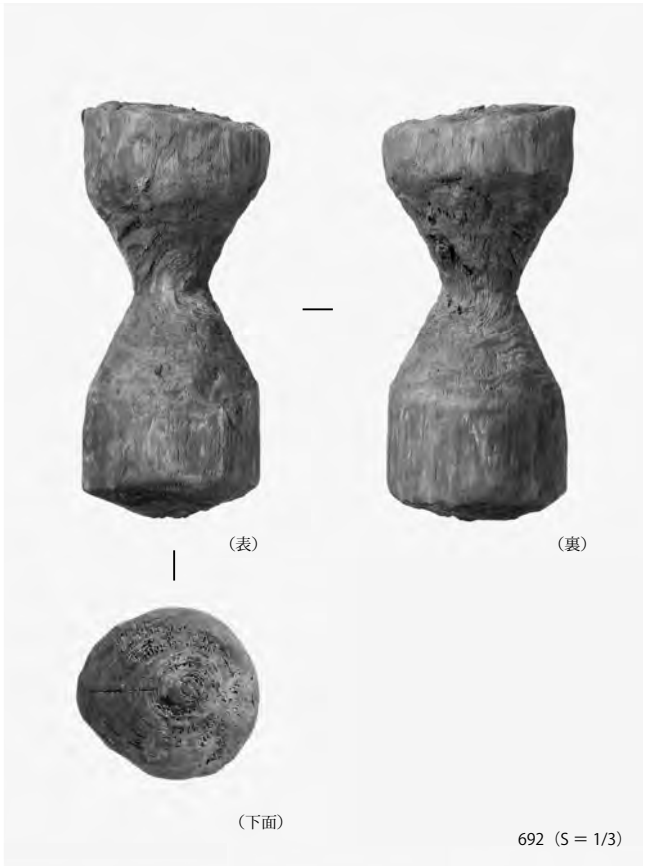
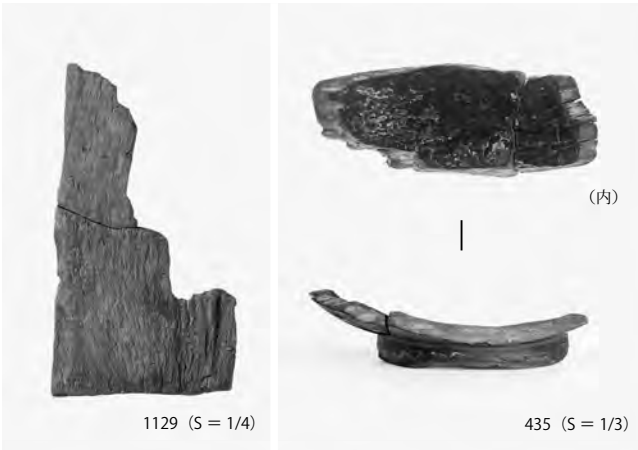






石製品 (7)、金属製品



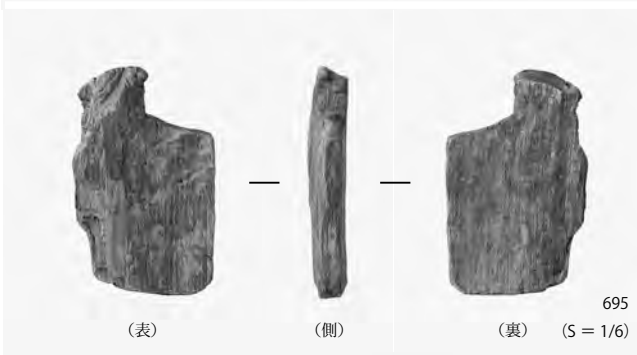




(表)

(裏)

711 (S = 1/8)

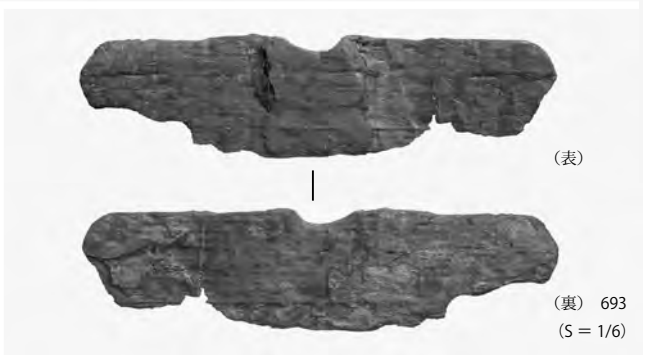


(表)

(側)

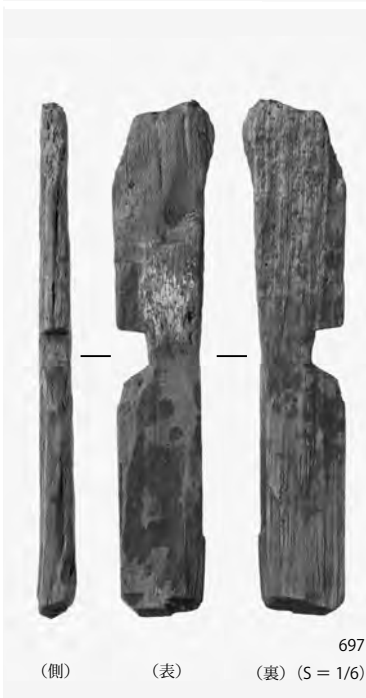
(裏)

695 (S = 1/6)



(表)

(裏) 693 (S = 1/6)



(側)

(表)

(裏)

697 (S = 1/6)



(側)

(表)

(裏)

699 (S = 1/6)

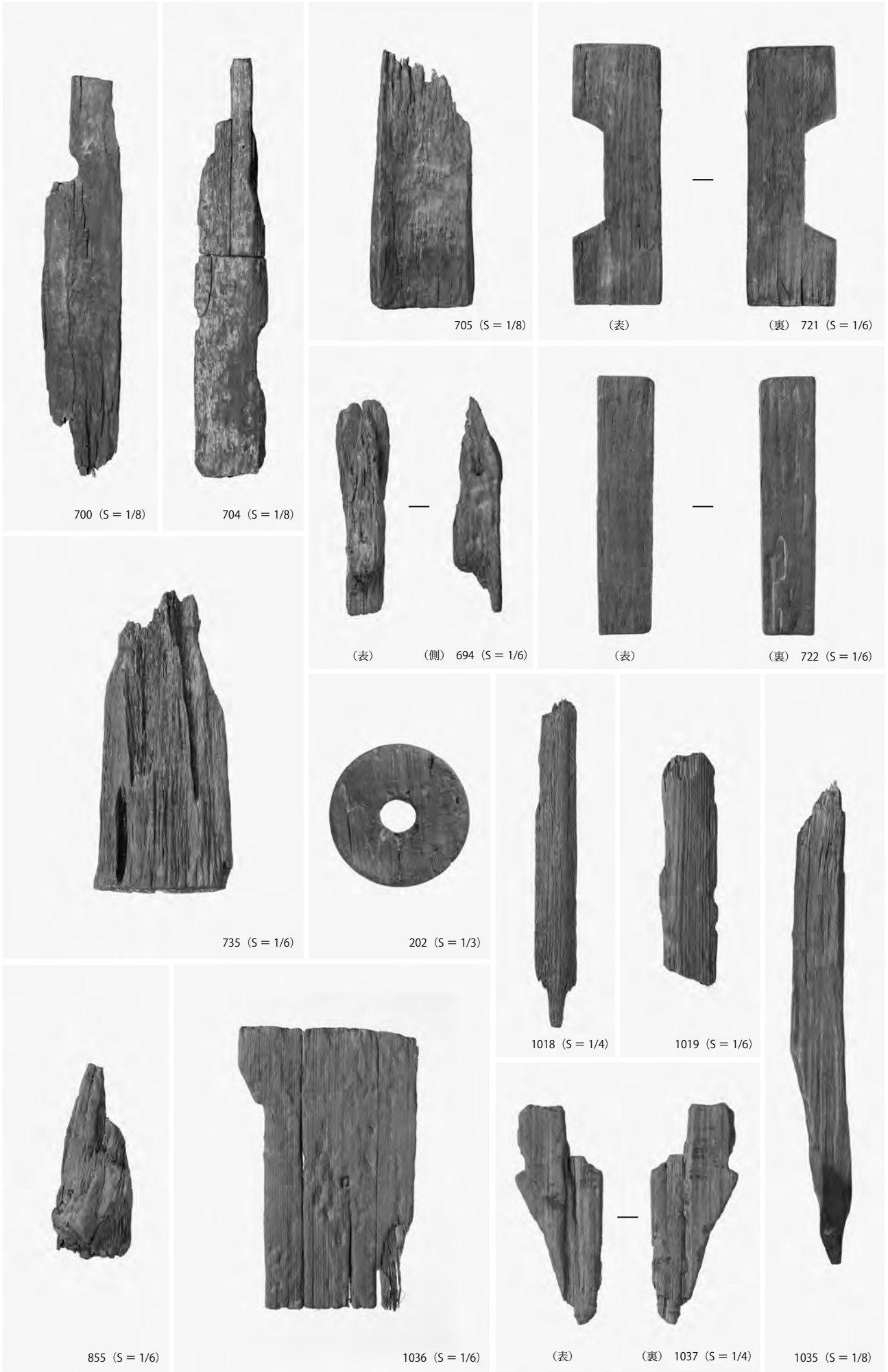


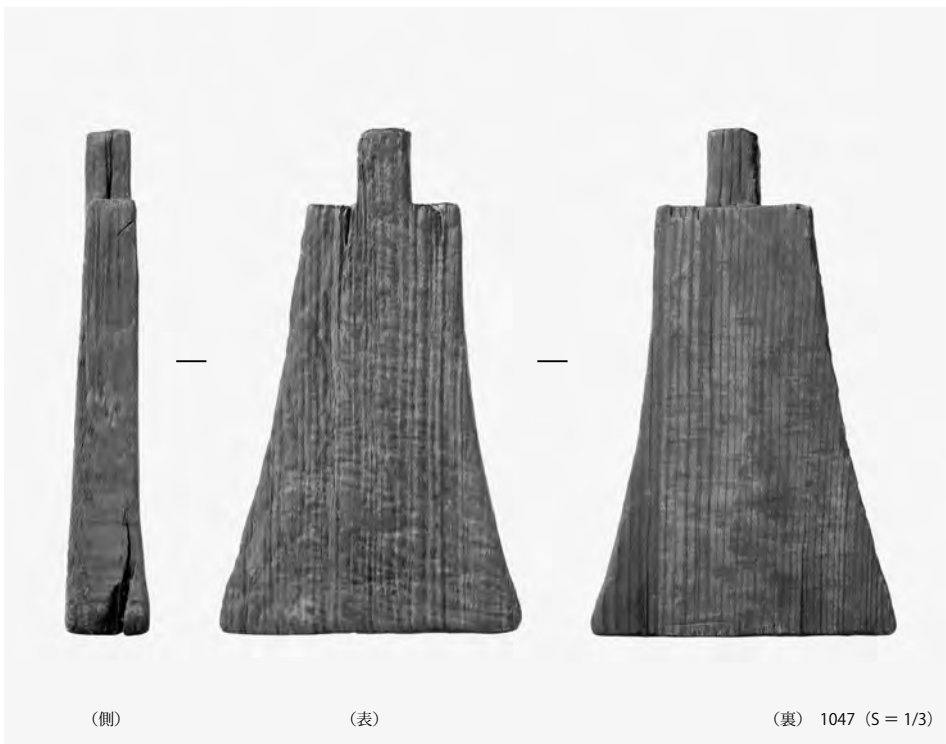
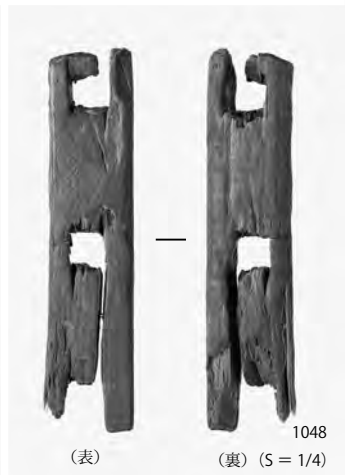
(側)

(表)

(裏)

698 (S = 1/6)







(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第215集

私部南遺跡 III

有池遺跡 上私部遺跡 上の山遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日/2011年3月29日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター
堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本/株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号